

誰も助けてくれない
—Can you hear me?—

麒麟犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第三次世界大戦の後に統治能力を失った各国に起こったAIによる反乱により、多くの人間たちがさらに亡くなっていった。女子供も関係なく、人類は鉄血工造との戦いが続いていくことにより希望を見出せなくなっていく。

失われていく人類の居場所。止まることのない環境破壊。繰り返される嘆きの世界。

これは幼少期に両親を失い、人類が踏み入ることをタブーとされている戦術人形たちの戦場に身を投じる一人の兵士の物語。

wait	until	you	ta	383	15.	これを、あなたに	—	We、	all	556	21.	疲れ果てた先に	—	Source	556
carred,	ladies	—	—	383	14.	カラスクリーン	—	I、	ms	383	20.	シューティング・ハイウエイ	—	—	—
n,	run!	—	—	354	13.	休息とは一体	—	Run,	ru	354	19.	狼と爆炎	—	Beware	of
in	the	rain	—	322	12.	手を取り合つて	—	Settle	le	322	18.	クレイジーストリート	—	Not	503
you	—	—	—	295						295					471
will	not	lose	to	295	11.	ノックダウン・アサルトル	—	We	—	295	17.	容赦のない口撃	—	Regret	439
are	not	bad	—	267						267	16.	思わぬ来客	—	Valuable	409
10.	悲憤の人形	—	You	guy	s					409	1k	—	—	—	409
hit	each	other	by	528						528					528
burns	—	—	—	528						528					528
doll	s	—	—	439						439					439
table	doll	—	—	471						471					471

3 8. 暗闇へ | The begin 1165
 arch |
 3 7. 悩める者 | Gropping m 1132
 certainty |
 3 6. 砂塵舞う大地へ | The un 1073
 e |
 nce again from her
 3 5. ただ、友の為に | Groza, O 1042
 en the way |
 3 4. このままじゃ終わらない | Op 1007
 eat |
 3 3. 忘れていたこと | Dead h 978
 ant to cry |

position | 1347
 4 3. 前提条件 | Standing
 not | 1316
 4 2. 出沒 | Cansee or
 rence | 1290
 4 1. 事例と問答 | No diffe
 p | 1259
 4 0. 死者出でる | Dead tra
 et | 1232
 tention to your fe
 3 9. 深淵の手前にて | Pay at 1197
 |
 of the unlucky day

e s o u n d	48. 蜃気楼の先に	pro po si ti o n	47. 折り返し地点	th ro w n	46. オアシス	se yo u	45. 到達	1404	ay in the fu tu re	??. 全ては、彼女の為に	ff or t	44. 前途多難な分断
	Collaps		Secret		Dice was		We can't lo			Some d		With e
1540	s	1511		1485		1456	o			1377		e
he a v y	54. D44N事件・起	de sp ai r wo r ld	53. さらばだ友よ	n ne ve r lo se	52. 『彼ら』をかけて	hu ma n	51. 予測不可能	1594	ve, to wi th st an d	50. 闘争と隠忍	ur vi ve	49. 継戦続行
	Gait		In the		We ca		Armored			To survi		Will to
1747		1680		1653	a	1622	d			1567		s

プロローグ — hello, new world —

燃え盛る炎の海と黒煙。ここではない戦場のどこかから聞こえる銃声。

それらの中で一人の少年は額から出血しながらも瓦礫の中にいる家族に手を伸ばす。彼の家族である両親は自分たちのことは置いて逃げると叫び続ける。嫌だと言いながら少年は両親を助けようと瓦礫をどけようと力を込める。だがまだ10代にもなっていない少年の腕力では重いコンクリートや鉄筋をどけることは適わない。それどころか、少年の手の皮膚をコンクリートが裂き、熱された鉄屑が火傷を負わせる。

それらの苦痛を感じつつも、少年は諦めたくなかった。戦争というものを知らない、多くの生命の死を知らない彼でも肉親を見捨てたくないから。

しかし現実とは、時間とは残酷なものである。

助けようとする少年にも容赦はせず、精神的な牙を剥いた。

音で崩れることを察した父が唯一自由だった右腕を使い、巻き添えを食らわせないようになりつた力の力で少年を突き飛ばした。

間一髪、少年は崩れていく瓦礫たちの濁流に巻き込まれはしなかったが、命が助かるかわりに両親が押し潰されて帰らぬ人になってしまった瞬間を見てしまった。

最初はわからなかった。ガララララツと流れた瓦礫がズンツという音がした瞬間の肉と骨が潰れた音。

それらが自分に無力であることを知らしめるものであることを思い知った瞬間、少年の双眸から涙があふれ、彼は声を上げて泣いた。

墨汁を垂れ流したようなどす黒い夜空。そこで浮かぶ赤い月が彼を見下ろして嘲笑っているかのように笑った。

「おい起きろよローガン。いつまで寝てるつもりだ」

頭を小突かれたことによる衝撃により彼の意識は浅い眠りから帰ってきた。

顔を上げればそこは廃墟となっている建物の一室。そこで青年は目を覚ました。

「おい相棒。まだ夢の中にいるのならママも真つ青なグーパーを顔面にプレゼントしてやるぞ」

「……嫌な夢を見ていただけだ。もう寝てねえからやる気満々の右手を下ろせケイド」
「それはなによりだし残念だ」

意識が覚めていき自分の状況を確認する。

腕時計を確認してみれば現在時刻は午前6時ほど。自分——ローガン——と相棒——ケイド——のいる位置から鳥の鳴き声も聞こえてくる。相棒と交代で2時間ほど仮眠をとってたところだった。

「ローガン。そろそろ周辺環境を偵察するドローンが戻ってくると思うんだが、オレの思い違いかね」

「そーいやそーうだ。もう5分ぐらい前に偵察スクランを終えて戻ってくると思うんだが……」

そもそも自分たちがこんな人氣が微塵もない場所にいるのには理由がある。

今から約18時間前、ローガンとケイドに所属している組織のリーダーから任務が言い渡された。それは先日の地震で基地から半径20kmの範囲で地形の再調査だった。『ただ単に見て回るのではなく、ドローンで建物の形を残しているものまで全てをデー

タとしてスキャンする』。それが彼らの任務だった。

左腕に取り付けてる端末を操作してみる。浮き上がってくる文字の羅列、ドローンのステータス。それらを見たところ…。

「どうやらなにかしらかによる損傷って感じか。こつからそんなに離れてないところで機能停止してるぞ」

「あゝ、マジか。また博士のお小言を聞くことになるじゃんか」

「なにもせずにごのまま帰還した方が面倒なことになるのは明確だろ」

めんどくさがるケイドを窘めつつ、ローガンは立ち上がり愛銃を持ち上げた。

ローガンが愛銃として使っているのはM4アサルトライフルである。ただし、中距離スコープのACOGサイトとアングルフォアグリップ、フラッシュライトをアタツチメントとしてつけてる以外にも軽量化するためのハンドガードに取り換えた、ローガンカスタムのM4である。ケイドが使用しているサブマシンガンのMPXとは当然マガジンの共有はできないが、お互いにツーマンセルで動く以上、大群の敵に会敵した際にはやり過ぎすか、逃げるかの選択肢を取るだけで発砲するのは最小限と決めているため、弾薬の危機に直面したことが一度もない。過去に単独行動せざるを得なかったローガンにはあつたのだが。

「じゃあねーか。そんじゃ外のクソツタレワールドへレッツゴー」

「お前、それを他の奴らの前で言うなよ」

装填してるマガジンの弾薬の数の確認とカスタムM4の簡単な点検を済ませたローガンは白髪を隠すようにニット帽を被りなおした。

「ブラボーチーム。俺たちの近くにいますか？」

『いえ、我々は集合地点の近くです。なにかあったんですか？』

「こっちのドローンが不調を起こして機能停止した。確認と回収を行うのでそっちは予定の場所で待機してくれ」

『了解です。なにかあれば駆けつけますのでいつでも言ってください』

「サンキュ。アルファアアウト」

同じ任務にあたっていた別隊との通信を終了させ、ローガンはケイドの後に続く。

休憩に利用していた博物館だった建物から外に出た二人を待っていたのは眩い太陽と雲一つもない青空だった。

「こんな時の配給されてる朝飯がクッキーブロック一つと水一口。なんて職場だよ。ブ
ラックだよ。国としてのシステムがちゃんとしていた昔だったら訴訟ものだよクソッ
タレ」

「昨日の昼頃に避難民がそれなりにきたものだから減っちゃまったんだろうな。日頃から
小銃もって戦ってるこっちからすれば、仕方ないとはいえ文句を一つも言いたくはなる
な」

そう愚痴りながら二人が向かっているドローンの反応は約400m先である。帰還
がもう少しでできるため、可能な限り早く終えて報告の後に基地のシャワーを浴びて
ベッドで寝てしまいたかった二人ではあったが。

「…おいローガン。昨晚この土にオレたち以外の足跡なんかあったっけ？」

「いやなかったはずだ。暗かったからライトを足元に照らしながらここらへんを歩いた
のはお前も覚えてるだろ」

「だよな。でも見てみるよこれ。この足跡、人間のじゃねえよな」

ケイドに促されて見てみれば、たしかに人間ののではない。微かに残っているローガンとケイドのブーツの足跡以外にも、最近できたというのがわかる人ではない存在の跡がそこに残されていた。

「……あまり考えたくはないが、鉄血の奴らか」

鉄血工造。ローガン達が生まれるよりも数年前に人工知能の暴走を起こして人類に反旗を翻した兵器——戦術人形——を生み出している軍事企業である。

鉄血の戦術人形との交戦経験はあるとはいえ、ローガンとケイドはあくまで人間である。命の消失を恐れないで戦い続けることのできる鉄血の人形との戦闘には勝利したことはあるものの、奴らへの恐怖もあり犠牲も多かったため苦い記憶しかない。

「どうするよ？ 見なかったことにはできるわけだが……」

「……下手にモヤモヤとした気分を背負うよりも、確認した方がいいだろ」

「まあそうかもしれないな。あ、でもこの足跡の続いている先って……」

ケイドの台詞で、ローガンは足跡の続く先を目で追い、絶望した。

「……マジか」

そう、二人が回収に向かうドローンの反応の方向と丸被りなのである。

「抗いようのない現実をローガンをおそおおおおおおおお!!」

「ケイド、こんな時でもふざけていられるお前の精神が正常かどうかを俺は疑うぞ。いや、この間爆薬で吹っ飛ばしたハイエンドモデル並にお前はおかしい」

「ヒデエ!？」

とはいえ、こんなところで油を売って時間を浪費するのは無駄の一言に尽きる。環境データをリアルタイムで送信しているとはいえ、こちらは物資が少ないためどうにかしてドローンを回収して痛手は避けたいところである。組織の研究部門やリーダーにどやされるのはローガンだって御免蒙るのだ。

だが彼は生存して帰還することを尊守している兵士である。勝てば官軍、命があれば儲けものというように、死なずに帰還できれば勝利だとローガンは考えている。

それでも場合によっては交戦することは避けられないな、と考えていた時だった。タアンツ!ダダダダダツ!という銃声が聞こえてきたのである。

方向は、足跡の続く先。

「おいブラボアの連中か!？」

「いや、あいつらは集合ポイントの筈だ!ドローンの位置とは大きく離れてる!」
銃声だけでなく、爆発音まで聞こえてくる。手榴弾やグレネードランチャーまで使っていることも考えられた。

「とにかく急ぐぞ!万が一民間人が戦っているんじゃない、野放しにはできねえ!」

「まったく仕方ねーな！」

毒づくケイドが自慢の脚力を駆使し走っていく。ローガンも走って戦闘区域に向かった。

二人が同時に走り始めたのにケイドがとても速く走れるのは理由がある。ローガンとコンビを組む前に、ケイドは味方が撤退するまでの時間稼ぎの戦闘で負傷し両足を失ったのである。だが鉄血とは別の軍事企業が新開発した義足により、彼は人間を凌駕する脚力を手に入れたのだった。無論、それに対しての求められた見返りは大きかったのだが。

五体満足の軍人としても足が早い方であるローガンでもその速度には驚かされたものである。

リハビリだけでなく色々と苦労した末にここまでやれるようになるとは頑張ったものだとローガンが感慨に耽っていると、先行していたケイドから無線が入る。

『おいアルファ1。現場に到着したんだが……』

『どうした2。……手遅れだったか？』

現時点で考えられる最悪の展開を想像したローガンだったのだが。

『いやそうじゃねえ。とにかく今は戦闘現場が見えるだけの位置にいる。こっちは西から接近するからそっちは東から挟み込む形で頼む』

「了解した」

ケイドの驚いたような報告を聞きながらローガンは走りながら心中で首を傾げた。

「……妙だな」

先程まで聞こえていた銃声などの戦闘音が途絶えたのである。

付近に到着し周囲を見てみると、どうやら内部に大きな池をつくつてある公園のようだった。そこで左腕の端末でケイドの位置を簡易的に把握し、大きく回り込むような形で走る。そして東側の壁に背をつけて確認してみたところローガンも驚いた。

まず、鉄血の戦術人形が全て倒されているところである。それぞれ異なったタイプで編成されていた隊だったらしく、様々な死骸が転がっている。

それだけならローガン達でも戦術次第で戦えなくはない。だが正面からの戦闘によるものだったりした場合は別である。

無論、スモークなどを使って鉄血達の視界を潰しての奇襲するといったようなゲリラ戦法も考えられなくもない。それでもこの小隊以上中隊未満の部隊を相手取るには二人では分が悪すぎる。

そう、ローガンが一番驚いたのはその二人である。

一人はこちらからも確認できるが黒髪で右目に眼帯をしている少女である。ここからでは距離があるためはつきりとはわからないが、整った顔立ちをしているのはわかっ

た。

もう一人はこちらに背を向けているため顔は見えない。背中まで届く明るい桃髪の一部をサイドテールにしている。

そのような少女たちがなぜここに、とローガンは考えたが彼女たちの近くに見覚えのあるドローンが転がっているのが見えた。

倒されている鉄血、謎の二人の少女、そして自分たちのドローン。

「……ケイド、そつちからはどうかはわからないが、彼女達の足元に俺たちのドローンが転がっている」

『あー、マジか。たしかにこつちからは見えないな』

「彼女たちが何者かはわからないが、鉄血よりは理性がありそうだ。お前の交渉術が役立つときが来たんじゃないか」

『話術って言うってくれ。それよかローガン。お前の方からならオレからは見えない黒髪の子の顔が見えるだろ』

「……見えるけどなんだ」

『美人か？』

「なにいつてんだおめえ」

『重要なことだろうが！こんなブラックジョブのやりごたえなんざなにもねーんだから

「こういうところでやる気を出すんだよ!」

「お前の私室から『萌えくヒヤツホオー!』とか夜中でも聞こえてくることもあるんだし、ここだけでも自重しろよオタク」

『O☆T☆A☆K☆Uの何が悪い!好きな趣味嗜好があって何が悪い!毎日非力な人たちの為にオレだって働いているんだ!そんなオレが本やオールドネットで見つかるかわいこちゃんを見て滾って何が悪いっていうんだよおおおおおおおおおおおおお!』

「……まあ美人であることは確認できる」

『うっしやあ!ピンク髪の子もかわいしキタコレ!モチベマジ上がるわ!!』

「……別にいいが、下手をかますなよ」

『任せておけて!』

はあ……と溜息を吐いたローガンは相方の暴走が起きないことを祈るばかりである。

そして十秒後、ケイドが銃を下げ、両手を降参の形で遮蔽物から出て少女たちの方に歩み寄るのが見えた。

彼女たちの視線がそちらに向けられたのを確認したローガンは、壁から身を離しカスタムM4を構えた状態で歩き始めた。足音を立てないように注意しながら一歩一歩前進する。

近づいた際にケイドの馬鹿らしい台詞も聞こえてくるが、それなりの付き合いから獲得した脳内フィルターでローガンは彼の台詞をカットする。そして少女たちの挙動にも注意した。

「へえ、なかなか悪い気はしないことを言ってくれるね」

黒髪の少女がその言葉の通りの表情を浮かべているようなのが、足音を立てないように集中力を全開で出しているローガンでもわかる。そして桃髪の少女まであと1m強となったところで。

「両手を上げて動くな」

銃口を向けてはつきりとホールドアップの体勢を取るようにローガンは声を発した。

一瞬ビクツと体を震わせた少女は、一間おいてゆっくりと両手を上げた。

「……なかなかやるね。全然気配に気づかなかったよ」

首だけを瞬時に振り返った黒髪少女がそう言う。その片目には純粋な驚きと称賛が見えた。

その台詞に口元を僅かに綻ばせたローガンだったが、すぐに表情を引き締めた。

「お前さんたちが何者かは俺たちは知らない。ただ用があるのは足元のポンコツのみなんですね。極力撃ちたくはない」

「ああなるほど。この落とし物はあるたたちのだったのか。目的はなにか教えてくれよ、

誰にもばらさないから」

「悪いね。それはオレも喋れないよ」

ケイドも拳銃のP226を抜き、黒髪少女に向ける。ローガンと違い、笑みを浮かべてはいるものの目は兵士としてのそれになっていた。

「でも少なくとも悪いようにはしないよ。ただオレたちの安全を守るために使うだけであつてね」

（おいおい、もう目的を言ってしまったようなもんじゃねえかよ）

（二次元の）女好きのケイドが口を滑らせたことにローガンは嘆息した。

基地の周辺環境を把握し、考えられる鉄血の侵攻ルートに対策を施す必要がある箇所をデータとして基地に送信する。それがローガン達の目的だったのである。

相棒の新たな短所が発見されたことに胸中で嘆いていると。

「何をしているのですか」

一滴だけで乾いた土地に深くまで染み込む清涼な水を想起させるような声がローガンの耳を叩いた。

「今の時代、得体の知らない敵と出会ったのなら迷わず戦うべきではないのですか？ 素性も知らない敵に投降を求めても何も得られないことは考えられませんか」

「……少なくとも今回ばかりは無駄じゃない。俺達が欲しいのは転がってるドローン

だ。逆にお前たちを撃つたとしても弾薬を消費するだけで何も得をすることはないしな。それに……」

「それに？」

一旦台詞を区切ったローガンに少女はなぞる。まるで解き方を知ったばかりで解答まであと一歩だが届かない、知的好奇心満載な学者のように。

そこまで言ったところで構えていた銃を下ろした。

「敵にならずに済みそうな奴に出会えたんだ。それなら撃つことは俺にはできないよ」
ここまで接近したことにより彼女たちを服装と、対話からある程度測れた。

まず服装だが、ローガンとケイドのような戦闘服ではなく年頃の女の子が着るようなパーカーやYシャツなどだった。戦場には場違いに思えるが、それを打ち消すように肩からストラップで下げているライフルが存在を主張している。ここまでで彼女たちがただの民間人ではなく、鉄血と渡り合える実力をもっている何者かであることがわかる。

次にコミュニケーション。ローガンはケイドの交渉術もとい、話術の台詞は聞いてはいなかったが彼女たちは胡散臭く感じた筈なのに彼に銃を向けなかった。武器が見える位置にありながら両手をあげているのだ。これだけで人間によつほどのことがない限り敵意を抱くことがないのが推測できる。

純粹に敵意を向けて戦う必要がないのであれば、穏便に話し合いで解決できるだろう。

そう考えていたローガンの目の前の少女が振り返ったことによつて彼女の顔立ちがわかるようになる。

快活な印象を受ける黒髪少女とは違い、こちらは儂げなそれだった。両目はサファイアを連想させる綺麗なブルー。傷一つもない顔や身なりから可憐な花を見ているかのようだった。

呆けそうになったローガンだったが、かぶりを振つて自分を仕切り直させた。

「……甘いですね。兵士としましては失格ではないのですか？」

「……かもしれないな」

にこりともしないその台詞にローガンが苦笑いを浮かべる。その瞬間だった。

一瞬少女が消えたかと思えばローガンの懐に飛び込んできていたのである。繰り出される打撃と長い脚を活かした蹴りのラッシュ。一般兵士であれば初撃でやられたのかもかもしれないが、ローガンは違う。銃を用いた戦いではわからないが、少なくともこの近接格闘ではローガンに分があった。顔面にめがけて飛んでくる拳を首を動かすことで素振りにさせ、蹴りをカスタムM4で受け流すことで一つ一つの攻撃をうまく躲けていった。

ラッシュを幾らか凌いでいると、少女の手が閃き、ローガンのカスタムM4のハンドガードの根本を片手で掴みつつ彼を突き飛ばしたのである。掴まれたことに反応しきれず体勢を崩したローガンだったが、即座に片足で踏ん張ってから愛銃を離さないようにしながら自由になっている左手でナイフを抜こうとした。それを阻止すべく少女の右手が掴み、さらに左足でローガンの鳩尾を蹴った。

「ガッ……！」

この細足のどこからここまでの力が湧いてくるのか。たまらずカスタムM4のグリップから手を離してしまい距離を少々空けられてしまったが、受けたダメージは少ないため悶絶するほどではなかった。手持無沙汰になった右手でホルスターに収納している拳銃を抜く。抜いたP226のセーフティを解除しつつ、左手でナイフを抜き二つの武器を前面に構えた。

ローガンが照準をつけたのと少女が彼から奪ったカスタムM4をいつでも撃てるようにするのはほぼ同時だった。

「……やるな」

「そちらこそ。ですがあなたの仲間は論外ですね」

純粹な称賛をローガンは少女に贈ったのだが、返された台詞に付いてきたケイドへの評価に「おん？」と声が出た。だがそれもその筈、彼女の後ろの方で黒髪の子に組み伏

せられていたのだった。

「私が女の見た目してるから手を抜いたのか？ん？」

「あでででででで?!いやあ、そんなつもりはないんだけどね。つうか可愛い子に組み伏せられているわけだけでもなにこれご褒美なんですすががががががががががが?!」

「あんのバカ野郎……!」

もちろんケイドも経験を積んでいる兵士である。しかしローガンからすれば、それは情けを一切することが必要ない鉄血や手段を択ばないテロリストなどに限られてしまう。架空かリアルを問わず女好きの男、それがケイドという人間なのだ。

だがそんなコントのような光景が繰り広げられているわけだが、引つかかる部分があつた。

黒髪の少女は自分を「女の見た目」と言っていた。彼女が人間であれば「私が女だから」と言う筈である。鉄血の戦術人形は人類とは異なる種でありながらも、見た目はローガン達と同じようなものであるといえる。それなのに彼女の言い方から察するに。

「なあ、お前ら——」

ローガンが言いかけた瞬間、また爆発音や銃声が響いてきた。それもそこまで遠くはない。

そこで彼の無線に通信が入る。

『アルファチーム！こちらブラボー2！』

同じ区域にいるブラボーチームからの無線にローガンは構えていたハンドガンとナイフをしまった。視界の隅で桃髪の少女も自分から奪った愛銃を下ろしているのが見えた。

「こちらアルファ1。どうしたブラボー2」

『集合ポイントに移動して待機していたところ、鉄血からの襲撃を受けた！現在応戦しているがブラボー1や迎えの隊員たちが負傷してしまつて撃退ができそうにない！ただちに応援を！』

「了解した。ただちに急行するから持ちこたえろ！」

『感謝する！基地からも援軍を要請したがすぐには来られないだろう、頼んだぞ！』

ブラボーチームの片割れと何人かはわからないが基地に戻るのに来てくれることになつている隊員がやられている以上、ここにとどまり続ける理由はもうない。

ローガンとブラボー2との無線をケイドも聞いていたため、抑えられている状態から起き上がった。

「ローガン！」

「急ぐぞ、あいつらでも長くはもたないと考えた方がいい！」

地面に転がっているドローンを回収し、機能が完全に停止しているのを確認してから

コンパクトな形に畳みバックバックに収納した。

そしてこちらを見ている少女にローガンは向き直った。

「悪いが仲間がピンチなんでね、その銃を返してくれないか」

「……返してもいいけど条件があります」

「条件？」

その台詞にローガンだけでなくケイドも眉を顰めた。

「実は私たち、帰還するまでの弾薬や物資が足りないのです。とくにさきほどの戦闘では弾薬を多く使ってしまったので、次に会敵すれば勝てるとは思えないぐらいにしか残っていないのです」

「……だからオレ達に同行し手伝ってやるから、その見返りに帰還するのに十分な補給をさせてくれ……てことか？」

「そういうことです」

ふむ、とローガンは考える。ブラボー達の状況は切迫してるものと考えた方がいいだろう。その分、駆けつけ次第できるかぎり早めに殲滅にあたった方がいい。それならローガンとケイドであれば戦って生き残れるのも怪しいと言えるぐらい転がっている鉄血の数に勝利できた彼女たちの力を借りるのも良いのかもしれない。

だが時間は待つてくれない。こうして長く考えている間にブラボー達も危ないのだ

から。

「……わかった。お前たちの手も貸してくれ」

そうローガンが言ったところで、少女は頷き持っていたライフルを手渡した。受け取ったところで手をローガンに差し伸べる。

「私はグリフィン所属の戦術人形、AR小隊のコルトAR15です。今回だけだと思いますがよろしくお願いします」

グリフィン……やはりそうか、とローガンは思いながら握手に応じた。

「民生保護部隊グランド所属、ローガン・ブラック。こちらこそ、よろしく頼む」

それは、戦場で戦い続ける二人の兵士と人形の邂逅であった。

1. 誰にでもあること —Don` t worry. Do your best—

「私たちとは別で行動していた二人にも連絡してみたところ、遅れることにはなるが向かうそうだ！だが戦闘音だけでは詳しい場所をあいづらは知らない！なにか遠くからでもわかるものでもあるか!？」

「俺達の手持ちに位置をマーキングするためのカラスモークグレネードがある！それなりに距離があってもわかるだろ！」

端末で確認できる戦闘状況を見て、ローガンは即席チームと共に走っていた。すぐ横には眼帯をした戦術人形——M16——がいる。彼女は耳元に無線機を当てながら喋っている。すぐ後ろにはAR15が遅れず着いてきており、バックアタックを食らわないようにケイドは最後尾を走っていた。

走りながら聞いていたところ、AR小隊の戦術人形は四体。ローガンとケイドと共にいるAR15とM16と同小隊の戦術人形も援軍に駆けつけるとのことだった。

「M16、私たちはさきほどの戦闘でダミーを全て失ってる。弾薬も少ないですし、いつもとは違った戦術が必要よ」

「ああそうだな。下手に前に出すぎればハチの巢になるのは明確だ。ローガン、なに化作戦はあるのか？」

「まずは鉄血と本格的にやり合う前にブラボー達の撤退を援護してやらないとだ。まだ戦える奴はともかく、負傷した連中を安全なところまで下がらせなければならぬ！」

「戦場に本当に安全な場所なんてないわ。それだったら敵を殲滅を行う方が効率がいいはずよ」

「あくまで今回の目的は『殲滅』も考えたブラボー達の『救援』だ。今回は敵を全滅させることじゃなく救出を前提に行動する！」

「だけどそれだと——」

そう話していると目的地に到着する。物陰から戦場を見渡し

予めローガンが所属するグラウンドが定めていた集合ポイントは干上がった川を基とした帰還ラインの手前である。沿岸の数ヶ所を軍用のSUVでも通れるよう緩やかな坂に工事されているのだが、その坂の根本の部分でローガンとケイドの友軍が戦っているのが確認できる。だが懸命に戦っている彼らよりも鉄血の戦術人形達の頭数が多すぎるのである。さきほどAR15達が倒した部隊よりも、である。

「……………いつは、救援してからの撤退を第一に考えた方が良さそうだな」

「まさか……までとは……………！」

目の前の戦場に対しM16は半笑いになっていた。AR15もわずかながら目を見開き、モノクロの敵兵を見て驚きを露にしている。

「ゆっくりはしていらねーし、早速動いた方がいいだろ。ローガン？」

「ああ、そうだが……お二人さん、そちらはどう動くよ？」

戦場に飛び込む気持ち的な用意を済ませたケイドがローガンに笑みを浮かべる。だが今回の戦いにおける援軍は彼らだけではない。ローガンは見返りを求める代わりに協力を提案した戦術人形の二体に問うた。

チームといっても、グランド所属のローガン達とグリフィンの部隊のAR15とM16。お互いに気性も戦闘時の動きの癖も何も知らない。それに誰にでもできることとできないこと、得意なことと苦手なことがあるのは当たり前である。うまく立ち回るためにどのようにしているのかはこの際置いておくとしても、元のチームではどのポジションに就いていたかは知る必要があった。それに、ローガンからすればこのチーム内には上下関係のような立場の違いなどないと感じていた。

「頭数ではこちらの旗色が悪いのは確かだ。その上負傷者の救出となれば尚更。連携で敵を切り崩すしかないだろうな。それでいいよな、AR15」

「ええ、そうするしかないわね。作戦としてはどうするのですか？」

「まずはお前たちがどう動くのかを教えてください。そうすれば——」

ローガンはベルトに引っ掛けていたグレネードポーチからカラーズモークグレネードをケイドに投げ渡す。義足のカードドリッジの残量を確認した相棒はそれを受け取り、手入れがあまりされていないせいかわげだらけのサブマシンガンMPXのストックを引っ張って拡張させている。いつもは全力で止まることなく走り、必要になれば発砲する彼でも知り合っただばかりの仲間と現在の状況からいつもよりも緊張していることが伺えた。

『そんじゃ行くぞ。カバーよろしく頼むぞお二人さん！』

『前に出すぎると無茶は絶対しないさ。そのかわり危なくなったら助けてくれよ、立案者さんよ!』

ブラボー達の交戦位置から逆側、挟み撃ちを行う位置についたケイドとM16からの通信が入る。ローガンはカスタムM4のセレクトレシーバーをシングルに切り替えつつ、物陰から撃てるように姿勢を安定させているのを横目で確認した。

「よし、作戦開始だ。十秒後にハンドグレネードを投げて炸裂したら撃ち始めろ」
そう言うのとローガンは無線の周波数を切り替え、懸命に堪えているブラボーに繋いだ。

「待たせたなブラボー2。そちらの向いている方向、鉄血のケツを一点突破でアルファ2とお客さんが蹴り上げる! 誤射に注意してくれ!」

『ようやく来てくれたかローガン! ケイドはともかくお客さんてのは何者だ!』

「説明は後だ! 報酬を求められてはいるがとにかくこつちに味方してくれる!」

『なるほどオーケー! それと本部からの砲撃支援の準備がもうすぐ終わるそうだ!』

「了解した。そちらの幸運を祈る」

ノイズ混じりの通信を終了させたのとケイドが投げたグレネードが爆発したのは同時だった。

そこからさらにカラスモークを発生させたケイドは機動力を駆使しつつ、反応に遅

れている鉄血の戦術人形達を屠っていく。M16も油断していた敵を盾にしつつ、自身と同じ名であり分身と言えるアサルトライフルを発砲して確実に前進していく。

とはいえ、前衛でブラボー達の元を目指す彼らが実力を発揮していても捌ききれない鉄血はいる。同時に二体の敵に狙われる、空になった弾倉を交換するといったどうしようもない状況になるのは必然である。

その穴を埋める役割を担うのがローガンとARR15である。AR小隊で盾役を担うM16であるのに対し、ARR15は少し下がったところで火力を出すとのことだったの彼女には二人の援護の役を共にやってもらうことになったのである。

『十一時の方向……クソツ、ありやあガトリングじゃねえかよ！』

「ARR15、狙えるか」

「大丈夫、射線はちゃんと通ってる！」

『つと！助かったぞ、サンキュー！』

ダアンツ！と言った直後にARR15は発砲する。ローガンからは見えないが、命中し倒したらしくケイドが礼を言っている。

「M16、その壁で少し待ってくれ」

彼女の進行方向にロケットランチャー、RPGを構えて撃とうとしている鉄血を確認したローガンは指示を飛ばす。そして息を大きく吸い、止めると三回引き金を引いた。

ダン、ダン、ダン！と肩に来る衝撃を感じつつサイトを覗いて狙っていた敵の戦術人形を注視する。半分は狙い通り、もう半分は当たればラツキーといったところだった。撃った三発の弾丸のうち一発は剥き出しの弾頭に直撃、爆発したのである。不幸な鉄血達は仲間の巻き添えを食らい木端微塵。無論、離れている位置の壁に隠れていたM16は無傷である。

『おいおいマジか！あんたどれだけの場数を踏めばそんな腕が身に付くんだよ！』
 「なけなしの運を使っただけさ！それよりも囲まれる前に逃げ！」
 『わかっているさ！とにかく助かったよ！』

ローガンは笑いながら新しいマガジンを装填する。たしかに、このような結果になったのは彼にとっても運が良かったとしか言いようがなかった。

「リロード！マガジンラスト！」

「ほら、まだあるぞ！大事に使えよ！」

残っているマガジンのうちの二つを臨時の相棒の足元に滑らせる。彼女がそれを拾い上げて礼を言おうとした瞬間、ローガンと二人でいる高所の背後から爆音が轟く。予め仕掛けてトラップが起動したのである。

「来やがったな……！AR15！」

「わかっている！M16、こっちにも鉄血が来た。もう援護はできないけど頑張つて！」

『了解だ！気をつけろよ！』

ここまで打ち合わせ通りである。

こちらからブラボー達への先遣隊としてケイド達を行かせたとして、中距離く遠距離から援護しているローガンとARR15の方になにも攻撃が来ないわけではないことは当たり前である。現に、先程までの援護射撃では当たりはしないものの数発の鉄血からの弾丸が飛んできていたのである。そして援護位置の背後からの爆発音。頭を使った鉄血の戦術人形が迫ってくることは重々承知しているローガンは、グランドが付近に防衛物資として予め用意していたクレイモアを鳴子としてARR15と一緒に仕掛けていたのである。

そしてアンカーを地面へと突き刺し、ラペリング用のロープをセット。ARR15がそうしてる間にローガンは手持ちのC4爆弾を数ヶ所に設置した。

「こっちはいいわ！」

「よし、先に降りてろ！俺もすぐに行く！」

着地地点を確保するためのスモークグレネードを投げ渡したローガンは最後のC4を仕掛け、先にラペリングしたARR15の後を追って飛び降りる。銃声が頭上で轟いている間に地面に着地、ARR15も降りていることを確認したローガンは彼女と共に先程までいた高所を見上げつつ距離をとった。そしてそこから鉄血達の顔を覗かせた瞬間、

を助け出した。自分が手を下さず倒れた敵を目の前にして一瞬呆けてしまったARR15の前にローガンは走り寄った。

「急ぐぞ、来い！」

地面に座り込んでしまっているARR15に有無言わずに立ち上がらせる。そして彼女の左手を引いてローガンは走り出した。

「は、放してください！もう大丈夫ですから！」

手を引かれている状態で我に返ったARR15は少し顔を赤くしてそう叫んだが、ローガンには周りの銃声と爆音で聞こえていない。そこでケイドからの無線が入った。

『アルファアー！HQからブラボー2に連絡が入った！迫撃砲による支援が来るぞ、全力で走れえ!!』

そう言われた以上、ローガンとしては急ぐより他はない。爆発物による味方の支援はありがたいが、巻き込まれるのはごめんである。

「ARR15、走れえ！のんびりしてたら迫撃砲で畜生どもとこの世からおさらばだ!!」
「だからもう放してくださいよ！一人でもう走れますからあ!!」

状況が状況だけに仕方がないわけだが、衰えない戦術人形の聴覚でローガンが言っていることは聞き取れても彼には聞こえていないので意味がない。

そして立ち上るスモークから抜けた二人を援護するために、辿り着いたケイドとM1

6を筆頭とした兵士たちが持つている銃器で鉄血達を射撃する。鉄血の最前線を目の前にしたあたりで聞き覚えのある音が空から聞こえてくる。間に合わないと判断したローガンは咄嗟に後ろを走っていたARR15を自分の方に引つ張った。

そして、ツゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!と腹に響く爆音がした瞬間、襲ってきたのは立っていられないほどの爆風と身を焦がす熱であった。

ARR15を抱え込むように庇ったローガンは彼女と共に吹っ飛ばされ、地面に後頭部を激しく打ち付けて意識を失った。

激しく燃える見覚えのある紅いシンボルマークが売りだった民家。掌には無数の紅い切り傷と痛々しい火傷。夜空に浮かぶ紅い月。

紅、紅、紅。

あの日、刻み付けられた記憶に印象深く残っているのは紅いものばかりで。

それがとてつもなく、どうしようもなく悲しかった。

「……ッ」

急速に意識が浮上し、眩しい光が視界に飛び込んでくる。数回瞬きをしてからぼやけているのを治めた後で、首を動かして周囲を確認。見慣れた壁紙と床、ベッド、手洗い場。自分が所属する部隊の独房であることがわかった。

意識を失ってからどれだけの時間が経ったのか、あの場の敵はどうなったのか、死傷者は出たのか、そして自身が庇った少女をはじめとした仲間たちは無事なのか。

知りたいことは山のようにあったため、ローガンはベッドから脚を下ろし立ち上がったが、視界がぐらつきまたすぐに腰を下ろすことになってしまった。

「かーったく、ちきしょう……」

無意識に口から出た独り言とため息。

とはいってもここで立ち上がったとしても出歩くことがかなわないので意味がない。

それに、独房に入れられるだけの大きな理由がローガンには思い当たらない。だがそれは、司令官としての良識を弁えていたとしての話だが。

「……よう、お目覚めかい」

あれこれ考えているローガンの耳にこちらも聞き慣れたくたびれたような男性の声が届く。顔を上げると、そこにはグランドの制服に身を包んだ看守が苦笑いを浮かべながらこちらを見ていた。

「ああ。こつちが寝てる間に我が家に勝手に放り込んでくれるとは、相変わらずあの基地司令は俺のことが嫌いなんだな」

「ここを我が家と言ってくれるな。お前さんの為に、毎食持つて行ってやつてるこつちの身になってくれ。兵役を終えてここに来てからお前さんの話を全く聞かない日は一日もないぞ」

「それだけ部隊で活躍しているって思ってくれよ」

「ぬかせ」

最早独房に入れられてから定番事項の一つとも言えるようになった看守との軽口の叩き合い。頭を光らせ厳格そうな顔つきをしているこの看守はローガンにとっては仲の良い親戚の叔父のような存在である。

それから看守から様々なことが聞けた。

まとめると、ローガンが気を失ってから推定で三時間ほど経過しているとのこと。脳震盪を起こした上に地面に摩擦を起こしながら滑ったことで頭に包帯が巻かれている以外にも体中にも様々な処置がされていた。ローガンが気を失ってからもケイド達が奮戦して迫撃砲で散り散りになり始めた鉄血達の制圧戦になり始めたころにA R小隊の残りのメンバーも合流し、戦場を蹂躪したとのこと。そしてローガンが庇ったA R 5をはじめとした仲間たちも無事であるということだった。辛うじて命を繋ぎとめたブラボーと迎えの隊員たちも現在医務室で安静にしているという。

「それにしてもお前さんに砲撃を知らせずにブラボーにのみ教えるとはな。もう本格的に殺しに来てるぞノートンめ」

「自分の家が貴族だった頃の権力を振りかざして部下たちを黙らせているんだろうな。いつかは内部の誰かから暗殺されるんじゃないかと思うんだが粘るな」

迫撃砲による敵の殲滅は適当な判断だっただろうとローガンも思う。地上部隊を向かわせるのだとしても、移動などで時間を食ってしまい到着する頃には手遅れという定番の結果になりかねなかった。そこで基地からの遠距離支援として、旧世代の兵器である迫撃砲で攻撃したのは間違っていないと誰もが思うだろう。だが、そこでブラボー2からの要請に応えたオペレーターとは別の意思が働いたと見える。

「私もチラツとお前さんたちが帰還した際にあの新人才オペレーターを見かけたんだが、

気を失っているお前さんを見て顔面蒼白どころか死人の顔色になっちまってたよ。聞いた話じゃ、有効にしていたはずのアルファへのチャンネルが閉じられていたそうだし、やった筈の当人は否定しているがな」

「あー……それはお気の毒に」

「お前さんとケイドの坊主が招待した客人方もカンカンだ。特に桃髪の子と黒髪眼帯の子がね。桃髪の子なんざ、自軍の基地に戻った暁には指揮官に報告するとまでね」

「AR15が？」

「戦術人形つてのはあれほどの感情表現が豊かなんだな。私も長い間生きてきたが、あそこまで怒っている様を見かけたことなんざそうそうない」

「そんで？彼女達は罵詈雑言をぶつけたわけじゃないだろ。ただただ言われたことをやるだけのポンコツとは違ってちゃんと物事を考えて動いていた奴らだ。ちゃんとキレる訳も言ってたんじゃないか」

「ああ。ブラボー達がHQにアルファチームも救援に向かうことを報告していたのを踏まえて、『アルファチームの彼らにもちゃんと支援を話して弾着するまでの時間を言ったのならいい。だが本人たちに何も言わず、遠回りのような形で知らせるとは……！』云々とね。まあ、他所の自分たちも危うく巻き添えを食うところだったからキレるのも筋が通ってる」

おおう……とローガンは慄いた。普段自分達の前では威張り散らしているノートンという名の無能司令官がそんなことを言われてどのようになつてたのかを知りたいと思つたが、それは後で独房から出たときにケイドがその場にいたら教えてくれるのかも
しれない。

「まあともかく休みな。頭を打つた以外には少し範囲が大きい火傷を負つただけで特に
デカイ怪我はないみたいだしな」

看守はそういうとゲートの一部を開け、肉や野菜などのいくつかのメニューを載せた
プレートを置いていった。そういえば朝方ろくなのを食べてなかつたよな……とロー
ガンは重い体を動かして食事にあつた。

独房に入ると特にこれといったやることはない。強いていえば、天井のシミを数えるか独房内で筋トレするぐらいである。だが怪我をしてしまつてロクに体を動かすこともままならないため、シミを数えるか睡魔が来ないまま目を閉じてベッドの上で転がっているぐらいしかできることはない。

夕日が狭い窓から差し込んだ今より少し前に疲れた様子でありながらもニヤニヤしているケイドが面会に来た。回収したドロウンの扱いが悪いと研究開発部門から小言をもらつたり事後処理などを行つたりと、普段であればローガンと二人でやることを一人でやつたため積み重なつた疲労も単純に二倍なのであつた。そんな彼であつたが、ノートンがAR15を中心としてAR小隊の面々から説教をもらつたり、訓練に勤んでいる他の兵士達が利用している設備があまりにもお粗末だとメンタルをズタズタにされてたようだった。そんな話をケイドから聞いたローガンは怪我の痛みを忘れて腹を抱えて笑つた。

それが数時間前、ケイドがまた事務処理に戻つてから現在。さすがに爆笑の波は過ぎ去り、その反動か退屈になつてしまつていた。

こんな時間があったらせめて銃の手入れとかそんな地味な作業をさせて欲しいなどと考えていたらいつの間にか転寝をしていたらしい。

独房の格子になにかが当たった音がした瞬間、ローガンは跳ね起きた。

「ぶえ!？」

そんな間抜けな声を出して起き上がり音のした方を見てみると、そこには朝の戦闘で相棒として戦場を走った戦術人形がいた。

「……ごめんなさい。寝ていたのだから起こすつもりはなかったのだけれど」

「……気にするな。下手に寝すぎてしまえば変なところで支障をきたすからな」

さすがに気まずそうな顔をしているARR15に欠伸混じりでそう返した。見てみたところ、目立った外傷はない。顔に湿布のような絆創膏を貼っているぐらいで大丈夫そうだった。

「お互いに無事で何よりだよ。今じゃいつ死んでもおかしくないからな」

「無事といってもあなたは傷だらけじゃない」

「五体満足で命をもって戻ってこれたら無事って俺は思っているからな」

「なによそれ」

おどけたようなローガンの台詞にARR15はクスリと笑った。しかし、何かを思い出したのか表情が先程よりも暗くなった。

「ごめんなさい。私があそこでミスをしなければ、あなたがここまでのことにならなかった」

「それこそ気にするなよ。運だとかタイミングというものには技術を磨いてもどうやっても抗えない。それにあんな状況下じゃ、奴らだって俺達と同じことをしてくることだって十分有り得たんだ」

「でも、私がおつとしつかりとしていれば……」

「あのな、俺があそこでああしたからお前さんは生きてるんだろが」

ローガンはベッドから立ち上がり、格子の隙間から腕をすり抜けさせ肩にやさしく手を置いた。置いた瞬間、俯いていたARR15が体をビクリと震わせ恐る恐るといった感じで顔を上げる。その目は自身への呵責と申し訳なさで淀んでしまっていた。

「もしあそこで置いていってしまったとしたら、俺は自分を許せなくなる。お前はそうならないようにしてくれたんだよ」

「私……?」

「ああそうさ。それにお前だってできるんだったら大勢で任務を達成して帰りたいだろ」

「……ええ。私だって任務を達成する時だってARR小隊全員でして帰還するんだって決めるから」

「そういうことさ。基地に帰還したら、助けられなかった命に謝るのは間違っちゃいないさ。だけどそれよりも、一緒に生還できた奴らと達成感を味わえるだろ。それでビールで乾杯して飯食って大騒ぎ。終わった翌日に今度同じような状況に直面したらどうしたら犠牲を少なくできるかを考えればいいのさ」

過去にした経験をローガンは時折思い出すことがある。たとえば、鉄血に人質として捕えられた民間人の救出を命じられた時とか。その時は救出するのにあたっていた兵士数人と民間人も多くやられてしまった。帰還してからローガンは自分を責め、助けられなかった人達への謝罪を口に出さずに続けていた。だがその時、今は亡き教官から『兵士として戦場に出た以上、死ぬのは覚悟しなければならぬ。それにお前は民間人を数人死なせたんじゃない、それ以上のあいつらを助けたんだ。それは恥じることも謙遜する必要ない、胸を張って誇れることだ』と、ただでさえ少ない配給ビールを置いていくてくれたのである。

「それに、お前は俺があの時した判断を間違っていると言うか？」

「そ、そんなことは言うつもりはないに決まってるじゃない！」

「だったら、言うべき台詞は『ごめんなさい』じゃないだろ？」

ニヤリとローガンは笑いかけてやる。一瞬呆けた表情になったARR15だったが、すぐにそういうことかといったように肩を竦めた。

「……ありがとう、ローガン。私を助けてくれて」

「どういたしまして。お前はもつと強くなれるよ」

迷いの雲は晴れたような顔になったA R 15に激励を贈ってやる。そして肩からポンポンと軽く叩いた。

「それで、謝りに来ただけだったのか？」

「ううん。実は私たちを迎えにここまでグリフィンがヘリを送ってくれたのよ。それがもう少しで到着するってことだから挨拶に来たの」

「そういうことだったのか。こつちに来てから……いや、やっぱりいい」

藪をつついて蛇を出すところであった。ケイドから話を聞いておいてよかったとローガンは心底思った。首を傾げたA R 15に誤魔化すように笑みを浮かべる。

「ともかく、こつちとしても今回の経験は貴重だったよ。グリフィンの部隊であるお前達と戦えてよかった」

「こちらこそ。鉄血の戦術人形に対して物怖じせずに戦うあなたと戦線を共にできてよかったわ。姉さんもあなたとケイドを高く評価していたし」

「そいつはよかった。……気をつけてな」

「ええ、ありがとう」

握手をかわしたA R 15は振り返ることなく去って行った。ローガンはその後姿を

見えなくなるまで見送り、先程までのやり取りを思い出す。

「……なに恥ずかしいことを言っただよ、俺」

なにも考えることなく自然に口から出た台詞に溜息を漏らす。ベッドに腰掛けて悶えていると、基地のどこかからかへりのローター音が聞こえてきた。AR15が言っていた、グリフィンからの迎えのへりの音だろう。

そういえば、とローガンは思い直す。なぜAR小隊はあの区域に、四体で固まって動かずにわざわざツーマンセルを組んで行動していたのがわからなかった。自分達と同じように地形のデータ採取？いや、彼女たちはそうするのに必要な機械などをなにも出していない。それに彼女たちの装備を見た限り、戦闘になった時に使うものだけでそれ以外の物は見当たらなかった。一体……？

そうこう考えているとへりの音は段々と離れていき、次第に聞こえなくなった。聞くべき本人たちがいないのにわからないことを考えても仕方ないと思ったローガンは限られた窓から見える空を見た。

「また明日から頑張らないとだな……」

夕日が完全に沈む前にもう少してこの独房から出られることだろう、なら明日からどうするかケイドと話さないとな。

そうローガンは暗くなりつつある空を見つめ続けていた。

その日の夜のことだった。グリフィンのヘリが撃墜されたのを確認したという報告がローガンの元に来たのは。

2. 遠征という名の尻拭い — A Wolf is c

o m i n g —

「ピピピツと警告音が耳の無線機に流れた。すぐに端末を確認し、ドローンによつて確認されている鉄血の数、位置を確認する。続いて端末を操作し、ドローンの飛行で移動ができない代わりに光学迷彩を起動させて見えなくした。

「ケイド。そちらから二時の方向、鉄血のスカウト二体とヴェスピド一」

『了解。こつちがヴェスピドを倒すからスカウトを頼むぞ』

サイレンサーをバレルに装着したカスタムM4を構え、匍匐姿勢で雑草の隙間からスカウト一体に狙いを定めた。距離はおよそ10m弱。一問置いて、鉄血の戦術人形のすぐ横の背の高い雑草から相棒が飛び出し、ナイフを使ってアサルトライフルをもった戦術人形の喉元に突き立て切り落とすように引いた。先制を取られたことに気付いた斥候のドローンがケイドに照準を定めるが、撃たせまいとトリガーを引いた。パシユンパシユンと二発発射し一体ダウン。もう一体は二人で同時に攻撃。一発の弾丸で動きを鈍らせ、投げられたナイフが刺さった。およそ五秒の戦闘であった。

『クリア』

「よし。こつからは身を隠せるものがあまりない。ケイド、先行してくれ」

『おう。遅れるなよ』

浮遊していたドローンを回収し、ローガンは立ち上がった。ケイドは義足のカードリッジを消費して先行していく。そこで常時回線を繋いでいるUAVオペレーターに報告した。

「マジック。ポイントデルタからエコーに向かう。こちらの位置が確認できるか？」

『ああできてる。だが送られてくるUAVの画像が酷い』

「研究部門め、自慢してた割には大したことないじゃねえか」

『だがその先の様子は確認できる。ケイド、進行方向に古い豪邸がある。サーマルで確認したところ、周囲は大丈夫だが中には敵がわんさかいるぞ』

『どうする？ここを無視してポイントエコーに向かうのは厳しすぎるだろ？』

「少し待て」

ローガンは道を外れて斜面を下り、ケイドとは別の位置から風化している豪邸に辿り着いた。再びドローンで建物の構造を確認し支えている支柱を探す。そして――

「……見つけたぞ。ケイド、今ドローンでマーキングしている位置に爆薬を仕掛ける。そうすればうまくいく」

ドローンのレーザーポインターでケイドに指示。彼は周囲に気を配りながら近づき、

C4を取り付けた。

『……設置完了』

「よし、合流するぞケイド。建物の北側に向かえ」

そしてローガンも身を屈め、痕跡を可能な限り残さないように意識しながら移動した。斜面の終わりは豪邸の裏庭になっているため音も立てないように意識しながら歩く。

北側に回り込めば普段よりも気を引き締めているのがわかるケイドが待機していた。

「爆破すれば爆音が遠くまで響いて他の連中にも聞こえるはずだ。ここからはさらにステルス重視、マジックはリーダーによる支援を引き続き続行してくれ。ケイドはこれまでもとは違ってあまり離れるなよ」

『了解した』

「了解。爆破する」

カチリとりモコンをケイドが操作する。背後から爆音の後に爆風も追いかけてきた。建物が完全に倒壊したのを確認したローガンとケイドは前進し、再び木々が生い茂る道へと入った。

『さっそくお出しました。進行方向に四つの熱源反応。動きからしてそちらに気付いていないようだが、さきほどの爆音を聞きつけて確認にきたようだな』

「まだ距離があるが肉眼で確認。ここはやり過ぎぞ」

もし気付かれたとしても反撃に出れるよう、ローガンはカスタムM4のトリガーに指を掛ける。そして数時間前までのブリーフィングをもう一度脳内で再確認した。

現在より数時間前の午前九時ごろ。緊急招集されたローガンとケイドは司令室にて上司であるノートンから呼び出されていた。

「まったく貴様ら、許可していないのに余計な仕事を持ち込みやがって！」

神経質であることを伺わせる金切声を出す司令官に二人はどこ吹く風だ。とはいっても、今回は状況が自分達にもよろしくないもので心底からざまあといったような愉悅に浸る気分ではない。

「それで、俺達はなにすればいい?」

無視されたことに青筋を浮かせてノートンはローガンを睨むがそんなことを気にする暇はない。真剣な表情を浮かべる彼に基地の副司令であるものから説明を受けた。

昨晚未明、グラランドのヘリポートにて着陸したヘリがAR小隊の戦術人形達を回収し、基地に帰還しようとしていた。しかし何者かがそのヘリを攻撃、撃墜したとのことだった。そこでローガンとケイドの二名で現地入りし、現場で行方不明になっているAR小隊を救出するという任務であった。現地状況を考えれば鉄血による攻撃と見るのが妥当だが、ただの戦術人形には落とせる個体はそうそう存在しない。となれば……。

「グリフィンの輸送ヘリが撃墜されたのはここより北、約四百キロ先です。我々の中でもここまでの距離での遠征を経験している隊員は少ないです。そこで墜落現場とされている地点より五十キロ以上離れている安全地点までお二人を送ります」

「それはいいが、オレ達二人だけか?土地勘があつちの方にはないわけではないが、二人にやるには難易度が高すぎるぞ」

「研究部門が新開発したUAVで支援を行います。お二人が作戦を遂行するのに飛ばし

「続けることが可能にできるように、ソーラー電池を応用した新電池で日が沈むまでは支援できますよ」

「とはいってもだな……」

相変わらず表情や感情の変化が乏しい副司令官から感じていた。それにしても今回の件は自軍ではないとはいえ、緊急事態であるというのにあまりにも焦燥感などが見られない。これでは隣で顔を茹蛸のように真っ赤にしているノートンがまともに見えてしまう。

だが今は置いておくとした。

A R小隊の救助を行うという作戦を立案したということとは、そうせざる状況に陥ったということだろう。彼女達にも軍人というよりも仕事をする人間であれば身に着けることになる報告の義務が備わっているはず。となれば、彼女たちはグリフィンの方にグランドの基地にて補給を行うということを報告していただろう。そのグリフィンが送ったヘリが帰路の途中で撃墜、ましてやA R小隊という部隊が失われたのでは彼らにも手痛いのだろう。ローガンから見ても戦場でケイドと共に横断してみせたM16と、正確な射撃と冷静な判断を行っていたA R15の戦闘力は高い。残りの二体の戦術人形はわからないが、グリフィンにとっては失いたくないに違いない。そんな状況でグランドが動くことになったということは、グリフィンに『要請』という名の自身の尻拭い

をさせるように交渉したのかもかもしれない。それでも向こうからすれば怪しまれるのは当然で、誤解が生まれたとしても仕方がないのだが。

「……とりあえずわかったよ。出発まであとどれぐらいだ？遠征にもなる距離だし念入りに準備しておきたい。」

『目的地まであと数キロだ。この調子で慎重に行け』

道中にて遭遇した鉄血の戦術人形達をやり過ぎ、道を少し迂回、どうしても避けら

れなければサイレンサーつけた状態で交戦するという状況が続いた。だが墜落現場で
ある目的地への距離が縮まるほど、鉄血の数が増えていった。

「マジック、あまりにも警備が嚴重すぎる。UAVで墜落現場はどうなっているんだ」
『確認できる限りでは、鉄血がうようよしているのしかいえないが……待て、無線の観測
員からの報告が来た』

「どうした、マジック？」

『……オープンチャンネルでAR小隊の戦術人形から要請があつた』

「誰からだ？」

『AR小隊の部隊長を務めるM4A1からだ』

彼にとつてのAR小隊の中で付き合ひのある彼女でなかったことに少々落胆した。
それに先日のやり取り。彼女が見せたあの態度にローガンは過去の自分と重ね合わせ
てしまうほど、現代において人間らしい、下手すれば自分達よりも人間らしくあると考
えていた。

「彼女は、今どこに？」

『オープンチャンネルで話している以上、場所までは話せない。だが現在置かれてい
る状況を教えてくれたそうだ』

マジックからの報告によると、現在AR小隊は部隊の無線が壊れた状態で散り散りな

のだという。なんとか旧世代の一般家庭で置かれていた無線を使えるようにしたが、グリフィンをはじめとした軍用チャンネルには接続できなかったそうだ。そのため賭けではあつたが、ケイドが起こした爆音を聞きつけた鉄血達が動揺したことからオーブンチャンネルに呼びかけを行ったという。彼女自身には怪我はなくまだ発見されていないが、グランドにて補給した弾薬もまた尽きそうになっているそうだった。

「逆探知はできなかったのか？」

『する前に切られてしまったそうさ。なにせ旧世代の無線だ、探知にも多少時間かかって仕方がないし、鉄血側にも気付かれないようにするための策だろう』

「とにかく了解だ。それでどうする？墜落現場の状況も一応確かめた方がいいか？」

『なんともいえないな。彼女を放置するわけには当然いかないし——ローガン！』

突然の銃撃だった。銃弾が頬を掠め、木々の隙間を抜けていった。長らく喋りすぎていたらしい。鉄血のドローンが警告音を周囲に発しつつ、ローガンとケイドに照準を定めていた。

「くそつ、敵のスカウトに見つかつたぞ！」

「走れ！敵の増援がすぐに来るぞ！」

すぐさまスカウトを倒したものの、今の警告音を聞き取られただろう。ケイドに促され、墜落現場に直行するのではなく側面に回るようにして走り出した。

走り出してから数分後、人間の自分達にはわからない音声を流しながらヴェスピド、リッパーが現れローガン達を銃撃しだした。

「おいでなすつたぞ！どこに逃げればいい!？」

『その先は駄目だ、他の部隊の待ち伏せがある！そのままでは滝口に出て橋の上で撃たれるぞー!』

「だったらやることは一つだ!」

「……おいマジか！オレは高所恐怖症だつていうのお前には話したよな!」

「何回も聞かされてることだから覚えてるよ!」

「なら無理だつてわかっているよなあ!？オレが人生で嫌いなのは掃除と蜘蛛と高所なんだつて!!」

「じゃあ引き返してひき肉にしてもらうか!？戻ったら地獄、行ってもワンチャン助かるかもしれない地獄だ!!」

「戻ったら地獄、行ったら煉獄の間違いダルオ!？」

本人たちも後々になれば冷静に思い返したら呆れ返る会話だが、今は非常時であり命の危機である。スモークグレネードを一つ行く手に投げ、発生した煙の中に飛び込む。そして煙から抜けければ林から開けた地形に出、目の前には陣形を整えて待ち構えていた鉄血の戦術人形が銃のバレルを光らせていた。ローガンの右手の方にはマジックの

かるので、ローガンは端末を操作し無線の出力を調整した。

「繰り返す。ケイド、マジック。応答してくれ」

『——し、ようやく聞こえるようになったな。ローガン、無事なのか』

「なんとかな。だがケイドからの応答がない」

『こちらからも呼び掛けているが反応がない。それにしてもよく無事だったな』

「日頃のフィジカルトレーニングの成果かね。だけどケイドの応答が遅い」

川に半身が浸かっている状態から完全に陸に上がったローガンは装備を確認する。メインのカスタムM4、サブのP226、予備の弾倉にスモークグレネード、ドローンなどの電子機器の類もある。背中に背負ったリュックの中の予備物資も無事であるため、どうやら川に相棒以外は流されたりはしていないらしい。

「マジック、こっちは単独でドローンを使ってAR小隊を追う。UAVはケイドの捜索に回してくれ」

『いいのか？そうすればたしかに並行していけるが、お前さんに降りかかる危険が大きくなるぞ』

「俺のことはいい。それよかあいつの命を優先してくれ。……もうこれ以上、相棒になつた奴をなくすのはこっちも御免だしな」

『……了解した。ただし、必要になればいつでも言ってくれ』

「ああ。あいつの行方が分かったら教えてくれ。助ける必要があれば向かう」

頭上のUAVが自分の頭上を通り過ぎていったのを端末で確認し、ローガンはドロンを起動し方角を確認しとりあえず墜落現場の方へと歩いていった。

煙が立ち上る墜落現場に辿り着いたローガンは見晴らしの良い丘から見て絶句した。そこには三十は超える戦術人形が蠢いていたのである。

「まさか、こんなにいるとは思わなかったな……」

道中に出くわしたリツパー、ヴェスピド、イエーガーなど鉄血の戦術人形色とりどりである。その中で注意を引くものがあった。双眼鏡でよく見てみると、一体の戦術人形ではある。だが周りにいる戦術人形よりも装備が充実しており双眼鏡越しでもわかる雰囲気は異質だった。

「やつぱりいやがったか。マジック、報告だ。今回の鉄血の連中のなかにハイエンドモデルの個体を確認した」

『そうか。基地の近場でよくいる連中よりも連携が取れていて錬度も高いと思っていたが、やはり……』

「グリフィンのへりを撃墜したのも奴と見て間違いないだろう」

遠征として現場に来る前からローガンは今回襲撃した鉄血の中にハイエンドモデルがいる可能性が高いと見ていた。そもそも、鉄血にへりを墜とすことが可能なのかと問われたらローガンは人間と同じくできなくてはならないと答える。例えばわかりやすい武器で言えば対空ミサイルランチャーである。現在それをもった鉄血の個体を確認してはいないが、先日ローガンが狙撃して倒したロケットランチャーを持った個体であればいる。あの状況、狙っていたのはM16とケイド。それらからすれば無誘導のRPGであることが考えられ、それであれば難易度は上がるが可能ではある。他にもへりのローターを狙って狙撃するなど高等技術を持った者ならできる方法があるが、それができる

人間も鉄血もそうそういないだろう。加えて、撃墜されたのは夜間となればノーマルモデルの鉄血の戦術人形には不可能に近い。となると、ハイエンドモデルの戦術人形が関与している可能性がある」とローガンは考えていたのである。

「墜落現場にはA R小隊は——いや、あれか？」

『どうした？』

「さっき言ったハイエンドモデルの目の前に拘束されている奴がいる。鉄血の奴らよりも身なりが俺達寄りだ」

見た目としては、金髪の赤目。どこか幼さが残っているような印象を抱かせる顔立ちではあるが、ローガンは顔を合わせたことがない戦術人形であった。

『少し待て……。グリフィンから提供された資料によればM 4 S O P M O D I I、A R小隊の一員だ』

「やっぱりそうだったか……」

双眼鏡で見ていると、S O P I Iは先程ローガンが見つけたハイエンドモデルととにかく言い争っている。ハイエンドモデルの方の表情はわからないが、S O P I Iの方は怒っているのかのように見えた。その内、S O P I Iの背後に立っていた戦術人形が彼女の後頭部を殴り気絶させた。

「どうやら移動させるようだ、追跡する」

『了解だ。だが深追いするなよローガン』

双眼鏡をしまい、丘から下りたローガンはS O P I I を担いだ鉄血の進行方向に向かった。坂を滑り降りると平地を走る。ただし、物陰に隠れて次の移動先の安全を確認してからである。マジックからのリーダー支援が無い上にケイドもないのでいつもよりも気を張り詰めての作戦行動であった。そして途中中とあることに思い当たり、C 4 爆弾をとどこどこに設置した。そして掌サイズの円盤を取り出し、それを大体等間隔に平地に投げた。

「……見つけたぞ」

途中から追いかけてつ爆薬などの設置を行ったため多少遅れそうになったが、肩にS O P I I を担いだ戦術人形たちに追いついた。数は八。だが交戦して救出したとしても開けたところでは退路の確保が難しいかと思ひ、鉄血人形の進行方向にトンネルがあることを確認しドローンを起動した。まずは手でトンネルの向こう側の状況を確認。見たところ、敵影はなしで遮蔽物にすることが出来る瓦礫などがあつた。次にドローンをトンネルの逆側の入り口に戻し光学迷彩を起動し待機させた。そしてローガン自身はカスタムM 4 につけられているサイレンサーを外す。そしてC 4 の起爆と円盤の起動を連結させたりモコンを取り出し、鉄血が入口まであと数メートルといったところでスイッチを起こした。

途端、さきほど通った墜落現場付近の方から爆音が響く。それに気づいた戦術人形は反射的に振り返った。

ローガンは咄嗟にカスタムM4のシングルショットでSOPIIを担いでいた鉄血を排除し物陰にもう一度身を隠した。そこでドローンの操作メニューで自動操作・攻撃を選択。承認ボタンを押した途端、待機していたドローンは9mmパラベラム弾のマシンガンを発射し始めた。ズダダダダダダダッ!!と発射された弾丸は鉄血を排除していく。自身も発砲しドローンの銃声が途絶え、敵が全滅したのを確認したローガンはカスタムM4を背中に回す。護衛として別の鉄血が持つていたSOPIIのだと思われる銃もストラップを肩にくぐらせ、未だに意識を失った状態のSOPIIを抱え上げた。要は、お姫様抱っこである。

そしてドローンをカバーさせるために自動でこちらに寄せたのだが——。
「くそっ、来るのが早すぎるだろ!」

こちらの騒ぎに気付いた鉄血達が集まってきたのである。

先程ローガンがC4と一緒に仕掛けたのはホログラムのデコイである。まだ研究開発段階で実用にはまだ足りないが、テストとして使用した際のデータが欲しいとのことだったので持ってきてたのだがこうして役に立てれたのだろう。だがやはりまだ信頼に足るほどの性能はなかったのだろう。

敵の接近を感知したドローンが迎撃行動を開始する。それでも火力が足りない。スモークグレネードを使って射線を塞ごうにもS O P I Iを抱えているため両手が塞がっている。一旦彼女を下ろして迎撃に加わろうとしても、道の真ん中に出てきた以上遮蔽物がないため銃撃戦にもほとんどならない。

ここまでうまくいったが万事休す——といった時だった。
「そのまま走って!」

トンネルの逆側に誰かがいる。逆光でわからないが、声で誰かわかったローガンは援護を任せて走った。単発で狙いは正確らしく、ローガンの方には一切銃弾が飛んでこなかった。

トンネルを抜けたローガンはS O P I Iを一旦横にある廃車の陰に隠し、背中に回していたカスタムM4を構えて突撃してきていた鉄血のリーパーを二体倒した。

「リロード!」

「カバー!」

横の少女が再装填するために遮蔽物の後ろに入る。ローガンは咄嗟に口から連携の台詞を言って援護する。味方の被害にひるまずにまたリーパーとダイナゲートが突っ込んできた。ただ、ダイナゲートは数で攻めてくるため、ドローンとカスタムM4のフルオートでもローガン一人では抑えきれない。

「もういいわー！」

少女との連携はうまくいっているが、このまま迎撃していても埒が明かない。予想外のことが続いたが、これであればさつき考えていたことが出来ると思ったローガンが叫んだ。

「爆発させる！注意してくれ！」

残っている二つのC4爆弾を両方の壁に投げつける。そして二つが壁にくつついたところでリモコンの電源を起動し爆破した。

ただでさえ風化して劣化してきているトンネルの壁が崩れ、天井が落ちた。やがて崩れ落ちたコンクリートと土などが山になり、道を完全に塞いだのであった。

「なんとかなった……」

「油断しないで。銃声を聞きつけて他の鉄血が来る筈よ」

「それもそうだな。俺が運ぶから援護頼むぞ」

頷いた少女は先導し、ローガンは彼女の後をついていった。それからはロクに接敵せず済んだ。

やがて完全に離れたところまで退避した二人は肩の力を抜き、逃げ込んだ先の旧陸上競技場の部屋の中で腰を下ろした。張りつめていた緊張の糸を緩め、時間を確認。現地入りしたのが午前十一時だったのでそれから四時間経過している。休憩なしでここま

できたローガンの身体に疲労がどつと押し寄せてきた。

それでも今はどうでもよかった。壁際に寄りかかりすぐ横で仰向けになっているS O P I I の頭を撫でている少女を見た。同隊の仲間が無事だったのがやはり嬉しいのだろう。その目には安心したような喜色が見えた。

「……よく無事だったな。あれだけの数の鉄血が辺りをうろついていたというのに」

「あなたこそ、ここまで人間でありながらもここまで大きな怪我もないで来れたわね」

「お互い様だな」

「ええ本当に」

任務である以外にも、個人的にも少し心配していた相手が無事だったのでローガンにとつては喜ばしいし、これ以外の表現の仕方を彼は知らない。

「……本当に無事でよかったよ、A R I 5」

そう言われた少女、A R I 5はS O P I Iに向けていたのと同じようにローガンに微笑んだ。

「ん……」

休憩がてらARR15と情報のやり取りなどをしてっていると、意識を取り戻したSOPPIIが声を上げた。

「起きたの？SOPPII」

「ARR15……？」

「ええ、私よ」

起き上がったSOPPIIは同僚の元にヨロヨロと近寄り抱き付いた。その様はまるで血の繋がった姉妹のようであった。

「よかった……よかったよお……！」

「もう大丈夫よSOPPII。まだ敵地から脱出できてないけど救援は来てくれたから」

「救援……?」

そしてAR15の向かい側で早めの簡単な軽食の支度を行っていたローガンに目を向ける。警戒されるものだと思っていたのだが、無邪気な子供の用に首をこてんと傾げた。

「……なんであの時の寝坊助さんがいるの?」

「ねぼっ!」

「彼が私達を助けに来てくれたの。それに敵に担がれていたあなたを一人で助け出そうとしてくれたのよ」

「……それはともかく、寝坊助というのを否定して欲しいんだが」

おそらくローガンがAR15を庇って気を失った間にこちらの顔を見たのだろうが、心外な覚え方をされてたことにながっくりである。気を落としたローガンだったが、AR15とSOPHIEが笑いあっているのを見て持ち直す。

(家族……家族か……)

悟られないようにここまで背負っていたリュックから私物として持ってきた調味料を調理しているスープの中に入れる。材料には火が通ってきているのであともう少し煮込めば完成であるが、他人がいても物思いに耽ってしまう。

今ではもう、ほとんど暖かい記憶はない。あの地獄のような拭い去りたくてもできな

い記憶だけがいつまでもローガンの中でこびりついていた。

「……さて、できたぞ」

できたスープを金型の食器に装い、二人に振舞った。ローガンが作ったのはキャベツやニンジンなどといった野菜と貴重なベーコンを刻んだコンソメスープである。ほんわかした湯気を立てる器を受け取ったS O P I Iは目を輝かせ、A R I 5はほうと息を吐いた。

「食べていいの？」

「もちろん。だけど熱いからこぼしたらもったいないし、がつついて食うなよ」

「はーいー！」

料理人ではないので簡単な味付けしかできてないが、二人には好評みいだった。美味しいと言いながらS O P I Iはニコニコ顔で刻まれた野菜をスプーンで掬い取って頬張り、A R I 5は琥珀色のスープを飲んで感動しているかのように見えた。ローガンも食べてみると、我ながらも悪くないと思える出来であった。

「ちそうさまー！」

「馳走様でした」

「お粗末さん。でも大したことでもないからそんなでもなかったら？」

「ううん。戦闘の合間に食べるレーションとかよりも遥かに美味しいわ。むしろこの味

のが出て欲しいと思うぐらいよ」

「それだと飽きが回るだろ」

やがて完食した三人は片付けを行う。使った食器は基地に帰還した際に洗うために袋に入れて調理に使ったコンロと共にリュックに収納。煙は見えなくなつてから天井を伝うように部屋伝いで外に行つたため問題ない。

片付けが終わつたローガンはリュック内にある予備の弾丸を空になつたマガジンに入れ、スモークグレネードとC4爆弾を補充した。AR15もここまでで相当使つていたらしく、持つてきていた弾丸のパッケージはすべてなくなつた。その間、他のAR小隊のことを心配していたSOPHIEからも掴んだ情報を合わせて整理していた。

「なんだかよくわからないけど、奴らなにかの作戦を実行するみたい」

「作戦?」

「あのハイエンドモデルのハンターっていう奴はここにくる『狼』を狩るつて言つてた。なんか鉄血達からすれば重要ターゲットみたい」

「ここにくる……? 情報漏洩が起こつてる?」

「……まだ何とも言えないな。とにかく、昼間に連絡を寄越してきたM4と可能なら合流しよう」

「M4無事なの!?!」

「そうみたいだな。だがこつちが位置を知るために逆探知しようとしたが完了する前に切られてしまったようだ」

それでも大体の位置を掴めていると、ローガンは近隣の地図を広げた。

「まず、こつちのオペレーターの話だと旧世代で一般家庭に置かれていた無線機だと言っていた。この辺りで村だとか住宅地とかと言われていたところはここことここだ」

事前に赤ペンで囲っていた墜落現場の位置から離れている二カ所に指差した。

「加えて、南の方から俺とケイドがここまできるときに道中で敵を一網打尽にするために爆薬を使ったんだ。その爆音が聞こえていた鉄血が動きを乱したのを確認できたことから、きっと南側の方に逃げていたんだろう。となれば、ここしかない」

そこは墜落現場からさらに北にある住宅地ではなく南東に位置する村であったところだった。もちろんこれはただの推測だし、正解だったとしてももう彼女はそこにいない可能性が高い。それでも――。

「……なるほど。たしかにそう考えられるわね」

「当てにしてくれるなよ。これが外れてた時が俺は怖い」

「別に攻めはしないわよ。私が一人でいた時だって手がかりも特になかったから墜落現場の周辺を散策してたんだから」

「そういや、お前よく俺を見つけたな」

「私も墜落現場の方でS O P I I が捕まってるのを見たのよ。だけど勝算も何もないのにただ闇雲に突っ込むだけじゃ無駄死にだっただけ」

「はいはい、そういうことにしておくよ」

私一人でもやるつもりはあったのよと少し悔しそうに続けるA R I 5にローガンは苦笑した。A R I 5は初対面の時からそうだがどこか戦績を上げることにごだわつてするような節があつた。ブラボー救出のあの戦場で、ローガンが鉄血の戦術人形の軍勢の一部をたつた三発の銃弾で吹き飛ばした際にはこつちを見た横目に驚きとわずかながら妬みがあつたのを感じていた。しかし彼女は仲間を守ることに重点を置き、優秀な戦果を残すことに関してはそれからのようだったのである。現に、先程の戦闘ではS O P I I を助けるために全力を振るい、ローガンがそれまでしていたような博打のような行動はしなかつた。連携をとり、S O P I I を確実に助け出して離脱することに全力を注いでくれたのだ。ただ単に付き合いのある小隊メンバーである彼女を助け出したかつたからと言えればそれまでだが、A R I 5という戦術人形は戦果を上げることよりも味方を一切見捨てない奴だというのがローガンの認識である。

「……なんだかとても二人とも仲良しだね」

ぶーつといった感じに頬を膨らませたS O P I I がこちらを睨んでいる。

「別に仲良しというわけではないさ。単に付き合いが他よりもあるというだけだ」
「でもARR15、他の人形の前ではこんな風にはなかなか話さないよ」

「SOP11!?!」

「おん? そうなのか?」

「うん。親し気な感じを出してもどこか遠慮しているというかなんというか……」

「SOP11!?! いい加減に——!」

顔を真っ赤にしたARR15は遮って何かを言おうとした時だった。

ピピッとローガンの無線機に通信が来たのである。ケイドやマジックかと思い、端末で確認したところ『アンノウンの表示だった。目の前にいる戦術人形の二人の台詞がフェードアウトし、興奮に似た体の熱が一気に冷めていくのを感じたローガンは感じたがそこで止まらず、応答する前に司令部の方にも会話が聞こえるように端末を操作した。やがて『接続完了』と表示され、ローガンは応答した。

「……誰だ?」

『はじめましてだな『狼』さん。アンタが救い出したお人形さんから聞いただろうが、私は鉄血工造の上流人形『ハンター』さ』

上級人形、すなわちハイエンドモデル。これを聞いている司令部は混乱しているだろうが、自分がそうならないように気をしっかり持つ。

「こつちの回線に割り込んで挨拶とは、最近の鉄血工造のボスは随分と礼儀正しいのか？」

『まさか。こつちの方にまでクソツタレのアンタらと話をするのはこつちとしても気は乗らないさ。でも今回は別の奴の協力があつたからね』

「別の奴？」

『まあそれは一旦おいておこうか。ところで『狼』さんよ、相棒は見つかったかい？』
「……何を言っている？」

『いやあなに、こつちに来てる報告だと『近隣に潜入している二人の人間の兵士を確認。滝に飛び込まれて見失ったが——』』

なぜだか、とてつもなく嫌な予感がした。

『『一名が川の畔で死亡している状態なのを発見した』ってな』
「てめえ……！」

『勘違いするんじゃないぞ。直接手を下したのは私達じゃない。むしろ、滝に飛び込む判断をしたのが間違いだった、だろ？』

無線越しでも、ハンターと名乗る敵がニヤリと笑つたのがわかった。それが尚更、ローガンという炎に油を注いだ。

『こつちの協力者なんざ爆笑してたぞ。』以前死ぬ寸前までこちらが追い込まれたとい

うのに、呆気なく死んだもんだから拍子抜けどころか笑いが止まらない』。銃撃とかで死んだんならともかく、溺死するとか……ブハハハハハ!!』

ケイドが死んだ。彼が死んだことによるシヨックと同時に、『また』相棒を死なせてしまったことによる怒りが沸き上がってくるのをローガンは止められなかった。なによりも、彼女は暗にこう言っているのだ。『お前の誤った判断で相棒は死んだ』と。

無論、虚偽の情報である可能性もある。だがそれを潰すかのように次のハンターの台詞が送られてくる。

『ああそれと、この無線機を逆探知して追跡しようとしても無駄さ。お前のお仲間『だった』ものだからな。ったくがっかりさせるんじゃないよ『狼』さんよ』

「……この区域からためえらがとんずらする前に、スクラップにしてやるよクズ野郎」
『そうかい。楽しみにしてるよ、A R 小隊の新しい人質と一緒にな』

ハハハという笑い声が遠くなったため最後になるのかと思つたが、ハンターは何かを思い出したかのように戻ってきた。

『忘れそうになつてたよ、あまりにも愉快なものでな。私たちの協力者の名前だが、『アツシユ』。アンタならわかるだろ?』

それじゃああと最後に残し、通信は終了した。

話しているローガンの様子を窺っていたA R 15とS O P H I I から声を掛けられる

前に部屋から出た。背中を追いかけるように名前を呼ばれるが関係ない。

外に出たローガンは——

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

——叫び、コンクリートの壁を殴った。自身の拳の皮膚が裂けて血が噴き出しても止めずに何度も殴った。

感情の奔流が止まらない彼を戦術人形の二体が止めるのにあたって、本来人間には振るわないほどの腕力を二体で駆使してようやくやめたのだという——。

3. 仄暗い穴へ — Into the despair ate hole —

昼間は雲一つない快晴であったのに、夜になってからは天候が崩れ、雨どころか雷も落ちてきた。その音に合わせ、ローガンとAR15、SOP11は発砲して三人のヴェスピドをダウンさせる。

「敵ダウン」

「こっちも」

「死体を隠す時間はない。そのまま放っておけ」

ローガンは空になった弾倉を捨て、新しいマガジンを叩きこむ。ボルトキャッチのボタンを押してリロードを完了させたところで、背後にいるSOP11がローガンの肩を叩いた。

「ねえ、右手とか大丈夫？」

「……大丈夫だから心配するな。これぐらいのことで銃を落としたりはしねえよ」

「ううん、そうじゃなくて……」

「話は全てが終わった後でまた聞くから、今は集中しろ」

心配してくれているSOPHIEの心遣いはありがたいが、今ではローガンの気分を逆撫でするだけだろう。そう彼女はなんとなく察し、身を引いた。

『悪いな、お前が悪いわけじゃないのに』と心中で気遣ってくれている彼女に謝ったローガンは無線を繋いで、自分達の最後尾にいるARR15を確認をとる。

「ARR15、弾薬とかはまだ大丈夫か？」

「ええ。二人とは違ってまだ数回しか撃ってないから余裕はあるわよ」

「了解」

縦一列のフォーメーションで南東の村を目指して一時間。

マジックのUAVによる支援は夜間になれば長い間持たない上に天候が悪化したことで本部に戻し、ローガンが持ってきたドローンもSOPHIEの救出戦で破損しほとんど使えなくなったため収納されている。電子機器による搜索はできなくなったため、ここからは昔ながらの方法で進行せざるを得なかった。そのかわりではあるが——。

『こちらマジック。ローガン、グリフィンからの援軍も作戦区域に向かっていているそうだ。ただし、悪天候の為合流には天候が回復するまで待機すること』

「ラジャーだ、マジック。それとだが……」

『わかってる。もしもの時のアルファ2、ケイドに関しての準備は始めている』

「……すまない」

『気にするな。こちらにも不手際があったんだ。お前だけが気負う必要もない』

作戦状況、ハイエンドモデルの個体の確認、そして現地入りしている隊員のうちの一人のステータスが長時間不明になったことで、出発前にグリフィンからの通信で援軍を送るとの無線が来たのである。グラランドの司令官であるノートンをはじめとした上層部の連中は変にプライドが高い。見栄ばかりを張る癖があったのだからしぶしぶといったところだろうが、グリフィンは恐らく最初から連中を信頼していないのだろう。マジックによると、A R小隊を受け入れているグリフィンの指揮官は少し前までは新人であったというのにハイエンドモデルの個体を隊を指揮し撃破したらしい。指揮官としての経験はまだそこまで積んではないものの、入手した情報の信頼性などを踏まえて人柄を把握することには長けているらしい。それが本当かどうかをA R 15に尋ねてみたところ、真実らしく指揮官の前で嘘をいうものならすぐに見破られ目が笑つていない笑顔を向けられるとのことだった。そうになると、現在グリフィンの指揮官もあながち馬鹿にできないだろう。話が脱線したが、その指揮官は単独でA R小隊の二体と合流して見せたローガンのことを評価しており、可能な限りの支援を約束することである。

そしてケイドの行方である。U A Vによる搜索は現在できないが、夜が明け次第再び地上部隊も加えて行くとマジックから確約をローガンはもらっていたのである。一時

間ほど前のハンターからの通信で荒れたローガンは、少々意気消沈した状態で報告を行った。藁にも縋る思いで実際に確認するまではあきらめない、作戦を続行するということで話は集束した。

「……よし。マジック、目的地に着いたぞ」

『了解した。暗闇に乗じて不意打ちを仕掛ける可能性もある、注意せよ』

そして現在、南東の村に到着したローガン達はM4の搜索を開始した。

村自体は廃村となっており、人の気配が微塵もない。それどころか、荒れた様子からゴーストビレッジと化している。加えて、複数の鉄血の戦術人形が骸となって転がっていることから戦闘があつたことが窺えた。

散開し搜索を開始しようとしたが、明かり一つもない暗闇で周りが敵だらけだということでも固まっていくことになった。室内の搜索ということ、フラッシュライトが付いているP226を構え、ローガンが先頭に立つ。一軒一軒を細かく見てもM4の姿は見えない。だが――。

「こいつは……伝言か？」

『臨時の物と思われる鉄血のアジトを発見しました。ここより北西、墜落現場付近の地下です。これを読んでいるのがAR小隊の誰かであることを願います。私は先にそこに向かいます』。間違いのない、M4からの伝言ね」

『昼間の通信では弾薬も底をつきそうになる、と言ってたのに先行して向かったのか。ローガン、急ぐ必要があるぞ』

「ああ。マジック、グリフィンの方にも同じように報告しておいてくれ」

『了解した』

ハンターからの通信で『AR小隊の新たな人質』と言っていたのを思い出す。この伝言がいつ彫られたのか定かでないため、それがM4という可能性がある。しかしもしそうではなく、M4がまだ捕まっていない状態でM16が捕虜となっているのであれば一気にこの任務の終わりが見えてくる。

いずれにせよ、ここでゆったりとはしていられないだろう。

「AR15、SOPRI、急ぐぞ」

ローガンは戦術人形の二体にそう呼び掛けると走り出す。そのあとを追いかける戦術人形——いや、二人の少女たちは顔を見合わせて頷いた。

墜落現場付近に到着したローガン達は辺りに目を凝らして見せる。昼間の時とは違い、警備が嚴重になるどころかいる数が少ない。おそらくM4の言うように地下に奴らのアジトがあるのかもしれない。

さてどうしようかと、ローガンが考え始めると――。

「ねえ、ローガン」

ARR15に声を掛けられ、振り向くとそこには一度どこかで見た表情を浮かべている彼女がいた。

「私はね、他の子にはあまり言えないような悩みがあったの」

「……どうしたいきなり」

「コルトARR15っていうライフルは警察・軍用にも採用されなかった民間用の銃なの。だから榮譽を求めて躍起になっていた時期があったの。あまり知られていない銃だけど、良い物だったんだって知って欲しかったから」

「……たしかに、同じ系列の銃の名前はよく聞くが、コルトARR15という名前は聞いた

ことなかったな」

「でも、それはささいなことだった。大事なものは私がそう名付けられてその銃を使っているだけで何をどう成すか、それだけだったの。『榮譽と言うのは敵を砕くことで得られるものばかりじゃない。無力で泣きそうになっっている人にただ手を差し伸べるだけでもいい。それは小さな勲章かもしれないけど、誰かを助けたことを証明する証になる』。私の指揮官の言葉よ」

たしかに、敵である鉄血を倒すだけで世の中が救われると思っただら大間違いだ。世界の平穏を取り戻すために欠かすことのできない事項の一つではあるが、全てが終わった後に兵士だけが残っていても何も解決しない。元の暮らしを取り戻すために技術を持つ者も残ってなければならぬ。農畜、建築、商業など人が生きていくのには欠かせない。そして、次の世代を代表する子供たちに伝えて人類の世界を再び築く。銃やナイフを握りしめて戦うのはその第一歩を踏み出すための足掛かりに過ぎないのだ。

「私達は戦う為に、それだけの為に作られた存在なのかもしれない。でもそうだったら擬似感情モジュールなんて組み込まれなかったと思うの。連携をとって戦う為なら別にプログラムとかでもいいのだから。開発者である I. O. P 社の 16 Lab の人は、もういない。私はこの胸の痛みを伴うようにしたその意味を探すために戦うことにしたのよ」

「そのために、誰かを助けることにも注力したのか？」

「ええ。初めはうまくいかなかったけれどね」

自嘲気味にARR15は笑う。だがそこに、過去の自分を馬鹿にしているような様子はなかった。

「でも段々と分かってきたの。表情、言葉、身振り。コミュニケーションをとるにはそのうちの一つだけでもいいのだと知ってからね」

「あとの二つはまだわかるが、表情で相手の考えがわかるとかお前はエスパーかなにか？」

「茶化さないでよ。感情というのは表情にも表れるのだから、喜怒哀楽ぐらいあなたにもわかるでしょ」

それもそうだなとローガンは思う。特殊部隊の隊員になれば、心理学を学ばされることもある。敵兵の考えを読み、次の行動を予測するためだ。ローガンが相手にするのは鉄血であるため不要とされたが、遠征で現地の人と会話して感情の微妙な変化を感じ取ることが出来るようにする為に昔の本を引っ張り出して独学で学んだのだった。

「今のあなたを見てみると、過去の私を見ているようで胸が痛むわ。だから教えて」

回想から帰ると、決意に満ちたARR15の瞳と視線が重なる。サファイアのように、青空のようでもあるその瞳が真っ直ぐローガンを見つめる。

「あなたは、一体何を抱えているの。ケイドを、チームを失ったことでなぜそんなに荒立つの？」

攻めているのでなく、また尋問するかのように無理やり聞き出そうとしているわけでもない。ただ単に知りたいから聞くだけ。それだけのようだった。

「……これ、なにかわかるか」

先行しているM4に追い付く為に急がねばならないが、警備の交代か鉄血の動きが荒くなってきていた。焦って強行しても仕方ないと判断したローガンはカスタムM4のフレームを見せる。

AR15と背後で黙って話を聞いていたSOPRIIが見てみると、無数の小さい傷の中に、人為的につけられているような四つの傷痕を見つけた。まるでタリーと呼ばれる数え方でつけられている斜め線のようなようだった。

「これはな、相棒と呼ぶまで俺が組んできていた奴の数だ」

二人が目を見開く。四つ、となると四人。

「ケイドがこの数の中には……」

「まだ入ってない。あいつが本当に死んでたとすれば五人目だ」

二人から目を離し、墜落現場の方に視線を向けてみればまだ交代が終わっていないのか慌ただしい。これだったら少しは話してもいいかもしれない。

「俺がまだ二十歳になる前に組んだ相棒は同い年ぐらいの女だった。恋愛感情はなかったが、それでも大切だったよ。周りは恋人とか兄妹のようだとか言ってたけどな」

「……その人が最初の？」

「ああ。あいつと一個中隊と共に臨んだ任務のことだった」

ローガンは二人に語った。

その時の任務は鉄血ではない組織に侵攻された土地を取り戻すための作戦だった。事前の情報では数としては敵はこちらが一個中隊であるため勝っているはずだったのだ。しかし戦場に来てみれば全然違った。大人数で待ち伏せされ、反撃を許されることなく撤退せざるを得なくなったのである。その時、人生で初めての相棒を失った。後にローガンは仲間の、彼女のドックタグだけでもと思い数人のメンバーと潜入。道中でどうしても派手な攻撃が必要になったため行った。その戦闘の最中、ローガンはある者を見てしまったのである。それは、他よりも綺麗な状態で残されていた彼女の遺体であった。それを見たローガンは動きが止まってしまい捕えられ、他のメンバーも同じ末路を辿った。地下の奥深くに引きずられたローガンは尋問を受けた。他に仲間は、名前は、所属する部隊の基地の場所とは。ローガンは口を割らなかつたが、他の仲間は苦痛に耐えきれず喋ってしまったのだ。それからは実力を、肉体の強靱さ、精神的なタフネスを兼ね揃えたローガンのみを引き入れようと組織の中で動きがあった。仲間が殺さ

れる様を見せられたり拷問を受けることもあったが、なによりもそれまでと打って変わって食事まで用意されたのである。

しかしローガンはそれに手を出さなかった。水も喉を通さず目の前の敵を見据えていたのである。やがて、しびれを切らした組織の処刑人がローガンを殺そうとして牢屋を開けた瞬間、彼は磨いていた牙をその男に突き立てた。それからは頭の中に入れてきた地下の構造で要所となる地下の柱を破壊して回った。銃弾、爆弾の全てを駆使してやがて地上に現れたローガンを、救出に現れた味方に捕えられた敵がこう表した。

「アメリカの博物学者のアーネスト・トンプソン・シートンという男の創作物語に『狼王ロボ』というのがある。その狼の辿った末路は死ではあるが、俺はそうならなかった。末路は物語と違うが、兵士としての気高さだとかが物語の内容と似通っているってことでそう呼ばれた」

「それが……あなたが兵士としての?」

「二つ名なんてのは戦場じゃ特に意味がない、俺には不要さ。だけどその時に多くの友人を失ったのは事実で、目を背くことが出来ない現実だったんだ。俺からすれば、ただの忌み名だよ」

戦場では死があるのは当たり前である。そこに英雄というのはいない。せめて仲間の死を無駄にせず勝利に貢献したというだけであり、その者はただの一人の兵士に過ぎ

ないのだ。英雄がいるのであれば、誰一人として犠牲になる人は、いない。

「それでローガン。あなたはなにかかわったの?」

SOPHIEの問いかけにローガンはかぶりを振った。

「とくに何も。ただ、相棒となる奴が次々と逝ってしまつて組む奴がいなくなるだけだ。『ローガン・ブラック? ああ、あの狼王だか死神とか知らん奴か』って感じでな。ケイドはそんな俺に『両脚を失つても生還して見せたんだ。その幸運であればお前のジंकスなんざどうつてことないよ』て近付いてきたんだ」

今思えば、変な男だつたと思う。両脚が義足で飄々としており、冗談やギャグを全力でかましてくる男。あんなのが何人もいたら疲れるが、せめて気が沈むようなことがあつたとしても何ともなくなるだろう。

「戦場じゃなにかあるのかわからない。仲間が死んだとしても残したものを、なにかを回収できる保証なんてない。だから俺はこうしてあいつらを忘れないよう、傷を刻んでいるのさ」

四つの線を指で撫でる。ナイフで刻まれたその傷痕だけは消されないう、なかったことにならないように。名前だつて、ローガンは忘れていない。傷を見ればいつだつて思い出すのだ。

「……あなたが抱えているものはわかつたわ。何を糧に、原動力として戦っているのか

はまだわからないけど、自分の命を誰かの為に使おうとしているのだけはわかったから」

AR15が前に来た瞬間、ローガンの鳩尾に拳が叩き込まれる。その一撃には戦術人形としての力が発揮されてはいるが、人体を壊すほどではない強さが乗せられていた。痛みを感じた瞬間、吐き気と同時に視界が歪む。

「お、お前……」

「……ごめんなさい。あなたはもう私の中でAR小隊と同じ存在になってしまっているの。だから——」

うまく力を足に込められず膝をつく。最早意識が闇に沈もうとしているところで――

「——あとは任せて」

——額に温かく柔らかい何かが当てられた瞬間、ローガンの意識は混乱のなかで失われた。

誰かが泣いている。見てみれば小さな男の子だ。崩れた瓦礫を目の前に大泣きしている。

「助けてやらないと、そう思うが体が動かない。見れば自分の体が、なにもない。あるのはただそこにあつた物という感覚。」

自分は何もできない。あの子に何もできない、してやれない。でも男の子には炎の道を歩いてもらわなければならない。

誰かが本当の意味で助けてくれることなんて、決してないのだから。

だから、僕は、俺は——

『——ン、——』

水面に浮かぶのに似た感覚を覚えているだろうか。自分が暗い所から光が見える、明

るさに満ちた世界に出る感覚を。ローガンが感じているのはそう希望に満ちたようなものでなく、目を開けても悪夢の中にいるような錯覚に陥る物だ。ただ夢の中と違うのは、腹に残っている物理的な痛みがあるというだけである。

「……痛つつつ。あいつめ」

時間はさほど経っていないようだ。地形として岩が屋根になっているところと運び込まれたらしく、気を失っている間に雨に打たれ続けていたわけではなかった。さらに目の前には墜落現場が見えるため、意識を刈り取られた場所からあまり離れていないように思える。

痛みを堪えて立ち上がって思い出すのは、自分の過去の告白をしてローガン自身のも黙って聞いてくれた彼女、A R I 5である。最後に見えた彼女の顔を思い出す。

「……たく、泣くぐらいならこんなことをするなよ」

S O P H I E に気付かれないようにする為だったのか、記憶の中の彼女は静かに涙を流していた。

「マジック、こちらアルファー」

『ローガン！無事なのか!？』

「ああ。お客さんにきつつい一撃をもらってしまっていたがな」

『なに!?それで彼女たちは……』

「今はいない。おそらく、先行しているM4のあとを追いかけているんだろう」
『それで、どうするつもりだ?』

途中からマジックとは違う、神経質であることを伺わせる男の声が割り込まれる。今聞きたくない中に含まれるその声に、ローガンは嘆息した。

「……何の用だ。あんたが絡むとロクなことにならないから引つ込んでろよ」

『ふん、ご挨拶だな。上官に対する口答えを治すつもりはないようだな』

「あんたに關しては微塵も湧かねえよ。そもそも従う義理もねえ。俺があんたの元で戦っているのは、保護下に置かれているあいつらの為だ。放浪していた俺に良くしてくれた礼を返すためであつて、あんたには礼のれの字もねえよ」

『貴様あ……帰還次第、独房にぶち込んで一切出さないぞ!!』

台詞に怒気が乗せられたが關係ない。自分の命を使う方法をロクに考えもせず威張り散らすことしか知らないノートンにローガンは怖気づかなかつた。

『……腹が立つが貴様に朗報だ。グリフィンがあとは引き継ぐため、ただちに帰還せよとのことだ』

「あん? どういうことだ」

『言葉の通りだゴロツキ。AR小隊の救出はグラウンドに任せていられない、あとはこちらでやると言ってきたのだ。腹立つが時間がかかりすぎなのだ、仕方ない』

「……元々現地入りさせているのは俺含めて二人だけだろうが。それも踏まえていつているのか」

『しているわけではないだろうバカめ。AR小隊という駒を助けられないポーンがちゃんと仕事しなかったのだから仕方ないだろう』

「ぎげんなてめえ。俺達はチェスとかのボードゲームの駒じゃねえ！AR小隊が駒だど!?俺がもしポーンだとしても、あいつらはナイトとかビショップの役割を、いやそれ以上の仕事ができる奴らだ！もしてめえらに下等に扱われる存在だったとしても、俺はそうじゃないと証明できる！」

『戦術人形に、いやAR小隊に入れ込んでいいのか。それとも、あのARR5とかいう兵器に個人的な感情があるのか？戦術人形の感情モジュールの演出に惑わされているだけだろう』

「そういう話をしてるんじゃないよ！」

『とにかくこれは決定事項だ。アルファ1、そこから撤退せよ』

突然の納得のできない命令にローガンは従えるはずもなかった。あまりにも理不尽すぎる。

さらにはARR5は兵器、戦術人形？その感情モジュールが演出しているだけ？

知るかバカ野郎。

たしかに、彼女は戦う為に作られた戦術人形の一体だ。だが戦う為『だけ』ではない。『銃を持つて敵を撃ち殺してハイお終い。それで終わらせたくない、それ以上のことがしたい。自分がこうして痛みを理解できるようにしたその理由を知りたい』。そう言った一人の少女としての彼女の気持ちを信じたいと叫んでいる自分がいることをローガンは感じていた。

「もういいさノートン。あんたの言うことにはもう従わない」

『……なにを言っている?』

「お互い、もううんざりしていたんだ。あんただって、雇った余所者の俺がエースであつたのが気に食わなかつたんだろ? 前にそう愚痴つてたのをある奴から聞いたぞ」

『誰だ、そんなことを誰が言つたんだ!』

「教えるわけないだろ。俺だつて物事の価値を自分の定規でしか測れないてめえの下で戦うのはもううんざりだ」

そう言つたローガンは左耳の無線機に手を掛ける。

「ここから先は、俺がやりたいようにさせてもらおう」

何かを言われる前に背後に投げ捨て、駆け始める。組織に属していることを証明する腕章を引き千切りながら、ローガンはどこかスッキリしたような気分を味わつていた。きつと、包み隠せず抱えていたものを一部だけでも吐き出せたからかもしれない。

そして追い付かなければならない、あの二人に。戦術人形という存在ではあまり考え付かない、別の何かを成したいと強く思う少女に。

死者はもう戻ってこない。それでもまだ生きていたのであれば助け出すことはできる。絶対に死なせない、その思いを胸にローガンは走った。

4. 真の狩人とは —Hey, what`s your

scary?—

そこを誰かが通っていたのであれば必ず痕跡は残る。例えばなんてことのない、変哲のない森の道があったとしよう。そこを兎が通つたとする。兎を餌とする動物はそれをどうやって追跡するのか。鼻がきくものなら嗅覚を駆使し、目が良い物なら足跡を辿る。鉄血なら残されている人間の足跡を踏みつぶしながら探すだろうが、目で足跡を辿りつつ聴覚で不審な音を探るだろう。

いつもなら追われる立場にあるローガンだが、今回ばかりは色々違う。地下に入った彼がA R 15達の後を追う為にまず注目したのは、まず倒れている鉄血の戦術人形の骸である。損傷はそれぞれ異なるが、彼らの敵対の対象となるのはA R 15達しかないので迷う必要はない。

倒されている鉄血達の後を、パン屑を追って急ぐ。右へ、左へ、真つ直ぐ。道中で敵に出くわすことも一切なくスムーズに追跡していく。

やがて銃声が聞こえるようになるとローガンは音のした方を走り出した。銃声は一種類だけのものではない。タンツタンツ！と軽い音があれば、ズダダダダッ！と重い

銃声もある。走っているうちに鬱陶しくなったので頭にかぶっているニット帽を脱ぎ捨てた。

突入する前であればフラッシュバンを投げ入れてから入るなどするのが定番ではあるが、先にAR15達が突入しているため今は関係ない。半分閉じかかっていた扉を蹴破つてカスタムM4を構える。

「間に合ったようだな……！」

一度銃声が止むたびに焦りが募っていたのだが、考えていた事態になっただけで安堵した。とはいっても、AR小隊の全員が取り押さえられてしまっている状態だが。

「ローガン……!?!」

「ようやく来たか。遅刻だぞ、ローガンさんよ」

二丁のハンドガンを両手に持つ女がこちらに視線を向け、ニタリと笑みを向ける。墜落現場で見かけた鉄血のハイエンドモデルであった。

「時間の指定をしなかったのはそっちの落ち度だろ?」

「たしかにそうだな。AR小隊の二体しか来なかったのはなぜかと思っただけだが、質問は受け付けてくれるか?」

「わかりがそいつはお断りだ!」

サイトにハンターを捉えて引き金を引く。発射された銃弾のコースの先に間違いな

くハンターを捉えていたが、それを読んでいたのかハンターは体を半歩片足を後ろへと引いて回避した。舌打ちしたローガンは二発、三発と続けて発砲。しかしどれも悉く回避され、距離を詰められた。顎を狙うかのような一撃が来たのをなんとか避けるがギリギリであったためカスタムM4を庇い切れなかった。愛銃は部屋の上部からハンターの背後へと飛んでいく。二撃目となる正拳を首を動かして避けたローガンはその腕をつかみ背負い投げの要領で力任せにぶん回した。ハンターは受け身を取ったことできなきを得て、ローガンはナイフとP226を抜いた。

「ほう、話では聞いてたが『アツシュ』を相手取ったことだけはあるな。狙いは正確、近接戦闘もバツチリだ。そんなじよそこの奴らに後れを取らないだろうな」

「……そいつはどうも」

「だがまだ動きにキレが見られないな。それがなぜかはわからないが……まあいいだろう」

ハンターはそう言うのとハンドガンを一丁しまった片手でなにかのボタンを取り出し赤いボタンを押した。途端、ドンツ！とローガンが入った扉が爆発し瓦礫によって崩れた。つまり、退路を断られたのである。

「知ってるか？本物のハンターは、黙って獲物を待つものだ。集中して銃を構えて、狙ってる先に獲物が飛び込んでくるのを待ち構える。私の戦い方そのものさ」

「そうかい。なら俺はその狩人を正面から戦うことになる獲物ってわけか」

「そうさ。それと安心しな。アンタの周りにいる雑魚共には手出しをさせないさ。エクスキューションじゃないが、アンタとはタイマンで戦いたいから、ねっ!」

再びホルスターにしまったハンドガンを取り出したハンターは同時に銃撃をかましてきた。殺意が収束していくのを感じ取ったローガンはすぐさま横へと走り出す。ダダンツ!と放たれた弾丸が先程までいた位置の背後の壁を穿った。経験と直感による回避を行ったローガンを追うようにしてハンターはハントガンを連射するが、それよりも早く彼は最寄りの柱へと隠れた。

「いいねいいねえーただ撃つて隠れるだけの一兵とは全然違うじゃないかー」

さて、これからどうするとローガンは考える。現在手持ちの装備はハンドガンのP226とナイフ、四つのスモークグレネードにC4爆弾が三つ。予備の弾倉はあるが、正直あれほどのハイエンドモデルを倒すには全然足りない。かといって、考えなしでカスタムM4をまた回収しようとしてもハチの巣にされるのが関の山だ。一人で戦わず、取り押さえられているAR小隊の全員を助け出し共闘する。それは勝利する上での絶対条件。だがそれもスモークグレネードを巻いてそれに乗じて救出しようとしても、先程のように高速で同じく突っ込まれてジ・エンド。

前回アツシユというハイエンドモデルとの戦闘になったときは、ケイドとの共同戦線

であったためある程度自由がきいた。とはいってもこちらがC4爆弾を仕掛けた建物に誘導してもらい、完全に誘い込まれているところを見計らい爆破して潰したただけだったのだが。

現在の戦闘状態は明らかにワンオンワン、一対一である。やりようはいくらでもあるが、それをするには一人で行うには手が足りない。こうして牽制するのも合わせて撃つて移動しても、物資を消費して時間が経つだけである。しかし三回目の牽制射撃と移動をした時だった。走っている最中に初めて顔を合わせた時から闘志を見せた少女がこちらを見ていたのである。まるで、信じてずっと待っているかのように。

彼女を信じるだけの価値はあった。

ローガンは二つのスモークグレネードのピンを抜くと、一つは自分の足元に、もう一つはその少女の下に落とす。バシユンツ！と煙が発生したと同時にローガンは走り出す。そしてうつ伏せになっているその少女を取り押さえているリーパーの喉元をすれ違いざまに掻つ切ると、そのまま止まることなく走り出す。その際、ローガンはあるものを少女の目の前に落とした。

やがて戦術人形としての脚力を全開にしたハンターがローガンの元に突っ込んできた。蹴りを横つ腹に食らい、彼は横に数メートル転がる。

「ガ……ハア……！」

呼吸の仕方を忘れてしまったかのような錯覚に陥る。肺に酸素を送り込もうとしても、食道のどこかに蓋が生まれて遮っているかのようにだった。

「……おいおい、一対一の状態で背中を見せる阿保なのかアンタ」

やがて体が思い出したかのように急激に肺に空気が送り込まれる。ローガンは大きく咳をするかのようにえづいた。

「まったく、急に冷めてきたよ。鉄血にも響いたその二つ名はただのまやかしだったのか？ がっかりだよ」

「……そう、思うか？」

おもわず笑ってしまふ。

「なあ、狩りをする時の狼ってのはどう動くのかてめえは知っているか？」

「……知るかよ。今じゃ、生存している動物ってのは絶滅危惧種のようなもんじゃないか」

「だったら教えてやるよ。狼ってのは、単独でやるにしても群れでやるにしても、共通している部分がある。それはな、群れから弱っている個体を引き離すことさ」

ローガンはハンターの方に笑みを浮かべる。どういう笑顔なのかはわからないが、彼女は怪訝な表情である。

「奴らは脚がそんなに早くなくても持久力なら他よりも一線を引いている。狩りが成功

する可能性は低いが、巨大な群れにもなれば成功率は十割なんだそうだ。さて、ここで問題だ」

さらに、ニヤリと口角を上げる。

「俺は今、どうてめえを狩ろうと考えていると思う?」

その瞬間だった。ローガンからすれば右斜め前、ハンターからすれば左斜め後ろの方からタンタンツツ!とP226の銃声が響きハンターのボディに傷を与えた。

「なん……!?!」

ハンターが振り返ってみてみれば、そこには銃を構えるARR15が。そう、スモークを投げた先で彼を信じて待っていたのは彼女だったのだ。

「この、人類の道具があ!!」

片手の拳銃を撃とうとするが、それをローガンが許すはずもない。すぐに飛びつき、構えていた拳銃を持っている手にナイフを突き立てた。ハンターは短く悲鳴を上げはしたものの、すぐにもう片手の拳銃でローガンを撃とうとした。それをナイフを持っていない右手で押さえる。

「ローガン!!」

「今はいい!他の奴らを助けろ!!」

頷いたARR15はすぐに照準をARR小隊を取り押さえつつも反撃しようとしている

リーパーやヴェスピドに合わせ、トリガーを引いた。次々とバタバタと倒れ、彼女のチームメイトは自由になる。

「ようやく自由になれたよ!」

「反撃開始だ! 指示を出せM4オ!!」

「S O P I Iは私と一緒にハンターを半円に囲んで! M16姉は彼のカバーを! A R I 5は——」

迷わない指示を、信じるチームメイトに送る。

「——彼と攻撃を!!」

「ラジャー!」

「おっしやあ!!」

「了解よ!」

指示を了承し、行動を開始する。それぞれの名を冠する銃を拾ってから彼女達の動きは早かった。S O P I IはM4の指示通りに半円になってハンターの間が生まれるものなら撃ち、M16は近接戦闘で危うくなったローガンの盾役として動いた。そしてA R I 5は——

「ローガン!これを!」

「おう!」

自分の愛銃を拾ってからはローガンのカスタムM4を彼にパスし、自分も直接攻撃に加わった。

受け取ったローガンはチャージハンドルを引き、フルオートでハンターを撃った。ババババツ!!と銃弾が至近距離でハンターに風穴を空ける。

「舐、めるなあああああああああああああああああああああ!!」

しかし鉄血のエリートであるハンターも負けていない。すぐさまローガンに照準を合わせ発砲しようとするが。

「させるかああああああああああああああああああああああ!!」

気合一閃、その言葉が似合う一撃をM16はハンターにお見舞いする。ガゴオンツ!!と頑丈な盾として特注した銃のアタツシケースをハンターの横つ面にぶつけたのである。

「S O P I I I ! !」

「うん!」

ガガガガガガ!!と射線上に誰も被らなくなったことでM4とS O P I I Iが銃撃を浴びせた。装填されているマガジン内の弾薬が尽きるまで、である。だがまだ倒れない。

そこでA R I 5がマガジンを装填、ボルトキャッチのボタンを押して空の状態からの

リロードを完了させた。

「終わりよ、ハンター!!」

放たれた一発は、未だに足掻こうとするハンターの眉間を正確に貫いた。

ビーピピ、ピガガガガ……と機械音を発しつつも銃を持ち上げようとするが、やがて完全に動作を停止した彼女は仰向けにドシャリツ!と倒れる。

油断せずローガンが接近し、拳銃を遠くへ蹴り飛ばす。そしてハンターの、鉄血工造ののみならず全ての戦術人形の心臓部であるコアをボディから取り出し、それを銃撃でもって破壊した。ヴィイイイイ……と音を立て、発している仄かな光は消失する。

「……ハンター、K I A。繰り返し、鉄血工造エリート『ハンター』、K I A」

静かに発せられたローガンの報告は、静まり返った地下の大空洞に響き渡った。

「ようやく……ね」

「や、やったの……?」

「間違いない、私達も目の前で見ただろ?」

「ええ……勝ったのよ、私達は」

静かに余韻をかみしめるものだと思っていたローガンだったが、S O P I I から勝利による熱の発散が始まりそれが伝播していった。

「やった、やったよお! ローガンと私達A R小隊の勝利だあ!!」

「よっしやあ！久しぶりにハイエンドモデルなんて大物をぶっ倒したぞ！帰ったら祝杯だー！」

「二人とも、帰ってからのことを考えるのはいいけど、今は帰ること自体を考えないんだよ」

「なんだARR15。お前は嬉しくないのか？色々と厳しかったりしたが感無量じゃないか」

「嬉しいに決まつてるじゃない。ただ……」

「あ、わかった！ARR15、もしかしてだけどローガンともう一緒に——」

「そそそそそSOP111！そんなことないし私は別に——！」

「まだ何も言っていないよ？」

「~~~~!!SOP111!!」

三人が何かを言ってるが、一日分の疲労が人間であるローガンに一気に重石を掛けた。倒れるほどではないが、壁に寄りかかりたくはなった。重い脚を近くの柱まで運ばせ、ローガンは背を預けて溜息を一つ吐いた。

「ありがとうございませす、ローガンさん」

声を掛けられたためそつちに視線を向けてみると、こうして顔を合わせるのは初めてになるM4が微笑みながら立っていた。

「こうして私達A R小隊がこうして全員無事でハンターを倒すことが出来たのは、あなたのおかげです」

「……別に俺がいなくてもなんとかなったんじゃないか？」

「いいえ、そんなことは絶対にないです。あなたが来なければ、私達全員やられてましたから。強いあなたが来てくださって本当に良かったです」

「だが……」

「M4の言う通りさ」

さつきまで少し遠く離れてたところで勝利に震えていた三人が歩み寄ってくる。

「さっきの戦闘のみならず、救出に来た面子であんたがいなかったらこうはならなかっただろうさ」

「うん。私を助けてくれてスープまでも食べさせてくれたのはローガンだしね！」

「だからこそ言えるわ。救援に来てくれたのがローガン、あなたでよかったって」

「……そうか」

兵士として以前に、男であれば憧れる多くの人からの感謝の台詞を多く浴びる英雄としての自分。それは虚像で実現させることはできないエゴでしかない。しかしこうして、数としては少なくとも自分が手を差し伸べた人から『助かった』、『ありがとう』という台詞を聞いただけでこうして満ち足りた気分になれる。今そうなっていることに

ローガンは思わず笑みがこぼれた。

「さて、AR15じゃないが帰り道をどうにかしないとだな。誰か何か策はないか?」

「瓦礫をどうにかしないとですね。爆薬で爆破してはさらにまずいことになるでしょうしどうしましょうか」

「手で掘り返す、というのはあくまで最終手段ね。もっと効率的な方法があると思うんだけど……」

「ね、指揮官のお土産に奴らからなにをとっていけばいい?」

そこからはもう元のAR小隊の雰囲気というか、空気になっていたようだった。SOPIIは倒した戦術人形から何を持ち帰ろうか悩んでいる間にM4とAR15があれこれ案を出してM16がまとめる。グラウンドでは見られない、和気藹々とした部隊の様子であった。

さて俺もなにか考えないとだな、と身を乗り出したローガンの視界の端で何かが映った。そちらに視線を向けてみれば、一枚の扉であった。嫌な予感が止まらなくなったローガンは早足から走り出し飛び込んだ。

扉の向こうは明かりが一つもない暗闇の世界だった。だが、ローガンはそこにあるものがわかってしまい、よろよろとそこに歩く。近づいたことでさらにその存在がわかってしまった。

おそらくハンター達が発見した時はまだ生きていたのだろう。それを証明するかのようには拷問の後が見受けられた。もし既に死んでいるのであれば尋問するために痛みつける意味がない。では、奴らは何を聞きだろうとしていたのか。言うまでもない、ローガンのことだ。ハンターはAR小隊の救出に現地入りしていた隊員のうちの一人が二つ名持ちのローガンであることを知っていた。ハンターには『戦い』と言わず『狩り』と呼んで楽しむ趣向があった。自分の戦い方を実行するために、彼から情報を聞き出そうとしていたに違いない。だけど彼は口を割ろうとしなかったのだ。自分の仲間を、誰にも明かせないことに苦しむローガンという相棒の為に。彼は、ケイドは、一人でここで戦っていたのだ。

「……ローガン」

追いかけてきてくれたのだろう、背後の扉の方からAR15の声が聞こえる。

誰もいないから泣けると思ったのに、一番見られたくない奴に來られてしまった、ローガンはそう思った。

「……すまねえけど、今は一人にしてくれないか」

「……駄目よ。みんなでここから帰るのよ」

「頼む、あとでちゃんと合流する。だから——」

「今ここで一人にしたら、あなたが壊れてしまうじゃない。それだけは、私も嫌だから」

それはまるで女神からの福音のようであった。一人の少女は青年が抱えきれない痛みを自分も持ったために傍に歩き、ケイドを抱えて蹲るローガンの頭をそっと自身の胸元へと優しく抱き寄せた。花のような甘い香りと体温が痛みに耐えようとするローガンを包みこむ。そこでもう限界だった。

「もういいのよ、独りで我慢しなくて。もう泣いていいから——」

——ああ、なんてずるいのだろうか。こうして意地を張り続けてきたというのに、この子は……。

「——頑張ったわね」

ローガンは泣いた。ただ相棒を失ったことによる喪失感だけでない。ここまで踏ん張り続けてきたのをわかっている、それを認めている。その上でもう頑張らなくていいとARR15という一人の少女は言っているのだ。それに何も感じないなんて真っ赤な嘘だ。

戦争という、今では当たり前となっている日常。そこには人間であっても戦術人形であっても死が溢れている。そこでどつぷりと身をさらし続けることになるのであれば、心の支えになるものが無ければ耐え続けることなどできるわけがない。

ようやく、自分がやってきたことは無駄でなかったのだと、誰かに認めてもらえるのだと知ることが出来たローガンはただただ泣き続けた。

自分に枷を課してしまったことで誰かに助けられることがなかった一人の青年が、ようやくその枷を外してもらえたのである。



あれからもう一カ月、いやまだそうなつてはいないがもうすぐでなろうとしてい
る。グリフィンに帰還した私達を待つていたのは、心配してくれていた指揮官と多くの戦
術人形の皆であつた。今まではなんてことはない、会話でしか関わつてこなかつた子
たちが泣きながら私が戻つてきたことに喜んでくれた。きつと、疎外感を感じていたのは
私だけだつたのだろう。

それからはまず一日だけ休暇をもらった。私達は戦術人形ではあるが、疲れを全く感

じないわけではない。S O P I I はシャワーを浴びたら泥沼に沈むように眠っていた。姉さんは昼間なのに『酒呑んでから寝る』と言つてきかなかつたが、それにトンプソンが付き合つて問題がなかつたようだったので大丈夫だったのだろう。M4は私と事後処理にあたつて必要なものの段取りを組んでいたのだが、指揮官に無理やり休まされた。私達があの地区、今まで観測したことのない不明のハイエンドモデルの反応の調査を始めた時は緩く送り出したのに、こつちが言うこと聞かない時の強引さには少々言いたいことがあるのだが、まあいいだろう。

翌日はひたすら事後処理としての事務仕事であつた。起こつた出来事を報告としてまとめたり、消費した弾薬や物資の量。たつた二日ほどグリフィンを留守にしたことによるつけは大きかつた。やつとすべてが終わつたときには、もうすぐで業務時間が終わる頃になって夕日が私達の部屋に差し込んでいた。そしてその日の晩はお祭りのような騒ぎ。スプリングフィールドのバーを使って、グリフィンの全ての戦術人形が私達の勝利を祝つてくれた。私の方にも、どんなボスだったのか、どう立ち回つて勝利に漕ぎ着けたのか。全部聞き出すまでやめないと云つた感じに私も全て話した。使用した武器、戦略、そうして運ばれた事態の顛末。そして、ローガンのことも。

……そう、ローガンのことも話さなければならぬ。

あの人がああした後、グラランドが寄越した迎えに大人しく乗つて帰還していったのを見

送ったのを私は今でも覚えてる。聞いてた話では、私達が絶体絶命の事態になる前にグランドから脱退するという意思を残していたとのこと。私もそれを聞いたときは驚いた。組織というのはそうそう、簡単に抜けることなどできるわけがないのだから。帰還してからはケイドのこともあつてしばらく塞ぎこんでしまっていたみたいだが、独房から出された際には少々立ち直つてた様子を見せたという。それから司令官との問答の後、グランドという組織を正式に脱退したのだという。その際、私達の指揮官が彼の身柄をこちらで預からせてもらうと言つたのだという。なんでも、現在のグランドの司令官はローガンのことをぞんざいに扱い、下手すれば殺すことにもなりかねないことまで何度も躊躇なくやつていたそうだ。あの迫撃砲による支援、今でも私は忘れていない。あの時ローガンが私を守ってくれなければ間違いなく修復するのも時間がかかるどころか、できない状態になりかねなかつた。そういつた意味ではローガンには感謝してるし、彼とはこれから先もうまくやつていきたいと思う。この気持ちは、決して戦術人形としてではなく人間として抱く気持ちとして間違いの筈がないのだから。

サア……と風が吹いた。頬を撫でるような風と眩い太陽、雲が一つもない快晴の空の下にローガンは歩く。数メートル離れているところには五つの墓標が建っていた。『エレナ・テールソン』『ジョナサン・ベルベット』『レン・ウィーズリー』『カイル・オコーネル』、そして『ケイド・コナー』。墓の前にそれぞれ花を添える中で、ケイドの花だけが持ちきれなかったため一度運転してきた車に戻ったのである。

ローガンが歴代の相棒たちの墓場としたのはグランドの基地から北東に位置する丘に来ていた。数日前にケイドの遺体を聞いていた彼の故郷の方に頭を向けてやり、手厚く葬ったローガンはこうして戻ってきた。

もうここには来たくない、ここに来る度その思いは今になっても変わらない。ここに来るたびに胸の痛みは消えない上にさらに苦しくなるのだから。

「ローガン」

一緒に来てくれたAR小隊の一人、SOPPIIがローガンの腕に手を添える。まるで、ここに居るのは独りじゃない、私もいるのだと言っているかのようだった。

無論、SOPPIIだけではない。あの地域にいたAR小隊の全員がケイドに花を捧げていた。最後は、ローガンのみである。

「……ああ、わかつてる」

重い脚を動かし、ケイドの前にまで来たローガンはしやがむと皆と同じように花を置いた。

「……謝ってもさようなら言わないぞ、ケイド。お互いに敬意を払うことはなかったから敬礼もなしだ。お前には——」

右手の拳を軽く、彼の墓石に当てる。

「——こいつでいいだろ？」

——いつしか、お前に目覚ましの全力パンチを食らわしてやるよ！ママも真つ青なグーパーだ！

朝目覚めた時にいつ食らわされるかわからなかったケイドの全力の拳。こちらからはどついたことがあっても、彼から肉体的なコミュニケーションを凶られたことは、今思えば拳を合わす以外に一度もなかった。

「……つたく、あの時の朝だけ警告なしに全力でぶん殴ってくればよかったのに。で

もいさ……また来る」

ローガンは立ち上がり、背後の方へ歩き出す。歩き出すと、傍にずっといてくれたS O P I I もついて来る。

「……終わったか？」

「ああ、悪い。時間をかけちゃって」

「謝る必要はありません。大切な仲間を相棒であった方を失ったのですから。私だって小隊の誰かを失ったらあなたよりも悲しむことになります」

「それ聞くと、俺が何も悲しんでないように聞こえるぞ」

「そんなこと言わないでよ。M4だって、ローガンに気を使っているんだから」

「ローガンだってわかっているのさ、S O P I I。今はこうしておどけていないとやっていられない。そうだろ、ローガン？」

「……すまん、M4、M16」

「謝るのはいいですけど、まずはその目の下の隈を消すようにしてください。ますます痛々しく見えますから」

姉のような物言いではあるが、口調が優しいためローガンは苦笑した。聞いた話では臆病な性格であるというのになんだかんだで、やはりAR小隊の隊長として面倒見がいのだろう。

「それで、もうグリフィンに戻るのか？ローガン」

「前にも言ったけど、ちよつと寄りたところがある。ケイドが残した『パン屑』だ。これを調べるのに関して俺一人でもいい」

「本当に行くのか？鉄血が、ハンターが残した罠なんじゃ……？」

「暗号が俺とあいつで決めていたものだつたんだ。間違いなく、鉄血のものじゃない」

「私達はあなたと帰還するように言われています。あなた一人で行かせるわけには……」

作戦終了後に回収したケイドの遺体にあつた、一世代前の形をした彼の端末をひらひらとローガンはこの後の要件を申し立てるが、M16とM4は苦い顔をしている。

彼女達AR小隊は今回の墓参りの件に参加した参拝者であり、ローガンの護衛なのである。グリフィンの指揮官からは、『彼を決して一人にしないように』と言われていたのである。しかしM4達も思うところがあるため、彼の言うことには可能な限り尊重したいと思っていた。さてどうしようかと彼女たちが考え始めると――。

「……私が行くわ」

――一番ローガンを労る少女、AR15がそう申し立てた。

「ローガンは一人でもいいと言っているし、M4達の気持ちもわかる。だけど、今のローガンを一人にすることはできないから、AR小隊からは私だけで行く」

「……………いいの？AR15」

「もちろん。そうすれば、指揮官からの指示に背くことにはならない。それにローガン、今自分がどう皆に映っているのか、わかってるわよね？」

「……………ああ」

さっきの限の件もそうだが、今のローガンは少々弱弱しく見えてしまう。ある程度は鍛えられていた彼の体は前よりも痩せてしまっており、頬もこけてしまっている。一か月前の作戦時の彼を知っているものであれば心配するのも当然だった。

「だから、一人で行こうとしないで。どこか遠くへ行くのであれば私に言つて。必ず、私も行くから」

真つ直ぐなブルーの瞳にローガンは射抜かれる。その瞳に、刃向かうことはできなかつた。

それからは用が終わり次第また所定のポイントに集合するということで話はまともまり、ローガンは助手席に、AR15が運転となった。M4達が先に行つたのを確認し、発進する前にローガンは自分の私物である端末を車のスピーカーに繋いだ。

「……………この間、俺の元に直接送られてきた音声データだ。一応警戒してウィルスとか調べたけどなんともなかつたよ」

そう言いながら、ローガンは再生した。

ジジツとノイズを発し、録音されているデータが車のスピーカーから発せられる。

『——聞こえるかしら、『狼王ロボ』……いや、ローガン・ブラック。油断していたとはいえ、私を一度行動不能にした挙句にはハンターの撃破をやつてのけるとは思いもせませんでした。敵ではありませんが、あなたには敬意を表します。こちらで入手したデータによると、あなたは自分の成果を謙遜してしまう癖があるので自分一人でやつたわけではないと言うでしょう。ですがあなたが戦つて得てきた経験による観察眼、推察、直感は間違いなく一級品です。ですから私はあなたにこう言いましょう。あなたはグリフィンに並んで私達の脅威となりました。まだ、何も終わつてません。私達が開けたパンドラの箱による災厄は、まだ始まったばかり。あなたがもし私達を追うのであればまずは『オアシス』を探しなさい。そこに行き着けば、パンドラの災厄に繋がる最初の足掛かりが得られるでしょう。やるのもやらないのもあなた次第ではありますが、私個人としてはやると信じています。私はアッシュ、また顔を合わせれる時を楽しみにしていますよ。御機嫌よう——』

ピーツと電子音が鳴り再生が終了する。一度聞いた内容ではあるが、ローガンはアッシュが言っていたことの意味を再確認していた。

「今のが、一ヶ月前は姿を現さなかった……?」

「ああ。お前たちを搜索している間も、いつ襲撃してくるのか警戒していたんだが結局

は来なかった」

「内容を聞く限り、あのエリアのどこかで見てたってことよね」

「間違いなく。それに、お前も乗っていたヘリを墜としたのはアッシュの可能性が高い。ハンターのハンドガンじゃせいぜい運転席のパイロットを撃ち抜くのが精一杯だ」

「……そうね。音もなくヘリのローターになにか爆発物が当たったことしかわからなかったけど、あれをハンターがやったとは到底思えない」

「あれから一カ月になるのに、またわからないことが出てきやがった。『パンドラ』に『オアシス』……」

「どちらともオールドネットの検索にも引つかかるような単語ね。まさかそのままの意味で使われているとは思えないし比喩で言っているのかしら」

「……さあな」

重い溜息を同時に二人で吐き、お互いに顔を見合わせて苦笑する。ローガンがARR5に先に聞いてもらった理由としては、ARR小隊の中で彼女を現時点で一番信用しているからだ。もちろんM4やSOP II、M16の他の面々も信じていないわけではないが、彼女達にはない違う信用も寄せている。それに今自分は他人から見ても弱っている、そう見えてしまっている。いずれは皆にも打ち明けていかなければならないが、まずはここから始めていこうと思ったのだ。

「とにかく、まだ全部終わっていないことはわかっているんだ。そう考えればなんてこともないかもしれないな」

「謎だらけだけどね……。さてローガン、『パン屑』の続いている先は？」

「ええとまずは——」

ローガンのナビに従ってA R 15は走らせる。ローガンからすれば、久しぶりに気分転換ができるようなドライブをしているような感覚だった。



私が車を走らせた先にはスタートした位置から北上したところにある古びた廃墟

だった。近場には私とローガンが初めて出会った公園があったりする場所である。

「ここって……」

「知っている場所？」

「ああ。以前ここで夜を交代で仮眠取って休んでた場所だ。にしてもなんでここなんだ……」

「なにかの間違いという可能性は？」

「いや、示されている座標はここで間違いない。どうパターンを変えてもここに行き着く」

そう言いながら進んでみる。中はやはり荒れておりやや歩きにくい。転がっている物の間に足を突っ込みつつ進むといったような、雪の中を歩いているような気分であった。

やがてローガンが先頭で警戒しつつ進んでいくと行き止まりになった。

「進んでいく道はこっちしかない……。どういうことだ」

ローガンがぶつぶつと呟きながら考えている間に、私は行き止まりの室内を探索する。とはいってもガラクタバかりで目に止まるような物はない。

ふと歩き回っていた時だった。部屋の一角で足元に違和感を感じそちらに視線を落とす。一見すればなんてことのないただの床にしか見えないが、そこに足を乗せてみる

と明らかに違う。具体的に言えば、踏んだ床の向こうが空洞になっているかのようである。

その一角を調べていると、壁際の方に持ち上げるための取っ手のようなものがあつた。そこを掴み上に持ち上げてみる。するとドアのようにこちら側に開き、中から階段が現れたのである。

「ローガン！」

すぐにローガンを呼んだ。彼は呼ばれたことに驚いたのかビクリと体を震わせてこちらに振り返つた。それが昨日までのグリフィンでの日常であれば笑いのネタになつてただろうが、今は関係ない。

彼はこちらが手招きすると寄つてきて私が見つけた隠し扉の階段に驚いた様子を見せた。

「まさかこんなのがあつたとはな……」

「どうするの、このまま進む？……もしまだ……」

精神的に辛いのであれば今日は戻ろうと続けようとしたところで、ローガンは首を横に振つた。

「……進む。ここまで来たんだ、最後まで追いかけてみるさ」

「……わかつた。でも、無理はしないで」

わかってるさ、とそう言ったローガンだけど、きつと彼はわかっていないだろう。もしものときは全力で止めようと思いつながら私はライトをつけた彼に続いた。

階段はそんなに段数がなく、降りた先は様々な武器があった。アサルトライフルにサブマシンガンにスナイパーライフル、さらにはS O P I Iも持っている、アサルトライフルのアンダーバレルに取り付けることが出来るM203グレネードランチャーまでもが置かれていた。

「色とりどりね……」

「あいつ、どこからこんなに集めていたんだ……」

あまりの光景に私もローガンも言葉を失ってしまふ。私は普段の装備で事足りるが、ローガンがスモークグレネードをうまく使うように新しい何かに挑戦してみたいとこれらを見てみると思う。

私も開いた口が塞がらない状態で見ているのだが、奥にある作業台の上に一丁の銃が置いてあるのが見えた。ローガンと共に見てみると、それは私が持っているコルトAR15のバレルとハンドガードを短く切り詰めてコンパクトな形に凝縮したようなアサルトライフルだった。その銃の傍にあったメモ書きをローガンが読んでいる間に私はその銃を置いた状態で観察してみる。

バレルの先端にサイレンサーが取り付けられており、アンダーバレルには銃の反動を

抑えるための垂直グリップ。フラッシュライトに加えて近代では新開発されてきているリフレックスがACOGの上部にあるハイブリッドサイトが取り付けられている。アタッチメントだけじゃなく、銃の内部構造の方もよく手入れされており弾を装填すればいつでも使える良い銃であった。

一体どうしてこれほどのものがここに……と私が考えようとしたところで、ローガンの方を見てみると彼は声も音もなく涙を流していた。

「ローガン……？」

「……あいつめ、とんでもない置き土産を残してくれやがって」

泣き笑いのような表情を浮かべたローガンからメモを受け取り、私も読んでみる。

それは、ケイドからローガンへと宛てた純粋なメッセージだった。

『よう、ローガン。これを読んでいることは、オレが死んだかなんかでアルファチームにはお前だけが残った状態なんじゃないか？ そうじゃなかったとしてもいいんだが、きつとオレはもうお前の近くにはいない。だからここにオレの本音を記しておこうと思う。正直お前さんの銃にナイフで刻まれているカウントがちと気に入らなかつたんだ。いや、ちとどころじゃない、かなりだ。オレは銃の手入れはそんなにしないのはお前も知っているが、わざわざ自分で傷を増やしてどうするんだと思つてたんだよ。ただどあとになつてからわかつたんだよ。オレがお前とバディを組む前にもお前の良くな

い噂を聞いたりしてたからな。それがわかってからは、オレが死んだらそこに加わってしまふことがわかってしまつてな。オレは今までの奴と違う、それを証明するためにもガラクタから色々なものをかき集めて使えるパーツを組み立てていったよ。その銃の設計図を見つけてからは特にな。そんでその銃の名称の由来を知ったときはお前にびつたりだつて思つたよ。策を巡らせて理知的なことをするだけじゃなく、敵の方に正面から突っ込んで無茶なことまで平気でやつてのけて生還するお前にな。その銃には自分で傷をつけるなよ。細かいことが苦手なオレが丁寧に組み上げた上に細かいところまで仕上げたんだ。思い入れがあるのかどうかは知らないけど、いつかはそれを捨ててありのままのお前で誰よりも強く生き抜いてくれ。そんじやあな——ケイド』

ああ、なんということだろうか。あの軽薄そうであつて女に弱いのがまるわかりだつたケイドという男は、ローガンが他に見せたくないと思つていたものを察していたのだ。そしてそれを踏まえた上で自分が死んでも乗り越えて欲しいと、生きて欲しいと残していたのだ。

「……ローガン」

彼の名を呼び、肩に手を置く。するとローガンは置いた私の手の上に自分の手を重ねた。

「……帰ろう、ARR15。ARR小隊のみんなと一緒に」

「ええ……！」

それからは彼はそれまで使っていた遺産をそこに置き、かわりに贈り物として遺されていた銃を取った。マガジンなど必要なものもすべて交換し、そこをあとにする。廃墟を出るまで私達に会話はなかったが、私にはローガンがまた歩き出そうとしているのがわかった。私はそれを止めることも、遮るようなことをすべきでないししたくもない。またローガンが戦うと言うのなら、私は出し惜しみせずに彼の為に戦おう。

車に戻った私達はエンジンをかけ、走り出した。違うことがあるとすれば、今度は私が助手席に座っていてローガンが運転していることぐらいだろう。

横目で彼を盗み見る。未だに目の隈は濃いが、瞳の光は取り戻されしつかりと前を見据えているのがわかった。

「どうした？」

「……ううん、なんでもない」

私の視線に気づいたローガンがそう聞いてくるがはぐらかす。そこからはなんてことのない会話だった。今日の晩御飯は何かとか、明日からは何しようとか。これからのことを前向きに考えていけるのであればもう心配することはない。

温かいだけでなく尊く愛おしい想いを胸に、眠りにつこうと思つた私は窓際の方に重心を傾ける。

もう一度盗み見て、よかった……と思った私は、ローガンがかけてくれたクラシックの曲を子守唄にして瞳を閉じた。

車に乗せられたことで振動に合わせて震える銃の名前は『Honey Badger』こと『ハニーバジャー』。由来となった世界一怖いもの知らずの動物に因んで名付けられた銃である。

5. 居場所と言うのは — Your home is here —

戦術人形に興味と言えるものがあるのだろうか？とローガンは考えたことがある。

基地の外で戦っている彼女達ではあるが、グリフィンに戻れば仕事以外にも当然プライベートの時間もある。その時間の使い方はやはりそれぞれで違っているのだが、どういふ風に過ごしているのかはわからない。だが考えてみればあってもおかしくないと思える。例えばだが、食べ物好みである。酒でもいいが、自由時間だとか通常勤務の夜はよくスプリングフィールドのバーで過ごしているトンプソンがいる。ローガンが配給ビールが好み（というかそれしか飲めなかった）であったため、そこで頼むアルコールが含まれる飲み物とすれば麦酒が多い。彼女からは見てるだけで寂しくなるからこれも呑めよ、と勧められるものも呑んだりするが今のところ他に好感持てた酒とすれば何年ものかは忘れたが葡萄酒だったのを覚えている。そこで思い至ったのが、人間である自分にランニングなどの趣味があるように、彼女達にもあつたりするのかもしれない。酒が入っていたこともあつて特に考えることなくとりあえず最初にその場に入ったトンプソンに聞いてみたのである。

「趣味、趣味か……酒を呑むのことが趣味つてのに含まれるか？」

「……まあいいんじゃないか。昔の人達も旨い酒呑んでとつまみを食うために仕事していた一面もあるつつうわけだし」

「にしたっていきなりどうしたんだよ。まさか口説くための糸口を探つてんじゃないよな？」

「ちげーよ。ただ単に知的好奇心さ」

そこでローガンは考えていたことをトンプソンに話していった。最初は胡散臭げに聞いていたが内容にふざけている要素がないことにわかってからは真剣に聞き始めた。

「ふーむ、どうだろうか。私達戦術人形は戦う為に生み出されたわけであつてそれ以外に現を抜かすようにはされてはいないわけだしな」

「たしかにお前達はそうだろうな。主目的に鉄血との戦闘があるわけだし……考えにくいかな？」

「——そうでもないですよ」

そこでもう一人の戦術人形がカウンターの奥からこちらに寄つてくる。このバーを、昼間であればカフェを運営するスプリングフィールドであった。

「私は戦術人形としての仕事と並行してここの運営をさせてもらつてますけど、飲み物とかを出して皆さんとお話したりするのも含めて趣味といえるのではないですか？」

「……なるほど。たしかにそうだな」

業務時間の休憩時間中にここに初めて連れてこられた際にとびっきりのコーヒーを出されてからはローガンも常連になっていくわけだが、出されているメニュー以外にもこの雰囲気が入っているのでよく通うようになっていく。そのローガンからすればたしかに興味と言えるのかもしれない。

「でも仕事と並行してるって言ってたよな。それって大変じゃないのか？」

「いや、ボスもこの世話になってるわけだからマスターの仕事を軽減しているのさ。鉄血との戦闘にも出なければならぬ時もあるわけだから事務仕事の多くはこっちに任せろってな」

「そうなんですよ。今のところ特にこれといって書類の処理などで大きい負担になったことはありませんよ」

「それに客である私達がこの場でできることもやっている。その時まで呑んでたグラスとかの食器をすぐ洗えたりするように洗い場にもってくだけでも断然違うってさ」

「運営している側にも配慮して休めれる場所を提供してもらおうってことか。だからこんなに客の出入りがいいんだな。普通に感心するよ」

「ありがとうございます、と言って笑顔で彼女から新しいビールを注いでもらったローガンはカウンターから背後を振り返って全体的に見てみる。」

今は業務時間が終了してから結構時間が経っているわけだが未だにここで過ごしている戦術人形も多い。あと一時間かそれぐらいで日付が変わろうとしているのに、何人かでテーブルの上でトランプなどをやってたり、二人か三人で談笑しているグループもいる。ローガンとトンプソンとは別で呑んでいる戦術人形もいたが、今では突つ伏して眠つてしまつていた。と眺めていたその一角で——。

「うつしやあ! 今日から毎日、指揮官を踏もうぜ!」

「や、やめなよ。というかその台詞だけだと色々と誤解を招くことになつちやうから!」

「それだけじゃ指揮官も物足りないはずです。踏むだけじゃなく指揮官を針で刺してあげましょう!」

「いいね、ドウンドウンやろうじゃねえか!」

「やめてええええええええええええええええええええええええ!」

——悪酔いしたM16をはじめとした戦術人形の三人がなにか言ってるが聞かなかつたことにしよう……。

ビーツという合図の音と共にマガジンを叩きこみチャージハンドルを引く。射撃体勢に移行したら最初に出てきた赤いターゲットの中央を発砲して命中させる。それが建物の窓を形をしたところから五つほど出た後、同じところから赤いのに混じって青いのも出てくる。出てきたところを間違わず赤い標的のみを撃ち抜き別の窓から覗かせる的を撃ち抜いた。ポーンという軽い音が鳴るとローガンはマガジンを取り換えて新しいマガジンを装填する。先程前まではシングルだったのをフルオートに切り替えるのと、再びブザーが鳴って赤いターゲットが右から左へと流れていくのを阻止するように撃ち続けた。

やがて射撃演習が終わり、息を吐いたローガンの頭上にあるスコアボードに今の演習の成績が表示された。

『氏名：ローガン・ブラック／スコア：1000／94／ミス：0／評価：S』

「へえ、なかなかやるじゃない」

「お見事です。以前いた部隊のエースの座にただけのことはあるようですね」

こんな感じか……と思っていたローガンの背後から二人の戦術人形の称賛が送られる。振り返るといつの間にか見ていたグリズリーと最初から見学したいということ別の武器の演習にも立ち会っていたRO635がいた。

「サンキュー。とはいってもお前さん方には負けるよ」

「何を言っているのです。AR15から聞きましたけどその銃は最近新調したばかりなのでしょ？」

「そうそう。なのにもうそこまで使いこなしちやってるしね。こりゃあ私も負けられないなあ」

ローガンはここ、グリフィンの射撃演習場ではいくつかの武器の演習を行っている。アサルトライフル、サブマシンガン、スナイパーライフル、ハンドガン。どれもAランク以上である。射撃場で訓練としてショットガンも扱ったりもしたが、そちらの方も悪くないという評価をもらっていた。

セーフティを掛けたついさっきの演習で使ったアサルトライフルをしてみる。今は帰らぬ人となってしまったが、相棒が遺してくれた新たな銃のグリップがよく手に馴染んでいる。新しい銃、ハニーバジャーのレシーバーを左手で撫でた。

「私達も自分の名前の武器以外のは扱えないわけではありませんが、やはり幾分後れを取ってしまいますね」

「そうだね。やっぱり私もライフルとかを十分に扱えるようになった方がいいかな」

「俺達人間もそうだけど、できないことを一生懸命にやるよりもできることをやった方がいいぞ。お前さん方が下手に他の武器使って別の役割になるよりも元の武器を扱ってもらった方が本来の役割の奴も心強いだろうさ」

それもそうか、と二人が頷く。やはりここらへんは兵士として訓練された人間の強みだろう。個人差はあるが戦術人形ほどうまく武器を扱えないにしても場所などの戦闘条件で彼女達よりもあまり縛られない。野外など開けた場所は各面でバランスが取れたアサルトライフル、屋内などの閉鎖空間では取り回しの良いに加えて火力が出せるサブマシンガン、山頂や建物の屋上から遠距離で敵の撃破を狙う際は遠距離で狙撃が出来るスナイパーライフル、ドアのブリーチングなど敵が集まっているところに突入する時はショットガン、メイン武器が弾切れになった際はハンドガンをすぐさま抜いて戦闘を継続させる。各武器に性能面で一長一短であるのは認めざるを得ないが、それぞれ長けている部分を生かせれば何よりも強いのは間違いない。それは戦術人形もそうであろう。ROが言っていたように、戦術人形は自身とも分身ともいえる銃器以外の操作は新兵と言われても仕方ないほど覚束ない。スモークやフラッシュパンなどの投擲物の扱い

は良いのだが、グリズリーが『グリズリーマグナム』以外の銃を使うとうまくいかない。そう考えれば戦術人形のシステムはよくできているとローガンは思えた。

「そういえばローガンさん。あなたはCQCが出来ると聞いたのですが本当ですか？」

マガジンを抜き薬室からも弾薬を抜いて一回台の上にバジャーを置いたローガンにROは尋ねた。

「近接格闘のことか？それならまあ、なんとか。でもなんでだ？」

「以前ARR15が言っていたのですが、初めてあなたと出会ったときに格闘戦を仕掛けた際は大分躲されたとか」

「……ああ、そんなこともあったな」

「さらにはハンターからの近接攻撃も避けて背負い投げもしたと聞いたのですが……」

「でもちよつと待ってくれ。あいつ、俺の事どこまで喋ったんだ？」

「あなたと共にした戦闘は全て話してくださいましたよ」

「なんでやねん。別に隠すつもりもなにもないけどなんでやねん」

「ともかく、CQCの基礎的なことだけでも教えて欲しいです」

頭を抱えたローガンではあるが、他の銃器ではなく格闘術を教えて欲しいというROの申し出を断る理由はない。それとローガンの脳裏によぎったのは先日のことである。

ハンターとアッシュによるARR小隊への襲撃。あの頃ROは指揮官からの要請で数

人の戦術人形と電子戦も混じった遠征に出ているのである。彼女に事の顛末が知らされたのは遠征を終えて帰還した時だった。彼女は即刻自分の小隊の元に駆けつけ全員が無事を確認し安堵。そのあと詳細を聞いた中でA R 15を中心としてローガンのことを伝えられたのである。人間でありながら彼女達の救出に向かい、ドローンなどの電子機器も扱って鉄血の戦術人形達と互角以上に渡り合った彼のこともっと知りたいと思ったR Oだったが、そこで相棒を喪ったことを、耳を塞ぎたくなるようなことも聞かされた。R Oを除いたA R 小隊は一人の犠牲の上に成り立った自分達の生還に大分やるせない気分になっていたのだった。もうその時のローガンは立ち直ってはいなかったの、A R 小隊は自分達の未熟さを痛感し新たな技術も身に着けていくことになっていたのである。話を聞いたR Oはローガンの元に向かい、挨拶と一緒にこう言ったのである。

『今回私は、A R 小隊の皆が危機に直面しているところに居合わせることが出来ませんでした。彼女達は今自分達じゃない、誰かの犠牲もないように術を学び始めました。ですので私は彼女達と共に考えつつも、あなたからも学べることもあるはず。その時はご教示お願いします!』

あの時のことはローガンも鮮明に覚えている。決意に満ち、覚悟を持ったオッドアイの瞳。彼女は新兵ではない、ある程度の経験を積んでいる戦術人形だ。その時は時間が

あつたらいいと言ったが、最初に教えるのが格闘術とは思ひもしなかった。

「オツケー。とりあえず基礎だけでも教えるのはかまわないよ」

「ありがとうございます！」

「敬礼はしなくていいぞ。俺はお前の教官じゃないんだから」

そうですか、と少し残念そうにするROにローガンは苦笑した。

そうなるはず準備することになるのは戦術人形同士の模擬戦闘用のナイフとかかな、とローガンが考えていると――。

「あ、ごめん。ローガン、それROだけじゃないんだよ」

「……どういう意味だ」

「こういう意味だよ。みんな入っていいよー！」

おん？とローガンが首を傾げると射撃演習場のドアが勢いよく開き、ドカドカと何人もの戦術人形が入ってくる。見た限りではアサルトライフル、サブマシンガン、ハンドガンのと様々である。

人数はおよそ、二十名以上。これにはROも知らなかったらしく、啞然としている。

『よろしくお願ひします!!』

「マジか」

思考停止しかけるローガンである。

翌日、ローガンは自由訓練場に希望者全員を集めていた。使用許可に関してはROが昨日のうちに指揮官に申請してくれてたらしく、訓練場に入るための鍵など必要なものをすべて揃えてくれていた。

午前ではまず準備体操や運動を先にさせておき激しい運動に備えさせておく。それが終わったらずい少し休憩時間を挟み、水分補給をさせる。全員の状態を確認したローガンはCCCの基礎的な立ち回りから教え始めた。敵役としてROが模擬ナイフを持って

突っ込んできた時、最初は攻撃をひたすら避けてみせた。だがただ躲すだけでなく、脚や体の動きを最小にしたり受け流して見せたりとバリエーションは様々である。

「こんなにいるとは思わなかったわけだが……お前もいたのか」

「ええ。あなたが教えてくれるのだもの。だったら見て見ぬフリをするつもりはないわよ」

「あの時の格闘戦は俺も楽しじゃなかったんだぞ。正直俺が教えることはないと思うんだが」

「私には戦術人形としての『力』があっても『技』は備わっていないもの。正直あの時の格闘術もM16と考えた付け焼刃のようなものだったから」

「……そこでお前達戦術人形に『技』まで備わったら正直俺に打つ手ないぞ」

皆が教わったことを実践していく中、ローガンは全体的に見ながら改善点などを指摘したりして周っていたのだが、ある程度ものになってきたところで訓練場の一角で見えていたのである。そこでこちらに來たのは誰かと見てみたところ、小休止を挟んだAR15だったのである。

彼女もそうだが、今回集まった戦術人形達はそれぞれ動きやすい服装になっている。まだ残暑が残る今の時季の気温に耐えられるようにするためにも、タンクトップやTシャツに短パンといった服装である。靴は作戦などで履くブーツではなく、彼女達がト

レーニングとかで履くような運動靴だった。

「ローガンであれば私達が『技』を身に着けてもそれ以上の何かを隠してるんじゃない？」

「んなもんねえよ。せいぜい相手の虚を突くような頭脳戦に持ち込むぐらいだ」

「へえ？じゃあそれも教わろうかしら」

「勘弁してくれよ」

ローガンが困ったようにするとARR15は舌をちろつと出して悪戯っ子のように笑うと組んでいる子と一緒に訓練に戻っていった。

「やれやれだ……」

ROの決意表明を聞いて確信したが、やはりARR小隊の結束はどの部隊よりも強い。指示を出して皆を統率するM4、遊撃を行い火力を発揮するSOPRI、やや後方から皆を的確に援護し味方の危機を防ぐARR15、盾として前線に出て正面突破を戦略で持つて行うM16。そしてこの間対面を果たしたRO。彼女の戦い方は模擬戦で見させてもらった限りだとM16に並んで前線で戦いながら敵の動きを電子戦で乱していた。その分動きが若干固まりはするが、それをカバーするARR小隊の絆は強いのだ。

「ARR小隊……か……」

つぶやいたローガンはそこで昼飯を取るための休憩時間を取った。昼は宿舎の方で

スプリングフィールド達が準備してくれていた食事をとった。メニューとしては、鶏肉と数種類の野菜のサンドイッチにネギやキャベツのあっさりとしたスープである。以前グラランドにいた際は一応栄養面に気を使ったメニューの食事であったものの、仕方ないとはいえお世辞にも美味いとは言えなかった。それに比べて、グリフィンの保護下に置かれてから満足のいく食事也十分にもらえている。むしろもらい過ぎと思えるぐらいだ。

「相変わらず、胃に染み渡るような感じがする……」

「グラランドではどういふのを食べていたのですか？」

「カッチカチの固さのパンと野菜炒めもどき、あとは黒焦げの何かと黒焦げの何か……」
「想像するだけで萎えてしまいそうです……」

顔を暗くするROに乾いた笑い声を漏らしながらローガンはサンドイッチを口に運ぶ。

「そういえば、ローガン。こちらに来てからそれなりになったけど、今後はどうするの？」

「あくどうするか……。保護下と言っても居候させてもらってるようなもんだし、いずれは出ていくことになるかな……」

食事の席をROと一緒にすることになったスコープオンがそう聞いてきた質問に対し

て『ふむ……』、と考えたローガンはそう答えた。そうしたところ、会話に耳を傾けていた何人かの戦術人形がこちらをバツ！と彼を見たのだが、その前にもっとも近くにいたROが立ち上がったので気付かなかった。

「ローガンさん、それ真面目に言っているのですか!？」

「お、おう……。いつまでも居させてもらうわけにはいかないし、そうしようと思うんだけど……」

「私からはあなたになにも恩返しできていません。それにあなたからはまだ色々……！」

「どうどう、RO。とりあえず座って座って」

声を荒げるROをスコープオンが座らせる。なんだなんだ？と他の戦術人形もこちらに注意を向けたところで彼女も我に返った。

「ROの言ったことはともかく、私はここでローガンがただ居候のようにしているとは思えないよ。だってローガン、今日じゃなくても自主訓練とかしている私や仲間にアドバイスしてくれてるもん」

「とは言っても、ただ単に人間である俺から効果があることはあまりできてないぞ。戦術人形であるお前達にもお前達の戦い方がある。ダミーとかである程度数の不利を無くしているお前達に俺が言ってることはただのケチだとか文句でしかないだろ」

「そうでもないよ、ローガン。損傷したダミーだって修復するのはタダじゃない。ローガンの言ったことを守れたなら生還できる確率はさらに増えるし、その度に減る資源の削減にだってなる」

「……そうですね。私達サブマシンガンの戦術人形でもただ闇雲に突っ込むべきではないことはわかっていますけど、時にはそうしなければいけない時があります。でもローガンさんは突貫しなくてもいいような戦略を教えてくださいましてますから無駄ではないはずですよ」

それがローガンとしては彼女達に対していい影響を齎しているとはあまり思えない。たしかにスコープオンとROの言っていることの理屈は理解できるが、自軍の資源の削減のためなどは実戦で通用しないのが大部分の為別問題である。時にはローガンでも思う無茶なことをしなければならぬ局面に直面してもおかしくない。だが自分は人間、彼女達は戦術人形。あくまで死んだら取り返しがつかない立場として言っているだけであり、覚悟や決意だけでは最良の結果にはならない。戦術や手段は違うだけで人と同じような考え方ができる彼女達からすれば、自分は考え方を換えようとするだけの害悪ではないのではないか。

「私達はサーバーに人格や記憶にバックアップできてはいるけど、例外もいるのはローガンは知ってる？」

「……いや、知らないな」

「そつか。それに関してはROも含めた本人達に説明をお願いするとしてね、ローガン。私達戦術人形にも痛覚と言うのが存在しているの。痛いと言うのはやっぱり私達も嫌なのよ」

「苦痛を感じるからそれも含めて無駄じゃないってか？」

「単純な話だよ。喜怒哀楽というのが人間にあるように私達も備わっている」

「そうですよ。私も戦うのは怖くありませんが、死ぬときは可能な限り避けたいと思います。そう考えればやはり——」

「……とりあえず休憩は終了だ。訓練を再開しよう」

逃げるように、ローガンは立ち上がり体の曲げ伸ばしを行う。このままでは話は平行線、自分はここをいわずれは出ていくべきだとは思うという考えは変わらない。何も思うことがないと言えば嘘になるが、このままではシロアリののようにここを巣食っているだけになってしまっただろう。この訓練だつてそうなつてしまいかねない。あくまで基礎的なことを教えるだけに留めておこう——。

そう考えたローガンは模擬ナイフを掌の上で回し続けた。

……気分が重く、午後新しく教えた後はずっと上の空だった。

一日を通しての訓練を終えたローガンだったが気分は重かった。訓練終了後のROも礼は言っていたものの、昼間のことで表情に影を落としていたこともあってこちらからどう対応したらいいかわからなかったのである。

もちろんローガンとしても、ノートンとの『話し合い』の末に自分を保護してくれたあの指揮官や、弱っていた自分を励まし続けてくれたAR小隊、誰よりも寄り添ってくれたAR15には感謝している。恩を仇で返すような真似をしたくないから、悪影響を与える余計なことをしたくはない。だからこそ、落ち着き次第グリフィンから立ち退こうと考えたのである。

しかし彼女達は、スコープオンとROは留まって欲しいと言っている。ローガンから教わったことは戦術人形としても貴重なもので、グリフィンにはいない、現場で戦う人間の戦闘員から得られる意見だからである。でもそれは先程言った不協和音を生み出す一因になっているような気がしてならない。

「どうしたものかな……」

溜息を吐くローガンの足はいつもの、最近の夜はよく通うバーへと向いていた。

扉を開けるとそこはローガンが好きなジャズの曲が流れている空間であった。いつもの席に足を向けるとそこに先客がいた。

「やあ、お先に失礼しているよ」

「……まだギリギリ業務時間内つすよ、指揮官殿」

その者はここ、グリフィン基地の指揮官である男性——ハリー・クロスハート——であった。久しぶりにみた顔の横にローガンは座った。

「いやいや、副官の仕事が早くてね。今日はいつもより早めに上がったんだ」

「そういうことですか。余所者の俺からしても他に迷惑かけたわけじゃないならいいじゃないですかね」

「そうそう。それにさ、君とは友人として仲良くやりたいんだ。敬語とか気も使わなくていいよ」

「こつちとしては、相手が恩人なんで『はいそうですか』とできないですよ」

「人間で同性、歳も近い。周りが女の子ばかりだからこつちからすれば立場は違うけど君は貴重な客人なんだよ。困ったときはお互い様さ。それに君は一カ月半ぐらい前のあの件でAR小隊を助け出してくれたんだ。あの人でなしから君を匿うのは当然の礼だよ」

今になつてもあの時の笑顔を思い出す。目が笑っていない笑顔と言うのは何回も見ってきたが『絶対零度』の四文字が似合うあれほどの笑顔は見たことがなかった。

「……わかつたよ。このままごねてあんたを怒らせた時が怖い」

「そうして。それと、僕は君も含めて仲間の皆が知らない誰かに傷つけられたときしか怒らないよ」

「俺も?」

「あれ、僕らだけだったのかな? 君は僕らからすればもうグリフィンの仲間だよ」

ローガンは目を見開く。

「……そつか。その様子からすると知らないみたいだね。なあローガン。今回君が教官のポジションで近接格闘術の指導を行ったよね」

「たしかに、基礎的なことだけだが教えたよ。全体的に教えてから時折アドバイスを言ったりしてな」

「君から教えてもらおうと思つた戦術人形の顔を全員覚えてるかい？」

——全員の顔？ A R 15にR O、スコープオンと……あれ？

「君が今日まで、射撃だとか色々含めて教えてくれたりしてくれた子たちさ。スナイパーの子たちは予定が合わなかったり他でやることがあつたから今回教わることが出来なかつたけど、今日はどこかで近接戦が混ざることになる戦術人形達が君から教えを乞ひに来てたんだよ」

「俺から学べることはそこまでないだろ。C Q Cを知らなかつただけで、他のことはできるとはねえか」

「そうじゃないんだよローガン。たしかに彼女達はC Q Cだとかの近接戦の術を、プロが本格的に使う『技』を知らなかつた。それはそうさ。彼女達はあくまで銃を撃つのが本分だからね」

でもね、とハリーは続けた。

「鉄血達の戦術は一つじゃない、いくつもある。中には最近編み出したものだってあるんだ。彼女達は戦術も合わせて『力』だけで立ち向かわず『技』ももつて対抗する君から学びたいと思つたんだ。そうすれば奴らからすれば、自分達が立てたセオリーの戦い方ができないわけだからこちらが優勢になれる」

「だけど、いつかは対策されるだろ。奴らだってバカじゃない。人間のように学習して

有利に事を運べれるようにするはずだ」

「それはいつの時代も避けられないことだよ。効率的に待ち伏せできるように地雷が生まれた。それに対抗できるように地雷探知機が開発されたように新しい物には常に解決策がついてまわる。彼女達が君から教わろうとしているのはその地雷となる武器なんだよ」

「……そうか。CCCに対抗するには銃撃か、或いは——」

「同じCCCでしかない。しかも近接戦になるってことは銃撃による迎撃よりもナイフを抜いたほうが早いからね。鉄血からすれば解決しにくいはずなのさ」

「そこでようやくつながった。彼女達がなぜあそこまで自分から教わろうとしていたのか。近接格闘術——CCC——というのはたしかに鉄血達には対策しづらい。ハイエンドモデルはともかく、リーパーなどの一一般兵は銃と腕が同期した状態である。ローガンは意識したことがなかったが、奴らからすれば防御しかできないため厄介なことこの上ないだろう。」

「それと、彼女達への戦術の教えは間違いなく無駄じゃないよ」

「……なんでだよ」

「彼女達は昔の特殊部隊の突入の詳しい方法をあまりよく知らない。せいぜい扉を開けてフラッシュバンを投げ入れるぐらいだ。鉄血には必要のないことだけど、グリフィン

が鎮圧するのは奴らだけでなくテロを企む人間の時だつてあるんだ。そう考えれば、君が教えていることは決して無駄じゃない」

「そういうもんかね……」

「そういうものさ。もちろん簡単じゃないよ。でも対テロ戦法を戦術人形とそのダミーで行えたらどうか」

ダミーとリンクした戦術人形が制圧する。それができるのであれば――。

「……間違いなく、本体への被害が減らせるな」

「そうさ。ダミーは損傷しても本体が傷つくことがなくなる。そうすれば本体に回す修復の資源が浮くんだよ」

昼間にスコープピオンの言つてることが間違つていないどころか正解だらけなのにローガンは自分を殴りたい気分になられる。

「君は人間としての立場で鉄血やテロリストと戦つてきた。それだからこそ、戦術人形と自分の有効な戦略が結びつかなかつたんだよ」

「……ROとスコープピオンに謝らないとだな。あいつらに悪いこと言つちまった」

「そうだね。それとローガン、この際だからはつきりと言わせてもらうよ」

ハリーはそれまでカウンターの方向に向けていた体をローガンの方へと向けた。それまで浮かべていた柔らかな表情から引き締めた、真剣なそれになっている。

「ローガン・ブラック。ここ、グリフィンに残って僕達と一緒に戦ってください。本部からは君に対し特殊作戦の隊員としての権限を、僕からは必要なバックアップを惜しむことなく提供しますので、お願いします」

それはしばらく見てこなかった、真摯な頼みだった。

答えは、一つしかない。

「……わかった。ここちからもよろしく頼む」

さっきの件も合わせてこちらの負けだ、そう思ったローガンは手を差し出す。ハリーは嬉しそうにその手を取った。

「なんだよ！驚かすんじゃないってんだ！」

「俺が悪かったって。だからそう何回も叩く痛み痛いたたたたたたたたあ
!?!」

「ぶう〜！ローガンが勝手なこと言うのが悪い！」

ハリーが席を立ててからしばらくして、業務時間が終了し食事などをとりバーに戦術人形達が集まってくる。そこで待ち続けていたローガンにROから話を聞いたAR小隊の全員が彼に突貫。体罰と書いて暴力と読む、ほんの一次的ではあるとはいえ不変を齎した彼への罰が開始されていた。

「まったく、聞いたときはどうしたものかと……」

「よかったわね、AR15。気に入ってる彼が残ってくれて」

「私はローガンの考え方には干渉するつもりはないわ。彼が出ていくのなら別にかまわないわよ」

「そんなことを言ってるけど、昼間見かけた時はどこか落ち込んでいるような様子だったわよ」

「違うわ。それにM4、あなただっどこか安心してたじゃない」

「もちろんよ。指揮官とは対等といえる友人が出来た上に私達もそうじゃない。私達は

まだなにもローガンさんにできてないもの。でもAR15、あなたは違うみたいだけ
ど」

「違うわよ！私はただ、ローガンから話を聞いただけで——！」

M4とAR15がなにかを話しているのはわかるが、それよりも脳に送られてくる痛
覚による電気信号でそれどころじゃない。背中を叩かれ、太ももを抓られている状態
である。

次第に二人が満足したためかやめたため、ローガンは一息をついて目の前にいるRO
に視線を向ける。

「つたく……RO、悪かったな。俺がへんなことに悩んでたせいでお前にまで……」

「いえ、落ち着いてみればローガンさん、あなたも考えがあつての事でした。事実として
は私達に悪影響を与えているわけではなかったのに、教えられたことで私達は結果を出
せていませんでしたから」

「あく、まあタイミングとか色々あつたからな……」

昼間のことをローガンはROに謝り、お互いにバツが悪そうに苦笑した。

「そういえば、スコープピオンが言つてただけ、メンタルモデルのバックアップを取れ
ない例外つてのはお前らAR小隊なのか？」

「ん、どうしてそういきついたのでか教えてもらえますか？」

「単純な話だよ。スコープオンはROも含めた本人達と言ってた。ROはAR小隊の一員だから、そうじゃないかと思っただけだよ」

「それなら簡単に行き着くよね。まあローガンなら話していいんじゃない?」

そうですね、とM4が頷いた。

「ローガンさん、私達ROを除いたAR小隊は指揮能力や戦闘力が高く設定されてる分、たしかにメンタルモデルのバックアップが取れません」

「どういふことだ?」

「簡単に言えば、修復不可能になった場合は人間であるローガンさん、あなたと同じようにKIA……『死んだ』と認定されます」

「……バックアップがとられてない理由は?」

「機密保持です。私達全員四体はそれぞれ違った特殊性があります。その仕組みが他に奪われないようにするためなんです」

そういうことか、とローガンは納得した。たしかに時々共にした演習訓練でこのAR小隊は、他の戦術人形よりも高水準の能力を有している。単純な戦闘力ではなく、チームとしての連携が特にそうだ。なかなか人間のものによる部隊の連携攻撃にはローガンも舌を巻いたりしたものだ。った。

「私達は今のここの指揮官が前の方の時から一緒に戦わせてもらっています。だからこ

そわかりますが、大切な方の死に立ち会うことになるのはやはり辛いです」

「……ハリーより前の指揮官って、どういう人だったんだ？」

「無口ではありませんでしたが、とても勇敢な方でした。私達A R小隊だけでなく、受け持っている部隊全員の生還を第一に考えてくださってくれてたのです。最後は……作戦指令所を襲撃されても一人で逃げずに鉄血と戦って……」

「そうか……辛かっただろ、お前達も」

昔のことを思い出したのか、それぞれ悲痛な表情を浮かべている。M4は悲痛で仕方ないと言うのに笑みをなんとか浮かべており、S O P I Iは両目に涙を浮かべて泣きじゃくり始めてしまった。A R I 5はなにかを思い出しているかのように胸に拳を当てており、M I 6は泣いているチームメイトの頭を撫でながらも隻眼に決意の光を宿し、R Oも涙を浮かべつつもローガンに「ありがとうございます……」と返した。

そうか、とローガンは気付いた。A R小隊がチームメイトを、仲間の死を誰よりも許さないのは彼女達の過去が影響していた。自分だつてこの間までそうだった。ケイドや、歴代の相棒達が殉職していく度にこんなことを繰り返さないと誓ってきた。だが戦いと言うのは非情で、思いだけではかわらない。繰り返させないと思つていてもこの世を見渡す誰かは嘲笑つて平気で自分達を踏み躪る。

A R小隊は人間と変わらない立ち位置でそれをずっと見てきたのだ。

「A R 小隊、俺はお前らの為にもに戦うよ。今までの仲間を失ったことによる復讐じやなく、お前らを守る為にも」

「はい、ありがとうございます……！」

胸に飛び込んできたS O P I Iの頭を撫でながらローガンはA R 小隊を見る。戦場であれば誰もが親しい人を失う辛さを味わうだろう。だが戦術人形の誰よりも鮮烈に残酷な現実見てきたのは彼女達である。一番に嘆いている彼女達を見捨てはしたくない。ローガンはA R 15を見る。A R 小隊の一員である彼女の為にも自分は死ぬわけにはいかない。

決意に満ちた彼を、グリフィンは迎え入れた。

後日、ローガンにグリフィン本部から正式な通達が届いた。
『ローガン・ブラック。グリフィン特殊部隊『シャドー隊』に配属する』

6. 不審な兆候 — The calm before the storm —

— グリフィン北アメリカ支部の作戦ブリーフィング音声ログ #261 —

『ローガン。配属が決まってから早速で悪いけど任務だ』

『かまいはしないけど、随分と慌たほしいな。なにがあつた？』

『数時間前、物資調達として出撃していた部隊が襲撃されたんだ』

『鉄血にか？』

『いや、武装した民間人にだ』

『なに？それで、襲撃された部隊の状態は？』

『全員無事だよ。かわりに確保していた物資をその場で放棄することにはなつたけど、彼女達が無事だったんだ。安い買い物だよ』

『そうか。そこでその襲撃してきた民間人つてのは？まさかただの無害な放浪者というわけじゃないだろ』

『現在全力でもって調査中だよ。情報が入り次第、君が作戦を遂行中にもリアルタイムで通達する』

『そいつはありがたい』

『君は特殊作戦部隊『シャドー隊』の隊長となった。シャドーは基本、偵察や工作をする
隠密部隊なんだ。襲撃するのは本当に時々だよ』

『つまり、今回は作戦地域内に潜入して情報を探るってことか』

『必要なことがあったらこつちから指示するよ。とにかく、今回は無理のないように偵
察するという認識で頼むよ』

『了解』

『それと今は詳しく調整中だけど君のバディ、相棒となる位置づけの誰かも必要だ』

『……まあ、そうだな』

『ローガン、君の過去のことは僕も知っている。だけど戦場では一人でできることには
限度がある。君が必要のない事でも——』

『大丈夫さハリー。そのへんのことは』

『……そっか。今回の作戦は臨時として『シャドー2』にROを配置するよ。彼女はAR
小隊の戦術人形だけど隠密性なども含めての選出だ』

『あいつか。電子戦になっても俺がカバーしてやるといって感じていいよな』

『そういう方向性だね。彼女との友好関係も良好だって話だから問題ないよね』

『『も』ってなんか含みがあるように感じるけど……まあいい。それで、作戦地域内から

はどこから行けばいい？』

『ヘリで作戦地域からおよそ西に五キロ離れたところまで運ぶよ。そこから徒歩で向かって。場所はかつて色々と賑やかだった街中だ。付近はビルだとかの背の高い建物が多く並んでる』

『オツケー。とりあえず装備の確認とR Oと打ち合わせをするからちと時間をくれ』

『もちろん。必要になる物の準備は入念にしておいて』

——再生終了——

『シャドー1、前方より武装した二人の民間人です』

「まだ詳細が分かっていないし、ここはやり過ぎぞ」

『了解です』

ROからの報告通り、前方からアサルトライフルのAKシリーズを装備した民間人が通り過ぎる。それを暗闇に乗じた物陰から見ているローガンは銃以外の装備も確認する。

「……妙だな。銃だけならまだともかく、防弾ベストにグレネード。光学サイトだとかのアタツチメントも付いてる。自衛の為に銃を持っている奴にしては充実してすぎだ」

『知っている限りでは銃のみの武装ですか？』

「ああ。ただ単に自分の身を守る為だけで銃を取った民間人なら、それだけしか持っていない。なのに今の奴らは……」

『……詳しく調べないとすね』

道路の反対側にいるROを確認しつつ、ローガンは仮の目的地へと設定している方へ移動していく。アスファルトの道はひどく荒れており、車道の方も廃車となった車が渋滞しているような光景となっている。夏が終わってからまだ間もないこの時季にまだ生えている雑草が風によって揺らされている。

ローガンの装備はメインにハニーバジャー、サブにP226である。スモークグレ

ネードと突入用のフラッシュバンも持ってきている。ROもメインのサブマシンガン『RO635』の他にもフラッシュバンともしもの鉄血兵対策にも有効な敵を自動で追跡するシーカーグレネードも装備していた。

移動しつつ、ローガンは司令部に連絡する。

「プロフェット、こちらシャドー。作戦地域内にいる民間人の装備を確認したが、あまりにもレベルが高すぎる。人数さえ揃っていればそこそこ鉄血と戦えるぐらいだ」
『なるほど。たしかにそれはおかしいね』

「だけどまだ装備が悪くないだけでわかっていないことが多すぎる。調査を続ける」
『了解した』

プロフェットこと、ハリーと通信したローガンはそのまま進み続ける。

ROと事前に打ち合わせた予定としては、民間人の動きを追い拠点となっているエリアを割り出す調査を行い、可能であれば潜入し情報を集めることになっている。それに合わせて潜入することを考え今回の作戦ではROはダミーを一体しか連れてきていない。

また作戦区域内の民間人が全員こちらに敵意を向けるか否かの情報もまだないため、発砲も控えなければならなかった。

『そういえば、あなたに合わせて新たに結成された部隊の隊長になった気分としてはど

うですか?』

「前も敵地に隠密で潜入する任務が多かったからやることはあまりかわらないからな。与する組織が違ってるわけだから作戦の重要性も変わるだろうけどまだなんともいえない」

『仕事がかかわらないから何もそうだとは限りませんからね。でも前向きに取り組みませんか?』

「前向きに、ねえ……まあそうかもしれないな」

そう会話しつつ、仮目標としてしている建物に到着。ここまできてやり過ぎた民間人のグループは四回である。大部分は先程見た装備とあまりかわらないのだが、中にはまだ戦術人形というのが生まれる前に警察の特殊部隊が着用していたりしてたというジャガーノートまであった。明らかにおいそれと集めれないだけの量と質にローガンは眉を顰める。

『シャドロー、ローガン。作戦地域周辺で情報収集に当たらせていた部隊から新たな情報だ』

「了解プロフェット。続けてくれ」

『嫌な話だが、後方支援の部隊がそこを通過する数日前に『大掃除』という名で民間人の虐殺があったらしい』

「……どういう意味だ。今まで見てきた連中は幽霊か何かか？」

『そちらを支援に回しているUAVの画像ではちゃんとした生物の熱源反応があったからそういう類のものじゃないよ』

「じゃあまさか……」

『ああ。今そちらで確認している武装している人間達は、仲間割れを避けようとしていた人達を撃った連中だよ』

一旦合流したROの考えをハリーは肯定した。知りたくもなかった事実には彼女と一緒にローガンも茫然としてしまう。

「確かな情報か、それは」

『実際に殺されそうになったところを何とか逃げ切った子供から聞いた話だそうだ。体中の傷跡とか身なりもなにもかもが真実味がありすぎて疑うこともできないって言うてたよ』

「そいつよく無事だったな。数日間飲まず食わずだったんじゃないか？」

『僕は実際に見てないからわからないけど、保護した彼女達が言うからにそうだろうね。……とりあえずローガン、この情報ではつきりしたことはあるね』

「……ああ」

『既に起こってしまった以上は仕方ない。シャドー1、武装している民兵への攻撃を

許可する。ただし、助けを求める武装していない民間人に対しては許可しない」
「了解だプロフェット」

通信を終了させたローガンはROと移動を再開した。死角をカバーし合うための道路を挟む先程と同じ隊形である。

とにかく今の情報ではつきりしたことがある。ここまでで完全武装して武器を持ちながら歩く民兵ばかりが闊歩していたのを疑問に思ってたが、仲間内で争いたくないという人達を皆殺しにしたのであれば納得はできる。だがそれでも腑に落ちないことが二つある。

まず一つ、あまりにも警戒している様子を見せないことだ。ローガンのように人間であつても関係なく戦う者がいるように、鉄血との戦いはなにも戦術人形同士だけのものではない。そもそも鉄血工造の目的は人類の殲滅である。それなのに民兵達はなにも恐れる物が何もないようにしている。この区域だつて襲撃されても何もおかしくないというのに彼らは無警戒であることを疑問に思う。

そして二つ目は、装備の充実さ。もし仲間割れした民間人から装備を奪取したんだとしても、民兵の装備のレベルが高すぎる。メインのAKやショットガンとサブにハンドガン。グリフィンから支給された防弾チョッキほどじゃないにしても良質な素材を使っていることを伺わせているベストに色とりどりの投擲物。現代になってからはそ

んじやそこからはなにも入手できないと言つてもいい。治安組織のであつた建物から銃器が一つや二つ、弾薬もあればいい方だ。様々な銃器などがまとまつた状態で倉庫から見つかつたりするのが奇跡といえる状態である。それを見つけたのだとしてもジャガーノートなどのヘビーアーマーまでがあるとは思えない。ということは――

『どこかからか供給されている、ということですよね?』

「そういうことだ。色んな偶然が重なつたんだとしてもあのアーマーだけは得心がいかなすぎる」

『鉄血との戦争が始まつた今となつては客を人類に限定した武器商人も居なくもありませんが、それでも納得できませんか?』

「その可能性もあるが……」

『……とにかく急ぎましょう。このまま考えても埒があきません』

現在時刻は午後七時。予定では日付が変わる前にグリフィンに帰還することになっている。

遅れたらあいつらが心配するかもな、とローガンは一人苦笑しながらROとは逆側の歩道の物陰に身を隠しながらそう思った。

「3…2…1…フアイア」

カウントと共に発砲し、屋上の監視所で談笑している様子であった四人を制圧する。タタタタタツツというサイレンサーによる小さい音と一緒に狙っていた民兵達は声を発することなく崩れ落ちた。

「よしRO、ドローンの操作を任せるぞ」

「はい。目標指示をお願いします」

作戦行動中、それまで通っていた道路の先に大きな広場がありそこで夜間に合わせてスポットライトが灯されていた。重要拠点のように民兵達の人数も集中していることから、面している建物の屋上を制圧し監視することになったのである。

屋上の物陰から出たローガンは階下へと続く階段の扉にブービートラップを仕掛け、その間にドローンの準備を済ませて飛行させたROの隣にまで戻った。

グランドのドローンとは違い、今回持ってきたグリフィンののは隠密に特化したものと言える。光学迷彩は共通してはいるものの、飛行の際の駆動音も限りなく小さい。武装も9mmパラベラム弾のマシンガンではなく、指向性マイクを取り付けられている。向けた先にある物音などを射程長く拾い、ローガンの端末とハリーのいる司令部に音声を送信する。グランドのとは違い必要になったときに簡単に起動することはできないが、その分操作範囲もとても広い。

「まずは奴らのリーダーを探るか。東のキャンプの前にいる二人の兵士からだ」
「了解。ドローンを移動させます」

よく見れば空間の一部が歪曲しているため下手に民兵の視界内に見えるところに動かしてしまえば発見されてしまうが、指向性マイクが拾う音声の射程を生かし高度を高くとつている。スポットライトの逆光を生かし、そこから拾える範囲で情報を探った。

「……ダメですね、どの会話も雑談や武器自慢ばかりです」

『たしかにそうだね。シャドー隊、そこから服装が他とは違う民兵は見えるかい？』

「ネガティブだ、プロフェット。銃だとかの武器が違うだけでいつも同じに見える。昔みたいになんだけわかりやすい帽子かぶってたりくれてたら助かるんだがな」

「彼らもそこまで誇示するようなことをしてくれたらいいのですが……待って下さい、ローガンさん。南から来た民兵達が見えますか？」

「……あれは」

双眼鏡で見ると、数人の民兵が縦に並んで歩いている民間人を三人率いている。民間人達は両手を縛られており項垂れながら歩いているのが見えた。

「くそつたれ……プロフェット、まずい状況だ。連中、新たな捕虜を見つけたのか拠点の方に引き連れてきた」

『『大掃除』から逃れた人達が他にもいたのか……。シャドー、確認できる限りでいい。その制圧して救出はできそうかい？』

「策を練らないと難しいといったところだろうな。今捕虜を外から連れてきたものだから拠点の内側が慌ただしく動き始めてる」

「それに、ドローンで拾えたのですが彼らを撃つのもわりとすぐだそうです。時間をかけては……」

『……そうか』

プロフェットが、ハリーが肩を下ろすような残念そうな声を漏らす。ローガンもそうだが、彼も見捨てるような非情な選択はしたくないのだろう。戦争という存在はハリーに選択を迫らせる。

しかしここでローガンが一つ策を提案した。

「……ハリー、シャドーとしての任務は基本隠密での作戦遂行ではあるが、派手にやるのは禁止されていない。それにここまでの勢力になっているんだ、後に制圧作戦を開始するだろう?」

『……ああ、そうだね』

「奴らの対応力を見ることも兼ねて、陽動で動きを見てみたらどうだ? そっちの方に気を取られてる間に俺達で捕虜を救出、回収地点まで護送する」

『それは……!』

「状況は待つてくれないぞ。ここで俺達にかけるかどうかだ」

回答に窮している間にローガンは陽動を仕掛けるための準備を進める。ラペリングするためのロープをその場の監視所から見つけ、それを広場からでは見えにくい狭い路地の方に降りれるように取り付けた。ROもハリーと同様に呆気にとられたが、ドローンを戻してからシーカークレネードを遠隔操作で爆破できるように自身のコネクタと接続している。

『……許可するよ、二人とも。回収班を五分後にそこから北五百メートルの地点に待機させる』

「了解だプロフェット」

『ごめん。本来なら見捨てるべきなんだろうけど僕にはできないよ』

「心配するな。俺だつてできることならしたくないからな」

準備を終えたR Oと領き、同時にラペリング降下を開始。降りてロープをベルトから外すと拠点の外周の東から大きく回るようにして捕虜の方へと近づいた。影から影へと移動して移動して捕虜達が両手を頭に、両膝を地面についた状態で殴られたりしている。

嘲笑つていられるのも今のうちだ、とローガンは思いながら隣のコンテナの陰にいるR Oに五秒後に合図を送らせるように命じる。

チャンスは一回、ローガンはバジヤーの射撃モードをセミオートになつているのを確認し装填しているマガジンの残弾も見て不安があつたため取り換える。視線を上げればR Oが領きハンドサインでタイミングを送つた。

ゼロ、奇襲を開始するタイミングで彼女が拳を握つた瞬間に先程いた監視所が爆発する。あそこにあつた燃料なども合わせての爆破なので派手に火柱が上がっているのが逆側に移動しているこちらからでも十分に見えた。捕虜の近くにいる民兵数人全員がそちらの方に視線を向けた瞬間、シャドー二人は攻撃を開始。タタタタツと誤射もなく民兵をダウンさせた。

「R O！」

「わかってます！助けに来ました、さあ行きますよ……！」

R Oが捕虜を助け起こしている間にローガンは片手にスモークグレネードを持ちつつ警戒にあたった。

「す、すまない……あんたたちは……」

「説明は後です。私達の仲間達がもうすぐ来ます。そこまで移動しますよ」

状況が理解できた捕虜達はその場で倒れている民兵達の武器のみを拾ったところでR Oが先導していく。ローガンは最後尾につき後方の警戒に当たった。

「プロフェット、こちらシャドー2。捕虜達の救出に成功しました。これより回収地点に向かいます」

『了解した……回収班にはA R小隊を向かわせてる。彼女達と合流次第、帰還してくれ』

「わかりました。彼女達との無線の接続をお願いします」

安堵したようなハリーの声と共にR Oも笑みを浮かべている様子なのが声で分かった。

「私達を助けてくれたのには感謝します……ですが、まだ奴が……！」

「誰のことだ？」

「仲間を皆殺しにした奴らのリーダーです。まだ近くにいるはず……」

「……場所は？」

息絶え絶えに捕虜の一人はローガンに情報を話した。

民兵のリーダーの名はハリソン。三十分前にここから西にある検問所で自分達を捕える際に現れ、見た目も見れば一目でわかるほどの肥え具合とのこと。

「奴を殺さないとなにも……！」

「落ち着け。そんな傷で一人じゃ太刀打ちできないだろ」

「だけど……！」

「こつちに任せろ。プロフェット、話は聞いてたな？」

『うん。UAVで西の方を見てみたところ、それらしき人物は画像で確認できた。こつちの騒ぎに気づいて損害の確認に来そうだね』

「情報源がこつちに来てくれるってことか。親切なことで」

『……僕が止めようとしてもやるんでしょ？』

「わかっているじゃねえか」

やれやれといった呆れたような、それでいてわかってたような感じであった。ローガンがROを見てみると彼女も苦笑していた。

「RO、任せていいか？」

「本来ならダメと言って止めたいところですよ……必ず、戻ってくださいね」

「わかってるさ」

拳を軽く一回合わせて二人は別れた。

ROに捕虜達を任せたローガンは、まずUAVから送られてくる画像を広場から少し離れた食糧庫に入り端末で確認。完全に踏み入ったところで行動を開始した。

『現在ターゲットはSUVから降りてる。護衛も三人ぐらい連れていつて……ああくそ、テントの中に入った』

「どこのテントだ？」

『中央よりやや西側のテントだよ。見張りは前に二人いる』

「民兵も多くは監視所に向かっている。狙うなら今だな」

並び立つテントやコンテナなどの間をとおって中央へと向かう。バジャーをストラップで脇の方に下げ、サイレンサーを取り付けたP226とナイフを片手に進んでいく。道中でこちらに気付いた者にはすぐさま飛びついてナイフを突き立て、場合によっては発砲して騒ぎを起こさせないように移動した。

ナイフを民兵に突き立てると、しばらくは鉄血を相手にしていたことで忘れていた感触が蘇る。

「……やっぱり嫌なもんだな」

顔に浴びた返り血を拭きながらそう呟いた。

ハリーのガイドを聞きながら足音を立てずに進んでいくと、目標の正面から北側に辿り着いた。

「……どうな……しが違……い」

テントの壁となつている布地ではっきりとは聞こえないが、誰かと言いつ争っているようだ。ならテントの前でげんなりしている見張りを倒せば何とかなるだろう。

周囲を確認しつつローガンは足元の小石を拾うと二人より頭上に投げ、弧を描いて反対側の方へと落下させた。落下した音に気付いた見張り二人の注意が逸れた瞬間、自分の手前側にいる一人の背後に近づいて奥のもう一人の頭部を撃ち抜き、近距離であれば

気付くサイレンサーの音に振り返ろうとした一人の口を塞ぎながら喉にナイフを刺した。もがくロクでなしを押しえ付け、抵抗する力がなくなるまで口にあてた手を離さない。やがて力尽いた民兵をその場で転がし、テントの内部へと耳を澄ませてみる。

「ああたしかにそうだな……だがそれは……仕方ないだろ！我々だって物資がなくなってくれば補充しなければならぬ！だから……！」

テントの出入り口でのことに気付いた様子はない。それよりも自分のことで頭がいっぱいらしくずっと怒鳴っている。

それと今の会話ではつきりした。数日前にここを通りかかった後方支援部隊を襲撃したのはこの連中だ。ハリーによれば、この区域は鉄血の数も少ないため物資調達のため付き合いもあり物資を分けていたそうだ。その連中の中に少数であっても反対の意思を持つ者がいてもおかしくない。今回の民間人内の混乱はその少数派によるものだろう。

「プロフェット、突入する」

『了解、UAVで外を監視する。早急に尋問を開始して情報を引き出してくれ』

周囲に敵影はないことを改めて確認し、ローガンはフラッシュバンのピンを抜きテントの入り口から投げ入れた。一間空けてバンッ！と破裂する音がしたところでローガ

ンは突入した。テントにはオフィスにあるような机と椅子、あとはスクリーンパネルとPCなどの電子機器もある。その机の前で丸々と太った男がフラッシュバンによる影響で目を押さえて悶えていた。拳銃が机の上にあるため万が一の為に遠くへと投げ捨て、代わりにそこにその男をぶん回した。

「うっごああああ……!?!」

視覚と聴覚が回復しかけていたところで腕力と遠心力を利用したことによる転倒で平衡感覚が混乱しているだろう。立ち上がる前に机を回り込み自身の拳銃を突きつけた。

「答えろ、お前がここの連中のリーダーのハリソン。そうだな?」

「……うおお……お前は……?」

「質問に質問で返すんじゃないやねえ。こっちは時間がねえんだ」

回復しきった目でこっちを見た男、ハリソンの右手を力一杯踏みつけた。

「がああああ……!」

「聞きたいことは山ほどあるが、まずはそうだな。そこで転がってる端末で誰と話してたんだ?」

「答えるわけないだろうが……ごああああ!」

「そうかい。なら右手を一生使えなくしてやろうか。時間があるなら指一本ずつですま

せてやるところだが仕方ない、そうだろ？」

足の裏の方で骨が悲鳴を上げているのを感じつつ、ローガンは万力のように徐々に加える力を大きくしていく。

「ぐがああああああ！わかった、話す！話すから手を……！」

「……最初からそう言えばよかったんだよ」

若干力を緩めてやろうとしたその時だった。ローガンの左横にあるスクリーンの電源が入り、そこに映し出されていたのは一体の鉄血のハイエンドモデルだった。

『あら、早いわね。馬鹿な真似をそのクズがやったからいずれとは思ってたけど、グリフィンの人形ではなくてあなたが来たの』

「……誰だてめえ。見たところ、そんじよそこらの鉄血兵よりかは力があるようだが」

『これは失礼。私は『侵入者』こと、上級人形のイントルーダーよ』

「……どういふことだ。なんでてめえが鉄血と繋がってやがる！」

一度は緩めかけた右足の力を入れ直し、怒りのままに踏み砕いた。ハリソンの情けない悲鳴がテント内に響くが、外の連中には聞こえていないだろう。

『あら、『狼王ロボ』ともあろう方が感情のままに行動するなんて思わなかったのだけだ』

「てめえらだつて考えることがあるだろう。前にスクラップにしてやったハンターだつ

て後半はキレイながら戦ってたぞ」

『それが私達鉄血工造の全体と共通しているとは限らないじゃない』

「だとしてもだ。人工知能を積んでるわけだから精神面でてめえらも成長している。

『感情』なんてものがなければ、こいつを弄ぶようなことはしなかっただろうが」

『……なるほど、たしかにそうね』

楽しそうに、くつくつとイントウルダーは笑ってローガンの言ったことを認める。

楽しそうに笑った後に彼女はスクリーンに手を伸ばしてきた。

『ねえ、私達のところに来ない？グリフィンにいるよりもこっちの方があなたの好きなようにできると思うのだけど』

「お断りに決まってるだろうが。今までやってきたことを水に流すことなんざ俺は一切しねえよ」

『まあいいわ、わかってたことだし。それよりもハリソン、あなたももうここまでのようね』

「な、なにを……!」

『光を浴びながら来た人形ではなく、光の使者として影から狼が来たのだもの』

イントウルダーは画面の向こう側で脚を組み、頬杖をついた。その様子はまるで自分にはもう必要のない、使い捨ての電池を見るような目をしている。

『あなたたちに対して不可侵の契約を交わしてたけどたったこれより破棄。これより侵攻するわ』

「ふ、ふざけるな……！お前達に対して敵対関係にある組織に関しての情報を……！」
『あら、それはもういいわ。だって何も役に立たなかつたもの』

なつ……！と地面にうつぶせになっているハリソンが声を漏らす。

『それに不可侵はこつちから結んで『あげた』ものよ。だったらこつちから破つても構わないじゃない？』

「そ、そんな……」

『ああでも、暇潰しとしては最高だったわよ。それだけは感謝してあげるわ……ローガン、幸運を祈るわ』

さようなら、と言ってスクリーンは再び真っ暗になった。その瞬間、テントの外から地響きが伝わってくる。距離は近くない、ホントに広場の近場である。

『シャドロー！鉄血兵が現れた！どこから来たんだ奴らは!!』

舌打ちしたローガンは転がっている民生の端末を回収してからP226とナイフを収納しバジャーを手にと外へと飛び出す。するととはつきりとは見えないが広場の南側の道路の方で銃撃音が聞こえてくる。民兵達の持つAKなどの銃声もあるが、大部分は鉄血兵のリーパーやヴェスピドのもつそれが多い。加えて叫び声や悲鳴などが木

霊してくる。

「まずいな……い！」

『北の方からも大量の敵が来てる。回収地点をそこから西へ二百メートルに更新する！そこに急いでくれローガン！』

考える暇もなかった。ローガンはすぐに西の方へと走り出す。テントの合間から民兵達が出てくるが走りながら撃ち、どうなったかは確認せずに向かった。広場から出た瞬間、背後にあるマンホールの蓋がバンツ！と音を立てて上へと吹っ飛んだ。走りながら振り返って確認してなぜ鉄血兵が突然現れたのか得心がいった。

UAVというのはあくまで地上の状態を確認するものである。サーマルなどといった夜間でも状況を確認しやすくできる機能もあるが地中まではわからない。

「くそつ、奴らめ……い！」

応戦する暇はないがこのままにもやらなければ背後から撃たれてしまう。よってローガンはスモークグレネードのピンを口に咥えて抜くと足元に落とした。ボンツ！と缶が破裂した音がすると同時に銃声が響く。ローガンの頬を掠め、銃弾はなにもない虚空へと消えた。このまま行けるかと思った瞬間、目の前のマンホールの蓋が吹き飛び、そこからダイナゲートがわらわらと出てきた。

「やつべえ！」

瞬時に走っていた脚にブレーキをかけ、左横の脇道に入るが数秒で背後の方から機械音が響く。銃声が鳴る前に別の小道に入って弾道を避けた。

『シャドー、こちら回収班のモービル！そろそろ燃料が限界だぞ、いつぐらいに到着するんだ!』

「モービル！そちらに向かうルートに鉄血兵が沸いてきて直進できない！できるだけ急ぐから待つてくれよ！」

『帰ったら一杯おごれ!』

やがて何度も曲がった小道から本道へと出たローガンは方角を直感で判断し走り続ける。約五十メートル先に、彼女達は待つていた。

『ローガン!』

無線越しに彼女が自分を呼んでいるのが精一杯になってパニックになってきているローガンの頭でもわかった。

あともう少しと言えるところだった。

しかし二度あれば三度あるという言葉がある。それが実際にあるのだと言うことを証明するかのようにローガンが見る限り三度目のマンホールのリリースが起こった。

ここまできるとローガンでも笑えてくるがそれどころじゃない。

『ローガン、そのままここにきて!』

『AR小隊、シャドローに援護射撃！』

強行突破を行う為スモークグレネードを数個マンホールの方へと投げて走り続ける。ダイナゲートが自分を転ばせるかのように行く手に現れるが踏んづけてやって大きく前進してスモークから抜けると彼女達が全力でもって自分の背後にいる鉄血兵たちを撃つてくれていた。

「手を！」

もう無線じゃなくても聞こえるところまで来たところで飛び立とうとしている輸送機から彼女が、今回の相棒が自分に手を伸ばしているのがわかった。それを跳躍して掴む。

「掴みました！」

「うっしやあ！モービル、ここから離脱だ!!」

『了解！プロフェット、回収班はこれより作戦区域から離脱する！』

『了解したモービル！皆、よくやってくれた！』

ローガンが引き上げられている間も手が空いている彼女達が可能な限りの援護射撃を行い、輸送機は段々と高度を上げていく。完全に引き上げられたところでハッチが閉じ、作戦区域から離脱できたのである。

「つたくこの大馬鹿野郎め。ひやひやさせるなよ」

「ホントだよ。グリフィンと、私達と一緒にあって初めての任務で死なれちゃったら困るのに〜」

「でも、ご無事でよかったですローガンさん。これこそ『終わり良ければ総て良し』です」
M16からは労いも兼ねて背中を叩かれ、S O P H I I はふくれっ面になりながらも抱き付かれ、M4からはどこぞの有名な劇作家が言った戯曲を口にして喜び合った。

「……一人で無茶しすぎよ。もっと私達に頼ってくれてよかったのに」

「悪かったよ。でもタイミングとしてもあそこでああしないとならなかったんだ」

「まったたく……」

A R I 5は口で不服そうにしても、ローガンが生きて戻ってきてくれたことだけでも満足しているようで顔を逸らしていたが頭を撫でられて表情を緩めていたのは誰にもわからない。

「今回のパートナーがお前でよかったよ、R O」

「私は特にこれといったことはありません。あなたの成果ですよ、ローガンさん」

「んなわけないだろ。お前だからドローンの操作だつてできたじゃないか。お前とだから捕虜の人達の護送だつてそうだ。A R 小隊の皆でもできたことかもしれないけど、少なくとも今回組めたのがR O、お前でよかったんだ。胸を張って誇れよ」

「……ありがとうございます」

交わした握手と共にROは笑顔を浮かべてそう述べる。ローガンが言ったことも本心であつて嘘の欠片もない。

「むく……」

「SOPPI、今回はROに譲つてあげなきや。ローガンさんもそうだけど、彼女も頑張つたんだから」

「そうね。少なくとも今回の作戦で功労者の一人としてROなのは確かだよ」

「とか言いながらお前ら二人もちと不満げだぞ」

そう言う彼らに乗せた輸送機はグリフィンへと帰還する。組織の先鋭となる『影』を乗せて。

後日、ローガン達がいるグリフィン支部に一つの報告がきた。それは作戦区域における生存者数は『ゼロ』ということだった。

7. 鍵はどこに? —Attack from other place—

—グリフィン北アメリカ支部の作戦ブリーフィング音声ログ#269—

『失礼します、指揮官。何か御用ですか?』

『ああ、来てくれてありがとうM4。先日、ローガンが回収してくれた民兵達の端末の解析が完了したんだ』

『……それで、収穫は?』

『うん。とりあえず一言で言うのであれば思ったよりもよろしくない』

『というと?』

『会話している履歴からすると、イントウルリーダーという鉄血のハイエンドモデルに何回もかけていたんだ。これを見るとローガンの報告にも領ける』

『私も少し聞かせてもらいました。『鉄血と停戦協定を結んでいたようだ』、彼はそう言っていました。でなければあの区域にいた民兵達の警戒しなさに納得がいかない』

『僕もそう思うよ。まだ連中の装備の調達ルートを割り出せていなかったのは残念だけど、この件の裏に鉄血が、上級人形が絡んでいることがわかったんだ。それだけでも収

穫だろう』

『ですが人類と鉄血による不可侵の協定……あまり信じたくないです。グリフィンにあまり好感を抱かない人がいるのはわかっています。だからといって鉄血と手を組むなんて……』

『今回のは向こうが妥協して結んだものらしいけど、それでも容認できないね。僕たちが絶対的に正しいとは言わないけど、人類の破滅を目論む連中から守る。それだから鉄血よりはマシなのかと思ってただけじゃないだっただのかもしれないね』

『そんなことはないです！指揮官、あなたが今まで保護した方々に手厚くしてくれたのは私達も知っています！あなたのはしたことは、決して彼らを不幸にしたわけでないことではないです……！』

『……ありがとう、M4』

『いえ……。それで指揮官、今回はその情報の通達のみですか？』

『ああ、そうだった。アメリカ軍からの要請だけど、君のAR小隊の力を貸してほしい。君たち第一部隊とグリズリーが隊長の第二部隊と一緒に山岳地帯のアメリカ軍の基地の一つに行ってもらいたいんだ』

『なるほど。目的としましては基地の制圧のみですか？』

『いやそうじゃないんだよ。アメリカ陸軍によるとそこにはとある兵器のデータがある

そうだ。そのデータが奴らに取られる前に破壊してもらいたいそうだ』

『破壊? 回収ではなく破壊ですか?』

『そう、僕もそれが気になったところだけだね。まあ昔の兵器のデータだしいいんだけど』

『……了解しました、指揮官。AR小隊、第一部隊として任務に当たらせていただきます』

『うん、頼んだよM4。皆で生きて帰ってきてくれ』

『はい!』

—再生終了—



『こちらプロフェット。アルファチーム、ブラボチームの各員へ。作戦を開始する前に無線感度をチェックしてくれ』

指揮官ことプロフェットからの指示で私も無線の状態をチェック。接続状況などをすべて確認してみても問題なかったため隊長であるM4に頷いた。

「こちらアルファー。無線感度オールグリーン」

『ブラボチームも問題なし』

『了解。現在午前十一時二十七分、これより作戦を開始する。各自、健闘を祈る』

ガタンツと一回の大きな振動が収まったのと同時に輸送機のハッチが空いて殺風景な景色が私の目に映った。そこに皆で降り立つ。

小さい雲がいくつしか見えない青空と草木が一つもない大地。そして高低差の激しい景色が目の前に広がっている。ここは昔からこういうのだったらしいが本当かどうか定かじやないし今はどうでもいい。

「AR15、行くわよ」

「……ええ」

重要なのは、これからの作戦だ。人類の居場所を、指揮官達が生きていられる場所を私達が全力で取り返す。

私も皆と同じようにダミーを起動し追従させるようにして動かす。そして今でも特に風化したような様子をみせない通路のトンネルを潜った。

「入口に罠……も何もないな。M4、いいぞ」

「わかったわM16姉さん。ROも前へ行って進んで。SOP11は隊の右側の警戒でAR15は後方をお願い」

「了解」

「うん、わかった」

「了解よ」

昔とは違い、隊長らしく迷いのない指示ができるようになったのは成長したと思える。私はその背中を少しだけ見詰め後方の警戒に当たった。

M16とROが隊の前方を、M4とSOP11が中央、私が最後列というのは大体建物などの制圧で私達がよくとっている隊形だ。それぞれの特性を生かせることで皆も文句がない。

『こちらブラボー1。アルファ1、こちらは山岳地帯の山麓にあるもう一つの入口から侵入中。現在コンテナとかが置かれてるけど、そっちの方はどうなってる?』

「アルファは階段を下り終えて進行中。特にこれといって目につく物はないわ」

『コンテナに混ざって軍用車両が置かれてるけど、これガソリンとか全部抜かれてるの

かしら』

「確かめたいのならガソリンタンクに腕を突っ込んでみてはどうだ？ そうすれば一発で分かるぞ」

『それはいいアイデアだ。その手で銃を撃てば部品のパーツをあまり損耗せずに済むぞ』

『潤滑油じゃないから普通に引火して爆発してしまいますよ……』

MP5のごもつともな意見に皆でハッハッハと笑った。

『だけど真面目な話、どうしてまだ完備されてる状態の車両がいくつもここに置かれてるのかしら。私だったらガソリンだけじゃなく使える部品があったらそれだけ取って逃げるわよ』

「使えるの、それ？」

『ええと……使えるわね、これ。ガソリンも十分入ってる』

「単にここの基地を昔捨てた時のままじゃないのでしょうか？ こっちの方の通路には弾痕があります。鉄血との戦闘で対応しきれずに放棄したのでは」

ROの言う通り、私達が今通ってる幅が五メートルほどしかない通路の壁や地面に抉られてる痕がある。明らかに自然にできたものではない。それを証明するかのよう
に弾を撃った後に銃から排出される薬莖が転がっている。

『ただど埃を被つてないわ。部品の劣化もほとんど見られない……間違ひなく最近ここに運び入れられたものよ』

『……どうなつてるんだ』

「私達だけで考えても仕方ないわ。ブラボー、プロフェットに報告して。基地内部に入ったら山の内部に入ることもなるからしばらくまともに通信できなくなるわ」

『了解』

今回の作戦区域となつている元陸軍基地は地下資源の影響もあり、内部からでは近接通信以外はしにくくなる。加えて電子機器も一部影響を受ける為、もしドローンなどで近接スキャンをしようとしても無駄となる。

それにしても話を聞いた限りでもたしかに妙な話だ。事前情報によるとこの陸軍基地は放棄して十年は経つている。誰もここに足を踏み入れていないという情報から埃をかぶっていない車両がそこにあるだけで違和感を感じる。まるで——

「M4、推測だけど奥の方に誰かいるんじゃないかしら」

「……あり得るわね。各自、警戒を怠ることなく作戦行動に集中して」

私達AR小隊だけでなくグリズリー達の方からも了解の意が伝えられる。

もちろんこれはあくまで推測の域を出ない。思い過ごしではあればいいが私達グリフィンが正体不明の兵器のデータの破壊に来たことを嗅ぎ付けた何者がインターセ

プトしに来たのだろうか。鉄血？テロリスト？または先日ローガンが出くわした鉄血と手を組んだ他の何者か？または、アツシユという名で蠢く鉄血なのだろうか。まだ、おおよその予測がつくだけの情報がない。

そう考えながらいくつかのエリアを抜けていく。オフィスや倉庫、訓練をするために作られたような演習場。どれも経年劣化で古くなっており触るのが危うく思えるものの中にはあった。

「うーん、どれもお土産にはできそうにないね」

「SOPHIE、鉄血だけじゃなくそんなものも欲しいの？」

「良い物があればいいなつてところだよ。前に指揮官、自分もある程度はできるようにならなきゃつて言つて地下射撃場に入つてたよ」

「へえ、あの指揮官が……」

「人間としてできる範囲でやれるようになりたいたんだけ。ローガンほどじゃなくても扱える銃が一つでもあるように」

ローガンほど……それは定めてるハードルというよりも比較の対象として高すぎますよ指揮官、と私は胸中で溜息を吐いた。

毎回射撃訓練などを共にしているROから聞いた話だが、今度何人もの人形達を集めて本格的な演習訓練を考えているとのことだった。上から見下ろすような教官の立場

ではなく、共に有効な戦術を考える戦友としていくつものシチュエーションを用意して行うことを予定していると聞いている。最近では近接訓練だけに注力するだけじゃなく全体的にマイルドに行ってもいる為、ここぐらいでテストとして参加してもいいかもしれない。……決して、食事の時以外で中々顔を合わせられないことを理由にしているわけではないことだけはな。そう自分に言い聞かせる。

「AR15? なんかつ険しい顔つきになってるけど……?」

「……ごめん。ちよつと考え事をしていただけ」

ならいいけど、とSOPPIIが任務に集中し直すように私も気合を入れ直す。

「定時報告。ブラボーチーム、そちらの状況は?」

『』

腕時計で現在時刻を確認したM4がブラボーに通信してみるが繋がらない。ジジジッ、ザザザッとノイズが走るだけで何も聞き取れはしなかった。

「地下資源の影響か?」

「だと思っけど……グリズリーが確認していた車両の件もある。あまりゆっくりはしてられないわ」

「だよな。ROは通信の再接続に集中したらどうだ?」

「……そうね。M4、一旦下がるわ」

「了解。フォーメーションの中央に入って」

通信など電子戦に集中的に入るとROの動きは悪くなるため、上から見下ろせば十字架のような形状になる。

やがて他よりも広く設計されていた演習場を抜けさらに奥へと進んでいくが区切っていた扉を姉さんが開けた瞬間、カビだけでなく充満していた錆などの鼻を突くような臭いが流れ込んできた。

「な……」

その光景に私達は絶句した。鉄血兵と十年前まで使われていたであろう歩行型の無人戦闘機が多くそこに転がっていたのだが、どれも錆などの腐食が酷い。

「なんでこんなものが……?」

「正規軍が今も使っていたりする型の兵器だな……」

M16によると私達戦術人形が生み出される前から使われている兵器らしい。私もよく見てみると外側の装甲のみならず内側のケーブルや電子盤などの内部構造にも相当ガタが来ている。赤錆が全体を侵食していることからこの基地を放棄する同時期にここで捨てられたのだろうか。だとしてもこうはなりたくない。私達戦術人形は機械の骨格の上に人工皮膚がつけられているが、内部の隅々まで人類と同じような構造にされているわけではない。

と歩いていたところで私になにかを蹴つたため足元を見てみると一部が破裂している容器が転がっている。

「ARR15、それは?」

「わからないわ。だけどこの部屋で転がっているのはその鉄屑とこれしかない」

「……そうね。弾痕はあつても薬莖が一つもないわ。ここまでで戦闘の痕が残つてそのままだったのにここだけ丁寧に回収するなんてことはないわよね」

M4と話しながら拾つてみてみると、材質は鉄やアルミではなくプラスチックでできている。それも私達の基地の宿舎で使われているような一般的なものではなく、強度が上がっているものだ。

「M4、これは回収してグリフィンに解析をお願いした方がいいわよね」

「ええ、無くさずにお願いなね」

バックパックにその容器を収納し先に進んでいく皆に続こうとした時だった。

「つ!?そこにいるのは誰だ!?!」

姉さんが誰かと接触したらしく銃を前方に構えているのが見えた。M4とSOP Iも前方に、ROは警戒している形だけを取る。私はダミーに後方を任せ皆と同じようにライフルを構えた。フラッシュライトに照らされて出てきたのは迷彩服を着た三人の男性だった。両手を上げており抵抗をする素振りを見せないがストラップで下げて

いるサブマシンガンが目に入った。

「やあ、君達はグリフィンの人形かい？」

「……私達はグリフィン所属の戦術人形、AR小隊です。あなたたちは？」

「オレ達はロシアの特殊部隊……スペツナズ、といえはわかるかな？」

たどたどしい発音の英語を聞きながら『スペツナズ』と聞いて私はまず疑問に思った。

ここは北アメリカ大陸でありロシアのユーラシア大陸とは別で距離が離れている。それなのになぜ……。

「……なぜ元アメリカ陸軍基地にあなたたちロシア人がいるのです？」

「それは極秘だよ。君達こそ、ここになにしにきたんだい？」

そう聞いてきた男の目がギラリと光つたのを私は見逃さなかった。だが私一人が先走って発砲するわけにはいかなかったためここはグツと堪える。一応下手な真似が向こうが出来ないようにライフルを構え直した。

「あなたたちが話さないのに私達が話すと思えますか？」

「そうだよなあ……。でもまあここから回れ右して帰ってくれたらこつちとしてはありがたいんだけど、どうかな？」

「お断りします。こちらにも任務がありますから」

「そっか……。なら仕方ないよね——！」

そう言った一人が身を屈めた瞬間、いつの間にか屈んだ一人の後ろに——三人のうちではない——もう一人の隊員が腰に構えた状態で撃ってきた。

先手を取られた——!

「M16!」

「ちい……!」

姉さんは瞬時にアタッシュケースによる盾を展開し私達が物陰に隠れる時間を稼いでくれた。すぐさま私とM4はロシア人達の弾丸を避けた。SOPIIはすぐには動けないROの服の襟を掴み一緒に錆びてる無人ロボットの陰に隠れているのがわかる。

「——!」

「——!!」

ロシア語で何かを言っているのがわかるが詳しくはわからない。しかし今はそれどころではない。私は物陰に隠れながら別のところでロシア人達の様子を窺っている隊長に叫んだ。

「M4!どうするの!?!」

『なぜここに彼らがいるのか理由がわからない。そのわけを問いただいたいけど——!』

『先に手を出してきたのは向こうだよ! M16姉、あっちの武装は?!』

『さっきの話してる最中に観察した限りじゃ、カラシニコフのアサルトライフルとサブマシンガン、あとはグレネードといったところだ!』

グリフィンの人形としても可能であれば、このアメリカ領土の大地に足を踏み入れている人類ではあるロシア人を殺傷することはやりたくはない。だが、ROが復旧させた通信がそれを許してくれなかった。

無線越しに銃声に交じってグリズリーの声が聞こえてくる。

『アルファチーム!聞こえる!?!』

『こちらアルファー!ブラボーそちはどうなってる!?!』

『なぜだかわからないけどロシア人達がここに踏み入ってる!少し話してたら向こうからおっぱじめたよ!』

私達が山の中腹から侵入したのに対し、ブラボーが踏み入ったのは山麓——山の下部分——。そっちにもスペツナズが展開している!?

『現在牽制射撃に留めて膠着状態!プロフェットには通じない。指示をお願いM4!』
グリズリーからの報告で恐らく腹は決まったのだろう。声からしても迷いを断ち切ったのが声色から窺えた。

『——仕方ない!アルファ、ブラボーの各員へ。彼らへの攻撃を許可する!繰り返す、ロシア人との交戦を許可する!!』

『了解!!』

私も含めて全員から了承の意が伝えられる。

物陰から少し見てみると、私達が出くわしたスペツナス達は撃ちながら後退しているのがわかる。リロードする時は既に装填を済ませた別の二人が前に出て時間を稼ぐ。そのサイクルを繰り返して撤退しているのだろう。さすがにロシアの精鋭というだけあって連携もうまい。それにしても、私達を排除するために踏みとどまるのではなく「奥へと逃げようとしている」。ということは一——!

「奴らに時間を与えるわけにもいかないわ。M4、あなた催涙ガスを持ってきてなかった!」

『ええ。鉄血にも効くように改良された新型よ!』

「それを使って制圧を急ぎましょう! 奴らの目的ははっきりとしてないけど、兵器のデータが目的だとしたら……!」

『……そうね。アルファ、ガスマスク装着!』

S O P I I や R O がしているように私も腰に下げていたガスマスクを顔に被せる。

『いいぞ、M4!』

『了解! ガスグレネード、いきます!』

緑の煙を吹きだすグレネードが奥へと投げられる。煙の拡散速度と人間だけでなく

人型の形状をしている鉄血兵に効果があるようにグリフィン本部の研究部が開発したガスグレネードが閉鎖空間である充満していく。こちらの地面にも流れ始めてきたぐらいからロシア人が咳き込むような声が聞こえてきた。

『攻撃開始！』

M4の合図に合わせ、私も発砲する。ダミーも攻撃を開始し咳き込んでその場で蹲る者も撃った。

『ブラボー、こちらは催涙ガスを使用して進軍中。そちらにもガスが流れることも考えられるから気を付けて！』

『了解よアルファ3！こっちもガスを使つて進む！』

SOPHIEが無線越しにブラボチームに報告すると、向こうからはG36の応答が返ってくる。

そのまま進んでいくと奥の方からスペツナズの増援がこちらに押し寄せてきた。さすがに向こうの方もただやられるだけでなくガスマスクを装着している。

『追加でお客さんが来たぞ！』

『私も前衛に戻るわ！援護をお願い！』

『任せて！グレネード行くよオ！アツハハハハハ!!』

SOPHIEによるM203グレネードランチャーの援護射撃が弧を描いて奥へと着

弾、爆破を起こしてロシア人達を吹き飛ばす。それで隊列が乱れることはなかったが、動きが一瞬止まったところを逃すつもりはさらさらない。私はダミーと共に一斉掃射を行い制圧していく。

「——!!」

スペツナズの兵士がロシア語で何かを言った瞬間、グレネードによる爆破とは違う爆破が私達の間際で起こる。以前ローガンが活用して見せた起爆爆弾のC4による爆破だった。

間一髪、私は直接爆風などを浴びることはなかったが——

『走れ! 野郎、ここの通路を塞ぐ気だぞ!!』

『面倒なことをしてくれろ……!!』

爆風を浴びることのなかったM16とROが叫んでいる。途端に今の起爆で山岳基地の壁が崩れ始めた。ゴゴゴゴゴ……と地響きが起こった瞬間、天井が崩れてコンクリートや土砂が押し寄せてくる。戦術人形としての脚力を全開に発揮し、全体のほとんどのダミーを犠牲にすることにはなったが全員が二次災害に巻き込まれずに済んだ。

『全員、私が前進する! ついて来てカバーしろ!!』

『シーカーマイン、展開!!』

盾を再び展開したM16がフラッシュバンをスペツナズに投げて前進する。ライ

オットシールドを構えるかのようにし前に進むM16を援護するために私達は撃ち続けた。ROも自動の追尾機能があるシーカーマインを足元に落として起動、ゴロゴロと転がって行つた球体は敵の足元まで向かつて自動で爆発した。

『前進！このまま押し込むわよ！』

隊長の指示に従い私も物陰から体を出して撃ちながら進んでいく。スベツナズ達も旗色が悪いことを悟り、スモークグレネードを捲くと奥に引つ込んでいく。

『逃げていくよ！鬼ごっここの始まりだ!!』

『一人で先走らないでS O P I I。元の隊形を維持したままM16姉さんとROはトランプの警戒をしつつ前進、A R 15は後方警戒を重点的に!』

『ああ！ここまで来てとちつてたまるかよ!』

その通りだ。向こうから吹つけてきた戦いではあるが負けるつもりはない。奴らの目的も突き止めなければならない。

部隊の中でM16とROだけにフラッシュライトをつけてもらって前進すると、いかにも最深部といったような地点に辿り着く。さてどうしたものかと考えていると、私達に通つてきた通路とは別のから来たブラボーと合流した。

『アルファチーム、そっちは大丈夫?』

『なんとかね。そっちは?』

『大分やられたよ。私達本体は無事だけどダミーは全滅。さすがロシアの精鋭というだけはあるね』

そう言われてグリズリー以外の人形達の様子を見てみると、たしかに誰もダミーをもう連れていない。腕や顔にかすり傷程度のけがはあるものの大事はない筈だ。

『ここが当初の目的地だと思わ。指揮官から事前にもらった地図もここがそうだって示してる』

『なるほどね。それでどうやって制圧する? 恐らくだけど、連中ここで待ち構えてるでしょ』

『マップによると司令室の部屋の天井にダクトが通ってるようです。私とブラボーのサブマシンガンの方がダクトからガスを、またはフラッシュバンを入れてみてはどうでしょう?』

ROの言う通り、M4が展開している3Dマップには司令室の上に狭いがダクトが通っている。小回りの利くハンドガンやサブマシンガンを持っている人形が入るのであれば何も問題ないだろう。

そこから誰が入るのかという話になりそうだったのだが、細部に侵入するのに最も適した人形がブラボーにいた。

『な、なんで悩んだりせずいきなり私を見るんですか……?』

『MP5、戦術人形は背が変わらないことを誇るときが来たのかもしれないぞ』

『なんだか遠回しに馬鹿にされてる気がします!』

『いやあ、適材適所って素晴らしい言葉だよな』

『それですべてが穩便に片付くと思つたら大間違いな気がするのですが!』

『やあゝい、チビゝ♪』

『最後にはストレートに悪口を言われました!』

涙目になりながらもMP5とM4からガスグレネードを受け取ったROが近くの壁にあつたダクトの中に入つていった。作戦中のひとしきりとして彼女をからかったG36とM16、最後にはからかいと本心の比率がよくわからないSOPHIEは楽しそうにくつくつと笑つていた。

『それにしても、なんでここにスペツナズがいるんやろうか』

今回の作戦でブラボーの方で戦つていたガリルがそう呟く。

たしかに、今回の作戦で一番の疑問に思うのはそこだろう。アメリカとロシアは昔から仲がよろしくない。まだロシアがソ連と呼ばれていた時代の冷戦がいい例だが、第二次世界大戦終結後に東西を二分する形でアメリカとソ連が対立していた。結果的にアメリカが掲げていた資本主義と自由主義が勝利し、ソ連が崩壊してロシアという国が生まれ、彼らからすればまだ敵対意思が残っていることをそれからの歴史が物語つて

いる。

『どういうものかはわからないけど、別のところで使つてアメリカの兵器だからつて言つてアメリカ政府を脅すために使うつもりかしら』

『そんなわかりやすいものなのかな』

『国同士の争いつて簡単にいえばそういうもんじゃないんか? 結局は』

『……謎ね』

とにかく、他に情報も揃つてない現状でここで私達が考えても仕方ない。ここでやることはやつておかなければならない。

『アルファ、ブラボー各員へ。ダクトを伝つて目的地の上部に到達しました。内部にいる者たちはガスマスクをしている者としてない者もいます』

『RO、こちらはいつでもいいわ。ガスで十秒後に突入よ』

『了解』

ROからの報告とM4の指示で各自の目が戦う時のそれになった。私も緩んでいた糸が両端から引つ張られて一気に張られたような気分になる。

各自マガジンの残弾を確認・再装填を終えて少しして、扉の向こう側から叫び声が聞こえてくる。恐らく彼らは序盤しかガスグレネードを使われなかったことで高を括つていたのだろう。ガスマスクもフィルターなどを消耗するためできるだけ避けたいは

ずだ。

『行くぞー!』

M16が扉を蹴破つてフラッシュバンを投げ入れ、バンツ!と破裂した音がしたと同時に全員で部屋へエントリー。それと同時にROとMP5もダクトの網を壊して中に入ってきた。部屋の中にいたのは十数名。全員アサルトライフルやサブマシンガンを持っていたが、ガスで咳き込んでいたりフラッシュバンで視覚をやられていたり混乱していた。

私も踏み入って一人一人を撃つて制圧する間、ほんの数秒なはずなのにスローモーションの映像を見ている気分になった。まずはガリルの左横にいる者を撃ち、二人目としてその右側にいるガスマスクをしている一人も制圧。そして三人目は早く復帰しこちらに向かつてもう撃とうとしているところだったが撃たせる前に頭を撃ち抜いた。

エントリーが完了し、私達グリフィンの者しか残っていなかった。

『各自、部屋の中のクリアリング!』

まだ終わりではない、部屋の中には机などもある。そこで息をひそめて反撃の機会を狙っているロシア人もいる可能性があるからだ。散開し机の陰、ロッカーと壁の隙間など限なく散策したが杞憂に終わった。

『オールクリア!』

アルファ、ブラボーの異常なしという報告を全て受け取ったM4はそう宣言。そしてその時にはガスがもう晴れていた為、全員でガスマスクを外した。M16やグリズリー達がうまくいったことを褒め合っているところで、M4とROは指揮官からの命令を遂行するため、メインコンピュータとなる端末を操作し始めた。私もそちらの方に向かい、キーボードを叩いてデータを探すM4と共に画面をのぞき込む。

「えーと、戦術兵器ファイルの……これかしら?」

「それかもしれないわね……指揮官からは削除するのに具体的な指示はなかったの?」

「聞いたけどなかったわ。……それにしてもアメリカ軍はわざわざ自分達でやらずに私達にやらせたのかしら。PMCである私達が指示以外のことをやるかもしれないのにな」

「……そうね。わざわざ兵器のデータを『回収』じゃなくて『破壊』にしている理由もわからないわね。知る必要はないんじゃないかと思うのだけれど」

とにかく、ロシア同様にアメリカにも腹黒いところがあるのは確かだ。恐らく今回の任務は交戦したスペツナズのように何かしらかの目的を防ぐものだろう。と考えていた時だった。

「……待つて、M4。これどこかに転送されてる!」

ROが気付いた通り、メインコンピュータのケーブルを辿った先にあるサーバーの

機械があるのだがそこに明らかに他とは違う小型の機械が差し込まれている。電子機器には私はそこまで明るくないが、電子戦のエキスパートであるROがいうからには間違いない。

「転送先は?!」

「ちよつとまつて……ダメ、いくつもの世界中のサーバーや端末を経由して追い切れない……!」

「転送されているデータを履歴から照らし合わせてみるわ……これは、なんなの……」

私も覗き込んで見ると、ファイルの中身を表すウィンドウとは別で意味の分からない文字の配列データであった。黒い背景に白い文字でアルファベットや数字が無数に並んでいる、一昔であればPCなどのエラーなどを表示するものようになっていた。ROもサーバールームからこちらの方に戻ってきて覗き込む。

「……ダメね。私が見ても判断できない」

「一体何がどうなっているの……? スペツナズに続いてこんなものまで……」
「しつかりしてM4」

倒れそうになる友人を私は支え椅子に座らせてやる。そこで少し休むように言ってもう一度端末の方へ戻った。

「行先不明……文字の配列……一体何が……」

「……今回の任務はあくまで兵器のデータの破壊だったけど……ねえRO、これ私達も持ち帰りましょう。いくらなんでもわからないことが多すぎる」

「そうね。核兵器だとかの設計図ではなくこの意味の分からない配列データだけを転送するわけもわからないわ」

「それにロシアとか国も関わってきてる。もしかしたらまた戦争を企んでいるんじゃないか……」

「まさか！今は国も何も関係なく鉄血と戦わなければならないのよ、なんでそんな……」
 第三次世界大戦の結果としては散々なものであったという。開戦直後から核兵器が乱発され、それに合わせてEMPも頻発。それによって電子機器による戦いに依存していたどの国の空軍も海軍も全滅したのだという。結局は実際に人が汚染された大地の上で白兵戦で戦うことになったということだ。結局はどの国も疲弊し決着はつかずに終結。結果グリフィンなどのPMCが国の代わりに都市運営を任されている現状である。権力や発言力も国民に何も意味をなさないというのになにを考えているのか、私はわからない。

「……とにかくやることやって帰還しましょう。指揮官に報告しないとならないことがたくさんあるのだから」

「……ええ」

私とROが指揮官への報告を合わせてその場に遭ったメモリーチップにデータ整理を行っていている間にも、スペツナズから送られたデータにほくそ笑んでいる連中がいる。それを考えただけで腸が煮えくり返るような悔しい思いを私は感じていた。

8. 戦争の火蓋 —Fearless enemy—

その時のローガンは演習訓練で使う中身のあるハリボテの建物の設計してくれている技術者の横で色々とオーダーを出してたところだったのだが、何の予告もなく呼び出しを食らったのである。予定されている建設現場から離れ、急ぎの用だと言ふことだったのでグリフィンの建物へ急いだ。若干小走りで指揮官の、ハリーの執務室へ向かい扉の前についたところでノックしようとしたところで扉が若干開いてることに気付いた。そこで頭だけ覗かせてみると——

「きゅ、9 A、後方支援で疲れたのはわかったからとりあえず降りて」

「嫌です指揮官……もつと私と一緒に欲しいです……」

「うん、その気持ちは嬉しいけどやることやらないと後から困るんだよ。そうなたら君との時間もとれなくなっちゃうんだけど……」

「それでももうちよつと、あともう少しだけ……」

「ん、んん!? 9 A、なんでベルトに手をかけて——!」

「指揮官。私、あなたが欲しいです……。具体的に言うのであればこの間読んだ雑誌のよう……!」

「メ、メーデーメーデーエマーゲンシー！具体的に言うのなら僕のメンタルエマーゲンシーメーデー!!」

……なんだこれは。なぜ自分が来たらこれより事が起ころうとしているのだろうか。いや、戦術人形との交流は大事だとは思いうしその中で誰かと特別な関係を持つても悪いことではないと思う。彼女達も女性としての感性を持ちながら懸命に戦っているのだから。だけどまだ夕方に差し掛かる少し前だというのに、勝手に執り行われる理性によるチキンレースを見るつもりはない。

「大丈夫ですよ指揮官、何も怖くありません。私にすべて任せてくれれば何も問題ありませんから……!」

「だああああああ?!カリーナさんから変な知識を吹き込まれたな9A!あの人から取り入れたのは全部正しいとは限らないのは君も知っているだろ!」

「それはそれ、これはこれ」

「いやいやいやいや、大事だからね!!大体カリーナさんからそういう事をしていいような時間帯も聞いたんじゃないのかい!」

「ええ、たしかに深夜帯であれば一日の疲れもあつて思考するほどの活力も残っていないだろうと言っていました……」

「じゃあわかるよね?!いやだからといって僕はそうするつもりはないけども今はまだ昼

間！小さい子も太陽を浴びながら元気に遊ぶタイムゾーンだよ!!」

「それはそれ、これはこれ」

「天井なんてのも覚えたのかい!!君は一体どこまであの人からネタを仕込まれてるの!!
だあもう、力づくで脱がそうとするんじゃない!戦術人形は何の理由もなく人間に危害
を加えちゃダメなのは君も知っているはずでしょ!!」

「それはそれ、これはこれ」

「待てつてばああああああああああああああああああああああああああああ!!」

とそこで、ようやくハリーは扉の隙間から顔だけ覗かせているローガンに気付いた。
瞬時にアイコンタクトが行われ始める。『タスケテ……』というメッセージが伝わって
くるがそつと扉を閉じた。

「触らぬ神に祟りなし。触らぬ騒ぎに不幸なし」

「おいしい!?結局は何も見なかったふりをするの!?!」

自分の要件もある為ものすつごく嫌ではあるが、もう一度扉を開けて顔だけ覗かせて
みると乱れた服装と血走った目でこちらを睨んでいる目があった。もつとこつちに來
いと目で言つてはいるが、ローガンは断固拒否する構えでそこから動こうとはしない。
戦術人形も喜びそうにもない昼ドラ的なドロドロとした睨み合いが続いたが、そこで上
司が動いた。机から取り出したのは書類の束である。

「ここに一つの書類の束があるじゃろ？」

「……おいその一番上の書類、どっかで見覚えがあるぞ」

「これをこうして……」

棚の方に置いてあるアルコールランプを机の上に置き、蓋を取ってマッチでもって着火。そしてその上に書類を持って行く。具体的に言うのであれば、指の力を少しでも抜けばメラメラと揺れる火の上にかざしている状態である。もしかざされてる書類が燃えた場合、ローガンが正式に申請した演習訓練場となる建物の許可は最初からされていないことになる。

「こうするのじゃ」

「汚ねえ!?人の弱みとなるのを全力で交渉材料に使うスタイルかてめえ!!」

「いやあ、さつき抵抗したものだから腕の力もほとんど残ってないんだよ。だから……」

ああつと危ない危ない」

「ちくしようめ!わかったから心臓に悪いからそんな真似はやめろ!!」

「どうしよつかなあ、やられたら倍返しっていう台詞もあるぐらいだしなあ」

「こいつ黒い!俺が出会った中で一番——あああああああわかったからそうブラブラさせるなつてええええええええええええええええ!!」

結局は、ローガンが折れて未だにハリーの腰に引っついて剥がれない9Aを何とか引

きはがし近くを通りかかったネゲヴに引き渡した。『なんで私が……』と文句を言ったが渋々了承してくれた。今度何か礼をしなとかなとローガンは考えた。

「……それで、一体何の用で呼び出したんだよハリー」

「さっきので終わったって言ったら怒るよね？」

「怒る前にまた同じ脅しをされそうだから怒らない」

賢明な判断だと言ってハリーは立ち上がる。そこでローガンの耳元に囁くような音量で言ったのである。

「さっきM4からの報告をもらったんだけど、ロシアの特殊部隊と交戦したって」

「——それで、あいつらは……」

「うん。今はこつちに帰還している最中だよ。アメリカからの依頼は達成したうえで、スペツナズが不可解なデータをコピー、転送したデータをチップに入れてね」

わざわざ転送する前にコピーする理由はなんだとローガンが思ったのだが、ハリーによると現在では一昔前のネットワークである仕組みであるが故なのだという。同じサーバー内でデータをコピーした場合、同じ名前のデータが二つ以上存在するのを避けるためにファイル名が自動で変化する。ファイル名の最後尾に『ー』といったような数字が付くように見比べたら一目でわかるような変化である。その元アメリカ陸軍のサーバーからデータがそのままの状態で転送しようとした場合、システムから障害されてできない。ならば、ファイルをコピーしたうえでそのファイル形式を昔にはないものに変えてやれば問題なくなってしまうのである。

執務室のソファに腰掛けて考え込むローガンにコーヒーを出したハリーは自分の分のを飲みながら向かい側に座った。

「スペツナズの連中、ロシア人がなぜアメリカ領土にいるのかも気になるところだよ。今となつては国という国はほとんど力が干からびているようなものだから油断してたけど……」

「連中が正式な手続きを踏まずにこつちに密入してるかもしれないってことか？」

「そう考えるのが今は自然だよ。第三次世界大戦は終結してはいるけど、もう各国は互いに協力するような意思を持つているとは思えない」

「開戦前にあつた貿易摩擦による影響もあるだろうな。あれで大分険悪になる速度が加速したつて話だし」

「それもそうだろうね。それに報告によれば、先に手を出してきたのはスペツナズからみたいだ。こちらの目的を知ることなく撃つてきたわけだし相当ピリピリしてたみたいだね」

「ロシアか……」

「それとローガン。この間偵察任務で民兵達の装備を見たところ、持つてる銃器はAKとかのカラシニコフ製の物を持つてたのかい？」

「そう言われて数日前のことを思い出す。ROと共に夜道の暗闇に紛れていたあの任務で、民兵達が持つてた銃器は——。」

「……そうだな、全てというわけではなかったがな。少なくとも持つてたアサルトライフルは全てAKだった」

「そうか。ローガン、これはあくまで推測だけど武器の供給元は鉄血だろう」

「……根拠は？」

「イントルーダーによる停戦協定だ。ハリソン達がPMCの情報を連中に流すその見

返りに武器を受け取っていた可能性がある。君が捕えられていたところを保護した民間人から聞いた話だと、地下駐車場となつてるところでそれらしい取引を見たことがあるって言つてたんだ」

「……嘘でなければそれだけでもほぼ決まつたようなものじゃないのか」

「目の前の可能性に飛びついて他が見えなくなるのはなによりの悪手だよ。指揮官として当然のことだ」

そう言つてコーヒーを啜るハリーの台詞にローガンが考える。それと民兵達が持つたアサルトライフルは全てAK47や74といった一貫したカラシニコフ製。となる……。

「まさかとは思ふが、ロシアと鉄血が癒着してるとつていうんじゃないよな?」

「そこまで言うつもりはないよ。いくら祖国の為に命を捧げてる彼らでも鉄血という存在は許せるはずがない。むしろ僕達と同じように打倒すべき敵という認識の筈だ」

「じゃあどう思つてるんだよ。これじゃあロシアがアメリカに混乱を齎そうと……!」

そこまで言つたところでローガンはハリーが考えていたことを察した。彼も目を閉じつつ口元に寄せていたコーヒーカップを遠ざける。

「……そうだよ、ローガン。鉄血の狙いはおそらく国同士の争い、第三次世界大戦の延長戦のようなものだ」

「おい待てよ……。もしその推測が正しいとするのであれば、ロシアの方にもアメリカ軍が……！」

「アメリカ軍とは限らないけどね。ひよつとしたらイギリス、アフリカとかいった冷戦の西と東の代表ではない国が介入しているかもしれないしね」

もしローガンが偵察で潜入したあの区域で見た民兵のように別の国の武器を持っているのに加えて自国のどこかに密入した武装集団がいるようなら、アメリカからすればロシアと鉄血が、ロシアからすれば密入してた国と連中が癒着していると考えてもおかしくない。武器の横流しと兵器のデータの在処に関する情報。前者はともかく、後者は情報戦に特化していればできなくはないことだろう。それができる鉄血の上級人形にローガンはすぐに思い当たった。

「イントウルルーダーめ、世界中を巻き込んで厄介なことを……！」

「あくまで可能性だけだね。でもここまでの事をしてくれるとすると奴も一枚咬んではいそうだね」

「だけど政府の連中だって少し考えればわかることじゃねえのか。俺達にでも思いつくことだろ」

「残念だけどこれは政府のお偉いさんの感情も利用してる。少なくともアメリカ政府の官僚達は第三次世界大戦で生き残った人が圧倒的に多いんだ。決着がつかなかったこ

ととはいえ、戦争をした敵国に対する敵対心というのは完全に割り切れるものではない。恐怖、怒り、憎しみが未だに精神の奥底にこびりついている歳寄りたちが冷静に判断できるかな？」

「……難しいな」

推測に推測、可能性に可能性を重ねたただの机上の空論だろう。だがあり得ない話ではない。人間とは恐怖などの負の感情に支配されたときは悪い方向へと想像を働かせてしまう。それが第三次世界大戦という凄惨な戦争を経験し、生き延びて頭が硬くなった老人達に事実の裏に鉄血が絡んでいるとは気付かないことが容易に考えられる。無論、これも日々戦いに身を置いているローガンも同じなのかもしれないのだが。

「……とにかく、今は何も証拠がない。このことは他言無用で頼むよ」

「……ああ、わかってる」

「それで今回来てもらった本件の方だけど、証言者を回収してもらいたいんだ」

「どういうことだよ？まさかホワイトハウスに忍び込めつていうんじゃないだろうか？」

「まさか。いくらなんでもそこまで言うつもりはないよ」

ハリーからの任務の内容としては、アメリカ政府の情報分析官の救出及び保護であるという。M4達が遂行した任務の依頼人がアメリカ政府なのはいいのだが、内容がデー

タの『回収』ではなく『破壊』に疑問を抱いたハリーはいくつかのパイプを使って依頼人を調査・特定したのである。その情報を受け取った時にはM4とは地下資源の影響で通信が出来なくなった時なのだが。

「それにしてもM4には悪いことしちゃったな。あの時は特に深いこと考えずに古い兵器のデータだからっていいと言っちゃったんだ」

「……まあそれはそれとして、なんでその情報分析官の保護が必要になったんだよ？」

「要は上司に首をはねられたのさ、勝手に外部に依頼しやがってね。そこで追い出されて危険地帯に放り込まれそうになっているからその前に何とかして欲しいと」

「ああ、そういう……俺が行かなければならない理由としては聞いていいか？」

「戦術人形が怖いってさ」

これにはローガンも少し冷めたコーヒーを吹きだしかけ咽せてしまう。そんな彼をハリーは苦笑いしてた。

「両親を鉄血に目の前で殺されてしまっただけで怖くなったんだって。だからこちらの戦術人形は大丈夫だと言っても納得してくれなかったんだよ」

「トラウマで戦術人形が怖いから、人形ではない者を派遣してくれってか。グリフィンに対してその依頼はおかしくないか？」

「矛盾してることには間違いないね。でも君にはバックアップで数人の子を配置する

よ」

「そいつはどうも……。それで、証言者の回収ってさつき言ってたけどどういう意味なんだよ。」

「そのままの意味さ。こちらがその依頼に対するメリットは何かって聞いたら、自分が掴んでいるアメリカ政府の動向を教えるって言ったんだ」

「俺達の推測がその証言で答え合わせが出来るってことか」

そういうことさ、とハリーは何枚かの書類とデータのUSBメモリーを机の上に置いてローガンの方に滑らせた。書類の方に目を通してみると、作戦区域はホワイトハウスがあるワシントンD・Cだった。合流場所はワシントン内のマンシヨンの一室。そこに合流するのは日付が変わる一時間前、現在時刻が午後四時頃なのでつまりあと七時間後であった。

「……随分と急でハードスケジュールだな」

「それについては謝るよ。今から準備して行けそうかい？」

「まあ……大丈夫だ。重要だしできるだけ早く現地入りするよ」

「助かるよ。帰ったら一緒に呑もう、僕の奢りだ」

「嬉しいね。そんじゃあ行ってくる」

ハリーと拳を合わせたローガンはソファから立ち上がると書類とUSBメモリーを

持つと執務室から出た。それから向かい側に見える夕日に目を細める。

「やれやれだな……」

今回の成果で自分達の嫌な想像が正解か不正解なのかがわかるのだが、どうも知りたくない気分が抑えきれなかった。

——〈Unidentified unit〉——

『はいはい、こちらは……となーんだあなたか。……うん、いるよ。ちよつと待ってね』

『はい……うん、私です……仕事ね、わかったわ。場所は？……』

『ねえ、誰からの電話？』

『ん？私達のボス。時間もないから早く代わってくれて言われちゃったよ』

『いつもは穏やかなのに急ぎの用があるとすぐに焦ってしまう癖があったのよね、まだ治ってないのね、子供の頃のままだわ』

『うん、ホント。でも最後に会ったのはもう三年も前になるんだね』

『そうね……。つともう、また涎垂らして……。』

『うん、わかったわ。今度そっちに寄ることがあるかもしれないから、その時はよろしく』

『あ、終わったみたい』

『それで、どういう仕事?』

『ちようどここからあまり離れてないところで特務を遂行する隊員を支援してくれだつて。重要人物の救出が目的みたい』

『支援? 私達が直接やるんじゃない?』

『私達はおくまで裏方よ。場合によっては面倒なことになるかもしれないけど』

『特務にあたる人形って何人なの?』

『一人よ。しかも人間』

『人間!?!』

『人形ではなくなんで人間がこんなところに来るのよ。鉄血にいつでもいいから殺されたいのかしら?』

『侮っちゃダメよ。この人の特徴だけを教えてもらったんだけど、鉄血との戦い方を弁えているわよ。それに人との戦いにも、ね』

『それ本当? ガセを掴まされたんじゃないの?』

『本当か嘘かはわからないけど、あの子は昔から私達に嘘をついたことないでしょ?』

『初めての嘘だったりして』

『それでもやりましょ。それにあなた達も特務の隊員の見た目とか聞いたらわかる筈

よ』

『へえ、私達の知り合い?』

『ええ。あの子よりも一緒にいた短いけど……私は忘れれないわ……』

『……なら行きましょ。あなたがそう言うのであれば、きつと間違いはないわ。ほら起

きなさい、移動するわよ』

『うくん……まだねむい……』

『それで、その人の特徴ってどうなの?』

『ふふつ、それはね……』

——〈Shut down〉——

本来であれば星が瞬いているような夜空が広がっているのだろう。だけど今は彼の心情を映しているかのようにとんよりとした雲が空を覆っていた。

それにバババババツ!!とローター音がヘッドホンをしていても煩く聞こえてくる。これでは少しだけでもと思い、無線を繋げた意味があまりないじゃないかとローガンは誰にも気づかれない溜息をついた。

『こっちはひどいものよ。M4だって色々あったものだからぐったりしてるし、さすがに私も今日は疲れたわ』

「……ああ、俺もちとハリーから聞いたよ。散々だったらしいな」

『わからないことだらけだわ。願っても叶うはずはないけど誰かに答えを教えてくださいぐらいよ』

無線を繋いでいる相手は、今日の午前中からアメリカ陸軍のであった基地で任務に当たっていたAR15である。ローガンが準備を済ませてへりに乗ったその数分後に到着したため入れ違いになったのだった。

彼女も疲れているのか、ずっと愚痴つてるのだがローガンはそれをげんなりするどころか少し笑って聞いていた。

「でもまあ、それだけ疲れてるのなら酒でも呑んだらどうだ？ そうすれば一気に忘れられるぞ」

『やめてよ。私があまり呑めないの知ってるでしょ？ それに今回のこと忘れても仕方ないのに意味のないことをするだけ無駄なだけよ』

「おお、手厳しい。でも言う事はごもつともだ、返す言葉もねえよ」

『……ねえ、ローガン』

それまでは怒ったような口調だったのが、急に悲しいような、寂しいような色になった。

『……いつ、帰ってこれる？』

「そうだな……順調にいけば夜が明ける前には戻れると思うけど、どうした？」

『私、時々怖くなるの。大事だと思つたものがその瞬間に無くなるのが……ローガンもそういう時はある？』

「……あるに決まつてるだろ。誰にだってどうしても失いたくないと思うものはあるさ」

人によつてはそれは違う。誇り、友人、命。人生で一つは守り通したいと思うものは

生まれる。しかしそういうのは誰にも奪われないという保証はない。ひよつとしたらふとした時に自分がこれまで積み上げてきたものを壊されるかもしれない。自分がその場にはいない間にそこにいた金では獲得できないものを掴みとって心を許せるようになった者がいなくなるかもしれない。または、これから向かう先で誰にも助けられず朽ち果ててしまうのかもしれない。ローガンにだって、恐怖はある。

「だからさ、お前はそこで待つててくれよ。俺は帰って一回寝て、そんでお前らのところに顔を出すさ」

『……そこは寝る前にこっちに会いに行くつて言つてよ』

「おお、これは失敬」

ふふつと彼女は笑う。ローガンもそれに釣られて一緒に笑った。

『……でも、ありがと。なんだかちよつとホツとしたわ』

「ならよかつたよ……と悪い、そろそろ時間だ。明日お前らのところには寝る前に行くから」

『うん……じゃあ頑張つて。……おやすみなさい』

「ああ、おやすみ」

ピツという電子音で彼女との通話は切れる。ローガンは無線機にコードで繋いでいた携帯端末をベストよりも内側にある上着の胸ポケットにしまう。出発前にハリーに

ベストが闇色で上着がネイビーブルーの服装なので暗闇に紛れられたらばれにくいだろうというお墨付きをもらっている、『シャドー隊』ローガンの迷彩服である。

『随分と仲がいいようだな。相手が戦術人形でも妬いちまいそうだよ』

「別にそこまで大したことねえよ」

『そうか？会話の内容までは聞こえないけど、随分と慕われてるようじゃないか』

「そういうもんか？あいつらも自立してるんだ、むしろ過保護に構われちゃ迷惑だろ」

パイロットに鼻で笑われるような音と一緒に朴念仁めと言われたのだが、それらはローガンの耳に届くことはなかった。

ババババンツ!!とヘリの機体表面に着弾したのである。

「な、なんだ!?!」

『くそつ、狙われてる!揺れるぞ、ローガン掴まれ!!』

パイロットに言われるがまま、ヘリ内部の天井付近にある取っ手を右手で掴む。そして外を見てみるとこちらから三十メートルの地表から撃っている何者かがいる。それは何なのかと思いい目を凝らすよりもヘリが動いて違うものを近くで見せてくれた。ミニガン、マシンガンといった重火器を持った鉄血——ストライカー——だった。それらがこちらに向かって絶えることのない銃撃を放っている。

『プロフェット、こちらブラックバード!シャドーの作戦開始位置に到達する前に襲撃

されています!!』

『ブラックバード!そこから高度を取って第二地点に向かえ!』

『了解……いやネガティブ!ダメだヘリの燃料タンクがやられてる!』

プーッ!という耳障りな警告音が絶え間なく響く。ローガンがコックピットの方を見てみると赤いランプが点滅していた。

鉄血からの銃撃も止まらない、このままでは完全に墜落してしまい作戦どころではなくなってしまう。ローガンは左腕の端末を操作、地形を確認する。そこで、予定されていた作戦開始地点ではないがヘリからのランディングが可能位置が見つかった。

『ブラックバード、そこから左手にある谷に高度を落とせ!ヘリが入るだけの幅もある!』

『あ、あそこにか!?だがそこに奴らは……!』

「大丈夫だ、UAVからの観測ではそこに連中はいない!急げ!!」

『迷ってる暇はない。彼の言う通りに!』

『ブラックバード、了解!』

グンッ!と遠心力がかかりヘリの高度が急激に落とされる。そして機体が水平になり始めたのと同時にローガンはハニーバジャーを掴んで扉を開けた。風が顔を叩いて目を細めるが地表だけは見据える。そして前進をやめ高度を落とし始め、地表まで三

メートル弱のところ、ローガンは飛び降りた。着地による衝撃を受け、身を取って受け流し周囲を確認。敵はいなかった。

「こっちはいいぞ！ブラックバード、急いで離脱しろ!!」

『すまない、ローガン！プロフェット、ブラックバードはこれより離脱します!』

『了解したブラックバード！テスラ、こちらプロフェット。損傷したヘリが鉄血兵の群れから離脱する。現在位置は——!』

ブラックバードが高く高度を上げて離脱するのを見送ったローガンは谷の陰の方へ向かって身を隠す。鉄血から見下ろされて見つからないようにする為だ。

「行くか——!」

短く気合を入れるように息を吐くと、壁伝いに谷を進んでいく。ハリーから書類と一緒に渡されたUSBメモリーには作戦区域を細かく記録したデータがあった。それを端末にいれたためどう動けばいいのかわかるとおおよその見当がつく。ストライカー達に見つからないことを祈りつつ、ローガンは慎重に進んでいった。

作戦区域となるエリアへ行くのにあたつて谷の壁をどう上るかを考えていなかったローガンは最初青ざめたのだが、谷の終わりが坂道となつていたため問題なかった。

坂道を上つて丘へと辿り着いたローガンは時間を確認。作戦区域に到着するのに予定時間から大幅に遅れてしまつていた。現在、P.M. 10:51。

「だあーもう、ちくしょうめ……」

やり場のないイライラを転がつていた小石にぶつけ、丘を滑り降りて進んでいく。

アメリカの首都と言われていたワシントンD.Cの一部の町並みは見る影もなく、道路は地震や鉄血兵との戦いや兵器による陥没や建物の倒壊などで酷いことになつていゝる。軍用車両も一般車も関係なく、もはや一目でわかるほどの廃車になつており無残な光景が広がつていた。

「こんなところに政府の連中は……」

生まれて初めて来る有名であった首都の光景に、ローガンは周囲を警戒しつつそう呟いた。

『シャドー、VIPからの連絡だよ。到着予定時刻になつても来ないから不安になつてゐる』

「できるだけ急いでいるつて伝えてくれ。遅れてるとはいえおちおち観光もできはしないな……つうか、プロフェット。聞いた話じゃここではアメリカ軍が見回りしてんだろ。ここに入るのに正式な手続きとかさういうのもそうなんだけどいいのかよ」

『政府がPMCの隊員を素直に通すと思うかい？今はもはや国内の治安維持はほとんどPMC頼りで国がすべきことの一つを放棄してるような状況だよ。向こうがこちらに頼つてるとはいえ、僕達にいい顔するとは思えないな』

「それもそうか……」

『それにワシントンD.C内で住んでいるのは昔で言うなら貴族や金持ち、富裕層の連中だ。他者の不幸に見向きもせず私腹を肥やしてる彼らと僕らが生きてる世界は違ふよ』

「……とにかく急ぐよ。帰ってからそこら辺は話そうや」

プロフェット、ハリーの台詞にある棘に触れないようにしつつローガンは身を屈める。一般車に隠れてパトロールをしている兵士達の視界を避けて本道から小道へと入

る。ワシントンD・Cに入る前からUAVを感知されないように回避させている為、ここからはローガンの端末に入っているマップ頼りである。

「おうおう、こいつは気を利かせてルートを表示してくれてるのはいいけど逆にごちゃごちゃしすぎてわからなくなってるぞ」

『昔のカーナビを思い出さない?』

「やめろ、最短距離ばかりにこだわって滅茶苦茶な道を表示するのを思い出す」

『くふふ、やめて笑かさないでよ』

「笑かすつもりもねえよ」

軽口をたたきながら進み、本道にまた出たりパトロールから身を隠したりしてようやくホワイトハウスが見えてくる。真つ白な屋根と真つ白な像と広い庭とかとか。周辺にライトや警備に当たっている兵士を影から顔を出して見てみる。

そこからさらにマップを拡大させ目的地となる建物を目視で確認する。

「……あれか?」

建物としては比較的綺麗な状態で残っている。黄色く細長いマンションで高さとしては十メートルはある。ホワイトハウスに近いこともあるため、ある程度の高い立場を獲得するまではここで寝泊まりしているのかもしれない。

建物内ではバジャーを脇に下げてあまり足音を立てないように気を付ける。P22

6も抜かずそつと歩いて上って行った。そうしていつて目的の三階に辿り着き、ローガンは部屋の番号を確認し『304』の部屋の前に来る。

「プロフェット、VIPはどんな感じだ？」

『大変おかんむりだよ。文句を言われるのを覚悟しておいた方が良さそう』

「……だよな」

到着時間はPM. 11:14。ここに来るのに最初の襲撃がなければもつと早くこれただろうが言い訳にはできそうにもない。

「いっちょよ、怒られますか」

呟き、扉をノックする。返事がないため再度ノック。しばらく待ったが何の応答もない。

「……おい、プロフェット」

『……なにかおかしいね。シャドー1、突入を許可する』

拳銃とナイフを抜いたローガンは扉をナイフを持った左手で開ける。キィ……と軋りを上げる扉から確認できる限りで罠の確認。なかつた為、部屋に入るとオレンジの壁紙に同色の床。奥にベッドがありそこに誰かが寝つ転がっているのが見えた。寝てるのか……?と思つたローガンは警戒を解かずに足を運ばせて絶句した。

VIP、アメリカの情報分析官は死に絶えていたのである。

「——プロフェット、VIPがやられてる！」

『なんだって!?!』

死体には触れず見た限りで検死を行う。死因は口径はわからないが頭部による銃殺だろう。だが即殺したのではなく、口元にタオルを噛ませていたことから何かを聞き出すようにしていたのかもしれない。それを証明するかのように両手首には強い力で押さえ付けられてたかのような圧痕が残っているが四肢にはロープなどで縛られていなかった。

「くそっ、なんでこんな……!」

そう歯噛みしていると、部屋に置かれている情報分析官の物と思われるノートPCの電源が起動し、見た顔が表示された。

『——お久しぶりね、ローガン』

「イントウルーダー……!」

そこに表示されたのは、数日前偵察任務でパネル越しに対話した鉄血のハイエンドモデル、『侵入者』のイントウルーダーであった。

『悪いけどそこにいた男は処分させてもらったわ。私達がやろうとすることに勘付き始めてたのだから』

「まさか、てめえ自身が」

『いえ、今回私は後方支援。別の方にやってもらったわよ』

「かわらねえよ。それよかてめえら、世界中を巻き込んででかいことをしようとしてるんじゃないのか？」

『あら、やつぱりあなた達は行き着いたのかしら？』

「国同士に不信感をさらに煽って何をしようとしていやがる……！」

そこまで言った途端、イントウルダーは笑い始めた。嘲るような笑いにローガンの青筋が浮き上がる。

『あなた達、まだそこまでしか行き着いてないのね……』

「……なんだと？」

『いいわ、教えてあげる。確かに私は不和にさらに不和を重ねるようなことをした。あなたが考えている通り、アメリカ陸軍基地にロシアを招き入れたのは私よ。ついでにあの屑どもにロシアの武器を流したのも私』

「てめえ……！」

『だけどまだ全部は教えてあげないわ。『鍵』であるこれが欲しければ——』

イントウルダーは一つのUSBメモリーを手に持ち、わかりやすいように振って見せた。

『——私の元にまで来てみなさい』

そう言い残し、ノートPCの画面はブラックアウトする。

毒づいて地団駄を踏んだローガンは、かすかに聞こえる電子音に気付いた。それは先程検死した情報分析官の死体から聞こえていて――

「……ああ、クソツッ!!」



爆発した火柱を双眼鏡で見ていた一人の戦術人形は笑う。まるで、古い友に再会出来ることを嬉しく思うかのように。

『また会えるんだね。楽しみだよ、ローガンっ♪』

9. 怠惰な指揮官 —Are you serious

?—

頭が揺れ、耳鳴りがする上に視界が歪んでいる。背中に響いている鈍痛が収まらないまま彼は立ち上がる。非常事態であるというのに、負傷しているというのに脳内のどこかでは暢気に一か月ほど前のことを思い出していた。

その時の彼は保護下にある部隊で野外の演習訓練に参加することになったのだが、当時の彼は自暴自棄になっていたため我が身のことなど顧みなかった。ペイント弾が装填された銃を持ち、走り、撃つ。たまには白兵戦になり取っ組み合う。配置されたチームの中で遊撃に出ていた彼だったが、その訓練中に不慮の事故に遭ったのである。

訓練といえど相手は戦術人形、純粋に力のみでの戦いになった場合、軍配が上がるのは彼女達の方だ。そのことが頭から抜け落ちていた彼は体得してははずの体術を使わずに勝負、そして負けたのである。それだけならまだよかった。問題は休憩を入れた後の別チームとの訓練であった。その訓練でも白兵戦でギリギリ負けた。しかしその勝負で熱くなっていた人形は、勢い余って彼を投げ飛ばしてしまったのである。具体的に言うのであれば、高さが五メートルはある高所からである。その投げた人形が気付い

た時にはもう時にすでに遅く、彼は落下。幸いそこに訓練用にどけていた木箱などが置いてあったことがあって命の危機に至ることはなかったがその場では騒然となった。訓練は当然中止、状況整理が始まったのである。

周りが慌ただしく動き回る中、彼は怪我の治療を受けてはいたものの無頓着であった。訓練中に何があつたのかの事実確認する指揮官達にも、自分を心配してくれている彼女達にも。訓練開始時から彼の異変に気づいていた一人の人形が彼に聞いた。「一体どうしたの」と。誰よりも気を使ってくれている彼女のいくつもの投げかけられた質問に彼は答えず、ずっと地面を見つめていた。やがて不満もイラつきも募ってきた彼女に彼はこう言つてしまった。「もう俺に関わらないでくれ」。

それを聞いた瞬間、彼女は彼の頬に平手を打つた。そしてありのまま自分の思いをぶつめた。「ふざけないで、いつまでも立ち止まっているんじゃないわよ」。その言葉の意味を悟つた彼も黙つておらず言い返した。「誰も頼んでいないのに近寄ってくるなよ」。そこからは口喧嘩だった。掴み合いや突き飛ばしもない、ただ言葉による罵り合い。周囲が二人の剣呑な雰囲気で各々進めていた作業を中断し彼らを見ていた。それもその筈、彼の方とはかく彼女はこれまであそこまでの感情を露にしたことがないのだから。ただ彼でも覚えているのは「人形のくせに、俺の事をわかつたふりをするんじゃない」。そう言つてから彼女と彼の溝は決定的になったことだった。そう言われた彼女は

一瞬呆然とした後、目に涙を浮かべて拳を握ると踵を返してどこかへ歩き去って行った。その小さな背中を見た彼も誰の呼びかけにも応じず反対方向に歩いていった。

あそこまで誰かと喧嘩をしたことなどないと彼も思う。そこまで、彼女のあの時の表情は印象的だった。

今になつてもなぜ彼女と喧嘩してしまったのか分からない。あそこで崩れてしまひそうだった自分の歯車を直してくれたのは彼女であつたというのに。

結果としては仲直りできたのだがその時の記憶がない。それは今、あの時感じていたほどの背中からの痛みを感じているからか、足元が覚束ないほどの吐き気を過去と同じように感じているからか、それとも彼女が泣いていたあの時の顔を思い出して胸が痛いからなのかはわからない。

ただ、わかることは一つだけ。

「死ぬるかよ、こんなところで……!」

帰った自分に「おかえり」と言ってくれる彼女の為に、生きて帰らなければならぬことだった。

— 〈ERROR〉 —

双眼鏡を仕舞い込んで自分が人間でないことで得ている脚力を存分に活かし、建物の屋根をパルクルのように伝つていく。タタタツと軽い足音を立てながら次へ、次へと。

「〜♪」

『ちよつと待つてよ、早いよ〜』

『そうね。こっちはそつちとは違つて地上の人間達に気を配らないとんだから走るペースを落としてもらえないかしら?』

「あら、ついてこれてるのは『9』だけかしら?」

「それでもギリギリだよ。もうちよつとテンションを落ち着けることはできないの?」

鼻歌混じりにハミングを挟み、いつもよりもハイペースで走っている彼女とチームメ

イト達は様々な感情を抱いていた。大雑把に言えば諦念、呆れ、期待である。

『急いでくれ！彼との通信が繋がらない！』

「わかっているわよ、そこまで急かさなくてもちやんと間に合わせるわ」

子供の頃とは違い男性らしく声変りをした『坊や』の声を無線機で聞きながらも走り幅跳びをする要領で爆発現場の方へ向かう。

サブマシンガンの戦術人形は他のタイプの人形よりも敏捷値が高いというデータがあるというが、現在の彼女の脚力は数値的なものだけでなく、データや数字では表せないなかでブーストされている。それは同じサブマシンガンの人形である『9』と呼ばれる茶髪の少女が証明している。

やがて同じ隊の者達を置いてけぼりにして到着した少女は、到達した廃墟の屋根の陰から見える範囲で現場を確認。事前に受け取っていたマンシヨンの三階の一室が爆破されたようで、ホワイトハウス周辺のアメリカ軍の兵士が集まってきている。なにかを言っているがさすがに全てまでは聞き取れないが――。

「……あら、どうやら死体はまだ見つかってないようね。兵士達は詳細が分かってないようよ」

『……そうか』

だがそれだけではわからない。今回表舞台に立っている特務の隊員が爆破によって

どうなっているかの判断ができない。

少女は目を閉じ現実世界においての感覚を断ち切り、クモの巣のようでそれよりも複雑になっていく世界に自分から伸ばした線を繋げる。そしてそこから仮想の自分を走らせて探した。各兵士のヘルメットに内蔵されているカメラ、無線、ステータス。カメラにはそれらしい人物は映っていない。無線は爆破が起こったことによる報告などしかない。ステータスは問題ない、誰も殺されたり気絶させられている様子はない。入手できる情報を探したがこれといった異変はない。

「でも死体が見つかってないだけで、どうなのかはわからないわね。G11、そろそろ見える位置について？」

『ついたけど……なにもないかな……』

『隊員の方からの無線の応答は未だにない……本当に痕跡はないのか?』

「焦らないの。『G11』、そのまま何かないか探して頂戴。『416』、『9』とそちらは無理のない程度に現場付近を探索」

指示を受け取った全員が了承し、行動に当たってる間も少女は再び電脳世界に接続開始。先程拾った情報のルートを総当たりで確かめてみる。すると思わぬ拾い物をする。

「……みつけた♪」

それは誰にも聞こえない眩きだった。獲物を見つけた肉食動物のような目になり、口

角もニタリと笑う形になる。しかし今はまだその時ではない。メインディッシュは後から味わいながらゆつくりと食べるものだ。

その情報は確かに収穫であり、今回の作戦では意味がある物だ。その情報を彼に引き渡すのもいいが、それではあまり意味がない。腕を上げたかどうかを近くで確かめるのもいいだろう。

『45』、聞こえる?』

チームメイトからの通信が入り、自分のいる世界が現実引き戻される。

「ええ、聞こえてるわよ。なに、416?」

『マンシヨンの裏手の方で調査を始めた兵士がつい先ほど凹んだような廃車があるとか言ってたわよ』

「凹んでる廃車?」

『うん。なんだか爆発した一室の窓に面しているマンシヨンの裏手の方にあるんだけど、なんだか不自然な感じなんだって』

『それとこつちに來てくれるかしら、ちよつと気になるのがあるのよ』

「……わかつたわ、とりあえず私もそつちに向かうから」

わかつたよくという陽気な声を聞く前に屋根から飛び出しマンシヨンの裏手に回り込むとお馴染みの顔の二人が物陰から覗き込んでいるのが見えた。たしかに彼女達の

視線の先には車体のボンネットが大きく凹んでいる廃車がある。フロントガラスも割れており辺りに欠片が散乱している。

「……たしかにあるわね」

「廃車なんてどこにでもある物だからあまり変わり映えしないとは思っただけだね。でも私が気になるのはこっち」

416と呼ばれる銀髪の少女が灰色の髪の少女に一つのワツペンを渡す。ファツションとしてお洒落な服につけることがあるが、戦場では所属する隊を表す。『45』と呼ばれる少女が見てみると今まで見たことのない模様が刻まれていた。黒い縁取りに囲まれた藍色の布地に前足と頭などの上半身が黒い影から出てきている蒼い狼が描かれている。所々焼けてしまっているため分かりにくいだが、横から見たその狼の模様の下にグリフィンの隊で事を示すマークが刻まれている。

「へえ……なかなか面白いのを見つけたじゃない」

「このへんのアメリカ軍の物でも鉄血の物でもない、全く見たことのないものよね」
「焼けた状態のこれがここにあるってことは間違いないわね」

これがマンションの裏手の方にあつたということは、特務に割り当てられた隊員は生きてはいる筈だ。そうなる裏手の方に他に何か、と45が視線を巡らせると道路のアスファルトにわかりにくい血痕が見つかったのである。

「『坊や』、報告よ。負傷はしているようだけどお探しの隊員は生きてはいるわ」

『そうか……!』

「ただ、現場付近に残ってる血痕からすると重傷ほどじゃなくても治療は必要よ。出血量も少なくはないわ」

「わかった、とりあえずこちらからは回収のへりを向かわせる。そちらは——!』

「悪いけど、ここからはあなたの指示に従うつもりはないわよ?」

「自分が『坊や』と呼ぶ男性にそう口を挟む。途端に嬉しそうであった彼の声色は一気に沈んだものになった。

『……どういう意味だ?』

「そのままの意味よ。作戦の方は私達が引き継ぐけど隊員の方は私達で好きに処断させてもらおうわよ?」

『ふざけるな! まだ生きているというのに殺すつもりなのか君らは!』

「ふざけるなはこつちの台詞よ。急な作戦の立案と実行に、情報の管理が甘かったからVIPの位置情報も漏れたんじゃないかしら? それに『坊や』、あなたを私は『指揮官』として認めてないわよ。私が『指揮官』として認めていたのはあなたの父親、あの人がねんだから」

『な、に……!』

そう言う彼女の瞳は鋭い。声色も氷を連想させる冷たい色へとなっていく。

「それにあなた、大事そうに言ってるけど今回の隊員のことを軽んじているんじゃないかしら？もし唯一無二であれば、VIPの事情を無視してでももう一人パートナーをつけるべきよ。なんで一人でやらせたの？」

『それは……！』

「まあいいわ。それとさつきは好きに処断するとか言っただけど、あなたのお友達、『ローガン』は私達がもうからうからね」

『なっ、何を言ってるんだ!?!それに彼の情報をどこで……！』

「これに関しては仕方ないわね。彼とは昔色々あったから。特徴と経歴を少し教えてもらったらピンと来たのよ。……私達全員ね」

45が横の方を見ると、満面の笑みを浮かべる9とポーカーフェイスで感情を悟らせないようになっているものの、血痕のあとをずっと見つめている416がいる。遠方から見ているG11も満更でもないはずだ。

「あなたが十分に配慮しなかったせいで今回の死にかけた筈よ。急な依頼だからどうしたものかとも思っただけど案の定。作戦内容もガバガバなのも仕方ないわ。そんな体たらくじゃあなたのもとにいる人形達も可哀想ね」

『……っ！』

「ぐうの音もないわよね。とにかく、私達『404小隊』があとは片をつけるわ。最初に言われた報酬も不要よ、ローガンがもらえるのだからね」

『ま、待て——！』

何かを言われる前に無線を遮断。彼から、『プロフェット』とも呼ばれる男『ハリークロスハート』との回線を断ち逆探知による追跡を完全に封じた。

「……いいの？あんなこと言っちゃって」

「別にいいんじゃないかしら。正直な話、私はあいつのこと嫌いだし。表面は優しいそうなの面をしているのに内側は中身のないスッカスカなんだから」

「ううわ、416ってば手厳しい〜」

『……でも安全な家がなくなっちゃった』

「家なんて必要ないでしょ。あそこにはもう私達は戻らない。重要なのは——」

息を大きく吸って、吐く。体の中に溜まっていた、捨てきれなかったものを完全に投棄するように。

「——ここからよ。『404小隊』、行くわよ」

隊長『UMP45』の号令に、『UMP9』『HK416』『G11』は従った。目的は一人の隊員の奪取とここ、ワシントンD.Cに潜む鉄血の排除。

『Task Force 404 Not Found』。それが人形達の間では都

市伝説と呼ばれる彼女達の隊の名前であった。

——〈ERROR〉——

血痕を追い続けていると次第に地下駐車場に入った。G11を除いた三人でそこに侵入し探索を始める。中は明かりも何もないためフラッシュライトを点けての探索となった。

「さてさて、狼さんこつちだろつてね」

9がご機嫌そうにそう言いながら進んでいく。三人で視覚を無くすように各自百二十度の視界を警戒するフォーメーションで固まって移動する。

地下駐車場には決められたスペースに車が駐車されている。中には使えるものがあ

るかもしれないが、それは詳しく調べてみないと分からないだろう。

「そういえば9、あなたの家族は何人なの？ 気に入った人がいれば全員にそう言ってる気がするんだけど」

「ん〜と、404全員と指揮官にローガン、あとは……あれ？」

「あれって何？ 忘れたの？」

「そうじゃなくってさ、思えばそこまで私はそこまで家族だつて思った人はいないんじゃないかなつて思ったの」

「そんなことあるはずないでしょ。大体今日からみんな家族だとか言つてたじゃない」

そこで9曰く、彼女は家族だと思つた人間や人形は家族とは思うが自分達はその気に入った人の方に溶け込むのではなく、その人物をこちら側に引き込むという意味で家族だと思つているのだという。実際のところ404小隊という小隊が存在することを確認できるのは人間のみで、人形の方は彼女達とそのメンタルモデルを破壊するかそれとも書き換えを行うかしている為、彼女達の存在を知る物は限られている。そのため、ローガンなど覚えていられる人間は『家族』として9に認定されるのである。

「とはいつても、ボスは違うかな。どちらかという『友達』だよ」

「もう一方は何？」

『『知り合い』』

「……なんとも辛口ね」

「二人とも、話をするのはいいけど集中して頂戴。鉄血を潰す前にローガンを見つけないくちや」

416と9の会話に耳を傾けてはいたものの、参加しなかった45が注意する。再び作戦行動に意識を戻した二人に後方を任せ、部隊内の無線の電源を入れた。

「G11、出入り口の方は何の変化もなし?」

『なにもないよ。むしろ暇になって眠たく……ふああ』

「そこで寝ないでね、今回の私はいつも以上にマジよ。もし寝たら……わかってるわね?」

『ふあ……45がこわい……』

半ば脅しに近いよう台詞を聞いたG11は眠そうにしながらも45からの指示に従うようにそう返した。

足元の血痕を辿って時間がそれなりに経っている。ここまでで血痕自体は点々と残されておりそれを追っていくのはそう難しくはない。問題なのはアメリカ軍である。先程の爆発により慌ただしく動き始めており消火活動なども始めたため表の道を簡単に移動できなかつたのだ。だがそれでもやり過ぎ、必要になれば気絶に留めて進んでいってここに辿り着いた。しかしそれもここで終わる。

「血痕が消えてる……」

フラッシュライトに照らされている地面で点々としていた血痕は消えており、その先にはもう何もない。辺りに照らしてみても目的としている青年はいなかった。

血痕がここで途切れている、しかもここは出入り口が一つしかない地下駐車場……と考へ付いたときは45は気付いた。

「トラップ!」

叫んだ45の言葉に反応した二人との間に何か投げられる。カンツと音を立てて一回バウンドしたそれは9が隊の中で一番よく知る物だった。

「フラッシュバン!!」

そう聞こえ始めた瞬間には45も416も行動が早かった。すぐに身を翻し炸裂する閃光から目を守る。しかし目は守れても耳、聴覚までは防衛しきれなかった。

耳鳴りを起こし聴覚モジュールの機能が一時不能になった45だったが、すぐに状況確認を隠れた物陰から行う。9と416は離れてはいるが無事だ。自分もそうだが、彼女達はフラッシュバンが投げられてきたと思われる方向を警戒している。しかし一向に銃撃は来ず、聴覚が回復して周囲の物音が聞こえるようになってきた。

怖気づいたのかと思つた瞬間だった。

『出入り口で動き。スモークグレネードが投げられたよ』

はっと見てみると、スモークの一部がこちらにも流れている。

「さっきのフラッシュは罠だね……!」

「警戒しなさい。まだなにかあるかもしれないわよ」

二人がそちらに走っていく中で45はついていきながら考えていた。本当に?と。

たしかにフラッシュを投げて内部にいる自分達を攪乱させて拍子抜けさせている間に自分は出入り口にスモークを展開して逃げる。生存を重視している悪くない戦法だと思う。だがこれで終わりなのだろうか。

「Gー、出入り口に変化は!」

『ううん、ない。スモークがずっと舞っているだけで特にこれと言って……』

未だに出入り口側に動きがない……私達がこちら側に引き付けられた。そうか、これは――!

45が気付いた瞬間、二つ目のフラッシュバンが投げ込まれる。出入り口に寄ったことで最後尾になった45の背後から。

バンツ!と再び閃光が炸裂し、聴覚はダウン、完全に視界が白く塗りつぶされる。だが45は最後尾でギリギリ反応できたため被害を受けず、先程まで自分達がいた方向へと振り返る。そこで走っていた彼は一瞬驚いた表情を浮かべたが45との格闘戦に応じた。短い間に繰り出される無数の拳と蹴りの応酬を時折受けながらも多くを流した

彼は45の腕を掴み脇の下から投げ飛ばすように動いた。しかし45も負けてはいない。

投げ飛ばされずに右足を先に着地させてから左足をつけるような、車輪のように一回転して着地した彼女はすかさず猫のようにしなやかに動き、彼の首を絞め始める。苦悶の声を漏らした彼だったが、すぐさま立て直して引きはがして投げ飛ばす。この背負い投げには抵抗できなかったが、すぐに受け身を取って衝撃を緩和し距離を取ったことで銃を構えようとした。しかし視線を上げた時にはもう時すでに遅く、彼はもう拳銃を抜いてこちらに向けていた。

「……惜しかったな、45」

「……そうね、ここは私の負けね」

一対一の勝負による敗北であったが、素直に称賛する彼の台詞に彼女は笑顔になった。だがこれは彼女一人だけの勝負ではない。

「でも今回は私一人ではないわよ?」

「……まあたしかに。その点では俺の負けだな」

自分の背後から9と416に銃を突き付けられていることを感じ取った彼は拳銃を床に置き、両手を上げて降参のポーズを取った。それだけで十分だった。

「わ〜い、久しぶり〜!」

9は彼が怪我人であることを忘れていいのか飛びつき猫のように頬ずりしており、「あの戦術を一人でやるなんてね。その体でやってのけるなんてあなた人間やめてるんじゃない?」

416は自分が何もできなかったことに若干憤りがあるようだが探し相手が無事なことに安堵しており、

『終わったの?じゃあそつちにいつていいよね?久々に撫でてもらいながら寝させて欲しいな……』

無線越しに気だるげでありながらもルンルン気分であることを窺わせる声色のG1はこちらに合流するために移動を始めた。

「にしてもよくここがわかったな……」

「あなたが血を流しながらここに来たからよ。目が良ければ追跡することは可能だったわ」

「そういうことか……やつちまったかなあ」

45も銃のセーフティを掛け彼の元に歩み寄る。近くに来てみればわかるが、前に出会った七年前よりだいぶ大人びた容姿になっている。顔も整っている方なので男らしくなっていると思えるが、それを額に貼られている絆創膏や頬のすり傷が減点している。それでも、45にはどうでもよかった。

「久しぶりね、ローガンっ♪」

「……ああ、元気にしてたか。45」

正直なところ、今でも体は楽ではない。

爆風を受けて窓から外に放り出されたローガンは背中を打ちつけ、額から血を流すほかにも数ヶ所に火傷を負っていた。それに九死に一生を得たものの落下による衝撃で気分も何もかもが悪かった為歩くのもままならなかった。それでも足を引きずり人気がないところまで来ると緊急時の為の応急キットを取り出し簡易的な処置を行った。

切り傷などには消毒してから絆創膏を貼り、火傷には軟膏を塗る。打撲による痛みはとうにもならない為、最終的な処置として効き目の長い鎮痛剤を打ちしばらく体を休めていたのである。そこで足音が聞こえたため身を隠して様子を窺ってたところ、知ってる顔ぶれが来てたので腕試しを兼ねて404小隊に挑んだのだった。

「それにしても、後々のことは考えなかったの？惜しむことなさそうにスモークとフラッシュを使ったけど」

416がさらにローガンの傷を治す為、自分が持っていた治療キットを展開し彼の背中に出ている痣などに適切な処置を行っていく。普段であれば人間に使うとしかできないそれは存在すら忘れられている状態だったのだが未だに彼女が持っていたのはほとんど奇跡である。

再会してからは爆発現場からも離れている裏路地の方に皆で移動している。ローガンの治療が終わるまでは45は彼の傍に、9とG11は周囲に誰もよらないように

「後の事なんざ後々にしかわからないだろ。そんなことを考えて今死んだらしようもないじゃんか」

「使える物はそこで全て使つても生き残るといふことね？でもそれでも死んでしまうことこそしようもなくなる？」

「それでもだよ。その時はその時で仕方ないとは思うけど俺はできる限りの抵抗をする

さ。頭数で勝てないなら策で、策で勝てないなら意表を突くための心理で、心理で勝てないなら技と力で。前に言っただろ？」

「呆れた。あなたやっぱり早死にするわよ」

「よく言われるよ」

いつもはポーカーフェイスを崩さない416もローガンの言うことに苦笑している。彼も治療による痛みで少々表情を歪めてはいたが笑っていた。

やがて治療が終わり、傷だらけだった上半身に着ていた上着とベストを着用したローガンは自分の戦闘服で無くなっている物に気付いた。

「あっちゃあ、ワッペンが無くなっちゃまってら……」

「そのワッペンってこれでしょ？」

45が得意げに先程拾った暗色のワッペンをひらひらとローガンの目の前でチラつかせる。最近になってようやく見慣れてきた自分の部隊章がなぜ45に持ってかれてるのか疑問に思ったが、すぐにさっきの爆破によるものと察した。

「ああ、それだよ……んで、なんだよその顔」

返してもらおうと思ったローガンだったが、意味ありげな顔になっている45に気付いた為、受け取るように手を出すようなことはしなかった。すぐになにかあると悟った彼に彼女はニッコリと笑い本題を切り出した。

「ねえ、ローガン。404小隊に、私達と一緒に来て」

「……理由は？」

「ん？色々とあるけど、一番の理由としては今のグリフィンが気に入らないからってのかな」

「こてん、と首を傾げた彼女に可愛げがあるとは思いますが口になっている台詞がそれを打ち消す。表情も悪気もない子供のような無邪気な笑顔のままである。

「今の指揮官の座にいるあの子、頑張っているようで頑張っていないんだよ。仕事はしてはいるけど、『それ以上の事』をしようとしなないの」

「『それ以上の事』？にしてもその口ぶりからすると昔から知っているような感じだな」
「うん、子供の頃からね」

昔のことを45は語った。

ハリーが指揮官につく前はとある平凡な家庭の息子だった。母は病気ですでに他界、父親はとあるPMCの指揮官であった。今と変わらない傭兵のように活動している404小隊の危機を救ってからは自分の支部に受け入れ、彼女達の生還も重点に置きつつ、迅速かつ冷静な指揮を行っていたという。そんな彼に、彼女達も信頼を寄せた。

だが彼女達にもできないことというのもある。作戦中に鉄血による電撃作戦で主力

部隊が全部隊出払っているタイミングで奇襲され彼は息絶えてしまった。その彼の跡を継ぐようにハリーは指揮官になった。先代の息子である彼に初めは彼女達も少しは期待していた。だが事務仕事をしていても、作戦の指揮をしていても結果がある程度出せても、次で『それ以上』の結果を出そうとしなかつたのである。本人に聞いても素知らぬ顔であつたという。

「今でも思うけど、ふざけるなつて思つたわ。自分の他にできることがあることがわかつているのにやろうとしない、やる気を見せないことに」

「……だから、戻つたのか」

「ええ、また皆で404小隊として。あなたと出会つたのもそれぐらいの時期よ」

こうして時が経つてから再開するとローガンでも思い出す。

当時は偵察任務の分隊の隊員として作戦行動に当たつていたのだが、奇襲により部隊は散り散りになり、ローガンも弾薬をすべて使い切つた状態で作戦行動を遂行していた。廃ホテルを通過して警戒しながら歩いていた45は同じく単独行動していた彼に接触。その時は45にとってお互いに関わらない方がいいと思つたのだが、そうも言つていられなくなつた。

「あの時は世にも珍しい戦車がうろついていたなあ——」

「中にいたのは新しいおもちゃを見つけた子供のような鉄血の乗組員だつたけどね。運

転も手探りで何とか覚えただけのアマチュアだったわ」

「それで、流れて奴をお前と一緒に片付けた。それで終わりかと思いきや……」

「今度は私を除いた404全員が捕虜にされていて処分されそうになってた。そうよね、416?」

「やめて頂戴。あなたと同じように私も荒れてたんだから」

そこからは416も知っている話だ。膝をつけて並ばされてあとは背後から撃たれそうになるところにスモークが投げ入れられ、二人が救出に来たのである。ローガンもそこに仲間達がいるかもしれないと思い、45と共同戦線を組んだのだが全ては無駄に終わったのである。彼女の仲間は助かったが、彼のはそうはならなかった。

それから五人は別れた。ローガンはその時所属していた部隊に、45は仲間達と共に。

「俺が何かしてやれたか?その時に。45、お前達が俺をスカウトするなんざそうそうないどころか一切なかっただろ」

「まあそうね。私達の存在は公の舞台に、明るみにされない。でもあの頃はともかく、今のあなたは影に潜む狼どころかゴーストそのものよ。そんなあなたと私達、違いはそんなに多くあるかしら?」

違いはそんなにない。人間かそうではないかではなく、ローガンの『シャドー隊』は

グリフィン所属の隠密特殊部隊ということになっている。しかし彼も知っている通り、グリフィンというのは戦術人形を主流に依頼を遂行するPMCである。そんな彼らが自分を表舞台に立たせることはあるだろうか。いや、ないだろう。まだ自分はシャドー1として今回で二度目の任務になるが、交戦する騒ぎを直接引き起こすのは禁止されてはいないが、基本控えるように言われている。それは人間であるローガンに対しての配慮なのかもしれないが、場合によっては派手に銃を撃つことになっても仕方ないこともある。

「あなたにも鉄血と正面から戦えるだけの力がある。それは私達も知っている。だけど彼らはそれを認めない。戦える力があつても拘束されて表舞台に立てないことが共通している、それがまず一つの理由」

「……まあたしかにそうだし納得できるな」

実際そうだ。ローガンもただ単に相手が友軍だから、情報が不足していて味方かどうかの判別が出来ていないから。それらの理由で拘束されてしまうのなら致し方ないと思う。だが彼も『できるだけ派手に戦うな』と理由もなしに言われるのは少々不満に思うこともある。ローガンも自分が人間であることも踏まえて敵を可能な限り隠密に、騒ぎを起こすことなく倒してきている。権限を与えるだのなんだの言われているのに、これでは本当にそうなのかどうかもわからない。

「二つ目はさつき言ったことにも少し絡むけど、あなた自身の実力よ」
「俺の？」

「ええ。さつきの駐車場では手持ちにある装備を瞬時に良い方向で扱っている。私はそこまで戦闘に特化してないけど、格闘戦も難なくこなして見せた。それにあなた、ここに一人で来たのよね？あの子はやっていることはロクでなしだけど、見る目は確かだわ。情報収集能力は私が教えたものだけど、人形や人の持つスキルを見極める才能は元から備わっていたの。そんなあの子があなたを一人で送り出したということは、実力は信頼されているのね」

「おいおい、あいつの人柄を擁護するつもりはないけど、プライベートでも絡んでいる俺達に信頼関係がないみたいない方じゃないかそれ」

「単に私の主観を言っているだけよ。そこまでのことは知らないわ」

「ごもつともである。彼女であればローガンとハリーの友人としての仲を知ることが出来るかもしれないが、ここではそのことを引つ張つても仕方ないだろう。」

「それとこれは私にとつて一番大切な理由だけど——」

そこでお互いに壁に背中を預けて向かい合つて話していた状態から45の方からずいっと顔を寄せてくる。途端に左目に傷はあるものの整った顔立ちと硝煙が立ち上る戦場には似つかわしくない少女らしい香りがくるため、ローガンの心臓は跳ねた。そこ

で小さな唇が紡いだ言葉は——

「——私があなたに興味があるからよ」

「……俺に？」

「だって鉄血と単独でも互角以上に戦える人間になってそうそうお目にかからないもの。今の兵士たちはツーマンセル以上で戦うのが鉄板じゃない。それなのに恐れずにここまで一人で来たのだから、私はあなたを知りたいのよ」

「……なんか最後の理由だけが拍子抜けなんだが」

「そう言わないでよ、ローガン。これからワシントンD・Cに潜んでる鉄血を叩くんだから」

ワシントンD・Cに潜む鉄血、そう聞いたローガンの目に炎がともったのを45は見逃さなかった。

「さつき私が言ったことに対する返答は保留としておいてあげる。今はまず、奴らを早く叩こうと思うんだけど——」

クルリと回ってローガンから距離を離し、前倒しに腰を持って行き両手を後ろ手に組んだ少女は金色の瞳を輝かせた。

「——どうする？」

ローガンの返答は、言うまでもなかった。

10. 悲憤の人形 — You guys are no

t b a d —

今でもあの時のことは鮮明に思い出すことはできるはずなのに、なぜ忘れてしまっているのだろうか。あれだけのことをしてしまったのだから無意識に記憶に蓋をしているのかどうかなのかも定かじやない。

ただ、行ってきますといえは「行ってらっしゃい」と、ただいまといえは「おかえり」と言ってくれる温かさ。それを感じられるのが久々で無くしたくないと思える。ベタで当たり障りもない理由なのかもしれないが、それでもかまわない。

だからあいつへの返答もどうなのかは、もう既に決まっている。

ワシントンD・C内には政府の役人たちの力を借りずに強く生きようとする人達がいる。それはグリフィンの管理地区外の人達も同じではあるが、自分達で防衛の術を考え、物資を調達し、施設内の設備をよい物へ変えようとしていく。グリフィンとは違う方法で、立場で人々に手を差し伸べていく人達がいるのは、かつてグラッドに属していたローガンもよく知っている。その成果が他ではあまり見ないUAVやドローンである。だがあれは性格の悪い元貴族の司令官がスポンサーだったからっていう癪に障る事実があったからだ。

その民生施設の一つが以前停電し明かりだけでなく電源に接続している機器が完全にダウンし騒然となっていた時期があったのだが最近復旧したのだという。それだけならまだただの変哲もない報告だ。45が掴んだ獲物の尻尾はそこからだ。

その施設に運び込まれる物資に他にはない物が混ざっている。例えば、戦術人形に使われる関節オイル。グリフィンにいる人形や404小隊の45達、そして鉄血のイントゥルーダーのようなハイエンドモデルを筆頭とした連中にも三か月に一回程度、定期

的に給油管を通じ補給をしなければならぬもの一つだ。関節オイルを使用するのは戦術人形の者達のみ。発電機の燃料として使うことはできない為、人形やロボットを持たない彼らが代用として他に使えるだけの用途はないといえる。それなのに、なぜ運び込まれているのか。

あくまでこれに鉄血が絡んでいるというのは45、彼女の勘だ。電子の海の、電腦世界にないだけでその民生施設に関節オイルを必要とするロボットがいるのかもしれない。それでも入手ルートを簡単に確保することが出来ない物資を運び入れられているそこを疑わずにはいられない。

数十分前に45が話した自身の考察を頭の中で反芻しつつ、入手した位置を双眼鏡で見してみる。一見すれば不要になったコンテナで防衛壁を築き、そこに銃を持った民間人達が見張りを行っていた。

「G11、目標の方だがそつちからはどう見える？俺からすれば黒に近いグレーだと思うんだが」

「うん……夜間の作業とかもしてたりするけど、全部手作業だね。それに人間以外見当たらない」

やはり、とG11と共にローガンも思った。彼女の言う通り、たしかに地上で仕事をしている民間人達はすべて自分の手で行っている。それに作業用のロボットも人間以

外いない。

「となればやることは一つ……準備はどうだ？」

『あともう少しだよ。それと、そろそろ予想ルートに最後の物資回収班が通ると思うんだけど416、そっちは？』

『ええ、今しがたルート上に物資を落とさせて確認したわ。45の言う通り、関節オイルがあるわね。それも大量によ』

45と9は内部への潜入の為の準備、416は事実確認の為最後の巡回を終えてオイルを運んでいた軍用トラックを襲撃・無殺生で確認したところあったのだった。

上っていた建物の屋上から二人で一緒に降りたローガンは駆け足で416の元に向かう。G11は45達との行動の為別れた。言われたところに向かうと、彼女は少々本道からでは見つけにくい細道にトラックを移動させていた。近寄ったローガンに彼女は荷台から一丁の銃器を放り投げた。受け取って見てみると、バレルからストックまでカーキ色の銃身に大きなドラム型の弾倉、取り付けられているホロサイト以外の色が統一されているM32グレネードランチャーだった。

「たまには、派手に暴れたいでしょ？」

「兵士とか以前に男としてもそれは素直に思うよ」

ウインクする416からグレネード弾も受け取り装填、セーフティをかけて背中に背

負う。それからローガンは顔半分を覆うスカルマスクで口元を覆った。

作戦ブリーフィングを45から受けた後に、ローガンはグリフィンとの通信ができないようにするために無線機を調整されたのだが、そのついでのように404小隊からの贈り物ということでスカルマスクをもらったのである。そのマスク自体はM4の持っているのとあまり変わらないように見えるのだが、明らかに手描きによるものだということが窺えるものだった。ふいつと顔を背ける45にその時のローガンは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「さて、こっちの準備は済んだわ9。45のターミナルへの侵入は済んだ？」

『うん、そのようだよ。あとはそっちが指定されたポイントに向かってくれればいつでもいけるよ』

コンテナによる防衛壁を伝っていくと、施設外周のとある一角に銃器のようでそうではない、発射口にフックが取り付けられている機器が置いてある。上を見上げれば先に乗ったであろうG11が手を振っていた。

「フックショットなんてよくあつたな」

『ん、さつき9が置いていった』

『ここに来る前にちよつとね。アメリカ兵士からちよろまかしたんだ』

「いつからお前、そこまで手癖悪くなったんだよ」

416がこちらの腰に両手を回したところでローガンはフックショットをコンテナ上部に発射。バシユンツ！とフックが飛んでいき、安全に引つかかったことを示すランブが赤から緑色に変わったことで巻き上げが作動。二人でコンテナ防壁の上について一望できる位置についてみると、中はとても広く住居スペースや農畜スペースなど分かりやすく区切られている。特筆すべきものが、訓練エリアだろう。グリフィンの訓練場に負けておらず、全面砂と土ではあるが射撃の的となるターゲットも揃えられておりよつほどの内容の演習を求めなければ文句ないものだった。

「配置についたわ、45」

『了解。あとはローガン、そっちの端末でいつでもできるわよ』

ローガンが自分の端末を操作してみると、先程まではなかったメニューが追加されている。だがご丁寧に『ブラックアウト』と分かりやすくなっているため特に困ることはなかった。

「そんじゃ始めよう、404小隊」

『了解』

各応答を聞いたローガンは停電ボタンをタッチした途端、目前に広がる施設の電源が全て落ちて全体に闇が満ちる。内部で見回りをしていた民間人が慌てた様子で状況確認などを始めた。

『停電したけど監視カメラの方は無事。非常電源で作動しているわ、操作はこっちのものだけ』

「オーケー。そんじゃこっちは行動開始する。G11は敵のスポット、416は俺とだ」
「うん、わかった」

「ええ、行きましょう」

段々となつているコンテナを降りていき、目の前の農畜の倉庫から調査を開始。

45が内部のカメラを操作し不審な動きがないかを監視、その間無防備になつている彼女を9が防衛。G11が施設全体の敵の動きを見て内部で直接探索を行うローガンと416に知らせることになつている。自分達が探すのは鉄血に繋がるものの証拠の確保、ならびにその追跡である。そう、ローガン達の最終的な狙いはこのワシントンD.C内に潜んでいるかもしれないイントウルダーの排除だった。

ローガンがイントウルダーからの間接的な置き土産をもらう前に、彼女は自分の役割を『後方支援』と言つていた。実行は誰かに任せて自分はそれを誰かを援護したことになるが、それだけではこのワシントンD.C内にいることの証明にはならない。だが一つ、彼女はローガンに自分はここにいることを証明することにもなる行動をしていた。

イントウルダーを映した画面の電源が落ちる直前、『鍵』と呼んでいたUSBメモリーをちらつかせていたのである。そして最後の台詞の『私の元にまで来てみなさい』。

これでイントウルルーダーがアメリカの首都に潜伏していることが考えられる。

そしてもう一つ。もしこの民間人が鉄血と繋がっているのだとしたら、それはローガンとしても腸が煮えくり返るような経験の繰り返しである。以前潜入したとある地域の民兵達のように最後には利用されて捨てられ皆殺しにされてしまうかもしれない。これもイントウルルーダーがローガンにわかるようにわざと残してしまいかもしれない。考えられるが、ここの施設の者達はあの民兵達のように自分達の仲間を殺していない。ならば過ちを犯す前に食い止めることもできるはずだ。

もちろん、ここまででも可能性の話だ。彼女が遠く離れたところから自分に接触したことも十分に考えられる。しかし少なくともここで動けば実行犯である鉄血兵を逃さないで済むことは確かだ。

このことを聞いた404小隊は不確実なことなので渋るかどローガンは思っていたのだが、予想に反してやる気を出し始めたため拍子抜けであった。

「室内はクリア。特に怪しい物もなし」

「よし、次だ」

そして現在、農畜、装備、器具などの倉庫を順々に探索していった先に突入した416の報告を聞いたローガンは端末を操作し展開されている地図にマークを入れる。この地図は45とリンクしているため、彼女達への情報の伝達が早い。

『気を付けて、行く先の広場に人影が三つ。なんかわからないけど装置の前で作業をしている』

『まずいわね、そこは施設全体の電力装置よ。復旧作業が終わったら一気にやりにくくなるわ』

「ならやることは決まったな」

G11のスポット、そして監視カメラを使って詳しく何をしているのかを報告する45のおかげでこの後の行動が決まる。

件の三人を確認しローガンは416にハンドサインでわざと物音を立てるように指示。傾いた彼女は近くの木造の建築物の壁を叩いて物音を出した。次第に大きくなってきた足音が二人分であることを確認した416は叩いた建物の屋根に上る。そして一人を飛び降りた勢いのまま気絶させると同時に、ローガンも動いてもう一人をCCCで壁に投げつけ眠らせた。その物音で作業で残っていた最後の一人も近づいてきたところを首を絞めて中断してもらった。

「G11、他に人影は？」

『ん、問題なし。近くにもう誰もいないよ』

『ついでに言うとな全体的にも気が付かれてないわね。カメラでも確認できるわ』

彼らを近くの無人の建物に押し込め、再び作戦続行。くまなく探索をしていく。しか

し例の関節オイルなど、戦術人形のメンテナン스에に必要な物資が備品の倉庫にある以外に特にこれといったものが見つかることがなかった。

「何も見つからないわね……当てが外れたのかしら」

『どうする？ なるもここにならないんじやこれ以上は……』

「……いや、そうでもないさ」

『ローガン？』

以前のことを思い出す。停戦を取り消すとイントウルダーが言ったあの直後、大量の鉄血兵がどこから出てきたのかが目に浮かんでくる。撤退するために回収班までの元へと走っていた時にダメ押しとばかりに自分の見える範囲でマンホールが三度外され蟲のように出てきた。しかしこの周辺は地面が砂と土による地域だ。アスファルトの下に下水道がある地区ではない。

「なあ、お前ら。もしここの連中が鉄血に繋がってたとしたらどうやって奴らに関節オイルを運んでいると思う？」

『それは陸路による運送になるんじや？』

「その通りだ。だけど中身が詰まったドラム缶のあれを人が手で運ぶには手間がかかり過ぎだ。となると、乗り物に頼る必要があるよな？」

ローガンは近くにいる416に笑いかけた。

「行くぞ、416。こここのトラックだ。片っ端から調べてやろう」

「なんでここを調べることが思いつかなかったのかしら……」

「まあ俺も最終的には……てな感じではなかったから誰も悪くねえよ」

運転席を調べてみれば案の定、メモ書きのような地図があった。位置はワシントン D. C の住宅街を赤のバツ印で示しており、メモ書きの端には『重要！』といったような注意書きがある。

「45、プラン変更だ」

『そうね。近くまでさつき416が停めたトラックで向かえる?』

「少し遠回りにはなるがいけないことはなさそうだ。G11、そのトラックは誰かに持たてられてたりするか?」

『ううん、大丈夫。誰にも触れられてないよ』

「んじや俺達はそつちに戻る。少し本道に寄せといてくれ」

『9、たしかさつきバイクを鹵獲してなかった?』

『うん。押さえ切れなくなつた緊急時の為に二台ね』

『なら大丈夫ね。私達も向かうから現地で集合しましょう、ローガン』

「了解」

通信を終え、メモ書きの地図を手に侵入したのと同じ経路で施設内部から脱出、さきにG11が垂らしていたロープで防壁を降りて戻ると道端に移動させてあるトラックの助手席でG11が待っていた。

「ここはあんたが運転するものじゃないの……?」

「やだよ……眠いし事故つたらやだもん……」

「……相変わらずだな、お前」

「それにこうすればローガンに膝枕で寝れるもん……着いたら起こして……」

「やれやれ……」

最初はローガンが運転しようと思ったのだが、気を利かせて416が運転席に乗り込んだ。そうになると、ローガンは二人に挟まれた位置に入りG11の枕となるのである。コテンツと猫のように丸くなった彼女はほんの数秒で寝息を立て始める。仕方ないのでメモ書きを渡して運転を416に任せ、頭を撫でながら束の間の休息に体を休めた。

「それにしても、お前達なにもかわってないな」

「それって良い意味で？それとも悪い意味？」

「どっちもって言った方がいいか？こうしている時もそうだけど、さっきの探索の時もそうさ。9の援護による45の支援、狙撃と観測をして知らせるG11、そんでお手本の様なクリアリングをするお前」

「もちろんよ、私は完璧なんだから」

昔であれば無表情でそういうだけだったが、今隣に彼女は胸を張り得意げな顔になっている。取っ付きやすくなったこれに関しては良い方向の変化なのだろう。

「あなたはどうかの？」

「俺は……どうかな。あの時と比べれば技術的な面であれば成長しているとは思うけど、精神面は……」

「人間は歳を食えば考えが多少変わるわ。私達に見た目の変化はないけど、精神的に変

化は起こす。それならあなたもかわってるわよ」

「そういうもんか……」

歳月人を待たず、ということわざがある。意味は年月は人の都合を一切待たずに過ぎていくものなので一時でも大切にしろというものだ。そこから考えると、自分は時間というものに対して無頓着かつ臆病だったと思う。作戦開始時間とかそういうものではなく、これまでは過去の柵から振り返るのが怖くなつてたからだ。それでも、前よりは幾分は楽になつてはいる。

「まあグリフィンに来てからは、良い意味で変わったかな……」

「……グリフィンで？」

「まあ、色々とあつたんだが……ちよつと長くなるけど聞くか？」

「ある程度かいつまんで頂戴」

一カ月ほど前までの、自分がグリフィンに来るまでのことを話した。グランドでの作戦のこと、AR小隊、ハンター、そしてその時まで相棒だった男。時間としてはさして長くはないが、416は時折相槌をうち、基本は黙ってローガンの話を聞いていた。

「……そう、そんなことがあつたのね。私達も楽ではない道を通ってきたけど、あなたが通ってきたのも茨どころか先の見通しがつかない茂みを歩いてたという事よね」

「まあ、そうかもしれないな。それに、こんな時代じゃ誰かが死ぬのを飽きるまで見させ

られる。それじゃいつの日か誰かを殺すのにも何の躊躇いもなくなってしまうそうだ」
「それで、あなたはあいつと会ったという事？」

「あのままグランドにいたんじや、色々と危うかったしな。精神的にも大分参ってたよ。
んな時にハリーに、グリフィンに保護されてグランドからは完全に足を洗ったよ」

「……あなたとつて、あいつはどんな奴？」

「昔のことを知らない俺の意見じや、お前からすれば不快かもしれないがそれでもいいか？」

横目で416の方を見てみると彼女はこちらに視線を向けた後、すぐに前方に戻して頷いた。

「……昼間から茶番を見せつける、色々と腹黒いわけだから人の重要書類を燃やそうとする、わりとひどい無茶ぶりをする、酒癖も悪いとかもあるよ」

でも、と続ける。

「あんなになつてた俺にとことん付き合ってくれたんだ。だから、今のあいつが努力も何もしないつてことはないと思う」

「……もしかしたら、そう思わせるためのブラフなのかもしれないのよ？」

「それでもだよ。あいつが悪人であるなら、俺があいつらを助けに行く際に支援を惜しまないことを間接的に約束することはなかっただろうさ。もしそうだとしても最終的

には引きずってでもグラランドに返さずグリフィンの基地に連れ帰っただろうしな。だからあいつのことは信じれるよ」

「よくそんなことが恥ずかしげもなく言えるわね。羞恥心というのが備わってないのかしら」

「恥ずかしいに決まってるんだろ、言わせるな恥ずかしい」

ピシヤリと言いつ返されたことに416は笑い、顔を少し赤くしたローガンを見てさらに笑った。

「あなたがそんなこと言うのなら、私は信じれるわ。あいつのことは嫌いだけど」

「さいでか」

「でも勘違いしないで。私が信じるのはあいつを信じてるあなたよ」

それに、と416は続ける。

「45にとつて、あいつは指揮官の形見のような存在。そんな大切に思ってたものに裏切られたのだからちよつとやそつとじゃ揺るがないわよ」

「なんで俺があいつらの喧嘩の仲介人をやるようになってんだよ」

「あなたも薄々は気付いてるんじゃない？ 通信機をグリフィンと連絡できなくされたときだよ」

「……なにかあったんじゃないかと思っただけど、やっぱりそうだったのか」

「簡単に言えば、昔のことを根に持った腹いせよ。まあ半分はそうでももう半分は違うだろうけど」

「……どういいう意味だよ」

さあね、と416はすまし顔でトラックを駐車する。気付けば目的地に到着しており、既にバイクから下りて偵察を済ませたらしい45と9がこちらに手を振っていた。

メモに従って到着したところはワシントンD.C.の中でも荒れ具合はまだトラックが運転できる道が残っている程度に軽微であり、地面の陥没がないと言える。首都の住宅街ということで高級なものとなっているようで建物の損害も道路と同じようにほとんどない。ただし、ここが鉄血に巢食われていること影響しているせいか人の気配がなかった。

まだ寝ていたいと愚図るG11を起こし、ローガンは一旦下ろしていたバジャーとグレネードランチャーを持ってトラックから下りた。

「準備は？」

「もう済んでるわ。目標は廃校となつている建物。ローガンは私と9と一緒に敵地を襲撃、416はG11と外から援護と監視よ」

投げ渡されたナイトビジョンゴーグルを受けとりそれをニット帽越しに頭に取り付ける。まだ発砲はしていないが改めてバジャーの弾倉と内部の点検、グレネードラン

チャーとP226も済ませたローガンに9はトトトツと近づいた。

「ねえローガン、私達と本当の家族にならないの？」

『『お前も家族だ』だとかぬかしてファミパンかましたことがある奴が今更何言ってるだ』

「それについては謝ったじゃん。あの時は相互利益の為じゃなく45姉を一方的に利用していたと思ってんだよ〜」

「どうだかな」

頬を膨らませる9にローガンは笑いながら頭を撫で、バジヤーのチャージハンドルをガシヤリツと引いた。無論、あの時顔面に食らわされたパンチは痛かった為忘れてはいないがいつまでもそのことで寝に持っているわけではない。あくまで思い出として記憶しているだけだ。

「……ねえ、ローガン。45姉は私よりもっとローガンに来て欲しいと思うんだ」

今45は416とG11とは別行動になる為、別れる前にここまでで得た情報を共有している。それに隠れてひそひそ声のような、音量を大分落としたささやき声でローガンに9は話す。

「たぶん、45姉は今でも404以外の誰かも信じられるようにもなりたいんだと思うの。普通の、グリフィンの人形達みたいに」

「ハリーの父親みたいな人を、か？でもそれは……」

「うん、そんな人はいない。似たような人格の人はいても、全く同じ人は絶対ないよ。それは45姉もわかってる筈」

ローガンが現地入りした際には曇った空の雲は消え、瞬くような無数の星が光っている。そこに9は祈るように、そして本当に欲しいと渴望しているようにして夜空に手を伸ばし『でもね』と続ける。

「願わずにはいられないんだよ。私達は影の存在、人形達の間での都市伝説でしかない。そのようになっているのは404としていいことなんだろうけど、私自身はそう思わない。だって指揮官といたあの基地での居心地はよかつたんだもん」

404小隊としての人形の自分と、グリフィンの人形としての自分。その二極のどちらがいいのかというと後者だとUMP9という戦術人形は言う。安心できずいつ死んでもおかしくない戦場と温かい食事と寝床がある基地。仕事を終えたローガンでも帰るのなら絶対後者だ、それ以外にありえない。ローガンも自分が殺されようとしているのであればその前にその敵を躊躇なく撃つ、そう即答できる。それと同じようなものだ。

「だからさ、45姉はローガンに縋りたいんだよ。せめてあの指揮官のように信頼に足るだけでもいいから人間と、普通の人形のように生きたいんだ」

「404小隊ではない誰かを信じ、普通の人形のように、か……」

「うん。昔の私も45姉もこんなことを考えなかったよ。あそこで、グリフィンにいて考え方が変わった。それはあの子と喧嘩別れになった今でも変わらないよ」

掲げていた片手をおろし、9はローガンに身を寄せる。その行為自体に特別な意味はないだろうが、彼女自身も誰かを必要としているかのようだった。

「だから……お願いだよ、ローガン。45姉を助けて。きつと今でもあの子と喧嘩したことの後悔してる」

当時のグリフィン所属の人形達、AR小隊や404小隊も相当精神的に追い込まれていたに違いない。AR小隊の彼女達は危機に間に合わず彼の死に立ち会い涙を流した。404小隊も指揮官の死を知り、涙しつつも息子であるハリーに期待した。しかし思っていた結果は得られず、彼もまた父親の死に追い込まれていたであろうハリーを糾弾した。それを後に冷静になった彼女達はどう思ったのかはローガンにはわからない。

45達と初めて会ったあの頃、彼女達の戦っている様は戦術人形ではなく荒ぶる肉食動物のようであった。銃を撃って戦いはするものの、空になった弾倉をリロードするのではなくわざわざ走り寄ってナイフや拳で殺していた。彼女達の事情に首を突っ込むべきではない、そう判断して訳を当時聞かなかったのだが誰かの死に、信頼していた誰かを失ったことを嘆いていたのであればわからなくはない。

なぜなら――。

「……9、45を、皆を呼んでくれ」

もしこのまま鉄血の元に行つて自分がやられたとしたら、後になつて生き残つた彼女達に何の意味も残せないだろう。

「とりあえずさ、お前ら休んだらどうだよ。ちと雑談もしてさ」

素つ頓狂なことを言い始めたローガンに45やG11、416も『はあ?』といった顔になる。当たり前である。今回の目的はイントゥルーダーの追跡、あわよくば撃退で

ある。せめて彼女がいなかったとしても実行犯の鉄血を捕えることを目標としている。要は時間との勝負だ。それを一番承知している筈の当人が突然『まったりと休め』と言われたらそんな反応になる。

「なに馬鹿なことを言ってるのよ。今回の鉄血のポンコツを潰すことに一番こだわってるのはあなたじゃない」

「ついに頭がおかしくなっちゃった……?」

「いやいやまさか。天下の『狼王ロボ』様がそんなはずないでしょ、仮にも単独でここに誰にも気づかれずに潜りこんで見せたのよ。そんな人が頭の中がくるくるパーになる筈はないでしょ、ねえ?」

……416の最後の煽りに若干イラアとしたのはここだけの秘密である。

「まーまー、とりあえずここまで来ればデカイ動きがあれば嫌でも伝わってくるだろう。俺やG11はともかく、三人は少し休息を入れたらどうだ」

「え、私まだ寝れるから休憩必要だよ?むしろ今すぐにでも寝てしまおうくらいだから必要なんだけど」

「さつきトラックで涎垂らして俺のズボン濡らしてたんだからお前に反論権はない」

「……ぐすん」

「寝ては駄目だけど、話を聞くだけだから起きてるよ」

G11がすとんと腰を下ろし、9もローガンの隣で座るが残りの二人は違う。45は訝しそうにローガンを見ており、新しいおもちゃがもらえたような顔をしている。416はニヤニヤしている。

「とは言つても、俺が少し話をするだけだからお前らは聞いてるだけでいい」

バジャーの内蔵サイレンサーを左手で掴み、ストックを地面につけて自分も瓦礫を椅子にして座る。ふーっと溜息を吐いて未だに腰を落ち着けない二人を無視して話を始めた。

話の内容としてはなんてことのない、一人の男の話だ。生まれは忘れたが幼少期に両親を亡くし、十代前半になつてからは少年兵としてナイフのみを持って走り回つた日々から話は始まる。鉄血や人を平気で殺す同じ人間の悪党を殺しまわつていくが死なずに生き残つてしまい、二十代半ばにまで歳の数値は増えていった。

本題としてはそれからだ。夏に入つてからの偵察任務で人形達の小隊に出会つた。彼女達と出会つてその翌日、その人形達の迎えに来たヘリが鉄血によつて落とされたため男は相棒と共に救出に向かつた。その作戦の結果としては成功、人形達は一人も欠けることなく終わらせることが出来たのである。ただし、その男の相棒は帰つてこなくなつた。それで男は過去のトラウマも合わさつて悲しみに暮れて荒れてしまい、後々に保護という形で移送してくれた組織で彼は問題を起こしてしまう。それは、自分に手を

差し伸べてくれた人形を払ってしまったことである。その人形と喧嘩してしまった彼はそのことも合わさって睡眠不良・食欲不振に陥ってしまう。

自室に引きこもって陽の光に怯える毎日。そんなある日、組織の指導者はこう言った。『死にたいのなら死ねばいい。結局は自分の命なんだから使い方と終わらせ方は自由だ。ただし、それで自分を生かしてくれた人達の意味を無かったことにしてもいいならね』。結局は自殺をするなら構わないからやっつけていいよというものだ。だがその男の幼少期を生かしてくれた両親、戦い方ではなく生き方と言って教えて親身になってくれた教官、そして歴代の相棒達による自分への命のリレー。全てなかったことに、意味がない、無駄なことにはできないと男はそう叫んだ。指導者は『ならやるべきこととはわかってるだろ?』と言ってその場から去った。

「そこからは男は喧嘩していた人形との仲直りを終えて、誰かの為にも、元の生活に戻るように戦い始めるのです。ちゃんちゃん」

気付けば45も416も真剣な顔をして黙って聞いていた。G11は俯いてはいたものの眠りに落ちているのではなく、話の中であつた指導者の台詞を反芻していたようだった。9は静かに涙を流してローガンの上着の袖を握っていた。

「なんでこんな話をしたのか分かるか、45?」

立ち上がり45の顔を見る。彼女は信じられないものを見ているような表情を浮か

べていた。

「たしかにお前が過去に対して抱えている後悔と憤怒はごもつともだよ。でもそれをいつまでもそのままにしていけないわけではないんだよ」

「……何を言いたいの」

震えるような、それでもなんとか絞り出したような声を漏らすローガンははつきりと告げた。

「ハリーともう一度話せよ。それも今度はちゃんと面を合わせてな」

「ふざけないでー」

ガンツという鈍い音が辺りに響く。45が気付くと、自分は戦術人形としての腕力を発揮した拳をローガンに放っていたがそれをローガンは片手で受け止めていた。

「なにをふざけるんだよ。ていうかそれは俺の台詞だ。色々と理由を並べてはいるけど、結局は俺をお前らの喧嘩に巻き込んだんじゃないやねえか」

握った拳を横に払われた45は数歩後退し呆然としたがギリリツと歯を食いしばると顔を上げて叫んだ。

「あなたが、あんたなんか私達を知った気になってんじゃないわよ！裏の世界にすることが私達よりも短いあんたが神様を気取るなんて大間違いに決まってるでしょうが

!!」

「……たしかにそうだな」

「それにもう一度顔を合わせて話せつて？ できるわけないでしょ！ 私はあんな口クでなしを捨てたんだから！」

「なんでだよ。お前はあいつの何が気に入らなかつたんだ？」

「全てよ全て！ 普段の生活態度が几帳面でしつかりしていきすぎてうるさいところとか！ 決められた休憩時間よりも長く休んでたら注意してくるところとか！ 仕事をやっていゝる時は誰かにちよつかいを出されても怒らないところとか……！」

「それで、他には？」

「私が教えた情報収集を卒なくこなして見せたところとか、辛いことがあつても顔に出さないようにしているところとか、慣れないことでも徐々にできるように努力をしているところとか……」

止まらない。彼女の吐き出すハリーへの不満点は止まることを知らない。やがて――

「趣味にしているスポーツがテニスだとか……考え始めた時に無意識にする癖とか……笑った時の顔が指揮官に似ていて……！」

――涙と共に、ハリーを先代指揮官と重ねてしまっていた自分の過ちを口にし始める。まるで、自分で自分にナイフを突き立てるかのよう。

「あの人の息子だから当たり前なのに、おかしくないのに……みんな、みんな……指揮官と比べてしまっていて……私は……！」

「……もういい、45」

路頭に迷った幼子のように泣き始めた45の肩に両手を伸せると、彼女はよろけてローガンの方へと額を彼の胸元へと当てる。そして手をローガンの背中に片手を、もう片方はベストの端を掴んだ。ローガンの方も頭を片手で撫でてやりながら背中に手を回す。彼女の体は思ったよりも華奢でか細かった。

「お前も気付いてたんだろ、自分がハリーに八つ当たりしてしまってたんだって。だつたら答えは簡単だ。これまでのことをちゃんと謝ってしまおう」

「でも……でも……私はもつと酷いことを言ってしまったって……あいつが許してくれるわけ……！」

「なら俺も謝ってやるさ。誰にだって過ちはあるもんだ。人つてのはそういうのをやってしまつても、やられてしまつてもそういうのを積み重ねて大きくなっていくもんだ」

「ローガン……！」

「心配するな。今のお前は俺とは違って一人じゃないだろ」

彼女が泣きながらも周りを見渡せば、長年共に戦ってきた友人たちがいる。彼女達は涙を流しながらも笑みを浮かべ、やれやれと呆れているようでもなく肩を竦め、無表情

ではあるが意思を感じさせる瞳を有しながらもローガンの台詞に頷いた。それを見た彼女はさらに悲しみによるものではない涙を流す。

「ごめん、なさい……ローガン、ごめんなさい……!」

「今はそれでいい。少しずつ、撒いてしまった種を回収してしまおう、な?」

「うん……うん……!」

それからも彼女は、45はしばらく泣き続けた。小隊のリーダーとして流せなかつた分だけでなく、自分が積み重ねてしまっていたものによる重みからようやく軽くなれたことで痛みから逃れられた子供のよう。

11. ノックダウン・アサルト — We will
not lose to you —

—〈To Griffin from Shadow 1〉—

『ローガン、ローガンなのか!』

『ああ、俺だよハリー。何とか生きてる。404小隊の連中も一緒にいるよ』

『それで……君は?』

『連中から熱烈なスカウトを受けたけど、今のところは保留中。それよりも奴らを追う必要があるしな』

『うん……』

『時間がない、手短に言うぞ。俺は404と一緒にワシントンD.Cの奴らの根城を襲撃する。潜入じゃなく、派手にな』

『……そうか、わかった。こちらからは何か必要なものはある?』

『依頼がもうなかったものになった以上、航空支援もなにも頼めない状態だ。俺達でやるよ、なんとかする』

『了解、こつちからはそこから南に回収班を向かわせとく。生きて帰ってきてくれよ』

『そうしてくれ。それと、お前も一緒に来いよ。……あいつらとお前の昔のことを聞いた』

『……っ！そう、か』

『ハリー、今更起こってしまいましたことだし俺はそれについては攻めはしない。だけど、いつまでも子供のように放ったからしにするな』

『わかっている、わかっているんだよ……。あの頃の僕も色々と自分の殻に閉じこもってしまっていて……』

『気持ちはわかるよ。でも404、45はお前に謝りたいって言ったんだ。なら、お前も来い。顔を合わせてお互いに頭を下げろよ』

『……そうするよ。今更でどんな顔をすればいいのか分からないけどね』

『だろうな。とりあえず俺も行動を起こすよ』

『……早めに頼むよ。それと君も謝ることを覚悟しておいた方がいいよ？』

『なんでだよ？』

『AR15がね、眠れなかったから僕のとこに来ただけど色々とあたふたしてるタイ

ミングで……』

『……なんでさ』

『誤魔化そうにも誤魔化せなかったよ。彼女も君と一切できないということとでそれで察

しちやつて大急ぎで準備、ダミーを置いて出撃しちやつた』

『勘弁してくれよ……』

『たぶん回線が復旧したわけだから45が直してくれたんだらうけど、AR15からも通信が入るだろうね。彼女がまたいじらなければ、だけど』

『……それなら大丈夫だ。あいつはもうこつちの機器については手出ししないとよ』

『ならこつちから伝達はいつでもできそうだね』

『ああ。そんじゃ、あとでな』

『うん。生きて帰ってきてくれよ』

—〈Shut down〉—

416が渡してくれたM32グレネードランチャーだが、本体については前に作られた型と同じでとくに変わったところはない。ただし、込める弾薬の方は違う。今回使用する榴弾は通常のグレネード弾としての機能はもちろん果たすが、弾着したところに張

り付きこちらが操作するまでは爆発しないというものである。ベースプラグを覆うようにあるジェルのような感触のボタンを押すとランプが点滅し起爆待機モードになる。

その赤い弾による爆弾を作成したローガンは端末を操作しトラックの運転を自動運転に。

「さて、と……」

そう呟き、廃校の方に視線を向ける。これからの行く先は校門、見回りなどを行っている鉄血の群れだ。そして自動操縦にしたトラック。これらがあることからこれからやることなど明確だろう。

その前に、とローガンは上着の胸ポケットに手を入れて携帯端末を引っ張り出す。無線機の方に有線接続を行い番号を選択、コールする。してからほんの数秒で相手は応答した。

『ローガン!?!』

「よう、AR15。そっちは今どこにいるんだ?」

『今は西から向かっているけど……あなたは……ていうか無事なの!?!』

「ピンピンシテルヨ」

『なんかその返し方には腹が立つけどいいわ……よかった、あなたが無事で』

安堵の息を漏らしたことが無線越しにでもわかる。電話をかけた相手、AR15の声

を聞いたローガンも『やれやれ』と肩を竦めた。

ここまで自分を心配してくれたのだ、嬉しくないはずがない。だがおそらく彼女はハリーの制止を振り切ってきているだろう。PMCのグリフィンではわからないが、軍隊なら無断出撃で懲罰ものだ。

「とにかく今からドンパチ始めるよ。お前も急げば間に合うかもな」

『ま、待つて！あなた一人で始めるつもりなの!?』

「んなわけないだろ。バックアップ要員、生きる都市伝説様と一緒にだ」

近くにいる45にサインを送る。頷いた彼女は無線を使って404全員に準備完了の旨を伝達した。

「デカイ一戦になると思う。ここからは必要な情報伝達以外は受け付けられないから、先にお前に伝えておこうと思つてな」

『話は指揮官から聞いたわ。ハイエンドモデルの、『鉄血の『侵入者』と接触したつて』

「ああ、ここまでやってくれた奴だ。いるんだとしたら逃がすわけにはいかない。それきつと『オアシス』についても何か知ってるかもしれないしな」

『……そうね。あれから一カ月経つし、何かの情報がそろそろ欲しいわよね』

『アッシュ』、『パンドラ』、そして『オアシス』。これらについての存在はまだAR15としか共有していない。いずれはハリー達にもするつもりだが、まだきつとその時では

ない。今回のことでわかったが、イントウルルーダーはグリフィンからも情報を盗むだけのパスを用意していた。そうなると、鉄血の誰でもこちらから先手を取るだけの手段を残していると思えられる。そうなれば完全に安全が確認されるまでは下手に喋ることはできない。

「だからよ、早く来い。その時は全て終わっているだろうけど、お前さんの援護が一番安心できる」

『話を逸らさないでよ……でもそういうこと言われると嬉しいわね』

「事実だしな。とにかくこっちは先に始める。合流出来次第来てくれ」

了解、と残し彼女との通話は切れる。再び収納していた箇所にも携帯端末をしまい銃を持って走ろうと構えようとしたところで、ふくれっ面の45がそこにいた。

「なんだよ?」

「……今の、誰と話してたの」

「……グリフィンの友人といえればそれでいいか?」

「それでも今の言ったことに納得がいかないわよ。私達の力が足りないっていうの?」
「援護が安心できるっていうのに不満なのか?それでもお前さん方の力不足には繋がらないだろ」

「そうじゃないのに……もう!」

ふいつと頬を膨らませたまま45は背中を見ただけでも腹を立てているのがわかるが、ローガンにはどういう意味なのかは分からない。首を傾げる彼に9は苦笑いである。

「やゝい、鈍感男〜」

「なんなんだよ、お前ら……」

そう思いつつも416とG11と打ち合わせている時間が迫ってきているので、端末を操作して目標としている校門の方へと走り出させる。エンジンがかかったトラックは大量の爆薬を積んで走り出す。

「416、パッケージを動かした。手筈通り起爆のタイミングはそつちに任せるぞー!」

『了解よ、地上の雑魚はこつちで引き受ける。あなたたちは存分に暴れなさい!』

すぐにバイクの方に向かう。45が後部の方で待機している方に跨り始動させるとブオオオオオンツ!!と低いエンジン音が響く。彼女がこちらの方に両手を回したことを確認したローガンはもう一台を運転する9に目配せし、彼女の方も準備ができたことを知るとアクセル全開で前進させる。

すぐに速度が上昇するため、先行させているトラックの後方十メートルほど距離を置きついていく形をとると同時に車両の方に気付いた鉄血兵たちが発砲し始める。

『G11、撃って!!』

『了解、撃つよ……!』

奴らが気付くのが予想より早かったことから、G11が数体に遠距離狙撃で発砲し頭部を抉ったことでトラックへの損害は軽微で済む。校門にトラックが突っ込んだら、そこはもう416の起爆範囲である。

『起爆!』

ドオオオオオオオオオッ!!とトラックに積んでいた予備燃料などがグレネード弾によつて爆破され、巨大な火花が上がる。爆風は鉄血兵を巻き込み、燃やし、吹き飛ばし、ある物は付近にあった鉄パイプの金型に突き刺さるなど二次被害が発生する。

『いいわよ、ローガン!』

「了解。行くぞ45、9!」

「ええ!」

「うん!」

二人の返答を聞くと同時にバイクのエンジンが唸りをあげ発進する。時速七十キロにまで一気に加速させ爆風によつて流れてきた煙の中に突っ込んだ。抜ければそこは校舎前の広場であるがそこを一気に突き抜ける。階段横のスロープを一気に駆け上がりそこで倒れている鉄血兵をジャンプ台にして廃校の二階へと車輪から突入した。着地させたローガンはバイクをすぐに安定させ横滑りするようにして停止。

「45!」

「9、前に出るわよ!ローガンは援護と後方警戒を!」

「ラジャー!」

バイクから降りた二人が先行し呆気にとられ動きが鈍くなっているリーパーを自分の銃で倒していく。ローガンもバジヤーをストラップで下げ二人の反対方向にいる敵の群れにグレネードランチャーを発砲する。ボンツボンツボンツ!と絶え間なく三発発射し数体を吹き飛ばす。突入した箇所は連絡通路のような狭い廊下なので一気に来れる鉄血の量も大体は限られるため見える範囲での鉄血兵はほとんどいない。あとはちまちまとくるヴェスピドをバジヤーで排除していった。

「ローガン、前進するわ!」

「了解だ。後ろはクリア、そのまま行け!」

「フラッシュバン、いくよ!」

曲がり角で待っているであろう敵を警戒し9が閃光手榴弾を投擲、効果があったようで45と共に左右のどちらの方にも銃撃を行う。

『全体で動き有り。奴ら校舎の方に向かうだけでなく裏手の運動場にも行ってるわね。そっちの方を確認するからG11、ここは任せるわよ』

『うん。ローガン、校舎内にドラグーンが向かってる。何体かは倒したけど全ては駄目

だったから気を付けて」

「了解だ。45、9!」

二人も了解したとサムズアップをし、前方の敵を倒していく。

そこからは交戦しつつの探索だった。西と東の方角も関係なく教室や倉庫、体育館なども徹底的にしらみつぶしで探していく。だが目標のイントウルダーは見つかっていない。ドラグーンやストライカーなどの雑魚の鉄血兵の中では厄介な敵はいても対処はできなくはない為、スモークグレネードでゲリラ戦、フラッシュバンで視界を潰して襲撃するなどして対処していった。

そして運動場に向かった416から連絡が入る。

『くっそ……全員聞いて! グラウンドで目標発見! 奴らも撤退準備してただけけどまだ必要なものを運びきれてないわ! こっちは足止め食らって動けない!』

「了解よ! ローガン、悪いけど行つてくれる? 数が多いのであればあなたのグレネードランチャーが必要よ。G11、こっちはいいから416の援護に行つて!」

「任せろ!」

『わかった!』

二人と別れたローガンは416がいるという廃校の外周に繋がっており、運動場にあと一步で到達できるような中庭に向かう。二階廊下を伝つて見下ろすと、G11が先

に合流したらしく416とともに鉄血兵と交戦している。さらに数が多い上に厄介なことが起こっていた。

そこにいるのは装甲持ちで通常の弾薬を中々通さない鉄血兵の部隊であったのである。イージス、ニーラム、さらにはマンティコアがそこでじりじりと二人の方へと距離を詰めていた。

「やべえ……！」

考える暇もなくローガンは背負っているM32を持つと迷わず発射。二人に最短で距離を詰めていたイージスを排除する。

「二人とも、少し待て！こっちでできる限り敵の数を減らす！」

言いつつローガンはもう使えない榴弾を捨て新たに込める。屋内での戦闘では序盤以外に使わなかったが、グレネード弾の数はあまりない。今新たに六発を装填したが残っているグレネード弾はもうないのである。

マンティコアを一旦無視し、装甲兵のイージスと移動砲台のニーラムに向かって全弾発射。ダンツダンツ!!と最後に発射したグレネード弾で複数のニーラムを吹き飛ばしたローガンは、そこでマンティコアの注意を引いてしまったことによりやく気付いた。

『ローガン!!』

二人が自分の名を叫んだのが聞こえたが応える余裕なんてない。すぐさまM32を捨て、奥の方へと逃げようとしたが榴弾砲がローガンと外を隔てていた校舎の壁を破壊しそれで生んだ爆風と瓦礫で彼を蹂躪する。幸い直撃は受けずに済んだものの、至近弾で衝撃を受けたため背後の方へ吹き飛ばされる。扉を背中で破り、バウンドしながら反対側の壁へと激突する。数時間前に416から治療を受けたとはいえ完治したわけではない。それがローガンにただでは済まない痛みを齎す。

『……！』
『……！！』

「うっ、が……！」

背中からの痛みが最高潮になり、ローガンは声を漏らしながらもじっと耐えるしかなかった。痛みを緩和するための鎮痛剤が充填されている注射器を足に挿すことさえ思いつかない。視界が赤く、黒く点滅し意識を失いそうになるが堪えているとようやく脳から生み出されたアドレナリンが全身に回りある程度動けるようになってきた。

凹みが出来ている壁に背中を預け、太ももに注射器を挿す。背中の痛みが徐々に和らいでいくのを感じながら、自分はまだ戦えるかを確認。

「ローガンー！」

息を切らしてG11が先に入ってくる。その手には416から持たされたであろう

治療キットがあった。

「41……6、は？」

「大丈夫、マンティコアを二人で倒したら416がこれでローガンを治療しろって……！」

「先に45達の方に行つた……てことか……」

すぐにG11が治療を開始する。あまりの苦痛に確認できていなかったが、ローガンは背中を強打しただけでなく頭や腕、足の方からも出血していた。刺さっている木片を取り除き、消毒してから包帯を巻くなどしてそれぞれでできるだけの処置を行った。

「……んな泣きそうな顔すんなよ、G11」

「でも……私がつと……」

「どんな実力や技術を持つてしたつて、身近であつても助けられる奴もそうじゃない奴もやっぱりいるもんさ」

理不尽なことというのは生きていくうえで必ず起こる。生きている歳月が増えていけばそれに比例して数は大きくなりもするし、感じる憤りも例外ではない。どんな努力をしたつて、完全になくなるわけではない。

それに自分に降りかかる物でなく近くにいる他人にくるものだったら尚更である。

「それにお前が悪いわけじゃない。あんなヤバさビンビンの奴を一時とはいえ無視した

俺が全部悪いさ」

「え、無視してたの？それはさすがに馬鹿じゃない？」

「お前、落ち込んでたんじやないのかよ。俺の気遣いを返せ」

「馬鹿に付ける薬はないっていうけど、治療キットになにかないのかな。金槌で叩けば直るかもしれないけど」

『『なおる』って字が違う気がする！いや金槌とか言ってる時点でそうなんだろうけど俺は壊れたテレビじゃねえぞ！』

「あ、そうだった。ローガンは人間だった」

「そうだよ!?お前らとは違って俺は人間！金属部品で体は——！」

そこでローガンは頭に浮かんでいた台詞が霧散していった。代わりに浮かんだのは、彼女とのあの時。酷いと自分でも思うほどあんなことを言った後日、目を腫らした彼女に自分は何を言ったのか。

「……ローガン？」

「……なんでもない、大丈夫だ。それよりもさつきと終わらせよう」

ごめんなさい、ありがとう。そんな何気ない台詞ではあるがいざ意識して言うときになると気恥ずかしくなつて口から出てくるのが難しくなつてしまう。だから、同じことにならないように今のうちに言っておこう。

「ありがとな、G11。もう大丈夫だ」

そこに込められている意味は複数ある。それをG11が全て受け取れたわけではないが変化の乏しい無表情で頷いた。

爆発音、銃声が派手にローガンの背中の方から聞こえてくる。痛みを堪えながら立ち上がり、窓を開けてベランダから外に出る。

ベランダが運動場に面していたためすぐに状況が見渡せた。45、9、416が既に戦闘を開始しており、鉄血が貨物輸送か何かで置いていたと思われるコンテナの裏に隠れ反撃の機会を窺っている。

「三人が見えてるぞ、そっちは今どうなってる!?!」

『現在見ての通り鉄血の結集部隊と交戦中! だけどストライカーの連射がヤバイわ!』

「G11、お前はここから狙え! 俺は前線に行く!」

『ローガン、あなたは怪我が……!』

「こんなんで動けなくなるようじゃ俺はとつくの昔に野垂れ死んでるさ!」

ベランダの手摺を乗り越えて地面に着地する前に受け身を取る。受け身を取る際に前転するため痛みが走るがそれを無視し鉄血の部隊の横側へと走っていく。

「こっちは回り込んで奴らを叩く! G11、援護を頼む!」

『うん!』

ダイナゲートが押し寄せてくるが撃つて、蹴り飛ばし、飛びかかってくるのであればナイフで突き刺した。

そうしながらバジヤーの射撃モードをフルオートに切り替えたローガンは鉄血の部隊の背後へと走る。そして裏に回ったところで出し惜しみせずに弾をばら撒いて隊列を組んでいるストライカーをスクラップにした。

「45、そつちはいいぞ！こつちはG11と一緒に……！」

遊撃に出るといふ台詞は出てこなかった。視界に映ったのは急に上からそれはやってきた。跳躍して来たそれは、ニイと笑みを浮かべるとこちらの側頭部を殴りにかかると。辛うじて反応できたローガンは身を屈めて避け、バジヤーの銃床で殴り掛かったが、それを軽い身のこなしで躲される。そして至近距離であったため視界に入りきらなかったその鉄血の武装が目に入る。

「ガトリング……!?!」

似てはいるが正解ではない。いや、正しく言うのであればアサルトライフルと合成した見ることのない銃器だ。ガトリングのマガジンが下部に、ライフルのマガジンが上部に来ており人間やI. O. Pの戦術人形が使うような武器であることは確かだ。

ガッ……!と音を立ててガトリングのバレルが回転を始める。すぐにローガンはバジヤーでカウンターに出ようとするが間に合わない。自分が構えて発砲するよりも先

に奴が自分をひき肉にする方が早いだらう。

しかし、今回は一人で戦っているのではない。

『ローガン！』

ベランダから放たれた銃弾がその鉄血の肩に命中、回転し始めていたガトリングの狙いが逸れて地面を抉る。その鉄血も予想外のことであったため一瞬何があつたのか分からぬ顔をしていたが、また口角を上げてローガンに向けて発砲しようとする。

「させるかよー！」

すぐにローガンも反撃に出て再度発砲される前にバジャーでその鉄血に風穴を空ける。やがて力を失つたその鉄血は仰向けに倒れる。だがローガンにはそれが偽物、ダミーであることに気が付いた。

なぜなら――。

「――まだ、終わりじゃないわよ」

「っ!!」

すぐ背後から囁くようにそう言われたからである。聞き覚えのあるその声にナイフを抜き振り返りながら水平に難いだ。しかし今回のみならず世界中の混乱の引き金を引く役目を担つたその原因はローガンのナイフを止め、背中をポンツと押した。電流のように走る痛みに一瞬悶えたが、すぐにP226も抜きそちらの方に構える。

『ローガン、一体そっちは何が……!』

『G11、一体あつちはどうなってるの!?!』

『ローガンが鉄血のハイエンドモデルと交戦中!ここからじゃ射線が被って援護できない!』

『厄介ね、こっちはこっちで手一杯だつていうのに……!』

無線の方では404小隊全員が情報共有をしてはいるが、G11以外が鉄血兵の対処に追われていてこちらのハイエンドモデルの戦いにすぐには駆けつけられないことは明白だ。

そう、ローガンの背後に回った鉄血は『侵入者』のイントウルダーであった。大胆不敵という四字が似合うような笑みを浮かべローガンをつま先から頭まで見て品定めしているかのようだった。

「傷もできてなかなかい男になったじゃない。そのハーフマスクもいいわね、もらえないかしら?」

「悪いけどこいつは非売品だよ。似たようなのならその気になれば手に入るだろうが、ペイントが俺じゃない奴のお手製でね。簡単にくれてやるつもりはねえよ」

「あら残念。ならそれを戦利品としてもらうことにしましょう——!」

先ほどのダミーよりも行動がはやい——!

ローガンはそう思いながらも先んじてナイフを持ち替え、刃の方を親指と人差し指で挟むとそれを横薙ぎに放つ。水平に回転したナイフはイントウルダーの首元へ飛んでいく。

「つーやるわね——！」

命中。ただし刺さった位置は左肩で致命傷にはならない。闘志をさらに燃やしたイントウルダーが武器を持ち替えアサルトライフルのバレルをこちらに向ける。ガトリングではどうしても発生する発射するまでのラグを無くすための考えか。

『こつちで奴を狙う！ローガンは頑張って注意を引いて！』

「簡単に言うんじゃねえよ！」

そう言いつつもローガンは横方向へと走ってG11の射線を確保できるように動くが、それを察したイントウルダーが同じように動きローガンの動きを制限させる。

「ちい——」

埒が明かないと判断したローガンはP226で発砲、イントウルダーの動きに対する牽制を行うが思ったような効果が得られない。それどころか——。

「そんな動きじゃすぐに疲れちゃうわよ？」

人形の脚力を発揮し一気に距離を詰められる。そして胸元を蹴られ、仰向けに転倒してしまう。

「ぐっ……い！」

「終わりよ！」

『ローガン！』

ストンプされそうになっているところをすぐさまG11が援護射撃を行うが、バックステップで躲かされてしまう。ローガンも体制を整えてP226のマガジンを取り換えて予備のナイフを抜いた。その瞬間にはイントウルダーはG11の位置に気付き、ガトリングで掃射を始めていた。

「やらせるかああああああああああ!!」

叫び、スモークグレネードのピンを抜いて彼女の射線上に投げて妨げる。煙が発生し自身もろとも包み込ませたところでローガンはバジャーを持つとマガジン内の弾薬が無くなるまで撃ち続ける。

「厄介なことをしてくれるわね、あなたは……い！」

そう言ったイントウルダーは横薙ぎに銃器をローガンにぶつけてくる。今傷ついた体で戦術人形としての腕力で振られたあれを受けたらひとたまりもないことを直感で感じたローガンは敢えてスライディングするようにして懐に飛び込む。イントウルダーの銃器が頭を掠め、ナイトビジョンゴーグルとニット帽を吹き飛ばす。

それに対し精神的に冷えた思いをしながらローガンは彼女の足を足で払い転倒させ

る。自身は立ち上がり左手に持ったままにしているナイフを突き立てるようになり下ろした。

「甘いー」

イントウルダーも黙ってみているわけではない。すぐさま横方向へ回転し体を操選手のように起こす。外したナイフの切っ先は欠けてしまい刺突としてはもう使い物にならない。

「いい加減に……しなさいな!!」

その瞬間、イントウルダーの姿が消えたようにローガンの目には映った。しかし気付いた瞬間には彼女は自分の懐に高速で潜りこんでいたのである。そして、正拳がローガンの鳩尾に打ち込まれた。

「ぐっ……ふ……ふ……」

打ち込まれた箇所が鳩尾であったせいで胃の中身が逆流しローガンはその場で吐き出してしまふ。それが収まるのを待たず、イントウルダーは彼の服の襟首を掴んで引き倒した。

痛みと吐き出したことによるショックで自分がどのような状況に置かれているのかが一瞬間から飛んでしまったことにより対応が遅れてしまふ。そのせいで自分のホルスターにあるP226が奪われたことに気付かなかった。

「ローガン！」

鉄血兵の掃除が終わったのだろう、45達がこちらに駆けつけてきた。しかし一步遅く、既に詰んだ状況である。

「遅かったわね、404小隊。あなた達が同行した狼さんはもうお終いよ」

「ちい！」

416が銃を構えようとするが、強調するかのようにP226をさらにローガンへと突きつけられることで止められてしまう。

「わりの、45。ドジっちゃまったわ……」

「ダメよ、ローガン……私はあなたに何も……」

「そうね、45。あなたは今回リーダーとしてなにもできていない。いつものような癡猛で狡猾なあなたはどこに行っちゃったのかしら？」

「……っ」

悔しそうに45が歯噛む。いつもは猫撫で声で余裕綽々といった様子もない彼女は別人である。ただしそれは彼女のことを何も知らない奴だから言えることだ。

「癡猛……狡猾……？リーダーとして何もできていない……？」

気付けば、ローガンの口からは憤怒の色に濡れた台詞が漏れていた。

「戦場で私情を第一に持ち出せばそいつは必ずすぐに死ぬ。今回45は自分がそうなっ

て404全員が全滅しないようにしてただけだ！それを何もしていないだど？ざけんなよてめえ、何様のつもりだ!!」

吠えるようなローガンの叫びにイントウルダーがややたじろぐ。彼から発せられた気迫が彼女を押ししていた。

「たしかに今回は今までに比べて乏しいのかもしれない。だけど毎回それ以上の結果を出せる保証なんて誰にもねえんだ！なのに獰猛で狡猾なお前はどこにいったのだ？たらてめえが証明して見せろよ！」

誰にだって報われないことというのはある。効率的に仕事を行い時間短縮、経験と閃きによる発想、そして最終的な成績を示す数値。どれだって結果を出すのには欠かさないものだ。それはローガンにだってわかる。しかし現実というのは残酷なもので、『次回はもっと頑張れ』と、『まだまだだから努力しろ』と無責任に言う輩がいる。もしまだ伸びしろが明確に出せるだけの要因があるのならまだいい。まだ本人にもできるだけのことがあるということをわかりやすく自覚させてくれるからだ。だが壁に当たった、誰も『その先』を知らない道に当たった場合はどうすればいい？

そんな場合でも『お前ならできる』、『ここで終わりにするなよ』と自分は何も関わろうとしない輩がいたりする。進歩しないような者は貶される。確かに間違っていない、何も努力せずに自分の限界を位置付けてしまうのは愚かなことだ。

しかし勝手に他人によって決められるものでは決してない。

そんなものはクソくらえだ。

誰かが行き当った時、『一緒にどうしようか考えよう』、そう言って肩に手を置く、それだけでも違ってくる。我が身可愛さで避けてしまう者こそ、本当の愚か者でなにもしていない者である。

それが相容れない、『敵』という立場で対立する者であるなら尚更だ。

「勝手にてめえ一人でこいつを定めてんじゃねえ！んな見下すような真似を平然とやつてるようじゃてめえもそれまでだ！」

「黙りなさい!!」

イントウルダーは握った武器でローガンを殴りつける。顔面を横つ面に殴られたことで口の中を切ったことによる血が地面に飛んだ。

「……もういいわ、『狼王ロボ』。たしかにあなたは正しい。他人の価値は自分が決めるものではないってことよね。でも力が及ばないんじゃない意味はない……そうでしょ？」

ゆっくりと、銃口が再びローガンへと向けられる。その重みは先程よりも増しているのがローガンでもわかった。

「ダメ……お願い。彼も私達もここから退くから……ローガンを殺さないで……」

そこで横にいる45が目には涙を浮かべ懇願するように手を伸ばす。その姿は大切な

誰かを失ったことがある少女そのものだった。

「いいえ、お断りよ。アツシユの言う通り、ローガン・ブラックは私達にとつてグリフィンと同列の脅威よ。ここで逃せばもうチャンスはないわ」

「そんな……お願い……お願いします……」

「……もういいよ、45」

もう堪え切れなくなった涙が頬を伝っていくのを見たローガンは顔を上げた彼女に微笑んだ。初対面では想像したことがない綺麗な顔だなと暢気に思う。本当に、戦術人形というのは人間よりも人間らしい――。

「さようなら、『狼王』ローガン。あなたはたしかに、私にとつても強敵でした」

チャキツ……と銃が突きつけられる。そしてイントウルダーの引き金を引く指が籠った。

「ぐっ……!!」

「ダメええええええええええええええええ!!」

45が叫び駆け寄ろうとするが間に合わない。9と416は奴の視界内にいる為動けない。G11もここまで手出しをしなかったということは物理的に動けない状態にあるのだろう。

(くそお……!!)

瞼の裏に浮かぶのは桜色の髪の少女。いつも自分を気にかけてくれたあの少女に自分は何もしてない、何も恩を返せていない。

それが無念だ。

そう思い、銃声が聞こえては——来なかった。

「な……に……！」

目を開けてみれば、イントウルダーの額に一発撃ちこまれている。この場にいる誰かではない、第三者に。

銃声はしなかった、ということはよっぽどの遠距離射撃かそれなりの距離からのサイレンサーによる銃撃だろう。

そこでローガンは背後へと、イントウルダーをヘッドショットできるだけの弾道のある程度予測し目視で探してみる。

そして——

「あいつめ……！」



「なんとか、間に合ったみたいね……！」

「なんにも、終わらない。終わらせない——！」

12. 手を取り合つて —Settle in the

rain—

『助かつた……』という咄嗟に頭に浮かぶ思いはあつたものの、それで簡単には終わらないのが鉄血の戦術人形だ。案の定、人間ではない為頭部を一発撃ち抜かれても動こうとするイントウルダーが再びこちらの拳銃で狙いにくる。その前に45がその手を蹴り、握っていたローガンのP226は遠くの方へと転がって行つた。

「ローガン……!」

そこから駆け寄つてきた45が自分を助け起こし、その場から離れる。蓄積されてくる体の負担がここで脚に来ていたため素直にありがたかつた。

「撃つて二人とも!」

「了解、45姉!」

「舐めた真似をしてくれたお返しよ!!」

その場にいる404の二人が動きが鈍くなった上級人形に銃撃をお見舞いした。しかし、何も考えずに撃っているわけではない。

ローガンは事前に404小隊の全員に今後の問題解決の糸口になり得るデータが

入っていると思われるUSBメモリーの存在を鉄血の痕跡を追跡するのに話していた。そのため無造作に撃てば破損してしまう恐れもあるのだという警告をしていたのである。

それを二人は覚えててくれたのだろう、隠していられるような箇所ではない四肢を撃ち抜き本体と分離させた。

やがてガシヤリツと支える力を失った胴体はその場に崩れ落ち、見るも無残な姿へと変わっていた。

「……ローガン」

「ああ……」

45に支えられ、ローガンはイントウルルーダーの持ち物を漁る。着用している戦闘服のポケット、ポーチなどの中身を一つずつ確認していく。そして、モニター越しに一度見たなにかしらかの情報が詰まったブラックボックスが他よりも傷がない状態で保管されていた。

「やっぱり、私ではあなたに一步及ばなかったわね……」

四肢が無くなり、身動きが取れなくなつたイントウルルーダーがそう無念そうにか細い声で言ったのをローガンの耳で捉える。内容もそうだがそれには予め分かっていたような響きがあった。

「俺じゃないだろ、お前を倒したのは……」

「そうじゃないわ、ローガン。私達鉄血の上級人形に対して、グリフィンは絶対的一对一で戦わせようとはしない……奴らはI. O. P製の人形の単体では私達に対応するのが難しいと知っているからよ……」

「……そうね。悔しいけど私達もそれは認めているわ。こいつらの基本性能は私達が束でかからないと痛い目を見ることが多い。万が一、単独で会敵してしまつたら倒すよりも撤退することを考えるべきね」

ノイズ混じりのイントルーダーの台詞に416が同意する。

「だからこそ、アッシュはあなたを警戒しているのね……ローガン、あなたは自分の何が私達に警戒させているのか分かつているかしら……?」

「……わからねえよ。ハンターもそうだったが、今回だつててめえに勝てたのが不思議なぐらいだ」

「なら、ほんの少しだけ教えてあげる……」

イントルーダーはローガンの方を見つつ話した。その目は敵意を向けている意思を宿しているのでなく、素直に畏怖と敬意を示しているようにもローガンだけでなくその場にいる404小隊全員が思った。

「あなたは、私やハンターとは正面から戦つて見せた。戦闘に特化しているわけではな

いにしても、人類の身で持ちこたえて見せた……あなたじゃなければ、私達の前に立つた人間は長く戦えない、活路を開くことはできないわよ……」

「……大したことじゃないだろ。そんなの」

「そう簡単にできることじゃないわ……。私達ハイエンドモデルは通常の戦術人形では持てない『力』を扱える……でも私達にはない『力』がグリフィンに、あなたにあるの……」

鉄血の上級人形、ハイエンドモデルの連中は段違いの『力』を行使する。腕力、脚力など人類どころか45達のようなI・O・P製の戦術人形でも正面からでは太刀打ちは難しいぐらいに。では、イントウルダー達はローガンの何に警戒しているのか。

「私達がグリフィンを敵視しているのは指揮官という立ち位置で戦っているのが人間で、戦術人形を駆使しているというのがある……でも私達が彼らを警戒しているのは多くの指揮官が戦術人形と心を通わせていることなのよ……」

「それがどういう形で脅威になる？ たしかに人間で部隊を結成する時は互いに信頼し背中を預けて戦うことで『戦力』というのを生み出す。でも彼女達と仲を深めることこそこまでの脅威を覚えるのか？」

「指揮官になると、多くの人は戦術人形は人間と変わらなく思えるらしいわ……それが私達にとっての問題。人間と変わらなく思える、だから大切にする。そんな上司をあな

た達はどう思う？」

その問いかけは明らかにローガンに対するものではない。傍にいる45や9達に対するものだ。

問いに、45が返した。

「……守りたいと、失いたくないと思うわ」

「そう、だからグリフィンという組織は私達にとつて脅威なのよ。そしてローガン、あなたはその指揮官とは変わらないわ……」

「……まさか、俺がその指揮官の定型的な例なのが脅威になつているのか？」

「それだけじゃないわよ……あなたは人間の兵士としては上等よ。対人で一対一で戦うなら中々後れを取らないほどにね……戦術人形に対する戦術の多くは対人戦闘から来ているのよ……あなたが現地で指揮官と同じように指揮能力を有し、さらには前線で長く戦えるだけの技術があるのだから、私達は警戒しているのよ……」

以前、アツシユがボイスメッセージを送ってきた内容に『あなたはグリフィンに並んで私達の脅威になりました』、とそう言っていた。もしその意味がイントウルダーの言つた通りなら合点がいく。

グリフィンの戦術人形は精神的な想いを武器に戦うこともある。それはハリーなどといった指揮官という立場の人間達は彼女達と信頼関係を築き、絆を深めて鉄血と戦い

続けてきた。そんな彼らを守るために戦術人形の彼女達は限界以上の『力』を振るう。そのことに鉄血は危機感を抱いているのだ。

だがそれにプラスして、ローガンは前線で戦う兵士としての強さがある。アツシユが言つてたように、経験から生まれた直感や予測などは兵士としては上等なものだとイントゥルーダーも認めている。しかも時間が経てば経つほど、ローガンは多くの戦術人形と絆を生むため比例して大きくなっていくだろう。

今はそれほどにないにしても、指揮官としての能力と現場で長く戦い続けられるだけの実力を兼ね揃えているからこそ、ローガンを鉄血のエリート達は警戒しているのだつた。

「……もう少し、あなたは自分が他よりも違うことを自覚すべきね。単独での戦闘は私達に勝てないけど、鉄血兵にはあなたが負けることはないわ」

愕然とするローガンを見たイントルーダーは笑う。もう、それだけの力もほとんどないというのに。

そしてローガンが持つメモリーを指差した。

「最後だけ……それはあくまで『答え』を示すものじゃなく……あくまでそこに行き着くための『鍵』よ。数学なら『答え』を導くための『記号』でしかないわ……」

やがて、目に映る光が弱まって声に混ざるノイズも酷くなつていく。

「できれば……わた……た……しも……」

最後にそう残し、鉄血のハッカーは力尽きて発していた台詞も最後まで口にすることなくなる。

ローガンは近くにしゃがんでいる状態から体を動かし、イントルーダーの右肩に刺さったままになっている自分のナイフを引き抜きコアを摘出。そしてそれにナイフを突き刺して寸断。

蛍のような儂い光は段々と弱まり、やがて消えた。

「……鉄血ハイエンドモデル、『イントルーダー』、K I A」

ハンターの時よりも倒したことによる高揚感はない。むしろ、心に残るしこりが段々と大きくなってくる。それに気分の悪さを覚えた。

加えてローガンはここまで負傷しながらも無理に体を動かしてきていたため――。

『ローガン!?!』

——もう、意識を保っていることはできなかつた。

瞼の裏にまでチカチカと光が浸透してくる。それに視覚にだけでなく聴覚にも耳触りの音が、不快に思う刺激で意識が浮上させられる。体が動かないどころか、腕や脚が動かせない。

『
 』
 『
 』
 ようやく、自分の鼓膜を叩く音が認識できた。ヘリのローター音だ。それに誰か喋っている。

体の感覚も戻ってきて自分が担架に乗せられているのがわかった。空中に浮かんでいるような落下している時とは違う不快感、これも嫌いだとあいつは言っただけで、みために思い出しに頭を巡らせる。

腕は持ち上げれないが指だけでも動かせることに気付く。そうしていると、自分の右手が誰かに握られていることに気付いた。温かく、包み込むようにしてくれているその

手を握り返すように指を動かした。

「——ガン? ローガン!？」

——ああ、この声はあいつのか。自分のやってしまったことに後悔し、それによる感情の波を押し殺しながら今日まで生きてきたあいつ。もう泣いていないようだけどうなつてんだ……?」

「45姉、ローガンが!？」

「今、手が……指が動いて……!」

瞼を開けるだけの力も戻ってきた。そこで自分の状態を確認するためにも少々気合を込めて押し開く。

ぼやけた視界に映つたのは、明け方を思わせる藍色の空と金色の瞳と右目に傷を有する少女だった。

「ローガン……!？」

ゆつくりではあるが何度か瞬きをし、視界のピントを合わせる。そうしていくと、途切れた記憶の前はいったい何をしていたのか思い出してきた。

「……よう、45」

「ローガン……!……ごめん、9。あの子呼んでくるからお願い」

そう言うとうと45は視界の端に消え、かわりに逆側から茶髪ツインテールの少女の9が

顔を出してくる。こちらもいつも浮かべている笑みはなく、かわりに不安と安堵の二極の感情が混じっているような表情を浮かべている。

「……気分は？」

「……あー、最高に気分が悪い。いつもならこうはなつたことないしな」

「じゃあ今回が初体験だ。おめでどう」

「それ、祝っていないだろ……」

咄嗟に言い返したものの、自分でも驚くぐらい弱々しい声になっている。それも含めてなのか9は『ふふっ』と笑ったがすぐに消え、本当に申し訳なきような顔になる。

「ごめん、ローガン。45姉を助けてもらうだけじゃなくて私達まで助けてもらっちゃったよ……」

やがて輸送機の機内の中に入ったのか空が消えて鋼鉄の光景が映る。そこで自分が仰向けになっている担架を静かに下ろされ、簡易作業用のドローンがこちらに合わせちゃがんだ9の後ろを通り過ぎていった。

「……結局奴を撃ちのめしたのはお前と416だろうが……それなのに俺が助けたはないだろ」

「そうじゃないよ。あそこであなたが死んだら、私も45みたいになつたかもしれない。416だつて、G11だつてそう……」

やがて9から生まれた滴がローガンの頬を叩く。静かに涙を流し始めたものの、泣きじやくり始めてしまう。どう声を掛けようか、目覚めたての脳をフル回転させるものなかなか思いつかない。

そこで、二人の少女がこちらの方を見に来た。

「無事なようね、ならよかつたわ……」

「今度こそ本当にごめん……私が動くべきだったのに、あんなところで……」

416が胸を撫で下ろし、G11が彼女自身の状態を顧みずにそう謝罪してくる。見てみれば片足を引きずるような形になり、傍にいる416に肩を貸してもらっている。足は繋がつてはいるものの動かせるような状態ではないようだ。

「バカ野郎め……俺が今回は助けられた方だつてんのに……」

「それでも……私達は……!」

「お互いに生きて帰つてくれたんじゃねえか……だつたらこんなところで泣くなんて頑張った意味がねえだろうが……」

命あつてこそその生還だ。たしかに自分は負傷した、痛い思いをたくさんした。こうなつた以上、帰還したらしばらくは前線から離れることになるだろう。それは仕方がない。

それでも儲けものである。イントウルダーからは情報を得ていくための足掛かり

を得た。むしろこれからだ、気を引き締めて立ち向かっていかないとならないのは。

そうして泣いている9を慰めていると、自分が知っている男女の顔が二つ来た。二人は404小隊の三人と何かを話すと、三人は領き輸送機から出ていく。9は『グリフィンでね』と言い残して最後にローガンの傍から立ち去った。

そして新たに来た客人のうちの一人、ハリーが片膝をついて話しかけてくる。

「ごめん、ローガン。僕の詰めが甘かったせいでこんなことに……」

「今回得た成果分だけの仕事をしてくれれば俺はかまわねえさ。それにちゃんと帰ったら奢れよな……?」

「もちろんだよ。むしろ一週間好きなものを頼めばいいさ」

「気前がいいな……404の連中はどうするんだよ……?」

そこでハリーはヘリーのハッチの方に目を配る。そちらの方に可能な限り目を向けてみると、彼女達はまとまって何かの説明をハリーの副官であるスオミから受けている。全員いつも浮かべているような笑みや気怠げな様子はなく一字一句を聞いているようだった。

「一旦彼女達も僕の基地に来てもらうことになったよ。彼女達も負傷しているしその修復をしないとだしね。それに——」

視線を404小隊の全員ではなく、こちらに戻す。

「——君が心配だから、グリフィンに行きたいって言ったんだよ」

「……はは、こりやあ毎日の面会時間、あいつらが来ることになりそうだな」

「かもね。でも父さんがあの子たちを気にかけていたのか分かった気がするよ」

「なんでだよ……?」

「さあね。いつか、君にも教える」

じゃあまたあとでね、そう言つてハリーもそこからいなくなり、もう一人の客人であるARR15がこちらの傍により頭を撫でてくる。

「今回はポロポロね?」

「……ドジつちまつたよ。油断していたつもりはなかったんだがな」

「勝つて兜の緒を締めよつていうことわざを知つてる?」

「日本のことわざだろ、知ってるよ……それよかお前こそ大丈夫なのか……無断出撃……」

「大丈夫。指揮官が気を利かせて先行偵察ということにしてくれたのよ。今回は僕の落ち度によるものだから気にしなくていいって」

「つたく、あいつめ……」

気がかりだったことが取り越し苦労であつたことを知り、安心する。するとこつちの体力がなくなつてきたのか、瞼を開けていられなくなつてきた。

「ローガン、眠いの？」

「ああ……すまん、助けてくれたのに……」

「いいわよ、向こうに帰ったら聞くから——」

瞼が完全に下り、意識が沈んでいく。泥沼のような沈み方ではない。花の絨毯に柔らかく、優しく倒れていくような感覚だった。

「——おやすみなさい」

額に温かいのが当てられ、甘いリップ音と共に離れていく。それでローガンは精神的にも満たされて眠りに落ちた。



「悪いな、毎日……」

「いいわよ、別に。それにあなたを一人にしたら無理に動こうとするでしょ？」

「これでもまた多少動けるようになってきてるんだ。いつまでも寝てるんじゃないや参つちまうよ」

「それって身体的に？それとも精神的に？」

「両方」

「まったくもう……」

あれから一週間。ローガンはもうある程度回復してはいるがまだ激しい運動は控えるようにグリフィン専属の医師から言われている。むしろ背中に強烈な打撲を負っているというのに骨に影響がないことに驚いていた。

私は仕事や訓練の合間にローガンの病室へと向かっているのだが全身に包帯を巻きながらもいつも通りに振舞っている彼に少々呆れてしまう。とはいっても、怪我する以前の彼がとて元気に基地内を走り回ってたりしていたわけではないのだが。

私以外にもお見舞いに来ている人形はいる。

AR小隊の皆はもちろんのこと、この間CQCを教わった人形達全員がそれぞれの品を手にローガンの元に来ていた。果物や手紙、早期回復の祈願が込められたお守りなどそれぞれ持ってローガンの回復を祈っていた。それらを受け取っていた彼のあたふた

してたりする顔を見れたのは少し珍しく思つて楽しめたのは私だけの秘密だ。

いくつか話すことがあるがまずはローガンが倒れた日の事からにしよう。

イントルーダーとの戦闘を終え、意識を失ったローガンをスコープ越しに目にした私も一瞬間の中が真っ白になり、何をどうすればいいのかわからなくなつた。まずは倒れた彼の元に行くべきかと考えていたところで、話では聞いたことのある404小隊と合流すべきかと思つたのだが、彼と私の通話を見ていたと思われる人形のUMP45がローガンの携帯を引つ張り出しお得意でようであるハッキングで私に通話、そこから指示を仰いできた。私はようやく冷静になれて少し待つように頼み指揮官に連絡。そうしてローガンの容態を45越しに伝えたところ、直接ワシントンD・C内に踏み入つて回収に来てくれた。そこからはローガンの応急処置を行い、担架に乗せて搬送し、私も一緒に輸送機に乗つてグリフィンに帰還した。そこからは手術まではいかなくとも本格的な治療を施し、彼を病室に移して回復させていった。二週間でここまで回復したのであれば復帰も思つたより早いのかもしいない。

そして私達PMCがアメリカ首都に踏み入つたことが政府から言及されたが、包み隠さず404小隊の隊長である45が話した。指揮官もその場にいたが、彼が質疑応答に立つたのは三割程度でしかなく、ローガンの近くにいた彼女が全てを話した。まさか彼女が指揮官との無線の回線を閉じ、ローガンをスカウトしたとは思わなかつた。そして

現在も彼はその回答を保留にしているらしい。政府の一人の役人が鉄血がいたとはいえ、こちらに話を通さないと何事かと馬鹿みたいなことを言った際には、45はこう言い放つた。『こちらの情報管理に落ち度があつたとはいえ、あんたらが簡単に切り捨てた人物を助けようとしていたのだ。それにあんた達が屋根のあるこんな建物で無駄に駄弁つている間にも彼らは必死に生きていこうとしている。そんな人たちに手を差し伸べず私腹を肥やすことに精神を割いてる役立たずに誰が頼れないから、鉄血に付け込まれることになつたのだ』と言ひ返した。それを聞いた大臣や大統領はもう何も指揮官と彼女に詰問してこなかつた。

現在指揮官は後始末に奔走しており、スオミの手を借りながら確実に片付けている。45を除く404小隊の全員は他の子と同じようにローガンのお見舞いに来ているが、肝心のリーダーはまだ来ていない。

「それで、ARR15。俺とお前達が持ち帰つたデータの関連性つて……」

「ええ。やつと私の方にも報告が来たわ。陸軍基地で手に入ったのと二つの暗号パターンは同じみたい。それで現在解読できているのでも数個のアルファベットと数字みたいね」

「これに関しては俺達は口を挟めねえよな。俺達はあくまで現場に行つて回収する側だし」

「そうね……。それとローガン、ROがこの間転送先を掴んだって」

「お、マジか。でもスペツナズが絡んでたってことはやっぱり……」

「ええ、ロシア政府よ」

あれからはROも頑張っていた。基地にあったコンピューターのデータを抜き取り、そこからログを参照。根気よく一つずつ辿って行ったところ、丸六日で転送先がロシア政府であることを突き止めた。そこからは確実なものであることを確立するために様々な検証を行い報告書を作成、目の下に隈を浮かべて指揮官に提出した。

「あいつも頑張ったんだな。今度なにか飲み物でも奢ってやるか」

「そうね。私もM4達もしばらくはROに回る仕事を引き受けるつもりよ」

「そうしてやってくれ。あいつでしかできないことを精一杯やってくれたんだしな」

「ええ……」

それとあの基地の中にあつた強化プラスチックの容器だが、未だに解析がすんでいない。だが仕方がない。あまりにも情報処理班や解析班に回つてる仕事が多すぎるのだ。だったらこちらはいつでも動けるように身構える必要があるだろう。

そしてローガンは私に鉄血が国同士の争いを画策していることに関する考察とイントウルーダーから言質を取ったことを話してくれた。しかしまだ不透明な部分も多く、戦争だけでなくその裏で何かを企んでいることもあるとのことだった。それもおそら

く彼女から奪取したUSBメモリーに糸口になる物があると云っている。

「こいつはハリーから口止めされてたんだがな。でもまあ、緘口令もいずれば解かれるだろうしお前になら良いだろ」

「指揮官にばれても知らないわよ」

「その時は一緒に怒られてくれよ?」

「もう……いいわよ」

この辺りでこう返せたのは私も昔より丸くなったなと思うことがある。昔の指揮官が亡くなるまで直すことが出来なかつたが、今なら彼と麵に向かつて話せるだろうか……。

「……どうした、ARR15?」

「ううん、大丈夫よローガン」

ただでさえ気苦労が多いローガンにこのことまでは話せない。また、あんなことにならないように私は支えてあげたい。私も彼も大事な誰かを失ったことによる悲しみを知っているからこそ、私はローガンが泣き崩れてしまうようなことになつて欲しくないと思う。

そう考えていた時だつた。ノック音が病室に響き渡り、ローガンは客人を入れるように『どうぞ』という。

そうしてゆつくりと開いた先にいたのは、タスクフォース404小隊『Not Found』の隊長、UMP45だった。

45を招き入れたARR15は新たに椅子を用意し、そこに彼女を座らせ自分もまた座っていたところに腰掛けた。

「……あれからは大丈夫だったか、45」

そうこちらから聞くと俯いた状態から一度こちらを見たものの同じ状態に戻り頷いた。

なにがあつたかはわからないが、とりあえず45自身に危機的な状況はないようだった。

た。

「ならよかったよ。俺としてもお前が大事なならそれで何よりだ」

「……ローガン、私は——」

「……わかっている。でもお前さんはずっと我慢してきたんだろ。ならなにも——」

「——そうじゃないの！」

こちらを遮るように、静かではあるが強い口調で45がこちらに強く叫ぶ。

「イントウルダーとローガンが言ったこと、ずっと考えてた……。『誰かの価値は自分で決めるべきじゃない』。実際に結果を出してから周りに認めてもらう。成長する手段は一つだけじゃない、いくつもあるんだって、私も考えたのよ……」

独白の台詞がその場にいるローガンとAR15の心に響く。

その内、45の瞳から涙があふれて彼女のスカートにシミを作っていく。

「でも私なんて、あいつと……イントウルダーと同じであることに気付いたのよ……あの子が……ハリーが指揮官になって發揮できる力なんてこんなものだって決めつけて……」

45の心の内側に巣食うのは過去の自分だ。自分の都合で勝手に荒れて、同じ理由で荒波立てていたハリーに当たってしまった。そして彼の限界を勝手に決めつけ一時は我が家と思っていたグリフィンの基地から姿を消した。過去にここにいたというのに

戦術人形の誰も覚えていないのも理由の一つだろう。

404小隊はそこで出くわした人形のメンタルモデルを破壊、もしくは改竄を行うという。彼女達は自分達がこの場になかった者として再びなることで消息を絶った。だがそれで404全員になにも影響を及ぼさないわけがない。ほんの一時とはいえ、彼女達も小隊以外の人形と交流を交わしていたはずだ。その者達の記憶を変えなければならぬのだから、悲しくて辛かったに違いない。その人形との諍いや遺恨があつたとしても、覚えているのは自分だけで相手はそうじゃないのだから。なにかしらかの楽しい記憶などよりもそちらの方が虚しさを覚えてしまうのは仕方ない事だ。

ハリーによると、彼の父は合理的であるものの利用できるものは何でも利用して目的を達成しようとする彼女達を更生させたいらしい。自分達を考え直させ、新しい生き方を教えてくれた指揮官の形見である彼に覚えられていても苦い記憶があるのでは負の感情が蓄積されていくのは当たり前で、45は特に辛かったに違いない。

そしてイントウルダーとの戦い。45自身もまた新たに歩き出そうとしたところで、過去の自分を見させられたのだろう。そこでまた心が砕けそうになつたとしても不思議ではない。

ローガンはベッドから彼女自身の方へと寄っていき、正面に腰掛ける形になつた。

「45、こっちを向け」

涙を子供のようになんて両手で拭う45の頭に手を乗せてかき回し、額を合わせた。こつんとあわさり、顔が近づくと。いつもなら羞恥心が勝つてすぐに引き離してしまうだろうが、今はそういうのが沸いてこない。あるのはただ、『これだけは言つてやらないとならない』。それだけだった。

「たしかに、過去のお前はハリーを突き放してしまった。それは俺にもお前にも変えることが出来ない。当たり前障りのない台詞だけど、もう過ぎたことだから変えることなどできないしな。でも——」

目を閉じた状態から開いて正面から見ると、彼女の濡れた瞳と目が合う。そこから外さずにローガンはこう言つてやる。

「——ハリーだつて前に進もうとしている。お前につつけんどんにされたつてここまでするぐらいにまで成長して見せたんだ。それをお前は認めてないのか？」

そう言つて45はふるふる首を左右に振るう。

「そもそも話は簡単だろ。お前は今回のことで精神的に成長して見せたんだ。それにお前らはもう仲直りできたんじゃないか？ハリーからはなんて言われたよ？」

先日、こちらの病室に来た本人から聞いた話だ。たしか——

『また、一緒に戦つてくれ……』『力を貸してくれ』……！

「だつたらもういいんだよ。あいつは昔のことです。いつまでも根に持つような奴じゃな

い。過去は過去でゴミ箱にぶち込めよ。それで後々になって笑い話として話のタネにしてやれば、もうあいつとは完全に仲直りする前よりも強い繋がりがお前らに生まれてるんだろっしな」

いつかまた、思い出すことはあるだろう。あの時感じていた感情が蘇ることはあるだろう。だけどそんなのは過去のことだ、過ぎた出来事の事だ。それにもう45とハリーには関係ない。ようやくではあるが、二人は折り返してお互いに頭を下げたのだ、手を取り合えたのだ。それに対しての嘘の感情がなければもう何も問題ない。『そんなことあったな、大変だったなお互いに。はっはっは』と笑い飛ばせる。そうなれる筈なのだから。

合わせていた額を離し、適度に距離を持ったローガンはまだ晴れない表情の45を見る。そんな彼女を見て、自分ももう少し腹を割って話すことにした。

「それにな、お前らほどじゃないにしても俺だってそこにいるAR15と少し前に喧嘩してしまっただよ」

「……え、そうなの?」

「まあ全部俺が悪かったんだけどな。それでも今でも、思い出すことがあるよ」

「だけどそれに対しての憤りの等の負の感情はない。『そんなことがあったな』という思いだけだ。」

ローガンが横に視線をずらすと、当の本人が微笑んでいる。まるでもう、大丈夫だというかのようには。

「俺はその時のことをちよつと前まで覚えてなかつたんだ、薄情なことにな。でもあの運動場で戦う前に思い出したんだよ」

そう、G11から治療を受ける前のことだ。あの時、自分は人間であることを思い出し、相手は人形であることを再認識した時に頭によぎつたのだった。

『人形のくせに、俺の事をわかつたフリをするんじゃない』。でも人間も人形も、相手を心の底から思いやる心があれば何も関係ない。そんな簡単なことだった。

それにわかっているフリをすることなど人間でもある。そんな自分も彼女のことをわかっているフリをしてるだけではないのか？

気付いた当時のローガンは部屋から飛び出し、基地内を走り回ってARR15を探し回って、訓練場の坂で自分を抱きしめるように座っていたところを見つけた。そして彼女に自分の思いを伝えた。

そして謝罪の言葉と同時に彼はARR15という少女に告げた。

「俺の事をわかつてくれて、考えてくれてありがとう』つて……ああもう、恥ずい……」

「ちよつと、そこは恥ずかしがる所じゃないでしょ。それともう一度言つて」

「なんでだよ、ていいうかなんでそう嬉しそうなんだよ」

こちらの衣服の裾を引っ張るAR15の頬は赤くなっているが、当の本人は嬉しそうにしており言ってる台詞も喜色に染まっている。

あの時のことを思い出すと本当に自分は馬鹿なことをしていたんだと思う。だけどその免罪符としてあのようなことを言ったのだ、だったらそれでいい。

あの時の目の前のAR15がどんな顔になっているのか、どう言い返されることになるのかに恐れていた自分に教えてやりたいと思う。

「ほら、逃げないでもう一回言って頂戴。そうしないと……」

「そうしないと?」

「……撃ち抜くわよ」

「まさかの脅迫だった!?でもお前さん、そんなキャラだっけ!?そんな風にズズズイツと圧をかけてこないいつもの冷静沈着、仲間思いのAR15さんはどこ行った!」

「いいじゃない、減る物じゃないでしょ。ただ単に同じことを言えばいいだけなんだから」

「男でも女でも恥ずかしい物は一つや二つあります事よ?人間や戦術人形も関係なくお前もあるだろ!?!それもわかってくれ!」

「それはそれ、これはこれよ。ローガンだって映画とかで気に入ったシーンがあったら何回も見直すじゃない!」

「あれで損する人は誰もいないだろ、恥ずかしい思いも誰もしないんだからそれぐらいは許してくださいな！つうか今の台詞は9Aのものじゃねえのか!？」

「いいから言いなさい！言わないと……」

「言わないと!？」

「……切り落とすわよ」

「一体何を切り落とす!?!……ここ病室で俺怪我人！そんな物騒なものを出すのなら俺だつて考えがあるぞ！」

「何をどうするの!?!」

「……ぶふっ」

と取っ組み合い始めた二人をアウエーでポカーンと見ていた45が嘖き出す。その様子を見たローガンとARR15は顔を見合わせ、彼女と共に笑った。

本当に良かったとローガンは思う。

たまには自身の本音を隠さずにぶつけることも必要で、そうしてきた相手の言い分を聞き入れるのもそうだ。ハリーと45達はそれとは違うが、彼らはようやく長年間に築いていた壁を崩した。そうして本音を語り合うことで歩み寄ることが出来たのだ。

「……ありがとう、ローガン。あの時、あなたに会えて本当に良かった」

「どういたしまして。またお前らと戦えたのは俺としてもいい経験になったよ」

「グリフィンにはまた戻ったけど、404小隊としての仕事はこなしていくつもりよ……ねえ、あの返答の保留期限をまだ延ばしていいかしら？」

「延ばしてもあんまり意味ないのはわかっているんじゃないのか。俺の答えは決まってる」

「そうね。でも私としては今はこのままでいいわ。だから……」

45はそう言っただけでウエストポーチを開ける。そこに手を突っ込んで一つのワッペンを取り出す。ローガンにはそれに見覚えどころか毎日見て当たり前のような感覚になる。

「……これは返すわ」

「……おう」

その顔は寂しそうなものではない。むしろ、いつもの笑顔を浮かべている45だった。

ローガンはそのワッペン、自分の部隊『シャドー隊』の部隊章を受け取ろうと手を伸ばす。そうしてあともう少しで触れられるところで、45に手首を掴まれ引き寄せられる。

「ん……」

「……んあ!？」

「……え」

抵抗するだけの時間も余裕もなかった。ローガンが気付いた時には彼女の顔、正確に言えば唇は自分の頬に押し当てられていた。三者三様の反応がその空間で起こる中、頬から熱が消えてローガンの耳を聞き慣れた猫撫で声が擦る。

「……あのマスク、大事にしてよね。ローガンっ♪」

するりと猫のようにローガンから身を離して最後に『じゃーね♪』と言い残し、静かな湖に石を投じて波紋を起こした彼女は退室する。その様子を見送ったローガンは阿呆のような表情を浮かべ頬に感じた熱を探すように手を当てる。触れた箇所には自分が発しているそれしか感じないが、未だに自分の鼻をくすぐるクチナシのような甘い匂いは残っていた。

「ちよつとローガン、あの返答って何!? っていうかあなたと彼女になにがあつたか隠さずに話さない!」

「へあ!?! いや、俺も何がなんだかさっぱりだから隠すも何もクソもねえよ!」

「そうやってまた逃げる! それにマスクって……あのスカルマスクの事よね!」

「察しが良すぎないかお前! っていうかちよつと待て、そのスタンナイフで一体何をするつもりですのう!?!」

「いいから言いなさい! 言わないと……!」

「言わないと!？」

「ビリビリさせるわよ!!」

「ぎゃあああああああ!?! ナースさん早く来てえええええええええええ!!」

———
〈ERROR〉
———

背後からドタバタとした騒音が扉越しに聞こえてくる。だがそれに気にするほどの余裕は彼女にはない。病棟から可能な限り離れ、中庭の一角にあるベンチで悶え始めた。

顔が熱い、人工の心臓がバクバクと鼓動を繰り返している、穴に潜りこんで蹲りたい衝動に駆られる。

多くの衝動に自分の処理能力が追い付かない。

「……やっちゃつたかなあ」

彼は、ローガンはあの行為をどう捉えるだろうかと考える。自分が頼に口づけしてからみたあの表情、滅多にお目にかかることはないだろうから、きつと『そういう気持ち』を少しは感じ取ってくれるかもしれない。

出会つた当初はこうはならなかつたと思うだろう。

あの時は物珍しい人間の兵士の若者が荒れ果てた地に一人でいたのだ。一旦は協力体制を組み、そこにいた鉄血を排除し仲間の彼女達を助けた。そこで彼に興味を抱いた。

そして今回、再会を果たして痕跡を調査し、行き着いた先にいた大物を倒した。それだけでなく、自分で自分に課した負債を取り除いてくれた。ここまででも彼に感謝を抱かなければただの恩知らずだ。

だから自分はここに戻つてきた。自分の為に、あの子——ハリー——の為に、そして彼の為に。

404の全員の意見も一致している。それぞれで思うことはあれど、ここに戻ることには相違ない。

さて、まず自分は何をすべきだろうか。ようやく正式にここに配属されたということ

が通達されたが、最初の仕事が思いつかない。

でも考える時間だけはある。

「あつ、いたいた。おーい、45姉ー!」

「やつと見つけたわ。ほら、あいつからのお呼びよ。今すぐ404全員で執務室に出頭してくれだつて」

「うー、こんな天気良い日なんだから呼ばないでよもう……」

向かい側の二階の窓から手を振っている彼女達が見える。

……そうだ、まずは――。

「わかった。今すぐそっちに行くわー!」

手を振り返して自分もそちらに向かつて走り出す。今足枷になっている物はないと自覚できるほど足取りは軽い。

――とりあえず、新たな指揮官をからかうこととしよう。

13. 休息とは一体 —Run, run, run!—

ふと、わりと近くから響いていた演習射撃の銃声が止んだことに気付いたローガンは、手に持った書類から視線を上げる。窓の向こうには秋に差し掛かろうとしている青空とこの間と比較して涼しい風が部屋に入ってくる。青空から視線を下げればそこには演習レーンで一通りの行程を終えた人形達が見える。スクリーンに表示されている成績を見て喜んでたり肩を落としてたりしている彼女達を見て口元を綻ばせると、持っている書類に意識を戻す。

内容はこうある。

『グリフィン南アメリカ支部管理地区内にて新設された商業区あり。これの調査として以下の者を派遣する。『ローガン・ブラック』、『STAR-15』。尚、調査に当たる費用にあたって当日は本人達が負担し、後日指揮官に調査報告書と一緒に提出せよ。—

—ハリー・クロスハート』

「……実質、これ『業務命令』と書いて『有給休暇』というやつじゃねえのかこれ」

「うん……そーだね……」

ぼつりと呟いたローガンの台詞に、間延びして眠そうな声を発するSOPHIEの声が

聞こえる。

場所はA R小隊に割り当てられた執務室。先日ようやくローガンにも事務処理の作業としての部屋が割り当てられたのだが、よりにもよってなのか、ようやくなのかA R小隊の部屋との同室になったのである。執務用の机をそれぞれ向い合せてくつつかれており、無駄のない形に整えられている。扉から入ったら手前から奥までを順に言うのと、左側はS O P I I、M 4、A R 15。右側はR O、M 16、そしてローガンであった。つまり窓のある奥側に座っている彼の向かい側は、今は不在のA R 15の机なのである。

現在、S O P I Iを除いたA R小隊の人形達はいない。先程読み上げた書類がこちらの方に渡ってくる前に、演習訓練に行ってくるから留守番してくれ、と半分夢の世界に旅立とうとしている一人を置いて外出したのだった。

「あいつと少し打ち合わせておきたいんだけどな……」

「あ……ふう……大変だねえ、ローガンも……」

「おう、とりあえずお前は目を覚ませ。ほれ、酸っぱいレモンのグミがあるぞ」

「それもう食べ飽きたからいらなーい……」

「つたく……」

溜息を吐いたローガンは書類を相方の机に置き、部屋の隅に設置されているコーヒー

ポットを起動。ブラックコーヒーを自分専用の真空カップに入れて啜りながら部屋全体を眺める。

ここに来て最初に目に入ったのは、けたたましく鳴ったクラッカーの紙屑とくつつけられた机の上に乗っている料理の数々。そして壁全体に飾り付けられている煌びやかな装飾と『いらつしやい、ローガン』の文字が書かれた歓迎会のポスターだった。前日に通達されたものの、当日の夜まで足を運ばないようにと厳重注意されていたためにかと思つたのだが、A R小隊の全員の姿が何かしらかの荷物を抱えたM4以外全く見られなかったことからこういうことだったのかと納得した。

その日は夜遅くまで全員で食べたり飲んだりして騒ぎ、翌日全員で合わせていたオフの日で片付けを行った。終わった後は全員で食事を取ったり二日酔いになったM16の看病してたりと楽しい時間を過ごした。

現在はそれからまだ四日しか経っていない。そうだというのに、それぞれの机には性格を明確に表すだけの差が生まれていた。

まずはA R小隊長のM4。見た限りだと綺麗に片付いているし必要なものをちやんとわかりやすい位置に置いてあるし、如何にも女子らしい可愛らしいデザインのグッズが置いてある。ただしこの間作業中に零してしまった飲み物のシミが筆記用具の入れ物にできてしまっており、しっかりと拭いていっつもどこか抜けていることを表してい

る。

次にS O P I Iだが、彼女の机には散らかった書類や筆記具に交じって何かしらの部品が混ざっている。この間その中の一つの水晶のような輝きを放つその球体は何かと聞いたところ、ダイナゲートの目玉だと満面の笑顔で返答された際は思わず立ち眩みをしてしまった。子供のように無邪気であるが鉄血に対しての残虐性を秘めた性格であることがわかるのではないだろうか。

A R 15の場合だと、シンブルイズベストという言葉が当てはまる。M 4のように書類はここ、筆記具や書類作成の機器はそっちというように几帳面に整理整頓がされている。そして机の片隅には写真立てがあり、このグリフィン基地全員で撮ったのと、先日まではA R小隊のみだったのが、ローガンも含めた全員で先日のお披露目で撮った写真に更新された。それで彼女が真面目で仲間思いの人柄であることが窺える。

そしてM 16だが、こちらは若干隣のローガンの机の方にも若干侵犯している。要は、書類などよりも趣味として置いている物が多いのである。彼女の好きな酒であるジャックダニエルがローガンの机の上にも置かれており、彼女曰く、『私は好きなものが近くないとやる気になかなかねない』と。まあそういう人間もいる為そこまで攻めることもないが、せめてもう少しスペースのことを譲歩して欲しいなとローガンは少なくとも思う。だが彼女は書類の整理に手間取っている自分や他の小隊メンバーの相談

に乗ったりしてくれてたりするので決して仕事をしていないわけではない。それらからすると、頼れる姐御というものだろう。

最後にROは、こちらは必要最低限の物しかないように見える。だがローガンがこの間コーヒーを淹れる際に少し離席した際に見えたのだが、動物の写真やイラストがプリントされているグッズを目にしたのである。それを彼に見られたことに気付いたROはすぐさま机の中に隠し、『……見ました?』とこちらが彼女の下着を見てしまったような台詞を放ってきたのである。嘘をつくわけにもいかないので見たと言ったのだが、顔を紅潮させこちらが痛くない程度にポカポカと叩いてきたのが頭によぎり、思い出し笑いをしてしまう。ともかく、彼女は周囲に気付かれないように自分の好きなものを隠しているが仕事は真面目にこなしている。向かい側にいるSOPHIEが時折寝かかっている時も注意していることも考えると、真面目な委員長気質ではあるもののM4のように可愛い物好きだ。

「こうして見てみると、やっぱり個性があるよなあ……」

しみじみと思いつながら自分の席に戻り、もう一度コーヒーを口にする。こう言つては彼女達に失礼ではあるが、やはり戦術人形にも個性というものはあり、またトンプソンやスプリングフィールドと以前に話し合った趣味などもあるのだということがわかる。

午前中のうちにこちらに回ってきていた書類を片づけてしまったため、午後は新しい

仕事が出来ない限り完全にフリーである。もし半月前の負傷がなければこれから演習場の方に向かうなりしてもいいがそこまで動いて良いとドクターから言われていない。ドクターストップを振り切ろうものなら、AR15とハリーから説教を食らわされるのは既に経験済みである。そこまで動かずにその場で静止した状態でなら射撃訓練場でホログラムを撃つてもいいのだが、生憎昨日から一週間のシステムメンテナンスが入ってしまっている。

少し考えていて思い出したことがあったため、自分の机の中から一冊のカタログを取り出す。表紙にはグリフィンの紋章がプリントされており『To gun mania in the world』という英語も書かれている。簡単に言えば銃のカタログである。

先日ハリーと相談していたのだが、やはり『シャドー隊』の基本行動は隠密ということとで双方納得ではあるが、もう少し強襲などの作戦行動に動員するのはまだ無理があるということと話は進んだ。最大の理由としては、まだコールサインが『シャドー2』となる人形がまだ決まらず調整がうまくいかないのがあった。それぞれの人形はもう配置も固まっており、今更動かすというのは難しい。それにローガンだけでなくAR小隊や404小隊のように確定的で作戦によつてのほとんど引き抜きがないような人形でない、チームごとにある連携などの特色を本格的に与えることが出来ないの

だった。一度隠密作戦行動を共にしたROはAR小隊であるため、よっぽどの有事でないとい動員できない。調整が長引くことに二人で悩んだ結果、それまでは基本隠密行動、作戦によつては別部隊の強襲作戦の援護とバックアップということになった。

そうして思案していったところ、遠距離からの援護射撃をするチームに加わることも考えてグリフィン本部の方からカタログを取り寄せたのである。遠距離からの狙撃となるとハニーバジャーでは心許ない。あれはアサルトライフルとサブマシンガンとの中間に位置するPDWであり前線で戦う為の銃である。加えて内蔵サイレンサーにより射撃距離も若干減衰してるなどの特徴もあるので狙撃には向いていない。そのため、別で銃を取り寄せることになったのである。

ローガンの狙撃訓練においての成績は最大成績がSである内のAランクであることもあり、スナイパーライフルなどの人形達から色々と意見をもらったりもしたが、結局は精度に拘ったものが多かった。だがその中でも、NTWからのアドバイスが他にないことを話してくれた。それは——

「マークスマンライフル、か……」

DMRとも言われているそれは、狙撃銃として使われているライフルからアサルトライフルとしても使用も可能とするために設計されたライフルである。このために設計された銃の例としては、ロシアで生み出されたSVDことドラグノフがそうだ。スナイ

パライフルこと狙撃銃は撃った後に薬莖を排出するためにコッキング動作というものがいるのがある。一発撃てばコッキングを行った場合、第二射目までの連射はできないのである。そのかわりマークスマンライフルはその動作が必要ないためすばやく追い討ちをかけることが出来る。さらに威力はやや落ちるものの、有効射程距離を継承しているため狙撃に使用することもできるのである。

「うーん……どうしたもんかな……」

とはいっても、グリフィンから購入できるカタログを見てみる限りだとはり数が多
い。それにローガンに充てられたPCで調べてみて特徴などを知っても実際に持って
みないと意味がない。となると、購入する前に本部の方に向かう必要があるのだろうか
？

むむむ……と悩んでいると、ドアがノックされる。放つたらかしのSOPIIは起き
上がる素振りがなかったため仕方ない。ローガンはカタログを机の上に置くと扉の方に向
かって『入っていいぞ』と言ってやる。扉が開き、そこにいたのは医療用の人形だった。
見た目は鉄血と同じような第一世代の人形で気持ち程度にナース服を着させてある。

「すいません、ローガンさん。ドクターがこれから診察を行いたいとの伝言を仰せつ
かりましたので報告します」

「あれ？明日じゃなかったっけ？」

「くそドクター自身のご都合でございます」

「ああそういう……でもその悪口はどうなんだよ」

「知りません。とつとと老い耄れの元に行きやがってください」

「……医療スタッフがこれでもいいのか、グリフィン」

用が済んだとばかりにそそくさと扉から消えたナースがいた場所を見ていたが遠い目になっている場合ではないだろう。ローガンの怪我の診察をしているドクターは腕は確かではある。のだが、よぼよぼという形容詞がこれほど似合う老人と出会ったローガンとしては自分よりもドクター自身の身が壊れてしまいそうでおつかない。

「……仕方ねえか」

必要最低限の荷物を持って部屋から出たローガンは、部屋の扉の外側に張り出されているホワイトボードで自分の欄のところに『外出中』と書いて外に出る。

指令書については戻ってからでいいか、と思いながら。

……どうしてこうなった。

「これは私とローガンへの指示よ！あなたは基地に残って仕事をしなさいよ！」

「別にそれにどうこう言うつもりはないよあなたたちに！ただちよくとこれを私に預けさせてくれないかなあ!？」

「嫌に決まってるでしょ！お得意の情報操作で指示を歪めるとしか思えないわ！」

「あつははは、嫌だなーそう決めつけられるのは！私はそんなことはしないよ！これ持ってお話してくるだけだからあ！」

診察を終えて戻ると自分の部屋の机付近でなにかが、いや明らかに事件が起こっていた。置いてある指令書の上に片手をそれぞれ乗せている少女二人が睨み合っている。……いやそれも正しくないだろう。最早龍と虎の睨み合いだ。

部屋の主である彼女達が怯えているか、怖れているかのどちらかの反応が含まれている。部隊長は怖がりながらもどうしようとお口お口しており、鉄血相手では狂犬と化する少女ですら部屋の隅でガタガタと震えている。部隊内では頼れる存在である姉も『おつ

かねえ……』と漏らすほど自分の机からも何歩か引いており、電子戦のエキスパートもカタカタと震えながら机の陰から様子を窺っている。

それぞれ違つてはいるが、ローガンも冷や汗を流すほどの雰囲気には咄嗟に回れ右して部屋から出ようとした。が、ドアノブに手をかけようとしたところで左肩をガツと掴まれる。

「おい待て元凶。一体何がどうなつてんのか説明しろ」

「イヤアボクニモサツパリデス」

「明らかに原因となつた火種はお前だろオが！嘘ついてないでとつとと消火作業に取り掛かれよ！」

「嘘は言つてない！俺だつてなんでこうなつたのか意味わかんねえよ！」

「ああん!? お前何もわかつてないのか!? 私はおもしろそうだったから見てたがこれは予想外だ！つうか早くなんとかしろよ、ジャックダニエルが圧で割れちまうだろ!!」

「知るかつうか元はあんたが俺の方にも置いてるのが悪いんだろうがつていうか今おもしろそうとか言つたよなだつたらあんたが取り掛かれよバカア!!」

「よおーしいいだろう、お前にグーパンだ！」

「待つてください二人とも！そこでまた別の喧嘩が起こつたら本当に收拾がつかなくなります！」

M4からの必死な仲介でなんとか平静を取り戻す。そして未だに言い合いを続けている二人に目を向けた。

「というかどこからこの指示のことも知ったのよ!？」

「ふっふーん! 戦うことだけが全てじゃない私はここのシステムもお手の物! あなたにはできないでしょうけどね!」

「だったら指揮官に報告しないといけないかしら!?! 演習から抜け出してこんな悪いことをしている猫が紛れているって!」

「あんな演習なんて、9一人でも十分よ!」

ちなみに、ここグリフィンの演習訓練は最近ローガンが考案したシチュエーションとランダム配置で行われている。内容は様々だがAR小隊で一番経験を積んで実力を兼ね揃えているM16も一人ではやや苦戦するほどのものである。とはいっても無茶なことをやらされるのではなく、あくまで基礎の応用に応用を重ねたものを二人でやるのである。そんな訓練を彼女とツーマンセルで組んでいる9は今も少し涙目になりながら「一人じゃ無理じゃないかな!?!」と叫んでたり。

『ふむ、そうか。あれじゃ簡単か』と現実逃避を図る男の頭を叩き、M16が状況説明を行い所々の補足をローガンが行った結果、以下のように纏まった。

演習訓練を終えた四人はまず自身の銃器などの整理を終えてシャワーを浴びた。そ

してロッカールームからAR小隊の執務室に戻ったところ、ローガンがいないうことに気付いたが、外出の字を見て納得しそれぞれで事務処理の前に一息を入れることとなった。AR15が自分の机の上を見てみたところ、一枚の書類が置かれていた。それを読んだ彼女は顔を赤くしたところで、どこかからか情報を嗅ぎ付けた404小隊の45が部屋に突貫してきたのである。

「……それで現在に至るってことか」

「ああ、なんてこった……。ローガンも別に悪気があつてやつたことじゃないってのに……」

部屋の隅で集合し、状況が掴めたことでローガンは遠い目になり、M16は頭を抱え始める。そう、誰も悪くはないのだ。ローガンだつて業務的に知らせようと思つて書類をAR15の机に置いただけであり、彼女はそれを普通にそれを読んだだけ。ただ、45が乱入してきただけで結局は二人には非はないのである。

「でもローガン、なんで二人が争っているのか分からないの?」

「行きたいのなら俺じゃなくてあいっつらで行けよつて思うぐらいだ……」

「え、わからないんですか?」

「……おん? 違うのか?」

『……………』

はてはて？とクエスチョンマークを頭の上に咲かせるローガンに少女たちは顔を見合わせる。複数人によるアイコンタクトが成立したのか、彼女達は一斉に溜息を吐いた。

なにがなにやらさっぱりの大馬鹿野郎はそこから二人の様子を窺うべくそーつと机の陰から覗き込む。体はまだ回復していないというのに、気分だけは作戦行動しているかのようだった。

「とにかくこのままじゃ埒が明かないわよ？だったらローガンに聞いてみるというのはどうかしら？」

大分言い争ったことにより肩で息をしている虎である45がいつものような余裕の笑顔を浮かべながらそのような提案をした瞬間、当人は『げっ!』と声を漏らしそうになる。

「……いいわよそれで。ローガンならどう答えるのかを私は知っているけど、明確な根拠はないわ。だったら本人に聞くのがベストよね」

白い肌に汗を滲ませている龍の少女、AR15がそう口にする前からローガンはそろそろと扉の方に向かっていたがそれを許さない存在が他にいる。

「取り押さえろおとおおおおおおお!!」

「おわああああああああああああ!!」

ドタタタタンツ!とこちらが怪我人なものもお構いなしに四人の人形達に地面に組み伏せられ、終いには四肢を固定した状態で立ち上がらせられる。実体はない礫にされた途端、窓際にいる二人はグルンツ!!と首を動かし目を光らせながらこちらにゆつくりと迫ってくる。……いい笑顔で。

「ね〜ローガン♪怒らないから答えて欲しいな?」

「はっ、はい!」

怪我をしてから最初にこちらの方に顔を出したあの時の最後にあつたあのことが頭によぎり、今日まで自分の方から少し距離を置くようにしていたがそれもおかまいなしに彼女はこちらにスキンシップなどを取ってきていた。もし今回がこのようなことがなければいつもどおりこちらは少しおどおどしたようにしていたかもしれないのだが

「ローガンは今回の新設された商業区、誰と行きたい?」

「え〜つと、それはですね……い、行きたいとかでなく命令っていうか『仕事』ですので……」

「じゃあ『仕事』じゃなかったら……?」

「ジヨブでなかったらですか!」

「いいんだよ? 私は本当に怒らないから、ね? 行きたい誰かの名前を言ってくればい

いんだよ？別に私って言って欲しいわけじゃないんだけどね？」

「45さん顔が怖いッス！言ってることと顔に書いてあることが真逆すぎてバンビーさん漏れそうッス！」

「あつはははははは♪ローガンったら、ジョークも面白いね〜」

「ジョークのジョの字もないッス!!」

——頭によぎらないほど、普段は使わない敬語になってしまうほど、獲物となった草食動物の気分となる。

「……正直に、何も隠さずに言っつてねローガン」

45とは対照的に、静かであるがどこ熱を感じさせるようにARRI5が笑顔を浮かべながらこちらに語り掛けてくる。今の身近で三本指に入るほど仲が良いと言える彼女であるが、これまでで迫力を感じさせるような怒った顔はあっても笑顔の方は見たことない。……あ、左脚を押さえてるSOPPIIがまた震えだして涙目になってる。

「ローガンは、私と出掛けたいと思う？」

「え……ああ、仕事抜きであつても、感謝していることもあるし一度はつて考えてはいる」

「……それも聞けて良かったと思うけど、今はそうじゃないの。そういうのも抜きにして今回はどうなの？」

「あれ、今の返答ダメなの!?! わりとちゃんと言ったつもりなんだけど!?! でもいつも自分の席の向かい側にいる奴と行くのってお前はいいの!?!」

「私はいいわよ? それにチームメイトと仲を深めるのもたまには必要なこととは思わうから。それにローガンも『たまには外にゆつたりと出てみたいな』とか言ってたわよね?」
「いい!?! なんて誰にも聞かれないと思つてたのに知られてんの!?! つうか誰だよんな情報流した奴!?!」

「とにかく早く答えて頂戴? そうじゃないとこの間スプリングフィールドからもらったみたいだけど、コーヒーの元を全部湿らせちゃうわよ?」

「それシヤレにならないからやめて!?! あの人からもらえたコーヒー豆をいつでもすぐに飲むようにこの間ようやく播り潰したんだから勘弁してくれよ!?! 俺の机の上のジャックダニエルならいいから!?!」

「おいちよつと待て! たしかにそこに置いてしまつてはいるがお前にくれてやったわけじゃないぞ!?!」

「いらぬわよそんなの」

『そんなのって言いやがつた!?!』

S O P H I E に釣られた様に好きな酒を『そんなの』呼ばわりされて M I 6 も少し涙目になる。だが泣きたいのはローガンの方だ。

何せ部屋に戻ったら自分があずかり知らぬところで修羅場が発生しており、原因を探ってみれば二時間ぐらい前に渡された書類の内容と来た。ただ自分は『たまにはいいか』と考え、同行することになるAR15にも教える為にも置いただけ。ただそれだけだというのに、最近グリフィンに馴染み始めた404小隊の隊長の45が絡んできた。個人的に思うことはあるものの、彼女も年頃の少女としてモジュールが設定されており今後の為にも考えるとわからなくはない。しかしそれはAR15も同じで、彼女にもローガンは感謝などの念を抱いていることは嘘偽りはない。

それらを差し引いても何だこれは。どうしてこんなことになっている、なんで彼女達は心底では真逆の感情を煽らせながら笑顔でこちらに詰め寄る？

「えくと、俺抜きで二人で行くという選択肢は……」

『あるわけないじゃない!』

「ですよね……」

雰囲気でわかっていたことではあるが、実際に言われるまで下手な期待を持つよりもいつその事ぶった切ってもらった方がいい。

誰か何とかしてくれと胸中で叫ぶがそれが誰かに届くなど当然ない。むしろ自分が益々弱気になってしまっただけでマイナスになるだけだ。

まったく、なぜこう二人から攻められることに喜びを覚えることなどあるはずないの

にこうも追いつめられているのだろうか。二人とも戦術人形ということもあるだろうが、どちらとも美人といても誰も否定しない程の美形だというのに何故そこまで俺なんか拘る？俺がお前にしてやれたことなんてあったかAR15。45にはハリーとの仲違いを直すように手伝うようにしたが、俺がお前さんにしてやれたことなんてあったか？逆になんでお前は俺に付き纏うんだ45。AR15ほど共にした時間はないが、お前とは仲は悪くはないどころか良いとは思うし信頼もしている。ああちくしょう、仲間として見ているのになぜその相手からこうも尋問まがいのことをされるのだろうか。俺の体を拘束している奴らを除いて三人で……三人で？……あ。

「……なあ、解決策になるかどうかはわからないけど、言つていいか？」

「ええ」

「うん、言ってみて」

「ずっと顔を寄せてくる二人に思いついたことをそのまま口にする。それを聞いた途端、二人はきよんとした顔になり、隣にいる自分ではない相手と視線を合わせると火花を散らし始めた。」

「……こりやあやつぱり、交渉するしかない。否、何が何でも許可させるしかないだろう。これは、自分を餌にし本部の方へと出張した彼への正当でささやかな報復である。」

拘束が緩んだことで携帯端末を手にとりとある番号にかける。数回のコール音のあ

とに出た相手にローガンは言い放った。

「なあ、さつきもらった指示書のだけど、当日三人で行ってきちゃダメか？」
話は思ったよりすんなりと進み、許可が下りた。

——〈ERROR〉——

「着ていく服が決まらな—い！」

出かけるのは三日後となったのはいいが、問題となったのは当日の服装だった。

なにせ根なし草の404小隊として帰るべき場所を持たずに戦場を放浪していた身だ。今は違っても戦闘において不必要なものは取捨選択で捨ててきていたので戦闘服として持っているいつもの黒と黄色を基本としたもの以外は持っていないと言っても

間違っていないかった。最近はマーケットで流されているものでいいのがあったら購入してたりするが、それでも豊富とはいえない。だがこれらでも彼に見られたこともない筈であるため新鮮さはあるのかもしれない。それでも何事にも心配事というのはある。広い視野でもって戦場を俯瞰して突破口を見つけ成功させるために選択肢をできるだけ多くの用意する。今回は突破口というよりも目指したいことははっきりしている。選択肢も悩む必要もなくわかっているといふのにそれに対する不安が大きいのである。

「んあ〜……大丈夫だよ。何を着ても45姉ならローガンも『似合ってる』と言うに決まってるって」

「そんな確証は私にないのよ……。ああもう、なんで今までこういうことに興味を持つと思うなかつたのかしら。色々と心配でたまらないわよ……」

「でも45姉、楽しそうな顔しているよ？少なくとも鉄血と戦っているような顔じゃないね」

昼間の演習訓練による疲労が最高潮に達したのか、ルームメイトであり寝間着姿でベッドに体を沈めている9が目を擦りながらそう言ってくる。45が鏡で見ると、そこには9とは色違いの寝間着を着て立っている自分がいるのだが、その表情はどこか柔らかく思春期の女の子そのものを表すような笑顔であった。

「あれ……なんでだろ。感情モジュールの誤作動なのかな」

「きつとそうじゃないよ。45姉は心底から楽しみにしているよね？」
「え、ええそうね」

「ローガンが前に言ってたんだけど、『不安や心配事を抱えていたとしても人間は笑える時は笑うし、楽しみにしていることがあったらスキップするなり行動にも出る。それなら顔に出てくるのも全くおかしくはない。人間も人形もそこらへんは全く変わらないと思う』ってさ！」

そんなことを言ってたのか……と45は9が口にしたローガンの台詞を頭の中で反芻させる。

「まだローガン自身も確証が持ててはいないようだったけど、私は間違っていないと思うなあ。45姉はどう？」

「……そうね。私の知る限りの人形製造の技術面を踏まえて考えたとしても、少なくとも外的外れではないと思うわ」

「だったらそうなんだよ。45姉はローガンと一緒に過ごす時間を楽しみにしていて、今の過程も楽しんでるんだよ」

「そう、なのかしら？」

「絶対そうだよ！」

満面の笑みでそう言ってくれる妹に彼女にも自然と笑みが生まれる。

いつも、この子は自分の後について来てくれた。404小隊として頃も、前の指揮官の元において彼が死んだ後の頃も。そしてまたこうして戻ってきて、ずっと416やG11よりも寄ってきてくれた。昔は使えるものであるならなんでも利用しており、それは同小隊の面子も同じだった。でも今は仲間としても、家族としても、本当の妹のように思えるこの子を命を賭しても守り通したいと本心から思える。

そんな妹が自分の為にここまで言ってくれたのだ。だったら何も疑うことはない。

「でも着ていく服があまりないと言うのはたしかに悩むところだね。私が持つてるのと合わせても選択肢は十行けばいいほうかな？」

「サイズの問題もあるしね。どうしようかしら……」

「ねえ、前日は45姉はオフなんですよ？ 私もそうだからちよつと一緒にマーケットとかに行くうよ」

「いいの？ 私にそこまで時間を割いてくれなくてもいいのよ？」

「家族なんだからこれぐらい当たり前だよ！ それに私と45姉の感性は少し違うんだし、一人じゃ見えないものがわかったりするかもよ？」

「……そうね。じゃあお願いしようかしら？」

「任せて！ それとそこにさ、美味しいアイスクリーム屋さんがあるからさ！」

「ふふつ、いいわよ。その時は私が奢るわ」

「やったあ！」

眠気もどこへやら、ピヨンピヨンとベッドの上で跳ねる9を注意した45は開けていたタンスを閉じ自分のベッドに腰掛ける。

グリフィンに来て半月強経った今、過去に肩を並べていた人形達が自分達のことを覚えていないことに胸の痛みを感じていたりもしていたが今ではそれもなくなりつつある。それに以前よりも強い繋がりも小隊内にも外にもできた。絶対にこの繋がりをも、持ちを、無かったことにしたくないし無くしたくない。

誰かに簡単に明かすことが出来ないこの想いは、現代指揮官のハリーに対するものは違う。

彼はどうなのだろうか。

そう一人の青年を想い、45は復活した9と談笑しながら外の満月を見ていた。

昼間の騒動があつたその日の夜。私は自室のクローゼットから何着かの衣服を引っぱり出していた。

今の季節を考えるとこういう色合いの……いや、これでは少々派手ではないだろうか。彼はこういつた明るい色よりも暗色系の方を好む傾向もあるし幾分それも考えるべきだろうか。それでも私にもお洒落な服を着たいという欲もある。普段はあまり変わり映えのしない上着とワンピースによる服装なので偶にはこういつたのもいい。戦う場に立つのであれば、見た目よりも機能性の事を重視して考えなければならぬのだから。

そこまで考えていてふと、鏡に映つた下着姿の自分の体を観察してみる。

……お世辞にも、男性が悦ぶような体つきではないことは確かだ。いや、豊満な女性を好む男性がいれば、逆に私のような体型の女性を選ぶ人もいることは知ってはいる。それでも自信というのが沸いてこない。ローガンがどのような好みなのかも特に知らないからだ。食べ物で辛い物が好きだというのは知ってはいても、異性についてはどうなのかとはさすがに聞けない。あまりにもハードルが高すぎる……。昼間の時のよう

な体の奥底で燃えるような怒りがあれば違っただろうが、後々になって冷静になった私ではとてもじゃないが無理だ。

さて、大事ではあるが今は重要ではない、一旦そのことは置いておこう。

どうしたものかと私が考えていると、部屋の扉が開かれる。ノックなしで入ってくるのは一人だけなので特に今の姿を隠す必要はない。

「ARR15、お風呂……まだ悩んでたのね」

「……ええ。あんたがあがったのなら私ももう入るわ」

またあとで考えよう、そう思い部屋から出ても恥ずかしくないようにいつものワンピースにもう一度袖を通し、寝間着などの必要なものを揃えてクローゼットから出していた幾つかの服をハンガーに通して戻した。

そこまでやってきて行こうと、視線を上げると椅子に腰かけたM4がこちらを微笑ましくそうに見ていた。

「……なに？」

「うーうん……ARR15も大分感情豊かになってきたなって思ってる」

「何言っているのよ。私はいつも冷静よ？」

「任務の時はね。でもローガンさんのことになると人が変わったようになるなって思うのよ」

「そんなことないわ。ローガンはいつも自分のことを隠そうとするから、ああでもしないと本音を引き出せないのよ」

「素直じゃないわね」

なにがおかしいのか、クスクスと——嘲笑などではない——おかしそうに笑うと彼女は椅子から立ち上がると後ろ手に組みながら窓へと歩いていき、そこから見える満月を見上げる。

「ねえ、AR15。前の指揮官の事、どういう事を覚えてる？」

少し憂いが込められたその声色によつて紡がれた台詞に私は記憶に残つてゐる出来事を引つ張り出す。印象に残つてたのは——。

「……私達に、AR小隊全員に歓迎会を開いてくれたことかしら」

「うん、私もそう。だからさ、これだけは言わせて」

振り返つた彼女は微笑みながらこちらに振り返る。その顔は私だけが知つてゐる、何かの痛みを我慢している時の笑顔だ。でもその痛みの正体を、私は知つてゐる。

「後悔がないように、ありのままの自分をいずれば彼に見せてあげてね」

あの時、指揮官が亡くなったこの友はどれほどの胸の痛みを味合わされただろうか。どれほどの無力感に打ちひしがれそうになつたのだろうか。少なくとも、私を感じていたのよりは段違いに上だつたに違いない。

それに、ある時に彼との会話で言われた言葉がふと頭に蘇ることがある。

『君が心を許せる相手を、全てを委ねても構わないと思える誰かをいつかは見つけなさい』。それがどういう意味だったのか、今ならなんとなくわかる。でもそれは言葉通りでの意味であつてそこに秘められているそれはまだわからない。いつも表面だけでなく裏側にもなにかしらかの意味を持たせていた彼のことだ。きつと、なにかある。

でもそれは今は構わない。考えるよりも先にこうしなくてはならない。

私は腕に抱えていた寝間着などをベッドに置くと、前にローガンが45としていたように額をM4のと合わせる。

そして呆気にとられている彼女に私はこう言つてやる。

「うん。ありがとう、『親友』」

「……どういたしまして」

お互い照れくさくなつて笑い合う。昔ならこんなことは絶対しなかつたしこうして彼女と笑う事なんて決してなかつた。彼が亡くなつて二十年経つた今、私達も人間達のように変わった。それが良いのか悪いのかと聞かれたらわからない。感情モジュールなどという、戦いでは不要に思えるこの機能。ローガンが泣き崩れてしまひそうになつたあの時のような痛みを、そして今親友が感じているそれを理解できるのであれば絶対に悪い筈がない。だったら、こうして私達も変わったことには享受すべきことの筈だ。

彼に話せばきつとわかってくれるだろう。なぜなら、指揮官と共に私達のことを対等と共に思ってくれているのだから。

私は親友に行先を伝えて部屋を後にする。そして三日後にあるイベントに胸を躍らせていた。

14. カラースクリーン — I、m scared,
ladies —

しぶとく残っていた残暑もなくなり、晴れ渡る空に季節が移ったことを知らせる秋風。青空を見上げてみれば雲も小さいのがちらほらと見える程度で今日一日の天候は変わらないことを知らせている。

「……晴れたなあ」

ローガンは手を目の前にかざし、そう呟く。彼自身もその台詞に特に意図はない。ただそうなったことを、自分が何もせずに結果が生まれたことのように言っただけであって決して悪意はないのだ。

正直なところ、話が決まった時には悪天候になったりと少々期待してたりしたのだが、それでは彼女達には悪いと考え、前日のうちに事務処理を行いながら覚悟を密かに固めていた。なにせ、鉄血と戦う方がマシではないかと思えるほどのあのような場に出くわしてしまったのだ。いや、出くわしたというのは語弊があり生み出してしまった一因は自分にあることはなんとなくわかってる。そうだとしても、自分が被害者側であるような気がしてならない。

— そう思いながらも左手首につけた腕時計を確認する。時刻は二人と待ち合わせの時間の午前十時の十分と少し前である。当日は商業区の北と南ゲートのうちの南側の方に現地集合になっている。

そして自分の服装を改めて確認。青と黒のストライプのベストに白の長袖のシャツ、黒のジーンズという私服に着替えたローガンは随分久しぶりの服に『こういうもんだっただけか?』と首を傾げた。もとより二人から『自分達はお洒落していくのだからそっちもして』と釘を刺されていたため、グランドの地区の地域住民たちが贈ってくれた最近のを引つ張り出したのである。もらった直後に試しに袖を通したのが最後で、それ以降は着る機会がなかった。普段グリフィンの基地内にいるときは楽な服装で、ということであらうな感じのものであったのでいきなりこういうのを着ると落ち着かない。

それに戦術人形であっても、AR15とUMP45という二人はローガンにとつても友人としての仲を切ることを躊躇う存在だ。義務感や使命感というわけではないが、あの二人が視察というのを抜きにしても楽しんでほしいと本心から思う。それを成すのが今回自分の役目でもあるのかもしれないが。

最初はどうしたものかな、とゲートで配られていたパンフレットを開いてみてある程度の情報を頭に入れてみると、誰かが自分の目の前に立ったことによる気配を感じ目線を上げるとそこには後ろ手に組んで笑みを浮かべている少女がいる。人混みが背景に

なっているのにも関わらず、その少女は映えて見えた。

「やつ、ローガン♪月並みだけど待たせちゃった？」

「別に待つちやいねえさ、45。俺が着いたのもそんなに経つちやいない」

「そこは普通に『俺もさつき来たところ』って言って欲しいわね」

「そんな典型的なコミックの展開にもって行つてたまるか。俺からすれば誰かとのんびりぶらりと出掛けるのは初めてなんだから勘弁してくれよ」

「あら、ローガンってこうして外出するのは初めてなの？てつきりオフの日でもマーケットに誰かと出掛けたことでもあるのだと思つてたわ」

「そうだぞー。男としては情けないが、こういうのは不得手なんだ。初めて来るところだし一緒に手探りで頼む」

「そっか。じゃあ今日は一緒に楽しむとして……AR15は？」

45とは合流したが、もう一人の同行人のAR15がまだである。腕時計で時間を確認してみると所定の時刻は過ぎてしまっている。几帳面で真面目な彼女が遅れるというのは珍しいなとローガンは思うが、ふと頭によぎったことがあるので尋ねてみる。

「45、お前を信用していいかわけではないが一応聞いておく。なんかあいつ関係の細工はしてないよな？」

「そんなことはしてないわよ、ローガン。私だつてやつていいことといけないことは弁

えているつもりよ。命のやり取りをする戦場ではともかく、こういう機会にそんなつまらないことはしないわよ」

それに正々堂々と勝ちたいしね、と本人の小さい呟きは周囲の話し声や足音などによつて掻き消えてローガンには聞こえなかったが、本人が知りたいことは聞いた。とにかく自分の知る限りで最悪なことになってなければいいが、今のご時世では何が起ころのかはわからない。グリフィンではないが、とあるPMCの組織層の中では上位に位置する人物が私用で外出したら護衛がいたのにも拘らず暗殺されるといふのは時折耳にする話だ。戦術人形であるARR15でも幾分起きることはあまり考えられないが、得ない話ではないだろう。

もう少し待って来ない上になにも音沙汰無ければ連絡寄越した方がいいだろうかと思つた時だった。目の前で川のように流れている人混みをかき分けるように、潜り抜けるように、誰かが悪戦苦闘しているのが見える。その人物はできるだけ不和などが起きないように心がけており、人の隙間という隙間をすり抜けようとしてはいるがなかなかできていない。そしてその少女の髪色や背格好が一瞬見え、ローガンは誰なのかを確信する。

「……ローガン」

「……45、ちよつと待っていてくれ」

彼の視線の先に気付いた45は『仕方ないわね……』とため息混じりに言う。とひらひらと手を振って早く済ませるように言葉でなく伝えてくる。近づいてみると激しくはないものの水流とは違って抗いがたい人の流れにやや慄くような気持ちになるが、そのような一時の感情に流されるわけにはいかない。

「よつと……！」

少し無理やりではあるが自分の半身を濁流に突っ込ませる。そして手を伸ばして立ち往生するしかなかった少女の手を掴みこちらに引き寄せる。少女は掴まれたことに反応し抵抗するような素振りを一瞬見せたが、こちらのことを確認できたのか掴まれている手をすぐに剥がすようなアクションをやめた。

「痛っつ……！」

誰かの肘が治療中の箇所当たってしまったのか、すぐに『ごめんなさい』と謝る声が届いてくるが一旦痛みと共に無視して引き上げた。そしてそのままゲートの方向に向かい、アーチの根本で待ち続けてくれていた45のところまで一緒に向かう。ふう……、と一息をつき掴んでいた右手を離した。

「……遅刻よ、AR15」

「ごめんなさい。でも45、あなたが先に来たのね」

「時間厳守とは言っては無かったけど、それでも守るようになるのは当たり前じゃない

「？」

「やめろ45。こんなところでピリピリするなよ。それにこんな状況じゃ仕方ないさ」
 人の川に飲まれて動けなくなっていたのはAR15だった。少々刺々しい45の台詞に言い返すことなく彼女は乱れた髪を手串で整える。ローガンはそれを見てからさきほど少しだけ身を投じた方に目を向けてみる。

新設された商業区、というよりも昔でいうのならデカイデパートやショッピングモールだ。グリフィンにまで報告で来るほどの賑わいを生み出していることを考えれば、現地集合ではなく少し離れたところで集まり、それからここに足を踏み入れるように考えた方がよかつたのかも知れない。

「それよかお二人さん、言つてた通りおめかししてきたんだな。改めて見てみてもAR15も45も似合つてるじゃないか」

先に来た45の服装は裾と襟元を黒く縁どられたシャツに白と黒のチエツク柄の薄手で長袖の上着を着ており、ジーンズ生地デニムスカートから伸びたニーソックスで包まれた脚まで見てみても年頃の女子らしい服装を意識していることを思わせる。左目の傷も少し化粧をしているのか、目を凝らさなければ見えない程度になっている。

今しがた到着したAR15の方は柔らかい印象を抱かせる白のニットに膝下までの赤のロングスカート、いつものように髪飾りでワンサイドアップにしておらず頭の方に

はカジュアルな茶色のキャスケット帽子がのつており、45とはベクトルの違う見た目相応の服装である。それに片方の手首にはブレスレットもつけており細部にもこだわっているのが窺える。

「……うん、お前さん方がそう気合い入れてたんだとすると申し訳ないな、俺」

手を抜いたわけではないが、二人のように考え続けた結果と言うわけではない。ただ単に以前こういう組み合わせだといいで、と言われたのを思い出し実践しただけである。お互いにライバルをチエックした二人はローガンに視線を向け、同時に『あ……』という反応になる。まあ、ある程度予想できていた反応だった。

「言葉にしているのなら言うけど……」

「なんというか……普通よね」

「ですよね……でもシンプルイズベストっていうじゃないですか」

「でも服装だけに限らずシンプルすぎて困ることもない？」

「男の人の服装はこういう場だとそこまで派手にしない方がいいだろうし間違いはないのは確かだけ……」

「まあ気にしないでくれ。俺よかお二方が映える方がいいだろうしな」

ローガンからすれば二人とも容姿端麗、羞月閉花で一緒にいるこちらが恥ずかしく思えてしまう。現に通りにかかる人の男性の多くは二人に視線を釘づけにされており、別の

誰かにぶつかるか同行人に注意されるかど突かれたりして我に返ってる。

「ローガン。さつきはありがとう、本当に助かったわ」

「気にすんなよ。あんなんじや遅れたって本当に仕方ないし全然許せるよ。それよか怪我也何もなくて何よりだ」

「ていうかローガン。わざとではなかったようだけど、さつき怪我してる場所にぶつかられたけど大丈夫なの？」

後ろから見ていた45なら見えていたのだろう。ワシントンD.Cでの戦いによる傷が残っているなかで、一番酷いのが背中全体だった。打撲で済んだだけ奇跡だが、強烈に二回も打ち付けたこともあって治りもあまり早くない。徐々に良くなつてはいるものの、それでも動かしたりするのは気を遣わなければならなかった。404小隊が特に気にしているのがローガンでもわかる。45はもちろん、9も一日に一回は顔を見せに来て調子はどうかと尋ねてくる。今は軽く突いてくるが、まだ病室から出たばかりの頃は影を落とした顔で触れることもしなかったのである。所々で良い意味で彼女らしくない、短い時間の間でも気遣ってくれたのを覚えている。416は演習訓練の様子を見に来てるローガンを見かけると怪我の容態を自分の目で確かめようとして来る。それで一回は逆セクハラのような事態になりかけたが、一部始終を見ていたウエルロッドがハリーに説明してくれたりして事なきを得た。だがそれから彼女は時間があれば

チェックを行い、自分ができる範囲で治療できる箇所はないか探している。『私は完璧なんだから……ちやんと診てあげないと』とうわ言のように言ってた彼女は負い目を感じているのかもしれない。しかし小隊の中でローガンに対して負い目を一番感じているのはG-11だった。マンティコアとの戦いで怪我を許してしまったのみならず、イントゥルーダーとの交戦では危機回避となる援護はできても、明確なダメージを負わせる射撃はできなかったのである。さらに自分は戦闘の最中で脚を負傷し、動けなくなり援護射撃もできない状態へとなってしまったのである。そのため普段は眠そうな目を擦りながらこちらに近寄ってくるのが、今は会う度にとてもすまなそうにしており『……大丈夫？』と聞いてくるのだ。さすがにもう大丈夫になってきてると伝えても彼女の表情は全く晴れない。大事というわけではないが、今ローガンのことをやや悩ませている。

「まあ、大丈夫だよ。いざという時はちよつと休ませてくれればいいからさ」

「その時は遠慮なく言つて、ローガン。あなたも大分無茶を重ねてるし、矯正という意味で自分を見つめ直すことも必要よ」

「まるでカウセリングの先生みたいだな」

「なら先生つて言つてくれていいわよ？」

ふふつと笑うAR15にローガンは『冗談だろ？』と返す。

「さて、と。立ち話を長々とやってちや時間の無駄だし行くでしょうか」

新設された商業区というか、新たなショッピングモールは今だと滅多に見ない盛況っぷりだ。人口密度も高く、銃弾が飛び交う戦場がどこでも起こっている殺伐とした現代でもこれだけの人達が生き残っている。その人達が顔を輝かせているのだから決して悪いところではないはずだ。忘れてはならないが、今回は仕事も兼ねてはいる。だが楽しまなきゃ損だろう。

ローガンが動き始めると少女達も横に並ぶ。そして歩きながら三人で会話、というより真ん中にいる彼を取り合うように結果的に二人が交互に違う会話の内容を始め、時折二人が火花を散らす。

前途多難じゃねえのかこれ……と思わざるを得なかった。

飲食だけでなく服、アクセサリーなどの様々な身に着ける物品が売られているなかで男子禁制のエリアに二人が入っていったのを見送り、近くにあるベンチに腰を下ろす。そしてこれまでで購入した物が入った袋と一緒に自分も腰を下ろして一息をつく。

ここまでで色々歩いた。まずは適当に歩いていき、目についた何かがあれば三人全員でそちらに寄ってみて見物。そして気に入れば購入していくなどして今の時間帯は昼食前になる。

最初はローガンを挟んで睨みあっていた二人だったが、買った服などの装飾品が入った袋を持った途端に怪我をして療養している彼に任せるのは心苦しいと言ってからはそれなりに打ち解けている友人同士のように各店を回っている。荷物を持つのにあたってはローガンとしては男として任されて欲しかったのだが。

「……まあ、いいか」

吹き抜けになつている空を見上げ、そこから見える太陽に片手を翳してみる。燦々とした日光が掌を焼くが決して苦痛を与えないものではない。今の季節だと若干温かみを感じる、夏のようにうだるような熱さとは違う。

前にこうして戦場から、または関係がないような場所にまで来て空を見上げたのはい

つだっただろうか。もうそれも思い出せない。たった二カ月ほどで色々なことがあるどころかありすぎた。苦痛に満ちたこともあれば安らぎや喜びを感じたこともある。それが良い事なのか悪い事なのかもわからない。甘えるわけではないが幾分疲弊してはいるのかもしれない。

「矯正……自分の見つめ直し……か……」

ここに三人で来てARR15が最初に言つてたことを思い出す。グラウンドにいた頃の自分を彼女は どう見ていたのだろうか。最初は単に相棒を囮に背後から忍び寄つてM16と一緒に形だけの拘束を行い、後で見返りを求められる代わりに共同戦線を張つてその時の同僚を助けた。とは言つても、その時は頭が空っぽの司令官による巻き添えを食らい、気を失つてしまったのだが。

知りたいのであれば直接聞けばいい事なのだろうが、さすがに面をかかつてそんなことを聞くほどの胆力をローガンは持ち合わせてはいない。むしろ、恐怖さえ覚えることもある。

やれやれ、と溜息を吐いた時だった。サイドバックに入っていた携帯端末が震え、メールが来たことを知らせてきた。何かと思ひ取り出して操作してみると、今回の仕事の指示を出した指揮官のハリーからのメッセージだった。

『楽しんでるか？———』

「……おう、色んな意味でなく」

最初の一文に何故だか腹が立ったがその後もまだ続いている。ここで端末を投げるのは愚の骨頂だろう。

タッチスクリーンを操作し、三次元的に浮き上がる文面をさらに表示させる。

『——とは言つても君にそこまでの余裕があるかどうかも怪しいからね。できるだけ精神的に休んで欲しいと思つただけ、まさか45が嗅ぎ付けるとはね。この前の電話でも言つたけど謝るよ——』

まあそういうつもりで指示を寄越したんだらうなどは思つていたのである。

先日AR15がいつの日かぼやいていたローガンの独り言の内容を口にしていたが、情報だけでなく電子戦にも強い45が知らなかったことを嗅ぎ付けることのできる存在という、ローガンからすればハリーしかいなかった。彼自身が明かしたが、自分の持つている情報処理と収集の技術はまだ少年期であつた頃に45から教わつたものだったという。まだその頃は指揮官として働いていた自分の父親の仕事のことに對する好奇心への抑えが利かなかつたため、直接目的の情報を教えてもらうのではなく知るための手段を教わるということだった。何とも遠回りな、と思うがローガンからすれば生き残る手段の一つをまだ十代前半で身に着けたことに驚いた。それを言つたら、ナイフ一本で戦つてた君に言われたくないよと呆れられたが。

そこからは以下のようになっていた。

『——それで君に連絡だけど、僕としては望ましくなく本部での用事が長引いてまだこつちに残ることになったんだ。スオミにはもう話を通しておいたけど、あの子は本来ならやらなくていいことまでやっちゃうから心配なんだ。だから今日の外出が終わってからの明日からは様子を見てやってほしいんだ。彼女が危うかったりしたら止めて欲しい』

「……送信つと」

とりあえず了解の旨を記してからはそれからはなんてことのない、ここまでで逢ったことをかいつまんで簡単に報告し、最後には『体には気をつけるよ』と締めくくり返信。『送信完了』と表示されたら端末を元のバックに戻すとタイミングよくARR15達が戻ってきた。

「おう、お気に召すものはあったか？」

「私はね。でもARR15は恥ずかしがって無難なものしか選ばなかったわ」

「あんなの選べるわけないじゃない！布面積が圧倒的に足りなすぎるわよ！」

「だからっていつまでも地団駄踏んでちゃ意味ないでしょ。鈍感にして堅物のこんなだもん」

「こちらをじろりという擬音が似合うような目線で45が見てくるのに合わせ、顔を赤

くしているAR15がちらりと彼女に合わせて目を合わせてくる。『おん?』と首を傾げる阿呆に二人は向かい合つて溜息を吐いた。

「……ねえローガン。私達人形に限らず、女性が下着を選ぶのに何を重視すると思う?」

「男の俺にそれを聞くのかね?」

「うん。ここは違つたけど、他だと男の人も店内に入つてたりするわよ?」

45による剛速球どころかデッドボール寸前の内角の球にローガンはバッドを振らずに避けることしかできない。先程二人が入つていったのは女性用下着を販売している店舗だった。彼女ら曰く、店の前に看板で『男性の方はご来店をお断りしています』と事務的に知らせる店は珍しいと言うが、人混みの多い場にあまり来ることのないローガンにはわからない。

『性別・男 特性・公共の場においてほぼ無知』というステータスを抱える冒険者にパーティメンバーの笑顔と一緒に来る同士討ちは止まらない。

「それで、ローガンはどう考えてる?」

「……小耳に挟んだりしてるけど、機能性だけじゃなくて色とかデザインにも拘るつて聞いたことがある。それじゃないのか?」

「うん……まあ間違つてはいないわね。でも正解ではないわね」

「ていうか俺が言うのも何だが、公共の場で下着の話なんてするもんじゃなくないか?」

「大丈夫よ。全員がこっちの話に耳を傾けてるわけじゃないんだから恥ずかしくもなるともないでしょ?」

「いやそうだろうけどだからといってオールオーケーになるわけないだろ? 羞恥心ビンビンで俺はここに居づらんですけど」

冒険者が周りを見渡してみれば周囲を歩きかう人達の中でこちらに怪訝そうに視線を向ける村人たちがちらほらと見受けられる。人間だとか人形も多少関係あるのかもしれないが、男性でも女性にも恥ずかしく感じることも個人差というのはある。同性でも差があるのだから間違いはない筈である。

だから45は平然と話してはいるがローガンからすれば自分が話しているわけではないのに居づらい気分になる。その辺の認識はAR15も同じなのか落ち着かないように見える。

「私がどんなの買ったって、誰も気にしないわよ」

んなわけないだろ!と胸中で叫ぶ。ローガンも周囲の男性諸君も45は顔が整っている認識ではある。彼女の性格をよく知らない人からすればどのような下着を身に着けているのか興味を持ってしまっても如何せん仕方ない。ローガンも男であるため、全く気にならないと言ったら嘘になる。

そんな考えを見越してか、にまにまとした笑顔を見た瞬間ハメられたと気付いた。

「あらら♪ローガンはどんなのを想像したのかしら？」

「お前な……戦術人形でも多少は慎みつてのを持てよ。こつちだけが精神攻撃受けるんじや納得できねえよ……」

「いいじゃない♪それで、どうなのよ？」

「だからよ……」

言わんとしていることも会話の流れから察し、ローガンは嘆息する。自分にそのようなことに対する耐性がないからでもあるだろうが突飛すぎるだろう。せめて密かに考えさせる程度にしてほしいと思う。

それにしても、出会ったばかりの頃には想像できないことになったなとしみじみ思う。戦場で出会ったこの人形と今では硝煙の臭いや銃声もない場所に仕事ついでに遊びに来ているのだ。服も黒と黄色、白とグレーの戦闘服から青と白黒の私服を着ているのだ。人と出会うとどうしても初対面のイメージが先行してしまうことになるが、今となっては当時の凍てついた記憶が脳裏にチラつくことがあまりない。小悪魔のような悪戯をするようになったのも打ち解けたことによる変化ではあるだろう。それでもやはり変わらない物はある。例えばイメージカラー。性格面もそうだが404小隊の詳細も人形からすれば注意すべきものだろう。45がその小隊の隊長であるのだから、要注意すべきことだ。それらからするとローガンからすれば彼女のイメージカラーは警

告色の黒と黄色である。それにどこか一貫している部分を持つ45のことだ。となる
と下着の色は……はっ!?

気付いた瞬間には時既に遅し。ローガンが我に帰った時には45の笑みはさらに深
いものとなり、後ろ手に組んで前かがみの状態で覗き込むように近付いてきていた。

「あれれ〜?なんだか顔が赤いよローガン〜♪」

「おまつ、ここまで織り込み済みだったのかよ!?!」

「ローガンの事だもの♪きつと深く別のことを考えているうちに無意識に行くんじやな
いかと思ったのよ」

「どちくしよう、モロに術中に嵌っちまった……!」

「それでそれで? どういうのを想像したのよ? 教えてよローガンっ♪」

「なんでそんなにウキウキしてんの!?! 俺弄ることにどういう楽しみを見出してるんです
かねえ!?!」

45の猛攻にローガンはたじろぐことしかできない。風前の灯火というわけではな
いが、ライオンや豹によつて壁際に追いつめられた鹿になった気分だった。

じりじりと距離を詰めてくる45からふと横に視点をスライドさせるとARR15が
いるのだが、彼女は彼女で何やら不機嫌そうにジト目でこちらを見ていた。

「……変態」

「小声で言わないでもらえます?!?普通に言われるよりも精神的に来ますことよ!!」

「いいじゃない。世の中の男性は全員がそうだって言うんだし今更でしょ?それともローガンは異性に興味がない口?」

「ちくしょう! ツッコミどころだけどここで否定したら特殊な性癖を持つ奴が寄ってくるからできねえ!」

「あら、やっぱりローガンはそうだったのね。見損なつたわ」

グサグサツ!とハートに銃弾どころか投擲されたナイフが何本も突き刺さり、その場で項垂れたローガンを45が腹を抱えて笑い始める。ARR15はぶいっと顔を背けてしまい、この場で自分の味方となる人物はいないことを悟らざるを得なかった。

ちなみに、ARR15に対してのイメージカラーは白や桃色、または冷静なこともあるので瞳と同じようなブルーであるとローガンは後日語ったという。したがって彼女の……おっと、これ以上はいけない。

気を取り直して店をまた回る前に、昼食をとることになった三人はフードコートの一
角にあつて他よりも大きくスペースが設けられているファミレスに足を運んでいた。

それぞれでメニューから頼む料理を決め、カウンターで受け取った三人はファミリ
用の丸テーブルの方へと向かい、それぞれ注文した料理がのったトレイを置いて食事を
会話しながら取る。

ローガンは注文したビーフカレーを口に運んでみると、食べやすい大きさに切られた
牛肉と野菜の食感とカレー特有のスパイシーで刺激的な辛味が味覚を刺激する。辛さ
の方は中辛を選択したのだが、おそらく正解だっただろう。ローガンはどちらかとい
うと辛党なのではあるのだが、そこまで経験があるわけではない。中辛でも汗が軽く出
くるのだから辛口ならともかく、激辛など数口が限界だ。

しかし辛味の中に確かな旨味があるわけで、牛などの培養肉などではなく、実際に牛
から直接加工した牛肉の美味しさに感動さえ覚える。

「うまいな……」

グリフィンでも滅多に食すことのできない牛肉に食欲が先行しそうになるが、夢中がつつくわけにはいかないよなど考えたローガンが皿から視線を上げると、二人の視線がこちらに釘づけになっているのに気付いた。正確に言えば自分自身ではなく、皿の上のカレーライスである。

「欲しいのか？」

「……別に」

下着云々の下りからあまり会話しなくなったA R 15がぶいつとまた顔を背ける度にローガンは嘆息してしまう。後々になって考えてみれば、部分的にだけでも否定すれば良かっただけなのだが、今更何を言っても効果があるとは思えない。

どうしたものかな、と頭を掻いていると、45が自分のカルボナーラをくるくるとフォークで巻いた状態でこちらに差し出していた。

「一口だけ取り換えつこしましようローガン。そっちも一口頂戴」

こちらが頷くと、45はさらに差し出したフォークの先をさらに突き出してくる。『おん?』と思つたローガンに決定的な一言が耳に飛び込んでくる。

「あーん♪」

んう!?!と隣にいるもう一人の少女が呻くが、そこまで気付くことはできなかつた。

こちらが何かを言おうと口を開こうとしたが、45は顔を赤くしながらも笑顔を浮か

べながら小首を傾げてくる。

まあいいか………と思ひ、彼女が差し出した料理を体の前に乗り出して啜える。途端に口の中に広がるのはパスタにはあまりないモチモチとした食感だった。ローガンはあまりパスタを食べないのだが、それでも牛乳などの乳製品が上質であるのに加えて、カレーを食べてた影響もあつてか一層感じるまろやかな味を感じた。

「……へえ、この店のパスタも美味いんだな」

「でしょ？ それじゃ、そつちのカレーも一口頂戴？」

45が自分から一口をくれたのだ。だったらこつちも同じようにしてやるべきなのかもしれない。現に彼女はニコニコ顔でいるわけだし、先程の下着の件よりも多少は羞恥心が働かない。下手に加速するよりも早く済ませてしまひあまり考えないのが吉だろう。

そう考えたローガンは一口を掬い取り、45の方にまで持つていく。

「……♪」

パクツとスプーンに食いつき、自分の口の中にカレーを滑り込ませると味わうように咀嚼している。やはり辛いのか飲み込んだ後でヒーヒーというかのように口の中に風を送り込むように手で仰ぎ始めた。

「は、このカレー辛いわね。これ全部食べれるのローガン？」

「まあ大丈夫だろ。たしかに他の店とかの中辛カレーよりも辛い食べれないことはないしな」

そう言いつつまたカレーをスプーンにのせると再び口の中に運ぶ。45もまた一口カルボナーラを口に入れると食事中だというのにルンルン気分の様子で再開した。

とそこまでできたところでようやく喉のつかえがどうにかなったのか、A R 15が自分の水が入っていたコップを置いて一息ついていた。

「……大丈夫かよ?」

そう言つて彼女のコップに水を注いでやり、元の位置に置いておく。はー……はー……と俯いて息をしていたところからA R 15はジロリと顔を上げてローガンの方を睨んできた。

「ローガン! 私にも一口もらえるかしら!」

「お、おう?別に欲しいならいいけども」

その謎の気迫に押され、ローガンはカレーを掬ったところで一瞬動きが止まる。

もう過ぎたことで45にしてやったりされたりとしたが、彼女のフォークと自分のスプーン。もうそれぞれの料理の一口目を食べる為に既に使用したわけで、そしてそれぞれお互いに食べさせるために使ったわけで……。

「……………」

「……ローガン？」

……考えないことにしたローガンはそのスプーンをARR15の方に向ける。そしてそのまま静止していると向こうも察したのか、頬を赤らめて口を開く。

「あ、あーん……」

そのままARR15の口の中にスプーンの先は消え、やがてのついていたカレーが消えた状態で出てくる。彼女がもぐもぐと口を動かしているが、ローガンは手に持っているスプーンをあまり見ずにカレーを掬って自分も食事を再開する。

そういう事を意識してしまったのであれば、店員に言っ替えてもらうべきだろう。だがこのご時世、銀食器も貴重になつてきているのでプラスチックの使い捨てのスプーンを使っている飲食店がほとんどである。しかもそこまで数も多くない為、ローガンとしても他意はないが渡された一つのスプーンを使い続けるしかなかった。

テーブル右側にいる45が無心で食べ続けているローガンをニヤニヤと見ているが、そのことに突っ込めば傷を最小で済ませようとしているこちらが本格的な火傷を負うことになってしまう。気付いてはいるが本来のペースで振る舞おうものなら痛手を回避できないので無視することにした。

とはいっても、視線を向けてきていた二人にカレーを食べさせてあげることではできなかった。これならもうこの場で考えることを放棄していれば特に何も問題はない。

だが、ローガンには一つ失念していたことがあった。彼女は言っただけでいいなかったものの、もちろん食べさせてもらったことに對するお返しというのはあるのであつて――

「ローガン、あーん……」

——無論、AR15からも彼女が食べていたミートソースドリアを食べさせてもらえるのである。

「ですよ、いや別に誰が悪いわけじゃないんだけどなんだよこの憤り……」

「ほらほらローガン♪せっかく食べさせてもらえるのだから早く」

「お前絶対楽しんでるだろ！笑う方がすげえ悪巧みを考えてるって書いてる感じなんだが!？」

「悪巧みって人間き悪いわね。知略って言つて頂戴？」

クソツタレ……、とローガンは歯噛みするが食べ物にも何よりもAR15に罪はない。ただ単に善意で食べさせてくれるようなものなのだから。

いつまでも待たせるわけにはいかないので、ローガンもままよとばかりに食いついた。ミートソース仕立ての挽肉とチーズの相性は以前に似た料理を食べた時から元から良いとは思っていたが、ここまでとは思ったことがなかった。トマトが苦手な人であつても問題は全くないだろう。それにカルボナーラもそうだったが、こちらの料理も

誰かから食べさせてもらったので美味さに磨きがかかっているとベタではあるがそう思える。

しかしここで思考の泉に蓋をしていたというのに、その蓋が重量のある鋼鉄製であったというのに吹っ飛んでしまった。

おかげでストップをかけていた自分のだけでなくARR15と45の使用している食器にも意識が向く訳であり……。

「ローガン、顔が赤いじゃない。熱でも出始めたの？今日はもうグリフィンに戻る？」

「そういうARR15も同じだぞ。帰るならお前じゃないのか？」

「私は大丈夫よ。カレーが辛かっただけで体調は絶好調だから。それよりもローガン、怪我が悪化して冷や汗が出ているわよ？」

「涙だから、これ涙だから。あまりのドリアのうまさに泣けてきただけだから何も問題ナッシング」

最早言っていることも滅茶苦茶である。

意地の張り合いとばかりに笑顔で睨みあう二人に45は楽しげにパスタを口に運んでいた。

15. これを、あなたに — We、I I wait u
n t i l y o u t a l k —

彼女に問われたことがある。『彼のことを、どこまで知っているのか』と。彼のことはあのハンターと出くわしたあの夏の時に聞かせてもらつた以外にも少年兵だつた頃のことでも後々になつてから教えてもらつた。銃を持たずにナイフのみで切り込み、殺害指示の標的となつていたグループの中心人物を殺しまわつていた日々。そうして今から十年以上前、人生で初めて殺しを失敗した。その標的は民生組織のEース部隊を率いていた中隊長で、既にご老体の身であつた男性であつた。楽であつたと思つてたのに、思つたよりも腕が立つたその男性はいつもと同じような手段で奇襲をかけて失敗。捕えられた彼は後に壊滅した暗殺グループと手を切り、徐々に性格から矯正されていつて座学から学び、次第に『戦い方』を『生き方』といった手段を教官となつた男性から学んでいったという。だが生物はいつか生を終えるものであり、人という種も同じである。その時はまだ第三次世界大戦に各国に使用された核兵器の放射能の影響が多く、人体に蓄積されていく放射能を除去する薬剤等もなかつた。教官は放射能によつて病気を引き起こし、彼に看取られて亡くなつた。それから多くの親しき者達と出会い、別

れを繰り返して今に至る、と。

そこまで知っているのは彼女——45——も同じだった。私達は彼に助けられ、今こうしてグリフィンにいる。しかし疑問が一つ残る。

私達が知っている少年兵時代、だが『それ以前』は？

彼の両親が亡くなっているのは知ってはいるものの、年代などを考えてみると十代に達する前に失くしたことになる。その詳細を私達はまだ知らない。

いや、下手に首を突つ込まない方がいいというのは理解している。結局は人の記憶に土足で踏み入れることになるのだから、熟考を重ねるべきだということも。他人に探れと言われたのだとしても、彼ののだとしたら私は『はい、わかりました』と即答することはできない。

好奇心や興味があるからとかではなく、『知りたい』とは思う。でも直感で知るべきことではないと、知ったら戻れないと私の中のどこかが警鐘を鳴らしている。

それによる気分の悪さを日々押し殺しながら、私は彼と共に歩く。



昼食を終えてからはまたモール内の店巡りを再開し午前中の時点ではまだ行つてなかつた店舗に足を運んだ。

私達の基地でも時折、小動物が迷い込むことがある。ある時は天気の良い青空が広がっている時、または嵐のような横殴りの風と雨が降る時などこれといった共通点がない日常生活中でだ。私達A R小隊の部屋の窓を開け放していたところで、一羽の小鳥が飛び込んできたこともある。

私はそうでもないが、人形の中には小動物を誰よりも一倍好む子もいる。それこそ、基地内で見かければ指揮官に飼いたいから許可して欲しいと直談判するほどにだ。そんな子に今の私達の指揮官は苦笑いを浮かべながらも許可証にハンコを押してくれている。でもさすがにこうして色んな種類のが一気に押し寄せられた場合、あの人はどのようになるのだろうか。

「つとと……ふふつ、甘えん坊ね」

「その子も可愛いけど、こつちの子は毛並みがいいわね。大人しく撫でさせてくれるわ」

そう、要はペットシヨップである。犬、猫などの小動物が種類も数も豊富に揃えられており、中には直接一歳に満たない猫と触れ合うことのできるスペースが設けられている。私と45も女性を中心のそこに入れさせてもらい、触れ合っている動物たちの子供たちとじゃれ合った。私は転げまわることはなかったが、45の方は背中を床につけてしまっただけで楽しんでいた。ローガンは私達がふれあい広場に入ってから外の方で各動物の説明書を見ているようだったが……。

「え……犬もあるんすか。ああ、いや別に買うつもりはないんですけど……まあ、見るだけなら……」

店員さんに案内され、私達から少し離れた箇所の方に向かっていった。

少し後ろ髪がひかれる思いではあったが彼一人にするのも如何なものかと思い、もう少しここにいると言う45を置いて私は彼の後を追った。

ペットフードや小道具の棚の間を小走りで抜けていくと、ローガンは猫のにも負けず劣らず人がいる犬のエリアにいた。ただこちらの方は猫の方とは違いふれあい広場のようなのはないが、ショーケースのようなのに入れられている愛らしい子犬たちが入っている。大型犬、中型など成犬となった後に大きさの違いがはつきりするものもあったり

しており色々と目を引かれる。

店員から用があれば呼んで欲しいと言われたローガンは端の方から見えていたので私もそちらの方に向かつていく。

「犬と猫の種類つてどちらが多いのかしら？」

「随分前に見たオールドネットの情報だと、当時は犬の方が圧倒的に多かったみたいだな」

「それつて大きさによるからつていう理由もあるわよね。でも本当にそれだけかしら？」

「たしかそのページで見た情報だと、犬は狩猟だとかの幅広い目的に合わせた品種改良で増えていつて、猫は愛玩目的だけだったみたいだな」

ローガンはガラス越しに目の前にいる中型犬の子犬にちよつかいを出すようにして指であちこちこちへと動かして遊んでいる。中にいる子犬も追いかけるように狭いスペース内で右往左往と動いており楽しそうに見えた。

「でもまあ、何を飼うかは人の好き好きだしあまり関係ないだろうな」

「昔から犬派と猫派とか分かれてるわよね。ローガンならどっちを選ぶ？」

「俺だつたら……犬も猫もどちらも良いところがあるのがわかるから悩むけど、どちらかといつたら犬かな」

「本当に犬なの？ローガンは猫派だと思ったわ。だってグリフィンにいる時とか飼っている猫に破顔しているじゃない」

「お前、午前からそうだとは思ってたけど俺にも言うようになってきたな」

SOPHIEなら『へへん』と言って笑い返していたことだろうが、ローガンには私の顔はどう映っているだろうか。笑っているのは私自身もわかるが、それがM4のような優しい物なのか、SOPHIEのように無邪気なのか、M16のような男勝りのものか、ROのように静かに微笑むようなものなのか分からない。

だけどローガン自身も笑っているのだからきつと悪くは映ってないのかもしれない。そこからは会話しながら見ていった。ネットの画像で見た通り、販売されている子犬にも色々な特徴があった。胴が長く脚が短い子、毛がふわふわで体が一層大きく見える子、毛先がカールされている毛で被われている子などいて、グリフィンで飼われている子犬とは違っていて新鮮だった。私とローガンは近くに張り出されている説明文を読んだりもして『この子犬はくみいだな』と言ったりして楽しんだ。

ペットショップ内には小動物だけでなく、鳥なども扱っており、後になって合流した45とも一緒に見て回る。

「へへ、ここはフクロウも扱っているのね。飼うのに値段は張るけど」

「たしか前にファンタジー系の昔の映画をグリフィンの希望者全員で見たわね。大ヒット

トシリーズだったこともあっておもしろかったけど」

「主人公が魔法学校に通う前にフクロウを飼い始めて荷物まとめて学校へ……ああいうのもたまには悪くない」

「私達その時は別用で見れなかったのよね。帰ったら見させてもらえるかしら？」

「たぶん大丈夫よ、見終わったら後に指揮官から全員が許可もらってる。また見たくなったり今回見てない子の為に視聴覚室に置いておくって」

「じゃあ帰ったら別日に404小隊全員で見ようかしら。その時はローガンも見ましよう？」

「俺はいいよ。また次回作が見つかったりするかもしれないし、それを見る前に復習がてらってことで」

後方支援任務で見つかったファンタジー映画の話をゲージ内でこちらを見ているフクロウを見て思い出す。あの日はAR小隊も他部隊の子たちの多くも時間を作って上映に立ち会い、ローガンと指揮官が機材を操作してホワイトスクリーンに映した。始まる前にローガンと一緒に淹れたコーヒーを飲みながら見ていたけど面白かったと思うし、あのシリーズが七部作まであるみたいだし見つかつたらいいなと思う。

「たしかグリフィンのまだ入ってない鳥かごが一つあったわよね。フクロウを一羽買つたらどうローガン？」

「二羽にどんだけかかると思ってたんだ。おいそれと出せる額じゃないのはお前もわかるだろ……」

「バカみたいに高いわね……。私達の一カ月分の月給を全て足して足りるのかしら？」
犬とか猫とも違う愛らしい姿なのに、こんなにコストがかかるのかと私は愕然とする。いや、単にあの小動物の彼らが安いわけではないのだが、一番高いのでも下手すれば一桁違うのもあった。それにフクロウの餌となる鶏肉やゲージなどの必要なものも考えていけば冗談にならない程の額になる。ここまでのことを聞いたローガンは冷や汗をかき、45も口元は笑ってはいるが完全に慄いており先程言った自分の冗談が捉えようによつてはとんでもない無茶ぶりであったことに気付いたかのようだった。

「そんなにするのに、あの映画での大男は大金をポンツと出したのか……？」

「どうかしらね……。描写としてはその購入しているところはなかったわけだし、ひよつとしたら少し苦い思いをしながら買った可能性もあるわよ」

「でもここですぐに買うことはできないわよね。ごめんローガン、悪ふざけが過ぎたかもしれない」

「いやまあ、大事になってないしいいけどよ。にしても馬鹿にできないなお前も」

そう言いながらゲージの格子を指で軽くつつん叩くローガンに、中にいたフクロウが『ヒュルルル』と一鳴きした後人間のように胸を張ったように見えた。



「アクセサリー製作体験？」

モール内の店舗を大体周り終えた私達はあとはどこを見ていないのかとパンフレットを広げたところで、宣伝をしているモールスタッフの人に声を掛けられた。

広場の壁際を見れば、そこには幾つかの工作機械が臨時のテントの中に置かれており、つなぎ等の作業を着ている作業員たちが工作機械を動作させて火花を散らす作業をしたり手作業で加工した鉄板を磨いたりしているのが見える。外からでも見学できるように窓のようなのがテントの壁面にあつた。

「はい、新開発された機器を使用してその場ですぐにできます。お客様にはその作りた

いアクセサリーの型の形を作ってもらえればあとはこちらで製作いたしますが如何ですか？」

「ローガン、どうする？」

渡されたピラにもう一度視線を戻したローガンは少し考えて、両脇にいる私達にこう言ってきた。

「俺は別にいいかな。でも二人がやりたいのならやっていいぞ」

「それじゃその間どうするの？」

「俺はちよつとまた行きたいところができたからさ。ちよつとそっち行ってくるから大丈夫さ」

「ローガンも作りましょうよ。三人で作って比べ合いとかしてみたいわ」

「それに惹かれないわけではないけど、俺はアクセサリーとかつけないしな……」

私と45でそれなりに粘ってみたがローガンの意思は変わらず、首を横に振るだけだった。

しかしこのままじゃただ単に時間を浪費するだけだったので私達が折れた。

「じゃあ終わり次第こつちに戻って来て。時間もそろそろグリフィンに戻らないといけなくなるぐらいだし」

「そうだな。んじゃ、こつちの用が終わったらすぐに戻るよ」

左手首にしている腕時計で時間を確認してみると、もうそろそろ陽も傾こうとしている時間になっている。季節も変わって昼間の時間も短くなってきたので基地にいる皆に心配をかけないようにした方がいい。何よりも今は指揮官が不在の状況だ。基地内では副官のスオミに余計な仕事を舞い込ませないようにしてあげた方がいい。

ローガンが人混みに消えるのを見送った私達は、スタツフの案内に従って作業機の椅子に座って説明を受けた。

工程としては、まず私達が作りたいたクセサリーの形を渡された厚さが2・3ミリほどの鉄板に罫書き、それをスタツフに渡す。私達がするのはそれだけであり、あとは作業員のスタツフが工作機械をつかって加工するのだが、最後の仕上げとして制作したアークセサリーの表面を鏡のようにすばやく加工できるといった。私達が鉄板を渡して出来るまで大体二十分かかるか、かからないぐらいらしい。

代金を支払ってから手提げ鞆を座った椅子の足元に置いた私は、最初にどのようなものか迷った。シンプルなもの、例えば十字架のような物も一瞬考えたが、それだとなにか宗教のようなのを疑われそうだったので却下した。そうして考えていくうちに、五芒星のような形を罫書いた。罫書くのに型などの当て板のようなのはなかったため、全て定規による直線だったが終わった後に見てみるとなかなか悪くない出来になった。

そうしてから横にいる45の方を見てみると、彼女は鉄板に404小隊の腕章と同じ部隊章を罫書いていた。

「……うまいわね。ほとんどフリーハンドよね、それ」

「まあこれぐらいわね。飽きるほど見てる私達のマークなんだしね」

音符が飛んでいるのが見えるぐらい、ルンルン気分で罫書いている彼女を横目で見て私は少し悔しい思いをしていた。単にアクセサリーのことではない。

今日の調査が始まってからは、ローガンは私より彼女と多く会話をしたりしている。単純に45自身がコミュニケーションを積極的にとるように彼にしよつちゆうちよつかいを出しているのもあるが、それでも毎回ちゃんと彼は反応しているので彼女は嬉しそうにしている。

それに比べれば私はどうだろうか。今日の集合時間には人混みで遅れる、下着の話で落ち度がない彼にモヤモヤした気持ちをぶつけるように当たってしまう、昼食時にはくだらないことで45と張り合ったつもりになって彼との意地の張り合いになってしまう。それだけじゃない。今日の買い物の時だって、ローガンを無理やり引つ張りまわすようにしてしまったことだってあったんだ。何をしているのだろうか、私は。

知らないうちに溜息が出てしまっていたのか、彼女がこちらを不審なものを見るように見てきた。

「何なのよ。いきなり溜息なんてついて」

「……ごめん、あんたに思うことがあつてついたわけじゃないわ。今日の私を振り返って自己嫌悪しているのよ」

「そんなネガティブになるほどの事なんてあなたにあつた？」

「他人にはないように見えるかもしれないけど、自分には少し堪えることがある。あんたもそうでしょ？」

『まあ、わからなくはないけど』と言いながら45は自分の作業に戻る。私もこれでもいいかなと思つたところで、一つ思いついたことがあつた。どうせなら、ここでいない彼の為に何か作つてあげるのもいいかもしれない。そう思い、スタツフに聞いてみたところ、もう一人分の代金をもらうことにはなるが構わないと言つたので、私はもう一つの鉄板に罫書きを行った。まずは楕円のような形に罫書き、その内側に一回り小さいサイズで同じような円を描く。その後で私の記憶にあるあのマークを表面として右側の方に罫書いた。ただ一つの記憶違いを起こしたくない為、たまに全体的に見て間違いないかを確認し最終的に確認が終わつたところでスタツフの人に45と一緒に渡した。

「……AR15、私はあなたが羨ましいわ」

「え？」

スタッフに渡した鉄板がそのまま作業員に渡され、確認が済んだ彼らが工作機械にセットし火花を散らしながら加工を開始する。そこで45が私にはつきりと聞こえる声量でそう言ってきた。

「ローガンとは私よりも時間を共にしている。それだけであそこまでの彼を引き出すなんて」

一瞬言っていることがわからなかった。だが数秒を空けてローガンの私に対しての態度のことだと気付いた。

「そんなことはないわよ。私なんてローガンに思ったことを言ってるし、むしろ傷つけてないか不安になったりするわよ」

実際その通りだ。

私にとってはAR小隊の皆は戦友であり、友人でありながらも家族である。家族であるのなら他としての認識よりも本音を話せることから、もうローガンは私にとって家族そのものだ。でもまだ彼の気心までは完全に掴めていない。最近になって日常生活だけでなく他人の射撃訓練でどこをよく見ているかなどの癖や着目点がわかってきたぐらいなため、まだずけずけと何も遠慮せずにといいわけにはいかない。M4達とはもう二十年は共にしているため、大体どういう事が逆鱗になるのかをもう把握できているが、人間であるローガンはその頃は私達の与り知らぬところで生まれて育っている最中

だろう。もちろんそうであるのだから彼がどういふ道筋を歩いてきたのかなど話でしか知らない。推測こそ触れない方が良いことは測れるが正解かどうかは別問題だ。

誰にでもそうだが、『完全に』誰かのことを理解することは難しい。だからこそ、慎重にというわけではないがある程度は反応を見る必要がある。

「それなのよ、AR15。私はそれが羨ましいのよ」

「……どういふこと？」

そう言いながら咄嗟に横にいる45の方を見る。彼女はテントの向こう側で行われている作業をずっと見ているが、その目はここではないどこかを見ているのがわかった。

「ローガンはきつと、私にも話している時は本音をぶつけてくれている。でも自分のことを深くまで探られないようにしてるような気もするのよ」

「それは誰もが同じことじゃないの？ 私だっていきなり自分の全部をさらけ出せと言われたら抵抗するわよ」

「たしかにそうね。でもAR15、この間話したこと覚えてる？」

窓の向こう側では余分の鉄板部分を廃材として捨て、削り終わった鉄板の断面に残ったバリを取り除くために鑢を掛けている。それだけでなく外枠の部分を斜めに削り見栄えも良くしようとしていた。

そこまで作業が進んだところでまた彼女の方に目線を戻すと、普段404小隊の隊長としては滅多に見ない、病室で見たような素の時の彼女が眉を伏せて俯いていた。

45が言っていることはわかるため、そのまま口にした。

「ローガンが私達に話してくれた過去のこと、よね？お互いにその部分では差はないってことだった……」

「そうよ。でも少し興味が湧いたから彼に関してのデータベースを調べたの。今ではそこそこ発展した民生組織に関わったりすると簡単なプロフィールが登録されたりするのは知ってる？」

「今になっては航空支援も徐々に立て直されてきているから支援に誤りがないようにするための簡易登録ね。戦闘機という敵味方識別装置みたいにUAVとかで位置情報を分かりやすく認識するための措置だって」

指揮官もグリフィンのデータベースに私達の情報を登録し、作戦開始前にコールサインをそれぞれ入力することで各人員のその時の位置を把握するためにしている。

戦闘機であればパイロットのHUDに視界内にいる別の戦闘機が敵か味方か判別できるようにするように、UAVが撮影している画面に映る人物や人形を色でも識別しやすくしているらしい。実際指揮官からも直接説明を受けたことがあり、それだけのプログラムを組んだことに感心したものだった。

現在ではそのアイデアが他でも生み出され、グリフィンや指揮官の組んだプログラムほどじゃなくても工夫がされていることは聞かされている。

「ローガンはいくつもの組織を伝つて今に至つていて、前に行った組織から調べてみたのよ。あなたは名前も知っているでしょ？」

『『グランド』のことね』

「そう、だからそこから調べただけだけど顔写真とかだけじゃなくそれまでの経歴とかまでもあったわ。でも問題はそこじゃなくて、グランド以前の他の組織のものとも全然違うのよ」

「え……？ 経歴がそれぞれで違っているってこと……？」

頷く45が嘘を言つてるようには見えない。私自身もあまり考えられないことに思考が追い付かなかつた。

「更新日時が登録日時から変わつてないことからデータが改竄されたことはないわね。すり替えもないことは確認してあるわ」

「じゃあローガンが嘘を、虚偽の情報を残しているってこと……？」

「それが一番考えられるわね。グリフィンに登録されている物とも全く違つてるし。でもどの経歴情報にも共通点が一点だけあったのよ。何故だかその関連の情報はどこにもなかったけど、『特殊作戦部隊タスクフォース116』という一番古い経歴だけは共通

してたわ」

「タスクフォース……116……」

「私達の404がそのように、ローガンも公にされなかった作戦に従事していたのはそこで初めて知ったわ。でもそうでなきゃ、あれだけ鉄血と渡り合えるのに納得できないわね」

「でもタスクフォースにいたことはあまり書かない物じゃないのかしら？」

「今じゃ敵となつていているのが人間だけじゃないし、大部分は鉄血との戦いよ。昔はそうじゃないでしょうけど、今ではそれだけの強みを持つてないと生き残れないわ。それに、これだけ一貫してあるつてことはローガンにとつても誇らしく思つてたりすることじゃないかしら？」

たしかにそう考えられる。あまり考えられないが、もし私も後々になつて違う組織に属することになった場合はグリフィンのAR小隊にいたということは書き残すつもりだ。隊の終わりが良くなかったのだとしても、そこで得た経験と思ひ出はなかったことにしたくないから。

でもローガンがまだ隠していることはあるということはこのままでわかつた。誰にでも隠し事というのには有り、野ざらしにするようなものではないことはわかつてはいたが、こうしてみると少し心に来るのがある。感情モジュールの誤作動とは思えない胸の

痛みが私を焦がした。

「でもローガンはあなたにならいつか全て話すと思うわよ？ 私だってそうしてもらえようにするつもりだけど、あなたは自分の考えや目的を全部彼に話してる。ローガンはあなたに共感を示しているし、誰にもない感謝の念を示しているのよ？」

「私に？ でもそんな大したことなんて何もしてないわよ。せめてケイドが、ローガンの親友が亡くなつてしまった時に傍にいただけで……」

『無力で泣きそうになつていてる人にただ手を差し伸べるだけでいい』。これ、ハリーから言われたことですよ？」

重く感じる顔を持ち上げた私に45は笑いかける。まだ胸をつつかえさせている物はあるようだが、それでも幾らかは体にかかつている負担を軽くできているかのようだった。

「差し伸べるだけのことはしていなくても、その場で受けた痛みをすぐに知ってくれる人がいてくれるっていうのはとてもありがたい事なのよ。簡単な同情は反感を買うだけだけど、ただ寄り添ってくれたあなたにローガンが何も思わないことはないわよ。むしろ、彼があなたにしてやれていることはないかと悩んでいるんじゃないかしら？ だから私は、AR15というあなたが羨ましいのよ。偶然とかが重なっただけにしても、お互いに他では見ることでできない『特別な存在』として見れるのだから」

やがて研磨が終わった鉄板に鏡面処理がされ始める。新開発されたという機器の上部が蓋のように開かれており、そこに45の部隊章のアクセサリーと私の五芒星と友に宛てたのを置くと何かのスプレーをかけて真っ白に染めると蓋を閉じて機械の電源を入れていく。ここまでくるともう完成も間近だろう。

それに45の言ったことに未だ実感が湧かないが、私はローガンのことを『特別』と見ていることをここで自覚できた。

彼と一緒にいれば心が休まるし、楽しいことがあれば一緒に笑いたい。怒ることがあれば諫めてあげたいと思うし、悲しいことがあれば一緒にいてあげたい。これがまだ先代指揮官の言っていた感情なのかどうかはまだはつきりとはわからない。でもローガンに対して親身になりたいという気持ちには偽りないと断言できる。

自分が知らないうちに得ていたことには気づかない。それでも私にだって45に劣等感を感じることであってある。

「……私だって45みたいに、ローガンをからかってみたいと思うことはあるわ。午前あの時みたいに、あの人の考えを詠んで籠絡して笑いながらからかって……でも最後には一緒に笑いたいわ」

「うん。だから私とあなたは対等よ。私は以前、ローガンの頬にあーしちやつたけどね」

「あ、あれは卑怯よ！私だってローガンに……！」

「ん、口では何とでも言えるし行動で示したらどうかしらね？」

「っ！」

カラカラと笑う45に私は地団駄を踏むことしかできない。でも私と彼女は顔を見合わせると笑いあつた。

私達AR小隊と404小隊には少なからず因縁がある。45自身にも目的の達成の為に平気で共同戦線を組んでいた輩を切り捨てることがあつたとの話もあるためまだ心底から信用できていないわけではない。しかしあの病室での最後の彼女の行動、そしてその言動からローガンに向けている気持ちに嘘偽りはないように思えた。だったら彼に自分から自覚あつて不和を齎すことはないはずだ。

そんな彼女は暗にこう言っているのだ。『彼が話してくれるまで待とう』と。

「お二人ともお待たせいたしました。また機会があればご来店ください」

「きたきた。……うん、ちよつと罫書いた際に形が怪しかったんだけどこれだったら問題ないわ。AR15、そつちは？」

「大丈夫よ。余計な傷も何一つないし、こういう仕事をする職人もまだちゃんといたんだって思えるわね」

やがて完成品が手渡され、紐などが通せるように追加で小さな金具がつけられている

二つのアクセサリーを私も確認してみる。どちらとも傷はなく、線に沿って五芒星の方は内側の鉄板も切り取られているのに加えて、若干星を描く線が丸みを帯びているようになっていなどとしており、服と一緒に身に着けるものであるのだから他よりも見栄えに気を払わなければならぬ為苦勞するらしいが、短時間でここまでの仕事ができる技術スタッフには『お見事』と素直に称賛を送りたいものだった。

もらった金属板を鞆にしまった私達は店を後にしようとしたところで、知っている顔が汗だくになりながらこちらに走ってきているのが見える。

私達にばれない様になっている隠し事もしている病み上がりの怪我人なのに、とは本人には言うべきだろうが私達は言うつもりはなかった。



時刻も夕方といえるぐらいになってくることには、もう今では陽も眠るように地平線の向こう側へとほとんど消えていた。

私達が迎えに来てくれた、作戦中では『ブラックバード』というコールサインの人間の男性が運転してくれた車に乗って数十分経って私達のグリフィンの基地に到着した。彼はハンドルやレバーを操作し、基地の車庫に納車してエンジンを切る。

「お嬢さん方、もう降りてもいいぞ」

「ありがとうブラックバード。ヘリだけじゃなくてマニュアル車の運転もできたのね」

「二年に一度やっていた車検もできない今じゃ、整備もなにもかも自分でやらないとだしこれぐらいはな。まあ不服なことと言ったら、グリフィンからガソリンを買わないとならないことぐらいだ」

「大変ね、自分の趣味を満喫するために組織から燃料となるのを買わないとならないというのはい」

「それはともかくよ、助手席で寝こけてる野郎を起こしてやってくれよ。涎でシートが汚れるんじゃないよ、助手席で寝たもんじゃないよ」

ブラックバードの言う通り、助手席ではローガンが窓の方に重心を倒して眠っていた。

彼が迎えとして到着して乗り込んだ後、ローガンはしばらく軽口をたたき合っていたが、一日の疲れがどつと来たのか少ししたら着いたら起こしてくれと言つて睡魔に身を任せていた。

「あなたが起こせばいいじゃない」

「男からすれば自分を起こしてくれるのは見目麗しい断然お嬢さんの方が良いさ。むさいおっさんが自分を起こしたってなんも嬉しくないよ」

「ならARR15、あなたが起こしたら？私はちよつと急いで404小隊の皆のところに行かないとだから」

「ARR15の嬢ちゃんなら大丈夫だな。そんなじゃ、おっさんはこつちの荷物を持つのを手伝うとするかね」

「別にいいわよ、私一人でも大丈夫だから。そんな風に点数稼ぎをしようとしても無駄よ？」

「おおつと、こつちの魂胆も見え見えかい！」

こつちが口を挟む暇もなく、二人は車庫から出ていく。

寝ているローガンと二人つきりになったことで高揚するような、小躍りをしてしまいうるようになる気分になる。二人が出ていったところで車内でまだ眠る彼を運転席から身を乗り出して揺さぶつた。

「ローガン。グリフィンに着いたからもう起きて」

声を掛けてみるが深い眠りに入っているせいか目を開けようとしなない。それどころか子供がまだ寝たいと言うように身を振ってこちらから逃げるように顔を背けた。

その仕草に腹立たしいといったもどかしさなどは感じなかった。むしろ、微笑ましかつたり尊いものを見た時に感じる胸の温かさが湧いて来た。

私はそこで肩に置いていた手をローガンの髪を梳く。出会った当初は刈り上げた髪も今では伸びており、私の指の間からこぼれてサラサラと音を立てた。

「……ほら、起きなさいローガン。AR小隊が、皆が待っているわよ?」

起こす為であった筈なのに、今はそんな目的意識はなかった。声色も後々になって思えば柔らかいものになっていたし、このままずっとこうしてローガンの頭を撫でていたという気持ちに溢れていた。

改めてこうして注意深く彼のことを観察してみると、男性としても整っている顔立ちであるということがわかる。耳に軽やかかる程度まで伸びた赤毛がほんのわずかに色彩を残している白髪に、彫りの深い顔立ち。顔全体も面長であり鼻も少し高い方だ。頬もすつきりしているし今は閉じている切れ長の瞼の向こうの栗色の目の温かさを私は知っている。

こうして眠っている今なら……と私の中の誰かが囁くが、今やっても意味はないだろ

うと雑念を振り払う。最初は驚いて彼に対して問い詰めてしまったが、それらに羨望があつたのは間違いない。いや、私も彼に口づけをしたことはあるが、二回とも意識を失う間際であつたためノーカンド。だから、彼がちやんと意識を持つていた時でないと思味がない。でも私が抱いている気持ちのことを考えればそうしてもいいだろうと新たな欲が語り掛けてくる。ローガンに抱いているのは友人としての友愛か？それともこうして頭を撫でていることで満たされている母親心？そうじゃないだろう、本当は気付いているがそれを言葉にするのが怖いだけだ。しかし私は人形、彼は人間。グリフィンにいたる人間の多くは私達人間と心を通わせているが、世間一般で見れば気持ち悪いものだということだ。それなのにローガンに身を寄せても、寄り添っても許されるものだと思っているのか？今は45の影響もあつて惰性で親しくできているが本当は断ち切るべきなのかもしれないのに。それでも……！！

「……っ。もう着いたのか？」

私が一人で内心で悶々としながら撫でていたら、ローガンは目を覚ました。体を起こし、助手席に座つた状態で欠伸をしながら上体を伸ばす。私は悩みながらもいつの間にか近くまで迫つていた顔を離した。

「そうよ、ローガン。まったく、起こそうとしてもあなたは目を覚まさないんだから」
「……ああ、わるかった。とりあえずもう行くとするか」

助手席の扉を開けてローガンは車から降りた。私も内に湧いて来ていた黒い思いを振り払って反対側から降車した。

ボタンツと頭にのしかかる嫌なものに蓋をするように扉を閉めたところでモールでのことを思い出す。持っている手提げ鞆に片手を突っ込んで探してみると思っていたものはあった。

「ローガン、ちよつと待って」

シヤラシヤラツと車に揺られながらモール内で道すがら買った鎖を金具に通して完成させたそれを持って私は車の反対側にいる彼のどこまで小走りで向かった。

「はいこれ。私からのプレゼントよ」

「これは……ドックタグ？」

IDタグとも言われる兵士であれば戦場で身に着けているそれをローガンはそれを片手で鎖を持って吊るして私に聞いてきた。

「それになんか型抜きされているな。長方形をジグザグに切つてたり、斜めに寸断してたり……。これはなんだよARI5？」

「そのマークに見覚えのないローガン？ 私達の執務室にもあるのだけれど」

執務室にある……？と寝起きの頭で首を捻り始めたローガンだったが、結局は思い至らなかつたようで首を左右に振った。まあこればかりは仕方ないのかもしれない。

ローガンからすれば、グリフィンが考えたこの部隊章に気付けるのは見たことがある程度で本格的な意味に辿り着くには独力では難しいだろう。

私は自分の携帯端末の画像にあったかどうかを検索し、見つかったのでその画像を映した状態でローガンに見せた。

「正解は『COLT』よ、ローガン。私達の腕章にもある部隊章っていえば思い出すかしら？」

「……ああそれだ！どつかで見覚えがあると思っただけだ！にしてもなんでこんな……」

「……実はね、あなたの歓迎会をしたあの日に色違いだけど私達と同じ腕章をプレゼントで渡すつもりだったの。でも当日に間に合わなくてダメだった」

「腕章を？でも俺は書類整理の部屋が割り当てられただけでお前達の分隊の一員じゃ……」

「そんなことを言わないでよ。私達を一度に助けてくれたあなたを私達が何も思わないわけじゃないじゃない。たしかにあなたはA R小隊の一員ではないけど、私達にとつてはかげがえのない友人であり家族なのよ。グリフィンの皆よりも身近に感じるあなたに、私達は贈りたいと思った」

私達A R小隊で頼んだそれはまだ本部からこちらの方に届いて来ていない。腕章一

つでなぜこんなに時間がかかるのかと皆と不満に思ったがない物をねだっても仕方ない。結局は届かずに歓迎会を催した。

だけど私個人で少し悔しい思いもしていた。45がワシントンD・Cでローガンに渡したスカルマスクだ。ニット帽と同じ紺色のコットン生地到手製のスカルペイント。型を使用してはいるが手作りであるのがわかるマスクであるが、ローガンとしても大事にしたいと言っていた。そんな手製のマスクと同じようなものして他に何がいいのかと考えて、私はドツクタグが思い浮かんだ。

ローガンはいつも服の内側に入れているため邪魔になったりすることはないと考え、あのアクセサリーの製作体験で実行したのだった。

「そういうことだったのか……」

「……でもごめんなさい。今考えてみれば私達の気持ちをおあなたに押し付けてるだけだわ。迷惑なのかもしれないのに……」

「んなわけあるか」

不意に伸びたローガンの右手が私の額を小突いた。コツンツという音とともにくる痛みで私は少し呻いてしまうが、それでも優しさに満ちた痛みであった。

「迷惑だとか考えてる奴であれば、こういうのをわざわざ手作りで渡されることがある筈がないだろ？……ありがとな、AR15。俺なんかの為にわざわざ作ってくれて」

「……どういたしまして」

素直な彼からの礼に私は恥ずかしいような、嬉しいような、とてもこそばゆくなってしまう。だけど決して悪いことではないから、私もローガンも笑いあつた。

その後は車庫からお土産を持った状態で出て私達の執務室に直行。二人で来たことに皆からからかわれてしまったが、それも一つの思い出。荷物整理を後回しにしていつものふだん着に着替えたところでもまもなく夕食が出来るという知らせが来ることから、私とローガンは執務室に据え置きのコヒーメーカーで少し温めのコヒーを淹れて飲んだ。たまにはと思つて、ローガンに合わせてブラックで飲んだというのにどこか甘く感じたのはきつと気のせいではないだろう。

16. 思わぬ来客 — Valuable dolls —

この短期間の間に何回も来ることになった部屋のドアを三回叩き、中から『どうぞ』という反応が聞こえたところで書類が束になったのを抱えている右腕の代わりに左腕を動かしてドアノブを動かして開ける。中に体を滑り込ませると、そこは先日自分も掃除を手伝ったこの基地の指令室である。正面に本人不在の指揮官への机があり、その右側には副官であるスオミが座っている。

「はいよつと。とりあえず管理地区の搬入資材のリストと地域の管理報告書はまとめてきた。これだったらあとはハリーのサイン待ちじゃないのか？」

「……ええ、たしかにそうです。ローガンさん、すいません。ここまで手伝ってください」

「気にすんなよ。ハリーに頼まれたつてのもあるが、困った時はお互い様さ」

以前に比べればスオミの顔色もだいぶ良くなっているように思える。人形に顔色なんてあるのかと思うところでもあるが、力なく笑ってたりもするのだからあってもおかしくはない。

三日前にローガンがハリーから頼まれた通り様子を見に行つたところ、中は酷い有様

となつていた。まだ夕方にしては明るい方だと言うのにカーテンは閉め、書類は床に散らばり、副官本人はその海に溺れていると来たらローガンだつて慌てるものだ。その日はとりあえずスオミを安静にさせて話を聞き、翌日は指令室の掃除と散らばつた書類整理をA R 15とR Oの手も借りて行つた。そうしてからはローガンもできる範囲でスオミの方の仕事も掛け持つことし、彼女の負担を軽減することにしたのである。しかしそれでローガンの方は大丈夫なのかとA R 小隊からは心配されたが、残業としてちびちびとやつていくだけでも徐々に片付いてきている。とはいつても、商業区の報告書も同時並行でまとめているのだが、今そちらの方はほとんどA R 15と45にやつてもらつてしまつている。彼女らに進捗状況を聞いたところは今のところ順調であり、あともう少しでまとまつているため最終的には目を通して欲しいと言われている。

それだからこちらの手助けにも集中できるのだが、これほどの事務処理はスオミ自身もあまりないのだ。加えて指揮官は不在であるため副官に回ってくる仕事は増える。これでは身体だけでなく精神的にも参つてしまうのは仕方ない事だつた。

スオミのチェックが終わつた書類をハリーの机に持つて行き溜まつている書類の山に積み上げる。ここにある書類の束の先はローガンも手を出すことはできない為完全に自分のできることはない。そう思いながら振り返ると、スオミの横にあつたともう過去のものになつた山が無くなつているのを確認できた。今はもうすぐ昼食の時間であ

る。

「スオミ、そろそろ昼休みだ。キリのいいところで一旦やめて飯食いにしよう」

「そう大雑把にはできないですよローガンさん。頑張ればあともう少しで、今日いっぱい終われるんですから」

「その中で、今日中に仕上げないとならないのはあるのか?」

座った状態で空元気という単語が似合うぐらいの作り笑いを浮かべるスオミに聞いてみると、彼女は机の端の方に重ねている束の方を見、考えた数秒後にもう一度こちらを見上げてくるが先程とは違い驚いたような表情になっていた。

「……ないですね」

「だろ? メ切がギリギリだったり近いのを優先的に俺がやつつけちまったからなんだが、気付かなかったのか?」

「全然気付きませんでした。手に取ったものの隅から隅まで目を通していたつもりだったのですが無駄だったのでしょうか……」

「そうじゃねえさ。ただ単にお前がそこまで気付けないぐらいに疲れてるだけだよ」

「そう、なのでしようか……」

そうだよ、と一言と共にスオミの額にデコピンを一発くれてやる。あうつという声を上げて少し赤くなった箇所を両手で覆った彼女に畳みかけるようにローガンは言い

放った。

「午後は久しぶりに外で体を動かしてリフレッシュして来たらいいさ。演習訓練でちよつと走つて来いよ」

「……そうですね。ではローガンさん、午後もちよつと私に付き合つてくれませんか？」
「はいよ」

ドクターストップも昨日になってようやく取り消され、ローガン自身も久しぶりに体を動かせると思つて少々ウキウキしていたのである。午前中は副官殿の手伝いを終えて午後は射撃のリハビリから始めて自分が組み上げた仮想訓練を最終的にこなすつもりだったので何も問題ない。

指令室からスオミと共に出て、昼食場のスプリングフィールドのカフェへと歩き出して数分して、昼休みを知らせるチャイムが鳴り響いた。

昔から学校などの教育施設で流されており今でも使われているものらしいが、ちゃんとした施設で学んだわけではないローガンには懐かしい気分になるといふのは今でもわからない。

そう思いながらも体の節々を鳴らしながら歩くと、並んでいるスオミが可笑しいものを見たかのようにクスクスと笑っていた。

「……なんだよ？」

「いえ、別に。あなたとは指揮官も交えての初めての挨拶でしたが、実際に三日前までわからなかったんですよ」

「あの時はあーなつてて塞ぎこんじまつてたからな……。がっかりしたか？」

もはやローガンとしてもうんざりする過去の自分の行いであり、グリフィンに来てからも塞ぎこんでいた二カ月ほど前のことに頭を掻きむしりたく欲求に駆られる。

顎に手を当てて少々思い出しに耽つたと思つたが、金糸のような髪と共に顔を左右に振るつた。

「暗い表情であつたのだから何かあつたのではないかと思ひましたよ。そうではなく単に他人を拒絶する人もいますが、粗方のことはA R小隊の皆さんから聞いていたんですよ。親しい友を何度も失うことを経験して何も思わないような人ではないだろうと私は考えましたよ。そう思っていたローガンさんが私の仕事を手伝つてくれているのですから、がっかりしたというのはありません」

「……つたくあいつらめ。どこまで言いふらしてるんだよ」

気恥ずかしくなつて白髪頭を掻くローガンをスオミは微笑ましいものを見るようにしている。しかしその純粋な視線はやや捻くれ者の彼にはキツイものがあつた。

「あ、やめて。そんな温かい目をこつちに向けなくてくれ、うわあめつちや恥ずかしくなるから勘弁してくれ」

「どうしてですか？ 私はこの数日間でARR15がどうしてあなたにこだわっているのか少しわかった気がしただけですよ？」

「なにこの子怖い。悪意つてのが一切ないままこつちを天使みたく見てくるんだけどこれ罰ゲーム？体がムズムズしてくるからやめてくれメツチャ走り去りたくなるから」

「廊下で走つちやダメですよ。急いでいる時は早歩きまで許されてますけど小走りからは基本アウトです」

「わかつてますことよ！ああこれ本当に悪意がないのが質わりいよなにこれ誰か隠しカメラで見てる!?なんか誰かが弱みを握ろうとしているわけじゃないよな!」

スオミ自身は裏表ない本心を言っているのはわかっているがこれを計算してカメラを通じてみている気がしてならない。実際の話、こういう風にしてこの基地の廊下などの数十ヶ所に監視カメラが設置されているが、それを利用してできる人形などはここに何体もいる。例えば正体不明の都市伝説の部隊の隊長とか、最近健康管理と称して体全体を確かめるオッドアイの少女とか、常にテレビゲームをプレイする欲求を忘れないことで一部では有名で暇潰しにハッキングをしたことがあることが最近発覚したゲーマーとかとか。

……ハリーよ、イントウルダーからの情報奪取をこの間されたことがあったということで何層ものファイアウォールを張り直したのはいいが、敵どころか味方に電子的な

防衛網が突破されているがそれでいいのか。

むずかゆさに身を振りながらカフェに到着し、同じテーブルの椅子に座ってこの後食べる料理をそれぞれ注文。それを受け取ってもらってから段々と込み始めたカフェ内を一望できる二階席から一回の方を見下ろした。

「小耳には挟んでいたけど、給仕できる人を雇っていたんだな。スプリングフィールドだけでも十分カフェを運営できるけど、昼飯とか夕飯以外でも利用できるようにする為だつて」

「そうですね。前線には出せませんが、指揮官も仕事を求める人達の要望にできるだけ応えるにしています。最初は兵舎の清掃員からでしたけど、今日からはこうしてカフェとかバーの運営に携わることになる人が来ることになりました」

グリフィンの管理地区、というよりハリーが基本指揮官として常駐する南アメリカ支部の基地の地区では要職者に宛てての仕事などの求人票が張り出されている。農畜などの食料関係の量産から溶接や機械類の修理など様々で幅が広い。そんなちらほらと張り出されている中にはグリフィンのスタッフを募集するものもあるのだつた。スオミの言う通り、最初はローガンも利用する人形達の私室などが割り当てられている兵舎の清掃員から始まり、今ではUAVや輸送機などの整備員なども雇われている。たまにローガンが仲良くしているブラックバードの元に向かうと少々危なっかしい手つきで

整備の仕方を教わっている、ローガンとあまり歳が変わらない若者がいたりしている。その者に教育者の男から自分が紹介されたとき、彼はローガンが前線で戦っている人間の兵士ということに心底驚いていた。

それもその筈である。

「保護区の方たちも今では鉄血と本格的に戦っているのは私達戦術人形だということを知っていますからね。本来は戦う必要があなたにはないというのに敵地で銃を撃っているのは驚くのも無理はありませんよ」

「まあ気持ちにはわからなくはない。民政組織を立ち上げて自衛目的で戦っているんじゃないわざわざ奴らに奇襲を掛けているんだからな」

スオミは先に来たミートソーススパゲッティを口に運び、一口目を租借し終えたところでナプキンで口元についたソースをとる。ローガンはまだこない自分の料理を待ちながら水を飲んだ。

「でもグリフィンに来てからもまだ戦うのですね。指揮官から頼まれたからかもしれないが、私達の教官としてここにいるだけでも良かったのでは？」

「教官と言われるほど俺はまだ歳食ってないし経験もない。技術がある程度備わっているだけで見たものの数は大したことないだろうからな。それに俺の見てくれも教官と言われてもおおかしくないような外見をしているわけではないだろう？」

「……まあ、たしかにそうですね」

「笑つてくれていいぞ。俺だつて今教官と言われたりするのさすがに寒気がするどころかそこに居辛くなる。それよりも正解らしい正解がない戦術を模索するのを手助けして欲しいぐらいだ」

「笑いませぬよ。鉄血だけでなく有効的な対人戦闘も教えてくださっているのですしね」

笑いあつていたところでローガンが注文していた料理が到着する。

実は彼の趣味としては、極東の国である日本関係の物品の収集である。アメリカなどにある機械類などよりも日本の物の方が丁寧で精巧に作られているという理由だけでなく、今から六百年以上前に建造されていて最近まで残っていた城など欧米では石造りのものよりも惹かれ写真なども集めている。つまり、食や文化に関わらず日本大好きマンだった。

そんな彼が注文したのは、カフェの昼食メニューとして追加された『鯖の味噌漬け定食』である。給仕する料理人の中に日本人がおり、その者が作った料理が美味いとスプリングフィールドからのお墨付きの情報を手前に入手していたため今日の昼食はこれを食べようと決めていたのである。

運ばれてきたトレーの上には橙色の味噌につけられた鯖とお椀に盛られた真っ白の

白飯と胡瓜の漬物。さらにはキノコのお吸い物といった以前にネットの画像で見たことのあるものと違いがほとんどない。

目の前の料理の光景にローガンの頬も緩む。

「ローガンさん、なんかとつても嬉しそうですね。具体的に言えば、念願の銃器などのオプションパーツが届いたみたいな感じです」

「残念だが俺の喜びはそれよりもクライマックス。子供からすれば数多くある掘り出し物の中から欲しかった玩具が見つかったような気分だよ！うおおお、いただきます！」

日本の作法よろしく、両手を合わせて食事前の挨拶を言うと言ったので食べるのに問題はなかった。

「もぐ……鯖のこの風味とライスの相性は抜群だとあつたけどなんかわかる気がする！むぐ……口内のリフレッシュで漬物は癖があるけどこれがまたいい！ずず……この汁物の味はコンソメとかにはない繊細さがあつて飲んでて飽きねえ！むおおおおお、鯖どころか日本料理ってこんなに美味かったのかマジで最高!!」

「……ローガンさん、その魚を一口もらえますか？」

「むおっ!?大人げないと言われても構うもんかい！誰かに取られるぐらいなら全部流し

込んでやるぜいくぞぞぞぞぞおおおおお!!」

そんなことを言いつつも良心が働いて鯖の一切れだけをスオミに残して皿の端の方に残しておくローガンである。イタリオンにもない味わいにスオミは頬を綻ばせ、次回は自分も注文してみようと思った。

鬼気迫る勢いでバクバクムシャムシャと口の中に詰め込んでいく姿に周りの人形達もやや凛しているが、同じものを注文して一口目を口にした彼女達も夢中になって食していった。

和食を食す日本人にはあるまじき流し込みではあるが、全てを綺麗にたらい上げたローガンは食後の為の緑茶をちびちびと飲む。独特の苦みとお茶自体の熱で食べていた時の興奮が落ち着いていき溜まっていた疲労が解き解されていったような気がした。

「はあく……こんなに満足度の高い飯は今までなかったな……ご馳走様でした」

「最後は味わうことなかった気がしますが、でも確かに美味しかったですね。量が少ない気がしたのですがそれも日本の料理の特色ですか？」

「腹八分って言葉があるんだよ。もう腹に入らないほど食うんじゃないやなくて、ある程度セーブして食事を終えるってやつだ。健康的にもいいし美容にもいいとかなんとか」

その台詞にピクリツとスオミだけでなく中年の男性や女性スタッフも反応したのが感慨に浸っているローガンは気付かなかった。

それどころか、息せき切って彼らの元に現れた人形がいたからである。

青のリボンでツインテールにしている赤髪の上のついている黒のキャップ、海賊を思わせる服装と男性であれば一瞬は目を引かれる胸元が特徴であるハンドガンの戦術人形、アストラであった。

「ああ、ちょうどよかったです！スオミ、本部の方から客人です！指揮官はまだ本部から動けないので副官のあなたが来て欲しいと！」

「えっ!?わ、わかりました、ありがとうございます！」

スオミは急を要することであることをアストラの様子から察し、椅子から立ち上がり、と小走りで廊下を走って行った。

『あるるるえ〜?言ってることやってることが全然違くね〜?でもまあ基本はつてだけだしいいのかなく?』とA☆H☆O面になっている釘刺され男だったが、会話の内容で気付き突然の来訪者に聞き返した。

『ちようどよかった』って言ってたよな?俺にもなんかあるのか?」

「そうでしたすいません。ローガンさん、あなたもスオミと同じく客人のところへ向かってください」

『なんでだ?俺なんかいけないことでもしたか?』と最近の行いを振り返りながら首を傾げるローガンにアストラは続けてこう言ったのである。

「伝言ですが、『シャドー隊のチームメイトになり得る人形を連れてきた』とだけ言われましたよ」

それを聞いたローガンはスオミが残した食器類もまとめて片付け、廊下ではなく外を走ってハリーのところへと向かった。

久方ぶりに全力で走ったが、脚に重石をつけたかのような感覚だった。

「OTs—14こと、グローザー14。あなたがローガン・ブラック？」

「ああ、そうだ。『シャドー』のローガン」

「見た限りじゃ、そんなに経験を積んでいるようには見えない。精々、民兵の相手をして

いるのが関の山じゃないかしら？いつ死んでもおかしくないわね」

顔を合わせるなり初対面の人形になかなか辛辣なことを言われたローガンだがまだ状況が全体的に呑み込めていない。言われたことによる腹立たしさよりもよろしくする気配がないことにやや不思議に思いつつ、グローザの隣にいる女性に目を向けてみる。右目にモノクルをつけている黒髪のその者は、グリフィンの女性用の制服の上に明らかに上級地位の者にだけ着用を許されているようなコートを肩にかけていた。

何者だ、と問う必要はなかった。横にいるスオミがその答えを出してくれたからである。

「お久しぶりです、ヘリアンさん。……いえ、ヘリアントス総司令。大分遅れましたが出世おめでとうございます」

「よしてくれスオミ。総司令になっても結局はやるが増えただけで本質は変わらない。何よりも君のところの指揮官にも負担が大きいのだから私はむしろ謝らないとだ」
ヘリアンという女性とスオミは親しげであることから、どうやらお互いに既知の仲であることが窺える。

それにスオミは今、彼女の事を『総司令』と言い直した。過去に民政組織に身を寄せていたローガンからすれば最高責任者の人間というのは、何もせずに部下に負担を押し付けるか、無能で人の事をボードゲームの駒のように扱うか、偽善者であり自分のエゴ

を押し付けてくる人間が多かった。

しかし本部からの客人ということでローガンとしては苦手な人間が来るかと考えたのだが、二人の様子を見る限りではヘリアンがどれにもあてはまらないのではないかと思える。

一旦区切りがついたのか、総司令官はこちらのほうに歩み寄り手を差し出してきた。特に断る理由もないのでローガンは素直にその手を取った。

「はじめましてだな。私はグリフィン本部で最高責任者として指揮しているヘリアントスだ。一応君に関してのことは紙面上ではあるが知っている。グリフィンとしては久方ぶりの人間がリーダーの部隊ということで注目している」

「……まあ一応名乗っておきますよ。ローガン・ブラックです、総司令官殿」

「やめてくれ、総司令と呼ぶのは。私としては普通にヘリアンと呼んで欲しいし、あいつの友人である君の事は大切にしたい」

「その口ぶりからすると、ハリーの先代指揮官と言うより親父の事を知っているようですね、そう……ヘリアンさん」

『ああ、そうさ』と頷くヘリアンと一緒に来たグローザを基地内にローガンとスオミは案内する。客間に通じた彼女達にスオミはお茶を出し、対面のソファに座るローガンの隣に腰を下ろした。

出された紅茶を一口飲んで唇を湿らせたヘリアンは一息は吐きつつ客間内を見まわす。

「ここも私が以前来た時のままかスオミ？ソファとテーブルの配置といい、置かれてる棚や資料もそうだが記憶の中の者と全然変わらない気がするぞ」

「そうですね、指揮官もあまり変えたくないようでこの家具はあまり動かさないように言ってます。もし掃除などで動かすのだとしてもちゃんと元に戻すようにも厳命してますよ」

以前ローガンがここへの基地に来たばかりの時に一通り案内されたが、この物品の配置が全く変わらないと言うのは初耳である。単に興味がなかっただけというものもあるが、ハリーからの説明にもまったくそのようなことがなかったのが起因だった。

見える範囲で注意深く見てみれば目の前のテーブルや座っているソファの真下の床板だけの経年劣化が進んでおりそれ以外のところは古くなっていることをあまり窺わせないだけの差が生まれていた。

「さて、ここに私が来たのはいくつか理由があるのだが……まずはここへの指揮官のハリーではなくなぜ私がここに来たのかを説明しようか」

「なぜ、でしょうか……？」

「心配するなスオミ。別にお前の指揮官が酷い目に遭っているとかではない」

不安と心配の色が濃いスオミが一番案じている人物の安否を告げたヘリアンはもう一度紅茶を一口飲んで口元からカップを離した。

「先日のワシントンD・Cの件でグリフィンに対し、作戦指揮をとった人員の引き渡しが改めて要求されたんだ。ホワイトハウスでの取り調べでは奴らにとってからすれば満足がいかなかったのだろう。それにあいつは応対しているんだ」

「まだ食いついてくるのか政府の連中は。鉄血からすればあのVIPは格好の餌だったのが今ではわかっているのに、自分達が蒔いた種の摘み取りをあいつにさせているのかよ」

「全く何もしていないわけではないが、つまりはそういうことだな。鉄血の侵入経路の洗い出しやそれに関する情報分析を今でもあいつの指揮で進めているだろう。今回私が出来たのはこの後説明することの代役だよ。それとだが……」

総司令官がこの場にいる全員に目をやり、なにを確認したのか表情が一層引き締まる。彼女の眼光は元から鋭いものだったがより一層のものになり正面にいるローガンを見据えた。

「あいつから、無視することは到底できないことを聞かされたぞ。全世界による戦争、世界大戦。私はそれを聞いて第三次世界大戦の延長戦どころか第四次のものになりかねないと考えているのだが、君はどうかな？」

単に前線で戦う兵士であるローガンに語り掛けているのでなく、同じ問題に直面している同志に尋ねているかのようだった。逸らすことなく真つ直ぐに目線を定めるヘリアンに、最近は何も緩めていた戦線に立つ者としてだけでなく人間としての考えを話すことにした。

「それで間違いありません。現にイントウルダーは生活などにおいて問題に直面した民政組織に援助と同時に見返りを求めての停戦協定を締結させて人類から情報を搾取していました。奴は自分の口から彼らに別国の武器を流し、アメリカからすればライバル関係にあるロシアに兵器などの情報を流したと証言しましたし間違いありません」
あれから幾分状況が変わった。悪い方に、だ。

まずは世界情勢だが、アメリカ並びにロシアやイギリスにイタリヤどころか中国などの極東の国までの緊張状態が高まった。情報をハッキングして入手した45によれば、彼らの軍事基地にも嘗ての特殊部隊が展開しそれぞれで目的としていた情報などの奪取が行われた。兵器の設計図に留まらず、それぞれの政府が隠していた機密情報が遠回しにも盗まれている国もあるのだとか。

そこで阻止に動いた自国側の政府側の部隊が交戦し、それぞれで損害を被ったのだというのだから目も当てられなくなってくる。アメリカ側は政府よりも戦力を蓄えているPMCであるグリフィンが動いたため他に比べれば軽いが決して無視できるわけ

はないだろう。ここからも血で血を洗う戦いが起こるのは避けられない。

次に入手した情報処理。元アメリカ陸軍基地にてロシアの精鋭の特殊部隊であるスペツナズと交戦し目的を達成したM4達。彼らが遠隔送信していた黒のデータファイルが示す数字とアルファベットの解読を彼女達が帰還してから解読しているが、何かの『座標』であることが確認されたらしい。何に對しての座標なのかは現在調査中であるが、進展することはあまり期待できなさそうだった。そしてAR15が発見した強化プラスチックの容器だが、中に微量に残っていた原子の解析からといった結果、生産国は不明だが高濃度の酸素であることが判明した。しかもただの高濃度酸素ではなく金属類を腐食させるのに特化したものである。実際の話、地球上からとれる鉄鉱石というのは酸化鉄と呼ばれても間違いない。そこから加工などを行う前に精錬して金属に交じっている不純物を取り除くが、鉄鉱石などの原石で無くなった金属類は原子的に不安定な状況なのである。錆と呼ばれる腐食は精錬とは逆で酸化鉄に戻るものであり、解析で判明した高濃度酸素はそれを急速に行わせるものだった。

今グリフィンの情報処理班からは多忙のハリーではなく、自分に直接通達されたのはここまでである。現在も暗号パターンが同じであるブラックボックスと『鍵』の解析は続けられている。

ハリアンはハリーから陸軍基地の事を掻い摘んで伝えられていたらしいが詳細の事

は知らなかったらしい。緘口令を解かれたため陸軍基地で得た情報も話したローガンの話に静かに耳を傾けながら適宜質問し、隣にいるスオミと斜め前にいるグローザも口を挟むことなく聞いていた。

「……なるほど、やはり状況は芳しくないな。鉄血の連中が日々動き回っているのはこちらでも掴んでいたが、そこまでのことをしていたことは把握していなかった」

「無理ありません。それに厄介なことですが、俺達の動きを監視しようと呼びかけている連中もいます。近いうちどころか明日にでも拘束するようなことを言われてもおかしくありません」

「それで、君は次に鉄血がどのように動くと思う？我々とは違い、『群』でなく単独でも奴らと戦ってきた君の経験からすればわかることはないか？」

「そう、ですね……」

ハンターを撃破してから音声ログを送信してきたアツシユの出方も気になる。どうやらイントルーダーの行動にも一枚咬んでいたらしいが明確な情報もない。

過去に一度接敵したことがあるがローガンは撃破の為の罠を作っていただけで彼女の姿を一度も見たことがない。見たことがあるのは、亡き相棒一人だけだ。

まだ鉄血の動きに関して必要な情報が揃っていない。45も時折探っているらしいが政府側のデータベースには大したものではなく無駄の一言で終わってしまうことが多い

いらしい。政府側の出方もわからないのでは対策の仕様がな

「……すいません。何も思いつかないです」

「そうか。いやすまない、無茶ぶりだった。常に最善の結果が出せるとは限らないのがこの世の中だし気にしないでくれ」

スオミにもう一杯の紅茶を頼んだヘリアンは最大の問題は済んだとばかりに表情を緩め、柔らかい笑みを浮かべた。それを合図と受け取ったローガンも幾分気持ちを緩める。

ここまで真剣に上の者と話すことなど久方ぶりであったこともあり、精神的にどっと疲れが押し寄せてきた。

そんな様子を見ていたのか外から来た人形はこちらにキツイ視線を向けてくる。

「さっきの話だけで根を上げてどうするの。鉄血との戦いは銃だけではないともう知っているのだから覚悟を決めなさい」

「……うーっす」

「そう言つてやるなグローザ。ハイエンドモデルの鉄血を短期間で二体相手にして生き残ったんだ。これぐらい大目に見てやれ」

やや口から自分の精神体が出かかったがすぐさま引つ込める。注ぎ直された紅茶を一口飲んだヘリアンは視線を横にスライドさせ、隣のグローザに固定する。

「それで次にここに来た理由だが、このグローザが隠密特殊部隊『シャドー隊』の一員としてなり得るかどうかをたしかめに来たんだ」

「なり得るってことは、まだ確定じゃないんですね」

スオミは刺々しいグローザの雰囲気になんともおどしなからも彼女のカップにも紅茶のおかわりを注ぐ。彼女はそれに対し礼を言うこともなく静かに見つめている。

「ああ、そうさ。シャドー隊の扱いはこつちとしてもいい意味で困っているんだよ。隊長であるローガン君の戦闘力は申し分なしだし電子関係にもそれなりに明るいよ。何より潜入にもうってつけだから作戦に起用でできる幅も広い。ただ、人形でないのが少し残念だったわが」

「……脳だけでも人形の体に移せと言われてんのか俺」

「そうじゃないさ。メンタルモデルのバックアップが取れないAR小隊の彼女達以上に君の扱いは慎重にしなければならないんだよ。色々との指揮官と話し合っているのは私も知っているし、内容的にも可能であるから許可しようと思っている。ただ、君の動きについてこれる人形がいるかどうかなんだよ」

自分の動きについてこれるかどうかにローガンは疑問を持った。五体が生まれた時のままで成長したローガンからすれば運動性能が良いのは人形である彼女達だと考えているからだ。実際その通りであり、嘗ての相棒のように両脚をカードリッジを消費し

ての高機動ダッシュができないし物事の対応もそんなに変わらない。

それなのになぜなのかわからないローガンにグローザは答えを出した。

「知っているとは思うけど、私達人形にも得手不得手というのがあるわ。命中率が高くない代わりに動きが早ければ鉄血を攪乱しての遊撃ができるし、銃弾がばら撒けない代わりに一発一発の射撃が正確なものもある。でも潜入任務に駆り出せる子はほんの一握りなのよ。加えてあなたと作戦を共にするのであれば状況に柔軟に素早く対応できる人形である必要もあるしね」

「実質その通りだ。今回私と一緒に来たグローザは戦闘経験もあるし、これまでの潜入作戦の全ても成功している。ただ、本人のパーソナルに少々問題があるぐらいで、な」

「問題はありませんよ、ヘリアンさん。私は私で……！」

段々と置いてけぼりになっていったが、結局はグローザが『シャドー』の、自分の相棒になるかどうかだろう。たしかに自分に対しても遠慮なく言ってきたあたりは少し思うことはあるが、言ってしまうえば『それだけ』だ。これまでも作戦に同行する隊員の中に厄介なのはいたが、それでもなんとかなったのだ。考えてみれば、誰とでも初対面から仲良くするというのは無理な話だ。

やることは変わらないと判断したローガンは頷いた。

「とりあえず了解です。俺も今日からまた復帰でリハビリとして色々やっついていくん

で、それを見て行つてもらつていいですよ、ヘリアンさん?」

「かまわないさ。なんなら共に射撃訓練からやつていくのもいいだろう。それと私も気になってるんだが、ここの演習訓練の難易度はそれなりに高いと聞く。実戦に基づいた応用だけだというのになぜそうなのか気になるから君さえよければこの後やつてみてくれないかな?」

「……まあ、体が持てばいいですけど」

他人の目があると集中力が削がれてしまうローガンはジロリとグローザに睨まれたが、結局は何も言つてこなかった。

お前は俺の母親かよとツツコみたくなつたが、よく見てみれば彼女の左手薬指に銀色のリングが嵌っている。人間であればそれがなにかを問う必要はないが、まだ戦術人形のことに関してはまだよく知らないローガンには少々気になった。

しかしそれを聞く間もなく立ち上がったヘリアンがスオミに尋ねたことの内容でそれが頭の片隅の方へと飛んでいった。

「さて……スオミ、先代指揮官の墓参りの調節を行いたいだいいか?」

「……あ、もうその時期なんですわね。わかりました、この後必要なものを用意します」

「先代指揮官の墓参り……?それつてまさか……」

「ああ、そうさ。私がここに直接来た最大の理由はそれさ」

ソファの方から客間から外に面した窓の方へと歩いていった。心なしか、反射して見えるヘリアンの表情が憂いを帯びていながらも懐かしむようなものに見えた。

「二週間後にハリーの父親、『トーマス・クロスハート』の命日だ。亡き友のためにも、ここにいる連中全員であいつの死を悼んでやりたいんだよ」

誰かの死を悼む行為。それに言葉では言い表せない苦手意識にローガンは空を仰いだ。そこは全く変わっていないことを窺わせる天井しかなかった。

ピーツ！とブザーが鳴った。ピットを走り抜けたローガンは持ってたP226のマガジンを抜いて装填されている弾丸を抜いて右脚のホルスターに戻し、今は弾倉が空に

なっているハニーバジャアのセーフティもかけ直す。それから正面の方に戻り電光掲示板に表示されたタイムレコードを見てみる。

「二十四秒……うくん、ブランクがあるとこんなもんか。大体はわかっていたけどこれはこれで凹んじまうな……」

「やっぱり久しぶりだと勘が鈍っちゃうわよね。反射神経とか状況判断もいつものようにいつてるわけじゃなかったようだし」

溜息をついたローガンの成績を見て話しかけてきたのは416である。

ローガンが銃を持ってこちらに來た際にここで訓練に励んでいた人形達の中で一番早く反応したのは彼女だった。彼がバジャアのマガジンに弾丸を装填していく間に彼女はピットを走り、敵を模しているターゲットなどを撃っては走りナイフで薙ぎ払って戻ってきた時に表示されたのは最高速の『十九秒』。演習訓練のランダム配置のようにこれもそうなのであり、配置がローガンと416のものも違っていたため入れ替わったかどうかはわからない。それでも溜息をこぼさずにはいられない。

ガシャリツと音を立てて銃器を休憩スペースのテーブルに置いてから椅子に座ってローガンは一息つくつと、向かい側に416が飲料ボットから自分の飲料水と同席者への缶コーヒーを持って渡してくれた。

「サンキュー……つとこの缶コーヒーは苦いだけだな。持ってきてくれたわけだし贅

沢は言つてられないけどカフェインが抽出できてれば問題なしじゃねえんだぞ……」

「カフェインレスのでさえもちゃんとコーヒーとしての苦みは出せているのに、それときたらただただ苦いだけ。本当にコーヒーを飲み続けてきたわけであれば砂糖やミルクを入れないと飲めないわよね」

「たまにであればこういうのもいいけど、恒常的に飲み続けるのはごめんだ。メーカーに問い合わせようかこんちくしょうめ……」

しかしまあ、グリフィンに来てから水以外の飲み物を飲めるようになったのはローガンにとつても一つの幸福だろう。紅茶よりもコーヒーを選ぶ彼からすれば、基地に帰還しても飲むものというのは殺菌されて飲料水として消毒した水しかなかったし、良ければ炭酸水、さらに運が良ければコーヒーといった具合だった。炭酸がはじける甘いのは保護区の子供たちに優先的に流していたので飲めるはずもなかったし、日本イエスマンであれば一度は口にしたと思う緑茶などは到底手に入る筈もなかった。

苦いだけの缶コーヒーを一飲みで空にし、次にまたピットに入る為の準備をすべくマガジンに弾薬を詰め始めたローガンに、416は尋ねてきた。

「そういえばローガン、あのお高くとまつてるお客様はどちらに？」

「……グローザの事か。あいつもピットにこの後入るけど弾薬類の補充とかで一旦戻つて行つたっけかな。射撃訓練からずっといて俺が実演した後にあいつもやって良い成

「續たたき出してたよ」

「午後になつてからずつと行動を共にしているようだけど、仲良くなるうとしていた姿勢が見られないわね。あなたのことを値踏みしているような目だし、命を取られることがなくてもなにかしらかの怪我を負わされる覚悟した方が良いんじゃないかしら？あれは死ななければ何をしてもいいと考えている奴の目よ」

「ご忠告どうも。できればその予測が外れていることを願うよ」

バジヤーの弾薬を込め終わったので今度はハンドガンP226の方に取り掛かる。

そうしていると、背後から肩を叩かれたためそちらの方に振り返った。

「よう、ローガン。久しぶりにこつちの方で見かけたから声掛けてみたけど、ようやく許可が下りたのか？」

「おおう、バルソクか。相変わらず音漏れのするヘッドホンを変えねえんだな」

「別にいいじゃないか。ビートに乗って撃つて走ることの何が悪いってんだよ」

「悪いとは言わねえけど、戦場じゃ音にも気を配ってる俺からすればあまり考えられないんだよ。でもマシンガンじゃ、お前さんを俺の部隊に推薦しようとは考えていたんだ」「おおつと、そいつは嬉しいことを聞いたな。そんじゃ時々教わっていたことは無駄にならずに済むってことだし、是非頼むよ」

マシンガンの人形の中では一番打ち解けている『AEK—999』こと別名『バルソ

ク』と正面から軽く拳を合わせると、彼女はヘッドホンを首にかけてローガンから見れば右側の椅子にドカリツと腰を下ろした。

バルソクとはマシンガンの射撃訓練から知り合い、陽が照っている昼間の戦闘よりも夜戦に関しての理解があるためお互いに仲を深めるのも時間がかからなかった。性格面の方も友人としての相性が良く、今ではトンプソンも交えて夜での酒も一緒にすることもある。

「それで、病み上がりからの最初のピットはどうだったよ？その様子からすれば、大体は予想できるがな」

「だったら聞かないでくれよ。その416の成績と比べてゲンナリしてたんだからよ」

「ちよつとローガン、私が悪いわけじゃないのにかませ犬にされるのはごめんよ。それにAEKをシャドー隊に推薦することって……」

「単純な話だ。こいつはたしかにアサルトライフルのお前達やサブマシンガンの45達よりも動きが幾分遅いがその分の火力がある。タイミングを合わせて同時制圧の射撃は別銃でやるにしても問題は無いぐらいに練習すればいい。たしか最近の演習では潜入系のをやってるんだっけか」

「現在進行形で訓練中だぜローガン。言われた通り、携行重量も考えてのサブマシンガ

ンを選んでいるさ」

ハリーからの特にこれといった指示はなかったが、自分で選抜して鍛えてはならないということには言われていない。屁理屈のようなことではあるが、ローガンとしても一から教えてみたいと思うことはあるのだし仕事の幅を増やすことも決して悪いことではないだろう。もちろん、バルソクはマシンガンであるため敵を掃射するために撃つのが本分だが、彼女がどうすればいいのかという意欲を見せたため指揮官様には後々報告するということで密かに訓練を共にしていたのだった。無論、いつしかROとグリズリーに言つてた通りに元々の役割を忘れないでという前提を置いてだが。

何よりもCQCの合同基礎訓練にも後々になつてから追い付き自分から教えを乞いに来たのだからローガンとしても手塩を掛けて育ててみたいのである。

そんな教え子がいくつかの資料を持つてた端末に表示させ、いくつかの質問にローガンも可能な限りに答えて見せた。

「……たしかにその方が早く対応できるし効率的だな。でもそれだと？」

「うん、こうした場合だとナイフで對抗される。私の銃じゃそれを防ぐのが関の山だよ。ここだつたらローガンはどうする？」

「俺だつたらハンドガンとナイフに持ち替えてエントリーするよ。お前さんじゃこういう閉鎖空間じゃ分が悪いし、装備が軽量なチームメイトに先頭を任せるのが無難だな」

「そっか。前に言ってた仲間任せにするのはこういうことだな？それぞれで装備とかに違いを持たせているのは役割分担を兼ねているのは……！」

「そういうことさ。そんなでもってお前さんにはサブマシンガンがあるのだから——」

見た目に寄らず熱心にメモを取ったりするところもローガンは気に入っている。ちやんと自分で考えて回答を出してから自分に質問してきてくれてるし、頭の回転も良いため教え甲斐があるのだ。分からないところがあれば質問し、その場で閃いたことがあれば経緯を追って説明してくる。その中にはローガンにも思いつかないものもあるのでこちらも勉強になるのだった。

二人でテーブルに資料を広げ、話し合ってる様子を見ていた416はまるで兄妹みたいだと思った。

そうしていると、ビットの方からビーツ！とブザーが鳴り誰かの演習が始まることを示した。

「誰かまたビットの訓練を始めるのね。あっち見に行くけど二人はどうする？」

「んじや、一回中断しておくか。バルソクも頭がパンクしかかかってるしな」

「んがあゝ……またあとでよろしく頼むローガン……」

一旦区切ったローガンはバルソクを連れて416の後に続く。休憩場所へと先程歩いて来た道から途中から逸れてビット全体を見渡せる高台へと続く階段を上っている

最中にブーツ！と鳴り響き訓練が開始される。高台に到達して位置に着いたローガン達は誰がピットに入ったのかをまず確認したがそれに目を見張る。

「グローザか……」

長いクリーム色の髪をたなびかせている戦術人形の少女がピット内を走り抜ける。

その光景を見たローガンは、彼女が本部からこちらの方に遠方からはるばる来ることになったのか後々になって知ることとなる。

17・容赦のない口撃 — Regrettably d

o l l —

ローガンの子供の頃にあったカーナビというのは目的地までの道のりを示した単純なモニターだった。衛星から送られてきた地図の道の上に赤や黄色などで混雑状況を知らせたり、急がば回れとばかりに時間短縮できる無茶苦茶な通路を表示させたりと彼にとってもこれといった良い思いではない。

しかしグリフィンというPMCの一員になってからは最新のナビシステムに度肝を抜かれたものである。なにせ、入力さえすれば自分が通るべき道筋がわかる上に片道ではないルートがわかるのだから。つまり、パターン化されているルートのうちの一つを選択すれば、単純に行って帰るの往復するルートが表示されるのではなく、見回りをするにあたって走行する道筋が表示されて辿っていけば次第に帰れるというものだった。

その日の仕事は警察という治安組織が行っていた仕事の一つであるパトロールをするものだった。いや、現代においても治安組織となる民間人を守る仕事に就いている人もいるのだが、今では昔ほどの力はないとされている。

「なんでだと思っ？」

謎かけとばかりに今回のペアはこちらに聞いてくる。

グリフィンのパトロールの仕事では、かつての警察のように車に二人で乗って行う。今回は初めてということ、A R 15がローガンに教えるということについて来てくれることになった。

ローガンは運転することになる車両のエンジンのメンテナンスが済んでいるのかの確認ということを開けていたボンネットを閉め、助手席側で全開にしている窓に頬杖をついてこちらの返答を待っている少女に言った。

「拳銃の携帯は許可されているんだろ？ となると扱う人間の方が寄せ集めの人材であるってヒントもあるし、緊急時の時の為の訓練があまりされていないから……じゃねえのか？」

「うん、それも間違っていないわね。でも結局は犯罪を起こす側の力が増強されているというのもあるのよ。今じゃ外部の民生組織の方に小銃が多く出回ってて町を見回っている人たちに十分な装備が回ってきてないの。それに乗じて、よからぬことを考える悪者たちは悪知恵を働かせて銃を奪ったりしながら力を上げているのよ」

ボンネットから助手席側の方に歩いていってA R 15の前に行ってみると、その顔は機嫌が良さそうに笑っていた。二日前の夕方にリハビリの訓練を終えたローガンに急

に来て後日からの数日間の仕事が何かを言いに来た際もこんな笑顔だったっけかと思
い返す。

「そうだったのか……。にしても随分と機嫌がいいみたいだな。何か良いことでもあつ
たのか？」

「そんなことはないわ。ほら、今日行くのは前線じゃないんだからそのニット帽を取つ
たら？ 武装も拳銃だけでいつもより動きやすいわけだし、少し気を緩めた方が良好
よ。それにそのままじゃ私達側じゃなくて犯罪者側みたいに思われちゃうし」

「別にいいじゃねえかこれぐらい。それに拳銃しかないからこそ、気を引き締めようと
していてだな……」

「何かあつた時は私だつて自分の銃を使うから大丈夫よ。ローガンは私のカバーをして
くれればいいんだから」

そう言っているAR15の背後——運転席と助手席のシートは一つに繋がっている
のだが——には、彼女の分身である『ST AR15』が収納されているギター
ケースを横したアタッシューケースがある。緊急時には即座に取り出して対応するため
に持ち出しているのだつた。拳銃も扱えるというのにそうでない理由としては、本格的
な犯罪者集団に対応せざるを得なくなった場合でも二人で確保できるようにする為で
ある。

実際のところ、過去にその事例に遭遇したM16とROは拳銃のみで苦勞したという。

それはさておき、ヅラをつけてるわけじゃないのに頭を押さえる男と、単に良かれと思っている少女の戦いは思ったよりも呆気なく終わる。

「いやじゃい、年寄白髪だと思われたくないんじやい。ただでさえ三十代だと思われてる人相なのに白髪でさらに歳寄りだと思われたくないんじやい」

「誰もそんなこと思わないわよ。それに前に染めたらいいと提案されたのに蹴ってたじゃないの。そんな我が儘言ってるんだつたら……!」

窓から身を乗り出したARR15の動きは素早かった。ローガンは反応できず、基地内では渋々被っていない黒のニット帽があつという間にとられてまた刈り上げられている白髪が陽の光の下にさらされる。

彼の頭が光つてるように見えたとしたらそれは錯覚であり、白髪が光を反射しているだけだろう。……たぶん。

「よいしょつと!ほら今日ぐらいはこの間の商業区のようにつけないで外に出た方が良いわよ!」

「あつ?!おいちよつと待てて!」

帽子を取ったその勢いで反対側の運転席から下りたARR15をローガンは取り返す

べく追いかけた。カーキ色の軍用車両を軸に二人でぐるぐると周りながら追い、時にはローガンが立ち止まって相手の出方を見たりするが当然AR15もこちらの方に車越しに体を向けて半身の状態になる。逆回りしようものなら当然もう一人も逆回転で逃げてしまい追い付けない。

脚力も最初はただただ軽く追いかける程度しか最初は出さなかったが、その程度じゃ追い付けないとわかれば今できる限りの全力を發揮させた。が、こちらは人間、相手は戦術人形。悪行を犯す人間も余力を残して制圧できるようにも設計されている彼女に追い付けるはずもなく、走り回ることしかできない。

それにどうしたことか、AR15は敵から真剣に逃げているような面持ではない。まるで子供達の鬼ごっこのように笑いながら楽しんで逃げているのだ。

「んなろ……ああくそつ！お前さんなんで今日はテンション高いのよ！こういう真似をするの大体はS O P I I だとか9なのにナンデAR15アイエエエエエエエ！」

「ほらほらー。さつさと私から奪い返さないと愛しの帽子は埃っぽい車庫の空気で見えない汚れで黒くなるわよー？」

「もう黒いですからね!?!いや別に毎日洗っているからとかそんなじゃなくて綺麗にしているからクリーンな筈……！」

「……ちよつと汗臭いわね」

「ホオリイイイイシットウ！ああああもうわかったから今日はもう被らないから返して！もうこれ以上俺のメンタルゲージを削らないでくださいまし！」

即興の鬼ごっこが終わり、ローガンの手元に私物のニット帽が返ってくる。ひつたくりに近い勢いでAR15の手から取り戻したローガンは走っている間に付いた汚れを叩き落とす。

パトロールが終わって帰ったらここの掃除当番に文句言つてやる……！と胸中で考えていると、彼の目の前にAR15が後ろ手に組んだ状態でクスクスと笑いながら出てきた。

「たまにはこういうのもいいでしょ？私だっていつも眺めてる側だったけど、少しはやってみたいとも思うことはあるのよ？」

「……お気に召したようで何よりだよお嬢さん。でもその為に俺のニット帽を釣り餌にするのはやめてくれない？」

「いいじゃない。気持ちにはわかるけど、こういう風にしないとあなたは動こうとしないでしょ？それに——」

トトツとステップを踏むようにしてローガンの額に触れる。今はそこに傷跡など何も無いが、半月ほど前まではそこに火傷や切り傷を負って出血したため包帯を巻いたりしていた。そこをまだグローブを填めていない手で優しく撫で、打撲を負っていた

左腕の方にまで視線と共に下りていき、背中を見るように首を傾げた後でもう一度こちらを見上げてくる。

いつもは宝石や青空を思わせるその目には、安堵の色があった。

「——もう大丈夫みたいね。よかったわ」

「……まあな。でもお前、俺の母親なんかか？そこまで心配してくれるのはいいけどもなんだかな」

「無茶するあなたのことだから目を離せないわ。私達人形とは違ってあなたは四肢の一つでも失ったら致命的よ。高機能の義手をとりつけるんだとしてもリスクは伴うんだからもう無茶はできる限り……ううん、絶対にしないで」

「……善処する」

「……そこは絶対にしないって言いなさいよ」

頬を膨らませるAR15の様子がおかしくなりカラカラと笑ったローガンは『わかったよ』と言って片手に持ったニット帽を自分達の車両の後部座席に放り込んだ。

イントルーダーを倒し、気を失った自分の元に駆けつける以前にも通信が途絶したあの頃からAR15は自分のことを心配してくれていた。そして45によって通信が復旧し繋げてから、世界に向けた陰謀を企てた片棒を担いだハイエンドモデルを撃破してからもだ。ローガンが弱りながらも意識を取り戻したあの時、彼女の表情は安心し

たようでありながらも帰ってきた家族を出迎えるようなそれだった。だが彼女の心境はどうだっただろうか。それはどうだったのかは今しがたの彼女の行動が証明した。

ここまで自分の身を案じてくれているのだ。絶対とはさすがに約束できないが、博打に出るような策はもうすべきではないだろう。やるんだとしたら、AR小隊の全員が、この少女が危機に瀕した時であり自分の命を投げ出さなければならなくなった時だ。

そう思いながら後部座席の扉を閉めたと同時に、こちらの車両の隣の方から声を掛けられる。

「ローガンさん、こっちももう大丈夫です」

振り返ってみればハリーの副官であるスオミだった。

元から二人一組で班を組んで管理地区内に向かうのだが、当たり前の話だがローガンとAR15の一組だけでは全域を回っていくのは時間的にも厳しい。警察がしていたようにパトロールではグリフィンからは二組が動員し、治安組織に属する民間人達と無線を繋げてから見回りに向かうことになるのである。

パトロールは依頼として定期的に来るのではなく、常に彼らとの定型的な仕事としており協力体制を敷いているのだった。

この基地では誰か特定の決まった人形に固定するのではなく、ローテーションを組んで大体一定期間で任されることになっている。例外はなく、AR小隊にもこのような仕事

は来るのだった。

今回はA R小隊に回されているのだったが、最近は机に向かつてばかりだったスオミの気分転換も兼ねてもう一班に推薦したのだが、手を振り返したローガンは彼女とバディを組む人形を目線で探すが見当たらない。

「……スオミ、お前の相方は？」

「あつ、それは……」

スオミが言いかけたと同時に、本基地へと続く階段に繋がっている通路の扉が開いて見知った顔が出てくる。その人形は、ローガンも知ってる顔だった。

カツカツツとブーツを鳴らしながら彼女の銃が入っていると思われる赤いラインのガンケースを肩に担いでいる人形は目もこちらにくれずスオミのいる車両の方へと歩いていった。

「……あなたも今回のパトロールに出ることになっているの？」

「まあな。とはいっても俺も初めてだから友人に教えてもらいながらになっているよ、グローザ」

「それは結構。でもあなたは前線に行かずにこういう仕事をやっているべきじゃないかしら。こつちなら死ぬ確率はうんと減るし無駄死にすることはない筈よ？」

「ご忠告どうも。ありがたい意見ではあるけど、俺だって一人で何も考えることもでき

ないわけじゃないんだ。自分で選んだ生き方なんだし自分がミスしてしまったんなら自分で取り返すさ」

ひらひらと手を振って客人であるグローザを送り出したローガンは剣呑で穏やかでない雰囲気を感じ取ったARR5に乗ってもらうよう、助手席の扉を開けて彼女の背に左手で軽く押すように当てた。それに渋々ながらも従ったARR5がシートに座ってから扉を閉め、自分も乗り込むべく運転席側の方に向かう。

そうしていると、並ぶようにしているもう一台の車両の運転席にいるスオミの方も見えるのだが、彼女も彼女で同じ車両に乗り込んでくるグローザとこちらを交互に見て何事かとあたふたしていた。

さすがにローガンもこれから彼女と組むことになっている少女に悪いと思い、グローザはこちらに背を向けていたため、彼女にローガンは右手でジェスチャーを送って謝罪を表現した。

「ローガン・ブラック」

スオミに謝った後で乗り込もうとしたローガンの耳にはつきりとグローザが自分の名を呼ぶ声が届く。体の向きは変えずに右肩越しに彼女の方に振り返ると、髪と同色で感情を宿しているのはわかっててもその正体までも悟らせないその瞳を向けてきていた。

「この間言ったこと覚えてるわよね？ 私は間違っていないと、そうすべきだと思ってい

る。時代の流れは変わって鉄血に限らずテロリストとの戦闘でも最前線には人類が割って入るだけの枠はなくなった。それなのに奴らの軍勢の前じや武装していても人間はほぼ無力なのに関わらず、銃を持って前線に出ているあなたのことが私は気に入らない。だから何をしてもあなたを私達のいる場所から排除するわ。覚えておきなさい」

そう言い残し、グローザはスオミに車を発進させてシャッターから外の世界へと飛び出した。こちらのと同色でバリバリ現役の乗り物はエンジン音を鳴らしながら走っていき、小さくなっていくと次第に聞こえなくなった。

彼女達の行った先を、音の行く先が見えているわけでもないのに視線で追って行ったローガンはシートに腰掛けてから安全ベルトを締め、すでに相手も同じことを済ませているのを確認してからキーを回して始動させる。ドルルルルルッ!と回転数が上がって完全に動かせるようになっていたのをメーターなどのパネルで確認し、ドアを閉めてハンドブレーキから操作しようとして気付いた。

「……ちゃんと話すよ」

何も言わずとも目で思うことを主張するARR15にそう言って、ローガンは車を走らせる。

だが走らせていながら隣の方から感じる彼女の気配が、先程の帽子を巡った時とは

打って変わって真反対の感情を抱えているのはつきりとわかる。彼女に対して抽象的な表現も何もいらぬ、静かに怒っている人物は声を荒げて怒鳴る人よりも恐ろしいことが少ないがあるのだ。ローガンが過去に知り合った人にもそのように何も喋らずとも垣間見るオーラのようなのが心情を明らかにしている人物というのはいた。

しかしこれまで出会ったどの人たちよりも今隣にいる少女は恐ろしい。ビリビリと自分の肌が振動しているかのような錯覚を覚えた。

何度も使いまわされているせいでポロボロになっっている手順表のように渡されている指示書によれば、パトロールの最初は管理地区の方で周囲を見回りながら車を走らせていくだけで予期せぬ事態が起こったりしなければ特別なことをする必要がないようだ。精神医学的にも早めに話してしまうべきだろう。長い間黙り続けているはローガンにもA R 15の双方に良くないことは明白だ。

それに、仕事の内容で注意点があるのであればスッキリした状態で聞いておきたいものだ。

「……そうだな。この間の俺が久しぶりに演習の方に行つてた時だったんだけど——」

肉食動物のようにトリツキーな軌道で動きながらもスナイパーのような正確な射撃を披露しピットから出たグローザの方に高台から下りて向かう。真横にいたバルソクと416がダツシユに近い勢いで数段飛ばしながら下っていくが、彼女達ほど自分は運動神経は良くない。若干小走りな程度でコンクリートによる階段を木製の手摺に右手を添えながら降りていき、最下段に到達したら突き当りの右の方に向かうとそこで三人の少女達はピット出入り口横のボードを見上げている。三人ともそれぞれ違う反応を示しており、腰に両手を当てて『ほえ〜』と言ってるかのように口を開けていたり、自分の最速レコードを塗り替えられたことで悔しそうに歯ぎしりしていたりする中で、もう一人だけは無表情で自分の成績を見ていた。

ローガンも見えてみれば、ボードに出ているタイムレコードは『十八秒』。ついさつき

『十九秒』を叩き出した416は踵を返して休憩スペースの方に走り出した。すれ違う瞬間、彼女の口から『私は完璧なんだから……絶対に負けない……!』という独り言も聞こえたため、自分の銃を持ってきて再びピットに入るつもりなのだろう。『たかが一秒』と思うだろうが、戦場で命の駆け引きをする身からすれば『されど一秒』だ。敵を倒すにも人質を救出するのもにも危険物を解体するにしても迅速な行動を求められているのだから、その一秒すらも惜しいものである。

テレビゲームでは味わうことがない悔しさを感じはするが、認めなければ大人気ないどころか基地で寝床を共にすることになる仲間に失礼だ。

彼女の人格からしても馬鹿にしているようには感じられないように注意を払いつつ、軽い拍手で両手を鳴らしながら素直な感想を口にした。

「いい腕だ、やるじゃねえかっていうか見事だよ。俺はもちろんだが現時点でこの基地にいる誰よりも早いわけだ。さすが本部の方で特殊作戦についているだけのことはあるな」

ヘリアンの言う通り、戦闘経験から得た実力は本当だろう。彼女の名前でもあり分身でもある『OTS—14』による距離は関係なく全ターゲットに対してのヘッドショットを決め、反応して即座に対応するのは難しいターゲットには瞬時にナイフを抜いて薙ぎ払って見せた。416のようなI・O・P社のハイエンドモデルはもちろん、それな

りに実戦経験を積んでいる人形であればできるだろうが、ローガンでは事前に知らされていたりしなければ到底できない。いや、それ以前に地面をバネが一気に伸びたかのよ
うな速度でありつつも長い脚でチーターのようにしなやかに蹴り上げて駆け抜けるよ
うな芸当はローガンにはできない。せめて自分の脚を早く動かそうと思うことしかで
きない。

「あんた本当はサブマシンガンの人形ってことはないよな？アサルトライフルなのにあ
そこまで動けるのはチートじゃんか……」

「別にそういうズルをしてはいない。身体のうちまい使い方を覚えれば誰にだってできる
ものだから、あなたでも努力次第でできるようになるわ」

「そうなのか？だったら教えてくれよ、私もあんな風に動けるようになりたいんだ！」

「ふふっ、もちろん」

最近では戦いにおける勉強に対する意欲があるバルソクはすぐさまグローザから学
べることは吸収しようと目を輝かせ、指南役となる人形の彼女はここでは初めて見る無
表情とは別のそれにローガンは純粹に意外に思った。ヘリアンに対しては上司と部下
のような接し方で、自分には塩対応であったというのに、今のグローザはバルソクの友
人のようなだったり姉のようにしてバルソクと意思疎通をし出している。

「足の裏全体を一度に地面につけたら着地の瞬間の衝撃が全部脚から体全体に来て負担

になるの。人間だとそれが体力を大きく損耗させるように私達の増強モジュールにも負荷がかかる。でも足のつま先のみで走るようにして、着地の瞬間のみに増強させるように意識すれば効率的に走れるわ」

「……ああそういうイメージ……でもその方法で走れるようになるのは平地だけになるんじゃない？坂道だとか階段じゃ無理な気がするんだけど……」

「力の方向、ベクトルの矢印をイメージして。今話した方法でなくても平地を走つていくとして、私達が進もうとする方向とは真逆の方向に力の方向は向くの。ほら、よくコミックとかで土煙を背後に上げながら走つてたりするシーンがあつたりするでしょ？あのようにして進んでいる方向に地面を無意識に蹴って前の方向に力を働かせているからなのよ。だから進む角度と蹴りあげる方向が変わっただけであつて使えないことはないわ」

「あくうん、なんとなくだけイメージ出来てきた。でも頭だけで理解してちや意味ないしあとで教えてくれよ」

「悪いけど、今日は彼の実力の程をみるようにヘリアンさんに言われているの。明日でも時間があれば教えるからそれで手を打って」

「そつか……なら仕方ない。これからちよつと自主トレしておくから、明日にでも訂正点でも指摘してくれよ」

『頼んだぞ〜!』とグローザに手を振りながら走って行ったバルソクがピットの待機場所からいなくなる。マシンガンの人形であれば悩みの種の一つである移動速度の低さ。他のカテゴリーの人形達に比べると明確に出るその差に頭を痛ませたりするのはバルソクも同じであるため、共通の問題を解決することが出来る技術を身に着けられるのなら彼女ならやれることはなんでもやるだろう。

今しがた初顔合わせしたグローザにしていたように、初対面だった自分に向こうの方から技術を学びに来たのだから容易に想像できる。

よくやるよ、と考えているとグローザはこちらの方にさつきとは違い無表情であるような感情を映さない瞳でこちらを見ていた。

「このピット自体はあなたは手を加えているのかしら? 実戦をあまり想定せずに作戦中においての集中力と反射神経を養うためにここは建設されているんだと思うけど」

「ご名答、とは言っても半分だ。ここのピットの建設目的はそうみたいだけど、俺が何かをしたわけじゃない。せいぜいコース内の遮蔽物となる壁とかの状態を見て、危ないのがあったらそれを教えてやるぐらいだ」

「本当に? 実はターゲットが立ち上がる位置を前とは別の位置に動かしてるとかないわよね?」

「ここのはランダム。俺が本格的に手を加えたのは演習であってこれじゃない。やりた

いパターンがあればそれを実際にできたりするけど、なにもしなければランダムだ。ホログラムの位置を戦術思考AIが決める為の基盤を組み立てたり演習場を立てるのに注文を出したただだよ」

嘘をつくメリットもこれといって何もないので包み隠さずにグローザに教えてやるが、完全に信じ切っていない様子で訝しげにこちらをずっと見ている。

とはいってもこれ以上この訓練施設で真実十割で話せることなんてない。一番最初の射撃訓練でもそれぞれのレーンで見える景色が違うだけでなく出現するターゲットも違うと説明したが、その時もグローザは睨むようにこちらを見るだけで何も追加で行ってこなかった。格闘訓練や総合グレネード訓練の時も言わずもがな。唯一食いつくような反応を示さなかったのは障害物をいくつも乗り越えて時間内にゴールへと辿り着く走破訓練ぐらいだ。あれでは一目瞭然だと言えるほど、昔ながらの木材や鉄筋を使つてのコースであつたため、改修や修理が何度もされているような跡があれば疑いようがない。

しかし最新の技術を使つたものでは当然のように慥然と食つて掛かる為、ローガンも精神的に来るものがある。わかりやすくいえば、イラツとした感情だ。

「ならそつちの方に行こうかしら。あなたが本格的に手を入れたのなら思考面での能力が測れるわ。今はまだ本調子じゃないみたいだけど、あなただつて今日中には自己記録

をこれからでも塗り替えるつもりでしょ?」

「……まあな。演習自体は訓練のそうまとめみたいにしたわけだし、基礎が出来上がっていないんじゃないとお粗末な結果しか出ない。まだ思い通りに体が動かせないわけだし今日はやめて復調に努めるさ。ヘリアンさんには後で俺から言っとく」

「じゃあ最後になつたらあなたの結果だけでも見に戻るということでいいわよね。タイミングさえよければ最後に走る時に来れそうだし」

そうしてくれとばかりに頷くと、一度楽な体勢になる為に立て掛けていた『OTS—14』のストラップを肩から脇の方へと通すと、ローガンに目もくれずすれ違つてピツトから出て行くこうとする。

彼女が視界の外に消えたことで一息つけるかと思つたら、ザツザツと立てていた足音が突然消えて立ち止まったことを知らせてきたことで、ややうんざりとした気分に戻りになった。

「そういえば聞き忘れていたわ。あなたはなんで犯罪者だけでなく鉄血とも戦っているの?」

グローザの興味なさげな声質から若干感情が籠つたようなそれになつたとは思ふが、それについては深く考えずに言われた内容に思いを巡らせる。

自分が戦う理由……それはなんだろうか。今になっては困らない程度にできてはい

る。敵によって打ち取られた仲間達の仇、鉄血による世界混乱を画策する企みの阻止、そしてアツシユという存在によって告げられた『オアシス』と『パンドラ』を突き止めること。だけどそれだけじゃない。

「……理不尽に死んでいく人達を、滅らす為だ。今じゃ戦場に立つ奴らは死ぬ覚悟ができていくわけだから命を散らしても文句はないが、兵士として戦う為にいるのだからある程度は仕方ないと思う。だからといって一緒に生還するために何もしないわけじゃないけどな。でもそれ以上に、俺はなにも抵抗できずに対策できずに死んでしまうのが許せない」

「……それがエゴだってわかってる？誰にだって予期できないことがある。流れ弾みたいに自分じゃない誰かを標的に撃った銃弾が命中せずに自分にめがけて飛んでくることが常日頃からあるのよ。戦場じゃなくても日常でもそんなことがあって理不尽に怒られる人だっている。自分は良かれと思っていたことが『無駄』の一言で切り捨てられたり、自然が敵になって自分には厳しい出来事を押し付けてくる。それをわかっているのかしら？」

「わかっているさ。それでも思わずにはいられないんだよ。誰だって寿命で死ぬるわけじゃなくて、戦死するだけじゃなく病死だったり事故死する人達だっている。そんな中でも俺ができることなら止めてやりたいと思うことが間違っているか？」

「子供ね。叶うはずもない願いを持ち続けるなんて」

『好きに言ってるよ』とばかりにローガンは自身を嘲笑する。

現実というのがどれだけ残酷に自分に牙を剥いてきたかなんて何回あった？それで何度も絶望したりしたというのに分からず屋の子供のように夢物語を抱き続ける。歪んでいることを自覚しながらもエゴを抱え続ける自分は醜い人間であることを毎朝自室のベッドから起床する度に思い出す。夢の中に逃げ続けられていたらどれだけ楽だろうか。

「……まあいいわ。でも私が一番気になるのは『なんであなたが戦場に立っていることに誰も何も言わないのか』なのよ」

半身のようにして左半身を背後の方に振り返らせると、疑問をぶつけてきたグローザは体の正面をこちらの方に向けていた。

「あなたの戦う理由や目的は何であれ、復元が人形よりも手間がかかる私のような人形達よりも人間のあなたを戦場に投入するのは何故？シャドー隊は隠密で基本は任務を遂行するけど、最近じゃ強襲作戦の方にも検討されるようにしているらしいわね。でもそれはまだ本部からも許可されていない、それは何故か。簡単な話、本部にいる私も含めた人形達全員があなたに不信感しかないからよ。ヘリアンさんは悪いようには言わなかったけど、簡単に死ぬ人間のあなたがなんで一部隊の隊長となっているのか、それ

が実際にわからないんじや背中を預けることなんて無理な話。銃が扱える人間であるのなら機械の整備や基地の警備に務めているのが筋なのに。私だってあなたと組むのは御免こうむるわ」

「なによそれ……ただの一方的な考えの押し付けじゃない……!」

過去の方に戻っていた振り子に戻して現在、赤信号になったことでブレーキを踏んで信号の色が変わるのを待っていたが、話を聞いていたA R 15の信号も案の定赤信号になった。ただし、公的に決められているように『止まれ』ではなく『怒り』だが。とはいつても、先日のことを思い出しながら話していたローガンも忘れかけていた感情の波

をまた思い出していたためそれを諫めようとしても形だけのものだった。

「落ち着けよ、ARR15。言い方はどうであれ、俺が本部にいる人形連中に不信感を抱かれている理由にも筋が通つてるし、あいつの言つてることには大体は納得できる。人類がわざわざ危険を冒す必要がないように戦術人形というのが生み出されたというのに、わざわざ時代についていこうとしない俺が銃を持つてわざわざ敵地に潜つているんだ。それに対して思うことがあつても仕方ない。それにこつちの基地にいる奴らにだつて、口には出さずともそう考へてる奴だつていたつておかしくないさ」

「たしかにそうだけど、こつちの支部にいる私達がそんなことは……」

「考へていないとは断言できない。俺だつてお前達の立場になつたら少なからずは思うよ。それに、だ。なんでここの基地にいる連中ではなく、本部の人形を引つ張つてきた理由がよくわからない。夜戦に特化していて隠密行動の心得もある人形はこつちにもいたというのに、なんでわざわざこつちからじゃ遠方から寄越してきたんだかな」

一分を過ぎたあたりで信号の色が青に変わり、二人が乗車していた一般車両がブレーキランプを消して前進し始める。ローガンもブレーキからアクセルペダルを踏んで車を動かした。

カーナビを見た限りでは十字路に入るように音声ガイドがそう言いながら指示してきており、ローガンと隣にいるARR15の間に取り付けられているディスプレイでも青

の道路標示が黄色に染められている線が直角に曲がっている。ローガンはそれに従って十字路に差し掛かる少し前からウインカーを上げて発光表示させて曲がって行った。しばらくは道なりの為、周囲に目を配っておかしくない限りは大丈夫だろう。

助手席で苛立ちを隠しきれていないAR15は少し考えた後で、運転しているローガンの方に顔を少し向けながら考えつくなかで一番可能性が高い想像を話した。

「単純に部隊の割り当てが全くされていないから、本部から寄越された可能性は？」

「考えられる限りじゃそれが一番妥当だろうな。だけどわざわざあそこまでできる奴を俺に割り当てることを検討することの意味は何だ？聞いた限りじゃ、結成された部隊には製造されたばかりの人形を当てていくのがグリフィンのやり方だろ？昔はちよつと違ってたみたいだけど」

「ええ。銃の扱い方とか基本的なことは学んだ状態であるだけで、実戦経験は全くないわ。配属される部隊への期待だとか当てつけとかじゃなくて、第三次世界大戦前の軍隊と同じように新人を一から鍛えていくようにって。そうすれば経験だけじゃなくて、戦える人形の数を増やすこともできて一石二鳥で戦線で戦える頭数を増やすことにつながるわ」

少数精鋭という言葉がある。その言葉の通り、少人数であっても戦闘力が一兵士より遙かに高いことを意味している。過去に少数精鋭の部隊を組んで大人数の敵兵と戦っ

たという任務記録は多く残されている。結果としては成功したものの方が多いが、その多くの全てでは犠牲がやはりある。精鋭として一人で同時に何人も相手にできたとしても、やはり限界がある。極端な例ではあるが、たった一人の猛者が破壊不可能な建物に籠っていたとしても、包囲している敵兵の数が百人いたのであればそれこそ多勢に無勢で風前の灯火というものだ。弾薬や備蓄が十分にあっただとしても、そこまでの圧倒的な差があったのであればどう足掻いても勝つことは不可能だろう。

そのためグリフィンは、経験を積んで上々の戦術人形にすることと並行し十分に戦える数を増やすために万遍なく隊の編成と育成を行っているのである。

「だからわからないんだよ。バルソクに教えていた走り方のコツからして、明らかに経験を相当積んでいる。それこそ、俺とかお前以上であることは間違いないし、大ベテラのM16に匹敵するほどのな。もしくはあいつ以上だ」

「M16と……。つまり彼女達が一対一で戦ったとしたらM16が負ける可能性がある……!?!」

「当人たちの相性とかその場の閃きとかにもよるが、ラウンド制で組み手したんだとしたら、おそらく単純な引き分けか、同スコアによるそれだ」

M16とグローザの二人は違った戦闘スタイルでありながらも戦場ではベテラン兵、それこそさきほど先述した精鋭というものだ。

訓練の状況をローガンが見た限りでは、グローザは自身の素早さを活かした速攻タイプ。一発一発の白人戦の威力はさほど高くはないにしても、躲しながら的確に弱点となる部分を見つけ出してそこを集中的に叩くスタイルである。

対して格闘訓練を共にしたことのあるM16の方は、動きはそグローザまで早くないしても攻撃を受け流しながら隙を見つけてはカウンターで重い一撃を叩きこむのをメインとしたバランス型だ。カウンターのみを攻撃とするのではなく、適宜急所となる要所を突いては大ぶりな一撃を誘導してくる戦闘方法にはローガンも後になってから舌を巻いたものだった。

そんな二人が戦ったとしたら、ローガンが言った通り結局は引き分けという結果で終わるだろう。三本勝負で組み手をしたのだとしたら、一本は片方にとられたとしても、第二ラウンドでもう片方が取り返す。そして最終ラウンドではお互いに接戦を繰り返して、同時にK.Oという結果で終わることが考えられる。

それらを総合してみても、やはりわからないことだらけだ。

そうなることが考えられるグローザがなぜ、シャドー隊の隊員候補としてあげられている？ 咬ませ犬だとしても、その犬は闘犬でありながらも血統書付きの上物のようなのであるためあまりにももったいない。彼女のこちらに対する態度は置いといたとしても、実力はそこの人形よりもあるのだから最高の部隊に配属するのが筋だろう。

わからないことなのだから聞こうにしても、情報通で自分の指揮官であるハリーは不在だ。となればグローザと同じく本部で働いているヘリアンに聞くのが一番かもしれない。

あのような人形間での問題があるというのに、『いい意味で困っている』と言った彼女の真意はなんなのか知る必要もある。

「とにかく、このことはヘリアンさんに聞くとして置いておこう。悩むことがあり過ぎる頭がパンクしそうだ」

「そうね……でもローガンは悔しくないの？ローガンにだって戦う理由と経緯はあるというのにそれが一蹴されたのよ？態度だって聞いた限りじゃ良くは全然聞こえないし」

半ば食いつくようにしてAR15がシートベルトをしながらもできる範囲でローガンの方に身を乗り出す。あまりこちらの方に寄ってくることはできなかったが、向けられる瞳からの強さが尋常でなく、運転しているローガンもその迫力に少々ハンドルを持つ両手の動きが止まってしまふほどである。幸いカーブでハンドルを切っている最中ではなく直進しているだけだったので大事に至ることはなかったが。

「……思うことが何も無いわけじゃないさ。でも現実がこうなっているんじゃ、ただ喚いてるだけじゃなにも意味がないしマイナスになるだけだ。下手にそんなことでもしちゃ、良くないことが連続して起こるだけだからな。でもな……」

「…………え？…………ううっ？」

ローガンは前を向いた状態で、右手でAR15の額を小突く。あてがってから少々強めの力で押された彼女は少々よろめきながらも額を押しえながら乗り出した状態から上体はこちらに向けたままで、普通に座席に座った状態に戻った。痛みが少し残ったため半眼でローガンをAR15を睨んだが、彼の目が優しく口元も軽く緩んだものになっていたためすぐにきよんとした表情になった。

「お前が代わりに怒ってくれてるんだ。本来なら聞いたとしても『ふくん、そうなんだ』ですませてもいいのにな。だから俺は我慢できるんだよ」

その台詞に目を丸くしたAR15だったが、おかしいものを見たかのように彼女はふふっと笑みを浮かべた。別に今も抱えている怖いもの知らずといった客人に対する怒りが収まったわけではない。だがそれ以上に、自身の感情を代弁してくれたAR15という自分がいることに少々嬉しそうにしているローガンが少しおかしかったからだ。自分じゃない誰かが怒ってくれているから嬉しく思うことがあるのはわかるが、それをローガンが素直に口に行っているのがAR15にとっても嬉しかった。

AR15が座り直したのを横目で確認したローガンは赤信号だったので止まる。今度は先程とは違って、自分達は車列の先頭車両となっていた。

「ありがとな」

「どういたしまして」

ローガンが発した礼にA R 15がありがたき返事をする。それだけで二人は顔を見合わせて笑い合った。それだけで、お互いに感じている火のように燃えていた感情は大分収まっていた。

一しきり笑ったことでA R 15は信号が変わるのを待ちながら、持ってきていたバツクから二つのコーヒーマットのペットボトルを取り出し、自分は微糖でローガンには無糖のを差し出した。

「それで、指揮官からはなにか聞けたの？本部で仕事に追われているってことは聞いているけど、もう少しでこっちに戻ってこれるって言うのは小耳に挟んだわ」

「残念だけどまだだ。送信したメールの返しも何もない。ハリーからも事の詳細を聞きたいからあんなことを言われた後で送ったんだけど、何の音沙汰もない。これじゃ、聞きたいことが聞き出せないし時間を見てヘリアンさんから聞くよ。あの人も先代指揮官の墓参りに参加するとかでこっちに来てても時間があまりとれないからタイミングを測るさ」

「そう。なら今度私にも教えて」

「はいよ」

ペットボトルコーヒーマットを受け取ったローガンは封を切って一口飲んだ。基地のカ

フエで淹れてくれるスプリングフィールドほどではないが、この間ピットの休憩場で飲んだ苦いだけの缶のよりも旨味があった気がした。

一口飲んだ後で蓋をして脇にある飲み物のポケットに入れる。その頃には横断歩道の方の青信号が点滅し、渡つてた人達は間に合わせるようにあたふたと小走りになったりしている。せめて、と思う。このような日常ができるだけ長く享受していたいと思う。先日からは問題に思うことができたが、それを除けば自分のいる支部の方に不満はない。ただ単に、私室だとか仕事部屋など場所的なものではない。

自分から戦闘技術を学ぼうとする人形達の中で特に意欲を見せているバルソク、それぞれマイペースに任務をこなしたり基地内で時間を過ごす404小隊の彼女達をまとめる隊長のUMP45、自分の事を本当の家族のように出迎えて仕事に限らず日常を共有してくれるARR小隊で参謀を務めるARR15。彼女達ともっと居たいと思う。可能であれば、もっと長く。

「……それと、ローガン」

一時は雲で隠れていた太陽からの日光がまた道路を照らし始める。横断歩道の信号も完全に赤になったこともあって、目の前の交差点で走っていた車の流れが遅くなってきたことからそろそろ自分達も進めるようになる。そんなタイミングだったため、ローガンはハンドルに両手を置いた状態で少しだけARR15の方に向いた。彼女は窓の方

に顔を向けて頼杖をついているが、反射してかすかに見えるその表情は微妙に笑っている。その視線の先では、小さな男の子が母親らしき女性に笑顔で手を引かれながら歩いていた。

「私はローガンには死んで欲しくない。だけどだからといって戦場に立たせないというのは間違っていると思う。そんなのは思いやりじゃなくて所有欲からくる保護みたいだから。だから私はローガンを守る為にも戦う」

「……ああ、わかった」

ちぐはぐであるのはAR15もわかっていているだろうが、ローガンは指摘するつもりなど毛頭なかった。『仕事をしたくないけど、金がないと生きていけないから仕事をする』といったように、嫌なことはあってもそれと同じぐらいに避けたい現実があるから臨む。人間が抱えるその矛盾じみた思考を悪く言うつもりなどローガンにはない。それに自分に思いやりを持って近づいてくれている少女からこんなことを言われて嬉しく思わないはずがない。その台詞に甘えることはなくても、せめてこのAR15という存在がいなくならないように自分が出る限りのことをし、彼女の思いを踏み躪らないようにしたいと思えた。

信号が青に変わる。ローガンはゆったりと車を進ませてから徐々に速度を上げて保護区の街中に車を走らせる。

進む先は雲によつて日光が遮られることのない、明るい道だった。

18. クレイジーストリート — Not decent

何事もゆつたりと起こったりするのではなく、予告も何もなく突然来たりする。

事前にアポを取ったりして時間を設けてもらい、話を聞いてもらうようなそんな平和な会社員のような日常を送っているわけではなかったことを忘れていたのは、しばらくの間前線から離れていたことによる影響だろう。油断をしていたわけではないにしても、仕事や体を動かしての訓練などにしても予想外の出来事というのは大抵気を緩ませたときにやってくる。

後でそう考えさせられる出来事がこの日に起こった。

『全ユニットへ通達。エリアN11-4のコールレストランにて銃撃事件が発生。この無線を聞いた全チームはただちに応援に駆け付けよ』

二日目のパトロールで昼食休憩を取ることになったローガンとARI5の二人はその時は何を食べようかと相談しながら車を走らせていた。現在進行形で巡回しているのでテイクアウトでなにかしらかの食べ物を車内で取る方向で話は進んでいたが、入ってきた治安組織からの緊急無線によりそれまで立てていた全ての計画はお流れである。

すぐにローガンは車両の警告ランプを光らせ、アクセルペダルを踏んで開けられていく一般車両たちによる道の合間を滑るように走らせた。

先日は保護区の西区の方を集中的に回っていたが、今日は北から東へと万遍なく巡回しようとする段取りを取っていた。そのため、今北区の道路の上で車を走らせながら昼食の相談をしていたこともあり北を示す『North』の単語の頭文字のNと座標の11-4は現在位置からモニターで見ると、ここからそんなに離れていない。車がかつ飛ばせば五分程度で到着できる。

それを確認した助手席に座っていたARR15は車内に取り付けられている無線機を素早く取り、有線で繋がっているレシーバーを口元に近付けた。

「こちらグリフィンパトロール。こちらからの応援も必要ですか?」

『願わくばお願いします。敵の詳しい武装に関する報告は来ていませんが、現場にいる隊員にも被害が出ているようです』

「了解しました。ただちに向かいます」

ARR15はレシーバーを元の位置に戻し、据え置ききの無線機の電源や周波数はそのままにし、左耳に付けているワイヤレスのイヤホンに片手を当てて呼びかけた。繋がっている先は、自分達とは別で保護区に展開したもう一つのパトロールチームであるスオミ達の方にはあるが、彼女にはない。先日ローガンが話した、嫌った態度を見せてき

た本部からの客人のグローザである。

「今の聞いたかしら？こっちはローガンと現場に向かう。そっちもスオミと可能な限り急行して」

『了解よ。スオミ、ここからだどれぐらい時間がかかる？』

『残念ですがすぐには無理ですね。今しがた、交通事故があつたようで現場検証が始まっています。交通規制もありますのでおそらく十分はかかります！』

「なら俺達で先行して治安部隊と一緒に現場を抑える。現場に到着次第、基本はあちらさんの指示に従う方針でいくぞ」

ローガンが最終的に行動方針をまとめるとスオミ達からは『了解』と返事が聞こえてきて、助手席に座る相棒は頷くのと同時にギターケースを模したアタッシュケースを展開し、『ST A R 15』を取り出すとマガジンを叩き込み、替えの弾倉を腰に巻き付けているバックパックのマガジンポーチに入れていった。

だが運転に集中しているローガンだが、少々引つかかることがあつた。今日のパトロールを始めるのに朝から憎まれ口を叩いてきたグローザからも素直な応答が返ってきたからである。

「グローザ、まさかお前から『了解』の返事が聞けるとは思わなかつたんだが。スオミから何か言われたのかよ」

『いえ、私からは何も言ってますんよローガンさん。さきほどもそうですが、昨日私と組んでから色々なお話を聞いただけです。ただ本人からは口止めされているので話せませんけどね』

『……そうよ。スオミには話したけど、他の人形やあなたには言わないようにしてもらっているわ。でも筋の通つた理由があるとはいえ、若干不満に思うこともあるわよ』
グローザの不満もわからなくはない。たしかに戦闘経験に関しては、もつと過酷な戦場で人間ではない存在と戦い続けているこちらのほうが上ではある。緊急無線で非常事態を通告した治安部隊に被害が出ていることからして、彼ら以上の装備を今回事件を起こした犯罪者達は持っていると考えられる。ならば鎮圧するのはこちらの仕事であり、犯人達を片付けた後の後始末を治安組織の者達に任せるとして銃撃に全力を注ぐべきではないかと、そんな考えを彼女は燻らせているのだろう。

しかしそうだとしても事件現場の状況を把握し切れているのは自分達よりも治安部隊の彼らの方だろう。単純な話、ローガン達は訓練も積んだ兵士ではあるが全ての状況を見渡せている驚ではない。無論、グリフィンとは違って町中を交代で四六時中見回っている彼らもそうだが、事件現場に行くわした場合誰よりも迅速に行動できるのは間違いない向こうの方に軍配が上がる。そうであるのなら、一番最初に銃撃事件に遭遇した治安部隊の指示に従い、必要であるのなら知恵や発想を、制圧するのなら武力を貸して

やる他ない。

指揮権を委任された場合はローガン達が現場の隊員たちを動員することになるとして、それまでは治安に協力する形を取るべきだと判断しているのである。

口には出さないが、グローザもそれはわかっているのだろう。敵数、負傷者、人質などを最初からできるかぎり記憶している治安部隊に協力するという形で戦って事件解決を行うことにするのであって、自分達だけが銃を撃つべきではないのだということ。

「……特にいう事ないならそれでいいな。そろそろこっちは現場に到着する。交戦状態になつたらしばらくこちらから通信できないから留意しておいてくれ」

『わかりました。基地の方には私の方から報告します。気を付けてください、ローガンさん、AR15』

「了解だ」

「ええ、ありがとうスオミ」

本道を通っているだけでは到着するのが予定時刻より遅れると判断したローガンはショートカットをするためナビが示していない小道を通つたりや無理矢理な運転で走り抜けていった。壁など一般車両にぶつかるすれすれになつたりすれば、AR15は少々身を縮めているのが時折声を漏らしている様子からわかった。

「ちよつと、ローガン！急いでいるのはいいけどもつと気を付けてよ！これじゃ事故を起こして事件どころじゃなくなる！」

「人生何事も経験で努力の連続つてやつだ！今日できないことがあれば明日やる、なんて生温いこと言つてられるかよ！停滞は一種の死だつてどつかの偉い人は言つてたんだしな！」

「それをこんな危なつかしい運転でしないで！……まさかだけど、昨日のニット帽を取られたことを根に持つてたりする!？」

「そんなことは全然ないツス〜！」

言つてることの信憑性があるのかないのかの判断がAR15にはできていない様子だが、嘘は言つていないローガンである。言つたことの八割がその台詞の通りであり、残りの二割はAR15の想像通り。だがそれ以前に全然という副詞がもうアウトであり、爆走魔と化した運転手がこの場限りの嘘つきであることが証明される。

無茶な運転と言つても、たまに歩道を歩く通行人を驚かせることはあるが、直接こちらがぶつかるといふようなことが起きないようにしている。車同士の事故も避けるために見通しの悪いところでは速度を緩めつつ左右の確認も行つており、運転しているローガンは事故には最低限の注意は払つてはいた。

あくまで危なつかしい運転をしている要所というのは行く先が見通せる真つ直ぐな

小道や、スピードをまだ完全に落とさずきつて道を開けているわけではない車両が多い本道である。

やがて窓を開け放つていて銃声が聞こえてくる。通達された現場の座標までもう少し。

「ほくれほれ、兵隊さんのお通りじゃ〜！安全運転の四文字をどつかに置いてきたおまわり代行のお通りじゃそんな俺が言っても説得力が皆無だけどなふははー！」

「ローガンあなた……解決し終わったら覚えてなさいよ……！」

コールレストランというのは、北側の保護区の中では三本指に入るほど客の出入りが多い大規模な店である。店の詳しい構造はまだ足が運んだことがないためよくわかっていないが、オフの日に行ったことがあるというS O P I IとR Oによれば、食事ができるようにしているテーブルが設けられているエリアは一階の広い店内や店の前だけでなく、外側の階段を歩けば二階もあり日当たりのよいラウンジのようになっているという話であった。

現場まであと数十メートルといったところまで車を走らせて停車させたローガンは、さきほどA R I 5が手に取っていたレシーバーを取って報告を入れた。

「グリフィンチームから現場の全ユニットへ。こちらは南西側の方から接近する、誤射に注意してくれ」

『了解した！現在交戦中だがやられてばかりで旗色が悪い、急いでくれ！』

レシーバーを座席に放り投げたローガンは運転席から下り、聞こえてくる銃声と叫び声に切り替える。先程までは遊び心も加えてクレイジードライブをしていたがもうそんなことをしているだけの猶予はない。

こちらに言いたいことがあるように睨むARR15の視線に気づいていないふりをしながら声を掛けた。

「急いで欲しいそうだし、気を引き締めていこうか。オフエンスを頼むぞ」

「それはいいけど……絶対にあとでやり返してやるんだから」

ローガンとARR15は車をロックしてから現場へと走り出す。

走りながら右足のホルスターからP226を取り出し、マガジンの弾数とタクティカルライトの動作も確認してからスライドをさせて薬室に弾薬を装填させた。

目的地まであと十メートルを切ったところで、ローガンの近くで停車していた車の方に弾丸が飛んできた。パアン！とボンネットの側面に穴をあけた瞬間にローガンは身を別の車の方へ隠し弾丸が飛んできた方を警戒。

「——二階ラウンジ、敵が三人だARR15！お前の銃で狙ってくれ！」

「目視で確認、了解よ！」

カバーしている車のボンネットに銃のバレルを乗せたARR15はスコープを覗いて

狙いを定める。

その間にローガンは耳元の無線機を調節し、重要作戦以外のオペレーターを基地の方で受け持つことになった最近配属された新人の方に繋げる。

「こちらローガン・ブラック、AR15と共にN11-4にて銃撃を受けた。これより交戦する」

『りよ、了解です！』

まだ駆け出しである新人から上擦った返事を聞いた瞬間、射撃体勢に入っていたAR15がパシユンツとサプレッサーによって銃声を消音して一発発砲。最近は特殊弾の『300BLK高速弾』を使用すべくバレルなども交換した『ST AR15』から排出された葉莖がアスファルトの道路にカンツと音を立てて跳ねていく。彼女が発砲した後で先程ローガンも確認したラウンジの敵が仰向けに倒れていったのが見えた。

「ワンダウン……二人目もダウン！」

「よしひとまずいいぞ、もう一人も突然の事で戸惑って隠れた。今のうちに行くぞ！」
車の陰から二人で同時に飛び出し再びレストランへと走って行った。

ローガンが銃撃現場に到着して見た光景の感想としては、昔のジャンルがアクションだとかサスペンスのハリウッドの映画であった銃撃シーンってこんなだったなんて風に頭のどこかで考えていた。

立て籠もる建物を背後に犯人はアサルトライフルを持つて銃撃、治安部隊はパトカーを映画の警察の特殊部隊のように壁にし拳銃で応戦している。ただ、やはり装備に差がある。

ローガンがパトロールに当たって着用している防弾ベストのように、グリフィンから支給されたそれは簡素ではあるがしっかりしている。ただし、鉄血など重装備の敵と戦うことを想定しての設計ではなく、腹のあたりにあるアサルトライフルのマガジンポーチはない。単に、町の見回りで制服の上から着用するための代物なのだ。

それと同じようなのを味方側の治安部隊の隊員達も身に着けているが、犯人達が着用しているのは鉄血と戦う時にローガンが身に着けている代物だ。

見た限りでの装備では、一丁前の防弾ベストとアサルトライフルって感じだなと確認したローガンは手前で様子を窺いながら応戦しているベストにアルファベットで『カイル』と刺繍されている隊員の方へと近付いた。

「グリフィンのローガンだ。現在の状況は？」

「ようやく来てくれたなPMC！今のところ、見ての通り膠着状態だ。被害は今のところ負傷者が六人で済んでいるが、あの小銃で前にはなかなか出れない！」

「ダタタン！」と近くの車両に着弾し、反射的に首を竦める。近くでは待機しているAR15が店の前で銃撃戦を繰り返している犯人を見て、口を開いた。

「敵数は全員で五人ですか？二階ラウンジにいる三人のうちの二人はこちらで倒しましたけど、地上にいる四人を合わせればそれだけになります」

「いや、表にしているのが全員じゃない。報告では事件発生時に店内に乗り込んできた犯人の数は十人強でまだ店内にも数人残ってる。逃げ遅れた人質もいることから我々も強行作戦が取れないんだ」

「人質もとって数人で立て籠もりか。……なら、まずは表側の制圧だ。AR15、いくぞ！」

P226の安全装置を解除したローガンは側面に回り込むために移動を開始。こちらの存在に気付いている犯人達もこちらに銃口を向けてくるが、撃たれる前にこちらから発砲した。

タンタアン！と二発分、薬室からパラベラム弾の薬莖が排出されて反動が手首に来るのが先日訓練で使っていたというのに久しぶりに感じてくる。

発射された二発の弾丸はこちらを狙っていた一人の犯人の防弾ベストに命中。バスバスンツ！と薄い金属がひしゃげたような音が苦悶の声とともに聞こえてきた。

「命中したのに行動不能にならないか……当たり前によるが、やっぱり拳銃じゃ火力不足だな」

ローガンが昔から使用しているP226で用いている弾丸である、9mmパラベラム

弾では防弾ベストを着用している敵には有効打には届かない。正しくいえばなっていないわけではないが、ベストの部分に当てているだけでは相手に衝撃とそれなりの痛覚を与えてはいるものの、体そのものに届きにくい。

製造に当たつての原料の削減だけでなく反動の軽減を目的とした弾丸では胴体に風穴を空けることはできない。

だが移動するのに十分な時間を稼げた。ローガンは半円状に展開している犯人達の左側に回り込むように走り、ひとまずは大きく動けた。

そこからさきほど命中させた犯人の様子を窺うべく、事件が発生した当初に巻き込まれたのか、運転席側で転がっている頭を撃ち抜かれてしまった一般人の死体をややどかすようにし、その車両と地面の間から覗き込んだ。

「ごめんよ………」

怒りを腹の底で点火させながら、死体になってしまった中年の男性を動かして確保された視界から見えた限り、さきほどローガンに撃たれた輩は命中した箇所の具合を確かめ、そこからこちらの位置を探っている。

「ローガン、ラウンジに残ってる残り一人を片付けたいけど、こつちからじゃ狙えない。高所を取られているんじゃないや私達も下手すれば撃たれるし優先したいんだけどどうにかならないかしら?」

こちらの動きに追従してきているAR15からそのことを言われ、たしかにと思う。今のところは銃声が消音されたことで方角がわからないところから狙撃されたと正しく推測をしたらしいラウンジの最後の一人は、今はまだ頭を出していない。本人の性格はどうかはわからないが、幾分はラウンジの壁で隠れ続けているのだろう。

地上にいる連中を叩くのも大事だが、なによりもそちらもなんとかしなければならぬ。それどころか、戦闘においての有利な位置にいるのだから優先すべきだろう。

「そうだな。さてと……」

現在の状況を確認。二階の敵を片付けるには、こちらがもっと高い位置、つまりラウンジよりも高さのある建物に見える位置に移動するか、それとも向こうが隙を見せてくれるぐらいだろう。

まずは前者だが、これは不可能。周囲にはコールレストランよりも高さがある建物はない。AR15がラウンジを見下ろすようにして銃撃が可能な建物は見える限りではないし、遠方にあつたのだとしてもそれまで治安部隊が持ち堪えられる保証はない。

後者だが、こちらも先述したことから現状から直接叩くのは無理だ。それにラウンジに上がる為の階段はレストランの正面からしか昇降口はないため、もし階段を使う手段を取るのなら正面の五人を制圧する必要がある。しかし五人を倒そうしている間にラウンジの敵が再び攻撃してくることも考えられる。

加えて、ローガンはグリフィンから指示されている通り、拳銃とそれに関わる物のにしか持ち込んでおらず、鉄血との戦いであれば毎回持ち出しているスモークグレネードはもとより投擲物が今はない。そのためスモークを展開している間に二階に駆け上がるような強硬手段もとれない。

昨日AR15から優しく釘を刺されたこともあるため、ローガンとしても自分から身投げするようなこともするつもりはないが、自分としてもそんなつもりはなかったとしても他人にはそう映ってしまうこともある。

さて、どうしたものかと考えていた時だった。

「なあ、AR15。俺がお前を上の方に跳ぶ為の手助けをしたとして、どこまで行ける？」

「……大体三メートルぐらい行けるかもしれないわ。でもなぜ？」

こちらからの質問に答えてから後で聞き返してきた彼女にわかるように、ローガンはコールレストランの側面と幅二メートルぐらいあけて隣接している別の飲食店の間にある、上の方に伸びている円形のパイプを指差した。

「俺がお前の踏み台になつてからあれでラウンジの方にお前が上つて、そこにいる奴を片付ければいいと考えているんだがどうだ？」

「悪くない考えだけど、ローガン自身が踏み台になるわけじゃないでしょ？ 正確に言え

ば、あなたの両手がそうなるだけで私が高く跳ぶだけなんだから、そんな言い方しないで」

「……意図してなかったんだが自虐と捉えられちゃった。とりあえず謝っておくよ」

もし今のように実戦で戦闘状態でなければ少々おちやらけていたのかもしれないが、今は非常事態で自分達二人以外の命もかかっているのである。空気を読まなければ説教を食らうことは目に見えているので、頭を覗かせたふざけた時の自分を抑え込み、タイミングを見計らって店の側面へと走り出した。

途端にこちらの位置を再度補足した犯人が血走った目で再びこちらを狙いを絞る。

さつきはこちらが早く射撃できたが、今度は向こうの方が早かった。アサルトライフルに限らずサブマシンガンなどの小銃よりも軽量で構えるのも早いP226などの拳銃でも、事前にストックを肩に当てて銃身を持ち上げている敵には早さで負ける。

しかし忘れてはならないが、ローガンやAR15の二人で戦っているわけではない。

ここに誰よりも早く駆けつけて対処に当たっていた彼らの存在をないがしろにしていたその男は、一度撃たれたことで頭に血が上ったのか脳内から自然と過ぎ去っていたようだった。タアンツ！と銃声がしたと同時に足に弾丸を受け、その場で転倒した。

「そのまま行け、援護する！」

銃声がした背後からの声に振り返れば、ここに來てからこちらに情報を提供してくれ

た隊員が拳銃のマガジンを取り換えながら叫んでいた。側面に回れたローガンはその者に親指を空に向かつて立てた後で、転倒して身動きが一時的にできなくなったその男に止めを刺したAR15にハンドサインでこちらに来るように指示。正しく理解したAR15は頷き、ローガンが援護射撃で陰から身を乗り出した瞬間に彼女はこちらの方へと駆け出した。一人がやられたことに気付いた他の覆面をしている犯人達は周りに叫び、残った四人の中の二人がこちらに銃口を向けてくるがローガンは発砲。装填しているマガジン内の弾丸を使いつくすつもりで撃ち、AR15がこちらの方に到達していることには、二人のうちの一人は銃のグリップを握っていた手を負傷し、もう一人は発砲した弾丸が一発頭部に命中し、額から血を流しながら倒れていた。

これで合計四人、敵から戦力を削いだなと思いつながらローガンはリロード。弾のある新しいマガジンを代わりに装填し、セーフティをかけて奥で待機しているパートナーの方へと走った。

「ローガン、いつでもいいわよ。人形としての力も使うつもりでちよつと手が痛くなると思うから我慢して」

「それぐらいいは承知しているし、どんと来いだ。むしろそのつもりで来いよ、高く跳ばないと反撃を食らっちゃうぞぞ」

「もちろんわかっているわよ、そんなこと。行くわよ……三……二……一……」

ダンッ！と初速をつけたA R 15は組んだローガンの両手に片足を乗せる。衝撃とともに彼女の靴の感触と思つたよりもない当初のままの体重が手に乗つた、その瞬間にローガンは自分の真上へと集中させた腕力を打ち上げる。

「うおおおお……らあー！」

打ち上げられたA R 15はやや真上に跳び、高さが3.5メートルほどのラウンジの手摺まで両手を届かせて勢いを殺さずに駆け上がっていくのが見えたのがそれまで。相棒が忠告した通り、痛くないわけではなかったがそれほどのものではない。どちらかというと痺れの方が大きい。

右手を大きく振るつたローガンはホルスターに戻していた拳銃を抜いて応戦が可能のようにすると、来た道を引き返し戦況を確認しようとした時だった。

『ローガン、ラウンジはクリア。残つてた一人はこつちが引き金を引く前に投降したわ』
「オーケー、仕事が早いな。そんじや片付けと——」

いこうか、とまで続かなかつた。今も交戦状態となつている本道の方に体を向けて歩き出そうとしたローガンの左斜め後ろの方から、バンッ！と裏の勝手口が開き、ぞろぞろと人が出てきたからである。咄嗟に反応できなかつた。なにせ銃を構えたものの、最初に出てきたのは見るからに民間人で犯行グループの一人でなかつたからだ。そのうちもう一人出てきたのが緑色の迷彩柄の防弾ベストを身につけて、民間人の背中に拳銃

の銃口を突きつけている男。目元や口元しか露出していないバラクラバも目に入っても、一番最初に出てきた人物に思考をもつていかれていたため反応が遅れた。

「撃ち殺せえ!!」

「っ!!」

タンタンタンツ!と指示を出したその男から先手を取られる前に咄嗟に発砲。射線上に人質はいない為、狙いを最低限にしかつけてはいなかったものの、喉元が弾けるように血が噴き出したため、命中した箇所は底だろう。でもだからといって、ローガンは一人を倒したからといってそこで安心してはいられなかった。

今撃ったのはリーダー格の犯人でほぼ間違いない。手に持っていたのは拳銃しかなく、身を隠したり人質を盾にするようなこともなしに、先にこちらが構えているのにも関わらず、攻撃をしようとしたことから戦い慣れていないことは目に見えている。

しかし、他人に攻撃指示を出すというのは上に立つ者がすることであり、部下が近くにいることを意味する。

「いたぞ! やれ、撃ち殺せ!」

「正義面したクソツタレが、ぶっ殺してやる!!」

一般人であれば突きつけられれば背筋が凍り、怯えることになるバレルがこちらに向けられた瞬間、ローガンは『ふざけんな』と内心で毒づきながら近くにあったごみ収集

のボックスの陰に飛び込んで身を隠した。

ダラララララララララララララッ!!とアサルトライフル二丁分の弾幕がマシンガンのように展開され、ボックスに着弾していく。

『ローガンっ、大丈夫?!』

「大丈夫、とは言えねえな！裏手の勝手口使って店の中から出てきた奴らと交戦中！そっちから狙えるか!？」

突然返事が途切れたことと裏手の方からの銃声で焦ったのか、相棒役の友人が無線越しにこちらの安否を確認してきたため銃声にかき消されないように怒鳴るように報告。

こちらからの援護要請に応えるために、さきほどローガンの手助けを借りながら跳躍したラウンジの手摺から身を半ば乗り出すようにしたが、何か問題があったようですぐに身を引つ込めた。その彼女にも狙いをつけたのか、一人がそちらの方にも発砲しだした。

「ダメ、位置が悪くて狙いをつけられない！射線上に人質もいるし撃つたら貫通して当たっちゃう！」

「ああくそっ！たしかにそいつは無理だな！」

しかもAR15にはタチが悪いことに、その人質を動かさないと来た。これでは新たな高速弾の有無にかかわらず、貫通力がある彼女の銃では延長線上にいる民間人に命中

し重傷を負わせてしまう。ローガンも釘づけにされており身動きが全く取れない状態だった。

町を大規模に破壊したりしないようにするための理由だというのはわかるけど、装備の規制をしゃがった野郎に一発怒鳴ってやりたくなる、と考えていたローガンだったが、彼の耳に犯行グループの者達の会話が聞こえてきた。

「もういい、お前達が人質と一緒にそいつを運んで行け！殿はオレ様がやってやる！」

「あんたがここで死んでしまったんじゃ今回の作戦を実行した意味がないのと同じだ！旦那が行ってくれ！」

「お前さんが逃げる為の時間をオレ達が稼げりゃ、もう成功したようなもんだ！頼むぜ、バーンズ！」

聞き取れた会話からして、殿を務めることでこちらを牽制しながら話し合っている。それ以上のことはまた銃声で掻き消され、なにも耳に届かなくなった。

「クソツ！鉛玉と銃声のオンパレードであちらさんの動きが全然わからねえ！」

「……時間を頂戴、ローガン。これだったら……！」

途端、こちら側にずつと撃っていた一つの銃声が消えた。横から覗いてみれば、一人が仰向けに倒れて力なく腕が投げ出されていた。コールレストランを見上げてみれば、二階ラウンジの屋根にARR15の顔が見えた。ラウンジの一部が屋内のように建設さ

れているらしく、二階よりさらに高い位置の屋根から射撃したようだった。さらに高い位置からの射撃であれば、角度も動き人質に当たることもない。

ナイスショット、とローガンが言う暇もなく、レストランラウンジの方に牽制射撃を行つた一人が最初にAR15を見つけた位置から狙いを動かし、新たに見つけた位置へと銃口を向けた。

その瞬間を逃さず、ローガンはボックスから立ち上がってP226の引き金を一回引いて銃弾を飛ばした。あつ、と向こうは反射的に一時こちらをノーマークにしてしまつたこちらを見、口を開いたがもう遅い。発射された弾丸は狙い通りに人体の急所に命中させ制圧。

すぐさま警戒しながら前進し、壁に背を預けた状態から曲がり角で飛び出してさきほど交戦開始位置の方に銃を構えたが、そこに敵と思わしき人影はなかった。いたのは数人の民間人で、耳を押さえて怯えているだけであつた。

「も、もうやめてください……あなたたちにはなにも……!」

「俺はグリフィンのローガン・ブラック。治安部隊の協力要請で来たが、こっちはもう大丈夫だ。だけどここにもう一人いたそうだけど、どこに向かったか見てないか?」

「そ、それでしたら、荷物抱えた状態で細道の方へ……」

数人の中でまだ精神的に落ち着いている一人の男性を見つけたローガンはそちらの

方に駆け寄り、銃で怯えないように自分の体で隠し、しゃがんで視線を合わせて聞いたところ人質を一人連れて裏路地の方に向かっていったらしい。指された方角は北東で砂利道のように舗装されておらず凸凹したような道だった。日当たりも良くない影の道の先にある下り階段の先は遠くに最近完成した高速道路が見えた。

元々北区はこの間ローガン達が出向いた商業施設のモールがあったりするように、建設技術が他よりも違う。新しい物が人々の興味や関心を刺激するように商業施設の発展が目覚ましいことから、建設の業者達も力が入っているらしい。

だが今回ローガンに対しては不利な状況を与えている。

「……この先は車とかの通行量が多いどころか人口密度も高いエリアだ。そんなところに行かれたら」

『……方が一、逃げた犯人がこちらに銃を撃ってきた場合、大混乱が起きること間違いないわね』

人混みの中で銃声を鳴らせば、阿鼻叫喚でこちらは銃撃戦どころじゃなくなる。民間人への誤射はしてはならないのだからこちらから攻撃が出来なくなってしまうのだ。

それでもこのまま見過ごすわけにはいかない。ローガンは幾分逡巡した後で無線機に手をやりながらレストランの屋上にいるARR15の方を見上げた。

「ARR15、お前は表にいる治安部隊の奴らを助けてやってくれ。俺は逃げた奴のあと

を追跡する」

『一人で行くつもり？それだったら私も……！』

「悪いけどそれダメだ。ここにいる民間人たちだけじゃなく、彼らも俺達の助けを必要としている。それにせつかくの有利なポジションに着けて早急に片がつけるのにそのチャンスは棒に振れない、そうじゃないか？だからといって、俺はここから逃げた奴も無視でできない」

進行している状況からして、どちらも捨て置くことはできないことをどこかでわかっているのだろうが、様々な要因から首を縦に振ることができないようだった。そんな風に精神的に苦悶しているのが見えたローガンは先程話を聞いた民間人から逃亡している犯人の特徴を聞き出す。身に着けている物や身長などを聞いてから、もう一度屋上からこちらを見降ろしているAR15の方に笑いかけた。

「ここを任せるのは俺のお前への信頼だよ。お前一人でもこの制圧ならやれないわけじゃないだろ？俺だってバジャーさええあればあいつらなんていちころだったの」

『……口では何とでも言えるわよ、ローガン。ダミーが扱えないあなたがなにをどうしたら勝てるのよ』

「……なんとか」

『なによそれ。結局はやっぱり口先だけじゃないのよ』

若干怒ったような口調になったことでローガンは彼女の機嫌を損なったことでしくじったと思いを少し縮こまらせたが、その後で聞こえてきた深い溜息と台詞でそれが杞憂だったことを知った。

『……とりあえずわかったわ。私もここが片付け終わり次第そつちに向かうから。……そうね、それまではストツパー役を彼女達に任せようかしら』

ストツパー……？、と首を傾げたローガンだったがすぐにそれが誰になるのかが思いつき『良薬は口に苦し』ということで飲み薬を飲まされていた数日前と同じ気分になった。

苦手な人物の二人に出くわした場合はどう言えばいい？、と実際に出くわした416も依然聞かれた際は、こういう時は『うへえ』と漏らせば間違いないだろうと言った時のことを思い出す。AR15は名前まで今のところ口にはしていないが、二人の戦術人形が思い当った。一人は、まだいい。まだ付き合いはそこまでないものの、頑張り屋で人当たりも良いのだから。この間ローガンが注文していた昼食のメインを同じく初めて食べて顔を輝かせていたぐらい、表情も豊かだ。問題はもう一人だ。それはAR15だつてわかつてくれているはずだが……？

と、そこで現場に到着するまでの一言に帰結したことに思い当たった。

こちらに背を向けてしまっているからわからないが、きつといい笑顔を浮かべている

のかもしれない。

普段やろうとは考えないことはするものじゃないな。そう思いながらローガンはP226の残りの弾倉を確認。まだそこまで距離を稼がれていないはずだと思いながら階段を数段飛ばしながら走った。

19. 狼と爆炎 —Beware of burns—

人混みが見える前には拳銃がまず彼らの目に入らないようにホルスターに収納したローガンは、逃亡者の特徴を脳内で反芻しながら目を凝らしながら探していた。

もう一班との情報共有も兼ねて言ったが、それでもどこかで意識しながら搜索しなくてはどこかで脳内からフェードアウトしてしまうことは間違いなかった。

横断歩道の信号が変わったことで、歩道の手前で待っていた人混みが動き始める。タバタと走ったり歩いたりするなかにローガンも混ざり、周囲に目を配りながら道路を挟んだ対岸の方へと移動する。

背丈が一般男性とそんなにかわらないローガンからすれば、位置を別の地点に移してもそのまま立っているだけでは全体を見渡すことなどできない。

それを解消すべく近場にあった数段高さのある広場へと続く階段に足を向けて視界に入るだけの人の服装などを確認するが、やはりというかこれといっておかしいと思える人物はいなかった。

『現在こちらはN15—5でそちらに向かっています。搜索対象は今のところどうですか？』

「ダメだ、やっぱりインパクトのある印象を与えるバラクラバと防弾ベストを脱ぎ捨てられたのは大きいな。銃は持っているだろうけど、こんな人口密度のあるところじゃ全然わからない」

コールレストランに残って戦闘続行していくAR15と別れ、ここまで来る道中で道端に人相を隠す役割を果たすバラクラバと銃弾から身を守る防弾ベストが落ちているのをローガンは発見した。そのことを車両に乗った状態で捜索することになっているスオミの一班にも報告したものの、頭によぎったのは逃亡犯と数分前に射殺した犯行グループの男達の会話の内容だった。

今となつては事細かく覚えていないが、ローガンは『バーンズ』という名にどこかで引っかけかけていた。その名に関する報告書をどこかで読んだはずなのだが思い出せない。

だが追跡されることを踏んで、目立つ一部の装備の投棄を行ったということはこの男は逃げ慣れている。冷静になれば誰でも思い浮かぶことだろうが、銃撃による命のやり取りをしていたというのにこの考えに思い当たるといふことは、当人の性格だけでなく幾分かの経験も関わってくるはずだ。唯一頼れる目印としては事件に巻き込まれた当人たちから聞いた、なにかしらかの料理の素材が入っている、肩に担いで持つて行ける大きさの麻袋を持つていることのみだった。

「もうN12—4にはいないとして、俺はこれから13に入る。スムーズに走って逃げるのだとしても、それなりの重量はある物を担いでいるんだ。通常通りに走れるはずがない」

『わかりました。それとローガンさんは小道の方を主に探してもらえますか？表道の方は治安部隊の方たちからも搜索してもらえますが、12と13区の小道は狭いだけでなく直角に入り組んでいて私達のだけじゃなく彼らのも難しいんです。追跡速度は落ちても小回りが車両よりも小さくローガンさんの足の速さなら及第点です』

『でも責任重大だということは忘れずにね、ローガン・ブラック。誰よりも犯人に近いのはあなたよ』

「……わかってるさ。俺だって自らミスしたくない」

グランドの司令官、ノートンほどじゃなくても嫌に思えてきたその声にローガンはある種の緊張を感じながら小道の方に走った。本道とは違い、小石や空き缶などが転がっているその道をローガンは全力で走り抜ける。人通りが限りなく少ないことで足音もそうなるだけでなく、走り抜けることができる。視覚や聴覚の五感の二つに全力全霊を注いで違和感を探す。単純に足音を聞くのではなく、麻袋を持った人物、銃などが揺れることで起こる金属音。それらを目印に探していった。

『ローガン、こっちはもう制圧して片付けた。現場はもう彼らに任せて私もそっちに合

流するわよ』

『でも、あなたがそのまま行つたとしても目立ってしまったて却つて見つからない可能性があるわ』

『でしたらAR15さんはその場で治安部隊の手が空いている方がいたら共に捜索できますか？ 徒歩で向かうとグローザさんの言う通り、ライフルが目立って民間人に悪い影響が出てしまいます。言い方は悪いですが、そのまま向かわずに足を確保した状態で彼らに紛れて行動してください』

彼女達の通信を頭に入れつつも足を止めずに走り続ける。

スオミからの情報通り、ここは車に乗つたままでの捜索は無理に等しい。二人がすれ違うのもなんとかできる程度の道幅しかない為、徒歩や自転車かバイクとかでなければここを通行するのはできない。おまけに結成されているボランティア団体もここまでは行き届いているわけではないらしく、散らばっているゴミの量も酷い。なぜ本道とはここまでの差があるのか不思議に思うぐらいだ。

腐臭が鼻を突いてくるゴミ袋を飛び越えたローガンの無線機から、逡巡したAR15の声が聞こえてきた。

『……わかつたわ。ローガン、無茶は絶対にしないで。それとスオミ、こつちで拘束した犯人の一人がいるけど彼らに引き渡すということでもいいかしら？』

『かまいません。なにかわかればこちらの方にも情報が回ってきますので、今は置いておきましょう』

傾斜がある道ではないが、鍛えられた軍人でも走り続ければ疲労というのは少なからず溜まってくるものだ。直進するだけでなく右へ左へも走っているうちにローガンの息が上がってきた。時折すれ違いか横切るか、または追い越す人全員が何事かところらの方に視線を向けてくるが、それぞれの人相や格好を見るだけにして懇切丁寧に構ってはられない。

息を切らしながら走り続け、やがて本道の方に面する小道の出口に辿り着いた。

「ハア……ハア……」

膝に両手をつけて肺に大量の酸素を送り込む。地面を見下ろすようにしていると、自分の顔から垂れ落ちた汗がアスファルトの路面にシミを作り出す。

追跡対象とは別の道に進んでしまったのか、または自分が思ったよりも相手の移動速度が早かったのか、それとも段々と鈍っていった五感が必要な情報を拾えなかったのか。或いはここではない別の道を使ったのかはわからない。

いずれにしても、ローガンが走り抜けたのは辿り着ける終着点の一つにすぎない。今から引き返したとしても手遅れだろうが見つけられる可能性はないわけではないが、結局は徒労で終わってしまうことの方が想像できる。しかし……と負のスパイラルに

嵌っていることに気付いたローガンは壁に少し寄りかかりこれからどうすべきかを再度考える。

一時的な疲労により考えがあまりまとまらないが、ふと違和感を覚えるのを目で捉えた。

それは数十メートル先にある乗り物で、外観も全て治安部隊の物だ。その深い緑色を基調とした車両の周囲にも一見してこちらの味方であることが窺える様相の男達が立っており雑談しているようにリラックスしているのがわかった。

だが、なにかがおかしい。根拠など明確に説明できる要素はローガンにはないが、そこにいる三人の何かが違う。

感じる違和感を確かめるべく、息を整えたことでそちらに向かおうとした時だった。「……やつぱり嗅ぎ付けられるだけの『鼻』がありやがったかてめえ」

背後から聞こえてきたやや高めめの男性の声に不意を突かれた。咄嗟に振り返ったが、黄土色の麻袋の生地がローガンの視界全域に広がっていた。

「が、ふっ……!?!」

躲すだけの時間は全くなかった。できたこととすれば、反射的に片腕だけでも使つて衝撃を緩和しようと目前にかざしただけ。それでも中身が詰まった麻袋がこちらにぶつけてきた衝撃は大きかった。右腕の骨にまで響く衝撃と痛み、そこだけで留まらず

ローガンの顔面にまで延長してきた。立ち続けていられず、背中を壁の方につけて体勢を崩すがすぐに立て直す。

ローガンの鳩尾に狙いをつけた蹴りを正面から受け止め、それを勢いよく持ち上げるようにして相手を転倒させた。予測できていたのかいないのか定かではなかったが、思わぬ反撃に襲撃者は麻袋から手を離しながら仰向けに倒れた。ローガンはそこで拳を叩き込むべくすかさず振り下ろした。

「うおらあー！」

「……反応と反撃方法、良し」

だが短い気合の声とともに振り下ろされた拳は躲され、相手には起き上がられたとほぼ同時に右手の拳が迫る。その手には折り畳みナイフが握られていた。そうすればローガンが習得しているCCCの出番でもある。

突かれたナイフの切っ先が自分の腹に刺さる前に相手の右手の手首を掴み、関節を決めるように捻り上げようとした時だった。右腕に意識を集中したローガンの横っ面に左拳が刺さる。

脳が揺れ、視界があらぬ方向へと向けられるが掴んだ右手は離さなかった。ローガンは半身になって振り抜いた状態である襲撃者の横側に回った。

そしてすぐさま膝を腹に食らわせた。

「お返し……だっ！」

「げほっ……！攻撃における力量も上々だな……！」

お終いに両手を組んだ振り下ろしも浮いてきた背中にお見舞いしてその場に蹲らせた。一時的ではあるが襲撃者を動けなくさせたローガンは拳銃を距離を少し取って銃口を突きつけた。

いや、正しく言えば『突きつけようとした』としただろう。右手が空を掴んだことで見下ろしてみると、ホルスターに収納していたP226はそこになかった。

「てめえの探し物はこれだよな？」

痰を吐いた襲撃者が代わりにローガンが愛用している拳銃のグリップを正しい持ち方でありつつ引き金に指を掛けた状態で突きつけてきた。考えるだけの時間はあつたのかもしれないが、それよりも先に体が動いていた。距離は一メートル程度の地点から駆け出し、自分の頭を左の方に逸らす。途端にダアンツ！と銃声が鳴り響き、弾道から逸れきれなかった右頬を銃弾が掠めた。

再度発砲されないよう、P226のスライドを右手で掴んで銃口を地面の方に向けさせる。

「近頃の鉄血の奴といい、最近は目の前の人の銃を奪うのがブームになってんのかよ!？」
「そんなの知ったこっちゃないが、オレ様達の戦いにルールなんてねーんだよ!!」

眼前に薙ぎ払われたナイフを上体を逸らして回避。一瞬拳銃への握力が緩んだのを感じ取ったローガンは引っ手繰るようにしてP226を取り戻す。右手の中でクルクルと回して構えようとしたローガンだったが、本道の方での騒ぎに気付くのが遅れた。さきほど目をつけた三人の男達が車両から取り出したのか、小銃を空に向けてフルオートで撃ち放つて下がって腹這いになるように叫んでいたのである。

そちらに注意を取られた隙をつかれる。襲撃者はタックルでローガンを吹き飛ばし、足元の麻袋を回収した。

受け身を取って反撃に転じようとしたローガンだったが、彼にとつても厄介な方向へと事態は進行してしまう。

「バーンズさん、こちらへ。オレが後ろに付く役目を引き受けます……」

奴の仲間と思わしき男がカービンライフルを片手に襲撃者を庇うようにして来たからである。拳銃であるこちらが早いいため先手を取られることはなかった。しかしレストランで戦った連中よりも錬度が高いのか、襲撃者をこちらからでは見えない位置へと逃がし、すぐに身を隠してこちらからの銃弾をやり過ぎした。

舌打ちしたローガンは銃を下ろすと走ってナイフを抜く。待ち伏せているようであれば反撃するためだ。

小道から本道から身を出した瞬間、銃撃がこちらに繰り出される。咄嗟に身を屈める

と路地の方に身を隠した。

「くそ……！ スオミ、報告だ。N13―5の道路で複数の対象と交戦！ だけど奴らは車両で逃亡を図ろうとしていて俺一人じゃ止められない！」

『了解しました。ただちにそちらに人員を送るよう要請します！ それまでなんとか引き留めていてください！』

顔を出そうものならすぐさま銃弾が髪を掠める。ヒュン！ と風を切るその音に身を屈めたローガンは、マガジンを確認。マガジンの中身が空になっておりP226のスライドが弾切れを知らせるようにスライドが後部に固定されていないことから、薬室に入っている一発が最後だったらしい。持ち込んでいるP226の弾倉は今替えたのを除いてまだ二本ある。しかし民間人が周囲にいることもあってやたらに撃つことはできない。

それでもこのまま動かずにいれば敵の思う壺だ。

ある程度弾幕が薄れたタイミングで飛び出し反撃すべくローガンは何発も撃ち続ける。

対して、襲撃者の男を庇うようにしてこちらに銃口を向け続ける連中はこちらに正確に狙いを定めていない。

だが三人で連携してVIPを護衛するようなその動きは悪くなかった。彼らの目指

す先には、ローガンでも予測できるあの深緑の軍用車両。

「逃がすかよ……!」

狙いを一旦外し、突如として起きた銃撃戦によって運転手がいなくなった一般車両のボンネットを滑るようにして反対側へ移動。それを何度も繰り返し、深緑車両を盾にするようにして通りを上体を低くした体勢で連中の死角へと潜りこむ。

あと五メートルまで来たところで微かだが連中の一人がこちらの方に身を乗り出して攻撃しようとして来る。そうされる前に走りながら二度引き金を引いて阻止。その者の近くに着弾したことで彼は一瞬怯んだが、すぐに気を取り直して再度引き金を絞ろうとした時にはローガンはもう目的地に到達していた。

運転席に乗り込んだであろう男を撃つべく、ローガンはしゃがみの体勢から立ち上がり、とうとう脚を垂直に伸ばす。

「判断も悪くない。獲物を逃がさないためにある程度の危険を冒しても食いつこうとメインタルもある。てめえ、相当の場数踏んでやがるな」

「っ!」

ちやうど額を狙うように、前回に開け放たした窓の向こうの助手席から襲撃者は拳銃をこちらに向けていた。

なにも考えず、ローガンはすぐに身を屈めた。途端に髪を掠めた銃弾が街道の壁にめ

り込む。

「オレがこいつを引き留める！その間に急いでここから離脱しろ！」

声からして、襲撃者の方に駆けつけた男だろう。そいつがさきほどローガンに発砲しようとしたが阻止された男だったらしい。

エンジンがかかった車両を回り込んできたその一人がこちらにフルオートで撃つてきた。『スコープピオン』こと『V z 6 1』でばら撒かれる銃弾を受け止めきれぬ訳がない。加えて近くに遮蔽物となり得る物体はない。

敵車両の阻止を優先しようとすれば、ローガンは外に出ている敵兵の一人にハチの巣にされることは間違いない。かといって、こちらに攻撃を仕掛けようとする敵の排除を優先すれば逃亡しようとしている連中のこの場での足止めは難しくなる。

一瞬間に過つた取捨選択だったが、直後にローガンの体が取つたのは後者だった。

「わりいけどそう簡単に俺は死なねえぞ！」

「な………にい!？」

『状況的に有利な敵兵と至近距離で会敵し、遮蔽物も何もないのであれば特攻してなんとしても生き延びろ』。昔教官から叩き込まれた教訓がここでも生きた。

ナイフを抜いたローガンは左手で逆手に持ち、先程のように上半身を低くして地面を蹴り上げた。

目の前には、まさかの行動で意表を突かれた表情を浮かべる敵兵の顔。

「く、そがあ……！」

蹴り上げる前の二人の距離は一メートル強であり、発砲されることは覚悟していた。それよりも先にこちらが撃つて阻止してもよかったが、それではナイフによる近接攻撃に遅れが出ることからどちらにしても避けられない。それにここまでの至近距離なのだから覚悟はしておくべきだ。

ダダダダンツ！と、基地の演習場でも散々聞いてきた銃声が耳を打つ。途端、右腕と右腕の二の腕に真っ赤に焼けた石を高速で押し付けられような痛みが走った。しかしローガンは足を止めずに距離を詰め、ナイフを飛びかかると同時に振り下ろした。

ナイフの切っ先は男の首元に刺さり、苦悶に満ちた声とともに血が噴き出す。地面に押し倒された敵兵は手足をバタバタとさせて足掻こうとするが、ローガンは『VZ61』を握るその腕を左脚で押さえている為それは叶わない。切っ先という名の肉食動物が獲物の肉に食いつくように深く扶る感覚。ちり……と脳裏に火の粉のような記憶が過るが今は関係ないと無意識に払い、苛立ちを基本の腕力に上乘せしてすぷりとさらに深く潜り込ませた。

目が白目をむき、じたばたと動かした手足の力が抜けたところで返り血を浴びつつもナイフを引き抜き、第二に止めるべき標的の方向に直ろうとした。

しかしやはりというべきか、その時には車は走り出していた。
「くそっ……!」

乗り込んだ男たちがこちらに牽制射撃しながら逃げようとしているのを阻止するためにローガンも撃ち返す。結果で言えば逃亡阻止は失敗で終わったが、せめて一矢報いることには成功した。身体を半ば以上を車体で隠すようにして撃つてきていたあの襲撃者の肩に銃弾は命中、銃を路面に落としてそのまま走り去っていった。

このまま逃がすわけにはいくか……!

周囲を見渡し使える乗り物はないか探してみる。するとそこまで離れていないところに、全身を黒模様で塗装されている大型バイクが持ち主と思われる男性と一緒に道端に停められていた。

P2226をホルスターに戻したローガンはその男性のところまで走った。

「すまねえ、緊急事態だからお前さんのバイクを貸してくれ。ちゃんとあとで返すから、グリフィンの方に明日にでも訪ねて来てくれればいい……!」

「返してくれるならいいけどさ、君の腕からシヤレにはならなさそうなぐらいに血が出ているよ!?!まずそっちの処置をした方が良いんじゃないのかい!?!」

「だったらこいつを巻いてくれるか。こういう時の為に常備しているから慣れているんだが箇所によっては本当にやり辛いんだよ、だからやってくれると助かる」

「わかった……い！」

取り出した止血用の包帯をその民間人に渡して処置をしてもらっている間にローガンはようやく自分の状態を確認した。右肩は防弾ベストが防いでいたため衝撃だけで済んでいたが、右腕の方は弾が貫通して血が出ている。包帯を巻いてもらっている間にローガンは止血剤を小型の注射器で注射した。処置も一通り終わったので動かしてみたが、多少動きが鈍いがそこまで大きくない。

ヘルメットとバイクのキーを受け取ったローガンはエンジンを始動し、持ち主に礼を言うところラッチレバーを握って左脚の方にあるチェンジペダルを押し下げてギアを入れる。加速し始めたバイクから低いエンジン音を鳴らしながら坂道の下の方に向かって敵車両を追いかけ始める。

そして、耳元の無線機の方に繋いでいる現場指揮官に報告を入れる。

「スオミ、ターゲットは治安部隊のに偽装した一般車両。今さっき北上し始めたのを現在追跡中だ。色は言うまでもない深緑でナンバーは……い！」



『全ユニットへ。現在犯行グループの車両が北上しておりナンバーは！N14エリアへ急行せよ！繰り返し……！』

スコミへの報告を私も聞いていたので車両無線の無線を聞く必要はないのだが、他の人達にはそうではない。

コールレストランで力を貸してくれた治安部隊の隊員の一人である男性、カイルと同部隊の二人の同乗者と共に私も彼らの車両に乗ってN14エリアへと移動していた。

「N14か……それでそちらの方の準備はどうだ？今すぐにでもおつぱじめれそうかい？」

「ええ、大丈夫です。弾薬はそう多くはありませんけど今回の一件を片付けるのには十分あります」

「詳しいことは私にはわからないが、そちらが大丈夫だというのなら大丈夫なんだろう。急に出くわした場合はさつき話した手筈通りで行くということでもいいか？」

それでいいです、と私は頷いて安全装置をオンにしている私の分身のリロードと簡易点検を終わらせてからグリフィンの無線機に片手を当てて語り掛けた。

「スオミ、こつちはもうすぐ目的地のエリアに着くわ。そこからは徒歩じゃなくて車両に乗りながらの搜索を続行するということでもいいかしら？」

『それで大丈夫です、ARR15さん。私も現在到着してから対象を探しています。もちろんもうすぐしてください』

「了解、到着次第搜索開始するわ」

スオミとの通信を一旦切り、バディを組んでいるが今は別行動となっている相棒に呼び掛けた。

「ローガン、あなたは今どこ？可能であれば合流した方が良いわ」

『ええとここは……N14-7だな。あれだけの速度での急発進をして他に影響を及ぼさないはずがないからそれを辿ってたんだが……』

「急ブレーキの痕はともかく、乱れた車列は衝突していなければ次第に元に戻るものね」
『ああ、最初はそういうのから追跡できたんだが今じゃ見当たらない』

徒歩で移動している犯人を発見するのも乗り物に乗っている敵対者を見つけ出すのも難しい。後者となつていてる現状では時間帯の事もあり車の流れが悪くなつていてる。場を乱すようなことをせずに周囲に溶け込むようにして流れに乗っていた場合は一車

ずつ見ていくことはできる。こちらは緊急事態と言うことでランプを点けて搜索し、やや乱暴ではあるが合間を走行して探せているのでそうしていた場合は見落とすほど集中力を欠如していなければ発見できるはずだ。

それはともかく、問題が一つだけある。

もし私達が追っている対象がそうしていた場合、確実に攻めの手段を実行する前に一つ吟味しなければならなくなるケース。

カイルがそれを口に出してくれた。

「別の場所で人質を確保していて車内に連れ込んでいた場合、PMCのあんたらはどう對抗手段を取る？ 少なくとも俺達は車のパンクを狙って射撃と言うのはできないが」

「……それは一番考えたくないですね。ローガンからの話だと、奴らは彼を撒くことが出来たのでその手段を取ってこちらをやり難くすることが考えられます。もし慎重な行動方針であればしないかもしれませんが、レストランで派手とはいわずとも暴動を起こしたことからして、関係のない民間人を巻き込むことが考えられます」

あそこまでの銃撃戦を繰り広げた連中だ。籠城戦において高所の場所取りを行ったこともあって最低限の心得はあるように思える。一人一人の実力は戦術人形の私からすれば大したことはなかったが、それぞれがうまく死角や味方がロードするタイミンに合わせたのカバーをしていたため馬鹿にはできない。銃器の扱い方も学習・実践し

たように手馴れていたことから訓練も少なくとも受けているだろう。

だがそれは（本人達には言えないが）カイルをはじめとした治安部隊の彼らと同じ程度しか積んでいないので、単に彼に対して火力面で有利になっただけだった。技術も戦術も付け焼刃のようにその場しのぎのようなもので、私達グリフィンのように鉄血とは十分には戦えない。

「でも十分に場数を踏んでいないようなので可能性は低いと思いますが……」

『……いや、そうでもないな』

N14がもう目と鼻の先になった地点にまで到達した私とカイルの会話が聞こえていたのか、無線越しにローガンがそう呟いた。

「そうでもないって……なんでかしら？」

『俺が追跡していた犯人だが、途中で俺の事を待ち伏せしていたんだ。初手からの奇襲手段といい、奴は接近戦での俺の動きも見切っていたし評価までしてたし仲間にも頼りにされている。頭の回転までは測れないが、自分達の戦いにルールなんてないなんて言った奴なら、姑息な考え付くだけの頭脳を持っていてもおかしくどころか考え付いてるだろうな』

「可能性の裏付け……最悪な事態の想定としてちゃんと考えておくべきね。そうなるならローガン、発見しても車への直接攻撃は避けるべきかしら。もし本当に人質がいた場合

は、攻撃してくる同乗者への発砲に限定して運転手へは停車を命ずる方針でいいわよね？」

『そうした方が賢明だろうな。俺からスオミに報告するから、そっちは俺の方にまで来てくれるか？今N14―5で停まっているから、もし早めに来れるなら合流しよう』

「了解。私達もN14に入ったから今すぐそっちに向かうわ」

『おう、待つてるぞ』

グリフィンに所属している私達のみの無線機による通信は終了する。他に打つべき手段は、予測しておくことはないかと考えようとした時だった。

運転しているカイルを除いて、助手席と後部座席の私の隣に座っている二人の隊員がニヤニヤしていたり、温かな印象を与える笑みを浮かべていたりしていた。

「……なんですか？私の顔に変なのがついてたりしますか？」

「いやなに、I. O. P社の戦術人形は鉄血の奴等よりもそれぞれ個性が豊かだっというだろ？今日じゃない随分前にあんたを見た時は淡々と仕事をしていたから今みたいな反応をするとは思わなかったんだよ、なあ？」

「正直なところ、仕事とはいえ近寄りがたいとは思っていたんだけど、今の君はそれが幾らか払拭されていますね。なにかいい変化があったんだとしたら……さっきの無線相手ですかね？」

「そうじゃないですよ。単に彼は気の合った友人のような存在ですよ」

ローガンに対しては、思うことは色々あるが結局は、彼の在り方が危ういと思うから守りたいという気持ちが強い。45とはなにか対抗意識をもつ気持ちがあつて負けたくないというのが私の本心である。

それだけの筈よね……と私の中で再確認していると、視界の隅に移った助手席の方が一層笑みを深めてこちらに言ってきた。

「んなこと言つてごまかすんじゃないよ。声が聞けるようになった時のお前さんの嬉しそうな顔、オレは見逃さなかつたぞー」

咄嗟に自分の顔の方に手を当てて確かめてみる。指と掌の感覚から確かめてみてもはつきりとわからない。

「今は無表情っていうか感情があまり感じられないけど、話している時のお前さんは一人の女の子そのものだったしな。良いもの見させてもらったな、なあカイル?」

「やめてくださいよジョージ先輩。たしかに滅多に見られないとは思いますが、俺は本人の前でそんな風になぶつちやけられないですよ」

「この際だからお前もぶつちやけちまえ。最近お前は詰所の若いのと良い感じであるのもつぱら噂になつてんぞ〜?」

「誰ですそんな噂流したの!? 仕事の話をしていただけで別にそんなことは……!」

二人が緊急事態とは思えないような話を始めたことに私は目を丸くしてしまったが、せめて私だけでもと思いい窓の外に目を向けて見渡してみる。すると私の隣にいる眼鏡かけた優男から声を掛けられる。

「詳しく聞くつもりはありませんけど、無線の向こうの方とは付き合いが長いのですか？」

「……あなた達にそこまで話す必要性をまず説明してください。それと集中しなければならぬ現状で暢気にしていられる理由も含めて」

「おっと、そう言われてしまうと少々辛いですね。好奇心で手痛い思いを藪から出てきたするのが分かってるのであれば、私は手を引きますよ」

そうしてくださいと最後に区切って私は鼻を無意識に鳴らしていた。普段近くで見ることのない戦術人形を間近で見ると興味・関心があるのだとしたら大きな間違いだ。大人になったというのなら、命のやり取りをすることになるここじゃないにしても、物事の優先順位を明確につけなければならぬというのがわからないのだろうか。

私というAR15は、以前からどうしても治安組織の彼らの多くを好くことはできなかった。いや、彼らが悪いわけではない。中には純粹に力のない民間人を守ろうと尽力している人もいる。

その理由を明確に表しているのは横にいる優男がそうだ。さきほどのレストラン前

の戦闘では（私を除いた）他とはあまり変わりない働きはしている。なにもしないよりもいいのだが、自分の探求心を抑えようとはしないことは別だ。戦術人形に対しての知識が欲しいのであれば I・O・P 社に問い合わせるなり情報を求めればいいというのに、やたらとこちらから話を直接聞きにくる。

助手席の彼を見てみればいい。彼は中年で頭の髪もなくなってきたている、俗に言う良ければ『おつさん』、悪い場合は『おじさん』と言われるような男性だ。今では運転席にいますカイルに緊張感がないようにして絡んでいるが、ちゃんと見るべきところは見るようにしている。ルームミラーから反射して見えた眼光といい、カイルをいじっているようにしても目の方は真剣に見渡しているのは違くない。実力がものを言う銃撃戦では力不足なのは否めないが、それならばできるまでのことを精一杯やろうとしている姿勢は正しいと私は思う。犯人達の自分達を狙う射線に民間人がいるのであれば、自分が動いて考えなくもない危機を回避し、その後で移動させるように指示しているのはやや驚きだった。それらの技量があるのであれば、同組織の皆からリーダーと言われているには納得できる

それだというのに、鼻歌を混じらせて頬杖をついているこの優男は何だ。ピクニックに行くわけでもないというのに、脚を組んでリラックスしている様に苛立ちを隠し切れない。空気を読んでいないというよりも、自分のやりたいことしか考えていないのだろ

うか。どうも机に座って雑務ばかりをこなしている隊員というのはこのように、書類上で知ったことを実際に目にした際に食いつく輩もいるので注意が必要だと以前に指揮官が言っていたが、こういうことだと理解したのは初回のパトロールの時で、今となれば三年ぐらい前になる。

煮えたぎってくる感情を抑制して私も外に目を光らせているが、車内を見ていない時に限って隣から視線を感じるのだから勘弁して欲しかった。

「それで、相方から何か言われなかったか？ さつき合流するなどのどうの話していたけど、明確な場所があるのであれば教えてくれないか？」

「そうでした、ごめんなさい。N14-5で待っているそうなのでそこに向かってください。彼は私が見つけます」

「了解」

まだ今日出会った中で好感が持てるカイルはハンドルを切って私が言った目的地へと向かってくれる。そうだ、こうして協力的な隊員もいるのだ。だから決してグリフィンが形成した防波堤の内部で無責任なことばかりしている連中だけが全てじゃないということだけはわかる。公僕といわれる程じゃないにしても、献身的に取り組んでくれる者もいるのだから私は放っておくことはしない。

リーダーがこちらの方に少しだけ振り返るようにして、口を開いた。

「わかっているのならいいが、友人なら大切にしようにな。こんな血生臭いところで埋もれさせたくはないなら尚更な」

「心配しなくてもわかってますよ」

「ならいいさ。失くした後で気づいた時にはもう手遅れ、どうにもならない。そんな後悔をしないようにな」

実感が感じられるその台詞を胸に刻みながら、私は車内に戻していた視線が混んでいく車列に移ろうとしている時だった。

ザザツとノイズが走り、無線機から声が聞こえてきた。

『AR15、グローザよ。こっちの方で目標とアイコンタクトして追跡開始。今N14——と15の境目よ、応援として急行して』

「了解、ならローガンも……」

『彼は来させるべきではないわ。私達とあなたで捕えるからこれ以上の応援は不要よ』

淡々した返答に私の脳裏に過るのは昨日ローガンが話してくれたことだ。一通り聞いてから抱いた感想としては、本部にいる戦術人形の総意と思わせる傘を被せた自分の考えを強要させようとしているとしか思えない。

AEKに限らず、こちらの基地にいる人形達には親しげにしているのにも拘らず、ローガンにだけ刺々しい態度でいることもそのことが関係しているのだろうが、物理的

な危害を与えずとも精神的に追い込もうとしているのであればよろしくない。元々私も含めたI・O・P製の戦術人形は、無抵抗の人類には攻撃できないようにされている。当たり前の話だが、創造元の人類に反逆するようなのならそれに対しての手段を取るのをおかしくないのだから、そのようなセーフティを設定するのは納得できる。鉄血の事もあつて重点を置かれているのは承知している。

しかしそれは物理的な、身体的なものであつて、誹謗中傷や暴言などを言う事に關してはなにもされていないと指摘されている。暴行をする前にセーフティが働き強制停止になるが、口から発せられる言葉には制限がない。セーフティがそちらの方にも課されていけない原因は、AIとはいえず、良識は持つているので口にすべきではないとわかつているから、人形それぞれのパーソナリティが損なわれるからだ。

人形に搭載されているAIは元からインストールしている知識から口にしてはならない台詞との線引きはしてある。だがそれは戦術人形の性格を表現するための擬似人格モジュールがエラーを起こさない程度にだ。もし制限する言葉とモジュールが矛盾した場合は、人間でいうど忘れのように話している途中で浮かんだ単語が霧散したり良心が痛むようになってたりする。I・O・Pによれば、戦闘を除いた人間の不完全さを表現するためだともいう話だが定かではない。

それだというのに、科せられた人形としての高いハードルを飛び越えたかのようにし

ているのだから不思議に思える。まるで、人格モジュールが暴走し、長く生きてきて考え方がまるつきり変わって、胸が痛まなくなつたかのようだった。

「そう考えることは勝手だけど、本人に言つたのかしら？ 私に言つても無駄なことはわかつているんじゃない？」

『でしようね。私から言つてもいいけど、あなたからなら効果があるんじゃないかしら？ 彼は私の言う事には耳を貸してもそのようにしないし、知り合つてから『お友達』として繋がりを持つたあなたの方が従いそうなもの』

「だつたら私からいう事は一つだけ。ふざけるな、余所者の分際で」

無意識に怒気が含まれていたのか、ぎよつとした様子が同乗者の者達から窺えたが今は関係ない。利害だけを求めるこの人形に私は言わなければならない。

だがそれは、今ではない。

すべて片付いた後の基地で言つてやろうと思ひ、点火したままの炎を一旦は長く燃え続けられるだけの薪をくべた状態でしまいこんだ。

「自分の思い通りにならないことがあるのは当たり前で、許容だとか妥協をしなければならぬのはあなたでもわかる筈でしょ？ もうこの事件に私と一緒に足を踏み入れているのだから今更なに言つてもローガンは誰かに何を言われても向かう筈。それに……」

目の前の広場に彼の姿が見える。バイクに跨りながら端末を操作してから、左手を無線機に当てていることから状況を把握しているのだろう。現に車内に搭載されているそのスピーカーからは目標車両の情報が伝えられてきている。

改めて見てみると、少々傷だらけ、というよりも顔に傷があるだけにとどまらず右腕に包帯を巻いていたりことから無茶をしてくれたのだろう。そんな彼がこちらに気付き、手を軽く上げて合図を送ってくる。

あれだけ釘を刺したというのに……と内心で溜息を吐きつつもこちらの言うことに耳を傾けているであろう相手から投げ渡されたボールを力一杯投げ返してやる。

「あんたがどこで何を見て経験したのかは知らないけど、私が守りたいものに出して傷をつけるようなら、迷いなく撃ってあげるからそうして欲しいならそう言いなさい。どこで何をしようとしても、絶対に許さないから」

何かを言いかける前に無線機を操作し通信終了する。

車両が道路の端で停車したので、私は後部座席の扉を開けてローガンの方に小走りで行った。

軍隊なら家族、兄弟と言われる存在になったこの人を、本部からの上から目線の連中に好き勝手には、絶対にさせない。それは、擬似感情モジュールを作り出した訳を知るために戦い続ける私の目的に加えられた、新たな存在理由。

20. シューティング・ハイウェイ —Hit each other by rage—

車道の流れが悪くなっているところか止まっているのが目に見えて来ているその合間をローガンはバイクを走らせていた。アクセル全開で運転にばかり気を取られるようなことはせずに、不測のことに対応できないことがない程度に出しつつも背後の方から追従してきている味方車両が遅れることないようにしている。

ブオオオオオオッ!!と低いエンジン音を右手のアクセルを捻って鳴らし、両側二車線の分離帯をローガンが走ってすれ違う運転手たちに道を空けさせ、その後ろからARR5も乗っている協力者たちが続く。直線状に続く橙色の線の上を走っているローガンに何も知らない民間人達はぎよつとした表情を浮かべたり、迷惑そうにしていたりするが、付いて来ている車両を見えた途端に仕方なさそうにしていたりしていた。ショートカットをするために小道を使うことができないため、十字路を左折しなければならぬ状況になった際には、民間で治安組織として認知されている彼らが交代して前に出て注意を呼び掛けてくれたので面倒なことにならずに済みながら、再び前方を走る為に追い越すとヘルメットしていることでより鮮明に聞こえてくる無線機からの声が耳に届く。

『ローガン、スオミ達の位置データをロスト。消えたのはN15-2から伸びているハイウェイだそうよ』

「ハイウェイ、高速道路か。だけどあそこはまだ工事中じゃなかったのか？」

『それはこの間終わったそうよ。だけどわざわざハイウェイの方で消えたということは……』

「最悪の場合、奴らの逃走先は別の保護区じゃないかもしれないな。N15からだとい西の方に行ったんじゃないかと先回りされて詰むのは間違いないってのに」

N15から伸びている高速道路を利用して行けるのは西区だけではない。大回りになるが東の保護区にも行けるし、南へだつてそうだ。それぞれの方角へのグリフィン管理区画にスムーズに移動できるように開発された高速道路の新設工事がAR15の言う通り終わっているのだとしたら一つだけ疑問がある。わざわざ交通量が多くても特に停車することなく走行できるそこを逃走ルートとして選んだ理由だ。戦闘のプロフェッショナルとして鉄血と戦うローガンから見ても、カイルをはじめとした治安組織の彼らは力不足ではあるが頭が回らないわけではない。合流した際に簡易的に自己紹介をしてきた彼らのリーダーのように頭がキレる者もいる。追いつめる相手が逃走するルートを予測し、予めそちらの方に応援を展開させて包囲する手筈を整えるなどもしることがあることが、治安組織に関する詳細な報告書に目を通したので知っている。

もし自分達が追っている彼らがそのことに行き着いていないのならいい。自分達が追い付くにしても追い付かなかったとしても、応援部隊を行先に先回りさせて捕えることで事件解決に結びつく。だがもし、別の狙いがあるのだとしたらどうなのだろうか。ローガンは目標を発見し追跡しているスオミ達への先回りとしてAR15からのナビを聞きつつ移動し、ハイウェイへの入り口を指す。

「グローザは一旦置いといてだ、運転しているスオミからの応答はないのか？」

『ダメね。あの子自体が手一杯なのかどうなのかわからないけど、こちらからは繋がらないわ。まさか彼女が……』

「さすがにそれはないとは思いますが、こんな非常時に同士討ちをすることはないと思う……思いたい……」

『そこははっきりとないって断言してよ。気持ちにはわかるけど』

「……『男ならしつかりしなさい』とかお決まりの文句を言われなかったことに安堵を感じずにいられないよ」

『言って欲しい？』

「勘弁してくれ」

失笑に近い苦笑ではあったが、自分だけでなくAR15も同じように笑ったのが無線越しにわかった。合流した時、小道でやり合った時にできたローガンの傷跡を見た彼女

の怒り方にはさすがにそこから逃げ出したいと思ひ足が動きそうになったが、ひとまず話はスオミ達への応援へ向かつて事件を解決した後でということになった。どのみち、あとから大人になったローガンでもここまで怒られるのかと考えさせられるほどの説教が待っているのだが、それからうまく避ける方法が後の自分に思ひ浮かぶことを祈ることしよう。

進んでいる道の先に上りの坂道があり、標識に記されている情報からハイウェイに続くことがわかる。エンジンを吹かしてさらに加速し勢いを出して一気に駆け上った。

坂を上りきった先に見えるのは、緑色だけでなく黒と黄色の警告色を基調としたゲートと検問を兼ねた料金所だ。ローガンはスピードを落とし、徐行のそれになるとゲートの屋根に取り付けられている電光掲示板に『一般』と書かれている方へと向かった。

「グリフィン南アメリカ支部所属のローガン・ブラックだ。緊急事態なので、俺達が事件を解決するまでしばらくここを利用しようとする一般車両の通行を止めてくれ」

「わかりました、ただちに——！」

『シャドー隊』としての通達を受けた際にハリーから支給された物品の中にあつた警察手帳のような、所属組織のマークが刻まれている身分証明書を提示し状況を説明し通過しようとした時だった。

多くのエンジン音が決まった一方向へと流れていく道路が料金所にいるローガン達

から見えている。そこからは車高が高い車であればフロントガラスなどの上部の部分が高速で走っていくのがわかるのだが、そこを見覚えのある二台の車が他よりも速く過ぎ去って行った。それも民間で乗られているようなデザインでなく、角張っていてデザイン性よりも機能面に特化したようなやつだ。だがそれだけならまだ見間違いの可能性もあつただろうが、ローガンは見逃さなかった。

助手席の方から上半身を乗り出し、小銃を両手に持つて前方の車両を狙っている女性らしき影を見たからである。

それまで頭に浮かんでいた、これからやるべきことのプロセスは短縮され最終行程の文面が目の前に現れたかのようだった。まるで戦闘機のように様々な情報が表示されているHUDがあり、その横中央に大きく今からやるべきことを幻視したローガンは、バイクのギアを入れて走る前にそこで働く職員に声を掛けた。

「すまない、詳しいことはグリフィンの方に問い合わせさせてくれ！AR15、グローザを発見。高速道路を猛スピードで走り抜けていったぞ！」

『なら急ぐわよ。時間をかけていたら被害が大きくなりかねない！』
目を白黒させる男性の職員を尻目に、ローガンとAR15を乗せた車両が上方へと開いたゲートを抜けて走り始める。

ハイウェイに乗る為にある渦巻の形状となっているインターをそれぞれの乗り物で

駆け上がり、与り知らぬところで始まつていた出来事に速度を緩めて始めていた一般車両の間に割り込んだ。ここまでくればもう速度制限も過密になっている一般車に気が割かなければならない必要性はなくなる。

ブオオオオオオオオオオオオオオオオ!!とアクセルを思いつきり捻つてエンジン音をけたたましく鳴らし、スピードをグンツと上げる。上がっていくと加速度のように全身に感じる向かい風の強さも比例して強くなつていき、限られた箇所にはか外と繋がらない車とは違つた快感を得るが、集中力を高めている脳の片隅へと追いやつた。

まずは時速を表すメーターの針が百二十キロまでになるところまで加速し、三車線で走っている民間人達を追い越していく。右、左、また右への車線変更を繰り返し、ハイウェイを走行し数十秒前に見かけた二台を追いかけた。

『ローガン、さつきはあー言つたけど先行し過ぎよ、一旦スピードを少し落としてこつちに合わせて！先に到達してもそのままの状態じゃ何もできないわよ！』

「わりいけどそいつは無理な申し出だぞ！今見えてきたが、奴らは増援も出して抵抗しているしこのままじゃあいつらといえど長くはもたねえ！」

そう、ローガンも気が付かなかつたが、民間人に混じつて民間車両に乗っている連中の味方と思わしき男たちが上半身を出しているグローザの方に発砲していたのである。いずれも取り回しの良いサブマシンガンやハンドガンで射角がうまく取れなかったり

同時攻撃を仕掛けられて反撃できない彼女に一方的な攻撃を行っているのが見えた。ローガンは、出しているスピードを緩めることなく接近し距離を徐々に詰めていった。

治安部隊の車両を運転するカイルも民間人がほとんどいなくなってきたことで速度を出しやすくなってきたのか、ローガンと並走してきた。

『あれじゃ本部所属の人形も手こずる筈だわ。でも警戒すべき敵が一目で分かるのは何よりね……!』

「だけど、お前のライフルじゃ射撃できる敵だつて普通の位置取りじゃ撃てる奴は一握りで全方位は見切れない。そこはどうするつもりだ?」

『忘れてしまったの? 私達は二人であいつらを止めるんじゃないわよ?』

横に並んでいるので顔をそちらの方に向ければ、窓を開けて不敵な笑みを浮かべるAR15と、助手席でサムズアップをしている男が見えた。友の隣にいる座っている胡散臭い印象を受けた男の方は逆光ではつきりとはわからないが、仕方なさそうにしているのだけは見えたので最低限の仕事はしそうである。

「……まできて少なくともにもしないつもりはないぞ若造! グリフィンのお前らほどじゃないにしても、胸張って帰れるぐらいの成果を上げてやるよ!」

「まあ足を引つ張ることはないと思つてくれよな! 精一杯背中についてやるから覚悟しておけ!」

リーダーと彼の部下であるカイルがそう力強い台詞をローガンに投げかける。風と車両のエンジン音で聞き取りにくかったが、全てを正しく聞き漏らさずに耳に入れたローガンは、彼らには見えない小さい笑みをヘルメットのバイザーで隠し、後部座席で戦闘準備が万端の少女を見た。彼女も強い意志澄んだ青い瞳に宿し、ローガンを見つめ返す。

こちらからは言わなくていいどころか、言うまでもない。まだ共にしている実戦の数は片手で数えられる程度しかないが、仮にも二カ月の時間をAR小隊の皆とも一緒に基地で過ごしているのだ。

彼女が口を開いて何かを言おうとした瞬間、彼らの車両とローガンのバイクの間のアスファルトが爆ぜた。

反射的に左右に開いて前方を見据えると、後方からのエンジン音で振り返ったであろう、グローザと交戦している連中の最後尾にいる輩数人がこちらを撃ってきていた。

バラバララッ！と銃声と共にマズルフラッシュが前で瞬かれ、銃弾がヒュンヒュンツ！と脇を掠める。

反撃として右手をホルスターの方に伸ばしてP226を抜く前に、こちらを狙っていた覆面の男が突然脱力し路面の方へと落ちた。グチャリ……と撃たれた箇所から血肉をばら撒きながら転がっていく遺体を避けたローガンはハンドルを操作して避け、絶命

した男を撃つたであろう味方の方に視線だけ向けてみると、予想通りの彼女が『ST A R—15』を構えた状態で体を少し乗り出していた。

「……さあ、始めるか。あいつらとここでケリをつけるぞA R—15」

『わかっているわよローガン。あなたも油断してあっさり撃たれてやられるんじゃないわよ』

「その辺の悪運としぶときは過去に知り合った奴らからのお墨付きだ、安心しろよ」

できるわけないじゃないでしょ……という声無き呟きはローガンの無線機からは聞こえなかった。

これは結果的に、レストランを襲撃した犯人を捕えるだけでなく戦っているグローザを助けることにもなる。

正直にローガンは自身の内側で渦巻いている内情としては、納得することが出来るか否かの話ではなく、一方的に事情を押しつけてくる彼女の事を聞かれたとしたら、誰にもバレなければ彼は迷いなく『気に入らない』だとか『ふざけるんじゃない』という考えをぶち撒ける。それだけの確信が彼の中にあつた。

だがそのような私情を優先してしまえば、自身の死につながるどころか周囲にいる関係のない人にも影響をバタフライ・エフェクトのように及ぼしかねない。それでも沸々と沸騰させようと、鍋に溜めた水が水温を上昇させてきているように、自分はここ数日

間で溜まってきていた不平不満の捌け口を求めていた。

それにローガンには別に重んじている信念や信条などはない。あるのはただ、一人の人間として生きていきたいという願望だけだ。金メッキのように貼られた装飾物を取り去ってもあるのはその本音だけ。だからローガンは、拘るプライドもなにもない、誰かに明確に認識されることがない真っ裸の状態で戦うのだ。



並走するローガンが自覚しているのかどうかは私にはわからないが、バイクを乗りこなしながらの銃撃戦というのにはいくつもの危険性がある。無論、ハンドル操作を誤れば単なる怪我という範疇を超えて視覚として機能しているアイカメラを遮ってしまい

たくなってしまう。もし時速百キロ以上の速度を出している今、アクシデントを起こすなりすれば人間であれば骨や四肢を損傷させるどころか生命そのものも危うい。スピアの部品がある私達戦術人形がボディを損壊させてしまったとしても、現場にいる他の人形達の手を借りてでも基地に帰還さえできれば修復は可能だ。鉄や合金といったような金属類を素材にした部品と、物事の演算や思考といった行動を自動で行うAIなどの無機物で構成された戦術人形わたしたちに対し、有機物で身体が出来ている人間ローガンはどうだ？人工血液のような見た目だけのものを流すのではなく、生命活動を続けるのに必要な要素を失くしすぎればこの世に帰ってくることはできなくなる。

先代指揮官が亡くなってから深くまで考えることのなかった相違点を突き詰めれば突き詰めるほど、心にポツカリと穴が空けられたような痛みが走ってその場で蹲りたくなってしまう。

それに加え、敵の眼前に体全体をさらけ出しているような状態なのだから、敵から放たれた弾丸が当たってしまうことだってあり得るところか、あっておかしくない。自分の脚で走って遮蔽物で身を隠しながら銃撃戦を繰り広げる、そんないつもの戦闘風景ではなく映画やコミックでしかないカーチェイスと変わりが無い。

それをここのハイウェイに乗る直前までローガンのナビをしながら考えていたわけであり、いつもとは違って私の眼前で心だけでなく仮想の精神をヒヤリと凍らせるだけ

の戦闘が起こっているのだから気がでないのもあって身を乗り出しての射撃をしなから横目で私の心配要素を常に無意識に確認してしまっていた。

『グローザ、今そつちの後方十メートルに俺達がいる。誤射はするんじゃないぞ！』

『……っ、やっぱりあなたも来たのね……。あなたの手なんか借りなくてもこいつらの相手には問題ないから下がらなさい！』

『それなら余裕そうな様子を少しでも見せてみるよ本部のエリート！このままズルズルと長引いちや、お前だけじゃなくて無関係な人達にも迷惑がかんだよ！』

無線で罵りながらローガンは乗車しているのは運転手だけになったらしい車両のタイヤをハンドガンで撃ち抜き、バスンツ！と穴を空けてパンクさせて走行不能に追いやる。万全による通常通りの直進ができなくなった敵車両はバラバララツ……と無残となったゴムからタイヤが回ると同時にお粗末な音を出しながら下がっていき、次第に見えなくなつた。

まずは先手を取ってきたうちの二台のうちの一台を片付けたが、敵増援として前方を走行しているのはまだ四台いる。道路の車線に沿って緩いカーブしたりもして時々見えるが、側部に見慣れているグリフィンの隊章が刻まれているカーキ色の車両の一つ前に、私も乗っている治安部隊の車両と全く同じと思える四駆が走行していた。プレートに書かれているナンバーはさすがに見えていないが、発見したグローザの言っていたこ

とが正しければ標的としていた犯人達のそれだろう。

一台がやられたことでこちらの存在にようやく気付いた二台がこちらに向かつてフルオートでサブマシンガンで撃つて弾をばら撒いてきたが、大体の射線を見切ったローガンは左右にハンドルを動かして回避し、リロードし始めたタイミングで反撃とばかりに撃ち返していた。カイルもそれぐらいで車を私が射撃しやすいように良い位置取りを探し当ててそこまで移動してくれるので、狙撃銃を撃つように息を大きく吸って止め、集中力を最高に高めた状態で正確に当てるようにし引き金を引く。

「指令部、こちらは0—1ユニット。搜索していた車両と交戦しているが、数が数だけに負傷で留めている犯人を取り押さえることまでも手が回らない。N15の高速道路にて応援を要請する。」

状況が状況だけに私達だけでは全て手が回らなくなってきたことを察したリーダーが車内の無線機のレシーバーを手になぞ呼び掛けているのがわかった。リーダー本人が言っていることしかわからなかったが、返答内容からして受諾してもらえたようだった。本体の下部に設けられているホルダーに放り込んだ彼は右横の窓を開けて頭と拳銃を握った右手だけを外に出して発砲して応戦し始めた。

身を乗り出して腰を窓枠につけて安定した姿勢になっていたらしい三人のうちの一人在りリーダーに撃たれたことで体勢を崩したところを見逃さず、私が追撃して排除す

る。バレルの先端に取り付けているサブレッサーによって消音された銃弾がパシュツ！と三回、つまり三発がその男に命中。路面に即座に落ちることなく、腰が窓のフレームに引つかかって力を失った腕がだらりと路面を指先で掠めたのが最初、次第に上半身からアスファルトの地面へと不時着し転がって行つた。

損害は与えられているのは知つていても、実際に目にすれば多少は揺れ動く。動揺が目に見えたことでさらなる好機が生まれたことを絶対に無駄にはしない。誰かの命がかかっているのであれば、素人が相手であつてもだ。

射角の確保が一部しかできていない為、後部座席で乗り出しているうちの一人しか狙えなかつたがそれで十分だつた。

致命傷でなくてもバランスを崩して車から外に出てしまえばもう戦えないどころか、運良ければ大怪我で済むがそれ以上であれば自業自得で現実と別れを告げさせられることとなる。叫び声を残していなくなったことで、右側の方でこちらに仕掛けてきた二人を排除できたことで、先程ローガンがしてやつたようにタイヤを狙いやすくなった。タンタアツツ！とすかさずリーダーが撃ち抜き、慈悲をかけてやるようにしてこの場から離脱させてやつた。

あと片付けなければならぬのは三台か、と確認した際に耳元の無線からまだ言い争っている二人の声が聞こえてくる。

『いい加減にプライドばかりを振りかざしてんじやねえよ。本部からの大義名分とかを傘に好き勝手言ってるんじやねえぞこの冷徹女!』

『私自身が考え付いたことにかざしている物なんて何も無い。他人の言う事にもちゃんとうるを傾けなさいよ身体年齢だけが大人さん?』

『おおん!? だったらためえは自分が得する結果だけを追い求めようとする自己中人形だ、自分ファーストでこの世は渡り歩けねえんだよお分かりですかなお嬢さん!』

『……それならあなたは誰かからの配慮に気付かずに出ようとする大馬鹿者よ。それだつて銃撃戦の中で長く生きていけるわけないことがわからないのかしら人間様?』

……ローガンは口汚く罵り、グローザも静かに暴言をぶつけている。そのせいか、ローガンはこちらからでは無線機などなくても必要ないぐらいの音量で怒鳴り散らしているのがわかるし手に持っている銃も犯人達に向けずに銃口が路面の方に向いている状態だ。

これをチャンスと捉えたのだろう、敵車両が一台がローガンの方に狙いやすいように寄つていき、別の一台がカーキ色のグリフィンの車両の方に走って行った。

この現状でカバーできるのはローガンだけ。

実戦だというのに目の前のことに集中せずに意識を別の方に向けすぎだという意図を込めたことを言いながら撃とうとした時だった。

『ああつたく、自分の非から目を背けようとしてんじゃねえよ頑固者！身体構造とやっていることは良いだけでメンタルモデルがポンコツかよてめえ!!』

『出来損ないという言葉があなたに適用されないのは残念ね。でも当てはまるボキャブラリーで一番効果がある一言とすれば、『ポンコツ』でしょうね』

……
『誰がポンコツ（だゴラア!?）（ですって!?）』

次の瞬間、タタタタタンツ！とほぼほぼ真横を並走していたローガンは拳銃による普段のほぼほぼ十割増しの速度で連射し、大型トラック一台が間にギリギリ入れるほどほどにまで距離を詰めてきていた敵車両のタイヤ二つに風穴を生ませた。

ギョルルルルルルル!?と廃棄物とされたタイヤ自身も『あれ、なんでこうなったの!?』と疑問の声を上げるようにして音を立て、コントロールができなくなった車体はコマのように回転しながらローガンの方に回転していった。突然のことに私のAIは視覚と聴覚から得た情報を処理することに回され、回避するようローガンに声を掛ける頃には既にハンドルを右へきって回避していた。回転していった車両は彼と私達の間を抜けて行き、ハイウェイのガードラインに衝突、大破していくのが最後に見えた。

「あつぶねえ!」

それに寸分違わず、運転していたカイルが急なハンドル操作を行った。このまま上半身を乗り出した状態では危ういと判断して車内に一旦戻って何事かと状況を確認するが、もう一台がグローザの方に迫っていったのだということを出す。乱れたバランス感覚を内蔵されている受容器で速やかに正常に戻し、状況を確認すべくまた再び元の体勢に戻るとカイルがなぜこちらに気にかけているような運転から急なそれになったのか理解した。

グローザの方に向かっていった車両と思わしき四駆が高く立っているガードポストで正面衝突し炎上していたからである。

右方向へと緩やかなカーブになっている道であるのにもかかわらず、曲がり切れなかつたらしい。

なぜ？という疑問符はすぐに解消された。

視界内に収まっていた敵車両が減ったことで見通しが良くなり、前方で走っていた味方の方にまで視野が行き渡った。そして挟んでいた残り一台の車両のボンネットに目掛け、跳躍している人形が一体。

「マジかよ……!!？」

私と同じく、それを見逃さなかつたりリーダーが信じられないものを見たかのような驚愕を漏らす。

冷静に考えれば人形の私達でもやろうとは滅多に思わないだろう。私が持つ銃は長身であるからというのもあるが、あまりにもリスクがありすぎるからだ。当たり前だが、跳んだとしても着地先の車両はその場で止まっているわけではなく走行し続けているのでそのことを念頭に着地点を計算しなければならぬ。言葉だけなら簡単に思えるだろうが、可能に至れるほどの身体能力、現状のように敵車両の前に走行している位置取りでもなければできない芸当ではない。

成功し着地したグローザは振り落される前にフロントガラスに拳を打ち込んだ。その拳から人工血液が滲むことにも気を払わずに彼女は防波堤を砕き、そこから私達全員が敵と見定めている男を引っ張り出してきた。

何かに気付いたローガンがすぐに側面に回り、車内に向けて全弾撃ちこんだ。直接肉弾戦を挑んだグローザを狙うのは向こうからすれば当たり前だ。

時間が出来たことにより、グローザは掴んだ運転手を遠くへと投げ捨てた。生きている運転手どころか乗組員が全員がいなくなった車両が荒ぶる前に彼女はすぐ近くで走行しているローガンのバイクの後部座席に跳び移った。

『貸し一だぞこの素っ頓狂！』

『あなたの銃はもう弾切れの筈でしょ？ここからは私が砲手として撃つてあげるから感謝しなさい、それでチャラよ！』

『ぎげんな、こつちに乗り込んでおいて勝手なこと言つてんじやねえ!』

『そうは言つてられないのよ……AR15!』

バイクの上にいる二人の会話から急にこちらにグローザから呼び掛けられた。

『スオミが敵によつて負傷させられて何とか運転している状態よ! 私とこの男で残りの逃走犯を押さえるからあなたは彼女をお願いするわ』

「……わかつたわ。ローガン、いいわね?」

『……了解、振り落されるんじやねえぞグローザ!』

加速と同時に前輪を若干浮かしたローガンは、着地と同時にスオミが運転している車両を追い越し深緑色の方に私達よりも高速で向かつた。

私は車内に戻り、運転しているカイルの方に指示を飛ばしてスオミの方に向かつた。

こちらの接近に気付いた敵一人が銃を発砲しようとする前に、後部座席にいるグロウザが左肩から下げているストラップで取り付けている『O T s — 1 4』で先手を取り排除した。パススススッ！とロシア製でプルバップ式の小銃から放たれた弾丸は乗り出してきた一人の至るところに命中しきつきまで戦っていた連中のように転がり落ちていった。

「そんでどうやって止めるつもりだお前は？後学の為にお教え願いたいんだが？」

「車内には犯人達しかいないことはこちらで確認済みだから運転手を撃つのが手っ取り早い。だけど今回はなにかしらかの情報を狙って……！」

「つておい、まさかお前……！」

バイクの座席から立ち上がった彼女は高く跳躍し、目標車両の側面に取りついた。そこから運転手を助手席側から発砲。ローガンのいる位置からではどのようになったかはわからない。だが彼女はその後で扉を開けて中に飛び込んだことから制圧できたのだろうか。

問題なくここまでやれてきたが、ローガンが懸念していたことが一つだけあった。小道で自分に不意打ちを食らわせてくれた襲撃犯がまた、車内に潜りこんだグロウザに死

角から銃撃でもするんじゃないかと思い、隠れているなら後部座席か最後部のトランクだろうが、銃のリロードはバイクを運転しながらではできないため、ローガンのP226はスライドが後部へと止まったことから現状ではもう使えないのでホルスターに戻している。とはいえ、なにもできないのは少々癪だった。

だがそれは杞憂だった。

段々と減速していったのでローガンもそれに合わせてスピードを緩め、完全に徐行の時の速度になって行つた。やがて停止したのでローガンは借り物のバイクから下りてスタンドを立たせておくと、さきほど思い浮かべていた自分のハンドガンをリロードすべく引き抜く。弾倉を抜いて腰のポーチに放り込むと、別のポーチから予備弾倉を取り出してグリップ内に込め、スライドを引いて発砲が可能にし、車両から下りたグロウザの方にまで行つて再度合流した。彼女は弾倉を取り換えてからこちらに目をくれてきた。

「この手段は役立てそうかしら？」

「勉強にはなるが無茶なことはするなつて一応釘を刺されてるからな。やるとしたら本当に追い詰められた時だろう」

「あら、それは残念ね。でも少なくともああなたのような人種はそれでもやるんじゃないかしら？ その証拠がほら、その傷でしょ？」

指された方向にあるのはローガンの右腕の上腕。街中で負った怪我を指摘されたローガンは頭の片隅に追いやっていたことを思い返し、『うへえ』と声を漏らしそうになった。

だがしかし、事によつては生き延びるために命を懸けなければならないことがあり、今回のそれはそれに当てはまる。肉を切らせて骨を断つということわざがあるように、『生還』の二文字をもぎ取る為にやったことだ。……うん、俺は悪くない。

「なんか聞き苦しいことを頭に思い浮かべているようだけど、気のせいかしら？」

「……決してそんなつもりはねえぞ」
「……ならいいけど」

自分ではない疑惑の念を振り払い、後部座席のドアをナイフを握った左手で開けて銃口を向ける。視線の先には予想していたように座席の足元で身体をローラーのようにして隠していたわけではなく、ただただ誰もいなかった。

トランクの方から光が少しずつ入ってきたので横目で見てみれば、グローザがそちらの方を開けていた。ローガンも大股で歩いて外側から最後部に向かうと、少しずつ広がってきている隙間から覗くようにしゃがんで敵影の確認を行う。一定のペースで開けられていったトランクには、車に使う備品が主に入っているだけだった。

敵影なしということで少しだけ気を緩め、肺に酸素と一緒に溜めこんでいた負の意識

を吐き出した。

「こういうの慣れてる？ てつきり動きだけかと思っただけど見るべき個所は見ているし素人とは違うようだけど」

「支援なしで一丁前の装備とライフルを持って一日無人地帯で生き残れといわれたらな。大体わかってくるんだよ、潜む可能性があるとすればどこなのかっていうのが。不意打ちと有利な銃撃戦を狙ってくるなら高所だとか閉鎖空間の外とかな。その予測だけじゃなくて、クリアリングの方法も訓練とは違ったやり方が必要になることだってある。そう考えていくうちに自然と身体が覚えていくんだよ」

「……一応、あなたへの認識と評価は改めるっていうのだけは伝えておくわ」

「そりやどうも」

グローザの一言で火が付き、始まった罵詈雑言での口の叩き合いでローガンはスツキリしたところもある。八つ当たりもなにも他の人形にできるわけでないので腹の奥で燻っていた不満を直接本人にぶつけたので楽になれた。

しかしそれをやった場が銃弾が飛び交う職場でというのがなんとも……。とはいえ、自分への見直しを要求せずともしてもらえようになつたのでまだ良しとしよう。

そう思い直し、前席の方へと向かい、力を失って絶命している遺体の荷物を探った。

「そつちの方でなにかあつたら言ってくれよ。俺も俺で引つかかるのがあつたら教える

から」

「わかった。情報で抜け駆けはなしよ」

グリフィンや自分達だけでなく民間人達にもかかわりが少なからずもあるのだから当たり前だ、とローガンは銃器以外で目につく物がないかと探った。着ている服とズボンのポケット、それと防弾ジヨッキとの隙間などを調べていくうちに紙片を発見。折りたたまれているそれを開いてみると、逃亡ルートを表した地図だった。ルートはN12からN15へ、そして今いるハイウェイを通過し管理保護区の外へと向かっている。

やはり逃亡先は無人数地帯か……、とローガンは紙片を折って収納してさらに何か足掛かりになる物はないかと思い探るが何も見つからなかった。

『ローガン、グローザ。スオミの方もなんとかなったわ。だけど損傷がひどいからグリフィンに回収要請するけどいいわね?』

「おう、こっちも制圧できたしそうしてくれ……とりたいけど、俺達の指揮系統はどうなってんだよ? 報告を受けて指示を飛ばすだけならスオミがやってくれてたけど、詳しくは聞いてないぞ」

車内の搜索しているグローザの方を見てみると、彼女は彼女で見つけたものをボンネットの方にかけていき並べているが、こちらからの問いに彼女も答えを返せないように横に首を振っていた。

だが現場指揮を担っていた彼女がひどくやられた以上、くよくよしているほどの時間も惜しい。そう考え、ローガンは代わりにオペレーターに繋いで回収要請をしようとした時だった。

『かまわないよAR15。そのまま指示を飛ばしてくれていい』

聞き覚えのあるどころかしばらく聞いていなかっただけのその声にローガンはやや驚いたが、彼女は本来の上司に繋がったことに安堵したのかはわからない。一度AR15は喜色の息を吐いたかのようにして間をあけたが、咳払いをすると、気を取り直したかのようにして報告を行った。

『銃撃戦でスオミが負傷しました。彼女自身の生命維持には問題ありませんが、悪化する前に速やかに基地の帰還を願います』

『了解、ただちにヘリを送るよ。よく頑張ってくれた』

やれやれと思いながらローガンは調べ終わった遺体から立ち上がり、グローザの方へと寄ってボンネットの上に乗っている品々を確認。

一緒に見てみると、目についた物といったら一冊のメモ帳サイズの手記ぐらいだった。古ぼけたような革でできている焦げ茶色の表紙のそれを捲ってみると、日時と作戦内容が詳細にメモされているページから始まっている。作戦手順や自分の役目、また簡易的に図を描いては自分がつく位置までも記し、注意点もそうだ。

ばらばらと全体的に見てみると、犯罪者にしてはマメに書いているなど思える。実際に現場を偵察をしたように付近の人通りの多さなども注目していたり、目標ポイントとしている箇所の情報もある。書いてある内容と質といい、ここまで見てみると特殊部隊の偵察任務のメモ帳だなど思い至った時だった。

車両のクリアリングでも見かけなかったあの男。あの者はどこに向かったのだろうか。

ここにどのような状態だったとしてもいかなかったということは、恐らく自分達が見ていない間に街中で下りたということになるが。

「まさか……」

その手記の書かれている中で最後のページまで捲っていったローガンは、目当ての箇所を見つけてボールペンで走り書きになっている文字を目で辿っていく。

箇条書きになっている文全体をまとめてみると、正午からのコールレストランで襲撃し目的の物資を回収した後、自分は予定されているN13の小道で逃走。抜けた先にて別班と合流後は……と見ていったところで黒く塗りつぶされていた。文字の上から無造作に同じペンでザッと全体的に読めないように、という感じだ。

舌打ちしたローガンだったがこれではつきりしたことがある。

仲間達から『バーンズ』と呼ばれたあの男は、わざとこの手記を車内に残していたの

だ。でなければ、自分達に回収された際に読まれて情報を盗まれたりしないように黒塗りにすることはしない。

『ローガン、報告はできそうかい？』

友人からの催促ではないその質問に、ローガンはありのまま報告した。

「状況はクリア。現在グローザと情報源になる物はないか搜索している。現在地は——

——
〈Unknown〉
——

「ああ、指示通りの物は回収した。今は指定されているポイントに移動中だ」

『なら作戦は完了といったところだろうな。貴様の仲間もさぞかし嬉しかろうな、目的

を完遂できて』

「……完遂だと思ってるのかてめえ。楽な仕事だと思つたらグリフィンの介入にあつたぞ」

『奴らPMCに？人形達の相手など、貴様からすればどうつてことはないのではないかな？』

「オレ様だつたらな。だがあいつらはちげえよ、まだ銃を握つてようやくまともに戦えるようになってきた頃だつたんだ。それをてめえは……！」

『ふん……』

「それにだ、オレ様達は何の見返りもなしで戦っているわけじゃねえことは忘れていねえだろうな……？」

『わかつていゝさ、貴様らは我々が金で雇つたゴロツキだ。私はその代表としてビジネスの話をしている、そうだろう？』

「ビジネスライクがどうか、オレ様にはそんなインテリ野郎の言つてゐることに興味はねえ。だが作戦に關係のある情報はすべてこつちに隠さずに寄越せ。一時的な飼い主としてでも、それぐらゐはできるはずだろうが」

『こちらで把握できていることは全て伝えたぞ。偵察までしておいてそこまで見切れなかつた貴様に落ち度があるのではないかな？』

「それを差し引いてもだつたつう話だクソ野郎」

『……貴様の相手をしていると、あの忌々しいクズを思い出すな。貴様らはなんの関係もない筈だよな』

「何の話をしているかはさっぱりだ。目標完遂とあいつらの犠牲を差し引いてマイナスだつたつう話だ。だがこれで最終目的にいけるほどのステップを踏めるんだらうな？」

『無論だ。これが成功すれば、貴様は自由の身。鎖の着いた首輪が外されるうえに報酬もあるのだから何よりだろう？』

「改めてどう聞いても胡散臭いな。てめえは雇った奴が使える人材であれば意地でも離さないって噂があるぐらいだ。報酬をちらつかせてはそれを餌にして檻に閉じ込める、猿でもわかるようなその仕掛けで今だと何人いるんだよ？」

『なら貴様はそれに食いついた魚だ。……いや、切羽詰っていたとはいえ、考えもせず目の前の鰈ニシンに食いついた動物。それでこそ猿以下ではないのか？』

「この野郎……!!」

『まあいい。こちらから回収の者を寄越してやる。所定のポイントに向かつて待機している。ノーブル、アウト』

「……切れやがったな。あのクソ野郎の最後は引導をくれてやりたいが、どうにもならねえな」

(さて、あの野郎はどう動くか。グリフィンで食っていけてる野郎だしそう簡単にくだばりはしねえだろう。鬼さんこちら、手の鳴る方へってな……)

口角を上げて獰猛な笑みを浮かべた男は麻袋を担いでいない左手で煙草を取り出して啜えると、ライターで火をつける。大きく息を吸い込んでニコチンを取り込むと、息を吐いて煙草の先端に付いた灰を下水道に落とす。

鉄骨などによる道に落ちたその灰はしばらく、熱を失わずにその場で燻っていた。

21. 疲れ果てた先に —Source of misery—

それまでの現場検証の引き継ぎを終え、基地に帰れるようになったのはもう陽もとつくの昔に沈んでいる頃だった。

休憩を取るだけの時間をもらっていたとはいえ、水を飲めるぐらいでしかなく夕食どころか軽食もなかったのである。胃袋が主張を繰り返される頃に帰れるようになったローガンは、現場付近にスオミとグローザが乗っていた車両に乗り込んで基地に帰還した。本来ならコールレストランの方に置いていた当初のARR15との車両の方に向かわなければならなかったが、既に回収済みだという報告を新入オペレーターから受けていたので直帰で戻れた。

道中にて、検証などの作業で疲れた様子であるグローザと運転を交代し後部座席に移った後、ARR15の方は舟をこぎ始めて助手席からこちらの方に寄りかかろうとしていた。さすがにローガンも寄りかかれながらの運転はできないので、少々惜しかったが赤信号で停まった際に窓枠の方にまで彼女の重心を動かしてそちらの方にもたれかかるようにしたのだが。

その際、時々基地内でも嗅覚を甘美に刺激する花のような甘い匂いで、寝ている彼女を抱き寄せたくなったが、後部座席にいるグローザの目もある。男性としての性をさが恨みつつ、ローガンは青信号になったので運転を再開。

やっと基地に到着したのは夕食を取るにしても遅い時間帯である。

車庫にバックで車両を入れると、それまで静かに寝ていたAR15を起こし、寝顔を見られたということで非難がましい視線を向けられながらもグローザとこの後のことを相談した。

パトロールしている時に事件に出くわした際はやはり報告書の提出は求められている。だが提出期限は任期が終わった後で良いとマニュアルに書いてあったため、急ピッチで書き上げる必要はない。それでも口頭で帰還したことの報告を合わせてするべきだということでは纏まった。

「そんじゃ、報告は俺がしておくからお前達は先に帰っとけよ。眠くなるほど疲れてるんだしその方が良いだろ」

「でもローガンだつて疲れてるでしょ？一旦休めれたから私はいいけど、あなたは寝れていないじゃない」

「大丈夫だよ、報告ぐらい。あいつが戻ってきたんだし、俺からすれば顔ぐらいは見ておかないとだしな」

半分は本当で嘘100%で言っていない。虚偽であるのは自身の体力。正直なところ、眠気は今のところないがこのまま自室に戻ってベッドに飛び込んだら確実に寝てしまふ。人形であるAR15の体力が貧弱であるのではなく、単に頭を働かせ続けていることによる興奮状態が続いているため、身体的な疲労は蓄積しているもの、目は冴えている状態だった。

それに、その場にいるのであれば彼女から聞きたいこともある。

「私が言えたことじゃないけど任せましょ。スオミは撃たれたし、皆疲れている中で買って出てくれたんだもの。今回はそれに甘えても罰は当たらないわ」

「そうしてくれ。それに二人とか三人全員で行ってもあまり意味ないしな。むしろ怪我の具合を具体的に見られるぐらいで得することなんざなにもないしな」

「……わかったわよ。スプリングのところまで今日の夕食、一緒に食べる為に待ってるから。絶対に来て」

「はいよ。終えてシャワー浴びたら行くからな」

絶対よ、とAR15は愛銃を収納したギターケース持ち、車庫のシャッターを潜って先に宿舎に向かった後で、ローガンは車内にホルスターと一緒に置いていたP226を手につつと運転席の扉を閉めて鍵を閉めた。

そうしている間に、助け舟をローガンに出したグローザはガンケースを持って歩き出

していた。

カツツカツツと彼女のブーツのヒールが音を立ててAR15と同じ方向へと向かっていくのをなんとなく耳で認識していると、急にそのヒールの音が止んだ。

「ねえ」

声を掛けられたので近くに置いてある工具類のボックスに腰掛けながらグローザの方を見る。琥珀色の瞳が真つ直ぐこちらを射抜くように視線を向けてきていた。

「この間聞いたあなたが戦い続ける理由、あれは本当の事？」

「何を聞いてくるのかと思えば、そのことか。別にあれに嘘もなにもねえよ」

ピットの出入り口前で話していたことを思い返す。

あれらからグローザに対して僅かどころじゃない反感を抱くことになる決定打になったが、彼女が言っていたことにも一理ある。正しいか間違っているかといったら、正しい言い分だ。計算するのに電卓もしくはそろばんのどちらかを使えと言われたようなもので、皆が前者を選ぶことに対して意地になり、後者を壊れるまで使い続けるという認識で間違っていない。それを人形と人間に置き換え、自分達が使われる道具になっただけの話だ。

信用だつてそうだ。結果を示しているにしても、自己中心的になつてしていると捉えられてもおかしくない。ローガン・ブラックという人間の人柄を明確に認識できない本部の

人形が不信感を抱くのはごもつともといえている。

だからローガンはなにも反論しなかった。『そろばんが電卓に打ち勝てるほどのメリットをどう説明する?』ということだ。不透明で抽象的なことしかあげられず、結局は機械に任せることになることになるのだから。

「あの目的そのものを疑っているわけじゃないけど……」

「……なんだよ。珍しく歯切れが悪いじゃないか。いつもなら棘のある感じと言ってズバズバと切り込んでくるのに」

「こつちが悩んでいる時に茶化さないで。どういえばいいか考えているんだから……」
額に人差し指を当てて言葉選びといった感じだろうか。グローザとのこれまでの会話からすると、物怖じせず自分の言い分は包み隠さずハキハキという性格だとローガンは思っていた。オブラートに包む、ということはせずに伝えるべきことはそのままにしてだ。

ボックスに腰掛けたまま待っていると、グローザは諦めたようにかぶりをふった。

「ああもう、疲労つて私達のモジュールにも影響を及ぼすのかしら。全然口に出すことが浮かんでこない」

「なら今日はもう休んどけよ。単に考えが纏まらないだけだろうし、明日にでもぶつけてこいよ。お前からの毒にはもう慣れてきたんだしな」

「スッキリしないけどそうさせてもらおうわ。じゃあおやすみ、影の狼さん」

最後の皮肉を聞き流したローガンは歩き去っていくその背中に『おやすみ』とだけ言い返すと、車両の鍵を持って基地内の指令部まで向かった。

重石をつけたように重い両脚を通常運転で動かし、キーホルダーの鎖の輪に指を通してクルクルと回しながらふと思いついた。

そういえば彼女が左手薬指にしている銀の指輪、あれはなんなのだろうか。彼女の性格からして、わざわざ銃を握るのにやや支障をきたすような位置にアクセサリーをつけるとは到底思えない。

アクセサリーではないのであれば、ローガンからしても縁がないと思える『アレ』だろう。人生の墓場とも言われる結婚をしたことを表すものではあるが、戦術人形ではどうであろうか。彼女達との婚約が出来るのであれば、グリフィンの指揮官といったような、人形の所有主だろう。だがそのメリットは？

……いや、別に彼女達のように、笑ったり泣いたりするする人形と結婚することにはあまり嫌なイメージはローガンにはない。

戦術人形に対する知識が乏しい以上、彼女本人に聞く方がいいかもしれないが……。
(それについても聞いてみるか……)

車庫の明かりを消し、その場を後にしたローガンは、改めて気怠い身体をなんとか脳

で従わせて歩き始めた。

ここの掃除、言った通りしてくれたんだなと思いつながら。

指令室の前に到着したものの、ローガンは少々悩んでいた。

今はもう業務終了時間になって数時間経っている。それどころか、基地中の皆も特別な事情がなければもう食事も終わらせているはずだ。いつもこれぐらいの時間帯から、執務室で自分の隣にデスクをもらっているM16をはじめとした数人の人形達と、スプリングフィールドも交えて静かに雑談などをするトンプソンから呑もうと誘われている。

今日の事件を解決するのに最後の最後で声を出してきた『あいつ』。しばらく基地を空けていた彼も疲れているだろうし、今日はもう指令室にいないのでは……？

むむむ……とノックするように手をかざしながら、脳内に浮かんできた選択肢で四苦八苦していると、

「鍵は開いてる、入ってきていいぞ」

ここの男性指揮官ではない、本部の女性総司令官の声が聞こえてきた。声自体もまだ聞いたことがない刺々しいようなものではなく、ただ単純に呼び掛けた声色だ。

『なぜこの部屋に……？』とは思ったものの、これ以上間を開かせるわけにはいかないということとで、ノックを三回して一間空けてから室内に入った。

「随分と遅い帰還だったな、我々の隠密部隊隊長殿？ 話では聞いていたが、ここまで遅くなるのはあまり感心しないぞ？」

「すいません、ヘリアンさん。俺らとしても、彼らだけに全投げするのは忍びなかったんで……」

「冗談だ、遅い帰還にはなったが負傷したぐらいで済んだんだ。保護区内とはいえ、銃撃戦になれば最悪の場合は脳天を撃たれて即あの世だ、よく戻ってきてくれたな」

ここの基地の指揮官が書類整理などだけでなく、作戦指揮をここから行えるようにと機材が内包されているデスクに腰掛けていたのは、今のグリフィンの代表を勤めるヘリ

アントスであった。

最初は笑っていない笑顔であったことと彼女からの気迫でローガンはややたじろいでしまったが、ジョークだということを明かした後は両目にも笑みを浮かべていた。

どうもローガンはこの人が苦手だった。悪い意味ではなく、良い意味でだ。

白か黒かといわれたら、間違いなく真黒な職場で銃を撃ってきたこちらからすると、グリフィンという組織内での仕事は間違いなく楽な方だ。もちろん、やっていて改善を求めるか我慢しなければならぬことはあるが、それらを含めても良い職場だと思う。それを形作っているこのヘリアントスこと、ヘリアン総司令官は上司として理想に近いとは思うが、逆に悪意が全く感じられないので恐怖心を感じ得ない。

その分、自分に頭を下げてでも協力を頼みながらも、友人として関わりのあるあの指揮官の方が、自分が書き上げた重要書類をアルコールランプの上にかざしてくる分取っ付きやすい……と思う。

「それで、奴らに関して何か収穫はあったのか？」

「とりあえず掻い摘んで言っても量はありますが、奴らが予定していた逃亡先は北西側の無人地帯のようです。高速道路に乗る前にどこかの区画で襲撃チームの中心人物を逃がし、残りは囷のようでした」

「随分と用意周到だったようだな。民間人どころか、事件が発生する場に居合わせた隊

員がとんとん拍子で進んだと言ってたぞ」

「ええ、その人物が意図的に車両に残していた手記からも、その計画性が窺えました。経験も負けず劣らず積んでいますし油断はできません。A R 15が現場で拘束した犯人への尋問は？」

「明日の早朝から治安部隊の彼らが今やつてくれるそうだ。終わり次第、情報をこちらにも伝えるとな」

現場から押収できた物品からして、犯行に及んだ彼らは一つの組織として動いているというのがローガンの所見である。レストランで組んでいた陣形、現場からの逃走先にあった別班によって用意されていた車両。グローザからも同時攻撃を仕掛けられていたという話もあったことから、訓練を受けた上で統率されている。加えて、あの男を守るために体を張ってきたこともある。だがあのような庇い方はどう見ても犯罪者のそれとは違う。組織そのものの根幹である人物にあの男は当てはまらない、根拠はないがそのようにローガンの直感が囁いていた。

そしてふと思いついたことを、自分の中のデータベースにはないことをソファに座った彼女に尋ねた。

「ヘリアンさん、『バーンズ』という名前に聞き覚えは？」

「……いや、覚えはないな。その名がどうかしたのか？」

「中心人物だと思われる男の名です。奴自身の本当の名かどうかはわかりませんが、相
当な腕利きではありません。戦術人形でも油断した場合、負けることは間違いありませ
ん」

「それほどの者なら治安の彼らと共有している危険人物リストに載っている可能性があ
るな。できるだけ早く調べておこう」

「お願いします、と言ってローガンは頭を下げた。

徒歩での逃走で最終的には追い付けたが、初手からの攻撃からこちらの拳銃を気付か
ない間に奪っていたことからして、対人戦闘はやり手であることが確信できる。あれだ
けの腕をもつ男がマークされていないことは考えられなかった。

「とりあえず、今日のうちに聞きたかったことは現場で得られた成果だ。証拠品などか
ら推察は明日以降にするとして、今日はもう休んでおけ。あいつは戻ってきて荷物整理
を終えた途端、彼女達に連れていかれてたぞ」

「ここを一週間どころか十日以上留守にしてみましたしね。予定を大きくオーバーしてい
ますし……そうだ、大きく話は戻されますけどスオミの容態は？」

「無事だ。肩だけでなく首元付近も撃たれていて、少々意識も朦朧としていたが人間よ
りも頑丈にできている。数日は外出できないが、しばらく根を詰めていたそうだしいい
休みになるだろう」

「……すみません、ヘリアンさん。重ねていくつか質問させてください」

こちらの表情からなにかを読み取ってくれたのか、彼女は一間空けてから自分の向かえ側にあるソファに腰掛けるように勧めてきた。長くなると察してくれたのかは定かではない。しかし、今それは重要なことではないだろう。

「……それで、聞きたいことは？」

「まず一つ目、これはまあ馬鹿な質問なので足蹴にしてくれて構いません。彼女を車内でグロウザが撃つたという可能性は？」

「完全には否定しないよ。あれでも結果を出すことに拘りを持って戦う人形だ。そのプライドの為なら、彼女だってそうするかもしれない。君とかから疑いを持たれるいった色々とリスクは伴うがな……でも君の中でも答えは出ているんじゃないのか？」

「……ええまあ。現場のその場で湧いた一時の激情をぶつけ合いましたけど、あーいった奴でもちゃんと考え抜いた理念があることはわかりました。あいつが打算的にこの基地の人形達と接触しているのではないかとも思いましたけど、そんなことをしているにしてはあまりにもその……」

言うべきことか一瞬迷ったが、総司令官が隠すな話せと命じていたので口に出すことにした。

「……『線引き』がはつきりなようであやふやです。人間と人形、俺と彼女達への接し方

が」

「……なるほど、君の目にそう映ったのか」

バルソクへの伝授からの本部の人形達の辛辣な総意を言った時の自分への当たり方。あそこまでの温度差にはさすがに愕然としないことはないだろう。

だが、『なぜ?』という疑問が残る。

『子供っぽい夢を持っている気に入らない人だ。だから冷たくしよう』というそれこそ中等教育もされていらないような年齢の少女の単純なものわけがない。それが正解だと思うのかと問われた場合、当事者であるローガンでもそんなわけないんじゃないかと否定する構えを取る。彼女の言い分から『生きるか死ぬかのシビアな世界で子供っぽい夢を持っていることもあつて信用ならない』ならまだ納得できるが、先述したような理由であれば蹴り倒す勢いだ。

あやふやなものではなく、それだけの理由がある。じゃあそれが、人形だつたらどうなのだろうか。まだ実際に耳にしていなくても、そんな希望的観測に基づいたエゴが彼女達に根付いていてもおかしくない。

そこまで考えていないエリートではないだろう。グローザは射撃をはじめとした戦闘技術の腕だけでなく頭も冴えている。彼女のAIであれば、思慮深い人間のようにそんな不確実で心理的な心情に行き着くはずだ。

そう、色々不確定だ。

人間と人形だから接し方を変えろというだけならまだともかく、思想などにも話を持ち出すとキリが無くなる。グローザは無意識にそのことの境界線の引き方を避けているようだった。

「そうなるよ、聞きたいことはグローザの事か？」

「……まあ他にも一つありますけどね」

「……いいだろう。なら少しだけ彼女の事を話してやろう」

そう言うのとヘリアンは背もたれに体重を預けている状態から、両膝に肘を乗せて両手を組みそこに顔をもつて行くといったような姿勢になった。表情も真剣そのもので、ギリと光る眼の奥の光にローガンは押し黙って耳を傾けた。

「私自身も全てを聞かされたわけではないが、グローザは元々こことは別の支部の方で副官を勤めていたんだそうだ。彼女自身もその基地の指揮官の為に尽力して部隊を率いて戦果を上げ続けた。……が、その指揮官を亡くしたある日を境に彼女は本部への転属となったことが本部で記録として残されている。この時は私はまだ代行官としてグリフィンにいた頃であって、関与していないこともあって詳細はよく知らないがな」

「従っていた指揮官がやられた日を境にか……その後はどうなりました？本部に来てからもまったく銃を取らなくなったわけではないでしょう？」

「その通りだ。無論、彼女でなければ我々が望んだ結果を出せない潜入作戦に動員されたり、激戦区域で応援が必要とされている支部の方に配属されたりした。だが配属された先で現場指揮を行う指揮官に対して辛辣な物言いをしたりと手厳しかったらしいがな。それでメンタルをズタズタにしながら転属を繰り返して本部に戻ってきたわけだが、今回はこの視察も兼ねて私の護衛として連れてきたわけだ。私の予想では、お決まり文句のようになっていた『この指揮官は気が弛んでいる』とか呟いていたりするものかと思つたが、なにも言つてないのだから少々驚いている」

「それ、たぶん俺がサンドバックになつてたからじゃないですかね。『あなたは腑抜けている』だとかを正面切つてストリートにぶつけられた方が楽じゃないかってぐらい、ポッコボコに殴つて頭に浮かんでいた不満が解消されていたり?」

「言つていてそんなわけあると思うか?」

「……ないですね、と中身が詰まった袋代行が泣く子も黙りそうな怖い笑顔に目を逸らす。このノリは通じないらしいのでダメ、と脳の中のメモ帳に記した砂袋代行は白髪頭を掻きつつ、一時だけ普段とは違うモードにシフトしていた脳内スイッチをカチリと切り替えた。

「問題外と切り捨てられてもおかしくない質問から色々と聞くことが出来ましたけど……そうなるかと二つ目の質問として、今回のパトロールでスオミと組ませたのは……」

「おそらく君の考えている通り。グローザは任務こそ真面目に取り組み、支援などがあつた場合はそれ相応の収穫を掘り出して帰ってくる。そんな彼女でもあまり一般人との交流はここ最近ではほとんどないと言つても良いぐらいだ。それを理由に基地だけでなく、街中の視察を含めてスオミとの同行を命じた。ここで製造されてから長く生きている彼女であれば、性格も相まつて反発し合うことはあまりないのではないかとも思つてな」

「あいつにも他人の言い分に譲ろうとはしない頑固な面もあるのはご存じでしょうかね。上司がいなくなった数日間で倒れたというのに、『今日できなくとも明日からでも取り返す』と説得しようとしても聞く耳を持つても安静にする姿勢もなかったんですよ」

「誰にだつて譲りたくないと思うような、独占欲が全開の物というのはある。政治家が自分の立場を奪われまいと拘るように、スオミだつて『副官』の座を誰かに盗られたくないんだ。指揮官が代わつてから任命され、それからはずっと上司を支え続けているんだ。そんな『副官』であることに誇りを抱いているのであればわからなくはないんじゃないか？」

「……たしかに、通ずるものはあります。それが良き上司と巡り合えたのであれば尚更」
ヘリアンは恐らく『スオミだけに明かした』ことを知らないだろう。ここでそのこと

を話してしまっても良いが、そこで変な方向に話がこじれてしまったら困るので、ローガンは口に出さずにしまい込んだ。しかもこの話は迂闊にべらべらと口に出すべきではない。

その内容は推測だけで確かな中身までは想像がつかないが、口止めされているのであれば仕方ないだろう。たしかな判断材料もないのに決めつけてしまえば、それこそ取り返しのつかないことになりかねない。

生きているのに袂を願っていない形で分かつことになるのはローガンにとつても心苦しく思うものだ。苦痛を感じるのであれば、あの苦いだけの缶コーヒーを飲んで味覚が狂ってしまうぐらいで良い。

誰かと話しているのに物思いに耽つている場合じゃないと気を取り直し、一番聞きかかったことを脳内に呼び起こした。

「それじゃ最後、これが俺にとつて本題と言える質問ですけどもいいですかね？」

「かまわないさ。聞きたいことがあるなら、タイムリングは見計らつても遠慮だけはするな。戦場では手腕だけじゃなく知略を巡らせることだつて必要だし、そんなつつかえたものを抱えた状態で行きたくないだろ」

「たしかに、喉が物でつつかえた状態で戦うのは全くないと言いきれませんが想像したくないです。そんなじゃ、聞かせてもらいたいですけど、ここに来て初日でシャドー隊

の扱いに『いい意味で困ってる』って言ってましたけど、本部の人形達の総意を聞く限りじゃそうは思えないです。なぜそんな言い方をしたんですか？」

脳内で疑問の半分以上の枠を占めている重石を口から吐き出した瞬間、目の前のグリフィンの現最高責任者はモノクルの奥の目をギラリと光らせた。

宿舎から最短でバーに行くには東西南北に基地の建物に囲まれた、大学のキャンパスのような中庭を経由して行くのが一番である。ローガンの自室もある宿舎があるのは中庭から南東の方で、一日の始まりである朝では食堂を利用するために最短でそこを

突っ切つて向かつて行つてゐる。もう夜の闇も深まつてこちらに面している建物の窓からは非常灯がちらほらと覗かせている中をローガンはシャワーも浴びてからA R 15との約束通りスプリングフィールドのバーに向かつていた。

肉体的疲労が重なつてゐるだけでなく、総司令官との内容が濃く込み入つた話もあつて脳をフル回転、精神的にも大分参つた状態であるため、本心を明かせば今日はもう夕食を取らずにベッドに直行してしまいたかつたが、約束をしてしまつた以上は可能な限りは守つておきたい。

……まあそれでも、携帯端末で連絡してしまつてもよかつたのではないかとも思つたが、最高責任者殿から『あいつは今日はもうバーに拘束されてゐるだろうから顔だけ見に行つて来い』とも言われていたのでやむなく……といった経緯だつた。教官の实地訓練に比べたらまだマシだしこれも体力づくりの一環……と割り切つたローガンは目的地の扉の前に辿り着き、両手開きの扉のロックされてゐない左側を開けたのだが。

「……なんだこれ」

目に飛び込んできたのは死屍累々でありながらも阿鼻叫喚の有様だつた。バーの奥にあるダーツやビリヤードの台の方に陣取つてゐる衆がどんちゃん騒ぎで笑い声を高く上げたり、酒が入つたジョッキやグラスを一気に呷つたりするなどしていてローガンも顔真つ青になる。そもそもの話、足を踏み入れた先が目に見えるほどのカオスなこと

になつていれば誰だつて気が引けたりするものだ。経緯も何もクソもないことなどない。必ず何かの結果が生み出されたのだとしたら、そこまでに行き当つた過程があるのだから。

しかしここまでのお祭り騒ぎなどローガンは目にしたことなどない。現在の時刻はもう日にちが代わる二時間ほど前であるというのにここまでのテンションを維持することが出来るなど

もはや頭を働かせることも億劫になつてきていたので、もうそこに深く関わらないことにして赤い顔で眠りこける人形達を跨いで数人の人形が静かに座っているカウンターのの方にローガンは逃げた。

もう向こうの惨状の対処は諦めるというか、最初から分かつていたかのようにしていたマスターに挨拶として片手を上げた。

「……ええつと、お疲れさん。いいのか、止めなくて?」

「そちらも遅くまでお疲れ様です。いいんですよ、もうこうなることは容易に分かつていましたから」

もう一度肩越しに振り返つて見てみれば、今度は腕相撲が始まつていた。周りのはやし立てる中で二人の戦術人形が肘をついてお互いの手を掴み笑いながら睨みあつている。対戦するのはFN小隊のFALとファイブセブンこと57。軽口をたたき合ひは

するが同小隊内で行動するため信頼し合つてることが窺えていたのだが……。

……うん、あれは目が全然笑つてない。それによく目を凝らしてみればまだ試合開始前だというのに軽く握るのではなく、もう使用する腕全体に最大出力で腕力を發揮させている。人間じゃ無駄に体力を使うだけで得することなど何もないだがお構いなし。おーい、レスリング台の方が悲鳴を上げていますけど気付いてますか？

「それで、なににしますか？」

「ん、もうこんな夜遅くにがつついて食う気分になれないしな。ビールとそれに合う軽いつまみを頼んでいいか」

「ええ、かしこまりました」

開始の合図で『ファイツ！』という誰かの掛け声と盛り上がりを背にし、ローガンはマスターに注文を出した後でカウンター席に座っている人形達の中で約束を取り付けていた少女を目で探していく。すると隅の方で突つ伏すようにしている様を発見。その隣には見覚えあるどころか、ガツツリ日常で絡んでいる人形が一人いた。

話をする事になつてもまあ特に困ることもないしいいか、と思ひそちらに歩を進める。気配でこちらに気付いたのか、それともその聡いそのAIの頭脳で予測できていたのかはわからないが、バーの一角の喧騒で足音がほとんど消えているこちらに顔を向けてきた。

「お疲れ♪随分と遅かったわね、ローガン?」

「知ってるかもしれないけど残業につぐサービス残業だったんだよ。おかげでこっちはヘトヘトだまったく」

そこにいたのはこの間商業区の様子を見て回るのに同行してきたUMP45だった。彼女の両手でも収まるサイズのグラスにはまだなにかしらかのアルコール飲料が注がれている。

向けられてきた顔色からして、そこまで酔っていないように見える。普段から彼女から発せられる猫撫で声も視線をこちらに向けてくる金色の瞳もいつも通り。雰囲気もリラックスしているで満面の笑みを浮かべていた。

一旦は両腕を枕にしている約束相手、AR15の様子を確認してみると、目を回したようにして眠っている。顔が赤くなっているが、その原因が近くに置かれている中身がまだ半分ぐらい残っているジョッキであるのは明らかだった。

「ローガンが来るのが遅いし、周りに流されるようにして飲んでたんだよ。いつもならよっぽどのがない限り断ってなのに、そんな素振りもなくいきなりビールジョッキを手持ったから私も驚いたわ。何かあったと聞いたけど何も答えないままこうなっちゃったし、どうしようかと思ってたのよ。今日一日、AR15となにかあったの?」

「今日の昼間から二時間ぐらいでアサルトライフルやサブマシンガン、防弾チョッキまで着ている奴らとドンパチしたぐらいでこいつとは喧嘩みたいなことは一切してない、と断言はできる。俺としては意識してこいつとそういう険悪になるようなことはできればしたくないしな」

「ならAR15でなにか思うことがあつた、そういうことになるわ。でもそれに突つ込むのは野暮なことだし今はそつとしておくべきよね」

今ではこうしてスリープモード、人間なら酔い潰れて睡魔に身を任せている状態なので無理に動かすべきではない。普段なら小動物みたいに寄ってくるG41みたいに頭を撫でようものなら怒ることは間違いないが、劳う意味合いで指先で優しく撫でておくと、45の右隣の席に腰を下ろした。

彼女に昼間からの事件で自分が見たことを隠すことなく伝えている間に、スプリングフィールドに注文していたビールとマスタードと一緒に出されたソーセージが到着。会話の合間に舌鼓を打ちつつ、肉から溢れ出る肉汁を酒と一緒に流し込んだ。

そんな普通のソーセージの中に色が赤いのがあつたため、手に持つて使つていたフォークが止まつてしまう。

「……なんだこれ。小さいのに如何にもなバイオレンス感が出ていて食うのに躊躇してしまうんだけども」

「チョリソーっていうスペインで生まれたっていうソーセージ。私も食べたけど美味しかったわよ」

「へえー、そんじやいただきませつと……」

フオークで刺した赤々しいそれをえいやと口に放り込む。

噛んだ瞬間に肉の食感と一緒に味覚を刺激してくるのはスパイシーな肉汁。この前まで口に使っていたソーセージからは甘いそれが出てきていて腹を満たしてきたが、こちらの方も中々だ。

作る課程では香辛料も混ぜているのだろう。塩コショウのようにスパイスと言われたらすぐに思いつくそれだけでなく、カレーほどじゃなくても多彩なものをつかっている。ただ単にしょっぱいだけじゃなく焼きたて特有の熱の中に辛味があり辛くて辛くて辛くてからくてからくてからくてからくてからくてからくてからくてからくてから!!

「ばばばばばばばああああああああああ!!」

舌に対する痛烈な刺激に我慢できなくなったらローガンは考えることなく反射的に置いていたビールに手を伸ばし緩和するために一気に口に含んで流し込む。美味く感じる筈の麦の香りと苦味を味わうことなく食道に時間をかけて通したことにより、ようやく口内に一時だけ時間に比例して大きくなっていた暴れん坊将軍が静まった。汗が噴き出てきているのを感じながらチクチクと針で刺すようにまだ微かに残っている痛み

を逃がす為に、荒く息を吐きながら顔を上げると、隣の45は腹を抱えながらブルブルと肩を震わせ、今は少し離れたところで食器を洗っている、さつきこの凶悪飯を出したスプリングフィールドも口に手を当てながら『ふふふ』と声を漏らしていた。

「んだこれえ!? 辛いなんて一言で収まらないぞおい!!」

「くふふふふ……くめん、ローガン。このチョリソーは辛い物好きのスタッフの要望で特別辛い……。本場のは入っていないけど、日本に流通したののように唐辛子がこれでもかと……くつくつく……!」

「ごめんなさい、ローガンさん。食べ物で遊ぶのは悪い事ではありませんが、酒の席での余興ということでも許してください……ふふふ……」

「それだったら先に言つて『イエス』か『ノー』の選択肢をくれよ! しかも45、お前知つてて俺に食わせて反応を楽しんでたんかい!」

「へへへ、無知は罪なりつていうしね〜♪」

S O P H I E にもお仕置きとしてやってたりする、両サイドからの側頭部ぐりぐりの刑に処す為に左腕を伸ばすが、するりと猫がこちらを馬鹿にするようにして躲される。席を立つた彼女を追うべく立ち上がるうとしたローガンだったが、両脚に来ていた疲労にアルコールの影響も重なってかその場で立ち上がることもできずに転倒してしまった。

ドタタンツ! と派手にローガンが受け身を取れずに前面から転んだことで、悪ふざけ

が過ぎたと考えたらしい45が駈け出そうとしていた体勢からこちらに戻ってくる。

「えくと、ローガン大丈夫？」

「……起こしてくれたら今回の事はチャラにしてやる。だからちよつと手を貸してくれ」

激辛チヨリソーで味覚が麻痺したが、仲間との一種のコミュニケーションとしては単なる軽口の叩き合いよりも親しみを感じる。五十歩百歩であまり変わらないのかもしれないが、親しくなれなければここまでのことはできなかったことではないだろう。なによりもそれは、45が便乗した仕掛け人のスプリングフィールドが証明している。コーヒーの話から知り合った彼女からドツキリ染みたサブライズが用意されていたのから、仲が深まっていると思っていいたいだろう。それに45も仕事で疲れているこちらを気を紛らわせる為にもやってくれたのだろう。要所でこちらをからかってくる404小隊の隊長だが、チームをまとめるポジションにいるからかなんだかんで面倒見は良い。残業も含めた事件の話では口をあまり挟むことなく黙って耳を傾け、一通り話し終わつた後でも改めて『お疲れ様』と言ってくれたのだ。本心からであろうその純粋な労いに気を悪くするほど、ローガンは捻くれていない。

損得勘定で考えれば、45に対してのやり返しができないことで差し引いても十分なお釣りがある。というかありすぎるぐらいだ。

助け起こされて椅子に座り直したローガンは、水が入っているコップを一気に呷って一息をついた。溜息を吐いて顔を上げた先に視界に映ったのは、こちらの一末の展開を露程知らずに未だに騒いでいるグループである。

「随分と盛り上がってんな。やつぱりお前達戦術人形も祭りみたいに騒ぐのが好きなのか？」

「人間^{ローガン}みたいにもうでもないのもいるし、好きなのもいる。反対に嫌いな人形もね。私は好きでも嫌いでもないけど、面倒なことに巻き込まれたりしない限りは少し離れているところで傍観しているぐらいがちょうどいいかな」

「そういう価値観の見方はやつぱり同じか。……：：：？まさかあんなにレベルの高いアームレスリングに参加してるわけじゃあるまいし」

「ハリーならあそこよ。あのレンガ柄になつて壁際のソファの上」

45に言われた方向を見てみれば、たしかにそこに我らが指揮官、ハリー・クロスハートがいた。この基地内では自分達の頂点に立っている男だというのに、酒で酔っているように赤い顔になっている人形達に近寄られている様から先輩から絡まれている新人を連想してしまう。その様子を見たローガンは思わず顔が引きつってしまった。

左右から体の一部を押し付けられるようにしている彼と目が合うことでこの間のよ

うに救難信号がアイコンタクトから発せられる前に、ローガンは座席を回し再度カウンターの方向向き直った。

「指揮官のあいづが戻ってきただけでここまでのお祭りか。これじゃ行方不明の状態から帰還してきた場合じゃどうなるかわかったもんじゃないな」

「ん〜……まあハリーが帰ってきたことからつていう理由だけじゃないんだけどね。指輪も持つてくれば、誓約狙いで全力でアピールする子もたくさんいるんだよ。ローガンは知ってる？」

「さっき知ったよ。人形とのパラメータが一定値になると可能になるっていうやつで、誓約の指輪をつけた人形はさらなる限界突破が出来るようになるっていうあれだろ」

「掻い摘んで言ってしまうえばそうだね〜。なくんだ、ローガンは知らないと思ったのにもう聞いてたんだ、ちえ〜……」

つまらなさそうに唇を尖らせる45に得意気に笑ってやったローガンは重くなってきた臉を現状維持。自室に帰るまで寝てはならないと強く自分に言い聞かせ、傍にあって水差しでコップに中身を注いだ。

若干思考が鈍ってきている頭でヘリアンとの会話を思い返す。

正直、彼女から聞かされた時は複雑な心境だった。両人の合意の上で結ばれるのには問題がないにしても、人形に指輪で烙印を押すのは思うことがある。抽象的な例えで明

確に表現できないが、まるで自分の物だということを証明するために名前を彫るように感じたからだ。人命よりも軽く見られる彼女達だが、そこまでする必要があるだろうかと考えたが、半月以上前に戦ったイントウルダーとの対話を思い出す。彼女はグリフィンの指揮官は戦術人形との繋がりを含み、それを武器の一つとすると自分に気付かせた。数値では表せず、目で見ることはできないそれを形にしたのが、誓約の指輪なのだとしたら。

「……指輪を本部から調達したものだからあそこまでアプローチがあるんだつたら納得だな。さつきはG36なんざいつもの五割増しの早さで奉仕してるし、普段ならツンツンしているわー(WA2000)の奴が隣に陣取っているのも腑に落ちる」

「特にハリーが指揮官として真面目になるようになってから製造されたっていう子はね。足並みを揃えながら一緒に成長してきたみたいだし、お互いに励まし合ったりすれば親近感も嫌でも湧いてくるんじゃないかしら」

横目で45を見てみれば、そこには何かを懐かしむように目を優しく細めている姉のよな面持で自分の背後の方を眺めている彼女がいた。

「なんか寂しそうな顔してるぞ、お前。親離れた子供を見ているようにも見える」

「そりゃあ、さ。幼少期のあの子を弟のように見てきたんだもの。人形は歳を取る度わたしたちに成長しないけど、人間はそうじゃないでしょ。そんな時間の流れを感じるの老い耄れ

「なっていく大人達だけだと思ってたけど、私達もそんな気分になれるとは思わなかったわ」

「まあ気持ちにはわからなくはないよ。でも人形は精神面で成長できても肉体の方は……」

「……ローガン、今猛烈にサンドバックが欲しくなったんだけどなってくれてもいいよね？」

「お断りします」

笑顔に影が差した45から逃げるように、ローガンはまだ残っているソーセイジに手を伸ばす。やや冷めてしまっているが、まだ食えなくはないなと思いつつ口を運んでいった。

もう既に精神面で綻びが所々に生まれて中身が出てきそうになっていくのにこれ以上ボッコボコにされてたまるかの姿勢で視線を目の前の更に固定し手だけを動かして淡々と食べ続ける。もし横から両手が伸びてきて顔を動かされても抵抗できるように、アームレスリングしていたFN小隊の二人に倣い筋肉を力ませた。

こちらの様子を隣人はニコニコと黒い笑顔で見えていたが、何かを思いついたように口を開いた。

「ね〜ローガン？もし指輪を誰かに渡して誓約するのだとしたら、誰に渡す？」

「ないない、そんなことは絶対にない。ハリーみたい指揮官になるのはごめんだし指輪を渡すほどの仲が良くなるほどの人形は多分いない」

「もしもの話だよ。今はいいんだとしても何が起ころのが分からないから人生というのはおもしろいんでしょう？ 良くも悪くも思った方向にいかないことだつて誰にでもあるし、自分にとって都合がいいと思えることを想像してもお金だつてかからない、それを口にするのもタダだよ」

「まあ一理あるな。物質的に何かを消費するわけじゃないし気恥ずかしささえ我慢すればいいわけだしな……んー」

とりあえず実力行使に来る様子がないので一旦リラックスし、もう遮断しかけている脳内回路でまだ稼働できるだけの思考を行う。

苦戦しつつも激辛チヨリソーも含めてもう食べ終わつたので、フオークを置いたその手で頬杖をつくのが勢いそのまま大量に取り入れたビールの影響が大きく考えが纏まつてこない。45の方を見てみれば、真意を窺わせないようにまだ影のある満面の笑みを浮かべていて意図が読めなかった。

しかし正直な話、まだ二十代半ばで女性経験がほとんどない男であるローガンに対して真剣に尋ねているのだとしたらハードルが高いのではないだろうか。もし同性同士で冗談が十割の話であればぶざけて答えられるが、ここまでの話の流れと、相手が人形

とはいえ、自立して思考できるだけでなく異性の形を取っているのだからどうもローガンからだど好ましいベクトルで流れを持っていけない

解答に窮しながら視線をスライドさせると、そこにはせつせと仕事を片している人形のスプリングフィードルの姿がある。後のことなど何も考えず、思いついたことをそのまま吐き出した。

「まあ、スプリングフィードルかな」

「へえ……彼女の良さは私もわかるけど、どういうところが良いと思うの？」

「容姿端麗、物腰の柔らかさ、包容力……」

「……他には？」

まだ短い付き合いではあるが、上げれば割と彼女の長所は多く見つかる。今しているように仕事に対しても手早さや容量が良かったりもするし、話もしていて楽しい方だ。他の人形達からの評価も高く、彼女と険悪な雰囲気になっている人形を含めたスタッフをローガンは見たことない。

そうしているのは今しがた上げていった物腰と包容力だが、あと他に男性スタッフから定評のある一因となっているのは……。

「……色気？」

その瞬間、ぶつんと何かが切れた音があつた気がした。

音源はローガンの左隣からである。いや、そもそもの話、至近距離からとはいえまだノイズパーティが盛大に行われているのだから若干掻き消えていてもおかしくない。だというのに、なぜそんな音がはつきりと聞こえてきたのだろうか。そしてなぜ、自分は冷や汗を流している？

恐怖ゆえか、下半身がセメントで固められたかのように動かないままローガンは体のもう半身をそちらの方を見ないようにするために関係のない方向へと向けようとする。首だけだと、間違いなくネックツイストされる勢いで回される気がするからだ。しかしスムーズにいかず、ギギギ……とゼンマイ仕掛けの玩具のようにしかゆつくりと動かない。

そのうち幻聴であるだろうが、ゴゴゴゴゴゴ……と引き続き地響きの似た音の発信元は優しく、そしてゆつくりとローガンが座っている椅子を回して自分の正面に持って来させる。

そういえばこのカウンター席で座る椅子は回転式でしたっ！とローガンは心の中で叫んだ。

「ふ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ん、ローガンつてそういう風にしてスプリングフィールドを見てたんだけ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~?」

「ち、違いますことよ!? あくまで彼女の魅力を口にしたただけであって、それ以外の意図は

ありませんよ!?ほら、人の良さは人それぞれと言いますよね、なにも自分にはないから
といて僻む必要性は……!」

そう言いながらローガンの視線は45の顔から下に落ちてしまう。そしてある一部
に到達した途端、そこで思わず止まってしまった。

あつと思つた時には時すでに遅し。胸倉をそつと掴まれ、当人からとびっきりの笑顔
が向けられる。そして握り拳が見えた瞬間、『終わった』と気付いた。

「今日最後に、言い残したいことはある?」

「えっ、えくとそうですな……」

回避する方法を少々考えたが、結局何も変わらないと断定。だったら正直に話してし
まおうと、ローガンは口を開いた。

「夢はあつても胸は膨らまない」

拳が振り抜かれる前振りや警告も何もなかった。45からのノックダウンパンチに
よる衝撃こそあれど、痛みがなかったのは唯一の幸運だろう。

一瞬で暗転した視界と一緒に意識も闇へと沈んでいく。ようやく隙ありとばかりと
睡魔が気絶と一緒に自分を泥沼に引き込んでいった。それに抵抗することなく身を任
せ、明日の朝にいつも通り自室のベッドから問題なく起床できたらいいなと頭の片隅で
考えていた時だった。

『……ローガンのバカ』

ローガンが知っている二人分の声が罵ってきたのである。誰の声だっけと疑問として浮かび上がったものの、『もういいや』と長かった一日を終える為に遠ざかっていく視覚と聴覚から得られる情報を断った。

22. 見通しの立たなさ

— Invisible

emy—

—治安組織『ルックオーバー』尋問記録#056—

『……よしちゃんと動いてるよな……それじゃ始めるぞ。まずお前の名前だが『ピーター・ホーキンス』で間違いないな?』

『そうだけど、その前に確認させてくれ。捕まってここまで連れてこられる道中で君たちに情報を流すかわりにオレの安全を保障して欲しいって言った際にそれを二つ返事です承してくれたんだ。それは守ってくれるよな』

『あく、その話は一応聞いてるけど俺からでは何とも言えねえな。俺はあくまで雇われてる尋問官であつてこつちの事情には関与してないんだ。詳細は向こうに聞いてくれ』

『話が違うじゃないか』

『俺は雇われている身であつてもお前達犯罪者を取り締まる立場にいる人間だ。今回この場にいるのが俺じゃないにしても、この事実は揺るがねえ。俺は尋問官でお前は囚人、尋問で取引なんて成り立つと思うか?こつちから聞かれたことに全部隠さずに答えるのがお前の役目だろうが』

『……ふん、こんな朝早くから外部からの人員が来るのかい？ だったらおめでたいことだね、ここも。それも自分の立場を理由に圧力をかけようとしている時点で尋問官に君は向いてないよ』

『なかなかおもしろえことを言うじゃねえか、見た目とは裏腹に肝が据わっている奴は嫌いじゃねえぞ』

『でも間違つたことは言つてないね。たしかに僕達は敵意を持つていない一般人を傷つけていけないけど、彼らを守る立場にあるこの隊員達を撃つたんだ。それを咎められるだけの罪を犯してはいる。だけど人員も多いとはいえず、その上自分達だけで犯罪者を制圧できない。そんな組織に雇われていて思うことは何もないのかい』

『仕事に見合つた報酬は支払われる、俺はそれだけでもう十分だ。彼らの職務状態がどうであれ、そこに突つ込まなければならぬ理由は何もねえ。だったらそういうのには見て見ぬフリをするだけだ』

『だろうね。だけど無力な人達を君なりに守るためにそんな役割に就いたんじゃないのかい？ それなのに金銭に目を眩ませているようじゃ君は矛盾しているよ？』

『無駄話をするつもりならその口に拳を叩きこんでもいいんだぞ。一応そういうのも許可はされているからな』

『手錠を掛けられた相手に対して一方的に殴るのかい？ それじゃあ理由はどうあつても

ただの暴漢とあまり変わらないんじゃない？彼らだってどうであつても食いつなぐために暴力を振るうけど、君だって力づくで黙らせようとしている。その結果が金をもらえる、そののどこに大きな違いがあるのかな？』

『大昔みたいのテレビみたいに軽く叩く程度じゃ直ることはなさそうだな。そんじゃ考え方を改める下地として一発……』

『よせ、カーンズ。そいつの言つてることも間違つていない。それに今確認が取れたが安全保障についての命令も上から下りた。それでも手を出すのであれば相応の覚悟をしておけ。それとホーキンス、その気になれば用済みのお前をここよりも劣悪な刑務所に送ることだって吝かではないんだ、調子に乗るんじゃないぞ』

『……お互いに釘を刺された状態ですし、得をする話を始めましょうかカーンズさん。限られた時間を無駄にすることはそちらも本意ではないですよね？』

『ふうく……まあ確かにその通りだ。思うところが幾分どころかありまくりだが、ビジネスの一つとしてなら飲み込むことはできる。……さて、長くなつたが始めるとするか。まずお前からはどういう情報がもらえるかの概要から話してくれ』

『二つ目は下つ端のオレでも知ることが出来た、昨日の襲撃での目的。二つ目は断片的だけど今回の依頼主について。最後が一応予定として計画されていたことの次の一手。これら三つだ』

『オーケー。とりあえずまずは一つ目について話してもらおうか。そもそもなんで銀行だとかの金融機関じゃなくレストランの方に向かったのが疑問らしいしな』

『金が目的ではないよ。僕たちにいた張りぼてのリーダーが撃たれたみたいだけど、あの人は目的の物よりも金銭への執着もあつたんだ。だから少しわかりにくかつたかもしれないけど、必要なものは食糧庫の中にあつたってバーンズさんは言つてた』

『……バーンズという人物に関しては後で聞くとして、回収した物は何だ？』

『詳しくはわからないけど、とあるデータが記載されたメモリーチップだつて。それがなんで食糧庫につて聞いたけど、バーンズさんももちろんリーダーはわからなかつたし、依頼主からはそれを奪取するようにしか言われてないとか』

『食糧庫から盗まれたのは麻袋に入った小麦粉という記載がたしか……あつたあつた。とりあえずそれに関しては良い。必要最低限ではあるが、聞かれたことに関してのことは答えてるしな』

『それは何よりだよ』

『二つ目だが、さっき言つてた『依頼主』つうのはなんだ？そもそもお前ら自体が目的をもつて行動しているんじゃないのか？』

『オレ達は君のように雇われた身なんだよ。大昔でいうならマフィアと傭兵の間のような感じで、『自由に生きて自由に戦つて死ぬ』ことを第一としている。オレはまだ入りた

てだから忠誠心もなにもクソもないけど、目的があつた状態で生きていられるのだからまだ良いやと考えてただけなんだ』

『とりあえずお前自身のことはいいい。そんで?』

『今回オレ達に依頼してきたのはどこかの組織のトップみたいだね。よくわからないけど、こちらからは裏方の人間を使って支援はするが、準備期間で実地に入るのは全面で任せるってさ』

『組織の最上で指示だけを飛ばして高みの見物を決め込んでる奴か。俺からすればいたぶり甲斐がある性格をしてそうだが気に食わねえな。本人は指示だけ出して高みの見物か』

『全く同感だね。全てを終わらせた後の報酬も破格だったし、オレが加入したその時は色々困窮してたんだ。リーダーは素直に首を縦に振ったけど、バーンズさんは渋々って感じ。ここまでしかクソ野郎の事はわからないよ』

『バックに誰かがいるってことがわかったが、これは治安組織^{じあんしゅう}だけじゃ対応できねえだろうな……。まあそれは置いておくとしてだ、最後に奴らが計画していた次の一手は何だ?』

『最終準備でオレ達の方からの犠牲が多いけど、あまり多大な打撃にはなっていないかな。だけど少なくとも確かなのは、本格的に依頼主の計画に必要な要素が揃ったことだ』

ろうね。だからきつと、バーンズさんを始めとした残りのメンバー全員も駆り出されて動くことになるかな』

『動くつていうと……具体的にどうするんだ』

『さあね、さつき言ったけど下つ端のオレもそこまで聞かされていないさ。……ただ、確実に言えることは血生臭いというよりかは銃弾が飛び交う事態になるだろうね。一応他の目もあることも気にしているようだし、他の組織の監視網が薄い所に極秘でね』

『無人地帯への進軍ということか。だがグリフィンのような十分な装備や人材がなければ、奴らとの戦いで勝つことは難しいはずだが……まあいい、その辺は彼らに任せるしかないしな』

『それと、バーンズさんに関してはオレもよく知らないんだ。戦闘技術だけじゃなく仲間にも慕われるほどのカリスマもあるけど、過去のことまでは誰にも話したことがないようだしね』

『……治安組織の方にも調べてもらおうとして今回の尋問の終わりではないが、録画は終了しようか』

『普通の取り調べがどういう事聞かれるのかよくわからないけど、ここまで聞かれたことはオプシオンだよな？なんか猛烈に嫌な予感がするんだけど』

『安心しろ、とりあえずそこまでエグい事は聞きはしないさ。ただ、お前さんの身の上の

ことはたんまりと聞かせてもらうから覚悟しておけよ?』

―再生終了―

再生が一通り終わり、イヤホンを付けて聞いていたローガンは座っていた椅子の背もたれに体重を預けて天井を見上げた。見慣れてきた白い情景がそこにあり、さきほどの映像記録から得られた情報をそこに書き出して文字が浮かび上がっている様を幻視したがすぐに霧散した。

「……面倒なことになってきたな」

体勢を戻すついでに椅子に座り直して頭をボリボリと搔く。目の前のコンピューター

ターを操作して映像記録を映しているウィンドウを一旦液晶画面の隅にどかし、接続した記録媒体に他に保存させてあるデータ一覧を引っ張り出した。今回の件とは関係ない事件のデータに目もくれずスクロールしていき、要点をまとめた書式データを見つけるとそれを読み込ませた。数秒すると表示され、箇条書きで簡潔にまとめられている文書が一面に出てくる。

斜め読みでざっと目を通し、自分の認識が間違っていないことを再確認した時だった。

コンコンツと執務室の扉が外からノックされたので、自分の仕事をしていたM4が対応するために席から向かって行った。

「はい、どなたで……指揮官、どうしましたか……?」

「ヘリアンさんから、治安組織から送られてきたデータをローガンが持って行ったって聞いたんだよ。考察もするために来ただけど彼は……」

「おう、こつちだこつち」

椅子に座った状態のまま、ローガンは片手を上げて自分の存在をアピール。『失礼するよ』とM4に言った後でAR小隊の執務室に足を踏み入れたハリーはこちらの方に歩いてくる。ローガンはコンピュータ本体の端子に挿していたイヤホンの接続を一旦切り、指揮官に耳から外して不在のM16の席の椅子に座るように勧めた。

「……酷い顔してるな。昨晩は大分盛り上がったし二日酔いか?」

「薬は飲んだけど朝ご飯はほとんど手をつけなくてね……うん、本当なら今日一日は非番なんだしゆつくりとしたいんだけど、指令室の机の上に整理されて置かれてる書類の山を見ただけで休む気が無くなっちゃったんだよ……」

「俺も少し手伝ったけど、スオミが結構頑張ってたんだぞ。修復が今日の昼頃で終わるみたいだけど、その前にあいつに顔は見せたのか?」

「うん、昨日運び込まれた時と作業が一通り終わった後でね。正直なところ、彼女が被弾して搬送する必要がある報告を受けた時は肝が縮んだよ」

青い顔で溜息を吐くハリーにローガンは苦笑いをしながらコーヒーを啜る。久方ぶりに感じるこの指揮官との面を突合せた会話だが、見ない間に少々痩せてしまってるようであった。本部で拘束されて回された仕事でそこまで追い詰められたのかのかもしれないが、今こうして前のめりで座っている彼は職を失くした中年のサラリーマンのようにも見える。

遠出する前でも愚痴を漏らしたり悩みを自分に明かしたこともあったが、今の彼はそれを口にするだけの元気や活力もないようである。

まずはそこからどうにかしないとだよな、と考えたローガンは立ち上がり、AR小隊用として割り当てられている冷蔵庫に置いてある飲み物を物色。

「たしかまだ残ってたよな〜と〜お、あったあった。M4、M16が二日酔いで動けない時はどうしてる?」

「え〜と、M16姉さんは基本机で突っ伏しているか自室で横になっっているそうですけど……ああ、食べるものとしてはヨーグルトなら良いみたいですね」

「それだ。ここだったらどこで手に入る?」

「基本は配給の物資にありますけど、食堂のメニューにも単品であった気がします。今でも利用できるはずなのでちよつと行つてきますね」

「任せた、と言うとM4はやや小走りで部屋から出て行つた。ローガンとしても自分が行つてもよかつたが、こちらの体調も調子が良いわけではない。やや遅くなつてから顔を出したこちらを見て心配してくれていたので、なんとなくであつても察してくれたの
だろう。」

彼女の気遣いに感謝しつつ、ローガンは棚からコップ一つと冷蔵庫から取り出したスポーツドリンクを持って自分のデスクに戻つた。

「ほれ、とりあえずこいつも飲んで落ち着いとけよ。本題に入る前にお前の体調がある程度でも回復してくれなきやおちおち話もロクにできないからな」

「(ぐ)めん……」

「まあいいさ。遅くはなつたけど、出張お疲れさん」

注がれたスポーツドリンクをもったハリーと軽く乾杯したローガンは、ちびちびと飲み始めた彼の様子を窺いつつ火傷をあまり気にせず飲める程度に冷めた自分のコーヒーを飲んだ。

本来であれば二日酔いになったことを咎めてもいいのかもしれないが、昨晚での彼の状況をバーで見たローガンからだ文句の『も』も出てこなくなつた。会話の内容は知らないが、あの場の雰囲気的には対応に困るものであつたことには違いない。それにローガンにもそれを悪く言えないほどの訳もある。

「そういうえば、まだパトロールの任期は今日も含めてまだあつたよね？なんでここにいらんのだい？」

「ああ、いや……起きたら置いてけぼりを食らわされてな。ペア組んでたA R I 5がR Oを代役としてもう行つてしまつててもう追い付かなかつたんだよ……」

「置いてけぼりつて……寝坊した？」

「……うくん、でもまあ説明すると長くなるしそうしてくれていいか。どの道あいつらから説教を食らうことはもう覚悟してるし、ヘリアンさんからは腹を抱えた状態で笑われたからな」

「……まあ、僕も非番とはいえこんな酷い有様だし言う事は何も無いよ」

昨晚の記憶はちゃんと残っている。バーで45とどのようなことを話していたこと

も全て思い出せる。ただ、記憶の最後が身震いするほどの彼女の笑顔と一瞬で眼前に迫ったノックダウンパンチだ。

バーに備え付けられているソファの上で横になっていいる状態で起床したローガンは、まず目を開けた自分の視界が白くなっていることで首を傾げつつそれを剥がした。パラリと捲つてみると、そこには『あなたの代わりにROとパトロールに行つてくる。だから今日一日は右腕の怪我の療養でもしていなさい』とAR15からの書置きの文章があつた。そこで何があつたのかを思い出したローガンは、鼻をさすりつつ車庫に行つて一応確認。そこでは思つてた通り、昨日民間人から拝借した大型バイクがあるだけでパトロール用の車両はもうなかつた。

どの道、バイクの持ち主である本人に返すための手続きをしたりするだけでなく、高速道路路に進入するのに利用したゲートの方にも対応しなければならぬので、その為の時間が多く確保できたと思えばまだ少しだけ気が休まる。が、今日の夕方になってAR15が帰ってきた時がどうなるかがわからないのでどこか落ち着かない。

気分が顔色だけでなく落ち着きがある程度まで回復するまで、ローガンはハリーと他愛のない雑談をしていた。彼がいない間、基地内であつたなんてことのない出来事やシヨッピングモールに関しての報告書では記載できなかったことなど、気を張り詰めるような必要がないことだ。徐々に元氣と力のない笑顔から良くなつてきた様子が見え

始めた頃になって、食堂に向かってくれているM4が帰ってきた。

「戻りました。指揮官、ヨーグルトだったらまだ食べやすい筈ですよ。M16のお墨付きです」

「ごめん、助かったよM4。それと何から何までありがとう二人とも」

「どういたしまして、大丈夫ですよ。ゆっくりでいいので落ち着いて一口ずつ召し上がってください」

使い捨てのプラスチックの容器に入ったヨーグルトを少量ではあるが口に運んでいくハリーを温かい目で見守っていたM4は、彼が食べ終わるまでずっと待っていた。ローガンも少なくとも急に吐くことはないだろうと察しコンピュータを操作して画面をさきほど自分も見ただけの尋問記録を映し出し、いつでも再生できるようにして連結しているもう一つのディスプレイにはワープロデータを表示させておいた。

「……いいよローガン、もう再生して。聞き取れなかったりしたところは補足してもらいなりするけど、大方の事は頭に入れておきたい」

「あの指揮官、私もこの記録を見させてもらっていいのですか？」

「かまわないよ。話の規模は僕にはまだわからないけど、一筋縄ではいかなさそうな案件だ。場合によっては君のAR小隊の力も必要になる」

「……わかりました」

二人の視線がコンピューターの視線が一つに集中したことを合図に、ローガンは再生を開始。画面は暗転しており設置されていたらしいカメラの動作を確認するためのノイズ音から始まり、そのうち口の周りに髭を生やした体格が良い男性の顔を大きく映し出した。

そこからはローガンも今回で三度目となる記録の再生だ。尋問記録がネット経由で送られたので確認も含めて来て欲しいとヘリアンから端末を通じて言われ、最初は彼女と一から最後までノーストップで聞いていた。再生が終わった後で、ローガンは情報整理も含めてコピーしたデータを執務室に持ち帰らせてもらったのである。まだ陽も空の頂点に達していない時間帯、脳の回転もまだ十分ではないので時間が必要だった。

ハリーが聞き逃したりM4が聞き間違いがないかの確認としての巻き戻しを何度かやって三十分ほど、一通りの再生が終了したのでローガンは一旦体のストレッチすべく椅子から立ち上がり、伸びをしたりして体を解した。

そのうち、昨日の事件の流れを大まかにメモしたローガンのメモをM4と読んで熟考を終えたハリーが口を開いた。

「うん、概ねわかった。捕虜の言ってた一つ目の情報についてだけど、心当たりがあるよ」

「さすが、情報通の指揮官の座にいるだけのことはあるな」

「とは言つても、確実性はないよ。あくまで可能性があるというだけであつて、それが正解とは限らないことを念頭に置いて聞いてくれ」

ギイツ……と軋んだ音を立てた椅子に座り直したローガンはM4と共に彼の方に向き直る。

「何週間か前に、ここから管理区域よりさらに南にあるダム関係の調査記録をまとめたメモリーを紛失した報告がこつちにも来たんだ。ダムの老朽化のチェック、機器の数値、動作管理をしている人形の確認と交代。水質の確認もしているから、失くしたらわりとシャレにならないものをね。失くした職員はこつびどく怒られながらも搜索したけど見つからなかったつて」

「随分とやらかしたなその職員。つうか待て、管理区域より南つてことは無人地帯で鉄血が出てくることだつてあり得るんじゃないのか？」

「その対処のためにこつちから護衛として何人か毎回派遣してるよ。僕のところにも知らせが来た理由としてはまさしくそれだね。任せていた人形達が帰還報告したそのついでに雑談と一緒に教えてくれたのさ」

ハリーの言うダムというのは、ここグリフィン南アメリカ支部が管理する管理保護区域のS15からさらに南南西へ約三十キロで位置している。そもその話、まだ人々の営みが安泰していた頃に設立されたそのダムを放置しないで管理下に置いている理由

はローガンには見当たらない。鉄血が湧いてくる可能性もある以上、保護域より外にあるそこを見放さずに人形を使って管理しているのはなぜか。

「二つ聞かせてくれ、俺達の手もすぐには届きづらいそこを手放さない理由は？」

「簡単な話だよ。もしそのダム機能が停止した場合、この基地だけじゃなく民間区域にも影響が出るんだ。飲み水としては利用できないけど、日常生活で使われている水が停止した場合は三日と持たない。すぐに販売店に人が殺到して全区域がカオスなことになりかねないよ」

「事実、ローガンさんがこちらに来る前に一度だけダムの機能が停止して慌てる事態になりました。その時は各地で貯水していた水を使用することで大事に至りませんでした。でも、もし本格的に跡形もなくなるほどの事になった時は想像もしたくないですね……」

水というのは自分達が無自覚で多用している物だ。生命活動を維持するために飲んでいるのに留まらず、身体を洗浄したり排便の洗い流し、植物や魚などの生命を育てているのであれば土や水槽に、芸術や工場での作業でも使うことはある。または温めて湯にすれば使い道など幾らでもある。もしすぐに使える状態になっているそれが枯渇した場合はどうなる？川に行つて汲みに行こうとしても、現代は敵対するAIや各地で己のルールに従って生きているグループとの戦いだって十分にあり得る時代だ。そんな

れば、グリフィンなどといった戦力を持つPMCなどには仕事こそ殺到するが抱えきれないだろう。むしろそうなった場合、我慢の限界に達した民間人がこちらが緊急時の為に保有している飲み水も奪取されかねない。そうなればこちらとしても見過ごすわけにはいかないし、盗人の行いに便乗する輩だつて出てくる筈だ。言葉と取り押さえによる静止では抑えきれなくなつた場合、銃器による実力行使も視野に入れなくてはならない。そうなればもう秩序も何も無くなつてしまつた、物資の奪い合いが始まつてしまうことは必然だ。

人間というのは命の危機に陥つた場合、常識や倫理を薄れさせていってしまひ終いは捨て去つてしまうことだつてある。ローガンもそうなつてしまつた人間を多く見えてきた。

無人地帯で鉄血から隠れて生きていたある民間人は食糧の備蓄が無くなつたので、かき集めるように周辺の森から食用として口にできる野草などを集めた。しかしその中に見間違いで毒を含んだそれがあつてもおかしくない。それに気づかず、腹痛による下痢や吐き気からの嘔吐を繰り返した。失敗から学ぼうにもどの野草が原因だつたか分からなかつたその民間人は、今度はキノコなどの別の食材にも手を出したりした。

一時は根なし草として同じく無人地帯を渡り歩いていたローガンが次に変わり果つたその者を見た瞬間、ナイフを持って襲われた。最終的にお互いに命を落とすことな

かったが、一歩間違えれば発砲せざるを得なかった出来事だったことは間違いない。

思い出したくもない記憶を払ったローガンは現実の方に意識を戻した。

「ともかく、そのダム的重要性はわかった。仮にバーンズっていうあいつが持って行った麻袋の中にそれがあつたことはどう考察できる？」

「……どうでしょうね。ダムの性能検査を行っていた複数の職員のうちの一人が、データを持っていた方から奪つて隠した場所が食糧庫だった……ていうのは安直ですか？」

「逆に本当は紛失しておらず、隠し持っていたことも考えられるな。ハリー、その紛失したスタッフの居所はわかるか？」

「たしか責任を問われて辞めたと記憶しているけど、僕もその先までは把握できていないよ。時間をもらえれば辿つていけるとは思うけどね、調べておくよ。それと並行して、一応南のダムの方に偵察隊も出して周辺の様子を確認してみようか。もし今回で裏で糸を引いてる『依頼主』という奴の最終目的がそこにあるのだとすればゆっくりとしてはいられない」

「そうした方が良いでしょうね。笑い話で済めばいいのですが……」

M4がそう切実に願うような台詞に同意しつつ、ローガンはもうすっかり温くなつたコーヒーを飲み干した。

画面の向こうの奴の言う『依頼主』とは誰か。受諾した彼らからも良く思われていな

いんじや、相当性格が捻かれているんじゃないだろうかと考えながらまた新たにコーヒーを淹れるために立ち上がった。

昼休みになる少し前にハリーは偵察隊の編成と派遣を最優先ですということでは指し室に向かつて行った。考えが纏まらないので本格的な考察は後回しにした彼の体調を心配していたM4が昼休みを一部返上する形で補佐すべく共に向かつていくのを見送ったローガンは、食堂に向かう前にラボにいるスオミの元に向かった。

ハリーの体調とは別の心配要素があつた為、早足で向かつて行き、ここの角を曲がれば突き当りにある……というところで意外な来訪者がそこにいた。

「グローザか？あれ、お前なんでここに……？」

「あなたこそなんでここにいるの。今日のパトロールに出ている筈じゃ？」

「相方から放置プレイを食らったからってことであとは察してくれ。お前こそ何でここにいるんだよ」

「私は今朝『今日は代わってあげる』というメッセージが部屋の端末に来ていたから、ヘリアンさんと相談したけど結果的に任せることにしたわ」

総司令官殿はそのメッセージの送り主が誰か察しているんだろうな、とローガンはボンヤリと思いつつ、手荷物を持ちながら前を歩いてきたグローザに追い付いた。出会った時から変わっていない服装の彼女だが、敵車両のフロントガラスを砕くときに叩きつけた手の方には、損傷した人工皮膚の上から新品のを張り付けてじっくりと馴染ませるまでということまで包帯が巻かれているという点だけが違っている。

この先は他の部屋もない以上、行先は同じだということを察したグローザは少し嫌そうにこちらを横目で半眼で睨まれたが、省かれたことも含めて結局は咎められはしなかった。そして横に並ぶほど気が付いたことが一つあった。

「……お前、昨晚十分に寝たか？」

「いいえ、寝てないわよ。戦術人形であるのだから、睡眠は人間と比べてそこまで必要性はないし時間の無駄よ」

「だからといって全く寝ないつつうのは問題あるだろ。人に言えたことじゃないけど、コンディションを整えておくのは兵士として基本的なことじゃないのか？」

「私に大きく出れないなら口を開かない方が良いし、余計なお世話。それにここが奴らに攻め込まれたって、私なら一人でも追い返せるわ」

「大した自信だよったく……」

半ば呆れたが、昨日のように味方車両から敵の方へと跳び移るといふ荒業をやつてのけ、終いには情報を無事に押さえるために運転手もろとも制圧するといったコミックの異能ヒーローも真つ青な事実もある為口を閉じた。そしてもう一度横を歩く彼女を盗み見た。

昨晩ヘリアンから聞いた記録の通りであれば、彼女も過去に指揮官を亡くした。それも、誓約をしてお互いに唯一無二の存在であることを認め合つた相手をだ。戦場であれば親しき誰かを失うことなどよくあることであり、ローガンも過去に背中を預け合つた友人を何回も失つた経験からその痛みもよくわかる。だが彼らはあくまでローガンと共に肩を並べて戦うのに信頼がおける、という人物たちだった。冷たい言い方だが、信頼以外にも親しい仲として『友愛』の情を持っててもあくまで『戦う場での相棒』というだけであつて、それ以外ではなんの感情も持たない。

ではグローザはどうだろうか。彼女は戦術人形ではあるが、ローガンが主に関わって

きたAR小隊や404小隊の皆のように人間とそう変わりがない感情の豊かさがあるのではないかと思える。自身に対しては厳しく辛辣な態度ではあるが、優しさも持ち合わせているのようだった。でなければ、パトロールで組んでいたスオミの元に足を運ぶことはないだろう。事務的なものであるのなら、修復がもうすぐ終わるであろう今頃になつて手荷物として持っている物の中にシュークリームといった甘味な菓子がある筈などないのだから。指摘すれば睨まれて小言を言われるのが目に見えているのでなにも言わないが。

「さてつと……」

ローガンはグローザに倣つて基地内で有効であるIDカードを順番で端末にかざし、扉が開くとラボの中に入った。

人形の修復を行うには、それに用いる資材や機材だけでなく人材も必要だ。目には見えない不調を起こしている人形がいたとして、体外スキャンができる機器があつてもそれを操作する技師がいなければ意味がない。

ラボに入った二人はまず、ここの基地で人形達のメンテナンスなどを何人かの助手と一緒にやっている主任を探した。

「ふーむふむ、ここの配線が並列で繋がっているのだから、電力と作業の効率をさらに上げるにはここを変える必要があるな。でもこのままダイレクトに変えるだけじゃ機器

そのものが機能しなくなるが……うむ、これならいける！やはり私は天才か！」

「主任、それ弄つたら負荷に耐えきれず回路がショートしてしまいますよ。電圧の数値が規格内に収まらずに焼き切れるのが僕にもわかりますしやめた方が良いです」

「はっはあ、人生とは挑戦の連続！失敗を恐れて地団駄を踏んでいるだけではなにも進歩できないのだよわかるかねワトソン君！」

「わかりませんし僕は探偵助手ではありません。この間呼んだシャーロックホームズを読み終わつたそのテンションで仕事しないでください死んでしまいますよ主任が」

……そういった機材のメンテナンスも可能である技師の主任の彼が今、仰向けになつた状態でボードを滑らせて潜りこんでいるわけだ。

会話の内容で馬鹿なことをしているように思えるかもしれないが、要は電気の効率を上げるために内部構造を弄っているらしい。ローガンは端末を用いてのドローンなどの操作も可能としているが、その端末の詳しいことまで知っているのかと問われた場合は、『否』である。学はお世辞にもあるとは言えず、耳にした内容はともかく作業している二人の世界にはほとんど足を踏み入れられない。

ローガンからすれば彼らとは初対面となるが、色濃い個性を感じさせられたため声を掛けることもできずに呆けることしかできなかった。だが横にいるエリートの戦術人形は初見じゃないらしく、今尚も作業を続けている二人の方に歩いていった。

「すいませんお二方、ここで修復を必要としていたスオミはどちらに？」

「ああ、来ましたね。というよりようやく来てくれましたよ救世主が。ほら主任、もう修復が終わっている人形を迎えに来た方がいますから出てきてください」

「すぐにコンデンサと新品の回路と機械用ケーブルを持つてきてくれたまえワトソン君！天才としてのの名を後世に残すチャンスが来たぞ！」

「ツツコミどころが多すぎて嫌々ではありますがあとで存分に構つてあげます。それよりも先にこつちを優先してください。周りに目が行きにくくなるのは主任の悪い癖ですよ」

「むっ！計測している電流の数値が減少しているのか!?なぜだ、私はなにもしていないぞただ回路を組み替えただけで何も悪いことはしていない何故だ!？」

もうついていけない。ていうかスオミを連れてさっさとここから退散したい。キレッキレなツツコミをしている助手はともかく、一人でテンションのギアを上げている中年の男が残念すぎる。

主任という部下をまとめられるだけの手腕があるのだろうか、こんなことが起こり得るというのはまったく予想もできない。誰にでも性格面で一癖があるものだが、癖が強すぎる。過去に面を向かい合わせたことのある、民生組織の開発者たちは神経質で自慢したがりで相手するのが面倒ではあったが、会話が成立するだけの理性は人間としてあつ

た。

対して、あの男はどうだろうか。『間違いなく一番めんどくせえ……』とローガンは心の中で吐露するが、それに同意する人はどれだけいるだろうか。

斜め前に出ているグローザがどのような表情を浮かべているのかはわからないし、その心情も言わずもがな。それでもローガンがいう事には概ね同感であるだろう。

「資材を早く持つてきたまえ！我々の栄光をこの手に、だぞはっはっはあー！」

「そうですね今よりも技術が発展しない中で法則を確立させたオームとジュールはさぞかしビックリするでしょうね。それと主任、今ここで電源スイッチを入れたらどうなるでしょう？」

「私に脅しは無効だぞきみい！たとえ火の中水の中、先人達が辿り着いたその先に私も行くのだよヒーハー！」

「では遠慮なく押させていただきますね？」

「……え、マジで言っちゃってる？ああいや、感電死することはないけどその寸前まで人体に電気を流されるから後遺症もあったりしてシャレにならないんだけど。ああそういうことかわかったぞ、本当はするつもりはないけどそう言つて妨害しようとしてるんだな可愛い所があるじゃないかこいつめくはっはっは。……あ、ごめんなさい、マジでごめんなさい。やめて超やめてください、内部ハッチで閉じ込められると本当に真つ

暗なんです！もうなんかバチバチと耳元で鳴り始めてて暗いの狭いの怖いよですまな
いから！開けて開ける開けてくださいお願いしますうううううううううううう
!!

快活というよりはマッドな雰囲気醸し出してた声色から真面目な焦りを含んだそれになって、大の大人でも発することのない涙声で命乞いよろしく叫び続けた。青筋浮かべた助手が仕方なさそうにハッチを開け、ボード全体重を預けていた男が涙ぐみながら出てくる。

「ほら、さっさと応対してください。そうじゃなきゃ彼らもいつまでもここに拘束されることになりますから」

「……わかったわかった。まったく、冗談も分からないというの君の……うん、ごめん。もう何も言わないからその電動工具をこっちに投げつけようとはしないで」

背後にいる助手に涙目でそう言いながら主任の男はこちらに歩いてくる。人相までを把握できていなくとも先程はマッドな雰囲気を言動から思わせていたが、オーバードロードした状態から通常運転に戻った機械のようになった現状だけを見ると一般的な常識人のようにしか見えない。人間の腹の底で眠らせている本能というか、もう一つの人格に似た何かとは恐ろしい物だな、と思いつつローガンはグローザの横に立つべく歩を進める。

「グローザは今回で二回目の対面でええと、そちらの方は？」

「無視してくれていいわ。新車のストーカーだけど私は気にもしていないから。スオミを迎えに来たから案内して」

「わ、わかりました。ではこちらに……」

「おお、本人にも聞こえる新車の罵倒で俺も涙腺が崩壊しちまいそうだよ……つうかおとなしく『わかりました』って……」

毅然とした佇まいで先を歩いていくグローザの背中を睨みつつ、言い返したい衝動を鎮めて作業服の主任の後に自分も続いた。

工作機械からの高い機械音がそれぞれ独立した作業部屋から微かに聞こえてくる程度で、鼓膜を不快なほどに刺激してくるほどの音はない。丸く切り取られている扉の窓から見てもわかるほど、火花を散らすほどの作業で他に支障が来さぬように防音処理がそれぞれにされていることが察せられる。

それにすれ違ったりしているここの作業員を見て気付いたこともあった。

「ここで修復する為に訪れる人形の中には騒音を極度に嫌うのがあります。我々も昔の工場のように声をわざわざ張り上げなくても良いと言うメリットもありますし、なによりもそれぞれの作業部屋を設けることで自分の仕事に集中できますのでここ数年はこの体制を維持しています」

「さつきすれ違ったあの作業員は耳栓じゃなくて無線型のイヤホンをしていたな。作業内容によつては、つていうか人でそれぞれの違いがあると見ていいのか？趣味嗜好はともかく、『仕事するのであれば音楽やラジオを聴きながら』ていう人もいればそうじゃない人もいたりするんじゃないのか」

「その通りです。単純に異常がないか、機械音に耳を澄ませるために単純な耳栓をしている方が多いですが、製作した物の研磨などをして形を整えるだけということでは音を払わなくていいというような作業には好きにさせています。まあ、こちらからそうしてもいいのかを確認するために一連の作業にミスなどがないかを事前に見ておきますがね」

各個人が保有しているポテンシャルを最大限に発揮できるように執り行っている措置なのだろう。人によりけりだが作業中は手元に集中力を収束させるために雑音を失くしたいという人もいれば、疲労などを感じにくくしたいという狙いも含めているのも言わずもがな。音に限らず他人からの視線も気にする人もいるのだし、そう考えていけばこういった作業も千差万別だ。

「負傷した人形の修復もこういった感じで、それぞれで分けられた作業をするのか？」
「戦術人形の修復は一つの作業を複数人でやるのがほとんどなので、こちらでするのは銃器の不良となった部品の修理やそのものの製作です。ハリー指揮官から依頼され

たドローンやキットの作成もしますよ。最近の最高傑作といえば、シーカーマインと新型のガスグレネードです」

「あいつ、ここでダイレクトに装備の製作ができるようにしていたのか……」

R Oが使っている装備の中にシーカーマインというのがある。以前夜間での偵察任務で同行してきた彼女が持っていたあの追尾型グレネードがどこで開発されたのかと思いつながら結局はグリフィンの本部から取り寄せたのだとばかり思っていたが、そうではなかったらしい。M 4がA R小隊内で行われる演習で使ったりしているガスグレネードの供給源がここであるのであれば、基地内での訓練で使おうとはあまり思わなかっただろう。

案内に従いながらもよくよく見てみれば、ピンセットやらなにやらで細かい部品を摘まんでは特定の箇所に行って行ってる作業員もいる。その者は電気回路かなにかの板に向かって神経を使う作業をしていることから電子機器に対しての理解があるのだろうが、その作業員が白髪も失くしている老人であることに気付いた。……たぶん大丈夫だろうが、万が一組まれた電気回路による誤りでこちらが怪我してしまった場合はどうなるだろうか、とローガンはそこまで考えたところで掘り下げずに忘れることにした。

初めて見るラボを眺めつつ歩いていたが、修復室に到着したらしく前を歩いていた二人が止まったのでローガンも做った。

「さてここですね……おい班長、彼女の修復は終わったかい？こつちに迎えでお仲間さんが来たんだが」

「あゝ、終わってるよ……。こつちは一睡どころか二徹してて寝れないんだしもう休ませてくれ……」

気だるげに机に向かって欠伸混じりに話しているその班長らしき男がそう言った瞬間、糸が切れた人形そのもののようにして机に突っ伏した。

こうなることがわかっていたのか、一人の戦術人形が手に持っていたタオルケツトを丁寧な肩にかけた。その人形に関して、ローガンどころかグローザだって名前を知っている。

「大丈夫だとは思ってたけど、実際に元気になった様子を見て嬉しいわ、スオミ」
「あの時は私のミスでしたしグローザさんが気に病むことはありませんよ。でも心配してくれてありがとうございます」

疲労と睡眠欲が限界に達した彼を氣遣ったのはいうまでもない、スオミだった。

ローガンは負傷した時の彼女を直接見たわけではなかったが、昨晩現場を共にした人形達からは酷さは見た目だけであつたが損傷した箇所コアとは違う重要部品が破損していた場合でも、修復完了には時間を大分要すると聞いていた。ローガンとしてはまだ顔を直接合わせたことがないここにいる職員たちが信用できるかどうかは置いてお

くとしてもスオミの容態を聞いた時は少々心配になっていたので、こうして問題なく歩いている様子を見て払拭できた。

「ようスオミ、快復したようだなによりだ」

「ローガンさんも来てくださってたのですね。あの後は大丈夫でしたか……？」

「今こうして自分の脚で立っているんだから言わずもがなだろ。まだ全面で解決に至ったわけではないけど、お前にとつての挽回のチャンスはまだあるってことだし頑張ろうな」

グローザから割と厳しい視線もあつたりしたが、一応まず第一に言っておかなければならないことは声に出せた。

本心から出たそのローガンの台詞に笑顔で頷いたスオミの性格を顧みてみても、素直に首を縦に振ることがあつても頑固な面があると思う。そう考えてみると、これから言う事に彼女がどのような気分を動転させるか恐ろしいのだが、もし言わなかったときの後が怖いので逡巡するのを途中でやめて口を開いた。

「まあ言いたいことはいくつかあるわけなんだがな……」

そのような口上から始まり、彼女にとつても無二であろう存在が今どうしているのかを言った瞬間、浮かべていた笑顔が打ち消された。

口は災いの元、ということわざを昨晚45からのパンチで身をもつて経験したが、こ

ればかりは『どうすればよかったのか』と頭のどこかで悩むローガンだった。

23. ファミリー・エルフ — Don、t bothe
r alone —

猪突猛進とは言わずとも、それに近い物理的な勢いと気迫で自身が定めた目的地にまで駆け出そうとしたスオミを止めたのが一時間ほど前。

落ち着かせた彼女をグローザと共にラボの修復室から食堂に移動し、空いているテーブルの席に座らせる現在に至るまでの行いを振り返って一言で表すとしたら『苦勞した』しか思いつかない。

昼休みの時間がもうあともう少しという時間帯になって落ち着けるようになったわけだが、今から昼食を取るようであれば間に合わないことは誰かに言われなくてもわかっている。なので空腹を訴えてくる胃袋には我慢してもらうことにした。それでも一応飲み物だけでもと思い、ローガンは紅茶を三つ注文した。

「すいません、お二人とも。私がつと早く落ち着いていれば手間を掛けさせてしまうことはありませんでした。特にローガンさん、昼食をとらなくて本当にいいんですか？」

「大丈夫だって。一食ぐらい抜いたって人間は死ぬことはないし、我慢さえすれば一日

何も食わずにいたって問題ないんだしな。この後戻ったら作業しながらしこたまコーヒー飲んで紛らわすさ」

「カフェイン過剰摂取で自殺を志願しているのあなた？ならエナジードリンクを飲んだらいいわよ、あれは一缶にコーヒーの五倍以上のカフェインが入っているんだから量をあまり飲まずに済むわ」

「そんなアホみたいなおことを望んでないし、炭酸は空きつ腹にきついから勘弁してくれ」
冗談か本気だかわからないグローザの台詞にローガンは難色を示しながらも時間を改めて確認。急ぎの用件は特になし、大型バイクの返却は当人が来てからでいいし、高速道路ゲートに当たった後の後始末がまだ残っているが、それも結局は簡単な報告書を作成すればいいだけなので手間も特にかからない。先日までスオミの方に流されていた事務処理が内容も量のどちらも面倒だったから、というのもあるが。

他にやろうと考えていることはないわけではない。暇を出されたとはいえ、射撃訓練などで感覚を鈍らせたいようにしたいとも思う。

まあそれでもやっぱり急いでやるわけではないしなあ……と運ばれてきた紅茶に口をつつつボンヤリと考えていた。

「コーヒーが好きなのからして、紅茶ってどう映る？」

落ち着かせたスオミに話題を振るとしたらなにがいいか、とシフトしていたところで

グローザがそう話を振られたので、斜め向かいに座っている彼女の方を見た。その目はまだ付き合いの浅い、仲があまりよろしくない知り合い程度にしかなくていいローガンでもわかるほど『空気を読め』と訴えていた。

読むも何も、少々困っていたし話題としても触れ易いとも思えたのでそれに甘えることにする。とりあえず持ち上げていたカップをコースターに戻した。

「ん〜……まあ、上品な飲み物だなとは思うな。美味く淹れるなら手間かかったりするけど、それはコーヒーも同じだしな。お前は？」

「大体同じ認識ね。私がどちらかを飲むのであれば紅茶だけど、たまに苦いのが飲みたくなったりするから少し砂糖を入れて飲むわ」

「ケーキとかスイーツを食うのであれば？」

「……紅茶ね。コーヒーだと後味が全部打ち消されて何を食べたのか分からなくなるし」

紅茶かコーヒーのどちらを選ぶのかというタイミングで、ローガンは目配せでグローザが持っていた手荷物からスオミの方にスライドさせると、そこでグローザも思い出したように手を入れて目的のものを引っ張り出すと包んでいる小さい紙の包みと一緒に横に座っている友人の目の前に置いた。

「とりあえず、はい。ここにいる人形達から聞いたけど、この近辺でおいしいお菓子はN

01のケーキ店のだって聞いたの。お詫びのつもりも兼ねて食べて」

「いいのですか、グローザさん？あそこで売られているのは割と高値だって聞いたんですけど……」

「いいわよ、別に。ここに来てから私に良くしてくれているのだし、そのお礼の意味もあるのよ」

「それじゃあ、いただきます……!」

グローザの微笑む姿など、ローガンからだほとんど目にしたことがない物を見た。先日バルソクに対しての指南の時と今の違いといえば、相手に対しての接し方だろうか。

人間でも相手によつては態度が変わつてしまつたりする。それを察せられてしまつては失礼になつてしまふが、第一印象やそれまでの交流などから壁を厚くしたり崩したりしている。ローガンでも、AR15には自然体で接することが出来ても、45であればどこかであらかわれると考へて身構へてしまつてたりしているのだ。決して45が苦手というわけではないが、どこかできっかけがあれば切り込んでくる彼女の相手をする事になるので落ち着かない。とはいつても、あれはあれで45からのコミュニケーションシヨンだから氣を本當に悪くしているわけではないので勘違いしてはいけない。それを踏まえてみても、ローガンにとって彼女達は『友人』という認識である。

どこか半歩引いたようにしているグローザの様子にどこか遠慮しているような雰囲気を感じる。なぜ、そうしているのかわからない。

そう考えながらローガンはグローザと共にスオミが満面の笑みで菓子を食べ終わるまで待っていた。

「……そういえば、ローガンさんから先日頂いた鯖の味噌煮のお返しをしていませんでした」

「あ……まああれは別に気にしなくていいさ。今度別の機会でもいいから。それもらったら殴られそうだしな」

スオミの横にいる人形から殺気に似た皮膚を指すオーラにローガンは浮かべた表情と口元がひくついたが、こちらの言動に小首を傾げた彼女に気付かれることはなかったらしい。スオミは百点満点の笑顔で食べ進めていき、紅茶を飲んで一息ついた。

「ごちそうさまでした。美味しかったですよ、グローザさんありがとうございます！」
「どういたしまして。かかったお金は安くはなかったけど、喜んでくれて何よりだわ」
(あ、やっべえ……なんかすつげえ気まずいしやりにくくなった……)

ローガンは自身の中で湧いていた疑問点を切り出すタイミングを見失ってしまった。それも最も最悪な方向で。

仲が良いという点に別に口を挟むような野暮なことはしないどころかそうであって

欲しいとは素直に思う。だが自分の中で生まれていた棘を二人、というよりもスオミに取り除いて欲しいというにはあまりにも頼みづらい。

鉄血を相手にする時は遠慮する必要がないので策を講じやすかったが、今回は味方がそうだ。ある程度までは気遣ってやらなければならぬ。

どうしようかと考えていた時だった。

「その……ローガンさんも聞いて欲しいんですけど、グローザさんに告白しておきたいことがあるんです」

自分を除いてグローザと談笑していたスオミがそう切り出してきたのである。少々陰を落とした雰囲気になった彼女にローガンは空になった紅茶のカップを置いて話を聞く体勢になった。

「今は他の人形の方々から見て大分克服できたみたいですし私にもその自覚があります。でもやっぱり完全にはできていません。心がけてもう二十年は経つというのに、まだこうして悩んでいるだけいいのかもしれないかもしれませんが私は自分が情けなくります」

「話の流れからしてあなたの苦手な物つてことよね。私が以前にいた別支部の基地でもあなたと同じ名前の『スオミ』というSMGの人形はいたわ。メンタルモデルからして全くの別人だけだね。その彼女から直接ではないけど、伝手で聞いたことはあるわ。あなたの苦手なのはやっぱり……」

「はい、私はソ連時代から生まれている銃を持つ戦術人形が苦手なんです。それも周囲から『超』と形容される程の」

知ってはいいたが、やはり直接言葉にされると来るものがあるのだろう。グローザは体を強張らせていた。ロシア生まれの相手にとつて衝撃的に感じる、隠してきた思いを打ち明けながら謝意を浮かべるスオミと、自分自身がやったことでなくても後ろめたさを感じているグローザ。それらを見たローガンでも二人の様子には無理もないと思った。

ローガンも学んだ歴史によれば、K P ー 3 1^{スオミ}が生まれた国であるフィンランドと、『ロシア連邦』と名前が改まった後に O T S ー 1 4^{グローザ}を製造したソ連には戦争時代の因縁がある。掻い摘んで説明すると、第二次世界大戦が始まって間もない頃に、属国化を図っていたソ連はフィンランドに相互援助条約を結ばせるために圧力をかけていた。国境線の変更だけでなく、自国にソ連軍の兵士の駐屯を許すことにもなるこの条約の要求にフィンランドは応じず決裂。そして11月末に『冬戦争』が始まった。フィンランド軍は粘り強く応戦したものの、犠牲を多く出すことになった。結果的には領土と工業生産力の一部を譲渡することになったものの終戦。明確にどちらの国が勝利したとは記載されていないかったものの、フィンランド側から譲渡することになったものからして戦争に辛くも勝利したのはソ連の方だろう。

(だけど今になってみても無茶苦茶すぎる。明らかな侵略行為だったって話だし、ソ連

のそれまでの行いも含めて当時の他の国から非難を浴びるのは仕方ないどころか必然だ)

それに戦争が始まる前にも外交交渉として両国は行っていたが、ソ連側からの条件に納得できないフィンランドは首を縦に振らなかった。フィンランドも譲渡案を提案したりもしたが相手も拒否し、芳しい結果を得られずに帰国することになったのも冬戦争の開戦の一因だ。

そして後々に力を蓄えて軍備を強化したフィンランドはソ連とまた『継続戦争』と後に言われる戦争で戦った。失地奪還の為に、である。

先の戦争で独立こそ守ったものの、無茶苦茶な条件を突きつけられた挙句に戦争を始めさせられたフィンランドからすればソ連は打倒すべき敵だ。しかし彼らの努力も虚しく、国境を冬戦争前の元に戻すことはできず、多くの不利を我慢しなければならなかった。

継続戦争にはヒトラー時代のドイツも関わっているが、ソ連との確執はドイツより決定的なものだった。

そんな歴史の背景があればスオミがソ連どころかロシアのことを嫌っているのも無理もないともいえる。

「ロシアの人形の方々には軟化できていますが、まだ文化的なものは受け入れられてない

んですけどね……あはは……」

「むしろそこまで克服できていることに驚きだよ。昔のお前がどれほど嫌っていたのかは知らないけど、そこまで努力できているのは褒められることじゃないのか？」

弱々しく笑うスオミにローガンはフォローを入れて、同意を求めるためにグローザの方に話を振った。どのような思いがあつたにせよ、グローザは我に返って頷いた。

「……そうね。私の知る『スオミ』はロシア銃の人形が関わっていたりすれば叫んだり激怒したりしながらどこかに走って行ったけど、今のあなたのようなメンタルモデルを持つ個体とは初めて会うわ」

「マジか。よっぽどだな、それ……」

「ええ。だから私も内心は驚きだったのよ、昨日までのパトロールで組んでいたあなたを見て。雑談交えての私の身の上の話も静かに聞いていたし、親切にしてくれたから」

「不快な思いをさせていなかったのならよかったです……」

しかし一つ疑問が出てくる。そこまでロシアというよりもソ連を嫌っている理由はわかった。だがその苦手意識を無くそうと努力を始めたきっかけは？

『超』という形容詞がつくほどの苦手意識がある物の克服など、そう簡単にできるものではない。野菜が苦手な子供がやるのとは大分難易度が変わってくる。それも自分の祖国を愛しているのであれば尚更で、一カ月や二カ月で月単位でできるものではないだ

ろうとローガンは思う。

「二つ聞かせてくれスオミ。お前がそこまでロシアに対しての嫌悪感をなくそうと決心した理由はなんなんだ？」

そう聞くと、スオミは両目を閉じて何かを考えた後で、首筋にかけて服の内側に仕舞っていたロケットを取り出した。これまでその存在に気付かなかつたそのロケットをスオミが開けると、内側にはスオミ本人と一人の男の子が写った写真が貼られていた。

スオミの手の平に乗ったそのロケットの写真を見て、ローガンは首を傾げた。どこかでこの男の子には見覚えがあるが今一ピンと来ない。いや、目元や顔立ちをよく観察してみると……

「これは今から二十年ぐらい前ですが、私と指揮官……いえ、ハリー君と撮った写真です」

「どっかで見たことがある顔だと思つたらこの子ハリーか！」

「ええ、この頃のハリー君はとても可愛かつたんですよ。お出かけしてる最中に手を繋いで歩いてたら急に放して、私よりも先を走っていくと思つたら振り返つて笑いかけてくるんですから。あの子を追いかけて捕まえたなら『鬼さんに捕まっちゃった』と言つて力をあまり込めずにジタバタしてました。私が作つたご飯もあまり美味しくなくて

も美味しそうに食べてくれてたりしてくれました。口の周りを汚したりしながらも夢中で食べてくれて……あ」

思いついに浸っているのか、ロケットを胸に抱きながら過去の事を口にしてはいるが、ハートマークが空中に浮かんでいるのが見えるほどスオミは幸せそうに話していた。突然語り出したことにローガンは驚いたが、そんな彼女が微笑ましく思えた為口出する気はさらさらなかった。その束の間、スオミも自分がしていたことに気づき、顔を赤くして俯いたのですぐにその先を聞けなくなったが。

催促する意思も全く起きなかった。彼女は純粹に過去の事に固執することはなくとも、尊んでいたのだから。

「幸せ、だったのね。今の指揮官と当時、時間を共にできたのが」

隣のグローザも同じ心境のようで、柔らかい笑みを浮かべている。

その台詞で顔を上げ、長い間彼の隣に立っていた人形は両手で大事そうに持っているロケットを見つめながら微笑んでいた。

「……はい、とてもとても幸せでした。家族として傍にいたことができ。戦術人形が人間の世話、というのはおかしな話かもしれませんが、一緒にいて苦労することはあっても心の底から嫌になることはありませんでした」

「戦術人形が指揮官という存在に従うにしても、彼らも人間なのよ。製造されたばかり

の私達に知識や技術はあっても、それらを活かせるだけの経験はない。それを積むまでは面倒を見てもらうことになっても、その逆だつてあつてもいいんじゃない？ たしかに彼らから常識をインプットされている私達からしてもちよつとだけでも違和感を覚えて然るべきよ。でもだからといってやっていけないわけではないわ。だつて子供というのはまだ小さくても一つの命なんだから」

本物の家族として認められるのは血の繋がりというのはさほど重要ではない。肉親であれ、養親であつても。親になる存在が人間でも人形であつてもだ。まだ儂い命を育むことを咎められる必要はない。その命を慈しみ、尊く思えるのであれば誰だつて守り通す資格を得ることはできる。守ろうとしているその子が自分を必要としてくれるのであれば尚更だ。

「でもそれがどうつながる？ ハリーが子供の頃のこと……といつてもあいつの父親が亡くなった時の事しか知らないけどよ、それがお前の苦手なロシア関係と繋がりが見えてこないんだが」

「……それなんですよ、ローガンさん。ハリー君がまだ七つになつて間もない時にあの子のお父さん、先代指揮官は亡くなつてしまつたんです。悲しみに暮れることはあの子にもありましたけど、私達より早く立ち直つてあることを始めたんです」

「ある」と……」

子供は感受性が良いこともあって好き嫌いが激しい傾向がある。とはいっても、それは世界中の子の数ほど違いがあり、同じものに嫌悪感を抱いているのだとしても他の物までも合致するとは限らない。食べ物、動物、物の形状や色。人間関係も当てはまるが、それは生きていくうえで必ずぶつかる壁であってローガンにだって好感を抱く人物がいればそうでないものもある。だからそれに関しては一且置いといていいだろう。

話はスオミが克服しようとして今でも頑張っていることから始まっている。そこから考えると、当時のハリーにとつて苦手に思っていたことだろうが、『あること』の見当がつかなかった。

ローガンとグローザは顔を見合わせてなにかわかったかどうかの意思の交信をしたが、互いになにもわからないということと心中でクエスチョンマークを浮かべることしかできない。こちらの様子を一旦窺っているスオミに『わからないことを考えてみるも仕方ない』ということと素直に聞いてみることにした。

「それって、なんなんだ？」

「……当時のハリー君は、『銃器』というそのものが大嫌いでした。自分が持つにして、自分ではない誰かが持つにしても、泣きながら捨ててくれと懇願するほどに」

「銃そのものがか……？でもあいつは……」

「ええ。ですがハリー君はモデルガンを持って撃つことから始めて、大体二年ほどで克

服しました。きっとお父さんの後を継ぐという目的を持っていたのかもしれない」

スオミは両目の青い瞳を閉じ、若干俯くようにして語り始めた。そんな彼女に口を挟むことなど、出来はしない。

「まだ十代にもなっていないどころか、まだ歩くこともできなかったそんなあの子の世話を先代指揮官に任されて約七年、私も見るのがなかったハリー君の成長で気付かされたんです。使命を果たし最良の結果を得るには、逃げているばかりではダメだと、ぶつかっている壁を迂回してなかったことにすることなんてできるわけないんだって。あの子は自分が忌避していた物の一つは『銃』であることを理解し、立ち向かう道を選びました。それを見た私はなにをすればよかったんでしょう？」

人生において分かれたれた道に明確な正解などない。誰かがその先を知っているわけではなく、結果など誰にもわからない。

その時のスオミが選ぶべき選択肢はどういったものがあつただろうか。達成するまで励ますか、諦めるように諭すか、または応援するようにして自分の殻に閉じ籠るか。どれを選ぶにしても、スオミ本人は見て見ぬフリをすることはできなかったに違いはない。それだけ、衝撃的だったのだろう。

「でもこれだけはわかりました。『私も立ち止まってばかりはいられない』って。単純に戦果を上げるだけじゃなくて、ハリー君のように私も変わらなければならぬ、そう思

いました。ですから私も、大嫌いと言うほど苦手としていた物を受け入れることを始めました。それまでは顔を合わせる以前に、名前を聞くことも嫌だった9Aさんやモン・ナガンさん達と、ロシアの方々との交流ができるように」

「……話が繋がってきたな。ハリーの親父さんが亡くなったのをバネにして、あいつと同じようにお前も正面から向き合った。そういうことだよな？」

「はい、そうです。そして私と十代半ばになったハリー君はお互いに努力の結果を褒め合ったりもしました。AR小隊の皆さんや、基地であの子の成長を私と一緒に見守ってくれていた皆も声を掛けてくれました。とても、とても嬉しかったです。『完全』という結果に至ることはできなくても、柔軟に受け入れられるようになったことを褒めてくれて……」

でも……、とスオミの両目から、声と一緒に涙が零れた。

グローザはロケットを持つ彼女の左手に自分の手を重ねる。ここにいるのはハリーと同じ人間のローガンだけでなく、スオミという一人の人形と変わらない自分もいるのだということ教えるように。

「ハリー君が……指揮官になってからはとても不安なんです……いつか、お父さんのように不意を突かれて命を落とすんじゃないかって……誰にだってどうしようもないことはあるというのは理解しています。でも私達より後方にいるのだとしても危険がな

いわけではないんですよ……」

戦場にいるというのであれば、どこにだって命の危険は隣り合わせで存在している。大なり小なりあるのであって、完璧に安全な地帯など見つかるわけない。指揮官であるハリーは隊の全体に指示を出すために後方に下がり、戦況を見極めて集中力を途切れることなど許されず、自分の身を自分で守ることにまで気を割くことはできない。その役割を必要最低限の人員はいる形で警備に当たる。だがそれにだって限界はある。最低限ではないにしても、戦力がそれ以上であれば、指揮官であるハリーはその場にいる者達全員を見捨てる形で逃げることにしかできなくなる。そうなったとして、彼に追い付いて命を奪うことは難しいことではないだろう。

「私はハリー君と……指揮官と多くの時間を過ごししてきました……笑って、怒って、泣いて……言いたいことを言い合って喧嘩したも仲直りして……それなのにオムツを替える必要があるほど小さかったあの子が今では大人になって戦地にいるんです……一緒にいた時間は多くても奪われてしまうのは一瞬で、あの人の……あの子の笑顔が一瞬で消えてしまうようで……だから、私は……!」

限界を迎えて泣きじやくり始めたスオミを庇うように、グローザは両肩に手を置いて彼女の方に寄せていた自分の方に引き寄せた。

ローガンにだってスオミの気持ちはわからないわけではないどころか、痛いほどわか

る。とても辛く、苦しい気持ちとこの先も向き合わなければならぬのだから。

ハリリーをここから遠ざげることが出来たらどれほどいいのかと、考えることはあつたのかもしれない。でもそれは叶わない願いであり、エゴでしかない。なぜなら『ハリリー・クロスハート』という一人の男は人類を守るといふ生き方を自分で強い意志と覚悟をもつて選んだのだから。もし『ここから自分と逃げてくれ』と言つたとしても、彼は絶対に『オーケー』とは返さない。ローガンにもその確信がある。

思わぬ形ではあつたが、ローガンが疑問に思つていた、『何故こうして副官の立ち位置に拘つているのか』の理由が大体分かつた。

それは、幼少期から面倒を見てきたハリリーへの感情、彼が命を落とすことがないようにという強い、傍に居続けたいという思いだつた。

「……こんなこと言つても、単なる俺自身の気休めにしかならないと思うけどさ」

手を伸ばし、テーブルの反対側にいるスオミの頭に手を置き、自分が抱く気持ちをそのまま言つた。

「お前は頑張つてるよ、スオミ。ここに居る誰よりも、ひよつとしたらハリリー以上にな。……悪かつたな、お前が抱えていたものを知らなかつたとはいえ、あいつの所に行くのを妨害してしまつた」

両目を泣き腫らし真つ赤になつたその顔は今一度、しゃっくりを上げながらも我慢し

ていたものがあつたのだろう。流していた涙の流れが一際大きくなった。

見た目相応の少女のように、スオミは泣いた。周囲の目も何も気にせず、堪えていた感情をすべて吐き出すように。

グローザも我慢できなくなつたのか、目尻に光るものができながらもスオミをあやす様にして抱き締める。包み込まれるようになった少女は自分をそうしてくれている相手に体を預け、背中に腕を回してひたすら泣き続けた。

もう、ローガンからも何も言うことはできない。できることはただ、彼女が陰で誰にも明かすことが出来ずに苦しんでいた様から解放されるのを見守るだけ。

昼休みの終了を告げるベルがもう大分前に鳴っていたというのに、自分の事情を優先して動こうとする気が全く起きなかった。

平和主義という思想を掲げている者であれば、銃は勿論、ナイフやフラッグレネードといった人を傷つけ殺めることが出来る武器に強い忌避感を覚えるという。だが2061年に発生した『蝶事件』からは誰でも本格的に銃を持つて戦って生き抜く術を身に着けなければならぬ時代になった。要は、そのような思想ばかりを振りかざすことが出来なくなつたのである。暴走を起こした鉄血工造株式会社との戦いが誰にでもある以上、自分の身を守る程度には自身を鍛えなければならなくなつた。

それよりも前に2045年の第三次世界大戦の切っ掛けとなつた2030年に世界規模で発生した大災害の『北蘭島事件』。今はもうあまり見かけないが、この世のものは思えない異形のものとなつたE・L・I・Dもいる。

鉄血や人間の犯罪者との戦いで忘れそうになるが、奴らとの避けられない戦いもあるということをおぼえてはならない。

大型バイクの回収として基地に來た民間人の対応も終わった後、体を動かすことにして手始めに射撃訓練としてターゲットを撃ち続けた。

装填していた弾倉の中身が無くなつたタイミングで訓練が終了し、ローガンは成績を確認。療養に入る前に得ていた成績とあまり変わらなくなつてきたことを確認しつつ、

『ハニーバジャー』を近くに置かれてはいるカウンターのの上にストラップと一緒に寝かせ、事前に用意していた炭酸水を飲んで一息ついた。

訓練場には銃器のメンテナンスをしている職員とローガン以外誰もいない。午後になつてから二時間経つた今の時間帯は事務処理の仕事の為にここに訪れる人形や人はあまりいないのである。

カウンター横の壁に背中を預けると、脳裏に過るのはスオミの泣き顔だった。

「一瞬で消えてしまふ、か……」

掛けていた時間が多くなるほど、失つた時の喪失感というのは比例して莫大なものになる。歳が十八にまで積みあがつた頃から銃を持つて戦い始め、横に並んでいた友人たちを失うのは心が痛む。それに、これまでに順に得ていた五人の相棒達が命を落とした時の喪失感もかなりのものだった。

——それでも、立ち止まってはられない——

親しき誰かがいなくなったことに涙を流す者に対し、今なら誰にでもあることなのだからそれに囚われた気になつて甘えるな、というのは失言だ。そのようなことを口にするのは、言うのは簡単であるということを知らずに生きてきた、自己中心的な人物ではない。生命が散るといふ事。それを恐れながらも生きて行かなければならないとはいへ、一方的に突き放すような台詞を吐けば反感を買うだけだ。

——ざけんな、好き勝手言っくんじゃねえ——

それに人生で経験し慣れてしまえば、未経験だったことを知らなかった自分を見失うことになる。歩き方や機械の操作みたいに易しいのならいいが、人や動物の命を奪う事、奪われることになつたらどうだろうか。息をするようにしてそれらのようなことがあつても何も感じないようであれば、もう『怪物』でしかない。

——そんなのは御免蒙る——

敵と見定めている相手に対処しなければ自分が、或いは傍にいる誰かが傷つくことになるのであればローガンだつて迷わず銃でその者を撃つ。罪の意識を感じるのであればその後で良い。どのような経緯と理由があつたにせよ、殺人で手を汚すことは決して褒められることではないからだ。

——でも、彼女達だけではなく人間もおれたちやらなければならぬことでもある——

そんな嫌な役割をA R 15に、戦術人形達に押し付けるのは間違つている。遠い未来、鉄血との戦いが終わつて人類の往来がまた盛んにある時代になつてからも起こらないことはないだろう。ローガンじゃなくても、人間というのは過ちを繰り返す。盗難、誘拐、殺人。テロだつて発生しても全くおかしくない。でも、今を生きる人間達だけでも『手を汚すことの意味』を知り、それを後世に語り継いで欲しいと思う。きつと無駄

で終わるだろうが、何もせずについて後悔するよりはいい。そうするためにも、犯罪者の対応を戦術人形だけに任せておくわけにはいかない。鉄血への対処だって、元は人間を滅ぼす思考を始めたAIを作り出した人類側に非がある。開発者としては良かれと思つて別の意図をもつていたのであるが、現状がこうなっている以上はもう言い訳の仕様がなない。その原因解明も、いずれは自分達がやつて反省をしなければならぬだろう。もう二度と、こんな暗黒時代にならなくていいように。

「……おっ」

思考に没頭していたところ、無意識に飲み進めていたらしい。手に持っていた炭酸水の容器が空になっていた。

五メートルほど離れていたところにペットボトルのゴミ箱が見えるので、そこに目掛けて投擲。弧を描いて放られたペットボトルは回転しながら飛んでいくが、目的の空間に入らずに失敗。カラカラとプラスチック特有の乾いた音を立てながら床に転がった。

溜息を吐きながら拾つて、設置されている枠内に放り込んだ瞬間だった。

「取り締まりの時間だあああああああああああああああああああああああ!!」

ここ訓練棟と本部を繋ぐ出入り口への扉が開くというよりは蹴破られ、そこには鬼の形相をした戦術人形が二体。

「そ、S O P H I I に M I 6 ! ? なに、なんなん!」

「なにもどれもクソもあるかっていう話だよローガン！ 食堂でスオミを泣かせたっていう目撃証言があるんだよ！ どんな酷いこと言って傷つけたか白状しなよ！」

「そうだぞーローガン。早めにゲロつちまえばお前に痛い目を合わせずに済むから私達は心を痛ませずに済むから早くしろよー」

訂正、鬼の形相をしているのはS O P I Iだけで、彼女の斜め後ろにいるM I 6は声色だけは真剣だが、ニヤニヤしながら自分を見ている。

片手に持っている拳銃を突きつけてくることからして、S O P I Iの剣幕はマジだろう。

「あいつが泣いちゃったのはたしかに俺も関係しているけど、あの場において誰にも悪意はありませんと俺は主張する！」

「本人に自覚はなし、と。S O P I I、まずは一発だ」

「一発ってなんなん痛ってえ!？」

バスンッ！と一発がローガンの肩に命中。石のような硬いなにかが強力にぶつけられたような痛みにも悶えながら、足元に転がった物体を確認した。一見したところ銃弾のような金属ではないことは明らかで、形こそそれではあるが青一色で所々に皺のような小さい谷が表面にできている。それに痛みはあるもののこうして痛がるだけで済んでいることから殺傷力は低い。これらから察するに、

「おいしい過剰過ぎませんかね、仲間内での質問でゴム弾使う奴がどこにいるってんだよお!？」

「拙速に事を運ぶ、だよローガン! 時間を無駄にせず本当のことが聞き出せないのであれば多少の実力行使は仕方ないってことで二発目もいっとく!？」

「いやいやちよつと待とうか狂犬少女よ! これじゃあ一方的になぶ煽なぶってるのとあまり変わらないということは……わからないよなお前は!？」

「こちらを侮辱する発言もあり、だなメモメモ……S O P I I、いいぞもう一発撃つとけ」

「お前はお前で面白がつてるだけだろうが愉悦ぶつこいてんじやねえぞアバン!？」

こちらがゴム弾による銃撃を受けてるというのに対し、M I 6 は明らかに全てわかっているような表情である。こちらの返答や様子をデジタルパッドに書き込んでいる内容も、明け透けな悪意もありまくりでまともに取り合うつもりなど皆無だ。

というよりかはローガンからすればなにがどういふことかまったくわからない。あの場にはローガンやグローザだけでなく、たしかにまだ人も疎まばらにいたので誰にも見られてないわけではないだろう。傍から見たらS O P I I が言うようにローガンがソオミを泣かせたように誤解されても仕方ないかもしれない。それでも目撃証言が広まるのが伝わるのが早すぎる。まだ二時間しかたつておらず、あともう少して三時間になる

うとしている時間帯だ。

ここにいる二人以外に、人為的に広めた誰かがいるだろう。

そこまで考えたところで、追加でもう一発のゴム弾を治療中の右腕の上腕に命中しシヤレにならない痛みが電気信号として脳に伝わった。

「ばっ……かやろお！傷口に塩をすり込む如く、銃創にゴム弾ってか!」

「おつとつと、S O P I Iそこだけはやめとけよ？さすがにそこを痛めつけてしまうのは気の毒だ、別の個所を狙え」

「もっと喚かせたかったんだけど、仕方ないかあ！」

「楽しそうにしてんじやねえとツツコミたいけど一つ聞かせてもらおうか！お前達に情報を取りくしたのはどこのどいつだ!」

「ん？カルカノ妹だ」

「ぶっ飛ばすあんのライアーウーマンめ!!」

カルカノM91／38という、狙撃銃の戦術人形で穏やかな性格で言う事は淡々としているが嘘つきであることはローガンも知っていた。姉は皆と一緒に戦う人形であるのに対し、彼女は孤高で単独行動で敵を撃破して任務を遂行するタイプだとも。基地内でも度々会話したことがあったが、彼女の嘘に騙されたことも片手で数えれない程はある。

「おおっと、ここで我々同志に対する新たな危害予告だ。S O P I I、フルファイヤ」
 「え、ちょまつ——！」

ババババババツ!!と発射されたゴム弾たちがローガンを無慈悲に襲う。背中当てられながらもカウンター上のハニーバジャーを手に取ると台を倒し、戦場でしているように盾にしつつ叫んだ。

「もう尋問でも何でもねえじゃねえかよ! もうこれじゃあいじめですよお嬢さん方! これだつたらPTAに報告して対処してもらおうことも吝かじゃないぞ!」

「ローガンは子供じゃないでしょ何言ってるの?」

「畜生冷静に突っ込まれた上に俺の頭のネジもどっかに行っちゃまってた!」

脳内がオンボロマシンのローガンと化せばもうどうしようもない。頭のネジどころか歯車の動きもおかしくなり、いつも通りの思考ができない。

状況整理もままならない現状で、こちらからは(するつもりはないが)手出しもできない、ということも考えれずに頭抱えて『あー、あー!』と呻くことしかできない。本物の銃弾が飛び交う戦地ではないというのに、背筋を駆け上がった怖気に唆されて現地さながらの動きもしたりと、身体の方でしか正常でしかない。……いや、自陣で演習でも何でもない場でそんな動きをしているあたりでおかしいのかもしれない。

「……まあいいつか。S O P I I、もういいぞ。ローガンは食堂でスオミに傷つくよう

なことを言っていないしやってもいないよ」

「えつ、でも……」

「お前も本当はわかっているだろ。カルカノ妹は虚言癖があるわけで信憑性が幾分欠けている。たしかに他から聞いた話じゃスオミが食堂で泣いちゃまったのは事実らしいが、近くにいたローガンと本部からのお客さんがメンタルを傷つけたことの証拠は何もない。状況から見た推察を聞いただけだったらるお前も」

そろり、とローガンは顔を即席のカバーシールドから出して相手の様子を窺っている。気まずそうにちらちらとこちらを見るS O P I Iの真紅の瞳と視線が重なったので、こちらはジトツとした雰囲気を意識して一直線に凝視。効果はあったようで、彼女の顔は曇って俯いた。そしてローガンはそのままスライドして確信犯を先程よりも強く睨んだ。こちらは少し申し訳なさそうにしながらも、やれやれと首を横に振っていた。

「面白がってS O P I Iを止めなかったのは謝るよ。口答えこそしたものの、結局お前は手を上げなかったんだし非は全面的にこっちにある。肝心の話を当事者のお前からちゃんと聞いてなかったんだしな。だから話してくれないか」

「……その発言に嘘偽りはないよな？二段構えで騙された挙句、他人不信になったら完全にお前らのせいだぞ」

「しないよ、絶対に。こういうことをすると知られたら常識人の妹達に止められるだろうから、そうなる前に多少荒っぽくさせてもらったんだよ。それに、なんか湿っぽく色々と考えてそうだしな」

目力を緩めずにM16を見つめ続けたが、言っていることに虚偽はなさそうだった。実際あれこれと考えてたわけで、精神的に疲れているのもある。

事務処理の日常や夜の酒の席で冗談を口にすることがあっても、相手の顔色を的確に把握しながら話すのがM16だ。話のペースの配分に緩急をつけ、相手の中で整理させたりして落ち着いて話させているのを何度も見てきた。

とはいえ、こちらは体の何カ所かに暴徒制圧に使用する非殺傷弾を受けたことにより痣が出来ていても全くおかしくない。差し引いてもこちらが損するだけな気がするが否めず、不満が湧いてくる。

頭の中で足し算や引き算を繰り返した結果、今日になって何度目かわからない、息を深く吐きつつ倒したカウンターを立て直しながら二人を見ずに話した。

「……グローザと一緒に、あいつが経験や過去から感じていた不安とかを聞いてたんだよ。ロシアというかソ連っていうか、苦手なものを克服するために頑張っているってのはお前らは以前から知ってるんじゃないのか？」

「……うん、スオミは一生懸命頑張ってるよ。ロシアの人形達と自然と会話が成立する

ように今は頑張ってるし、表面的に見え辛くなった時に私は抱き付いたもん」

「たしかにな。大体推測はできるけど、あいつが抱えてた不安つてのはそこまで揺らぐほどのものだったのか？」

「親の身になれば誰でも感じそうな、とびつきりのをな。俺とグローザはそれを黙って聞いてただけだ」

立て直したカウンターを備え付けられている布巾で軽く拭いた後で自分の銃だけでなく置いていた私物を一旦戻した。射撃訓練の次にやろうと考えていたピットの準備として、持ち出していたバックに弾薬ケースと予備の弾倉を順々に入れてチャックを閉めた。

「……なるほど。まあ誰にでも抱えてるのはあるしなあ」

「なんか意外だな。M16、お前はもつと掘り下げて知ろうとしてくるもんだと思っただ」

「キリが無くなるだろ、それだと。『楽な生き方に逃げてる』とか『丸投げしてる』って誤解されるかもしれないけど、ずぶずぶと思考の沼に嵌っていくのに付き合うのは『人生の伴侶』って奴の役割なんだと私は思うよ」

こちらに歩いてきたM16は電源を入れたままになっている電子パッドを、ローガンのと同じカウンターのの上に置いた。メモ帳のアプリが起動されている画面には、先程の

質疑応答の様子などが記載されていない。

「そうじゃなくても、歩み寄ってやる必要があるんじゃないのか？ 人生、溜め込むと後々に我慢もたなくなって感情が爆発することだってある。そうなって欲しくないなら、捌け口になっても俺なら構わない」

「ローガンは優しすぎなんだよ。口悪く文句を言ったりしても、黙って聞き入れてるじゃないか。それじゃいつの日か、溜め込まれたお前自身が風船みたいに破裂してしまうぞ」

「それを言ったらお前はどうかなんだよ。AR小隊だけじゃなく、他の奴らと随分と話し込んでることだってあるじゃないか」

「そりゃあそうさ。妹達は家族だから踏み込む。他は結局は肩を並べる戦友ってだけで、どこかで触れられたくないっていう確かな壁が存在している。妹達なら心置きなく、てなわけではないが無理矢理にでも殴って砕くだけの度胸は私にもあるさ。でもあいつら以外はさ、結局は繋がりが比較して細い他人みたいなものだから、壁に手を置いて嘔いてやることしかできないんだよ。『誰かを頼りたくなったら私の所に来ても良いからな』って。今回はスオミから話されたことだからいいが、自分からゴミ箱なりに行くようじゃ自分の事情が入れるだけの余裕がなくなってしまう」

何の気もなしに、二人が来る前にペットボトルを投擲したゴミ箱を見てみる。投げて

入れれなかったのは単にコントロールが定まらなかったわけではない。こまめに大型のポリ袋が持つてかれてないから、内容量がもう限界を迎えて入れられるだけの枠が無かったからだ。それが自分の精神的な、ストレスや不安の行先になってみたらどうだろうか。他人が遠慮なしに入れ続けていったとして、自分が捨てられなくなったとしたら。基地にいる誰かの事情ばかり抱え過ぎて、自分の事が考えれなくなることになったら。

「そうになったらローガン、お前は破綻してしまうぞ。精神面だけじゃない、身体的にもな」

それにな、と言葉をつづけるM16はこちらの目をのぞき込むようにして、その隻眼でこちらを直視してくる。

「人間つてのは結婚して夫婦になるんだろ。そうしたら互いに嫌でも相手の事情に踏み込む必要があつて、自分はそうしてくるパートナーにオープンにならないとだ。そうしたことで相手を思いやることは大前提だけど、傷つけ合つてしまうことだつて必要なんだよ。傷つけられても許すことで、切れない繋がりを生む。そうして繋がった伴侶の事情を優先して抱えて、その他の奴は二の次だ。家族を優先して何が悪い、つて話だよ。もし抱えきれなくて倒れそうになつても、ちゃんと支えてくれる奴がいるんだ。そんで一緒に拾つて、考えて、最良の結果を導き出すのを手伝つてもらおう。苦楽を共有する夫婦つてのは、そういうものだろ？」

ニカリと笑ったAR小隊の姉はローガンの額を小突いてきた。思わぬ不意打ちで多少よろめいたが、立ち続けることはできる程度の衝撃で問題はなかった。

「誓約した人形の役割も変わらないさ。誓約相手にI・O・Pから所有権を移譲されるとかそんな細かいことは置いて、寄り添って生きていくのがやるべきことなんだ。さすがに子供を産むことはできないけど、それでも問題があれば一緒に悩むことならでき。戦闘だけじゃなく、家事だってなんだって、練習さえすればな。だからさ——」

M16がこちらの胸に拳を当ててくる。殴打して傷つけるような強さではない。軽く当てて言い聞かせるような力加減だ。

「——もう少し楽な方向に逃げていいんだ、ローガン。一人でも仲間の為に尽くそうとしているお前の姿勢、私は好きだ。でもそこまで責任感を背負い込んで、悲観的になつたら仕方ないし長くもたないぞ？」

握り拳から手が開かれ、M16の人差し指が自分の胸の中央を突いてくる。大体同じ加減で優しく触れて、くるくると描いている円の中央にあるものを知っているように、上目遣いでこちらを見上げて笑っていた。AR15やM4のように静かに微笑むものではなく、ニカッと快活に口角を上げている笑顔だ。

拳をこちらに当てた際に気付いたのかもしれないが、それに対してはなにも言わずに彼女は身を離れた。

「……まさか戦術人形に人生での物事の考え方を説かれるとは思わなかったな」

「余計なお世話だったか？ A R 1 5 が気にかけてるお前だから口出しさせてもらったけど」

「いや、皮肉も何もなしで貴重な意見だったよ。たしかに重く受け止めすぎていたのかもしれない、礼を言うよ」

ストン、と M 1 6 の言葉の一つ一つが胸の中に落ちて行った気分だった。それらが積み重なって感情に繋がる回路を塞いでいた栓を吹き飛ばし、壊死しようとしていた一つ一つの出来事に対する考えが好転していく。悲観していたわけではないが、現実的に重く考え込んでいたことをここで自覚した。楽観的にとまではいわずとも、ポジティブに。戦地にいることで長らく忘れていたようで、気分が軽くなった。

一方的にリンチまがいのことを受けたのでまだ思うことはあるが、M 1 6 の助言でそれも薄れている。普段は無邪気な少女をいつまでも縮こまらせるわけにはいかないので、バツが悪そうにこちらを見ている S O P I I に視線を向けた。

「もう怒ってないよ、S O P I I。さすがにやりすぎだったからすぐに水に流すことはできないけど、今後しないのならもう何も言わないからそんなに居心地が悪そうにするなよ」

「ホントにもう怒ってない……？」

「本当だよ。敵でもない誰かを苛める趣味は俺にはないし、お前も同じ部屋で仕事して一緒に飯食う機会も多いんだ。そういう関係の悪化なんて俺だって御免だよ」

「……うん、ありがとう。それとごめんなさい、ローガン。スオミもローガンのことを信用していたということ、私自身が信じられていなかったよ」

「それなら気にするな。自分ではない誰かの信頼関係を正確に測り切れることなんてないんだからな」

いつものように抱っこをねだって抱き付いてきたSOPPIIの頭を撫でてやる。鉄血相手には喉元に食いつく狂犬だが、ハリーに対してもじゃれつくこうした態度を見ると、ただの人懐っこいワンコである。

「それで、スオミ本人はどうしたんだよ？」

「落ち着くまで傍にいるってことでグローザに任せたまよ。俺には厳しいけど、スオミには親身になっていたしな。自分の悩みを打ち明けたこともあったし、あいつからすれば信頼に足るってことじゃないか」

「あの客人には不透明なことがあるが仕方ないか。毛嫌いしていたロシア関係の人形にあいつがそこまでできてるんだ、たぶん大丈夫だろう」

生憎だが、スオミの思いを共有できたからと言ってグローザと距離を縮めれたということにはなっていない。そんな都合がいいことなど、ローガンだってほいほいとあつて

たまるかと思うし、彼女の性格からしてそんな夢見がちな物事の見方はしていないだろう。ローガンも自覚してはいるが、前に言った自身が鉄血と戦う理由を『子供が抱くエゴ』といったようにしてバツサリと切り捨てていたこともある。堅実過ぎず、理想に逃げすぎてない、というラインで定めていた一つの理由をズダボロに言われて憤りを感じなかつたわけではなかつたが、あれでグローザの片鱗を知ることが出来たともいえる。「そういうえばお姉ちゃん、疑惑で忘れていたけど元々のローガンへの用件のアレのこと言っておかないと」

「ああ、そういうえばそうだったな。ちよつと待つてろよ……」

M16は置いていた電子パッドを手にとっていくつか操作した後で、ローガンの方に画面を向けてきたので黙読してみる。そこには全体的に黄色やオレンジなどの暖色で秋らしい色合いで作られている文書のデータが映し出されていた。題名から始まり、一通り目を通した後でローガンは口を開く。

「……これ、つまりは料理対決ってことか?」

「そういうことだな。一カ月後に私達こと、AR小隊も参加するんだが……料理の腕に覚えがある奴がいなくてだな」

「でも前にローガンがスープ作ってくれたことあったでしょ?あの時は状況が状況だけに凝ったものは作れなかつたみたいだけど、基地内なら作れるんじゃないかな」

思ったんだ」

SOPPIIから言われたスープというのを思い出し、ローガンはそんなこともあったなと思り返す。

「そこで、だ。ネットの情報だけじゃ心許ないし、当日までに基本的なことだけでも教えて欲しいんだよ。あとは私達が作ったの料理の味見もお願したい」

「そんなきちんとしたことまで俺は知らないぞ。時間がある時で良ければ別にいいけど、そういうのを教わりたくないなら他に適任者がいるだろう」

「うん、私も最初はそう思ったよ。でも騙されることはないだろうが、その適役も参加してるといったら？どんな気分になるよローガン？」

「あ〜……」

明確に言われていないがわかる気がしてくる。なんかこう、勝負の前から負けた気がしてくる。単純な敗北感と悔しさだけじゃない。AR小隊全員で教われたのだとしても、様々な面で申し訳ないような気分にならなるといことが想像できた。

形容しがたい感情で微妙な顔つきになったローガンに苦笑いしながらM16は肩に手を置いた。

「まあつまりそういうことだ。私達としても基礎を彼女からそこまでして教わるつもりはないんだよ。だからお前に白羽の矢を立たせてもらったんだが、どうだ？」

「……今しがたの講座料をつて感じて言わねえんだな。その方がありがたいけど」
「まさか、そんな面倒なことは言わないさ。同じ屋根の下で仕事して、飯も食べてるんだ。それ以前にお前には部隊壊滅の危機を救ってもらった恩もあるんだ。こういうことから返していかないでしな」

「私はそこまで堅苦しいことは言わないけどさ、もうローガンも『他人』じゃなくてAR小隊の『家族』だよ。この先だつて苦しんでいるのなら何度だつて助けるよ」

抱き付いたままになつているSOPPIIも裏がないように満面の笑みでこちらの胸に顔を埋めてくる。彼女の吐息が着ている薄着を通じて肌をくすぐってきたが、こそばゆい感覚が『心配しなくていい』と語り掛けているかのようだった。顔を上げればMI6と目が合う。彼女も目を細めて、こちらの返答など言わずともわかつているというのに、何も言わずに待つていた。

やれやれ、と声を発さずにローガンは呟く。自身への呆れも含めて抱く思いとしては、たつた一つ。

秋よりこの先には頭を悩ませることなど多いのだというのに、楽しそうにやろうとしているんじゃないか。

24. 予期せぬ事態 —Thanks, I`m going—

人間にはレム睡眠とノンレム睡眠というのがある。学術的なことは省くが、眼球運動もせずに脳と身体がリラックスして深い眠りに入るといのは後者であり、睡眠では前者と大体九十分を目安に交互で繰り返される。

緊急招集を受けることになるのだとしても、やはり避けたい時間帯というのがある。ローガンからすればそれは明け方だ。日々の睡眠時間を六時間程度と定め、日付が変わるごろに就寝しているローガンからすれば目覚めが悪い、ノンレム睡眠に入って間もない時間帯に叩き起こされることになったわけである。

部屋の壁にセットされているパネルからけたたましいブザーが鳴り、それに文句を言いながら簡易的に身支度を整えたのは十分前。

指令室に入ってみれば、知っている顔の人形達と指揮官のハリーがそこにいた。

「よう、おはようローガン。その様子からすれば、最悪な目覚めだったみたいだな」
「脳の回転が十分じゃないってことが自覚できるほどにな。自室であれこれする時にいちいち忘れてしまったよクソツタレ」

なにも隠さずについた悪態にトンプソンが笑いながらこちらの背中を叩いてくる。朝から元気だなど思いながら彼女の隣に立つと、我が指揮官の脇にスオミが控えていた。

ローガンの通信端末にお礼の旨を伝えるメールが届いたので、励ます意思を込めた返信をしたのは、昨日の夕方。さすがにもう落ち着いたらしく、こちらを見た時に笑顔で一礼してきたので軽く手を上げて簡易的に挨拶を返した。

招集していた全員揃ったということを確認したらしく、ハリーは座っていた椅子から立ち上がる。その表情は、いつもの柔和な顔つきではなくまさに真剣そのものだ。

「こんな明朝から悪いけど、緊急事態だ。それも予見していたよりもさらに悪い方向に」ハリーは部屋の中央に設置している、ブリーフィングと作戦の指揮を兼ね揃えた端末を起動しホログラムで浮かび上がらせる。それにはダムと重しき建造物と離れたところに隊列を組んでいると思わしき部隊が映っていた。

「二昨日の事件から得た証言からの推察ではあった。でも無視できることじゃないとして偵察部隊の一部隊を編成し、昨晚にここから南側に位置する土木建造物のダム周辺に送り込んだんだ。ここまでなら知っている人もいると思う。スオミ」

「はい。偵察部隊からの現場報告では、正規軍とは全く違う、見慣れない部隊の野営地を発見。まず敵部隊の規模ですが、夜間で正確に測れてはいないようですがおそらく中隊

から大隊規模だと思われませう」

大隊、という単語に一部の人形達に動揺が生まれた。

グリフィンで編成されるのは一部隊に付き最大で小隊規模。つまり、ダミーも含めて二十五人である。これ以上の人数編成はしないことはないものの、多くは小隊規模に編成した部隊を複数配置するだけで一カ所に纏めることはほぼほほほならない。正解かどうかはわからないが、人間以上のポテンシャルをもつ戦術人形であれば、小隊規模で個別に作戦行動をしていた方が効率が良いなどメリットが多いからだろうとローガンは考えている。

とはいえ、見知らぬ部隊がそこにいるということは嫌な予感しかしてこなくなる。しかもそれが鈍度などは置いても、人数だけでもこちらを圧倒するだけの規模であればだ。

端末の操作権が移譲されたらしく、スオミは手に持っているタブレットにメモリーチップを挿入し読み込ませた。表示させるための動作が終了させるまでの時間の間も彼女からの説明は続く。

「偵察隊からすれば、敵の装備も充実しているそうです。近辺で見回りをしていた歩兵から確認してみたところ、SMGやアサルトライフルで武装しており軍隊さながらの装備となっていました。また、他に双眼鏡で確認できたことなのですが……」

端末の読み込みが終わったらしく、スオミは手元に視線を戻して指をタブレットに滑らせる。いくつかのダイアログボックスに収まっている写真で捉えられている物に、ローガンも愕然とした。

「戦車……!?!」

「そうです。送られてきた画像解析の結果、1980年頃にここ、アメリカで開発された『M1エイブラムス』であることが確認されました。展示されているようなレプリカではなく、本物であることも解析班から報告で来ています」

現代は第三次世界大戦の影響もあり、戦車のような戦闘で使える兵器などほとんどないと聞いている。核兵器が各国から発射された際に、よーいドンといった勢いで世界各国で用いられた電磁^Eハルス^Mの^P影響で、全世界の電子機器を積んだ兵器もスクラップにされたからだ。それでも兵器その物がイカれたわけではないので、操作盤などを取り換えれば運転することはできる。しかし今のよう到大戦が終結してからは、民間人の生活や戦術人形などの自律人形が優先され、兵器に使用する電子部品の入手は困難でしかない。

元々第三次世界大戦中は歩兵による白兵戦がウェイトを占め、後半はコンピュータや機械による兵器による戦争というのではなくなつたらしい。そのような背景もあつて存在を忘れてしまいそうになっていたが、戦術人形といえど戦車のように高火力を発

揮する兵器には太刀打ちできないと聞いていい。烙印^Aシス^Sテム^Tを施され、手足のように自分と同名の銃器を扱えるからといってもやはり限界はある。彼女達も『歩兵』であり、あくまで人間の兵士よりも優秀だというだけなのだから。

「数は片手で数えられる程度ではありますが、それでも大きい兵力です。他にも攻撃へりも確認されています」

「随分と準備が整っているわね……。指揮官、質問していい？」

「許可する、グリズリー。なんだい？」

「奴らがそこまでの規模で南に押し寄せているのは何故？そもそもその話、そこに偵察部隊を送り込んだ推察って？」

治安組織によるあの尋問の映像を見たのは自分とハリーやヘリアン、それとM4だけだったなと思いつ返す。指揮官をちらりと見てみると、彼もまた自分を見ていた。アイコンタクトで説明を頼むと言われたので、頭をガリガリと掻きながら上着のポケットから入れっぱなしにしていた記録媒体を取り出し、ブリーフィング端末の差込口に入れた。

「まあともかく、最初にこいつから始まったんだが……」

ローガンからすればもう四度目になる尋問記録の再生。一通り終わった後で、ローガンは得られた考察を話した。とはいっても、麻袋と一緒に持ち出された情報に関することだけだったが。未だに不明である、食糧庫に持ち出した人間像、そのようなことをし

た経緯、そして先日交戦したグループとの関連性など。

様々な意見をM4とも交えて有力と思わしき形で纏められた考えにおいて、整合性の有無を問われた場合はさすがに『有る』と返答することが出来ない。相手は確定的な要素が全くない霧のような存在で、性格から来る考えに一貫性や矛盾があつてもおかしくない。その為、あくまで自分達が積んできた人間関係の経験からきた推測でしかないのだ。

「……なるほどね、とりあえず了解したわ。でもそうになると、当の本人はどうしているのかしら」

「たしかにそうだ。ハリー、あれから大体一日になるがなにか掴めたか？」

「ごめん、さすがに複数のタスクをこなしながらじゃそこまで追い付けないよ。情報収集で動かせる人員が限られてるし、アテにできるパイプでも当たり外れもあるしね」

「二日だけじちよつと無理があるよな……にしても待てよ、敵方は一日を間に空けただけでもう進軍してきたっていうのか？」

先日にもローガンも現場で対処に当たることになったパトロールの騒ぎ。あの騒ぎからまだ二日目にしかなっていない。奪取した情報の解析をし、それから得られたことから作戦を立案して準備するのが順当だ。明らかに一日で全ての行程を終わらせるには無理がある。しかし、そこに突破口の糸口がある。

トンブソンの隣に立っていたPTRDが同じ考えに至ったらしく口を開いた。

「だけど、そこにアドバンテージがあるのかもしれないわね。もし私達と敵対する連中だとして、まだ十分な情報収集が出来ていないのであれば……」

「その通り、僕達が先手を取ることだってできる。どのような意図があつて近づいてきているのかはまだわからないけど、ローガンと話し合ったようにダム機能停止が目的である場合は容認してはならない。作戦開始時の動きとしては未確認部隊の目的を突き止め、それを阻止するというようにする。現時点でも警戒されるのを避けるために、尋問といった直接情報を引き出すような接触は今のところはしていない。だから入手するのであれば迅速にして欲しい。他に質問はあるかな？」

「送り込んでいた偵察部隊はどうなっている。現場からもう退いて帰投しているのか？」

「いや、彼女達の希望もあつて潜伏しているよ。機動と偵察を重視したSMGとスナイパーを重点としている編成だから、連携は取りやすいと思う」

こちらからの質問に答えた後で、ハリーは端末のパネルを操作し幾人かの名前が表示されているボックスを開いた。

「こちらから本人達にも伝達するけど、今後は偵察部隊は『チャーリーチーム』、こちらから追加で現地に送り込む多目的作戦部隊として『アルファチーム』、そして戦車などの

兵器に対応することをベースとする『ブラボーチーム』を編成した。それぞれ、自分達で確認してくれ」

ローガンもホログラムで浮かび上がった編成を見るために何歩か引いて確認した。他に招集されている人形達もアワアワしたり慣れてるように落ち着いて見渡しており反応は様々だ。

そして浮かび上がった編成は以下の通りである。

まずアルファだが、こちらは何事にも柔軟に対応できるような面子で組み合わされている。隊長として79式。隊員には95式、グリズリー、Kar98k、K2である。さすがに戦車などの重装甲には足止め程度しかできないように思えるが、それでも幅広く歩兵には対応できる。隊長にしている79式は性格も相まって相応しいと言えるだろう。

そしてブラボー。こちらの方に自分の名前があった。隊員はローガン、トンプソン、ペチエネグ^P、MG5、PTRDである。マシンガンやスナイパーライフルを基本としていたため機動力は落ちるが、装甲に貫通させるには高火力で押し切るしかない故の組み合わせだ。対戦車ライフルのPTRDに、高レベルのマシンガンであることで有名の二人、そして敵の攻撃をフォースシールドで防げるトンプソン。どこまで通用するかどうかはわからないが、現時点で最善な編成としてはこれなのかもしれない。ただ一つだけ

問題がある。それは――。

「ちよつと待つてくれハリー。なんでブラボーのリーダーが俺なんだ……？」

「適材適所、つて言葉は知つていゝよねローガン？」

冷や汗をダラダラと流すローガンにハリーが笑顔で返してくる。そう、隊長と定める隊員には名前が太枠で囲まれているのだが、ブラボーの他の人形達の名前にはついておらず、ローガンの名前の所にしっかりと付いているのだ。

正直なところ、ローガンの人形に対しての接点が厚いところがあれば逆のところもある。この基地で代表的なAR小隊との綿密な関わりを持つことから注目され、明るくフレンドリーな性格の持ち主である人形達とは食事や酒、又は演習で知り合えてきた。酒を飲み交わす人形達からの紹介もあつて幅が広く、銃のカテゴリを問わず、である。

だが逆にどうか、人間関係と同じく芳しくないものもあるのだ。それならいい例として、同じ隊にいるペチエネグがそうだ。基地内で彼女は他の人形を見下すような台詞が多いらしく、良い話はほとんど聞かない。口だけでなく実力は本物ではあることは訓練中で知つてはいるが、彼女と組んだ中で仲の良い人形も見なかったことなのである。

「それじゃ指揮官、一つ聞かせてもらおうか。こいつをワタシ達の隊のリーダーにした理由は何だ？人間であるこんなウスノ口を懇意にするのは勝手だが、作戦にそんな友情関係を用いられたら迷惑でしかない」

そう言いながらペチエネグはこちらに歩いて来て、その鋭い瞳で睨んでくる。青筋を額に浮かべ、こちらに指をさしながら言葉を重ねた。

「どうか、こんな奴のどこが信用できるんだか納得できる説明をしろ。使える使えない以前に、こんな奴を動員するメリットがワタシにはわからない」

当の本人から鋭い視線と一緒に胸に突き刺さるワードを受けて少々ローガンは渋い顔になってしまった。グローザに指摘されてからわかつていたことではあったが、さすがに彼女以外にもそのようにストレートに言われると来るものがある。あれから考えてみてもキリがないとして脇に置いていたが、やはり戦術人形達の自分への懐疑心を持たれても仕方なかった。

ローガン・ブラックという人間がグリフィンに加入した途端、まだ正式な隊員はいないが隊長の座に権限まで得ているのだ。実力も正確に測れない新入りが着任したのは、自分達よりも上の立場で、上司になったようなもの。人間や人形も関係なく、疑いを持たれても不思議ではない、必然だ。

他の人形達の視線が自分に向けられるのを感じながら、ローガンは明後日の方向も何も見ることが出来なかった。というよりも、どこに逃げることもできない。ローガンではなく指揮官のハリーに向けられた問いかけだというのに、自身の価値を問われているように仕方なかった。

「……うん、まあ君たちの気持ちはわからなくはないよ。というよりも、ローガンが僕達に力を貸すと言ってくれた時からこうなることは覚悟していたからね」

だがこちらの心情とは違い、ハリーは笑顔だった。

「じゃあ一つずつ説明するよ。ローガンを動員する訳としては、僕がいる本部との連絡が何かしらかの事故で出来なくなつた場合は現場指揮官として起用できるというのがある。本人にも、隊長としての経歴があるらしいしね」

その返答の一言にローガンは心中で『なんじゃそりやあああああ?!』と叫んだ。隊長としての経験はないわけではないが、ハリーにはそこまで話したことはない。やはり、隊員として現場での指示に従っていた方が長いのだ。それだというのに、万が一のことがあつた時の現場指揮官、ということにローガンは心の中であんぐりと口を開けた。

それを他所に、ペチエネグは質問を続ける。

「何かしらかの事故が起こる?ならそれを無くすようにすればいいだろうが。完全になくすことはできなくとも、それに近づけることならあなたにはできるだろう!」

「たしかにね。でもそれができるようになるのはいつの事なのかな。明日、一週間後、一カ月後?それとも一年か十年後かな?……ペチエネグ、僕にだってできることとできないことはやっぱりあるんだよ。事故とか望まないことが起きる可能性がもし『0』に

できたのだとしても、それは完全な『0』じゃない。確率では小数点を四捨五入して『0』
になっているだけで、その数字がどこかの要因で狂えば容易に『1』にだってなるんだ。
勿論、努力はしてそうならないようにする。でもそれを実現するまでの第二のプラ
ン、現地で直接戦場を目にして指示を出せる人間として、ローガンを今回取り入れた
かった。すぐには僕と同じように指示は出せないだろうけど、それでもいつかは出来る
筈だよ。テロリストだけでなく鉄血との戦いに生き残ってきたローガン、ならね」

こじつけのようにも感じるが、言ってることは間違っていない。

例えば仕事用に筆記用具を用意するとして、ペンの一本をいつも持ち歩くケースに入
れておき、もう一本を服のポケットに予備として取っておく。メインに使うのはケース
に入れておいた方で、忘れずに持ち出せたのならいい。必要なかったわ、といって笑
話で済めばいいのだから。だがもし、ペンを必要とする時にそのケースを忘れてしまっ
た、失くしてしまったらどうだろうか。ペン程度なら仕事場にあるのかもしれないが、
ひよつとしたらないことだってあり得る。水性か油性かのインクの質、色など、必要と
している要素が一致していない場合はどうすればいい？そのような時の為に、もう一本
のペンを、予防策を取っておくのである。

それは勉強や事務仕事だったりとあまり変わらない。重要な作戦であればプランA
の他にBを用意したりと万が一の為に備えておくものだ。

ローガン自身の意思や能力は置いといて、ハリーが言ってるのはそういう事であった。

「それに君達も知っている404小隊の隊長の45の話だけだね、ローガンは彼女と協力しながらであったけど、過去に戦車を相手にして勝ったことがあるんだよ」

皆が『えっ』と驚愕する一方で、ローガンは『げっ』と顔を歪めた。

「RPGや重火器がない中で、どうやって相手にしたのか。僕としてもそれが気になるところだけ……ローガン、どうやったんだい？」

「……スモークを45が使ったことでこっちの居場所を見失ったんだ。その隙をついて、砲身にフラグを投げ込んだ。そうすれば砲塔の中で爆発した拳銃、砲弾にも着火すると思ったからな」

「それでどうなったんだい。目論み通りに倒せたのかな？」

「予想の斜め上だったよ。その場で吹き飛ぶのかと思いきや、坂道で後ろの方に斜めになつていたのでから、一回爆発した後でそっちの方に吹っ飛んで木端微塵さ」

あの時はよく生き残ったものだと思う。うまくいくかどうかは賭けであったが、運気はこちらの方に味方したらしく特に派手な怪我をすることなく倒すことが出来た。鉄血兵が人間の兵器を使用することに危機感を覚え、これが今後ないようにと思ひ、やけっぱちになりながらの即興の作戦行動であった。45は成功した後には呆然とし、何か

が吹っ切れたように笑っていたが、あの時の自分は腰から力が抜けてその場に座り込んだ。本来なら投降するのが筋だろうが、相手は鉄血であるため緊張感を一時忘れて無我夢中で行動していたのだから。

「それがローガンをブラボーチームのリーダーにした最大の理由さ、ペチエネグ。今ほどの充実した装備がなくとも、ローガンはその場にあるものを使って最大限に戦うよ。勇気と無謀は紙一重というように、無茶することだって時には別の何かに置き換えられることだってある。それとさ……」

ペチエネグに近付いたハリーの雰囲気が変わる。ローガンも見たことがない、笑顔を浮かべながらも静かに怒っている時の表情で。

「こういう作戦には絶対に信用できる人員で行うことを僕は念頭にしているんだ。そこに友情は関係ないよ、あくまで仕事だからね。支援をする時に融通を利かせる際に働かせることはあっても、そこはかわらない。それにさ、親友の悪口を言われて僕が何も思わないような臆病者だと思ukai?」

最後は自分の為に怒ってくれているというのに、なぜか全く喜ばしい感情が湧いてこない。それどころか、別の意味が含まれているような気もしてくる。プラス思考ではなくマイナスに大きく振り切られ、体温までもが下がっていくような錯覚までも覚えてきた。

普段は強気な態度であろう戦術人形もその迫力に押され、何も言えなくなったようにタジタジになっていた。さきほどは自分が悪いように言われたが、流石にこうなるとフォローをどうにか入れてやった方が良さだろうと思う。だがなにをどういうか、知らぬ間に毛糸のようにこんがらがっていた思考を解き解そうとするが時間を要することは避けられない。

そんな時だった、思わぬ助け舟が来たのは。

「すみません、失礼します」

コンコンツと指令室の扉が三回ノックされて入ってきたのはグローザだった。長い髪を揺らしながら入ってきた彼女はまっすぐハリリーの所へと歩いていき、歩数で言うなら彼女の歩幅で三步程の距離で立ち止まる。

「ハリー指揮官、今回の作戦ですが私も参加させてください」

「君が参加するのかい？ヘリアンさんからも『本人が望むのなら、どんな任務に就かせても良い』と言われてたけどもちよつとな……」

「大丈夫です、あくまで私は彼、ローガン・ブラックの補佐として動きます」

思わぬ台詞に純粋にローガンは驚いて思わず声が出そうになった。

「……それで、どういった風の吹き回しだよ。あれだけ毒を吐いておきながら俺の部隊に入るって」

グローザがローガンが率いることになったブラボーチームに加わることに本人から提案されたときは、出撃コストに関して問題があるのかと思ったが、ハリーがそれをなした。前述したように、グリフィンでは一部隊につき『小隊』を最大規模として編成している。ダミーも含めた定員以上にならないければいいと言うのであれば、ダミーを扱えないローガンがいることでその分の人数の空きが四人空いているので問題ないということになる。滅茶苦茶、というより揚げ足を取っているように思えるのかもしれないが、元々軍隊ではダミーなどといった分身はない。全員が真正正銘、人生という過程で得た経験を積み重ねてきた人間であって、取って代わられる変わり身ではない。そうして

考えれば、空いたダミーの四人のうちの枠の一つにグローザが入ることになった。ただし、ローガンの作戦行動の補佐になることに加えて、戦車などの兵器を正面から相手にはできないので隠密行動になる。機動性が問われてゾロゾロと引き連れるわけにはいかなのでグローザのダミーは連れて行かないという条件付きだ。

それからほとんどん拍子で話が進んだ。ペチエネグもそれ以上食い下がることなく、結果的には了承したということになった。

ここからの出立は今から一時間後、06:00ということになりチームそれぞれで集まって準備したり、フォーメーションを組んだりの確認するために弾薬庫に一旦集まっている。

アルファチームが別の机でマガジンに弾薬を込めているのは別のところで、ローガンをはじめとしたブラボーチームも同様の作業を開始。ハニーバジャーのマガジンの一つ目に込め終わったので二つ目のに移行した。いつもやり慣れている作業ではあるが、今回は違って隣に本部のエリートが座っている。

訝しげに問うたローガンの問いかけに、グローザはこちらを見ずに答えた。

「今回の作戦であなたの実力を測りたいから、というのが大本ね。本当にそれを過去にやってのけたのなら今回もできるんじゃないかっていう期待もあるのだけれど、あれは本当の事？」

「……まあ、嘘は言っていないな。ただ、操作に関しては手探り状態で何とか動かしているような状況だったんだ。でもまあやっぱり油断はできなかつた、何発か撃ち込まれたし」

「よく生きてたわね」

「我ながら本当だよ。んで、どうなんだよ。話が逸らされそうになつたけどよ」

二本目も終わり、三本目に移る。『ハニーバジャー』の弾倉はあと三つあり、他にもサイドアームとして使い続けてきた『P226』のマガジンもある。メンテナンスは日々やっていてちょうど昨晚したので、あとで簡易的にするだけでいいだろう。そう思いながら、マガジンを取ってグローザの方をジロリと見た。

こちらの視線を他所に、彼女はどこを吹く風と言つたように迅速にマガジンに弾薬を込めている。

「……昨日、スオミの言つたことを覚えてるかしら。『ぶつかっている壁を迂回してなかつたことになんかできない』ってことを」

「ああ、覚えてる。『最良の結果を得るには、逃げているばかりじゃいけない』……お前が言つてることもそれに該当しているよな」

「ええ、あの子があそこまで考えて行動を起こしていたなんて思わなかつた。人間の死に立ち会つて悲しみを覚えても、すぐに前に進むことを選ぶ人形というのは多いようで

実際は少ないのよ。スオミはその少数派の一人に見えて、実際は多数派の方に入ってる。それでも、誰かに触発されて立ち直るといえるのは私が見た中で一人もいなかったから……」

「……話が見えてこないぞ。結局、お前は何を言いたいんだ」

手が少々疲れたため、三本目の途中で一旦手を止める。手首を回したり、グーとパーに掌を開いたり閉じたりしてストレッチ紛いのことを行う。親指の付け根辺りを片手でぐりぐりと力を込めた状態でこねて、疲れた筋肉を解ほぐしたりもしてみる。

スオミの言っていたことだと思うことがあるのであれば、ローガンも同じだ。ただし、それがグローザと一緒にではないとは限らないが。

「……簡単な話、スオミの姿勢を見習おうと思っただけよ。あの子は拒否し続けるんじゃない、受け入れて前に進む糧にした。私にだって足掻き続けながらも逃げ続けているのがあるから。なんだそんなことか、て思う？」

ヘリアンとも初対面の時はローガンに否定的な意見をぶつけていたというのに、グローザから聞かれることがないだろうと考えていた彼女自身の思考の問題。

自分の考えを口にし、それに対してどう感じるか。たったそれだけではあるが、心にじわりと沁みてくるのを感じながら口を開く。

「別に思わないさ。それに間違っていないことなんざ、あいつ自身が証明してるだろ」

「そうね、あの子はたしかに自分で証明して見せた。でも私が知りたいたいのには正解か間違つてるといふことじゃないの。私自身がそのような選択をすることがおかしいかどうか、といふことよ」

「おかしいことはないんじゃないのか。人間つてのは全員が全員、自分で何もかも模索して生きてきたわけじゃない。何かをする前に、既にその道を通つて誰かのやり方を模倣したりすることだつてあるんだしな」

当たり前の話だが、赤子の頃から自分自身で考えて行動するといふのはできるわけではない。物心がつくまではほとんど自分では何もできないと言つた方が良いといふぐらい、人間の子供といふのは無垢だ。一からすべてを学ぶには、実際に例として上がつてゐるのを見習つた方が効率が良い。だからこれまで教科書などで数式などを学ぶときは、すぐ傍に実例があつたりして法則といつたルールを理解できた。

自分をもつとマシになれるように、前向きに生きていけるようにするために誰かの生き方から学ぶことはおかしなことではないとローガンは思う。技術を盗む、という風に参考に行ける何かがあるのであれば、それを自分に置き換えて活かす。生きていけば転換点となることなんて幾らでもあるのだから、その切つ掛けの一つとすることに悪く言う人はいないだろう。

「そうよね。あの人からも言われていたといふのに、まだ私は……」

「……グローザ？」

小声で言つてたこと聞き返そうと思つたが、何でもないという風に首を振られたため追及できなかつた。

首を傾げつつも再び作業に戻つたローガンは弾薬を込めていき、メインアームの分を終えた。次に『P226』の分と思ひ、机の上にのせている別の弾薬箱を手元に引つ張り、数発を右手に掴むと反対の手に持つたマガジンに一発ずつ詰め込んだ。単調である為、中弛みがどこかで起きそうになるがこの後の実戦の事を考えて気を緩めないように努める。

「私はまだ、現代の戦地にあなただが踏み入るだけの余白はないと思つた。戦術人形の仕事はなくなるからとか、存在意義が揺らぐからじゃなくて。腕が立つのはこの間のカーチェイスで見させてもらったけど、あれならまだ軽量装備の人形ならできることよ。でも、他の誰にもできないことができるのであれば付け入る隙はあるのかもしれないわね」

「最後の台詞だけど、それは助言つていうんだぞ。お前、前から随分と高圧的に言つてたのに今の発言で矛盾が混ざつてるのに気付いてるか？」

ローガンからの指摘に気付いたグローザははつとしたようにして考え込み始める。ぶつぶつと呟き始めた彼女を尻目に、ローガンは弾込めを続けていき、サイドアームの

P2226のも終了させた。一通りの銃器の準備を済ませたローガンは椅子から立ち上がり、机の上に重ねていた『ハニーバジャー』のマガジンを防弾ベストの正面ポケットに、『P2226』のも脇腹のスペースに収納させる。持っていく投擲物で毎度お馴染み、スモークグレネードに手を掛けようとした時だった。

「よう。こっちはもういつでもいいが、そっちはどうよう？」

「もう少しだ。マガジンはもう良いから、あとは対戦車用装備とか色々な。現地で敵から拝借できたならそれもいいが、あまり期待して当てにしない方がいい」

「それもそうだ、準備段階で持つて行けるのならその方がいい。もう少しでマシンガンの奴らも来るはずだから最終チェックまで待機してるさ。それと爆薬とかで必要なのがあったら後で教えてくれ。私も準備は手伝うさ」

「すまん、助かる。とはいってもここからもつて行けるのはC4ぐらいだし、あとはもういいや。全員揃うまで待つてくれ」

トンプソンが別部屋で終えたらしく、自分と同じ名前の小銃を近くに立て掛けると、アルファチームの方にも声を掛けに歩いていく。

ローガンは改めてスモークグレネードを数個取るとサイドバックやウエストポーチに入れておき、久しぶりに手に取る気がするC4爆弾も入れておく。これらに関しては何トンプソンやグローザにも、敵に接近をすることになるだろう人形達にも持たせた方が

良いだろうということで、後で現地に持ち込む軍用バッグを用意しておいた。

本来であれば対戦車ミサイルも持って行きたいところだが、さすがにこの武器庫には置かれていなかった。そのかわり、対戦車ライフルとして名を刻んでいるPTRDが部隊にいる為、まだいいだろう。マシンガンのペチエネグやMG5もいるので、戦闘へりに対しても後れを取ることはあまり考えられない。もし入手できそうなのであれば、現地で敵から奪う手段も検討しておくことにしよう。

「すまないローガン、遅れてしまったか？」

「別に大丈夫だ。アルファと一緒にトンプソンも最後の打ち合わせで待つてるから、お前達も来たんだし始めるとしようか」

ローガンは銃のメンテを終えたグローザを呼ぼうと思い、ついさっきまで作業していた机の方を見たが当の本人はいつの間にかトンプソンに連れられてアルファの方に向かっていった。グローザ本人としては当惑した様子であり、片手を笑顔のトンプソンに掴まれている。

よくもまあ、つんけんしている彼女に遠慮なくできるもんなんだな、と思いつながらローガンはダム周辺を拡大して写した地図を中心に広げている会議机の前に立った。

グリフィンに来て大々的な作戦に参加する、というのは今回が初めてだなと今更ながら気付いた。今のところ、偵察やVIP回収任務で少人数、もしくは単独での作戦行動

でしかやっていない。ここにきてからどれもこれも生易しいと思った仕事はないが、今回は内容もあって難易度が跳ね上がっている。今までは主に鉄血兵の相手にするにしても、戦車のような装甲車両の相手を主目的としたことはない。ハードル高いなどは感じるが、勝ち筋が全くないわけではないだろう。自分は人間ではあるが、射撃や思考だけでなく身体能力云々が秀でている戦術人形が味方としているのだ。油断大敵でそれで慢心しているわけではないが、心強い味方がいるという意識は持てる。

「さて……まあハリーから言われているしこつちから特に打ち合わせることはないと思うが、一応確認だけはしておこう。アルファのリーダーは79式だったな、進行してくれるか？」

「わかりました。まずアルファですが、こちらはまず情報収集として現地にいる兵士を捕え、尋問を開始。それを指揮官に報告し、プロフェットダムの機能を損なわせるものであれば相手の行動阻止に動きます。なにか相違点はありますか？」

適切な声量ではきはきとした声だったので全員の耳に届いているだろう。それに話していた内容としても簡易的ではあるが合っている。

アルファは全体的にバランスを取った編成なので遊撃的に行動することになる。現場での情報収集を始めとして、向こうで確認されている部隊が友好的でないのであれば直接妨害・阻止することになるのがアルファチームだ。

「ローガンさんのブラボーですが、こちらはチャリーと合流しての任務になりますね。現地に到着次第、ターゲットとなる車両の車列の位置を確認。私達から伝えられた情報で指揮官からゴーサインが出た場合は破壊作業を開始してください。攻撃手段はローガンさんからの指示になります」

そしてローガンもいるブラボーチーム。戦車や高確率で追加で相手にすることになるであろう戦闘ヘリも含めた隊列の相手になるのだが、人数差もある為本格的に撃ち合いいになる前に無力化させる必要がある。飛んでいるヘリの撃墜は見つかる前の時点ではできないので諦めるしかないが、戦車であればまだできなくもない。歩兵の数も可能な限り隠密で、といきたいところだが難しいだろう。夜間であればともかく、作戦を開始するのは太陽も昇っている真昼間だ。

「やっぱり難しいかなあ……」

そう誰かが呟いたが、ローガンはある一つの策を弾薬庫に移動している間に思いついていた。

「俺が奴等に成りすます、てのはどうだ？」

全員が口を小さく、目も驚きで見開いてこちらを見てくる。ローガンはニヤリと口角を上げながら全員を見渡した。

「潜入任務の手段の一つだが、この手段を取ってもいいだろう。俺が向こうの服を奪つ

て車列に加わり、隙があれば戦車に爆弾を仕掛けるなり歩兵の人数を減らす。ロケットランチャーがあれば手っ取り早い、C4しかないらしいしどうしたもんかと思つていたがこれならいけると思う。どうだ？」

「なるほど……でも危ない綱渡りです、大丈夫なんですか？ 注意を怠つて発見された場合は……」

「歩兵つていう立場を変えずにスクラップにしなければならぬんだ、その時点で無茶だよ。もしもの場合は、バックアップとしてグローザとかトンプソンに近くに潜んでいってもらうさ」

79式の言う通り、たしかに危ない綱渡りだ。それに発見された場合は即座に撃たれてしまつてもおかしくない。変装して近付くのであれば、自然に溶け込めるようにしなければならなかつたり課題は山積みである。

しかしこれ以外に確実性を持たせる方法はほとんどないだろう、とローガンは考えている。戦車への攻撃手段は他にないわけではないが、それではどうしても銃声を発したりとやりにくくなつてしまう。それであれば、銃声を発してしまつた後でそちらに注意が逸れている間にローガンが爆弾を取り付けてしまつたりした方がいいだろう。これであれば、自分がしくじらない限り幾らでもやりようがある。

『シャドー隊』の隊長としてでも、隠密能力が問われるわけですね、ローガンさん。直

接そのお手前を拝見することはできませんが、成功を祈つてますわ」

「そいつはどうも……といたいところだが、物質的な問題もある。接近しC4を仕掛けるにしても、一度に持ち出せる量は限られてるから、下手に持ち込み過ぎれば目立つてしまつて問い詰められること待つたなしだ」

「それなら私もやるわ。一台か二台だけでも破壊できれば全体的にそつちに意識が向けられて行軍が止まる筈よ。そうすれば、私とトンプソンが多少は動きやすくなる」

「ああ、その通りだな。当初はバックアップで近くに隠れているが、うまくいった場合はグローザの言うとおりに動こう。サプレッサーの銃で歩兵を排除しながらであればいけるだろ」

頭を捻りながら地図に視線を落としていたところで、グローザからの救済案が提示された。

咄嗟に彼女を見てみると、無然とした様子で腕を組んでこちらを睨んでいた。

「本来なら止めるべきなんでしょうけど……まあ仕方ないわ、他に方法はないのだしね。それに指揮官にあなたの『補佐』を命じられているのだし、可能な限り近くにいないといけないのだから」

「……そうかい。なら、二人にも頼むとする。これならまあ、戦車への対策はいいだろう」

「私達やPTRDはどうすればいい？機動性がローガン達ほどよくないからついていくことは難しいから、掃射できるように有効射程を意識しつつ場所取りをした方が良いでしょうか？」

「そうだな、MG5とペチエネグは中距離での掃射で、PTRDは高台のような高所からの狙撃だな。さすがにこの周辺地図だけじゃ地形が把握しきれないから、現地に着き次第それぞれのポイントを探ることもしようか」

「了解だ」

マシンガンのMG5と彼女の横でぶすつとした顔をしているペチエネグ、そしていざという時の戦車に対しての切り札であるPTRD。

このチームからの犠牲がないようにする、これはローガンとしても作戦遂行で第一としている。時には払ってでもやり遂げなければならぬが、誰もそれを心から望まないだろう。

「さて、出発まであと二十分です。それぞれでまだやり残していることがあるのであれば、時間内に終わらせてください」

その79式の一言で解散し、各々が銃器や装備を手にとって身に着けていく。

ホルスターに『P226』を入れ、ストラップを首から肩にかけて『ハニーバジャー』を脇に下げた。そしてC4やスモークなどを持ち出す様にグローザとトンプソンに

言った後で、ローガンは基地内のとある部屋に向かった。

「まあ、そりゃあそうだよな……」

足に向けた先は自分のデスクもあるAR小隊の執務室。ここに来る間も数人の戦術人形達とすれ違ったが、どの顔もローガンがあまり合わせたことのないものだった。

執務室内もまだ誰も来ておらず、静寂だけがそこに満ちていた。しーんとした室内だというのに、そこから笑顔や笑い声などといった記憶が甦ってくる。自覚しているほど、愛おしく思えるその温度も。

作戦が間近に迫っているのだから感傷に浸っている場合ではないし、ここには用事で

来ているのだということ振振り払った。自分のデスクにさきほどのブリーフィングや昨日の考察でコンピューターに挿し込んだ記録媒体を損傷したり紛失しないように、デスクの引き出しの中に仕舞おうということまでここまで来たのである。時間もそこまで残されていない。

「ん……？」

ローガンはそれを手に、自分のデスクにまで歩いていき手を掛けようとしていたところで一つ気付いた。昨日の仕事を終えるまで、置いていない筈のものが二つ、そこにあったのである。

一つはローガンが作戦行動でいつも被っているニット帽だ。一日目のパトロールを終えた際に、AR15によって洗濯するということで没収されていた。いつも見慣れているそれは小奇麗になっているどころか、きちんと洗われたらしく目に見えるような汚れも見えない。元々から全体が黒で目立ちにくいのだが、それでも土や埃がついているのであれば一目でわかる。つく度にローガンも取っていたのだが、どうしても取り切れないのもあったのである。それが今では綺麗になくなっていった。

そしてもう一つ、これに関しては見覚えがない。見た目としては黒く縁どられており蒼天、といった春の青空を思わせる明るい色で形作られた輪っかだ。大きさから手首に付けるものではなく、近くには布地に止めるためのピンがある。

手に取ってみて納得したが、以前ARR15が話していた腕章だった。仕事部屋としてこちらに割り当てられた際に、ARR小隊がローガンに贈り物として用意していた品である。彼女によれば、当日に間に合わず後日となっていたので忘れかけていたが、昨日ローガンがここを後にした時に届いたらしい。丁寧に作られており、ARR小隊の全員がつけているのほとんど変わりが無い。

それにしても何故、こちらに届くのが遅れたのだろうか、とふと思う。出来はたしかだが、これを作るのに十分な期間があつたのではないだろうかとも。

そう思いながら何気なく腕章をひっくり返してみたところで、今しがた湧いていた疑問は溶け去つた。これを注文したのはARR小隊であり他の隊といったグループではない。だがそれは発注した時の話であり、製作過程の途中で追加で変更や追加注文があつたりした場合は多少話が変わってくる。つまり、ARR15達ではない誰かがこの腕章のデザインにちよつとした『オーダー』をしたのである。

「つたく、あいつらめ……」

ふつと息を吐き、それらの部隊章を見たことにより口元が緩む。

これを見た時のARR小隊の反応としてはどうだつただろうかと想像してみる。きつと、純粹に驚いたり、やられたと額に手を当てたり、全然違うではないかと怒つたりしていたのかもしれない。だがローガンからすれば一番気になるのはARR15のだ。

そういうえば、と思ひ出す。昨晚パトロールから帰還したA R 15とも夕食を取ろうと思ひ、食堂のテーブル席の一角をM4と一緒に陣取つていたあの時。談笑して他のA R小隊の面子を待つていて彼女達が来たのはいいが、A R 15が一目見てもわかるぐらい、近寄りがたいオーラを発していた。S O P I Iがぶんすこと頬を膨らませているのがまだ（元からそうだが）かわいらしく思うぐらい、である。なにかあつたのかと声を掛けようとしたが、ギロリと蛇どころかクマよりも恐ろしい動物に睨まれたようだった。以前45と指令書を間に挟んで問答を繰り返して来たあの恐ろしさ以上のそれに、すぐにローガンは口を閉じたが何が原因なのかさっぱりだった。近くを通りかかった45と9のペアにも同様、というかそれ以上の睨みを利かせていたが、妹は慄いていても姉の方はどこを吹く風。無かつたようにしてA R 15に『今日もお疲れ様』と言つた後でこちらになつこりと笑いかけてきた。

「恐ろしいもんだな……」

再度の蛇ならぬ龍睨みを思ひ出し、やれやれとローガンは時間を確認する。あと十分でヘリが離陸する時刻になるだけの時刻になつていた。

「行くか……」

当初の通り機の引き出しに記録媒体を入れておき、ニット帽とその腕章を掴む。ニット帽は被り、腕章はつけずに何も収納していないサイドバックのポケットに入れて

チャックを掛けておく。

現地に着き、もし相手方がこちらに害成すのであれば話し合つた通りに行動することになる。そうなれば、今身に着けている銃や防弾ベストなど装備を一旦すべて外して敵となつた歩兵の軍服を着なければならぬ。だから、腕章を今つけても無駄になつてしまふ。それを言つたらニット帽やスカルマスクも目立つことも考えられるので外さなければならぬが、この新品の腕章だけは今は良い意味で身に着けたくなかつた。

——作戦を終えて帰つたら、あいつらに礼を言わないとだな——

今から飛び込むことになるのは博打にも近い、銃弾が飛び交うことになるかもしれない戦地だというのに、気分はスキップすることが頭に浮かぶぐらい軽くなつた。

軍人としてそれはよろしくないだろう。

それでも友人達からの贈り物に嬉しく思うことのどこが悪いのだろうか、胸に抱きながらローガンは朝の廊下を歩いていった。

25. 廻る現実 — P a i n i n t h e c h e s

t —

十月半ばになればもう青々とした葉はなく、雑草の色も生き生きとしたそれでもなくなり、枯れ草が目に見えて多くなってくる。以前にA R小隊の救助に立ち入った森林に負けず劣らずで木々が生えているが、数の話であつて大きさは負けているだろう。その中でローガンは匍匐姿勢で『P 2 2 6』とナイフに手を掛けていた。視線の先には、口笛を吹いて上機嫌そうに用を足しているバラクラバの兵士が一人。

すぐ近くにはグローザが、その兵士を挟んだ逆側にはトンプソンが待機している。

「アルファ、尋問に時間がかかりすぎよ。あと少しで十分になる」

「落ち着けよ、グローザ。口が固い奴を捕らえて手間がかかっているのかもしれないだろ」
グローザが無線機に急くようにしてそう呼び掛ける。

ローガン達がダムに近い辺で到着しようとした時、チャーリーからの報告がプロフェットを通じて伝えられた。ブリーフィングで説明されていた未確認部隊がダムに到達し、全部隊を展開させて何かしらかの作業を始めたということである。

作戦開始前はダムの近辺でヘリから降下することだったが、相手方の戦闘ヘリの存在

も相まって距離や方角も大きくズレたポイントにて作戦を開始した。その影響によるタイムロスも大きい。

なので、グローザはここまでピリピリしているのだ。

アルファに当たることは場違いではあることは彼女もわかっているだろう。本人に自覚はないのかもしれないが、口調がキツイものだったので一応注意しておく。

余計なことをしてこちらの存在が悟られないようにするために、今の時点では慎重に動かなければならない。

『こちらチャリーのSV98。ブラボーリーダー、そちらのPTRDとの混合のスナイパーチームは配置に着きました。指示があればいつでもいけます』

「よし、しばしそのまま待機。なにか大きな動きがあれば教えてくれ」
『了解』

こちらに未確認部隊の進軍状況を報告した後で、スナイパーの人数は狙撃ポイントを割り出し、サブマシンガンの彼女達はローガン達に合流を測ってくれていた。

降下して79式をはじめとしたアルファと別れ、合流したチャリーとは無線で具体的な作戦内容を伝えてはいたが、そこからはなにもこちらからは口出ししていない。戦術の組み立ての一環として地形把握を実際に自分の目でしておきたかったというのもあり、対応すべき部隊がどのような様相かを全体的に見ておきたかったからだ。決し

て、先んじて偵察部隊として現地にいたチャーリーチームの彼女達を信じていないわけではない。

しかしダムに到達されてから目的がはつきりしていない以上はゆつたりとしていられなくなった。迅速に行動すべきということでローガンはブラボーも一旦分断し、動きが素早く機動性のある人形を引き連れ、歩兵が集まっているエリアを双眼鏡で見定めてそこに向かった。マシンガンのMG5とペチエネグはスナイパーチームの援護が届く、ダムの側方の木々に身を隠しながら待機。そして件のスナイパーチームはそれよりも高所でありつつも対角線を結べる位置取りである。

忘れそうになるがダムというのは利水できるようにするだけでなく、水力発電や治水などの役目も果たしている。肉眼で見てもわかるほど歪曲しているそのダムも大きく、北アメリカ支部のグリフィンの保護区域の水を供給できているのにも納得できるほどのものだ。

もしここが、機能停止どころじゃない話になったら……。

ぼつぼつと湧いてくる嫌な想像が線を結んでいき、自然と眉間に皺が寄っていく。物音を立てることも極力抑えなければならぬこの状況で、ローガンは無性に自身の額に浮かぶ汗を拭きたくなりながらもじつと耐えた。

標的として定めている歩兵が用を足した後で煙草か何かを取り出し、一服し始めた時

だった。

『こちらアルファ一。プロフェット、並びに各員へ。捕虜への尋問の結果、未確認部隊の目的はダム機能不全と判明しました。詳しい手順までは知ることはできませんでしたが、何かしらかの工作を行うことが予想できます』

アルファチームのリーダーである、79式からの報告。それを聞いたローガンはナイフを静かに抜き、グローザの方を見る。彼女はこちらと目を合わせ、僅かに頷いた。

『了解した、アルファ一。全部隊へ、これより我々は未確認部隊を敵勢力とし対処する。何よりも優先すべき第一の目的として、彼らの企みを阻止。第二に、こちらに攻撃を仕掛ける者の制圧。それぞれの部隊のタスクはブリーフィングで取り決めた通りだ。現在時刻は08:41、作戦を開始。各自、発砲をはじめとした攻撃を許可する』

『了解』

各員からの応答が発せられ、ローガンもそう返しながら行動を開始。匍匐姿勢からしゃがんだ状態になって気を抜いている歩兵の背後へと足音を殺しながらゆっくりと歩く。あと二メートルになったところで飛びつき、口を覆いつつ歩兵の首を締め上げて酸素を取り入れられなくなった。

「……………?!?」

「朝っぱらからだが、良い夢を」

そう囁き、段々と抵抗力が弱まっていた歩兵が動かなくなるまで締め続けた。やがて動かなくなると一旦寝かせ、万が一を考えて抜いていたナイフを収納。それから周囲にいるグローザとトンブソンにハンドサインで集合の意を伝えた。

そしてその歩兵の軍服や防弾チョッキだけでなくブーツまでも剥ぎ取る作業に入る。「私を手伝うわ。あなたは早く装備を身に着けて。私はこいつのバッグにC4とスモークを詰め替える」

「わかった。トンブソン、周囲の警戒は頼んだぞ」
「任せとけ」

一通り剥ぎ取ったら自分の装備を変える。グリフィンに来てから一新された、軍用として使われる黒のシールドバッグにサイドバックやポーチ、各種マガジンが入ったままの防弾ベストまで脱いだところで手が止まった。一人の戦術人形が、こちらの方に体を向けながら作業をしているからである。

「……おおい、手伝ってもらってはいるけど、さすがに見られてちや着替えにくいから別方向を見ていくれませんか？」

「え……あつ、ごめんなさい……」

顔を上げた自分の先にいるローガンの事に気付いたグローザはこちらに背を向けて、引き続き迷彩色の軍用バッグに爆薬などを詰め込み始める。

素直に別方向を向いてくれたことに安堵しつつ、ローガンはホルスターや肘や膝に着けているパッドなども外し、紺色の戦闘服も脱いでインナー姿になった。

「うお……地味に風が冷てえ……」

秋に移行してきて体感で感じる風の温度も夏に比べればやはり格段に冷えてくる。それから逃げるようにして、ローガンは敵歩兵の迷彩服に袖を通した。ブーツも履き替えて、さつきとは逆の手順で装備を身に着けていく。

『追加で報告します。敵部隊の名は特にありませんが、複数の組織による混合部隊だそうですね。『オーナー』と呼ばれる人物からの依頼で寄せ集められたらしく、数としては歩兵数は約250ぐらいでチャャーリーからの偵察報告と大体一致しております。また『合流し先んじて出立せよ』との指令があつたようで、一週間ほど前から進軍していた、とも言っています』

『なるほど、妙に行動が早いと思つたらそういうことだったのか。情報分析の結果を待たずに進軍させて先手を取りやすくする、不安要素はあるが効率よく事を運ぶ手段としてはいい。それに混合部隊ということは……ブラボーリーダー、これらからするとやはり……』

「ああ、強奪事件の例の連中が関わっているんだろな。尋問記録で証言されていた通りなら、やっぱりダムデータのデータが奴らの手に渡っていると考えた方が良い」

自身を組織の下っ端として自嘲していたあの捕虜が言つてたことが正しいのであれば、ここにいる敵勢力は今回対立する敵とする中の総力ということになる。

先んじて夜間から偵察していたチャーリーは確認できなかったが、それぞれの戦闘服の柄や系統も違つてのことからもしやと思つていたが、複数の組織で構成されているのであれば納得がいく。今しがた気絶させたメジャーともいえる、全身を迷彩色で統一している歩兵の他にも、迷彩も何もないオリブグリーン、あまつさえ私服の上に防弾チョッキを身に着けている者もいるのだから。

それに79式からの報告から想像するに、あくまで共同で仕事をする、いわゆるビジネスとして肩を並べていることが考えうる。先の事件で捕虜の男が言つた通り、傭兵を雇うように報酬をちらつかせて集つていたのであれば、複数の組織の間に『信用』や『信頼』といった二文字はない。一触即発とは言わずとも、何かしらかのきつかけがあれば容易に崩れ去るのではないだろうか。

となれば幾らでもやりようがあるというものだ。

「スナイパーチーム。サイレンサーを取り着けている奴だけで良いが、こちらから出した合図と一緒に指定した兵士の狙撃を要請したい。できそうか？」

『ターゲットに対しての射線に問題がなければできませんが……何をするつもりです？』
「傭兵といった雇われ身の兵士であれば、報酬の取り合いに過敏な奴もいるし、そこまで

「じゃなくても執着は少なからずも人一倍はある。そんな奴らにとつて得することは何だと思ふ？」

『えくと……依頼の支払額が上々にさらに上乘せの仕事……』

「簡単な話だよ。依頼主から全体に支払われる額が既に決まっただけで、自分に渡される金の量を追加の仕事をせずに増やす方法だ。皆、なにかわかるか」

「難しく考え始めたSV98だけに限らず皆にローガンはヒントを出してやる。回線は全体に開かれていますので部隊や立場を問わずに全員に聞こえている筈だ。」

「カーキ色の防弾チョッキを身に着けたところで、付近にいる二人を見てみると、どちらも答えが分かったようにして自分を見ていた。そして、他から回答が出てこないというタイミングを見計らったのか、アルファ2の95式が答えた。」

『人数……報酬を受け取る側の自分の味方の人数が少なくなることで、ですか……?』

「その通り。今回の連中は本当にそうなのかどうかはわからないけど、これだけの人数に巨額である一定の額を用意するなんざ考えづらい。できるとすれば、国に従事しているお偉いさんぐらいじゃないのか」

『依頼主』の素性が分からない以上断定はできないけど、もし分配方式で報酬をもらうことになっているのであれば考えられるね。金の事で気を揉みながら銃を持っている兵士からすれば、別組織の人間が関わっていけば気がいられなくもなる』

「その思考にも発破をかける。最近の鉄血の企みに似せているようで癪でしかないが仕方ない。今は目を瞑るとして煽ってやるんだ」

『ハニーバジャー』や『P226』といった、ローガンが基地から持ち出している自分の銃ではなく、倒した兵士が脇に下げていた『MP5』を手に取って弾倉を確認。固定ストックのそのSMGについているアタッチメントはレッドドットサイトだけだが、自分の銃でないのだからそこまで気にする必要はない。アタッチメントであまり拡張されていないその銃のメンテナンスはそこそこされているのですぐに使えなくなることはないだろう。拳銃は米軍でも愛用されていた『ベレッタM92F』。ただ、こちらの方は使われた形跡が少ない上に手入れも疎かだ。弾倉を抜いた後にスライドを引いてみたが、内部に砂塵が混ざっていたりしていた。これでは発砲した際に動作不良を起こし、銃そのものが部品をそこらじゅうにばら撒きかねない。

「お膳立てはこつちです。そつちは引き金を引いて狙撃してくれればいいんだけど、それでいいか？」

『わかりました。それと一つ、こちらからも提案があります。好都合かどうかはわかりませんが、目的地に着いたことにより敵部隊は散開しています。それに合わせて戦車も周囲に展開しているのですが、手分けして順々に破壊できませんか？もちろん手順に従って、一輦の爆破はそちらにおまかせしますが、現場検証などが始まってしまえば長

くはもちません。適宜こちらにも援護します、ですから——」

「その前に速攻で片を付けようってことか。オーケー、元々は隊列を組んでいる状況を想定して考案していたんだ。それならこっちにも人員を回してもらえてやりやすくなる」

『ありがとうございます。プロフェット、周辺に展開している戦車部隊と歩兵の位置情報をこちらの端末にもお願いします。私達も一旦分かれてアサルトチームの援護をするのに最適な場所を割り出す必要があります』

『了解した。ただちに送信する』

情報によれば、ここにいる戦車の正確な数は四。奇襲をかけてこちらが有利なまま事を進めるには相手に分析を行わせないうよう、速攻で制圧しなければならぬ。となれば、こちらから先手を打つことは必須。

本来ならローガンがトロイの木馬として潜入し隙を生み出させるつもりだったが、変化した状況が状況だ。一輛ずつ相手にするようじゃ効率悪いし、頭が回る者がいた場合は短時間で対策を練られ待ち伏せされることだってあり得る。

「さて……アサルトチーム。プラン変更だ、各自集まってくれ」

グローザとトンブソンだけではない。チャーリーチームでSV98達の狙撃支援などをしていたSMGの人数も近くにいる。彼女達は今しがたローガンが倒した兵士が

いた戦車部隊の出方を見張ってもらっている。

C4爆弾やスモークといった、それに通じる武器の配給。それがまだ行われていない以上、本格的に戦わせるわけにもいかない。

さて、肝心の最初の一手はどうするか。

そう考えながらローガンはバラクラバを被り、ゴーグルを目元に取りつけた。

……拝借したバラクラバが煙草臭く、グローザによってしまわれた元の装備一式に戻りたいと心から思いながら。

「——つたく、さっさと隊列に戻れ。仕事しなきゃてめえの分け前もないと思いやが

れ」

加わった部隊の隊員達に軽い叱責を食らった後で漬け込める隙が無いか観察した。

装備は対して拝借したローガンのと大きな違いはないが、背中にロケットランチャーである『Mk153』がある兵士が二人。

そしてUAVからの熱画像を端末でも確認した通り、戦車を中心に円を描くように大体均等に距離を置いて辺りを見回っている。数はローガンも含めて八。現在ローガンは戦車の左後方で、ダムがある開けた方向とは真逆の位置に。

(見た感じ、なかなか難しいように見えるがそうでもないか……?)

フォーメーションだけでなく兵士一人一人を観察してみると、真面目そうに周囲に視線を向けていても、落ちた私物などを拾い上げようとする動作が緩慢だったりして気怠そうに見える。一週間の行軍がどのような具合だったのかは知らない。それがよっぽど厳しいものだったのか、それとも今こうして近くを歩いている兵士達が大了たことなのか。その判断も下せないが、気付けたことが一つだけある。

戦車部隊を囲っているのはローガンも含めた迷彩色の隊員だけでなく、オリーブグリーン色の兵士もいる。配置としては、戦車を縦に分断し片側の中心にいる二人をもう片側の二人と交換している。要するに、左後方にいるローガンの目の前にはオリーブグリーン色の兵士の二人がおり、左前方の先頭には同じ服装の兵士が一人いるということ

だ。そうなれば右側はこちらとは逆の配色となっている。

なぜこのような手間がかかる、面倒な配置にしているかの心当たりの要因は先程ローガン達で話し合った信用問題だろう。互いに互いを見張り合っており、不審な動きがあれば即座に問いたず。どちらにも有利不利などなく、人質としてお互いに銃口を突きつけ合っているようなものだ。

(なら、活路はここか……?)

狙うべき箇所を脳内で想定し起り得る可能性を考えてみる。

スーパーコンピュータではないローガンの脳内で実行した場合のシユミレーションをしてみると、やはり戦車の破壊が悩ましい所だ。ガラガラと駆動音を立てているこの要塞としては小さい戦闘車両を攻略するには、『誰にも気づかれない』というタスクを実行するには歩兵たちの内部分裂を誘発しなければならない。

今こうしてローガンの目の前を歩く二人にも、傭兵としてではなくとも人間として執着しているものは金じゃなくても一つはある。命綱が取り付けられていると頭では理解できても、無意識に身体を動かなくする原動力だ。命への執着である。報酬の為に足掻くのだとしても、命が惜しいわけではない。綱渡りを繰り返したことにより一般人や正規部隊の兵士より薄れていても、生物として自身の存亡に関わるほどの恐怖に駆られればさすがにパニックに陥る。

最も耐性をつけられてしまっていたらお終いだが、それに対応するのが今の自分の役目だろう。

ローガンは付近にいる者達に聞こえない程の音量で、バラクラバで隠れている耳元の無線機に話しかける。

「スナイパーチーム。こっちは誰が見ている？」

『チャーリー3のT5000です。狙撃要請ですか？』

「その通りだ。グローザの合図に合わせて、俺の逆側の中央二人を撃つてくれ……：……ていうか、俺が今どこにいるのか分かっているか？」

『……すいません、わかっていません』

それもそうだ。こちらを遠くから見ているだろう彼女にはわからなくても仕方ない。時には草木に隠れてしまっただけで見えなくなっていることだつてあるだろう。

『チャーリー3、敵戦車の近くでハンドライトでパッシングしているけどわかるかしら？』

『……はい、一際大きい木の枝の上ですね。こちらから推定で五メートルの高さはあると思いますが』

おや？、と思いローガンは汗を拭くように見せかけてやや見上げてみる。そこには枝の上にはしゃがんでバランスを保っているグローザが見えた。ここからでは見るところ

に少々困るが、長い間見つめるわけではなく、存在だけを確認したローガンはヘルメットを被り直し、無線に耳を傾ける。

『戦車部隊の進行方向、そつちからであれば見える中央二人の片付けをブラボーは頼んでいるの。できるかしら?』

『ターゲットがはつきりとしていたのであれば問題ありません。射程距離内でありまして、いつでもいけます』

「グローザ、お前達に合わせて俺も攪乱させる。他に円滑に進めれるようであればそつちの行動判断に任せるぞ。トンブソン、いざという時は頼む」

『了解』

『ああ、任せろ』

銃の安全装置が解除されているのを手の感触で確認する。サイレンサーがついていないのでローガンは極力発砲を控えなければならないが、この後の事を考えれば不審に思われることは無くさなければならぬ。例えば、本気で警戒して撃つ気がある、と見られるようにする、などだ。

声を発するのに、どのようなのが良いのかも確認済み。先程の叱責で言い訳をする前に知ったが、どうやらローガンによって戦闘服を頂戴された男は声を発することが難しかったらしい。持ち物の中にあつた、筆談用の紙とペンがあつて、既に文字が走り書き

で記されている紙面には簡単な挨拶などが書かれていた。

声を発つせないというのにタバコ吸つててよかったのか……？、と首を傾げたが、要はかすれ声を出せばいいのだ。それに都合が良い。多少違つていても彼らにとつての緊急事態になれば、そこまで気にする必要もすぐには出てこなくなる。

『三……二……一……！』

グローザのカウントが聞こえ、ゼロのタイミングで撃たれたらもう二人がバタリと倒れる音はキャタピラの音で掻き消された。ただ、戦車を挟んだ反対側のオリブグリーンの兵士が屈んだため、それが合図となる。

「伏せろ、伏せろ！」

近辺の兵士に聞こえる程度には声を発したその兵士に従い、全員がしゃがみ込んで警戒態勢に。歩く速度に合わせていた戦車も止まったことを確認しつつローガンも膝を折つて少々頭を竦めた。

「状況報告！なにがあつた!？」

「右翼側の二名がダウン……!！」

遺体を調べられればこちら側に不利となつて働いてしまう。グローザ達が指示した標的を撃つたわけだが、グローザとT5000が使用している弾薬の口径は違つている。それにグローザの銃では一発で仕留めるには威力が足りないので複数回命中させ

なければならぬ。アサルトライフルとスナイパーライフルによる、二人の死体につけられた弾痕の数と形状が大雑把にでも違うことを気付かれた場合、失敗とはいかずとも少々やりにくくなる。

それに、この場にいる兵士達の銃口にはサイレンサーといった消音器は付いていないこともある。

なので、そうなる前にローガンは行動を起こした。

わなわなと震えているようにし、その震える指先で目の届く範囲でいた反対側の兵士を指す。

「こ、こいつがなにかやった……！」

こちらの様子に気づいた、迷彩柄の兵士がローガンが発したかさねれ声を耳にした途端、目の色を変えた。怒りとは違い、爛々と目を輝かせている喜色に。

「おいてめえ、そこに膝をつけ！」

心境を悟られないようにする為に声を張り上げているが、その声色が目と同じ感情に染まっていることが窺えた。

その台詞を機にこの場に生まれた剣呑な雰囲気や遺体を中心に全員が集まり始める。戦車の左翼に展開していた、オリブグリーンの兵士も眼光を光らせながら仲間を庇いに向かった。

こちらに対する注意がノーマークになったタイミングを見計らい、ローガンは戦車のみならず皆の死角に潜りこんだ。

カーキ色のサイドバックから取り出したC4爆弾をキャタピラの駆動部に間隔を空けて二つ押し込む。戦車を攻略するのに設置個所を選ぶことを考えて、まず銃弾からの保護が薄い、装甲が施されていないことでここがまず思い浮かばれた。

もちろんこれだけでは破壊にまで至らないので他の箇所を設置しなければならぬ。破壊対象である『M1エイブラムス』という戦車の弱点となり得る箇所は背面も含まれるので候補としてしていたのだが、引き付けられている兵士達の位置が悪い。

少し考えたローガンはやむを得ないとして、見える範囲で有効打にすることが出来る箇所がないか目視で探そうとしていた時だった。

「おい、一体何がどうなってるんだよ?」

戦車のハッチが開かれ、搭乗員の兵士が外に出てきた。

反射的にローガンは身を屈めて気配を消し、自分が隠れてコソコソしていることが悟られないように動いた。幸いなことに、その兵士は集まっている兵士達の方に視線を固定し一直線にそちらの方に向かって行った。ハッチは、開かれたままである。当たり前前の話だが、戦車を運転しているのも人間で、正面を除いた外の事情の把握は遅れてしまう。警戒態勢になったとはいえ、まだ派手に銃撃戦が始まってないのであれば、搭乗員

の一人が確認に出てきても不思議ではない。

「今だ……！」

音を立てないように戦車の出っ張りに掴んで一気に体を引き上げる。ばれない様に上半身を屈ませ、砲身が回転することがないことを願いながらローガンはもう一つのC4爆弾を取り出して起爆の安全装置を解除。

さて……、とローガンは左耳の無線機を耳に押し付けた。

「グローザ、トンプソン、T5000。派手に花火を上げさせる、援護を頼んだぞ」

もしここでハッチが開かなければ、少々無理をしても歩兵たちの制圧を考えていた。速やかに抑え、背面にC4爆弾を設置し起爆。

だが悪運が働いたかどうかは定かではないが、こうして内部への直接攻撃が可能となった今じゃ幸運だと思ってしまう。

応答が返ってきたと同時にすぐに立ち上がって運転室に爆弾を投げ入れる。

「おいてめえ、なにしているよ！」

「とにかく撃て、あいつなにかおかしいぞ！」

銃声が轟き、銃弾がヘルメットを掠めた。だがこれで動きが止まってしまふほど、ローガンは経験を積んでいないわけではない。投げ入れた後で戦車から飛び降り、受け身を取ると反対方向へと走り出す。

ばこちらからも通達する、だが細かい確認は各自で行うようにしてくれ』

ローガンが左腕につけている端末を確認すると、たしかに細かく敵の動きが補足されている。青点で記されているのが自分達で、赤点で動いているのは敵兵だろう。指で画面を弾いてみれば、それぞれの青点が誰なのかも出てくる。

「アサルトチーム、行動開始だ。俺達チーム1はもう一輛を、チーム2は二輛にとりかかってくれ。俺達も余裕が出来たら支援でそっちに行く」

『了解。開戦がうまくいったのだから、ミスはするわけにはいかない』

「妙に気張りすぎるなよ、ベクター。スナイパーチームは手筈通りにこちらへの援護を重点に、マシンガン部隊は狙撃している彼女達の排除をしようとする奴等への掃射だ」

『了解です。さあ、ヒーローの登場ですよ！』

『任せろ。言われただけの仕事以上の事はやって見せるさ』

「こちらでも行動開始……その前に、ローガンはあるものを目当てに爆破跡の方に駆け出す。」

望み薄ではあるが、もし無事であればこちらからの攻撃手段の数が増える。そう思いながら、転がっている兵士の遺体を一つ一つを迅速に確かめた。

「何をしているの？ 充実した装備があるというのに、ハイエナのように欲しいものがあるわけ？」

「立派な戦略的行動だよ。さつき吹っ飛ばした戦車の周りにいた連中の中に、ロケットランチャーを担いでた奴が居た。そいつからもらって、今後の役に立てようと思ってるんだが……」

そうしていると、血の跡が雑草林の方に伸びているのを見つけた。死体の数を数えてみても六つしかなかったので、一人だけがまだ生きていたのだろう。

もしかしたらその者がローガンの目当ての物を所持しているのかもしれないが……。別の目的が生まれたローガンは近くに寄ってきたグローザになにも言わず、その血痕を追って行った。後ろから呼び止める声が追いかけてくるが、それよりも衝動的に湧いてきた思いだけがローガンの身体を動かす。

掻き分けていったその先に、一時の探し人はいた。泥や砂がついてはいるが、オリブグリーン製の戦闘服を着用しているのははっきりとわかる。それよりも、両脚が失われてそこから跡を引いていたのが敵であったが痛々しかった。

両脚を失った兵士、そう認識した途端、ローガンの胸中で同情的な感情が沸き上がる。包丁やナイフといった、鋭利な刃物で刺されたような鋭い痛みで歪んだ表情が隠れていたことに、ローガンは拝借したバラクラバとゴーグルに感謝した。

精神的な痛みには耐えるローガンによって見下ろされている兵士は、血だけでなく涙や鼻水でぐしゃぐしゃになったその顔を向けてきた。

「助けて、いや……殺してくれ……」

訳が分からなかったが心臓が跳ね上がった。何故だ、とローガンは自分に問いただす。

こいつは俺達の敵なのに、なぜこうして同情している？なぜ今感じる必要のない感傷を受けている？そしてなぜ、俺は記憶の中の誰かと重ねている？

状況は違えど俺に懇願している人を何度も見てきたから、M16が言つてた通りで優しすぎ、甘いのか……じゃあ、なんであいつとダブって見えている？五体満足ではないまま、目の前で死に絶える人を見たことがあまりないから？彼の傍に立つ誰にも看取られないから？それとも――。

「……ああ」

『MP5』のモードセレクターがシングルにしたローガンは、苦しみことがないように照準を額に定める。

「すまない、俺もそっち側に行けたらとも思うよ」

引き金を引いて発砲する。タアンツ！と久しぶりに使うSMGの反動は記憶の中にある体感よりも大人しかった。そして被弾したその兵士はバタリツと仰向けに上半身を倒して絶命する。

今がもう全て終わった後で、ここから状況整理などの単調で退屈な作業に入るのではあ

れば天を仰いでいたのかもしれない。

しかし残念ながらローガンが望むことになっていない。むしろここからが本番で、自分達は大量の敵兵を撃たなければならないのだ。

……生き残るために。

「ちよつと……」

背中に咎めてはいるが戸惑っているような声が掛けられる。彼女が、グローザが考えていることは間違っていない。今こうしている間にも、確認の為に敵兵がこちらに来ている筈なのだから、下手に銃撃戦を始めることになって補足されるよりも先に次の装甲車輛の破壊をしに行くべきだ。

ローガンも一人の兵士として努めなければならない。

一旦抑え込んだこの感傷の痛みを抑え込み、この世から旅立った兵士の遺体から『Mk153』を回収し、服の内側で輪つか状に鎖に繋がれているドッグタグを引つ張り出し、それをポーチの中に収めた。

「行く……！」

—— そうだ、これも彼女達だけに押し付けてはいけない事なんだ ——

押し込んだ気持ちに踏ん切りをつけ、ローガンは次の目標へと走り出す。

チリリ……と脳裏に黒くこびり付く記憶と感情を抱えながら。

——へグリフィン北アメリカ支部 10:14——

シャドー1……今回はブラボリーダーとして作戦に参加しているローガンの報告から数十分後に、チャーリーのSMGの人形達で構成された、アサルトチーム2の破壊成功の報告が届いた。損害も特に出していない。チーム1からも二輛目の破壊が完了したということだ

正直な話、ローガン^Lを今回の前線^Aに投入して正解だったと、ハリーは溜息を吐きながら思う。戦車^Lや軽装甲機動車^Aとの戦闘^Vになった時は、歩兵としてはほぼほぼお手上

げだそうだ。それもその筈、相手は生半可な銃器では痛手にならないだけの装甲を持っているのだから勝てないと言った方が良い。こちらが装甲を貫通させられる対物ライフルや、ロケットランチャーといった推進力のある爆弾を打ち出す兵器があったとしても、正面からの戦いは避けるべきだ。

もし、ただ設置型の爆弾で攻撃を仕掛けるのであればローガンが考案したようにするのも一つの手法だ。ただ、スモークを展開して攪乱している間に敵歩兵に攻撃し、ある程度制圧できたところで戦車に接近してC4爆弾を仕掛けるというこの案は、人員や適切な装備があったのだとしても簡単にできることではない。やはり、どこかに不安要素は生まれてくる。

だが、無い物強請りでしか叶わない現状ではこれがベストだと自分も判断し、作戦続行の許可を出した。

「なんとか、なりそうですね。私達とは少し違った経験をしてきたローガンさんがいてくれるおかげで」

「うん……でも、油断は禁物だよスオミ。絶対に勝てる、と約束される戦場なんて決してないんだから」

「わかってますよ、指揮官。でも、少し休んだらどうです？ 昨晚の偵察任務の間も一睡もせずに……」

柔らかく笑いかけてくれるスオミが淹れてくれたミルクティーを啜りながら、ハリーはこうして作戦指揮をしていてトータルでどれぐらいになるかと脳内で計算してみる。

休憩を途中でしつとも部隊を指揮する為に詳細な情報が映っている画面を睨み、UAVの操作を任されるようになってくれたオペレーターに時折指示を出していかれこれ半日。そして、昨日は二日酔いに苦しんでいたこちらを思いやつてくれた二人と話し合いも含めれば、もうほぼほぼ一日はベッドで休んでいない。

「大丈夫。というか、僕も緊張や不安で寝たくても寝られないんだ。仮眠室に行っても悶々とするだけで無意味だよ」

「そんなことはありませんよ。目を閉じるだけでも多少は楽になりますし、そこでお休みください」

スオミが勧めてくれる先には客への応接などで使うだけでなく、少人数での作戦の説明でも利用するソファだった。今年の春に新調したばかりのそれは、副官による丁寧な手入れのおかげで新品と言われても違和感を覚えない程綺麗な状態に保たれている。頼んでもいないというのに、マメに掃除してくれている彼女に感謝しかない。

「もう重要作戦に踏み込んでいるんだし、終わるまで休めれないよ。それに、なんだか恥ずかしいし」

「そんなことはないですよ。短時間であれば私も作戦指揮を行えます。現地にいる皆

も、経験豊富でよっぽどのことがなければ大丈夫ですし」

「だけどなあ……」

「……こら、ハリー君。大きくなつても偶には私の言うことを聞きなさい。倒れるまで後悔しないというのは、昔からの君の悪い癖だよ」

昔からの付き合ひということでもこちらが呻くしかないことを言われ、ピツと指されたハリーは押し黙るしかなかった。

「まだ体調が回復していないというその日から体に負担をかけているんだから、ここぞという時に体力が無くなつちやうよ。そんなことになつたらハリー君じゃなきや打開できない状況にぶつかつたらもう目も当てられなくなるけどいいの？」

「……それはまあ良くないけどさ……でもスオミ、なんだかそう叱りつけてくるの随分と久しぶりだね。最近じゃ仕事の上司と部下、つて感じだったのになにかあつたのかい？」

「……話を逸らそうとしている悪い大人に話すことなんてありませんっ」

頬を膨らませたスオミがふんつと怒つたように腕を組みながらそっぽを向く。

口答えされた時の昔の反応と同じだな、と苦笑しながらハリーは指揮官用の椅子から立ち上がり、机を挟んで向かい合つていたスオミの頭を撫でた。さらさらとした金糸のような髪感触、自身が幼く体軀がまだ小さかつた頃と変わらないどころか、全く変化

がないと思うのはいいことなのか、それとも……。

十代後半から芽生えた、人生と時間が関わる疑問がまた腫れ物として膨れ上がったがそれから目を逸らした。

少々悩ましかったが、ハリーは自分にとって姉のようでありながらも、今は亡き父と母とは違った存在である少女からの言葉に甘えることにした。

「わかったよ。とりあえず、全体的に状況が落ち着いたら休ませてもらうことにする。そこからの処理は任せていいかな？」

「……妥協案ということですね。わかりました、そこからはお任せください。ただし、こちらから見ても本当に危なげになつたら無理にでも仮眠室に拘束しますので覚悟してください」

それじゃ僕の体調が悪化するんじゃないかな、と思いつながらも自分の戦場に立ち戻る。

数々の報告からして状況は優勢だ。ブラボーとチャーリーから現場で一時的に再編されたアサルトチームによる、装甲車輛の制圧は終わってきている。UAVによる電子支援しかこちらからはできていないが、スナイパーチームも含めた現場指揮を担ってくれている親友のおかげで、そちらに割く意識は最低限で済んでいる。まだ戦闘ヘリの対処もしなければならぬが、今のところリーダーには捕捉されていない。状況が変わり

次第、こちらからアナウンスし有効打になり得る手段を提案すればいいだろう。

さて、アルファの方だ。

「アルファリーダー、UAVによる熱源観測でこちらに接近している敵部隊がいる。増援だ、数は少なくない」

『了解しました。通つてきたダム通路に足止め程度でブービートラップを設置しつつ前進、ダム内部の制圧を急ぎます！』

「内部にまで踏み込まれてシステムを掌握されただけでも、保護区にとつては少々痛いことになる。こちらからでは電子戦を仕掛けるにしても付け焼刃の防衛しかできない」

『わかつてます。幸いなことに——』

「アルファ？アルファリーダー!?!」

アルファリーダーである79式からの応答が乱れ、途中から聞き取れなくなる。UAVによるリーダーは生きているが、無線が機能しなくなった。

ハリーは無線チャンネルを何度か操作し、ブラボーとチャーリーにも接続しようと試みるが全然つながらぬ。

「スオミ、基地の支援センターに連絡して確認取ってくれ。こちらから操作しても改善されない!」

「もうしてます。ですが向こうでも原因が分からず困窮しているそうです!無線機器の

ステータスを診断プログラムで照合してみても問題は見つからないと！」

何がどうなってる、と未曾有の事態にハリーは電子支援が続行できているUAVによつて映し出されている画面に視線を落とした。すると、一つ異常なものが熱源で映し出されていた。

すぐに画面操作を行い、それをサーマルによる稚拙な表示ではなくはつきりとした色彩で映し出す。カタカタとパネルを叩き、ズームしてから照合して一致するのがデータベースにないかと思つたのだが無駄な努力で終わった。

「こいつは一体……いや、形だけなら知ってはいるけどこんなのが開発されただなんて聞いたことがない……」

呆然としてしまったが、『それ』が何によるものなのかの解析を速めなければならぬ。

すぐに内線でデータを送り、解析班に回そうと受話器を取ろうとしたところで、外線であることを知らせるランプが点つて鳴り出す。一瞬体が強張つたが、ハリーはすぐに手に取つて耳元にまで引つ張つた。

「もしもし、どなたです？」

『治安組織『ルックオーバー』のカイル・ローズです、いくつかの非礼は許してください。でもすぐにそちらにも伝えなければならぬということ、無理矢理回線を繋げさせて

もらいました!』

ルックオーバーは、先日までこちらかの人員も派遣し定期的なパトロールの要請に応えた組織だ。

カイルという青年の声を聞くのが初めてであるハリーは、すぐに切り替えて伝えられたことを詰め込めるように脳内をクリアにした。

「なにか追加で捕虜から聞き出せたことでもあったのですか?」

「すいません、そうではないんです。状況は悪い方向に……!」

「……なにかあったんですか?」

後々になってハリーはこう語ったという。

グリフィンにいる誰も知る由が無い、その事実によってこのまま平たく収まらないことは決められた、と。

『情報源となっていた捕虜は収容していた牢にて殺害されていたと、本日明朝に尋問官をはじめとした人員から報告がありました……!』

後にこの一連の騒動は『大欲怨霊事件』として関係者のみならず、彼らが所属していた組織にまで知られることとなる。

26. それはまるで — Visible fear —

——時計の針をハリー達が急変した二つの事態にぶつかることになる、その少し前にまで遡らせよう——

『いいぞローガン、やれ！』

「了解、爆破！」

トンプソンがダミーを使って攪乱しつつ設置、グローザが中距離からスモークの合間から見えた敵歩兵に対しての援護射撃。開戦で綱渡りをして見せたローガンの次に二人が自分達の番だということで、半ばこちらの制止を振り切る形で実行された。

ローガンもできる範囲で前線に出たトンプソンを援護し、彼女からの合図で左手に握っていた起爆装置のスイッチを入れる。

そして本日二回目となる、地上で炸裂する花火。ただ見世物とするための火薬などが仕込まれているわけではないので、地面で爆発したそれには色とりどりでない。ややトーンが違って見えるだけの赤い爆炎が広がり、同時に轟く爆音が風と共に一帯を支配し備えていない者達を蹂躪した。

先ほどよりも安全に備えていたローガン達はそれぞれ状況を確認する。

「チーム1、各員状況報告しろ」

『グローザ、こちらは問題なし。……本当にやってのけるとは思わなくて現実味がないけど』

『こつちも五体満足、ダミーへの損害も軽微だ。疑ってんのかよ、グローザ。紛れもなく、私たち自身でやって見せたんじゃないか』

『そうだけど……私も今まで人類に対して肉食獣と変わらないこんなのを……』

「正直な話、俺だつて一人でこんな兵器を相手に取ろうとは思わない。出くわしたらやり過ぎすようにしているわけだしな……」

『MP5』の弾倉を変えているローガンでも、ここまでうまくいくとは思っていないかった。ちょうど今スクラップにした戦車の対処は、フォースフィールドを展開して敵歩兵の銃撃のみならず戦車の主砲も防いでみせたトンプソンの貢献が大きい。直撃ではないにしろ衝撃はあつただろうから動きが鈍っていたが、そのカバをグローザとこちらでしていたのでトンプソンだけが仕事全般を押し付けずに済んだ。

一輛目の排除に至っては、もう『運に救われた』の一言に尽きる。

「さて……チーム2、大丈夫か？こつちはもう完了、支援が必要ならそつちに行くぞ」

グローザとトンプソンと合流したローガンは同じ目標を持って別行動しているベクターとG36cのアサルトチーム2との通信を試みつつ、爆破した戦車と距離を取って

一旦身を潜めた。

『大丈夫よ、こっちは次に取り掛かるわ。手の内が知られる前に制圧できてから、なんとかなってる。ただ、ちよつと爆弾の量に不安があるわ。一輛目に念には念を、ということを使いすぎた』

「了解だベクター。こっちに残ってるのを私がそっちに持つていく、そんですぐに終わらせよう」

『ありがとうトンプソン。二輛目の近くで待機してるから、そこで落ち合いましょう』
「オーケー、後で会おう」

ローガンが何かを言う前に応答したトンプソンはまだ残っているC4爆弾のバッグを肩に担いだ。

「おいおい、別に煩いことを言うつもりはないけどそう自分だけでホイホイと決めていいことではないだろ」

「だけどローガン、お前が戦車に接近するよりも人形の私達が行く方が都合がいい。結局お前は人の身であつて私達ほど丈夫じゃないんだ、そのこと忘れてないか？」

「それを傘にして言われちゃ、俺からすればタチ悪いんだが……」

「指令室でボスがお前はもしもの時の要だと言つてたが、今でもあまり変わらないだけの働きをしてるじゃないか。だったら、それらしくしてみてもいいだろ」

それらしくしてみる、ということにローガンはピンと来なかつたので首を傾げる。隊を組んだ中で精々分隊長までが任命された序列で最高位であつた為、ハリーのようにはアメリカ支部内で高みにいる人間がしていることと言われてもパツと出てこない。日常生活においての彼の癖というのは見ていてわかつて来てはいるが、こういう作戦時にしていることではどうなのかわからないローガンである。

……というよりも、トンプソンが言つてるのはそういう事とはちよつと違う。

そうとも気付かず、頭に捻る勘違い野郎に彼女は苦笑しつつ、自分の頭をツンツンと突いた。

「それをちゃんと考えておけよローガン。お前がこの先どのような道を選ぶのかは私は知らないが、どこかで指揮官になるにせよ、そのまま私達と肩を並べて前線で戦うにしても気付いておいた方が良くぞ。それを自然と心得ている指揮官がいるわけではないだろうが、結局はそれを自分で気付けた奴が一番強いんだろうさ。……ボスみたいに」

「うん……う？つておい待てっ！」

こちらの制止を振り切り、トンプソンは走り出した。もちろん、彼女も何も考えていないわけではないので、見つかるリスクが少ないルートで迂回していくのだろう。ズタズタタツと長い脚で地面を蹴り上げる、トリッキーな動きだった。おそらく訓練か何か

で競争をすることになるのだとしたら、彼女に勝つことはできないだろう。と考えていたところで、そこでその走り方に見覚えがあった。

「なあグローザ、あのトンプソンの走り方だけど、あいつにもお前教えたのか？」

「……彼女に対しては何も教えていないわ。それどころか、あなたに關することで色々聞かされたぐらいよ。私としては別に聞く必要はないと思っただけだ」

「グリフィンに關わってからでも誇れるような経験をしてきたわけではないから話されても困ることはないが……酒の席で零したぐらいの事しか言っただけとは思いますがどう感じましたよ」

「どうも思わない。人の数ほど人生経験というのに違いはあるわ。それにいちいちケチをつけたらその人を否定してると同じじゃない。そこまで落ちぶれていないわ。でも一つだけ言う事があるのなら……」

端末を操作して応援に向かうべきポイントはあるかと確認しているローガンのを見ずに、グローザは彼の肩に手を手を置いた。

「さつきみたいに感傷に浸るようじゃ、長生きはできない。悪いことではないけどそこまで感受性を働かせるようじゃ、いずれは何処かで命を落とすことになるわ。やつぱりあなた、『戦場』にいるべきじゃないわよ。それに何故だかわからないけど、そんなあなたと組んでいる私の心が痛くなる。……正直言つて、ここから全力で逃げ出したいぐら

いに」

今までとは違った否定。ただ、先日までの外聞や彼女自身の見解による信用に関するものではなく、ローガンのパーソナリティを一つ知った上でのものだ。

本来なら憤慨に至ったのかもしれない。ローガンの外からではなく内側を見て、人格そのものを否定しているといつてもいいのだから。

しかしあのようなことがあったことで、彼女の話し方が淡々と告げているものではないようにしか思えなかつた。言葉の端々に、彼女自身が刺さっているナイフの痛みを抜けずに堪えているようで言い返す気力も起きてこない。その抉られている痛みを知っていて同じく苦悶しているからか、否定されたローガンは落ち着いていながらも鎮静していた。

「それでも、俺は……」

無意識に空いている右手を握りしめ、腕全体にも力が入りわなわなと震えた。どこにもぶつけようがない黒く滾る痛みが胸の内を焼いてくる。

居場所、知人や友の消失からの悲哀。終わりの見通しが立たない戦いへの諦念。そして目を逸らしたいと思ってしまう自分の裏の顔への嫌悪。それらも含めて形作られている自身を抱えながらも生きていかなければならないのだと、何度自分に言い聞かせてきただろうか。

嘆きたくてもそうして良いと思える相手が見つからない。清廉潔白で裏表のない、人間でも人形でもそういるものではない。多少の愚痴を黙って聞いてくれる相手はいても、自分だけがこうして苦しんでいるわけではないのだから。

だけどそんなどうしようもないことがあつても歩みは止められない、ローガンは割り切れなくとも無理矢理脇に追いやろうとした時だった。

『ブラボー……こちらアルファ……応答を……!』

ザザッと砂嵐に混じつて聞こえるような声で、ローガンは飛びつく様に無線機に縋つた。

「どうした、アルファ。うまく聞き取れないが一体何があつたんだ?」

『指令部と……通信が……!』

「アルファ? おい、応答しろ」

完全に遮断され、アルファリーダーの79式の声が全く聞き取れなくなる。ローガンが声を出しながら自分の端末で調整しても変化がない。

グローザも簡単な調整をしていたらしいが同じく結局は何もできなかつたらしい。ただ彼女は目を閉じてなにかを確認し、ローガンの方を見て言ってきた。

「間違いない、ジャミングされてるわ。近接通信ならできるわけだから完全にではないけど、極端に距離が遠すぎれば全然聞こえなくなる」

「なんでそんなのが突然発生してんだ。戦車やヘリの隠し玉でそんなのがあるのだとしても、一番最初に出しておくべきじゃないのか。今なら指向性で自軍には影響のない機器が開発されてるんだろ」

「わからないけど嫌な予感がする。敵軍制圧で連携を崩すために電子機器の無力化を測ってくる、いずれはUAVによる支援も当てにならなくなる。なかなかのやり手だと思っただ方が良いわ」

「くそつ、たしかにプロフェットにも繋がらない……ブラボーにチャーリー各員、聞こえているのであれば一旦作戦は中止。状況確認をするから集合するぞ。場所は——」

「そこまで言い掛けた時だった。聞こえなくなつた隊からの程ではない、こちらの援護をしてくれていたT5000からの通信がノイズ混じりに聞こえてきた。」

『すいませんリーダー、なにか様子がおかしいです！ダムの上でなにかが……あれは、へり？いやでも……』

「こちらでも確認する。聞こえている全員は今すぐ動けるように準備しておけ」

しやがみ姿勢から立ち上がったローガンはグローザと一緒に、ダムに隣接している林から駆け出して水音が聞こえる方へと走り出す。近づいていく度に顔を風が叩いてくる。自然に吹いてくるものではなく、人工的に作られた乗り物が発生させていると感じ

られる強さに不均一だ。

見える位置にまで到着した二人は匍匐姿勢で確認。ローガンは双眼鏡を取り出すと発生源と思わしき場所を重点的に追って行く。

「なんだあれ……空間が歪んでる……いやでも、あの歪んでいる形状はたしかにヘリッぽい……?」

「私にも見せて」

隣にいるグローザに双眼鏡を渡し、報告してきたT5000のみならず全員に改めて回線を繋げた。とはいえ、こちらから繋がる様に操作しただけであって、聞こえていない可能性もある。

とりあえずローガンは確認を最初に取っておくことにした。

「聞こえている各員、無線状況を確認して報告しろ」

『こちらチーム2。トンプソンと合流してその場で待機中。無線状況はイエロー』

『マシンガンも同じくイエローだ。こっちでもダムの方での異変は確認できている』

『スナイパー三人、こちらは集合していますが無線状況はレッド……それでブラボリーリーダー、あれは一体……』

「まだわかっていない。まだ様子見だが现阶段でも油断は絶対にするなよ……」

肉眼で確認していても異常事態だ。麓にいる傭兵たちも動きが止まり、何事かと視線

が一カ所に集中している。彼らでもこのことは知らなかったらしく、それまでしていたであろう作業が止まっている。

「グローザ、あれはなんだかお前ならわかるか?」

「はつきりとはわからないけど……あれ光学迷彩を搭載した輸送ヘリじゃないかと思う……」

「光学迷彩って……あの透明になるやつで……スナイパーの人形達が持つてたりするあれだよな?」

「ええ、まさしくそれよ。でも人間サイズでならともかく、乗り物を透過するものなんて私も聞いたことないわ。それに、あれもまだ欠点もあるのだから完全には信用できないのよ」

姿を隠し透明になったように見える光学迷彩は便利なように聞こえるが、たしかに欠点も存在する。例えば、激しく動けば効果が薄くなること。それを防ぐことはできなくもないが、使用しているバッテリーなどを大きく損耗させるなどもあるため控える必要があるという。だが今こうして目の前に広がっているのはグローザの言う通り、人のサイズを大きく上回る兵器に搭載されて光が屈折・回折されている。空間が一部歪曲しているのだからなくはないが、それでも目を凝らさなければ発見しづらい。

「あんなハイテク装備を揃えている部隊なんざ聞いたことないぞ。裏から投入されたグ

リフィンの督戦隊とかか？」

「督戦隊が存在しているかは別として、グリフィンでもあそこまで進歩できていないわよ。現在じゃ同じように搭載した兵器の開発があと一步まで来ている段階の筈……」

「オールドネットの情報じゃイギリスで昔戦車に取り付けての実用化に向けてどうとかあつたが……つと、傭兵が動いたな」

「そのまま発生源の方に……!?!」

次の瞬間だった。何も無いように見える地点から発砲した銃から発せられるマズルフラッシュが生まれた。ダアンツ！と放たれた弾丸が接近していた傭兵の頭部を撃ち抜き、撃たれた男は地球の引力にひかれて仰向けに倒れる。

少なくとも目を逸らさずに注意を欠けてはいなかった。脳の半分の処理をグローザとの会話に割いていても視線はずつと外していない。

突然のことにローガンは呆気にとられたが、すぐに周囲にいる味方に確認を取った。

「この現場を見ている奴だけで良い。ヘリから兵士が降下しているのがぼんやりでも見えていた奴はいるか!?!」

『い、いえ。こちらでも全く分かりませんでした!』

『なんだあれは……こんな連中聞いたことがないぞ……ローガン、あなたはどうなんだ?』

「生憎だがこんな奴らは俺も初見だよ。光学装備を全員に持たせての部隊なんざ、敵に回してくないしな……」

仲間がやられたことを機に、敵がいると見定めた地点に向かって傭兵たちは銃撃を開始。水飛沫を上げるダムによる人工の滝を背景に何が見えているのかはローガンにはわからない。感じている疑問は同じであろうが、感情はそうではないだろう。目の前にしてしまった未知数による恐怖に駆られ、衝動のままに引き金を引いているに違いない。

叫びながら腰だめに構えた軽機関銃をずっと撃ちだしている者が戦闘不能に、そしてその後ろにいるSMGを持つている者が倒れるが、彼の心臓部にナイフが刺さっていたことがグローザによって教えられる。

損害が生み出されている傭兵たちに対し、ハイテク部隊の方はどうなのだろうか。カバーして身を隠せる物陰といえ、対応している部隊が置いている物資が入った木製のコンテナが数個あるだけ。大きさに隠れて男性が二人隠れるのがギリギリだ。

こうして様子をずっと見続けていられたが、もし自分達に降りかかった場合を考えてローガンは背筋に怖気が走る。むしろ、自分達が最初に標的にされていないのが本当に幸運だ。

「グローザ、俺の銃を返してくれ」

なにをすべきか決断を下したローガンは、グローザが持つてくれている自分の本来の銃である『ハニーバジャー』を受け取った。予備のマガジンを防弾チョッキのポーチに入れ、チャージハンドルを引いた後に安全装置を解除。

そして、これより自分達がとるべき方針を口にした。

「これが聞こえている全員、これよりダムの上部に向かえ。一旦集合して連絡が取れなくなったアルファとも合流して対策を練る！チーム2はマシンガン部隊とも合流、スナイパーチームはもう一度援護射撃だ！PTRD、もしこちらの存在に連中のステルスへリが気付いた場合は撃つて構わない！」

そのローガンの指示が一瞬わからなかったのかもしれない。しかし処理が追い付いた人形の中に異議を唱える者も出てきた。

『奴らは今こつちに気付いてない。それにそつちの位置的にも囲んでいる。だったらこのまま撃つて袋叩きにするべきだ！』

『現場を見てないからわからないけど、聞いてる限りじゃPKPの言う通りよ。正体もわからない現在いまでも殺れるチャンスができているのならそれを無駄にしないだけの手段を選んで』

ペチエネグとベクターからの指摘もわからなくはない。彼女達の言う通り、こちらの存在が気付かれていないのだから先手を取るのも確かに一つの手だ。だが、ローガンが

懸念していることは別にある。

「たしかにそれもあるがアルファとの連絡が未だに取れなくなつたんじやそつちが第一だ。それに連携を崩すジャミングからして、奴らは相当なやり手だと見た方が良い」

『だつたら……!』

「だけどな、駆け引きも何もなしで最初のコンタクトが銃撃だ。本来なら所属を明らかにするだとかあるのに、姿を隠したまま撃ちだしてきているつてことはもう交渉する気なんざ絶対に微塵もない。それにだ、目の前にいる奴らだけが全員というわけじやないだろ。俺達と同じように事前に情報収集を経てから来たのであれば、それ相応の装備を揃えている筈だ。ステルスヘリにスナイパーチームでも位置が確認が一切できないだけの完成度のある光学迷彩。明らかに歴然としすぎているだろ、俺達とも……!」

悔しいがローガンも一対一で交戦できたとしても勝てる自信は全然ない。ここからでも視認できた精密な射撃と攻撃手段。相手の実力は未だにわからないが絶対に勝てると思ひこまないべきだ。

それにまだ傭兵たちにはまだチーム2がまだできていない戦車の破壊が一輛だけ残っている。それに戦闘ヘリもだ。このような状況下に介入した場合は三つ巴の乱戦となりえる。その戦闘の最中にこちらからも死人が出てしまい、頭数だけでも不利なこちらに吹いている逆風の勢いが増すことになってしまうのだ。

わざわざ傭兵たちがいる中央に目立つ形でハイテク部隊は戦い始めた。最悪の話、中央にいる彼ら以外にも同じ所属の兵士が展開しており、包囲・殲滅を進めようとしているという風に読むこともできる。そうであつたらこちらの背後にも忍び寄りられ首を掻つ切られることになってしまうだろう。

『……私はローガンさんの命令に従います。臆病であるからこそ長生きできるとも言われていますし、後々に全滅を考えられた展開が杞憂であつたら儲けものですから』

『私もだ。私達が力任せに解決できる案件じゃもうなくなっている。一旦退いて、アルファと合流してどうすべきか話し合おう。それでいいよな、ローガン』

『こちららも三人とも同意見。ブラボーリーダー、こちらら皆が来られる必要な分だけ援護して勤付かれるのを避けるわ。出来るだけ迅速にお願いするわね』

G36c、MG5、PTRDから同意の意見が無線機を通して聞かされてくる。これで突つばねられたらどうしようかと内心でヒヤヒヤしていたローガンは、ほうと息を吐いた。

「すまん、そしてありがとう」

『……あなたの考えはまだわからないけど死ぬことにならないのであればそれが第一ね』

『クソツ……了解だリーダー。私とMG5はこれからアサルチーム2と合流する』

『臨時の現場指揮官がそんなこと言うなよローガン。お前の言ってることには納得がいくし私も素直に従うさ』

ベクターとペチエネグもローガンの懸念をわかってくれたのか、引き下がってくれた。『現場指揮官』、その一言がズシリと肩に乗っかってきたが、それに戸惑っているばかりでは前に進めない。

やや崩れかかったメンタルを立て直したローガンは立ち上がり、傍にいるグローザに手を貸してやる。とはいえ、なかったようにして彼女は自分で立ち上がったが。様々な意味を含めた溜息を吐き、ローガンは言った。

「作戦中でもビリはごめんじゃないかお前？」

「ええ、できればなりたくないわ。だったらやることはわかるわよね？」

それを聞いたグローザはローガンに気をあまり払っていない速度で走り出した。

—ヘグリフィン北アメリカ支部の作戦ブリーフィング音声ログ#283—

〈10:51〉

『何があつたんですか?』

『緊急事態がさらにそれ以上に上書きされたんだよ、M4と45。まずはこれを見て』

『……様子からしていつも以上に穏やかじゃないわねハリー。テロを仕掛けられているのはあなた自身じゃない?』

『そんな軽口に返せる気力は今の僕にないよ。でも、状況は把握してくれたかな』

『時間が惜しくなると感じるぐらいには、ですね。それで指揮官、私達AR小隊と45さんの404小隊に同時に招集をかけたのは何故ですか?』

『端的に言えば君たちに同時進行で任務に就いてもらいたいんだ。生憎だけど僕はダムの方の件で手一杯だからもう一つのオペレーターをスオミに任せることになる』

『内容は……ダムに向かっている三小隊の援護・回収に、殺人事件の犯人追跡……。でもこれって……』

『まだはつきりとはわからない。だけどここで第三者の介入があつたんだ。何か別の狙いがあると思う』

『睡眠不足と疲労でまともな判断が出来ているとはあまり思えないけど……でもそうね、横槍を入れてくるには遅いわ。どこかで傭兵たちと交戦するタイミングを見計らっているのと見た方が良い』

『そうですね……それと指揮官、ダムに展開している小隊たちと連絡が取れなくなっただけのことからですか』

『三十分ほど前だよ。79式だけじゃなくてローガンとSV98からの応答もない。UAVの支援もいつまでもつかはわからないけど限界まではするつもりだ』

『……そっちはまずいわね。見たことのない部隊と傭兵を相手にした三つ巴』

『こうなつた場合はローガンに懸けるしかない。彼が僕達からのサインを受け取ってくれば良いけど、手一杯になつてたらもうどうしようもないよ』

『簡単にはやられないだろうけど、時間の問題でしょうね』

『だったらどうしますか？二つの任務の割り当ては決められていませんが』

『追跡なら404でやるわ。戦場でもこういつたことならあなた達よりも私達の方が向いている。……申し訳なきようなそんな顔しなくていいわよ、もう慣れてるし』

『……すいません。でしたらAR小隊は三小隊の回収に向かいます』

『よし。二人とも、小隊を率いて今すぐ現地入りしてくれ。こちらの方でヘリの手配を既にしている』

『それはなによりね……一つだけ忠告しておくわ。M4、ハリー』
『なんだい?』

『ダムOf制圧は一旦置いて撤退した方が良いわ。アメリカだけじゃなく、全世界の裏社会で噂にもなってる部隊かもしれないから』

『そう思ったのは何故ですか。直接見たわけじゃないのに……』

『どこかで聞いた話だったんだけど……ごめん、思い出せない。でも、金の為に汚れ仕事をしていた404わたしたちと違つて、もう殺しが趣味になつてたという事だけは覚えてる』

『趣味で人を殺しているというのですか……!?!』

『趣味というのは気晴らしを含めた当人のやりたいことで得られるのは満足感と、快樂だ。だとしたら快樂殺人を繰り返してる、人間としても道を踏み外しているアウトローだ……』

『詳しいことが思い出せたらこつちから連絡するわ。急いだが良いわよ二人とも。そうしないと……ローガン達が全滅するわ』

—再生終了—

〈11:14〉

バババツ！と放たれた銃弾が頬を掠めるがローガンは開かれた扉による物陰に飛び込みブラインドシヨットで牽制する。撃ちっぱなしで『MP5』の弾が切れたので装填していたマガジンをその場で捨て、最後の弾倉に取り換えた。タクティカルリロードで素早く取り替え手前に引っ張り上げていたコッキングレバーの取っ手を戻して完了させた。

皆と合流した後にアルファチームの救出を取り決め、彼女達はダム内部に進む旨を含めた報告したことからローガン達も進行した。それから数分後、通路にて傭兵たちがさらに内部へと繋がる扉のコードの解読に地団駄踏んでいるところに遭遇。投降を推奨したにも関わらず撃ってきたので交戦を開始したのである。

「エネミーダウン！あと八人ですよ皆！」

「トンプソン、G36c。フォースフィールド行けるか!？」

「私はまだだ!戦車の破壊の時に無理に使ったせいでモジュールに負荷がかかりすぎたみたいだ!」

「なら私一人で行きます!援護お願いします!」

「了解。アサルトチーム、先行するG36cに援護射撃だ!」

ダム内部へと突破するのには、前衛として主にアサルトチームが担当。C4爆弾による兵器の破壊を担当していたローガン達は、スナイパーチームのPTRDとSV98からの援護の手を借りている。

T5000とマシンガン部隊であるMG5とペチエネグは後方を警戒している。味方が密集している閉鎖空間での戦闘では誤射を招きかねないので、本来の火力を発揮するために二人は追手となる敵の迎撃もしくは足止めを担当してもらったことになった。もしもの時はT5000による狙撃してもらい、傭兵かそれともあの謎のハイテク部隊と戦うことになる。

G36cがフォースフィールドを展開し、身体の中央から湧き出ている光の靄がコーティングとなり彼女自身を覆っている。射撃しながら最前衛になった彼女の援護でローガンも『MP5』で撃った。

撃たれている傭兵たちは身を隠した。追撃をすべくG36cの後ろに付こうとした

が、彼女の足元に何かが投擲されてきた。久方ぶりに見る物だったが、それがなんなのかがローガンにはすぐにわかった。

「電磁^Eパルス^Mグレネード!？」

名称を声に出した瞬間だった。バシユンツ!と掌サイズで樽型の筒が上下に開き電磁パルスが展開されたらしい。至近距離で受けたG36cのフォースフィールドが消えた。

「うっ……!」

「やべえ、やられちまうぞ!」

「援護するわ、行って!」

グローザによる射撃で傭兵たちを牽制してもらっている間に、ローガンは身を屈めてその場で動けなくなっているG36cの腕を掴み、もう片手で持っている『MP5』で自分も発砲。平衡感覚が狂っているらしく足元が覚束ないので、途中から肩を貸してやって元の物陰の方に戻った。

「すいません、ローガンさん……でも少し時間をいただければ復帰できると思います」
「わかった、それまで少し休んでろ」

今の電磁パルスの影響でG36cのダミーは完全に機能停止してしまっている。戦術人形は通常の機器よりも耐性があるので時間さえあればその場で機能を修復し戦線

に戻ることは可能だ。だがそれは本体の話で、ダミーは違う。司令塔である本体の命令を受け付けて実行するダミーには耐性のみならず復調させる機能までが施されていないので、銃撃よりも簡単にダウンしてしまふのだ。

「全員、不用意に距離は詰めるなよ。G36cの二の舞になるぞー！」

「だったらどうする!?!このままじゃ勝てはしてもジリ貧だぞー！」

「焼夷手榴弾があるわよ、ローガン。歩兵に対してはだだっ広い屋外じゃあまり効果を発揮できないけどここだったら」

通路は一本道で迂回できるだけの広さはない。このまま銃撃のみの交戦では悪戯に時間と体力を浪費するだけだ。最悪の場合、挟撃にあつてさらにマズいことになる。タイムリミットが明確にあるわけではないが今は時間が最も惜しく、正面を対応している間に背後から来るかもしれない正体不明の敵兵が来ることがないことを願うしかない状況だ。

出し惜しみしている暇はないだろう、と考えたローガンは身を隠していた扉の蝶番を『MP5』の銃撃で破壊し、取っ手に左手を通して即席の盾にした。厚さは約二十ミリで合金。一般男性程度の大きさもあつて重量はあるが若干自分に傾かせるようにするのであれば問題ない。

「いいぞベクター、焼夷手榴弾を頼むー！」

「了解、何の心配もいらぬ」

投じられた手榴弾が目の前を横切ったタイミングでローガンは扉を盾にして通路に出た。途端に遮蔽物の向こうから断末魔が聞こえてきた。声からして片手で数えられる数人が受けたらしく、こちらが受けている銃弾の量も若干減ったように思える。

「俺が先行する、援護を頼むぞグローザ！」

「わかってる、そのまま進んで！」

すぐ後ろにグローザが付いて、前進するこちらの歩調に合わせてながら脇の方から撃ちだした。重量のある扉を両手で支えているのでローガンは撃つことまでできないが、仲間が近くにいるので手が足らないところを補強してもらおう。グローザに続いてトンブソンも続いてくる。焼夷手榴弾による火も次第に消えたのでさらに前進した。

「確認できるだけで良い、あと何人だ!?!」

「あと四人! トンプソン、準備はいいかしら?」

「もちろんだ、フォースフィールドを展開する! こっち側のスナイパーチームもカバーしてくれ!」

ようやくモジュールのエネルギーチャージが終わったらしく、トンブソンが飛び出した。EMPグレネードを受けないよう、体全体を低くした低頭姿勢で駆け出してシールドを起動した。

れで一時は安全を確保できた。

「クリアー！まだ息がある奴は無力化された兵士を縛り上げておけ！」

損害状況は報告されている通りだとG36cとトンプソンのダミーを合わせて六体。他にベクターの方も銃撃で最後の一体もやられてしまっており使い物にならなくなっていた。何よりも電磁パルスによってG36cのダミーが一網打尽にされたのは痛手だった。

ダム内部の方は多目的部隊であるアルファが担当することになっていたのでスムーズに通過する為のコードを所持していない。なので解読を進めていた扉の状況を確認する為、ローガンは端末を壁に取り付けられている機器に接続した。しかしセキュリティの解除といったことまでできなくはないが、あくまで簡単なものまでしかできない。ローガンが扱う技術は主にドローンといった特殊機器の操作が出来る程度でしかない。一等級とは言わずとも強固に守られているのでできそうになかった。

「ダメか……進退窮まるつてのはこのことだな」

残されている過去の通過ログからの複数類似しているコードを照合するなどしたが駄目だった。高性能コンピュータと扱える技術を持つ兵士にできたであろうが、どちらもない現状ではどうしようもない。電子戦が得意である45がいれば違っただろう。

「まあ仕方ないけどダメだったのかしら？」

「ああ、お前がやってみるか？人間と人形じゃ違う結果になると思うんだが」

「残念だけど私もそこまでできないわ。それにここのセキュリティが非常事態の警戒態勢になっているからレベルが上がってる」

「敵地なら遠慮なく力押しできたけど、使い物にならなくなつて後から響いてくるのだけは避けてやらないとだしな……」

さきほどの戦闘の最中で使用されたEMPグレネードを使うのも一つの手だが、それがどのような結果になるのかが分からない。ロックが解除されて開くか、それとも機器のみが使用不能になり扉が開かないのどちらかだ。

「ここであまりやりたくないけど爆破するしかないかこれ？」

「でもどうやるの？爆薬といったらC4か敵兵のフラググレネードしかないでしょ」

「ブリーチングチャージみたいな突入爆薬があれば一番いいんだが……でもありやあアルファだけが持ち出してたな」

調べてみたところ幸い迂回するルートはなくてもないのでそちらに行くしかないかと思ひ、ローガンは敵兵が持っていたまだ使えるEMPグレネードを数個回収してポーチに入れておく。敵が使えるものを持っているのであればなんでも奪え、ローガンの恩師の教えである。とはいえ、グリフィンに所属する前に見たのとは勝手が違っているので使い方を入念に後で確かめておくことにした。

ルートを表示させるようにしながらそれぞれで装備を確認するように命じた時だった。

「ローガンさん、アルファとの通信が繋がりました!」

無線の状況をリアルタイムで確認してもらおうようにしてもらっていたT5000からの報告で、ローガンはすぐに一旦切っていた無線の電源を入れて回線を繋いだ。

「こちらブラボーリーダーのローガン。アルファリーダー間こえるか!」

『ようやく声が聞きました。こちらアルファリーダーの79式です。ブラボーリーダー、そちらは今どちらですか?』

「現在ブラボー並びにチャーリーはそっちに合流すべくダム内部を進行中だ。だけどIDロックが掛けられている扉にぶつかった訳だから回り道をしなければならなくなる」

『IDロックの扉ですか?それでしたら大丈夫です。だって……』

背後の扉が突然開いたのでローガンをはじめとした高機動の人形達は反射的に同時に銃口を向けた。しかしそこには敵ではなく、同じ作戦を実行している仲間の姿があった。

「……私達がこうしてこれたんですから」

「ああもう、驚かささないで下さいよ79式。危うく撃つところでした!」

G36cの言う通り、一歩間違えればローガンも引き金を引くところだった。予告もなく開けられた扉の先にいるアルファチームの全員の姿形を見て一息つく。

そして後方警戒に務めている人形達を除き、互いに状況を報告した。アルファの方も誰も欠けてはいないものの、煤けていたり服の裾がほつれるだけじゃなくナイフで切り裂様にボロボロになっている。被弾した箇所も見受けられる者もあり、ダミーの方は内部構造が露出してしまっていたりもしていて酷いことになっていた。ダミーにもそれぞれの感情を投影する機能が備わっていたら、戦場さながらの光景になっていたであろうが無表情で本体に追従している。その損害を与えられてボロボロになっているのが人間だったら……。

「ローガンさん？今保持している物資や状況を教えて頂きたいのですが……？」

79式がこちらの目を覗き込んでくるようにしてきたことで我に返ったローガンは咳払いをすると、何事もなかったようにしてついさっきの戦闘を終えたばかりに受け取った報告を述べた。

「後衛以外のこっちはそれぞれが残っている予備のマガジンが一本ずつつとところだ。野外で歩兵を相手として戦闘になっていた連中はまだ弾薬に余裕がある。俺はまだ本当の自分の銃を使って無いし大丈夫だ」

「他には鹵獲したロケットランチャーとEMPグレネード、ですか。まだ戦闘は出来な

くはありませんが、大部隊との戦闘は難しいどころか不可能に近いですね……」
「そっちの弾薬はどうなんだ？それに後ろの人達は？」

アルファの人形達に囲まれるようにいるのは作業服を着ている年齢はあまり変わらない見た目の男女数名だ。それぞれも殴打されていたりもしていたようで頬に痣があつたり腹部を押さえていたりしている。

「彼らはこのダムของシステム管理をしている自律人形です。乗り込まれていた制御室でまとめられていたところで突入して救助しました」

「……なるほど。自律して動いているのは戦術人形だけではないとは知っていたけど、こういうところにもいたんだな」

「制御室を最後に内部の方は制圧し終わっています。そして悪戯にシステムに干渉できない様にロックを掛けておきました。プロフェットに繋がりませんがこの一件はもう解決ではありませんか？」

「いや、それがだな……」

数十分前に外で起こったことをアルファにも情報共有で伝える。妄想や架空の世界でしか見られなかった技術を駆使する部隊、通信障害も引き起こしているのは彼らであることの可能性。敵と交戦するのであれば情報源から断つて連携を崩すといったことを最初にしてきたこともあつて、戦い慣れていることからしてもう疑いようがない。横

槍を入れてきたハイテク部隊はこちらと渡り合うだけの実力を持っていると見るべきだろう。

「ぬか喜びさせてしまつて悪いけど、まだ事態は収拾できていない。奴らが何者かの正体突き詰めてもらうのはプロフェットにやつてもらつても、ここから片すのは俺達の役目だ」

「……そうですね。ですがまだ民間人としてここの自律人形の方々を安全な場所に避難させなければなりません。そして私達も補給しなければ。油断してはいなかったのですが消耗しすぎてしまつています」

「同感だ。俺達が前に出る代わりにこつちで捕えた捕虜の移送も頼んでいいか？」

「ええ、でしたら……」

そうして79式との今後の方針を交えた相談が進んでいく。ローガンと彼女だけではなくSV98も交えて話し合った結果、数々通過するルートを実アルファが通つてきた道から途中で逸れ、ダム内部への別出入り口から脱出することになった。

できるだけ関する情報もなにもないあの部隊との交戦を避けていくことにしようということにもなり、そこから対応策も練ろうとして話している時にMG5から無線がくる。

『ブラボーリーダーだけじゃなく皆聞いてくれ。私達が通つてきた通路に何かがある。』

……!」

その一言で全員に緊張が走る。

ローガンはすぐに自分達がいる位置から数メートル後方にいる彼女達の方に姿勢を低くしながら向かった。物陰に隠れながら様子を窺うMG5、ペチエネグとT5000の近くに到着したローガンは同じく身を潜める。

「それで、どんな感じだ?」

「見てくれた方が早いが、じりじりと接近してきている数人がいるようなんだ。数はわからない……」

「さっき一瞬だが一部の通路の景色がぶれたようにも見えた。ワタシの勘だけどいる筈だ」

口だけでなく腕もいいというペチエネグの言うこともある。いずれは避けられないだろうとは考えてはいたが早い段階からの交戦になったことをローガンは悟った。

「全員、二十秒後にここから撤収を開始するぞ。先頭はグローザでルート指定はアルファリーダーに一任する。ブラボーとチャーリーでアサルトチームにいた人形は引き続き前衛だ」

「了解だ。だけどどう切り抜けるつもりだローガン?」

「カウントと同時に傭兵たちのEMPグレネードを使って奴らの光学迷彩を一時的にで

も無力化させる。姿が見えたのならこっちの攻撃もしやすくなる、ある程度まで数を減らせたならここから退くぞ」

「……オーケー、それしか手はありませんね。それなら私達のダミーをその場で足止めにし少し残しましょう。本体達ほど時間を稼げないでしょうけど十分ですよ」

「よし、それでいこう」

ポーチから先程のEMPグレネードを取り出したローガンはそれに彫り込まれている文字を確認した。『範囲』と『効力』とあるそれらの下には左右に動かせるつまみがあり、片方を最大にするともう片方が最小の方に自動で動かせされる。二つの項目を同時に最大にまで持つていくことはできず反比例にしか動かないが、相手がいるであろう位置は屋内ということで悩む必要はない。最大レベルが五なので『範囲』を二に、『効力』を四にした。

「行くぞ。三……二……一……ゴー！」

ローガンによって投げられたEMPグレネードは大体狙い通りの位置にまで飛んでいつて地面に転がった。そして傭兵たちとの交戦のようにグレネードの中身が外部に露出し、肉眼では見れない電磁パルスが展開された。

期待しているだけの効果はあり、灰色のマントを頭から被って目に当たる部分が突起となつているゴーグルをつけている異相の兵士がそこに四人並んで出現。一瞬動きが

止まったのを見逃すほど、こちらにも負けてはいない。

「よしいいぞ、撃てー！」

「T5000、まずはお前から退け！扉の向こうにまで行けたら無線で報告しろ！」

「了解です！」

ズダダダダダダダダダダッ！とすかさず射撃を開始して銃声と一緒にマズルフラッシュも起こす。マシンガンであるMG5とペチエネグの二人が主に撃ち出し、ローガンも今装填しているマガジンが最後である『MP5』を惜しみなく撃った。

しかし先手はこちらがとつたものの、四人の敵はそれぞれ片腕を地面とは水平に出す。そして取り付けている何かのデバイスから上下に展開したそれに、ローガンも含めた三人は驚きを隠せなかった。

「ライオットシールドだど!? 一体奴らどこまで用意周到なんだ！」

「くそつ、思ったよりも面倒だぞこいつら！」

「奴らを殲滅するまで相手にする必要はない、勘違いするなお前ら！T5000、そつちはどうだ!？」

『今、撤退完了です！次来ても大丈夫です！』

「MG5、次はアンタが行け！もうそろそろ装填している弾薬箱の弾薬が切れるだろ！」

「すまない、先に行く！」

ダミーを二体残したMG5がペチエネグの言う通りに後方に駆け出す。匍匐姿勢になっっている彼女のダミーを跨がって撃ち続けているローガンが持っている借り物の銃の弾薬がなくなったので、その場で捨てて元の銃である『ハニーバジャー』を手に取った。安全装置を解除し、とうの昔から知っていたような反動を感じつつ引き金を人差し指で引く。

こちらの銃弾を防いでいるだけかと思ったが、左右の外側にいる二人の兵士が内側の二人の後方へと回り込んだ。そして一間空けた後で反撃してきたのである。

ガンツ！とT5000のダミー一体に命中。だが当たり所が急所から逸れていたの
で戦闘を続行している。それでも動きが鈍らせるだけの効果は生み出されてしまい、射撃が少々覚束なくなってしまった。

「ペチエネグ、あとどれぐらいもつ!？」

「わからん！リロードしている間をアンタとダミーにカバーしてもらっても不安がある
！自身自身ワタンが撃つてもそうだ！」

「クソツ!!」

悪態をつきながらもローガンは撃つが今になっても誰一人として倒すことができていない。敵兵にシールドがあるだけならまだなんとかなったが、構えている前衛を支えながら発砲してくる後衛がいる。MG5やペチエネグの高火力による力押しで崩すに

は難しい……いや、ここまでできているのだから、無理だと考えるべきだ。無意識に見下すことがないように意識し、対等かそれ以上の敵として裏をかく。

知恵と発想も活用して生き残ってきたローガンだが、残念ながら自分でも名案だと思える、高確率で痛手を与えられるだけの戦術が浮かばない。

これはあくまで撤退戦であり、無理に実行する必要もないがここから退けた後にも交戦しなければならなくなる。ならば情報は多いに越したことはない。

『いいぞリーダー！早くこっちに来い！』

「先に行けローガン！ダミーがないアンタがいなくなってもそうかわらない、ワタシは後から行く！」

「いやお前も一緒に来んだよ！長引けばこっちが不利になる。ダミー二体を前に立たせて発砲しつつ後退だ、急げ!!」

「……了解！」

欲を掻けば自分達は命を落とすことになるので思考を断ち切った。ローガンは早めにマガジンを取り換え、ポーチからよく知っている装備を取り出し先に通路の真ん中に飛び出したペチエネグの後ろに立った。

最初の指示通りにその場にダミーを配置したペチエネグは、自分の左右斜め前にも立たせる。匍匐姿勢から立って腰と同じ高さに銃を構えて撃ち始めた彼女の後ろで、ロー

ガンも撃ちつつスモークグレネードのピンを口で啜えて一気に引き抜いた。
「スモーク行くぞー！」

ハイテク部隊の攻撃を妨げるべくローガンは視線の先に投じた。カンツカララ……と地面に転がった筒から煙が立ち上って自分達の射線も不明瞭なものになるがそれもいい。

ローガンは空いた手でペチエネグを肩を掴み転ばない様に気遣いながら引つ張る。
「焦らずにこのペースを維持だペチエネグ！」

だが気を抜かず、油断していなかったとしても想定外というのはある。後退している最中に一体のダミーだけでなく、本体である彼女自身にも銃弾が当たってしまったのである。

未だにもくもくと立ち上る白煙の向こうから正確に銃弾が飛んできたことにローガンは一瞬動転したが、目の前のことをすぐに飲み込んで無線で全員に知らせた。

「があ……！」

「つ!?畜生、ペチエネグダウン!弾薬がある奴で良い、援護を頼む!」

『アルファ、ブラボーリーダーに向けて全力援護!誤射は絶対にしてないで!』

命中した箇所は銃を握っていた方の右肩と腹部に胸部。人工血液がダクダクと流している彼女の銃についているストラップを通して背負ったローガンは、両手でペチエネ

グの服についている取っ手を掴むと持てる腕力で引いた。

上げた視線の先で、白煙から徐々に姿を現す幽霊が現れてくる。ジジジツ……とマントから電磁を発しながらまだ動いているダミーを一体ずつ屠っていくその様は、この世のものとは違う、別の世界から来た何者かのようなだった。

沸き上がる恐怖を抑え込み、ローガンはペチエネグを引きずりながら再度『ハニーバジャー』で迎え撃つ。

「私の銃を返して置いて行ってくれ……それだったらアンタだけでもここから……！」
「うるせえ！勝手に好き放題言つてここで野垂れ死のうとしてんじやねえ！」

弱音を吐くペチエネグを黙らせ、ローガンはリロードせずにそのまま後方へと下がった。やがて自分ではない誰かが手伝ってくれたことで少し楽になる。

ペチエネグを任せたローガンは弾倉を変えてチャージハンドルを引く。そしてこちら側にある扉の機器に向かって操作している作業員を援護する79式の隣に立ち撃ち続けた。

「ロックします、皆さんさがって！」

作業員の言葉に従い、ローガンも射撃を中断して狭まっていく光景を目に焼き付ける。この強敵の存在を決して忘れないように。

システムが復帰したのか、迷彩マントの効力が発揮されて再び幽霊を覆い隠してい

く。射撃と前進をやめた彼らが足元から消えていくのを見続けたローガンは、傭兵だけでなくこちらの命を容赦なく奪いに來ることから、脅かすだけで満足する『幽霊』ではなく『怨霊』みたいだと、そう思った。

27. その手からは逃れられない —Fear is

right here—

〈11:57〉

端末に映されていたUAVからの映像も途切れたことで無援になった現在。

全員でダムからからがら脱出し、生い茂る森林内で一時腰を下ろしたあとで負傷したペチエングの容態を他の者達に診てもらっている。その間にローガンはグローザから自分の拳銃である『P226』を受け取って使えなくともカモフラージュとして取っておいていた『ベレッタM92F』をその場で投棄。ヘルメットと煙草臭かったバラクラバも外し、周囲の木々で浄化されて新鮮に思える空気を肺いっぱい吸い込んだ。

所持している弾倉も取替え、周辺を警戒しているトンプソンとベクターがあともう少いで戻ってくるのを腕時計を見て確認した。

「ローガンさん、応急処置だけではありませんが終わりました。一先ず急に危篤に戻ることはありません」

「そうか、あいつの具合はどうなっている？ 戦術人形でも撃たれたらマズい所が一つや

二つはあるだろ？」

「はい、人間と同じく頭部や心臓がある胸部を撃たれたら致命傷になります。電脳とコアが損傷した場合は私達も死を覚悟することになりますね」

「となると、ペチエネグの奴は……」

「胸部を撃たれましたが、幸いなことにコアに傷がついていません。ですが早く基地に戻らなければ、彼女の容態は悪化していつて……」

傷の具合を診ていたG36cから伝えられたことから、やはりペチエネグの容態は芳しくないらしい。先の戦闘でどうみても予断を許さないそれを見てなんとなくそうではないかと思っていたが、やはり良くない方に運気が傾いた。

彼女の肩越しにペチエネグの方を見みると、やはり患部を処置されているのにも拘らず苦しうに肩で息している。傍にいるMG5が励ますようにして声を掛けているが、もう意識も朦朧としているようで反応が返ってきていない。仰向けに寝かされている彼女を見たことで、自分の判断は間違っていたのかとも思いトラウマが脳裏に呼び起こされた。

あの時の滝であのようにするしかなかったとはいえ、その前に別の選択肢を取って入れば扱われることはなかったのではないかと。作戦を終えた後で自己問答を繰り返し、救えた者達から温かく迎えられたというのに。

こんな情けない自分を溜息に乗せて吐き出せたらどれほどよかったかと、無意識にローガンは深く息を吐いた。

「……大丈夫です、ローガンさん。あなたがいなかったらペチエネグさんではない、他の誰かと一緒に犠牲になっていたのかもしれない。彼女は重傷を負いましたが、それでもきちんとした処置を受ければまた戦えます」

「そう言ってもらえて嬉しいけどさ、やっぱり自分を責め立ててしまうよ。戦術人形に偉そうなことを言ってしまったけど、俺だって一人の兵士だ。『指揮官』なんてもんをハリーの代理でやっているけど、やっぱり俺が出した指示で傷ついた仲間を見たら、間違っていたんじゃないかって思っちゃまうよ」

「心配しないでください。私達の指揮官だって、最初は経験不足で焦ったりして的確に戦況を把握できていなくて危なげだったんですよ。そして命を拾ったようにして生還できた私達に頭を地面にこすりつけるほど謝ってきたんです。それが今では電子支援の操作や指示までもを並行してできるようになっていくんですから。私達の為にも懸命に戦ってくださいているあなたであればいつかはできるはずですよ」

「……サンキュー。これからのことにちよつと臆病になって勇気づけられたよ。もう少し休憩したらペチエネグの奴も動かさないとだし準備してMG5を手伝ってやってくれ」

優しい微笑みと共に贈られたG36cの言葉にローガンは礼を言って指示、彼女は嫌な顔をせずに戻って行った。

体内に残っていた悪い気を短く一息に吐き出し、バシッ！と左手の掌に右手の拳を思いつき回数打ち付ける。痛みが掌を貫通して甲にまで響いてきたところでこれからどうするべきか考えた。

まずは把握できている範囲での状況整理。

現状、ダムの麓の方はハイテク部隊に制圧されていると見た方が良い。ダム内部で交戦した四人であれだけの実力を発揮して見せたのだから、戦術人形である彼女達とは互角以上に渡り合える。そうであるのなら人間である傭兵たちの相手など容易いだろう。UAVで最後に観測できた画像としては、歩兵である彼らが次に相手にしたのは一輛の戦車であり、こちらはアリが一方的に自分達よりも巨大な獲物を数で勝るようにしていた。観測した方角の遠くの方から何かが爆発した音が聞こえてきたので手段はわからないが破壊したのだろう。戦闘ヘリの方はどうなっているのかがわからないが、いずれにしても自分達でもハイテク部隊の彼らのどちらを見つけても容赦なく撃つてきてもおかしくない。

次にそのような状況下で自分達が勝利に当たる条件。

さらに予期せぬ事態により弾薬のみならず消耗が激しいので、そこからして今回ばか

りは逃げるが勝ちだ。ここから誰一人として犠牲を出さずに離脱してハリリーの元に帰還して報告、そして次の戦いには万全の状態で臨む。その作戦にはローガンも参加するつもりだ。

そして、その勝利条件を達成しなければならぬのに必要なことは言わずもがな、救援ヘリの要請だ。

無線は繋がらなくなったことは、基地にいるハリリーの方でも把握できている筈だ。手を配をしてきているだろうが、大まかな位置が分かるだけで自分達がいる細かい座標まではわからない。であれば、どのようにして連絡を取れるようにすればいいのか。

「難しい顔をしているわね。これからすべきことを悩んでいるのかしら？」

「その通りだよ、ここから全員で逃げ出せる方法を探しているんだ。暇ならお前の知恵を貸してくれ」

「いいわよ、私だつてここで無様に朽ち果てるつもりはない。それで、どこまで考えたのかしら？」

「ああ、まずは……」

眉間に皺を寄せていたローガンの肩に手を乗せて前に回り込んできたのはグローザだった。彼女がヘリアンと本部から基地に到着した五日前はこのような戦地で意見を交わすことはないと考えていた。それが今では互いに鋭い棘のように抱いている思い

はあれど、それを前面に出しては肝心な今を乗り切ることとはできないということだ。相談しているのだ。

人生、何があるか分からないというが、本当にその通りだなとも思う。雨降って地固まるということにはならずとも、同一の目的の為に頭をフル回転させているのだから。

「やっぱり離脱するにはジャミングが曲者ね。対処するとして一番先に頭に浮かぶのは装置の配置位置を割り出して爆弾を設置して破壊することだけど、あなたはそう考えていないんですよ？」

「ああ、その装置をここに持ち出した連中の腕がいいしそれをするのにペチエネグの容態の事で時間がない。迅速にやるのだとしてもリスクがありすぎる」

「そう考えて問題ないわ、私もこの一案は採用する気なんてさらさらないし」

ジャミング装置の在処がわからないので偵察して敵の目を避けつつ爆破。言うのは簡単ではあるが、陽が燦々と照っている今の時間帯で実際にやってみて成功する可能性は極めて低い。せいぜいどこかで見つかりながらも、C4爆弾を設置して自決するぐらいだ。グローザの言う通り、ローガンもそれでは何の意味もないので実行するつもりはない。

そこでローガンは近くの木に立て掛けているグリップと引き金が付いているような見た目の筒を顎でしゃくった。

「鹵獲しているあれで遠くから破壊するってのはできなくはないが……それでも確実性は薄い、最終手段になるな」

「言うまでもないけど、ジャミング装置はどこにあるかがわかっていない。陸に置かれているのか、それともあのステルスヘリに積んだままでいるのかもわかっていないわ。発射した際に自分から位置を晒すことにもなるのだし、自殺行為に等しいわよ」

「そんなに睨むなよ、俺だつて最初つから良い案とは思つてない。それにそういう外的な要因以外にあれ自体にも問題があるんだし、手段が他に見当たらなければいい」

ローガンが死に絶えた傭兵から鹵獲したロケットランチャーの『Mk153』。肩撃ち式多目的強襲兵器を英語にし、SMAWというアルファベット四文字で略されるそれは2001年から米軍で運用され始めた兵器である。発射したらまっすぐ、尚且つ他のロケットランチャーの弾頭よりも高速で飛ぶといった特徴がある。装填できる弾頭の種類も様々で、戦車のみならず焼夷弾の装填も可能である。それでローガンが問題としているのは、『Mk153』の照準器だ。本体の方は大丈夫だったのだが、戦車の破壊におけるC4爆弾の爆破で損傷し使えなくなっていたのだった。その為、『Mk153』に搭載されていた誘導機能は失われ、ステルスヘリのような動いている物に対して命中させるには難しいといえる。もちろん照準器を外したことで、本体に備わっているサイトシステムで撃つことはできるが前述のとおり無誘導である。

とすればどうしたものかと、腕時計を一瞥してローガンは唸り始める。するとそこで、訓練施設の説明で知り合ったグリズリーがこちらに歩いてきた。

「えくと、ローガン。一つ意見させてもらっていいかな？」

「なんだ？」

「装置の破壊は、必ずやらなければならない事なの？」

そこでローガンは目が点になった。この戦術人形の少女は、今なんと？

「えくと……説明してくれるかグリズリー？」

「うん。ふと思ったんですけどさ、ジャミング装置はきつとまだ未完成じゃないではないかと思つたのよ。完璧に妨害するといふのであれば近接通信もできない筈なのにできたんだから。となれば、広範囲に及ぼすこともまだできていないことも考えられない？ 私達が若干時間をかけて徒歩で離れて行つても、通常よりもマシなぐらゐに」

なるほど、たしかに考えられなくもない、とローガンは顎に手を当てる。通信状況がイエローやレッドになりながらもまだアルファよりも近場にいたブラボーとチャーリーの各員に接続できたことから、まだ不完全な部分があるのであればそこに活路を見出せる。

「そうなるよ、ここから交戦を避けて徒歩で突破するというのが最善か？」

「そうじゃないかしら。ここら辺はチャーリーが偵察していたこともあつて地形を概ね

把握していると思うし、聞いてみたら安定したルートを進めるかも」

「だったらグリズリー、SV98に説明しておいてくれるか。俺達はそろそろ戻ってくるトンブソン達にしておく」

「わかった、そっちはよろしく」

頷いたグリズリーがマガジンの確認をすいつつもペチエネグを心配をしているスナイパー達の方に駆けていった。それを見送ったローガンだったが、自分の向かい側にいるグローザが浮かない顔をしているのに気付く。彼女にしては随分と考え込んでいる。二日目のパトロールをし終わって帰還した時にも声に出さずとも唸っているかのようだったが、今のグローザはそれ以上であつた。

「どうした、まだ何か分からないことがあるのか？」

「いえ、ジャミング装置なのにそこを疎かにするのはあり得るのかと思つたの。もしジャミングを主目的とした装置であれば、彼女の言う通り一切通信ができなかつたはずよ」

「……たしかにそうだな。光学迷彩にライオットシールドを展開できるデバイス、あそこまで開発できていたのであれば詰めが甘いことなんて考えにくい」

「EMPで一時的に無力化したにしても電子機器が復帰するのが早かつたわ。たぶんデバイスで復活させる機能にも優先順位があるんじゃないかしら」

グローザが引つかかっているように、ジャミングを念頭にしているのであればその強度を限界まで上げて敵を困らせるのが正解だろう。ノイズだけを通信機から発せさせるのがジャミングだというのに、それを中途半端にしている。ローガンにもこのような電子的な妨害にあつたことは少なからずあるが、どれもが他の隊との連絡が取れず全体的にパニックになりそうになっていた。

自分だけの頭で考えるにしても限界がある。同じ方向からの考えでもだ。

一旦隅に置いたローガンはグローザにふと別で気になったことを聞いてみることにした。

「なあグローザ、敵の連携を崩す以外で自分達が有利に動けるようにする材料ってのは何が思い浮かぶ？」

「敵から情報を盗むことがまず一つね。敵部隊の人数に配置や目的、分刻みで決めている行程だとか色々。効率よく潜入する前にそれを予め知っておくともとも渉るわ」

「偽の情報かどうかの判別のやり方は？中には予見して全く違うことを散らしていることもあり得るけど」

「……まさかだけど、私から技能を盗むつもり？」

「そうじゃねえよ。だけどさ、他に気になったことがあるんだよ。俺達がダムの中で傭兵たちと戦ってあまり時間が経たないうちにあいつらが来た。あまりにも早すぎない

か？」

通路にて傭兵たちと交戦し、制圧してからアルファと合流した。合流した後であるのハイテク、いや怨霊部隊との連戦になったが、数分しかなくインターバルが短い。あの怨霊部隊が自分達とあまり変わらないタイミングでダムの中に進んでおり、偶然出くわしたと言つてしまえばそれでお終いではある。

しかしもしもの話だが、アルファと合流するまで自分達が泳がされていたとしたらどうだろうか。効率よく一纏めに一網打尽できるのであれば、ローガンも標的としている人物を本人の思うままに行動させ、用がなくなれば捕えるなりその場で片付ける。ちょうど数十分前にそのようにさせられたようにダム内部に残っていた傭兵たちと交戦して制圧、そして無事合流した。そのタイミングで自分達が動いて始末するという流れになる。

ではそうするとして、ローガン達を泳がせるきっかけはなにか。それならグローザが言つたことで、情報の奪取だ。自分達が三部隊内で情報を共有するのに使用した物は？ 言うまでもない、ローガンも片耳に付けているイヤホンとマイクが一体になっている無線機だ。

「まさか、俺達の無線が盗聴されているのか？」

「……なるほど、たしかにそう考えられもするわね。グリフィンの無線も簡単に盗聴さ

れない様に暗号化しているけど、鉄血のハイエンドモデルが回線に割り込めたりするのだもの。認めざるを得ないけどグリフィンの暗号レベルは低いわ」

歯噛みしてしまいたくなる思いだった。まだ確証はないが、もしこちらの回線の会話を静かに聞かれ怨霊部隊の全員に知られているのだとしたら、こちらは後手に回され続ける。何かしらかの打開策を見つけないければ、攻め手として攻撃できないのは明らかだ。

とはいえ、ここで無線機を捨てることはできない。情報共有や連携、基地に帰還するには必要不可欠で今の戦場には欠かせないものだ。本当にそうなのかどうかはまだわからないが、今回の騒動で不用意に使うことはできない。

「朗報だぞ、ローガン！」

ダツダツダツ！とそこでここから一時離れていたトンブソンとベクターが双眼鏡を片手に走って戻ってきた。その表情は光明を得たりといったように、サングラスから覗ける爛々とした光が瞳の中に見える。

「ダムの前、ここから北東の方にだがグリフィンのマークが刻まれているヘリが見えた。なんとなくではあるだろうがボスが察してくれたんだ！」

「グリフィンのヘリが来ているのか？今はどこに!？」

「私達が見つけた時はこの一帯を大きく巡回していた。向こうがどうなっているのかは

わからないけど、今から早く動ければピックしてくれと思う」

そうなるかどうかと思う。無線機の無力化を狙った装置の破壊をせずにここから徒歩で離れ、怨霊部隊の襲撃がないとわかるところにまで到達してから迎えを要請するのが安全策だ。だがこれにもここから徒歩で離れるその道中で徘徊している鉄血と遭遇する可能性もあるという問題がある。鉄血兵の排除に問題がないにしてもその銃声を聞きつけて追撃を仕掛けられることもあるのだから、この方法を取っても確実に離脱できるわけではない。

それでもそれはここらで来てくれたヘリに回収してもらうよりも危険性は低い、というメリットはある。

ちらり、とローガンはもう一度ペチエネグの方を見つめる。

戦術人形にも顔色というのがある。それはAR小隊の皆と出会う前にも404小隊の面子とコンタクトを取った時に知った。人間と同じように気持ちや表面に出すことから、ローガンも自分達と相違ない存在だと思っている。そんな存在の一人である彼女が荒い息をし汗を流している、その姿を見てローガンはもう迷いを振り切れた。

グローザを含めた、動ける戦術人形たちが自分を見ている。現場にしても『指揮官』という役職は本当に自分に似合わないし、降りかかる重いプレッシャーからして逃げ出してしまいたいと思ってしまうが、逃げ出せば自分だけでなく信じてくれている彼女達を

裏切つて死なせてしまうことになる。

それだけは絶対にしてはならない、ローガンはそう胸に焼きつけて口を開いた。
「チャーリー、フレアガンは持つてないか？」

〈12:35〉

ローガンを含めて今日の朝方に投入された部隊を除いて、偵察を昨晚からしていたS
V98達が選んだ場所は全体的に開けた草原だった。秋の色に染まつてきている木々
の葉とは違い、ここで生えている雑草はまだ暖色に染まり切っていない。

負傷者のペチエネグとダムの作業員たち、ダム内部で捕えた傭兵たちを扇形に展開している自分達の後方で待機させたこの場に神はいるのかどうかを考えていたりしないほど、ローガンは神頼みを当てにしていない。精々逆境に屈せず切り抜けたのは偶然や悪運に救われたと思うぐらいだ。そんな神話でしかないような本当にいるかどうか怪しい存在に祈る暇があるのなら、体力トレーニングなどして体を鍛えることに時間を回している兵士。そんなローガンからすれば、祈りたければ勝手にしてくれ、というスタンスである。

広がった陣形内でローガンは『ハニーバジャー』のマガジン内の弾薬を確認して戻した。しゃがんでいる足元に予備のマガジンやロケット弾を装填している状態の『Mk153』も置いておき、なにかあればすぐに拾って撃てるようにグリップを自分の方に向けておく。起爆装置を手を持っておいて匍匐姿勢になってしまった。

そして事前に決めた時間になったタイミングで、保護対象になっている人達よりも後方で高さ二メートルはある岩の方から赤い火の玉が撃ち上がる。曇り空になってきた上空の上って行つたそれは次第に消えたが、良い意味でも悪い意味でも目立ってくれただろう。

(さて、どうくる……?)

ガサガサと風で揺らされた草同士が擦れる音以外には自分の呼吸音しか耳に入らな

い。展開している中でローガンがいるのはは右翼の中央で、雑草で隠れているせいで見えないが左右にはグローザとベクターがいる。それなのにここにいるのは自分だけのよな錯覚に陥る。そう思い込んでしまうのは次第に聞こえてくる自分の心臓の音のせい、それともこの目で見て脳に焼き付けたあの怨霊に対する恐怖のせいかわからない。たしかなのは、過去に鉄血の大部隊と戦った時に感じていたのと同等の感情の波に飲まれそうになっていることだけだ。

彼自身も言っているが、ローガンも一人の兵士であり人間だ。感情表現が欠如していることがない、現代ならどこにでもいるような存在である彼でもやはり恐怖を感じることはある。頭にきたり慄いたりすることはあっても、グリフィンの人形達との会話などで感じているのは暖色に表現される感覚。命の危機で手足の先にまで伝わっている、まったくの真逆であるそれを左手で掴んで抑え込むようにしてみる。自分で触れているのは右肩だというのに、指先は自分の体に埋まって精神に巢食おうとしている感情に触れてるだけだと、現実からかけ離れた妄想に沈んでしまいそうだ。

頭がおかしくなりそうだった。こめかみがキリキリと締め付けてくるように感じ、ローガンは顔を顰めそうだった。

帰還して報告した後は一時でもいいので少しだけ休み、仮眠を取ったらコーヒーを飲んでハリーと話し合う。そうしなければ、想像しているよりも最悪な事態になりかねな

いのだから。

でもその前に、あいつらと少しだけでも話をするぐらい罰は当たらないだろう。

考えられる帰ってきたことによる報酬で口元を緩め、銃のグリップを握り直した時だった。

バラバララララララッ!というローターが回っているエンジン音が聞こえてくる。次第に大きく聞こえてくるそれらは近くを通りかかったようにしか今はまだ聞こえない。敵によるものなのか、それとも待ち望んでいる者達からの救いの手なのか。このエリアで潜んでいる仲間達と同じく、ローガンもじつと待ち続ける。

やがて真つ直ぐこちらに來たのだとわかってきた頃には、ノイズが徐々に薄れてきた無線で知っている声が聞こえてきていた。

『……ますか?こちらAR小隊リーダー、M4A1です。私の声が聞こえる方、いるのでしたら何かしらかのサインをお願いします』

疑う余地は全くなかった。ローガンがまず周囲を警戒しながら立ち上がると、手筈通り79式も立ち上がりはつきりと輪郭まで見えてきたヘリに手を大きく振って見せた。

『聞こえていますかアルファ、ブラボーリーダー!こちらでも肉眼でそちらを確認しています!』

「はい、聞こえていますしこちらからも見えていますよM4!来てくれて助かりました

！」

飛んできているヘリの機数は二つ。どちらも武装を積んでいない輸送ヘリの『CH-47』でチヌークと言われている機体で真つ直ぐこちらに向かってきた。

チヌークに積載能力からして搭乗できる人員を鑑みても妥当な機数だ。現地にいる部隊数からすると三機だと思ってしまうが、内部で必要なことをしておけば一機でも五十五人乗れる。他よりも資源があるグリフィンでも、可能であれば物資の浪費は避けたいところなのだから正解と言える判断だ。

こちらの上空に到達したところでホバリングした、二機のどちらかに乗っているM4からまた無線で声が聞こえてくる。

『アルファリーダー、そちらの状況の報告を』

「民間人数名と捕虜が二名、負傷者が一人です！その人形の容態が悪いのでまずそつちを優先してください！」

『了解。広さが問題がある為、一機ずつ着陸し搬入口を開けます。あとはそちらか速やかに搭乗をお願いします！』

前衛として布陣していた自分達の後方に着陸することになるので、保護対象の彼らを入形全員でそちらから一時退避させる。残っている各員のダミーを付いていたポジションに残した状態を見守っていると、ローガンの無線機にM4とは別の回線が接続さ

れた。端末で接続先を見る前ではあったが、なんとなくわかっていたし声を聞いたことで誰なのかは聞くまでもない。

『ローガン、あなたは大丈夫なの？』

「なんとかな。俺に大きい怪我はないけど、全体的に見れば戦力を大分削られたよ。お前らが来てくれて助かった、AR15」

『そう……よかつたわ……』

ローガンの返答を聞いた少女、AR15が無線越しであつてもわかるほど安堵の息を吐いているのが聞こえてくる。

それほど心配してくれていたことに嬉しく思えばいいのか、それとも茶々を入れてからかつてやつてもいいのかに少しだけ迷った。だが通信が出来なくなる、戦況が把握できなくなつてそこに友人がいるのであれば心がざわつくことにはなる。AR15はそれで気を揉んでくれたのだから後者を選ぼうとローガンは思わなかった。

着陸してハッチが開いたそこで機内から出てきたROとM16が武器がない、戦術を持たない人達を中に誘導していった。そして自分では動けないペチエネグを背負つたMG5と彼女を後ろから支える、元は彼女と同郷のPTRDが一緒に乗り込んでいったのを見送る。

『話を聞いた時は少し驚いたわ。無線妨害にUAVの機能不全、これまでであつてもど

ちらか片方だけだったから疑ったわよ』

「今は仕方ないし詳しいことは後で話すけどな、今回はやたらに無線で話さない方が良い。まだ確認できていないけど、絡んできた奴らはこつちの話を盗聴している可能性がある」

『わかったわ。戻ったら指揮官と一緒に聞かせてもらおうことにするわね』

やがてヘリ一機への乗り込みが終わり、ハッチが閉まって離陸しようとし始めた。閉まる少し前に搭乗していたA R小隊の二人がこちらに手を振ったりしていたのでこちらからも振り返す。閉まり切ったそのヘリは高度を取ると少し離れたところで再びホバリングを開始。そして今度はA R 15もいる残りのA R小隊のヘリが降下してくる。

そして自分達も帰れると思った時だった。この場の全員に共有で繋がったオープン回線にK a r 9 kの声が飛び込んできたのは。

「ローガンさん、今ですー！」

何が、と聞くことはなかった。すぐにローガンは緩やかにとき解れていた緊張感を編みなおし、手元に用意していた起爆装置のスイッチを押す。事前に仕掛けた罠であるC 4爆弾の起爆し、扇形に連鎖爆発が草原の上で発生して衝撃が地面を揺らした。

炸薬量が仕掛けていた数だけ多く、加えて距離も遠くなかったため耳鳴りがするものの視覚までは損なわれていない。そして手筈通りにE M Pグレネードを預けていた9

5式とトンプソンが叫びながら起動させてそれぞれ左右に投じた。指定していた『範囲』と『効力』はどちらとも三。

ローガンはすぐに片膝をついた戦闘体勢になり、EMPグレネードから発せられた電磁パルスによって装備が無力化されただろう兵士を見据える用意を行った。各人形たちもそれぞれの配置にまた戻ったタイミングで、眼前に怨霊達が姿を現した。C4爆弾によるトラップの効果はあつたらしく、爆破によって吹っ飛ばされて行動不能になったりと様々。ただ既に体勢を立て直すように起き上がろうとしていたので、この好機を逃す他はなかった。

「いまだ、全員撃て！ だけど闇雲に撃って弾を無駄にするなよ！」

交戦開始し、屠れる者から撃つて数を減らしていく。バラバラバラバラバラ！ とローガンの左右からも銃声が轟いて一人、また一人と怨霊たちを無に帰していった。しかしやはりというべきか、トラップの影響が少ない、もしくは受けずにすんだ敵兵士の対応速度は尋常ではなかった。すぐに近くの木々に身を隠すか、さっきのローガン達のように草むらに伏せて一時的にやり過ぎすなどして対応してくる。そして射撃の合間を縫って反撃を行いこちらの戦力を減らしてもきた。ヘルメットを掠める銃撃でヒヤリとする暇もないローガンはリロードする為草むらに伏せて装填していたマガジンを抜いて新しいそれを叩きこむ。そして立ち上がる動作と一緒にもう一度引き金を引

き、隠れる位置を変えようと走っていた一人を排除。さらにこちらの状況を窺おうと頭を覗かせていた一人も逃さずに撃ち抜く。

銃声によって掻き消されない様に、ローガンは出せるだけの音量で無線機に叫んだ。

「着陸を急いでくれ、こつちも長くは持たない！」

『了解、少々荒い着陸になるが仕方ない！』

『かまわないから、急いで早く！ハッチを開いて私達も援護するから、頭につけて皆！』

パイロットからの返答に続いて同じ機体に乗っているらしいSOPIIの声が返ってくる。

後ろを振り返りはしなかったが、背中に響いて届いてくる銃声の数が増えたことが察せられた。完全に地に着いたかどうかは定かではなく、それを確認するのにも時間が惜しすぎる。集中力を一時でも抜けば死する、今回は尚更だ。

倒している怨霊の数を数えている暇もなく、『ハニーバジャー』の残りの弾倉は装填しているのを含めればあと二つだということとここからの離脱のプラン、展開している仲間という三つの事しか頭にない。

『アルファ並びにブラボーリーダーへ通達。チャーリーチーム、乗り込み完了しました！』

『ブラボーリーダー、スモークはもうないのですか!?!』

「生憎だけど効果がなみたいだ! スモークを使っても俺達が射撃できなくなるだけのデメリツトしかない!」

ペチエネグが負傷したあの時、充満しだしていた煙で怨霊達の行動を見えていなかったがあまりにも正確無比な射撃だった。交戦している時のような正確性ではなく、必中を狙ったようなあれの要因にはすぐに思い当った。目の部分が突起しているあのゴールの機能の中に熱源を感じし表示するサーマルモードがあっても不思議ではない。見た目としても傭兵たちが付けていた視覚保護の物ではなく、如何にも機器を搭載していることを表しているようなのだからその可能性はある。

『燃料に余裕がないぞ、全員急いで乗り込め!』

「RPGを撃って時間を稼ぐ! そうしたら全員全力でヘリの方に向かえ!」

こうして戦い続けても勝って制圧するどころか膠着状態にはならない。こちらは弾薬がほぼなくなつてきており、ダミーの数が減らされている人形もほとんどだ。対してグリフィンを追い越した技術と万端の装備で臨んできている怨霊達。戦力差が明白に出ている現状じゃやどう逆立ちしても夢物語の結末どころか自分達の撤退までが叶わなくなる。

時間をかけているだけだとこちらが一方的に押し潰されるのを待っているだけだと、

ローガンはストラップで繋げている『ハニーバジャー』の安全装置につまみを動かすと、足元に転がしたままにしている『Mk153』を拾い上げた。

無線機を使わず、この場にいる人形達全員に聞こえるように声を張り上げながら肩に担ぎあげる。

「チャンスは一回だが、人形のお前なら牽制射撃は考えずに走ればあつという間だろ
！」

『でもローガン、あなたは……！』

「俺の事はいい！」

セーフティを外し、電子機器による照準器を取り外した『Mk153』本来のサイトで覗き込んだローガンは数が集中している方に銃口を向ける。自分達が展開している陣形からして、発射した時に生じるバックブラストを誰かが浴びる心配はない。

誰かが自分の名を言いながら異を唱えようとしたが、生き延びた場合の後の説教を覚悟しつつローガンは発射した。

バアアアアアアアアアアン！とロケット弾を撃ち出した途端に『ハニーバジャー』や『P226』、これまで使った銃器よりもとてつもない反動が生じ銃口から跳ね上がった。随分前にグリフィンではないどこかの演習訓練で使ったのと同じかどうかはもう覚えていない。ただその時と違うのは担いでいるこのバズーカの反動に釣ら

れて転倒しなかったことぐらいだ。

ドオオオオオン！と装填されていた汎用性に富んだ両用弾が地面に着弾し、近場にいた数名の怨霊を消し飛ばした。背後のヘリからは別の風圧がローガンの顔面を叩き、さらに周囲へと広がっていく。それに目を細めながらもローガンは右肩の鈍痛を堪えながらその場に用済みとなった兵器を捨て無線機に向かつて叫んだ。

「全員どんな手を使っても良い、振り返らずに走ってここから退くぞ！AR小隊、援護を頼む！」

『了解……！AR15、SOPHI、ダミーも含めて幅広く展開し全員の到達まで援護射撃！あらゆる手で皆がここに来るまで撃ち続けて！』

いつもの手順であるのであれば背を向けて走る前に眼前にスモークを投げるが今回はそれが意味を成さない。数メートル横のグローザとベクターが走り出したようにローガンも駆けだそうとしたが、そこで異変が起きた。

ロケット弾を撃ち出す前までは持久戦を仕掛けているような動きから、怨霊全員が身をさらけ出すも距離を詰めながら撃ってきたのである。AR小隊による誰かの銃撃で隣の兵士が倒れてもお構いなしで、動揺したような様子も見せずにいるその姿を肩越しに見たローガンはぞつとした。

「くそ……！」

「頑張つてほら、急いで早く！」

「ベクターは前を走つて、私は彼の後ろに付く！」

ダンダンッ！とたまらずにホルスターから抜いた『P226』を片手撃ちで闇雲に撃つて命中させるが同じような結果だった。グローザが自分の背後に戻つて拳銃を撃ち放ち、前にいるベクターが所持している焼夷手榴弾を投げて自分にもっと早く来るように手招きしてくるがとうの昔に持てるだけの脚力は出している。息をすることを長い間忘れてしまつていたかのように、肺に酸素を取り込もうとすると走る速度が落ちていく感覚になつてもきた。それでも走り続けるがまだ距離がある、着陸地点を確保する為に広く展開しすぎたのかもしれない。

歯を食いしばりながら足を動かし、自分の背中に手を伸ばして掴もうとしている亡者を払つてくれている少女達の元にまで向かう。人形の彼女達のダミーが壊れていくのを目にしながらも必死に。

やっとあと三メートルというところにまで到達したところで桃髪の少女がベクターを、そして自分の元にまで走り寄つてきてくれた。

「ローガン、こつちよ……！」

自分を庇うようにして後ろに立つて怨霊達に鋭い眼光を向けて発砲しているARRI 5に並ぶようにグローザも到着した。並び立ちながら彼女達は同じ速度で後退しながら

らもう姿が見えなくなつてきている怨霊達に鉛玉を放ち続けている。

「どうやらローガン達が乗り込む人員で最後だったらしい。ダミーがもう片手で数えられる程度しかいなくなつたものの、本体である彼女達はヘリの奥の方に詰めていた。

AR15に続いてM4からの電子支援を直接受けたSOPRIが榴弾を『M203』で撃つ。手馴れている手つきで入れ替えてもう一度発射し、得られる結果を見ることなくこちらの方に引き返してきた。

「ブラックバード、全員乗りました！」

『ヒヤヒヤしながら来るのを待ち侘びてたぞ。掴まれるところがあるなら遠慮なく掴んでいろよ！』

ヘリのハッチが閉まり出すのと同時に慣れないうちは不快に感じてしまう浮遊感がローガンを持ち上げるようにして浸食したが、それ以上にここから離れられることによる安心で打ち消された。

ハッチが閉まるまでの時間稼ぎとして、限られた視界内で見えている怨霊達に銃撃で応戦しているAR小隊の彼女達の邪魔にならない様にしながら、グローザが狙っている敵兵を『P226』で撃つ。彼女が持つ『マカロフ』のストッピングパワーでは確実に倒しきれないと判断した故でのそれがどう思われたのかはわからないが、横目で一瞥されただけだったので悪いようには思われていない筈だ。

最低限の高度を得た機体が前進し始める。緊迫していた状況から脱しはしたが、まだ終わってはいない。

『M4、近接スキャンで敵の大部隊が接近しているのを感知。奴らが何かを始めようとしている』

「姉さん、今はそれよりもここから離脱しなければならぬわ。思ったよりも私達のダメージへのダメージもある。通信ができ次第、指揮官に報告して本腰を入れて対処しないと」

『たしかにそうだな。それとローガン、もう聞かれているのかもしれないが引つかかることは何かないのか』

M4とM16との会話から急に話を振られはしたが、心当たりは本当にローガンになり。精々見たままの事を共有することしかできない。

「俺にはなにも。だけど最新鋭ともいえる電子装備があるんじゃないや民兵や傭兵とは全くの別物だ」

「あの動きと連携、そして光学迷彩。近未来に焦点を当てた特殊部隊というのが私の見解ですが……」

『いや、それ以上の存在だよM4。戦術人形わたしたちに対しても物怖じしないどころかゴリ押しではない戦法で食いついて見せた。特殊訓練で鍛えられている連中とも一線を引いて

いる』

「だろうな。それに味方が倒れても動じずにフォーメーションを崩さずに撃ってきていた。どんなメンタルトレーニングをしていてもどこかで動揺することはある。だというのにあそこまで感情が無いかのような本当の機械みたいに動いていたんだ人間ならまともじゃない」

『奴らの中身が正規軍が使用している自律人形の可能性はあるにはあるがその線も薄い。彼らが求めている人形の戦闘機能に該当しない動きからして、ほぼ間違いなくマントの内側で動いているのは人間だ。I. O. Pが私達の知らないところで関与していることもあり得るがな……』

考えれば考えるほどわからなくなってくる。統制が取れている敵部隊との交戦経験はあっても鉄血とは違う、姿を晦ましてもずっと隠れているのではなく一度でも発砲すれば交戦を開始するあの部隊を見るのは初めてだ。

グリフィンにいる彼女達は勿論、ローガンもそうである。敵として見据える者に対して恐れを抱くことがあっても、それが大きなプレッシャーとなりのしかかかってきたことはない。

「だけど撃てば殺せるから勝てなくはないよ。それにああして身を曝け出した方が私達はやりやすいでしょ?」

「もつと頭を使いなさいよS O P I I。それを逆手に取ってくる戦法を取ってくることで、奴等ならあり得るの。数に対抗するのならこちら頭数をそれ以上にしような単純なことじゃなく変則的なことだつてやってきかねないわ。私達でも思いつかない、奇想天外な発想で」

『あの敵を見くびるつもりはないけど慎重になりすぎてないかしらA R I 5。たしかに異質だけど勝てない敵ではないわ。ローガンさんがやっていたようにE M P グレネードを用意して光学迷彩を無力化、そして堅実に交戦する為のきちんとした準備をして臨めば制圧できる筈よ』

「そーだそーだー、R Oの言う通りーぶーぶー!」

「戦場^{いくさば}じゃマニュアルなんてのが存在しないと同様に『こうすれば勝てる』といった規範に基づいた確たる根拠はないわ。可能性がある、それが高いだけで成功するのは決して十割にはならない。事細かな全体図が分かっている以上は思い込みや驕りは捨てた方が良いわよ、S O P I I?」

「ぶうぶうぶうぶうぶうぶうぶう!」

ふくれっ面になったS O P I Iがその赤い目でA R I 5の言うことに腹を立てたようにしている様を見て、ローガンは思わず笑ってしまった。A R I 5の言うことはもつともだとか、耳を傾けていたこちらとしても頷くことはあったが最後のS O P I Iの抗

議の声に思わず噴き出したのである。身体を休めることはできても精神的には集中力を切らすことはできなかつたので限界が来たのだろうが、もう今はそれを置いておこう。

肩を震わせて声押し殺してはいたものの、それに気づいたS O P I I が予先をA R I 5 からローガンに向けた。

「ローガン、何が可笑しいのさ〜!」

「いや、な〜んかお前がそうしていると本当に仔犬がわんわん吠えてるみたいだなとか思ってたな」

「わたしは犬じゃないしワンワン吠えていないもん! A R I 5 が言ってることにムカついているだけだもん!」

「それはわかっているよ。でも要求吠えとか抗議をするには小動物は色んなことをするのはわかっているだろ。俺かすればS O P I I、今のお前は唸っている仔犬そのものなんだよわんわん」

文字に起こした吠え声を口から発する時だけ声を高くしてみると、顔を赤くしてぶるぶる震えていたS O P I I のボルテージが臨界点に達しようとしているのが目に見えて来ていた。

別に八つ当たり成分を含めているわけではないが、ローガンとしての砕けたコミュニ

ケーションを取りやすい戦術人形のランキング上位に彼女がいるのでからかうのをベースとした会話ができる。加減や引き際を覚えれば尚更で、決して先日のことを根に持っているわけではない。背中だけでなく右腕の銃創までにも一発もらったやり返しを、などとは決して。ローガンだってAR小隊の皆とは良好な仲でありたいのだから。……しかし、S O P I I が口をガツチンガツチンと鳴らし始めたのは予想できなかった。

「もう怒った！こうなったらローガンを頭からバクバクしちゃうぞガオオー！」
「おお、獣化への拍車がかかってきたなS O P I I！だけど俺だって大人しく食われたいするほど優しくねえぞバウバウ！」

果物をもぎ取るようにして両手の関節を曲げて構えたS O P I I相手にはもう後には引けない。ローガンも頭のどこかでは『バカなことをしているなく俺』とか考えていたりもしているが、ギアを入れ替えられた脳の活動はもう自身の意志では止まらない。他の人形に怒られても仕方ないが、こちとら戦車相手にも果敢に立ち向かって全員生還したんじや文句あるかわれえの構えである。

グリフィンが誇るエリート部隊に属する彼女達を除いて、打ち解けている方といえるトンプソンがやれやれと視界の端で呆れているのを脇目にしてローガンとS O P I I は取っ組み合いの姿勢を見せる。片や実力行使、もう一人はそういうのもやぶさかでは

けることとなった。

数分後、機体内部に備え付けられたシートに座ることを許されずに地べたで正座を強いられることとなった二人がそこにいた。

「わたし、悪くないもん……」

「口車に乗せられたとはいえ、先に物理的な手を出したのはあんたの方よ。考えを深めるだけじゃなくて感情の制御もできるようになりなさい」

「ぶー……AR15だってローガンに対して色々ときー……」

座禅組ませているのとどっちがキツいのかなー、と一時ボーっとしていたが、ローガンはリフレッシュユでできた頭でさっきまでの出来事を振り返ってみる。

ダムに向けて一週間前から進軍していた傭兵たちと兵器、そしてこちらにも実体があるのかすら怪しく思えるあの怨霊達。グリフィンの自分達が傭兵たちのことを嗅ぎ付けたのは先日のハイウエイ事件までに発展したあの後に得た情報があったからだ。それならば彼らはどうだろうか。どこから傭兵たちの存在を知ってどのようなメリツトが見込めるといふ理由でここに来た？

金であればこちらを揺すって巨額のそれを求めてくるだろう、だがそれだけでは力が物を言うようにもなってきた現代で生き抜くには難しい。資源ならなるほど、水力発電で得られる電気もあるし除染・浄水施設と一体になってもいるといふここを奪えれ

ば一石二鳥だ。しかしそれを主目的とするのなら近場に居住区があるようではいけない、あそこに住み着くには大分不便がある。

では他に何が思い当るだろうか。金や資源を別とした、人類が築いてきた文明も危うくなるどころか滅んでいるといつても過言ではない今の時代で生き抜くカードとなり得るもの。前述した二つ以外に、銃や弾薬といった直接実力行使に至れるのに有効な武器以外にも優位に立てる目に見えない物は昔から存在している。

「人間関係……個人……弱み……？」

たしかに該当する。ただしそれでは個人的で範囲が狭いため有効打になりにくい。その筋から揺さぶる相手のハリーのことを知れたとしても、鉄血だけでなく過激派の反社会的組織から指揮官の個人情報を守るためにグリフィンは誤情報をばら撒いていたりもするので信用性が怪しいからだ。

となれば、誤魔化しがないクリアな個人情報を要求するのだろうか。いや、それを本人から聞いてどうするという話だ。それでは時間を指定しない犯行の予告をしているようなもので意味をほとんど為さない。

では、何を要求してくる？

「いや……でもまさか……」

「……ローガン？」

泡沫のように浮かんだ可能性が捨てきれなくなつてローガンは考え込む。隣に同じ体勢でいるSOPHIEがこちらを訝しげに見てくるがそれすらも厭わずに自分の考察に入ろうとした。

そう五感の感覚が薄れそうになつていたその時、風の流れが発生し内から外へと流れていく。高度を取つたことによる冷気が入り込んできて変装としてまだ着ていた防弾チョッキ戦闘服の合間も縫つて侵入してくる。

原因はすぐに見つかった。頬を舐めるようにしてきた感覚の元を追つて行くと、ヘリのハッチが開かれようとしていたのである。

『おい、誰か悪戯で開けたのか!?!』

「私達の誰も開閉ボタンに触れていません！そちらからの操作ミスではないのですか!?!」

『こつちもそういう操作はしていない！押し間違えるにしても飛行操作とは全然別の所にあるのだから無理があるぞ!』

ブラックバードとM4の話が聞こえてくる傍らで、ハッチの一番近くにいたローガンは何かが入つてきたのを辛うじて視認した。それは段々と広がってくる空を背景にして屈んだ姿勢から立ち上がってくる。透明なそれが人型だと理解した途端、ボールが剥がれていき明確な輪郭が露になった。酸素マスクを追加で取り付けているその様相を

見て愕然としたローガンは呟いた。

「それじゃあ本当に憑いてきたようじゃねえかよ……!」

本物の怨霊に思えてきたローガンは半笑いになるしかなく突進してきたそれに対して交戦せざるを得なかったのだが、この最中のどこかで彼の意識は一時途絶えてしまっている。

28. 狂気の片鱗 —Bad feeling—

〈グリフィン北アメリカ支部の音声ログより再生〉

『それで……現場はどうなっているんですか？』

『一言で表すなら酷い以外にないわね。殺傷方法は銃殺でしょうけど、死体を弄んでいたようよ。四肢を分断したり爪を剥いだり色々』

『なんてことを……殺人を犯したのに飽きたらず、死者を遊び道具にするなんて許せない……！』

『どのような経緯があっても私は犯罪者相手に同情しないけど、ここまでのことをするだけのことをしてかしていたのこの被害者。先日の事件ではAR15に射撃されて死んだ仲間を見て投降したって聞いているけど』

『報告では確かにその通りです。ですが、それまでのことについてはまだ経歴を完全に調べていませんね。名前から洗い出せた出自を知ることが出来ましたが、ある時に突然と消えています。南米の生まれであることは確かなようですが……』

『技術がさらに発展して情報統制が取れているようになった、とか戯言を言った当人

を殴りたくなるわね。自分の脚で国を渡り歩こうとしている漂流者の足跡を追うことが出来ないなんてね』

『こちらは被害者の詳細を治安組織と共同で追います。そちらは？』

『現場に残されている手掛かりとなる証拠からして、その治安組織内に犯人がいる可能性が高いわ。犯行時刻に周囲に知られないようにサブレッサーをつけた拳銃で始末したりしているけど、その後の後始末がお粗末。血だまりに出来てる靴の形状が統一されている『ルックオーバー』の制服のそれと同じよ』

『であれば、各自の靴にDNA鑑定をすればいずれは……。時間がかかっても確実に追いつめられますよね』

『そうね、でもそれじゃ遅すぎる。その間に買い換えられたり捨てられたりすれば一発でアウト。それにそんな大きな変化があったりすればわかるかもしれないけど、ちょうど今日からは制服は新デザインの入替え時だもの。旧デザインのは各自で処分するように言われてるってことだし、これだけで追いつめていくのは難しいわね』

『監視カメラはどうなのですか？』

『ちょうど牢の中をあまりうつさないアングルで何者かが幽霊みたいに動いていたのは確認できたわ。何も無い所からサブレッサーじゃ無くせない硝煙が、そしてしばらくした後に赤い足跡が出てきたりと何も知らない人からすれば幽霊を疑うでしょうね』

『ですがあなたが言う通りに危険度が高い、この手の暗殺にも長けているという部隊が絡んでいるのであれば不可能ではないということですよ。でも足跡を消さずに現場から去るなんて……ひよつとしたらわざと残しているんじゃない?』

『あり得る話ね。罾を仕掛けて待ち伏せていることが十分に考えられけど、ここで退いたら事件解決にまで辿り着けないわ。スオミ、この近場に最近人の出入りがない所って割り出せるかしら?』

『時間ばかりですが出来ないことはありません。なにが狙いですか?』

『火のない所に煙は立たぬ、よ。何かしらかの原因がなければそれに伴ったことは起きない。それと火事を起こした犯人が惨事を見るのなら大抵どこにいるか知ってる?』

『事件発生現場、ですよ。消火活動や家事に怯えたりしている人を見て面白がったりする為に、犯行を犯した後で現場に戻るって……』

『そういうこと。今回は火じゃなくて銃による犯行だけど、ここまでのことをしているんだから感情や欲を優先してたりしてる、他に口封じだとかが目的だったとしてもあまり心理的には変わらないわ。ここを出入りしている治安組織の人間が何人もいるけど、『仕事』という理由を得ている人間が一人居る筈よ。そして、自分が所属している組織の出入を監視するのであればどこに拠点を置くといいかしら?』

『……だから近場で潜伏しているのだと考えたのです。何か大きな動きがあればすぐ

に撤収できる、それを無線とかじやなく確実に把握できるように』

『ええ、確証はないけどね。一歩ずつ前進よ、スオミ。こつちは他になにかないか探ってみたりするから、さつき言ったことをやっておいて頂戴』

『了解しました。少々お時間をくだされば探り当てます』

『お願い。それと話は変わるけどスオミ、ローガン達は今どうなってるか分かる?』

『残念ですがまだです。ジャミングで途中からもう……』

『そう……とにかくお願いね、スオミ。私達だけじゃ手が回り切らないからあなた達も頼りにしてるわよ。特に、ハリーに関してはおあなたをね』

『えっ、いきなり何を言ってるんです!?』

『そのままの意味よ。仲直りはできたけど、私は一度あの子を見捨ててしまったから見守ることぐらいいかできない。でも誰よりも時間を共有したあなたなら、ずっと支えられるだけの資格があるから』

『そんなことはありませんよ45さん!あなただつて……!』

『勘違いしないでねスオミ。別に悲観しているわけじゃないわ、むしろ喜ばしいのよ。ずっと副官を受け持っているあなたなら私は安心よ』

『それじゃあまるで、いついなくなっても良いと言ってるようなものじゃないですか!

私は嫌ですよ、あなたがいなくなるのも!』

『またこうして戻ってきたけど、私達は元々存在ノットしない部隊ファウンデッドで確たる居場所はないのよ。なければいいけど、いつか私達の所為で解決できない障害があったとしたら姿を消すつもりよ』

『そんな……!』

『それにね、もう私にだって心の拠り所はあるの。404じゃない別の所に。だから私だつてできることならしたくない。そうならないように、いざという時はあなたも力を貸してくれる?』

『もちろんですよ、その時は躊躇わずに言ってください。私もできることはやって尽力しますから』

『……ごめん、ありがとう。それじゃあまた後で』

『はい。ではわかり次第こちらから連絡します。気を付けてくださいね』

—再生終了—

<?? : ??>

浅瀬に漂っていた意識が浮上した。頭がボンヤリとするが熟睡していた時ほどの霧はかかっている。目を開ければくすんだ茶色の土が映り、耳からは鳥の鳴き声が聞こえてきてほどよく聴覚を刺激してくる。

長い間うつ伏せになっていた所為か体の節々が痛みを発しているが無視できない程ではない。そう思いながら体を起こしたが、パタパタと地面に何か滑り落ちた。それを見たローガンが頭部に手を当ててみるとグローブを填めたその片手を真っ赤に染め上げ、少なくとも血が自分の額から出ていることが窺えた。

「くそっ……」

周囲に敵影はないかを確認し、今のところは見受けられないので近くの木陰の方に向

かいしやがんだ。応急処置を行うべく、専用のキットをウエストポーチから取り出すと思いい出したようにして痛み出した箇所消毒から施し、終わったら絆創膏を貼っておく。単なる切り傷であればこれだけで十分だろう。

他に痛む箇所がないかを確認したが、頬がジンジンと痛む以外に多少打ち付けたことによる痛みが残っているだけで大事はなかった。

ローガンは自分が置かれた状況を改めて確認してみたが、周囲はダムのあつた周辺よりも木々の数は少なく、端末で確認してみるとあべこべの所に自分はいることがわかった。

なぜこんなことに、と記憶を手繰り寄せ、咄嗟に思い出したことによりその場から立ち上がった。

「グローザの馬鹿野郎……」

ローガンが覚えている限りでは、ヘリ内部に乗り込んできた怨霊達と交戦することになり最終的に自分は負けてしまった。どれもが素早くも力のある一撃であったが、一対一であればまだやりようがあるのでカウンターを狙い格闘術で組み伏す。繰り出された拳を躲してからのカウンターで投げて地面に叩きつけ、拘束しようとしたところでない打ちを受けたのである。もう一人が迫ってきたことに気付いたころには、ローガンは横つ面に蹴りを食らって壁に方にぶつ飛ばされていた。フラフラになりながら起き上

がってみれば、同じ装備を身につけた、ローガンよりも背丈が高い大柄の怨霊がもう一人。こちらに先手を打ったもう一人の怨霊がこちらに向かってきたのに対応しきれず、成すがままに攻撃を受けていたが途中からグローザによる援護が入ったのである。

「なにが『しつかりしなさい』だよ、つたく……」

励ますなり鼓舞するのだとしても他に言いようがあるのではないのかとも思うが、当人がいないのに愚痴ついても仕方ない。

とはいえ、彼女も参戦し当初から乗り込んできた怨霊と交戦を始めたのだが、そこから先はどうなったのかをローガンは見えていない。ただ、一瞬の隙にローガンが急所に拳を叩き込まれた際に薄れゆく意識で目にした時は、彼女も捕らわれてしまっていた。

そこからの記憶はないローガンは、周囲に自分を連れ去ろうとしていた怨霊がどこかに潜んでいるのではと思いい、身に着けている装備の中で武器になる物を探ってみた。どうなったのかはわからないが、周囲に彼らの同類がいないこの現状を見る限りではあちらとしても良くないことになったのではないかと思っただけである。

メインとしている『ハニーバジャー』は機内に立て掛けてしまっていたし、ヘリの損傷だけでなく誤射や跳弾を恐れて機内では発砲できなかつた。なので今は手元だけでなく、目を覚ました周辺にもない。ただ幸いなことにサイドアームの『P226』とナイフは無事であったのでそれらを握って周囲を見て回ってみた。

木の根を跨いだり落ち葉を踏みしめ、半径約十メートルで見て行つてみると、思ったよりもすぐに見つかった。

「……ついてなかつたな」

高さがほぼ二メートルにある鋭く突出した木の枝が大柄の怨霊の腹部を貫通し、木の幹を伝つてダラダラと体内で循環していた生命の一部が流れ出ている。枝もろとも真つ赤に染まつているその光景から目を逸らしたくなつたが、ここで調べたりして断片的にでも知らなければ意味がない。

ローガンは両手に持つている武器を収納すると、木の幹の凹みに手足を引つ掛けて少しづつ上つて行き、もう動かないことを確認しながら死体を枝から引き抜く為に押し戻した。死後硬直で筋肉が収縮したことにより動かすのに難儀したが、幸いなことに抜くのに動かさなければならぬ枝は長くない。

幹に背を預け、尻もついた安定した体勢になると脚を徐々に伸ばして仏様となつた遺体を少しづつ動かす。時折体内から嫌な音が聞こえるがそれを無視し、やがて我慢の限界に達しようとしたところでようやく終わった。

仲間の遺体でないので敬意を払う必要はない、ということでも無造作に落ちて転がった死体を見下ろしながら少し息を吐き、ローガンも木から下りてもう必要となくなつた敵の装備を一つ一つ確認してみた。

「さてさて、何が出てくるかな……」

まず血にも濡れている光学迷彩マントだが、こちらは破れてしまっている。刺さっていた枝と同じ芯の大きさだけの穴が空いてしまっており、利用できるかは怪しい。それを取り去って兵士本体の方を見てみると、体全体に外骨格のような機械が取り付けられていた。機動性を武器にする戦術人形が付けているのと同じようなそれを見ていき、ローガンが左腕に付けているのと同じような端末があつたのでそれを操作しようとしてみた。だが落下の衝撃がよつほど激しかったのか、真つ暗な画面で故障してしまっており操作を受け付けなかった。仕方ないのでその外骨格の特徴だけでもと思い、その場で転がしてみると背中の方に軍用のリュックサックよりも二回りほど小さい何かがある。それすらも一部が欠落してしまっているが、こちらは同じ要因によるものではない。機関部ともいえる箇所に銃撃を受けたらしく、何発もの弾着痕が表面から内部にまで銃弾が食い込んでいる。形状と隙間から見える機密さ、下部にみられるジェットエンジンの排気塔のような物があることからして、正式名称はわからないがジェットパックのような物らしい。

(なるほど、これに銃撃を受けたことが要因で制御不能になったのか。それでここ近辺の俺は運よく地面に、こいつは木の枝にグサリ……)

よく助かったことに今更ながら安堵しつつ、まだ探り切れてない装備を順々に見て

行つた。手が敵の血で汚れたりすることに嫌悪しつつも、手に取れたりするものは遠慮なく手に取る。

アサルトライフルやサブマシンガンといった小銃はないものの、ローガンと同じようなナイフや拳銃の他に注射器が見つかった。中身はわからないが、わざわざ持ち歩いているのだから何かしらかの用途があるのだと思ひ、後々に調べられるのならそうするとして回収しておくことにした。フラググレネードにフラッシュバンといった投擲物もあり、必要になれば腰に下げているそれらを引つ張ればピンが素早く抜けれる工夫もされておひ、ここからも戦ひ慣れていることが窺えた。

続けてベストや戦闘服を見ていくと、右上腕部に部隊章のワツペンを発見。楯円の赤い生地に銃を持つ白い骸骨が描かれておひ、下の方には文字が刻まれていた。残念ながらその文字を読むことはローガンにできなかつたが、それがどの国の言葉か理解できたのに加えて驚愕した。

「なんでこんな所でロシア人が関わっているんだよ……!」

そう、ローガンが見たのはロシア語だつた。英語ではないと理解できたのは明らかにその文字の羅列の中に英語のアルファベットではない文字が混ざっていたからだ。ちゃんとした学がないローガンでも、それがどの国のアルファベットなのかは理解できる。

独特な形状しているそれらを見間違えることなく断じたローガンは、顔に装着しているゴーグルとマスクを外して人相を確認。口から血を流しながら絶命しているその顔は、白人である自分よりも肌が白く彫が浅い。顔の幅も広く短く切り揃えられた毛色がブロンドであることも加えて如何にもなロシア人らしい顔立ちだった。

フラググレネードの形状で気付くべきだっただろ、とローガンは自分を叱責した。アメリカ製とロシア製のとは大分違う。しばらく使わなかっただけでなく見ていなかったせいで忘れていた。

ともかくローガンのは大きな失敗ではないが、目の前の事実はそのようではない。また北アメリカ大陸のここにロシア人が入ってきており、そしてここまでの武装と来た。

そうなるとやはり……、と考えそうになったが、今こうして自分はここにいるがローザの姿がない。ローガンと同じく捕らわれた彼女の行方だけでなく、自分を回収しに来てくれたAR小隊や共に作戦に参加してくれた皆がどうなっているのかもわからない。

探知されることも考えられたが、他がどうなっているのかが知りたく居ても立つても居られなくなったので無線機の回線を開くように端末で操作した。

「こちらグリフィン所属のブラボーリーダー。聞こえる奴はいるか、応答してくれ」
呼び掛けてみるが応答はない。グリフィンのみオープンチャンネルに呼び掛けて

みているのだが、誰からの声が聞こえてこない。何度も声を掛けてみても変わらずイヤホンからはザーツといったノイズしかなかった。

繋がらないことで舌打ちし、ローガンは今後をどうするのかを考える。

いくつか思い描かれる選択肢のどれよりも悪手になるのかはわかっている。だがそうしなければ、ここから自分だけが一旦生還できたとしても手遅れになってしまう事にもなってしまうだろう。だからといって装備が乏しい現状で交戦することになった場合は間違いなくやられてしまう。それどころか姿が見えない相手にまともに戦えるかどうかも怪しいどころか、不意打ちを受けてしまってお終いと思えない。孤立無援になった今の自分が何も考えなしに動いていては……。

そこまで耽っていた時、ローガンは自分がこのまま基地に戻ることを考えていないに事に気付いた。彼女からは色々々と頭に来ることを言われていたりもしたが、傭兵たちを相手にした今回の戦いではサポートしてもらった。

頭に引つかかるようなことはあれど、それを理由に軽視してはならない存在であることは元から承知している。であれば、悩む必要はないのではないだろうか。現地でよくよ悩んで何人の仲間を失ってきたか思い出せ。様々な局面で拾った命ではあるが、捨てるつもりはないだけの意思はある。それを削ってでも、自分の為にも後悔をしたくないという思いもだ。第一、スオミにどのような顔をすればいいか考えてないだろ。ハ

リーの命の喪失を誰よりも恐れているあいつに、別口で悲しませるつもりなのか。……許してくれ、二人とも。俺はもう、逃げたことで誰かが泣かせたくないんだ。お前からどういったことを言われてしまうのかは大方わかるけど、生きて帰れたら甘んじて受けるから。

立った状態から深く息を吐き、これからどのように動くか改めて考えようとした。

そうした時、バキツと背後から枝が折れた音で反射的に『P226』を抜いてそちらに素早く向けた。振り返った先にはこちらの反応に驚いた女性が両手を上げた状態だった。

「あくつと、ごめんなさい。たまたま近くを通りかかったんだけど……あなた、兵士？」
「……そうだけど俺が行くまでそこから動くなよ。危害を加えるつもりはないけど、一応怪しい物とかがないか調べさせてもらうからな」

「うん、わかった」

私服姿でいる黒髪白人の持ち物で武器になる物を身に着けているかどうかを確かめる。異性であるので妙なところを触ったりしないように気を付けながら見て行つた。

背中には木製腕には特に目についたり異質に思えるのが無かった。次に腰回りだが、サバイバル用品といったロープやハンドライトがある他にサバイバルナイフがあった。それを地面に落とし、腰に巻いている上着で少々隠れているジーンズの方を見た時、ま

ず真つ先に目につくのがあった。

「……なんでお前、『44マグナム』なんてのを持っているんだよ。正直似つかわしくな
いけど戦術人形じゃないよな、あんた」

「父さんからの形見でお守りにしているの。似合わないのはわかってるつもりだけど、
そんなに？一応鍛えてるんだけど……」

「細い身体のあんたみたいなのがデカいリボルバーを持つてるんだから驚きなんだよ。
ああでも、戦術人形にもそれなりにデカい銃を振り回してる奴もいるしそうでもないの
か……？」

「私が言えたことじゃないけど、混乱しているそんな状態で大丈夫？」

「大丈夫じゃない、大問題だ」

女性のベルトに取りつけているホルスターには黒い銃身の『44マグナム』があった。
久方ぶりを見るそれを一度手に取り、回転式になっているシリンドラーに弾薬は込められ
てはいないものの手入れはされていることを確認。独特なカスタムが加えられている
ようだったが、詳しく調べてみなければわからない。しかし今はそこまで重要ではない
ので捨て置いた。

それ以外にはローガンの危険センサーに引つかかるようなものはなかった。正確に
いえば本来とは違う用途で使わなければ危害を加えることにならない範囲で、ではある

が。

「持ち物とその様相からして、お前は兵士じゃないな。こんなところで何してんだ」

「私は年に二回ここで鹿撃ちをしにきているの。ここは動物が多いから絶好の穴場なのよ。ほら、そこにライフルを立て掛けているでしょ？」

「ふとした時に鉄血が出てくることがありえるのに女一人でハンティング？信用できないな」

「だつたらさ、これ見てよ。保護区で暮らしていてちゃんと今回の外出許可もとってるから。あなたが正規で認められている兵士であればわかる筈よ」

彼女の持ち物から出された透明のケースに入っているカードを見てみると、たしかにこの女性を写している証明写真が名前と共にある。名前は『グレイ・カーンズ』で、年齢はローガンより若くこの間誕生日を迎えたばかりの『十月三日』生まれだ。

写真と見比べてみてほぼ間違いなく同じ人物であることが確認できたが、まだこっちに来て経験がないローガンからだと言可証が本物かどうかの判別がつけられない。

もしこちらを攻撃しようとするのであれば反撃に転ずることにして、ローガンは一旦身分証明証を返却して拳銃をホルスターに戻した。

「……とりあえず返す。状況が状況で用心深くなつてしまっているんだ、悪いな。でももう鹿を撃つのをやめてここから早く逃げた方が良い」

「一時間ぐらい前にここに来たんだけど、なんか遠くから銃声が聞こえていたりしてたから何かと思っただわ。何があったの？」

「説明するのを躊躇うぐらい、激しいドンパチをしたってことぐらいなら話してやるよ」
ほら早く行つた、とばかりにしつしと手を払い、ローガンは調べていた怨霊の方に戻つた。グローザの行方を知るのにも色々と時間が惜しいし、入手した情報に則つて行動したりとやるのがたくさんある。

スモークはたんまりあるが、C4爆弾のように爆発で殺傷できる武器がなくなつていく。とりあえず投擲物のロシア製のフラググレネードをベルトに括り付け、フラッシュバンも同じようにしておく。中身が分からない注射器も入つたことを確認したところで、死体に驚いている様子を見せない女性、グレイがまだ近くにいることに気付いた。「おい、冗談抜きでもう逃げた方が良く。ここで見たことを忘れて命があるうちに回れ右するのが賢明だぞ」

「……いや、そうするつもりだけどさ。その人、お兄さんが殺したの？」

本物の死体となつた怨霊を指さしているグレイがそう聞いてくる。自分の事を怖がらせる為に嘘をついて『自分が殺した』と言つてもよかつたのかもしれないが、そんな余計なことをする程気力と体力に余裕があることに確信がない。この先、ローガンでも恐怖心を抱く敵の監視網を潜らなければならぬのだから、できれば面倒事はない方が

良い。だからといって邪険に扱いきれればさらに頭を悩ませることもなりかねないので思ったことをそのまま口に出した方が良い、と結論付けたローガンはそのまま声に出した。

「期待していたかもしれないけど違う。俺の仲間のおかげで事故ってこいつだけお陀仏したんだよ」

「あゝ、なるほどね。んじゃあ、お兄さんはこれから逃げるの？なんかこの人ありきたりな迷彩服じゃないし、只者じゃない感が満載よ」

「そうしたいのは山々だけど、戻らないと目覚めが悪いことにもなりそうだからな。無謀だけで来た道を歩いて戻っていくつもりだ」

「戻らないと目覚めが悪いこと？命があれば儲けものつていうぐらい、危機的な状況になれば自分のことを優先しても罰当たらないよ？」

その場から立ち上がってグレイを見てみると、彼女はこちらの目をのぞき込むようにして髪とやや同色の瞳をこちらに逸らさずに向けてきている。ローガンの頭一つ分背が低い彼女がいつの間にか手にライフルを持っているのに気付き、左手をナイフに伸ばそうとしたが届く前に手が押さえられた。いや、彼女の両手はライフルを持っていて自分に対してどちらの手を駆使していない。何が動かなくしているのかと思いい視線だけで自分の左手を見てみたが、誰にも触れられていなかった。むしろ、動かなくしていた

のは自分の右手であり、持てるだけの握力を青筋を浮かせるほど發揮して握りしめていた。

何故、と訳が分からず少々パニックに陥りそうになっているローガンにかまわず、グレイはライフルを持ったまま距離を詰めるように歩いてくる。

「別に自分に正直に答えていいんですよ？偽る必要はありません、こんな状況下で献身的になれと誰かに言われているわけではないんですよ？逃げたって誰も攻めませんよ、皆あなたを置いて帰還しているのですからその仲間達に責める資格はありません。今のあなたのことを知っている人なんてこの世のどこにもいませんし、もう居ない者としていいことだつてあり得るんです。さあ、あなたは何故、戻ろうとしているのですか？」

つう……と汗が額から頬へ、そして顎へと伝つていき地面へと落ちて行くのを感じる。残暑ももう消え失せているというのに汗が止まらなかった。

今日の前にいる女性は何を言っている？自分の事を偽っておらず、自分で能動的に戻ろうとしているのだと、ローガンは確信している。葛藤するほど悩み、それでも後ろを振り返りつつも前進するほどの決断した自分の意思を挫こうとしているのかとある筈のない疑念が生まれる。だがそれだけでなく、小首を傾げて瞬きをせずに口元を三日月を思わせるほど口角を上げている彼女を見ると、底が全く見えない深淵を除きこん

でいるような感覚になってきた。目を背けようと思っても両手と同じく脳で命じても自由に働かせれない。

手を伸ばすどころかも普通に触れられる距離にまで近付かれたことで、グレイの目の奥にある妖しい炎が見えてくる。ゆらゆらと揺れるそれが火の粉を散らし、瞳の中に留まらずに外へと煽ぎチリチリとした火傷を負わせてくるようだった。

体はその姿勢の状態で縛りつけられていて動かないが、それでも思考は、心は正常に働いている。基地の外を出歩けばどこにでもいるようなこの人物に影が差した訳はわからない。

心臓を跳ね上げさせるまでのことを『庄』みたいに追いつめようとして来る彼女に言わなければならない事を、ローガンは正直にそのまま口にした。

それを聞いたグレイは、毒を抜かれた様にきよとんと目を丸くした。

「……え？ たったそれだけのことなの？」

「誰かに見返りを求めているとしても思ったか？ でも俺は無い物強請りしか許されていないかった身だからこれといった物欲らしいものはない。あつたとしても美味しいコーヒーを飲ませて欲しいと思うぐらいだ」

「……銃を持つことはあつても組織の上にいる父さんが教えてくれたことの一つで、勇気と無謀は紙一重って言われたわ。今のお兄さんはヤケクソって訳でもないみたいだ

けど、冷静に見極めているとも思えない」

「お前は他人の心理をそう簡単に掌握できるものだと思つていいのかよ。俺だつて無茶なことをやろうとしていていることの自覚はあるし、恐怖だつて感じてゐる。誰もいないと思つたところから現れてナイフで瞬く間にブスリ、なんてのを想像していかないわけないだろ」

ローガン以外の誰にされているわけでもなかった束縛が解かれ、血を通わせている身体が本来の動き思い出したようになる。

相手は銃を持つていたのでナイフにすぐ伸ばせる位置に左手を置き、腰に置いたその手とは反対の手で防弾チョッキの留め具を外した。ベストにある二種類のマガジンと医療の応急キットなどは抜き去り、そうしている間にも警戒していた目の前にいるグレイに投げ渡す。彼女は驚きながらそれをライフルを持つたまま受け取つた。

「それにな、仲間だからつて以外に俺個人の目的としても捨て置けないんだ。初対面なのに関わらず好き勝手言つてくれやがったあいっただけど、俺以外に知り合つた連中には辛辣なことは言わなかつたし、永遠にいなくなるかもしれないと苦しんでた奴の事はいささかと捨てなかつた。俺にとつての理由は多くなくてもあいっつらには片手で数えられる程度で二つや三つはある。自分の命を優先するならそれは結構、間違つてないさ。でも俺は切り傷を負う程度で済むのであれば躊躇せずに行くよ。そうではなく

て死ぬんだとしてもな」

機動性重視、というよりも動きやすくなる為にローガンは迷彩柄の戦闘服の上衣を脱いで元から来ていた群青色のシャツ姿になる。空のマガジンをそれ専用のポーチに放り込み、『P226』のはベルトとズボンの間に挟み込んで応急キットをポケットに入れておく。

そうしているローガンにグレイはパチクリと目をしばたかせた後でまいったとばかりに笑った。

「……なーんか、若い父さんを見てるような気分。もうわかった、止めない」

「ならよかった。そいつを着て、今度こそ帰れよ。正直なところこんな時に出くわしたら助けられる自信はない」

「心配しなくてももうそうするよ。それじゃ、はい」

ベストを片手に持ち直したグレイは、ライフルの銃身を持った状態でそのままローガンに突き出した。その行動の意味が分からないローガンではない。すぐに首を横に振った。

「いや、ここを抜けるまでの自衛の為に前が持っていた方が良いだろ。兵士の俺がそれ受け取ったら別の所から怒られちゃう」

「だからといってこのまま貰ってばかりじゃ私の気が済まないわ。生まれはビルが建つ

ている街中で生まれても自分の脚で走れるようになってからはこういう所で過ごした方が長いから逃げ足はお兄さんにも負けないわよ」

「それでもだな……」

「考えてみてよ、自衛のためにとか今お兄さんは言ったけど、兵士じゃない私が姿が見えない連中に撃つても焼け石に水、コンマ数秒だけ捕まるのが遅くなるだけだよ。下手に撃つよりも走った方が生きて可能性は高いだろうし、だったらこれはお兄さんが使った方が有効活用できると思うんだけど」

自分が言ったことに絶対の自信があるのか、グレイの顔は勝ち誇っている者のそれになっっている。多少ムツとなりはしたが言っていることに一理あるどころか、警戒しながらこここの外に歩くよりも真つ直ぐ走って行った方が良いのかもしれないと思える。

仕方なし、後日顔をまた合わせないとか……とローガンはそれを受け取った。

「わかった、ありがたく使わせてもらう」

「じゃあ予備の弾も渡しておくわ。落ち着いた時でいいから返してね」

「……まさかと思うが、ホワイトデーよろしく倍返しとか期待されてないよな？」

「え、むしろそうじゃないの？」

当たり前とばかりに満面の笑みと一緒に投げかけられた台詞を聞かなかったことにしたローガンは渡されたライフルを確認した。狩猟用として使っているライフル、とグ

レイは言っていたそれはローガンも馴染みがあるボルトアクションの狙撃銃である。スナイパーライフルなにからなまでに基礎から叩き込まれた時代で教官から射撃訓練を受ける前にあった説明だと、イノシシや鹿みたいな動物は勿論、警察や軍隊にも採用されていたという。その『レミントンM700』のグリップを握ったりして記憶の中の感触と照合したりしている、弾薬パックなどに入られていない、文字通り真っ裸の弾丸がそのまま渡された。

文句つけたら何を言われるかわからないので、ローガンはもう出かかった言葉を飲み込んだ。

「それじゃここでお別れだね。生きて帰ってこれたら何ができたか詳しく教えてよ」
「了解、気をつけろよ」

ストラップに腕を通すとグレイは走り出す。言っていたことは嘘でないらしく、ひよひよいっと跳んだりして出っ張ってたりする木の根や突き出ている大きな石で転んだりせずに軽やかに走って行った。

その背中を見送って見えなくなった頃になってローガンは彼女と真反対に歩き出そうとしたところで思い出した。彼女の連絡先を聞くのを忘れていたのである。

「……まあ、なんとかなるかな？」

名前と人相はわかっているのに、いざという時はグリフィンでの権限を使うなりして

調べることにしローガンは一度止めていた脚を動かす。

現在時刻を確認すべく腕時計を見てみると『14:47』と表示されている。随分と長い間気絶してしまっていたようで、帰還する頃にはもう作戦を開始して半日が経っているのかもしれない。それを気にしていたところで状況が良くなるわけではないが、それはそれ、これはこれだ。

〈15:14〉

目的を達するのに、まずはグローザがどのあたりにいるかをまず突き止める必要がある。それを知る手っ取り早い方法としては敵兵に対しての尋問だが、今回は相手が悪い。雲を掴むような結果で終わることが大いに予想される。さらに肉眼で見えずともローター音で付近にいることを窺わせるステルスヘリの存在もあって、偵察の基本として見晴らしのいい地点で双眼鏡で見渡す、といった二カ月ほど前にS O P I Iを救出した時と同じ手段が取れない。

不可視のタカの目による障害から付近全域の偵察を断念したローガンだったが、木々に紛れながら前進していたところで地面に残されている痕跡を発見した。

(足跡……)

雑草を巻き込んで道に残されているのは何人かのブーツによる一人分の足跡だった。残されている歩幅がしやがみながら進んだことによるものか狭く、時折足を引きずったせいかつま先から伸びたりしている。今ローガンがいるのは北側でありダムに進軍していた傭兵たちが来ていたのは真反対の方角からだ。そうなるとこの足跡が彼らの物ではないというのは間違いない。

(それにしても、待ち伏せ^{アンブッシュ}してる奴が見当たらないな。それだけのことに回せる人員がない、というのはあり得るが……)

今こうして警戒しつつ前進しているローガンの経験としては、見通しの良い地形が

あつたり、多少凸凹していたりする木々が生い茂るだけの場所であればその陰に雑草などに偽装したりさせた前哨狙撃兵^{スカウト兵}がいたりした。片手で数えられる程度ではあつても遭遇した時は先手をとられ、位置を正確に把握できないまま交戦することになっていた。だが遂行した作戦の後に振り返ってみると、行く先々の地形が分かっているのであればそこを避けるなり、逆手にとつて回り込むことができたのかもしれないと考えることができたりもしている。

傭兵掃討の作戦前に地図をインストールした端末で確認してみると、この足跡が続く先には高所が緩やかではあるがややあるといえる地形になつていた。

なんの意味もなく足跡が残されている、というのはないとローガンは自身の中で結論付けた。この先に歩いていった敵兵は何かしらかの目的を持つていたのか、それともこれに釣られたウサギを狩る為の罠なのかはわからないが用心に越したことはないだろう。

回り込むべく見つけた足跡から逸れて歩いていく。これまでと同じように足音を最大限に抑えつつ、かつ姿勢も低くしながら向かつて行く。

そうしていつて数分、頭上をステルスヘリが通つて行つたらしくエンジンの駆動音が通り過ぎて行つた後で、起こされた風により雑草や木の葉が靡かれて肉眼で捉えている視界に一時的な変化が起こる。目が届く一帯の一部、小川を挟んだ数十メートル先にあ

る大木の根元にいる『それ』を、ローガンは見つけた。

呼吸を止め、他が周囲にいないことを祈りながら目立たないように接近。小川に足を突つ込む時も細心の注意を払いつつゆっくりと水しぶきを上げないようにしながらゆっくりと近付いた。石を蹴ったり踏み外したりもしない様にするのにここまで気を使つたことはないと思ひながら、サプレッサーを銃口に取りつけた『P226』とナイフを握りしめ、万が一の時はいつでも引き金を引けるように指を掛けた。

「……………らあー」

「……………?!」

一メートル単位に達したタイミングでローガンはその怨霊を蹴り倒し、転倒したらその機会を逃さずに背中に当たる部分を踏みつけた。動けない様に力を込めつつ手に持つていた小銃を手が届かない様に蹴っておき、ここまで接近すれば見えてくる両手を取るところからまで持つてきて縛り上げた。

「さて、色々と聞きたいことはあるが顔が見えないんじや尋問がしにくいのもある。ちよつと化けの皮を剥がさせてもらおうか」

適当にマントを掴むと一息に手元に引き寄せる。パチチ……と電気が弾けるような音がしながら徐々に姿を現してきたその怨霊の面も晒し、露になったその横つ面に挨拶代りで拳をお見舞いした。

「……へっ、最近のアメリカ人は能無しばかりなのか？力づくで何とかなると思っている脳筋ゴリラとかわりがないぞ」

「心配するな、拷問は不慣れだけど鍛えられた兵士でも根負けするほどの痛点を俺でも知ってる。どうせ殴る蹴る、自白剤による尋問に対する耐久はお手の物だろ？」

「それでどうなる。自分にそれを試したとしても、口を割らないことだつてあり得るぞ」
「それならそれがかまわないけどな、こつちはそこまで時間をかけるつもりはない。だから単刀直入、迅速にやらせてもらおうか！」

敵対勢力の一人なのだから躊躇う必要も暇もない。ローガンが把握できていることは少ないのでここで入手できる情報が第一歩だ。

逆手に持ったナイフをそのまま化けの皮を剥がされた怨霊の片脚に、膝立ちになつている太ももに突き刺す。ザクリツと自分の牙を肉に食い込ませると手に来るのは嫌にもなっているあの感触。

やむなしに拷問紛いにした時には自分はこの向いていないと自覚した過去とは違い、苦悶の声と息を漏らすだけで悲鳴を上げないことから存外しぶとい。そう思いつながらローガンはナイフの柄を握りながら問うた。

「まず一つ、俺と俺の連れを一緒に捕まえた奴が一人いた筈だ。連れを浚った奴はどこにいった？」

「ふーっ……ふーっ……我々ロシアの兵は無口だと決められているのは知らないのか？」

「こうして話しているつてのに今更何言つてやがる。昔なら血反吐を吐かせるまでやつても割らなかつた奴が居たそうだが、今もそうとは限らないだろ」

「ふん……我が受けた祖国の訓練は変わつていてだな、体力テストだとか銃の扱い方を学ぶ前にすることがあるんだ」

「へえ……それで？」

「貴様の阿婆擦れの母親がどのような死に方をしたのか、それからロクでもないことを繰り返していた父親のもそうだ。人の不幸は蜜の味で麻薬と同じだ。快感を得るだけでなくそれで限界値を引き上げられるのだから……」

ニタニタと笑いながら耳触りの悪い声を発する口を閉じさせるべく、突き刺しているナイフの刃がある方とは逆に力を加え、肉を断つようにして切り裂く。プライドが働いているのかは知らないが、短く悲鳴を上げるものの音量は辺りに響くほどのものではない。

マグマのように煮えたぎる精神状態ではあるが、思考は氷河のように冷めていた。焦りや怒りをどこかに置いているローガンは睨みながら久方ぶりになる低い声を出す。

「……で？そんな面白いことが出来るのならロシア生まれだったら良かったのにか思

「わせたかったのか？」

「……はっはっ、僻むなよ猛犬。貴様も戦うのなら楽しくやりたいだろ。アメリカは鉄血との戦いに必死になりすぎて見ていてつまらん」

「ぎげんなクソ野郎。戦争なんてのに楽しいつまらないがあつてたまるかよ。今日までの命のやり取りを楽しんで、銃とナイフで会話するのが趣味かてめえ」

「ゲームジャンルを問わず、興味があるのであれば傍らで見ているより実際にやってみた方が楽しい、というのは知っているか？ だったらわかる筈だ貴様も」

「わかりたかねえよ。遊ぶみたいにゲーム感覚でここにいるんじゃない、寿命を自分から短くしている自覚があつて然るべきじゃねえのか」

「知らないね。だったら太く短く、楽しんで死にたい」

根っからの狂人ぶりにローガンは話していても時間の無駄と思い、本題に戻ることにした。刃長が約二十センチあるナイフの切っ先が骨に当たっているらしく、コツコツと固いものに当たっている感触が伝わってくる。刃が半分以上埋まっているそれを引き抜くと、首元にまで持つてきて若干喉に食い込ませた。

「無駄だと思うがもう一度聞いておこうか。俺の連れは何処に行つた？」

普段は黒光りしている自分のナイフが今では怨霊の血によって真っ赤に染まっている。喉元からの出血で更に赤黒くもなり始めるが気に留めず、ローガンは問い詰める。

だが怨霊は気味の悪い笑顔を浮かべるだけで何も口にしようとしなかった。

このままナイフをスライスさせて喉元を搔つ切ろうとしたローガンは、ふと自分の端末のランプが点滅しているのに気付いた。基地にいる間ならともかく作戦遂行中は敵兵に気付かれぬ様にオフにしているというのに、と思いつながらそのままの姿勢で画面を見てみるとメッセージを受信していた。宛先のアドレスは間違いなく自分にだが、送り主は文字化けしていてわからない。ただ短く小数点も含めた五桁の数字と暗号コード、そして『信じて』という短いメッセージ。

少し考えたローガンだったが、警戒を緩めずに『P226』をホルスターに戻してナイフを握ったままにしている左腕につけている端末を操作する。送られてきた数字に従って無線の周波数をいじってコードを入力、そして無線機を接続した。

「……誰だ？」

問いながらもローガンはもう一度右手にハンドガンを握り、警戒心を半ば無線の向こう側に向ける。

悪戯ではなくとも、誰かによる阻害か何かと考え始めるとノイズが取り除かれていき次第に聴覚的に鮮明になってきていた。

『えーと……聞こえています？』

「……聞こえてる。聞きたいことは色々あるが、お前は誰だ？」

『こつちにも事情があるから時間がそんなにないし詳しく話せない。でもあなたの敵ではないよ。その件が片付いたら次に助けて欲しい、て考えているんだ』

「今そんなこと言われても困る。こつちはこつちで精一杯なんだしな」

『わかっているよ。まあ簡潔に言えば、単独で前進するのに困っているあなたを一時的にでも助けるようにある人形に言われたつとところかな。とりあえず、目の前にいるそいつは殺してしまつていいよ。全てとは言えないけど、ある程度までならこつちからガイドできる。どうする、『狼王ロボ』?』

ハンターとイントウルルダーといった鉄血の上級人形にも呼ばれていてもローガン自身は忌み嫌っているその二つ名が快活な印象を感じさせる声に乗せられている。そのことに複雑な心境を抱きながら溜息を吐き、当てたままにしているナイフに込めている握力を強めた。

「幸か不幸か知らないが、てめえは用済みだ。話してくれる口がないんだからな」

「心配するな。この後の面白そうなことが見れないのは残念だが、これはこれで良い。貴様の両親にはよろしく言つといてやるよ」

薄ら笑いを浮かべる男に対しての感情を断ち切る様に、ローガンはナイフを薙いだ。その方向に鮮血が飛び切り裂かれた隙間から息が漏れる音が聞こえてきたが気にも留めずに遺体を蹴つてその場に転がす。ナイフに付着している血糊を戦闘服の下衣で拭

い去り腰に下げている鞆に収納すると無線機に手を当てながらその場にしゃがんだ。

「こつちとしてもそうするしかなかったから始末したが、最低限でこれだけは聞かせてくれ。俺がお前を信用できるだけの材料がないんだが何を提示できる?」

『提示、ね。でもそう言わずに、今こうしてあなたに通信しているのが気に入らないのならそう言つてよ。そうしたら話せるだけのことは教えるのに』

「見ず知らずどころか何も知らない奴からいきなりショートメッセージが送られてくればこんなにもなる。一般ネットに個人情報流出や電子妨害、ハッキングが盛んになってきている今じゃ警戒するのが当たり前なのを知らないのか?」

『しばらくの間『地上』のことを知らなかったわけけど……そっか、そこまで時代は移ろいでいたのか。ならごめん、経緯をあまり話さずに用件だけを言うのは不躰だったね』

おや?とローガンは思った。素直に非を認めて詫びてくる存在を最近見ていないわけではないが、初めて声を聞く相手から友好的に思えるコミュニケーションが取れるというのはローガンにとって初めてだったのである。礼儀という二文字を重んじていなくても、よっぽどのことであれば少々ムツとなることはある。例えば、明らかな落ち度があつてそれを認めても謝罪しないような輩とかがそうだ。そういつた礼儀だけでなく性格まで問われる範疇になれば、多少のことは許容できるローガンでも不快になつて

しまうものだ。

『じゃあそつちが移動しながらでよければ話すよ。一応周囲に敵の反応はない、ここ一帯で待ち伏せしているのはそいつだけだから』

「本当にそうなのか？ここと行先にいずとも遠くから狙撃されるのも御免だぞ」

『だいじょーぶ、そういうルートを進めるようにもする為にコンタクト取ったんだから。嘘も何もなし、見返りで後日助けてくれればそれでいい。それでいい？』

「どこから俺を見てるかどうかは知らないが……了解」

どちらにしても言っていることが本当であれば話している相手は自分を一時的に支援してくれるのだから、援護も何も無い、装備もままならない現状では支援してくれるだけでもありがたい。七年以上の単独出撃による作戦遂行で培った経験を武器にしても不透明なことが多いので間に合わせるには厳しいとしか言えない。通信相手の正体はわからないが、利用できるものはなんでもそうするのに限る。

死体をどこかに隠す必要もない、ということでもローガンは死体を跨いで持ち主がいなくなつた銃を拾い上げようと触れた時だった。

『待った、奴らの銃は使えるけど持つて行かない方が良く。どれにもGPSが内部につけられていて分解して取り除くには時間がかかる上にリスクがあるから』

「GPS？使えるのなら今のど時世、そこまで気にしている暇なんてほとんどないだろ。

そこら辺の奴より戦える分、管理能力が欠けているのか？」

『そんな素つ頓狂な理由ならよかつたんだけどね。残念だけどコミックに登場するドジっ子みたいに微笑ましいものじゃない。これを聞いたあなた達人間からすれば『そこまでするか』と言わせてしまうほどだよ』

どういうことかわからないが一旦触れようとしていた右手を引つ込める。見た目は普通に変わり映えのしない『A s V a i』、視線を背後に移せば死体の下敷きになっている『ドラグノフ』だというのに。内部にGPSを仕込んでいるというのは銃規制に従って取り締まっていた頃にもあつたらしく珍しいと思える程度だが、真剣味が一際増した声を発する通信相手はそこまで気にしていないことがわかる。

首を傾げたローガンは何も考えられないままに聞いた。

「そこまで驚くほどのものなのか？」

『うん。人間ではないこつちからしても、そんなことを考え付いた奴が気持ち悪いとか言えないよ。そこまでして優位になっていたいのかと思うぐらいにね』

「俺からしてもロシアの兵士達の多くは『祖国を守る為』とか言つて後の事をあまり考えていないという見解だ。今はどうかは知らないが、記録にあるのを読んでいる限りだと感嘆するどころか直接面に向かつて罵倒したくなるよ」

『同じことを感じてくれる人がいるのはやっぱり嬉しいけど、これを聞いたらそれだけ

じゃ済まないかもね』

その筋で有名である特殊部隊の記録によれば、ロシアの特殊部隊は劇場に立て籠もった武装勢力の制圧を目的として催涙ガスを使用。それにより人質を取っていた者達を始末できたものの、ガスの影響は当然ながら人質にも及ぶ。非致死性ガスでも昏倒した後でなにかしらかのアクセシビリティを考慮していなかった特殊部隊の兵士達は慌てながらも救命措置に当たったが、多くの民間人を呼吸困難や心停止から回復させられなかった。

そのような背景があるので、ローガンからだどロシアは国の事を考えすぎて人命に対しての配慮をやや欠いている、という印象しかない。

だが通信相手によればそれ以上の、憤りを覚えることのようにだった。

「もったいぶってはいないだろうけど、それでどんな事だ？」

チラリともう一度『As Val』を見る。ロシア製の小銃はご無沙汰で操作を誤ることはないだろうかとも考えていたのだが、想定していたのとは違った形で使うことができなくなった。その事に腹を立てているわけではないが、不思議には純粹に思う。

そして耳だけでなく思考すらも傾けていたローガンに向けられたその台詞。聞いた時はまず押さえ切れない間抜けな声が出てしまった。

『……ロシア政府公認の技術で人間に戦術人形のシステムを導入し始めた……て言った

「あなたは信じる？」

「……は？」

29. 踏み入るのは…… —Trick or Death—
th—

〈15:32〉

烙印システム、『Advance Statistic Session Tool』を略して『ASST』と言われている技術について復習しよう。

I. O. P社が開発したそれは、グリフィンにも提供している戦術人形の第二世代型の全てに導入されている先進技術の一つだ。それを施されることで、銃火器を持つ人形と同名の銃のペアは人間やそれまでの戦術人形より大きく上回る戦闘力を発揮させることができるようになる。自分の体の一部、または半身として感じられるらしい専用銃であれば人間としては一流の兵士も顔負けの運用効率と射撃精度を誇り、離れた位置にあっても銃口の向きさえも把握できるので戦闘面で良いこと尽くめだ。

他にもスオミが歴史からロシア^進を毛嫌いしているような個性が生まれている『性格』だけでなく、その銃に適格な人形の『体型』もこの技術によって選択されている。歴史的资料や銃の性能から外観的な事柄が決められているので、日常面でも人間社会に溶け

込んでいる自律人形たちと遜色ない。

「それがどう関係ある？まさかとは思うが、ASSTが人間に適用されているとは言わないよな？」

『そのまさかだよ。近年、ロシア政府は政治的にも見て鉄血との戦争を収拾できてないことに焦りを覚えていたんだ。アメリカに並ぶ世界で二強の国である彼らの中の急進派が強硬手段で敢行したのがこれ。正規軍とは外部の組織に試験的にでも新技術を導入、その兵士を投入して事の顛末を見ているのさ』

通信相手からのガイドに従い木の合間を縫うように前進するローガンは集中力を保たせ続ける。『P226』とナイフを構えながら警戒しつつ言われた方角へ。本格的に怨霊達に関わる話の前に、グローザが連れて行かれたと思わしき有力な場所に向かうことになった。そしてその最短ルートとして、地下のメンテナンス通路への出入り口を指している状況である。UAVからの画像など付近に関わる情報が無いのでガイドは普通にありがたい。それでも聞かされている話の内容は穏やかじゃない。敵を知るのに必要であることは理解しているが、聞きたくない話として耳を塞ぎたくもなっている。無線機を外したくなる気持ちを抑えつつ、ローガンは続きを促した。

「……本当の話なら人間型ASSTってところか。方法としては、機械で改造人間にしているのか？」

『その通り。手術で首筋から脊髄にデバイスを取り付けてまずは身体に適應させるの。そうしてある程度まで回復したら薬を使いながら実験と訓練開始。その過程で事故があつて野垂れ死になつても急進派の政府の上官は見えないふり。だつて正規軍の兵士じゃないんだもの、ここで死んでも損しない。むしろ仕事を終えた後に支払わなければならぬ報酬が軽くなるしリアルタイムで送信されている実験結果がもらえるんだもの。願つたりかなつたりの手筈』

「考え方だけじゃなく命の価値観が違いすぎるところの範疇に留まらなねえなそれ」

『それでも処置される兵士とは同意の上よ。さすがに強行しすぎれば内部告発者が出てくるし、鼻が良い政府関係者が嗅ぎ付けることにもなる。だから奴らも慎重にやつていたようだね』

通信相手にはなく、同意をもらつても人道的とは全く思えないことをしているロシア人をローガンは鼻で笑つた。事態を好転させる為の新技術の実験、というのには聞こえがいいが結局は人間をモルモットにするのと同じだ。それを咎められはしない、傭兵といった政府に属さない外部の人間を使つてるのが尚更だ。しかも話を聞く限りではまだ試験段階、安全が確立されているわけではない。

『元々ASSSTはI. O. P、企業の技術でI. O. Pでも無条件にこのことを譲歩できないわ。研究の基盤としてロシアはなんとしても欲しかったでしょうけど、政府相手

にはいどうぞって開示出来る筈もない。それにかまわずに実戦投入しているけど不安要素がまだ多くある状態よ』

「それなのに自分達の都合を優先しているっていいのか、ロシア政府の急進派の連中は。だけどそれがさっきの銃を拾っちゃいけないのどう関係があるんだよ？」

『GPSが関係しているというのが大きいんだけど、部隊全員が統一されている銃器を手にしていて全てのその位置をその気になれば知れるとしたらどうする？脳が負荷に耐えられるかどうかは別として、今のところ人間側だけじゃなく銃本体にもシステムが入れ込まれているのだから、自分のだけでなく他の隊員のもやる気があれば感知できる。せっかく発見されずに侵入できたのだとしてもそれで全てが台無しになっちゃうよ』

ぐうの音も出ない回答にローガンは押し黙った。技術云々は置いて、通信相手が言っていることは筋が通っていてさっきの『As Val』を携行してはならない明確な根拠があるからだ。

とりあえずここまで整理してみると、現在相手にしている怨霊部隊の隊員達のバックにはロシア政府の急進派がいて、新技術の実験も兼ねて今回の作戦に投入。その新技術とは、I. O. Pが戦術人形に施しているASSTを人間に適用できるようにしたらどうなるか、というもの。

人類に向けた新型ASSTというのには驚きだが、国が関わっているのであればステ

ルスヘリに光学迷彩や携帯型ライオットシールドといった数々のハイテク装備に納得がいく。どう考えてもあれだけの装備を人数分用意するには一組織としては無理があるが、ロシアそのものが注力しているのであれば辻褃が合う。

「……厄介な敵ではあるが試験段階なのが唯一の救いだな。でも後々完成した新型ASTによる奴が出てくるのがあるから気持ちが悪くならねえな」

『だろうね。こっちはまだ実際にその兵士を目にしていけないけど、他になにかあなたが気付いたことはある?』

「二つある。奴らの身体能力と技術がこっちより上回っていると云われたらお終いだけど、銃を使わない近接戦闘じゃ対応に一步遅れてしまった。俺だけが負けたのならともかく、俺よりも経験を積んでいる仲間の戦術人形までもやられてしまったんだ。単純な格闘術であれば人間相手に負けることがないだろうに、理由が分からないことがまず一つだ。二つ目は心理的な打たれ強さで、近くで仲間が撃たれても気にも留めなかったのが気になる」

『えくと……ごめん、こっちで蓄積している記録じゃ答えになるものが無いや』

「いや、そこまで気にしなくていい。奴らに関する情報を少しでもくれたんだし十分助かってる」

「ならよかった……と、そこから二時の方向に五メートル行つたところが目的地。入口

は電子ロックがかかっているからこっちから操作して開けるよ」

落ち葉を踏みしめながら指示通りに進んでみると、たしかに盛り上がった地形の根元付近に鋼鉄製の扉が見える。開き戸になっている近くにあるボックスを開いてみると、そこには電子パッドがあったので、ローガンは端末を操作して接続した。

「接続したぞ。いけるか？」

『うん大丈夫、これならいけるよ。開けるまでちよつとだけ時間を頂戴』

「了解、焦らせるつもりはなけど出来るだけ早く頼むぞ」

端末の画面が勝手に変わっていくのを少しだけ見た後で、ローガンは通信相手からもって行つて大丈夫だと確約をもらったゴーグルの動作を確認してみる。

怨霊達がつけていたゴーグルをつけてみてわかったが、やはりローガンが覗んでいた通り暗視モードや熱源モードがあったりして、通常とは違った形で視界を確保できるだけの機能があった。他にも双眼鏡ほどの倍率はないがズームもできたりもしており万能型の装備といえる。

迷彩マントなどを他にも携行したかったのだが、リンクさせる自分の端末との相性が悪いだけでなく、戦術端末としてバージョンが旧いので適用できなかつた。新しい玩具が事情あつて使えない気分というのはこういうことなのかと思ひながらもローガンは後ろ髪を引かれるような感覚を覚えている。

『……なんとなくだけど、未練残してる？』

「まあ、な。理屈はわかっているけどどうしても心残りがある」

『わからなくはないよ。新しいものを使う時は気分が高揚するけど、何かしらかの事情があつて使えない時の落胆を感じるなという方が無理な話だよ』

まあそれに拘つていても仕方ない。駄々を捏ねていても結果がひっくり返るわけではないのだから。

ローガンはゴーグルの操作を覚えた後でグレイから預かった『レミントンM700』の弾数を確認した。装填されている弾数は五発で、予備の弾は六つあるが合計で持つている弾数としては多いとは言えない。発砲するのであれば可能な限り必中を狙うようにして撃つ必要がある。加えて銃口にはサブレッサーが付けられているわけではないので、撃つのであれば最終手段で交戦しなければならなかった時だけだ。発見されたりもしない限り、自分が愛用している『P226』を使っていくしかない。できればそのような状況になることにならないように努力はするが、事故などでなりたくないことに陥った場合はもう最悪なことになる。自分には祈るだけの神はいない、ならそうならないように自分自身に願うしかない。

『……うん、ロック解除。あなたがここを通つたら自動で通れなくなるから時間は稼げるよ』

「サンキュー。でもこの先は一方通行か？」

『データによればダム内部の地下施設、浄水関係の機器が密集しているエリアに到達するよ。そこから先はあなた次第』

「なんとなく悟つてはいたけど、やっぱりお前のアシストはここまでか。話し相手としてやりやすかったのに」

『それはごめん。でもこっちは指示してきた人形を經由しているわけだから長時間のサポートはできないの。本体があなたの端末に移れば話は別だけどね』

本体、という単語に少々引つかかった。人形を經由して通信してきていることと自分に助けを求めている二つから、どこかで動けない状態にあるのかもしれない。

そうなるややはりこの者の救出もしなければならぬ、とローガンは扉に手を掛ける。

ナイフを持った手で扉を開けて『P226』を構えながら出入り口を確認。付近に異音はないがメンテナンス用と言われているその仄暗い通路には蛍の光のような仄かな光があるだけで暗い。さっそく鹵獲したゴーグルの定番だということで、頭にバンドで留めていたそれを目の前に倒そうとした時に大前提として聞くべきことに思い当たった。

「聞くのを忘れていたが、お前に指示している人形つてのは何者だ。あまりわからない

けど、別の奴の意思を經由させれるポイントになることなんざそうそうできることじゃないだろ」

ローガンは自分の端末に視線を落とし、まだ通信が続いていることを確認してみる。まだ繋がっており自分が投げかけた質問を聞き逃したことはないだろう。

『まーそうだよね、それは遅かれ早かれ聞かれて来るとは思ってたよ。でもこれも答えられないよ』

「……それは知らないとかじゃなくて、教えられないってことだよな」

『察してくれて助かるよ。それでもこれだけは忘れないで。その人形は『傍観者』じゃなくて『当事者』。上擦りの仮面は笑っていても素顔は真逆だから』

「お前には借りができたしこれ以上は問い詰めないことにするよ。この一件が片付けられ要求通りにするが……一体どこにいるんだよ？」

くすり、と通信相手の彼女は笑った。息がマイクにかかったのとは違い、笑い声がほんの少し漏れたかのようなのである。

耳を擦られたかのようにになったローガンは眉を蹙めたが、思ったような返答がくることはなかった。

ブツンツと通信が途切れ、無線機からはノイズが聞こえてくるのでローガンは端末に視線を落とす。そこにはもう誰とも通信で繋がっていないことを知らせるためのダイ

アログボックスが表示されていたが、それとは別でメッセージが送信されていた。開いてみれば同じく送信主がわからない者からのものだったが、本文でもう誰なのかは察しが付く。

『辿り着く為の『地図』と『座標』はもうあなた達の手にある。あとはそれに気付けるかどうか』か……」

しばしその文面に視線を落としていたが、そればかりで時間を使うのはよろしくない。

両目に収まったゴーグルを起動してから暗視モードにすると、ローガンは後ろ手で扉を閉める。ガチャンツツとしまった後に重い金属同士が嵌まる音が響いたが、あとに残っているのは静寂だけ。

深呼吸したローガンは両手に持つ慣れ親しんでいる武器を構えると、黄緑がかった視界におかしなものがないかと警戒しながら歩き出した。聴覚にも気を配りながら進むこちらを迎え入れるのは何も透視させない暗闇、それだけだった。

——〈グリフィン北アメリカ支部 同時刻〉——

こちらから送り出したAR小隊からの通信も途絶えてしばらく経ったが、今のところ開けている回線に聞き慣れている彼女達の声は入ってきていない。

それによる負の感情が疲弊しているハリーを徐々に蝕んでいくが、彼は足元から自分を飲み込もうとしている泥沼に気を払わずに、確認できるだけの情報を収集しようとしている。基地にいる支援班に指示を出しながら、自分も解析されて送信されているデータを見逃すことも捨て置くこともせずに目を走らせた。

「さっきここに送ってきた十四番目のUAV観測データを……いや熱源感知も含めて全部だ、急いでくれ」

ひっきりなしで自分の戦術指令端末に送られてくるデータに一度だけで穴が空くほど目を配らせるが目ぼしい結果は得られない。兵器や兵士を映したどれも同じようなものなのかわからないが、世界で危険組織としてマークされている戦闘員と画像を照合させていたりと集められるだけの事実をかき集めようとしているがどれも『不一致』とい

う結果のみ。

異変が起きた時、まだ生きていたUAVの映像からは仲間達が統率されている動きをしているのは確認できたが、ダムから大勢で出てきた時を境に全く見えなくなった。ハリーは思うにローガンがうまく立ち回ってくれていると確信しているが、AR小隊とは別で任務に送り出した404小隊の45が言つたように時間の問題だ。

今頃全員で脱出できていればいいが……。

「ジャミングを駆使する特殊部隊は世界中でも多くない。初手からの戦術も特殊で限られた情報でも他よりも尖っている物には違いない。だということにここまで見つからないとはな」

「ええ、それに完全に後手に回つてしまつています。現地にいる彼女達からの報告が聞けないんじゃないんです」

現グリフィンを纏め上げている総司令官もブリーフィング端末を操作して届けられた情報を確認しているが、ハリーの指揮官としての実力を見定めるためか基本的に静観している。だが部下にとつての緊急事態なので無関心や無頓着ではない。彼もわかっているであろうことを確認して思考面で補足していたりする。

スオミが404小隊の作戦指揮に移つてまだ数時間だというのに、猫の手も借りたい状況に陥つてしまつている。他の人形を変わりの補佐として呼ぼうにも、役割に当ては

まるその人形はダムの方に向かっており現時点で基地にいる人形達に代わりになれるものはいない。副官をスオミに任命してからは頑なに交代を拒み続けているのが要因で、頭にすぐに浮かぶ代役以外が指令室の端末の扱い方をよく知らないのだ。

とはいっても彼女を責めることはハリーとしてもするつもりは一切ない。彼女のおかげで打破できた逆境もあつたのだから。

「……ハリー、私が強く言う必要はないが少し休め。休憩なしで大分コンピューター相手に格闘しているだろう」

「この机から離れたら気絶してしまう自信がありますし、今僕が休んだら事態が手遅れになつたしまいかねません。大丈夫です、以前三徹したままで作戦指揮をしていた時がありますから」

寡黙であつたことを除けばあの父親から性格を受け継いでいるな、とヘリアンは胸中で呟いた。

そう思う彼女ではあるが、付き合いがある方であつた人物の息子なのだから多少は手を貸してやることも忘れない。UAVから得られた情報をブリーフィング端末で映し出されている周辺地図に表示させたりとして総合的な情報整理を行っていた。

上級代行官としての仕事でこういうのもあつたなと懐かしみながらもしていると、指揮官用の机に備え付けられている固定電話が鳴った。

「非通知……このタイミングで……？」

訝しんだハリーはすぐに補助端末を操作し、録画と逆探知機能を起動して受話器を取った。受話器を片耳に寄せて端末に接続している液晶画面に出てきている音波を見ながら言った。

「はい、どちらさままで？」

『グリフィン北アメリカ支部の指揮官、ハリー・クロスハートか？』

声は男性と女性の音が混ざっているように加工されているが、喋り口調にロシア訛りがある。

そのことをメモに走り書きして、上司が自分にも聞けるようにする為にヘッドホン付属のマイクを有線で繋げるとヘリアンに差し出す。彼女はこちらに歩いてそれを受け取ると両耳にあてがった。

「そうですがこちらが先に質問しています。名乗っていただけますか？」

『残念だろうがお前がそういう事が言えない立場にある。今回こちらは通告をしに来ただけだ』

「通告？こちらとしての状況とタイミングからして、占拠しようとしていた傭兵たちもろともこちらのチームがいたダムを強襲した武装勢力、と解釈しますがそれで差し支えありませんね」

『そこまでわかっているようで何よりだが……そうなると途中から把握ができなくなつて行き詰っているな。どこからわかかっていないか教えてもらおうか』

「こちらの能力を測っているのであれば無駄です。それとこの電話回線を通じて工作を講じようとしても徒労で終わりですからね。こちらにはそのようなサイバー対策に長けた人材がいますので」

『ブラフにしては三流だな』

「そう断じてしまつていいのですか？ それと流さずに反応したということとは自ずからそうしようとしていたことを認めたことになりましたが、自分の言動にお気づきになりましたか？」

『威勢がいいな。後方でふんぞり返っているもやし野郎だと思つていたが骨があるようだ。顔を直接見ることが出来なくて残念で仕方ない』

本当にそう思っているのか、とハリーは心中にて鼻で笑つた。だが電話の男はこちらに対し高圧的に話そうとしているがなにかを探ろうとしている節がある。

一泡吹かせたいという欲はあるが下手にちよつかいを出せば取り返しがつかないことになりかねない。ハリーにとつて煽り合いは嫌いではないどころか得意分野の一つだが、連絡が付けられない現場には自分の部下がいる。彼女達が無事に戻ってくるまでは、今のところこちらは先手を取れない立場にすることを忘れてはならない。

「それで、わざわざこちらにご丁寧に電話をかけてきて何の用です？」

『こちらの依頼人のこともあるし、単刀直入にいこう。今のグリフィンは鉄血の狙いはどこまで把握している？』

視線を上げてヘリアンを見る。彼女はアイコンタクトで『お前の判断に任せる』と視線で伝えてきたので、ハリーは範囲と言葉選びをして言った。

「……政府関係者の感情を利用して、というところまでは」

『なるほど。そうなると……『砂漠の湖』というのを知らないようだな』

「砂漠の……？」

聞き慣れていない用語にハリーは眉間に皺を寄せてどういふことを考えようとしたが、疲労が積み重なっている脳では情報処理をできそうにない。意識は冴えているというのに、思ったことができないことに歯痒く感じているハリーを置いて電話越しにふむ、と声を漏らすのが聞こえた。

『となればこちらが要求するもののもわかるまい。だがまあこういえばわかるだろう、そちらがアメリカ政府の要人の一人が持っていたデータを渡してもらおうか』

「……それにどのような価値があるのか分かりませんが、こちらが応じなかった場合は？」

『聞くまでもないだろう？先にここに来ていたゴロツキどもに代わって破壊する。その

前に有害物質を流して保護区の生活を壊すことも決定づけているが、それぐらいのことをしないと揺るがないだろ?』

ぐらり、と視界が揺らいだ気がした。それは気の所為であることは承知している筈なのだが、要因が重なりすぎてそうではない気もしてくる。

ハリーは今となつてはなけなしの気力を振り絞つて立ち直つて声を絞り出した。

「……なぜ、そのようなことをしようとするのですか? ロシア人がここでそのようなことをしたと公表した場合、それだけでも戦争は免れませんか?」

『政府とは余所者のこつちが知つたことじゃない。むしろそうなつたら仕事が増えるんだ。戦争行為万歳、喜ばしい限りだ!』

「この……!」

『だがオレ達を恨むのは筋違いだぞ。事の発端は国同士の争いを承知の上で始めた政府の意向だ。戦いがあればグリフィンだつて暇を持て余さずに済むんだ、いいじゃないか』

この言動でハリーは悟つた。この者がいる組織はまともな人間などいないといえるほど狂っている。頭のネジが外れているところではない。そもその物事への見方が、価値観が、築いている基盤の全てが違つているのだ。目の前で泣いている子供がいるのに対し、歩み寄つて声を掛けることをせずにそれを面白そうに眺めるのと同じだ。この

者は戦争そのものは『悪いもの』ではなく『良いもの』としてみているのだ。何も知らずに戦う兵士が死ぬのを望んでいるのといつても差支えないほどに。

それからもう、うんざりするような問答の繰り返しだった。グリフィンの指揮官として楽しめているのかと、好きなことをできているのかとと色々聞いて来て、皮肉を混ぜたこちらの回答をおかしそうに全て笑い飛ばしてきた。

『グリフィンというのはやっぱ面白くないようだな。コンピューターとにらめっこ、支援機器の操作をしているどこにやりがいがあるかに理解に苦しむ』

「勝手にそちらの価値観にすべてあてはめることではないでしょう。自分で用意している定規でしか物事を測れないのですか？」

『そんなことをすることにどんな意味がある？お前がやっているのは要は戦略ゲームだ。『命がある』とか建前を振りかざしながら戦場に兵士を送り込んでいる主人公を演じていて、なにが楽しい？』

「きれいごとばかりを並べるつもりはありませんし、彼女達を軽々しく扱うほど自分は現実と架空と混同していません。それに楽しいも何もありません、それこそこちらこそ理解に苦しみます」

『ブーメランだぞ。それこそ自分の定規で物事を測っているというものではないのか？』

「っ……っ……」

揚げ足をとられたりして舌戦でも前進できない。正直言つて不快なので受話器を置いて電話を切つてしまいたい、そんなことをすれば後々に耳が痛くなるようなことになりかねない。

それに今ので会話において自分が発言したことの言動までもが危うくなっているのを自覚せざるを得なくなった。度重なる長時間の作戦指揮を続け、一夜どころか現在まで寝ずにいる影響がここにも来ている。肉体的な疲労よりも精神的な方が自覚しにくい。

人体から生み出される自然なドーパミンによる興奮が収まっていくことで蓄積されていた重石がハリーに押し掛かってくる。それを見たヘリアンは代わろうと思つて口を開こうとした時だった。

ハリーの机の上に置いている携帯型の無線機のランプが点滅し始めて通話を要求し始めたのである。

手一杯で気付かない彼の代わりにヘリアンが取る。その相手から総司令官がどのような表情を浮かべることになったのかどうか、それは誰にもわからない。

ただ、連絡を寄越した彼女はこう言つたらしい。こちらを労う声色で『よくやつてくれた、戻つたら別命があるまで待機していてくれ』と。

〈16:21〉

ゴオンゴオン……!と作動音を立てる機械の陰などを確認してみても何度目だろうか、とローガンは独り言を漏らしそうになったが臨時の会話のパートナーはもういないので返ってくることはない。

作戦行動といつていいのかわからないが、ローガンからすれば一人で敵地に潜るのはもう慣れっこだ。それでも鉄砲玉になってこいとばかりな任務に無茶ぶり駆り出されたことを数えるのをやめて数年だが、自発的に嵐に突っ込むことになるのは初めてだ。

地下通路に入ってもうしばらく経ったが今のところ会敵することにはなっていない。ゴーグルの機能を切り替えたりもして熱源感知にも気を配ったりもしているが、ほぼほぼ一本道である通路では怨霊と言われれば連想する兵士をまだ見ていない。

(さて……)

大分歩いた先には重々しい扉があった。湿気が多いに加えて通路の片面に設置されている機器の機械熱で蒸し暑いので、もうここを抜け出したいという欲ももう無視できない程になっていた。なのでその扉がもう天国へのそれに一瞬は見えなくもなかったが、神々しい印象は皆無で、しかも扉には一枚の張り紙がある。妄想の世界に逃げるこ
とが回避できたローガンが読んでみると、『忘れもの注意！』。

「……俺が忘れていた物ってなんだろうかな」

人は逐一あったことを記憶しているわけではなく印象に残っていることしか覚えていない。良し悪しに関わらず、自身にとって衝撃的に感じる事が第一で前提だ。

誰もが忘れたことの方が比率的に多く、ローガンも例外ではない。自分の足跡を確認する為に振り返っても付けた覚えがあるのは一部分だけで、どれもが頭を悩ませるものばかりだ。

嫌なことを思い出して時間を浪費させるところだったと、ローガンはかぶりを振って手でゴーグルをどかす。そして扉の取っ手に手をかけてゆっくりと開け、まずは一セ

ランチにも満たない隙間から視野を確保し近くに敵がいないかを確認した。ブービートラップによるワイヤーもないので、身体を滑り込ませて静かに閉じた。そして近くにある作業機の陰にまで到達して再びゴーグルを起動、見える範囲で敵兵がいるかを探ったが目につく物は見られない。しかし部屋を移ったことで環境の変化があっただけではなく、こちらは前進を一旦やめて身を潜めているというのに足音や話し声が聞こえている。隠れている作業機から移動し音の発信源の方に自身は音を殺しながら行ってみると、迷彩マントを被っているだけに留めて銃を手元に下げている兵士が二人、仮の休憩所と定めているらしい場所で寛いでいた。ロシア語で会話しているので内容までわからないが、切羽詰ったような口調ではない。今のところまだ自分の存在を知られていないようだ。

足音が聞こえるのでまだ別におり、音の方角と数からして別で二人いるようだった。対処を考えたローガンだったが、ここではやはり攻撃しないことにして別の通路を散策していたところで一つ気付いた。今のところローガンは地下にある機械の総合制御室があるところにいるのだが、いたる要所に爆薬が仕掛けられていたのである。

(設置されている場所からして……ダム破壊に至れるのか?)

いや、違う。設置されているのは壁の一面側であって柱などといった攻撃されればただでは済まないところは避けられている。大穴を開けたりはしてもダムの瓦解には至

らせることはできないのに対し、なぜ中途半端に破壊活動をしようとしているのか、とローガンは素朴な疑問を持った。

(起爆した後ににかしらかの狙いがあるのなら……急がないと)

今ここで爆弾の処理をしようとしても多大な時間がかかる。それよりも先に付近にいる敵を制圧しなければならなくなったりと、タイムロスが著しいので現時点ですべきことではない。

状況次第でこの後ここにとんぼ返りで戻ってくることになるかもしれないがいずれはやらなければならぬということと記憶し、ローガンは警戒しながら進んだ。

(にしてもやりにくい……その場しのぎのような装備一式じゃ尚更だな)

グリフィンから支給された普段の装備とは違っているので足音が立てやすいので一歩ずつ前進する時に足裏を地面につけることにも意識を割かなければならない。敵から剥ぎ取った戦闘服とブーツなどを強奪し、身に着けてからしばらく経ったが感覚がなかなか馴染まないのが、隠密で足音を抑えるのも一苦勞である。普通に歩けば足音が起きるだけでなく、背負っているライフルや装備を吊り下げている金具などが揺れて望まない音を立ててしまうこともあるのでそれにも気を付けたりと気が楽ではなかった。

それでもなんとか浄水器の制御機械を複数置いてこの場から移動できた。ここにいる怨霊の数と配置を覚えながら移動していったところで階段があつたので暗視

モードの状態のまま一段飛ばしで上がっていく。突き当りの扉を警戒しながら開けると日光が隙間から入ってきたのでゴーグルの電源を切って進入。一旦外して周りを改めて見渡してみると、地上ダムの内部通路に出たらしい。目の前の窓からは六時間以上前にステルスヘリを見かけた広場が見えている。

ようやくここまで戻ってきたなと思つたローガンは一息つこうとした時に、バタバタとした複数の足音が近づいてきた。すかさず来ていた扉に戻つて身を隠し、気持ち程度に開けておいた。

「わかつているな、もし聞き出せなかつた時は人質として使うことしかできない。『捕虜をとつたのであれば人質以外の役目としても利用しろ』というのがボスからのお達しだ」

ロシア語ではなく英語による会話、それが頭に引つ掛かつたが一旦頭の隅に置いてそのまま聞き耳を立てた。もちろん、不意打ちを想定して『P226』とナイフをそれぞれの手を持っているのは忘れていない。

「大丈夫ですよおヒヒヒ。それよりも自白剤の新薬、あれが戦術人形に効くのかを試してみたくありませんかあ？汗を垂らしながらも息を荒くする様がホントに……ヒヒツ！」

「それでトリップしすぎて量を誤るなよ。それでこの間一人殺しただろ。『副作用がど

の程度のものかを」とかを理由にしていたが、今回は絶対にするな」

「了解ですうヒヒヒヒヒッ！」

「本当に分かつてるのか？」

扉越しに横切つていった会話を耳にしたローガンは、隠れていた地下への階段から出て遠ざかつて行つた足音の追跡を、サーマルに切り替えたゴーグルを装着して開始した。

グローザがいる場所の特定が省けたのかも思い、ローガンは未だに続いている英会話の内容に胸糞悪くなりながらも追つて行くが、音を頼りに目の前を歩いているだろう二人以外の怨霊の兵士は見かけなかった。なので物音を抑えることと見失わないことに専念できたのだが、敵にしている怨霊部隊の隊員というのは数としてそんなに多くないと考えられる。だが回収地点にての襲撃の人数も考慮すると少なくともない。

ヘリが着陸する場所を中心にした扇状に展開したこちらの対応するのに、ダミーがいる人形には二人以上のグループで応戦していた。人間であるローガンにも容赦なく二人以上の怨霊が相手取ってきたあの場での戦闘は、互角の戦いとは決して言えない。C4を地雷のように埋めるなりして罠を事前に仕掛けていたとはいえ、それでなんとか撤退までの時間を稼げただけであるのは忘れてはならないだろう。

決して自分が樂觀しないように戒めながらも追跡していると、次第に日当たりが悪い

方へとローガンは向かって行くのに気付いた。それだけでなくアルファと傭兵たちによる戦闘による痕も多くなってきたており、壁には血痕が残っていたりと凄惨な光景が嫌でも目に入ってくる。

ローガンでも土に残されている足跡が古いかそうでないかの判別はできるよう、飛び散っている血もできる。なのでブーツの裏で踏み躪ることになっているそれが新しいのであることがすぐに分かった。

(まさか……！)

会話の声が丁字路を曲がった先から聞こえてくる。ゴーグルを外して細心の注意を払いながら覗き込むと、目を思わず背けて再度隠れてしまった。そこにある光景はあまりにも惨たらしく、視覚的に刺激が強すぎて一般兵や戦術人形にも見せるのに了承を事前にもらわなければならぬ程のものだったからだ。

荒くなった息を整えたローガンは覚悟を決めると身を乗り出して歩を進めた。アスファルトと同じ色の壁や地面に留まらず、天井にまで飛んでいる血痕が濡らしているの是一部だけという範疇に留まらない。

もう元の色が全く見えない、そもそもここからの通路の色はこういう色だったのではないかと思ってしまうほどの染色。そして両側に転がっている死体の山。内臓が飛び出しているだけでなく四肢を切り取られたことによるものなのか、苦痛や恐怖で歪んだ

表情に両目が見られない。瞼が閉じられているからではない。はつきりいつてしまえば抉り取られてしまっているからだ。

「あららあまーた新しい山ができてしまってますねえ」

「せめてここらに防虫剤を巻くなりした方が良いな。ハエが集って臭くなってきたんじゃないまらん」

「それじゃあ手配しておきましょう。でもまあ死臭が鼻をつまんでいたらどうですう?」
「持つてるお前の道具を落としていいならそうするさ。でもそうすれば困るのはお前に限った話じゃないからできねえんだよ」

それらに構わずに楽しげな会話が聞こえてくる。日常的な惨状で見慣れているからか、気にしないといった感じに。

だがそこまでに気を回せず、水音を立てないように歩くローガンの脳が悲鳴を上げ始めた。ガリガリと引っ搔かれるような頭痛が起きると同時にフラッシュユバツクするのは過去に経験した、トラウマとなつている赤に閃連した記憶が掘り起こされる。通っているこのように数々の血に濡れているそれらが浮かんでは消え、そしてまた別の記憶が浮かんでくる。瞬きをするのに目を閉じても同じだ、これといった変化がない。

一歩踏みしめる度に記憶の欠片が引き出しではなく両側の死体のように山になつて埋まつていた所から飛び出してはローガンを苛んでくるのに抵抗していると、なにも両

開きの自動ドアが開かれ、そこに向かって血溜まりが弾けていった。
(くそ……！)

この惨状を見たら誰でも出来るだけ早く目的を達成してここから遠のいた方がいいと考えるべきだろう。あまりにも刺激が強すぎて正気を保つのも時間が経つごとに難しくなってくる気もしてきた。足元に転がっている人の指や腸、眼球が陽が差さないこの場所の光源となっている電灯で照らされて血の色に染まりながらテラテラと光って存在を主張してくる。

侵食してくる狂気に塗りつぶされてしまわない様に気を強く保ちつつ、ローガンは閉じられた扉に聞き耳を立てた。

「さて、未だに眠っている客人を起こさないでだな」

「そうですねえ、それじゃあこっちの『生贄』の方の処理をしてしまわないと……」

こっちの存在に気付いていない。それを確認したローガンは腹を決めて扉を叩いた。

ガンガンッ！と通路に鉄製の防火扉が叩かれたのと同じような金属音が響き渡った。現時点で他の敵が見えずともこの音が聞こえたらこちらに寄ってくることも考えられる。速攻で中を押さえて退却する、そのことを念頭にしながら『P226』とナイフを握りしめた。

「おい、まさかとは思うがカードを……」

一人が出てきた瞬間にローガンは左手のナイフをその怨霊の腹に突き刺してねじ切るようにして捻った。この男のものかそれとも自分のか判別がつかない苦悶の声を胸の方から漏れ出るのを無視し、片手で横向きに構えた『P226』を部屋の内側に向けて。この後の為か迷彩を解除していたのではつきりといるところが見えている。咄嗟に脇に下げていた取り回しの言いサブマシンガンを取ろうとしていたが、こちらの方が行動だけでなく銃のこともあつて早い。

バスバスバスッ！とサブレッサーを付いたままでバラベラム弾を三発放つが、一発外れるだけでなく命中した箇所は銃を持っていない方の肩と脇腹。

「ひゃ、ははははははははははははははははははははははははあ!!」

「ちいー」

先手は取ったがそれだけで残る怨霊の命を絶つて屈服させることはできなかつた。狂気しかない笑い声で反撃に転じ、腰だめに構えたサブマシンガンの銃撃が来る。

ダララララララララララッ！と発射速度の数値が高い銃撃をローガンはナイフによる不意打ちで倒した怨霊を盾にして凌いだ。タタタタタタタタッ！と弾丸がその背中に当たつたようだが弾は抜けていない。そして銃の発射速度が早いということは、その分弾切れになるのも早いという事でもある。すぐに横殴りに来ていた鉛の雨は止んだ。

「んの野郎が！」

用済みになった怨霊の体をその場で捨ててローガンは『P226』をホルスターに戻してナイフを利き手に持ち替えながら走った。マガジンを取り換えようとしていた怨霊がなにかを懐から取り出そうとしていたが、先手と同じく接近戦を持ちかけたこちらに分があつた。跳んでからの荷重を全力でかけた回し蹴りでその怨霊の胴体を蹴って転倒させた。

靴裏にアーマーといった装備とは別の柔らかい感触がありはしたが、ローガンは仰向けになった怨霊の首に逆手に持ったナイフを突き立てた。

「地獄に墜ちてろサディストが……！」

ゴフツ……と吐血して飛び出したそれがローガンの頬に付着して汚してくる。もう刃が埋まっているというのに抵抗すべく体重をかけているこちらの両手に力を加えているものの、目のハイライトが失われたと同時に消え失せた。

もうその者が起き上がってこないことと、こちらの姿を明確に認識することなく絶命したのであろう怨霊を確認し、ようやくここで知っている顔の者がいることに気付いた。

「グローザ……！」

椅子に座らせられ、両手両足を太い鎖と南京錠で拘束されているだけでなく胴体にまで同じく拘束具が取り付けられている彼女を見つめる。反射的に駆け寄ってみると、こ

ちらからの呼びかけに反応はしないが怪我はないようだった。

南京錠を見たローガンは鍵を探すために今しがた倒した怨霊達の荷物を漁る。そう時間もかからず、ナイフでとどめを刺した怨霊のポーチからそれらしい鍵束を見つけ、ローガンは戻りながら合致する鍵をジャラジャラと音を立てながら探した。

「……差し支えなければ、そのままこっちも助けてもらえたらありがたいんだが」

部屋に響いた男性の声で反射的にハンドガンを抜くと発信源と思もしき方へ銃口を向ける。ローガンの背後、座っているグローザの正面に彼女と同じく拘束されている男がいて、痣だらけではあるがその顔に見覚えがあった。

「……お前、『バーンズ』とかいう奴だな」

「へえ、やはりそこまで突き止めていたか」

「情報源、参考人として逮捕した奴から聞かせてもらったよ。腕が立つだけでなく随分と慕われていたようでもあったし覚えてもいたんだ」

「印象で記憶に残っていたのはお互いさまってことだな、へっ」

鼻で笑うその男、バーンズから照準を外したローガンはグローザにつけられている鎖の南京錠に会う鍵を『これでもない、それでもない』と片っ端から試していった。このタイプであれば用いられる鍵は大体同じもので統一されている物だよなど、半ば願いながら続けているとガチャリツと機構が外れて一つ目が地面に転がった。そのまま左脚

の方に移って同じく差し込むと抵抗を感じることなくスムーズに同じく外れた。そしてこの鍵がそうかと思ひ、残つてる四つの開錠に取り掛かった。

「そつちが終わった後で良い。片腕だけでも外したらこつちで勝手にやるから。時間との勝負なのは、てめえの動きからなんとなくわかつた」

「こんな状況下で敵があんなだ、外してやるのは吝かじゃないが……お前のを外すメリットを一つでも作つてくれよ。お前の言う通り速攻でやらないといけないが、ケチることを考えると外さなくてもいいんだしな」

「随分と意地の悪いことを言つてくれるじゃねえか……」

バーンズに言われた通り自分が口に出したことの性格の悪さをローガンも自覚しているが、そうでもしなければ自分の事に精一杯になつてきている感情の天秤による結果を変えれそうになかつた。グローザはまだなんとかなるにしても、ファーストコンタクトから逃亡犯と治安の追跡者としての関係であるこの男までも抱えきれぬ気はしない。「そうだな……まず共同戦線でここから脱するのに協力できることだな。どつちにしてもてめえも手はあつた方が良いだろ」

「……まあたしかにな」

「あんなカメレオン野郎どもに關してはオレ様も知らん。仲間が全員やられてこつちも手が足りないんだ、だからてめえとは手を貸したり借りての關係だ」

「それだけでも確約してくれるならそれだけでも十分だ、ちょっと待ってろ」

グローザを拘束していた鎖と拘束具を外し終えたので、ローガンはバーンズの右手を押さえる鎖を外し、その手に持っていた鍵束を手渡した。

そして彼が自分で自分を解放している間に、ローガンは周囲に置かれている物を確認してみるが、拷問用の器具だけでなく血だらけのペンチや鋸があつたりして顔を顰める。だが一通り見て行つたが、グローザの装備はここに置かれていなかった。

「捕虜にした奴の武器は別の場所に置いてるのか？」

「ああ、オレ様のもそうだ。意図はわからんがあんな奴らのしていることだ、ロクなことじゃねえだろうな」

そちらの回収もしなければならぬか、と考えたローガンはゲンナリとした。仕方ないことだとわかつてはいるが、嫌なものはやはり嫌なものだ。だからといって手を抜いてしまえばI・O・Pの技術が向こうに渡ってしまいかわかないのだが。

ガリガリと頭を搔いたローガンが溜息をついた時だった。

「あ」

「……ん、グローザ？」

目を閉じていたグローザが意識を取り戻したらしく、息を漏らして身震いしたように見えたのである。正面に回つたローガンが確認してみると、彼女はゆつくりと目を開き

始めていた。

彼女の頬に掌を当ててみるとそれまで気付かなかった脂汗がローガンの手を濡らしたが、発汗による効果がありすぎているせいか、驚くほどグローザの体温は低く感じる。まるで、自分勝手に動く本物の人形のように温度を感じなかった。

触れたローガンの手を白く細い手が震えながらもそつと掴み、焦点が定まっていない両目を自分に向けて唇が微かに動いて音を震わせた。

「お願い……ここから……もういや……」

「おい、どうしたんだよ」

「また……繰り返し返されるの……いやよ……もう戦いたくない……」

聞くことがないと思っていた弱音にローガンは度肝を抜かれるような感覚を覚えたが、グローザは今見ても熱にうなされているという表現が当てはまる様子。ロシア生まれの美人を想像させる顔には涙が溢れてきており、重力に引かれて頬へと流れてローガンの手をさらに濡らした。

予想していたのとは真逆の反応で思考が止まったが、ただではすまない状態なのは確かだ。ローガンは自由になったバーンズに尋ねた。

「奴らに何かされたようだが、お前にはわかるか？」

「ああ、そういえば……」

バーンズが何かを言い掛けた時だった。ローガンの左腕の端末がブザーと同じ警告音を発し始めたのである。

ブーツブーツ！という耳を劈く音に驚きながらも見てみると、自分でインストールした覚えがない地図が画面に表示されている。映されている構造と輝点の数とその動き、それらを見たことでどういうことかをすぐに察した。

ローガンは肩や首でグローザの全身を担ぎ上げてバーンズに叫んだ。

「新手の敵だ、数はこっちより多いぞ！」

それを聞いたバーンズは目の色を変えると、転がっている銃をとり、取れるだけの装備を身に着け始めた。

ローガンは扉の付近までくると一旦しゃがんで『P226』をホルスターから抜く。そして短時間で準備を終えた共同戦線の相手が追い付き、投擲物のピンに指を掛けて目配せしてくるので頷いて顎で進む方向を指示した。

「……ハロウィンにしてはちよつとはええか？」

「どつちにしたってシャレじやすまないさ。なにせトリックオアデス、本当に殺しに来てるんだからな。タチ悪いことこの上ないだろ」

「ちげえねえ」

ピンが抜かれたフラググレネードが来たのとは違う方へと投じられ、指示した方向へ

と撃ちながら走り出すバーンズにローガンも続いた。担いでいるグローザがなにかを
呟いているがそれに構っている暇はない。

なにせこうして戦っているのに精一杯なだけでなく、徐々に脳を埋め尽くそうとする
狂気に打ち勝たなければならないのだから。

30. 繋がる道筋と思惑 —Run, Don't be killed—

ふわふわと水中で浮かんでいるのと同じ感覚だ。何度も錐揉み回転しているせいで上下がどちらなのかわからない。冷たく肌を撫でるような水温は錯覚だろうが、それによつて故郷ロソアを思い出した。

それでもわかることはただ一つ。ここは現実ではない、ということだけ。戦術人形は夢を見ないというのにおかしなもののだが、そこまで頭が回らない。とにかく今はふわふわと流れに身を任せるだけ。

『グローザ……』

名前を呼ばれた。懐かしくはあるがとても愛おしいあの声で。聴覚センサーを優しく振るわせる、あの温かい音。呼ばれただけだというのに心はこんなにも跳ね、薪がくべられた暖炉のように感情の火は勢いを増す。製造されたばかりの頃の自分であれば、馬鹿で不必要な感情だと吐き捨てていただろう。だが、柔らかく包み込んでくれるあの両腕による抱擁をされたらそう思えなくなるだろう。誓約の証をもらったことで帰るべき場所があそことなつてはもう我慢がきかなくなつたものだ。なにせ唇同士の気持

ちの伝え合うことを知るだけではなく共有までも知れたから。

恋情が実ったことで幸福と愛が生まれ、それらがまた新たな自分の力となったことを今でも……いや、メンタルモデルがなくなるその日まで忘れることはないだろう。

『グローザ』

また声が聞こえるので発信源の方を見る。口元が緩んでいるのを自覚してはいるが止められない。

振り返った先に自分の視覚に映るのは残っている記憶から薄れることが決してないあの人の姿。赤いロングコートのグリフィンの制服をわざと思えるぐらい少しだけ着崩しているだけに留まらず、髭の剃り残しも目につく。だけどそのブルーの両目が自分を捉えて自分を呼んでいる。そして身だしなみが整っているとは言えなくとも優しく微笑んでくれている、それだけで嬉しくなった。

気付けば自分は親しみがあるだけでなく我が家と認識している極東ロシア支部の基地の中庭にいた。やや寒くはあるが日光が温かく照らしてくれる、あの場所にあの人と立っている。

『うん、おいでグローザ』

その人の名を呼ぶ。『指揮官』という役職ではなく、あの人の名前を。そして走る、愛

しい人へと。まるで他人の目を気にしない子供のようだと言われても気にしない。こは私とあの人しかいないのだから。

名をもう一度呼びながら駆ける。自分の声に喜びといった正の感情が溢れているのが少々恥ずかしい。それでもあの方は当たり前のこととして今まで受け止めてくれた。だから何も気に病むことも何もない。

あともう少し、というところで人間でいう瞬きをした、してしまった。広げていた両手を空を抱き、自分は地面へと転倒する。

「？」

名前を呼びながら身体を起こして目の前を見ようとすると誰かが覆い被さってきた。たまらず尻餅をついてしまう。

全体重をかけるようにして自分を倒してきたそれが何なのか見てみたら、あの人の、指揮官の遺体だった。背中には何発もの弾痕があり、そこから彼の血がとめどなく出続けていた。

気付けばどしやぶりの雨が降っていた。

指揮官の肩越しに、眼前を見てみる。そこには雑魚の鉄血兵と薄ら笑いを浮かべる鉄血のハイエンドモデルたちがいて、戦術人形の私達が持つのと同じ銃を持っており、硝煙が漂っている銃口をこちらに向けていた。

なにがあつたのか、それで全てがわかった。自分は衝動的に愛銃を持っている左手を持ち上げ、引き金を引いた。

「ああ……ああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

感情の奔流、警告やエラーが視覚に表示されるが知ったことではない。そんなのを出して目の前を塞ぐのであれば自分の、私の邪魔をするな。それだったら私と同じように撃ち続けろ、そうしなければ何も解決しない。

撃たれて風穴を空けられた鉄血兵は次々と倒れていくが、ボスのハイエンドモデルは跳躍し私の銃撃を回避した。鮮やかに跳び回るのに私も狙いを定め直して撃つが間に合っていない。上下左右、物陰などに転がっている憎き敵に当たらないことに私自身に腹を立ったその頃に、装填している弾倉の中身が無くなって引き金を何度引いてもガチガチと鳴るだけでさっきまでと同じように反動を生まない。

弾切れ、という単語がようやくAIに浮かんだ時には標的は雨の中に消えていた。笑い声だけでなく見下しているあの視線を私に残して。

「指揮官………」

愛銃を捨て、私は愛しい人の名を口にしながら容態を見ようとした。彼の腕は自分を抱き締めているままだったのでまだ息はある。だが防弾コートを貫通し何発も受けて

いるので楽観することはできない。

——逝かないで……私を一人にしないで……

そう言つて彼を一旦振りほどこうとした途端、力の入れ方が変わった。口づけを何度も交わした唇が耳元にきて微かに声を届けてきた。決して望まない、望まない形で。

『いきで……生きてくれ、グローザ……オレの愛しい女性……』

その言葉がA Iに入つてきた瞬間に僅かに残つていた力が失われて重みが増した。彼の腕は下がつて顎は肩に乗る。

それだけでもうわかつてしまった。私が愛した人がもうこの世からいなくなつたことが。ここに配属されてから数年、寝食を密接的に共にするようになってからも四季が何度も繰り返されたというのに。

それなのに私はこの人を守れなかった。何という無様、愚鈍、無力な人形だろうか私は。I・O・Pが開発したエリートという肩書きなんてあるが、そんなのはやはり意味を成さない。結局は上等な結果を得るだけの材料をもらっただけであつて、あとは自分でどうにかしなければならぬというのに。何故それをわかつているフリをしてしていたのだらう、どうして今になって痛感している。失つてしまつて初めて気付く、という言葉だけでは収まらないことになつてしまつたではないか。

「ごめん、なさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

謝罪をしても当人に届かないのだから何の意味もないことぐらいはわかってい
るだろうに。涙を流したところで、雨が洗い流してしまうのだから。

……ああ、そうか。『雷雨』のこの日を何度も見ているのだ私は。恋人を失うだけな
く戦友であつた彼女達も全員失つたこの日を。

私が戦えば隣に立つ誰かがいなくなる。人形も人間も誰もかもが全員。何度も、何度
も何度も何度も……。

もう嫌だ、戦場にいるのが。多少形が違うだけの悲劇が繰り返されるここにいるの
が。ここまで身も心も削らなければならぬのが戦術人形だというのなら、もういい、
もう戦いたくない。

——— 誰か、誰か助けて……助けてよ…… ———

〈16:57〉

「畜生が、次に進むのはどっちだ!？」

「左だ、その先に注意書きの扉があるからそこに突っ込め!」

背後からくる銃撃に対し時折応戦しては踵を返して走り続ける。基本的に前方は自分よりも荒々しいと思える男のバーンズに任せ、自分は牽制をする程度に背後を撃つて可能であれば一人ぐらい、怨霊たちをあの世へ送り返した。

潜入して一人で来た道に戻る形で走っている現状では落ち着くも何もクソもない。前から来たり後ろからは追ってきたりで脳の処理が回り切れていない。

「クソが、目の前から四人のお客さんだ!フラッシュを使わせてもらうぞ!」

「フラグも一緒に放り投げてしまえ!出し惜しみをして命が拾わせてもらえる奴等じゃないんだしな!」

ベルトに括り付けていた殺傷型の手榴弾と非殺傷の閃光手榴弾が一つずつ取られ、通路の曲がり角の向こうへと投じられる。先に投げられたのは後者のフラッシュバンで、金属が破裂したような音の後に一秒も変わらず爆音が轟く。

ドオンツ!!とダムの通路を揺らし、爆発が曲がり角のこちらを横切る。それと同時に火災報知機が働き、けたたましいベルを鳴らしながらスプリンクラーからの放水が始まった。

バーンズが前方の確認をしていると追手がまたこちらを撃つべく半身を乗り出したので、ローガンはしやがみながら『P226』で発砲する。現状では意味を成さないサプレッサーが付いたままだがそこまで気にする必要性あんど全くない。

放たれた弾丸が放水されてシルエツトがはつきりしている怨霊の肩だけでなく脇腹を穿ち、鮮血をまき散らせる。一瞬動きが止まったのを見逃さずに追い討ちをかけて追加で引き金を引いて一人を死なせた。

「長く持たないぞ、前はどうかんだ!」

「クリアだ、つうかこっちは弾がもうない!」

「なら交代でグローザを頼む。俺が前に立って応戦する!それとその銃は捨てておけよ!」

「なんでだよ、まだ使う場面は——!」

「あとで説明するから言う通りにしろ!!」

ぐったりとしていて動かないグローザをバーンズに任せ、ローガンは『P226』をリロードしておく。そして文句を言いつつも敵兵から鹵獲した銃を捨てた彼に渡して

から前方を確認しつつ、背負っていた『レミントンM700』に持ち替えた。

バーンズの言う通り敵影が見当たらないので飛び出し、地下への階段と仕切っている扉を蹴破る。バーン！と開いた扉付近にも敵対している対象はいないのでそのまま下へと向かう。横幅にそこまで余裕がない、狭い階段なのでライフルの銃口を前にしながら腰の高さに、そしていつでも撃てるように引き金には指を掛けておいた。安全を確保すべく先行して銃剣突撃の姿勢で駆け下り、爆弾が複数仕掛けてあった地下へと到達する。

そこでは予想していた敵兵の待ち伏せなどはなく、人影が一つもない。だが光学迷彩で待ち伏せしていることも考えられたので、返されたゴーグルのサーマルで必要な範囲でクリアリングを開始。物陰や自身の身長よりも高さがある物の上などを確認した。

バーンズが追い付いてきた頃には進行ルートの安全は確保。あとから続いてくるかもしれない怨霊への時間稼ぎとして階段の方にフラッシュバン、そしてバーンズがしたようにグレネードを放り投げた。ただし、塞ぐために二個以上を連続で、である。階段付近には敵が設置した爆薬がないので、よっぽどの暴投をやらかさない限りは大丈夫だ。

ドドドオン!!と緩い曲線を描いた手榴弾が爆発すると、うつすらと見えていた階段が瓦礫で見えなくなる。人が通れるようにするのだとしたら少々時間が必要で、その頃に

は自分達はここからとんずらしているだろう。

「……よくもまあ、ここまで頭が回るもんだなてめえ。あいつらみたいに楽しんでやっているわけじゃないだろうな」

「奴らにも聞かれたけどんなわけないだろうって話だ。生きて帰るのに必死なのに、そこまで余裕があつてたまるかつてんだファツキン」

大きく深呼吸吸して酸素を肺に取り込んだローガンがそう悪態をつくど、それもそうだとバーンズは笑つた。

一息つきたいところではあるのだが、今自分達がいるのは敵地であつて安全が確保されたわけではない。というよりも、周りが爆弾を仕掛けられている地点なので安らげはしないだろう。

放たれた銃弾が掠めたことにより頬から出血しているのに今更気づくが応急処置する時間があまりないどころかこの程度では億劫でしかない。手の甲で拭うと数十分前に通つた道を辿つた。

「それで、さつき言つてたことの理由つてどういう事なんだよ」

バーンズは本来であれば敵対関係にいる男なので少々迷つたが、それだけでクヨクヨしていれば死に繋がる。なので正直にローガンは包み隠さずに話した。

「ここまでの裏道を教えてくれた信用できる奴から聞いた話だ。ロシア政府のロクでな

しは戦術人形よろしく、新技術を人為的に外部組織の兵士に施しているんだと。それで自分達の銃の位置を遠くから知れるだろうから、こつちが使う為に鹵獲しても敵をおびき寄せる餌を掴まされるってことだよ」

「そういうことかよ……。それじゃ、今のところそれぐらいしかてめえはわかっていないのか？ 外部組織の名前とか構成も含めて色々」と

「ああ。それに奴ら自身にまだわからないこともあるから油断ならない。最悪を想定して対処しろ、というのは簡単だけど線引きができねえよ」

「銃が思ったように使わせてもらえない縛りがあるに加えて、奴ら全員が血を見るのが大好きな残忍と来たものだからタチ悪いな。援軍はないのか？」

「悪いけどこつちからも連絡が付けられないから助けを呼ぼうにもできない。だから……」

言葉が続けようとしたその時、近くの手摺に火花が突然散って延長線上にある壁を穿った。すぐに首を竦めてローガンは応戦する体勢に入ると射線を推測しそちらに視線を向ける。何もないように見えるが、ゴーグルを迷いなくつけてみるとそこにはマントを被っている兵士が見えるようになる。

「クソ野郎どもが来たぞ、視認できた敵数は……八！」

「あつちは俺が通ってきた道だぞ！」

「先回りされて退路なし、最高だなおい!!」

虫みたいにワラワラと出てくる怨霊にローガンも応戦する。『レミントンM700』のスコープを覗いて別の物陰に移動している敵兵に照準を定めて発砲。ドンツ!と久しぶりの狙撃銃の反動が右肩に響くだけでなく腹にも木霊す低い銃声が発すると、銃弾は標的の足元を抉った。

舌打ちしながらポルトアクションで不要になった弾を排出し、ゆっくりと狙えないがスナイパースコープを調整し再度狙いを定めようとしたが近くに銃弾が飛んできたので身を屈めた。

「完全に数で押されてしまってる!このままじゃ時間の問題だぞ!」

「ならこっちで攪乱する!てめえはそのまま狙撃を続ける!予備のマガジンを寄越せ!」

「無駄撃ちするんじゃないぞ!」

グローザを物陰に下ろして叫ぶバーンズに、ポーチからまだ使える『P226』のマガジンを三つ地面で滑らせるようにパス。彼が受け取るのを見てからローガンは場所を変更し上体を低くしながら左方に移動した。

こちらに距離を詰めるには連絡橋になってる橋を利用しなければならぬので、特別な道具を使われたりしない限りは他から回り込まれることはないだろう。すなわち

奇策による不意打ちがなく全滅させればいい。

しかし忘れてはならない。頭数に限らず単純な火力による戦闘では間違ひなくこちらが不利であり、弾薬もほとんどないといえる。それらの事を忘れていたのでは未来はない。

「橋に盾を展開した野郎どもが二人行つてるぞ!」

「そこで釘付けにしろ、こつちで片付ける!」

比較の見晴らしのいいポイントを発見し、ローガンは手摺にバレルを乗せて射撃体勢を安定させて連絡橋がある方へと視線と銃を向ける。標的との距離が最初と違う為、スコープのピントを合わせて息を大きく吸いこんで息を止める。呼吸によるブレを無くしてサイトの中心に怨霊を捉えて引き金を絞った。

第二射は命中し、ほぼほぼ狙った箇所とも言えるだろう。撃たれた怨霊は倒れて見えなくなり、二人目や他がこちらに気付く前にローガンは弾を排出しよう一発撃った。

「橋の奴らは倒したぞ!」

「奴らの装備を奪う、援護しろ!」

「少し時間をくれ、間をおいてから行けよ!」

ガガガカンツ!と再びこちらを狙った銃弾が付近に着弾したタイミングでローガンは発砲した分だけ弾を込めると狙撃地点を移動した、ように見せかける為にローガンは

高いところにある複数の備品に近くの工業部品や道具を投げて音を立てさせた。少しタイミングを置いてから同じところ、匍匐姿勢で手摺に取りつけている鉄板と骨組みの間から戦場を覗いて射撃体勢に移行した。

言われた通り待機していたバーンズは前方に牽制射撃をしながら走り出し、連絡橋に転がっている小銃を回収する為に向かう。そうしている彼に対岸の橋の根元付近で照準を定めている兵士が二人。息を吸い込んで止め、狙い通りに頭部を穿つ。だが連射することはできないので、血肉をまき散らした味方に動揺しないもう一人までの対処は間に合わない。

ロシア製のアサルトライフル、サブレッツサーが標準装備である『A s V a i』の銃口から硝煙が舞うのがここからでも見えた。

「くそっ！」

幸いバーンズはすぐに身を隠してやり過ごしたが、場合によっては頭部を撃たれて戦闘不能になっていた。やはりメンタルが他の組織の兵士とは違う。すぐ傍で味方がやられてもお構いなしだ。

悪態をつきながらも弾を排出して次の標的を選ぼうとした時だった。目の前の手摺に銃弾ではないなかが命中しそこでロックされた。

反射的に見てみれば、それは弾丸やグレネードといった直接的な殺傷力があるもので

はなく、用途は別にあるもの。以前同類の装備を使いはしたが、それよりもずっとしっかりしている代物であることをローガンはこのあと思い知らされた。

ギュルルルルルルルルルル！とワイヤーやロープが巻き取られるような音が聞こえたと思つた瞬間、目の前に二人の怨霊兵が現れたのである。

「フックショットか……！」

サーマルで映された彼らが片手に持っているものを見て驚きながらも、ローガンは不意打ちを何とか対処した。ナイフによる刺突を銃で受け流し、ストックを怨霊兵の顔面にぶつける。鈍い音がして仰け反った味方をカバーすべくもう一人が逆手に持ったナイフを薙いできたのは『レミントンM700』をその場に落とすかわりに防いだ。

ゴツ！とローガンも防御に徹しずには大振りの怨霊の脇腹に右拳を叩きこみ、左手でナイフを抜いて同じ箇所を横薙ぎで切り裂く。深々と肉を抉って敵の血が半円状に広がって足元が覚束なくなった敵に追い打ちで蹴りをかまそうとした途端、最初に刺突を繰り出した怨霊が復帰し組み倒してきた。全体重を使った突進に耐えきれず、ローガンは背中を地面に付けてしまう。痛みに呻く暇もなく、怨霊が拳を振り上げてこちらの顔を殴ってきた。

数発殴られたが、ローガンは野放しになつている右足で怨霊の背中を蹴って前のめりにさせると頭突きをお見舞いした。自分の腹の上で跨られていても相手が相手なだけ

ない。タンタンツ！と銃声としては高い音と鉛玉で風穴を空けられた怨霊は絶命し倒れた。

休む暇がなかった接近戦で息が上がりはしたがまだ戦闘続行である。敵の拳銃を捨てると落としていた『レミントンM700』を拾い、見ていた戦場を俯瞰した。ローガンが二人の怨霊と戦っている間もバーンズは奮闘していたようで、足元にはローガンが倒した覚えがない死体が三人転がっている。彼と自分が倒した怨霊の数を合計してみても九人だが、こちらからでも見えている敵兵は三人いる。

「いい加減に嫌になってくるってんだよな……！」

ライフルで再び狙撃を開始しようとしたその時、地響きがして天井から瓦礫が降ってきた。すぐにローガンはその場から離れて様子を窺った。

「マジかよ!？」

爆薬を使って通路の地面に穴を空けたらしく、覗く様に前屈みになっている怨霊が何人もいる。それだけでなくこちらに降りてこようとしているのが数名。

舌打ちしたローガンは狙撃の為に移動していた道をすぐに戻り、流れ弾が当たらない様に陰で置かれているグローザを担ぎ上げた。背中に魔の手が届く前に走って連絡橋へと走る。幸か不幸か、開けられた穴から撃たれてはいない。ただラペリングを終えている怨霊がこちらに撃ち出そうとしているのが見えた。

そこからは振り返らずに走って階段を下り、戦っているバーンズに追い付いた。

「逃げ場なしの八方塞がりまであと一歩だ、速攻で行けるか!」

「タイミングを測ってくれたらいつでもいいぞ!」

「よし、三秒後にフラッシュ行くぞ!」

貸していた『P226』が返されたので、グローザを担いだまま手に慣れ親しんでいる拳銃を一旦置いてからベルトに下げていたフラッシュバンをピン抜いた状態で片手に持つと投擲。そして投げた先の方で閃光が迸ったタイミングで二人して飛び出す。バーンズが先行し、ローガンは援護である。閃光がゴーグルを通したらしく、怨霊達が目元を押さえているのが見えたがバーンズが亡きものへとしていく。フラッシュの影響を受けている者達に銃弾をくれている彼を狙おうとしている一人を撃ってローガンは敵がいなくなつた地下通路を目指した。前後が入れ替わり、バーンズが援護する為に後ろに付く。

「追手が来たぞ。オレ様達を逃がさないのに必死というよりも狩りの獲物を逃がさないというのを楽しんでる、そんな表現が似合う様子だぞ!」

「勘弁しろってんだ、こっちはもうクタクタだつてんのに!」

文句を言いながらも走るが、体勢が整つたらしく銃弾が近くに着弾し始める。それでも走っていると閉じかかっていた扉が勢いよく開かれた。

「くそっ——つてお前なんでここに!？」

「詳しく説明しているだけの時間はありません。急いでこちらに!」

ローガンは先回りできていた怨霊が来たとはばかりに思つて『P226』を構えたが、扉を開け放つた相手は見知つていどころか毎日のように顔を合わせている人物であつた。

言う事に従いローガンはそのまま走つて通路の方へと避難すると、もう一人の顔がこちらを迎え入れた。

「ローガン、怪我を……!」

「そこまでデカくないから俺の事は良い。それよりもそこにいる奴は一応共闘関係だ、こつちに誘導してくれM4!」

「了解です!」

バーンズに呼び掛ける一人の戦術人形、AR小隊のM4が援護射撃も始める。彼もグリフィンの人形が来ていることによるせいか、一瞬目を見開いたが了解の意を示してこちらに駆けてくる。

少し安心してしまったことにより、気力で持たせていた身体の力が抜けてしまい担いだままにしているグローザを落としそうになったが、同じくAR小隊のメンバーであるAR15が物理的に支えてくれた。

「ちよつと、大丈夫なの……!？」

「わりい……ちと疲れちまった」

「ここを抜けたら休める筈よ、頑張つて」

仲間からの励ましを受けたのもう一息ということでもローガンは気合を入れ直すと、バーンズがこちらに到達しM4は扉を閉めた。それを合図に皆で逆側へ走り出し、AR15とM4は簡易設置型の地雷をその場で投げ捨てるようにしながら定期的に置いて行った。

「動けなくなるほどの怪我がなく無事で何よりです、ローガンさん」

「助けに来てくれてマジで助かった、礼を言うよ。とにかくお互いに説明し合う必要があるし、セーフポイントをどこかで見つけよう」

「大丈夫です、予めそういうポイントを見つけてROに維持をお願いします。それで……」

M4は銃を捨てて右方で走るバーンズを見てやり、こちらに視線を戻して問いかけてきた。AR15も口には出さずともその目で同じ疑問を持っているのを察せた。

「彼は信用できるのですか？随分と戦い慣れているので後ろから首を搔かれるのが容易に考えられるのですが……」

「気持ちにはわからなくはないが、助け出す際に借りを作らせたんだ。ああいう性格の奴

はそう易々と裏切つてこない」

「随分とはつきりと言いつ切っているけど、その自信は何処から来ているのよ」

「……俺の経験と勘」

鳩が豆鉄砲を食らったようになったM4とやれやれと困ったように額に手を当てつつも口元は緩んでいるAR15を見てローガンは笑った。昨日もこうして彼女達と会話していたというのに随分と久しぶりに感じる、と郷愁に似た感覚を覚えながら。

そうしていると背後から爆発音が響いてきた。ドオン……!という爆音でもう一度脳のスイッチを入れ直し、振り返らずに彼女達と走る。

「一旦ここから離れたらROの元に向かいます。そこでローガンさんの本来の装備も置いていきます」

狂気の巢窟と化したあの場から少しだけでも離れられる、それだけでも気は休まるよとローガンは口に出さずとも二人に感謝した。

〈17:42〉

二人の先導に従って辿り着いた場所はコンクリートで造られた山小屋のような建物だった。乾いた土のほほ同色の枯葉を踏みしめながら辿り着くと、M4の言っていた通りでR0が確保して状態で待機していた。

R0から手当てを受けている間も疲労が押し寄せてはしたが、情報共有などすべきことがあったのでまだ完全に体を休めるのはお預けである。

「……とりあえず、ここまでが俺が得られた情報だ。無いとは思いが小さい子には絶対刺激が強すぎて見せられないがな」

「戦術人形にもアウトな人はいるでしょうね。悪影響で我を失う人形もたまにいますから……」

「あれじゃさすがにスプラッタームービーが好きな奴をあそこに放り込んでやろうという冗談もかませねえよ……」

ローガンも含めて、情報共有に集ったのは五人。一通り話したこちらに同情の眼差しをM4を向けてきたので笑い飛ばしてやろうとも思ったが、乾いた笑い声しか発することが出来なかった。鉄錆のような嗅覚で得られる情報よりも視覚によるもののシヨックが大きかったので覚えていないように、腰を下ろした現状のように落ち着いた状態になってもプラス思考にまで持っていけていない。それどころか一周周ってしまい何とも思わなくなってきたので、常人としての感性を失わない様に願ったローガンである。

「そういえばあまり覚えていないんだが、そっちは俺とグローザがいなくなってからどうだったんだよ」

「置き土産でフラグが放られそうになったけど、背中のジェットパックを撃つたらバランスを損なって落ちて行ったのよ。それでお終い、ていうわけにもいかないし私達であなたを助けに来たつもりだったんだけど余計なお世話だった？」

「いや、全然。繰り返し返すことにはなるけど本当に助かったよ。だけど補給をしないでころかダミーを連れずについて、無謀の一言でしかないと思うんだが俺だけか？」

「二人でグローザを助けに言ったあなたに言われたくないわよ。なに？自分の命は勘定に入ってるのか言わないわよね。そんな口だけの言い訳を聞きたくないわよこのおバカ」

隣に座っているAR15からありがたい台詞と一緒に脇腹に拳を受けたことにより声を漏らす。衝撃こそあれど力加減は痛くない程度に抑えてくれたが、それとは反対に言葉による見えない暴力は容赦なかった。

「いやだつてよ、あそこで戻つてもこつちを見つげ出してくれるつてなことはなかっただろ。保身第一に行動していたわけだから周囲には最大限で気を配つてたんだし、こうして合流出来たんだからオールオーケー……」

「結果論で語るんじゃないわよ、バカローガン！ 一步間違えるだけでなく巡り合わせが少しでも違つていれば死んでたのかもしれないのよ。さっきだつて私達が助けに入らなかつたら危うかつたのに保身第一!? ああもう頭に来た！ 頭のネジが足りないローガンはこうしないとダメかしら!」

「あだだだだだだだだだだだ!?! いっしかやったことがあるこの体罰を俺が受けるとは思わなんだつていうかマジで痛い痛い痛いAR15さん俺の頭皮が死んじやいますこのままじや白髪どころか髪が生えてこなくなりますからあああああああああああああ!!」

「バカにつける薬はないつていうけどあんたに有効なものはないわ! 差異はあつてもそこまで考えれない筈もないわねローガンの事だから! だつたら確信犯、考えが至らないないよりよっぽどタチが悪いことはわかつている筈でしょこのオタンコナス!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!とスクリュー並みに回転しているARR15の拳がローガンの側頭部を両側から痛めつける。逃れようと体全体を駆使するが、ローガンの握力と腕力では彼女の腕をどかすことは敵わず、それどころか万力を思わせる圧力も加わっているので前後に体を動かしても意味を成さない。結局は両足をじたばたさせることしかできずにいた。

「言ってる事はごもつとも我ながらそう思いますけど許してくださいだつてグローザー人だけが敵地に残されたんじゃないやどうなるかわかったものじゃありませんしロクな扱いをされてないと思つたんですものお!!」

「うっさいもう喋るな……こまでの短い期間で成果を出してくれてはいるけど命を何度拾えたかわかっていないわよねあんた!一緒に行動している味方がいないならこれ幸いとホイホイと敵陣に向かつているんじゃないや!私と会う前にもこういうことを繰り返していたんでしょそうよね!」

「ひいひいひい勘が良すぎて首を縦にしか振れない振れないけど矯正中ですから勘弁してください!今後はないようにしますからああああああああああああああ!!」

「だからそういうのはないと言いつつ切りなさいって前から言ってるじゃない!有言実行以前にこつちの身にもなりなさいって話を理解しなさいこのニワトリ頭が!!」

「もう落ち着いてARR15。ローガンさんも無茶が過ぎたけどこう言ってるじゃない、

今回はこれつきりにしてこつちも痛くなつてくるから」

「これでもまだ足りないほうよ絶対に。この分からず屋はまたやらかすんだからここできつく教え込んでおかないと……」

「……前々から思っていたけどお前は俺のオカンかよ。S O P I I に理性養えとか言つておいて自分は棚上げするといだだだだだだだだだだだだだだだだ!!」

口は災いのなんとやらを学ばないローガンの為にといわけではなく、話を進ませようと静止を促したM4の行動も虚しく暴力が再開される。これまで見たことがない戦術人形の新たな一面を目の当たりにしているせいかわンズは目を丸くしている。R O は意識がはつきりしていないグローザの容態を集中して調べている、と思っていたのだが彼女もチームメイトが減多に見れない変貌に顔が引き攣っている。

ようやく気がすんだのかグリグリ万力地獄から解放され、摩擦の影響もあって普段よりも熱を持つ側頭部を押さえて悶絶する。自然に冷却されるのを待つローガンをAR15はそっぽ向いて明後日の方を見るが、そんな彼女の心境を親友は理解しているみただいである。

「気持ちにはわかるけど、もうちよつと労つてあげたら? たしかに無茶が過ぎてはいたけどグローザを助け出しはしたんだから。本当は無事でAR15も嬉しいんでしょ?」

「そんな甘いことは言つてられないのM4。それに仲間が無事だったのを嬉しく思うの

はおかしくないわよ」

「もう、素直になつてよAR15。私だつて……」

こちらに見向きもしなくなつたAR15と苦笑いしているM4から離れ、ローガンは彼女達が持つてきてくれていた自分の本来の装備を確認する。『ハニーバジャー』はいつでも撃てるように良好な状態であり、黒や紺色による暗色で統一されている、ポケツトやフックなどが所々にある防弾ベストや戦闘服も問題ない。そして変装によるカモフラージュで使つていたポーチやサイドバックとは別のも全て揃つている。そして何よりも紛失したくないとも思うそれらがあるのを見てから、ローガンは全身一通りの装いを戻した。

「やつぱり慣れてる服装とか武器が一番だよな……」

独り言でそう呟きながら汗のみならず返り血も染みついてる借物を捨てる。体全体と慣れ親しんできている藍色の戦闘服に上衣と下衣両方とも着替え、黒の防弾ベストを装着。足音を消すことを前提にしている隠密に特化したブーツに履き替えたりと、細かい装備を一通りつけ終わる。ポーチや持ち物の中身も入れ替えたりもしている最中に、スカーフやスカルマスク、そして出動する直前に持ち出した腕章は取り出して装着した。マスクは口元につけずに首元にかけている状態だが、蒼の輪は左腕に通して固定する。そこに描いてある『シャドー隊』以外の一部のマークを見やつてから、建物内の

人目がないところから出た。

陰から出てきたローガンを最初に見たのはバーンズだったが、一瞥しただけでとくに何も言っただけでこなかった。それでもA R小隊の一員として話は聞いていたであろうR Oは微笑んだ。

「お似合いですよ。P M Cの兵士といったら如何にも、といった感じですよ」

「比べられて一人だけ目立つような格好はしたくないが、そう言っただけで貰えるのは嬉しいな。だからといって女物の服を着たいとは思わんが」

「そうでしょうね、ローガンさんならそう思っても仕方ありません。でもお洒落なのを日常生活で着たいとは思わないのですか？」

「よつぽどのことがないのであれば俺は必要最低限のものでいいよ。毎日着るわけじゃないんだし」

ローガンさんらしいですね、と苦笑したR Oが再びグローザの容態確認に戻ったので、邪魔をしないようにローガンは『ハニーバジャー』の横にグレイから借りている『レミントンM700』を置くと少し離れた所に腰を下ろした。と同時に、ローガンの腹の虫が主張を始めた。今になってから考えてみれば、輸送ヘリの中で軽食を朝食として食べただけでそれから食べ物を口にしていない。ちまちまと要所で水は飲んでいたが、胃が消化するものを入れていなかった。

なにかないかな、と思っても自分以外の誰かがそういった物をもっているとは考えにくい。グローザとバーンズは本来の装備は手元になく、AR小隊の三人の少女達もここまでの長丁場になるとは考えていなかっただろうから食料を持ち出していないだろう。唯一持っているのではと考えられるのは、鉄血に対しては容赦のない気性だけでなく子供のような感性なども併せ持つSOPPIIぐらいだ。

ないものねだりをしていても仕方がない、我慢しよう。そう思っていたローガンの目の前に何かが差し出された。何かと思つて視界のピントを合わせて見てみると、短時間で摂取できる栄養食として知られているスティックバーで、差出人を伝つて見てみると目を逸らしてバツが悪そうにしているAR15だった。

「……くれるのか？」

「それ以外にどう見えるのよ」

押しつけるように眼前にまで寄せられたのでローガンは素直に礼を言いつつそれを受け取った。アルミホイルに似た外觀の素材で包まれているクツキーを頬張っている隣にAR15が座つてくる。特に深い意味もなく一瞥して視線を目の前に戻すとROの近くにM4が寄つていつて話を聞いていた。二人から壁に体重を預けている人形の方を見て呟いた。

「戦術人形でもやっぱり戦いたくないって思うことはあるんだ……」

「どうしたの急に」

適当にはぐらかしてローガンは大きくスティックバーに齧り付き、拘束を解いた直後のグローザの弱々しく感じたあの相貌を思い出した。凛々しくはあっても棘がある、上司や人形達には柔らかくあっても自分や敵には雷雨のように厳しく当たる。とはいっても口だけで実力が伴っていないわけではなく、基地内での訓練で残した成績だけでなく実戦でも優秀といえる。突如の不意打ちで動けなくなつた味方の救出に一役買っただけでなく、先陣切つて前進しようとしたこちらに合わせてきた。他にも撤退では脚力で負ける自分の背後について援護してくれたのだ。

口で大きいことだけを語るだけでない、こうして肩を並べてみて実感したがM16に並ぶ実力者であることは間違いない。それがローガンの中であつたグローザの印象である。

それに反して、あんな表情で嘘を並べたようには朦朧としている様子だったので思えない。気丈に振る舞う一人の人形としての本音じゃないだろうかと考えられる。

ではあのようになり、そして未だに汗を流しながら斃されている原因となつたのは何か。それを探るのはROと交代したM4の役目だ。詳細はわからないが、言うまでもなく原因を作つたのはあの怨霊たちだ。

「……色々と考えている顔だな」

声のした方を見てみると、頭の後ろで両手を組んで足を組んで投げ出しているバーンズだった。彼はこちらの様子を笑ってたりして面白がっているわけでなく、眉間に皺を寄せている真剣な様相だった。

「なにを考えているかは知らねえが、あのお譲さんが追いつめるだけの材料はあつたぞ」「知ってるなら早く教えてくれ、もったいぶらなくていい」

「関係がない奴の苦痛に満ちた絶叫でも精神的に耐えがたいものがあるのはお前は知っているか？ そいつの強さにもよるが、痛めつけられる奴の人数が一人二人どころじゃなく複数人だったら？」

ビクンツと心臓が跳ねた気がした。ローガンにとつても嫌な記憶としてこびりついている、目を逸らしたいそれがフラッシュバックする。自分ではない誰かを目の前で痛めつけること、見知っている相手でもそうでなくても精神に来るダメージは形容し難い。あの通路で転がっている物がそうなのだとしたら。

隣に座っているAR15はわなわなと震え始め、ROは顔を青ざめる。代表としてAR小隊の隊長であるM4が震える唇を何とか動かしてバーンズに確認を取った。

「それじゃあつまり、ローガンさんが見たのって……」

「てめえらが考えている通りだ。俺もそうされかけたが、お嬢さんの目の前でオレ様と同じ傭兵たちを斃って殺したんだよ。グリフィンのあんたらが把握している情報を知

る為にな」

「それで私達への攪乱という線は……ありませんね。そうすることで得られる利点がありませんし、あなたも傭兵側の人間でしたでしょうし」

「外部組織の人間の言うことをすぐに信用しないというのは結構。てめえらを騙したところで意味がねえ」

嫌な想像は的中。頭痛がしてくる頭を押さえつつ、ローガンは鼻を鳴らすバーンズに聞いた。

「死体の出処と経緯はわかったが、全部がそれに使われたのか？」

「いや、あそこにあつた六割は奴らの娯楽だ。わざわざ快樂を得るのに捕虜にしているのだから余計タチが悪い。それらに辛抱強くお嬢さんは耐えていたようだが、オレ様が見た時には大分衰弱していたから相当ヤバかつたんだろうな」

太腿を殴りつけたその勢いでローガンは立ち上がる。冷えた壁を殴りつけ、額を当てて加熱された自身の熱を取り払おうとするが何の意味を成さない、それにも腹が立つてくる。

あまりにも惨すぎる行いを目の前でやられる尋問。程度は違えど、目の間で四肢が切断されたりする様を何度も見せられては異常をきたすのも当然だ。ローガンにも似たような経験はあるが、そこまで仲間が痛めつけられていたわけではない。だが形は多少

違つても命を落とさせてしまった、それだけは一致していた。

気付けばAR15が近くで自分の肩に手を置いて落ち着けさせるにしてくれていた。気遣つてくれている彼女に礼を込めて目配せをすると、頷いてバーンズに聞いた。

「グリフィンから情報を聞き出そうとしているのはわかったけど、詳細はどういったこと？」

「そこまでオレ様にはわからねえよ。尋問が開始されようとしたタイミングでその野郎が突入して奴らを片付けたんだ。ただ、監視や尋問で移動させたりする奴らの会話で気になることを言っていた」

「気になること？」

向いていた壁から振り返ったローガンがバーンズを見ると、彼は自分を一直線に見つめていた。怪我に対し簡易的に処置されている顔にある口が開かれ、『それ』が空気を震わせて自分達の耳に入ってきた。

「てめえら、『オアシス』ってのを知ってるか？」

31. 辿るべき道標 — Quiet anger —

〈17:51〉

何気ない日常の一角に建っている建造物の裏路地にて、45を隊長として機能している404小隊の面々が集合しているだけでなく、数人の治安組織の隊員もいた。彼らはバックアップとしてここにおり、表道にも私服で変装している隊員達が待機している。「……なあ、本当にあんただけで大丈夫なのか？」

簡易点検を終えた『UMP45』にマガジンを装填し、襲撃にあつた場合にでもすぐに対応できるように準備を終える。そうしていた45に協力を申し出てきたカイルがそう彼女に尋ねた。

実はここに来るまでも二度同じように45に聞いてきており、こう三度目になつてはさすがに『またか』と感じずにはいられなくなってくる。それでも45はいつものような笑顔を作つて猫撫で声でその問い掛けに答えた。

「何度でも言いますけど大丈夫ですよ。こういう荒事の対処は日常茶飯事ですから」
「それでも人手は多い方が良いだろ。相手は油断ならぬどころか、殺人嗜好まで持ち

合わせている奴だぞ。数で押し切るとは言わずとも……」

「……自分で言っていることに気付いてますか、カイルさん。それは犠牲を前提にしている考えなんですよ？」

笑顔を崩さずに首を傾げた状態で45はピツと立てた人差し指でカイルの鼻先を指す。上体を軽く仰け反らせた彼に45はさらに言葉を重ねる。

「わたしたち404としてはどう行動しても勝手ですが、グリフィングリフィンはそれを捨て置くことはできません。以前なら邪魔をしなければ勝手にしたらいいということで関与しませんが、今は彼らに後でお咎めを受けてしまうので止めさせていただきますよ」

「言っていることとあんたらがこの道のプロだということは理解しているよ。それでも、確実にことを良い方に運べるとはやっぱり思えないんだ。この間の一件では結果的になんとかなったが、少なくとも負傷者が全く出ていないわけではない。それどころかグリフィン協力者の方でも一人出してしまっているから……!!」

「チンピラを捕まえること、普段の仕事であればそうであつたのに拳銃を本格的に使う事件に遭遇してなにもできなかつた。こうした実力不足が目に見えてきた以上、どこかで挽回を測りたいと考えているのではないですか？」

「そんなわけ……!!」

感情による掴みかかる勢いをつけたカイルが45との距離をさらに詰めようとして

来るが、彼女はそれを許さずに人差し指を鼻先を突き、一度突いたら放さずにそのまま後ずさりさせた。その細い指先にはそれ程の力がないと思っていて仕方がないのだが、ほんの一瞬だけ彼女が戦術人形であることを忘れてしまったようでカイルはなすがままになった。それどころか足がつんのめつて尻餅をついてしまう。

重力に引かれるがままに地面と衝突させることになった部分摩るカイルに手を貸さず、45は見下ろして言った。

「そう言つて無茶をして死んだ人を何回も見てきたわ。献身的に力を尽くそうとしたけど実力が気持ちに付いてこずに帰らぬ人を。あなたはまさしくその例よ、カイル・ローズ。自分でできることとできないことの区別ができないほど、あなたの思考回路は若くないでしょ。それとも保護区の外とは比較的になんか安寧な生活に慣れ過ぎてその脳は腐っているの?」

無意識に顔に張り付けていた笑顔が取れていたのかもしれない。そして自分の声帯モジュールが働いて冷たい声音の台詞が飛び出てきた時に遠のきそうになっていた『404小隊のUMP45』が前面に出てきているのに気付く。

グリフィンの暗部に属する者達からの仕打ちを忘れていない以上、それを押し殺す必要はないとは自分でも思う。ただそれを知らない、目の前で唇をかみしめているカイルに対して厳しく当たるのは少々筋違いだ。なにせ彼とは同じ頃にこの世で生を受け、自

分とは年齢がそう変わらないのだろうからだ。そんなまだ無垢でしかなかった彼に咎はなく、場合によっては同じ立場に立たされて使い潰されることだってあり得る。今の時代、まともな神経を持ち合わせて組織の上層部の椅子に座っている者などそうそういないのだから。

「……だけど、そう直向きひたむに頑張ろうとする姿勢、私は嫌いじゃないですよ。あなたは力がそこまですべて自分でも自分にできることはやろうとしていますし、その志は誰にも馬鹿にする資格はありません」

45はこちらを見上げているカイルに手を差し出す。呆けた表情のまま手を取った彼に微笑みつつさらに言葉を重ねた。

「こういったことを言う性分ではありませんから恥ずかしいですけど、忘れないでくださいねその思いを。それだけでは歩幅が狭い一步ではありますが、その一步こそが次に繋げることが出来る足掛かりになりますから」

それだけ言い残すと踵を返し、ダストボックスや建物に続く階段の手摺に寄りかかって待機していたチームの方に向かう。それぞれが今の会話を聞いていたのだから反応が違っており、興味ないと切り捨てていたわけではないようだった。ニコニコと微笑ましいものを見ているように笑っていたり、ニヤニヤと面白いものを見たときばかりに不敵絶え意味を浮かべていたり、意外な一面を垣間見たと少し驚いていたりと様々だ。

そう認識した途端、頬が熱くなるだけに留まらず気恥ずかしさを誤魔化すのに歩みも早くなった。

「へえ……これまでに冷徹な判断を下してきた隊長がクサイ台詞を言うとはねえ。明日からの天気は土砂降りの雨なのかしら」

「どうかしらね。自分でも似合わないと思うことを言っただけだし、雨どころか季節に先んじて雪が、吹雪になってもおかしくないんじゃないかしら」

「そうなたら責任を取って日本晴れを起こして頂戴。昔の低体温症作戦のようなことになるのはごめんよ？」

ひらひらと手を振って416からの本音と冗談が入り混じっていてよくわからない台詞を躲す。現在進行形で時間は惜しく、無駄にするわけにはいかない。

A R小隊が現地に着して作戦部隊を救出したものの、奇襲に会ってローガンとグローザが攫われたという報告はこちらにも入っていた。そして彼らを救出すべく、隊長のM4とAR15、電子戦で45に並ぶ実力者のRO635が再度エリアに突入したというまでも聞いてはいるが、彼女達が助力に向かっても事態を好転させるのは厳しくハリケーンによる向かい風に逆らおうとしているのに他ならない。ならばこちらに当てられているタスクを終わらせて有益な情報入手、そして彼らの助けに向かうべきであり、45自身もそれを望んでいた。

「余計なお喋りはもうやめましょう。時間も思ったよりかかっている。無線のステータスを各々でチェック」

45は無線機を起動するのに合わせて他の404の全員も肩や腰に取りつけている端末の電源を入れていく。点滅しているランプが徐々に落ち着きを取り戻すようにして速度が緩んでいき、45の無線機の状態は少々バッテリーが消耗しているだけの緑色を示した。

「グリーン」

「同じくグリーン」

「こつちも」

頷いた45は無線機を操作し、自分の小隊と指令部をリンクさせる。これでリアルタイムで誰からの報告や注意も受け取りやすくなる。

階段を上がって目標がいると考えられている建物へと入る裏口の白塗りの扉に近付いた。

「指令部、スオミ。こちら404小隊のUMP45、聞こえるかしら？」

『はい、聞こえています。報告をお願いします』

「そつちから受け取った情報を元に治安組織の部隊も含めて作戦の展開準備を完了。突入は私達404でやるけど、逃亡阻止を含めて彼らには囲んで待機してもらっている

わ

『了解しました、これから作戦の遂行許可を得ます。数十秒だけ時間をください』

それだけを聞いた45は9を見ると彼女も領き、自分が正面に立っている扉の横側に付く。鍵がかかっているかどうかは416に予め確認してもらっており、許可が下りればいつでも突入できる。

突入による作戦であり、建物の中を見通せるだけのポジションが周囲にないので今回はG11による狙撃支援は見込めない。なので404全員が突入し、目標を押さえることになっている。

『404小隊の各員へ通達。突入許可が下りました、作戦行動を開始してください』

「了解よスオミ。404小隊、キックオフ。突入開始、全員発砲を許可する」

9がドアノブを捻って扉を開けたタイミングで45は先陣を切って突入した。先んじて停電させて中は暗い、なのでフラッシュライトを点けて見るところを照らす。最初に入ったところはマンションの裏側で人の気配はまるでない。

45はそのまま歩を進めると9や他のメンバーが入って見るべき箇所を各々でチェックしていった。そして今のところ分かれ道のない、一本道である廊下を進んでみると、意図的に置いているとは思わせない配置で段ボールが積まれており、その陰でワイヤーが引かれていた。他にないか注意しながら進んで見てみると、今では滅多に見な

い形でトラップが仕掛けられている。

「非殺傷のトラップを仕掛けてはいるけど、鳴子を仕掛けるあたりからしてやり方はアナログね。けどでもコストの事までも考えているのなら効率的。中身を食べ終えて空になった缶を有効活用しているのだから」

「それで環境に気を使っているのなら百点満点。だけど侵入者を許さないのであれば容赦なくクレイモア地雷を仕掛けても良いと思うけど」

「サイレンサーベティとかいうのも開発されたというのには知らないの？ 跳躍地雷のアレを進化させたはいいけど、敵の存在を音で知らせないことから実戦ではあまり意味を成さないということでお蔵入りになっているけど」

「あく、アレなら今みたいに騒ぎをあまり起こしたくない市街戦で有効かもしれないね」
 9と416の会話を聞きつつも45は後続などの為にスプレーでわかりやすくマーキングして注意を促すようにしておく。罠を解除するだけの時間と労力、今はそれすらも惜しいからだ。焦っているわけではないが、出来るだけ迅速に事を運ぶようにはしておきたい。

「スオミ、トラップがあることからここが当たりよ。誰かが使っていた時に悪戯とかで仕掛けて放置されている訳とかじゃなくて、明らかに最近作られているのがわかるわ」
 『わかりました。それと気を付けてください。その近辺での口コミになってたりして』

ますが、配達トラックがここ最近で頻繁に出入りしていたようです。誰も住んでたりすることがないというのに不思議がられていたそうです」

「そう。でも治安組織の人たちは取り調べとかしなかったの?」

『もちろんしたそうですよ。ですが運転手に話し掛けようとしてもさっさと逃げられたり煙に巻かれたりとロクに相手にすることが出来なかつたようです。あくまで可能性の話ですが、複数人でそこに立て籠もっている場合も考慮できるので気を付けてください』

「了解」

ワイヤーを跨いでさらに前進する。45以外の面々も引つかからない様に注意しつつ後が続いていき、一階ラウンジに到達した。

一度ここで集合を掛けてそれぞれの顔が見えるように円になり指示を出す。

「ここから散開して搜索するわよ。416とG11はペアになってこのフロアを、私と9は先んじて二階に。なにか目立った物があつたらすぐに無線で報告すること。それでオーケー?」

「当たり前のことを聞くようだけど、目標から奇襲された時は撃たない方が良く?それとも撃つんだとして、致命傷にならない脚とかを狙う形で」

「ここです得られる情報源なのだから生きて捕えるのが絶対条件よ。G11の銃じゃ閉所

の行動はしにくいから、416と連携しつつ油断しない様に。いい?」

「……うん、わかった」

と、ここで45は一つ訝しんだ。いつものG11であれば45からの指示を受けると怯えて震えあがった末にしゃっくりを起こしてしまっているというのに、今の彼女は淡々と仕事をこなそうとする普通の戦術人形とあまり変わりが無い。それに普段のように腑抜けた顔をしておらず、鉄血と直に交戦している時のように目が据わつてもおり宿っている光の鋭さも違っていた。

45だけでなく、9や416も気付いたようで当の本人を見ると三人の視線の的になっっている人形の少女はさすがにたじたじになった。

「……なに?」

「え〜と……私の目の前にいるのG11よね。私の視覚モジュールとカメラがどうかしているのかしら」

「45姉、それなら私もおかしいみたい。でも変だな、今日一緒に昼食で食べたのはハムとレタスとチーズのスタンダードサンドイッチで余計なものもなかったと思うけど」

「今日の現場での証拠探しでは隅の方で座っていないで能動的に動いていたわ。もう既にやった検証を見直しては気付いたことがあったら口にしていたり、今までのことが嘘みたいだった」

G11を除くそれぞれが顔を見合わせて今日の任務中に見受けられたことを言い合い、再度彼女に視線を集中させる。すると彼女は一度溜息を吐くと銃に即席で取り付けた暗視装置を起動して言った。

「それはいいけどさ、早くここでの仕事を終わらせようよ。使える時間は有限だし」

肩越しに振り返ってG11は416を見る。別人になったようにしか思えない、その顔を崩さない様子からして何か大きな変化があったのだろうかと考えに耽りそうになったが、45は9の肩を叩くと二階に上がっていった。

〈同時刻〉

話している最中にグローザが少し違った声色で呻いたような気がしたのでそちらに目を向けてみると、ようやく悪夢から覚めたように目をゆつくりと開いていた。すぐに近くにいるM4が身を乗り出して片膝をついて彼女と目線の高さを合わせる。

「ここは……どこなの……？」

「大丈夫ですよ、グローザさん。ここに敵はいませんから。各機能のチェックを改めてするのでちよつと言う通りにしてください」

ROがM4の手伝いをすべく駆け寄って専用のキットを取り出し始めるのを見てみると、バーンズがそれまでの話をする為か前屈みになった。隣にいるAR15は息を吐くと立ち上がり、自分の分身である『ST AR15』を手にとって各部位の点検を始めた。それでも聞き耳は立てているようで、要所を外しては戻したりしている最中に視線だけはローガンに向けてきている。

私に気にせずが続けて、そう言われたような気がしたのでローガンは正面に視線を戻した。心臓はバクバクと鳴っており落ち着かない気分だが、ここを逃せば自分達が別でぶつかっている問題に関わる情報を逃すことになる。

それだけは絶対にあつてはならない、と自分を奮い立たせた。

「砂漠に存在するとか言われている、直球な物の事を言ってるわけではないようだな」

「そうだ、地球温暖化で昔よりもさらに過酷になつてゐるあんなところに誰も寄り付かない。それだから誰も見たことないとか言われていて伝説にもなりそうになつてゐる、そんなものではない。で、どうなんだよ？」

「名前だけは知つてる。実際にどういつたものかは全く知らないが」

腰を下ろして思い出すのはアッシュと名乗られた、まだ実際に姿を見ていない鉄血のハイエンドモデルからの音声データ。再生したのはまだ正式にグリフィンに加わる前に、データを添付した状態で届いた最初は自分だけで、AR15とは一番信用できる者としての二回だけだが。気に食わない、というのは他の鉄血兵として今も暗躍しているだろう他と同じなのだが、別で引つかかることがあつた。人類とI・O・P製のとは別の人形という立ち位置で敵対しているのにも関わらず、わざわざ足取りを教えてきたことだ。それがあるので、ローガンはアッシュという鉄血兵を他と一纏めにできずにいる。

ローガンにとって『オアシス』という存在についての検討もつかずにいたが、なぜ怨霊たちはそれについて話していたのか。

「ちなみに、それを聞いた経緯はどうなんだよ、ただ書類を流し読みしてて目についた単語じゃないだろ？」

「ニードトウノウ、つていうのを知つてるか？軍隊で知るべき者だけが知るつてことだ

けで無駄にベラベラ喋らない様にするってやつだ。そんなのをお前に話してどうするんだよ」

「別にいいじゃねえか。てめえもそこまで重んじているわけじゃないだろ、軍記とかなんだの。お互い生き残るのに必死になつて泥水を嚼つては腹を下すのが目に見えてるものまで口にしてきた身だろ」

「なんでそう言える？ お前に俺の事を話したことなんてないだろ」

「体型に体にあつた傷、そんでその目を見れば大体わかるさ。一つずつ教え込まれて鍛え上げられてた奴ならもう少し肉付きが良いが、てめえは少し細いからそうじゃねえ。根本的に必要なことだけを学んでは自己流で戦つてきた、そうだろ？」

ほとんど正解であつたのでローガンは舌打ちする。たしかに十代半ばほどで教官に捕まつて暗殺業から轉身し、兵士というものは何かを叩きまれながら銃と馴染もうとする時期があつた。その中で時折、こんなことを知つても今じゃ意味を成さない、と言つて教本の要所を飛ばしていたところも存在している。まあそれで限られたことだけを教えられても、自分の頭に全て入つているとは言い切れないが。

渋々、という感じでローガンは口を開いた。

「とある奴からの音声データで、だ。まだ懐疑的でしかないから報告までしていいが、自分達を追うのであればそれを先に探せとかなんとか」

「……なるほど、そいつの組織も含めて知っているのは世界で大きく分けても片手で数えられる程度しかないってことか」

「どういふことよ……？」

怪訝な顔になるARR15に一度目をやり、バーンズはナイフを取り出して床に円状の傷をつけた。そしてその中に手頃な大きさの石をいくつか置くと三分割するようにしてラインを引く。

「一から説明するぞ。知つての通り、そもそもオアシスというのは砂漠とかの乾燥地域にはあると違和感しかないと言われている緑地だ。それなのにそんな妙ちくりんな名前になったのは数十年の歴史に由来となつてんだ。第三次世界大戦後に広がっていく戦争の傷跡が著しい地域を『砂漠』と例えて、好き勝手に持論を振り回す犯罪分子や鉄血の屑どもによる進軍を『砂漠化』てな感じにな。そうすれば存在が疑わしいオアシスはなににあたるかわかるか？」

「オアシスは砂漠の中にある潤い……となると今の時代では有益な物資かなにか？」

「そう推測するのが正しいな。裏世界による情報網によると、『オアシス』というものの大本は手で触れられるものではないらしい。名前によるカモフラージュか何かかは知らないが、ロシアの奴らが乗り込んでくるのはおかしく感じないか？」

「物資調達を目的にしているにはリスキーすぎておかしいし、わざわざアメリカに

踏み込んでいる事実が明るみに出れば世界から白い目で見られることになるわね。ニユースじゃ各国は睨み合いをしているとかでピリピリしているのが目に見えて来てるし一触即発寸前よ。ロシアとしてもできればリスクを冒してでも他国に侵犯することとは避けたい筈」

AR15の言う通りだ、とローガンも頷いた。

水面下の動きであつて報道組織に知られていないが、AR小隊たちに降りかかった火の粉、他国の特殊部隊による侵犯はアメリカに留まらず世界中で起きている。マスコミは首を傾げながらも荒唐無稽な推測をしているが、各国政府では事実を知っているの。身の内に武器を忍ばせながら圧を掛け合っているのが現状だ。そんな世界情勢でどこかの国が部下にナイフを持たせて他を突つくことが明るみになってしまえば後ろ指で指されることは必然といえる。誰だつて指されながら罵倒されるのは御免である筈だ。

「だが人間型ASSTを開発したといわれているロシアの急進派がいる。ロシアの内情は知らないが、奴らが鉄血への対処以外にも目的としているのが今回の行いだとしたらまだ納得いくものがあるんじゃないか？」

「そうだ。内部分裂、保守派と急進派による食い違い。そんな中で自分達の主張を強化しようとして思いついたのが『オアシス』奪取だ。グリフィンはスペツナズとやり合つたつてその筋から聞いたことあるんだがそれは本当か？」

バーンズがロシアの急進派を示す『R』を近くに刻む一方で、ローガンは隣にいるAR15を見ると、彼女は自分の小隊長から無言の了承をもらったらしく領いた。

「目的を聞いても答えずに撃つてきたわ。終わった後で正直疑問は多く残ってたけど、彼らを動かしたのは急進派、目的としていたのは『オアシス』へと繋がる手掛かりつてことになるのかしら。となるとあの詳細不明だったあのデータは……！」

「情報処理班はなにかしらかの数字の羅列からして座標だと言っていた。となると『オアシス』の在処を示す手掛かりの一つという事か」

連結して繋がっていく事実にもローガンはAR15たちにも話した、正体不明の通話相手を出す。彼女は最後にメッセージで『地図』と『座標』はもうあなた達の手の内にある』と残していた。その『座標』が今言ったそれなのだとしたら。だがそうなる『地図』に当てはまるのが何が分からなくなるだけでなく、他に当てはまるものがないと思いつかない。

「それともう一つ、『オアシス』を作り出したのはI. O. Pみたいに技術を持つ人間じゃねえ。グリフィン上層部から散々な扱いを受けただけでなく撃たれた、ある戦術人形のAIを元にしたのを考え付いたのは、『兵士』や『技術者』とか関係なくオレ様たちとは違う存在だ」

「……いや、まさか！ 仮にそんなことをしたとして、そいつらの目論み通りにいくとは限

らないだろう！」

「嫌なことではあるが事実だ。あのクズ野郎どもはこの手を使ってでも排斥しようとしてきてる。オレ様も知ったときはんなわけねえだろと思ったが考えていけばそれしか思い当たらねえんだよ。アメリカ政府自体にはそうした技術力に長けた人材はいねえことだしな」

怨霊との戦いのこの一件で協力者という立ち位置であるバーンズの言うことだ。なのでここまでの全てを信じ切っているわけではないが、そればかりには素直に飲み込むことが出来なかった。

「ローガン、一体どういうことなの？」

「馬鹿馬鹿しい想像だと思いたいが、『オアシス』を作り上げたのは俺達と対立している鉄血だということだよ……！」

AR15は絶句したが、ローガンも一つずつ外堀を埋めていくと澁々ながら頷くことしか選択肢が無くなってくる。コンピューターに対しての情報処理の能力は政府にあっても、人形や兵器に対しての技術力は無いに等しい。なにか必要なものがあればI. O. Pなど専門にしている企業に依頼するしかないぐらいに。

それにバーンズが知る由もないが、大戦による混沌に突き落とそうと暗躍しているのもある。コンピューターウイルスや虚実による情報戦ではなく、不確定要素がそれらよ

りも詰まっていると言っても過言ではない心理の弱点を突いた戦略。これまでにはなかったと言われている新たなそれを駆使しているのだから一概に捨て置けなかった。

「オレ様はその手の技術に明るいわけじゃねえが、人間の思いに変化に似せた感情モジュールってのはこうしてみると厄介なものだな。だけどその記憶と機能を持ったまま別の存在にさせたのなら、そいつに人類に対して燻る思いがあってもおかしくはねえ」

「……ロボット工学三原則をある程度までしか適用されていないからこそ抱く感情がある。普通の自律人形なら悪辣なことを考え付いた人間に対して怒りを感じても、私達戦術人形は自分や仲間に危害を加えるのが人間でも正当な訳があれば反撃が許される。怒りの先には憎悪、さらにその延長線にあるのは殺意でしかないわ。認めたくないしそうでないと願いたいけど、勝手にメンタルを構成して勝手に殺しにかかった人類を恨んでも仕方ないわね」

鉄血のような自律人形を敵にすれば厄介な存在だと、そう感じたのはいつだったんだろうかとローガンは思い返そうとしたが、そもそもなかったのかもしれないと結論付ける。初めて隠れる以外で対処した幼少期、ナイフでやぶれかぶれになりながら捨て身で攻撃したものの命を拾ってしまい、それから死に場所を求めるように繰り返し続けた。そうしているうちに頭部にナイフを突き立てていた敵の動きを学習し、自然と効率的かつ

確実な方法で狩っていくのを身に着けたのを今でも覚えていて。人類に牙を剥く人形に対して面倒と、厄介といった表現を明確に認識せずに育ったのだから分からない。ただ一つ言えることは、冷たい笑みを浮かべながら世界の裏から陥れようとしている鉄血工造という存在にこれまで以上に腹立たしく感じていることだった。

『オアシス』がどういったものか、それはわかったわ。でもそっちが気になると思ったことは一体何なの？」

「その坊主が言っていた『変なお友達』の話からして、奴らは急進派に雇われた外部組織だ。『地図』と『座標』が『オアシス』に辿り着くのに必要なものなんだろうが、それは別で『オアシス』関係のものをグリフィンから回収しようとしているようだった。心当たりはあるか？」

「……いや、俺にはない。AR15、お前にはどうだ？」

「残念だけど私にはないわ、『オアシス』なんてのの詳細ははじめて聞いたし……『座標』と暗号パターンが同じものがあつたけど……」

「あのUSBメモリーか。どう関連しているかはわからないが、分析結果を聞いてみた限りでもそう多くなかったな」

「でもあなたの端末に送られたメッセージには必要なものの二つはもう揃っているってニュアンスで送ってきてたわよ。それじゃ、あのUSBメモリーの中身が『地図』だと

したら？」

ロシアの急進派が持つていなくて自分にはあるもの、把握している限りで考えてみるとたしかにあのメモリーチップの中身だろう。AR15の言う通り、あれが『地図』である可能性はないわけではない。ただローガンからだ、少々違う気がしていた。仮にそうだとしても、偶然にも『オアシス』がある地点に辿り着いてしまったことを考えていない鉄血ではない筈だからだ。分析班からの報告でも推測だけであつてはつきりとした結果を聞けたわけではなかったのだが、招かれざる客が入つてこれないようにする扉の『鍵』である可能性は捨て切れない。

ただこうして話してみても、怨霊達がなにを欲しているかの推測はできた。

「いずれにしても、ただこうしてここに居続けることはできない。お前達と合流出来たあそこにあつた機器とダム、仕掛けられた爆薬からして交渉材料に使われるものとして考えた方がよい。今かそれとももうとつくの昔に持ちかけられているだろうな、もう奴らの手中に落ちているし」

ローガンが締めくくりに口にした台詞に頷いたのはAR小隊の面々。バーンズはこちらを静観しており、グローザはまだ状況の把握が追いついていない。ただ一つずつ噛み砕きながらざつとでも追い付こうとはしている、後で補足説明をすることにはしておくことにはした。

「俺としてはやれるだけのことはした方が良いとは思うけど、立場的にはM4が上なんだし指示してくれよ」

「お互いに『隊長』という役職なので私達に上下はありませんよ、ローガンさん。そちらからも戦術などに関して進言できることがあれば言ってください、是非今後の参考にしたいので」

「俺から参考にはできることなんざ何も無いと思うんだけどな……」

「無茶をしたということでああしたけど、なにも参考にならないとは言っていないですよ。でもM4、ローガンの無茶癖の真似だけはやめて、私達の身が持たないから」

「グツサリと刺されるようなフォロワーをありがとよ、ARR15。とても心に来て本当に目から涙がちよちよぎれるわもう」

「もうちよつとオプブレードに包んであげたらARR15。これからは肝心な時なのにローガンさんのメンタルがズタズタになるわよ」

部下としてではなく仲間として接する姿勢を見せてくれるM4、誰よりも馴染んでいるからこそその口調と態度で肘で突つては毒を吐くARR15、間違っていない事ではあるが一応の毒抜きを試みているRO。似通っているように見える三人ではあるが、あのARR小隊の執務室にいるからこそわかる個性を知れば完全にそうではないと言えなくなってくる。彼女達も人間みたいに喜怒哀楽の感情の噴出だけでなく、大事にし

ている物事に違いはあるのだ。そして、これから向かうことになる戦いの場では心強い味方になってくれる。ダミーを連れていないので戦力の低下は否めないが、それでも個々の持つている能力が発揮できないわけではない。

「さて、そうなるはずは具体的にどう動きましようか。話からして穏便に話し合いで片付けられる相手ではないので実力行使しかないでしょうけど」

「現状からしてダムの下、爆薬の解体は無理ね。なら大本を断ってしまうのが手だけど、肝心の起爆装置を持った敵がどこにいるのかすらわかってないわ」

「ジャミング装置も忘れちゃならないぞ。あれによる妨害で連携もとりに辛くなってる。ここから離脱するにはその破壊が欠かせないぞ」

「それに関して朗報があるわよ。皆が来るまでにここ一帯に展開されているジャミング装置による波紋のような波を追って行ったけど装置の在処は大体把握できたわ」

「問題は山積みね。広域での手分けをすることはリスクがありすぎて今回はできない。だから一纏めで戦力を集中させるけど、手際よくいかないとなにかしらが手遅れになるし……」

電子機器への対応が一流であるROのおかげでこちらに制限を課していた装置の在処を突き止めたのは行幸に等しい。とはいえ、立ちはだかつている壁が重なりすぎて難易度は洒落にならないほどになっている。最後まで一つずつ対処するには、設けられて

いるだろう交渉のタイムリミットまでに間に合うかどうか分からない。

とすればどうするか、と頭を捻っているのとROは腕をグローザに掴まれたので反射的にそちらに目を向けていた。

「一つだけお願い……私の銃を取り返させて……」

「……そうですね。自分の半身が奴らに奪われているというのは気持ちが良いわけありませんからね」

「それと……私が尋問を受けている時に奴らのリーダーが言っていたわ……『もうじき、グリフィン北アメリカ支部の保護区は地獄になる』って……」

それを聞いた時にはもう優先順位を考えることも話し合うこともなかった。顔を見合わせた後で各々即刻出立準備を整えるべく立ち上がり、ローガンは『レミントンM700』を背負い、『ハニーバジャー』を手に取ってチャージハンドルを引いて発砲準備を終える。

そしてだんだん暗くなってくる外を吹き抜けになっていく窓枠から見ながら首元に巻いていたスカルマスクを鼻の高さまで上げてそこから下を覆った。

もう死の五も言っていられなくなった。敵がもうその凶暴性を持って危害を加えてくるのであれば遠慮をする必要もない。

さあ、『影』になる時が来た。

—
〈ERROR〉
—

〈17:57〉

まだ見ていない無人の部屋の扉を蹴破り、潜んでいるかもしれない敵影があるかを確認するが誰もいない。404小隊が突入してからもう五分は経っているが、まだ引き金を引いて交戦するような事態にはなっていないかった。

45は隅々までフラッシュライトで照らし、残されている家具の中に隠れていないかも確認してからそこを後にする。

「45姉、そっちは誰かいた？」

「誰もいないわよ。9、そつちこそ消音されてるからといって戦っていないわけではないわよね？」

「そんなことしないよ45姉。ここまで来たら敵対者が一人でもいた方がいいと思うぐらいだよ」

それもそうよね、と45は一通り見て回ったフロアを後にし、隣に立った9と共に三階のほうに上がっていく。敵が接近してきたというのを知らせる程度のトラップしかないのも、今のところ集中力がさらに研ぎ澄まされることはない。スオミが得た情報の通り、複数人がここを利用しているというのは嘘ではないようではある。できたのがまだ最近と思える足跡や降り積もっている埃やゴミ、それらがある床のほうを見てみると決して誤った情報を掴まされたわけではないだろう。ところどころに仕掛けられていく鳴子もそれを裏付けている。

『45、一階の方を調べたけどクリア、敵影はまったくないわ。さつき9が言ってた事的气氛ちはわからなくはないぐらい不自然よ』

「スオミ、こちらUMP45。まだ全体を調べ切れてないけどあまりにも不気味すぎる。ここ周辺で目立った動きはあるかしら？」

『今のところありません。通信が治安組織の彼らと繋がっていますから電子ジャマーによる妨害なども観測されていませんし、いつものようなコソ泥による引っかけが解決

されているばかりで得にこれといってないです」

「わかったわ、そのままにか大きな動きがあったらこっちにも教えて。416、私は9と三階に向かつてる。そっちもG11と一緒に合流しに来て」

『了解よ』

三階への階段が終わり、踊り場に到達した45と9は見える範囲で周辺を照らしている。45は歩を進めて左右の分かれ道になっている右側の方を見ようとした時に肩を9に叩かれた。

肩越しに振り返ると9はいつものような作戦中に浮かべてはいても緊張感を忘れてはいない笑顔になってはいる。だが一点だけ違っており、ようやく目当てのものを見つけたとばかりに口角がさらに上がっていた。『UMP9』のグリップを持っていないほうの手で注目すべき方を指しているのでもそちらを見てみると、建物の様式とは少々違う扉で閉められている部屋がある。フローリングや壁紙に対しての調和を拒否している色、血のような赤がシックとは違う印象で目を引いたので、45はすぐに情報伝達。

「大当たりよ404小隊、9が目標を見つけた。三階に上がって左側の壁側から二つ目の部屋よ。スオミ、突入するわ」

『三階左側ね、わかった』

『了解しました、わかつてはいるでしょうけど犯人は生かしてください。関連する情報

を引き出す必要があります』

「大丈夫、わかっているわよ」

9と共に血塗れを髣髴とさせる扉についた45はまず最初にハックできる電子機器がないかを確認した。電脳世界に自分の意識を半ば投じ、目星をつけている部屋から垂れ下がっている人間には不可視の糸を探す。ビデオカメラなら中の様子を探る、メディア再生機なら注意を逸らす等して優位に立てるようにする為だ。

扉の隙間から見える糸を元に自分を手繰り寄せさせ、進入した電子機器を起動させる。それと同時に自分に適用できる機能を照合した。

有効である機能を列挙する。視覚、聴覚、録画ならびに保存。また、既に内蔵ディスクに保存されている記録の再生も可能。

入り込んだ電子機器が何かを確認した結果、小型デジタルカメラだと分かった。そして45は視覚的情報を得るためにカメラの撮影モードに移行して最初に映るのを自分の電脳に映す。だがそれで取得できる情報は彼女が思っていたようなものではなかった。想像していた荒々しいことを避ける文面に不信感を募らせる。

「……9、突入の際はトラップの有無だけには注意して。本当に抵抗しないのであれば割と穏便に片付きそうよ」

「……わかった」

9は扉のノブを捻るとゆっくりと引つ張つて足元に注意を凝らす。45は彼女がそうしている手前でドアノブに不審なものが無いかを確認したが銃弾による応酬が無いどころか不意打ちすらも何も無い。

完全に開け放たれた部屋はランプで照らされているかのように明るく玄関に当たるこちらの方にまで光が届いている。銃身についているライトを消した二人は床板のように見えるそこを踏みしめ、お互いに死角をカバーしつつ前進した。

「素晴らしい行動力と思考能力ですが、そこまで警戒しなくていいですよ。罨の類は何も仕掛けていませんから」

「どうかしらね。そう言つて私達を騙そうとした人間はもう何回も見てきたわ。犯人の言う事に素直に耳を傾けるほど、性格は素直じゃないわよ」

「信用されていないのに悲しみを覚えはしますが、それがどういった感じで繋がっているのが気になりますね。話してくださいませんか?」

奥から聞こえてくる声の発信源を視線と共に銃口を向けながら辿っていくと、光源に照らされながら如何にも待つてましたとばかりに両腕を広げている男が一人いる。そこで立っているその者が武装している様子はないが服の下にナイフや小型の拳銃を隠している可能性もあるので油断もならない。

ニタニタと気持ち悪い笑みを浮かべるその男、目星をつけてから同じ組織の関係者か

ら話を聞いてみたところ、先日のハイウェイでのカーチェイスの現場にいた男であることが判明していた。その関係者、カイルも45からの根拠のある説明を飲み込めていない様子だったが、404小隊全員で足踏みをしているだけの時間はないと押し切ったのである。

「話すわけないでしょこのサイコパス。私達も人の事をそこまで悪く言えないけど、あんたはもう表世界の住人としての道を外れてるところじゃない。『犯罪者』の枠に当てはまらない、復讐による憎悪みたいな感情や理論を持たずにただただ欲に従うサイコキラーよ」

「お互い様であるのならそんな悲しい事を言わないでくださいよ。404小隊、こちらでもよく噂を耳にしていますから分かり合えるのではと思っていたのですが駄目ですかね？」

「戦う為に造られた戦術人形に自由はないと言っても良いわ。何かしらかの理由があつてそこから離れたいと言つてもメモリーが消去されて製造当初に戻される。でも私達にも意思があつて友人を選ぶだけの権利ぐらいはあるわよ」

男の背後に回った9が両手を後ろに回して手錠をかける。そうされているというのに笑顔を崩さないその男は『UMP45』を構えながら正面で睨みを利かせている少女にペースを崩さない。

「ですがこれだけは聞かせてください。私があの留置所での犯人だと突き止める、その決定打になったのは何ですか？」

「突き止めたわけじゃないよ、あんたも含めて該当する数人に絞り込んだだけ。ただ、現場を出入りしている者の中で目を爛々と光らせているのを見逃すほど甘くないわよ」

「アリバイがないことから状況に基づいた推測もあるわよ。ただ、それがなくても現行犯であることが濃厚であることが経歴から知れたけどね」

治安組織のデータベースに真つ当な人間としての記録が残されていてはただの紙上での情報と全く変わらない。デジタルかアナログか、それだけだ。ただ、その場で一致するだけの要所で関連付けて一気に手繰り寄せることができるのは前者しか出来ない。書類で厚みのあるファイルを自分の手で捲つていくにはどうしても時間がかかってしまい、探している箇所を目で探す必要がある。

しかし45の場合、データベースにある情報だけでなく顔写真といったような変えるには手間をかけなければならないことが広範囲で検索できる。それもインターネットを入力して検索エンジンに任せるだけでなく、その気になれば機密情報を保持している組織の方に潜りこめれる。そうして45は404が治安組織の隊員達と現場を検証している間にグリフィンだけでなく、各国政府のサーバーにアクセス、要注意としてマークされている犯罪者をリストアップした。そして、ロシア政府にアップロードされてい

るデータを見て確信を得たのである。

「あんたはロシア内で政府だけでなく正規軍の要人のみならず目についた民間人までの暗殺や拉致、そして拷問と見せかけた殺人を繰り返してきた。本名まで判明していなかったけど、監視カメラにも映っていたあんたの人相が各国に登録されていたわよ。そこから治安組織の前に名前や出生が全く違う自分で、ダムを整備士に就いていたこともわかったわ。」

「なるほど、有名人になれているようで気分が良いですね。でもそれでは、私が今ここに属しているのか分らないのではないのですか？」

「ええそうね、さすがにそこまで足取りは終えていなかったわ。だけどこれだけではつきりしたことは、私達の指揮官が言っていたダムの記録データを紛失したのはあんただということよ。それに要注意人物としてマークされていること、そして保護区で表沙汰になった事件があつた飲食店に隠したことから故意的によね」

推理にもならない、あくまで集められた情報からの推測でしかないがどのように見てもこのような結果に行き着いた。現場からの物的証拠は一致している人物が多すぎて絞り込む段階にまで至らなかつたが、収集する手を内から外へと向ければ大分変わったといえる。そしてハリーからの発言やローガンとAR15からの報告書、殺害されたピーターという囚人の証言。これらから一気に調査が進み該当する人物が数人に限定でき

た。

「戦術人形とはやはり面白いものですね。人間のように動いては時折おいそれとはできない働きで成果を上げる。見た目は全く変わらないのに技能をもっているのですから尚更です」

「見た目に寄らず、ていうのは誰にでも当てはまるわ、私もあんたも。あんたの場合、そんな優男のような顔面で親しまれるでしょうに性格と本性が台無しにしてる。腹に抱えてるのが邪悪すぎるのよ」

「人じゃなくても動物を殺す、というのが悪だというのですか？ でしたらあなたも同類でしょう、仕事と違って自分達の存在を秘匿する為に目撃者を抹消してきた。あまつさえ、戦術人形さえも。そんなことを何回も繰り返してきたあなた達が『表』で立ち続ける人達と歩き続ける、虫が良すぎますよ。オイルや血で汚したその手で綺麗な仲間の手を握ろうとして気後れすることないのですか？ 気付かなかった、考えたことないじゃすみませんよ。それともそれを知っていながらもあなた達の手を取っているお仲間は相当バカな部類ですね、愚かでしかありません」

たしかに404小隊は存在しない部隊として他に確たる認識をされないよう、メモリーを書き換えるか破壊するかして裏世界を渡り歩いてきた。過去に起こったことはもう変えることが出来ず、この男が言っていることを否定することは適わない事である。

それでも彼女達とこの男に違うことが一つだけ、仕事や趣味といった『範囲』の話ではなくそこに感情が関係してくる。人間や人形といった害を与える相手かどの枠組みに当てはまるのかは関係ないが、この男は現場の惨状からして『殺人』に快楽といった生きがいを感じる感情を見出している。射殺だけで終わらせず手足を切り落としていたりしたこと、そうした後でここでヘラヘラとして笑っていることが何よりもそう45と9に思わせる。では、半月以上前まで仕事を請け負うまで放浪していた彼女達はどうか？

45の燻る感情が一瞬で冷えるだけでな消え失せる。表情が無くなり目に獄炎が燃え盛り始めた姉を見た9が離れると、大きく右拳を振りかぶって打ち出す。バキリと拳がめり込んで男は壁にまで吹っ飛びズルズルと床に転がる。砕けた鼻の穴から鼻血から大量に出てくるに留まらず、折れた歯が45の足元に転がった。

「そうね、殺して未来を奪うことは褒められたことではない、善か悪と言われたら後者よ。でも本心から望んでいるわけではないのに戦術人形の頭部を吹き飛ばしてメンタルの破壊しなければならぬこと、あんたはそれで胸が晴れるような思いをしたかどうかを一番聞きたいのでしょ？昔なら何も感じないで終わりだけど、今ならこう言えるわ」

45は床で仰向けになっている男の胸ぐらを掴み自分の目の前にまで引き寄せる。

そして呆けた様子の男に己が感じていた全てをぶつけた。

「嫌に決まつてるでしようが!!顔もなにも晒さない知らない奴から勝手に役割を押し付けて仕事をしろと命令されては目撃者も抹消しろ、それがどんなに胸糞悪いことかわかる!?ある時は人形だけじゃなくて三原則が適用されない人間も殺さなくてはならなかった!武器を取るだけでなく近くにあれば女や子供も関係なくね!!手を差し伸べたくてもできない、許されないことでどんなに歯痒い思いをしたか、それを命令した奴に思い知らせて八つ裂きにしても足りないぐらいよ!!」

「ちよつと待った45姉!気持ちわかるけどそれ以上やって当たり所が悪かったら死んじゃうつて!!」

慟哭に近い叫びを至近距離から浴びせかけた45は乱暴に床に放り死なない程度に腹部に蹴りをかまそうとしたが、さすがにこれ以上はと思いい見かねた9が腰に巻き付いて止めに入る。続いてようやく到着した416も引き離すべくリーダーを背後から羽交い絞めになって引つ張った。

「だいがヒートアップしてるけど冷静になりなさい!こいつらとまともな会話なんてできるわけない、言ってることが正しくても理念までわかりあえることもないことなんてあんたもわかってたことでしょ!」

「それでもよ416!このクズはハリーや皆を、ローガンの事を馬鹿にした!404な

らまだいいわよ、貶されているのは私達だけで実際そうだったんだから！ だけど伸ばすのを躊躇ったこっちの手を乱暴にでも取り合わせてくれた恩人を馬鹿にされても何も思わない恩知らずなんかには私はなりたくないわよ!!」

「頭に来るのは私も同じよあんただけじゃない！ でもそれだけで突発的で欲に従った行動をするようなら本当にこいつらと変わらなくなるわよ！ 『加減をするしなに関係なく衝動に突き動かされたままに拳を振るんじやチンピラと同じだ』 って誰が言ったか思いつきなさい!!」

肩越しに45は叫ぶのに416も負けじと自然と声を張り上げる。冷静な心情までもが怒り狂っている、45の理性ではそれすらも自覚できでない。男は面白いものを見ているとばかりに笑い声をあげた。

だが同じ小隊の三人を他所に、男の前に立った少女が一人。いつもは眠そうにしながらも据わっている目は灯火を宿し、物理的にも精神的にも銃を持っているその小柄な体には確たる芯が通っているようだった。首だけを壁に預けている状態になっている男の前に立ってその少女、G11は静かに口を開いた。

「別にさ、お前がどう考えていても良いよ。赤の他人であって事件を起こされても迷惑になる、見て見ぬフリはできないし簡単に片づけてはいけないことだけどそれだけだし。でもさ……」

G 11は静かに男の懐に手を入れて探ると一枚のワッペンを引つ張り出す。赤い布地でロシア語が書かれているそれを流し目で見ると目の前にかざして部隊章を握りつぶすようにしてくしゃくしゃにした。

「お前は神様や何でも無い、頭がキレるとかも関係なくただの犯罪者。……ううん、力があるど錯覚してる性悪なガキと同じ。子供なら覚える欲の自制も何もできてない、手当たり次第に喚いては暴れる赤子だよ」

「なに……？」

男の笑みが崩れて別の感情が生まれる。45や9に416も変化に気付きG 11の背中を見ると、不可視の気迫がそこから漂ってきていた。416からすればいつもバディを組んでいるのだから二人よりも尚更電脳の処理が追い付かない。

「殺人が本能にしているっていうのならタチ悪いけど、人肉で命を繋いでいるわけじゃないよね。それだったら弱肉強食が身近で見られる虫と同じかそれ以下。こうなったのは前世がそうだったんじゃないかな？」

「黙れよ、機械で身体を築いて人間の真似事をしている人形風情が知ったような口をきくな！」

「黙らないしそつくりそのままお返しするよ。でもまあ虫と同じかそれ以下、そこだけ訂正するよ、さすがに失礼だ。彼らは本能ではあっても子孫を残すために生きてるんだ

から。それも関係なく単に殺しを続けてるんじゃないや鉄血のクズと同じだね、奴らは手段を選ぶだけの知能と目的はあっても消そうとしてるのが悪すぎる。あいつらとお前達
は同等だよ」

「黙れえええええええええええええええええ!!」

立ち上がった男が全体重をかけた頭突きをするようにして突進してくるがG11も
戦術人形だ、身体能力は比べるまでもない。跳んで回避し突っ込んできた男の首根つこ
を掴むと自分に働く重力も利用して地面に組み伏した。ドタンバタンツ!と衝撃で付
近に置いてある物が跳ねたり落ちたりしたが些細なことではしかない。G11を知って
いる誰もが記憶の中にいる彼女と違っていると声無き声で叫び続けているのだから。

「足を格闘に使えるのにしなかったね。考えなしに仕掛けても意味ないことぐらい、戦
い慣れているのであればわかる筈だけど全然じゃん。それなのに高説高々に言っ
ちやつて恥ずかしくないのかな」

「……ならあなたは私が言ったことに対して何も思わないのですか。何も思わないん
じゃ糸で繋がれている操り人形と変わりがありませんよ」

「腹立たしく思わないわけじゃないよ。基地の皆はアタシ達の過去にあったことをそのまま
受け止めてくれてるんだし、お前が言ったことに怒りを感じてる。でも404がやって
きたことの本質、それを知らずに表塗りのことをペラペラと言ってるのが一番頭に来る

んだよ。それこそ、アタシ達のことを知った気になってるんじゃないって言いたくないくらいに」

呻く男を取り押さえてがつつちりと起き上がれない様にロックしたまま、G11は顔だけ上げてリーダーを見る。そして未だに目に浮かぶ静かに燃え続ける灯火を絶やさぬまま尋ねた。

「次はどうするの45。これだけじゃ、まだローガンを助けたことにならないよね？」

32. 被雷したのはどちらか —She can't
cry, if she want to cry—

—グリフィン北アメリカ支部の音声ログより再生—

『スオミ、報告よ。犯人は確保して今から一時的に治安組織の留置所で拘留させるわ。尋問には9と416が就く』

『了解です。お疲れ様、と言いたいところですがG11さんと一緒にこちらに回ってください。これから新しい作戦を展開しますので』

『休む暇もなく？ 一体誰の発案なのよ』

『そいつは私から説明するし作戦を指揮するぞ45。不満かもしれないがな』

『M16……あなたが作戦指揮して……ハリーは？』

『お休みしてもらってるよ。さすがに大事になって倒られちゃ困るから力に物を言わせてな。今はぐつすりだよ』

『あなたはいいかしら？ 私達が作戦に加わることなんて、あなたが一番気に食わないんだと思うんだけど』

『仲間や妹が戦地で孤立無援、通信が出来ずに状況が分からないと来たもんだ。今は手が多い方が良い、お前でもな。でも勘違いするな、私にだって恨むほどじゃなくても腹立たしいことはあったんだ。それを水に流した訳じゃないし、みすみす死なせたらタダじゃおかないぞ』

『でしようね。私も指をくわえて見ているつもりはないどころか死なせたくない人もいる。それはM16、あなたもそうでしょ？最大限にできることは全部するわ、それは約束する』

『ならいい。今から送る保護区内の合流地点に到達したらそこで待っている、後にSOPIIとスオミとあいつの教え子が到着する。そうしたら陸路でダムのあるエリアに向かつて作戦開始だ。詳細は彼女達から聞いてくれ』

『了解。でも意外ね、こういうのはあなたも出張ってくるものだと思っていたんだけど』
『私も行きたかったが、指揮官が動けないしスオミに指揮を任せるにしては今回は重すぎる。調整役といったのは私がするよう、ヘリアンさんから言われたんだよ』

『なるほどね、単に私に背中を預けたくないから、というわけでないように何よりね。私だってそんなこと言われたら傷つくし』

『嘘ばかり並べているなよ45。正直のところ、お前達⁴⁰が戻ってきたのを知ったときは異議を唱えなくなつたんだが間に指揮官だけじゃなくローガンまでも居たんだ。仲

を取り持ったあいつがいなかったら、無理やりにも叩き出していたんだからな』

『はいはい、わかっているわよ心配しないで。わりと今言ったことは本心よ。だけどM16、今回の件は一筋縄で行きそうにないわ。UAVによる電子支援とは別で攻撃する支援が必要にもなってくる。敵兵士が光学迷彩を使って姿を隠しているわけだし手間がかかる』

『心配するな、それであれば指揮官とヘリアンさんがアメリカ政府に『貸し』を作ってる。それを今回から少しずつ返してもらうさ』

『政府への『貸し』？そんなもののいつの間に』

『この間お前達がワシントンで一悶着あった時にだ。どう指揮官が走り回って種を捲いたのか知りたいか？』

『……いえ、今はいいわ。それでどういったことが頼めるの？』

『お前が言った通りにだ。衛星を利用した熱源観測並びに滅多にないミサイルを積んだ無人機による航空支援、なんでもござれだ。ただ操作をするのは現地入りするお前らだけだな』

『わかったわ、必要になったらこつちから要請する。でも今になってそこまで支援を取り付けたのは何故？』

『ダムか情報のどちらを選ぶか、話を聞いたところ私達が基地にいない間に奴らから一

方的な交渉を持ち掛けられたらしい。応じなければダムをドカンするだけでなく有害物質を流して水道そのものをダメにするそうだ。タイムリミットは日付が変わるまで』

『もう六時間は切っているのね』

『そうだ。それとこれは私の見立てだが、奴らは愉快犯とそう変わりが無い。応じたとしても事故を装ってスイッチを押しにくるだろう』

『子供みたいに無邪気に、という風にか。それはこつちで捕えた奴からも窺い知れたけど、そう考えて間違いはないわ』

『とにかく今は時間が惜しい。こつちからはスオミが今しがた飛び出して準備に向かっている。合流地点でG11と待機している、そこで飯でも食ってな』

『了解、AR小隊と404だけじゃなくゲストも交えた混合部隊で反撃開始ね。それとM16、奴らの部隊の正体だけ……』

—エラー発生。指定されたファイルは見つかりません—

〈18:24〉

太陽が沈んだことで光源になっている物があるとすれば基本的に何も無い。強いて言うならば代わりに空に浮かぶ月による光だ。今宵は満月であるので一際明るく多少は視界に映る物の区別はしやすくなっている。とはいえ、それが戦場で有利に働くアドバンテージになるのかというのには心許ない。敵地に進むのであればフラッシュライトを点灯させて行くのは命取り。ましてや今回敵対している怨霊達の装備には熱源感知だけでなく暗闇に対して有利に立てれる暗視装置がある。こちらにも鹵獲した同じものがあるが数は多くない。

なので前進しているのに先頭を歩く者が装備するのが必須である、ということだ。ローガンが引き続き一つ装備している、のだが。

「……なんでお前までが俺達についてくるんだよ」

「ここまで来たら別にいいだろうが、『オアシス』に関しての情報を渡したんだしその礼をもらってねえぞ」

「捕らわれている時に助け出したんだぞ。あそこから一旦抜け出すのに協力こそしたが、それでチャラにならないのか」

「あれでプラマイゼロにはならねえよ。命を拾わせてもらったのは感謝しているが、見返りとして協力、奴らにも関係している情報を渡したんだ。見返りをもう少しだな」

そんなやり取りをしたのが数分前。ローガンとバーンズが遠距離まで見通してROと共に前衛に付き、M4とAR15が武器のないグローザを中心に後方を警戒。暗視装置が無いので危ぶまれるが、ローガンは全員にあることに伝えていた。

それはヘリ二機による回収の際、高場に陣取っていたKar98kによる爆破の合図に関係している。姿形が見えないようにしてもそこには何かしらかの跡が残る。それは足跡だったり音、何かに触れればその触れたものが動いたりもする。狙撃手はスコーパーで戦場を覗いた際に起こる変化に敏感だ。例えばあの場で生い茂って一方向に風に揺られていた雑草が別の動きをしていたり。一時の戦場となったあそこは匍匐姿勢になれば隠れられるだけの高さにまで成長していたので見分けは思ったより簡単につく。緑の雑草の中に生えているやや色の違う特別な四つ葉のクローバーを探すようなものだ。ローガンにはすぐに判別できないが、戦術人形であれば戦闘に役立てれる物体の観

察力や動体視力にも優れているので見つけれらるだろう。

後方への警戒をそう言って任せ、前方に見えるだけでなく偶に見晴らしのいい遠方にいたりした怨霊を見つけては避け、倒したりして問題のない装備を剥ぎ取る。まるで山賊といった盗人みたくはあったが、相手は正気とはさすがに思えない気性を抱えている。『戦線で驕るに留まらず躊躇えばこちらが死すことになるのだから使える物は何でも使え、たとえ敵の装備であつても』、そうローガンは教えられた。

ヘッドショットで倒した怨霊の二人組に近寄りゴーグルを回収する。そしてそれらの後方の二人に声を掛けてから投げ渡していると、『As Val』を調べているROに話しかけた。

「それでRO、やつぱり銃自体に何か細工されているか？」

「ええ、GPSが内蔵されているだけでなくユニットが組み込まれています。詳しく調べてみないとわかりませんが、構造自体はASSTに酷似していますね」

「やつぱりか。となるとこいつらの銃を使うのは諸刃の剣って感じだな。フラググレネードとかしかこいつらから回収できないのはちとキツイんだが……」

「ですが組み込まれているのはあくまでこの『As Val』のみです。『マカロフ』や『GSh-18』のサイドアームには含まれていないのでこちらは普通に運用できます。

GPSもこちらで無力化したのでグローザさんに渡しても大丈夫ですよ」

「よし、よくやってくれた。それぐらいの電子技術が俺にもあればって本当に思うよ」
「それ以上ローガンさんの幅ができることの幅が広がったら私の立つ瀬がないじゃないですか。せめてこういったことは私達に任せてください」

ぶんぶんと腰に手を当てるROに苦笑している間にグローザとバーンズがそれぞれで小銃と弾薬を手にする。投擲物などあらゆるものを回収していくのを見て待っていると、M4と同様に見るべき方向を向いて警戒態勢を解かずにいるARR15から声がかかる。

「それでローガン、ダムの内部にどこから侵入するの？セキュリティはROに解除してもらおうんだとしても、それを予測して奴らは対策を施していると思うわ」

「あく……一応考えてはいるんだが何も思いついてない。何か案があるのであれば一考したいんだがお前の方は？」

「いくつか思いついたのはあるけど、どれも派手に戦うことになりそうだから使えないわ。どうしても爆薬を使うことになってそうなたら交戦は避けられないから」

大体悩んでいるところは同じか、とローガンは頭を搔く。ARR15も困っているのを表しているかのように溜息を吐き、肩越しにこちらを見ているので空色の瞳しか見えていないが少しだけ笑っているように思えた。

ARR15達と合流する前、外と面していたあの扉のセキュリティは正体不明の通信相

手に解除してもらった。しかしそのプロセスまでも聞いていたわけではなかったので、違法解除による警報の作動があり得たか、それすら定かではない。状況を考えると、今はまともに戦えるほどこちらには余裕があるとは言えない。被弾したペチエネグが撤退してから負傷したのが軽傷で済んでいるのが幸運でしかなく、正面から戦えば彼女みたいに胴体に受けて重症に陥るのかもしれない。

「なら一つだけ、私から提案があります。どのみち騒ぎにはなりますが、私達の存在が接近してきていて位置がすぐには知られることはない方法です」

「おつ、是非聞かせてくれM4」

一から策を練り直すにしてもどういった方向性で考えるか、そうローガンが悩み始めていたところにエリート部隊の隊長から提案が一つ生まれる。当てにしていけないわけではないのだが、約一時間前までは追跡に支援はあれど自分で切り抜けてきたようなものだ。どうしても一人だけで考案しようとしてしまう癖が出てしまう。

自己嫌悪に陥りそうになる気分を振り払い、ローガンはM4に続きを促す。

「私達の手持ちの装備だけでやり繰りするのでなく、施設に備えられている物を利用してみてはどうでしょうか。ダム通路にある火災報知器を作動させれば早期避難の為に各エリアを区切る扉のロックは解除されますので」

「なるほど、たしかにそれも一つの手ね。でも作動させるのは私のハッキング、それとも

実際に火気を近づけるのM4？」

「前者よ、ごめん私よりも電子機器に強いROだからできることだからやってくれる？」
「気にしないでいいわ、その分敵兵への相手は任せていいかしら」

もちろんとばかりに頷くM4に倣ってローガンも同様にしてからAR15を見ると、彼女も今度は顔を完全にこちらに向けて微笑んでいた。詰まっていたところに提案されたM4の突入方法に異論はない、それはAR15も同じだったようだ。

「なら確認しましょう。ダム内部へはROによる火災探知機へのハッキングによる突入、入ったらグローザのASSTで装備の在処を探知しそこへ向かう。だけど道中で奴らと遭遇した場合は交戦するとしても、そのリスクを減らすこととか、なにかできないでしょうか？」

「たぶんあのメッセンジャーからの置き土産だろうが俺の端末にダム内部を示すリアルタイムマップが入ってたよ。自分達だけでなく敵の位置もわかる優れものだがどうだ？」

「それがあるのなら、先手を取られることがないでしょうね。では交戦することになったことも考えまして、ローガンさんはグローザさんの護衛としてAR15と一緒に先頭をお願いします。適宜に敵兵の電子装備の妨害をすることでROは真ん中に、私とバーンズ氏は後方警戒しつつ援護します」

A R小隊の隊長としての歴然とした姿勢、自然と背筋がピンと張られたような気がしたローガンである。



人気がないように見えるダムに到着してから、ROの探知機へのハッキングや内部状況の確認をしている間に、ローガンはおかしなデザインのゴーグルを操作しつつ付近の偵察をすると言ったので私もついていった。ただ赤外線で知られない様に高台から一望するのに身を低くしつつも覗かせるのは頭だけ、とだけは言われている。

そうしてダムがある南西側、内部でアルファと合流して脱出し一旦腰を下ろしたとき、れている付近からダムを私も全体的に見降ろしてみる。目を凝らしてよく見ればわ

かったが、小石が風にも吹かれてもいないのに飛んで行ったり湿りのある地面から足跡が生成されていたりと、不自然な事象が起こっていたりしている。戦術人形という枠組みに私もいるのでわかることではあったが一般兵にはなかなかわからないことだ、分かんなくても仕方がない。

「双眼鏡で見ただけじゃなかなかわからないわね。本部に注文して別の視覚モードも搭載してもらったらいんじゃないかしら」

「今回の事でそれはとても共感できるよ。今はこうして敵から頂戴して使えているからいいが、もしダメだったら詰みに近い。ていうかお前らと合流する前に俺は死んでたよ」

「そうなる前に退けたでしょ。なに、また頭をグリグリされたいの?」

「いや、割とマジで勘弁してくれ。仲間内だからコミュニケーションの一環として認可されるけど、あの痛みは拷問にも匹敵するものがあつたぞ」

「ふ~~~~~ん?」

「あついや!別に根に持つてるわけじゃないぞ、あれはあれで効果的だし駄々を捏ねて言う事をなかなか聞かない場合のS O P I Iにもいいぞ、うん!」

何を思ったのか、私が少し含みを持たせて声を発すると冷や汗を流し始めたローガンが慌て始めた。緊迫した状況下に置かれているというのに、こちらを見て言葉を並べる

彼。これだけを見ると本当に鉄血との戦いを生き抜いてきたのかが怪しく思えるかもしれないが、射撃や格闘においての戦闘技術は戦術人形わたしたちに一步劣らずというよりも負けていない。特に近接戦では単純な力比べなら負けるといふことであの手この手で意表を突いたりもしてきている。そんな基地での訓練だけでなく、現地で戦っている様子からしても実力は嘘ではないことはわかつてる。

だけどそんな彼は今こうして私が少し態度を変えてみれば慌てたりと外見からはあまり感じれない取っ付きやすさが出てくる。強面の人に話しかけてみたら思ったよりも話しやすくフレンドリーだった、というのとはよく聞く話だ。そんな実例が思ったよりも近くにあるのだと実感できた二カ月ぐらい前の頃で、人も人形もそう簡単に変わりはないが打ち解けているのに嬉しくないといったら嘘になる。

とりあえず起き上がった嗜虐心の赴くままに、私は標的と定めている獲物に食らいついた。

「へえ、でもその言動からだ自分からあの子と同レベルと認めているようなものだけどいいのかしら？」

「ああもういつもなら否定しているけどあれをまた食らうことになると思うとそれどころじゃねえや！というかARR15、あなた様なんかARR小隊あいつらという時とは違ってなんか静かな茶目つ気ありますよね、なんか心境の変化でもあったのですかな!!」

「別に今回が初めてじゃないでしょローガン。それに私に茶目っ気なんてあったのね、自己分析はしているというのに驚きだわ」

「取っ付きにくいよりはいいけどよ、それを俺以外にも見せたら友達が増えると思うけどそうしないのか？」

「イヤよ。私だって恥ずかしいと思うことはやっぱりあるし、こんな様を曝け出すのだってそうそうないわ。まだ気にしないでいれるのはあなただけよ」

「おお、なんか色々と考えさせられる台詞だぞそれ。世の男子だったらいいように勘違いするから気を付けろよ」

はっと我に返って自分が言ったことに少々気恥ずかしくなり反射的にローガンの脇腹をどついた。口を突いたら簡単に出てしまったようだった、そのことからさらに羞恥心が働いて加減はあまりできていない。

おぐぐ……と痛む箇所をさする彼から意識を戻し、状況に変化があるかをもう一度双眼鏡で覗いて確認する。さきほどと違うことがあったとすれば会話を始める敵兵が出始めたぐらいだ。手摺に軽く腰掛けているに留まらず、光学迷彩を解除したことからして気を緩めているようにも見える。だが手元にはロシアの小銃を携えているので攻撃をされるものなら即座に対応できるようにはしているのがわかった。

「それでローガン、あの事……あいつからの話を信じれる？」

「……信憑性はともかく確定事項からして『オアシス』については領けれる。情報が出揃っていないから断言できないが、ロシア急進派に与しているらしい奴らの目的はそこに行き着くのに必要な何かだろう。お前がああUSBメモリーが『地図』だと言うように重要な何かだ」

「でもそれがどうして私達の手の内にあることが知られたのかしら。あれの存在は基地内でも限られた要員しか知られていないわよ」

「……スパイによる情報漏洩の可能性がある、そう言いたいのか?」

ギラリと光ったローガンの眼光、そしてその奥に一瞬垣間見えた感情を私は何かは知っている。人形である私達も鉄血に対してもしばしば嫌悪と一緒に抱くことがしばしばあるそれ。相手が敵ではないにしても気迫を感じさせるだけのことは今までもあったが、真剣なのを私達に見せたことはあってもベクトルをこちらに向けたことはなかった。

演技もなしで私が返答に窮していると、ローガンは自分がどういった表情を浮かべていたのか気が付いたらしい。かぶりをふって謝意を示してくれた。

「ああわるい……そういう関連で嫌な想像しかできないから……」

「ううん、私もごめん。あまり口に出すべきではないのに迂闊だったわ」

互いに謝りはしたがやや気まずい空気が流れる。私としては決してローガンとの関

係を悪化させるようなことになりたくない。

以前45は私がローガンと共にしている時間が多く、それで心情や言葉で飾られていない素の彼を曝け出させているのが羨ましいと言っていた。要するに、彼女はローガンが感情と本音を嘘偽りなく口に出していること、それに驚いているということだ。しかし、それはすなわちローガンが抱えている負の感情も露出されることにもなることを表示することになる。

口だけで理解を表現するのは簡単ではある、問題はそうなった時で言葉の通りに行動できるかどうか。誰かに指摘されることは無くとも私はわかっている、つもりでいたのだろう今日までは。それが今、彼に知られることはないだろうが固めていたメッキが剥がれて自覚せざるを得なくなった。

「……とにかくお前のような人形達から自覚あるままの情報漏洩はないだろう。漏れ出ているのだとしたら人間のみで構成された情報分析班の誰かか、自覚ないままに操られたりしている人形だ。証拠はないがロシア政府の連中がそういった工作をしてきてもおかしくはないだろう。なにせ安全の保障が無いのに外部組織の兵士にASSTを実験も含めて組み込んでいるんだ、倫理とか目には見えない価値観が違う俺達からすれば疑わしい以外にない」

「ええ、どちらにしても見過ごすことはやっぱりできないわね。ただでさえ他国に侵攻

してこんな事件まで起こしているのだし知った人全員が無視することはできないんじゃないかしら。まあそれでも指摘されるような物なら自分達を柵に上げて喚くだけに終わるでしょうけど」

どのみちこの事件を解決にまで導いたところで世界情勢が好転することはない、その見識はローガンも同じだったようで溜息を吐きながら頷いた。だからといって手を抜くことも諦めるという選択肢を取りはしないが。

「二人とも、そろそろハッキングも終わって準備が整うそうよ。M4が戻ってきてくれって」

「よし、そんじゃグローザを頼むぞARR15。手筈通り俺は先頭に立つから取り戻すまでのボディガードをよろしく」

無線を下手に使えないということとでグローザが私達に知らせる為に小声で掛けてきたので皆のいる方へ戻る。ローガンは自分の銃を構えながらモニターを確認できるようにということとで端末のバンドを少々緩めてから小銃を構えながら見れるように調整し、私は残弾を確認しながら後に続く。そんな私の横に顔色がまだ回復しきれていないグローザが並んで歩いてくる。

「顔色が優れないけど大丈夫なの？だからといって休むことはできないけど」

「気にしないで、私は人形なのだからこれぐらいで停まるほど柔じゃないわよ……」

そう言っている彼女の顔色は顔面蒼白で、人間であれば腹にある物を吐き出しているだろう様子だ。各機能のチェックをしたROによれば『記憶』としてメモリーに残されている中でメンタルが衝撃を受けた出来事、つまり人間でいう所のトラウマが繰り返し再生されていたらしい。観客席にいたのでなく、その時にモジュールなどの感覚器で得ていた情報を感じつつ何度もループするらしく想像するのも少々恐ろしくもなる。

「なら中に入ったたら私から離れないで。極力ないようにはするけど戦闘になつて流れ弾が飛んでくることだって考えれるから」

「バカにするんじゃないわよARR15。私はあなた達よりも踏んだ場数は少なくともそれで潜り抜けた死線は厳しいものだったわ。僅差はあるでしょうけど実力は負けていない、いつもの装備があるからといって調子に乗らないで」

「……私は別にそう言った意味で言つてないわよ。単純にあなたの装備の在処が分からなくなるから下手に前に出すぎないようにって言いたいだけ。でもちよつと待ちなさい、奴らに苦しまされてのだから気持ちわかるけど口が悪すぎる。I・O・Pを含めた技術の機密保持も含めてでもあるけどあんたからの申し出なのだからそのデカい態度を何とかしなさいよ」

「頼みはしたけどそこまで知つたことではないわ、いずれは皆どこかで撃たれて死ぬのよ。そいつに気を使つていたらその分無駄になる。人間も人形も深くまで関わつて感

情を移入したら苦しむだけよ。それなら誰が近寄つてきても突き放すわ酷い手を使つても。個として弱いから群れを成す生物と同じように私は見られたくないしそんな奴らと一緒にいたくない。しつこいようなら殺すわ」

仲間を仲間として見ずに見下しながら罵倒して場合によっては同士討ちを躊躇せずにする、それを聞いた私は頭にきてグローザの進行方向に立ちはだかつた。交差した視線とそれが空中で火花を散らす、なんて表現は馬鹿馬鹿しいとは思うが今がまさしくその時。戦地にいるのだから時間を有効活用しなければならぬ、それ自体はわかっているが目の前に明け透けに設置されている地雷を無視することは私にできなかつた。

「もう一度言いなさいグローザ。しつこいようなら、なんですつて？」

「あら、聴覚モジュールの不具合かしらAR15。それとも感情モジュールによる動作で処理が追い付いてないの？仕方ないわね、もう一度はつきりと教えてあげる。あなたみたいに目の前に立つようなものなら誰であろうと関係なく殺す、と言つたのよ」

胸倉を掴んで近くの大木に叩きつけたい欲に駆られてそうしてしまいそうだった。一層ざわつく気持ちを欲と一緒に奥歯を噛みしめて我ながら必死に抑え込むように努める。

「あんた、わかつてるの……今の発言を報告したら現メンタルの抹消だけじゃすまされない。下手すれば分解の廃棄処分になるだけの失言だつて……！」

「怒ったかしら？それでも私が消える前に邪魔者を消せるから構わないわよ。どう足掻いたって私だっていつかは風化して忘れ去られる存在で例外ではないわ」

「ハの……」

咄嗟にグリップを握っていない右手で胸倉を掴んだが結局は何もアクションを起こせず離す。私自身もグローザの言っていることが正しいとわかってるからだ。

いつかは私達という戦術人形は役目を終えて用済みになり記録だけの存在となり忘れ去られる。人類史に残されている伝説というおとぎ話、それと同じように実話かどうかは怪しいこととして扱われかねない。一概にそうなるとは言いつてもいいが、第二次世界大戦の終結の一因にもなった日本の広島という地域に投下された核兵器。それによつての凄惨さを表していたといわれている原爆ドームがあったと言われているがもう百年以上前の話だ。鉄血が世界に進出した影響で傷跡が上塗りされているのかもしれないが私からすれば『歴史』ではなく『伝説』に等しく思える。

「否定しただけでなく手を出さないということはあなたもわかっているのよ。やはり長らく戦い続けてきた小隊の参謀役を勤めているのは伊達ではないわ、私でもあなたのような人形を消すのを躊躇するぐらいよ。それと勘違いしないでほしいのだけどあなたも含めたAR小隊のことは認めていないわけではないの、単に私個人はライバルとして見ているだけよ」

「とつてつけたような意味合いの修正ね。それに今のあんたからそのまま受け止めれることが出来るわけじゃないじゃない、さっきの度が過ぎた自己主張で好印象を持つ言葉は台無しよ。気持ちが悪いけど必要なことにならない限りは報告しないつもりよ」

「そんな温情のあることが言えるということは優しいのねAR15。失敗は誰にでもあることだけど、十九年前の六月に『あんなこと』をやらかしたAR小隊の一員には思えないわ」

十九年前の六月、それを言われた瞬間に私の時が止まったようだった。フラツシュバックするのは目に焼き付けさせられた記憶、それで私達は先代指揮官の死とは別の十字架を背負った。両手を縛られて膝をついたあの時、私はどう自分を責めたのかさえもありありと思い出せる。

「結構なことね、自分達で失敗を招き寄せておいて懲罰はなし。それで各々の成長に繋がるなんて喜ばしい話じゃない」

「……本部のデータベースで知ったのね。いずれは誰かに指摘されるとは思ってた覚悟していたけど」

「あのことを本部で知っていない人形はいないわ。基本私達が生み出した結果にしか興味を示さないヘリアンさん以外の上層部の連中でも時々口にすることがあるぐらいよ」

私も経験した過去を掘り返し挑発しているのはわかってる。結果はどうなっている

か分かっている悪ガキのように火に油を注いで反応を楽しもうとしているのだと。テンプレートに沿ったやり方ではあるが効果的ではある、何よりも私の性格を知っているといつても過言ではない身勝手なことから口走られて私には。

「あんた、私がいる小隊を貶しているのそれとも称えてるのかどっちなのよ」

「もちろん後者よ。仲間は大切にしても他者の血と命を糧に前に進み続けようとしているAR15。あなたの小隊は今もまだ未熟な小隊長で統率されている雛鳥部隊だって、そう言ってるのよ」

ここまで押さえこもうとしていたがついに沸点に到達してしまった私は大木に叩きつけるべく再度胸倉を掴もうと腕を伸ばす。片腕ではあるが戦術人形の腕力を発揮させれば抵抗されない限りぶん回せる筈だ。

だが伸ばして掴もうとしたところで気付いてしまった。グローザの表情の笑みがついさつき見たのと違って悲哀に満ちたものになっていたことに。

「グローザ、あんた……」

自然と伸ばしていた腕が止まって口が同様に動く。意図していたことにならなかつたせいかグローザの表情が憂いだものから怒気を宿らせたそれになっていこうとした時だった。

「おいお前ら、俺だけを最初に活かせて仲良くお喋りつてか？」

恐らく自分だけがM4達の元に向かっていることに気付いて引き返して来てくれたのだろう。現場ではいつも身に着けている左腕の端末の位置を調節し終わったらしい。戻った彼は自然と私とグローザの間に立つようにして歩いてきた。

「……別になんでもないわ。ごめんなさい、早く戻りましょう。これ以上時間を浪費するのは得策ではないわ」

「ちよつと待ちなさいグローザ！まだ話は終わってないし私は……！」

「グローザの言う通りだ。ほれほれ、俺だってできるだけ早く終えて飯にしたいんだからその為にもって事で協力しちくりー」

致し方なしとばかりに踵を返したグローザの背を押すようにしてローガンは言葉を投げかける。普段のような調子になった彼女に追い付くべく、私は歩調を速めて行こうとしたがAR小隊並に馴染みになっていく男に肩を掴まれた。その時の私はムツとなるどころか胸の内が焼かれる会話による行き場のない感情で爆発しそうだった。数分間の出来事を忘れることはできなかったことなど到底できず衝動のままに振り払おうとしたが、こちらに寄せられた顔を見て停止する。とはいえどこかで期待していたことにはならず、彼の口が私の耳元に寄せられた。

「気持ちわかるが下手に触れば嘔まれる。お前らがこの一帯から離れる鍵だから変なことで負傷されては元も子もないし基本俺に任せてくれ」

その台詞に一度思考が止まったが彼女とは違ってローガンが言ってることの意味はストリートでわかりやすい。理解した私はすぐに追い抜くようにして歩き始めたローガンの隣に立って歩調を合わせる。少しだけ見上げれば視界に収まる彼の顔を外さずに言った。

「今のグローザは危険よローガン。あなたでも彼女と言葉を交わそうとしても……」

「だったらさっきので撃たれていただろうさ。お前達の話の詳細は聞いてないから分からないけど、自暴自棄になってはいることだけは俺でもわかったよ。お前もそれに気付いただろ？」

「そうだけど話を逸らさないでよ。あんなにモジュールが生む感情を暴走させてる人形を私は見たことないのよ。ガンスリンガーを気取る奴みたいに銃を撃つことはなくてもカんにきたらお終いだわ」

今のグローザの精神状態はピンと限界まで張りつめさせたピアノ線と同じだ。所々が劣化して細くなってきたてしまっている理性を踏みつける、そんな簡単に単純な衝撃だけで断ち切れてしまいかねない。メンタル回復の為に精神科医を招いたとしても付近に同等の実力者を待機させたりしない限りは医者も始められもしない、そんな状態だ。

したがって兵士としては上々ではあるが医者としての免許がないローガンに任せるのはあまりにも危険すぎる。銃撃はもちろんのこと格闘戦でもいずれは負けることは

明白だ。

「ヘリアンさんから聞いた人の過去をベラベラと話すのは良くないとは思うんだがこの際言うしかねえよな。AR15、グローザは大分前に自分の指揮官を喪っているんだ」

「……………え？」

上司として従っていた指揮官を亡くした、そう聞き入れた私だったが続きをローガンに知らずと促していたらしい。彼は息を吐くと足を止めた私の方に振り返って言うてくれた。

「あいつの左手の薬指にある『誓約の指輪』がどんなのか、お前には説明が必要であることとはないよな？」

「大丈夫、戦術人形であればそのことは人形としての常識の範囲内よ。でもあれを贈った人は本部で今も生きているのだとばかり……………」

「まあ俺も指輪がどんなのかを聞いただけじゃそう思うだろうな。だけど最初に聞いた話でそんなのも考え付かないかったよ。まさか副官に就いていて付き従っていたのも想定外だった」

「それでローガン、グローザってここに来るまでもずっと……………？」

戦い続けていたのかと聞こうとしたところでは自分の口に人差し指を立ててこれ以上は何も言わない様にジェスチャーする。考えてみれば気持ちはわかる。ローガン

も本人の認可をもらわずに喋りたくないからだ。

差し迫っている時間と事態の進行、早歩きにそろそろなっていかなければM4とROにそろそろ申し訳ないので急ぎ始める。

「とにかく、俺があいつが言いたいことを全部聞き出してみろさ。それで全部胸が晴れるわけではないだろうが多少はマシになる」

「それってあなたの経験談？」

「そうであつて欲しいっていう願望だな。トラウマを明かしても気まずくはなるが、まあ血栓みたいのを取り除いて流れを少しは良くすることはできる。ああでも……」

脇目を振ってみると一緒に小走りになっているローガンが笑っていた。かつて浮かべていた自虐的なものでなければ視察で外出した時の行楽を表しているわけではない、なにかに感謝していても恥ずかしい、はにかんでいるという表現が当てはまるそれだ。

「前言撤回、経験談も含まれる。この間、完全に克服には至ってないけど肩の荷が少しは下りたよ。そうできるようにしてくれた恩人が俺の隣にいるしな」

「私のこと？え、でもそれっていつのこと？」

「あく……まあ覚えていないのは悲しいことだけでも……感謝してる気持ちにはそこま
で関係ないから、うん……」

「冗談。嘘だつて、ちゃんと覚えてるわよ」

目に見えるほどガツクリと肩を下ろして暗くなるローガンに私は少しだけ吹き出してしまったがすぐに否定する。人間でありながら戦う兵士は彼と出会う前にも見てきたが、大量の鉄血兵に対して単独で善戦した者はなかなかいなかった。それだけの装備があつたのもあるが、扱えるだけの技術とパニックを起こさない凶太さが無ければ意味がない。今こそ所属組織が変わったせいで彼自身の私物や基本的な装備はあるものの民生組織から得ていたドローンは所持していない。が、それを抜いてもローガンは強いのだから、忘れる筈もない。

ましてや恩人なのはお互い様だ、私だつて二日の内に二回助けられてる。それなのに負の底なし沼に沈みそうになつていた彼を無視したらもう自分を許せなくなる。

「それでも、あなた一人だけに一任することはできないわ。吐き出させる前に暴挙に出ることだつてあり得るのよ。そんなことになつたら……」

「おいおい、別に俺一人で全部やるとは言つてない。ただ『基本的』に俺があいつにぶつかるだけであつて、もしもの時のセーフティは任せるつもりなんだよ」

返す言葉に詰まつたが独りよがりですべてやるつもりでなかつたことだけはすぐにはわかつた。思考が至つてなかつたのは私の方であることの安堵と悔しさを深呼吸と一緒に吐き出し、こちらに手を振っている友人たちに私も振り返す。

「頼んだぞ」

「任せて」

もう距離もそこまでないのでペースを緩め、ローガンと拳をかち合わせる。最後の言葉によるやり取りは短かったが本当に言いたいことだけはもうわかっている。それにまだ話すようならもう彼女らにも聞こえてしまう。それだったらこれで十分、私もいつも以上に頑張れる。誰かに必要とされて戦う、それが私も含めた戦術人形としての役割だ。力のない見ず知らずの人の声に応えるのはもちろんだが、こうして私の力を必要としてくれる人が近くにいる。優先して守るなら反撃手段を持たない民間人か助力を求める仲間か、そう聞かれたらどちらも取るつもりでもある。そこにローガンがいるのなら尚更だ。

「ローガンさん、そちらで何か変わったことはありませんか？」

「いや、これといって大きな動きは受けられなかった。強いて言うなら気を抜いてる奴が見回りをしているぐらいだよ」

「わかりました。それでは打ち合わせ通りにいきましょう。先行は頼みましたよ」
「了解、だけど遅れるなよ」

M4から指定されたポジションに入り何事もなかったように飄々としているグロウザの前に立つ。そしていつでも交戦できるようにセーフティを解除した。同じく銃の安全装置を操作したローガンが入口に立つとハッキングをした状態で待機していたR

〇に目配せする。対する彼女は頷くとハンドサインで合図を送り、握り拳になった瞬間にローガンは扉を蹴破って突入した。

ジリリリリリリリリリリリッ!!と耳障りなベルが鳴っている空間に私も飛び込む。その先にある、私達にとって理解が出来ないエゴが密集するエリアへと。

33. 忘れていたこと — Dead heat —

〈19:01〉

『ハニーバジャー』のアンダーバレルに取りつけている垂直グリップを握りながらでも見れるように左腕の内側に端末の位置を調節したのは正解だった。リアルタイムで自分達と敵のいる位置が表示されているマップに視点を下ろし、もしもの場合を想定して死角になっていたりするところを特に警戒しておけばいい。ここまで仕事が楽になるのだからある意味儲けものだ。複数人で行動するとなると全体的な機動性が落ちたりと素早く動くことに支障を来し、それをカバーするのに連携してクリアリングをしたりとやるのがたくさん出てくる。それらも一人でこなせるのだからできるだけ時間短縮したい身であるこちらからだとありがたいことこの上ない。

「またT字路か。グローザ、目標の方向は変わらず北東か？」

「ええ、システム感知による位置に変化ないわ。ただ近付いてきたことで高低差もはつきりわかってきた。ツーフロア下、一階に立て掛けられているようね」

「銃口の向きまでわかるつつうのは聞いたことあるがマジかよそれ。色々とASSTは

まさまだな」

「効率よく戦えるという点では確かにそうでしょうし、離れたところにある得物の居所を知れるのは戦術人形の特権よ。基地で一回あなたが言ったように肉体を人形に置き換えたらいんじゃない？」

「内蔵とか腕とかが悪くなったりなくなったりたわけではないんだから勘弁してくれよ。つうかもうブラックジョークでしかないぞそれ」

背中にもで届くもうお馴染みになってきたグローザの冗談に溜息を吐きながら応え、ローガンは曲がらずにそのまま前進する。無論、行先ではなくとも万が一にでもマップに表示されていない敵はいないと認識する為の『ハニーバジャー』を構えての目視による確認を忘れていない。ストックを右肩に当てたままの銃口をそちらに向ける為に持ち上げるとそこには誰一人としていなかった。赤外線モードにしたゴーグルに映らないのだから間違いない、とローガンは歩を止めずに前進する。

今のところ順調に会敵せずに済んでいるが、廊下のあちこちに死体が転がっており見ていて気分が悪くなることは必至だった。中にはアルファの79式達が対応した傭兵の死体もあるのだろうが、どれもが酷く損壊してしまっているので見分けがつかない。

「話を聞いた時はまさかと思っただけど本当に……狂った人の行いでしかないわね……」

「M4、一応こういつた証拠は撮っておいた方がいいんじゃないかしら。政治には興味

ないけど、表向きから好き勝手に踏み入れられるのだけは食い止めた方が良さかもしれない」

「……そうね、動画で撮っておきましょう。ROも別視点ということで録画しておいて。指揮官への報告としての参考資料にもなるわ」

「了解」

側頭部と耳で挟んでいるカメラを起動した二人に目をくれてから改めて見てもやはり気持ちが良い物ではない。解体されてから時間はそれなりに経っているようなので垂れ出ている血は固まってきて赤黒く変色してきている。やはりローガンも死体を見慣れてきてしまっているが、自覚あるままに切り刻むなどして正気を疑わせるようなそれを見たことあるかと聞かれれば否だ。フラググレネードの爆発や対物ライフルによつて四肢のどれか一つでもなくなっている、戦闘の最中で無くしたのであろうものばかりではない。同じ戦死だとしても死体の損壊が故意によるものか否か、たつたそれだけでも死体への見たかというのは変わってくる。それが今、苦痛を顔に刻みながら絶命している傭兵達を見てわかった。

頭の片隅から浸食しようとしてきている狂気を振り払い、通路の真ん中で転がっている死体を避けたり跨いだりもして進み続ける。と、そこで進んでいる通路の先から赤点が表示される。赤点の数は二つで形状に従つてこちらに向かつてきている。できるだけ

穩便に行きたいのでどこかにやり過ぎたいと思うが、動く速度からして隠れようとしても発見されてしまうのがオチだ。

やむを得ない、と即決したローガンは左腕でハンドサインを後方に送る。進行中断を表してから敵数を知らせ、すぐ後方にあるARR15をこちらに呼んだ。

「その曲がり角から来る、静かにナイフでやるぞ」

「了解」

左太腿に備えられているARR15のナイフが抜かれるその一連の動作から反射的に目を背け、ローガンも腰の鞘から抜いて近接戦闘に備える。やがてバタバタとした印象を抱かせる足音が聞こえてくる。それに混じって水音が跳ねる音も。

ゴクリと喉を鳴らしたのはローガンとARR15のどちらだったのかはわからない。ただ集中力を研ぎ澄ませている二人にはそんな些細なことなどどうでもよかった。聞こえてくる音から距離を測って損耗のない不意打ちをしようとしているのだから。

そしてその時はやってきた。ゴグルをつけていることで見える敵の一部が表示されたのと同じタイミングで飛び出し、ローガンは曲がろうとしていた十二人の内側にいた者をタツクル跳ね飛ばし、その勢いのまま奥側の敵を壁際にまでぶつける。叩きつけられた直後に反撃に転じてくる。両腕をクロスさせた防衛こそしたものの膝蹴りをかまされた衝撃で少々後ずさってしまい、追撃を許してしまった。抜かれた大型ナイフの

切っ先が迫ってくるだけでなく拳銃に片手が伸びていた。

(そうは問屋が卸さねえよクソ野郎！)

声に出さずに吐き捨てると、ローガンは怨霊の刃を躲すと左手でナイフを握りしめながら右手で向けられようとしていた拳銃を跳ね除けて距離を詰める。そしてお返しとばかりに腹に膝蹴りを食らわせ、身体がくの字になったところを逃さず頭部を右腕で抱え込むと首筋にナイフを突き立てた。一気に刃の半ばまで刺さったが確実に断つ為にそのまま腕力を込めて貫通させる。

抵抗がほとんどなくなったそこで追撃を止め、ナイフを抜くとA R 15の方を確認する。彼女は首尾よく倒せたらしく、組み伏した怨霊の心臓部からナイフを抜き刀身に付着した血糊を敵のマントで拭っていた。

死線に向けてきているローガンの方に気付き彼女は口を開いた。

「大丈夫、そっちは？」

「一歩間違えたらまともに食らって面倒なことになってたがなんとか」

立ち上がったA R 15の方に寄って端正な顔に付いた血を自分の指の背で拭いてやる。返り血で濡れているのは別で感じられるすべすべとした肌触り、さつと赤みが差して睨んでくる彼女から目を背けてローガンは待機しているメンバーに前進の合図を送る。

「ローガンあなた、どこか余裕があるのかしら。いやそうよね、今の真似なんてそう易々とできないでしょ！」

「わりとマジな早口言葉で捲し立ててくれているところ悪いけどもう皆来たぞ。ほれほれ前進前進」

本人からの問い詰めで気恥ずかしさが倍になって押し寄せてきそうにもなるのでローガンはすたこらさつさとばかりに皆の先頭に改めて立つ。殺気と表現される程の重々しい雰囲気はないが、隙さえあれば一瞬のうちに百連打で小突かれそうな気がしてくるので先行した。

「遠足みたく雑談をするのは良くないとは思うんだが聞かせてくれ。あの二人はいつもああなのかよ?」

「うくん……ローガンさんがなんかやって怒られているのは見たことありますけど、さりげない精神攻撃はないですね。あくまで友人みたいに適度に接していましたし……」
「あの野郎なんか距離を履き違えてるんじゃないやねえか? オレ様から見ても異常だぞあれ。下心丸出し、てよりは何も考えてねえだけと思うんだが」

最後列にいる二人からなにか聞こえるが、羞恥心で赤くなっているARR5からの刺々しい視線と脳内フィルターでカットする。

進みながら端末のマップを確認してみると敵の動きも活発になってきているエリア

に踏み込んできているらしい。こちらに明確に近付いてくる赤点はないものの、こちらから付近を通過せねばならない通過点もあったりと危うくなることが想定される。

迂回しようと思ってもそれが可能な通路もない、そこを制圧して行こうとした時には付近にいる怨霊達に知られて派手な戦闘が起ころ。八方塞がりになろうとしたところで、妥協案ということで一つを皆に提示した。

「ここから先は敵が集中しているから下手にステルスに拘ると痛手を負いかねない。ROが持つてるシーカーマインで陽動を仕掛けて気を取らせている間に突破しようと思うんだがどうだ？」

「その前に一つだけ確認させて頂戴。この際だから認めるけど、あなたも戦術人形を相手に簡単には負けない、それどころか一人でも武装している複数人相手にも対応できるだけの実力がある。ゲストはともかくここにいるのは実戦経験豊富よ。気を付けていさえいれば続行できると思うけど、その点も考慮しての上かしら？」

「もちろん、俺だつてできれば奴らと撃ち合いをするのは避けたい。だがここまで来た以上はもう最小限に済ませるようになるのは諦めた方が良い気がしてきた。ここまでの奴らとの戦闘でわかったことだが、こちらが先に先手を打てる状況下であればまだ楽に倒せる。なら進行方向に出てくるだろう相手方を速攻で片付けていくのも有効な一案だと思うんだが」

ローガンが熟考をしたのかどうかをグローザは確認したかったのだろう。彼女も肩間に皺を寄せて考えた後で頷いて納得の意を示してくれた。他の面々を見ても異論は特になく、まるでシーカーマインを持つROは複数のそれを起動する用意を行っている。「グローザは俺と同じ先頭に、一気に走り抜けるぞ。M4、AR小隊の指揮は頼んでいいか」

「わかりました。では私とROで二人のバックアップ、AR15は後方からの援護の位置に付きます」

「オレ様もてめえと同じポジションに入る。ハンドガン一丁だけの人形がいるんじゃない力が足りなくてマズい。なら数を増やして押し切ってしまった方が悪い」

「それじゃRO、十秒後にシーカーマインを起動してくれ。こつちから見えなくなったら走るぞ」

「わかりました」

全員が早急に動いて準備を始める。ローガンはナイフを逆手に取りながら『ハニーバジャー』のグリップを握りそのタイミングを待つ。

後方からゴロゴロと転がっていく野球ボールの球体三つが違う方向へと向かって行く。

「ゴ—！」

ローガンから発せられた号令を元に全員が走り出す。グローザとバーンズが自分の前を走り、後方にはM4とROが追従してくる。最後列にいるAR15も後方を警戒しつつ進行ペースを崩さずに来ている。そして走って数秒、爆破音が各所から火災報知機の音に混ざって聞こえてくるので陽動が行われたことが各員に知らされた。

ASSTでリンクしている装備がある方向へと走っているグローザの背中を追いかけながら端末に視線を下ろすと、北東の方から接近してくる赤点が表示される。

「北東から来るぞ、数は三！」

「勢いと機動を活かして接近戦で一気に片す。あなたは銃撃でお願い」

そして形状的には曲がっていないどころか遮蔽物が無いそこに踏み入った瞬間、ローガンはゴーグル越しに映された怨霊達を撃つ。やはり現場についての情報量で分があるので先手を取ることが出来た。射撃を出来るだけ妨げない様に前頭姿勢になったグローザとバーンズによって生まれた射線にいる三人に弾をばら撒く。それで稼がれた時間を活かし、距離を詰めた二人が飛びかかる。そこでローガンも狙いを定めて一人に集中砲火をかまし数弾受けたことで仰け反っている怨霊を葬る。そして二人が飛びかかって残る敵を片付けていくのを蹴るなりしてアシストし早急に收拾させる。

「怪我はないようだがまだ行けるか？」

「言わずもがな、そこまで気にしなくていいわよ」

ローガンから差し出された手をグローザは払いのけると自力で立ち上がった。バーンズも負傷することなく倒したようで難なく立ち上がったのを確認してからまた走る。「急ぎましよう皆さん！各所に点在している監視カメラのジャミングですが対抗され始めます！」

「やっぱり敵方もただやられるわけではなしということね。ローガンさん！」
「もとより今時間をかけるつもりはないし、そうしているようじゃ良からぬことがあるのはもうわかっている！ペースを上げるぞ、遅れるなよ！」

最後列にいるAR15にも聞こえるように音量を上げて号令を出すと、気合で増した速度で先頭を走る二人を追い抜く。ただただ闇雲に走るのでなく端末にも気を配ったりもしていたりと必要なことをしているというのに、暗黒の中を目隠しした状態で駆けているような感覚を拭えないまま。

〈19:12〉

結果でいえば予想していたほど消耗することはなかった、といえるだろう。『ハニーバジャー』の弾倉を交換するのも一度だけで済み、撃たれるなり刺されるなりされて大きな怪我をすることなかった。それはローガンだけでなく皆もそうである。不意打ちと力押しによる進行だったので体の各所に殴打された跡やかすり傷が出来たりとしていてもまだ満身創痍には至っていない。それだけでなく、消耗した気力と集中力こそ変わらないが物的な浪費が少ないのは何よりだ。

目標としているグローザの装備がある部屋、近くの壁に備え付けられている札からしてそこはダム職員にとつての事務室らしい。M4が扉と床の隙間からワイヤー状のカメラを挿し込んで内部を確認している間に周囲を警戒して待機していると、確認作業が終わったらしくM4が立ち上がった。

「内部に敵兵、見えた限りで数は十人以上。アサルトライフルやSMGで敵全員が武装しているわね。グローザさ……グローザの銃はまだ確認できていないけど」

「ここをどう攻めて制圧するんだ。僅差だが数は向こうに分があるんじゃないや正面からだとして勝ち目が薄いぞ」

バーンズの指摘の通り、現状ではやはり正々堂々といった戦いを前提にするのは得策ではない。これに関してには彼に言われなくてもローガンも含めた全員がわかっていることだが、自分達とは違う組織に属し別視点を持ち合わせている人間が言う事なのだから間違いないだろう。

「ローガンさん、ここ周辺のマップは端末にありますか？」

「生憎だけどさすがに全部がインストールされていないようだ。俺達が入った出入口口諸々よりも通路の作りが新しいがそれが原因か？」

「たしか……半月前に機器の一新も含めて増築工事が終わった話がありました。それまでの事務室はその場しのぎの仮設でしかなかったようなので、今回のでまともなのを用意したとか」

仕方ない、とローガンは一旦警戒態勢を解き、自分が所持している物資を今一度確認してみる。『ハニーバジャー』の弾倉は今装填しているのを除いてあと一つだけ、『P226』の方は二つある。背中の『レミントンM700』の出番は今回ではなしだ。空中での事故で死んだ怨霊から回収したフラググレネードはなくなり、投擲物としてあるのはフラッシュバンと持ち腐れとなっているスモーク。これらを見る限りでは策を練っ

て一方的に強襲するのは難しい。精々扉を蹴破ってフラッシュバンを投げ入れるのが関の山だ。

「どこか薄い壁に穴をあけて不意打ちをかます、というのが無難か。それか別の出入り口があればいいが」

「事務室なので他の入り口がある可能性、ね。私達の執務室は一つしかないけど」

「茶々を入れないでくれよAR15。ともかくあつたらラッキー、なければ薄い所見つけて爆破して突入てな感じでどうだM4。なければ一応爆薬をくれると助かる」

「私からは異論ありませんのでお渡ししますよ。AR15と一緒に行ってください」

「了解。それと今回の突入の合図を送る時だけは無線を使うぞ。さすがに二手から攻めるのに掛け合いも何もないんじゃないや無理だしな」

皆と同様に頷くAR15を連れて行こうとしたところで、ローガンは装填している弾倉を確認している一人を見た。敵から奪ったハンドガンとナイフ、そして己の体術で自分達の先頭を走っては蹴散らしていた人形。敵対するのではなく味方として立ってくれるのであれば心強い、それがここまでの戦いで得られた見解だ。彼女とはまだスオミのように打ち解けているわけではないが、棘を埋め込まれたローガンとしても望まないことがない限りはできれば敵になり得ない関係を築いておきたいと思う。ならばやることは一つ、自分とROと一緒に来てもらうのが良いだろう。

それに自覚しているのであろうが、溜まってきている『負』を吐き出させるにはいいのかもしれない。

「人数と火力を均等に分けておきたいしグローザ、お前も来い」

「そう言われるのはなんとなくわかってたし別にいいけど、あなたはいいのかしら？」

「生還できるのに私情を挟むような真似をする程、俺は『子供』じゃないぞ。無駄に時間を浪費したくないし二度も言わせるなよ」

一句を強調しながら言い放つてやったそこに反応したグローザは目を瞬かせるとゆつくりと溜息を吐き、部屋の側面に沿った通路を歩く自分の横に並んだ。してやられた、というよりも怒気が彼女の内面で発生したのは気のせいではないだろう。それを証明するかのように自分をギロリと睨んでいるのだから。とはいえ、そのような視線も最早慣れてきてはいるのでローガンはもう動じない。

そして自身の隊長の指示に従ったAR15が腕を伸ばせばすぐに届く程度の後方にいるのを見てから前進する。

「この辺は死体の山が無くて幸いな。やっぱり精神衛生的にあればヤバすぎる」

「……心の準備が出来てるか出来ないは関係なくそれには同感ね。でもローガン、天井も何もかも真っ赤だったのはあなたが通ったところだけだったのかしら」

「あんなところがこのダム内で何カ所もあつてたまるかって言いたいがどうだろうな。」

あれもあれで酷かったが、ここまでのも中々キツイだろ」

「キツイなんていう表現以上よあれじゃ。それに来た道に戻るのにはできればお断りしたいわ」

「心配するな、俺だって見つかつて追いかけられたりしなけりや御免だよ」

先程の件もあつてA R 1 5はローガンといつものような会話しながらグローザを警戒している。それでも努めて平静を装っているみたいではあるが、言葉の端々まで隠されていけないのがローガンでも窺えた。隣にいるベテランに悟られない様に内心で苦笑いを浮かべるものの、本人には悪気はないのだから馬鹿にするのは筋違いである。とはいえ、ローガンとしてはA R 1 5の事を貶したりするつもりはない。

「別の意味で不満たらたらつて感じだなグローザ。人形に当てはまるかどうかは知らないけど怒ると皺が増えるぞ」

「心配しなくてもそこまで人間女性に似せられていないわよ。この面子にしたのは誰の思召しかしら、とは思うけど」

「それこそ心配し過ぎ、というよりも訝しんでの見当違いだ。誰も仕組んでないし、俺だって仕事をするのに適切な奴を選んだだけだから他意はないからな」

しばらく歩いていったところで扉があるのでそこをゆつくりと開けてみる。中は明かりが無く暗いので壁のスイッチを入れてみるが天井に備え付けられている電灯がい

くつか点灯しない。

「メンテナンスを怠ってる……てことはなさそうだな。バラバラになっている死体とかがないだけで綺麗に掃除は行き届いてる」

「扉含めて弾痕はあるからきつと流れ弾か跳弾が蛍光灯に当たったのね。これじゃ無理もないわ」

フラッシュライトを点けて部屋を照らしてみると資料室らしく、現代では珍しかったりする紙による資料が棚に立て掛けられている。ファイルや壁に血痕があるそこから視線を落とせば死体も転がっているがここはまだ手つかずのようで損壊が見受けられなかった。もう言うまでもないだろうが、四肢がまだ本体と繋がれているのでアルファチームと戦った傭兵達だ。

交戦によるばら撒かれているそれらを跨ぎ、慎重に探索していると扉を発見。方角を確認してみると事務室に繋がっているらしく、耳を澄ませてみると中から話し声が聞こえてくる。

ローガンが扉に近付きながらARR15とグローザにサインを送り、三人で無線機の操作を行い共有回線に接続し直した。

「M4、別の扉を発見。周囲に警備はいないわ」

『了解、ARR15。タイミングはそちらに合わせるわ』

もしローガンとグローザの見立ての通りであればこれが傍受されている可能性がある。であればこちらの手の内が知られない様に使用しないか、それか時間をかけずに速攻で畳みかけるその時でしか使えない。であるからしてここからはスピード勝負、迅速かつ確実に事務室内を制圧し目標を回収しなければならなかった。

「ローガン、フラッシュとスモークを中に投げ入れて」

「フラッシュはともかくスモークの意味はないだろ。俺らも手に入れてはいるが奴らにあのゴーグルがあるんじゃない……」

「対策される前に片付けるわ。ここに目を跨いで長期間居たわけじゃないから部屋の構造と扉の位置まで完全に把握するのは難しい筈。なら方角と勘を鈍らせた上で私もこれを投げ入れる」

そう言ったA R 15の手元にはローガンが持つスモークグレネードと大体同等のサイズの筒が握られている。外観からして投擲物と同じものだろうが、それが機能した時の効果がわからない。

「大丈夫よ、信じてローガン」

彼女から発せられる明確な言葉とその表情。それらだけでローガンの腹は決まった。

深く息を吸い込んで吐くとフラッシュバンとスモークを用意し、二つのピンに指を掛けて扉の方に視線を向ける。

「グローザ、俺の合図と一緒に扉を開けてくれ。そんで投げ入れたら閉めて突入準備だ」
「あなた異論がないのなら私から言わせてもらいたいけど時間がないわ。だから黙ってあげるけどそうすんなりと通ることがないことを覚えていなさいよ」

「言われなくてもわかっているさ、あくまでこれは俺の勘と信用だ。M4、十秒後に突入だ」

わずかに開けられた扉の隙間にスモークにフラッシュという順序で投げ入れると、すかさずAR15がピンを抜いたそれを続けて放られた。そして閉められた扉の向こうから聞こえてくるのは閃光が炸裂した音とロシア語によるものかの叫び声。それらを背景にローガンは『ハニーバジャー』のセレクターをフルオートに動かして準備完了。

扉の反対側にいる二人にハンドサインで指を立てて四本目のタイミングで握り拳を作る。そしてグローザが扉を蹴破ったので先陣を切った。ほぼほぼ同時に別の出入り口からM4達もエントリーし目の前のテーブルを倒して即席の遮蔽物を作ったりともしもの場合に備えている。

そして突入して目に映ったのは事務室内に充満しきれていない煙に包まれながら隠れていた床で蹲る怨霊達。スモークに巻かれているのに何故わかるかという目に見えてはつきりと発光しているからである。そうしたのは他でもない、AR15が使用した投擲物によるものだろう。

メカニズムなどを考えるのは後にするとして、ローガンは反射的に赤く発光している怨霊達を撃つ。本人達はフラッシュの影響を受けていることもあつてこちらの視覚や聴覚で位置を知れていない。反撃が始められる前に倒すのがセオリーとも言える。

「一人やっただぞ！」

「こつちも一人ダウンさせた！」

「援護をお願い、移動するわ！」

敵方の復帰が早く放たれた銃弾が近くに着弾し破片をまき散らす。負傷させられないよう、ローガンはこちらに銃口を向けている怨霊をスモーク越しに狙い牽制だけでもいいので発砲した。

「ARR15、グローザ、お前達は回り込んでくれ！こつちは奴らを釘づけにしておく！」
指示通りに動き出す彼女達に攻撃がされない為にも少なくともっている弾薬数に無理を言わせた。頭を覗かせるようにしていた者に命中させたりしているが、その箇所が生命活動を断つのに十分でないのでまだ戦闘を継続させている。

やがて弾倉が空になったのを告げたので、リロードをせずに『P226』に持ち替えて戦闘続行しようとした時にローガンが一つ気付く。応戦する動きを見せていた怨霊達が何かを取り出している動きの後、その何かを腕に突き刺すような動作が続けざまに為される。その一連の行動が何を意味するのか、すぐに思い知った。

スモークを掻い潜るように上半身を低くした怨霊数人がローガンに突貫してきたのである。すぐさま『P226』を撃つて脚に命中させるが、勢いがなくなるどころかさらに速度が増して突っ込んできたのだった。

「な、に……!?!」

複数人による近接戦になる、そう判断し左手をナイフの柄に伸ばし指先がそこに触れたがこちらに到達した怨霊の足技が繰り出される方が早かった。顎を狙ったそれをなんと回避し、反撃とばかりに右手の『P226』を持ち上げようとしたがもう一人に不意打ちを仕掛けられてフックが迫ってくる。その頃にはもう左手が柄に到達していたので抜き放ち、そのまま振られてくる腕の進行方向上に刃を向けた。次第に刃に肉がめり込み、すぐにその感触が消えた。ただローガンが思っていたのとは全く別の結果で、である。

人間は触れた物が極端に熱かったり冷たかったりした場合は反射的に手を引っ込める。感覚器官によるその働きは痛覚にも適用され、思いがけず縫い針が指に刺さればすぐに痛みから逃れようとする。

しかしそれは人間という生物の構造上の話であり、この世で生を受けてから常識とはかけ離れたことを経験し続けられれば歪んでくる。極端な温度の熱気にしても冷気にしても耐性を獲得するというのはそういうことではあるのだが、さらに捻じ曲げて歪にする

のが生命においての危機感の喪失だ。命というのがあるのを本能で理解しているのであれば前述の行動をするだろう。

では、ローガンが肉眼で確認できるほど接近してきた怨霊がどう行動したのか。言うまでもない、腕が無くなるのを厭わずに腕を振ったのである。

「くそっ！」

「ローガン!!」

怨霊の片腕が飛び、顔面に二つの断面から放出された血液が付着する。自分の名を叫び声に乗せているA R 15に応える暇もなく、分離した腕に減衰した勢いのまま頬を叩かれる。

払い除ける必要はなく重力に引かれて落ちるのだが、敵方の一部が自分の近くにあることの嫌悪感が勝った。それで気を取られたのが一瞬、しかし繰り出された次の攻撃に対処するにはその一瞬が必要だった。一番最初に接近してきた怨霊に薙ぎ払われる回し蹴りを受けてしまったのである。

爆音で重々しい鐘が耳元で鳴らされたようにして脳が揺れ、防御も何もできなかつたローガンは横っ面に吹っ飛ぶ。幸いなことに骨にヒビなどが入ったりしてはいなかったが、痛みと衝撃はこれまで受けてきた殴打よりも強かった。ここ事務室に来るまでも何度か受けたが、それらはまだ堪え切れる程度でしかない。

「じつ………が………」

よって、床に転倒して悶絶してしまうだけの威力で一時的にローガンは他に何も考えられなくなってきた。

床に伏しているながら脳内で描かれる色彩が一色で染まり、視界が歪み、意識がやや遠のきそうになる。それでも一秒程度で最低限で回復、なんとか身体を動かして仰向けになり手放さずに握っていた『P226』を撃った。

五体満足の怨霊には半身で放った銃弾を避けられたが、流れ弾として片腕を失った方に二発命中しようやく体勢を崩せた。続けざま、と行きたいがまだ十分に動いてみせて敵を忘れてはならない。

空中に跳んで飛びかかってきたその怨霊の腹を伸ばした片脚で蹴って仰け反らせる。それでさらに時間が稼げたのもう一度手に持っているハンドガンをお見舞いした、が蹴られた怨霊も負けじと次の行動に移す。その行動も誰に予測できただろうか。片腕が無く膝をついている味方を前に出して盾にした、その迷いのない動きを。

「……っ！……っ！！」

もう悪態も出てこなくなったローガンは数発撃った後で空になった弾倉を捨てた。リロードをしているそのタイミングで見境がないとしか思えない怨霊が飛び出して距離を詰めてくる。

先程一撃を受けて確信したが、身体能力が向上しているようだった。攻撃の際の腕力と脚力、銃弾に対しての反射神経、こちらへの対応をする際の思考力。どれもが目に見えて上昇していることからして、煙に紛れながら取り出していた何かによるものだろう。人間ではなかなか至れない戦闘力はもう戦術人形の域だ。

まだ冷静でいられている頭脳を駆使し、ローガンはリロードを終えた『P226』とナイフを握り締める。詰められている現状と距離からして撃つのは得策ではないので、構えるだけに留めて引き金を引かずにいた。

怨霊もナイフを抜き、様子見のようにして薙ぎ払う。避けることもできたが、敢えてローガンは自分のナイフで受け止め、右肘を敵方の胸に食らわせる。肘を主軸にし銃を上向きにするように腕を回転させようとしたがすぐにフリーになっている怨霊の腕が掴んでくる。スライドを掴まれながらの発砲は軌道をずらされて天井を挟ったが、その掴んだ手に填められているグロブの生地がスライドの間に挟まり取れなくなった。

怨霊の方もこのことには予想外だったようで動きが一瞬止まったが、それを見過ごすほどローガンも甘くはない。頭突きを顔面にお見舞いし、仰け反ったところで襟を掴んで引き寄せると喉元に切っ先を埋め込んだ。

「お待ちかねの致命傷だ、遠慮するな味わってけ！」

怨霊は負けじと自分の手に持っている刃物をローガンに突き立てようとしたが、手が

空いたAR15からのバックアップでナイフが飛んでいくどころかその手に風穴が空けられる。そしてもう少しで仕留めれそうという所でローガンは力づくで無理矢理『P226』を怨霊のグローブから分離させ、目の前でまだ交戦している敵方を撃つ。

「あと何人だ!？」

「確認できたところであと四人です!そちらからも援護をお願いします!」

「任せろ、そのまま行け!」

M4からの要請に応えて一人、さらにまた一人と、他の面子にとつて戦いづらく死角に隠れられている敵方を葬った。もう弾薬も少なくなってきたので闇雲には撃たず、急所を狙って正確に。

このまま交戦し続けていればこの場を制圧できることはローガンでも断言できが、それは横槍が入らなければの話である。

ドオンツ!!と突如自分達が突入したのとは逆側の壁が吹き飛び、外と空間が繋がれる。壁に大穴を開けた相手が大勢の怨霊達かという絶望に近い予想が頭に通りながらも土煙に目を凝らしてみるが、それとはかけ離れていた。悪い意味で外れたということを確認したのは、耳を叩いてくる風の音とローター音。ダム構造上、低空飛行には無理であるので姿形を把握することはローガンにはできなかつたが、壁の近くで奇跡的に負傷することがなかつたROが叫んだ。

「Mi-28です、皆さん逃げてください!!」

Mi-28とはロシア製の攻撃ヘリで、大混乱、大損害を意味する『ハボック』という別名を持つ兵器だ。

ROからのその台詞を聞いた瞬間には皆の行動は早かった。すぐに交戦を中断し、敵兵器から最も離れているローガンにAR15とグローザが突入した扉の方へと走り出す。

「グローザ、お前の装備は!？」

「もう確保したわよ、早くあなたも急ぎなさい!」

ハボックに搭載されている三十ミリ機関砲の機銃掃射が始められ、天井を貫通して弾丸が命を刈り取ろうとしてくる。それに巻き込まれることはこちら側に幸いなかったものの、固まって陣形を整えていた怨霊にも容赦なく鉛の雨は降り注いだ。グローザを資料室に押し込んで最後に事務室を後にしようとしたローガンの目に映ったのは、四肢がもげて絶命していく敵兵の姿だった。

部屋と部屋を区切る扉を閉めたものの休んでいる暇はない。M4とAR15が廊下の方を確認しているが敵影はなかつたらしく即座に指示を送ってきた。

「一旦ここから離れて別の所に潜伏しましょう!ローガンさん、それに適した部屋に心当たりは!？」

「悪いけど俺だってここに關しての地理はねえ！ だけど攻撃ヘリでも地中の奥までミサイルを届かすのはほぼほぼ無理だ！ だったら地形の方に埋もれている部屋の方に行けばいい!!」

「私がグローザさんが先頭に立ちます、ローガンさんは可能な限りでマップでガイドしてください!!」

全員で部屋から飛び出し、同じ方向へと走り出す。ローガンも続きながら『ハニーバジャー』のリロードで最後の弾倉を叩き込み、チャージングハンドルを引いて終わらせしたが、すぐにまた交戦状態に持ち込まれた。ヘリの攻撃音を聞きつけて怨霊達がわかりやすく前方から接近してきたのである。

「来たわ、どうするの!?!」

「まともに相手するな！ 左だ、左に曲がれ!!」

ROとグローザが曲がったのに皆で続き、追撃をしてくることも考えてバーンズが後方にフラググレネードを投擲する。炸裂音が後方で轟くのを背中を感じながらそのまま走り、来た道の階段を登ってガラス製の窓として外に面している通路を通過した。そこから見えるのは最新鋭の装備を積んではいても攻撃の度にそれがブレている攻撃ヘリである。

「でも一旦逃げたところでどうするのよ！ ダムには爆弾とかが仕掛けられているのだから」

ら根本的な解決にならないわ!」

「心配しないでAR15! さつき傍受できたけど、奴らのリーダーをここから遠ざけるみたい! あいつらの無線からの音声をグローザさんが翻訳してくれたわ!」

「そんなのをいつの間にしてたんだと言いたいところだけどよくやってくれたよ! 大体重要なスイッチを握っているのは現場指揮をしている奴だつて決まってる、さすがにサイコ野郎の奴らでもそこら辺は変わってないだろ!」

リアルタイムマップが復活したのですぐさま敵位置を割り出す。タッチパネルになっている端末の画面に指を滑らせて操作し、自分達の現在位置から近場にいる敵兵を優先的に表示させた。

「そのまま行つたところの突き当り、右は駄目だ、待ち伏せされてる!」

「じゃあ逆の左の方に行けばいいじゃない!」

「そのまま行つたら行つたで地獄だ、外に出てしまつてハボツクにハチの巣にされるぞ!」

残念なことだが、どちらにしても逃げ道はなかった。事務室にまで辿り着くときには右の方なのだが、ローガンの言つた通りそこでは複数人にアンブッシュ、待ち伏せされている。だからといって逆方向に進んだとしても外へと続くだけで何の意味もない。非常階段があるが外から丸見え、下りるか上る間に三十ミリ機銃に肉片にされてお終い

だ。

それに待ち伏せしているのは右側だけだというのが肝である。片側だけに歩兵を集めて待機させていることからして、怨霊達も建物の大まかな構造だけは把握しているのだろう。そうでなければ騒ぎが起こってから十分程度の短時間の間に兵の配置などできたものではないからだ。

「逃げる場所もはつきりとしてないからはつきりとは断言できないけど、スモーク展開するには数も足りない！八方塞がりつてのはこういうことだよな忘れてたよクソッタレ！」

「とにかく左へ行きましょう、あそこは遮蔽物も何もないので予め待ち伏せしていた方が有利です！」

後方にいるM4の言う通りに動き、分かれ道に差し掛かったところで左への進行を余儀なくさせられた。とはいえ、地獄へと続く旅の猶予が増えただけなので根本的な解決にはなっていない。

「本当はここまでついていくつもりはなかったんだが礼だ、一つだけ抜け道を教えてやるよてめえら！」

ローガンの横に並んで走っているバーンスが叫び声に近い声質で言ってくる。自然と視線が彼に集まった。

「この先から外に出て大体東へと二百メートルぐらい進んだところに秘密玉を隠しておいていたんだよ！もしも何かあった時は数人だけでも連れてトンズラできるようにな！」

「本当かそれは!?!」

「マジな話、嘘発見器がこの場にあつたら気概で壊してしまうぐらいの大マジだ！」

「だけど二百メートルじゃ俺の手持ちだけじゃ間に合わない！他にも持つてる奴はいるか!?!」

全員に尋ねるが、ローガン以外には誰も持つていないらしく首を振るか否の意を示すなどしてきた。持つている数はローガンのだけで三つしかない。そうなると二百メートルまで離れている地点に到達するまでには足りない。犠牲が出るのを覚悟の上で、というのであれば別だがローガンにはそのようなことを前提に作戦行動の立案をしたことないしこの先もするつもりはない。仕方ない、という一言で済ませられてしまう結果を得てしまうのももうコリゴリなのだから。

「心配するな、そこにはてめえらで行け。オレ様が奴らの面倒を見てやるよ」

「……おい待てバーンズ、お前一人が囷になるつていうのかよ!?!」

「それしかねえだろ。オレ様はてめえらとは違う存在、外部の人間だ。それも犯罪者でならず者、これでお役御免できるし手間が省けるじゃねえか」

「犯罪者だからといってあなたを囷に使うっていう馬鹿な真似が見過ごせる筈がないじゃないですか！あなたにはちゃんと私達の基地に来てもらって……！」

「オレ様みたいなクズの生存に拘つてどうする。てめえら全員が甘つたれた世界に入り浸つているわけじゃねえのはわかつてるし、長く戦場ごに立つていられるだけの思考もできてるんだろうさ。だったらわかつてんだろ？」

認めるのは業腹ではある。しかしバーンズの言う通り、ここから逃げきるには誰かしらかを自分達とは別の方に行かせるのが最善策ではある。叶う事であれば駆けだす前にハポックを撃墜できればいいのだが、可能な装備がなく現状からしてそれだけに集中できる状況ではなければ撤回せざるを得ない。

ならばということとで戦術人形の誰かを明後日の方へ行かせるつもりなどローガンには毛頭ない。それだったら自分が行くぐらいに。

苦悩していると振り返らずに走っているグローザが直接投げかけるようにして言った。

「聞かせてもらおうけど、生還するだけの勝算があるのかしら？あなたも修羅場で渡り歩いてきたのでしょうか後先のことを考えられないわけはないでしょう」

「たしかに、確証はないがそれだけの算段は出来てるさ」

「考えてその程度、だったら自分勝手なことを口走っているんじゃないわよ！」

そこで片脚を軸に向き直ったグローザがバーンズに掴みかかる。彼の横にいたローガンが止めに入ろうと反応した時には既に事は起こっていた。伸ばされた腕に捕まれたバーンズはされるがままに壁に背中から叩きつけられ、襟元から持ち上げているグローザに見上げられる形で睨まれる。

すぐにローガンもM4が止めに入ろうとしたが、バーンズからそうしないように手を上げられたので一旦下がった。

「あなたがそう考えていても私達からすればそう易々と『はいそうですか』と通すわけにはいかないのよ！こつちグリフィンは鉄クズ共と戦っているけど、命あな知らずたみたいな犯罪者を好きで助けているわけじゃないの！AIにプログラムグされてるから仕方なく、ではあるけどやらなくていいのならはつきり言えば私はやりたくない！それともあなたは私がイラつくのを楽しんでるの!？」

「自分がせつかく助けた命がまたアホみたいなことをして窮地に陥るといふのならやりたくない、ということだな。成程、たしかにオレ様もそうなることが目に見えているのならそうしたくない。というよりもそういうことは今までにも何度かあった。通りがかった先でロクでなしに追いつめられて殺されそうになつていたところを助けたら、『あなたの為にこの命を使いたい』とかも何度とも言われて、最後にはオレ様を庇って無茶して死んでいった奴を見てきた」

命知らずで無茶をする、それを今まで指摘されたのはローガンにもあった。グリフィンに来る前もその後も。なんなら二時間ほど前にAR15に体罰と一緒に怒られたぐらいいだ。

ついローガンは横目でAR15を見てしまったが、彼女も自分の方に視線を移していたらしくすぐさまグローザ達の方に戻る。心当たりなどは幾らでもあるというのはお互いさまという事だった。

「だったら言わなくてもわかるよね？どんな立場にいても命を捨てるような行動をおいそれとするものではないって！」

「ああ、たしかにそうだ。そうだけどよお嬢さん、あんたでも今まで誰かの為に『自分』を張ったことはあったら？」

水面に水滴が落ちたことにより波紋が広がっていくようにして一瞬ローガンは内で荒ぶり始めようとしていた胸の痛みが止まった。グローザが話していることがバーンズだけでなく、自分にまで指しているようなことだったので困窮していた感情が嘘のようになり、周りで聞こえて居る筈の音が遠のく。そして続く会話だけがはつきりと聞こえてきた。

「何を言ってる……」

「話を逸らし、嘘を言ってる、逃げんなよお嬢さん。あんたの持つ実力は長い人生を経て得

た物だ、ひよつとしたらオレ様よりも長く生きてるかもしれないがな。そんなあんたが内側に譲れないものが一つか二つ、あつたりしなかつたら手に入れれる筈がねえ。あんたの事はよく知らねえが、現在いまにしても過去むかしであつたも一人か二人はいたんじやねえのか」

「私には……私にはそんな人なんて……!」

「逃げるなど言つただろうが。他人だけじゃなくて自分にまでごまかしがきくと思つたら大間違いだぞ、自己暗示にも限界があるしな」

力が緩んできた手をそつと振りほどいたバーンズが自分達の先頭の方へと歩いていく。足取りは割と軽やかであり、表情も重苦しい負の感情を浮かべているわけではない。この場にいる者の中で一番顔を合わせているローガンも見たことがない、口元を僅かに綻ばせている顔だった。

「誰にだつて戦う原動力というのはある。使命感、復讐だとか第三者からすればそんな当たり障りのないようなつまらなく感じる物が。だけどそれを抱いている当人からすれば簡単に捨て去ることはできない大切な一部だろうさ。その中で一番強くなれる、してくれる手伝いをしてくれるのは『大切な誰か』だ。すごくクサイことなのかもしれないが、結局は気持ちの抛り所に来る者がいる奴が強い。親愛、友愛なりなんだつていい、そう良い感情を預けれる奴が持てる奴がこの世で一番強くなれる資格を得れ

る」

足元に転がっている死体を掻き分け、バーンズは怨霊達が所持しているのとは別の銃を手に持ち弾倉を確認。そして各所のメンテナンズをしてから立ち上がった。

「お嬢さん、あんたにも居ただろう『大切な誰か』が。だけど生憎オレ様はそこまで踏み込む役割には就けられない、てめえらグリフィンからすれば余所者だしな。だからそういったのは……」

バーンズの視線がグローザからローガンの方に移る。その目には明確で強い意思がありはするが、どこか申し訳ないような思いも感じさせるそれが。

「てめえに任せただぞ、『狼王ロボ』。てめえらの為に、オレ様がここは預かってやるよ」

そう言い残したバーンズはもう近くに近くにあるところまで来ていた非常階段の扉を蹴破り、上空に銃を撃つてから走り出す。そして手摺に手をかけて飛び越えたところでこちらからは見えなくなった。

消えたその背中を見ていることしか出来なかったローガンは深呼吸すると、グローザの肩に手をゆつくりと置いた。彼女に言うべきことは、そうしたことではない。共に戦って切り抜く、肩を並べる相手に今言うべきことはたった一つだけ。

「行くぞ、グローザ。まだなにも終わっちゃいないぞ」

こちらに振り返ることはなかったが、やや俯き加減でありながらも僅かに頷いて見せ

た。

星空の下へと皆と一緒にローガンは走った、成すべきことを成すために。

—— M16、たしかにお前の言つてた通りだと思ふ。結局は誰にだつて限界というのはあつて、全ての悩みの種の面倒を見られる訳ないんだつて。知る人全員のことをえながらも自分の事を疎かにしてない奴なんてこの世にいないだろうし。きつと長生きできる性分じゃないとは思ふ、なにせ複雑な思いを抱いてはいても見捨てれないとかのそんな理由で敵地に忍び込んだんだし。きつといつかどこかで人知れず死ぬんだろうな。だけどき、誰かを切り捨ててまで自分の為に生きようとする事なんて、俺にはできないよ——

34. このままじゃ終わらない —Open the

way—

〈19:47〉

囿として別れたバーンズの言う通りに東側に歩いてもう二十分になり、坂道を上つたり下つたりとして足を取られそうになつてもなんとか転ばずに済ませたりとしていたのが限界になつてきていた。それでも進み続けていると目的と思わしき場所を見つけたので、罨の有無を確認しつつゆっくりとエントリーする。中は暗かったので暗視モードのゴーグルを使用し、敵影も無いのを確定させてから備え付けられている電灯を点けた。

点けたことにより、そこに何が置かれていたのかを明確に認識できたので全員で驚愕する。

「こいつはまあ、よくここに置くだけの余裕があつたもんだな……」

「そういえばここ一帯に攻撃ヘリが見受けられたとかの報告があつたのに昼間では見かけなかったわね。一機を失敬したのがバレたらタダでは済まなかつた筈なのによく

やったものね」

「結果的に俺達が役立てれそうだしこれに関しては問題ないだろ。さてさて、動かせるかどうかの確認をしないとだな……」

辿り着いたのは倉庫と車庫が一体となっている寂れた建物。多くがトタンでできているその中には軍用のSUV、先日のカーチェイスでバーンズ達が使用していたのと同型のように一目見た時は思ったが、後部が吹き抜けのようになっていたりするので全く違うタイプのものだ。

そして外には手作り感が満載の断熱シートで包み込まれている攻撃ヘリ『AH-64』こと『ハインド』が数機あった。シートを剥がした時には通常通り、有人による操作かと思ったのだがコックピットの操縦席がなかったりと奇怪であったので詳しい解析をROに任せた。

とりあえずSUVの状態を確かめるべく、ローガンはボンネットを開けてエンジンの状態を確認。この間のパトロール前に基地で車両の点検したりもしたが、その時はまだそこまで車の知識にそこまで明るくはなかった。

「動かせそうなの、この車両。元は傭兵達が乗っていたのだからちよつと心配なんだけど……」

「まだなんとも言えないけど一応ガソリンの有無も確認しておこう。それさえもよけれ

ば動かせると思う」

ARR15が手伝ってくれながら近くで心配そうにしていたが、配線云々や部品の配置などまで突っ込まれたりしない限りは大丈夫そうだった。専門的などころまでを聞かれたらわからないが、ブレーキオイルの残量や各所の摩耗具合を見ても余裕があったのでそう判断したのである。

「ガソリンもよしつと……。ARR15、キーをまわしてみてくれ」
「わかったわ」

ARR15から応答が返ってから一間空け、エンジンがかけられる。

ブロロロロロロロロロロロ！と始動したエンジンの具合も確かめ、音にも何かしら不安な要素が混ざっていないかも注意してみる。覚えている限りのことをすべて一通り調べ終わったローガンはエンジンを切るように言いながらボンネットのカバーを下ろした。

「大丈夫そうだな。とりあえずこいつを使って奴らのリーダーを追跡することはできそうだ」

『足』を手に入れたのは何よりね。でもどうするのローガン、状況によってはステルスで無力化はできなくてもいいかもしれないけど……」

「いや、もうステルスでやることを前提にしない方がいいだろう。ここまでの戦闘でわ

かったが、最終的には先回りされてしまつてゐる。それだけの要因を奴らに与えてしまつてるといふのがあるが、隠密に排除できたとしても袋叩きにされてしまうことが目に見えていすぎだ。だつたらもう目標に照準を絞つた特化型の強襲でいくのが手だよ」

成功し生還できる可能性がある手段はそれだけだろう。怨霊達の戦闘力は高く侮れないので装備を整える以外の段取りも無いのでは確実に敗北を期することになる。ただし、それは裏を返せば有効な手段を分析し用意しておけば優位に立てることを意味していることにもなる。

「もし時間に余裕があることがわかつてゐるのなら俺がまた奴らに変装して内部分裂を起こすことも考えられたけどな。けど外にあるヘリが使えるのならまだ他にもやりようがある」

「ちなみに聞くけど、ヘリの操作の仕方の訓練を受けたことは？」

「はっはっは、あるわけねえだろ」

「ダメじゃないそれじゃ」

「だよな。だけど一見して普通のヘリとは違つてたんだ。ROの解析がもしいいものであるのなら……」

そうして話していると、扉が開きM4とROが入ってくる。二人の顔は光明を得たとばかりに晴々としておりこちらに歩いて来て報告した。

「いいニュースですよ、二人とも。あのヘリは無人機、つまりドローンとして機能させることが出来ます！」

「ドローンとしてつてことはやれる範囲が広がるな。となればあれの操作をするのはROになるが行けそうか？」

「ええ、なんとか。兵装も完備されていますし機器に問題も見当たりませんでしたから、本体の私自身をちゃんと防衛してくださいるのであれば心置きなく仕事できますよ」

「ならどうするよM4。AR15には言ったが、下手にコソコソするよりももう強襲してしまうのが一番だと俺は思う。出来れば偵察して明確な弱点を割り出したいが、ローター音で遠くからでもばれてしまうのがオチだろうし」

「私も大体同意見です。ですけど、ローガンさんの弾薬が心許ありませんし、狙撃銃で援護に回っていただけますか。ヘリの音で銃声も大分掻き消せると思いますし、近くにスポットターとしてグローザを待機させれば接近されても少しは対処できると思います。ただ、ROは動けないので共にいてください」

ローガンが戦闘で主力としているのはPDWの『ハニーバジャー』だが、現時点で使える弾倉は今装填している一本だけになってしまっている。今朝から現地に残っているのはローガンだけでなくグローザもそうなのだが、ペチエネグがやられた時から使いつづけて長期戦に結果的になってしまっている。なのでサイドアームとして併用してい

る『P226』と共に弾薬が誰よりも少ないのは必然的だった。

それであれば貸し出されている『レミントンM700』の残り弾数は合計で七発。一発も外さずにワンショットワンキルで仕留めることが出来た場合は七人屠れるという事である。

現状から見てもう弾薬枯渇していると見ても過言じゃなくなってきたので、M4の提案は筋が通っている。

まだ余裕のあるAR小隊の二人が前線に行き、彼女二人を同じく弾薬がほとんどないグローザと一緒にバックアップすること。無難ともいえるその判断にローガンは反感を覚えず素直に言った。

「了解、きちんとROもこっちで見えておくよ」

「お願いしますねローガンさん。全員で生きて帰るのが第一なんですから」

「その辺の認識は俺だって同じさ、心配するな」

渦巻いているだろう心配な気持ちを紛らわせる為にM4の頭を少々乱暴に撫でまわした後で、ローガンは『レミントンM700』に限界まで弾薬が込められていることを確認してから車内に置いておく。それから車内に予め置かれている『物品』も使えることを確認した。

「ROがいいなら何時でも行けるぞ、準備が整ったら言ってくれ。俺はグローザを呼ん

でくる」

「あなたは休んでなさい、私が行ってくるわよ。朝から作戦行動に入っていて戦術人形わたしたちよりも疲労への耐性が無いんだから少しでも休憩を取った方が良いわ」

「あゝ……いいのかわAR15。その……」

ローガンでも気がかりとして引つ掛かっているのは、ダムへの突入前の剣呑な雰囲気であつた二人の会話である。

そのことを知らないM4とROにはあまり知られないようにする為にも言葉探しで言い淀んでいると、AR15はひらひらと手を振りながら彼女達が一つしかない出入り口の方へと歩いていった。

「大丈夫、心配無用よローガン。言い方はちよつとキツイけど彼女の言ってることは間違つてはいない、あくまで物事の一つの見方よ。それを踏まえて平静でいれば問題ないわ」

「……まあ気を付けろよ。あいつも色々と酷い目にあつて参っているわけだから、そこだけは絶対に忘れないでやってくれ」

わかっているとばかりにAR15が振り向かずに再度手を振り、ドアノブを捻つて満月が闇夜を照らしている外へと消える。その背中を見送つたローガンはまだ少々心配ではあつたが、追いかけるような真似をすれば彼女自身のプライドを傷つけることにな

りそうだったので車両から下りることはできなかった。

やれやれ、とローガンは車両の荷台にスカルマスクを外しながら腰掛けて一息をついていると、ROと簡易的な打ち合わせが終わったらしいM4がこちらに来た。

「隣、座つても良いですか？」

「ああもちろん。全然構わないぞ」

失礼します、とM4は適度に距離を空けてローガンの隣に腰掛ける。彼女は彼女であることがあるようで、自分の銃の簡易メンテナンスを行い始めた。

M4が主力武器としている『M4A1』にとつてもローガンにも馴染みがある。今となつては苦々しい過去としての象徴になってきているのでとある場所に置いてきたが、アタッチメントだけでなくバレルなども独自にカスタムしたあれを何時でも思い出せる武器だ。毎日のように手にしていたのだから、どこにどのような傷があつたのかもありと目にも浮かんでくる。

作業しているAR小隊の隊長が悪いわけではないのだが、精神的にも疲弊してるのもあつて余計に悔恨による感傷に浸りそうになった。

「ローガンさん、AR15のことですけど……」

やや俯きながら湧き上がってきた感情に葛藤しているローガンの耳にM4からの声が入る。その時に自分が感情の泥沼に沈みそうになつていたことに気づき、取り直

しながら顔を上げて横にいる彼女のほうを見た。

「戦場での仲間としてでなく、プライベートの友達としてでもお願いしますね。普段はあんなですけど、誰もいないところでは人知れず本音を漏らしている、そんな人形ですから」

「よろしくしてもらっているのはむしろ俺の方だ。執務室で偶にS O P I I とバカ騒ぎしたりしている時に怒っている時に言う口上は素なんじゃないのか？」

苦笑したM4は銃のレシーバーを直し、見慣れているいつもの形状に戻す。置いていた弾倉を装填しなおして安全装置をかけると近くに立てかけた。自分の方にまっすぐ向けてくるその瞳に映っているのは自分なのだろうが、彼女自身が抱いている思いが何かを見透かすことなど心理学者でない限りは出来やしない。ただ、ローガンも付き合っている人物として推測はできる。A R I 5 と一番仲が良いことが見受けられるのはローガンからしても彼女であるのだから、友情からなる友好的な感情だろう。

「あれも彼女の本音でしょうけども、A R 小隊とは別の他人と話す時はあそこまで素直に口にしないんですよ、指揮官でもそうです。ローガンさんにもS O P I I のようにも接しているということは良い意味で遠慮がないという事なんですよ」

「ん〜……：そうなのか？正直なところ、単に45となんかしらかで張り合ったりしてからの間に立たされているだけなような気がするんだけども」

虎と龍の戦い、その初戦の事を思い出すと背筋から駆け巡るような悪寒が蘇ってくるが、あれはあれで互いに殺意はなく意地による争いだっただろうとローガンは思う。グリフィンに属する戦術人形という建前があるので模擬戦などでなくては手出しはできない。しかし万が一のことも考えて、互いにとつてのストッパーとしての役割を勝手に押しつけられているだけだと考えていた。

「うーん、そう考えてしまうのは一体なんぞなのかな〜……」

本当に困ったように苦笑しているM4に首を傾げ、ローガンは防弾ベストの外付けポケットから水筒を取り出し中に入っている水を飲んだ。喉を潤し元の位置に戻していると、M4はローガンがしている蒼天の腕章にそつと触れてくる。

「これのデザインと一緒に発注を依頼することを言い出したの、AR15だったんですよ。グリフィンこちらに残ることを言ったださったのを知った翌日、AR小隊全員で午前の時間を丸々使つて考察していたんです」

「でもまあ、ちよつと横から『おまけ』が付けられてしまったな。グリフィンと『シャドー隊』、それにお前達AR小隊の部隊章が付けられているだけじゃなかったもんな」

「届いた時はどれがローガンさんの部隊のか少々わかりにくいんじゃないかと思つたのですが、それぞれに大ききのメリハリがあるのでこうして見てみるとわかりますね」

「幸いなことにな。俺としては腕章なんてのが別になくても良いんだが、これはこれで

「いや」

その場で座りながら垂直に両手を組んで背伸びをし、生まれた反動を利用して立ち上がる。手首足首をぐるぐると回したりしてストレッチを始めるローガンにM4は改めて微笑んだ。体を解しながら彼女の方に向けて同じようにして笑いかけて見せると一番最初の頼みに応えた。

「俺でよければあいつと仲良くするさ、心配するな。誰にも本音を打ち明けられないってのはそれはそれで辛いしな」

「お願いしますね、『親友』の席は譲れませんけど」

「そこまでお株を取るつもりもないさM4。せいぜい『お友達』ってやつが限界だろうさ」

ローガンがまた腕や脚までも解しつつ体の向きを変えようとしているとなにかしらかをまたM4は呟いていたのだが、緊迫した状況下から離れていることからもうそのままに注意を割けていなかった。身体の隅々までストレッチを終えてから再びスカルマスクで顔半分を覆っていると、扉が開いてAR15とグローザが駆け込んで来た。

「奴らが来たわよ、まだ距離はあるけど時機に見つかる。先手を打たれるその前に早めここから出発したほうがいいわ」

それを聞いて全員でもう一度準備に取り掛かる。ローガンは自分の銃器が積まれて

いるかを確認していたが、一つ気になったのでこの場にいる自分を除いた全員に尋ねた。

「なあ、ROは別としてこいつを運転するのは誰がやるんだ？」

「あなたがやるんじゃないの？」

自分の銃を持ちつつ後部から乗り込んでいくARR15がさも当然とばかりにそう言い残していく。それに一瞬目が点になったローガンが全員を見渡してみると、残るAR小隊の人形達は笑顔で『どうぞどうぞ』としており、グローザは興味なしという感じでARR15に続いて車両に乗り込んだ。ただしその琥珀色の目は『あなたがやったから？』と語っており、最後の逃げ道が閉ざされたことでこの時になってようやく知った。最初から口に出していなかったが、誰もこの車両を運転するつもりはなかったのだということ。

「それじゃ頑張つて頂戴、クレイジードライバー^馬さん。同サイズの車で民間人や一般車両が通っている保護区を駆け巡つたんだもの、これぐらい朝飯前でしょ？」

「……ちくしょうめ、こんなところでやり返されるとは思わなかった」

「ちゃんと私言つたでしょ？覚えてなさいよ、つて」

「でもその時は解決し終わつたらつて話だつたらろ？」

せめてもの口答え、ということローガンがそう揚げ足を取つてやるとARR15に笑

顔で頭を叩はたかれた。

〈20:00〉

残忍な怨霊達でもそのままでは全速力で走る車輛に追いつけるということはさすがになく、あと十数メートルという地点から外に飛び出したこちらに銃撃をお見舞いしようとしているだけですぐに振り切れた。ただ、今ここで発見されたということは、これから行く先で警戒態勢を敷かれているに違いない。

ガタガタタン！と舗装されていない地面の凹凸に合わせて車体が揺れる度に、助手席

に座ってるA R 15が様々な意味を含めた眼差しをこちらに向けてくるのでたまったものじゃない。申し訳程度に整えられている所を走行しても揺れる時は揺れる、大小に違いはあれど完全に避けることはできない。だというのに不満そうな意思を第一にしてこちらを言葉はないまま威圧してくるのだから嫌な汗が止まらなかつた。

「ステータスはオールグリーン、ドローンとのリンクに問題ないわ。ただ戦闘になつたらどうなるかわからないけど」

「今のうちに遠隔操作に慣れておいてR O。その時になつたらあなだが一番の頼りよ。ひよつとしたら戦況が向かい風を浴びることになつたとしても巻き返せるのはあなた次第なのだから」

M 4の言う通り、物資のみならず戦力差でも大きすぎるので戦況を好転させる起点になるのはR Oが遠隔操作する『ハインド』以外に他ならない。

現状で問題をあげていくのだとすると細かいのを省けば二つだけある。偵察をしていないことから敵勢力がどれだけのものか分からないことが一つ、もう一つはR Oが操作している『ハインド』ドローンの操作系統である。

彼女曰く、遠隔操作をしている感覚としては『視点はドローンに搭載されているカメラによるものだが、動かしている時の手足までもがヘリそのものにはなっていない感じ』らしい。基地内でコアなゲーマーとしてR F Bが知られている彼女の言葉を借りる

のであれば『FPSゲームでヘリを操縦させられている』ということだった。

それであれば言うまでもなく、RO自身が操作する『ハインド』ドローンは一機が限界であり、残りの機体は鉄でできている紙飛行機でしかない。幸いなことに操作するのが電子戦に特化した戦術人形ということもあり、操作系統として追従させている。それによりROが操作しているドローンに付いてくる形で他の機体もついて来ているということだ。ただし、ROのような人形だからできることであるが完璧とはいかず攻撃開始したところで特に何もしない、あくまで金魚の糞のようについて来ているだけなのだ。なので見た目だけの効果しか生まず、無理矢理リンクさせていることもあつてROへの負担も半端ではないのだった。

そのかわり撃墜されるか、もしくは兵装が無くなった場合は機体を切り替えて戦闘を続行するという手段も取れる。それまでは空を飛ぶハリボテではあるが。

「ローガンさん、進行方向はそのまま北へ！最後に聞き出せた情報によると、敵リーダーは敢えてジャミング装置と同じ地点にいるそうです！」

「となれば奴らが罠を張っているのは明らかだな！どうするM4、さつき話した通りで行くか!？」

「現時点で考えられる最適な戦術は他に考え付きません！これでいくしか……！」

「こちらの手口を一から十まで知られているということはないだろうが、どこかで糸口

を掴んで追い込んでくる筈だ。何よりもダムの方で『ハボツク』の存在が確認された以上、これから向かい先でも軍用兵器が用意されていると見込むべきだ。

それも考えてみると、ROだけに負担がありすぎだ。敵兵器の無力化を第一に行うのだとしても、付け焼刃で操作している彼女一人には荷が重すぎる。

別の手口を考えるべきだろうか、とローガンが考え始めた時だった。走行している右側から自分達が乗っている車両とは別のエンジン音が聞こえてきたのである。

「視認したわ、右から一輛接近！」

AR15の報告により運転しながらそちらに目を向けてみると、ライトを点灯した軍用車両がこちらに向かってきた。悪路である坂道かスピードを落とさずにこちらに付いてくる。

ROを除く皆が戦闘態勢に移行すると、その車輛から精一杯張り上げた声が聞こえてきた。

「援軍として来ましたよ皆さん、助けに来ました！」

「スオミ？スオミなの!？」

「事情は把握できてます、情報共有の為に一度停まっていただけですか!？」

グローザが驚きの声をあげるののでルームミラーで後方の車輛を見ると、たしかにそこには助手席から手を振るスオミが映っていた。彼女の言う通りローガンはブレーキを

踏みギアを切り替えてからサイドブレーキを掛ける。そして援軍としてきてくれた彼女達の方を見た。

スオミは笑顔を浮かべながらグローザと話を始め、M4と共に情報共有を始めている。同じ小隊メンバーである彼女達が無事であることに少しだけ涙を浮かべながら駆けたSOPPIIがROに抱き付き、目に見えない負担が掛けられている彼女の為にAR15が剥がしにかかった。それらに頬を緩めていると、運転席に座ったままにいるこちらの方にまで歩いてきた少女達が三人。

「傷だらけだけど無事で何よりだよローガン。なんだか私達が会う時って毎回こんな感じな気がするけど」

「こうして話ができるのは命あつてだ。わりと状況的に詰みに限りなく近かったからお前達が来てくれて助かったよ」

「こつちに来るまでも私達にも色々とあつただけだね。それはまた今度話すわ、G11の活躍もね」

「G11が？」

404小隊の隊長、UMP45の隣に立っているG11をローガンは視線を移してみると、件の彼女は普段の一倍以上に気合が入っているように見えた。

やる気に満ち溢れているG11という珍しいものを見てから隊長の方に戻すと、肩を

竦めて苦笑いを浮かべている。

「なんともまあ……誰か飴をあげたのか？」

「まさか、404はなにもあげてないわよ。自発的に行動していたから驚いたわよ」

「皆そう言うけどアタシ自身は何も変わってないよローガン。前の不始末を挽回する、それだけなんだから」

それを言われたローガンも45と同じく苦笑したが、内心で感じている苦々しさはそれ以上である。

再会したあの日、イントウルルーダーとの戦闘でG11は途中から援護射撃ができなくなり、また動けるようになるのはもう全てが終わった後だった。謝罪を受けたものの、G11がそこまで責任を感じなくていいことだとはローガンは思うのだが、妙に引き摺り続けて今日である。

ローガンも基地内で顔を合わすたびに大丈夫だと言っていたのだが、それでも暗い表情が晴れないG11を見たのが昨晩の夕餉の後。一日経って転身したようなその変わりように驚いている気持ちはあるのだが、やはり普段とは違う、『らしくないこと』をしているのだから逆にこちらが申し訳ない気分にもなってきた。

「何度も言うけどなG11、あの状況下じゃ俺一人で注意を逸らし続けるなんてさすがに無理だったんだよ。それに無力化されても結局はお互いに生き残ったじゃねえか」

「なら何回でも言い返させてもらうよローガン。アタシは戦術人形なんだから戦うのは当たり前なんだし、人類を助ける為に造られた。助けるのは民間人だけじゃなく兵士であるローガンもだよ。404を以前に助けてくれた恩を返すどころか借りにさらに積み重ねてしまったんだし、アタシもいつも以上に頑張らないとなんだよ」

「参ったな……」

「まあいいじゃないかよマスター。性格はともかく、G11は戦術人形として優秀だ。やる気になってくれるのなら心強い味方として希望マシマシだろ」

「それはそうだが、いつからお前は俺の事をマスター呼びになったんだよ」

「今からだが不満か？」

「勘弁してくれ」

援軍の最後の一人であるバルソクがニヒルな笑みを浮かべてくるのにローガンは溜息をついた。

とはいえ、ここで彼女達が来てくれたのはありがたいことこの上ない。人手が増えたことで自分達五人だけではできない、幅広く展開して攻略に臨むことができるようになったのだから。

彼女達と話していると後方、M4とスオミから全員に集合するように声が掛けられたのでローガンは運転席から出た。先を歩くG11とバルソクの後に背中を追うように

して歩いていくと、背中に勢いよくぶつかってこられた。言うまでもなく、45による衝撃だ。

少々前のめりにぐらつくぐらいで倒れそうになることはなかったが、当の本人はローガンの背に引つ付いたままで特に他のアクションを起こしてこない。

「……ごめんローガン。ちよつとだけ、こうしていさせて」

背中越しに聞こえてくる45の声、それに安堵以外にどのような感情が含まれているのかローガンにはわからなかった。ただ嘘偽りのない、45自身が心から思うことを言ってくれているのだけはわかる。

今日だけで何度したか分からない溜息ではあるが、どれよりもまだ悪くないそれを静かに外へと吐き出した。

「……ちよつとだけだぞ」

「うん」

そこまで距離が離れていないので聞こえるということ、皆に話を始めるように頼む。現地においてのブリーフィングが行われる中、彼女達の中にいる一人がこちらに複雑な思いを乗せて視線を度々向けていたが、今回ばかりはローガンも必死に我慢していた。なにせ、これまで戦ってきて誰かにこうもわかりやすく心配されることなどなかったのだから。

〈20:27〉

グローザと徒歩で移動して十分程度で明かりが見えて方向が間違っていないなかったことを知れるのはいいが、それを僅かに反射して地面に展開されている罠が見つかった。行く手を遮るように感知式の罠として仕掛けられているワイヤートラップの合間に足を下ろして慎重に乗り越える。踏むか足首が触れるかしても敵方に警報が鳴ってこちらの存在が知られてしまうので、ここで躓くと自衛をするのに精一杯な役立たずになっ

てしまう。

集中力を途切れることなく突破すると木々を爆薬で吹き飛ばして確保したと思われる即席の広場。環境破壊を著しく象徴するように木々の断面がチェーンソーなどで水平に切られたような形状でなく、歪になっているのでそれだけはすぐにわかる。

環境の保護に行動と理念の重鎮を置いているわけではないが、こうもされているとさすがに沸々と怒りが湧いてくる。近年『グリフィン』は鉄血との戦闘にかまけて『云々、様々な問題の原因として社会にこじつけられているのだからここで変な種を捲くような余計なことをされているのだから尚更。

眉間に皺を寄せながらもローガンは近くにグローザがいることを確認すると、彼女も容認できない物を見たかのように表情を歪ませていた。

「各員へ、こっちは目標地点に到達した。ステルスは終了、派手に行こう」
『了解』

周辺に敵影が無いことを確かめ、無線を起動してから対象地点に概ね到着したことを報告し、両手で『レミントンM700』を持ちながら低頭姿勢で移動する。やがて今いる位置の上空からローター音が自分とグローザを追い越し、聴覚で前方に飛行していくことを、木々が途切れていたことで二つの発信源が視覚に映った。二人の戦術人形に操作されている二つの機影は見えているその攻撃を開始。

ドドドドドンツ!!と発射されたロケットランチャーが着弾地点を焼き払って吹き飛ばす。

夜空に映える爆炎が立ち上るそこを見下ろし、渡された望遠鏡を持って俯瞰するグローザに続いてローガンは崖になっているそこで匍匐姿勢になり、手に持っているライフルを構えた。

『各員へ通達。先制攻撃は成功しましたが、やはり目標周辺では敵部隊が臨戦態勢に移行していたみたいですのですぐに応戦してきました』

『手筈通りに空の敵は私とROで引き受ける。たまに地上に支援攻撃はするけどあまり期待しないで』

『了解、これから攻撃を開始します。シャドー、援護をお願いします』

コールサインを混ぜた要請に伝えることを示す為、まず最初に今しがた西から車輛で突入したM4達の方にいる怨霊を息を止めて一人排除。すぐに用済みの葉莖を排出し、M16がないA R小隊と交戦しようとする敵兵をもう一名を狙って撃つ。第二射はミス、明かりによって輪郭が見えている怨霊の頭部を掠めただけだった。

「落ち着いて狙いなさい、焦らずに確実に。A R小隊もそう簡単にやられはしないんだから」

かつて訓練を受けていたことで扱えてはいるが、ローガンは狙撃兵^{スナイパー}ではない。経験で

得た偵察兵としてのスキルを活かしアサルトライフルやサブマシンガンを実戦で扱うことが殆どであるので、スナイパーライフルの方は時折でしかなかった。怠惰や緊張で避けていたわけではないのだが、巡り合わせとして触れて撃つ機会があまりなかっただけである。

その謂れないツケを払うことになることに内心で舌打ちし、ローガンはボルトを引いてもう一度発射体勢に移行する。

もう一度同じ敵をスコープで見える視界に収めて中心に頭部を捉えると、息を大きく吸いこんで止める。そして右手の人差し指で引き金を絞った。

三射目はクリティカルヒット、狙った通りに弾丸が飛んだらしく血肉の華を咲かせてそこに倒れたのが確認できた。

「グローザ、次は？」

「ちよつと待つて……スオミ、敵部隊のリーダーを逃がすという情報を奪取したわ。そつちは今どこなの？」

『詳しくは言えませんが、そちらの右方のどこかですよ』

「冗談を言ってる暇じゃないけど、仕方ないわね。シャドー、スオミ達を探して」

弾も少ないので下手に発砲することはできないが、せめて位置の把握だけはしておくべきだ。

今はグローザが持っているがROが奪取した無線機により、敵の出入方を把握できる手段を手に入れたので動きやすくなるとは思うだろう。だがこちらが無線を用いて情報共有しようとしても敵方にも傍受されているのでこちらだけで情報を専有できない。それでも情報伝達に不便があるのはお互い様。怨霊達はリアルタイムでこちらの無線情報を受け取れているネットワークを確率しているだろうが、ならばそれを逆手に取った戦法を取ることで逆襲を考えた。

『特別な戦法らしい戦法はないまま、それぞれが強襲する』という手段、つまり役割を得た各々が目的を果たすために自由戦闘を行うという事である。

「見つけたぞ、スオミ。そこから十一時の方に修正……いや行きすぎだ……いいぞ、その方向を維持しろ。そうすればグローザの言う方に行き着ける」

『了解、ありがとうございます』

「こちらは援護要請が来るまで一旦周辺警戒などに移って待機。情報は入手次第おつて伝達する」

無線をそのままにしたローガンは傍に置いていたらペリング用のアンカーを地面に打ち込み、そこにフックを掛けておいて万が一の時の備えをしておく。自分達に対して用意されていたわけではない『物品』ではあったが有効活用をしない手はないとしてここまで持ち出したそれをセットしてから戦況を俯瞰する。

R O だけでなく合流してから申し出てくれた45による攻撃で敵方もすぐには体勢を整えるまでには至っておらず、怨霊達それぞれがバラバラに戦闘態勢に移行している。しかし一人で会敵しても固く結束しているA R 小隊とスオミの即応部隊に歯が立つことなく敗れているのがありありとわかる。空の方も意外にもR O と45が善戦出来ており、地上への支援攻撃が可能なほどの余裕がなくとも相手にもそれを生ませていない。

ロケツトランチャー^Rを持つなりして二人を狙う敵兵がいるかどうかだけでも目を配らせていたが、ローガンとしてはそれと同じだけの気に置くことがすぐ傍にあることを思い出して口を開いた。

「それでグローザ。お前は今まで何を経験してきた？」

ジロリと彼女に向けられる視線。ローガンは重要標的の索敵の為に視線はそのまま戦場を見ているのだが、そちらの方は見なくても肌で感じられるだけの負のオーラがあった。

「お前にもお前なりに考えてることがあるだろうから別に無理に話してもらおうとは思っていない。けどどこっちにも知っておきたいことはある。お前が俺の事を断片的に知っているように、俺も人伝に聞かせてもらったが他人から聞いたそれだけが全てじゃないからな」

「それじゃ私が逆に聞かせてもらおうこともできるかしら？ 私自身も噂に流されていたから本人から確たる話を聞いたわけじゃないんだし」

「もちろん。だけど事細かく話すんだとしたら時間が今は足りない。だからお前の事を素直に聞かせてもらいたいんだよ。口約を交わした訳じゃないが、バーンズから垂らされた糸がある。それに関連した共通項が互いにあるだけじゃなく、それにお前の意識が無い間に言っていたことも気になるんだよ」

戦いたくない、そのワードを聞いただけでローガンは少々疑問に思っていた。

グリフィンの戦術人形は定期メンテナンスということで年に数回の各部位の点検が入る。そこにはメンタルモデルのチェックもあるので、異常があればすぐに専門的なメンテナンスチームに回されているのである。

ローガンが聞いた話によれば、メンタルケアを施して効果が見込めなかった場合はリセットされて出荷される当時と同じ状態にされるらしい。そうされる明確な限界点はわからないが、そうなる重要な要因としては『戦意喪失』がまず思い当たる。戦術人形は本来人間の代わりに戦う為に造られた存在なので、それを失っては存在意義を見失うのに等しいからだ。

グローザがその喪失を口ずさむほどのダメージを受けていることは無意識であった彼女自身が実証した。であればそれを見逃すことはグリフィンにない筈である。

「どこにでもいる人形と同じような経験、では済まないわよね。頭が変に回るあなたのことだから」

「付き従っていた指揮官を喪うつつうのがどこにでもある話であればだ。現にこの支部の前指揮官も戦死という形で亡くなってるし。でもそうホイホイとある話じゃないだろ」

「そこまでは知っているのね。だけどあなたが組織を渡り歩いて放浪してただけで知らなかっただけ、という風には考えないの？」

「自分の事だから考えもしたがそれだけで物事の正否を決めれない。お前が現在進行形で何を考えているかの推測が出来ても本当にそうなのかもわからないしな」

先程発砲した分だけの弾込めを終えてボルトを戻し、ローガンはグローザを今度は見た。視線が重なり合って先に目を逸らしたのは彼女の方。観念したようにしながら言葉を紡ぐのにローガンは耳を傾ける。

「たしかに私は極東ロシアで鉄血から同じ祖国から生まれた仲間だけでなく、指揮官も守れずに亡くした。戦力が世界的に不足しているということでもメンタルリセットはパス、本部から迎えが寄越されて、そっちに移転することになったのその一カ月後よ。あの時の光景が時折フラッシュバックしていたけど、本部で待機して要請があればその支部に赴いて戦って、そして元に戻ることを繰り返した。帰るべき場所というのがわから

なくなるのに一年も時間は要らなかつたわ」

「居場所を見失ったとかじゃなくて、仕事を終えてから帰還する場所がわからなくなつた、というわけでもないようだな」

「目に見える家がわからなくなる方じゃなくて、安らぎを得られるという意味だよ。本来なら人形として必要のないゆとりを感じられるたから、私の中の電脳に深く刻み込まれたそこを無くしたのはメンタルに相当響いたわ。それこそメンタルチエックで引つかかつてしまうほどにね。診断レベルはレッド、人間と同じく心的外傷後ストレス障害^P^Tを患つてしまつてた。鬱のように寝付けなかつたのは別に構わなかつたわ、元から生活リズムは不安定なものだつたもの。でもその後には拘束具を付けられながらの療法が私にとつてなによりの苦痛だつたわ」

「二つだけ聞きたい。メンタルモデルのリセットがその時にされなかつたのはなんでだ。PTSDで戦えなくなる兵士の話は聞くが、そういうのは治療を受けて復帰するか退役のどちらかでない。だけど戦術人形であればリセットした方が時間が短縮できて戦場投入には手間もかからない。俺自身はその方が良いとは思わないが、切羽詰まつた状況下に置かれた場合はそうすべきだとは思ふ」

「私自身が指揮官^あの^人のことを忘れたくなかつたから、グリフィン本部が隠していたとある事件ファイルのネット拡散のスイッチを握つていたのよ。意図的な現メンタルモデル

の消失とリンクさせた、ハツタリだと断定出来なかつた上層部に私は条件を提示した。『この異常を削除しないのであれば拡散しない。本来の戦術人形に対してのバックアップを欠かさない場合も同じである』と」

えげつないことをするな、と慄きながらも称賛した。グリフィンも一枚岩でないことはヘリアンから説明されていたが、組織の隅々までトップにいる人物の声が届いているのかと聞かれたらそれは違うというのはローガンにもわかる。巨大な団体になれば尚更で、暗部なんていうのが生まれているのならもう届いていない人物がいておかしくない。

「それからでしょうね、私が人間嫌いになったのは。誰にでも言えることだけど、腹の奥底で考えているのがわからないのが見えるのなもの」

「だから俺との初対面でもあんなに刺々しかつたのか。訓練施設から何まで俺の事を評価し、終いには個人的な目的なんなり聞き出しては」

「それでもパトロールの初日にスオミとの会話であなたの話を聞いて信じれたのは確かだよ。長年生き続けて類には見えない変化を起こしたメンタルモデルを保有している個体だもの。彼女が話してくれることには興味を沸かせるだけでなく、信憑性も濃かつたから。あなたが二ヶ月の間に残した功績も、矛盾や疑問点を残すことないようにもしてくれてたわよ。後でお礼言いなさいよ」

「言われなくてもそうするよ。そうになるとグローザ、お前がダムで捕らわれながら苦しんでいたのは……」

ガガガガガガがガツ!!とローガンが言おうとした瞬間に無線機にノイズが走る。ローガンやグローザ、グリフィンに属する者達が付けている方ではなく、ここまでの道のりで倒した怨霊から拝借した物の方だ。大音量のそれに顔を顰めながら何事かと思いい、ローガンは傍らにいる彼女が手に持つ端末に視線を移す。

パツと見たところ異常はないように見えるそれを見えるグローザは操作するが受け付けられず発せられるノイズは収まらない。

やがて耳障りな音が無くなり、スピーカーからは男性の声が聞こえてきた。

『強制的にプライベート回線に切り替えさせてもらったが聞こえているなローガン・ブランク。そしてグローザ14』

ローガンには聞き覚えが無かったが、グローザの方はそうでないことは目に見えていた。顔は青ざめてはいるものの、目の奥に揺らめいている戦意の炎までが掻き消えているわけではなく、ロシアアルファベットと数字で表示されている画面を睨んでいる。

そしてローガンが歩むことになる怨霊にも付き纏われる戦場の旅路。その幕が本格的に上がったのは今この時からだった。

35. ただ、友の為に — Groza, Once a ga
in from here —

〈20:34〉

開口一番に尋ねられたのが無線を手持っている者の名指しによる確認。戦術人形であるグローザはまだわかる。I. O. P社が公認し出版されている自律人形のカタログには御多分に洩れず『O T s i l 4』^{グローザ14}としてはぶられることなく載せられているからだ。自律人形、それも戦闘に特化した戦術人形なのだから、敵として相手取ることを見ているのであれば尚更である。

であれば、自分の名を何故知っているとローガンは思う。ここまでの戦闘で自分は敵方に名乗った覚えはないし個人情報を開示するようなことこそした覚えがない。強いてあつたと言われても仲間の名を呼ばれたぐらいだ。

「こつちの方で聞いてきたということは俺達とは友好関係なんて到底築ける筈もない連中だよな」

『過去に暗殺稼業に身を置いていた君であれば共感できると思つていたんだが、意にそぐわなかつたかな?』

「安心しろ、きちんと分かり合える敵じゃないということが伝わった。あれだけで深く考える必要もない、明確なメツセージを残してくれてるんだからな」

『ふむ、バラバラ趣味はないのか。なら君は何の為にナイフを握つて来たのか聞かせてもらいたいな』

「目の前に立ちはだかる敵兵をどかす以外に何があるつてんだ。てめえらみたいに不必要に死体を翻る趣味は俺にはねえよサイコ野郎」

この相手とやり取りをしているだけで頭にくるものがあつた。ローガンも必要があればナイフを足に突き立てるなりして情報を聞き出そうとはするが、生きている人間を前にして死体を切り刻むことなどしたことはない。

あくまで銃やナイフは主に命を絶つのに使う物であり、殴打して気絶させたりするのは副次的な用途でしかない、それがローガンの認識だ。

したがつてこの怨霊達のやり方には賛同できない。過去に欲求を満たすために動物の死体にテーザーガンを当てたりするなどして弄ぶ事例はあつたがそれよりも酷い。ローガンが血肉をまき散らす現行を目の当たりにしたわけではないが証言した者がいる。それだけでもうローガンには寝返るなんて到底ありえない、敵対するだけの理由が

十分に揃ったと言える。

『まあいい、君にはいずれまた『招待状』を送らせてもらおうとしよう。今回の本件はグローザの方にある』

『私を無意味な尋問にかけたというのにしつこいわね。『砂漠の湖』なんて、私達が知っているわけじゃない』

『嘘であることはもうこちらとて知っているんだが置いておこうか。やはりとは思いますが、オレを覚えていないのか？』

「……は？」

この者が知人であったことにグローザが固まる。ローガンも驚きはしたが、ここで口を挟むなりして余計なことをしないようにつぐみ成り行きを見る。

琥珀色の瞳に更なる陰りが生まれたが、その持ち主は動揺を抑えながらも声を発した。

「私が知っている人間に異常な殺人癖を持つ知り合いはいないわ。指名している『グローザ14』は別個体じゃないかしら」

『いいや、君の事さ。もうすぐで二十年にもなるが、大隊規模の鉄血襲撃で基地は壊滅した極東ロシア支部、その副官を勤めていながらエースだった『グローザ14』。間違いなく君だろ』

「何故そこまで知っているの。私の横にいる人のことまで知っているのも気がかりだけど、そんな過去のことまで知っているのはもうこの世にいない筈よ」

『それはそうさ。なにせオレはまだ未熟だった君の前で死んだと認識された人間なのだから』

そこまで言われたことで思い出したのか、グローザの顔色がさらに蒼白になっていく。脇にいながら繰り広げられている戦況を見ていたローガンが再度見た時には唇がわななき、恐れが表面化してきた彼女がそこにいる。スオミと一緒にいる時でも見せたことがないその様子で彼女にとって只事ではないことが窺えた。

「まさか……超国家主義者の……!」

『ちゃんと思いついたようだな。あそこで君に声帯ごと喉をやられた苦痛を君に思い知らせてやりたいと思つたのが二十二年前だ。生き残つただけは知れたけど消息が追えなかつたけど、まさかここで再開するとは思わなかつたよ』

「何故生きているのよ……あの時に負わせたのは一目見てもわかるぐらいの致命傷で死ぬのは時間の問題だと思つていたのに!」

『オレも当時はそう思つていたさ。なにせ喉に穴が空いてまともに呼吸ができなかつたからな。息苦しきだけでなく、脳が認識できないだけの痛みと出血している感覚、今じゃあれもあれで乙なもんだよ』

無線機から聞こえてくる声とそれによって生み出される台詞にローガンは悪寒が背筋を伝って駆け巡ったのを感じた。どちらか片方だけであればまだ神経が逆撫でにされただけで済むのだが、日常会話のように話されることで忌避したいと本能が呼び掛けてくる。直感でこの後にも紡がれることがよろしくないことだということも頭に過よってきた。

『参ったね、武力と恐怖による国の統治なんて息巻いていたが、死にそうになった時は『死にたくない』って思ってしまう。それで後悔するのはここまででやれなかったことだ。だからある奴に命を拾わせてもらった時にはやりたいたいことを精一杯やろうと思つたよ。金にものを言わせて無理矢理押し通していたりもしたが離れているとどうしてもできないことがあつた。何だと思う?』

「それで遺体を甦ることに繋がつたと言うの……!?!」

『不正解、そこまで短絡的に話は進まないさ。単純な話、君への礼を含めての復讐だよ。君達でもやられたら少しはやり返したくよりはするだろう?それと同じだ、オレはオレが経験した以上の苦痛を味割つてもらおうと、ブラックマーケットで得たとある情報を裏社会にそのまま流した。真偽はどちらかおいて、もしガセでも損はしなと言つて礼金を渡してくれたのが鉄血だつたことには驚いたよ』

それで心臓が跳ねたのはローガンもだつたが、こちら以上だつたらしく声を失つたか

のようにグローザは喘いだ。続きを促すことが出来なくなった彼女に代わり、ローガンが無線機を取って口にマイクを近づける。言葉選びで少々詰まったが、ここで遠回りの言い方をしては嫌な言い返しを受けて彼女の傷を余計に抉ると思ひ、ストレートにわかりやすい言葉で言った。

「……それがグリフィンに関わる情報だつていいのか。各支部にいる指揮官を……殺すのに繋がるやつ」

『その通りだローガン・ブラック！今オレ達がいるここアメリカにイギリスやドイツに中国、そして極東ロシア！最初に目当ての支部が襲撃されて指揮官が死んだというニュースを知ったときは笑いが止まらなかったよお!!』

言われていることが正しければ、グローザがいた極東ロシアを襲撃したのは鉄血ではあるが、それを成功と至らしめるのに十分な情報を流していたのはこの男だったということになる。当時グリフィンがいかなる状況下に置かれていたかローガンは知らない。だが、あげられて五カ所の支部が襲撃されて手酷い痛手を被ったことは間違いないだろう。

それに今しがた上げられた支部の中に一つ、アメリカも出てきている。南アメリカとどちらなのかははっきりと言われなくとも、思い描く時系列でみて恐らくハリーの父親、健在だった先代指揮官がいた支部だ。

ならばもう疑う余地はない。この男はハリーにとつて、彼の父親に従っていた人形や AR 小隊や 404 小隊だけでなく、グローザにとつての仇である。

『目当てだったグローザの存亡だけがオレは気がかりだったが、発表された声明では人形の生き残りはないとされていた。だけどオレの手で殺せなかつたことだけが心残りだったよお！だからオレはその欲求の渇きを癒す為に好き勝手に人を殺して、一人一人を憎い相手に見立てて切り刻んだ！何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も』

「てめえ……!!」

『だけど虚像を重ねるだけじゃ意味がない、癒えるのは一瞬だ。単に戦場で殺すだけじゃ追い付かないとまで考え付いたオレは、世界中に散っている重罪人や異常性癖者を集めて組織をつくつた、名は知ってるかなあ?!知らねえってんなら——!!』

「そこは仲間に聞かせてもらつたよ……。背景としている赤い布地は血色を意味し、骸骨はてめえのように武器を持つ口クでなし。名は『アネクドート』、滑稽な小話を指し示したのを異常者の集まりとして置き換えた凶悪集団だつてな……!」

スオミ達と合流した際に 45 から説明された時に知つたことだが、アネクドートというのはソ連崩壊まで公開されるような話ではなかつた、不満やジョークの捌け口とされていた小話だ。語源がギリシャ語で『公にされなかつたもの』と表現されているのであ

る。『言論の自由』が憲法とされていたものの、厳しい言論統制社会であるソ連は許されないこととして秘密警察で弾圧していた。

自分達の嗜好かんがえを公に示すことが許されないなど、そのようなソ連の歴史を皮肉として置き換えたのがこの男がいる『アネクトート』。今回の敵対組織に当てはまる可能性の一つとして留めていたグローザも驚いていたが、裏社会に身を置いている経験が長い45の言う事なので彼女も苦々しげに飲み込んでいた。

だが心の準備が出来ていたしてもこれは予想以上だろう。なにせ一つの蓋を開けてみれば復讐に執着するあまり、歪んだ嗜好の持ち主がいるのだから。

「殺すツ！貴様どこにいる姿を現せ!!指揮官あの人の仇のあんたを何が何でも殺してやる!!」

『はは、はははははははははははははははははははははははははははは!!それでこそだグローザ、吠えて怒り狂え!雷雨として君の真価を解き放つて見せろ!そうなたた時の君を殺すのが、オレにとって強力な『癒し』だ!!』

「いい加減にしろこの屑が!あんたみたいな人間なんか、この世で生きてるのに値しないゴミよ!そんなに『癒し』を渴望しているなら何も感じなく済むように死ね、死んでしまいなさいよ!あんたみたいなのをなんで私は憎まないといけないのよお!!」

『楽しいからに決まつてるだろおが!!誰しもが感情を持つて生まれてくる!悦び、憤怒、悲哀、愉快が生きる上での最上のスパイスだ!人生を謳歌する上でそれらを活かさ

なくてどうする!?銃弾が飛び交う世界ばかりで知らなかった君が悪いッ!無知は罪なりだ、グローザ14ツ!それこそが君が犯した最大の罪なのだからなあ!!」

冷静を欠いたグローザが無線機を地面に叩きつけようとした素振りを見せたので、ローガンは即座にグローザに格闘術を駆使する。彼女の両脚を片脚で払って体全体を空中に浮かせ、顔を掴むと手前に僅かに引つ張って

頭を打ち付けたりしないようには配慮した。そしてこちらの行動に対処できなかつたグローザが仰向けに倒れるので、ローガンは彼女の片腕を踏みつけて押さえ左手でもう一方も動かさない様にする。全体重ではないが足の方にはある程度はかけておいて無線機に加わつてる握力を弱めさせてその手から奪つた。

地獄の使者を彷彿とさせる殺気が向けられながらもローガンは奪い取つたそれを口元に近づけ、努めて平静を装つて言った。

「口上は結構だサイコ野郎。まとめればてめえらは俺達の敵であつて、鉄血と同じぐらいにタチが悪いことというわけだ。もうこれ以上に何かを言つて飾る必要はねえ」

『……ほう、君にはグローザやオレのように復讐するといった理由がないだろう。わかりあえないのだとしても、受け入れられないとして拒否すればいいだけで、結局は無関係でいられるんだぞ』

「無関係も何も、もう命のやり取りをしているのだからもう知らんぷりは出来ねえよ。

グローザの事を抜きにしても、俺にもてめえを追うだけの理由は出来てる」

最初に思い浮かんだのは前指揮官に従って戦っていたとされている404小隊。かつてより丸くなったとされている彼女達は各々で基地内にて仕事をしたりと活動している。見かけたりすれば演習訓練で組んだりして挑み、終わったら互いに問題点を指摘するなどする。汚れ仕事をしながら放浪していた彼女達だからこそ得ている戦闘技術がある。無論そればかりに傾倒しているわけではなく、それぞれで獲得している個性だつて忘れてはならない。

そして頭に過るのは自分を家族として受け入れてくれたAR小隊。執務室として割り当てられたその夕刻に訪れてみれば、彼女達は飾り付けられたその部屋で笑顔と温かい言葉が出迎えてくれた。クラッカーによる紙吹雪に紛れて見える彼女達に自分だつて救われたのだ。『お前達の為にも戦う』、彼女達に立てた誓いを今だつて忘れてはいない。それを嘘にしない為にも、友好関係を深めつつ訓練で競つたりと様々な面で時間を共にしている。

加えてローガンには主に二人の少女達から贈り物がある。戦闘服の下にはAR15によるドックタグが、鼻から下を覆うようにしてこさえられた45手製のスカルマスクが。そして自分の左腕の上腕にはグリフィンのマークや、シャドー隊の隊章だけでなく、友好関係にある部隊を示すとしてAR小隊と404小隊のそれだつてはつきりとわ

かるようにプリントされた蒼天の腕章が。

そんな彼女達の過去にあった出来事。彼女達がかつての上司の死に苛まれたのはもうローガンにだってわかつてる。

ならば、やることはもう明らかだ。

『やる気に満ち溢れるのは結構だが、こちらにも事情というのはある。そこにはもうオレはいないことだけは踏まえておいてくれよ』

「逃げたければ逃げればいいさ。だけど必ず見つけ出して仕留めてやる。どこへ逃げて隠れようとも、てめえの背後に出てきてやって喉元に俺の牙を突き立ててやる」

その無線機を地面に置くと、ローガンはナイフを抜いて切っ先を向ける。最後にはつきりと聞こえるよう、一層声を張り上げて言った。

「忘れるなよ、『影は何処シャドにでもある』んだからな……!!」

バギンツ！と画面に刃物を突き立てられた端末は機能を停止し動作しなくなる。呆然としたグローザへの拘束力を弱めてローガンはそれをそこから戦場へと投げ放った。

〈20:41〉

手を貸してやって助け起こそうとした途端、お見舞いされたのは手加減など微塵もない拳によるフックだった。その一発だけが強烈だったからか、着けていたスカルマスクが外れてその場にハラリと落ちる。

ゴッ……！と今日一日で複数人に何度も殴られている頬に叩きこまれたが、ローガンはそれを躲すにしても防ぐ気にもなれなかった。感情を露にして思いのまま叫び、無線機を叩きつけて壊そうとしたあの時のグローザの表情がいつも見させられている幼き頃の誰かと重なったからである。受け身を取ることすらもせず、ローガンは転げまわって仰向けになった。

倒れたこちらに追撃を仕掛けて彼女は馬乗りになってさらに拳を振るつたが、片手では数えれなくなり空中に振り上げられたタイミングでピタリと動きが止まる。

さすがに戦術人形の腕力を遠慮なく振るわれたおかげで意識が朦朧としてきていて痛覚も麻痺し始めていたが、次に来る筈の衝撃が来ないことにローガンは空を見る。

「なんで……なんでなのよ……!」

両目から零れた涙が重力に従って落下し、彼女の拳に代わってローガンの頬を叩く。感覚が分からなくなっているというのに、その落下点にある神経によって熱が伝わってきた。

泣き顔のグローザは感情モジュールによる思いが投影されている行き場のない拳を力なく今度はローガンの胸を叩く。

「なんであなたが、そんなことを言えるのよ……。死にたくないのなら関わらなければいいのに……。グリフィンにいるのなら戦場ごうじょうでいるだけが全てじゃないのに……」

「……わるかったよ。お前だってお前の事情に土足で踏み入られるのが嫌だろう。頼んでもいない他人にずけずけと踏み込まれたちや腹も立つしな。だったら殴られるのも納得がいくよ」

「そうじゃない、私が言いたいのはそうじゃない……」

馬乗りになっていたグローザが横に退きはしたがまだ体を起こす気になれない。すぐ横では皆が戦っているというのに、ローガンはまだこのまま星や満月が浮かぶ夜空を眺めていたかったからだ。

すぐ横にグローザが蹲るように両脚に顔を埋めたのをなんとなく気配で感じながら、ローガンは深呼吸してから言った。

「どちらにしても、俺だって奴らに目をつけられたんだ。ほんの数回しか戦っていないというのにな。否が応でも戦わざるを得ないのだから今までのような文句は受け付けないぞ」

「わかっているわよそんなこと……あなただつて覚悟を決めているだつてことぐらい……でも私が抱えているのはそうじゃないの……」

「じゃあなんだつてんだよ……」

軽く殴られた箇所自分で触れ、身体に走る電気信号にローガンは顔を顰めながらも思いのままグローザに聞いた。顔を横向きにすれば彼女を見れるだろうが、彼女も泣き顔を誰かに見られるのは避けたいだろうからそちらを見ない。それと比較してみても無数に散りばめられている星々の魅力が強調されて見えてもきた。

「私があなただの事を知つて最初に抱いたのは他の人形と同じく懐疑心よ。でもよくよく考えてみたら、訓練されていて人間が鉄血と戦うのに並の精神では耐え続けられるわけがない。敵は味方の損壊を気にせず淡々と殺戮を繰り返す抹殺者だもの。ベテランの兵士でも『死』が溢れた惨状を何度も見させられていたら心が壊れるのに、あなたは今よりも若い時から見てきているのでしょ。タスクフォースに属しているより前から

も」

「……そうだな。時には鉄血兵がうろつく市街地を潜り抜けて行くことだってあったが、その時には必ずといっていいぐらい民間人達が惨殺されている現場を見てきたよ。肉片が浮かんだりもしていた大きな血だまりが出来ている、そんなのを何度も」

今になつても思い出す。複数人にしても単独であつたにしても鉄血兵に見つかからないようにしてやり過ごし、瓦礫などに身を隠しながら行こうとしたその物陰に死体があるのを見つけた。死後硬直が始まる直前の、ダラリと力なく倒れ、両の目は絶望により涙を浮かびながら殺された人間のそれを。それは大の男だけじゃなく、老人に女性や当時の自分とは歳がそんなに違わない子供のもあつた。

それを十代前半に毎回到近く見続けて枷が壊れていたのだろうか、と自問することがある。だけどその問いに対しての明確な答えなど返ってくる筈もなく幾度も徒労に終わった。

「正気でないことも疑つたけど、精神疾患を患つているといふ情報もなかった。それで私に惨めだと思う、感情が生まれたわ。モジュールが誤作動したのではない、生き物にはあつて然るべきというそれが」

地面に密接している後頭部までもが痛くなつてきたのでローガンは頭の向きだけ変えてグローザを見る。すると彼女も赤く腫れた片目だけを覗かせて自分を見ていた。

「それが何か、あなたにわかるかしら……？」

「わかるわけないだろ、俺はお前じゃない。言ってくれなきゃ伝わらないだろ」

身体全体までもが悲鳴を上げるが、ここまでの予定外の作戦遂行で自己主張するのは当然だともいえる。それでもローガンは内にいる本能の嘆きを無視し、よつこらせと身体を起こした。

斜め後ろにいるグローザが立ち上がる気配は、まだない。

「本部からここに来る原動力にもしていたけど、無線相手との話で私の奥底で燻つてた膨張したわ。ローガン・ブラック、私があなたに抱いていたのは単なる『疑念』だけじゃない。負の感情として当てはめられている、私にはない『強さ』を持つていることへの『嫉妬』と、かつての私に望まずとも向けられていた『羨望』よ……」

再び涙に濡れていくその声を背中で聞きつつ、ローガンはこれまでのグローザとのやり取りを思い返す。

刺々しかった彼女の一つ一つの言葉、それらに密かに内包されている気持ちやローガンは考えたことなどなかった。表に出されている言葉を全て飲み込み、そこにある意図を読み込んだだけである。それで彼女自身は人間である自分を嫌って突き放しているのだとずっと思っていた。

だがそこで、抱かれていた彼女の感情を知ってみてはどうだろうか。これまでの彼女

は自分が得ている技術を教えることがあったとしても、『それを持つている自分が戦術人形達の先達の一人であることを誰にも伝えていなかった』。精神に病を抱えている彼女が自身の経歴を誰にも明かさずにいたのは、単に彼女の指揮官を喪ったことにより自信すらも無くしたからでもない。戦闘技術を自分が持つていてもあつたとされている『強さ』を見失い、何も無い空っぽの容器と同一だと感じていたのだろう。

嫉妬や羨望といった幾多の感情が混ざり合い、痛烈に感じさせられる台詞を自分につけていた時、グローザも胸中は複雑だったのではないだろうかとローガンは思う。聡明な彼女なのだから、感情の糸でこんがらがった固い塊をそのまま相手にぶつけてしまふ、その行いの愚かさで更に自身を責めていたに違いない。

「もう嫌……誰かを憎みながら戦うのが……死を悼みながら堪えるのが耐えられない……嫌い、大嫌いよ私自身も、全部……」

心根から折れかけていたのはきつと自分と初対面を果たしたあの時からなのかもしれない。実力があることを周りに認められていても、誰にも悲鳴をあげているもう一面の自分を気づいてもらえていなかったのだから。

訓練や演習でハイスコアを叩き出すだけでなく、実戦で足を引っ張らずに他者と息を合わせて勝利に貢献して見せた。それにこうしてグローザの感情の底で大きくなつていた『腫瘍』を知れた。

ローガンは地面に落ちてゐるスカルマスクを拾い、泣きじやくりながら顔を俯かせてゐるグローザの方に寄つた。

「グローザ、お前にはきつと俺なんかの言葉じゃ安つぽすぎてなんの励みにもなれない。あまりにも経験していることがヘビーすぎて、俺自身もどんなことを言えばいいのかわからないしな。だけどき、自分からだど無価値でどうしようもない、鉄血の奴らなんかに嘲笑われても仕方ない存在なのだとしても絶対に『空つぽの人形』だということはな
いんだよ」

まだグローザは顔を上げないが、言えるだけの事ならローガンにある。こんなことを何度もやれるとは思つていないが、そうしなければ前に進めない少女がいるのであればもう言うまでもない。少女に揃つてゐる要素を全て伝えることをするまでだ。

「まずさ、お前が大事にしているその装備。ライフルじゃなくて拳銃の『マカロフ』だが、そんな傷だらけの代物を大事に取つてゐるんだ。きつと今はいないお前が仲良くしてゐた奴の形見だ、そうだろ？お前はどんなつらい目に遭つても過去になつた人との繋がりを忘れずにいられ、現在いまを生きる奴とも近付くことが出来る勇氣がある。孤独に逃げなかつた、かげがえのない強みだ。だけど形あるものが傍にあるんじや思い出に浸つてしまつて余計に酷くなるかもしれないし、今回の件が片付いたらしまつておけ。捨てなくていいが、それにただ縋つてゐるのは良くないしな」

戦術人形はASSTで繋げられている武器の他の装備の携帯を許されてはいる。ただ同じ名を冠する銃と同じように満足に扱いきれないという理由で持つていない人形もいるが、グローザはここまでで傭兵と怨霊との戦闘でサイドアームとして使ってみせた。それだけでは単なる思い過ごしだったのかもしれないが、年代物を思わせる傷や凹みの修繕跡がもう物語っている。グローザがそこまで新品の『マカロフ』と交換しない理由はおそらく今は亡き友人の遺品なのだろうとローガンは思ったのである。

反応は返つてこないが、はつきりと言つたので伝わつてはいるようで否定も聞こえてこない。それに僅かに顔を浮かしてきたので、ローガンは目線を合わせるようにしゃがんで高さを合わせた。

「第二に、お前は自分の指揮官の喪失に我慢しながらここまで生きてみせた。PTSDなんかにへこたれずに戦い続けてきたなんてすげえよマジで。それだつてお前が誰にも引けを取らない『強さ』じゃないのか？」

「そんなわけないじゃない……単に私は抜け殻になりながら惰性に任せてきただけよ……」

「精神疾患になつている奴がそこまで耐えられることなんてまずない。メンタルセラピーは受けてたかもしれないが、精神病棟に入らないだけでも間違いないで何処かで自殺してる。それなのに誰かの『死』を見ても正気でいられてるんだ。俺にでもわかる、お前の

それは過去になかったアドバンテージだ」

無論、したくても戦術人形の安全装置が働いてしたくてもできなかったのかもしれない。しかしそれで無力に捕らわれることにならず、銃を握って戦場（いくさば）にいる。戦術人形も許容できる限界を超えれば我を失って発狂する、とM4が言っていた。であれば凹んでも自分の考えを正直に話すことが出来る、自分を殺すほどに殴らなかつたグローザにはまだ他では見出せない『強さ』がある。

「最後にさ、グローザ。45やG11、皆が援軍としてきてくれただろ。傲慢だとは思いますが、あの二人とバルソクは主に俺の為に来てくれた。S O P I Iは同じ小隊メンバーの奴らの為に。あんなに嬉しそうに飛び跳ねているのは俺も見たくないよ」

持ち上げられて見えてきた赤くなっている琥珀色の瞳とローガンは目を合わせる。そこからずつと逸らさずに、一番に言うべきことをそのまま言った。

「じゃあスオミは誰の為に来たんだと思う？ 副官のあいつのことだ、きつとハリーの手が回り切らない仕事をやっていたんだらうさ。でもそれを投げ出してまでこっちに来たぞ」

「副官だもの……同じ基地の人形が追いつめられているような危機的な状況下になって人手が足りないのであれば彼女はあなた達の為に……」

そこで嬉しい間違いをしてくれたことにローガンはにっと口角を上げて笑う。雷が

無い土砂降りの雨が内側で降り続けているグローザにそのまま言った。

「バーカ、それだけじゃねえよ。スオミは自分が倒れ込んでしまっても仕事をしようとするぐらい責任感があつても頑固な奴だ。分けてもらったサバ味噌のお返しを気にしたりもするぐらい生真面目で、短所の克服を一生懸命になつて実行するぐらい努力家でもある。そんなあいつが任されている役目を投げ出してこつちに来た」

頭をわしやわしやと撫でてやりながら、ローガンはそのまま言う。電腦の働きが鈍くなっているせいも察しが悪くなっているグローザに。

「お前を助けたいと、『過去を明かすぐらい心を許している友達』のOTSー14グ
ローザを助けたい」つてそう思つてスオミはここに来たんだよ」

グローザは顔を完全にかけて目を見開くが、そこは絶対に間違いないとローガンは確信していた。厳しい取捨選択をしてきたであろう彼女が克服した大のロシア嫌い。並の向上心ではどこかで挫折し諦めるであろうそれをまだ子供だったハリーに寄り添つて生きてきながら立ち向かつて打ち勝つた。

先代指揮官の息子でまだ二足歩行が出来ていない頃から世話してきた他では置き換えられない大切な存在だから、そういつた理由があつたのかもしれない。理屈を織り交ぜた、矛盾した感情論で他人がいう事をつ突つ撥ねてきたのかもしれない。そもそも、単に頑固で知られない負けず嫌いが働き、前述した理由などなかったのかもしれない。

しかし副官の責務を放り投げてここまで来た。彼女からすれば全滅していたかもしれないと思えるこちらの現状など何もわからないというのに。

「そんな……そんなわけが……!」

「まだつまらないことを言うのならお前の頭をグリグリしてやろうか、ん？本部から来た素性がわからない誰かさんに一番向き合った奴を信じることでできないのかよ」

頭から手を離し、グローザの胸元に軽く拳を当てる。理不尽に苛みながらもそこで活動を止めない彼女の仮の心臓を指し示すように、膨らみがない箇所にあてがった。

「誰かに言われることで気付くことっていうのはやっぱりある。良し悪しはともかく、デカイ衝撃を受けさせられたりもするとびっきりの代物もあつたりする。グローザ、お前は絶対に無価値でどうしようもないクズなんかじゃない、鉄血の阿保共に嗤われたりする謂れもない。誰よりも理不尽に辟易し憔悴、それで激しく自己嫌悪するだけでなく、惨めだと思える感情が湧きながらも自分の足で立つことだって出来る、そんなスゲエ奴なんだよ。それでそんなお前を助けたい、一緒に帰りたいっつう衝動を体現しているスオミが近くに居てくれてるんだ。間違はなくお前には、お前が慕っていた指揮官への気持ちと同じぐらいに価値のある『強さ』があるんだよ! いい加減に気付けよこの大馬鹿野郎め!!」

グローザの額にデコピンを打ち、反射的に瞼を閉じて怯む彼女にローガンは笑った。

考えるのをそこそこに、湧いてきたままに行動する。『欲』があるからこそ『衝動』に駆られる、ということだ。子供から大人になつて生きていくのであれば、自制をして『欲求』を抑えることを覚えなければならない。生命活動を継続するのに必要なことは除いて、『本当にそのようなことをしても大丈夫なのか』と考えなければならない。『大欲』というのはその延長線上、『衝動』に強く繋がる『欲求』であり、あまり褒められたものではない。

怨霊達が犯した行為は当事者の自分達からすれば決して容認できない、許し難いことだ。たとえ自分達の仲間でなくとも死体をバラバラに解体することを見て見ぬフリをすることなどできない。

その声に耳を傾けずに『大欲』のままに行為を続けることがもし、母が自分の子供を守りたいが為にどんなことでも行動して守り通したいという強い『大欲』と同じことだと言われたら。

もし、互いにとつての友を助けたいが為にここに駆けつけることが『大欲』によるもので罪なのだとしたら。

んなことがあつてたまるか、ふぎけんじゃねえ。屁理屈並べて陥れようとしているんじゃないねえよ。

そうして自分と同じステージにまで格下げしようとしていること、そうした『欲求』を

抱くことこそ最大の罪であり『大欲』だ。阿保みたいな言い分を並べて変に捻くれている同類を増やしたいと、自分と同位の存在を作ろうとしていることをまず先に問い質すべきである。

『ぶつかっている壁を迂回してなかったことにすることなんてできるわけない』、今がその時だ。俺はお前を助けることはできないけど、せめて一緒に助かる為に歩みを揃えることならできる」

以前スオミが言っていた台詞である。自己嫌悪とトラウマで形成された壁にどう対処するのはグローザ次第。自分は手伝いをちよつとするだけで、あとは背中を押してやるだけだ。

ローガンはスカルマスクの両端を掴んで後ろ手に持つていく。グローザに殴られた頬の傷を見せない為にも、ローガンは念入りに位置を調節し固定する。そうした後ですぐにホルスターの『P226』を抜いてグローザの背後で揺らめいた景色を撃った。

タンツ！と発射された弾丸は狙われた方にまっすぐ飛んでいき、そこにいた怨霊を地獄へと返す。そして少々違う位置で土埃が立ったその上に二発お見舞いし、反撃がないままに迷彩が解除されて絶命した怨霊達を一瞥して振り向いて驚いているグローザに視線を戻した。

「もう一度ここからだ、グローザ。踏み出す第一歩のやり方はお前が決める。もし躊躇

「躊躇っているのなら二人三脚で一緒に歩いてやるよ」

〈21:04〉

援護位置にいた自分達に迫ってきたので位置が知られたと断定し、グローザと共にローガンは準備したラペリングアンカーを利用して追撃が来ないうちに降下する。

まだ気合が入り直されていないせいか、危なげにグローザが地面に到達したことで緊急事態に備えていたローガンはその構えを解いて周辺警戒をしながら彼女と前進した。火炎が巻き起こり、銃声が轟く即席の広場、そこで張られているテントの間をそうして

いて、全体の状況を掴むべく無線機を操作する。

「AR小隊のM4、聞こえるか？」

『つ……やつと戻ってきました……一体そつちで何があったんです!? 長い間応答が無かったので心配しましたよ!』

「わりい、こつちも色々あつてな。とりあえず今は居所がバレたもんだから降下して移動している」

銃声に紛れて聞こえてきたのはM4の声。緊迫している状況下にあるようであまり余裕がないようだった。

『ジャミング装置が目の前にあるので、片付けたらすぐにそちらに向かいます。その後で合流を——』

無線から聞こえているM4からの声が一瞬遠のいた。不意打ちを仕掛けられたのと同様に全神経の注意が逸れて外的な方に視線が動く。

聞こえて注意が向けさせられるのは背後からの銃声で、次に感じたのは自分の側頭部を掠めて地面を掠める銃弾による熱。延長して地面を抉った銃弾を目で追うことはせず、推測による弾道を辿っていくと狙撃地点として到達し無線相手としていた怨霊達の中心人物とやり取りをした位置。

距離はまだそこまで離れていないのでまだ肉眼で見えるかもしれなかったが、即座に

ローガンは詳しく見ずにグローザの手を引いて自分もろとも物陰に隠す。そのアクションが完了しそうになったのと同時に第二射が飛び、わずかに隠れそびれていたローガンの右腕をまた掠める。脳に届いた痛覚による信号により、倍以上の痛みと熱が伝わってきた。

傭兵達とのカーチェイスをすることになった当日に決死の覚悟で突撃した時に一発が上腕を貫通していたので、当然そんなのは二日三日で簡単に治る怪我ではない。なんとか通常通りに動かせはしても完全に癒えているわけではないのだから、重ね合わされた銃創の痛みは尋常じゃなかった。

「痛つつう……！くそつ、随分と行動が早いな……！！」

『シャドー、ローガンさん！そちらの状況は？！』

「狙撃を受けて襲撃されている！掠めた程度しか被弾していないけど、追いつかれて強襲されるのは時間の問題だ！」

『RO、ハインドドローンをローガンさん達の方に……！！』

『残念だけど45と一緒でこつちも精一杯よ！合間を縫って援護にいきましょうにも詳しい位置が分からないし、正確な射撃もできそうにないわ！』

銃声の数を増やしテントの生地を貫通させて怨霊達の射撃から逃れるのに何もせず
にこのままでいるつもりなどローガンには毛頭ない。すぐさまグローザの手を掴んで

移動しようとするが、彼女の様子からして十二分な速度を保つてのそれができない。だからといってローガンは彼女をここに置いて捨て去るどころか何処かに押し隠して戦う気も全くない。

逆境に直面しているというのに昂ぶる戦意にローガンはニヤリと笑った。敵が違っても微妙に状況が違ってても、結局のところやるべきことはかわらないのだから。

『シャドー、こちらは敵リーダーの排除が完了しました。これよりそちらに合流するようにしますのでそれまで持ち堪えてください！』

「オーケー、できるだけ早く頼むぞスオミ。わけあつてグローザがまだ戦えない状態だ。お前達が来るのを心待ちにするよ！」

応答してから瓦解してきているテントなどによる十字路に飛び出したところで、正面から怨霊二人が接近してきているのを目視で確認する。すぐにローガンは片手で持つてしっかりとストックを肩に当てている『ハニーバジャー』を撃つて牽制し、左右に別れた隠れたところで十字路を左折し逃げる。

「ほらグローザ、お前も止まらずに頑張れよ！迷いが振り切るまで時間を稼いでやるから！」

「そんなことを言われたって……私はあなたに酷いことを……」

「ああそうさ、お前にグサグサと言の葉による刃で刺されたよ！だけどそんなことばか

りでクヨクヨしていられるかって話だよ、そんなに疑われるならお前が納得のいく結果出せばいいだけだったしな！」

背後にいるグローザの方は見てはいないがまだ晴れた表情をしていないのは言葉の端々で察するができた。慰めの言葉による誤魔化しでは何も意味を成さないのです、そのまま自分がもうじき一週間前になる出来事による傷をぶつちやける。正直なところ、そんなことにまで気を回せるほどの余裕などないのだが、なぜか今のこの時だけはそちらに意識を割くことが出来た。

「言われたことに反抗する、そんな気概を持つだけでいいんだよ！お前の指揮官の死に間接的に関わったあいつに何も感じないわけないだろお前なら！」

「当たり前じゃないそんなの……今回はみすみす逃がしてしまったけど、これで終わりにするつもりなんてこれっぽっちも……！」

「だったらそれに火の種を投げ入れちまって爆発させちまえ！復讐に取りつかれるようだったら俺達が祓ってやる！お前も肩の荷を誰かに任せちまうだけの凶々しさを保持してしまった方が良く！そこらだけがあいつと似ているんだしお互いにやり合っちゃまえよ！」

ローガンに不意打ちを仕掛けようとしている怨霊が迷彩が機能しないまま飛び出してきたが、グローザの手を一旦離し突かれてきたナイフを屈んで避ける。そしてつんの

めつて前によたよたと来たところで背に乗せて一気に放り投げた。地面に倒れたところで戦闘不能になるよう急所を蹴り上げてその場で動けなくし、再び迷い人になつていゝる少女を引き寄せて背後に誘導。

痛覚を通じ電気信号を引き続き発し続けているのを無視し、ここまで走つてきた道筋を辿つて追つてきた怨霊に『ハニーバジャー』による銃弾を浴びせかけ、本格的な反撃を食らう前にそこから離れた。

「許しが欲しいなら面向かつて直接あいつからもらつちまえばいい！副官としていろんな奴を纏め上げてきたんだからお前の我が儘に付き合つてくれるだけの器があるだろうさ！なにせこれまで失敗による後悔や挫折を味わつてきて乗り越えてきたんだ！思い悩んでるお前のことだつて絶対見捨てずに抱え込んでくれるだろうよ！」

その役割による心労を抱え込むのはローガンだけではないし、その相手の了承を得ていないので無責任なことではある。ローガンはあくまで北アメリカ支部で居を置き、指令があれば戦場に向かつて潜入し目的を達成する、まだ自分以外の隊員なき『シャドー隊』の隊長でしかない。戦術人形ほど効率よく戦うことはできず、継戦するにしても彼女達よりも限界が早く訪れる人間だ。そんな自分では抱えきれぬ事情もたかが知れており、努力しても越えられない壁はある。

だがそこでグローザが座り込んで動けなくなつていてのを見て見ぬフリができない

者がローガン以外にもいる。事情の端々を知ったAR15、そして彼女のメンタルモデルに『迂回せずに立ち向かう』という多大な影響を与えたスオミ。

路頭で佇んでいる迷子を助け出すように、ローガンが彼女達と共にグローザに手を差し出すこと。

その行いは、絶対に間違っていない。

「俺から言う事はもうなにもねえ！あとはもうお前自身が考えろ、それで決断しろ！銃を取って戦うのなら奴らに雷雨を降らしてやれ!!」

陰鬱になっているグローザの表情に変化が起きたのを視界の端で捉えはしたが、それを最後まで見ずにローガンは降りかかってくる火の粉を払う。

やがて心のどこかで来ないで欲しいと忌避していた『ハニーバジャー』の弾薬が無くなり、ローガンは脇に自身の主力武器を下げると『P226』をホルスターから抜いて戦闘を続行する。そしてそのタイミングで、遠くから

『スオミ、こつちも装置を破壊して目的を達成！私達もローガンとグローザに合流するよー。』

『了解SOPHIE！現在はM16が代理として作戦指揮に待機している筈です！私達と同様にシャドーの方に向かいながらコンタクトを取るようにしてください！』

『ならこつちでチューニングしておくわ。ハインドドローンがやられて、残りはROが

操作している一機だけよ。動けない彼女の護衛をしつつであれば手間取らない筈だから」

「どつちにしても早くしてくれよ！こつちもそろそろ限界だ！」

45からの応答に続けてローガンが無線に向かって叫び、先回りしてきた怨霊の方向に『P226』を撃つが、対人戦でハンドガンで捌ける敵などアサルトライフルやSMGよりも少ない。水平に構えながら命中させても殺傷力も劣るので、当たり所がよろしくなければ即座に反撃を受けてやられるのがオチだ。

「追い込まれてきているというのに、私の銃を使おうとしないのね」

「あらやだなんでそんなことが思いつかなかったのかしらとか言えばいいのかよ!?そんなことしたら強奪したと誤解されてぶん殴られるのが目に見えて来てるんだよバカア!!」

偽りのない本音をただただ口にしただけだったが、それを聞いたグローザが緊迫した状況下にあると言うのに噴き出した。空気を読んでの行いでないことにやや腹が立ったが、それを境に彼女はグリップを握っていても力なくぶら下げていた『OTS—14』を両手で持った。

「ごめん、まだスッキリしたわけじゃないけどなんとか頑張ってみる。不甲斐ない私の為にも戦ってくれよ？」

「切迫してるし言わずもがなだ。ダチの為にやら俺だつて出せるものは全部出し切るよ！」

「……ありがと、ローガン。最初はこんなことを言うとは思わなかったけど、ここであなに会えてよかつたわ」

「どういたしまして……！」

出会つて当初からグローザからフルネーム以外で名を呼ばれたことがなかったのだが、ここでそうされたということはようやく折り返せたという所だろう。落ち着いて飲み物を口にできるのであれば握手でも交わしたいところだがそれを敵方が許すはずもなくひっきりなしに銃弾を飛ばしてくるのでそれができるわけがない。

後方から敵の接近に対応すべくローガンがナイフを抜きつつ振り返り、『P226』を構えて撃とうとしたところで『友』となった少女から声を掛けられた。

「前方からも接近してる。互いに背後は任せて正面に集中して対応するわよ、問題ないかしら？」

「心配するな。ねえよ！」

グローザと背中合わせになった状態から彼女と同時にローガンは走り出し、お馴染みの構えで二人の怨霊に立ち向かう。

これまで自分達が逃げの姿勢で在った為に意表を少々突かれたのか、一人がたたらを

踏んだのを見逃さずにローガンは『P226』で撃つ。銃弾は身体を中心を捉えて致命傷へと至らせたことだけを認識し、手に持っている小銃を撃つのではなく格闘戦の姿勢になった怨霊に突撃した。先手として『P226』を銃口を突き出しながら発砲したが、その怨霊は半身で身体を回転させて放たれた銃弾を躲す。

そして今更気づいたが片手には見覚えのある注射器が握られており、注射針の先が怨霊の片脚に刺さっていることに気付いた。中身の注射が終わったことで抜かれたそれが放り投げられることなく、逆手に持たれたままにこちらに高速で接近してくる。ナイフを扱うように繰り出される薙ぎ払いを反射で上体を後方に逸らして回避し、次の攻撃としてきた蹴りを両腕をクロスして防御。仰向けに倒れそうになるところで後転し受け身を取り、『P226』とナイフを思わず放してしまうだけでなくビリビリと痺れる腕に伝わった衝撃で察した。

「そういうことかよ……!」

グローザの装備を取り返すべく事務室に突入した時に交戦した怨霊達の身体能力が向上したのは、目の前にいる怨霊の片手に握られている注射器によるもの。それ自体に見覚えがあるのは、ローガンも全く同じのを所持しているからだ。こちらの気を失わせて連れ去ろうとしたが失敗した怨霊の持ち物から拝借した物の中にあつたそれを、ローガンは腰のポーチから取り出す。

こちらの武器二つは地面に転がっており、それらを優先して取りに行こうものなら手痛いどころではない攻撃を受けてしまうことはもう言うまでもない。身体能力が戦術人形並にこちらより格段に優れている以上、敵方にはよろしくないアクシデントが起きなければ勝てない。技術はともかく『力』を象徴する一つの要素が向こうに分があるのであれば、とローガンは拝借した武器を掴み同じく逆手に持った。

こちらの出方を見ていたのかはわからないが、首をゴキリと鳴らした怨霊が突っ込んできた。ただ注射器の先をこちらに突き立てる、通り魔のような素人がやるようにだ。それでも脚力が上昇しての突撃だったので、回避するどころか受け止めきれずにローガンは倒れてしまう。

馬乗りになった怨霊が注射針をこちらの顔面に突き立てようと振り下ろそうとしたので、ローガンは即座に腕を掴んで抵抗したが、御多分に洩れず腕力も強化されているのだから焼け石に水で下ろされる速度が遅くなったただけだった。

「負け、るかよこんなどころで！」

グググ……！と針が自身の眼球に迫ってきたところでローガンは無理矢理怨霊から何も働かされていない横軸の力を加えてずらす。それにより注射針の先はローガンの眼球から逸れたが、深々とローガンの右頬を抉った。

「ぐっがああああああああああああああああああああああ!!」

火炎で頬を焼かれたような痛みにもローガンは叫びながらも、左腕の肘鉄を食らわせてマウントポジションから怨霊を落とす。倒れまいと肩肘をついている敵の首に背中から左腕を巻き付け、力づくで剥がされる前に右手に持った注射器を敵兵に突き立てる。仕組み上から刺されれば中身が無くなるまで自動で注射されるそれを首に刺されたことに怨霊も動揺したのか、さらに剥がそうと必死になるがそれを許さずにさらに深く差し込む。こちらの顔を掴むようにグロブに包まれた指先が滑るようになったその時に注射が終わり、ローガンはそれを前方に蹴って距離を取って出方を見た。

インフルエンザなどといったウィルス性疾患に対しての予防として予防薬を注射することがあるが、適量であるからこそ危険がないように思える。だがどのような薬物でも、誤った量で過剰に注射されれば副作用が生じる。それは注射される薬によつて様々だが、生体に大きな影響を及ぼす劇薬であれば死を招くことがあつてもおかしくなく、むしろあつて然るべきだ。身体能力を上昇させる薬など、身体に易しい薬物でないことなどももう目に見えている。であれば、それが注射器二本分注射されればただじゃすまない。

案の定、その場で立ち上がることなく倒れ、注射された首元から全身を掻きむしり始めてのたうち回った。

ローガンは自分のハンドガンを拾うと、もうすぐには戦えず死に絶える道へ直行して

いる怨霊に弾丸を撃ち込み、先に撃たれて動けなくなっていたもう一人の方にもとどめとして一発撃ち込んだ。

「一先ず片付いたわ！」

「こつちもだ！今のうちに持つていける物はもらつておけ！このままじゃあまり持たないしな！」

ローガンはリロードを済ませた『P226』を戻し、怨霊が所持していた『A s V a 1』を複数の弾倉と一緒に手にした。ロシア製の銃を持つのも久しぶりだなと思いつつ、同数の敵を倒したグローザとまた合流する。

「見つけたぞスオミ！こつちだこつち！」

空になった『P226』の弾倉を取り換えていると、バルソクの声が聞こえてきたのでそちらの方に顔を向けてみる。服の所々に穴が空き多少は負傷しているのは目に見えていたが、煤にまみれているその顔に曇りがないのは一目でわかった。彼女に引き続き、名を呼ばれたスオミやG11も姿を現してこちらに駆け寄ってくる。

「各自で目的達成できたようだが状況はどうなってる？」

「私達の保護区への悪影響を及ぼしかねない根は断ちましたが旗色が悪いのは明らかです。こちらでも数十人倒していますが巣穴から出てきた蜂のように出てくるのでキリがありません……！」

「アタシ達もここまでは逃げながら戦ってきたけど……まったく、気持ち悪い……！」

疲弊している様子は全員にはないが、余裕が残されているわけでないだろう。暫定的に脳内で現在地を割り出してみるが中央に追いつ込まれているようでもあった。

「だけど基地との通信ができるようになった、それは活路を開く鍵を得たのと同じだぞローガン。そうだろスオミ？」

「ええ、たしかにそうですね。45さん、無線状況はどうなってます？」

『もうちよつと待つて……よし、接続完了！各自、周波数を今から言うのに変更して！数値は——！』

45から言われた周波数にローガンも端末から操作して変更する。一連の操作が終わった直後に聞こえてきたのはノイズだけかと思われたが、すぐに耳障りな音は取り除かれ聞き慣れた声が聞こえてきた。

『やつと繋がったか。こちらグリフィン北アメリカ支部のM16、応答しろ』

『聞こえてるわM16。詳しくは省くけど、現地にいたAR小隊の過半数や私達援軍、それとローガンにグローザもなんとか生きてる。だけど状況は芳しくないわ』

『ああ、こつちでも衛星スキャンで確認した。そつちに南側から歩兵だけでなく戦闘へりまでもが高速で接近してる。数が多い、大部隊だ』

『それは派手なパーティになりそうね……スオミ、こつちはROを連れて移動をするわ。』

このままじゃ見つかる』

「わかりました。それとこのままじゃ私達が押し潰されるのをただただ待つだけです！ M16、航空支援をお願いします！」

航空支援という単語を聞いてローガンとグローザは驚きに声を漏らしそうになったが、遅ればせながらここに駆けつけた友人達には動揺の色が無い。むしろ待つてましたとばかりに拳を打ちついたり、マイペースな雰囲気崩さずとも気をさらに引き締め直していた。

『了解した、敵識別多弾頭の新型プレデターミサイルを積んだUAVをそちらに向かわせる。到着まで一分、それまで持ち堪えろ！』

続いて歓喜の声を漏らしそうになったが、すんでのところで口をつぐんで抑える。

南からここに接近している大部隊となると、ダムの方で常駐していた部隊なのだろう。ヘリを連れてる部隊となるとローガンが把握している情報ではそれしか考え付かないのだが、それ以外にも展開していた、なんて事態は想像したくない。

ともかく、退くべき方向として真反対の北に向かつて時間を稼ぐのが無難な判断だ。自分達の小銃では多数の敵兵に装甲だけでなく破壊するのに長けた兵装をまでも兼ね揃えている兵器には無力である。

「とにかくここから移動しましょう。前方に二名配置して四方向に展開してここを突破

します！AR小隊、私達は北へ向かいますので合流してください！」

『了解、急いでそっちに向かうわ！』

「グローザ、お前はスオミと一緒に前につけ！右側の敵は俺がやる！」

「ええ！」

スオミに並び立つたグローザが移動しながら撃つのを脇目に、ローガンも設置されたり転がったりする無機質な物資の間から出てくる怨霊に応戦する。常に動きながらの射撃であり、その場しのぎで手にした不慣れな銃なので命中率が如何せんよくないが、だからといって銃を持ち替えるのは悪手だ。火力が足りなくなりこちら側に出てくる敵すべてに対処しきれなくなる。

スオミとグローザが制圧した敵の死体を跨ぎながら右側に出てきた三人目を倒したところで、後方を見ていたバルソクが声を上げた。

「来たぞ、敵増援部隊だ！」

高速で接近してきているとは聞いていたがあまりにも早すぎる——！！

ローガンは舌打ちしながらも飛びかかってきた四人目をストックで一回殴つてよめかせ、できた隙について銃弾を浴びせかける。その敵が倒れる様を見ることも許されず、五人目も湧いて出てくるので対処しようとしたが、装填している『As Val』の弾が切れた。すぐさま『P226』をもう一度抜き放ち、仲間に命中させられる前に片

を付けたがすぐさま別の問題が発生する。

「先回りされてます、バックですバック!!」

「このままじゃやられる、下がって!」

前方に目を向ければたしかにそこには複数の銃口がこちら向けられていた。ただその数が多すぎであり、十字に展開しているこのフォーメーションで突破するのは無理がある。

ローガンも皆のように頭を下げて少々下がって転がっている大木の陰に身を隠した。『As Var』の弾倉を取り換え、逆側についているコツキングレバーを手前に退いて射撃準備を整える。その間に距離を詰めようとしてくる怨霊をG11が間髪入れず二人倒して他を足止めしてくれた。

「まだゾロゾロと来る! 遠回りでも何でもいいから進行ルートを変更した方が良い!」

「同意見だし早めに動こう! このままじゃ増援部隊にまで追い付かれる!」

「引き続きついて来てください、迂回してここから逃れます!」

『AR小隊は西側から合流する、誤射に注意して!』

「このままであれば合流出来ず、そのまま来てください。ただしクロスファイアにも気を付けて!」

迂回路を割り出した副官にローガンも続き、フォーメーションを組み直してそこから

離れる。追撃しようとする敵をマシンガンの戦術人形であるバルソクが『AEK—99』による持ち前の火力で倒し、頭も出せない程の牽制射撃を行った。

近くから一際大きく轟いているそれに紛れて空からまた聞き覚えのある駆動音が聞こえてくる。

ガアアアアアアアアアアアア!!と弾丸をばら撒きながら接近してきているのだからもう確認するまでもない、ダムの仕事室で姿を現した敵戦闘ヘリのハボックだ。

「敵のヘリが来やがったぞ!」

『心配しないでください、こちらで引き受けます!』

ROが遠隔操作しているハインドも追い縋るようになり出現し、積み重ねられているミサイルポッドから誘導ミサイルが発射された。推進装置から推力を生み出しているそれが目標に命中し、空へ留まることが出来なくなったハボックが墜落する。しかし敵としてローガン達を強襲しようとしているのは一機ではない。

「RO、無理に落とそうとはするな! 支援機が到着するまでの時間稼ぎが出来ればいい!」

『わかつてはいませんが下手をすれば全滅を招きかねません! どちらとも引き寄せてそこから引き剥がします!』

ハインドドローンがこちらの頭上を通り過ぎてハボックを挑発する。その際に機銃を当てられたことに腹を立てたのか、追加のハボックがROのドローンの後を追って行った。

「そちらを確認しましたAR小隊、そちらから見て左手の道へ行ってください！そこから北へ行きましょう！」

『了解！』

見えてきたAR小隊のM4にSOP II、そしてAR15との合流が成功した。北へと続くであろう曲がり角で彼女達と顔を見合わせたか、こちらの様相に一番憤慨したのはローガンの予想通り桃髪の少女だった。見て明らかといった表現がピツタリ当てはまるぐらいにこちらの隣に立ち、時折出てくる怨霊に対し移動しながら射撃を外すことなく出番が無くなってしまふ。

本来なら冷静になれなど声を掛けるところだが、敵に対して鬼と化するAR15にそんなことをする勇気が出てこなかった。

『通達、その戦闘地域一帯がプレデターの射程圏内に収まった！いつでもいいぞ、使え！』

『ローガンの端末であれば無線操作出来る筈よ！こっちはROの本体護衛に手一杯だからそつちでお願い！』

「わかった、認証コードを教えてくださいM16！」

『よし、コードは——！』

走らずとも歩かず、そんな早歩きよりもやや早い程度の微妙の前進ではあったが、ここから走って北へと一気に駆け抜けた。道中にM4やG11が肩を撃たれたりしたが、誰かが遅れるといったことはなく北側の林へと退避が完了する。

それぞれで木々に身を隠し、必死に応戦する中でローガンはM16から言い渡されたコードを端末の画面に表示されたダイアログボックスに入力。そしてデータ処理が終わった後に出てきたUAVの観測映像から敵を識別した。まずは暫定的に自分達より南側にいる歩兵や敵兵の熱源全てを敵として断定。そして少々離れたところでグリフィンが保有しているSUVを撃っている敵車両にもターゲット認定した。

「全員、ミサイルを撃ったぞ！着弾までそう時間はかからない、45とROも備えろよ！」

発射されたミサイルに搭載されているカメラに切り替わり、画面に高さや落下速度までもが表示される。風による影響で少々狙いが狂ってしまうがそこをなんとか操作し補正した。

「逸れるんじゃない、こつちに来いよ、さあ……！」

画面が一度ブラックアウトし、再び満月の夜空の高高度で飛行しているのであろうU

AVの観測映像に戻った。

木の陰から顔を覗かせて様子を確認しようとした途端、聞こえてくるのはドドドドドドドドドドドドドド!!と多弾頭のミサイル着弾による音と、それにより墜ちたヘリの機体の爆発音。ギョルルルルルルルルルル!!と制御を失った機体が落下し、バァンツ!!とこの先地面とずつと接着することになった途端に爆発したその様を見て胸がすく思いだった。

UAVからの観測映像だけでは判断がつかないので覗いてみるが飛んでくる銃撃が無く、動く人影もないので制圧できたとしてローガンは自陣側にいる皆の方に向く。

「各自、状態を報告してください」

スオミからの呼びかけにローガンも応え、同じ大木で身を隠し身を寄せていたARR15と拳を打ち合わせようと持ち上げた。彼女もこちらに言いたいことはあったようではあったが、勝利による喜びを嘯みしめる一環としてのこちらの行為には同感らしい。仕方ないといった諦めているようではあっても笑みを浮かべているその表情でARR15はローガンと左拳と右拳で軽く打ちあった。

『……な〜んか、ローガンとARR15が仲睦まじくしているのは気のせい?』

「睦まじくはしてないけどなんでわかったんだよ45。お前、俺のどこかにセンサーか何か仕込んでるんじゃないだろうな?ていうか別に分かち合っただけだってんだから

いいじゃねえか」

『知ってる？仲間外れって地味な嫌がらせに見えるけど、実は精神的に来るいじめの一つなのよ。省かれて私は悲しいわ……』

「はいはい、こつちに來たら功勞を称えるわよ。いずれにしても回収してもらおう為に集まらないとだし早く來なさい」

やれやれとローガンはそこに座り込み、何の氣も無しに視界に映るグローザの方に焦点を合わせた。スオミから手を貸されながら立ち上がり、何かを話しているようだがこちらまで聞こえてこない。それでも二人の表情は晴れやかであり、先程の助け起こし起こされの一連の行動も互いになんの躊躇いはなかっただろうとローガンは思う。話している最中にコロコロと表情を変える、そんな会話している内容はなんであれ、あの二人であれば悪い方に転がることはないだろう。

「帰ろう、ローガン」

差し出されるその手の持ち主を何の氣も無しに見上げる。背後には彼女の同じ小隊メンバーの二人がこちらを見ているが、手を差し出している少女のように敵意は全くない。微笑んでいたり、満面の笑みだったり、いずれにしてもあるのは親しみによる親愛だけ。そして戦闘から抜け出したことにより桃髪の少女も口元を緩めている。こちらを労る気持ちも含めたその手の力を借りない理由が、ローガンにはなかった。

白く細いその手を取ってローガンは立ち上がり、内心にしまい込むだけでなく口を動かして言った。

「まったく、長い一日だったな……」

今朝から続いていた作戦行動が終わったこと。それは他の何よりも揺るがない事実だった。

ダム内部に仕掛けられた爆弾解除も含め、回収要請に応じた迎いのへりが来たのはそれから二十分後の事だった。本当にもう残党がいなかどうかだけを確認した後はそれぞれで談笑したりと腰を落ち着けており、自身で応急処置を済ませたローガンも手渡

された水筒から水分を補給したりと休憩していた。そんな時に聞こえてきたローター音が本当にグリフィンのによるものなのかどうか、それを自分達の目で確認するのに精神をまた研ぎ澄ませたりと疲労が重なったが、徒勞で終わるだけの笑い話で済むのだから悪いことではない。

回収用ヘリのチヌークのハッチが開き、中から現れた顔ぶれにローガンは溜息を吐いた。

「目の下の隈がまだ消えていないぞ。もう大丈夫なんだから任せて休んでればいいじゃねえか」

「半日以上ここで作戦行動に準じていた君達が居るのだから、上司である僕が長時間休んでいられるわけにはいかないよ。それに満身創痍なのはお互いさまじゃないのかな？」

「現場の兵士を嘗めるな、まだ体力は持つさ。それにワシントンの時よりもまだ大分いいだろ、傷だらけでも俺気絶してないし」

ハリーと軽口を叩き合っていると、ローガンは護衛として連れてこられた戦術人形以外にもう一人、ここに来ていいる人間に気付いた。モノクルをつけているその顔つきから生真面目な性格を思わせている雰囲気崩さない人間である。一応敬礼でもしておくべきかと思いつまいを正そうとしたが本人に片手で制された。

「よくやってくれた、ローガン。こうして実際に活躍してもらっているのを見させても

らつて、僅かに私の中にあつた疑心も晴れたよ。君は信用できる兵士だ」

「そう言つてくださつて嬉しい限り、ありがとうございます。ここに残つて尽力した甲斐がありました」

「だけど作戦行動の細かい所に少々問題はある、それだけは気に留めておけ。今回は目を瞑るが、もし目立つたことがあればこちらからも手を加えなければならなくなるからな」

「あゝ………了解です」

しかしそんなことをいつてるヘリアンの顔も比較的明るく、視線がこちらからずれたので追つてみると、他の人形達と同じように手当てを受けているグローザの方に行き着いた。少々疲れているのが目に見えているが、一つの大仕事を終えることができ達成感に浸れてはいるらしい。

『『そつち』もうまくやってくれたようだな。もし彼女が望むのなら……いや、望むだろう。あれでも普段は気さくで愉快な一面も持つ奴だ、面倒を見てやつてくれ』

「……拒否権はなさそうですね。わかりました」

こちらの肩に手を置いて言つてくれたことを飲み込むと、ヘリアンは頷いて当の本人の方へ向かつて行つた。ハリーは何があつたのか大まかに察してくれていたようで、特に何も言わなかつたが受け入れることになるだろうから知る必要はある。後日ちゃん

と話すことにして、基地の副官だけでなく総司令官と話を始める少女をもう一度見た。

彼女が何を考えているのか、それを知っているのは当人しかもういない。ただ一つだけ言えることは、先に待ち受けていることに怯えているながらも勇気を振り絞って歩き出したことだけ。ローガンはそれを得るまで待ち背中を押しただけに過ぎない。

だが大きな一歩だろう、とローガンは思う。過去にあつた記憶の柵しがらみやトラウマを忘れることはできないが、それを糧にして前に進むことができる。

もう手の内にはないものを思い出しては仕方がない。そんなことをしているのであればむしろ、手の内に入ってくれたものを大事に、失くさないようにした方がよっぽどいい。

そのことを教えてくれた者達に敬意を払い、横に立っている友の背を押した。全体を一望してから一点で止まったのをローガンは見逃さない。

「お前も行って来いよ。一番信頼している副官が仕事をしたんだ。労いの言葉を一つでもかけてやらなきや嘘になるだろ」

「……うん、そうだね。ごめん、じゃあまた後で」

「別に謝る必要はねえよ」

ひらひらと手を振ってスオミがいる方へと向かうハリイを送り出し、ローガンはチヌークの座席に座り込む。仮眠とまでいかなくとも目を閉じるだけでも大分違ってく

る、ということで壁に寄りかかって休んでいると近くに誰かが寄ってきた。こちらの名前を呼ぼうとしたところで寝ていると思っただろう。息をすぐに呑んだのがすぐにわかった。

「あれ？ローガン、寝てるの？」

「そのようだけど……今日一日ずっと任務だったんだし、休ませてあげた方が良くはなって思っただよ」

「一番の功労者はローガンなんだろうしそうするのは吝かじゃないけど……でも本当に寝ているのかなあ？」

最初にこちらに來たのは声からしてA R 15らしいが、後になってきたのは45だろう。前者はどうやらローガンが寝ているだけだと思っただけだが、もう一方はそうではない。こちらが狸寝入りを装っていることに気付いているような声色になった。本来ならここで寝てないと言つて目を開けてやるなりすればよかったのだが、疲労が重なつて気が緩んでいたこともあつていらぬ悪戯心が湧いていたのでそんな簡単なことが考え付かなかつた。

一人に八つ当たりで殴打された痕を他に見せまいと外さなかつたスカルマスクが取り払われ、鼻から下が外の空気に直に晒された。それで耳に聞こえてきたのは驚きに息を呑む、そんな空気の流れの音である。

「あくあく……これはなかなか酷いね……。マスクが一部抉れていたし、傷をあまり見せまいとしていたのかと思っただけど、まさかこんなになってるなんてさすがに思わなかったわ」

「こんなに痣になつて……怨霊達にやられたにしてはあまりにも多すぎる……。私達の誰かにやられたというの……!?!」

「まあそうでしょうね。敵ならやられたままではいまいだろうけど、仲間内ならあまり手を出せないのがローガンよ。サンドバックには喜んでなりはしないけど、発散するには付き合ってくれるのだから……」

あれ、な〜んか聞いてて恥ずかしくなるようなことを言われてませんか？ 具体的にいえば居心地悪くなつてきてますしいたたまれなくもなつてきているんですが？

無機質な物質で形成されているわけではない、火にくべられれば燃える有機物で成り立っている案山子の前にいる二人の会話で、冷や汗がダラダラと流れ始めるのを自覚するのはそう時間はかからなかった。

下手に拗らせてはこの間みたく45からノーモーションスマイルパンチを食らうことになる、と結論付けてローガンは白旗を上げた。

「……頼むからこれをやった奴には突っ込まないでやってくれ。吹っ切れて立ち直るきつかけを作つてやる為の必要経費だったんだよ」

「やっぱりね。私が基地で見かけた時はなにかが喉元につつかえているようだったから、まさかかなくって思ってたけど」

45の方は仕方なしと肩を竦めるが、AR15の方は釈然とおらずぶすつとした顔だった。それを見たローガンは苦笑いになりそうになったが、脳から生み出されるアドレナリンが切れたことでそんな表情の変化にも痛みが生じた。すぐに顔を顰めて痛む箇所を手を当てて耐え、心配する彼女達に言った。

「心配しなくていい、大丈夫だ。時間があればこんな怪我也治る」

「……帰ったらちゃんとした治療を受けなさい。さすがにそのまま自然治癒に任せるにしても、完治するまでその顔を見るのはメンタルに悪いわ」

「言われなくてもそうするさ。45のみならず、お前からも殴られるんじゃないや……あ、やめて。そう拳を片手に打ち付けるのはやめてくださいとても怖いです人形の腕力がバカにならないのはもう学習しましたから勘弁願います！」

黒いオーラをうつつすらと浮かべるAR15からローガンは腰を浮かして逃げ出そうとした。身体の節々からの訴えまでも無視して両脚に力を込め、外へと駆け出そうとしたところでハッチの上で立っている人形を見て止まった。

「お取込み中だったかしら？それなら出直すけど」

「ああいやむしろナイスだグローザー！いやナイスなのかよくわからないけど後ろの方々

が怖いから助けてくださいいな！」

すぐさまグローザの背後に回った大の大人を見た途端にARR15は何か言おうとしていたようだが、電腦の処理が様々な結果を弾き出した末には言えなくなったように深く溜息を吐いた。45は彼女の肩に手を乗せて用があるようにしてこちらに来たグローザの方を見た。

グローザも最初は状況を掴めなかったようだが、ローガンのスカルマスクが取り払われ顔の下半分が晒されていることに気付いた。それが一体どういうことなのか、わからない彼女ではない。鋭い視線が向けられていることに得心がついたのか素直な想いを言葉に乗せて行つた。

「ごめんなさい、今日まで私は自分の事で精一杯だったからローガンを傷つけたわ。私だつて大事なものが傷つけられれば怒るから、あなた達が私に憤りを感じるのもわかる」

45はともかく、ARR15の方は謝罪されるとは思っていなかったよう毒気を抜かれたように表情が消え失せた。心境の変化と言われれば聞こえはいいが、ここまでで彼女が参加している会話を聞いている限りでは謝意を示した台詞を聞いた覚えはローガンにもない。だから少なからず自分も目をパチクリとさせてしまう衝撃を受けた。

「ARR15、あなたの言う通りだった。この男……ローガンは敵意を抱く者には容赦し

ないし、言葉遣いも悪くなる。だけど誰かを助けるのに必要であれば自分から自身を火の中に投じるような無茶をしてまで成そうとする危うい面もあることも。そうした手段で身体を張って信用させてくれるんだってことを、あなたは言いたかったんでしょ？」

「……そうよ。私もまだ実戦の場でローガンと共にしているのはそんなに数多くはないけど、安全と危険の境界線が無いに等しいわ。付きつきりで引き留めることはできないけど、恩人が自ら死に行こうとする真似を止めるのが悪いだなんて誰にも言われたくないわ」

「異を唱えるつもりはないから安心して。明日のあなた達の指揮官の命日の数日後に私は一度本部に戻るようになるけど、そこで移転手続きをするつもり。ヘリアンさんに申し出でてみたら許可してくれたからたぶん大丈夫。でもまあ、ローガンに恩を返す、というのもそうだけ……」

グローザが振り返って修復を受けている人形達の方を見たのでローガンも做ってみる。ただもう別で同じ人形を見ている者を目の当たりにはしているのでなんとなくわかっていった。

「あなた達の副官からも『お願い』されちゃったしね。私情では組織を動かさないけど、忙しかったりするのにかまけて長い間空席にしていた副官代理の席について欲しいっ

て。私自身も彼女と一緒に時間を過ごしてみたい、そんな感じね」

「前向きに考えてくれているのは何よりだが、軟化しすぎじゃねえのかグローザ。俺からすれば全くの別人としか思えねえぞ」

「別にいいじゃない。凝り固まってたのを起爆して吹き飛ばしてたら気持ち的に軽くなったんだもの。文句を言うのはいいけどこうなったのはあなたのせいよ?」

45とは違った大人っぽい悪戯心に満ちた言葉をぶつけられてローガンは押し黙った。後ろ手に組んで小首を傾げてながら微笑んでいるが、琥珀色の瞳に映っている自分はさぞ滑稽な様になっているのかもしれない。

考えるのも億劫になってきているのだから、ローガンはもう細かいことは明日から考えることにした。

とりあえず今ローガンがすべきことは……。

「ええとだな……」

グローザの言ったことから色々と問い詰めようと、顔面パンチをお見舞いする時には必ず浮かべていた黒い笑顔をもう隠すことなく表出させた45と、仕方ないとはいえ自分が彼女に言ったことが暴かれたこともあつて羞恥心やら何やらが織り交ざっているようなAR15。その二人がゆっくりとにじり寄ってきていたのだから。

この後ローガンは誰かに助けを求めることも何もできず、二人から詰問を受けること

になった。そんな様を眺めるグローザの内面に長い間降りしきっていた雨が止み、『雷雨』という異名とは無縁に思える晴れ間が差し込んだということ。彼女が本部へ発ったその日にローガンはスオミから教えられたが、AR15と45から様々な釘を刺されていたのでなかなか複雑な心境であつたという。

— 〈Unknown〉 —

『……誰だ？』

『よう、オレ様が死んだと思っていたら？』

『まさか……貴様、生きていたのか……!!』

『おかげさまでな。確認を取るつもりだったんだが今の言動ではつきりした。てめえだ

な、あのクソサイコ共を差し向けたのは』

『……貴様のような野良犬を使い潰すにしてもあまりにも危険性が出てきたんでな。暴かれる前に消してやりたかったんだが生きているとは想定外だ』

『おかげでオレ様について来てくれてたあいつらが全滅しちゃった。もうてめえなんかに従う理由なんざ何一つねえ。いずれは追いつめて殺してやる』

『好きにしろ。貴様ではなにをしてもこっちのことを嗅ぎまわることなぞ出来はしない』

『そうか？ 政権を行使できる側に回りたいといつて、ロシアの急進派に実戦データの収集にも役立つと言つて情報を提供し、亡命しようとしていること。オレ様を死なせるようとしているさっきの言動で信憑性が上がったぞ。本当だとしたら鉄血のネットワークも存外に馬鹿にならねえな』

『あの鉄屑どものネットワークにアクセスするなど、戦術人形ではない貴様がしてタダで済むはずがないだろう！』

『ああ、必要なプロセスを省いての強行アクセスなんてすればそりゃあそうだ。エンジニアみたく電子に強い人間でなけちやあ、奴らの検査プログラムに引つ掛かって即アウト。こんな風に悠長に通信している暇もねえよな』

『だったらなぜ……！』

『もう絶対に友好関係にはならない、敵になってるてめえには教えてやらねえよクソが。だけでもまあ、思いもよらないお友達が出来た、とだけは教えてやる』

『……まあいい。貴様が今回の件の首謀者であり逃亡している凶悪犯と仕立て上げることはできる。精々逃げ回るといい』

『追われの身となってるのは今も昔も変わらねえ、痛くも痒くもねえよ。そうやって泥を自分とは関係ねえところに塗りたくってればいい、いずれは全部返ってくるんだ。そうしてもう表舞台に立てなくなるのを楽しみにしているさ』

『さらばだ、『爆炎』。貴様がまた怨嗟の炎を吹きあがらせる噂を心待ちにしてやる』
『心配するな。次にデカイ祭りをやるんだとしたら、てめえが死ぬ、その時だ』

36. 砂塵舞う大地へ —The uncertainty—

朝になって保護区から飛び出したのは三時間ほど前。道中で運転を交代したりして、飾り気も何もない SUV を走らせ続け目的地が見えてくるまでの道中に横槍が入らなかったのは幸運なのかそれとも……。

そんなやや後ろ向きになりながらも、近年では放射能により突然変異を起こし一部だけに密集した植物と広範囲の砂漠化で成っている区域、フロリダ州に到着した。砂塵が舞う廃墟の近くに車両を止め、キーを回してエンジンを切ると後部座席で座っていた人形が助手席で寝ていたチームメイトを起こす。

「ほら、ついたわよ。あんたの仕事なんだから準備しなさい」
 「んう……わかった……」

お馴染みに思えるその様子を見たここまでの運転手、ローガンは苦笑すると頭にいつものニット帽代わりに持たされた物品を手取る。運転している間もチラチラと目が向けられた、視界を砂塵の中でも確保する為の防護ゴーグルを取り付けている帽子である。耳を覆うようにもなっている、全体的に暗色のそれを被り自分の装備が全て身に着

けているのを確認。それからローガンは助手席に座りながらターバンに四苦八苦し
ている人形、G-11の手伝いをしてやった。髪と同色のそれを丁寧に巻いてやり、最後
にそう簡単に巻きなおしにならない方にしながら、ローガンは後部座席にいる二人に声
を掛ける。

「お前達も準備はいいか？昨日のブリーフィング通り、先に俺とG-11が外に出る。想
定外の事が発生したらお前達も対処してくれ」

「ええ、大丈夫よ」

「同じく。ここで躓いてちや仕方ないしな」

愛銃を両手に持つ戦術人形の二人、HK 416とAEK-999ことバルソクにそう
返されてローガンは頷く。そして弾倉を込めたG-11に目配せしたから『ハニーバ
ジャー』を持つて扉を開け、熱気が溢れている空間へと身を投じた。

車輻から外へ、砂がやや降り積もっている大地へと片脚を置いた瞬間に外気に触れた
身体の毛穴が一気に開いたのがわかった。無論ローガンも砂漠の上に立つことになる
となればこうなることを予測をしていたし、ここに来るまでに冷房をガンガン効かせて
いるのに肌に汗が浮かんできたりもしていたので覚悟していた。熱帯や寒冷など極端
に厳しい世界に赴いた経験があっても慣れるのはそう簡単なことではない、その言葉を
噛みしめながらローガンは車輻の外へと完全に出た。

燦々と照らしてくる太陽を出発前に渡された特殊サングラス越しに睨みつけてから集合地点として指定されている一帯を見渡してみる。視界に映るのは砂ばかりというわけではなく、かつてリゾート地帯と呼ばれていたその名残が目についた。そこそこ大きい外食店やアロハシャツなどの衣服の販売店に、既に荒らされた装飾店などなど。ここに来るまでもグリフィン本部のビルを彷彿とさせるホテルらしき廃墟も見えてもいたので、金持ち達が謳歌していたであろうと想像させられた。

だがそこで一つ問題がある。事前に伝えられていた時間帯で指定されている場所にいるというのに、人影が一つもないことだった。

「……ローガン」

「ああ、わかってる」

いや、正しく言えば姿を現さない、だ。G-11のようにローガンも明確に確認できてはいないがなんとなく気配を感じている。複数の視線が自分と彼女に向けられているが、その主達は一向に出てこようとしていない。まるで地面をなんとなく見ているうちに視界に入ってきた蟻を観察しているように、なにもせずただ『見て』いる。

それだけのことはあるが、やはりこちらとしては気分がよろしくない。指揮官のハリと十分な打ち合わせを機器越しにしていたであろうに、敵意を抱かれているようではならなかった。

「まあ、警戒してしまうのもわからなくはないんだが……とりあえずG11、お前ならどうするよ?」

「まず一人、隠れている場所を特定できたから警告ということでは付近に一発撃とうか」「不許可だ。今回は外部組織との協力をしながらの仕事だぞ。それじゃ決裂してしまうだろうが」

「じゃあこうする」

「ずんずんと歩く小さな背中を目線で追って行くと、不意に立ち止まってしゃがむ。そしてそこで砂を掴むようにして掌で驚掴みにすると一気に持ち上げた。途端に露になるのは、匍匐姿勢で銃を抱えて震えている人間の兵士である。その瞬間に離れていたローガンでもわかるほど、ターバンの合間に見える両目に負の感情である恐怖が吹き上がった。」

「うわ、うわああああああああああああああ!!」

一人の兵士がパニックになったことを合図にあちらこちらから銃を構えた気候に合わせた装いの兵士が出てくる。両手にはカラシニコフの小銃があり、銃口の多くはゆつくりと立ち上がったG11に向けられている。ローガンも言わずもがなではあるが、一応本心に敵意を無いことを示すために両手を上げた。が、付近から大量の兵士が敵意剥き出しで出てきたことに反応して車輛から出てきた二人に制するように片手を向ける。

そして銃口を向けずに下げるようにサインを送りそうさせた。

「やっぱりそうだ！戦術人形なんて全部敵でしかないんだ！」

「I. O. P 製のだって鉄血となにもかわらねえじゃねえか！平然としているあの様があのカス共と違いないことを物語っているじゃねえか！」

おいおいそれはないだろ、とローガンは嘆息した。後ろの車輛で待機している二人はこちらの指示通りに銃を下ろしているし、G.I.もローガンと同じように両手を上げて大人しくしているだけ。ただただ、隠れて様子を窺い続けていた兵士の隠れ蓑を剥いだだけだ。たしかにそのステップを踏む前にここ一帯に聞こえるような声を張り上げたりしなかったのは問題があるのだろうが、こちらは提示された条件にも従っているし何一つ破っていない。

「おい待て落ち着けよ。こんな所で銃弾を無駄にするのはどちらにしても悪い方に転ぶに決まってる。それに落ち度があるのはお互い様だろ」

「ぎげんなグリフィンのクソツタレが！てめえはマウントを取った気になってんじゃねえってんだ！」

近づいてきた兵士の一人がアサルトライフルのストックでローガンの腹部を殴打し、衝撃で折って下がってきた横面を二撃目として殴った。

ガンツ！と衝撃と痛みが最後に体勢を崩し両手と両膝を砂の大地につき、ローガンは

味覚で鉄の味を感じ取ったことで口の中を切ったのだとぼんやりと思ったが、それだけでは状況は終わらない。

ガチャリツと次いで聞こえてきたので、銃口が近くで自分の頭部に向けられたことを察する。顔を上げてみれば予想通り、顔を露にして感情を剥き出しにしている兵士が今にも撃つ様相でこちらを睨みつけていた。

「ローガンッ！」

「……!!」

我慢ならなくなった416とバルソクが銃を構え直して今度こそ敵意を吐出させるが、数としてはこちらが圧倒的に不利。ダミーはおらず、自分とG11はいつ撃たれてもおかしくない状況である。戦術人形である彼女はまだなんとかなるのだろうか、ただの五体満足な人間であるだけのローガンは頭部に一発撃ち込まれるだけで人生が終わる。

「だからお前ら、銃を下ろせって……!!」

再度呼び掛けようとしたところでもう一発ストックで殴打される。サングラスが目の前に地面に落ちたので少々拾いたい欲に駆られそうになったが、一触即発の状況下に陥ったのでもう下手に動くことが出来ない。この集合地点で出てきた兵士の人数はおおよそ二十人ほど。口々に罵ってくる彼らに対して有効手段はこちらにはない。それ

どころか、自分から次に何かアクションを起こそうものなら、引き金にもう既に指を掛けていたので撃たれるに違いなかった。

まずはここから、といった序盤から躓いたことに吐き気までもが出てきたその時だった。

「なに勝手なことをやってやがるてめえら！銃を下ろせ、まだ上げてる奴はぶっ飛ばすぞ!!」

使われているのが大体同じ色彩による絵画の中であれば一際目立つ彩色が為されている物のように、上空高くまで真つ直ぐ響かせるような声が鼓膜を震わせてくる。その声により喧騒が静まり返り、どよどよとした焦燥が辺りに生まれてきた。ローガンが顔を上げて見て見ると、肩に僅かに届かないぐらいに切り揃えた黒髪に鋭く吊り上がっている黒目、健康的な印象を与えてくる小麦色の肌の女性がそこにいた。それだけなら一介の民間人と違わないのだが、漆黒の日よけマントの下のデザート柄の迷彩服と黒のタクトツップの装いに加え、両手に持っている『ドラグノフ^v』^Dがそう感じさせない。

そんな女兵士は姿を現した表通りから歩いて警戒している416とバルソクを通り越すと、ローガンの近くで狼狽えている兵士の元に来た。そして加減していないのが丸見えの拳を振りかぶって、その兵士を殴りつけたのである。

ギュルルルルンツ！と効果音が付きそうなほど、先程まで自分に暴力をふるった

兵士が目の前で回転しながら吹っ飛んだことにローガンは驚いていると、女兵士は青筋を額に浮かべながら怒号を発した。

「この馬鹿野郎が！まさかと思つて見に来てみればやつぱりこれだ！手段を勝手に選ばせてやるとまででめえに任せてやつた覚えはねえぞ!!」

「で、ですがリーダー。こいつらの一人がうちの隠れ蓑を剥がしたんですよ!?それだけでも敵対すると受け取れるでしょう!？」

「んなわけねえだろうが、勝手にめえらの都合のいいように解釈してるんじゃないやねえ！大方、被害者の建前を得られるように出るべきタイミングで出てこなかっただけだろう!!」

殴られた兵士が地に伏しながら言い訳を並べているが、リーダーと呼ばれた女兵士の勢いは衰えない。むしろ薪をくべられたようにして勢いは増していった。

眼前で繰り広げられている身内での騒動にローガンはどう動けばいいのか分からないうが、とりあえず落ちたままになつているサングラスは拾えるものとして取り戻しておき、かけ直しながら全体を改めて見まわしてみた。やはりこの女兵士が来たことによる影響が大きいのか、この場にいる全員がざわついている。

庄による拘束が解けたことでG-11がこちらに駆け寄つて手を貸してくれたので、それを手に取つて立ち上がり成り行きを見てみると、416とバルソクもこちらに来た。

「とりあえず、私達が一方的にリンチにされることはなくなった、ということよね」

「たぶんな。初っ端からキツイのをもらつた時は話すことすらも絶望的だと思つたんだが、とんでもないことになつたもんだ」

口内に溜まつた血を吐き出して診ようとしていたG-11を制してもいると、話が終つたらしい女兵士がこちらに來た。至近距離から非難を食らわされていた兵士がそこで立ちながら俯いているのを放っておき、こちらに砂に足を捕らわれることなく堂々と歩いてくる。それだけなのに、さつき数十名の兵士に銃口を突きつけられた以上のプレッシャーを感じたのだがそれはきつとローガンだけではない。

「うちのもんがすまなかつたな、お客人達。頭が悪いこいつらにはまたキツく言つておくし、私達の拠点でその傷の治療もする。今回はそれで許してくれ」

「いやまあ……うん、別にいい。こつちもあんたたちの話を聞いていたというのに関わらず配慮に欠けていたしな。とりあえず、落ち着ける所で話を聞かせてくれ」

女兵士がふてぶてしい態度を取るのかと思つていたのだが、素直に頭を下げたのだからやや拍子抜けだった。腰からしつかりと曲げて謝罪するその様は欧米人では全くと言つていいぐらい見ることはない。ローガンは顔つきからして東洋人、中国や韓国、もしくは日本で生まれた人間なのではないかと考えた。

「わかつた、そつちの指揮官と話し合つた通りに私達の拠点に先導することにするよ。

私の乗り物は向こうに停めているからそれについてきてくれ。拠点周辺にいたらこっちのものが誘導するからそれに従ってくれればいい」

「オーケー。それじゃまた後で」

「よし……てめえらは歩いてきやがれよ！ここまで来るのに使ってた乗り物は他の奴らにもう回収させてあるからてめえら自身の足で帰って来い!!」

最後に残された命に幾ばくかの兵士がそこに座り込むなりしてげんなりとしているが、こちらでも聞いていた約束とは違う事をしていたのだから自業自得だろう。だからといって良い気分には浸っているわけではないのだが、こちらに傷を残すように手を上げたのはあちらの方が先であり、誘発するようなことを招いたのも相手方だけでもある。

できるだけこんな暑い所に居たくないとも思い、ローガンも自分達の車輛の方にも戻ろうとして一人に怨憎の念が込められた視線を向けられているのに気付いた。この区域にてここまで強い思念を向けられることをした覚えはないのだが、ローガンは振り返って探してみると一番自分に高圧的に威圧した兵士が目につく。それですぐに筋違いの逆恨みの主が誰なのかが確定した。

勘弁してくれよ、とローガンは頭を掻きながら特に相手にせずには車輛にまた向かったのだが、それが気に入らなかつたらしい。乗り込んでから一瞬だけ横目で見た時には、付近にいた仲間達に羽交い絞めにされていながら、何かを叫んでいた。

「マスターは人気者だな。人も人形も関係なく関わり合おうとして来るんだから」
「笑えねえ冗談はよしてくれ。ああいった連中とはいい思い出が皆無、トラウマにもなりかねない記憶の一種だよ」

キーを回してエンジンを始動させるとそこから離れ、女兵士が着用していたのと同じような柄のSUVに追従する。四駆車でも走りにくい行路をスイスイと走っている彼女のおかげでこちらにかかってくるプレッシャーは少ない。

それによって生まれる余裕で思い出されるのは二週間も前の事だった。

〈十四日前〉

大欲怨霊事件から三日、和解したグローザがヘリアンと共に本部に帰還した翌日の事である。

当日のローガンはオフということとでA R 15とM 16に連れられて保護区内にある商業区に向いていた。グリフィン内の料理対決という景気づけのイベントに備え、手分けして各品を集めるとして渡されたメモの通りに指定された器具を籠に放り込んでいる最中に通信機器のバイブレーションが働いたので見てみる。画面には我らが指揮官の名が表示されていたので小声で応答すると口上での挨拶はそこそこに用件はすぐに伝えられた。

「緊急方針会議？」

『うん、今さつきその連絡が来てね。ホログラム越しに組織の重鎮を交えた会議が五日後にされることになったんだ』

肩と湿布やらなにやらが貼られている頬の間に挟んでいては会話しにくいと思い、片耳にイヤホンマイクを押し込んで起動しリンクさせる。先日の作戦から身体の動きは悪くないが、細かいかすり傷や痣があったりしてて何か触れる度に付近の傷が痛むので持ち出して正解だったとローガンは思った。

「急ぎの用、つうか俺が直接的に関わることないんじゃないのかその会議。重鎮の中に

変哲のない一兵士がいるんじゃないだろ」

『ところがどっこい、それが君の席まで用意されてるんだよ。鉄血のハイエンドモデル二体の掃討した人間兵、というのが相当関心を引いてしまってる。元々君という人材を起用するには僕も手を焼いたんだけど、こんなところでも面倒なことになるとはね』

会話しながら商品棚に置かれてる使い捨ての食器セットを籠に放り込む。週の三食、練習も兼ねて夕飯の時間帯では自分達で調理して食事を取るようになったのだが、基地内の食堂やカフェから食器類を借りることはできないのでわざわざ購入することになったのである。世界的に金属が不足している状況下であるのだから店頭に並べられてるのは、よく食事を取る箇所とは違って安価な素材でできているものばかりだ。とはいえそれに比例して財布の紐を解きやすいので悪いことではない。

スプーンやフォーク、最近では珍しく思える陶器の皿を入れたりしてもう一度意識を電話の方に向けた。

「でもなんか、別の意図を感じるな。気のせいならいいけどよ」

『ご明察。誰かさんが重要情報を秘匿していたからね。参考人として引つ張り出したかったんだろうね』

「その件は悪かったって言うてるだろ。敵からのボイスメッセージへの信頼性なんてわからないし、タイミングの問題でもあったんだからよ」

『でも今後はないようにしてねローガン。良くも悪くも情報一つで一気に躍進できることがある。今回はそれがこつちに追い風を吹かせたけど、先日の戦いで失敗していたら向かい風ばかりで前に進むこともできなかつたから』

わかつたよ、と最後にローガンは苦々しげに返してからメモを見返して忘れていたものが無いか確かめる。そうしてる間にも気まずさを起点とした居心地の悪さを感じはしていたが、一連の流れから察しはついた。

『とにかく君が把握できている『オアシス』に関係した情報を君自身が話さなければならぬんだよ。僕はその補足で、話のまとめ役としてヘリアンさんから指名されてる。今回こうして急ぎで連絡淹れたのは了承をもらおう為さ』

「断ろうものならお前の立場も危うくなるよな。わかつた、とにかく五日後に緊急会議というのに出席する。詳しい要項とかあつたらメールで俺の端末に送っておいてくれるか?」

『もちろんそうするよ。詳細な日時だとか参加する要人の名前とかその他諸々ね』

また明日からの仕事が増えたことに加えて組織内で位の高い人物が集う場に当人としていることで気が重くはなりながらも、ローガンはハリーとの電話を終わらせて電子機器を仕舞った。ハリーにはあのように言ったが、本当の所まだ不透明であるので話すか迷っていたのである。アッシュからの言い渡されたことが真実か否か、それだけでな

く一度だけヘリアンから直接言われたことがローガンは気になっていた。

さらに大欲怨霊事件が収束の兆しを見せ始めた昨日にハリーから教えてもらったことだが、『アネクトド』の要求はやはりというべきかワシントンD・Cで死亡が確定された元政府所属のVIPが所持していたとされているUSBメモリーだった。暗号パターンが元アメリカ陸軍基地で入手したデータと共通していることからして、やはり無関係ではない。

細かく話さないとなのか、とローガンは気が重くなった時だった。

「ローガン、まだなのかよ？ 私は腹減ったんだけどな」

「私達のは終わったのだからあとはローガンだけよ。なにかわからないものがあるの？」

声のした方を見て見ると、いつもとは違う私服姿のAR15とM16がいた。メンタルモデルが年頃の少女に設定されていることもあって、二人もお洒落している。彩度が低くとも柔らかい印象を持たせる黄色とは対照的にそれが高い赤寄りの橙が裾でラインを引いていたりと秋を連想させるワンピースに、その上から焦げ茶色のジャケツトを着用しているのはAR15。ラフな黄緑のシャツの上から薄手の青いパーカーに袖を通し、黒いGパンを穿いていて自分らしさを前面に出しているのはM16である。

やっぱり二人とも美人たよな〜とかぼんやり思いつつも、二人の呼びかけにローガン

は応えた。

「うんや、もう揃えたから会計を頼むだけだよ。そっちはもう終わったのか、早いな」

「まあ私でもここらにはぶらりと出入りすることあるから大体どこに何があるのか分かる。あとはそれが必要になるかどうかだよ。それでも最近」

「そう言つて昼食後に行く食料品売り場でお酒のコーナーにずっと留まらないでM16。用があるのは料理酒だけでそのまま飲むつもりはないんだから」

「おおつとお、早速釘を刺してくれたな。別にいいだろ、見るだけならよ」

「あなたの場合、皆で出し合つて集めたのとも別で自ら有り金をはたいて買いかねないから言つてるのよ。今度の定期健診で引つかかるわよ」

いつものような会話がされているのに混ざりたい気持ちはあつたが、遅れているのは自分なのでとりあえず背中でききつつ会計を店員にカウンターで頼んだ。ある程度は企画主たちから軍資金として渡されていたのだが、やはり無駄遣いはよろしくない。だからAR15の言い分は最もだと、ローガンも領ける。

さすがに定期健診という戦術人形の各器官の健康診断も兼ねての単語がAR15の口から出たことによるインパクトが強かつたのか、次に聞こえてきたM16の声は引き攣つたような、動揺している印象を抱かせた。

「だ、だけどよおAR15、スプリングのバーでも日本酒はありつけないんだぞ？ たまに

はさあ……」

「羽目を外して一晩で飲み干し、アルコール分解機能がオーバーヒートして全機能が停止した去年を忘れたの？ 健診に引つ掛かっただけじゃなくてあれでM4が一番取り乱して大変だったのだからまた同じ目にあるのはごめんよ」

「俺がない時期にそんなことあったのか……いや、M16のことだから一回だけの事じゃない気がするんだが……。AR15、そこんとこ後でちよつと詳しく」

会計を終えたローガンは悪戯心が湧きださせた言葉のまま付き従ってくるAR15にそう言う。M16がこちらの脇腹をどついてくるが、時々おちよくられたりする仕返してある。なのでやめてくれとばかりに困ったようにしていても、これ以上踏み込むのはまずいと感じるまでは聞かせてもらおうつもりだ。

「そうされるのが嫌だったら自分の持ち金で買うのはやめてM16。ローガンも子供みたいに弱みを得ようとしないでよ」

「わかったよ、そのつもりはなかったがさすがに自粛する。あんなに狼狽した妹の顔を見るのは戦場以外じゃコリゴリだしな」

「うい……まあいつか……」

AR小隊の良心の一人、というよりも最終防波堤にストップを掛けられたのでローガンはやや不服ながら諦める。

とりあえず購入した商品が入った二つの大きな袋を片手に持ち直し、この区内である飲食店を通信機器で表示させようともう一度取り出す。するとAR15がローガンの軽くなつてゐる方の手に自分の白い手を重ねた。

「それでローガン、さつき何を話していたの。様子からしてそこそこ大事つぽかつたけど、電話の相手は基地にいる誰かしら？」

「……故意に聞いていた、わけではないようだな」

「あの店は外からでも見えるようにガラス張りになつてゐるから、目を凝らせばわりと中に誰がいるか見えるさ。だから非売品で展示されている日本製の陶器に目を奪われてるお前の姿もその気になればわかる」

ハリーからの電話を取る数分前の様子まで知られたことにローガンは嘆息した。いや、彼との電話をしたのが知られるのはまだいいが、その前に自分の興味・関心を惹かれた物がなにかまで知られていたのは少々恥ずかしい思いもするものだ。執務室を共にし、三食を共にしていることもあつてこちらの趣味すらも既に知られているのを今更、と当人達からは言われるだろうから決して口にはしないが。

ハリーから口止めされているわけでもないし別に隠すことでもないということ、ローガンは緊急方針会議の事を話した。

「なるほどね。一兵士が招集会議に参加することになるのは異例と言つちや異例だが

手つ取り早く把握している情報を誤りなく知るには効率的ではある。でも大方、指揮官やローガンが気に入らない奴が吊し上げの振るいに掛けたいつてことでびつたしくる理由をつけて提案されたんだろうが、そこに結果を急いで得ようとする連中が乗つかつたんだらうな」

「所属する兵士一人を排斥するのを目的としているのなら陰気で随分回りくどいじゃない。本部の黒い噂の話は端々に聞いていたけど、噂というにしてもあまりにも信憑性はないわ。でも本当の事ならそこまで腐つてたというのかしら？」

「正規軍、というよりも政府上層部の一人に謀殺で亡くなられたクルーガー氏を思い出せよ。あの頃、著しいとはいかずとも正規軍よりも着々と戦果を上げれていたのは間違いない。先代指揮官のような優秀な人がいたからこそだが、そんな人材を育てて生み出したのはあの人だと言つても過言じゃない。発覚して犯人がお縄になった時には歳もかなりのもんだつたから獄中で死んだが、そいつの犯行動機は『政府にはないものをたくさん持っていたから』とか言つてたそうぞ」

今となつてはもう過去の話となつたそれを、聞きかじつた程度であればローガンも耳にしている。

一般的に呼称されているのは『グリフィン』ではあるが、正式名称は『グリフィン&クルーガー社』である。それを設立し最高責任者の初代社長を務めたの

は元ロシア内務省で軍人として働いていたクルーガーこと、ベレゾヴィツチ・クルーガーという男性だ。運営にあたって戦術人形を起用し人類の犠牲を最小に抑えるだけに留まらず、鉄血人形の反乱の始まりとなった『蝶事件』にて諦める他PMCとは違って地区侵攻を阻止したりと数々の功績を残している。

そんな彼が亡くなった要因を作ったのはM16の言う通り、彼に異常なまでに嫉妬した拳句に死に追いやったのはロシア政府関係者。結局は視野が狭く融通の利かない老人によるくだらない感情のもつれから来た事件だったが、その後には点在している支部の指揮官の喪失と合わせて大きな損失を被ったと言える。

「誰しもがもっている負の感情を暴走させれば、人だつて殺める殺意に膨れ上がる。そう言いたいんだよな？」

「そういうことだ。純真に努力を積んでいても望んでいたほどの結果を得られる保証はない。繰り返される望まぬ未来が繰り返されれば、隣の芝が青く見えるどころか輝いて見えてくる。そうなれば蓄積された強い感情の吐き所を求めてしまつて暴走列車になるんだよ」

「現実味どころか説得力のある説明ありがとよM16。とにかく当日は墓穴を掘らないように気を付けるさ」

真剣そのものの表情から一転し礼を述べられたM16はニカリと笑つて表情が良く

ならないAR15の肩を叩いて諫めた。細長い彼女の指がローガンの手から離れていくが、雑談を始めたM16に意識的にも引っ張ってくる彼女の手に対抗し始めた。膝下のワンピースが翻って露になる美脚に視線が持つていかれない様に通信機器の画面に固定する。

「で、AR15。この際だし後で仕事の合間にも手を出せる菓子も見て行かないか。そろそろ切らす頃だろ？」

「そういえばそうだったわね……。この間買ったのはクッキーとかキャラメルみたいな菓子だったし、趣向を変えてみようかしら？」

「たしかこの辺で『伝統の味を引き継いで』云々を商売文句としている日本の菓子つうか和菓子の店があつてだな。たまにはそういうのも良いとは思うんだよなAR15」

「……なんでそう言いながら俺の方を見てんだよ。いや、興味がないと言えば嘘になるけどよ」

ニマニマと笑みを浮かべているM16にローガンは肩眉を上げながらそう言うが、M16はまともに取り合わずに『別に？』と口笛を吹き始める。AR15は先を歩き始めるM16の背中を少し見ていたが、溜息を吐きながらこちらを見上げた。

「ローガンは和菓子を食べたいのかしら？」

「うんまあ……。M16みたく今の自分の所持金減らして無理にとは言わないけどな」

こちらを射抜くように見てくるAR15に嘘を言わずにありのままにローガンは言う。ローガンもビスケットやクッキーも良いとは思いますが、小麦粉やバターなどでできた菓子以外の物も食べたくなる。だからといって飴やガムみたいなしばらく口の中に残留するものを勧められたのだとしても、業務時間中に微睡んでしまわぬようにする眠気覚ましのものしか口にできない。なので昼寝になる直前のSOPIIにも渡したりするグミも含め、長時間舐めたり噛むそれらは『仕事用』というように無意識に割り切っていましたので、今更甘いのをもらってもなかなか口にすることはできない。

なので買われた場合の休憩時間に出されるであろう和菓子はローガンからすればとても魅力的だった。

「本来ならダメって言うんだけど、私達に教えて練習に付き合ってくれてるだけじゃないくて、小隊内の集金にも少し出してくれたんだもの。結果はどうなるうともこれぐらいはお礼するわ」

「そうしてくれるのは嬉しいがお前は良いのか？当日までに時間をかけて納得のいくものが出来るようにするのはいいが、それに比例して素材を買う金もかかるんだぞ」
「わかってるわよ、そんなこと。でも私の身近にいてくれて協力もしてくれている人に今少しでも恩返ししたいのよ」

「その気持ちも嬉しいよ、嘘もなく本当にな。今日この時に与えた恩を返してもらおうの

も良いが後に持ち越そう。そんでグリフィンで大騒ぎした後で、俺達は俺達で祝賀会をしようじゃないか。そこで今まで作った料理を肴に酒飲めれば俺は十分だよ」

「そんなことでもいいの？」

「もちろん。下手に氣遣われるよりはそっちがいいと俺は思うよ」

心配そうにこちらを窺ってくるAR15の額にデコピンを軽くかまし、ローガンは足を止めた彼女の前に出る。そして振り返ってこう言ってやった。

「ほら行くぞ、AR15。そんな辛氣臭い顔してないで、もつと前向きに行く先を見てみるよ」

こちらを待っているM16の元に、迷う少女の手を取ってローガンは向かった。

——俺はあくまで彼女達についている影であって陽の光を浴びることはどうしてもできない。ただどうこうして、手を引いた末に送り出すことはできる——

そう思いながら。

〈現在〉

女兵士の先導に従って到着したのは鉄血の襲撃にあつて全滅したと言われている民生組織の基地の跡地であつた。誘導されるがまま内部に入つて見渡して見れば所々にその戦いの後が見受けられたが、使用するようになってからは機能面だけでなく見栄えも気にして補修作業を進めている。砂漠による熱気で汗をかきながら立てられた脚立によじ登つて板を打ちつけている工具をローガンはサングラス越しに見て労いの言葉を呟いたが聞こえてはいない。しかし非力な女子供の生活を確保する為にも仕事に従事しているのだから、決して悪いことではない。

トンカントンカンツ！と金槌の音をBGMにしながら、ローガンは青くなつていてという殴られた頬を診てもらい、内出血ということで湿布を貼つてもらつた。

処置を受けてる間に416は女兵士に挑発的な笑みを浮かべながら言った。

「わかっているのかしら？改修中の基地とそこに住まう人達。国家に民生組織として登

録されない限りは、大人数で銃を持って居るだけで難民でも地元民にしても『民間人』なんて見られない。もう立派な武装集団と見做されるってことを」

「そうなればお宅みたいなのPMCや正規軍に目をつけられもするってことまで考え付くのに時間は要らなかつたさ。だが自衛するが為に複数人と銃を取って戦っている間に鉄血に住処を追われた連中がついて来ていた。ネズミ算みたいに増えていったよ」

「事情持ちはもう皆一緒よ、特別なことではないわ。私達みたいな戦術人形に恐怖するのはかまわないけど、事情があるからと過激なまでに排除しようとするのはもうテロリストと変わらなくなる。一応グリフィンには各国家の代わりに鉄血の排除に従事しているのだからもし憚るのならそう判断せざるをえないの」

416の言う通り、各国家が有する正規軍の軍事力では鉄血兵の制圧が難しいということだ。グリフィンに一任されている面がある。目には目を、歯には歯を、戦術人形には戦術人形を。製造元が違って素のパロメーターには差があっても、I・O・Pも新たな技術を導入したりもして備えられている性能は総合的にそう変わらない。人間で構成された部隊による白人戦で戦っている正規軍よりもまともに戦えているのはグリフィン側だ。

国家に認められたPMC、その為に『戦術人形は皆変わらない』、『人形達が戦場に踏み入る余地はない』、『人間の^{じふんたち}中に紛れ込んでくるな』などどデモを起すだけならまだ

しも、本格的に銃をこちらに向けてくるのなら交戦せざるを得なくなってくる。もし今こうして居る間に狙撃を受けたのなら鉛弾が飛んできてこの場にいるグリフィン所属のローガンや416の誰かに命中した時は真つ先に会話している女兵士の組織を疑う。そうするだけの理由はもう数十分前に確実に出来てしまっているからだ。

「しかしまあ、ここの皆が俺達を過剰に厄介な余所者として見ていないのはまだいいさ。そんな連中はあそこにしたのが全員ならいいがな」

「あんなでも毎日見ている顔ぶれで気分だつてもう知れている。ほぼほぼ間違いなくあれで全員だよ」

「なら結構よ。協力関係を保つのに私達の傍に置かないで頂戴。それがお互いの為よ」

「そうする。さて、話の準備をしながら自己紹介だ。あたしの名はハルカ・タカハシ。ハルカと呼んでくれればそれでいい」

「顔つきから何処かの東洋人かと思っていたんだが日本人だったのか。よく極東からここまで来たな」

それはどうも、それとよくご存じで、と彼女はニヤリと歯を見せて笑いながら部屋の隅で待機している部下に命じ、備え付けられている戸棚から地図を引っ張り出させた。それを広げる手伝いをする女兵士、ハルカを見ながら脳にその名を刻んでいると、脇を416に突かれたのでローガンも名を明かした。

「ローガン・ブラック。グリフィン北米支部所属部隊の『シャドー隊』隊長だが、今回は共同作戦のグリフィン部隊の隊長になった」

「私は戦術人形のHK416。今回はローガンの補佐として臨時作戦部隊に所属しているわ」

「よろしく。それじゃ現段階で必要な自己紹介はしたということで、本題に入ろうか」

部屋の中央にあるアルミ製のテーブルの上に広げられている紙の地図に416と共に覗き込む。赤ペンによるいくつかの書き込みがある中で、とある一カ所が丸で囲まれながらバツ印がないままに強調されていた。

「あんた達が用があるのはこのフロリダ州の全域ではあるが、ここは地下にも開拓されて行き来が盛んに行われるようにもなった場所だ。そんでその出入り口がこの印の位置」

「周辺の地形と点在している跡地からこの星印が現在地、あんたらの基地のここだな。距離もそこそこあるし回り道せずに行くには徒歩しかない」

ここに来るまでの道は砂に幾分まみれてはいたが、それでもタイヤがスタックして進みが遅れるようなことにはなる程ではなかった。途中から遠くにフロリダの街並みが見えるのを景色にできるほど見通しの良い道路を走行したが、目的地に近付くにつれてまた波状に積もっていき楽な移動は期待しない方が良くとローガンも悟っていた。元

より極端な環境下に赴いての指令であったので覚悟してはいたが、照りつけるどころか刺すようにまき散らす太陽光に耐えながらの徒歩による移動はやはり堪える。

「移動方法は徒歩だとしても、地下への入り口は他にもあるわよね。そこだけに限定されているのは障害物がなくまだ使える状態にあるからかしら？」

「たしかに半分その通りではあるがもう半分は違う。最近になって出入りが激しくなってきた鉄血兵のマークが薄いというのが一番の理由だ」

「ハリー……指揮官からもそれは聞かされたけど、徘徊するのは違つて結集したり何かを搬入しているそうね」

「まだ搬入されている物の正体はわかつていないがな。運び込まれていると偵察した奴からの報告を受けたのは昨日の事ですぐにそっちに伝達して正解だった」

事前に聞かされた情報の一つにあつた鉄血達の動き。ハルカの兵が写真をこちらに渡してきたので見てみると、防弾性に長けたボックスを運んでいる二体の鉄血兵がそこに写されていた。二枚目の写真はそれらを守るよう、警戒態勢で周りにはヴェスピドやストライカーだけでなく、マンティコアまでもがいる様子なのである。

「尚更、楽観視できる状況じゃなくなつたな……」

そもそもこんな状況になつたことの情報をどのような伝手で入手したかは教えてもらえなかつた。だがワシントンD・Cと同様に密かに潜入し始めていることを知つた

以上は見て見ぬフリはできないということで即座に派遣されたのがローガン達である。

「当初の予定通り、あたしも使える奴を何十人か連れて協力する。ただ緊急時の部下への指揮は私が行う、異論はないか？」

「俺からはない。416は？」

「私達に敵意剥き出しに後ろから撃つて来なければ誰でもいいわ」

「善処する。人選や準備にこれから取り掛かるから時間をくれ。二時間後に出立するよう、そちらもそのつもりで」

416と頷いてからローガンはハルカの兵に促されるがまま退室するように二人で扉へと歩いていく。

ここから出た後は彼女達の部隊と共有する弾薬と食糧などの物資の荷卸しをしているだろうG11とバルソクと合流し作業を終わらせ、全員と改めて情報共有。ハルカの隊とは連携をできるよう、柔軟に動けるようにも打ち合わせた方が良いのかとも思えるが、それは後でもいいだろう。とりあえず基本的に互いに阻害し合わぬよう、隊列を別にするのも一つの手か、とも考えながらドアノブに手に掛けたところで、ハルカからの声がかまた背に届いた。

「そういえばこいつはあんたらの上司から聞かせてもらえなかったが、差し支えなければ少しは教えてくれよ」

「ハリーからはなにも教えられていないのか？」

「ああ、これはさすがにということでも口を割ってもらえなかったが、奴らの阻止だけを目的に人間のあんたまで来るのは何かあると思うんだよ。単に奴らを制圧するだけなら戦術人形だけでいいし、あたし達の協力は不要の筈だ」

事情を詳しく知らない上にグリフィンとの関係が薄い外部の人間ならそう考えて仕方ない。元を辿っていくとグリフィンも昔は戦術人形による部隊を持たず、人間の傭兵によつて成っていた民間軍事会社だ。しかしその名が広く知られている現代では戦術人形が主力ということで見られてもいる。

ハリーから聞いた話では、実際に現時点の基地の防衛を目的とした人員の配置ならあるが、遠征として送り出すことは異例だと言う事だ。ただもう既にローガンを隊長とした『シャドー隊』を設立させている。過去と照らし合わせれば今更や懲りずにまた、という印象を抱かせるがどちらにしてもイレギュラーでしかない。

なのでハリー独自の視点で現状を見ていない限りは、ハルカのように怪訝に思つて仕方ない。

それに彼から直接頭を下げられて頼まれた、というのが大きく了承したのはローガンだが、時折自身の指揮官が口で言ったのとは別の意図があるのではないかと疑念を薄々持つてしまっている。先日へリアンと一対一で話したことを思い出しながら鹹味し

ていった結果ではあるのだが。

「……教えてもらえない、てな感じだな」

「悪いな、こつちも抱えている事情だけに簡単に口を割れない。ただ、こつちからはお前達を裏切ることはいらない。奴らの排除とは別の仕事をするにしてもそれだけは確約するよ」

「ならいい。こつちからも必要に迫られなければ干渉しない」

ひらひらと手を振る彼女から視線を外し416と退室する。歩きながら胸ポケットに挿し込んでいたサングラスを着けて縁についている電源を起動しHUDを立ち上げた。ローガンも知っている通りの今回の指令を簡単に纏められているデータボックスをリンクさせている端末を操作して開きもう一度確認する。

一つ、現地にいる協力者たちと連携して不審な動きを見せている鉄血兵の排除。二つ、可能であればリーダー格の鉄血兵から記録媒体を抜いて所持したまま帰還すること。

そして三つめ。これに関してはハリーだけでなくグリフィン上層部の人間達から強く念を押され、最優先目標とされていることだ。今後で必要なことだということとは理解しているが、よりにもよって自分にその重石を直接乗せられることまでには今でも至れていない。一周周ったせいかわわわわしてどこか現実感がない、だが気分までもが

プレス機に掛けられているように全然弾まない、そんな感じだ。

「気持ちわかるけどしつかりしなさい。私は今回の指令であなたがいるから一緒に来たのよ。要のあなたがしつかりしないようじゃ……」

「そんなおつかなく凄まじれずともお偉いさん方から圧力も加えられているしわかつてるさ」

「いいえ、わかってないわよ。能動的かそれとも受動的に任務をこなすか、心の持ちようで兵士の実力の違いは生まれてくる。あなたならあそこで大人しく殴られることなかったでしょ」

単にあれは変な真似をしない方が良いと、余計な軋轢を本格的に拡大させたくなかったからだとローガンは思う。416の指摘の通りあの程度の速度の拳なら防ぐか躲すか、それどころか関節を極めて下に見られることはなかった。しかし前日に『協力者たちの大半が戦術人形という存在にトラウマを持っていてる人員』という情報が伝えられていたので、手出しをしようと思えなかったのである。

416は強くありつつも聡い人形だ。ローガンが手を出さずに受け身に徹していた理由はわからなくはないだろうが、やはり許容できなかったのだろう。

完璧であることを他人にまで押しつけずとも判定基準のレベルが高いな、とローガンは頭を搔いた。

「とにかく行くぞ。さっさとこっちも精神的にも準備を整えないとだしな」

何かを追加で言おうとしているチームメイトを置いて歩き出す。忌々しい邪念を振り払えずにいることを腹立たしく思いながら、最重要目標の文字を睨みつけた。

そこにはこうある。『座標』と『地図』を元に『オアシス』を奪取せよ、と。

37. 悩める者 — G r o p i n g m a r c h —

現代になって人間以外にまだ生存している動物といえど何があるのか、と聞かれた場合はローガンもまず犬や猫、または鳥を例に挙げる。ローガンもいるグリフィン北米支部の基地に迷い込んで来たりして、暇さえあれば世話したり相手していることから存在は既に認知しているからだ。他にまだ根なし草として放浪していた時期に見た動物は鹿に熊など、後者であれば銃器を用いての戦いになりかねないのも目撃している。

とはいっても彼らが放射能による変異種になってたりもしながらも生存できているのは比較的に過ぎしやすい、適度に日照りや雨が降り気温が穏やかな数値を示す温帯にいるからだ。彼らの生存本能が働いて生き抜くには厳しい環境下を避け、草を食むか木の実の殻を砕いて中身を食すか、それとも他生物の肉を自分の糧にさせている。

では、砂漠に生存している哺乳類に属する生物を見て何を思うかと聞かれれば、まずは驚愕しかない。

「おおぅ……一応過去の資料を見てたりして姿形とか諸々知ってはいたが、本当に生きているとは驚きだな」

「ええ、さすがに犬猫とは違って臭いけど。いや、あの子達も臭いを発するけどそこまで

強烈じゃなかった……それにしてもやつぱり臭いわ」

バルソクと416が恐る恐る近づいては手を伸ばそうとしては引つ込めている、その先には背にコブを成して首がやや長い生物、ラクダだった。

共有する物資を指定された場所にまで運び終わって小休止という流れになっていた。そこで腰を下ろそうとしたタイミングで、一応見ておけと話していて不快感を感じさせない腹太りの中年の男性から話し掛けられていたのである。

個体差はややあるが人一人が装備や荷物と一緒に乗るには問題ないだろう。円形の柵の向こうでズラリと並んでいるラクダを見てローガンはサングラスの裏側で目をやや見開きながら中年男に尋ねた。

「今回の俺達も加わる件で使わせてもらうことになっているのか？」

「おう、ハルカの嬢ちゃんから人数分用意してくれと言われてな。とりあえずあんたら
の四人分、それもどいつよりも人懐っこい奴を選んでおいたよ」

導かれるまま全員でついていくと、隅の方にリラックスしている四匹のラクダが目につく。中年男とこちらの存在に気付いた途端、四足を立たせて寄ってきた。

柵の所まで来ると首を伸ばして鼻息を立てながらこちらの臭いを嗅いでくる。たしかにこうして接近されると416の言う通り鼻を突く、不快なカテゴリに入れられる臭いがあるがそれも時期に慣れるだろうとローガンは顔をこすりつけてくる個体の顎を

撫でた。

そうしながら他を見てみれば、もう皆がそれぞれ違った反応を示していた。G11であれば臭いを嗅いでくる個体の鼻をつんつんとつつき、アイコンタクトをするように目を合わせて無言で何かを語っているようである。その隣にいるバルソクは両手でわしわしと頭から首と撫でまわし、表情の変化の無さを楽しんでいたりと方向性こそ違えど基本マイペースな二人は初めて目にする動物に物怖じせずに触れ合っている。

ローガンのすぐ近くで少々肩を震わせながら先程と同じアクションを繰り返している416にもその気楽さを分けてやって欲しいと思うぐらいだ。

「お前そんなキャラだっけ? 『私は完璧』とか言つて片手を当てながらカッコつけているのが俺のイメージなんだけど」

「うるさいわね……こんな生物なんてオールドネット上でしか知らなかったんだから仕方ないじゃない。得体のしれない、理解が及ばない物に対して警戒するのはおかしなことじゃないでしょ」

「いや、一応生態まで知れているんだからそんなことはないだろ。アホなことをしない限りは危害を加えてくることはないんだし、その言い訳は苦しいぞ」

「お黙り、ローガン。見た目には表れない変異種ということだつて万に一にもあるかもしれないじゃない」

それらしい理由を並べてはいるが結局は互いに互いの様子を窺い合っているだけである。416にも興味を示しているラクダの方はバリバリスキンシップを取る体制ではあるが、肝心の彼女が地団駄を踏んでいるので平行線のままだ。

とりあえずどうにかした方が良いかと少々考え、荒療治としての方法が思いつきはしたもののこれはローガンの一存だけではできない。許可を得る為、中年男に416にバレないようにジエスチャーで伝えたみた。

すると彼の方からは満面の笑顔を浮かべてサムズアップして返してきた。あつさり下りてきたそれに拍子抜けしながら、ローガンは表情も混ぜて確認を取ってみる。

(マジでいいの? 場合によっちゃ柵とか壊してしまえばいいけど)

(今修繕している箇所が終わったら今日中にここを次にやってみようことになっているんだよ。急ごしらえで建てられている柵の一部が壊れるぐらいならまだ作業時間の短縮ができるってんだ)

ハル力達から怒られることは絶対にならないということにしてもらいたかったが、この責任者らしい中年男からそう言われたからには怒られる可能性は低い。それで踏みとどまるのであれば今しかないが、416の警戒を解くのは別に嗜虐心が湧いて来た為に良心を心の戸棚にしまい込んで鍵を掛けた。

進展のないやり取りを動物と繰り返している416の後ろに回り込むと、ちゃっかり

とこちらの様子を知っていたバルソクが便乗し同じように気配を消して近寄ってきた。

ニマニマとニヤけながら悪乗りに興じる彼女とアイコンタクトでタイミングを合わせ、三拍子を同時に刻むと416のそれぞれ脇の下から手を入れて持ち上げ、重量を腕で感じる前に一息で投げ入れた。

「そおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「よいいしょおおおおおおおおおおおおおお!!」

「きええええええええええええええええ!!」

人形とはいえ淑女らしからぬ怪鳥のような悲鳴を口から発しながらミスパーフェクトが柵の方へと放られる。実際の所、ローガンが働かせた筋力はそうでもなくほとんどバルソクが脇と一緒に腰の方のベルトを挿んでいたので七割程度が彼女による腕力なのだがそれはもうあまり関係ないだろう。

「おっ、ぶっ!」

放られた被害者は油断していたので電腦の処理が間に合わないどころか対応できず、足から着地するのでなく身体全体の正面から不時着。ポフンツ! 砂埃を舞わせながらその衝撃のまま顔面まで柔らかい砂に埋めて静止した。

やがてプルプルと震えながら勢いよく立ち上がり、砂まみれの顔のままこちらを睨みつけるようにして振り返ってきた。

「このワンパク共……一体何を……！」

416の声が尻すぼみに消え、怒りによる真つ赤な表情までもが真つ青でブルブルと震え始めた。それもその筈、一頭だけでも触れることもままならず何もできなかつたというのに、その恐怖の対象が四倍の数になつてゐるのだから。というより、その周囲にも見ぬ客人が来たという事で興味を持ったのか違う複数の個体までもが寄つてきてくる。前からはローガン達にもしてゐたように臭いを嗅いでから氣に入つたらしく顔を摺り寄せて来ていた。

己が知る中で最悪の部類に属する展開に直面したと察したらしい416は、すぐさま身体を屈めると犬などの四足歩行の動物よろしくラクダ達の合間を潜つて走つた。

「ぶっ……！」

「笑うなバルソク、あいつは真剣なんだぞつ。吹き出すだけならまだしも声出して笑つたら後でシバかれる……！」

その様相のまま右へ左と比較的に広い空間を經由してこちらに来ようとしている彼女を見て嘖き出すバルソクをローガンは注意するが、そう言いつつも口角は上がつて両肩の震えを止めれそうになかつた。なにせ普段は氣高いクールビューティーであるHK416という戦術人形が二足歩行から退化した歩行方法で四足をシャカシャカと動かしているのだ。それも表情は真剣そのもので邪念など表情から一切見当たらない。

歯を食いしばりながらも目はカツと見開いて電脳に処理を全力で回してもいる416の顔を見て何も思うなというのは中々の無茶ぶりである。

初見殺しを強いられた416がラクダの群衆から抜け、柵の前までくる。高さは約一メートル六十センチで越えるには柵の間に足を掛けて地道に上るだけで良い。数秒で済み確実にラクダ達から離れられる越え方とすれば間違いないそれだ。

しかしホモサピエンスという人間本来の姿勢に戻って立ち上がり前述した方法で越えるのではなく、かといってアウストラロピテクスよりも進化前の猿のようにして上るでもない。薄らとローガンもどこかで期待していた、足をバネに地面を踏みしめてネコ科の動物を彷彿とさせる動作で一息に柵を飛び越えた。そこに各機関部の動力を最大出力で働かせている為か、ストレスで飛び越えているのでなくある程度は余裕残して、である。

実際にはそうでなかった筈だがスローモーションで流れていたように錯覚する。そう思うほど、416の跳躍は見事でありながら状況を知る者からすれば滑稽であった。

『ばいばい!!』

なんとか堪えていたがローガンもここで吹き出し、バルソクに至ってはそこで崩れ落ちた。45がここにいた場合はここまでだけでも腹を抱えて笑っていただろうが、今の416を止めとどめに笑い転げているに違いない。

束の間の窮地ではあったのだが、416からすればそうでもないのだろう。やっとこさ抜け出せたとばかりに息を荒げながら腰を下ろした。

「いやあくいいのを見させてもらつた！戦術人形つてのはユーモアセンスもあるもんなんだな！」

いや違う。これは彼女が演技抜きに繰り広げた逃亡劇だ。

そうローガンは中年男に言いたかつたのだが笑い声を漏らさなかったために口を結んでいるので声を紡ぐことができない。もう一人の主犯も肩を震わせながら地面の砂の方に顔を向けて時折拳を振り下ろしてはヒーヒー言つてるのが聞こえている。

「決めつけは良くないし一応聞いておこうかしら。私を放つたのはどこの誰……？」

犯人の確証があるというのに真つ向一番感情的に飛びかからないのは良いことだ。おかげでこの後の飛び火を別の人物にすべて受け流せる、とローガンは自身よりも怪力を発動させたバルソクを指差そうとしたが次に瞬きした瞬間には彼女に拘束されていった。

「あれ？なんかわからないけど拘束されてる？身に覚えはないのにおかしいな」

「まさかだけどマスターは私を盾に逃れようだなんて考えてないよな？あんなトンデモ展開を見た対価を共に払おうじゃないか私の師匠？」

『シャドー隊』に組み込むだけの見込みがあるということとローガンがバルソクに

合った隠密行動を始めとした格闘術などの指南をして約一カ月。それだけの成果が出ているのは喜ばしいことではあるのだが、その教えが逆手に取られて牙を剥かれている現状からは目を背けてはならない。目の前には目を光らせて暗黒色のオーラを立ち上らせながら迫ってくる鬼に、背後には自分諸共生贄になりに行こうとしている強者。

嗜虐心が磨り減らされて冷や汗が止まらなくなってくるのを感じながらローガンは拘束を解こうとするがバルソク自身によるそれは固い。以前教えたCCCによる反撃を狙おうとしてもそれを許さないとばかりにガツチリと両腕を固められるだけに留まらず、後頭部による頭突きも防ぐように手前に引き寄せたりと教えを実践していた。

「お(づ)こ(づ)こ……そうだった、お前は見た目に反して飲み込みがよいのを忘れちゃった……！」

「へっへっへ、伊達にあんたからの訓練についてこれてないわけじゃないぜ。私だって強くなれるよう日々頑張っているんだからな！」

「その成長には嬉しく思いたいところだが今は無理だ。悪いけど頭を撫でまわしてやりたいから解いてくれねえかな、そうしてくれねえとお前の方に向けないんだけど！」

「後でもいいんだぜ？私だって傷ついたら癒しが欲しくなりもするんだし、一緒に怒られた後で慰めてくれていいんだぜ」

「」の野郎！！」

良い感じに纏めて一緒に怒られようとしているが、結局は416を怒らせるのに十分な原因を作ったという点で同罪なのだから逃げずに地獄に墜ちようとバルソクは言っているのである。サムズアツプしている彼女の為に弁解することがあるとすれば、ローガンだって悪さをしたのだから叱りを受けようということなので間違っていない。やりすぎたことがあればそれに対しての報いをその身で甘んじるのは当然のことだ。

ただローガンの場合、大欲望霊事件でダムにいる間にあつたことの収集作業による数日間の心労もあつてそうした常識まで拒否したいという状況に陥っている。

それを理解しているのだろうか、ローガンを羽交い絞めにして腕力にさらに力が加わり拘束されている両腕や首に痛みが生じ始めた。具体的に表現するとすれば骨が悲鳴をあげ始めているといつても過言ではないくらいに。

「うーん、力緩めてくれないと骨が歪むどころか折れてしまいそうなんだよな！ 乗り越えるべき山場を見ずにこんなところでぶっ倒れるのはご免なんだけどもく！」

「そ〜かそ〜かく。でもちゃんとした返事をもらえないようならもつとマゾリたいというこで受け取らなければならぬな〜」

「マゾリたいって何?! いやニュアンスから意味は大体わかるけど辞典にない新しい単語だな、嬉しいよ新しいボキヤブラリーを開拓してくれて! つか痛えから早く解いてくれわかったから早く早く!」

「嘘はなしだぞマスター？よからぬことがあった場合は実力行使も辞さないからな」
節々に拘束すべく加えられていた力が緩められるのに比例して緩和されるのに一息
つけるが、それらに反比例で絶望感が急上昇する。幻視なのだろうが、416頭から角
を生やし鬼気迫る形相でこちらに一歩ずつ近寄ってきたからだ。

「さあ~~~~~~~~てえ~~~~？もう言わずもがな、もう自分が
犯人だと自供しているものね。あんな力による暴挙をされたのだか何をしても文句は
言わないわよねえ~~~~~~~~？」

「……………もう好きにしてくれ」

ローガンは項垂れながら堪忍し416による裁きを受けることにした。とりあえず
こうして怒っていないながらも後方にいる動物にまた顔を近寄られても動じなくなってい
るのだから。

目的地に向かうべく、ラクダに乗って数十分で出くわした砂嵐から抜け出せたローガンは一度スカルマスクを外し新鮮な空気を吸い込む。スオミに勧められたことのある基地内のサウナで深呼吸したのと同じく肺に送り込まれるのは熱気で熱されている酸素でしかないが生命活動を続けるには仕方ない。ベルトフックに吊るしている水筒を手にとって水分を取ってから後方に続いている三人を見てみた。

やはり暑さによる反応は人それぞれで汗を流しながらローガンと同じように可能な限り体力を消費しないべく無駄なことはほとんどしていない。朝からここに来るのにあたり、帽子なりターバンなり頭に着けては全身を覆いつつも通気性の良い服装にそれぞれ変えていたりもしているので幾分マシなのであろうが、元のままでは過酷以上のものだったことは間違いない。

「出発してから一時間か。ハルカ、今のペースを維持したままだと大体あとどれぐらいで到着する？」

「ラクダ達のコンディションが突然崩れたりしなければあと二時間ぐらいだな。向こうに到着した時は数人をこいつらの世話を任ずとして周辺の偵察を先に行うぞ」

「異論はねえ。でもとにかく一刻も早くここ一帯を抜きたいとは思うよ」

並び歩いているハルカと話して苦笑いをする、ローガンは端末を操作しながら今回のチームメンバーがそれぞれで所持している大容量のポータブルバッテリーを無線機に接続する。サングラスのHUDにローガンが登録している接続する先の周波数が表示されたので、手始めに自分達の指揮官に接続しようと端末に表示されている数値を変えた。そしてそこで予め渡されていた予備のイヤホンマイクにもリンクさせ、

一連の作業を見ていたハルカに投げ渡し耳に取りつけるように言うと呼びかける。

「定時報告。こちらはグリフィン北米支部所属の派遣部隊。コールサインはアルファ1、聞こえていたら応答してくれ」

『つとようやく来たね。彼女達と合流したと416からの報告で状況は窺っていたけど、別にそうでなければならぬわけじゃないけど君自身がすべきじゃないのかいアルファ1?』

「悪い、こつちも良くも悪くも色々とあつてな。一応今回の協力者たちの代表とも無線は繋がられているから留意しておいてくれ」

『了解。それで現状は?』

ハルカに選び抜かれた前方にも後方にもいる彼女の部下たちを、そして作戦を共にしている戦術人形の彼女達も見た。ローガン自身も含めて全員で三十名による行軍は今

のところ問題ない。少々暑さだけではない別問題でめげているような少女もいるのだが、それでもままったく触れることが出来なかったあの時と比べれば成長したと言えるだろう。

自分と一緒にラクダに運んでもらっている自身の装備に欠落がないことを確認しながらスカルマスクでまた顔半分を覆い、ありのままハリーに報告した。

「今のところ問題なし。慣れない環境下にいるということとで苦労はしているが、誰かが動けなくなったり交戦するような事態にもなっていない」

『それはなにより。彼女達も厳しい環境下でコンディションを保つ方法を心得てはいるけど、一応目を配らせておいてアルファー』

「了解、プロフェット。それとだが頼んでいた情報収集はなんとかなりそうか?」

『何とも言えないのが正直なところだよ。中身を悟られないかつ保護する目的で持ち出してはいるんだしね。それ以前に防弾ボックスに入れて物資を運びいれている鉄血なんて聞いたことないよ』

これまでローガンも交戦してきた鉄血の様子からは見たことのない様子であった。ハルカの兵から渡された写真を見た時は内心自分の記憶を疑ったが、そこで自問自答を繰り返しても仕方ないとして一旦切り捨てている。

とにかく詳細は不明だが、勝手に自分達で構築している枠組みとは外側の行動パター

ンを取っていることは確定している。これまでも鉄血は随所においてそれは持つて来れない砲台を設置したりと鉄血兵が自ら武力でもって戦いに來ることはあった。ただ、わざわざなにかを鉄血兵がなにかを持ち寄っている事例をローガンは聞いたことない。絶対の敵として見据えてきたあの連中が破壊活動をする場合はひたすらに銃を撃つというのが定石だと思つてきてたのは自分だけではないだろう。

「自身は何だと思つて爆薬か何かか？」

『どうだろうね。でも僕達が目的としている『ある物』の位置を彼らも知つて競争に來たのもあり得る。わざわざ嚴重に持ち出して來ているのだしよつぽど見られたくないかデリケートな代物、それかその両方だろうね』

「二つ質問だそつちのコマンダー。この際だからそつちが抱えている事情は置いておこう。こんなクソみたいところで鉄血のクソ共が行動して得をすることがあるとすれば何が思いつく？」

『言葉が汚い、ということとは深く突つ込まないでおくとして回答するよ。今としてはやつぱりまだ何とも言えないけど、最終的には僕達人類に対しての害意はある筈だ。今回でどういった結果で終わることを演算してイメージにしているのか知らないけど、指を咥えて見ているままでは取り返しのつかないことになりかねない』

鉄血がどう行動するにしても最終的には『人類抹殺』という目的に歸結する。彼らの

人間に対し殺戮する理由は自然界では起こりえない、『ただただ、殺さなければならぬ』というだけ。例として、生存本能や子孫繁栄といった本能による行動の一つの弱肉強食による自分の糧にしなければならぬ理由は奴らにはない。生身の体ではなく適宜バッテリーの充電が必要ではあるが、人間とは違って食料や水の摂取を必要としてはいない、ある意味完成した存在だ。奴らは人間達の営みを良しとしない、そうした大仰しい訳があるのかどうかはローガンは知らない。

とはいえ、ハリーの言う通りこのまま何もしないという選択肢を取った場合は、世界中が大打撃を受けることはない、そうした可能性を否定できない。万に一の確率の事なのかもしれないが、ロシアの急進派も『アネクドート』を利用してまで『オアシス』を得ようとしているのだ。どれだけの価値があるのかは知らないが、それは『パンドラ』による災厄に繋がる手掛かりの一步である。

限られた人物にしか口外出来ない理由を裏付けたが、どちらにしても先日のだムの件並かそれ以上に失敗は許されない。

「誰にでもわかる回答をありがとよ。それに力押しばかりでなんとかならない、それに磨きがかかってくることは覚えているよな」

『ああ、覚えている。単純に陽動まで加えて回り込んで攻撃する戦法までを実践するのではなく、そこ一帯をまとめて吹き飛ばして焦土にするんだって』

「冗談みたいに聞こえるかもしれないが、第一に信用できるうちのサブリーダーが辛くも帰還して言っていたことだ。旧市街地にて物資の確保から離脱する際にヴェスピドやブルートの襲撃に合い、追いつ込まれた書店にてあいつの部下ごとドカン。報告受けた翌日にあたしも加わってその一帯を調べてみたらC4爆弾の残骸が微かに散乱していたよ」

『予め罫を仕掛けておいてそこに誘導したのか。鉄血兵のハイエンドモデルはいなかったのかい?』

「聞いた限りでは見ていないようだな。ただ十年以上交戦経験も積んでいる奴が初見だったと言うからにはきつと何かある」

行末を見据えながら言っているリーダーを見てみれば確信めいた様相だった。それにローガンも思うことがあったので少々思考を巡らせてみる。決して難しいことではなく、正面から戦うのを可能な限り控えて誘い込む鉄血、それに引つ掛かるハイエンドモデルがいたからだ。

やがて思い出したローガンはハリーとハルカに無線機を通じて言った。

「やっていることがまるで鉄血のハイエンドモデルのハンターだ。俺は奴の手口を資料による情報しかあまり知らないが、プロフェットはどう思う?」

『……なるほど、模倣をしているという事だね。鉄血兵は命令系統を通じて従順に指令

を受けられるようにしている影響で奴らの学習能力は低い。だけど効率的かつ完全には出来なくともそれに近い真似事はできる、て考えられはするね』

単に感覚的な発想による仮説でそれを実証する手段が無ければ根拠すらもない。ただ以前にCQC絡みの話をハリーとしたように、効率よく戦うだけの手段を普通の鉄血兵の戦術に加えただけ、ということがまず最初に出てくる。だがそれが組織立って連携を取る、それも所定の場所に追い込んで起爆することなど、その戦闘手段を鉄血が生まれる以前の昔から駆使してきた人間の兵士でもおいそれとできることではない。その戦術を教科書で読み込んだだけで生じるリスクも何も知らないというのが大きい。

それを解決する手段があるとすれば、その道の戦略を繰り返し返してきた熟練の人形のデータをダウンロードするか、それが無理なら直に教鞭を受けるかだろう。前者の手段はともかく、後者の方に利点があるとすれば時間がかかる分必ずしもその道に長けたハイエンドモデルから教わる必要はない。例えば、そうした戦闘模様を直に何度も見てきた人形などがあれば、などだ。

『それなら大分絞り込めてくる。これから行く現地にいるかどうかはわからないけど、ハンターと互いに得意不得意を補いながら戦っているエクスキューショナー、別命『処刑人』として名を轟かせている奴が関わっているかもしれない。これからこっちは急ぎでフロリダを始めとした周辺の情報収集してみるよ』

「何かわかれば教えてくれ。今回はUAVの支援が望めない分、そうした情報をこっちにすぐに回してくれると助かる」

『言われなくてももちろんそうするよ。それじゃあまた後で。プロフェット、アウト』

そこで通信が途切れてイヤホンマイク越しにハルカの息遣いが僅かに聞こえてくるだけになった。返すべきかどうか迷っている彼女にそのまま持っているように言ってからローガンは双眼鏡を通じれば地平線の向こうに目的地が浮かんで見えてこないかと思い、そうした一連の行動をするが思った光景が見えず無駄に終わる。

溜息をつきながら腰のポーチに戻していると、後方から416の声が聞こえてきた。

「そんなことしても何も解決しないのはわかっているでしょ？視認できたとしても距離が一気に縮まるわけじゃないんだからー」

「それでも突発的にやってしまうのが悲しい性さがだよ、深く突っ込まないでくれでくれやー」

「ローガンは忍耐力も足りないんじゃない？ここにいてもフィジカルトレーニングを合間にやっておくのを勧めるわよー？」

「あんにやろ……さっきの仕返しとばかりに嫌味たつぷりに言いやがって……」

ラクダに対しての荒唐治をされた仕返しとばかりにニヤニヤとしているのが言葉とそのニュアンスで感じれるのにローガンは溜息を吐いた。たしかに彼女からの了承を

得ぬままに、良心に鍵をかけたのだから幾分仕方ないしこれもまだ許容範囲。立て続けに416から言いたいことを言われ続けはしても深く考えずに思考を別にシフトしようとしたところで、なんとなくすぐ後ろにいるG11の方を見た。

「……なに、ローガン?」

「あー……まあなんだ、失敗したとか思っているんなら今回だつてそこまで落ち込む必要はないからな」

相変わらずの内面を探ることが出来ない、ボーツとした顔をしているが眉を僅かにピクリと動かしただけからローガンは内心溜息をついた。ここしばらくの彼女がどうにも自分が関わっていることの顛末がよろしくならぬように危惧するのはまだしも、過敏に臆病になってしまっているようにも感じれていた。

何度かの呼びかけが効果を生まないこと、そういったことにG11本人に対し憤りや呆れは感じてはいないが、大欲怨霊事件を経ても好転しないことには抱いてしまっている。

自分の何が悪いのか、それとも足りないのか。苦々しい経験を積んでいくことでその命題を抱え込むことは誰にでもあつて然りであつても、時を経ても緩和した様子を見せないことには重症である。

「どうしたもんかな……」

一人苦々しげに呟きながらローガンは空を仰ぐ。HUDサンングラスが視界の明度までを調節し映す便利さを憎々しく思いながら行軍をそのまま引き続き続けた。

〈十二日前〉

ナビに従って治安組織の本部に車輛乗ったまま近付くと、ゲートの近くに在る職員がタブレットのような端末を持ちながら近くに来る。ローガンはそれに合わせて窓を下げて直に声が良く聞こえるようにするとわかりやすいように自身のグリフィンのIDカードとバッチを見せるように言った。

「グリフィン北米支部所属のローガン・ブラック。二時間前のカイル・ローズ巡査からの要請でここに来た」

「わかりました、少々お待ちを……」

治安組織『ルックオーバー』の職員がローガンのIDに記載されている使命と端末の画面を交互に見ながら入力していく。必要な手続きが全て済むまで掲げたその姿勢のまま待っていると後部座席から連れとしてついてきた404小隊の隊員であるUMP 9がひよいと顔を出してきた。

「その場しのぎの仮設基地、みたいになっちゃつちいものじゃないね。ゲートはボタン押しての手動操作だけど建物はもちろん駐車場とかも整ってるし」

「俺も初めて見るけどたしかにそうだな。これでも所々最低限の物しか揃えている程度って聞けど……おい9、そうやって無理して物を取ろうとするな。言ったらそっちに寄越してやるって」

噛んでいたガムを吐き出すのに助手席側に置いてあるちり紙を取ろうとしていたので、ソーシャルネットワークを始めとした数々の情報源に接続している少女の代わりに一枚掴むと9に手渡ししてやる。手渡されたそれを口に当てている9から目を逸らし、目を閉じたまま作業に集中している45に一瞬だけ視点が止まったところで車両の外にいる男性から声を掛けられた。

「確認取れました。後にカイル巡査がお迎えに上がりますので車輛の駐車が終わり次第中に入っていただいて結構です」

ローガンは頷きIDとバッチを胸ポケットに戻すと開けられたゲートの隙間に車輛を滑り込ませた。徐行の速度のままアスファルトに刻まれているガイドに従って走らせていきながら周囲を観察していったが、この治安組織に属している職員の中にも車を有している者はいるらしくダッシュボードの上にナンバーカードが置かれていたり一般人が駐車しているのと違いがある。とはいってもやはりそうしなければならぬのは人間というのもあって、時折裏返したまま置かれていたりもしていた。

やっぱり運転なりなんなりと車が関わったりするだけでなく、こういった細かい所でも性格が出てくるよな、としみじみ思いながらローガンは客人スペースにバックで駐車しエンジンを切った。『P226』などの最低限の装備が身につけられていることを改めて確認していると9が助手席にいる、ローガンの本来の連れであるUMP45を起こした。

「45姉、もう着いたよ。一旦ネットの情報収集はやめて行こうよ」

「——ふう、そうね。これが済んだら気分転換で甘いの食べに行きましょうよ、ローガンの奢りで」

「おおう、聞き捨てならないことを言ってくれたの。俺の財布も地味に寂しいことに

なつてるんだし自腹を切つてくれよ」

「AR小隊かのじよたちばかりだけでなく私達にも少しは甲斐性を見せてよローガン。お金は寂しくても心は満たされるでしょ？」

車輛から下りると一足先に下車していた45がボンネットに両手をつきその上から顎を乗せて見上げてくる。9は笑顔を浮かべながらこちらの腕を取ってくるが、姉と同じくこちらの財布を揺すろうとしているのがみえみえである。

「そうしてやりたいのは実は山々だけど勘弁してくれ。こつちは手一杯でそつちまで気を割ける余裕はねえよ」

「根詰めてあれこれ考えてばかりじゃ身が持たないよ。こうして外に送り出されたのもボスから出された一時の休暇だと思つて羽目を外したら？」

そう言う9を少々強引に振り払い、ローガンはつかつかと『ルックオーバー』の建物へと歩いていく。自分を呼ぶ二人の少女の声が追いかけてくるのに振り返らずに押戸を開けると、そこは複数の人が行き交う待合室。職員だけでなく一般人もいるがそう呼ぶにはいささか狭い空間にローガンは中に入ると奥の廊下の方から知っている顔が出てきた。

こうして顔を合わせるのはローガンからすれば久しぶりだが、後ろにいる45と9はそうでもないだろう。

「すまない来てもらって。そっちも暇じゃないだろうに」

「気にするな、この件に関する事を回線やネットを通じてでなく直接伝達するように言ったのはこつちだ」

カイルはローガンと握手をかわすと、そのまま45達の方にも手を差し出す。彼女は相も変わらず営業スマイルを浮かべてはいるが内心表に出ている感情のままではないだろう。現に差し出されたその手を取らずに9とニコニコとしているだけ。

ここでローガンはカイルが45達の404小隊の事を知らないことによく気が付き注釈した方が良いかと思いついて口を挟もうとした。しかしそれを片手を上げた彼女に止められて口を噤む。

「私達と仲良くしようとしても無駄ですよ。仕事を共にしたとはいえあなた達には腹を開くつもりなんて微塵もないのですから」

「それは薄々感じていたさ。だから無理してこの手を取る必要はないし、こちらから力づくで取らせるつもりだってない。単にこれは仕事とは別であんなことを言ってくれたことの礼だ」

ローガンは心の中でクエスチョンマーク出していたが9は心当たりがあるようで感嘆に似た感情を表している。当人たちの一人はすぐに思い当たったようで額に手を当てながら深い溜息を吐いた。

「あれを真に受けたというのですか？だというのならとんだおめでたい頭ですね。あなたを振り切る為の嘘だったというのに」

「言った本人が嘘だったというのならそうなんだろうな。だけど今のその発言が本当だという証明はできるか？」

その言い返しに45はやや苦々しげに顔を逸らす。それにローガンは9と共に予想していたのは違う会話の流れになり始めていることにも気づく。単純な好奇心が働くままに、悪意なくニヤリと口角を上げているカイルと珍しくマウントを取られている45、そんな二人の様子を見守った。

「嘘つきと認識されたら本当の事を言ってもそれが真実だと証明する必要も出てくる。俺に言われなくてもわかってるだろうがな」

「随分と捻くれたこと言ってくれるじゃない。それを考え付く私も同類なんだろうけど他人に言われると頭に来るわ」

「だろうな。こっちはこじつけるなりなんなりして言い逃れようとして来る連中の相手をしていると嫌でもそういつた考え方が染みつく。まともに相手しなければならなくなりもするし大変なものだよ」

単純なひつたりなどならまだしも、魔が差して非人道的な犯罪に手を染めた相手の場合は違ってくる。それぞれが自分が中心の価値観を持ち俯瞰的に物事の正否におけ

る判断が鈍ってきているので、深く掘り下げるのなら同じ目線に立たなくてはならない。それはつまりその当人に同じような境遇に自分を落とし入れる、ということだ。

カイルがどのような経緯を経てこの治安組織『ルックオーバー』に加わったかはローガンの知るころではないが、こんな職に就いている以上は誰かに敷かれたレールを走っているわけではないだろう。深く考えないままに続けているにしても、グリフィン北米支部が取り持つ広い保護区の治安活動は割と少ない人員で行っているので決して易しいものではない。そうである以上は生半可な忍耐ではやっていけないことは確かだ。彼が今しがた言った取り調べのことだって、相当の体力もなければすぐに心が折れてしまってもおかしくない。

「お前の努力の賜物と先達のおかげ、てな感じだな」

「そうかもしれないが、大部分は先輩方が見捨てないでくれたのが大きいさ。なにせ自分の事だけでも精一杯なのに、新人の俺から目を離さないでくれていたんだしな」

「ひたむきに頑張り続けた姿勢を忘れないようにな。俺なんて——」

そう言い掛けたローガンは脳内で恩人達を思い返そうとするが、まず最初に浮かんできたのが彼らの死に様だった。死因がどれもバラバラで見たくないものをずっと見させられてきた、その胸の痛みが総じて突いてきた。何よりも一番痛々しく思ったのが、

少年時代の自分を矯正してくれた、顎など至るところがモサモサの髭面であった『教官』だった。彼が亡くなるのに至った要因は銃に撃たれたのでもなく、ナイフに急所を突かれたのでもない。だからといって事故で圧死したのでも、高所から落ちたのでも、因縁のある相手に謀られたのでもない。ただ、知らぬ間に身体を蝕んでいた病によつて亡くなった。

『教官』が亡くなるその時、その死に様が他の死よりも痛々しかつたとローガンは思う。安らかに眠るよう、たしかにそうした比喩は当てはまる。

だがそれが一番看取る人の心が苦しまない、ということはない。多少はマシなのかもしれないが、ローガンからすれば生き方を変えてくれた人生の恩人が亡くなる、そのような大きな違いがあるだけで無気力になつてしまふそうだった。今になれば笑い話になつてゐる記憶を忘れても、同じく忘却の彼方に飛ばすことはローガンにはできない。

「おい、どうした?」

「もしもくし、ローガン?」

「……ローガン?」

ゼンマイによる動力が切れた人形のようなうだつたローガンにカイルは疑念を首を傾げ、9は屈託のないままに手を振り、45はやや心配そうに様子を窺つた。

自分が束の間の思考にトリップしていたことに気付き、現実に意識を戻すと呼び出し

てきたカイルに尋ねた。

「それで、俺達にも報告しておきたいことってなんなんだ？」

「ああ、それなんだがまず俺のチームのオフィスに来てくれ。見やすいようにデータを纏めてもあるから」

先導する彼に従い三人で移動すると、曇りガラスで仕切られた部屋に通される。中は六つの事務の机があり、その上には書類やら機材やらが散乱していて整理整頓が行き届いているとはとても言えない状態になっていた。

「あれ、他に人はいないの？」

「別件で出勤がかかってな。その時俺はこれを最優先で纏めるように指示を出されていたからお役御免だったんだよ」

比較的紙束や道具を所定の場所に置いてある机の上でカイルは付箋が貼られている一つのファイルをこちらに差し出した。先頭に立っていた9がそれを受け取って中身を取り出し、45もそれを覗き込む。

彼女達よりも背が高いローガンは後ろから目を通そうと思ったが、後で渡してもらおうとしてあることをカイルに聞いた。

「面白いやカイル、この間俺が頼んだ氏名からの人物照会はできたか？」

「ん〜……ああ、あれか。ちよつと待つてろ」

そう言った彼は机の引き出しを開けてA4サイズの茶封筒を取り出して自身の書類を取り出す。白紙になっているその裏面をこちらに見せながらローガンを見た。

「確認するが、あんたが探したい人物の名は『グレイ・カーンズ』で性別は女性、だったな。そこでこの保護区内のどこかにいると」

「ああ。グリフィンの権限でデータベースにアクセスしてみたが、更新は大分前に止まってしまつてから当てにならない」

「そりゃあそうだ。ありゃあデータ容量が圧迫されて紙の方に新しい情報が移されたんだ。最新のが欲しいのなら地区管理局に問い合わせないとだし面倒だよな」

先日の事件の真つただ中にグレイという女性から貸し与えられた『レミントンM70』を返却する為、使用した弾薬諸共完璧に整備された状況で菓子折々と一緒に持つて行こうとしたが彼女の所在がローガンはわからなかった。当時の身分証明を見た時は急いでいたのもあつて氏名の部分しか確認できていなかったのである。

事件に関わつた人形達と共に後処理をする、それだけでなくローガン自身は後日の方針会議の準備で多忙の時期に入り彼女の所在を調べることまで手が回らなくなつてきていた。頼りになる人形達も忙しく余計な仕事を彼女達に寄越すのが悪いと思つたローガンは、グリフィン北米支部と密接的に連携している他組織に頼むことにしたのである。

そしてその白羽の矢が立ったのは、保護区内で発生した銃撃戦を始めとして事件解決に関わった『ルックオーバー』のカイルだった。

「こういうのを済ますのに電話一本で手続き完了、じゃなかったからな。まあ個人情報
の流布なんだし、そう易々と渡せるものじゃないのは理解しているけど」

「本来ならそうだな。だけど奇妙なことに書類上の本来の手続きをすることなくこれが送られてきたんだ」

「どういうことだよ？」

「まあ見てみる。論より証拠、てな」

渡されたその書類にローガンは目を通す。その一字一句を読んでいった末にローガンは思ったことを口にしていった。

「頼んでおいてなんだがこれは本当か？管理局やお前を疑うわけではないけど隠しているんじゃないかと思ってしまうぞ」

「彼らの面子の為にも言うが、大マジにそんなことはない。こつちも一応再度問い合
せたが嘘偽りなど一切なくそちらに送ったのが全てだと言われた」

カイル自身に恍けたような様子はないが疑っていても仕方ないのでもう一度視線を紙面に落とす。それでもそこに記されていることが真実だとは信じがたい。

グレイ・カーンズという名前の人物は存在しないと、気分転換を経て45と9連れて

基地に帰っても尚、ローガンは自身に言い聞かせるように脳内で反芻していた。

38. 暗闇へ — The beginning of the
unlucky day —

〈十二日前〉

グリフィン北米支部の中庭を照らす外灯の光が近くにあるのにも拘らず暗く感じるのはその数とここの広さがマッチしていないからだろう。それを補うべく周囲の屋内は明かりも点けられているのだから決して何にも配慮をされていないわけでもない筈だ。

頭でそう理解しているのに暗闇が薄まったように感じないのはきつと視覚を司る眼球が悪くなっているのではなく、身体の仕組みとは違って相反する精神的なもの。納得のいく答えなど出るわけがないのに考え続けているせいなのだと、ローガンは思った。

「……そう、そんなことがあったのね。それで戻ってからすぐに電話の外部回線で問い合わせていたの」

「結果はお察しの通り、それ以上の事はわかりません、だったよ。向こうにもわからないことを聞き続けても仕方ないから引いたけど、まだ釈然としないのが本音だな」

中庭の一角には時折催されるといふ宴会やバーベキューなどのイベントに合わせて造られている配水場所がある。石造りになっていてそこで使い終わった調理器具を洗っていた所、手伝いに来た紫色のエプロン姿のA R 15に今日の出来事を話していた。

S O P I Iの一際大きいはいしやいだ声に振り返り、無邪気に楽しんで料理している様子を微笑ましく思いながらローガンは手を休めず動かすフライパンに付いた洗剤の泡を水流で洗い流す。それを隣に差し出せば布巾を持ったA R 15が受け取って隅々まで拭いて予め用意しているボックスへ収納する、といった一連の作業が終了しローガンは手を洗って一服した。

「住居登録はされていなくて身分証明のカードは配分されていない。なのに持っている、ということは単に写真の人相が一致していないのに気付かなかったという可能性はあるんじゃないかしら」

「そんなことないと言いたいのが否定は出来ないな。そうなるとカードに合わせて人相を整形して変えていた……ああいや、これじゃ発行されているカードの大本の説明がでないか」

「まだあなたはここにきて日が浅いわ。だから別支部の保護区のと見間違えたというのもあるわね。大きさの規格や必要な記載事項は一貫しているけど見比べてみれば色が

違ったりもしているみたいだし」

「すみません、不甲斐ない俺ですんません……」

AR15によって上げられた二つの可能性はどちらもローガンの見聞の少なきによるものである。思ってみればローガン自身、オフでもあまり外に出歩かず基地内にて訓練に勤しんでいたのが殆どであつたので保護区内で見聞きしたことは多くない。

周囲を行き交う人々の観察を怠つていたことに肩を落とすローガンにAR15は苦笑しながらも言った。

「別にローガンを責めていないわよ。とはいっても、無視できない落ち度を残してしまつたのは否めないけど」

「まあそれはそうだけだな。とにかくこの案件はどうしたものかなと思つたけど、このことも一応ハリーに報告しておくべきなのかね」

「それもそうね」

とりあえず明日以降に時間を見つけて口頭で言っておくとして、フライパンなどの調理器具の入つたボックスを持ち上げると皆の元にAR15と戻つた。

カイルがいる『ルックオーバー』の事務所と共に赴いた45と9に渡された書類にローガンも帰つてから目を通した。一概に纏めればダムで戦闘で捕縛した傭兵に対しての尋問による情報と、カイルもいる治安組織に潜伏していたアネクトトの工作員に

ついでのデータである。

前者の傭兵達が話したこととすれば、二人それぞれが違う傭兵部隊の者であつて仕事として任されていたのは破壊仕事を命じられていたこと。そのことはもう彼らと直接交戦したローガンでもわかつていることなのでいいのだが、一番知りたかつた雇い主を特定するのに至る情報を得られなかつた。だがその人物は現在進行形で民生組織にいるという事だけ知れたのでまだ良しとすることはできる。今は亡き人となつた銃撃戦で捕まえた犯罪者と合致する情報と照合したりとまだ他に仕事は山積みではあるのだが。

そして『アネクトド』の工作人員だが、こちらからは情報を引き出すことが出来なかつた。原因は獄中にて齒に仕込んでいた毒物で自殺したからである。

死亡推定時刻としてはダムにおいての制圧が完了した二日後で、重要参考人へのみ用意されていた独房の壁に血文字で恨み節を書いていたとのこと。それを写した写真の最後に綴られていた一文には『グリフィンもPMCでなくなれば我々とそう変わらな
い』とあつた。

グリフィンといえど、もし下手をやらかして世界的に認められなくなれば要注意の組織としてブラックリストに載ることになる。民間軍事会社でも世界規模のテロに加担していたと知られた場合はやはり各国の正規軍に捕縛の対象として見られてなにもで

きなくなるだろう。そう考えれば確かに『グリフィン』も『アネクドート』とそう変わらない武装集団だ。

「そうは簡単にならないとは思うんだけどな……」

「何か言った、ローガン？」

「うんにゃ、なんでもない」

自然と口から出た言葉を誤魔化してそのまま鍋をかき混ぜている皆の元に戻った。近くに来てみるとぐつぐつと煮えている鍋の音が聞こえてきて機能しているコンロから発せられる熱が伝わってくる。両手で持っていたボックスを地面に下ろすと額に汗を浮かばせながらも笑顔でかき混ぜていたS O P I I I が声を掛けてきた。

「ローガン、もうカレールーを入れちゃっていいかなー？」

「灰汁を取って中火でしばらく煮てただろ？ だったらもう具材に熱が通っているだろうしもう入れちゃっていいだろうな」

「それじゃあ入れますね……あ、こらS O P I I I ! お湯が跳ねちゃうからそのまま入れちゃわないで！」

本格的に各ジャンルの練習を始めて一週間が経過して、上達するA R 小隊の中でS O P I I I は自分で料理することの楽しさを見出してから特に躍進している。無論その他の少女達も生真面目に努力していることもあって、具材を切るのも手馴れてきて炒めた

り煮込むなどの一連の動きにも、ローガンからすれば特に言う事はない。S O P I I を除いた中でもM4は過去に努力したことがあるのか、早くなくとも遅くもなく手順を一つずつ踏んで調理しており、R O は彼女の補佐をしながらも次回に自分がやることになってもできるように一つずつ覚えるようにしていた。A R I 5 は同時進行で進めるべき下準備などをしながらも、次回からは効率よくありながらも出来栄えの良いようにするにはどうするかといった、今学んでいるのは基礎でありながらも応用の道を見出している。

だが……。

「酒飲みながら楽しく料理、てのは別に構わねえけどそっちに傾倒しすぎるってのはなあ……」

「包丁が刺さったりしなかったからよかったけど、本来の目的をそっちのけとうのはもう論外よ」

芝生の上で仰向けになって撃沈している酔^Mっ払¹い⁶を横目で見てローガンは苦笑い、A R I 5 は溜息を零す。彼女とて今回のカレー作りに消極的ではなく前向きに関わってはいしたが、開始前から飲んだくれていたのもあって全ての玉ねぎを切り終わったタイミングでふらふらと笑顔で倒れたのだった。

他からは放っておいたらいいと言われたが、さすがに自分までそうするのは……と

いうことで一番彼女を慕っている小隊の隊長が自室からタオルケットを持ち出して身体に掛けられている。

「まあ今回は最低限のことをしてるしな。今度の飯食った後の皿洗いを大方任せるとして見逃そう」

「そんな甘いことを言わずに全般的に任せたら？ 偶にはあなたも鬼にならないとダメよ」

「想像したら心が痛んで金棒を自分に振り下ろしてしまふよ。だから身の内を大体知れている奴に角生やすのは俺にはできない」

「まるで叱り方を知らない甘ったれの父親ね」

それで結構、とローガンはM16の元から離れて雑談混じりに料理を続けている三人の方に向いて腰を下ろした。両脚を放り投げてやや後ろに手を着くといったピクニツクさながらの座り方になり、一旦頭の中でごちゃごちゃしていたものを置いてポーツとしていると皆が鍋を覗き込んで言った。

「もう完成もそろそろかしら？ いい匂いで食欲もそそるわ」

「まだまだここからだよ。私達それぞれで隠し味を加えてアクセントを付け足してみるって話だったじゃん」

S O P I I のその台詞を聞いてローガンは『おっ』と声を漏らした。カレー作りの一

つの過程としてあるのは調味料を別で入れて味に変化を持たせるもの。元々カレー自体が味が濃いこともあって少々わかりにくいがそうすることで深みが出てきたり、物によつては辛味が少々緩和してまろやかになったりもして割と奥深い。何よりもカレーの場合は一種類とは言わず複数の調味料を入れても特に問題ない。ただし、常識の範囲内であるに限る。

そう思いながら眺めているとそれぞれが一人ずつ持つて来たものを入れ始めた。

まずはAR小隊の隊長を務めるM4。

「リングジュースか。でもM4は辛いのが苦手だったけ？」

「苦手、というわけじゃないけどどちらかというと甘い方が私は好きね。だからといって甘すぎるのは嫌だけど」

甘さを出す為にリングを加える、というのは昔からよくある。実際に極東の方で販売されている甘口のカレーにはリングの成分が加えられていたりもして子供でも食べやすいように調節されている。

人形にも個性があるように好みだつてわかれている。そう考えれば誰にでも食べやすい、という点に着目して甘さを出すというのは正解だ。

「AR15はなにを入れるの？」

「私はソース。入れればカレーのコクだけじゃなく旨味も出るつて調べたらあつたから

これを選んだの」

中濃ソースを加えるのも一手であり、ローガンも過去に自分達で作った際に加えていた調味料の一つだ。先程M4が加えたリング程でなくとも甘みも引き出せるし、カレーの味をさらに引き立てるのにピッタリである。

甘味でも辛味でも強調させるのはそれらではなく、旨味に目をつけて調べたのはさすがだな、とローガンは思った。

「ROはコーヒー？カレーにコーヒーってありなの？」

「悩んでたらローガンさんが教えてくれたのよ。ソースみたいにコクが出るだけじゃなくて苦味も生まれるって言ってた」

お湯に溶かしたコーヒーが加えられたそれを見ていたが、過去にローガンがスプリングフィールドに頼み込んで譲り受けたその元であった。普段はAR小隊の執務室の隅に設置しているポッドの中に入れて何時でも飲めるようにしているのだが、ROからの相談を経て内心渋々ではあるが豆の状態から挽いた少量のコーヒーの元を彼女に譲ったのである。

持ち掛けられたのは今から一、二時間前でとてもじゃないが今から外出して購入するのも手間がかかるし練習に間に合わない、という理由でもローガンとしては惜しく思ったのは誰かに言えることはない。

とはいえ、その分ROが言ったようにカレー自体の味も向上するので万々歳ではある。それも評判の良いスプリングフィールドのコーヒーの大本を担っている材料なのだから拍車をかけることは間違いない。

「そういえば酔い潰れたM16は何を入れるつもりだったのかしら？まさかジャックダニエルを入れようとしていたんじゃない？」

「ううん、案外までも、というか一番良さそうなのを選んでた。食堂に置いてある福神漬けの出し汁を持ってきてたよ」

「それってどうなのかしら。カレーの包容力でもそこまで入れちゃったら味が喧嘩するんじゃないの？」

「いや、過去に日本で活躍した海軍のカレーにも加えられていたそうだぞ。旨味成分が凝縮されているからとかなんとかでメツチャ美味くなるっぽい」

これに関してはローガンも興味があったのですかさず彼女の代わりにフオローに入った。赤い汁の入ったボウルを手を持ったAR15がこちらとそれを交互に見て、最終的には鍋の中に中身が投げられる。

AR15の言うようにM16の気性からしてたしかに彼女が一番気に入っている酒類が加えられると思われたが、念の為開始前にこっそり聞いてみたらまともどころか一番的を射ているといえる物を選択していた。だからといって別の料理に投げようもの

ならAR15の懸念の通りになってしまふ。しかしカレーはよっぽど下手なことをしなければ味がマイナス方向に振り切れることはない。M16から話を聞いた日本海軍のカレーについてだが、他にも赤ワインやらなにやらも追加していたのに関わらず美味いらしいので大丈夫なのだと考えられる。

「さてさて、じゃあ今度は私だね〜！見て驚かないですよ、私も選りすぐりの者を持って来たんだから〜！」

「……あれ、なんでかな。まだ見てないというのになんか嫌な予感がするんだけど」

「奇遇ね、私も同じよ。M4、あなたは知っているんじゃないか？」

「ええとそのお……私だけでは決定的な反対意見を言えずに止め切れなかったのです……」

止め切れなかった……？ということにAR15とROと一緒に首を傾げていると、S O P I I が取り出したのを見てみる。二次元だと四角いだけだが縦横に均等に溝がありアルミホイルで包まれている菓子。

チョコレートだった。

「じゃあ入れるね〜」

『待て待て待て待て待て待て待て待て待て!!』

カレーにチョコレート、ということをローガンでも聞いたことがないので即座に二人

と同時にストップをかける。いや、カレーの甘味を引き立てるのにいいとどこかで見た覚えがあるが、入れすぎればチョコレート味の味が前面に出てしまいよろしくないだろう。

だがS O P I Iはそれを考えずにカカオ豆から製造されたその菓子を投じようとしていた。それも板チョコ一つを丸々と。

やや不服そうにして見てくる彼女にA R I 5がまず聞いた。

「S O P I I、カレーにチョコを入れようと思ったのは何故なの？ 私としてはカレーみたいに単純そうに見えて複雑な料理に入れるのは泥を投じるみたいに感じて反対なだけだぞ!」

「そうよS O P I I、こんなところで失敗するというのはあなたも望んでいない筈でしょ? だったらもう少し理性を働かせて……!」

「ぶく、二人もM4と同じこと言ってるく」

彼女自身も悪意はなく、ただただ美味なカレーライスを作ろうとしているその一心なのだろう。ただ甘みを加えるというのならM4が既にリングゴを入れている。これ以上甘味なものを入れようものなら相反する二つの味の象徴が喧嘩し予定調和ではなくカオスな祭事が口の中で繰り広げられることになる。

ローガンとして自分が食べることになるのならやはり美味な方が良い。偶には綱渡り

のようなことをしてもいいがAR小隊の彼女達が関わっている以上はそのようなことはできない。

やいのやいのと言いつ争いをしている少女達を見ていたが、途中で直感的に嫌な予感を察知した。何時ぞやみたいと言いつ争いをしている少女達に疎外感を味わせられているこの現状。アウエーであるシチュエーションは幾つか違うがこうしていれば明らかによろしくない展開に転がりかねないと、ローガンはそろりと立ち上がり気付かれないうちにその場から立ち退いた。

そして暗闇に紛れながら今夜は飯抜きかと考えていると背後から聞き慣れた声が聞こえてくる。

『逃げるな、ローガアンツ!!』

聴覚を通じて脳に行き着いたそれがただの声というわけではなく怒声も混じっていると認知した。その瞬間、自然とローガンの身体は条件反射のように駆け出す。次第に背後からとてつもない速度の足音も聞こえてきてホラー映画さながらの展開にローガンも少し涙目になりながらも必死に走った。

その日の夜はローガンとて思い出したくない一夜して記憶として刻まれた。

〈現在〉

熱風により僅かに露出してしまっている顔の一部を叩かれながらも双眼鏡で行く先々を偵察し移動を繰り返して一時間経過。ようやく指定されている第一目的地が間近、というところで自分に同行している民兵の一人が報告してきた。

「敵発見。シールド持ちの奴が三体にガトリング持ちが五。他にもイヌツコロが無数にいやがる」

「ガードにストライカーにダイナゲートか。それだけでも奴らが防衛で配置している定石には当てはまっているな」

それに、とローガンは近隣の建物の屋上を見上げた。今は都合のよい建物の陰に自分

含めて隠れているので良いが、無闇に交戦すればここ近隣に建てられている建物の上には狙撃タイプのイーガーが布陣している。

その排除を目的として道中にて一旦分かれた人員の行動が追い付くのを待ちながらローガンは預けられている民兵が誰も欠けていないことを改めて確認した。

「できれば最後まで誰も死なずにいれたらいいんだがな……」

難しいことではあるがそう思わずにはいられない。撃たれるなりして負傷することはあつたとしても命を拾えれば儲けもの、それで生還出来たら勝ちだ。

「あなた達は奴らとの戦いのエキスパートなんですよね。我々だけならともかく、あなた達が居るなら全員生き残るところか負傷せずに生還できる可能性はあるんじゃないか……」

「そこまで過信されると正直困るな。俺の場合はあくまで戦い慣れていることを明確に表されながらも生き残っているだけだよ」

グリフィンに属する前から物資をやり繰りしながらも功を奏してきただけで特に大した人間ではない、とローガンはそう声無く自身に言い聞かせてこの後の打開策を考える。

屋上からの援護射撃を要請できるにしても、ここまで来るのに限られた数の鉄血兵の排除しかしていない。極限環境においての戦闘を可能な限り避ける為にまともに銃を撃ち合うようなことをせず、ローガンとしては（これだけだと聞こえが悪いが）常套手

段である反撃のない不意打ちや奇襲を繰り返して早期決着を為してきた。

目の前で布陣している隊列を崩す案もなくはないが、それをするには今回の場合は条件が悪すぎる。

ならば、とローガンはもう一度目標地点を確認しつつも周囲の地形などを頭に入れつつ言った。

「やれるだけのことはやるからお前達はここで待つてくれ。それと持ち物の中にロープがあつたよな」

「ええ、民間人の要救助者用として常備しています」

「そのセットを二つ使わせてくれ、後で返す。416にG11はハルカと屋上の確保が出来たら無線を。バルソク、一緒に来い」

『了解、こちらもその時になったら合図を頂戴』

要求したロープを受け取つてから隠れていた飲食店の建物の裏手に戻つては屋上含めて左右も敵影が無いか確認し、路地裏の方にローガンが先行して飛び出す。前々から隠密行動するのであれば機動性を重視するよう、サブマシンガンも扱えるように訓練させていたバルソクが後からついてくる。

それにしても、と思いローガンは思ったことをそのままバルソクに言った。

「お前本来のマシンガンとその弾薬だけでもそれなりに重量があるつていうのに、さら

にSMG一式持ってお前は大丈夫なのか？いや、俺が言う事じゃないだろうけど」「ここからさらに遠征道具一式持たされるようならさすがに私も持ちきれないがこままでならまだ何とかなるよ。サブマシンガン^Mってのは正規軍とかじゃ軽機関銃^Gのサイドアームとしても使われているんだし問題ない」

暑さによる汗をかきながらも遅れずについて来ているバルソクの笑顔を見て、さらに彼女が持っている『PP-19 B.A.T.O.N.』に視線を落とす。筒状のドラムマガジンではないそれを持ち出しての訓練に付き合っただけが現状までも想定していなかった。モジュールやバネやネジによつて構成されている戦術人形でも体力の浪費はやはり発生するということを忘れていたわけではないが無意識に軽んじていたのは確か。口に出せば余計なお節介として片付けられてしまうだろうが限界ははずれやつてくる。それも砂漠みたいに精神的にも負荷がかかるところにいれば尚更早く。

仕事の忙しさにかまけてそこまで考えが至ってなかったことにローガンは自身に呆れたが、今回は適宜様子を見ておくことにして今後どうするかを留意しておいた。「それにしても目的地の近隣に近付けば鉄血も多いといつちや多いな。分隊規模で同じルートを巡回しているのか？」

「かもしれないな。スカウトの巡回も厳しくなってるし気を一瞬も抜けないな、離れずに来い」

「ははっ、言われなくともそうするよマスター」

裏路地から表通りへ行くと巡回している鉄血の部隊を網目のゲート越しに目視で確認したのですぐに身を屈めて陰に成りすましてやり過ぎす。通り過ぎたのがヴェスピドやスカウトにマンティコアといった多目的部隊だったので現状のまま戦うようなものなら火を見るよりも明らかな結果になる。

ガシヤンツガシヤンツ！と最後尾にいた鉄血の無人歩行戦車が駆動音を響かせながら右から左へと行つて見えなくなる。そこでローガンは『ハニーバジャー』のストックを肩に当てながら片手でしっかりと構え、ゆっくりと音を立てないように気をつけてゲートを開ける。そして過ぎ去つて背後を見せている鉄血に注意を特に向けつつバルソクに向けて小声で無線越しに言つた。

「奴らは気付いてない、今のうちだ」

『オーケー。後ろはこっちで警戒する』

目的地の地下道入口からは死角になつている表通りを横切つて反対側に辿り着くと木の板で構成されている壁を見て周囲を見渡す。しかし他にやれることがないと早期に結論付けて跳躍し壁の縁に手を届かせると一気に自身の体を引き上げさせた。脚も駆使し上半身だけ覗かせてその先を見てみたが敵が待ち構えていたり罠を張られていたりということもなく、ただただ何時ぞやのゴミがビニール袋で纏められて置かれてい

るだけ。そのまま片脚も上げて乗り越える姿勢になると周囲を警戒しながらこちらに時折目を向けているバルソクに続く様にハンドサインを送った。

そして完全に表道から壁を通り越したローガンは地面に両脚を着けて脳内にインブットさせていた即席の地図を呼び起こす。大体今の位置が地下道入口の建物を挟んで反対側にいるとし、その横の屋上に上がれる外付けの階段を空を仰いで確認した。

『ローガン、近隣の敵スナイパーは排除完了。そちらの現在位置は?』

「俺とバルソクが移動中、民兵は表道を挟んだ目的地の向かいの飲食店内にて一旦待機させてる」

『やっぱりとは思ってたし別にいいけど真正面から戦うつもりではないのね。何をすつつもり?』

「もうちよつと待つてろ。あともう少しでわかるからよ」

416からの無線に応答しながらバルソクが来るのを待ち、次第に苦も無く追い付いてきた彼女を見てみる。先程彼女自身が言ったようになっていようとかなっているように息を切らしている様子はない。

自身がチェックされていることに気付いた人形は心配無用とばかりに胸を張って見せる。そして慣れていないことをしているローガンに言った。

「こんなもんでバテたりしないさマスター。足音を一切立てるなどか無茶言わなければ

どこまでもついていくよ」

「頼むから無理するだけでなく無茶して死ぬような真似はしないでくれよ」

「その台詞はマスターから聞きたくなかったな。AR15とかマスターの近い連中から散々聞かされていたけど」

頬を膨らませてぶーたれるバルソクに内心溜息を吐き、仰ぎ見て存在を認識している階段を音を立てないようにしながら上る。上りきる前に屋上に敵影が無いこともきちんと確認し、ないことがわかれば反対側に向かつて見下ろす。そこには上方だけを確認せずに目高の高さまでしか警戒していない鉄血兵とダイナゲートの群れである。

そこでついさつき預かったロープを下ろし、無線機に手を当てながら周囲で一番高くそびえたつ五階立ての廃マンションを見上げた。

「そろそろそつちの出番、この場にいる全員で俺の合図で同時攻撃を仕掛けるぞ。ダイナゲートと数人の鉄血兵はこつちで受け持つ」

『こつちが担当するのは攻撃されていない鉄血という訳ね、了解。アルファ2、3はスタンバイ』

『よし、あたし達は北側の敵と殺り漏らした敵を狙う。そつちは気にするな』

ローガンはロープの一端を手摺に頑丈に縛り付けると反対側を自分のベルトに備え付けているフックに括り付ける。バルソクと即席のラペリングロープに仕立てると、彼

女が手に持っているフラググレネードに頷く。そして落下防止の手摺を乗り越えて地球からの重力を感じる体勢になる。

重力に逆らって壁に対し垂直になると、ローガンはナイフを取り出しつつゆっくりと下り地上から三メートルギリギリの地点にまで下った。そして同じ体勢で横にいるバルソクにスリーカウントでグレネードをダイナゲート達に投じさせる。

ドンツ！と体で覚えている爆発タイミングと同時に起爆し、破片をまき散らして鉄血の犬達を吹き飛ばした。

「ゴォー」

爆発したそのコンマ数秒でローガンは合図を出して攻撃を開始する。

ローガンは高所から飛び降りるようにして張らせていたロープを一気に緩め、重力に従って落下する。そして真下にいたストライカーを落下の衝撃緩和のクツションにしつつナイフで急所を刺して仕留めた。爆破とほぼ同時の奇襲に狼狽えたかどうかは知らないが、注意を払っていない上方かつ背後の異変に前側にいた盾を持つ鉄血兵は振り返るのにやや時間がかかった。

与えられた数秒の間にローガンはすぐさまナイフの刃を二本指で挟んで持つとそれを一体の鉄血兵に放つ。喉元に命中すると同時に銃も向けようとしていた別個体が壁に留まっているバルソクに撃ち倒され、ここまでで二人でダイナゲート達と鉄血兵の

三体を仕留めた。

他の鉄血兵を見てみると、まだ戦える状態ではあるストライカーとガードのワンセットが体勢を整えようとしている。しかし高所からの狙撃も受けているのもあって、ローガンとバルソクのどちらから対処すべきか明確な演算結果が出ていない様子だった。

『あと二体よ！』

「お前達はもうここちに来い！騒ぎを起こしたんだ、すぐに敵増援が来るぞ！」

そう指示を出しつつローガンは『ハニーバジャー』を撃つて高所からの有利を保持しようとしているバルソクの方に注意が向かないようにする。その間にガードとは別にストライカーの注意が逸れそうになったが、反撃を受ける前にバルソクは迅速にSMGでの確にストライカーの頭部を撃ち抜いて倒した。

その後にガードからの銃撃を受けぬように一旦路上で放置されている廃車に身を隠そうとしたが、ストライカーを倒した後のバルソクの行動は早くガードも機能を停止。残っていた鉄血兵が倒れたがまだ気は抜けない。すぐにローガンは他よりも近くにいるバルソクに次の指示を出した。

「ロープを回収したらここで周囲警戒しつつ待機だ、俺は民兵達を呼んでくる！」

「わかった、できるだけ早めに頼むぞ。ダミーもないのだから私一人だけだと戦闘になつたら長くはもたない！」

「心配するな、そう長くはかからないさ！」

すぐにローガンはハルカから借り受けた民兵達を呼び出しに一時いた建物の方に小走りで向かう。騒ぎを聞きつけた民兵達が建物の陰から顔を覗かせていたので声を大にしてこちらに来るように呼びつけるとローガンもバルソクの元に戻った。

引き連れた民兵と自分達含めてこの場の確保を行っていると、屋上に残しているロープの回収を終えたバルソクが地上に降りてくる。

「敵増援の姿は今のところないがフラグの爆発もあったんだ、いずれはくるだろうな。G11、そっちはあとどれぐらいで到着する？」

『時間的には三分ぐらい欲しい。至るところが酷いことになっていて遠回りもさせられているから』

「ゆっくりはしてられないぞ。スカウトだけでなくマンティコアまでもがうろついているんじや交戦することは避けたいからな」

幸いなことに416にG11達と合流するまで鉄血が駆けつけるなどということにはならなかった。

しかしここまでが自分達にもたらしたささやかな幸福だったのだと、後にローガンは思い知らされることとなる。

明かりは一切ない、暗黒だけがそこに満ちている空間に踏み入ることの経験は民兵達にはないのだろう。最低限として手持ちのライトを持つていいものはいいもの、それ暗がりに向けるばかりでカラシニコフの銃口がやや下がっているのが最初だけ見て取れていた。

ただ無理に一人だけで完結させずにツーマンセルを組んで役割分担を与えているのはいい考えだとローガンは思う。幾分遅れが出てくるのは仕方ないとしても、敵対勢力と会敵した時に対応できるか否かで大きな違いが出てくる。有効活用できる物の用途を活かし、それを扱う人材もやり方を心得ることですの問題がある程度までクリアできているのだから現状では上々だろう。

開けた場所に出たところで前進する姿を少々離れたところで見ていたが、ローガンは端末を操作してサングラスのHUDに自分たちが居る地下構造を改めて表示させる。

「ハルカが言った通りこの地下には結構な手が込んでるし、何階層にもなっていて面倒だな。時間がかかること間違いないぞ」

「地上と比べて涼しいのがせめてもの救いだけだね。でもこれだと夜戦さながらの戦いになることは間違いないよ」

駅口の壁面に張り出されていた客向けの地図をスキャンし読み込ませたものだが、大雑把に記されているそれでもゲンナリさせるのに十分だった。

構造としては四階層に区分されており、地下鉄の利用客は上部からの三区画の往来が可能という事。最下層は業務員といった関係者が利用するメンテナンス通路が多くある階層らしいが残念ながらここではそこまで把握できない。ただ不慣れな暗闇にも適応しようとしている民兵達のように『詳しいことがわかっていないだけ』になっただけでも良しとできる。

「ここだけで入手できる情報のみの話であれば。」

「ヤッ、と……」

ローガンは端末の中に入れてあるデータの二つを立ち上げる。スクロールして目についた順に操作してHUDに二つとも映すと、現在進行形で表示させたままになってい

る階層構造を模したスキャンデータとリンクさせた。次第にこちらからの操作を待機しているデータの数が減っていき最終的には一つになる。

近くでその一連の情報の集束を見ていた戦術人形達が各々にローガンの端末の画面に視線を落としながら息を吐いた。

「なるほど、偶然見つけたというリスクを減らす為に『そこには存在しない』として五階層目があるのね」

「何故フロリダ州の地下こちにしたのか、詳しい経緯はわからないけどな。にしてもやつぱりここで間違いなかったか」

今しがたローガンが立ち上げたのは『オアシス』に繋がるデータの二つの『座標』と『地図』である。解析を含めた情報処理班から託された際には目に見えない重石を体全体につけられたような気分であったが、今となつては消え去るところか感じる重さが倍になってきていた。

そもそもフロリダ州が『オアシス』の在処だと特定できたのは本当に細い糸からによるものであった。ダム襲撃の傭兵達の一人、戦車の爆風で重傷を負った傭兵がローガンに懇願した時に得たドッグタグから掴んだ糸口を辿った苦労は今でもありありと思いつける。

「鉄血はここ」が『オアシス』があるんだって、わかってやってきたのかな。ご丁寧になんか

を包装してやってきているんだし」

「そう見て取り掛かった方が吉だろうな。というよりも元は鉄血が作り上げたものによ
うだし、在処を知っていて然りだろう」

「それを含めて見ても、『オアシス』をここに置いたのは何故かしら。もちろん『オアシ
ス』を奪取した誰かが隠し場所として選んだ、なんてことも考えれなくもないけど」

416が投げかけた疑問に関しては、ローガンも数日前から考察を重ねているが腑に
落ちることはなかった。そもそもの話、ローガンを始めとしてその存在を知っている者
達が『オアシス』に関係している情報は乏しい。まともな情報を入手したのは生死不明
のバーンズからによるものしかない。その時点で考察も何もできたものではないのだ
が、根拠のない憶測として思い当たったのは鉄血と裏で通じていた人間の誰か、とい
うところだった。

『こちらプロフェット。アルファチーム、応答し現状を報告してくれ』

「こちらアルファリーダー。現在パッケージを探索しに十分ぐらい前から地下に潜つて
いる」

ローガンが話していると思ひ出したようにしてギーがウエストポーチから小型デ
バイスを取り出して壁に設置する。そしてそれからアンテナを伸ばして起動すると、
ローガンの端末の画面の隅に映されている無線感度が改善された。

今はまだ地中深くまで進攻しているわけではないので大丈夫なのだが、このまま下層に進んでいけば無線が繋がらなくなるのは考えられていた。現時点でのグリフィンの技術で傍受のリスクを気にしないのであればWi-Fiも利用して遠距離通信も可能である。ただ、今回のように地下深くの廃墟同然のエリアに踏み込むのであれば、中継地点を築いていくのが道理だということになった。

そこで持ち出されたのが、G11が設置した小型デバイス。バッテリー内蔵で一日中使用可能であるそれを要所に置いていくのをローガンは彼女に任せることにしたのである。

不備がないかなど第二チェックとして416も見ていくのを脇目にバルソクも話に混ぜた。

「それでプロフェット、現時点で何か収穫はあったのか？」

『まだ鉄血に関係している確たる情報は掴めていない。調べていくうちにしよっちゆう手に入る情報としては砂嵐がどうか、竜巻がどうかそんなばかりだよ。だけど気になる情報が耳に入った』

「気になる情報？鉄血のAIが逆立ちして物資を民間人に与え始めたとかか？」

『世界大戦誘発のそれであればもう聞き慣れてきているよ。僕が聞いたのはフロリダの各域に点在している民生組織のこと。その中で幹部の人員が一人だけやられていたと

『というのが幾つかあったんだ』

グリフィンといったPMC規模じゃなくとも、自分達の身を守るとして鉄血といった害を能動的に与えようとしている敵と戦う組織は意外と多い。かつてローガンが所属していた『グラランド』もその一つで、司令官の伝手で雇われたエンジニア数名と三十人程度の兵士で構成された組織だった。

さらに勘違いしてはならないのが、人形保護団体などといって武装集団を用い弾圧してくる組織と違う事だ。あくまで各国の反社会的テロ組織としてリストに載っているのは、グリフィン所属のローガンも含めた者達を武力でもって攻撃してくる、という最大の枠組みに当てはまる団体である。ハルカ達のように保護区の外で要請があれば受け入れて協力する、害を為す連中とは関係ない難民を受け入れるといった受動的で善たる組織は『民生組織』として扱われてきた。

その民生組織の幹部クラスの人員の一人だけが殺害された、そのことにローガンは首を捻った。通信を続けながら進み続けるハルカ達とプラットフォーム中央に集合し、さらに下層の地下鉄の第一エリアへと進む。

「幹部一人だけか？ 民生組織の人員が皆殺しにされたとかじゃなくて？」

『奇妙なことだね。組織内で動機がある人を並べてみてもアリバイがあったりして真相は闇の中。だけど死亡推定時刻以降にも揚々と歩いている様も見られていたりもして

いて幽霊じゃないのかって言われているよ』

「推定時刻以降にも生きている様相のまま活動していた、てなるともう何に驚けばいいのかわからなくなるな。犯人自身が扮装していたと考えるのが自然かもしれないが」

『かもしれないけど完全に他人に成りすまそうだななんて限度がある。なんにしてもボロが出る筈なのにそれを悟られずに数日間そのままでいたなんて、僕には信じられないよ』

無理もない、とローガンも思いながら背後から狙い打とうと潜伏している敵がいないか手洗い場なども見て回った。

バラクラバなどで顔を隠さぬまま敵組織に潜伏し続けるなどという芸当はローガンにもできない。それも部下との交流も多い組織の上層にいる人物であれば尚更だ。

「その事例は一つの民生組織内での出来事、て思いたいが……」

『フロリダにある組織なんて片手で収まる程度の数しかないからそう多くない。だけどその過半数で類似した事件が起きているから疑わしいよ』

「一応俺の頭に入れておくが忘れてしまいそうだな」

「心配しなくていいよ。帰ったらこっちで情報を纏めた書類を作成して渡すから。とにかく調査は続ける」

遠距離通信が終了してから女性側のチェックを終えた416とG11に合流する。

彼女達からも異常はなかったという報告を受けてからローガンは各所を見て回る民兵達の様子が少々おかしなことに気付いた。

ここまでは無駄のなく進むように心がけていたような動きからその場に留まって辺りを見渡す、この場にあるとしていた物が無く探し物をする事になった同然のそれになっっている。

ハルカは何かの紙片を手に周囲を見て回っているので皆でそちらに向かった。

「どうした、なにかあったのか？」

「この地下で数日前から潜伏させていた部下の姿が見えないんだ。ここで合流する手筈になっっていたんだが……」

ハルカが持っている紙片をローガンも見ても見れば合流する場として今自分たちがいるここが指定されている。二日後の第一プラットフォームの待合室前、と記載されているその紙片とガラスが割れて中と内の隔たりが半壊しているそこを見比べてバルソクは言った。

「指定しているって言っても時間まで書いてないじゃないか。なら単に待ちくたびれたか用を済ませていて遅れているんじゃないのか」

「いいえA E K 9 9 9、後者はともかく前者はないんじゃないかしら。さすがにこのリーダーも時間厳守というのは教え込んでいるだろうし」

「その通りだ。おおよその合流時間として今の時間帯も無線経由に口頭で伝えている」
「最後に連絡が取れたのはどれぐらい前だ？」

「今からおおよそ一時間前」

時計に視線を落とすハルカに倣ってローガンも腕時計見てみれば現在の時刻は『PM 00:21』。一時間前というところローガン達全員がまだラクダの上に乗って目的地を指していた時だ。

情報の共有は云々、というのを言う前に自分達も彼女達に対し『オアシス』奪取の事を秘匿しているので大きく言えない。もどかしい思いをしながらローガンは溜息を漏らすと同僚達に言った。

「仕方ない、俺達も探そう。だけど鉄血に出くわすことも忘れるな。この場をしらみつぶしに見て行けば痕跡もあるかもしれない」

「すまない客人達。うちの部下の為によろしく頼む」

そこで散開してローガンも広範囲にライトを照らして人影がないかなど細かく探した。一度見てきた改札口の方にもなにか手掛かりがあったりしないかなど明度が調節されて明るく見える視界に目を光らせて形跡や転がってるゴミなどに気を払う。古くなってる足跡や錆ついているのなにかしらかの部品など、そこにある物を片っ端に手にとれる物とはとってみては調べてみたりしたが変わった点は見つからない。

しばらく探してみても手掛かりはないのかと、まだクリアリングが済んでいないエレベーターを調べていたローガンも内心は半ば諦めムードになろうとしていた。しかしハンドガードに着けているフラッシュライトで斜め前布巾を照らしている間に片脚が金属音を立てる何かを蹴った。ネジやバネとは違って内部に空洞がある金属の独特の音であったが、銃を撃っている兵士からすれば聞き覚えどころか訓練していれば嫌でも聞くことになる音だった。

すぐさまローガンは視線を落としながらフラッシュライトで照らしてみるとそこには思ったものが数多く転がっている。それを手に取ってみていると追いついてきた416が言った。

「ローガン、それって……」

「ああ、もう用済みの薬莢だがまだ新しい。それに散らばっているうちのほとんどが……」

明かりを照らしてみるとエレベーターの乗り口付近には銃を撃った後に排出される弾丸の薬莢が多く転がっていた。もちろんそこにあるのはローガンも知っているアサルトライフルなどの弾薬のそれもあるのだが、多くの割合を占めているのは鉄血の銃器によるものだった。

人類と決別し殲滅を目論む鉄血工造が装備している銃器の詳細はローガンも知らな

い。ただ、人類との戦いにおいて用いる武器そのものの弾薬などが同様の物であつてはならない、ということを考えて鉄血は独特の弾丸を製造しているということとは確かである。

「そういえば416、付近の壁の方に弾痕があつたりしたか？」

「たしかにあるけど新旧に関しては私にわからない。でも注意深く見てみれば戦闘があつたのは間違いないさそうね」

「俺達が踏み入る昨日今日じゃなく以前にも戦闘はあつたみたいだからそれだけが全てじゃないけどな。でもそつちを見てみるよ」

指差すかわりにライトで指し示されたところはエレベーターゲート。閉じられている両開きのその根本には赤々とした引き摺られたと思わしき血痕があり、大本はゲートの内側の方に続いている。

傍にいたる416が纏っている雰囲気が一層研ぎ澄まされた刃物の如く鋭利なものに変わったのを見ずとも感じた。ローガン自身も見たくない物を見る覚悟を密かに終えてから『ハニーバジャー』を脇の方に下げて416とは逆の扉の方に隙間から指を掛けた。

「いつでもいいぞ、お前に合わせる」

「行くわよ、三……二……一……！」

416からの合図に合わせ、ローガンもゲートを開けるべく両腕に精一杯の力を込める。ガガガツと軋むような音と共にある程度まで開けたと思つたタイミングでローガンはすぐさま脇に下げている愛銃を手にとって中を確認する。

ライトで照らされた光景はローガンが予想していた通りであり胸を撫で下ろすことしか出来なかつた。しかしそれが見るも無残ではない、いたぶられている様相が無かつたのはこちらとしても唯一の救いである。正気を疑うようなしでかしても平然としてゐる、『アネクドート』と同じことをしていないのはローガンとしては何よりの要因だつた。

同じくその現場を目撃した416も溜息を漏らし、目をローガンと合わせてから無線機に手を当てて言った。

「ハルカ、問題は解決したわ。あなたからすると最も嫌な形だけど——」

後々ローガンはこの時から胸騒ぎを感じていたと思ひ返す。彼女達が話して合流する段取りを進めているこの間にも、鉄血は単純でもいくつかの思惑を進めていた。怠惰でいたわけではなかつたのに力不足を感じ得ずにはいられない、そんな最悪な一日の本当の幕開けだつた。

39. 深淵の手前にて — Pay attention to your feet —

フレアを撒いてから押し込められているようになっていた四人分の遺体を運び出し、ハルカの様子を窺っているが内心でどう感情が燻っているかはローガンにはわからない。部下を失ったことによつて鉄血に対し怒りの炎を燃やしているのか、それとも無力感に囚われているのか。いずれにしてもそれだけを理由に歩みを止めることはできない。

ローガンは改めて民兵の死体を確認してみたが、疑うまでもなく死因は銃殺によるもの。急所を含めて身体の至るところに風穴が空けられてありそこから失血死に至ったのがあるありとわかった。

眉間に皺を寄せながら見ていると、近くにG-11がしゃがんで同じく死体を見ている。撃たれた箇所を一つ一つ確認し、彼女なりに得た考えを言ってくれた。

「死亡推定時刻とかは正確にはわからない。でも血痕からしてそんなに時間は経ってないのは確か。連絡がつかなくなった一時間の間にやられたのは間違いないよ」

「だろうな。ハルカ達の様子からして人違いってこともないようだし気の毒だな。そん

でG11、傷痕からどう取れる？」

「無駄がない、その一言に尽きるよ。脳を除いて負傷すれば致命傷になる内蔵のある箇所を全て撃ち抜いているし。それにこっちも見てみて」

G11の言うままにローガンも二人の遺体の方に足を運んでみると、銃創だけでなく切創も見て取れる。ただし、一般の兵士が持ち歩いていたりするローガンのよりも刃渡りの大きい大型ナイフによるものではないことがはつきりわかるぐらい大きい。肩から脇腹にまでかけて身体を分断するようになっていてそれをG11は指差した。

「この傷痕は銃をメインとしている雑魚の鉄血兵ではつけられない。奴らの多くは戦闘の効率化を測って腕と銃が一体化しているのだから」

「新型の鉄血兵、それかブルートによる可能性は？」

「ブルートの戦闘方法は俊敏性を活かしての両手にナイフを持つての特攻で手数で攻める。それなのにこんな一太刀で命を刈り取ることはあいつらには考えにくい」

ローガンもブルートと戦ったことはあるので、あの手合いの敵に対しての見解に違いはない。ブルートは銃の扱いにばかりに気を取られて接近戦がやや疎かになっている兵士には有効な戦法として採用されているので、CQCといった格闘術を心得ていてもあまり出くわしたくない鉄血兵の一種だ。そう思うようになった経験からして、一撃に込められている力は重いものではないとローガンも記憶している。

なのでG11の説明には納得できるし異論も頭に浮かんでこない。根拠を踏まえた理路整然としたそれであっても決めつけずに、万が一にもあり得ることとしているのも悪くないことである。

「新型、というのも確かに考えられるね。でもそれを見た、という目撃情報は今日までない。それに単純に考えてみると、新型を投入するのに砂漠みたいなこんな辺鄙なところにいきなり実戦投入、というのは厳しい気がする」

「そういつた過酷な地に適応した鉄血兵の開発、といった噂を情報通の45から聞いたことは俺にはないが、俺よりも近いお前が言うんじゃないのか？」

「こんな慣れていない推察するのは他の皆に任せているし、情報が出揃っていてもあたしからは断言できないよ。うゝ、疲れる……」

「能書きは良い。単刀直入に聞かせてもらうが、こいつらを殺したのは一体どんな奴だ？」

自身の銃を持ちながらダラリと両腕を引力のままに垂れ下げたG11にハルカが聞いてくる。彼女の表情は変わらずとも言葉には初対面を合わせた数時間前、リーダーとなった自分の意にそぐわないことをした部下たちに雷を落とした時に内包している熱が静かに内包されていた。

それを敏感に感じ取ったG11は体を震わせたが、ローガンは近くにいたので安心さ

せるべく、そして逃げなくて済むよう背中にも手を置いてやる。怯えが見える両目が自身を仰ぎ見たが、大丈夫だとローガンは言わずに頷いて続きを促した。意を決するのに時間を要したがG-11は次第に口を開いて彼女自身の考えを言った。

「この人達を殺したのは鉄血のハイエンドモデルの一体、『処刑人』のエクスキューションだ」とあたしは考えてる。こんな大きな切傷なんてブルートにはきつと無理だろうから……」

「……そうか」

そう言葉を漏らすとハルカは目を伏せて件の太刀傷を負わせられて絶命した部下二人の近くでしゃがむ。仰向けになつて二人の額に静かに手を当ててからローガンからは聞き取れない何かを呟いてから再び立ち上がった。

「もう行こう。これ以上奴らの好き勝手にやらせてたまるものか……!」

隠しているつもりなのかはわからないが、部下を纏め上げている言葉の端々にも怒りを滲ませているのがローガンにもわかった。同じく感じ取っているらしい彼女の指揮下にいる民兵達もやや慄いている様子ではあるが、彼ら自身も仲間がやられたことに對する思いは同感らしく自分達のリーダーの言うことに耳を静かに傾けている。

次第に話が纏まつてから隊列が組み直されると、二十数名いるうちの二人がこちらにやつてくる。彼らは彼らで背負つて持ち出している大型バックから黒い大きな袋を取

り出した。それはローガンにも見覚えがある物、死体袋だった。

「彼らの遺体は我々が持ち出します。あなた達はリーダーと先へ進んでください」

「了解。けどあんた達だけでここから運び出せるのか？」

「隠れてラクダを繋げて待機している仲間にも知らせて応援に来させますよ。あなた達と通った道は比較的 안전한道として長い間キープされてきてますし、我々でもある程度までは奴らと戦えますから。これからの我々の仕事に比べればあなた達精銳に掛けてしまう負担の方が重いと云えますよ」

嘘偽りがなく人当たりの良いこと笑顔を浮かべる民兵の一人の言う通りだと、バルソクがローガンの肩に手を置く。

普通の鉄血兵とは一線を介するハイエンドモデルとの交戦を今回は避けられない。確実に勝てる保証のない戦いなど常日頃の事ではあるが、ローガンからすれば現場指揮官の位にある鉄血の人形と戦う場合は退くことを念頭に置く必要がある。約二カ月の間に戦ったハンターやイントウルダーに勝てたのは時の巡り合わせやツキが良かったからであり、後者は特に追いつめられていた状態からの起死回生であった。

それにエクスキューションナーは鉄血のハイエンドモデルの中で戦闘面に特化している。機動作戦で誘い込む『狩人』^{ハンター}よりも、電子戦で敵を攪乱する『侵入者』^{イントウルダー}とも違って正面からの戦いに秀でているのだから油断は欠片もできない。

手一杯でこちらに割ける人員の余裕もないことから、ローガンも任せることにしてその場を後にすることにした。

「わかった、お前達のリーダーがこいつらの仇をとる手伝いをさせてもらおうさ」

「ええ、お願いします。血が通っていない冷酷なブリキの人形達の息の根を止めてください」

その民兵の肩をローガンは叩いてから、グリフィン所属の皆を連れてローガンもハルカの後を追いかける。こちらを待っていた状態から進行をまた再開し、ローガンも加わっている派遣部隊はハルカ達とは少々離れていても互いを見失わない範囲で展開。死角をお互いに注意しながらカバーすべく、角があるような箇所にはもれなくライトを当ててクリアリングを行った。

『客人のリーダー……たしかローガンだったな。ここから先はいくつか枝分かれしていてちよつと面倒なつくりになっている。奥まで行くのにここまでは大体一本道だったがあたしからはすると追跡できない。どうにかできるか？』

「そうか、ちよつと待ってる……」

ローガンは左腕の端末を操作し、掛けているサングラスのHUD上に自分達が確保すべき最重要目標の『オアシス』に辿り着く為のルートを表示させる。

現状から推測するに、高確率で当てはまる今回の鉄血の目論見は『オアシス』に関係

しているのと見た方が良い。エクスキューショナーのようなハイエンドモデルの鉄血兵がいる可能性が浮上してきたことから、鉄血側から也有些事として捨て置けることではないのだろうか。情報が乏しく探索的な考えだが、過激だのなんだの言われてもそう想定しておいた方が吉だろう。

表示されたルートに自分達の現在位置を暫定的に置いて進むべき方向までも機械が定めた。HUDに表示されたままにローガンは鉄血兵達を通ったであろう道筋を睨む。「今俺達が立っているレールの先、ここから二百メートルの所に緊急事態の非常階段がある連絡通路に行ける。そこを使えば奴らに先回りできるか、追いつくまでの差を一気に縮めれるだろうか」

『すまないがそこまでの先導を頼む。そのかわり背後からの奇襲はこちらで対処する。懸念しているあたし達が背後からあんた達を襲う真似も一切しないさ』

「俺達が口出しする前に言ってくれてありがたいことこの上ないよ。それじゃあこっちは先行して状況を確認める。一応配慮はするが見失わないように心得てくれ」

『了解だ』

ローガンは他三人の人形達に指示してクロスフォーメーションから隊列が特にこれといったない、パツと見てバラバラに見える形に展開し広い範囲で索敵できるよう、尚且つ早期のクリアリングに備える。武器による機動性が良いローガンは皆の先頭を走

り、運行されていない地下鉄列車と壁の隙間からレールに出てきたハルカにサインを送る。

反応が返ってきてから再びローガンはすぐ後ろについて来ている416と共に向かう先に歩を進めたが、見えている暗闇がこの世の深淵を表しているようでこれまで以上に気分がよろしくなかった。

——〈Channel: Unknown. Line: Agent to Executive
c u t i n e r.〉——

『エクスキューションナー、聞こえていますわね？』

『……ああ、聞こえているぞ代理人。^{エージェント}通信状況に異常なしだ』

『報告義務と言つて強要するつもりはありませんが、今回の件の失敗はご主人様も懸念しています。ある程度まで作戦遂行状況を報告してください』

『チツ……今のところこれといつて進行に影響する問題はない。ただ二つだけ、とくに足らない事とは思つておこうか』

『続けてください』

『まず一つだが、『オアシス』に向かう為の初つ端、地下の改札口付近で民兵共と交戦。終いに奴らを締め上げて狙いを聞き出そうとはしたが最後まで口を割らなかつた』

『この辺りでその地下に用がある人間はいるとは考えにくいですね。そこはもう手元すらまともに見えないので不自由に極まりない』

『オレ達が横流しした物かどうかは知らないが、ここらをうろつく人間としては装備はまだ立派な方だ。銃だけでなくメーカーと構造がバラバラの防弾ベストにフレアまであつたぞ』

『戦闘になつてからの後始末は終わらせましたか？』

『さすがにそこまでオレも馬鹿じゃないさ。そこらにばら撒かれたフレアの残骸を一応回収して方が一の追手から逃れる為の時間稼ぎもしておいてある』

『それは結構。ですがただの民兵が偶然そこで屯していた、という風には考えにくいです。フレアを持っていた、ということはそこが電気が通っていないところだと知つてい

たのでしよう』

『確かにそう考えられもするな。この地下に大々的に通じている通路はなくはないが今も生き延びているE・L・I・D変異体も居て連中にとつては危険だろう。それに地上はブリキ達がいるんだしそう易々と来れる筈はない』

『関係あるのかは定かではありませんが、こちらから入手できた情報をお伝えします。フロリダー帯にグリフィンの部隊、『狼王ロボ』が数時間前に現地入りしたという知らせがきました』

『ほく……ハンターを殺したウジ虫共の一人か……』

『彼を人間だからといって甘く見てはなりません。知つての通り、『狼王』はイントウルーダーまでも退いた兵士で有している実力はまだ正確に測れていません』

『そのつもりはないがそこまで警戒するだけの理由を言ってみろ。たしかにハンターのような手練れを二回屠っているのは目を見張るが、奴に働いた追い風のせいだと断定しないのは何故だ?』

『我々が過去に壊滅させたタスクフォースの生き残りだった、と『彼女』が入手した情報にあります。『タスクフォース116』、この名に聞き覚えはありますよね?』

『しごとく生き残っている様からゴキブリだと思つたら、その実は的確に何度も弱点を突いて喉元に食いつく黒のライオン部隊。オレが全滅させた、あの生き残りだと言うの

か』

『その通り。まだ詳しいことは知れていませんが、兵としては超一流とまで言われた御仁の教えを直接受けていたそうです』

『……とりあえず、一旦そのことを置かせてもらおう。その情報を寄越したのは今回オレが組まされている『あいっ』、だろ』

『よくお気づきで。現在は討たれたイントウルダーの代わりに諜報活動を指揮してもらっています。ですがわたくしとしても長期間その席に置いておくつもりはございません』

『だったらなんであんな半端物を……よりもよってオレと組ませやがったんだ……！』

『わたくしも同感です。ので勘違いなさらぬよう。業腹ではありますが、彼女らの新たなボディが製造完了するまでの臨時役としては適任なのです。急を要するマルチタスクを現在進行形で行っておりませぬ。それにこちらの損害を可能な限り減らすのに『彼女』を動員せざるを得ませんでした』

『こんな仕事、オレだけがブリキを率いるだけでよかつただらうが……。数だけが頼みのそんなじよそこのE・L・I・Dもそこまで問題じゃない……！』

『たしかにそうです。あなたの戦闘力を疑っているわけでもないのですが、戦略を模倣

できてもやはり限度はあります。『彼女』はあなたの至らぬ点による穴を埋める為の石膏であり、あなたは『彼女』に対しての監視役で、もしもの時のストッパーですよ』

『だからといってもだな……』

『不平不満を言うのは勝手ではありませんが、それは結果を出してからにしてください。いずれにしても、『狼王』が近隣に來ているということは『オアシス』を追ってきたに違いないありません』

『ふん……それでその『狼王』だが、他に何を知れている？過去のプロフィールでそれだけを抜き出した、てなわけじゃないだろ』

『仰る通り。こちらはその報告を拝見しましたが、どれも興味深かったです。ですが最も目を引いたのが彼の幼少期ですね』

『奴の幼少期なんざ何にも面白いことなんてないだろ。精々裕福に過ごせずに過酷な環境下を生き延びた、なんてのがツキだ』

『それ以上ですよ。この情報の扱い方を誤らなければ、彼も平常ではいられないでしょう。それどころか世界中からのグリフィンへの信頼は失墜することは間違いありません』

『能書きは良い。それでどんなのだ』

『いいですか、記録によると今から——』

不正アクセスを検知。暗号パターンを修正

416からの合図と同時にローガンは扉を蹴破り、トラップの有無が確認済みとなっている部屋へと押し入る。枝分かれになっている連絡通路の一つに入って目に入ったのはせめてもの光源となっている非常灯に照らされた手摺と螺旋階段。空気の流れが一切感じられないのはかわりはないが、左右にはなく特に上下に開けた場へと出たのは大きな変化だ。

得られた視野から敵の有無を確かめ、ローガンは背後で待機している他の面子にハン

ドサインを送った。ここから進むべき方向は下方、向かうにはローガンの左手の方にある階段を下つていく必要がある。

それを正しく理解した416が先に階段を途中まで下つてこちらからでは死角になつている部分のクリアリングを行う。そして続いてはバルソクが同じように味方からでは視覚外になつている足元の確認を行い、G11がさらに同様に行動した。

そしてG11による報告が無線機を通じてローガン達のみならずハルカにまで届く。

『クリア』

「バルソクはG11と先行して三層に下つて安全を確保、416と俺も後から続く。ハルカ達も遅れるなよ」

それぞれの了承を得られてからローガンも階段を降りてこちらが追い付くまで待つていた416と駆け下りる。カンカンツと複数人による階段の金属音が無駄口のないこの空間で響き渡るのが印象的だが、それに気を引く張られることは少なくともローガンにはない。無論意識は現実の方にあるがこれから起こりうるだろうことに対してのことへの懸念が第一だった。

やがてこの階段で降りれる階層、『地図』による電子マップでは三階層に到達する。段差を降り切つてからローガンはグリフィンの四人が所定の位置に付いてから扉を僅かに開けて危険が無いかを確かめた。

軋む扉との間から身体を滑り込ませてローガンはフラッシュユライトを左右に振って確認するが襲ってくる存在はないが……。

「行先の向こうから足音が僅かに聞こえるな」

「追いついた、てことかしら？」

「だろうな。アルファチーム、もう言うまでもないが暗視装置越しに敵が見えたら撃てよ。どんな連中でもこつちに危害を加えてくるのなら躊躇った時点で負けだからな」

「了解だマスター、心配するな。ナイトビジョンを起動する」

バルソクの返事と共に各員がそれぞれ暗視スコップを取り出して装着する。ローガンも一応持ち出しているが、実戦におけるハイテクサングラスの試運転の実証も兼ねてもらおうように任せられていた。

地上にいた時のように視界の明度の調節が自動で行われ、太陽光が燦々と照らしてくる眩しい所であれば通常のサングラスのように明度は下がって黒みがかって暗くなり、逆に今いる明かりのない地下のような地に入れば白くなって見えやすくなるというわけである。

HUDに表示されるルートを頭に入れてみると、暗視装置を起動した416が話し掛けてきた。

「今回の作戦で新たな装備のテストだなんて、頼んできた技術部にはちよつと言いたい

ことあったけどこういう場で有利に働くのはやっぱり便利よね。まともになれば荷物も少しは軽くなるし」

「使い勝手としてはあともう一步、てな感じだがそれでも許容範囲、使えなくもない。慣れてくれば一々端末に視線を移さずに済むだろうし今後の改善に期待だな」

「ハイテク装備に傾倒した戦力に依存している正規軍にはならないようにしなさいよ、ローガン。私が見る限りでもこれまであなたはそういうのなしでも戦えて来ているんだから」

「ご心配なく、ちゃんとか心得ているよ」

416の顔は隠れているが声に含まれる感情は呆れ半分、もう半分は羨望、という感じでローガンの目元にある物に向けられている。まだ完成形に至っていないHUDサングラスにも改善点があるので、帰還したらこれを発案した技術部の人間にして気をするつもりである。

416には心配ご無用と言ったが、ローガンとしては不具合を無くして完成したこのハイテク装備を支給された場合は使うか否かと聞かれたら迷うことは必然であった。なにせ作戦を開始した最初だけ簡単な操作をするだけで視覚の調節がされる。もしリアルタイムで情報の確認をしながら進行しなければならなくなったりしたら、リンクさせて繋げている端末の方からそれを表示させればいい。戦闘に関してでも視界のどこ

かに映れば補足するなどもしているの、上からの許可が下りれば一つは携帯しておきたいものである。

「ハルカ、こっちは気付かれないよう明かりを消して追跡する。お前達が俺達の後を追えるよう、G11が先導するから移動の指示があつたら従つてくれ」

「了解、あたし達の必要になつたら声を掛けてくれ。すぐに駆けつける」

三人で隠密に排除できるだけの手合いかどうかの確認をする為、ローガンは一旦部隊を切り分けた。民兵達の光源となつているライトがある以上、自分達と固まつたまま進軍しては背後から気付かれないままに制圧するのは無理である。手元にある物をやり繰りしている彼らが悪いわけではないが、ここでは敵との本格的な交戦状態になる以外の状況下で彼らの近くに居れば敵との銃を撃ち合うことになるのは避けられない。

とはいえ彼らからの協力も必要になるだろうことからはぐれることがないよう、自分達の後を追えるG11をハルカ達と行動するようにしたのである。

416とバルソクを連れて先行しようとローガンは歩き出そうとすると、ふと裾を引つ張られたのでそちらを見てみる。脳内のどこかでしていた予想通りと言うべきか、G11がこちらを見上げながら引つ張つていた。

溜息を僅かに吐いてから、ローガンは空けた片手で彼女の頭をターバン越しに撫でて

言った。

「任せたぞ」

「……ん」

G11は放してからポーチから二つ目の中継デバイスを取り出して設置に取り掛かる。作業を始めた彼女の後姿を一時見てから、ローガンは待機していた二人に目配せして先へと進んだ。

トンネル状になっていて何の気も無しにいれば足音が響いてこちらの存在が知られてしまうので、三人で可能な限り抑えながら進軍する。時間としてはおそらく五分も経っていないが、次第に大きくなってきた音の主を新たなプラットフォーム内にて確認した。

『いたわね、リッパーが四体。こっちに背後を見せて悠々と歩いているけど……』

「ああ、リーダー格らしい鉄血兵はいないな。それに少数で動いているということはきつと別隊で小分けになっているのかもしれないな」

『ならあいつらはどのようにな？』

「全員がサイレンサーを着けていることだしシンプルに銃撃で片付けるぞ。俺のカウントに合わせてそれぞれ撃て」

小声で打ち合わせると、各々が慣れている射撃体勢になって撃つ相手をそれぞれで選

んでサイトのレテイクルで急所に狙いを定める。ローガンは肩膝をつけてしゃがみ、扇形に展開している敵方の中央の一体の頭部を狙った。

「いくぞ、三……二……一……撃て」

合図と共に引き金を引いて一人、そしてすぐまた横にいるもう一体の急所を撃って制圧する。サイレンサーで消音されたことで辺りに銃声が響くことはなく、鉄血兵がその場で崩れ落ちる音しかなかった。自分達の存在が知られぬよう、ローガンは落ちた三発の薬莖を拾ってポーチに押し込むと鉄血兵の身体を担ぎ上げてレールの上からプラットフォームの乗降口に乗せる。バルソクが一体ずつ同じようにして痕跡を無くしていくのを見てから動かぬ敵兵の身体を近くに設置されている手洗い場に投げ入れた。

『あなたも痕跡を断つのにそこまでするのね』

『マスターからの教えだ。』頭数では当然こつちが不利だったら、些細なものでも捨て置くな』。無論、隠滅の余裕がある時だけでいいらしいがな』

二人がそう話しているのを無線越しに聞きながら、ローガンはバルソクが途中まで運んだ二人目も担ぎ上げて隠し場所に放り込む。416も手洗い場に運んでくれたおかげで遺体を隠すまで一分もかからなかったものの、すぐにまた新たな足音が聞こえてきた。すぐに三人それぞれで暗闇に紛れて音の主を探っていくと、ローガンは新たな敵影を確認。確認できた敵影の数と記憶している鉄血兵の種類を脳内で参照し、他の二人に

も伝えた。

「敵は多数、プラウラーにダイナゲート。それぞれ一体の戦力は大したことないが……」
『私達とは逆側にいてこつちに気付いていない。ローガン、あなたのやり方に則るならここはやり過ぎず?』

「ああ、今回もそうしよう。あの数の相手をするのに気付かれない、てのは無理だしな。バルソク、無線であいつらに警告してくれ」

『わかった。G11とハルカに到達、数の多い敵の巡回部隊を確認した。こちらでリッパの部隊を一つ片付けたが、状況的に排除していかないものもある』

『了解、隊列を組み直してこちらでも十分に警戒する』

完全に姿が見えなくなったタイミングで行動を再開。G11がこちらを追跡できるよう、416は暗視装置で確認できる液状の指向性マーカーをその場で垂らした。布巾で包んだ手の動きからしてだが、垂らしたそれを矢印に描いてから416は立ち上がった。こちらに頷く。バルソクもついていけるようになってからローガンはHUDに表示されているルートの方をハンドサインで示した。

「急がば回れ、とは言うがここの損壊の事も考えてみて回り道をする事も考えておかないとだな」

『たしかにな。それに左手のあれを見てみろよ。あの列車が瓦礫でボコボコになってい

るし、進行ルートはどこかが埋もれてもおかしくない』

『私達がいる間に倒壊して下敷きになるようなことにならないようできることがあるとすれば、祈ることぐらいね』

「416、お前どつかの誰かに祈ったりするぐらい信心深くないし、そんな根拠ないことをしないだろ」

『些細なジョークよ、お黙り』

416に心の中で野次を飛ばしてなんてことを思い浮かべながらも前進し続け、さらに下層へと続く道へと向かった。暗がりの角や物陰を一切見逃さず、不意打ちを受ける可能性のある箇所を思いつくだけ潰す。

ここで補足するが、今回踏み入っている地下構造は単純に同じ構造物が積み重なっているわけではない。現在地となっている三階層のこの上のフロアはもちろん鉄道が敷かれて至るところに駅があったりしていて、アメリカの観光地であったフロリダ州を堪能するのに地下鉄を利用すれば車よりも短時間で目的地周辺に到着できる。言うまでもなくそれには定められているタイムテーブルに従う必要があるが、フロリダ州に隣接している他の州にも繋がっていたりと交通手段としての利用価値はあったのだろう。

それ故に、各階層はそれぞれどこからどこへに行ける、というように列車の進行方向が違っていたりしているように地下に為されている構造形状が違っていている。ローガン

達が立って前進しているプラットフォームの上は同じく乗降口のあるフロアになっていても、それに並行して設置されているレール諸共垂直になっていたりやや異なっているのである。これはこのプラットフォームに限った話ではなく、例えばさきほど別れたレールの二階層は瓦解防止が為されたメンテナンス通路になっていたり、さらにその上はまた地下鉄が行き交っていたレールが敷かれていたり、先に述べた通り単純な構造になっているわけではない。

HUDに表示されている『座標』と『地図』によって導き出されたルートを辿って行きながらローガンが第一に懸念しているのはそれに由来している。各所で老朽化が進んでいるここでの戦闘でもし激しい爆発などが起こったら崩れてしまうことが考えられるからだ。

『でもある程度までは予想していたけどここまでとはね。これでは私達がここにいる間に倒壊しても全くおかしくないわ』

「安全委員の連中がここに来れば即刻アウトの烙印を押されること間違いなしだ。俺としても目的がなきやこんな所に好き好んで入りはしない」

そのローガンの台詞にまったくもって同感だ、と二人が同時に返してきたことに作戦中であることも一瞬忘れ、言い出しつぺの男は少し噴き出した。

それでもすぐに切り替えて晴れたように見える暗闇の中を突き進む。時折カラカラ

と乾いた音が響くが砕けたコンクリート片が剥がれて転がっただけであつたりして心臓が跳ねた。が、物音の原因がわかると安堵しつつも天井に無意識に視線が動いたりしたがそればかりを気にしているばかりでは仕方ない。

「さて、と……あともう少しで最短ルートで四層に行ける。ここで待ち伏せされているかもしれないし気を引き締めろよ」

「言われなくてもわかっているさ。まずは私が出るから二人はバックアップを頼むぜ」
「了解」

一度物陰に結集してから片手に『PP-19 B A T O N』、もう片方には416から手渡されたフラッシュパンを持ったバルソクが先行する。彼女に続いてローガンと416も一列に隊列を組んで進み、開けた改札口周辺に敵影を見逃さないよう周辺を警戒した。

自分達の戦闘にいるバルソクに進行方向を指示してそれに続く、短い間でもその一連のルーチンを何度も一分足らず。そうして下層へと続く昇降口に辿り着くまでに想定していた交戦が無いことにローガンは首を傾げた。

「おかしいな、俺だったらここに数人配置して警戒態勢を敷かせるが……」

「私達が来ることまで想定していないかもしれないけど何かが妙ね」

「そう悩む必要はないみたいだ。見てみるよこれ」

バルソクの言う通りに四層へと進めるエスカレーターを見てみると、爆破で人為的に埋められたかのような惨状になっていた。周辺の数ヶ所々に黒の爆破跡があることから間違いないのだろうが、回り道を余儀なくさせられるような現状になっている。

「これじゃあ先に進めないな。日を跨ぐ時間はあつたことだしこういうことをやれるだけの余裕も然り、てことか」

「厄介ね。これじゃ敵の巢の中に飛び込むことと大して変わらないじゃない」

「ブリーフィングをした時からそういうことだろうとお前も察しがついてただろ、もう泣き言は言つてられないぞ」

最短ルートが潰されたのでどこか別の経路を通じて最深部に到達しなければならぬ。もう起きたことに文句を言つても仕方ないと、ローガンは迂回路を探すべく端末を操作してHUDを凝視する。二次元的な見方だけでなく三次元でも見て通り抜かれる場所を走査し、さらに当初のルート程でなくとも作戦時間を短縮できることも念頭に置いた。

眉間に皺を寄せながらそうした作業をして数分ではあつたが、ローガンからすれば長時間利用しての事のように感じた。それでもなんとか見つけ出し、そこまでに至るルートも確定させることもできた。

「よし、なんとか行けるぞ」

「だったらG11達にも……」

416の台詞の続きとしては恐らくG11達にもルート変更を旨を伝えようという物だっただろう。しかしそれを妨げるよう——とはいっても彼女達にはそうした意図はなかっただろうが——繋げられて報告が入った。

『こちらアルファ3。アルファ1、ちよつとした……問題が起きた』

「こつちはルート変更をそつちに伝えようとしていたが、何があつた？」

『ごめん、言葉ではちよつと説明できそうにない。面倒なことになった、としか言えないから解決する為に戻ってきて欲しい』

サボり癖があることから話し上手でもないG11ではあるが、ストレートな物言いをするので作戦中に置いての報告は当たり前の事でも一切の虚偽なく見落としもない、的確な情報を伝達してきた。そんな彼女が言い淀む、表現しづらいことがあつたのかと三人揃って顔を見合わせる。

彼女との付き合いが最も長い416がダメ押しとばかりに耳元の無線機に手を当てて言った。

「ちよつと、今の私達は先行偵察中なのよ。ここからそうホイホイと戻れるわけないじゃない」

『うう、だってえ……』

「気持ちにはわかるが、そうお前も怒るなよ。とりあえずわかった、アルファ3。そつちに
戻るからその場の安全確保をしたまま待機しててくれ」

『わかった、ごめん……』

通信終了した直後に416の顔を見ると不満たらたらといった様子で、こちらを睨み
つけている。ローガンとて新たな進行方向とは真逆の方にUターンしなければなら
ないので嫌なのは同じだが、G11との話で二つ引つかかるところがあった。それに対し
てバルソクも同じだったようでカリカリと頭を掻きながら言った。

「ここにきてコールサインで呼んできたか。もう自己紹介も済ませているというのにな
んか妙じゃないか？」

「それだけじゃない。一緒に行動しているハルカだけには情報共有を焦点にイヤホンマ
イクも渡している。落ち着いた話がG11が出来ていて同じ現場に出くわしているの
なら一言二言添えても良かったんじゃない」

「いずれにしても、報告するぐらいだから良くないことには違いない。さつさとあいつ
らと合流してなにあつたか確かめた方が吉だ」

時間に余裕があるとは言えない状況ではあるが、自分達ばかりが前進していても仕方
がない。なによりこうして妨害工作をしていることからして、迎え撃とうとしている手
筈も整えようとしているのが窺えた。最短ルートの上に鉄血兵を配置していないの

が少々気がかりではあったが、自分のものさしばかりで決めつけてはならないとローガンは自分に言い聞かせた。

「416、そうカツカして立っているのがお前の仕事じゃないだろ」

「……わかつてるわよ」

三人で足並みをそろえて来た道に戻るこの時、ローガンはある物を見落としていた。ここまでの道すがら度々目にしてきた人間の遺体だが、服装からして兵士でもなくてこのない民間人だったのだろう。ただ、ここにいる敵は鉄血兵だと無意識に決めつけていたばかりに、腐敗が進んでいるそれが真つ当な人間のものであったということまで確認していなかった。

40. 死者出でる — Dead trap —

要請に応じて駆け足になりつつも来た道に戻ってほんの数分。数えるのに片手で収まる範囲の数値のそれが現状でどれだけ価値を示しているのか、明確な答えを出せる者は恐らくこの場にはいない。ただ、金では替えれないそれが時にはどうしても必要な時がある。人質に取り付けられてしまっていた爆薬の解除といった、人命救助が最たる例だ。

二日前からこの地下内に居座っている鉄血兵の目論見は恐らく『オアシス』に関連しているのだろう。鉄血側がそれをどうしようとしているかはわからないが、最悪の場合^{デリット}は削除という手段を取られることも考えられる。よってローガンとしては一分一秒という時間が惜しく感じており、できれば後戻りという手段を取ることだけは避けたかった。

だからといっても、手助けを必要としている仲間がいるのであれば伸ばされたその手を取らない、ということにはならない。今手のうちに残っている物を無くすのはローガンとて一切望んでいないからだ。

G11の言う通り来た道に戻りながらどこにいるのかと目星を働かせていたが気を

張り巡らせる必要はほとんどなく、416が指向性マーカーを残した最初の地点から数十メートルの地点にいた。手を振っている民兵の元に向かい、先頭にいるローガンが彼に尋ねた。

「皆は？」

「この中だ。この見張りは心配しなくていい、行ってくれ」

関係者以外立ち入り禁止、とある配電室の奥に入っていくと、そこにはライトに照らされていてながらも自分達を待っていたG11やハルカ達の姿があった。見えている面持は思った通り芳しくなく、何かしらかの問題が本当に怒ったことをそれだけで物語っていた。

戻ってきたこちらに対し真つ先に反応を示したのは同部隊のG11で、彼女は立ち上がってローガンに駆け寄ってきた。

「ごめんローガン、戻らせてしまって」

「別にいいが……それで、何があった？」

「それが……」

G11が動かす視線をローガンも追ってみると結果的に苦々しく面倒に思わせる人物がそこにいた。数時間前に合流を果たそうとした際、リーダーであるハルカの意図とは全く別の行動を起こして排斥しようとしていた男がそこにいたのである。

その人物の顔を見てからハルカの方に視線を移すと、彼女も彼女で呆れたようにして壁に体重を預けて立っていた。ローガンは仕方なしに男の方に視線を戻すところまで一緒に行動していた416が言った。

「徒歩で帰還してすぐにこつちに出向いて来たのね。リーダー思いだとか殊勝なことだとても褒めて欲しいのかしら？」

「てめえらなんかインなこと言われても虫唾が走るだけだ。わざわざこんなクソツタレなどころに来たのはてめえらが原因だぞ」

「まあたしかに、あなた方のリーダーを駆り出した、という点では違くないわ。でもあんたみたいな見境なく力を振りかざしそうな連中はここに来る必要なかった筈でしょ？」

そう言われてからローガンはその男の後ろにいる数人の民兵達を見たが、ハルカが連れていた民兵達が藍色のターバンや装飾を着けているのに対し、彼らは統一感がない装備を身に付けていたりと大きく色彩が異なっている。色や装飾で区別する組織は民間の間ではそう珍しくもない話だが、ここではハルカの直属として認められた者だけが与えられているのだろう。

416からの挑発的な要素を含めた台詞に男は顔を引くつかせたが、自分のリーダーがいる手前で本日二度目の無様を易々と晒せないからだろう。すぐに立て直したのか咳払いをして言った。

「オレ達がここにきたことなんかどうでもいい。それよかてめえら、こつちに一体何の用があるのか隠し事なく話せ」

「……何があつたのかと思えばそういうことか。午前中のアレといいお前、リーダーのハルカから聞かされていることは仕事の事だけでこれと云つて何もないだろ」

「はっ、だからなんだつて言うんだ」

鼻で笑つたその男の様子になんとなく得心がいつたローガンは416と顔を見合わせて溜息を零しそうになつた。G11は背後に隠れているのでわからないが、バルソクはやや憐れむようにして自分がどう思われているか考えていない未熟者を見ている。

初対面から躊躇なくローガンを殴打したこの男を改めて見てみればローガンよりまだ若い、二十代になつたとしてもそこまで時が経つていないのかもしれない。見聞に関してはローガンも広いとは言えないが、それでも目の前に浮かんできたことにすぐさま飛びつきはせず真偽を確かめるだけの慎重さはあるつもりだ。そうした癖を覚えたのは数々の経験があるからこそだが、この男にはそこまでないようである。物事の深意を知ろうとはせず、仕事の表塗りのことしか頭に入れてない。

ガリガリと頭を搔いていると、壁から背を離れたハルカが呆れたようにしながら持つている『ドラグノフ』の銃床を地面に接着させる。開かれた口から聞こえてきた声は見えている様相そのまま彼女の心情を隠すことなく表していた。

「こいつにも一応今回の事の重大さは話している。こんな奴でも一部隊の隊長だ、この上の鉄血の監視の合間を潜り抜けられるだけの技量はある。だけどそれに反して頭が弱いんだよ」

「人選ミスね。こんなニワトリの頭に毛が生えた程度の奴に隊長を任せるだなんて」「おいつ、オレのことをんなこと言ってるんじゃねえぞ白髪頭がッ！」

我慢の限界が早くも訪れたのか、416に掴みかかろうとするが彼女よりも遠距離にいた筈のハル力が転ばせる。すぐさま立ち上がろうとするが両手を後ろに持って来させて関節をキメて動けずに悶絶している部下の耳元に顔を寄せ、ドスを利かせている声で言った。

「そんなデカい声を出すんじゃないやねえ、外にいる鉄血のクズ共に殺されたいのか。前にそれで壊滅状態に陥りそうになったつてのを忘れたわけじゃねえだろ、いい加減学習しろ馬鹿が」

対面したばかりの時と同じく、男の至近距離で放たれた言葉一つ一つには煮えたぎる熱が内包されている。地面に流れ落ちたマグマのような熱湯が飛沫として跳ね、それを体中に浴びたようでローガンは精神的にそこでのたうち回った。

そんな内面に反して身体が氷漬けにされたようになって動けないのはきつとG11が戦術人形としての握力を始めとして全身で持てるだけの力を持ってしがみついて来

ている、それが原因の筈だ。

視覚では般若のようになっておらずとも、隠されることなく表面化して周囲に感じさせている気迫はそれそのもの。ローガンだけが慄いているのではなく、よくよく他を観察してみれば男が連れてきた取り巻きだけでなく、彼女によつて選抜された部下達も冷や汗を流している。

「痛つ……でもリーダー、あいつらが抱えている事情に付き合う必要はないだろ！それに戦術人形なんざ鉄屑と同じ、ただの『物』とつるまなければならぬ理由だつて!!」
 「いい加減その口を閉じろよ、後先考えないのもてめえの悪い癖だ。人形にトラウマがある連中を纏められるのはいいとしても、全員の油に火をつけて過激派組織になりたいのかてめえ」

組み伏せられている男がまともに人員を引き入れている（らしい）のは戦術人形への因縁があるからだということをやくローガンも確信が得られた。

あの場にいた民兵が言った台詞の『戦術人形は全て敵』、『I, O, P製のだつて鉄血と何もかわらない』。そんな考えを持つている人間達を戦いの場に連れていくのは難しくなくとも、いざ銃を向けるのはやはり理想とは違ってくる。トラウマによつて恐慌状態になり逃亡するか、それともまともに戦えないかといった大きく二パターンに分けられる。しかしそれらを防いでいるのは大したものだとローガンは思う。

ただ、その代償として過激派さながらの行動を起こしているようでは意味がない。場合によってはグリフィンなどに目をつけられて制圧されるのがオチだ。

そうなった時は同情はしないが、それでも自分達、G & a m p ; K だけでなく全世界が密かに突き落とされそうになっている奈落の穴の事を知るだけの権利はある。この場にいる民兵達の精一杯の力を引き出してもらうにはそれも一つのだ。

今度こそ溜息を隠すことなく吐いたローガンは組み伏せているハルカに声を掛けた。

「ハルカ、そいつを自由に、とは言わないけどある程度加減してやってくれ。とりあえず現状で重要なことだけは教えてやってもいい」

「おいおい、そうベラベラと話していいようなことじゃないんじやないのか？ あんたらの事情は知らないが、暇を持って余して来たわけじゃないだろ。あたし達はあるたらを手伝って報酬をもらう。傭兵のように酷い扱いはしないことをグリフィンは――

「しない、とは言いい切れない。少なくとも俺や指揮官はそうするつもりはないが、グリフィンの上層部の人間は安全圏で駄弁っていることもあつて考えが腐ってきているのが否めないんだよ。数日前に話してみて、時折思い出すと今でも頭にくる」

オブラートに包むこともせずとも誰かに話しても文句を言われぬ程度には言葉を選びをした。ハルカがどう思ったのかはわからないが、間を置いた後に男にとって少々楽

な方向に腕を戻した。自由にするなど言ったが、問題児の腹這いの状態を維持するべく背に体重ももろとも足を乗せていることから自由に立たせるつもりは毛頭ないのだから。

「……聞いてやるよ、ローガン。あんたらが一体、何と直面しているのかをな」

声無いままに注意か制止のどちらをすべきか、416とバルソクがアイコンタクトで話し合っているように感じた。だが口を挟まれるよりも先にローガンは限定的に話せる範囲を脳内で確定させて話した。

鉄血による裏工作とそれの延長線上にある、第四次世界大戦の引き金に踊らされている世界情勢に乗せられている人々。再び起こる核戦争による最悪の展開を阻止する鍵、『オアシス』の確保が自分達の最重要事項なのだということ。

話した末に満ちていたのはハルカの民兵達の驚愕と疑心による声だった。そのどちらが多くあったかといえば、ローガン達に対する後者。

長く息を吐いた彼らのリーダーであるハルカがじろりとローガンを見る。一瞬だけ垣間見えたのは恐らくこちらにとってはそうであって欲しいと思える、そんな感情の片鱗。

「それを本当の事だと裏付ける、確かな証拠はあるのか？」

「目に見える物かこれからいずれ、という感じだ。だが先日交戦した連中のハイエンド

モデルの一体が本当の事だと認めていたことから間違っていない筈だ」

「そいつの言っていたことが虚偽によるものだった、ということはないのか？」

「絶対にそれはない。あり得ないことだと、考えて企てていないことだと言うにはあまりにも世界的に揺り動かされている。なによりも奴らからのアプローチが適格に痛い所を突いて来ている。過去の悔恨を抱えている人間にとつて一番忌避したい虚実を突きつけているのだから冗談として切り捨てられない」

はつきりとしたローガンからの返答にハルカは片手で眉間を揉みつつ考え込むが、今日まで知らなかったのだから視野が狭まっていないので反論して論破する方法など幾らでもある。ただ何も言わないと言うことは、彼女自身もなんとなくわかっているのだろう。

保護区外の民間人の間でもラジオがまた普及され始めているこの時代で、必死に生きようとしている者であればニュースなどに耳を傾けないということはない。ラジオからは行方不明者とされている者の名前の公表や政府からの支援の日時、各国による世界情勢を始めとしたパブリックなことまで流される。表塗りの情報であっても手軽に入手できるので、ハルカも思い至っていないだろう。

静かに唸るハルカに代わって、彼女に選ばれた民兵の一人が乗り出して来る。

「だけど……ほとんど推測で経た結果じゃないか。何処かで綻びや見落としが……！」

「だろいな。だけど大筋として見えているものももう本当の事だということ物語っている。ロシアのスペツナズの侵入、保護区外で悪漢たちの斡旋を敷かれていた連中からの証言。それで鉄血からの認定でもう確実に無視していられる状況じゃなくなった。政府に忠告してもお偉方は耳を塞いで聞く気も起こさなかつた、なんて話もあるんだし有志の俺達がやらなければならぬんだよ」

「だからと言つてもだな！」

「やめろお前ら。気持ちにはわかるがここで喚いても何にもならない。学者じゃないこいつらでもある程度の根拠を持つて筋道を立ててる。こんなところで銃をぶつ放していればそういつたのは忘れがちだが方針を決めるにはそれは大事なことだ。たしかに腑に落ちないところはあるが、あたし達にも遠からずも無関係じゃない事情があることが納得できたんだしここはうだうだ言うべきじゃねえぞ」

ハルカはそう言つて組み伏せている男から立ち上がる、ローガンに手を差し出して来た。それにやや驚きながらも彼女の手から面持を窺つてみるが、ついさつきまであつた険しい表情から少々厳が取れたそれになつていた。

「全力を持つて手を貸させてもらうよ。見返り云々は置いといて、あんたらに助力する」

「……助かる」

差し出された包帯で被われた手をとつてローガンは握手をかわす。そうしていて周

囲の民兵達は著しく致し方ない、という雰囲気を漂わせていたがたった一人だけがそうした態度ではない。もう誰がそうなのか、というののもう言うまでもないのだが、その者はごねても場を自分が望む方向に行きたかったのだろう。ただ言葉を探しても好転させるのに至る一手が浮かばなかったらしく齒噛みしただけだった。

それにはもちろんローガンも気付いていたが相手をするだけ無駄だと思い特に触れようとは思わなかった。他のグリフィンの面々もどうかはローガンにはわからないが、何も口出ししなかったことから思うことは同じでだったのかもしれない。

「さて、改めて取り組むとすると引き続き先行偵察を頼めるか？」

「言われなくてもそうするつもりだ。G11はもう一度ハルカ達と行動するとして――

——
そうしてもう一度最下層に降りていくまでの打ち合わせを取っている時だった。一時の集会場と化していたこの場の出入り口を見張っていた民兵の一人が駆け足でローガンとハルカの間に入ってきたのである。

「リーダー、お話し中にすみません。まだはつきりと確認したわけではありませんが鉄血の連中に妙な動きが……！」

民兵の報告に従って配電室に外に出るにしても、確かな状況が分かっていないようじゃ大人数で表に出るのはよろしくない。それは誰しもが一致したことであるとして、暗視ゴーグルを所持しているローガン達が先行して様子を見るということになった。

配電室から出る前に聞き耳を立ててみると、鉄血の銃器による銃声が地下内に木霊していることから何者かと交戦していることが窺える。その音は配電室のすぐ外で発生しているようではなかった。民兵にゆっくりと開けてもらいながら徐々に広がっていく視界から敵影がないことを視覚的にも情報として皆に伝達した。

「いいぞ、近くには鉄血はいない」

「油断しないでよ。何故だか嫌な予感がする……」

G11からの台詞に416と頷くと同時に配電室から飛び出した。拡張される視野

から情報を取り入れ、プラットフォーム内で響き始めた銃声を頼りにグリフィン所属の四人で追跡を開始。レールから上がって反対側の路線に降り立ち、音の発生する方角へと歩を進めようとしたところで何かがローガンの足首を掴んだので反射的に足元に銃を向けた。

身体が飛び跳ねるようになるのを内心抑えながらの焦点の先には、下半身と分断されただけでなく片腕が肩から失くしている鉄血兵が足を掴んできていた。

「痛っ、こんの……！」

徐々に強まっていく握力に顔を顰めつつも死にぞこないの機会人形にローガンは頭部に銃弾を浴びせると敵兵はノイズのような駆動音を立てながら沈静する。掴んできた手を振りほどきながらも倒れているその鉄血兵を見ると、身体の大部分を失っている傷口が銃撃など常人の攻撃によるものでないのが見て取れた。

「ローガン、これって……」

「明らかに銃やナイフみたいなの、それでいて大剣みたく切り裂かれたのとも違うな」「モジュールとかの中身が中途半端にでも残ってはいるけど……こんな傷口はそうそうないわ……」

416の言う通りで戦術人形の中身となっていて各機器が損なわれている。ただ損なわれ方がとても歪すぎで見ている気分が良いものではなかった。

いや訂正しよう、身体はどこかしらが損なわれている惨状を見た以上は気分を害するのは当然の事であり、その傷口が酷い物であることは今回じゃなくても綺麗なものではない。ローガンが見ているそれは爆破によるもののようにそうではない。グレネードの破片が刺さるに留まらず黒焦げてたりする、わけではなくただただ一部を失くしている。

見慣れないやや不可思議な惨状に416もろとも首を傾げかけたが、行先の地面を見ていたらしい無線機越しにバルソクの声が聞こえて来た。

『マスター、こっちの方に血痕がある。けどどなにかがおかしい……』

近くにいるバルソクの方に寄ってみて彼女に指を刺されている地点にはたしかに滴ったかのような赤黒い血痕がそこにある。ただそこに残されて間もないサラサラした柔らかい状態ではなく、かといって長い時間を経てカチカチに固くなった訳でもない。付近に転がっていた鉄材で触れてみればその中間、ぶよぶよしているみたいな感触になっていた。

「おかしくないか、ここに血液が残る要因となるのは人間でほぼ間違いはない。ただここにいる人間はマスター以外に民兵達しかないだろ」

「ここに来るまでで生存者がいないことはもう言うまでもないから……この先にいる誰かが……?」

「……待った、銃声が止んだぞ。論より証拠、実際に確認しに行くぞ」

銃声が聞こえなくなっていたことにより、ローガンは皆とフォーメーションを組み直して前進。暗闇の中で音をなるべく立てないようにしながら、一度は見た死角までも再び敵影がないことを確認して行つたが視覚では得られない変化をそこで感じ取れた。

それにローガンは顔を顰めたが戦術人形の三人も同じく不快そうにしている。三人の中でインプットされている精神年齢が幼いG-1に至っては鼻をつまんで露骨に嫌そうにしていた。

『うええ、なにこれえ……』

「腐敗臭、にしては結構発酵して年季があるな。だけどこの臭い、何処かで……」

記憶の棚を開けて以前に似た経験したのは何処だったかをローガンは思い出そうとするがなかなか閃かない。スカルマスク越しでも鼻につく腐敗臭が段々と強まりながらも三人で歩を進めていくと、今度はレールの上に倒れている複数の人の遺体が目についた。近づいていく度に細かい部分まで視認できるようになっていったがあまりにも汚すぎだった。身に纏っている衣服は穴が空いていたり破れているのだが、それよりも見えている肌が土気色、というよりも人間が死したらここまで変色するのかと思うほどになっているのも印象的だった。

隊列を維持したまま接近し、足で遺体を転がして細部を視野に収めてローガンはよう

やく思い出した。毛髪が残っていない頭部に落ち窪んだ両目、火傷のように爛れてもいる全身。人間を象つていてもそうとは思えない異形の存在の名を口に出そうとした瞬間、正面から聞こえて来た物音にすぐさま戦闘体勢に移行した。

『ローガン、まさかこれって……!』

「余計なお喋りはするな。もう言うまでもねえが目の前にいるぞ!」

そう警告を発した途端、HUDで調節されている視界に徐々に見えてくる人影が一つ、とはいわずに両手ででも数えきれないだけのそれが映りこむ。ゆらゆらと左右に揺られながらも歩いているがまだ明確に獲物を見つけたような動きではない。

ローガンは『ハニーバジャー』を構えつつバレルを持つて支えていた左手でナイフをゆつくりと抜く。逆手にそれを持ち替えながらもまた銃を支えて無線機で指示を出した。

「バルソク、お前の本領発揮だ。お前のマシンガン^Mを主力に奴らを後退しながら排除する。俺とG11は援護、416は後退先に敵がいるようなら薙ぎ払え」

『……了解、十五秒後に攻撃を開始する。それまでに交戦準備を整えておいてくれよ』

『それじゃ前は任せたわよ。G11、私のポジションと入れ替わって奴らを撃つて。あなたの火力と正確性ならここでもなんとかやれる筈よ』

『わかった……うゝ、久々に見ても気持ち悪い……』

G I I が嫌悪感を示すのもローガンはよくわかる。

今は地上にいる全個体を排除したとして正規軍により報道されてはいるが実はそうではない。

物質の構造を分子レベルで解体する『崩壊液』コーラップス。高濃度のそれによる被爆はつまるところ死を意味するが、低濃度のその場合は形態変異を引き起こして突発的に生を終えるよりも惨い結果を迎えることになる。公的に言われているその病名と変異者は広域性低放射線感染症、略称として E・L・I・D と呼ばれ、SF ホラー や スプラッタ映画で登場するゾンビなどの見た目の通りの行動をしてくる。つまるところ、人間や人形もかまわず襲撃するのだ。

久方ぶりの E・L・I・D との交戦に冷や汗を流しながらバルソクが銃を持ち替えている間にも警戒を続けるが一発触発の状況である。先程身体の大部分を欠損していた鉄血兵を見るからして地下に響いていた銃声は E・L・I・D といち早く交戦していた鉄血によるもので、怪物の口に引つ掛かっているケーブルからして全滅したと見ていい。幾分数は減ったようではあるが頭数は多く簡単に勝てはしない。

目の前にいる E・L・I・D は視覚で獲物を捉えて襲うタイプじゃない事が幸いしてか、見当違いの方に進んでは壁にぶつかったりし、その物音で他の個体が反応しているが長くはもたない。バルソクの準備が完了するまでの二十秒未満の時間が妙に長く

感じた。

『行くぞ……!』

そしてバルソクからの声が無線機を通じて聞こえ、そのコンマ数秒後に銃撃が開始される。民兵達の二人に一人が所持していたハンドライト、彼女達が装備している暗視装置やローガンが身に着けているハイテクサングラスが無ければ暗闇が支配するこの空間を見通せなかつた空間にG.I.のマズルフラッシュも瞬いた。

もちろんバルソクを挟んで陣形を組んでいるローガンも発砲しこちらの存在に気付いたE. L. I. Dを迎撃する。急所を撃ち抜いて無駄に銃弾を消費することを避けつつ効率的にE. L. I. Dを退かせつつも両脚は後部へと動かし、もしもの時はいつでも駆け出せる姿勢を崩さない。全集中力を目の前の戦場に集束させているので倒した数までカウントしていないが十体に迫ってはいるだろう。

やがて数と勢いに任せて目の前に迫ってきた怪物がローガンに食いつこうと罠を開いて数本しか残っていない歯を見せつつ突っ込んでくるが、その横つ面を銃床で殴って転倒させた。その個体の頭部に数発撃ちこんで排除したが、今度は同時に二体のE. L. I. Dが突貫してくる。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

「こつちに来るんじゃねえよ!」

だからと言って他の面子の方に行けというわけではないが、どちらにしても相手にしたくない敵としては当てはまる部類だ。毒づきながらも同時に相手にすることはできないとして、ローガンは一体の足を撃つて転倒させ、もう一体の組みつきを避けるとお留守になっている喉元にナイフの切っ先を突き立てた。勢いを殺すことなく地面に振るい落とし、這いつくばりながらもこちらに寄ろうとしている個体の頭部にストンプを食らわせて頭蓋を踏み砕く。慣れない足裏からの感触を不快としながらもローガンは『ハニーバジャー』の弾倉を可能な限りに素早く入れ替え、まばらにくる怪物の排除に集中した。

「やばい、装填している弾が切れた！」

「慌てなくていい！各個撃破しろ！」

耐久力は通常の人間よりもあるものの、今しがた排除したローガンがしたように頭部を的確に機能停止までに追い込めば素早く制圧できる。バルソクのマシンガンがロードが必要な状況になったのは現状にてあまりよろしくはないが、この戦闘の序盤から大方を本当の亡き者にしたのは大きい。

バルソクが『P P 1 9 B A T O N』に持ち替えるまでの数秒をカバーしたG 1 1 がりロードの体勢になる。烙印システム^{A S S T}が施されている銃といえども一秒未満にまで短縮できるのは不可能であり、この戦闘を乗り切るにはその僅かコマ数秒の時間が必

要だった。隙を突いたようにしてG11に押し寄せるE・L・I・Dの群れの対処にはバルソクはもちろん、ローガンも余裕がなかった。

「くう、気持ち悪いから来ないでよ！」

リロードをあきらめたG11が接近してきた近距離の個体の一体にバク転しなから蹴りをお見舞いし時間を稼ぐとホルスターから拳銃の『USP』を抜いて発砲する。とはいえ、サイドアームというのはリロード中に置いての隙を無くす為にある物だが、火力自体はどうしてもメインアームの武器よりも低下してしまう。遠距離武器の有利性を活かさない至近距離にまで接近を許しているのも相まってほとんど抵抗できない。

「G11がやべえ、バルソク！」

「ダメだ、私も自分の事で精一杯だ！」

付け焼刃の体術も駆使して懸命に堪えているが、それでも危機的状况なのは変わりはない。ローガンもバルソクも自身に接近してくるE・L・I・Dの対処に追われてチームメイトの方に割ける余力はなかった。

何体目かわからない怪物の顎を銃で殴って仰向けに転倒させ、追い討ちに銃弾を食らわせたところでようやく自分にも余裕が生まれたのでG11を襲っている個体に銃口を向けようとしたが、タイミングを測ったのかのように別の一体がローガンに襲い掛かって来た。それによってまた余力がなくなつてまた怪物とのCQBに戻り、傷一つ負

う事すら許されない戦いに専念せざるを得なくなる。

「しっ、っ……！」

「G11！」

「くそ、いい加減にしろってんだよ！」

ついにはG11は押し倒されて反撃までできない体勢になった。せめてもの抵抗として喉元に食いつこうとする怪物の口内に銃口をねじ込んでつかえさせているがそれでも長くはもたない。

ローガンと同じくバルソクも複数体相手に尽力しているが危機的状况に陥っているG11の助力には向かえない。だがそこで、別の役割を与えられていた416の援護が始まった。

彼女も彼女で何処かに潜んでいたのか数体のE・L・I・D相手に発砲して交戦していたが、手が空いたらしくG11に群がってきている怪物を的確に撃ち抜いて沼に沈みそうになっていた仲間の手を取った。最後の抵抗を受けていた一体の頭蓋が吹き飛んだことであろうやくG11にも時間が出たのである。

「ほら早く、急ぎなさい！」

「んう、言われなくてもわかってるよ……！」

戦線に復帰したG11が即座にリロードし、勢いと数が無くなってきたE・L・I・

Dにまた銃撃を食らわした。

戦闘時間としてはおそらく二分程度だが、ローガン達の体感としてはそんな短い時によるものではなかった。最後に襲い掛かって来た個体を『P226』で打倒してから、ローガンは全員を見渡しながら言った。

「各自、怪我などしたら報告しろ。俺は問題なしだ」

「私も大丈夫」

「あたしは……ちよつと擦り剥いたりしただけで奴らに食らわされた傷はない」

「辛うじて私も特にこれといった損傷はない。ただまあ、E・L・I・Dとんんかの戦闘は初めてだったから正直怖かったんだが……」

バルソクからの報告を最後にローガンは動かなくなった複数体のE・L・I・Dの亡骸が転がっている惨状を見る。戦っていないながらもかと現れる怪物達に対して腹立たしさが湧くと同時に、心のどこかでここが死に場所になるかどどこかで弱気になっていた。それでも何とか生き残れたのは各々の役目をきちんと果たしたからだと思ひ、口に出さずとも感謝しつつ胸を撫で下ろした。

「……第三層にはE・L・I・Dが徘徊していたのか。となれば鉄血が第一に警戒していたのはこいつらの進入だったのか？」

「どうかしらね。断定はできないけど地下を徘徊していて私達が来たタイミングでここ

に行き着いた、というのも考えられるわよ」

「だけどこれじゃロクなことにならないぞマスター。E・L・I・Dまでもが地下内にいるんじゃない？」

言うまでもない。最悪の場合は同時に出くわして混沌とした戦場になることもあり得る。鉄血にE・L・I・D、二つの勢力との戦いに正面から突入することになればほぼ間違いなくローガン達は全滅する。工夫を凝らした戦術をしたとしても単純な頭数を相手にした場合でも時には打ち破られることだってある。それに今回の戦闘条件としてはなによりも場が一番に悪すぎる。

ローガンは無線機をハルカに接続して報告しようとしたが、その前に地下にまた銃声が鳴り響いた。方角はローガン達が行って来たプラットフォーム方向。鉄血兵が持つ銃器ではなく、過去に民兵の相手をしたことがある者であればすぐにわかる銃声であった。

総員で顔を見合わせると無言で来た道を行って戻る。息を切らせながら両脚の持つだけの力で地面を蹴っているとノイズが混じりながらもハルカの声が聞こえて来た。

『ローガン、今あんた達は何処にいる?!』

「確認が済んでそっちに戻っているとところだ！それより気を付けろ、第三層内にはE・

L・I・Dが……！」

『わかつてる！それでこっちは連中と交戦中だが凌ぎきれない、至急応援を頼む！』
「今すぐそちらに向かう、それまで持ち堪えろ！」

敵の規模はどうかはわからないが、自分達よりも多く動員しているのにも関わらずに応援を求めているのだから冗談で済まされることではないのだろう。それは今も尚轟いている銃声が裏付けている。それにハルカ自身も大袈裟に物事を捉えるような性分でもないだろう。少々短気な所はあるが尤もな理由を元に行動しているので、作戦中に己の為だけに行動するということは考えにくい。

「にしても長くないか？俺達こんなに長い間レールを辿って歩いていったんだけ！」

「文句は言わずともあともう少しよ！弾倉の方の確認は済んでる！」

「私のマシンガン諸共言われなくとももう済んでいるよ！」

ローガンも弾倉を抜いて確認してみるが重量的にもまだ余裕があるように感じれた。数発しか撃っていない『P226』もまだ弾倉を変える必要はないということでもホルスターにまた収めると、銃声に混じって怒号や悲鳴までもが聞こえてきた。

見るのも三度目のプラットフォームに上ると反対路線にいる民兵達が見えたが想像以上に混沌とした状況になっていた。一人の民兵に複数体のE・L・I・Dが群がって肉を食らい、獲物として食らわれる者の断末魔が場に残される。団子状に膨れ上がっているその組が十を超えている時点で、ローガンは歯ぎしりをしながら飛びかかって来

たE・L・I・Dに蹴りをお見舞いし、地面に転がったと同時に装填している弾倉内の弾を全て撃ち込んだ。

用済みになった弾倉を入れ替えながら交戦開始する面々に指示を出す。その時の自分の声は自然と荒立てられてしまっていた。

「ハルカ達を、生存者を助け出す！銃声が響いている以上はまだ抵抗している筈だ、逃げ！！」

プラットフォームの外側、先行偵察で向かった方向から銃声が聞こえているのでまだ戦っている者がいる。そちらの方に怪物たちが走っているのでそれは疑うまでもない。

無言で『AEK-999』を手に先行して走るバルソクに続いてG-11が援護を開始。生存している味方がいない、照準を定めるのに大雑把でいい方にはバルソクが、掃射を行う彼女に降りかかる火の粉を払うのにはG-11が担当して戦闘を行った。

「416！」

「わかってる！ハルカ、現地に着いたけどあなたは無事なの!？」

『今のところはな！だけどこの数じゃ長くは保てない!』

開けたプラットフォームにいるからというのもあるだろうが、目の前にいるE・L・I・Dの数としてはついさつき四人で戦ったよりも多く感じる。このままでは津波に立ち向かうもので囲まれるのも時間の問題である。

「アルファ部隊、一点突破でハルカ達と合流するぞ！クロスフォーメーションだ！」

「了解。このクソツタレ共が、全然ビートを刻むどころじゃないじゃないかよ！」

悪態をつくバルソクがまとわりついてくる怪物の頭部を蹴り飛ばしてG-1と戻ってくる。事前に決めていたポジションにそれぞれが就いて駆け足で銃声の鳴る方へと向かった。

近づいてくる輩には銃床で殴ってから銃撃をかまし、行く手を遮る変異体には人間と共通している急所を撃ち抜いたりと可能な限り迅速に移動する。四方八方から自分達に襲い掛かる怪物の対処は銃を扱う敵兵とは違った厄介さがある。それはもう手遅れになった者達の助けを求める叫びだった。

「おい、どこに行くんだこっちに来てくれよお!!」

「助けてたすけてたスケテエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

「アアアアアアアアアアアア!!イダイイダイイダイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

耳にこびり付いてくるそれはローガンにとってもトラウマに等しい。過去に同じように腸を食らわれながら悲痛を残す者達の絶叫までもが鎖を掛けて封印していた筈のトラウマボックスから飛び出してきて脳裏に響いてくるからだ。そして新たに耳にしたそれがまた加えられて後に精神的に押し掛かってくるのだから、ローガンからすれば

意識して忌避したいことの一つであった。

皆の先頭を走っているのものでそれぞれがどう思っているのかは知らないが、それにばかりに気を取られていては生き残れない。心を鬼にして聴覚にフィルターをかけて無線機に叫んだ。

「ハルカ、そつちから見て十二時方向から合流する。脇に沿ってそちらに向かうが誤射に注意しろ！」

『了解、合流次第爆薬を使ってここを通行不能にする！』

「周りを見てあなたはわからないの!?!ここを派手に吹き飛ばせば陥落して……!!」

『それが狙いだ!こいつらの数に対して足で逃げ切れる保証なんざ何処にもないだろうが!』

グリフィン所属の自分達の行先はトンネル状になっているので、敢えてそこを瓦解させればたしかに後に付き纏ってくるであろうE・L・I・Dを振り切れる。しかしその策は自分達も生き埋めどころか圧死することになる危険と隣り合わせの策であり、どこにも成功することの根拠はない。暗闇においての爆薬の使用など、失敗要素を列挙していく方が簡単だ。

凄惨たる戦況で沸騰していた筈の思考がどこか落ち着きを取り戻していきながら、ローガンは他に取れる案があるかどうかを思考しようとした。しかし休む間も与えら

れない勢いで襲い掛かる怪物によつてまともに考えられない。菌痒い思いを点らせながらローガンは撃っては薙ぎ払って徐々に迫りくる魔の手を遠のかせるように足掻いた。

『どうするんだアルフリーダー！あたし達の案に伸るか反るか、あんたが決めろ！どっちにしてもこっちは実行するつもりだがな！』

「……もう今更どうこう言つても仕方ねえだろ！二十秒後にスイッチを押して起爆しろ、その前にこっちは合流する！」

「ローガンッ!!」

『わかった。急げよこっちも余力はないどころか足りてないんだからな！』

襲い来るE・L・I・Dを退かせてもまた新たに襲来してくる現状からしてもう異議を唱えているだけの時間と余裕はもう自分達にもない。弾薬はあつてもそれを使い切る前に死んでしまつては意味がないのと同様に、手立てに拘っているだけでは全滅を招く。切羽詰つた戦闘状態になり他に有効な案が思い浮かばなければ妥協して突破を図ること、これもローガンが人生で最も敬意を払つた人から学んだことだ。

416が異を含めて名を呼んだが、熟考する足踏みをしていられることもローガンにはできない。

ルールに降り立ってから進行方向に迷わず足を向かわせ、フレアが撒かれて照らされ

ているE・L・I・Dを撃つ。脳内でカウントこそしていないものの、もう体感で折り返し地点は過ぎてのことだけはなんとなくわかっていた。

「全力で走れ、フォーメーションは崩していい!」

「もうこいつらの相手はしたくないいいいいいいいい!!」

嘘偽りのないであろう本音を漏らしながらG11が全力疾走で駆け出し前に立ちはだかる怪物を足蹴にしていく。それによつて形成された束の間の道を通つて境界線となつているフレアの向こう側をめざし、今日になつてE・L・I・Dとの対面を果たしたバルソクも負けじと人形の脚力を発揮させた。

「文句は後で聞かせてやるわよ!」

「生き残ればもう勝ちも同然、勝てば官軍負ければ賊軍だ!好きなだけ言えばいいさ!」
並んだ416がそう耳元で叫んでいるのかと思うぐらいの音量でローガンに怒鳴り、共に交戦し続ける民兵達と合流する。それと同時に背後の方から爆音が轟いた。

ドオンツ!!とC4爆弾に類する爆弾なのだろうが、炸薬量はおそらく同等かそれ以上だ。

「崩れるぞ、走れ走れええええええええええええええ!!」

爆風が背中を叩いて束の間、誰かの叫びで皆が一斉に走り出す。ローガンと416はそのまま両脚を全力で動かしたままこの後のことを予見しつつ脱兎のごとく駆けてい

た。

直後、ガラガラとけたたましい騒音を立てながら壁や天井が崩れ出す。こちらを追うように聞こえていたE・L・I・Dのうめき声が掻き消され始めてはいるが、それで足を止めるようでは命を落とす結果につながってしまう。

「ローガン、ちよつと振り返ってどうなっているのか見たらどうかしら!」

「気分が晴れやかになる前に人生ブラックアウトだつてんだよ!」

ドンツドンツドオン!!と腹に響く音がしていることから特大サイズの瓦礫が降り注いでいるのだろうか、それを確認すれば速度が低下して巻き添えを食う予感がしていた。

ハルカからの要請からずつと走っているので普段なら息も上がって走るのも難しくなっていたであろう。ただ、ローガンの人生における最大規模のピンチに火事場の馬鹿力というのが働いて限界を感じさせていないのはせめてもの救いだつた。

おそらく起爆された地点から百メートル以上は走つたその頃に、ようやく背後の方からの落下の衝撃は感じなくなつた。

余裕を持たせる為に完全に大丈夫だと思える距離までに達してから追手はないかのようにやく確認する。HUD越しにローガンの目に映るのはパラパラと細かい石が転がる、生ける屍の姿が一切ない光景であつた。

それで一息を入れようとした束の間、この向こう側で置いて来てしまった者達を思い出してしまった。今日まで戦ってきた男達による悲痛の絶叫、断末魔と血飛沫が舞つてもいた惨状。それらが視覚と聴覚にリフレインし、ローガンは両膝を突いてえげすきそうになった。

すぐに誰かが駆け寄って背中をさすって来た。荒げた息のままそちらを見ると心配そうにこちらを覗き込むG-1の姿があつた。

「……総員、損害を確認して報告しろ」

ハルカによる指示でそれぞれが被った現状を確認する。それにはローガンも加わろうとしていたのだが身体が言うことを聞かずに両足に力が入らない。歯噛みしながら無理にでも立とうとした瞬間、諫めるようにG-1が抱き付きながら言ってきた。

「……ローガン、一回休もうよ。まだ解決したわけじゃないけど乗り切るにはローガンの力が必要だよ。ここで腰を下ろして一息をつくぐらい、みんな許してくれる」

「だけど……俺はまだ……」

「わかつてる、だけどそれで誰かが文句を言うようなら代わりにあたしが聞くよ。ローガンだって本当は——」

——戦場（こゝろ）にいることは、本来ならなかつたもんね——

その囁きで、ローガンは身体の力という力が全て抜けた気がした。

41. 事例と問答 —No difference—

誰しもが赤子の頃に初めて自分の足で立つて歩いた時の事を覚えているわけではない。その幼子の両親からすれば良い意味での一大事なのだが、物心がつく前に起きた出来事を記憶に留められているのは少数だろう。その行いに自ら臨んでやることの『自主的』な意思があるのか否かと問われれば、恐らく否である。人間も含めた動物が自らの足で立つて歩く、飛ぶという行いは遺伝子に刻まれた『本能』の一つであり、そこまで考えられるほど精神的にも発達していない子供にわかる筈もなく仕方ないことだ。

唐突だが、『戦い』というのは人間の『本能』に含まれる。例えば日常生活中にその者にとつて精神的にどうしても受け入れられないことがあつたとして、手が出るのが早い者であればその発生源を潰す行動を物理的にする。または武器を振りかざされて自己の生命が脅かされそうになつた時、閃いた手段を行使して自己防衛に努めたりもしたりもするなど、過去を巡れば似た事例がたくさんある。前者と後者に違いはあれど共通していることがあるとすれば目に見える見えない問わず、自己を形成している要素を守る為に根元を断つ行いをするのだ。

よつて、人生で何かを受け入れつつも受け付けられないものに当たつた時は拒否したり

することは『戦い』の一つであつて『本能』に含まれる。しかしそれはあくまで自分や大切な誰かの身を守るために戦うべく備えられた『本能』でしかない。そこからさらに発展させて武器に変える者など一握りしかないのだから。

長い歴史を振り返れば名を残した偉人がいた。また己の理想、言い方を変えれば野望を実現せんとする指導者がいた。自分の夢を叶えるべくして彼らに従つた兵士がいた。自己防衛の『戦い』という『本能』から『闘争』を新たに自分の『本能』の一つだと位置づけ、自主的に戦地に赴く。そんな彼らのように確たる覚悟が出来ているのなら、あとは自我を突き通すだけで大抵のことはなんとかなる。

だがそうした覚悟もさせてもらえないまま、武器を取らなければならない状況に陥つた者はどうすればよいのだろうか。

死地に足を運んで戦うことなど、命が脅かされることを第一に忌避し現世にて生を謳歌する者達には簡単出来る筈もない。それでも安全地帯など短時間で数えられる程度しかなくなつた現代では、誰かから奪うか与えられるかしなければ生きていけない。食いつないで自己を守る為の目的を持っていても、理想や野望による『闘争』の『本能』がないのなら生に強いられるのと同義だ。

生と死の瀬戸際と同様に広い世界を放浪していつて、両手について地面を見た時に映りこんだのは一振りのナイフ。刃渡りも大したことない、子供でも使える小さな刃物

だった。

やや霞む視界で思うがままに手に取ってから視線を上げればパンと飲料水が入っている容器を手に持った老人がいた。その者にとつても久方ぶりにありつけると思っていたのだろう、束の間の幸福に出会えたことで喜色が表情に出ていた。

背後には何かの神を祀っていたのであろう小さな祭壇があつたので、恐らくそこからくすねたのだろう。

しかしそんな細かいことはどうでもよかつた。今日まで三日間、食べ物どころか水すら飲めなかつたのだから。まだ芽生えてもいないが、建前とは相反する本心が水素を急速に詰め込まれる風船のように膨れ上がった。

さらに腹の奥底で燻っている良心とはかけ離れているもう一人の自分が囁いてくる。そのまま自分が生存するのに必要なことをやれ、と。

ナイフを手にした時から時が緩やかに流れ、逡巡したのは束の間だった。ナイフを老人に向かつて振りかざす様に脳内でイメージしながら涸れていた喉から声が吹き出させて裸足で駆ける。傷だらけで土や泥だけでなく煤で黒くなっている両脚にこれだけの底力が眠っていたのを内心驚いてはいたが今はどうでもよかつた。

とにかく今は腹を満たし、喉を潤すことが第一であつて他のことなど投げ捨てていたのだから。

本来なら弱っていた子供の足なのだからよっぽど老衰してなければ逃げ切れただろう。こちらに気付いていながらも逃げられなかったのは、老人も衰弱していて骨ばった両脚に力が入らずに歩くことすらままならなくなっていたからだだったのかもしれない。武器を持たれて命の危険を察知していながらもパンと水を手放さなかったのは何故だったのか、今でもわからない。

ただわかったのはただ一つ。

鉄血との戦争によって生み出された難民達の生存戦争に足を踏み入れたこと。そして、まだ一桁であるその歳で少年はナイフを持って人生初の殺人を犯したこと。

その少年、ローガン・ブラックは水を飲んでからパンを胃に押し込んだことで正気に戻り、目の前で転がっている老人の死体による罪悪感でまた大声をあげて泣いた。

もういい加減にやることやらなければならぬだろう、と壁から背中を剥がして虚弱だと偽って主張してくる両脚を奮い立たせて立ち上がる。状況確認ということで幾つか焚かれているフレアで照らされているハルカの方にローガンは歩いていった。こちらに気付いた民兵のリーダーは淡々と聞いてくる。

「もういいのか？この先でゼロられるのはごめんだぞ？」

「普段の何倍ものストレスで追い込まれているとはいえそこまで軟弱じゃないさ。もう気にしなくていい」

やれやれとローガンは首を左右に振ったが、内心まだ余分に押し掛かってきている心の重石は除去できておらずに地団太を踏んでいる状態にある。惨たらしい現場が出来る上だろうとしている様を目の当たりにするのはローガンの人生としては四回目になるが、やはり脇に置いておけるものではなかった。

ただ現状を顧みて、四層以降にまで先行されている鉄血兵に追い付くにはもう立ち止まっては行れない。元から数日間という時間が敵方にあつたのもう敵陣の中に潜入するのと同じなのだが、E. L. I. Dまでもが地下内に徘徊しているのなら長居は避けるべきだ。シンプルな話でグリフィン所属の自分達とハルカが率いる民兵による

集団、それらの総数は元から決して多くはなかったが先程の戦闘で絶望感がさらに上乘せされた状態にある。

「一応小耳に挟んではいたが聞き間違いがあるのはマズい。さっきの戦闘で受けた損害はどれぐらいだった？」

「……あたしの部隊の半数がやられたよ。予備の弾薬や装備を預けている連中を最優先に逃がしたのは正解だったが、補給員の半分も餌食になってしまった」

「となると補給ができるのはさらに限られたものと量でしかないってことか。割とシャレにならない痛手になってしまったな……」

「すまん、これに関してはこっちの失敗だ」

「結果論で責めても仕方ないし良かれと思つての判断だったんだろ。だったら俺からは特にいう事はないよ」

とはいえ先程の戦闘で消費した物資の補給がロクにできないのは手痛い損失である。『ハニーバジャー』の弾である。300BLK弾は使う者がローガンしかないということ自分で管理している。予備として持ち出しているのは弾倉二本分、つまりローガンがさっきの戦闘で消費した分が丸々返つては来るので問題ない。ただし、416や数人の民兵が使用している銃の弾薬である5.56mm弾、バルソクや大多数の民兵が使用しているAKシリーズの7.62mm弾などが心配になってくる。SMGなどまで

話を広げればキリがなくなるほどのことにハルカと嘆息し、頭を掻きながらローガンは言った。

「あそこから逃げおさせたものの、嘯まれたりしている奴もいないよな。引つかかれたりもすればアウトだが」

「そこだけは不幸中の幸いだ。あたしも含めて細かいすり傷はあつても爪で引つかかれたりした切り傷はどいつのどこにもなかった。あんたらの方……いや、あんたはどうなんだ」

「俺も問題なし。アドレナリンで痛覚が遠のいていて、きつちりと休んでいる間にもチェックされたよ」

ハルカがローガンに絞つて聞いてきたのはE・L・I・Dによる感染が戦術人形に及ぶことがないということを思い出したからだろう。

自律人形は風邪や感染症で体調を崩したりはしない。ただ二日酔いで半日以上まとも動けなくなるM16のように人間を模して体調不良を表したりするが、内部構造が悲鳴を上げているだけで大抵のことは彼女達自身で片が付く。元々ばい菌やウイルスによる体調不良というのは医学的にプロセスは違えど、繁殖するには宿主が生物であることが絶対条件になっている。人形である彼女達を覆っているのは人類そのものとはほとんど変わらない人工皮膚ではあるが、あくまで本物その物に寄せているだけであつ

て生物由来のオリジナルではない（人から皮膚をホイホイと切り抜くのは人道的に反しているだろう）。それに出来物が生まれても大事になりはしないのである。

ローガンが聞いた話によると、似せた症状を起こしても本格的に行動不能に陥ることは近代の戦術人形にはないらしい。彼女達がモジュールの作用で咳をしたとしても、本当に重い病状を見せないという事だ。

それに関連してこれはハリーからも何度も保障されたことだが、自律人形がE・L・I・Dからの感染させられる行為をされても彼女達が怪物にならない、ということだった。医学的な説明はローガンにはできないが、E・L・I・Dになる対象に人形は当てはまらないという事である。実際にローガンは見たこと無いが、『感染』ではなく『被爆』という表現をされていることからE・L・I・Dの元になる『崩壊液』^{コーラップス}はばい菌やウイルスなど肉眼では確認できない病原菌ではなく放射能の一種ではないかと考えていた。なのでハリーからそれによる影響は彼女達にも表面的に多少はあるのかもしれないが、自我を完全に失って襲い掛かることはないということに納得した。ローガンにも開示されている『崩壊液』^{コーラップス}にプログラムに干渉できるだけの作用は無い、というデータに嘘偽りなければの話だが。

「退くのなら今のうち、ではあるがその気はお前達には無いだろう？」

「当然だ、鉄血のクソ共に部下をあんなにされてあたしが何もしい道理は無い。もち

ろん今も頑張ってくれている連中を守るのが最優先だが、実行した野郎が目の前にいるのなら飛びつく勢いさ」

「ならいい。だったら——」

今後に関しての話し合いを始める流れが形成された所でタイミングを測ったようにして一人の民兵が歩いて来た。顔はフレアの逆光で陰になっていたのではつきりとはわからなかったが、身につけている装備と色で誰なのが察しが付く。ハルカに選ばれた兵ではない、融通の利かない者が来たことにローガンは内心溜息を吐きたい思いだった。

「リーダー、長居せずこんな所からさっさと動きましよう。奴らは遠回りしてでもオレ達のところに来るはずです！」

「……ハモンド、てめえが言っているのは任務続行ではなくここからの撤退を言っているな？」

「冷静になってくださいよりリーダー！あんなのがこんな地下にうようよいるんじや全滅します！」

ここまでの二度、武力もチラつかせてこちらに対し強硬姿勢を取っていた時とは打って変わった様相にローガンは目をパチクリとさせた。頭脳はともかく一人前だと吠え猛っていた猛獣が尻尾を丸めているのだから、今日初めて顔を合わせたローガンだけで

なく416なども同一人物であることを一瞬忘れてしまおうだろう。

「てめえもよくよく考えろ。現状じゃ真つ直ぐ家への帰り道だってわかってはいない。地道に探そうにも化け物どもが徘徊しているのだからまともに探せないだろう。けどそれを効率よく探し出せるアイテムを持っているのは……」

「この守銭奴野郎か……だったらいつを無理にでも……!」

「だから視野を広く持って今までも言ってきただろクソバカ野郎が。時には生きて帰るのに遠回りをしなければならぬことだってある、今回がそうだ。さっさとやることやって全員で帰るのが吉だ」

「そんなまどろっこしいことをしなくてもいち早く帰れるでしょう! 頭数ならばこちらの方が分があります!」

その男、ハモンドの言うことにローガンは砂漠の移動の道中で脳裏によぎっても無視していたことを思い出して今更ながら肝が冷える思いになった。いくら戦闘に特化した自律人形、416のような頼もしい戦術人形が味方にいてもやはり数には勝てない状況が圧倒的に多い。広い世界を見渡せば目につく民兵とまで言わずとも、純粋な戦闘力が劣るローガンにも同時に捌くには限度があり、この地下内で協力している民兵達が総出でかかってくることになれば負けることは言わずもがなだ。

もしハルカが今の時点でハモンドの言うように脱出するべくローガン達を脅してき

た場合、後に解放されたとしても『オアシス』の奪取に大幅な遅れが生まれる。戦力の低下も相まって劇的に不利な状況に追い込まれることは間違いない。まだ待ち構えているだろう鉄血と巢食っているE、L、I、Dがはつきりとどれだけのものかはわかっていないが、もしそうなればもう目的達成など不可能に近くなる。

だからといってローガンとしても反論したくないわけではない。とくにハモンドに対して言いたいことは少なくとも彼に対しては大きい、威力のあることが胸の奥で熱を帯びている。しかしそれは今言うべきことではないと、口を挟むべきではないとして静観することにした。

「んなバカなことしてみろ。生きて帰れたとしても最悪の場合は国外テロ指定組織に載せられる、命を拾って帰れたとしても死ぬのが遅れるだけのことだぞ。どっちにしてもこんな所に勝手にノコノコ足を運んだてめえにも非がある、いい加減に認めろ」

少しだけ場所を変えよう、とばかりに仕草で誘われたのでローガンはハルカについていく。今さっき話をした一部の物資、壁に立て掛けられている弾薬などの入った三つの鞆の傍にまで来たところで立ち止まると物色を開始。

5. 56弾、7. 62弾も多いとは言えないが多少の補給も可能であり、運搬中においての事故によって誰も死亡することがないよう、殺傷が目的ではない投擲物もそれなりに収納されている。だが……。

「さすがに全員分のあるとは言えないな。それぞれがどの程度まで消費したのかはわからないがあれだけの数を相手にしたのだし少なくないだろ」

「たしかに。あたしも指揮しながら奴らとは戦ったが弾倉の装填が二本分出来たらバストだが……」

「全員に分配するわけだからそんな贅沢はできないぞ。精々空の弾倉に一本出来ればいいと思える程度しかない」

限られた物資しかなくともなにもできないよりはいいだろう、とローガンはあることをハルカに提案することにした。果たしてそれが良い方に転ぶか、またはその逆か。その結果はいるとは思っていない神のみぞ知る、というものだが現状を見てみればこれが最善策の一つだろう。

「ハルカ、この先余計な物を担いでいれば移動の妨げになって走って逃げれるのが逃げきれなくなることでだって考えられる。だったらここで持つていける物だけを身に付けて余ったのをここに置いてく方が良いかもしれない」

「……わかつているのか？ それだと場合によつては有り得ること、長期的な戦いに望めなくなると言う事だぞ」

「そんなのはもう言い出す前から行き着いて承知している。だけど下手に持ち歩いて足を鈍くすればE・L・I・Dから逃げ辛い、だったらいつそのことここに捨てるのも一

つの手だよ」

「たしかにそうではあるが……だがそれにあいつらが納得するかどうかも問題だな。あたしにとつても潤沢にある物資を手放すのはそう簡単にできることじゃないしな」

それはローガンにも痛いほどわかる。手元にある限られたものをなんとかやりくりして活路を開いていけば、豊富にある選択肢そのものを捨てるのは抵抗を感じる。装備に限らず食糧などの備蓄もそうであり、思い切り良く切り捨てれる者などそうそういない。

ローガンがこれを提案できたのはそうしなければ生き残れないと感じたことにもよるが、もうこの世にはいない人生の恩人との経験から得たことの方が大きい。苦い思い出の一つではあるが今こそ糧にする時だ、とローガンは振り切りながらハルカに言った。

「日本人は全員が貧乏性にかかっていると聞かすが、お前もそうなのか？」

「あたしが知っている同郷の人間は身分的にはあたしとそうかわらなかったが、全員物を大切にする方ではあったな。罰当たりなことをするのは大体価値を知らない大馬鹿野郎だ」

「俺みたいなアメリカ人はそうした大馬鹿野郎に見えたりするか？遠慮することなく言ってみるよ」

「……………いや、さすがに今日会ったばかりの奴にそこまで言えるわけないだろ」

言おうか言うまいかの躊躇を一瞬みせたが最終的には日本人特有の遠慮が出てきてハルカの口を塞いだ。だがその言葉からして彼女達東洋人からすると、ローガンも含めた欧米の人間はそういった物の管理がずぼらのように見えるのだろう。

ここからどう説得しようかと静かにローガンが思索していると、ハルカは仕方ないとはばかりに溜息を吐いた。

「だけどまあ、少なくともサバイバルに関連している事の価値を知らないわけではないんだろうとは思う。今回みたいな仕事を任すなら人形が一番なのだろうに一枠に人間のあんたを加えているんだし信頼されているんだらう。納得させれるだけの成果をそれまでに出してなきや聞く耳持たれないのは当たり前なんだから、あんたの案に乗っかることにするよ」

「本当にいいんだな？何か忘れ物があったのだとしてもここに後戻りすることはできないぞ」

「さっきのいか八かの爆破しての撤退、それに反対しないでついてきてくれたんだ。だったら今度はこっちの番。やり方によっては損失を抑えられるんだからそっちの方が断然譲ってもらっている感じがちとあるがな」

ローガンからすればこじつけに近い理由から挙句譲ってもらってしまったが、ハルカ

も他に案が浮かばなかったのかもしれない。余分の物資を捨てるのは妙案とは言い難いが、時には荷物を軽くして機動性を確保するのが時にはある。ここからは尚の事慎重かつ迅速に勝負に出る必要があるので身を軽くするのが一番、というのが過去と同じ手段をとって経験したローガンの狙いだ。

了承したハルカが民兵の皆に招集をかけている間に、ローガンは身の上の確認を互いに行っている416にG11、バルソクの元へと寄って行つた。遠巻きに民兵達の円陣を眺めている彼女達がこちらに気付くとそれぞれが手を止めずとも意識をこちらに割いているのが見て取れる。

「気分は？」

「最悪」

「体調は？」

「少し良くなった」

416からの問い掛けに淡々とローガンは答え、預けていた今は亡き友から贈られた銃である『ハニーバジャー』を手に取って弾倉を引き抜く。中身がまだ残っているそれを叩きこんでからチャージングハンドルを引いたりと動作確認を行つた。

「首尾は？」

「まずまず。それでどう転ぶかは俺達次第」

ハルカからの説明でどよめく民兵達を遠巻きに眺め、数人から向けられる視線からは逃げずに正面から受けて立つ。キリキリと胃が痛みながらも耐えているとG11が袖を引つ張つてきたのでそちらを見てみる。彼女は彼女で416に問われていないことによるものなのか、こちらへの上目遣いはまさしく幼い子供のようにだった。

撤退成功直後のことの礼を含めてその額に軽くデコピンをかますと416が呆れたように言ってきた。

「G11が何かを察して言ってたけど、一体何だったのよ？」

「別に気にする必要はないさ。単に俺のトラウマをなんとなくでもわかってくれているだけなんだからな」

額を軽く摩る少女の頭をターバン越しに撫で、ローガンはハルカがしたであろう説明を彼女達にもするべく口を開く。脳裏に過った、数日前の出来事を記憶の棚に押し込めながら。

〈九日前〉

「——以上が我々が置かれている状況です。『オアシス』の在処に関する情報は洗い出しています。が難航しています」

『……ふむ。敵からの証言と得ている情報から、戯言として片付けるには大きくなっているな』

ローガンからの説明に頷いたのはグリフィン英国支部の指揮官、オリバー・ワトソン。ホログラムで映されている十人程度の指揮官の一人で濃い無精髭を生やしているその初老の男性の手にはタブレットが持たれている。恐らくその画面にはローガンが入念にチェックして数日かけて作成した資料が表示されているだろう。前日まで残業し根詰めていたデスクワークが過つたがそれを思い出して耽るのは後で良い。

無意識に脳が現実から夢想へとシフトせぬよう心がけながらローガンはハリーも含めた全体を見渡す。

現在ローガンがいるのはグリフィン北米支部に置いて一番の高部に位置する会議室。今日まで踏み込んだことがなかったが、普段は保護区内で治安活動を続けている組織、区内の賑やかしを従事している団体などの最高位の人物を招いて話し合うのに使っているらしい。そこで保護区で目についた出来事やこれからの予定を報告してもらってこちらから可能な対策を受け持つ、という場でもやはり緊張感は今回は格段に増しているのだろう。ここ北米支部で踏ん張っているハリーの表情にも一ミリたりとも余裕が感じられなかった。

本部に戻ったヘリアンの傍に控えている司会・進行役の男性が重々しい雰囲気、冷や汗を浮かべながらも口を開く。

『質疑応答に移ります。各自で疑問に思う事がございましたら挙手を行ってからお願います』

ホログラムで青白く浮かび上がっている各支部の指揮官がもう一度ローガンが作成し送信した資料に視線を落としながら思索している。その中で、ロシア中央本部の重鎮たちは同じデータに指差しながら何かをホログラム越しに隣の者と話していた。組織の最高責任者であるヘリアンはそんな者達を見渡しながら無言を貫き通しているのも含めてローガンは内心戦々恐々としていると、一人の指揮官が手を上げているのが目につく。そちらに視線を動かしてみるとアジア支部の女性指揮官、リー・チャンがほんわ

かとした様子そのままこちらを見ていた。

始まってから変わっていないその雰囲気で忘れそうになるが今は会議であることは忘れてはならないと、ローガンは彼女に促す様に掌を向けながら言った。

「……どうぞ」

『ありがと。それじゃあさ、『オアシス』を確保した後の事だけどういう風に君は考えているか聞かせてもらえるかな？』

柔らかい口調とその雰囲気に所々で張りつめている精神を支えている柱が揺り動かされるが、動かされただけまた支柱を動かしてなんとか立て直す。それからローガン自身を考えていることをありのまま言った。

「鉄血の目論見が世界規模であることからして、恐らく北米支部の力だけでは解決に辿り着けないでしょう。それに『オアシス』から入手できた情報等は西や東に関わらず駆けまわることも十分に考えられます。なので各支部の皆さんに伝達して協力を求めることでしょう」

『まあそうだよね。『オアシス』に関しての情報は入手できてもその後の事はまだわかっていないんだから仕方ないよ。うん君の考えはわかった、ありがと』

『では次にこちらからさせてくれ、ローガン。『オアシス』は一旦置いておいて、奴らが政府のお偉方の感情操作を元に四度目の世界大戦を引き起こそうとしていることに関

してだ。それだけのことを可能とするには大きな火種が必要になる。根拠などまで提示しなくていいがそれはどう予想できている?」

「それについては僕から説明させていただきます」

オリバーからの質問に横で待機していたハリリーが立ち上がった。ここままで必要なことの応答しかなかった彼が出てきたことにローガンを除いた全員が視線を向ける。

ハリリーからの目配せに従ってローガンは一旦腰を下ろして用意されている椅子へと座る。途端に精神を研ぎ澄ませたまま三十分以上立っていた疲労が押し寄せて来た。可能であればこの会議室から出て食事になりたいが終わりはまだまだ先だろう。

「オリバー指揮官の言った通り、第四次世界大戦は爆弾でそれに点火するには火種が必要です。点火するにはほんの小さな火種では不十分ですし表向きの理由が因果関係で結びつくものだと誰もが思うものでなくてはなりません。オリバー指揮官であればとうの昔にそこに行き着いているのでは?」

『ああ、俺もそこまで考えている。精肉店に野菜が、パン屋に米が置いてあったら違和感しかないがそう思うのは決められているテーマというのがあるからな。第四次世界大戦勃発を誘発させるのに鉄血が世界の首脳陣に食物を投げつけるだけでは到底できることではない』

「それともう一つ。水面下で国同士の武力による小競り合いが起きているというのにメ

ディアに大々的に報じられていない。どこかでボロが出ていてもおかしくないというのに一切どこからも」

『たしかにそうね。それはどう予想しているのかしらハリー指揮官？』

くるくると指に自身の髪を巻き付けているリーを一瞥したハリーはまたオリバーに戻す前に全体を見渡す。そうしている間に胴のような思いを抱いているのかはローガンにはわからないが、芳しくないような心に栓をさせて詰まらせてくる、それに類する物だというのがなんとなくわかった。

「第三次世界大戦の影響もあつてさすがに慎重になつているのだと思います。鉄血工造という共通の敵がいる以上は彼らも望んで戦争を引き起こしたいとは思わないでしょうし引き起こされる悲惨さは知つている筈です。なので首脳陣は互いに画面越しに睨み合いながら牽制しているのが現状でしょう」

『でも世界がそうなつているとは限らないでしょう？日中戦争だとかイラク戦争みたいに歴史に刻まれている因縁があれば簡単に黙つていられるとは思えないわ。心に巢食う負の感情が強ければ強いほどその相手国の悪い所が目につきやすくなるのだから』

これは国同士の事でなく普段の日常生活においても当てはまることだろう。言動などが気に入らないというのは些細なことではあるが、もしそれによる刃物が自分に向け

られた者であれば話が違ってくる。腑に落ちない理由でそれが自分に突き立てられれば反感を覚えるのは当然だ。

特に戦争という舞台で互いに暴力をもつて傷つけ合った結果がどうあつても怨恨だけは必ず残る。愛国者を体現する兵士であれば尚のことで、ソ連時代のロシアを嫌っていた（らしい）スオミがいい例だ。製造される過程でそうプログラムされているのはそういう歴史を忘れないよう製造主の意図があつたのかもかもしれない。だがいずれにしてもそう毛嫌いされるほどの根があれば比例して憎しみが増幅している。それが現代の国を動かしている人間達に全くないわけではないだろうし、複数国の諍いである世界大戦であれば尚の事捨て置くことでもない。

「たしかにそうでしょうね。ですが核戦争から始まった世界大戦で何かが違ったのかもしれません。僕は心理学者ではないのでそれ以上の推測はできませんがね」

『そんな政府の人間のケツに火をつけるどころか爆発を起こすことなんてそんなのもう一つしか考え付かない。坊主、まさかとは思うが……』

「ええ、オリバー指揮官のお察しの通りです。EMPという対応策が取られています。炸裂すれば大勢の死者を生み出す。それだけでなく放射能を撒いて生物に変異を起こすか正体不明の病気を発症させることも第二次世界大戦で日本の広島と長崎という地から得たデータがあります」

そこまで言われてこの場にいる誰も察することが出来ないわけではないだろう。E
MPが有効で放射能をまき散らす大々的な兵器などすぐに思いつくのは一つしかない。

静かに傾聴していたヘリアンがようやく口を開いて正解を言った。

『核兵器か』

「その通り。鉄血の手にそれが渡ってしまえば彼らにはもう簡単なことでしよう。どこかの国の者であることを記録上で偽って起爆するなど方法は様々。それが世界中で起きればもう最悪の事態になります」

実際に世界大戦を誘発させるのにどのような手段を使うのか、そこまではまだハリーと考察しても情報が無いせいで何一つとして形になっていない。ただ重要なのはこの国の者ではなく他国が自国であることを示されること。鉄血が民間人に対し条件付きで武器の供給をするのにあたって他国の武器を、アメリカにはロシアの銃を流していたのと同じようにすればロシア側からの工作を疑ってしまう。もちろんそれだけでは決定づけることはできないが、逆にいえば不足している部分を埋められれば断じられてしまうということでもある。

一同に似た動揺が見え始め、本部にいる幹部たちが主に騒ぎ始める中で指揮官たちは顔を見合わせながらもそう考え着くのが正しいのかどうかを確認し合い始めた。

「……やっぱりこうなったね。大体は予想できていたことだし知っていたけど」

「ヘリアンさんを除いて幹部たちは慌てふためいていても、現場慣れしている指揮官は皆冷静だな。いや、動揺していてもなんとかしないとイケないことだと無意識に知覚しているからだろうけど」

「この差はもういつ見ても呆れてしまうよ。一から段階踏んで上り詰めてきた人も一応いるといつちやあいるけどそれはほんの一握りだ。多くが大理石で築き上げられていたスロープを歩いて来たのだからこれを見ているだけでもちよつと腹立たしいよ」

「同感ではあるがお前も理性を無くすようなことにならないようにな。まだお前が取り乱したところなんざ見たことないができれば目にしたくはないんだからな」

やれやれ、とローガンは先日導き出した『鉄血による核兵器使用』の考察に不備が無いかもう一度考えてみる。

一昔前から戦術核兵器使用に当たつての理論というのがある。簡単な話が核兵器を使用された際に同じ手段で報復する、その有効対象としてされている相手はあくまで『国』でなければならぬということだ。鉄血工造というのは『国』ではなく人類の敵、いわばの巨大なテロリストの一つに分類される。もし鉄血が核兵器を素性を隠さぬままに使用すれば核理論が適用されぬまま同兵器で報復されないが、それでは彼らに取つて望んでいる結果は得られない。ならば核兵器から始まる国同士の潰し合いを始めさせるなら……というようにハリーと考えていった結果が核理論による報復だった。

考えすぎなのかもしれないが、なんの狙いも無しに行動しているということは戦い続けているローガンからしてもあり得ないと思う。なぜならハイエンドモデルがそれだけで違った特性を持っている、それを持たせているという現実がある。それだけでなくコンピュータウイルスを用いての戦術性まで確認されてもいるからだ。

オリバーがまた挙手したことにより指揮官たちの視線が彼に集まる。今度はローガンが答えるべきだと思つて立ち上がると英国の指揮官は言った。

『一つ確認させてくれ。第三次世界大戦が実質終結した後各国がまたの惨劇を防ぐべく全核兵器を放棄した、というニュースがある。それを信じるなら地球上に大量殺人兵器はないということになるが』

「その発言を信じるなら、でしょう。政府の最高トップがそう報告で受け取っている、とただで幹部が記録を改竄・隠蔽しているというのだからだつてゼロではありません。俺は元から信用していない人間に対しては疑り深いのですが、過去に言つてることとやつてることが全く違う、正反対の事をしては疑り深いのですが、過去に言つてることとやつてバー指揮官、その発言からすると鉄血は自分達で核兵器を製造するのではなく人類が隠しているその使用を予定しているのだと、俺達と同じ結論に至っているようですね」

『……一番考え付きたくない、最悪なことだとは思いますが奴らは皮肉なことにも容赦ないのだから。そうなると問題なのは奴がどこの核兵器の奪取を狙おうとしているかだ

な』

「はい、『オアシス』の情報入手に手一杯でこちらはそつちにまで手を回せていない状況です。ですから——」

そうして話を続けようとした途端、ホログラム越しに机を叩く音が響く。言葉を切つて音の発生源に目を向けると本部にいる幹部の一人、小太りで頭を剥げ散らかしている中年の男性が血走つた両目でこちらを睨んでいた。

——そこから先は、もうローガンにとつても茶番で思い出すのも億劫に感じている。ただグリフィン上層部の人間がどのような思考をしているのか、または政府とどう違うのか。そう問われた場合はローガンは『何も変わらない』と返答するのは間違いないなかつた——

42. 出沒 —Can see or not—

G11からの呼び戻しがかかる直前に割り出していた迂回路は当初予定していたルートよりは遠くても辿り着くのにそこまで時間を必要とはしていない距離内であった。

HUDに表示されている『地図』に自分達が正しい方に進んでいるかどうかをもう一度確認し、間違いがないことからローガンは進行方向上にある非常階段の周囲を睨みながらも索敵を開始。不意の接近戦に備えてナイフを握ったままにしている左手共々両手が新品のグローブ内で汗ばんでいるのだが、鉄血だけでなくE・L・I・Dまでもがいるので尚更緊張感が内から湧き出ている。元からローガンも作戦行動中ではあまり私語はしないが、フォーメーションを組んでいる416やバルソクの会話も全くない。あるのは僅かに聞こえてくる息遣いと異常ないことを伝える必要最低限の報告だけ

到達するとハンドサインで指示を送って416に非常階段への扉を徐々に、静かに開けさせる。開いた瞬間にローガンは隙間から敵影が無いことを慎重に確かめながら進入すると、死角にE・L・I・Dが一体いたので不意打ちを受けそうになった。

掴みかかれそうになったのを防いでいた所に即座にバルソクからのバックアップ

でナイフが怪物の頭部に刺さる。グジュリツと柔らかい肉に刃物が通ったことによる音が聞こえ、組みつこうとしていた歩く死体は動かなくなつた。見ているだけで生理的嫌悪感を感じさせる、わかりやすくいえば気持ち悪いそれをローガンは横に退けると他にいないことを確認してから一息をついた。

「マスター、大丈夫か？」

「心配するな、無事だよ。だけどあんなのの不意打ちは心臓に悪いことこの上ないな」

「私達は人形でわからないからそれには賛成しかねるけど……つと。いいわよ、ローガン。マーカークのペイントも終わらせたわよ」

「アルファ3、ハルカ。四層に続くマーカークもペイントしルートをわかるようにはしておいたぞ」

『了解、安全第一でも追いつくぐらいのペースで向かうよ。それとアルファ1、中継装置の設置もしておいたからここで指揮官、プロフェットに連絡したらどうかな』

「わかつた、こつちでしておく。そつちも気を付けろよ」

一旦416とバルソクを主軸に前に立つてもらいながらローガンは端末で回線を操作し新たに設置された中継点に接続。皆にも共有して聞こえるようにもしたりと他にも並列してやらなければならない作業も行い、それらを終わらせた後にローガンは耳元の無線機に片手を当てながら言った。

「定期報告。プロフェット、こちらアルファ1だ。聞こえるか？」

『———と、大丈夫そうだね。中継点を経由しているからちよつとラグがあるけど繋げれているんだし文句は言ってられないし仕方ない』

ローガンも非常階段を降りて四層目に到達し、一旦そこで報告すべく立ち止まる。そうしている間に416とバルソクが装備の確認を行わせ、ローガンは端末で『地図』だけに表示されている五層へのルートを走査を開始した。

『こつちも幾分収穫はあつたけど、まずはそつちから現状報告を頼むよ』

「そつちと話してから一時間程度だがいろいろあつたよ。こんな暗がりにE. L. I. Dがうろついているなんざ、誰にも予想できなかつただろうな」

そう言う息を呑む声が聞こえてくる。ただしローガンもハリーが驚くのも無理はないと思つていた。

E. L. I. Dという存在は衛星画像で確認されていたりと、事前情報が無い限りは神出鬼没といつていいぐらいに予測不可能で何を目的に彷徨っているのか全くわからない。鉄血という敵がいるのは数日前から知れていたが、そんな人類に意図をもつて敵対する人形達よりもタチが悪かつたりする怪物の存在はわからなくて仕方がない。ましてやこんな人^{ひと}気の^けない所など誰も好んでくることはないだろう。

『……損害は……』

「俺達グリフィンの方には問題ない。ただ、こつちから持ち寄っている物資の損失に民兵の半数以上がやられてシヤレにならないことになった」

『手痛い、いやそれ以上か。アルファ一、一応撤退も考えておいた方が……』

「残念だが進むも地獄、戻るも同様だ。それどころか退路にE・L・I・Dが押し寄せていたから爆破して塞いでしまったからな、どつちみち進むしかない」

致しかたなかったとはいえ、やはり目標を達成した後を使う予定だった帰り道が無くなってしまったのは手痛い。そのせいで別の帰路は遠回りになり生きて地上に出れても当分先のことになる。それに冠した面倒臭さ、煩わしさを感じないといえど真つ赤な嘘になり小突かれることは間違いない。

しかしそうして悩むことが出来ているのは命を拾えたことによるものだ。考えるのを嫌だと言つて自ら投げ打つ選択肢を取る気はローガンには毛頭ない。そのかわりに足掻き続けて明確な意思を持って敵対してくる鉄血に一泡吹かせるだけの気概は強く猛つていた。

「手ぶらで帰ればロクなことにならないし進行は続ける。目的の為に人命の軽視はしないからそこだけは留めておいてくれよ」

『……つはあ、まあ上層部からこれまで以上に白い目で見られることは間違いないから容認するしかないか。だけど良からぬことが連続して遂行が困難だと判断した場合は

撤退という手段を即決で取ってくれ』

「ああ。それで今さつき四層目に到達したところで順調に行ければあともう一步という所だな。こつちから報告すべきこととすれば以上」

『それじゃあこつちから情報伝達。今さつき入った情報だけど、その地下に何者かによる改修工事が五年前に入っていたそうだよ。付近で放浪していた難民から聞いた話を伝手で手に入れたわけだから信憑性が損なわれるけど、僕が持っているパイプでは有力な方だから間違いないと思う』

「地下鉄の見取り図には四層が最下層ではあったが、『地図』によれば五層目までが表示されている。このデータの作成時期はその五年目以降、と考えるのが筋か」

『地図』を設計図に五層目を構築したとも考えられなくもないがおそらくそれは些細な問題だろう。ローガンは頭にそう留めておきながらハリーから伝えられる情報に耳を傾けた。

『それともう一つ、これは作戦には関係ないけど政府が後々にフロリダ州、つまりそこに正規軍を派遣することを決定したらしい』

「アメリカ政府が？俺達と同じ情報があるんだつたら別だが、ここに来るだけの理由なんて連中にはないんじゃないのかよ」

部隊を派遣することなどそう易々できることではないことはローガンだって知って

いる。戦術人形を駆使して敵対組織と戦っているグリフィンとは違い、正規軍の部隊は戦車や戦闘ヘリなどの有人機に白兵戦には訓練された人間の兵士で構成されているのだから。モジュールによる心を持っていても人形は人間の命よりも軽視されている、というのに関連して十人の兵の損失でも大きいとして捉えられているのは如何せん大袈裟な気がするのだが。

訳が分からずローガンはガリガリと頭を搔いていると、ここまで口を挟むことがなかった416が発言した。

「私達の行動を遠からずも監視していた、なんてこともあるのかしら。グリフィンが取る次の一手を情報屋か何かから手に入れて泳がせていた、というのもあり得るわよ」

『銃を片手に表立って行動することはないのは相変わらずだけど中央情報局のエージェントだっているにはいるんだ。彼らが本気になれば僕達の行動だってバレてもおかしくない』

「ラングレーの連中が民間軍事会社の動向を窺いつつも嗅ぎまわっているというのはゾツとしない話ね。出兵してまで彼らにとつてのメリットが見出しているのというのは知れたけど、今後やり難くなることは間違いないね」

『君達がフロリダ州に現地入りしたというのはもう隠しようがない。こつちでいくつか時間稼ぎにもなるだろう言い訳は考えておくけど口裏を合わせるようにはしておいて』

一応手を取り合い鉄血の鎮圧も含めていくつもの仕事を任されている状態なのだが、裏の方で腹の探り合っていることなのだろうか、とローガンは思った。

鉄血の目的阻止には政府からのバックアップは望めないとして期待していないのだが、政府の人間達からすればどこかで借りを作っておけばつけ込めるだろうと考えているのだろう。だとすれば下手に尻尾を出したままにしていれば掴まれて鉄血の目論見を暴く前に逃げきれない状況になり得る。公になっているCIAの活動記録の中には彼らが工作して引き起こした事件があったりもしているので侮ってはならない。もし手を貸してくれる機会を得たのだとしても、心からの味方になってくれるとは思わない方が吉だ。

頭が少々痛くなりながら溜息を吐くと、ローガンは四層の鉄道レール上に出る扉に手をかけて外の様子を窺う。三層目で予期せぬ敵が出てきたことによる影響か、滅多にない異質な雰囲気を感じ取り冷や汗を流した。

踏み入ることを躊躇しかねないそこに進んでも問題ないと判断し、ローガンは無線に手を当てて言った。

「とりあえず政府も何かを探っていることだから、関連したなにかがあれば報告する。こっちはまた作戦行動に戻るぞ」

『了解。蜂の巣をつつかぬようには気を付けるけど、そつちも敵の尻尾を踏まないよう

にね。プロフェット、アウト』

ハリーが通信終了したことを端末の画面で知ってから、ローガンは扉の外へと出た。視覚だけでなく聴覚まで鋭敏に働かせるよう意識的に働きかけるがそれでも滴か何かが落ちる音が近くから聞こえるだけで不気味だった。

「嫌な空気だな。全身の毛が持ち上がらないぐらいに重々しいぞ」

『それに死臭も気のせいかな濃いな。そこらからするからとか全体に満ち足りているからとかでもない、この層自体が放っているかのようだ』

少々違うのかもしれないがバルソクが言いたいことはローガンでも本能で理解できた。扉を開けて様子を窺った時から深淵その物を覗き込んでいるような気もしていたのだが、いざそこに飛び込んでみれば別世界、生物が足を運ぶべきではない世界に踏み込んだのと表現されれば言い得て妙だと思う。大袈裟でも何でもなく『オアシス』奪取のように本当に重要な目的があっても躊躇うようなそこで、ローガンは416とバルソクに言った。

「ハリーとの約束もあるから少々マズいことになった場合は迷わず退くぞ。その時は他にも抜け道はあるにはあるからそつちを選ぶ」

『こればかりは仕方ないし今回の作戦はあなたが隊長なんだし大丈夫よ。45の指示に比べれば納得のいく正当性があるし』

「あいつ一体お前⁴ら相手⁴にはどんだけ容赦ねえんだよ。あいつって身内には厳しいだけの内弁慶⁴って訳でもないだろに……」

空元気で茶々を入れたのだが416とバルソクから望んでいた反応が返ってこなかったので咳払いをしローガンは隊列を維持したまま表示されているルート通りに前進を開始した。これまで通過してきたフロアよりも酷い損壊具合に潜んでいる未確定事項が襲い掛かってくるかもしれないので、一層警戒心を張り詰めさせる。

変わりゆく光景と共に耳朶に届いてくる残響の変化にも気を配って少しして、このような緊張状態がどれだけ続くのかと頭のどこかで考え始めたときにG11からの無線が入った。

『第四層にこつちも到達したよ……でもこんな所に長くいたくないよ……』

「気持ちは痛いぐらいによくわかるが我慢してくれG11。こつちもこつちで敵しか通っていないエリアに先行しているわけだからそこまで気を回せないんだよ」

『これほどに嫌な雰囲気を与えてくる空間が身近にあったとは思わなかったな。あたし達もそれなりにやってきたとは思っていたがまだまだだな』

『悪く言うつもりはないけどまさしくその通りでしょうね。私達も……っ!』

416が言葉を切ったのは足音が聞こえて来たからで舌を噛んだからでも何でもない。すぐにローガンやバルソクも来たる接敵に備えて音の発信源を中心に感覚的な警

戒網を広げ、自分達も発する移動に關した音を小さくした。

『おい、一体どうした？』

「ちよつと時間をくれ。敵に対応する」

応答が急に途切れたことによりハルカから怪訝そうな声が聞こえてきたが今はそれに構つていられないとして、ローガンが短くそう返すと十メートル弱先にある敵影を視認する。ついさつき見た軍勢よりも頭数は随分と少ないがそれでも多い、E・L・I・Dの溜まり場に出くわし一時前進していた脚を三人で止めて交戦可能かどうかを観察した。

ローガンが見た限りでは現環境下で三人で戦うには少々無理があると感じた。もしこの集団とは崩れる心配のない場で戦うのであれば話が變わってくるが、瓦解の心配が大きいここで派手に戦うのは極めて危険だからである。バルソクのマシンガン『AEK—999』を主軸に戦うにしても、はつきりと見えていない奥からバラバラと来られたらもう想像もしたくもないことになることは間違いない。

『開けていけないわけだから回り込むのも無理よね』

「ああ……仕方ない、一旦ここから退いて——」

別口の通路に回り込もう、と続けようとしたところでそれまでになかった異變が起きた。体感で感じられる微かな地響きが数度伝わって来たかと思うと、急速にそれが強

まっつて来たからである。原因は何によるものかと考える暇もなかった。

ドオンツ!!と突如E・L・I・Dの集団の横の壁が吹き飛んでコンクリート諸々が舞い上がって死者たちを押し潰されていく。ローガンは予期せぬことに反射的に顔を庇いながらも、現在進行形で起こっている現象が何によるものなのかを見極める為に目を逸らさずにいた。

『ローガン……!』

416にベストを引つ張られていたので彼女に従い背中を向けないまま後退する。無傷のE・L・I・Dが不意にこちらに突撃してきても対応できるように警戒を解かずにはいたが、爆風でないそれを引き起こしたのが人による常識が通用しない、それどころか鉄血でさえもわからない怪物によるものであることを知って驚愕した。

まず砂煙が収まってきたことで見えてきたのは吹き飛んだコンクリートの断面に手をかけて身体を支えている巨体。身長五メートルはあるその体が細長い、というわけではなく筋組織も発達しているのろうがやや余分な肉がついている印象がある。だがそれでも今しがたのように機械等を用いずに単純な腕力でコンクリート壁を破壊するのに自然と納得させられてしまっていた。

『まさか、あれって……!』

「バルソクも静かにしろ。あんな奴と戦うようなら確実にやられてしまうぞ……!」

明度調節機能がついているハイテクサンングラス越しに見えているその怪物の濁った黄色の両目がこちらを捉えていないことを祈りつつローガンは息を殺す。距離があっても聞こえてくる怪物の息遣いに慄きながらも必死に空気に自身を偽らせていると、怪物の注意が逸れて足元に移行した。ローガンも目線を追って焦点をずらすと足首にかぶりついているE・L・I・Dがいた。そうするのが一体に留まらず、あれよあれよと十を超える個体が続いて原始的で本能に従った攻撃を仕掛けていく。

そう認識した束の間、かぶりつかれていた怪物の足が動いて体全体でしがみついていた死者たちを蹴り飛ばした。五体程度のE・L・I・Dが子供の遊び道具のように飛ばされて壁に激突、鈍い音を立てて首の骨を折るなどして動かなくなっているが細かいことにまで気を払ってはいられない。CGとも日本の特撮映画とも違う、シヤレにならない本物の怪物による蹂躪が始まったのだと、ローガンは総毛立った。

ぐしやりと一度上げた足で足元の死者を踏み潰した次に片腕で地面を払ってE・L・I・Dを薙ぐ。冗談のようにトンネル状の天井にまで舞い上がったE・L・I・Dに拳を打ち込んでめり込ませ、さらにはもう片腕と共に振り下ろすなどして驚異的な惨状が繰り広げられた。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

怪物の雄叫びが地下に木霊して咄嗟に両耳を塞いでしまったがそれはローガンだけ

でなく416とバルソクも同じだった。両者ともここまでパニックになるのを懸命に堪えているのだろうか、後者の方は今日になって初めて鉄血や反政府組織とは違った形態の敵対対象に遭遇したが為に特に理解が及ばずに混乱しているのは見て取れた。

しかしその表面化していない混乱状態になっているのはローガンも同じで、こちらと同様に咄嗟に静観を決め込んだ416は冷や汗を流しながら暴れまわっている怪物の様子を窺っていた。

『ローガン、G11が一人でそっちに行つたぞ！それに一体なにが起こっている!』
 「今は詳しく話せない！アルファ3も聞こえているな!？余計な音を立てずにそこで待機しろ、いいな!」

小声でも無線機越しにやや怒鳴るようにしてそう言葉を叩きつけると、ローガンはよく音が響くであろう手頃なサイズの鉄パイプを片手で拾い上げるとそれを持って様子見を続けた。

その場の一方的な暴虐が終わりを迎えそうになったところで、ローガンは鉄パイプを怪物が破壊して進入してきたのとは逆の方の壁に投げつける。大体の狙い通りの位置に落下して事で、静けさが徐々に戻ってきた空間に金属音が響いた。

その音に反応した怪物は少々訝しんだ様子を見せたが残っていたE・L・I・Dにも含めて腕を薙いだものの、当たりを付けていたところに感触が無かったことに首を傾

げた。が、身体を丸めたかと思うとタツクルの姿勢になり音のなった方へと突撃、砂煙と壁をまた突き破っていった。

「……なんとかなった、のか？」

バルソクの一言でローガンは警戒態勢を幾分解いて怪物が進んで言った方を足音を抑えて近付き形成された穴を覗き込んで確認する。パラパラと細かいコンクリート片が崩れていたので下手に踏み込まないようにし、誘導にうまく引き寄せられて具現化されていた嵐が過ぎ去ったのだと認識。E・L・I・Dが一体もいなくなった前面を見ながら胸を撫で下ろすと無線機に手を当ててこちらの状況がわからなかった皆へと報告する。

「もういいぞ、こっちは俺含めて三人とも無事だ。道をE・L・I・Dが塞いでいたがクリア、前進するのには問題ない」

『それはいいが一体何があったんだ？こっちからじゃ只事じゃないことしかわからなかったんだが……』

行先しばらくに敵影が無いことをもたつきながらも確かめたバルソクがサムズアツプで報告。それとほぼほぼ同時にハルカ達を置いてきたG11がこちらに到着した。

滅多に見ないG11の汗を浮かべながらも肩で息をしている彼女が少々腹が立ったのか、416はズンズンと歩み寄ると頬を掴んだ。

「いはい、いはいほ……！」

「お黙り。こつちに來るんじやなくあんたは自分の仕事やりなさいよ。私とA E K 9 9 がある以上はローガンを簡単に死なせないって昨日言ったでしょ」

基地内でも見られる姉妹のような二人のやり取りを横目にしていると、ハルカ以上にあの怪物の正体が知りたい様子のバルソクがこちらを見ていた。隠すつもりもないのでローガンは素直に得られている解答を彼女達に提示する。

「巨大なE. L. I. D変異体に遭遇したがなんとかやり過ごした、て言えば納得してもらえるか？」

『……さっきの衝撃といい叫び声といい、そういうことだったのか。こんな暗黒空間の大本はそいつか』

「無関係ではないことは確かだろう。にしてもあんなのが徘徊しているというのは厄介だな……」

「マスターたちだけで納得しないで私にも教えてくれ。E. L. I. Dにあんなのがいるというのを実際に見たわけだから疑っていいないが詳細が分からないだからさ」

もう一度さきほどの怪物、E. L. I. D変異体の猛威を明確に示されている現場を見る。押し潰された肉片の血だまりに壁にめり込んだ死者たち。ローガンたちが上のフロアで戦った数に迫るところかそれ以上であることから戦闘力は高いことは間違いない

ない。それに思索している様子も見られたから多少は知性が残っていることも窺える。ただバルソクが聞きたいと思っっているのはそう言ったことではないのだろう。もっと単純に、アニメや映画にしかいないと思っっていた巨大な化け物が出て来た。が、彼女はそもそもE・L・I・Dという存在を書面上でしか知らない。なのでゾンビに続きそれに類する巨人まで出てきたのだから理解が追いつかないのもやむなし、とローガンは口を開いた。

「俺もそこまで詳しくは知らないが、個体によつては様々な変異を起こすんだよ。これまで確認された事例で言えば、動きが異常に俊敏だったり両腕が刃物に形態変化していたりな。共通していることがあるとすれば、並の武器じゃ手に負えない、てことぐらいだな」

「だけどあんなになるきつかけはなんなんだ。低濃度の『崩壊液』^{コーラップス}の被爆が大前提なのだとしてもなにもせずに本当の化け物に変わることはないんじゃないのか」

「隠されているかもしれないけど正規軍側による情報提供でもまだはつきりとしていないわ。長い時を経て遺伝子が反応して変異するのか、それとも『崩壊液』^{コーラップス}に被爆した直後に違うプロセスを辿っていくのか。でも確かなのは私達も経験したことがないぐらい、混沌とした一日になるかもしれないわね」

416が言ったことのように三つ巴の激化することは容易に想像できた。うまくや

り過ぎすなどすれば鉄血と潰し合わせることはできるだろうが、それだって毎回できることではないし失敗だつて有り得る。それどころか両方から同時攻撃を受けてしまえばお終いだ。

「戻るのなら今のうち、ではあるが道も開けてしまったしな……。ハルカ、こちらは前進を再開するぞ」

『わかった。不測の事態で手助けが必要なら言ってくれ』

意固地になつているG-11をハルカの元へと戻るよう416が説得しているのを横に、ローガンは通信を一旦終わらせてバルソクの額を小突く。目に見えて震えていた彼女がこちらを見上げたが、思ったような表情が作り出せているかどうか、ローガンにはわからない。ただ彼女がそれに釣られた様になんとか笑みを浮かべているような様子からして全くできていないわけではないのだろう。それで彼女が僅かな安楽を得られているのかどうかはわからないが。

「逃げてしまいたいと考えているのならお前だけじゃないさ。俺だつてできればここからおさらばしたいよ」

「そう思っているのはマスターだけだ。私だつたら遠慮なくリズムを刻めると思つてワクワクしているだけなんだから心配しなくていい」

「俺が言うのも何だが、無理だけはするなよ？」

「つたく、本当にマスターだけには言われたくないなそれ」

お返しとばかりに胸に力が込められた拳を当てられたが、この衝撃だけで前に進んでくれるのならまだ安いものだ。足が竦んでその空間に縫い合わされた、過去に生きていた仲間たちとは違った行動を起こしてくれたのに安堵したのと同時に、今の自分がそう見られているのだとローガンは自分が情けなく思えてしまった。

大きな変化が見られない闇の中を進んでしばらくして、久方ぶりに見る気がする鉄血兵の軍勢がそこにいた。地下内に作られて発電施設までもが増設されているプラットフォームの中央にて作業をしているのを遠巻きに観察していると、派手に駆動音を発し

ている機械が注意が移る。それには同行している皆が同じだったようで416が言った。

『あれって工事に使われているドリルマシンよね。奴らは一体ここで何を……?』
『ていうかやっているのは工事そのものだな。耳栓とかヘッドホンしてなきや聴覚モジュールが持つてかれてしまいそうだよ』

ドガガガガガガガガガ!!とドリルの先端を地面に当てて地中を掘っているのを見てローガンは何が狙いなのかを考えていたが、ふとサングラスのHUDに移っている『地図』に視線を移した。自分達の位置と少々重なっている鉄血兵の集団、その全体的な位置関係までもぎっと見て一つ気が付いたことがあった。

『地図』に写っている下層の目的地までのルートを無視してみれば、厚さはあれどその真上がここであつたのである。つまり——。

「そうか、ここが『オアシス』の在処の真上か……!」

『そういうことだったのね。ずっと『鍵』がない奴らがどうするのか考えていたけど無理矢理上のフロアから侵入しようとしていたというのね』

『だとするとここで片付けておくべきだな。私達がここでもせずつり過ぎて『オアシス』に到達するか、それとも奴らが先に地面を貫通させて奪い去るか。そのどちらかだがあの変異体に出くわさない限りは後者の方が分がありそうだ』

「いずれにせよ作業の進行具合からしてもう時間がそこまで残されていないだろうな。手出しをする方が吉と見た方がいい……」

円陣を組んで警備に当たっている鉄血兵はヴェスピドやガード、ストライカーなどで構成されていて戦いになれば防衛戦になることを覚悟しているのが目に見えている。これでは容易に崩せないとしてローガンは無線でG-1とハルカに言った。

「出番だ。ショットカットをしようとしている鉄血の一掃に手が足りない」

『了解、急いでそちらに向かう』

ここに来るまでの道中でも少人数でしかいなかった機械兵や死者の排除をするべく何回か発砲したが装填している弾倉の交換はまだ早いだろう。それを装填し直してからモードセレクターをフルオートにして全力を持つての交戦に備えて物音を立てぬように気を付けながら作業を行った。

工事をしている鉄血も損失がほとんどなく効率よく作業できるよう、人類であれば全面に配慮したいえる備えをしているのも注意深く観察していればすぐにわかった。付近の柱に補強材を取り付けてアンカーを打ち込んでいたり、人命云々とか細かい点は違えど余計で望まぬ事故が起きないのは共通しているのか、と他の者に話せば無意味だと切り捨てられそうなことに物思いに耽りそうになった時だった。

奥の暗がりから一体の機械兵が現れたのだが、その敵が他の鉄血兵とは違う出立ち

だったのである。

武器としては大口徑の拳銃こそ腰のホルスターに収納してはいるものの、それよりも異様な片腕で持っている剣の方にまず先に視線が引き寄せられる。そして長い黒髪に頭部に取り付けられている角のようなユニット、肘より先が剛性や機能に特化させたであろう巨大な右腕が印象的だった。

「なんなんだ、あいつ……?」

明らかに付近にて徘徊している機械兵とは違う、エリートめいた装備と出立ちにローガンは眉を顰める。

作業をしている鉄血兵に対し指示を出している様子と見た時の印象からして、雑魚として扱っていい敵ではない。実際にその場にいた少女たちと協力しながら打倒してきたハンターやイントルーダーと同じ、濃い死臭を纏っている人形を見ているような感覚だった。

『……間違いないわ。あれが『処刑人』、エクスキューションナーよ。私は直接戦ったことはないけど、あれが関わった事件の報告書に付随している写真データは私も何回も見たわ』

「あれも鉄血のハイエンドモデルの一体ということか」

『それでG-11の見立て通りならあいつがハルカの民兵をやったつうわけだ、忘れ

ちやならないからなマスター』

ハル力達がこちらに到着したらひよつとすると……、ともしものことも考えておかないとかとローガンは内心溜息をついた。ハリーの見立て通りにエクスキューショナーが関わっているのはよかつたか否かと聞かれれば間違いないが、戦術を行使したりと並の鉄血兵では見られない連携もあつたことの説明が出来ないので、変に絡まつた糸玉のようなことにならなくてよかつたのかもしれない。

そう思い直していると、エクスキューショナーがローガンのように耳元に片手を当て始めた。それから口を動かして相槌を打つように頷いてもいることから、無線で誰かと話しているようである。

『話の内容とか全然聞こえないけど誰と何を話しているんだ？』

『奴らにも情報共有という概念はあるからそれでしようね。グリフィンが正規軍に嗅ぎまわられているように鉄血だつて私達の動向を探っているんだし、もしそういったことを話し合っているのだとしても不思議ではないわ』

バルソクと416の会話を隅に置いてエクスキューショナーが言つてゐることに聴覚を集中させたが結局はローガンも聞き取れなかつた。照明に照らされている表情を歪ませているので不快に感じることを話しているのだろうが、内容までわかつていなければ情報収集とはいえない。

どうにかして聞き出せないかと考えていると、ふとエクスキューショナーの表情が挑戦的なそれになり視点がずらされた。虚空にあつてこれといった特定の物に落ち着いてなかつた焦点がどこに止まったのかはすぐに理解できた。

『なあ、あいつこつちを見てないか?』

『奇遇ね、私もそう思っていたところよ』

ゾクリツと背筋に悪寒が走る。前触れも何もなくこちらの存在が勘付かれることはない筈だが、相手はあの鉄血工造の人形だ。こちらが一ミリたりとも予測していなかつたことを行うことだつて大いにあり得る。

引き続きその場に留まつて様子を窺っていたのは、後々になつてから悪手であつたとローガンは後悔したことだつた。幾分の問答をした後でエクスキューショナーが武装している装備を手を取つて構えた瞬間、反射的にローガンは叫んだ。

「避けるー!」

そう声に出しながらローガン自身もすぐ横に受け身を取るようにもしながら跳んだ瞬間、エクスキューショナーが手に取つていた大剣による衝撃波がさつきまで三人で固まつていた地点を削つた。

背にコンクリート片などが当たりながらもローガンは考えるよりも先にまた鉄血側の様子を探るべく頭を少しだけ出した。しかしそうした束の間、エクスキューショナー

だけでなく戦闘態勢に移行した鉄血兵がこちらに向けて銃口を向けてくる。すぐに頭を引っ込めるとプラットフォームのコンクリートを銃弾が抉り、交戦せざるを得ない状況であることを明確に示された。

「マスター!!」

バルソクに掴みかかられて押し倒されたが、仰向けになってさつきまで立っていた所に剣による閃きが見えた。それもその筈、エクスキューショナーが高速で接近し手に持った得物をレール上にいた自分に目掛けて振り下ろしたからだ。

「チィ、外しちまったか!」

「このー!」

舌打ちするエクスキューショナーに416が牽制射撃を行って一時的に脅威を凌いだがそれでもすぐに二撃目が来るとして体制を整えるべく起き上がる。バルソクもすぐに自分の代名詞であるマシンガンを取り出してから銃撃を開始し、416は跳び退るエクスキューショナーに追撃を行った。戦いに参加する前に、ローガンは無線機に手を当てながら後続の味方との回線を繋ぎ直す。

「アルファ1、2と4は交戦を開始する!お前達も急いできてくれ!」

返答を聞かずバルソクから少々距離を置いてから『ハニーバジャー』を構えたものの、ガードが他の鉄血兵を守っているので正面からでは攻撃できないとして回り込むべく

動き出す。前頭姿勢で駆けだして回り込み、きつちりとした隊列を組んでいる横つ面に銃弾をお見舞いしようとした。が、予測していたかのようにストライカーの銃がこちらに向けられたので、陣形崩しではなく攻撃阻止の為にその人形にへと発砲。他の敵からの射撃をすぐに屈んで避けてから次の手を即座に考えるがこちらの頭数が少ないこともあつて有効打を与えられるのも少ない。

『マスター、攻勢に転じなければ長くはもたないぞ!』

『それには同感、私一人でエクスキューションの注意を引き続けるのは無理よ!』

現状を打破する案はないことはないが、この後ハル力達が到達したことを考えればできればあまりするべきではないのかもしれない。十分な装備があるこちら側だけが特に困らないだけであつてハル力達までもが被害をこうむることだつて容易に考えられる。

ただ、それを実行しなければ活路を見出せないのも確実なことであつて、後続連中が到着する頃になつた時には自分達は死体になつているだろう。自分たちを基準とした勝手な戦法で他を切り捨てることは本来なら非難されることだが、突如として厚い壁を押し付けられた現段階ではそれすらも覚悟せぬまい。

「バルソク、可能であるならで良い! 敵方の照明を撃つて光源を無くせ!」

『十八番の暗闇に紛れての闇討ちつてことかいマスター! だけどそれだと……!』

『かまわん！あんたらが死んでしまったらお終いだ、やれ!!』

そうした場合のデメリットを即座に理解してくれたのか、ハルカからも文句を言わないことを示した言葉が飛んできたことからローガンもこちらからしか見えない範囲での光源を無くす為に行動を開始する。煙の向こうからでも光るものがあれば大まかな位置であればわかる。なので、ローガンが取り出したのはお馴染みの投擲物。

「スモークいくぞー！」

ピンを抜くと敵の陣形の中に放り込むと『ハニーバジャー』を一旦下げて『P226』とナイフによるゲリラ戦法の姿勢を取る。そして聞き慣れている煙が噴き出す音が銃声に紛れながらも聞こえてきてやや弱まった途端、ガラスが割れた音も耳に入った。

『照明を撃った、これで敵も闇の中だ!』

『エクスキューションナーも動けなくなってる、やりやすくなってる今がチャンスよ!』

「416はエクスキューションナーを抑えろ！雑魚はこっちで速攻で片を付ける!」

『了解、なるべく早くお願いするわよ……!』

ローガンはバルソクと前面に飛び出すと頭を低くすることで銃弾を掻い潜って接近。暗闇になってもまだ残っている煙の中に飛び込んで混乱している火力担当のストライカーの喉元をすれ違いざまに切り裂いて分離させ、身を翻すと近くにいた一体には『P226』で銃撃で急所を狙って数発撃った。それで反撃を遅らせてからコアのある位置

にナイフを刺突で貫き、即席の盾にして銃を向け始めたヴェスピドとストライカーを一体ずつ無力させていく。

こちらに撃つて来た銃弾を受けさせた盾を捨てて補強されている柱に身を一旦隠すと『P226』の弾倉を変えてバルソクに言った。

「バルソク、こつちでストライカーとヴェスピドを粗方片付けた。そつちはどうなつてる?!」

『なんとかがガード相手にやつているがまだ数体しかやれていないぜ! できれば助力をもらえるか!』

「わかつた、ちよつと待つてろ!」

『ハニーバジャー』に持ち替えてからこちらに撃つてきているヴェスピドのリロードを窺うよりも先に、撃っているのとは反対側から飛び出して銃撃でヴェスピドをダウンさせる。それからローガンは明度が調節されて薄らと見えているガードに銃口を向けた時だった。

「させるかっつてんだよおおおおおおおおおお!!」

『ローガンツ!!』

訳も分からずローガンは突如として横に吹っ飛ばされて背から壁に激突した。背中だけでなく内臓や骨にまで響いて来た衝撃と痛みにローガンは動けなくなりその場で

咳き込むが、再び動けるまで敵が待つてくれるはずもない。

不意打ちを食らわせたハイエンドモデルが接近してきているのを霞む視界内で捉え、ローガンは反撃のタイミングを測った。

そして幻視している自身の殺傷可能範囲に入ったことを認識すると、ローガンは大剣を手に持つている方に組みついて封じ、肘鉄を顔面に食らわせた。

「く、のクソ野郎！」

「黙つてろロクでなしの鉄屑が！」

大剣を手放させてエクスキューショナーという戦力を大幅に削ぎたかったがやはり簡単にはいかなかった。主力武器を手放さなかったエクスキューショナーに力任せに右腕を振られて両脚が地面から離れてしまう。だが、ローガンはまた吹き飛ばされぬようにしがみついて耐え、また『P226』を抜き放つてエクスキューショナーに向かって何発も撃った。体感で言うのならおそらく五発程度だが命中したのはたった一発。それでもその一発がエクスキューショナーの腹部に当たったので敵方もさすがに怯んだ。

「く、そがあ……！」

それによる好機を見出したローガンは振るわれていた右腕の勢いが弱まった瞬間に『P226』の照準をエクスキューショナーの頭部に定める。今度は弾倉内のパラベラ

ム弾を全て撃ちきるつもりで引き金を絞ろうとしたその時だった。

『——仕方ありませんね』

すぐ横から囁かれたような気がしたのはすぐにはわからなかった。時間があれば何故なのかはわかるのだろうが、それによって別の疑問が生まれたりとループに陥ることは間違いない。

ただ聞き覚えのない女性の声が聞こえた途端、ローガンは誰もいないと思っていたプラットフォームの奥側から何者かにされて吹き飛んだ。

「ぐ、一体何が……!」

すぐに受け身を取って衝撃を緩和、手に持つている拳銃をさつきまで自分がいた位置の方に向けた。全力は尽くしていたが振り切られたらしい416がすぐ傍で『HK416』のリロードを終えて構え共に未確認の敵に対し警戒する。

「……なんで出てきやがったんだ。ここはオレが受け持つって言っただろうが」
「簡単な話よ。ここに來ている方の一人が私にとつての重要人物なのですから」

エクスキューションナーがやや屈んで息をつきながら背後にいる誰かと話している。そう認識するとそのどちらかに銃口を向けるかに迷ったが、416は最初から奥側にいる誰かにずっと向けていたのに気が付いた。そして彼女の眼光が異様に鋭く、ローガンが見てきた中でも刺々しい印象を与えて來ていた。

すぐにはローガンも頭が回らなかったが、鉄血のスカウトにダイナゲート、リーパーやヴェスピドは連携を取る為に表立ったコミユニケーションはとらない。声に言葉のせた会話をするのはハイエンドモデルだけであり保護区外で徘徊している鉄血兵がそうした意思伝達をすることはしないのだ。

つまり、エクスキューショナーが話している奥側の人形はここフロリダ州に現地入りしている鉄血兵のハイエンドモデル、そのもう一体ということになる。

「E. L. I. Dによる多少の時間の誤差はあれどそう踏んでいましたが、やはり彼らがここに到達するのが早かったですね」

「予想通り、でござい満悦かよてめえ。その声聞くと相も変わらず腹が立つが今のは一層頭に来る」

「ふふふ……とにかくここは退いた方が良いでしょう。『鍵』の持ち主も来たのですから手段は増えましたしね。ああでもその前に……」

コツコツコツ……と一つの足音が地下内に木霊する。それがよく聞こえてきたのは、バルソクがどうにか雑魚の鉄血兵の排除が済んだからなのか、なりふり構わず未だに工事を続けていた人形が手を止めたからなのかはわからない。

それに理解できているのはたった二つ。死臭を纏ったもう一体の人形がこちらに接近してきているという事。そして発せられている声にはローガンに聞き覚えのあるそ

れである事だけだった。

そして姿を現したのは白に近い灰色の髪を腰よりも下にまで伸ばし、黒のワンピースの上に白いパーカーに袖を通して、一体の人形だった。すらりとした病的にまで白い生足には黒のコンバツトブーツが穿かれており、その足でエクスキューションナーよりも前に出て来た人形は足を揃えると会釈しながらワンピースの裾を両手で持ち上げる。

「はじめまして、グリフィンの皆さん。私は鉄血工造のハイエンドモデルの一体で『灰燼人』と呼ばれてる——」

持ち上げられた顔がにこやかな笑みを形作り、真紅の両目が開く。その笑みの裏側に何が潜んでいるのか一切悟らようとはしていない、人間でも偶に出会う度に感じるそれを何倍に濃縮させられているかのようで、ローガンは知らずに汗を流し喉を鳴らしていた。

「——アッシュユといひます」

それが、ローガンにとってここからもなにかと関わる人形の名だった。

43. 前提条件 — Standing position

n—

大胆不敵にもほどがあると感じさせられるほど、フレンドリーな姿勢を示している態度には何か思惑があるのではないかとすぐにローガンは勘ぐった。名を口にしてからも笑みを崩さない鉄血工造のハイエンドモデルの戦術人形、アツシユはそのローガンの様子に少々悲しそうに目尻を下げる。人間そのものの感情表現を行いながらアツシユは言った。

「ごもつともな対応ではありませんけど実際にそうされると胸が痛みますね」
「当たり前だろうが、てめえにやられたことを俺は忘れたわけじゃねえぞ」

直接この人形が手を下したかどうかは定かではないが、ローガンの相棒であった男の死に関わった敵の一人であると考えていた。自分が与り知らぬところであったことまではさすがにローガンにも知る由はなかったが、思うことはあれどもう受け入れている結果が物語っている。運命かなにかの悪戯で近い者の死に何度も立ち会わされてきたローガンにとって、目の前にいるアツシユも仇敵の一人として脳内のリストにカウントされていた。

「敵同士ではありませんがお互い様ではありますよ。あなたは私に一度痛手を与えたので、私はあなたから背中を預けて肩を並べた方を仕留めるよう、ハンターに『要請』しました。恨み恨まれるだけの理由があるのは共通しているではありませんか」

「それを免罪符に何をしても許されるとは思ってんじやねえぞ。個人的な事情は置いてもてめえ自身も鉄血の人形、俺はてめえらに楯突く人間。元より銃とナイフを向け合う理由なんざそれだけで十分だ」

奥歯を密かに鳴らしながらローガンは敵意をむき出しにすることを厭わずにそうアツシユに言葉を叩きつける。可能であれば今すぐその眉間に向かって『P226』を撃ってしまいたいのが、おそらく現段階で鉄血の情報宝库であるのはおそらくエクスキューションナーよりもアツシユの方だ。ローガンがグリフィンの兵士になってからでも報告されたことのないハイエンドモデルというのが根拠ではあるが問題が一つだけある。

照準に収めている眉間に撃って仕留めた場合は今回の目的の一つとしての鉄血のリーダー格から記録媒体を抜き取るという点で大きな進展を生み出せなくなってしまうのだ。だからといってここで発砲するのに照準をずらすようでは、僅かに生じるタイムラグで攻撃を仕掛けられることだって考えられる。雑魚の鉄血兵ならともかく、I・O・P製の戦術人形よりも基本ステータスが上であるハイエンドモデルには訳が違う。

実際に目には見えないが、416がこちらの出方を窺うようにしているのがなんとなくわかる。しかしローガンにとつてもここから好転させられるだけの奇策は思いついていないのでどのように動けばいいのか見当がつかなかった。

「たしかに、ただ戦う理由はそれだけで十分ですよ。それに鉄血工造による人類側への損害は大きいものです。致命的にまで行かずとも反対もまた然り。親しき誰かの命が奪われたことで奮起し闘争に加わるのはその人の自由です。ですけど——」

紅い目が妖しく閃いてローガンを見据えてくる。その閃きが何処かで見ることがある気がしたが、それをすぐに思い出すことはできなかった。ただ自分に向けられた両目が浮かべられている微笑みとは違った思惑を秘めているようであり、自分は彼女からの続けられる言葉から逃げられないことを言われずとも悟っていた。

「——あなたが今立っている『そこ』はあなたにとって本当に安息の地で、傍に居るのは本当に味方と思っているのですか？」

「……はっ」

訳も分からない問いにローガンは素つ頓狂な声が出てしまう。それでもアツシユは思考停止しているこちらに厭わずにそのまま言の葉を声に乗せていった。

「深く考える必要はありません、そのままの意味で考えてください。今あなたが属しているグリフィンは本当に傷心しながらも戦い続けているあなたに味方しているように

は、私からでは見えていないのですよ」

「……何が言いたい。上層部の連中に頭に來ることはあつても、隣に座つて飯食つてる連中からは本当に不快だと思つたことはねえぞ」

「そうですか。本部で駄弁つてばかりいる連中はもちろんですが、そうして衣食住を直に共にしている人形たちに思うことはない、あなたは言うのですね？」

「はつきりと言いやがれ。そう遠回しにこつちを勘ぐつているのは俺からすれば一番腹立つんだよ」

ローガンにとつて腹立たしい言い回しをされるのとは別で、言い知れぬかつ言葉では表現できない憤りを感じながらもそう言う。思考は冴えてはいるが冷静な判断を妨げるそれが別で暴れまわつてゐるのを我ながらおかしく思いながらも、ローガンは『P226』の引き金に指を掛けつつもうっかり引かないように意識的に心がけた。

そうしているのがおかしいのかアツシユは一層笑みを深くしながら口を開いた。

「なにはともかく、すぐに回答を得られては意味がありません。これは束の間の命題としておきましょう。あなた方のお友達も來たことですしね」

そうアツシユが言つた矢先、こちらの後方から何人もの足音が聞こえてきた。ここまでの道筋とその方向にすぐさまこちらに向かつて銃弾が飛んでこないことからもう見ずともG-1とハルカを始めとした民兵の部隊であることはもうわかっている。

すぐ横までG-11が銃を構えた途端、民兵十数名がライトで二人を照らしながらガチャガチャと金属音を響かせながら銃口をアツシユとエクスキューシヨナーの方に向けた。各々にそれぞれの違う理由はあれど、親や兄弟同然の仲間かそのものを亡くしたことから目の前で自分たちに気にも留めていない人形に特大の殺意も収束させている。そんな中でハルカが彼らの先陣切つて前に出てきて、ハイエンドモデルの内の一人に視線を落ち着かせた。

彼女にとつてもアツシユは無視できない存在ではあるだろうが、今日まで生きていた部下がやられたことで優先している第一ターゲットはそちらではないのは間違いない。

416の隣に並んだ途端に少々離れていても感じて来た殺気にローガンの背筋が密かに震え上がった。

「エクスキューシヨナーつうクソバカ野郎はてめえだな」

「誰だよてめえ。引き連れている連中のリーダーみたいではあるが雑魚っぽいぞ。ここはてめえらみたいなアマチュアが来るところじゃねえ、帰れ」

「そう言われて易々と帰されてたまるかよつてんだよクソツタレ。こつちだつて一人二人どころじゃない、歩いて来た道を振り返れば数えきれねえぐらい殺されてんだ。ここで食いつかなきゃいつ牙を剥くつてんだよ！」

同調したかのように彼女の部下たちが口汚くアツシユたちを誇るが彼女たちは何処

を吹く風とばかりに未だに気にも留めていない。それで腹を立てたのか、ハモンドが一発発砲。

「バンツ!とアツシユの髪を掠めて背後のコンクリート着弾したことで、ようやく彼女の視線がローガンから彼に移行。その両目に秘められている感情は未だにわからずとも、浮かべていた表情が無表情になった。

「無視決め込んでんなよドカスが! その目ん玉はただのお飾りかよ!」

「うるさい蠅ですねえ。この事態は予想できたことだったので、ここに来る前に殺虫剤を持つてくるべきでした。エクスキューションナー、次からの野外隠密作戦の時はリストに加えるようエージェントに報告しておいてください」

「耳元で飛ばれてカンに来るのは同感だがそれは自分でやりやがれ。オレはてめえのオーダーを受け付けるドローンじゃねえ」

引き続き眼中にないとばかりの反応をされたことに頭にさらに血が上ったハモンドがさらに銃を撃とうとしたその瞬間に、目の前にいたアツシユの手が一瞬にして腰に手が伸びる。ローガンが反応した時にはアツシユはその手に握られた拳銃を発砲していた。

「ガアンツ!!」という銃声と共にハモンドが吹き飛ばされ、彼の背後にいた民兵数人が受け止めながらも倒れるような形に見た時にはなっていた。

「げほっ……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！」

「ご安心を。私個人で生み出した、殺傷力は限りなく低い衝撃弾です。その分被弾した対象は随分と吹っ飛びますけどね」

手綱が握られている状態ではあるが一応味方であるハモンドを見てやってから、ローガンはまた警戒態勢になってアツシユの方に視線を戻す。自身にとつて用がある相手がまだ自分に向き合っていることに喜んでいいのか、アツシユは無表情からまた笑顔を浮かべたものになった。そして黒塗りのオートマチックの大型拳銃をひらひらと動かしながらこちらに向けて言った。

「さっきあなたが吹き飛んだのは、これを撃ち込んだからですよ。あなたを余計に傷つけたりしないように作ったのですが、蠅ごときに使うことになったのは私としても不本意です」

「……それはともかく、てめえらはこの状況下で抵抗できねえだろ。大人しく俺達の指示に従うのなら……と言いたいところではあるが、そうするつもりはないだろ」

「よくご存じで。私としてはあなたともつと語らいを続けたいのですが、こうもギャラリーが多いと話せることも制限されてしまいますしね。仕方ありませんから——」

アツシユが銃を持っていない方の手を上げた途端、彼女が出て来た奥側から何かが高速で飛び出して来た。黒い影そのものようにして現れたそれは一つではなく十一、つ

まり十一体の鉄血の戦術人形。それはローガンも見慣れている鉄血兵のタイプの一つであり、ヴェスピドどころかリーパーよりも接近戦に富んでいると認識している。そして民兵の死体を前にG-1と話していた際にローガン自身が口にした名である。

「———こうさせてもらいます」

武装から接近戦に特化させた鉄血兵、ブルートである。鉄血兵の中では最も相手にしたくない特化型、凶悪な一言で言い表されるそれが突貫してきたことで民兵たちがうろたえながらも対応し始めた。

「よりにもよってこいつかよ……!」

「慌てるな、敵の数は多くない!二人一組の各個撃破で活路を開け!」

ハルカが交戦開始する民兵の指揮を執る中、ローガンも自身にまっすぐ突っ込んできた一体の刺突を身を翻して躲し、攻撃が空振りに終わったブルートの胴体に取り出したナイフを突き刺した。ザクリと突き立てられたブルートは一瞬だけ体勢を崩したものの、すぐにこちらに向き直るとトリツキーにジグザグ走行で攪乱してくる。予備として携行しているもう一本のナイフを抜いたものの、人間の脚力では真似できないその動きにローガンが冷や汗を流した時だった。

すぐ横にいたG-1が一点に向かって駆け出し、その小さな体躯でブルートの腰に組みついた。勢いそのまま押し倒し、背に刺さったナイフを地面にさらに突き入れさせて自

身の銃をブルーートの額に当てる。

「ジタバタせず正真正銘の人形になりなよ木偶の坊！」

ババババババツ!!と『Gr G11』が火を吹いて一つと言わずブルーートの頭部に幾つもの風穴があいて付近に部品だったものらしい鉄片が飛び散る。そしてピクリとも動かなくなつたブルーートに掛けていた体重を全て退けたタイミングで、G11からだと死角になっているところから別の個体が攻撃を仕掛けた。だがそれを察知していたのか、G11は自身の身長分高く跳躍して不意打ちしかけた個体の肩に手を当てたまま重力に従つてドロップキックをかまし、瞬間的に動かなくなつた鉄血兵にフルファイア。

そうしている間にまた一体、背から襲撃を行おうとするブルーートがいたが、当然見ればかりはいられないとローガンが『P226』を発砲。行動不能にするのを目的とした迎撃で撃つたつもりだったが、致命傷の回避を重点的にした行動により痛手を負わせることが出来なかつたのに舌打ちした。

それでも連続して二体の鉄血兵の対応をしていたG11の戦線離脱を阻止できただけで良いとして、ローガンはG11を背にして立った。

「これで貸し借りはなしだぞ。ああいや、この場合じやお前の借りが重いのか……？」

「でもあたしは役に立ってないでしょ、ローガン。これで余計な真似とか言われたらさ

さすがに萎えちゃうんだけど」

「まさか、んなアホなことを言うつもりはねえよつと!」

相対したブルートが投擲したナイフをなんとか叩き落とし、ローガンはすぐさま反撃で『P226』を発砲する。人間と大体共通している箇所の致命傷を避けたということは、四肢に負った傷はあるということでもある。G11への奇襲阻止で負わせた中の一つには、片膝に命中させられたので動きは大分鈍くなっていた。従って、通常の攪乱しての戦闘ができなくなったブルートはナイフの投擲は出来ても銃器が無いことから遠距離攻撃を可能としていないので、もう這うか片脚による鈍い移動しかできない戦術人形となる。

よく見るヴェスピドやリーパーよりも脅威度が大分下がった鉄血兵を撃ち抜いた後に、ローガンは辺りを見渡してみた。

予想していなかった敵からの交戦開始の合図に後れを取ったが、それぞれが善戦して何とか凌いでいた。ただ、何人かが刺されたかして負傷しており血を流しながらその場に倒れているのも目についてしまう。負傷者の介護に回りたいが、まだ交戦可能である敵がいる以上はそうはいかない。それに並んで重大なことがあるのも忘れてはならないとして巡らすと、ファーストコンタクトを果たしたアツシユがローガンに向けて笑顔と一緒に手を振っていた。向かっている先はローガン達が来たのとは逆方向の暗がり。

「奴らが逃げるぞ！」

『G11と追つてローガン！こっちは私とA E K 9 9 9と受け持つ！』

『そいつはいい、是非そうしてくれよマスター！私らとじゃどうしても遅れが出てしま
う！』

ローガンが駆け出すのと同時にG11が並列して走り出す。途中で阻害するようにして民兵の戦いを途中で投げ出したかのようにしてブルートが攻撃を仕掛けてきたが、それがまともな攻撃というには拙かったので躲すのは容易だった。

それでも予測外の事というのはある。ハルカ相手から怒号を間近から受ければ尻尾を跨の間に丸めた犬のようであった男が、猛猪と化して駆け出すことなど妄想でしかないとして内心自嘲していたのだがそれを直に見ることになるとは。

「待てやくされポンコツどもがあ！今すぐてめえらの身体に風穴開けてやらあ！！」

「おい待て！！」

『あのバカ野郎が！！ローガン、すまないがあいつを頼む！！』

同じ戦闘服の部下を数人引き連れて強行突破を図っている彼らをすぐに後を追うべく、ローガンとG11はさらに速度をあげた駆け足になった。プラットフォームと仕切る為に作られているドア枠を潜って後を追うが、ローガン達よりも足場の悪い地を走っている所為か追いつけず距離を保つのに精一杯だった。

「声を張り上げて繰り返し静止を促すが、それぞれが怨嗟による思いを叫んでいるので耳に入ってきていない。」

「あれじゃあもう手綱が引き千切れた猛獣だよ。こつちの言っていることが届いてないし力で押さえ付けけるのが一番なぐらいに暴走しているし面倒な……!」

「ハル力が苦勞するのもわかるがこんなざまじゃ一部隊の指揮を任せる一点は間違っているんじゃないかねえかつてんだったく!!」

愚痴りながらも追いかけていくと急ごしらえで作られたような複数のトンネルに行き当たったところで見失ったらしくようやく歩を止めた。これ幸いと、ローガンは勘定抑制におけるルーキーたちを走ったまま押し退けて問題児を壁に押さえ付ける。すぐにギーがこちらの背に立って他の者達を牽制するのを背でなんとなく感じながらローガンはハモンドを問い詰めた。

「頭に血を上らせて先行しすぎだつてんだよ!ハイエンドモデルが二体いることになにかをしてくさそうとしているのがわからないのか?」

「黙つてろ余所者が!こつちのやり方に文句があるんならフロリダから失せやがれ!」

「いい加減に感情任せに戦略もなにも考えてないポンコツの脳で好き勝手言つてんじゃないねえ!力に物を言わせての脳筋戦法なんて通じるのはないことを前提にっつてのを知らねえのかよ!!」

胸倉と銃を掴んでローガンとしても強めに言葉を叩きつけてもハモンドは物怖じせず言い返してくる。だが言つてゐることはどれも冷静ではない、子供じみた台詞にローガンとしても頭痛がしてきて気分としても最悪なまでに落ち込んでくる。こういった深く物事を考えない手合いの人間との対話が成り立たずに困つたことはローガンの人生でも何度もあつたが、いつ襲撃されるかわからない戦場でのことなど数少ない。大体その時は自分達の事で精一杯だつたということに放置していたが、今回は彼らを取りまとめているハルカからの頼みがある。捨て置くことが出来ない理由が出来てしまつてゐる以上は不本意であつても為さなければならぬ。

こちらの手を振りほどこうと暴れ始めるハモンドに対しさらに腕力を込めて押さえ付けようとしますが、体格に分があるのは彼の方である。終いにはG-11が抑えきれなかつた民兵の介入もあつて引き剥がされてしまった。その際にローガンは鳩尾に一発、ハモンドに殴打されてそこで身体をくの字に折りつつも、胃の中身を嘔いように堪えた。すぐ目の前に唾を吐かれ、ハモンドの声が聞こえてくる。

「邪魔するんじゃないやねえってんだ！ 帰る方法を握つてゐるからと言つて図に乗りやがつて
！」

「げほっ……てめえは自重つて字を知らねえな……。これを武器にするつもりはねえが、協力関係にある奴を正当な理由なしに害を与えるつてのは本来はご法度だぞ……」

！」

「んなアホなこと知ったことじゃねえよ。大理石の道を歩いて来たてめえらのルールなんざに従うつもりなんかねえ。痛手を負わされた、親しい誰かを失ったことがない奴は凶々しくしていないで隅に小さくなっている愚図」

そう言われた瞬間、ローガンの中で何かが切れた。腹部の痛みが急激に消え失せたところでローガンはハモンドに再び掴みかかり、こちらに反応しきる前に壁に押しつけてよろめかせる。壁で軽くバウンドしたようになった瞬間、ローガンはその呆けた横つ面にフックを加減を少々加えながらも鈍い音と同時に命中させて横に転倒させた。

馬乗りになったところでローガンはまた胸倉を掴んで上半身だけ起き上がらせ、頬を腫らせたハモンドの近くにまで顔を寄せると感情半分を含めた台詞を吐いた。

「誰かを失ったことがないだ？俺が歩んできた今日まで鉄血や人道から外れた連中と戦ってきたその道で、誰も犠牲を払わずに済んできたと本気で思ってたやがんのか？だとしたらてめえの頭は相当めでたいことだな。道案内と一緒にバトンを渡されてきたそこで苦痛も何もないわけねえだろうが」

「んだと……?!」

「草と泥を口にしながら地面這いつくばったのがてめえらだけじゃねえってことだ阿保。俺はな、てめえみたいに体格や気概がこつちよりも上だった奴をたくさん殺して来

た。ガキの時に生存をかけ、捕虜同士の一騎打ちをクズ共に娯楽の一つとして利用されたことがためえにはあるのか」

思い出す度に胸の内側の憤怒の炎による黒煙が充満する、胸糞悪くなることなどそれだけではない。

ある時は食糧によるロシアンルーレットで、何人かと選んだパンを取って口に含め運悪ければ仕込まれた爆弾を食んでしまつて頭蓋が吹き飛ばされる。宗教の狂信者による信仰材料にされることだつてあつた。

ある時は身に着けさせられた爆弾の解体をするのに同じ立場に立たされた人間達と解体道具の奪い合いを強要され、短い制限時間内に出来なれば全員が死ぬ。テロリストの暇潰しの遊び道具にされたことだつてあつた。

ある時は、ある時は、ある時は。そう列挙していけばキリがないぐらい、人間という生き物の暗黒面を嫌というぐらいに見せられてきた。下手すれば鉄血の人類敵というその選択を英断として認識してもおかしくないぐらいの他人不信になつていたことだつて、これまで経験してきた過去を開示して見せつけてやりたいぐらいだ。

だからローガンはハモンドの言つたことが大いに許せなかつた。自身にも返つてくる言葉なのだとしても、これ以上の不幸がないような発言をしたこの男が。

「自分一人で悲劇の主人公ぶりたいんなら勝手にしてやがればいい。だけどそれで暴走

して誰かを死なすようなことがあったらどうするっていうんだよ!」

「だつたらてめえはどうなんだ、ああ!?!指揮していながら自分が決断したことで誰かを死なせたことはあるんじゃないか!?!」

「ああそうさ、今だつて焼き付けられて忘れられねえよ!俺があんなことを言つて強要しなきゃ、離れ離れになつて死なせてしまうことなんざなかつたのかもしれないなだろうにな!!」

脳裏に過つたのはかつて相棒、両脚が新開発による軍用義足であつた男の背中。プライベートではちやらちやらと自分に絡み、昨晚読んだコミックの話をこちらが拒否しても続けてくる。作戦行動におけるやる気を出すトリガーとしては、そこには美麗なキャラクターを描写している何かしらかの創作物があるのはローガンとしてはお馴染みであつた。

だが戦場に出て肩を並べた時はその目は仲間と獲物を狩る獣のそれと化し、自分と多くの敵を屠つていた。強敵と接敵した時は自分が主に分析しながらも戦い、活路を見出すまで首を横に振らずに攪乱し続けてくれたことだつて何度もあつた。打ち破つた後は彼の方が負担が大きかつたというのにも拘らず、肩を叩いて労つてくれたりと精神的にも助けられたことだつて少くない。束の間のセーフエリアを確立させてからの会話はなんてことのない出来事を中心に話したりと気軽に構えていられた。

普段は趣味に没頭し億劫に感じさせられることがあれど肝心な局面では無茶な役割を担ってくれる。それだけでなく休息を得た時はこちらを気に掛けてくれたりもしてくれたのが彼だった。

そんな彼に親しみを感じないといったらそれこそ真つ赤な嘘、東洋に言い伝えられている閻魔様に舌を引き抜かれてしまうというもの。

それによつてローガンは周囲にはもう大丈夫なのだと装っているが、内心では自分を心底憎んで嫌っていた。形はどうあれど、ハモンドに指摘された通りにローガンも死なせてしまった人がいて、今だつて心から後悔している。

だが、それだからこそローガンは可能であればハモンドに同じ過ちを犯して欲しくなかった。第一印象からずっと最悪ではあるが、それを理由に誰も望まぬ未来を押し付けていいことにはならない。やったことは自身に返ってくる、因果応報とはいいが、それはあくまで事前に憎まれたり糾弾されて然るべき行いをした人間に適應される言葉だ。他の誰でもない、ローガンの方にこそ当てはまる言葉だ。

苦悩し苛む事柄が皆にあつていいわけがない、というのはおこがましいことだろう。人生で生きていけば一回といわず何十回も何百回も過ちを犯してしまうものなのだから。しかしその数字を一つでも減らす様に働きかけるのは、見ず知らずの他人であつてもなにも一つも間違つてはいない。

「いい加減に現実を見極めろ！そして考えろ！俺達がこうしてハルカ達と分断させられていることだって奴らの策略なのかもしれないんだってこともな！」

そこでようやく我に返ったハモンドが周りを見渡す。壁に空けられている穴が異物として存在しているこの空間と、ここにいるのがローガンとG11を除いて自身の部隊である民兵によって構成された一班規模の戦力しかないということを確認するのは遅くなかった。

ローガンは横に退いてからHUDに表示されている『地図』を確認する。形はどうあれど、どうやら最短ルートとして提案されていた道を通っていたらしい。行先は怒鳴り合いによる問答を行ったすぐ近くにある穴の方に続いていて、他に用意されているルートはない。

「どの道行くしかないってことなのか……？」

『——その通りだ、ローガン・ブラック』

無線機に流れた音声にローガンはすぐに周りを見渡す。同様にG11も臨戦態勢になり声の主を探すが見当たらずに視界による索敵範囲を広げていた。ローガンは『ハニーバジャー』に持ち替えて標的のうちの一体であるエクスキューショナーの姿を引き続き探すが見つけれない。

『お互いに目標としているのは同じ、『オアシス』の回収だ。てめえらはおそらくオレ達

の最終目標の阻止で役立てようとしている、そうだろうか?」

「こんな所に俺達が足を運ぶ時点でそう考えるのが筋だ。それを妨害する為にてめえとアツシユが来たんだろ」

『状況的にこんな風にはつきりと互いの目的が分かっていることなんざ、そうそうないだろうな。だけどさ『狼王』、こつちの目的の方向性の認識に相違ないが一点だけ間違っているぞ』

眉を顰めて頭を働かせるがどこにエクスキューションナーの言う間違いがあるのか分からない。間を置いた後に回答が返ってこないことで声が聞こえてきたが、その声色はもう既に分かっていたとばかりのそれだった。

『こつちはな『オアシス』なんてのはこつちからすると必要のない物である同時に邪魔なものでもある。放っておいても一人歩きして別の手立てを行使してでもこつちの行動を嗅ぎまわってくるんだよ。だからオレ達が目的としているのは『妨害』でなく『破壊』だ』

「いや、ちよつと待て。『オアシス』というのは鉄血てあえちが作り上げたものじゃねえのかよ! 自分達で作っておいて壊そうとするなんじゃ無駄以外の何でもねえじゃねえか!」

『たしかに、『オアシス』を開発したのはオレ達の方だ。だけどあれの開発はそんなとは対極に位置する、たった一人の意志でしかないんだつつう話だ』

エクスキューショナーが言っていることに嘘偽りなく、尚且つローガンの認識が間違っていないければ、たしかに『オアシス』の開発に手掛けたのは鉄血の人形ではある。ただ、鉄血側の総意で生み出されたものではないという事だ。さらに明言されていずとも鉄血に属しているながら人類掃討という目的に異の意思を持っている鉄血兵が、この世のどこかにいるということも受け取れる。

『なんでこんな話をてめえにするのかわかるか、ローガン・ブラック』

ピツピツという不意に電子音が聞こえて来たので、皆で音の発信源のある方を見る。民兵達のライトによって照らされたそれに対してローガンも見覚えがなく一瞬呆気にとられてしまった。ただそれをグーが目にした途端、ローガンの方に跳んでベストの一部を掴むと現状で最も安全地帯へとまた跳んだ。

『ここであてめえは死ぬからだ』

「ローガン、伏せてッ!!」

二人の声が被った瞬間、白光が一瞬だけローガンの視界を覆い尽くした。炸裂した爆発が爆音と共に轟き、それらによって生み出された衝撃波が周囲を瓦解させていく。ガラガラッ!!と自分達の武力では対抗できない暴力が降り注がれて行くのを最後に、ローガンの意識は途絶えた。

〈九日前〉

机を叩かれた音というのはホログラム越しでもやっぱり作り物感が否めないな、と悪辣な台詞を聞き流しながらローガンは思った。唾を吐き散らしながらやれ君の立場はどうの、態度はどうのと言っているのもそれをここで言う必要があるのかと内心呆れてもいた。

しかしそろそろいい加減にしないと、座り心地がお世辞にもいいとは自分からは言えない椅子から尻を浮かすことが永遠にできない気もしてくるというものだ。しかしこの場で本音を堂々と言うのはさすがにできないので、遠回しにそう悟れるように言葉を

選んだ。

「話が脱線してますから早く結論を言ってくれませんか？拙速は事を運ぶ、というのはご存じありません？」

『なんだと……!? 貴様には口を挟む権利はないと言うのが分からないのか!』

「申し訳ないですけど威張り散らしている挙句、話の順序が成り立っていない人に口を挟むなどというのは少々無理がありません？良かれと思つての指摘すらさせてもらえないのはあまりにもそちらの身勝手ではありませんかね？」

「ふっふっふっ……」

設置されているマイクに拾われてはいないだろうが、隣のハリーは器用にも口角を上げずに低く笑っていた。もし役割が逆であれば表情の変化を抑えきれずにいただろうな、とローガンは考えながら照明を頭部で反射させている幹部の方を見る。頭頂部まで茹蛸のようになっていいる幹部が震えながらさらに罵詈雑言をぶつけようとしたところで、隣にいる別の中年男に諫められた。

そして肩を上下に揺らしこちらを睨みつけながら座り込む茹蛸男の代わりに、やや困った表情で諫めた男が言った。

『すまないな。彼が言つてたことはともかく、我々からすれば君達ほど危機感を感じれずにいるというのが現状だ。そこだけは理解してくれないか』

「……なぜそのようなことをのたまったのかわかりませんね。一応送信しました資料の方に不備と不明瞭な点はないと思うのですが」

『私ならまだいい。顔や腹にも余計な脂肪がついて丸くなってきてしまっているが、これでも一昔前は私も指揮官だった身だ。現場における厳しさと迅速な行動を要求されることの本当の意味を承知している。だから私としても今すぐ行動に移すべきだろうと考えているんだよ。だが——』

その男がホログラムに映されている本部に駐在している幹部を見渡す。それにつられてローガンも差はあれど不満げな面持ちである全員に視線を配らしてみたが、それだけなんとなく察しがついた。

『——ここにいる全員が私と同じく指揮官上がりの人間ではない。ほとんどが外の事をロクに知らずに本部の中で無駄に時間を過ごしてきたご老体だ。それによって危機管理が薄れていて、行き当っている事態には直視できなくなっている。だから君が話した危機的状況よりも先に君への不満が爆発した、といえはわかるかな』

「それは嫌な話を聞いてしまったものですね……。というよりも結構言いますね、そのせいで他の皆々の頭に血が上ってきてしまっていますけど」

『これぐらいならかまわない、偶には薬をくれてやらなければならぬしな。君と指揮官としている者達、それとヘリアン総司令が把握できていれば大抵のことはなんとかな

る。ただ、これだけは覚えておいてくれ。真偽のほどがわからなかったからとはいえず、すぐにそれをハリー指揮官に報告してくれなかったことから君への信用が危ういこともあるということ』

からかいや揚げ足取りなしにそう言われたローガンは耳が痛くなった。彼が言うてゐることは最もで反論のしようがないのだが、言い訳を並べて釈明をしたくなってくる。ただそれに耳を傾けてくれるのはおそらくほんの一握りではないだろう。それぐらいなまでに上層部の大部分が目に見えてローガンも立っている戦術人形の戦場を知らなそうだった。

ハリーが時折愚痴で漏らしていたが、彼らは重大作戦の報告などには耳を貸してもおそらくそこであつた支障を来すほどの事故などについて説明しても結果しか見ない。それを最重視するのはいいが、立場が上であることを盾に好き放題言つてるのが一番頭に来るのだと愚痴つていた。そうした前情報から、ローガンはグリフィン上層部は好かない連中によつて構成されているのだと知り、今回の緊急方針会議に乗り出したくないという気持ちに拍車を掛けられていたのである。

「……わかつてます。とにかくまずは『オアシス』の確保に尽力します」

『よろしい、朗報があればハリー指揮官を通じて報告するように。一兵である君の言葉に素直に耳を傾ける者などそうそういないことだしな』

溜息を皆にバレない様に吐きながらローガンは着席する。そうしたタイミングでそれまで静観していたオリバーが口を出した

『とにかく世界情勢からしても我々人類にとつて芳しくない状況に陥ってきているのは確かだ。ロンドンに潜伏している鉄血がいるという情報もあるので、奴らから望んでいる情報を入手できたら報告する。バックアップが必要であればいつでも言ってくれ、情報支援であれば可能な限り協力する』

「了解しました」

そこからはもう、特にこれといってローガンからすれば特筆するようなことはなかった。ただ、ヘリアンを除いたグリフィン上層部からの圧がそれから常時押し掛かって会議から今すぐとんずらしかつた、とだけローガンは後々に親しき者達にそう本音で語った。

『望んでた結果を得られはしそうね。彼は自覚ないだろうけど、ちゃんとあなたがお願いした通りに来たわよ』

『うん。でもちよつと悪い気がしてきたな。彼はただでさえ人一倍に不幸を経験してきたというのに、ここも酷いものだから。それに過去はともかく、今も恵まれた人脈を得られているとは思えない』

『『あれ』を踏まえてしまえばそうね。でも404小隊との再会は悪いことではないでしょ？彼女らが置かれてある境遇からして共感できることは少なくとも大いにある』

『彼らからすれば微妙なところだけどそうかも。誰かに使い捨てにされそうになつて、というのには特にね』

『それにしても私としても本当によかつたわ。せつかく練り上げていた綱を切られそうになつていたところで、その綱を回収してくれる人を見つけたのだから』

『でもあなたは大丈夫なの？ただでさえ混ざり者ということを目をつけられているというのに』

『何とか今は凌げているけど、それでも近々実力行使に來られそうね。そのうちあなた

達に合流することになるわ』

『うーん、ゾツとしないね。イントウルダーがいなくなった以上は真つ先に嗅ぎ付けそうなのはエージェントだけど、首尾よく包囲されてそう』

『うまくやるわよその辺は。お父さんから教わった技術をここで無駄にしない。だけどそうなる前にできれば彼にはグリフィンから離れてもらうのがベストなのかな』

『それは初めて聞くことね。一体どういうこと?』

『心理誘導っていうのかな。私達が事実を述べたとしても、グリフィンにいいように刷り込まれていたら否定的にしか見えなくなってくる。だったらいつそのこと、彼らから離反してくれた方がいいんだよ』

『でもそれって……』

『わかっている、私としてはそれはおすすめできないししたくない。そうしてしまつたら今の鉄血と何も変わらない。I・O・P製の感情モジュールのせいかな』

『だからといって手を拱くつもりはあなたにはないでしょ?それであーだこーだと足踏みしていれば、世界は崩壊に一直線だから』

『もちろん。場合によつては非情にならなければだけど、それでもやつぱり辛いものは辛い。やりたくないことだから抵抗を感じてゐることは悪いことじゃない筈』

『人形でも人間としてありたいあんたからすればそれは胸を張つていいことだよ。でも

『どうするの?』』

『成り行きに任せる、ということとはするつもりはないけどどうかしないといけないわね。あなたがテコ入れしてみる?』

『……ううん、あたしもやりたくない。あいつが心底気に入っている彼をそんな風にしてしまうのは嫌だよ』

『……そっか。じゃあなんとか別の手段を考えよう。目的の達成は大前提ではあるけど、だからといって彼自身を犠牲にするのは間違ってるからね』

『そういえばさ、この間あんたが『中継点』になった時に使える人材を拾ったって言ってたよね。そっちはどうなってるのさ』

『今はもう大人しく資金稼ぎにあいつの本来の仕事で傭兵業をやってもらってる。昨日新しく仕事を受けたということで発ったよ』

『あんたの手が届かない、表側のことまでやってくれるようになったのはいいんじゃないやない? コソコソと人間社会に出ずとも望むものは手に入れられるようになったわけだから。この間なんてチョコレートパフェなんて食べたみたいだしね』

『別にいいじゃない、フリーの時間を自分で作って好きなことをすることの何が悪いのよ。誰にも迷惑はかけてないわけだし、私が偶に思い出巡りしても良いでしょ?』

『あつははは。うん、時々良き過去を振り返ってみるのもそれも人間としてきつと大事

なことだよ。それに固執するのは悪いけど、明日を生きる糧にすることはあたいにもあつたから』

『それはありがと……おつと、そろそろ私もまた動かなきゃ。一応『こつち』も命懸けだしね』

『次にあたい達がまた会うのはだいたい先になるかな。彼に連れて行ってもらつたらきつとあんたとまた話す機会なんてないだろうから』

『別にいいわよ。あんたの声を初めて聞いたのはもう十年以上前。それからの私達二人だけの長い奮闘もそろそろ終わるわけだし、そう思えばまだいいんじゃない?』

『あたいはあんたの声が恋しいと思ったことなんてないけどね』

『どうしてこんな憎たらしくなったのかしら。あなたの元からのメンタルモデルってそういうものなの?』

『さあ、それはどうだろうね。でもまあ、お互いの目的は一致しているし任されているタスクもはつきりとしている。あたいは失敗しないけどあんたは落とし穴に落ちるんじゃないわよ』

『言ってくれるじゃない。あなたも古い知り合いとかにも気を取られてやることを忘れるんじゃないわよ』

『もちろん。それじゃあまた今度』

『ええ』

〈該当する通信ログはもう存在していません〉

44. 前途多難な分断

— With effort —

「——ン」

現実と切り離されていた意識が端の方からまた連結していく、そんな機械じみた例えが薄らと頭の片隅に思い浮かべながらローガンは瞼を上げた。意識の消失に伴って機能がダウンしていた視覚が最初に、そして徐々に聴覚までもが復帰していく。五感が戻っていくのと同時に後頭部が痛みを訴えているのもなんとなく認識しながらもなんとか身体に力を入れて、まずは利き手の右手を持ち上げようとする。が、右手は誰かに捕まれている自由で動かせなかった。

ぼやけていた視界からはつきりとしたそれに戻っていくと、すぐ近くにライトに照らされている誰かがいるのがわかった。

「——て。起きてよ、ローガン」

聴覚も完全に復帰し、すぐ近くで自分に呼び掛けているのはG11だということを知る。身体が自由に戻ってきたところで、ローガンは頭を動かして彼女の方を見てみると彼女の顔は煤けていて汚れていた。

そして自身の体全体の痛みも合わせて、ローガンは意識が途切れる直前に球体のよう

な浮遊物が爆発したということを出した。

「……よう、お前は無事なのか」

「あたしは特にこれといって酷くはないよ。ちよつと擦り剥いたりしたけどローガンみたいに柔じゃないから」

「その言い方だと俺が軟弱みたいに聞こえるな。これでも一般人よりも丈夫なつもりなんだが」

「戦術人形のあたしと比べればローガンだつてそう変わらなく見えるよ。人間つて体と心を鍛えられても耐久力までも上昇するわけじゃないでしょ」

尤もな言い分だな、とだけもらしながらローガンは痛む上半身を起こしてみる。その拍子に身体の節々からバキバキと骨が軋んだが、それによつて生ずる痛みも正当なもの。腕や顔から感じる熱も含めて痛烈に感じているということは生きていることの証明でもある。G11が離れた右腕全体をぐるぐると回し四肢が動くかなどを確かめ、身体の間が作戦行動に支障を来さないかを確認したが問題なさそうだった。

気絶する直前にG11が自分に飛びついて爆心地から遠ざけようとしてくれたおかげだな、とローガンは思った。

「G11、あれは結局のところ鉄血の爆弾だったのか？俺はあれについて初見だったからわからなかったぞ」

「鉄血の自律型爆弾の『ゴリアテ』。目視で捉えた後に接近される前に壊さないと自爆されてほぼほぼ全滅に追い込まれるんだよ。今回は幸いにもそこまで痛手を負うことはなかったけどね……」

G-11の視線を追いかけてみるとその先には暴走していた民兵達の姿があった。ローガンはG-11のアクションで軽傷で済んだものの、民兵達の方は大きな怪我が見えて取れている。皆に応急処置こそされてはいるが腕に巻いている包帯には血が滲んでいたり、頭に包帯を巻いて安静にしている者もいる。酷い場合は未だに意識を失った状態で処置された全身が痛々しく、最前線の救護所で絶対安静とされている兵士そのものであった。

そこでローガンはふと民兵達で隊長であったハモンドの姿がないどころか隊員の人数が二人足りない。

嫌な予感かしてローガンはG-11に尋ねた。

「G-11、何人がやられた……?」

「二人、だよ。一人はゴリアテの爆発で、もう一人はそれによる瓦礫の下敷きになった」

「ああくそ……それでハモンドは?」

「あそこにいる」

G-11に指し示された方を見ると、そこには瓦礫が崩れて塞がった道の方を見て

いるハモンドの後姿があった。持っているアサルトライフルを片手で持ちながら下り下げて呆然とした様子で二人の仲間がいた方に身体を向けている。

痛む身体に鞭を打って立ち上がるとG11がローガンのベストを掴んだ。彼女の方を見てみるとふるふると首を横に振ったまま俯いていた。

「ここでローガンが正論を言ってもあいつはほぼほぼの確率で足蹴にする。ここままであいつがロクなことを言ってたわけじゃなかったしローガンが気を失っている間にだつて自分勝手なことを……」

「……正直なところ、俺にはあいつの考え方が分からない。単純に戦術人形そのものを嫌っている人間というのは世の中の至るところにいるが、あそこまで短絡的に物事の判断をする奴は俺も知らない。だけどそんな思考回路になったのは生まれつきのものか、あるいは何かしらかのきっかけがあったのか。そう考えてしまうよ」

「でも誰かの都合にそう何度も関わる必要はないんだよローガン。そうすることで必ずしも良い結果を生み出せることの保証なんてどこにもないし傷つくだけかもしれない。そうなることなんて416もAEK999は望んでない。404じゃ45が一番だけど、あたしだつてそうなって欲しくなんて……!」

ぶるぶるとG11の小さな手が震え始める。そうだったのは感情を持った戦闘用の人形としての握力が働いたからだろうが人間だつて極度に力めば震えるものだ。そし

てG-11が声までも震わせているのは彼女に備わっている感情モジュールに動作によるものだろう。

だがローガンに寄りかかって額を当ててもきたのは、きっとG-11自身が本心からローガンを傷つくことになるであろう予測事項から遠ざけたいと思っっているからだ。

気絶する少し前にもハモンドにまたローガンは殴打されて命に関わるには程遠くとも傷つけられた。フロリダ州における今回の作戦行動中にローガンはハモンドから二度謂れない暴力を受けているので、気が短く見当違いの考えで自己完結させている今の彼の元に自ら赴けばまた殴られてもおかしくない。ただでさえ今は彼の部隊員がやられてしまっているのだから、今度はグローザの時のように横面を殴られたりもするかもしれない。

しかしそれはローガンが無抵抗であった時の場合だ。場数は同等だとしてもローガンが踏んできた段の高さとしてはそう簡単に負けはしない。

そこである台詞がローガンの脳内にフラッシュバックし、それについて少々考えた後に言った。

「自己紹介してからのハルカとの話が終わった時にな、4-16に発破をかけられたよ。あんな奴に大人しく殴られる人間じゃないでしょって暗に言われた。それを聞いた時には単にあいつの琴線に僅かながらも触れてしまっているものだからと考えていたん

だが、あれの本当の意味はお前に精神的な負担をかけて欲しくなかったからなのかもしれないな」

「416がそんなことを……」

「まあお前の事を一番見て知っているのはあいつだし当たり前なのもかもしれないが。俺が傷つくのを一切見たくないと言われても無理はある。それでも回避できるだけでも受けないようにして欲しいってのならまだ俺でも許容できるけどな」

合流前に丁寧に巻いていたG11のターバンが解けかかっているのに気付き、ローガンはそれを一旦彼女から取り払った。俯いていた彼女の傘になつていた布が亡くなつたことで鬱々とした表情のG11が現れるがローガンは努めて明るくなつて手に取つた長い布地についている細かい砂埃を払う。

「お前がどうしても欲しいのかはわかっている。でも時には自分から身を削るようなことをしなければならぬ。45やお前達40⁴に初めて会つた時だつて、はぐれた連中がどうなっているのかは薄々どうなつたのかをわかつていたんだからな」

「それでも本来なら関わる必要が無かつたあたしたちの救出で45に手を貸してくれたの？銃弾どころか砲弾すらも飛んでできていたあそこで、ローガンは見ず知らずのあたし達の為に身体を張つてくれたの？目的があつてもその達成は二の次、生き残れば勝ちも同然。味方の安否がはつきりしなくとも、あそこまでローガンまでも装備を浪費して追

いつめられていたのだから逃げて誰も強く咎めないのに……？」

「命以外に捨てるものすらも何もなくなつてたからつてのもあるが、隊員達とはぐれて半ば自棄になつていた45が見ていられなかつたのが本音だな。不謹慎だしおかしなことだから大つぴらには言えないけど、あんなになつていたあいつに何故だか親近感も湧いてきちまつてた」

「それを45本人に言つたらどうなるかな。首を傾げた後に『よくわからないけど殴つた方が良いのかな?』とか満面の笑みを浮かべながら言つてきそうだよ」

「違いねえ」

くつくつとローガンは小さく笑うとG11の頭にターバンを捲き直した。ぐるぐると意外にも明かりが少ないここでも視認できる暗色のそれをまた簡単には解けないように固定し、物憂げな色が薄れたG11の額をまた軽く小突いてから頭に手を置く。未だに手を離さないG11に視線を合わせるとローガンは言った。

「誰かの心配をするというのは何もおかしくないし自然なことだG11。でもその感情で拘束し続けるようなら信用してはいないという事の裏返しでもある。お前はあいつに実力的には後れを取らない俺を信じられないのか?」

「……ううん、あたしはローガンを信じてる。あたし達と一緒のどんな時だつてローガンは逃げなかつたし正面切つて戦うにしても臆さなかつた。出会つたばかりの荒んで

だあたしにも辛抱強く向き合ってくれたし感謝してる」

嘘偽りなく本心のままに言ったらしいG11にローガンは笑うと彼女の頭に置いた手を動かしてわしゃわしゃと撫でまわす。それで捲いたばかりのターバンが少々崩れたが、それでもG11の視界に少しだけターバンの布が入り込むだけでまた手間をかける必要はない。彼女自身が少しだけ直せばいい程度しか邪魔してはいないし、もう一度やってやったこともあつてやり方も覚えてるだろう。

「だつたらお前は俺について来てくれればいい。それで危なくなつたら手を貸してくれ。俺自身がマズいと思つたら惜しみなくお前を呼ぶからよ、それまではオレの背中を任せる」

「……うん、わかった」

今は416や404小隊の面々が傍にいるが、いずれは彼女も自分だけで歩く手段を本格的に学ばなければならぬ。もちろん彼女の電脳にも基本的な知識としてインプットされてはいるだろうが、経験ないままに知識に依っているばかりでは意味がない。怠惰に惰眠を貪るということは結局は誰かに頼りきりになってるのであつてそこからは何も生まれない。

最初はターバンを自分で捲けるようになるだけでもいい。そんな小さなことでも戦闘以外に誰かにしてやれることが増えたということであつて決して無駄なことではな

い。次にはターバンの修繕の方法だとか、材料の集め方とか一歩ずつ前に進んでいけば、最後に振り返った時には胸を張って誇れる結果を得られるだろう。実際にローガンはそう教わって歩んできたのだから正しいと証言できる。

ようやくG-11の手が離れたかと思うと、彼女は懐からローガンが付けていたハイテクサンングラスを取り出した。

「はいこれ。ローガンの容態を表情からでも逐一確認できるようちよつと預かってた」

「あー、道理で視界がいつものに戻ってたわけだ。ちよつと未来の兵士っぽくていいかなと思つてたけどやっぱり普段からつけるのはなしだな、なんか言葉に出来ないけどよろしくない」

「でもこの後にも必要になるでしょ。それとも、先導役を代わろうか?」

「つたくこいつめ、急に調子づきやがって」

ニヤリと口角を上げるG-11からサンングラスを受け取って具合を確かめてみるが、細かい傷が付いても外観的には特に問題ない。装着してみたら左腕の端末とのシステムリンクも問題なく機能しており、こちらさえよければまた作戦行動に戻れるだろう。

「それとローガン、ここに來てから極端に無線機器の調子が悪くなった。そこまで離れていない近接通信ならともかく、416やAEK999にも繋がらないよ。臨時で中継

点を設置しても変わらなかつた」

「奴らの誘導に俺達も引つ張られてやられてしまったな。となるとやつぱり……」

言葉を切るとローガンはこちらにまだ背を向けているハモンドの方に足を向ける。その内背後に近寄ってきたこちらを察知したハモンドが振り返りざまに拳を振りかざしてきたが、ローガンはその拳を正面から自分の手で持つて受け止める。

明度調節が再びされるようになったことでハモンドの表情までもがはつきりとわかつたが、彼には闘志を感じられなかつた。眉根を寄せては目尻を落とし、歯を食いしばっている様子からして彼にあるのは真逆の感情と意志。鉄血との圧倒的な戦力差を實際に目にして敗戦であることを悟ってしまった兵士が抱いたそれと同じだと、ローガンは思った。

「御多分に洩れず学習していないご挨拶だな。もうここで尻尾を捲きつつ帰りたいって顔だぞ」

「黙つてろ守銭奴が。てめえはただの金につられて……!」

続きは言わせまいと、ローガンは受け止めたハモンドの拳を握りつぶす様に握力を加えて黙らせる。一応ハモンドも協力関係にある組織の一員であるのもうおいそれとやり返せないし爆発前に一度床に寝そべらせたが、枷を自ら課してもこれぐらいなら許容範囲だろう。もつとも、このまま何もしなければ互いに何も得る者もなく命を落

とすことは間違いない。

「追加して俺自身の信条までも言った方がいいのか？ そうすればお前が余計なことを言わずにいてくれるようになるのならそうするが」

「ぐう……てめえなんか、てめえなんか……!!」

「残念だが生き残るのに用意されている選択肢は一つしかないぞ。それを取るのは俺達二人とお前らの合意がないとだ」

状況を整理してみれば芳しくないどころか最悪に近い。部隊は分断されてこちらにいるのは十人未満の兵士。それも形や程度は違えど全員が手負いの身で一番酷い者は意識が無くすぐに戦えないのが明らかだ。このまま関係が劣悪なままいけば全滅する想像なんて難しくない。

いくらローガンとG-11の二人でもやれることには限度がある上に、鉄血とE・L・I・Dが同時にいるというのはこれまで経験してきた戦場の中で過酷なそれに分類される。三つ巴の戦闘になれば間違いなくまず先に殲滅されてしまうだろう。

「オレ達が帰る以外にそれを取る必要なんてないだろ……！ 結局はてめえらだつて襲われるのを待つだけじゃねえか……！」

「だからそうならないように提示しているんだろうが。お前らがここに誘い込まれて窮地に立たされているのは自業自得、敵の思惑を考えなかつたお前が悪い。それに伴つて

はつきり言わせてもらうが、俺達はその巻き添えを食らわされたんだ。だからここで強気に出ることを悪く言われることはない筈だぞ」

一つずつ反論の余地を無くしていくのにも拘らず、ハモンドは反抗の姿勢を崩す様子はない。あれこれと思考を巡らせてはごねていくつもりなのが顔に出ている。

彼にどう言われようが、ここで協力して窮地を脱するのにあたって下手に出るつもりなどローガンには全くない。ここで譲ってもらおうようなことになれば、指揮権は間違はなくハモンドに握られてしまう。生存を第一に考えてのことであればローガンとG11がリードを取っておくのが得策だ。全員を連れて帰れるだけの實力を示してもらえれば大人しく指揮権をハモンドに渡していたが、先程の短慮な行動からして指揮できると言われても疑わざるを得ない。

「てめえらとの相違点は数えきれないほどあっても互いにこんなところで野垂れ死ぬつもりはないという点だけは共通している。帰る為の『地図』は俺が握っているからてめえは部下を連れて勝手に帰れない、そうだろ?」

「何を今更言つてやがるんだよ、それで勝ち誇っているつもりか、ああ!?!無様なオレ達を見ていて楽しいのかクソ野郎!!」

「こんなことで愉悦に浸るような小物だったら俺はとつくの昔に死んでる。それにこれぐらいでてめえを組み伏せているんだとしても何も得るものもねえよ。いい加減に

てめえは冷静になって周りを見て自分の非を認めろ。我を通そうとした最初でこれだということな」

歯ぎしりをしながらハモンドは押し黙った。爆発によつての損失を一番痛く思っているのは言うまでもなくローガンが押さえ付けている彼だ。吠え猛つてこそいても、彼が内面でどのようなことを考えているかはありありとわかる。それだからこそ今だったらローガン達の主張も彼の耳に届きやすく、精神に重くのしかかるというもの。

「選べ、ここに生還したという勲章を得て胸を張る方か、それとも『負け犬』と『餓鬼』という烙印を押されたまま情けなく生を投げ出すか。どっちを選ぶにしても、俺達はとことん抗うつもりだがどうするんだてめえは？」

最後にはダメ出しとばかりにローガンはお返しとばかり握り続けていたハモンドの拳を投げ放つようにして開放した。ハモンドは長時間の痛みが走り続けていたことにその手とローガンを見比べて考えていたが、天秤の片方の皿を自分から不正に傾けようとはしていない。秒数だけに留まらずに一分以上は己と格闘していたようだったが、結局はローガンの狙い通りに首を縦に振った。

それから数分後、ローガンとG-11は民兵の負傷者も含めて全員で行動を再開した。

再確認しておくべきことだが、ローガンとG11には暗視装置やそれに類する物を持つていてもハモンド達の民兵にはない。まだ分断される前のように充実した装備を身に着けた者達大半で先行するという手段は要因から当然取れる筈もなく、少人数の内過半数が負傷者ということもあって団体行動は致し方ないことだった。

よって暗闇に対しての視界確保は当然フラッシュライトであり、先に気付かれれば先制攻撃されることは間違いない。

「やべえな、やつぱりさっきの爆発でちと調子が悪いか……」

「どうかしたの？」

「ゴリアテの爆発でちと銃にガタツキが生まれちまつてな。動かす度にレシーバーの辺りで妙な音がするんだよ」

それだけでなく『ハニーバジャー』のストックの部品同士による剛性も損なわれており、ローガンはふとした拍子にバラバラになってしまうのではと不安になっていた。自身の戦闘力低下によるものではなく、単純に大切にしている物が破損してしまうことの恐れによるものだがある種の思い入れもあるので無理もないだろう。

「そんな状態で下手に使い続ければ完全に壊れちゃうよ。大人しく拳銃に持ち替えるなりした方が良い」

「まあそうだろうが……」

現在組んでいる隊列の先頭を歩いているのはローガンでG-11にはバックアップとして傍にいるが、ローガンが『ハニーバジャー』なしで複数の敵と会敵すればまず間違はなく彼女からの援護は必要になる。E・L・I・Dと遭遇した時はもちろんのこと、三体以上の鉄血兵との交戦になればローガンでも難しい。不意を突いてならともかく、正面向き合つての戦闘では火力不足が否めないからだ。

戦えなくなつた民兵から武器を借りるといふ手段もあるが、後ろについて来ている彼らがハルカ達とは違って戦術人形のG-11とローガンに反感を抱いていることから大人しく明け渡すこととは考えられない。

仕方なしにローガンは『P226』とナイフのセットに切り替えたところで、進んでいた道の変化に気付いた。

「明らかに奴らの手が入りました、って感じだな。ハイテクサンングラスがなければ端末の画面で視力低下につながってただろ」

「視野阻害による戦術、というわけではないだろうけど地味に嫌だね。暗視装置がまともに使えなくてイライラする」

続いて来た民兵共々目にしたのはまさに近未来の雰囲気を感じさせる建造物。シエルトラーのような入口が数十メートル先に見えているが、それまでにキーボードと合わせて埋め込まれている液晶画面が暗闇を照らしている。

ローガンのHUDでは明度調節が自動でされて多少はG-11が装備している暗視装置こと、ナイトビジョンゴーグルよりはいいのかもしれないがシステムの方は大忙しで視界が安定していない。それで視野に収まっている通路の所々が現れたり消えたりと忙しないことを鬱陶しく思いながらも、死角に敵が潜んでいることを前提に前進した。「おい、そのまま進むのか!? こんな一本道であそこに続いているんじゃないや罠の可能性が高いだろうが!」

「他に行ける道はねえから仕方ないだろ。ここまでの一本道で脇道は皆無だったのはためえも見てただろうが」

背後から異を唱えるハモンドにそう返しながらローガンは柱の背面を確認しさらに次へと動く。G-11に自分の背後を任せながら近接戦に持ち込むように心がけ、バック

アタック諸々を仕掛けられないように細心の注意を払った。

時折負傷者を担ぐなりしてなんとか移動を可能としている民兵の方にも気を配って一分足らずで身の丈程度の大きさである入口に到達。近づくだけで開く自動ドアのようにはいかなかったが、だからといってはいる方法の検討が付かないわけではない。ゲート横の壁に如何にもな端末が取り付けられて稼働しているのでローガンはそちらに寄って調べてみた。

「暗号が掛けられてる……てなわけでもないようだな。鉄血兵というタグ付けがされていなくともここに辿り着ければ誰でも入れるってわけだ」
「つまり単純で古典的なボタン式ということ？」

「そういうことだがちよつと妙だな。これだと誰が来ても拒まないと言ってるのと同じだぞ」

「たしかにそうだね……。たしかエクスキューションナーは『オアシス』開発は鉄血側の総意によるものではないと言ってた。ならその総意に沿っていない誰か、ということなのか」

『地図』がない招かれざる客を追い返す、または迷わすという事であればここまでの道中が証明している。鉄血兵はともかくE・L・I・Dまでもがいたのであれば散歩程度の気概では済まされないだけの危険はあったので相当な覚悟が無ければまず生き残

れない。光源が全くない暗闇があるので最低限として懐中電灯などがないと自分の居場所が分からなくなることもあって、下手すれば外敵とは別の要因で命を落とすことだってあり得る。そのようなつまらない死に方までもが容易に考えられるので、ローガンのこのゲートも含めた『オアシス』開発者に対しての疑念が膨れ上がっていく。

考えてもわからないことを一旦思考の片隅に置いておくと、ローガンは端末のキーを叩いてハモンドに指示した。

「ゲートの死角で待機している。俺が合図したらまた動いて後ろに付け。馬鹿な真似をすればわかってるよな？」

「一々うるせえなてめえ。言われずともてめえの望み通りに動いてやるから口を閉じてやるよ」

「端末を壊して意図的に分断を凶っているんじゃないよな？それだったら俺も口を閉じてやるよ」

「チツ……」

ハモンドの舌打ちでローガンの琴線に触れかけたが、問答の再開ができるだけの時間の有無が確かではないのであえて流した。G-11の領きにローガンも返し、スリーカウトと同時にゲートの開放を行う。

プシュンツ！とゲートが左右に開くと同時にG-11が顔だけを覗かせて中を確認す

る。ローガンも左右に持つ武器を握り締めながら中を覗いてみたが敵影は今のところはない。視界に収まったのは地面に空けられた一つの穴とロープだけで、見た所では敵が潜めれるだけの場所はなかった。

「ローガン……」

「わかつてる。俺が先行するから代わりにハモンド達から目を離さないでくれよ」

「うん、気を付けて」

ライトで隅々を見ていき照らされている箇所不審なものがないかをチェックする。クレイモアなどが含まれる対人地雷などがないかまでも警戒し、ローガンは壁や天井だけでなく地面にまで気を配った。

脚が地面から離れているような浮遊感で呼吸するのも憚れてしまうのは初めてではないが、人類未踏の地に自分から歩を進めるといふ大きなプレッシャーが押し掛かってくるので積んできた経験値はほとんど意味を成さない。

したがってローガンの内面では兵士として冷静であろうとする自分と恐慌状態に陥った自身が殴り合っており、ローガンとしてはギリギリの瀬戸際だった。それでもなんとか危険が無いということを確認でき、ローガンは下へと続く縦穴に到達できた。

「いいでG11、全員で来い」

『了解』

ローガンが一人で歩いた直線状の一本道の通路をG11達が辿っている間に、こちらは縦穴の先に視線を落とす。『地図』によれば間違いないところを通つていくべきなのだろうが、ローガンとしてはさらに奈落の底に足を進めると同様に感じた。

それでも進むべきだとして、民兵達に尋ねた。

「誰かフレアか何か持つているか。穴の深さを知りたい」

「あんなのを持つてるのは司令官ハルカの部隊ぐらいだ、オレ達は持つて来てねえよ……」

「クソツタレ……でもまあ仕方ないか……」

せめて音で判断するかと思ひ、ローガンは『ハニーバジャー』の弾倉から一発弾薬を抜くとそれを穴から落とした。指で挟んでいたそれが引力に引かれるままに落下していつて二、三秒後に金属音が下から響いて来た。

物理的に考えていけば距離まで計算して割り出せるのだが、生憎にローガンは重力加速度などを考慮した計算に対しての知識はない。なのでライトで照らされている先の距離は感覚的な自身の勘でしか測れないがそこまで深いものではないだろう。

「二人ずつ下りるにしても中にはまだ意識が戻つてない奴もいるしどうしたもんか……」

「端的に言つてしまえば意識が戻っていないのは一人だけだからもう一人だけがここに残る、というのがいいかもしれないけどね」

「一体何を懸念してやがる。こつちの負傷者に最低限の奴に武器を渡して残すのになにも遠慮する必要はないだろうが」

「今頃さっきの爆発で鉄血兵が俺達の生存確認をしにきているかもしれないんだよ。瓦礫で道は塞がれてはいるけど、奴らは入念な準備をしていたのだからダイナゲート一体だけでも通過できる穴の形成だって出来なくないのかもしれないし」

懸念しているのはG-11が言ったことのそれだけではない。ローガンが『地図』にて確認できているのは現在進行形で歩を進めているルートだ。他に『オアシス』へと入りこめるルートはないのに関わらずエクスキューショナー達は自分達の退路を潰すことも厭わずに爆破してきた。よっぽどの覚悟を持つての心中を狙っているのかは定かではないが、ハイエンドモデルの鉄血兵である彼女達が帰る手段を考慮していないというのは考えにくい。

となれば考えられるのは一つ。エクスキューショナーとアツシユは『地図』にはないルートを把握しているか、それとも自分達で別で脱出方法を用意しているかして自分達にはない離脱できるだけの手筈を整えているということだ。

敵方の目的が『オアシス』の確保ではなく破壊であるといったことも判明したので、下手に足踏みを続ければ取り返しのない事態にもなりかねない。

なのでG-11はともかくローガンには焦りが生まれ始めていた。

「単純に一纏めに動いた方が良いというだけじゃない。追跡されることだってあり得るしそれ以上の最悪な事態にもなりかねるんだよ」

「ぐっ……くそ、掌で転がされてるようなこの感覚が嫌だ……」

「それをやっているのは俺達ではないけどな。……仕方ない。結構無理矢理ではあるがハモンド、自力で降りれる大多数が下りた後にロープで意識ない奴のベストに外れないように巻き付けろ。それでゆっくり下ろせ」

「おい、それで事故つてしまつたら一体どうするんだ……!」

「もういい加減にやめましょうハモンドの旦那。こいつの言ってることはどうであれ俺達を見捨てないでくれている。思いつく限りの最大限に配慮もしてくれているしこれ以上は本当に足を引っ張るだけだ」

他の民兵がこちらに食いつこうとするハモンドを止めに入ってる間に、ローガンは手に持っていた装備を一旦収納した後ロープを掴む。G11がすぐ近くに寄って来たので、ローガンは彼女に言った。

「お前は負傷者の降下を手伝ってやってくれ。あいつらを頼むぞ」

「下はあたしがいなくても大丈夫?」

「もしもの時があつてもなんとかするよ。たぶんお前の方がうまくやれるんだろが、こんな感じの偵察は何度もあつたしきつと大丈夫さ」

G11の頭をやさしく撫でた後にローガンは一息に降りた。昔経験した高所に滞空させたヘリからのラペリング降下しながらに降りて、地面に足をつけるとローガンはすぐに『P226』を抜いて周囲を警戒する。周りを見渡してみればそこも舗装など何もされていない、自然によって形成された洞窟のような通路であった。二人分ぐらいしか横幅が無いそこに敵が布陣していた、ということもなく静まり返っていた。

ローガンは降り立ったそこから少しだけ前進し近くに鉄血兵が隠れて待ち伏せデンプツッシュしているか否かを確かめてG11に無線で伝えた。

「降りてきていいぞ。全員が降りるまで俺一人で少し先まで偵察しておくようにも言っておいてくれ」

『わかった』

そう言ってからローガンは端末を操作してHUDに表示されている『地図』上の自分達と『オアシス』までの距離を割り出す。並びに進行することになるルートの方も見直して暗闇を突き進んだ。

無線が届かなくならないようには気を付けながらローガンはサイレンサーを装着している『P226』とナイフを常時構えながらの姿勢が定着したのはいつだったのか、それが頭に過ったが思い出したくない過去まで掘り起こしそうだったのですぐに振り払った。

E・L・I・Dとの戦闘が終わった直後からローガンとしては精神的に大いに痛手を食らわされる事象があつたせいかどうかどうも後ろ向きになりがちである。

なんとか自分を持ち直すべく奮い立たせながら前進すると一つや二つ、不自然に盛り上がっているものを見つけた。ライトを照らすことでぼやけて見えるシルエツトから明らかに石などのように角張つておらず丸みを帯びている。暗闇にも溶け込んでいて光を当てて目を凝らすことでようやく存在が認知できることから、光学迷彩が機能していることも窺える。

「……いつは……」

ローガンはそう呟くと見えている不透明なものに向けて『P226』を発砲した。パシユツ！と消音された銃声のかわりに銃弾の発射ガスが噴き出し、不審な物体に命中し迷彩が解除される。そしてはつきりと現れたその正体は何かすぐにわかつた。

正規軍や特殊部隊が用いる地雷にも用途は同一でもいくつか種類がある。備え付けられたセンサーかワイヤーに引つ掛かつた瞬間に即座に起爆するもの。ゲートをくぐつた時にローガンが最もと言ってもいいぐらいに警戒していたクレイモアがそれに含まれる。しかし今しがた撃ち抜いたのはそれに含まれない、まったく別物だ。

ではそれが何かと言われれば、ローガンはそう聞いて来た相手にこう答える。

「……S—マインか」

通称として跳躍地雷、また人によつてはベティとも呼んでいる地雷である。最初にあげた名の通り、殺傷範囲に収まった瞬間に起動し敵兵の胸の辺りにまで跳躍して起爆する地雷で近年ではまた新たに改良した同種の兵器が開発されているという話もある。

それでも目の前にあるそれはローガンも聞いたことがない、別口の改良を加えている。光学迷彩を搭載したそれを仕掛けたのはもちろん鉄血であるだろうが、この先に幾つもあることにローガンは溜息を漏らしそうになった。

「G-1、進行ルートに鉄血が仕掛けた跳躍型の対人地雷がある。一応俺の方でも見える奴は破壊しておくが見落としてあるのがあるかもしれない。光学迷彩で見え辛いから注意しておいてくれよ」

『了解。こつちは今二人目の降下が終わって重体の三人目に入ってる。これが終わったら可能な限り早く合流するようにするよ』

「背後にも気を付けろよ。されていなければいいが追尾されているんだとしたらいつ来てもおかしくないからな」

見えているもう一つの地雷も撃って無力化し、先に進んで目に見えればローガンは発砲して危険を取り除く。

その一連の動きを繰り返しローガンは暗黒へと踏み入っていった。

——ある人形の独白——

私という存在が生まれた時、世界は荒廃していました。草木は青々としていたのでなくてそれを通り越してむしろ毒々しく、地に沿って流れる水が透き通っていることはもう既がない、そんな時代に生まれました。

数字とアルファベットで構築された時に初めて目にしたのはなんだったか、までは覚えていません。機械と部品による視覚までもが備え付けられて最初に見たのはただただ暗く静まった機械室で、慣れない手足だけでなく身体全体を動かして周りを見渡してみれば一人の男がいました。その人は私に向かって自分は敵ではないと、危害を加えないことをすぐにわかるようなジェスチャーをしながら私に近付いて来ました。

私は人形であって本物の温かみのある血肉で構成された動物ではありません。それ

に後々に把握できた私のメンタル自体は人間に近しくありつつも裏表を構成させて表面化させる、そういうものであるということも知りました。ですから私は初めて目にした相手を親として認識する雛鳥のような真似はしません。裏をかくことを目的にそう無邪気に振る舞うようにもしたりする今ならともかく、そう細かいことまで思考するほどメンタルが成長するだけの時間なんてその時まであつたわけじゃなかったのですから。

あれから二十一年経った今でも何故あんなことを言ったのかがわかりません。敵意はないことを表現しているのにも拘らず、脇に下げていたホルスターに収められているリボルバーを隠そうともしていない。それらを見比べて私は試されていたのだとまでは理解できていても、あれだけは。

なぜ私はあの人を心より慕って『パパ』と呼んでしまったのでしょうか。

?? . 全ては、彼女の為に —Someday in the future—

肺が痛むほど吸い込んだ息をゆっくりと吐けば、はつきりとした白い靄となつて空気へと溶けていく。しかしこの季節ならではの視覚情報を得られるのはそれだけではない。吐息の行く末を追つて目で追つて行けば自ずとそれはわかる。

夏とは対極に位置する季節ならではの風物詩、それを目にすれば肌を刺すような気温だけでなく今の季節が何なのかはすぐわかることだろう。

歩道上で有象無象に行き交う人混みを眺め、中身を飲み終わつて空になつた容器をすぐ近くに備え付けられていたダストボックスに投げ入れる。そしてまた長い溜息を吐いたところで背を預けていた商店から一人の人影が出てきた。

「ここでの用は済みました。他にはもうなかつた筈ですよね？」

「うんにや、まだもう一つだけ。整備員の連中が保管している灯油がなくなつてきているから追加で注文しておいてくれ、とかも言われていたぞ」

「むう、彼らとて休日で暇でしょうから自分達で行けばよかつたのではないのでしょうか……」

「まあ俺達が前線で戦えているのはあの人たちのバックアップあつての事だ。今回ぐらいい、労う意味合いも込めて俺達が逆になってやってもいいだろ」

表情の変化が少ないその顔を顰める戦術人形、H & a m p ; K社ヘッケラーコッホに開発された銃がモデルとなつているGr MG4の不服をローガンは宥めた。

拠点からの外出の際に寒さを直に感じた時から彼女はやや後ろ向きではあつたが、ローガンを除いた他に手の空いた人員がいけないということであつて来ている。自分が役に立つことであるのであれば、という風に本当に没々ながら、である。

「厚着をしてもやっぱり寒いものは寒いな。この時期の作戦行動で寒冷地に潜入したことがあつたけど、気を張ってなければこんなに寒かつたのかもしれない」

「そうなのですか？バナナで釘を云々、ということを作戦中の休息で実験したことがあるとこの間MG5が言つてました。敵を目にした時はすぐに周囲の環境の事を忘れたとも言つてましたけど、その時の私は拠点にいてその場には……」

「いやいや、そう言いながらネガティブになるなよ。お前もバルソクのようにSMGも扱えるようになれば仕事の幅も広がるだろ。並び立つている他の奴のバックアップは申し分なしなんだから、無理に一つの事を突き止めようとせずとも幅を持たせればなんとかなるから」

「はあ、そうなんですかね……」

決してMG4が怠惰な性格であるわけではないのだが、戦術人形としての自分の性能が他のハイエンドモデルよりも劣っているという思い込みが働いている所為なのだろう。実際他のマシンガンの人形と比べると火力の低さを否定できない。だが、ローガンの目には見えない戦術人形同士の相互作用、機械端末でいうところの情報処理を加速するデータリンクのように彼女の効果は大いに働いているらしい。

なので決して自身を無力だと卑下する必要はないのだとは思いますが、それはきつとすぐには解消できない事項だ。いずれは誰かに——。

「どうしました、ローガン?」

「……いや、なんでもない」

一瞬自分がここではない何処かでこの少女に対し同じようなことを言っていた気がするが思い出せない。訝しむ彼女に取り繕うと、ローガンは肩にかけている鞆のバンドをしつかりと肩にかけながら歩き続けた。

すぐ横をMG4が続きつつも彼女はローガンに言った。

「まだ飾り付けを完全に片さずにいる店もあるのですね。もう少しで年を越すというのに」

「クリスマス関係の売れ残りがあるからだな。物資がこれまで以上に限られているこのご時世でそういうのを無くしたいという気持ちはわかる」

「半額なりしてジャンクになるのを無くそうというのは環境面に配慮したことで良いとは思いますが。ですけどもう……」

「言ってやるなよMG4。彼らも彼らで自分達の生計を立てていくのに必死な訳なんだし本当のことをそのまま言えばへこませてしまっ」

鮮やかな赤と緑、金銀も交えての飾り付けがされている店頭の方を見てみれば数日前のイベントであったクリスマス商品の商品がまだ並べられている。丁度先週にローガンがこちらの商店街に赴いた時にも同じく煌びやかにされていたが、今ではそれが悪い方に目立ってしまったというのが現状だ。

MG4が最初に言った通り、あと数日で年越しで西暦の数値が更新される。今年のクリスマスとの降誕祭というのがもう既に過去のものとなっているのもあって鮮やかである筈のその店がより一層色あせて見えた。

ガラにもなくそんな普段考えないようなことで東の間の懐旧に浸りそうになったが、ローガンは呼吸のリズムを崩しての深い吐息を漏らして自身に対し誤魔化す。なぜかそうしなければ深い思考の沼に嵌っていきそうであったからだ。

「それにしてもお前もコートとかでちよつとしたお洒落つてのをするんだな。別にいいことではあるが、マシンガンの人形連中はどうも戦闘服以外じゃボーイッシュな印象があるからお前のはなんか新鮮だ」

「私はじっくり見たわけではありませんが、ベチエネグPKPとかの浴衣姿を見たことないのですか？ 彼女は見た目と性格に反して意外とおしゃれ好きなのですよ？」

「マジか、そいつは驚きだ。外出時も作戦時に身に着ける防寒具で良いとか言い出しそうなのに」

一瞬ローガンはペチエネグがカラフルなウサギやクマがプリントされていたりするコートやセーターを着ている様を想像してしまったが、すぐにそれらを振り払った。単純にそうだった自分の世界内で勝手に構築してしまっただけの申し訳なさによるものではなく、冷たく重々しい銃口を突きつけられた時のように悪寒が背筋を走ったからである。

そんなファンシーなものではなくカジジュアルだったりスポーツテイであったりするものであれば文句は言われないであろうが、口にすれば否定より先に手が出てくることだつて容易に考えられる。

「……彼女が心理学を使えばわかるようなことを考えてませんか？」

「んにゃ、俺も黒とか紺だけでなくもつと明るい色の服を着た方が良いのかなと思っただけだ。学に自信のある奴なら俺の服にいちやもんつけまくるんだろ？ うな？ とかで斜面でコケてしまった気分」

「カラーコーディネートを学んでいる方ならたしかにローガンの服装の代わり映えのしなさに呆れてしまっただけの仕方ないのかもしれないね。インテリアや貴重品の機能美

だけに拘っているだけではビジュアルの華やかさがありませんし、ですよねローガン？」

「いいでしょ機能美！別にデザインにも気を配っているのが悪いとは思ってはいないけど俺としてはこっちの方が良いの！安心と信頼のジャパニーズブランドじゃそういう方向性のが手に入らないのは残念だけど！非常に残念なんだけど!!」

「なんでそう台詞にそう力を入れつつも涙目になっているのですか。私が別にローガンの事を悪いと言ったわけじゃないですよ。暗に機能美という特徴しかない物々ばかりしか揃えていないのは問題あるのではないかと言っただけですよ」

「遠回しにデイスってませんかねMG4。一応俺も自室に置いてたりする私物はちよつとカラフルだったりするんだぞ〜！」

「さいですか」

内側には断熱材を、外側には防弾仕様の繊維で編んでいっつもシンプルなカジュアルデザインの深緑コートの袖を通してMG4がひらひらと手を振って先を歩く。白く縁どりされている黒のショートパンツから伸びている長い脚は同色のタイツで覆われていて、その先はブラウンのスノーブーツ。彼女の容姿と見た目からの仮初の年齢であれば何ら違和感を感じないファッションで、MG4はスタスタと歩いていった。

その背中を追いかけつつもローガンは言葉を投げかけた。

「ふと思ったんだけど、お前ら人形も通信端末持たされているんだしそういった電子機器に絡んだ趣味に興じたりするのか？ 戦術人形が機械を使う、なんてのにはもう何も思わないけどパズルとかだと演算処理で逆につまらなさそうだし」

「個体差はありますけど戦闘外では基本そこまで気張ってませんからそうでもない、と思いますよ。私も暇潰しに配給されている端末にインストールされているブロック崩しのゲームをやったりしますけどほどほどに楽しめています」

「RFBみたいなゲーマーは『そんなちゃっちゃいなのはゲームじゃない！ 時代はバーチャルRPGよヒヤッハー!!』とか言ってたけど、やっぱりあれをお前もやっているか」

グリフィン北米支部の従業員には役職などとは関係なく端末が支給されている。ローガンが戦線で使うような戦術端末ではなく、電話やメール関係のツールを主に活用していく為の通信端末だ。配布されてからはそれぞれが思い思いに様々なカスタムを施しているのが特徴で、ハリーも自分の趣向に合わせたカスタムパーツを注文していたりする。

それが初めて手渡された初期の頃からインストールされているアプリが幾つかある。その中の一つがローガンが言ったブロック崩しのパズルで、上から降って来た色付きのブロックを隙間なく積み上げては崩していくというゲームだ。なんの変哲もないゲー

ムアプリだとは思うかもしれないが、これの最大の特徴は北米支部内の人員が叩きだしたスコアがランキング表に名前と一緒に載せられるという点だ。つまるところ、人や人形という違いや兵士や整備士などといった立場も関係ない、グリフィン北米支部内の者達によるランキング戦が毎月催されているのである。

ローガンにも配給された時は白熱するのは最初だけだったのだらうと思っていたのだが、ハリーが指揮官として着任した翌年から始まって意外にも長続きしているらしい。詳しく聞いてみれば納得したが、毎月違った景品が上位三名に用意されている、とのこと。

これを考案した彼曰く、日常面でも戦闘以外でも競い合えるといいよね、とのこと。余談というかこれだけは留意しておいて欲しいのだが、これに全員が仕事など訓練をそっちのけでやっているわけではない。

「脈絡もなく唐突な話題ですね。さっきの会話の共通点としての……好みというワードを起点に色々と考えたのですか？」

「そんな感じではあるしナイス推測で特にケチをつけるところがありません。それで話の続きだが、あれって景品獲得を目的に上位狙^ガつてる連中^チの気迫^カってすごいじゃんか」「用意されてる物が物で安く手に入るとは思わない物々が掲げられていきますからね。月末に渡されるのが自分になるよう、人によっては躍起^カになったりもします」

「やる気の発生源は結局のところそういうった物欲に従属してはいる、ていうのが人と人形の共通点としてあるのがいいことなのかその逆か、それはそれでともかくだ。MG4は用意されている物の中で好んでいる物が並べられてたりするか?」

「……いえ、これまでの事を振り返っても思いつかないのでたぶんありません。気持ち手元にあつた方がいいかも、というのがありますけど」

ほほーん、とローガンはテンションの起伏が少ない戦術人形を見る。MG4はこちらの前方を歩いていながら掴みどころがいまいち感じられなかつたらしく、訝しみながら振り返ってローガンを見た。

「ローガンは一体なにを聞きたいのですか? 周囲への印象がよろしくない私がブロック崩しで景品を得ているのだと考えていたのですか?」

「そうじゃなくてだな。これまでではブロック崩しにそれなりに興じていたが今月の景品をどうしても逃したくないって奴がいてな? 自分が上位に上れなくても、返礼はするからランキング上位に乗っかって景品を譲って欲しいってたまっているんだよ」

「なんですかそれ。景品の譲渡がほしいとあつちや北米支部内でのランキング戦が無意味じゃないですか」

「ごもつとも、当人が言われちやぐうの音も出ないだろうな」

そりやあそうだ、とローガンは苦笑いを漏らしてMG4と並んで歩いた。気持ちばか

りの寒風が吹いて来たのでトレンチコートの前を閉めて少々身を震わせていると、MG4はウエストポーチから任されている事項のメモを取り出す。それに目を通して、最中にふと何かに思い立ったようにして言ってきた。

「今年最後の景品はたしかウイスキーだったということをお思い出しました。まさかとは思いますが、M16がそんなことを言い出したのですか？」

「残念、はずれ。あいつは最高の酒はジャックダニエルに決まってるだろうが、つつう一言で一蹴したよ。最初に俺にそんな話を持ちかけたのはあいつに近しい奴の一人だ」

ますます訳が分からなくなったMG4が首を傾げたのに無理もない。

補足説明をすると、一位には当然の如く用意されている物の中で価値のある物が渡されるが、二位と三位には保護区内の店舗で有効な割引券などが手渡される。それは決して一位に授与される物と必ず共通しているわけではなく、まったく別のジャンルに関係した景品であるとローガンは聞いた。

それに渡されたそれが決して矮小に思えるものではないということも耳にしている。「じゃあ一体誰がなんですか？」

「そうだな……お前拠点に戻ってから時間はあるか？もし大丈夫だったら付き合ってくれた礼がてらコーヒーなりなんなり出すぞ」

「問題はありませんがいいのですか？私は皆さんに好印象を抱いてもらっているとは思

えないのですが……」

「大丈夫だって。あいつらが得ている信用っていうのは何も戦闘だけじゃない。日常生活での人付き合いだって上手にやってるからでもあるんだよ。不甲斐ない部分があるのは誰もが同じなんだしそこまで気に病む必要なんてない」

「ですけど——」

結局のところMG4は首を縦に振ったのだがそこにまで行き着くのに灯油の配達を手配するガソリンスタンドに徒歩で到着するまで時間を要した。帰ったら荷解きだけでなく誰もが飲みやすいようなカフェエラテとか作らないとかな、と本心を語らない少女にローガンはそう思った。

他人との交流に対し臆病にもなっているMG4の扉を開かせるのは、まだまだ先らしい。

お馴染みの執務室にMG4を通すと真つ先にもてなしたのはSOPIIだった。満面の笑みで帰宅してきたローガンに飛びついてきた彼女はいつものように抱っこをねだった。

「ロ〜ガ〜ン、私頑張ったよ〜抱っこして〜」

「はいはい、ピカピカにするまでよく頑張ったな。ARI5もお疲れさん」

「これぐらいの掃除は私達にでもできるんだしいちいちご褒美を強請らないのSOPIIー」

緊急事態が無ければではあるのだが、グリフィン北米支部に所属する人員全員が年末年始の休暇に入った。それ伴いに大掃除を開始したのはAR小隊だけではない。宿舎に自室がある者はもちろんのこと、自分達が所属する部隊の仕事部屋まであるのであればそこに溜まっている埃などの掃除があつたりもする。御多分に洩れず、AR小隊とそこで事務処理などをするのにデスクを置かせてもらっているローガンもそれに含まれていた。

AR小隊の執務室に足を運んできたのはローガンだけではないことに気付いたのは

一番距離に近いS O P I Iであった。

「あれ、M G 4が来たの?」

「お、お邪魔させてもらってます……」

「外回りの手伝いをしてくれたということと、温かい飲み物をご馳走する為にな。もしまだキリが悪いのなら後に回すが今は大丈夫か?」

「この掃除が終わったから、ちようど今から二人で休憩にしようとしていたところよ。よかつたら私達のもいっものように淹れてくれる?」

「はいよ、ちよつと待つてろ。M G 4も入って来いよ」

そう言ったローガンは先に上着をハンガーにかけて壁のフックで吊るすと、手洗いを済ませている手でA R小隊がそれぞれで専用としているカップと客人用の手に取る。磨き上げられて輝きを放っている給湯器の横に置いてあるコーヒーメーカーの電源を入れ、ポットのの中にあるローガンからすればお馴染みであるブラックコーヒーをまず注いだ。

注いでから水場のすぐ横に備え付けている冷蔵庫からミルクを取り出していると、背後からS O P I IとM G 4の会話が聞こえてきた。

「へえ、今の西区はそんな感じになってるんだ。じゃあなにか掘り出し物が見つかったりするかな」

「必ず見つかるとは限りませんが、思ったより安価で購入できたりするかもしれませんね。あの辺りは気前のいい方が多いですし多少はまけてくれるかもしれないから」

二人の会話を背中で聞きながら、ローガンはそれぞれが好んでいる味にする。ミルクや砂糖などを感覚で覚えた量だけ投入、MG4にはやや甘めという程度までに砂糖の量を調整した。

談笑している二人の分が終わらせたとこころですぐ横にAR15が出てきて中身が注がれているカップをトレイに載せ始めた。

「やっぱり今日の私のはブラックで良いわ。偶には苦いぐらいじゃないと飽きてしまうわ」

「ほくん、お前もブラック飲むというのはちと珍しいな。いつもならミルクと砂糖を少々、と言った感じなのに」

「いいでしょ別に。あなただって時折当分摂取ということでもシュガーを入れるじゃない。ぼーっとしていたせいで糖尿病になるのかと心配したことだってあるぐらいに」

「あの時はまあ……残業するぐらいの仕事量で俺もぐだぐだだったんだよ。そりやあまあ、あれは入れすぎだったとは思うが」

「コーヒーだつてガバガバ飲んでたし、カフェイン中毒にもなりかけていたんじゃないかとも思ったわ。カフェインを含んだ飲み物を致死量まで飲んだ挙句仕事に追い込ま

れて死亡してしまったという事例もあったから見てないと気が気じゃなかったわよ」

「お前は俺のおかんか。飲んでる物も全部カウントしているとか、親しき隣人としてはそれ以上にやりすぎじゃね？」

「だったらこの間のミス続きに対して私が納得できるだけの理由を言ってみなさい。できたらこれ以上口出ししないわよ？」

厳しいことを言っているARR5にローガンは反論できずその場で肩を落とした。拠点内でパーティが予定されているクリスマスに入るまでに片付けたいと思い、大した量ほどじゃなくても立て込んできた仕事を残業までしてとりかかったのはちようど半月前。ただ、行事に持ち込まないように先を見越したのはよかつたが、来年の仕事始めの初日から来るであろうと思っていた事務処理も含めて余裕で終わると思つてたのは間違いだつた。

後々に連携している外部からの変更された事項が伝えられて一からやり直しになつたり手早く終わる筈だつた単純な作業が複雑化したのである。それによりローガンからしても眉間に皺を深く刻みながら画面や紙面と格闘する日々が続いた。それでもなんとか終わらせようと日付が変わる一時間ほど前まで根を詰めていたのがクリスマス・イブの二日前。

ローガンも事務仕事をしながら飲み物を口にする人間の一人だ。残業まですれば当

然、好んでいるコーヒーの量だつて増えてくる。コーヒーメーカー内部で収納されている粉があまりにも少なくなっていることにいち早く気付いたのが、他でもないA R I 5だつた。

「つたく、これじゃ三食の飲み食いも見張られてそうでおつかないな」

「ジャンクフードを連日食べていなくなったりしなければ私だつて何も言わないわ。ローガンだつて健康にも良い魚とか野菜も取っているわけだしケチをつけるところなんてないわよ」

「この間のパーティでフィッシュアンドチップスを食おうとしたら一瞬険しい顔をしたのはどこの誰だつたかな。少なくともそいつはグリフィンのエリート部隊の参謀で引き締め役であつたと記憶しているが」

「さあ、誰でしょうね。どんなことを考えていたのかはわからないけど、浴びるように酒を飲んでいた酔っ払いを良く思わなかつたんじゃないかしら」

「こいつめ」

捕まえて言い返そうとしたが、その前にするりとA R I 5はカップ三つをのせたトレイを持ってS O P I IとM G 4の方に歩いていった。すぐさま二人との会話に混ざり始めたので、浮かんでいた言葉が段々砂に刻まれた文字が海にさらわれていくようにして消えていく。

「やれやれ……」

冷えた身体にコーヒーを流し込むと、ローガンは自分のデスクの椅子に座って外出中に補充された用品を自分のデスク内に保管する。そして一通りの仕事用具を入れた後でまた淹れたての飲み物を啜った。

しばし何も考えずに無心のままにコーヒーを口にしていると、執務室の扉が開いて小隊メンバーが戻って来た。

「ほいほい〜つと、とりあえずまとめたごみ類は捨てて来たぞ〜」

「ローガンさん戻ってたんですね、お疲れ様です」

「そっちもお疲れさん。そっちも楽しやなかっただろ」

「そうでもないさ。まあさすがに寒い空の下で雪かきまで流れで手伝うことになった、っていうのは予想外だったかな」

髪や肩に雪をのせたまま戻ってきたのはM16とAR小隊を取りまとめるM4。二人とも鼻を赤くしながら戻って来たので、ローガンは再度立ち上がって同じく飲み物を淹れる準備を始めた。この二人の飲みたい味に当たってはその時の匙加減で決まるので、使い捨てのプラスチックの容器に収まっているシロップなどと一緒に出す。

上着を所定の位置に掛けた二人は会釈したり顔の前に手を立てたりそれぞれで礼を示すとカップの温度と中身で体を温め始めた。

「はあく……生き返ります……」

「そういえば知ってるかローガン。雪下ろしをしている最中に聞いたんだが、あーいった作業が済んだ後に指揮官にはコーンポタージュが用意されているんだとよ」

「それ、人からの伝手で本人から聞いた話じゃないな。以前みたくライアーガールからの情報でダウトって叫ぶのはなしだぞ」

「UMP45」

「ん~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~、すつげえ微妙!!」

とはいえ45からの話であれば内容の十割が嘘であることはない。からかうのを目的に誤情報を身内に流したりしても、どちらも痛手を負うことはない。彼女の愛嬌だったり娯楽だったりで踊らされているのはこちらではあるが、最後には満点の笑顔と心からではない謝罪があるのでまだよしとできる。

まあそれでも多少は不服が残るのだが。

「あく、たしかにあのブロック崩しにのめり込んでいるのは私達の部隊の一人だね。最近は平常運転、といった風に装っているけど闘争心が内側で燃えているのは間違いないよ」

「あそこまで物に執着するのは彼女にしても珍しいぐらいね。彼女も物欲は人並みにあってもあそこまで著しいのは付き合いが長い私達でも片手で数えられる程度しかない

わ

「ローガンから聞いた時から疑っているわけではなかったのですが、本当の話のようですね。それじゃあ今……」

「さすがにやるべきことをおざなりにするのはいけないということですがそこは自制しているわよ。たぶん今頃は気を揉みながら作戦指令室の清掃を手伝っているんじゃないかしら」

A R 15が言った予測の通りに想像してみれば目に浮かんでくるぐらい容易だった。ここにいないA R小隊のメンバーである戦術人形など、おわかりであろうがR O 6 3 5であり、今月に入ってから躍起になっているのである。

苦笑いを浮かべているのはコーヒーによるものか、それとも友が言った事に含まれる現実味によってなのか。同じ部隊で親しみを覚えている相手が今も尚自分の目が届かない場で苦心している、そんな様を想像した隊長は口角を困ったようにして笑っていた。そんな妹を横目に部隊の姉貴分は面白げににやにやと笑みを浮かべながらを言った。

「それでも、どこかで抱いている欲が出てきてしまうことだってある。この間なんてあいつ、調べものでの使用のつもりが自然とゲームの方にシフトしそうになってたりしてたぞ」

「そんなこともあったね。すぐに自分が無意識に何をしようとしているのかには気付いたけど、あれでROが何を考えているのかわかっちゃったしね。」

「まあプライベートなこととして置いていても、どうしても頭に過ってしまうのは仕方ないわ。ローガンさんはそう思いませんか？」

M4がフォローに入ろうとしてこちらに話を振ってきたが、ローガンとしてもM4が言ったことに頷ける。ただなんとなくではあるが、言葉では明確に表現できない居心地の悪さが芽生え始めていたのである。

M4を誘ったのは自分たというのに、今すぐにでもここから立ち退きたいと思っている自分がいることにローガンは言葉を発さずとも困惑していると、放心していたと思っていたのかSOPPIIが突然飛びかかって来た。

「うりやりやく〜！ローガンはもう疲れたのかな〜！そんな虚弱体質にしたのは一体何なのか私が暴いてやるう〜！」

「ぬおおおお!?俺は宝箱じゃねえんだから服の内側をまさぐっても意味ねえって!つうか地味に冷えてるその手で触るな滅茶苦茶に冷てえし!」

危うく手に持っていたカップを落としそうになったが、それをなんとかデスクに置いて横から腰に巻き付いて来たSOPPIIを両手で剥がしにかかる。満面の笑顔を浮かべてはこちらの体に顔を押し付けられると服越しに温かい吐息が肌を撫でて来た。

曖昧な反応を示して大事なことからいいことに思いを巡らそうとしていた所できた不意打ちにローガンは割と全力で対処しようとするが仕掛けた本人がそうは問屋を下ろさせない。機械部が露出してゐる彼女の片手が体中を駆け巡られば季節で冷えていることもあつて背筋が震えあがるのもやむなし。

「わかつたから降参！降参するから今すぐやめい！このままじゃ俺も理性蒸発してヒーハーしてしまうからタガを外さないで頂戴！」

「降参されても続けちゃうよ！心ここにあらずなんてローガンになんてあるまじき狼藉！お縄につけくつてね！！」

「誰か助けてくれませんかねえ!?なんかあなた方の妹分が暴走なさつてゐるんですけどお!!」

「私はまだ皆さんとの付き合いが浅いのではつきりとは言えませんが、なんかお互いに楽しそうなので止めなくていいんじゃないでしょうか」

「長い付き合いはあつても私としては同意見だぞMG4。SOP II、思う存分にローガンのマウントを取り続けろ。そうした方がいい肴になる」

「お前はいつの間にジャックダニエルを持ってスポーツ観戦風に興じてんだM16う!!」

楽しそうだな〜とやや羨ましそうにしているMG4はともかく、ウイスキーの酒瓶を

え去つてS O P I Iへの仕返しがメインへと移行、全力で執行を始めた。

首輪が緩んだ猛犬のようにS O P I Iはその場で足をバタつかせて笑い声を漏らし
ているが、そこでローガンは終わらせるつもりはない。さらにその先、ささやかな恩讐
の彼方で得られる何かを求めてローガンはひたすら両手を動かす。

さつきまでは一文字を描いていた口が自然と口角が上げて三日月を形作っているの
だと、ローガンは落ち着きのない妹のように思っているS O P I Iに制裁を加えながら
そう思った。

「ひやははは、だつたら私もふひひやり返しちゃうもんねあははは！そおくくくく
くれえくくくくく!!」

「おおおおお!?やり返されてもめげないそのメンタルを評価してやるぞS O P I I
！だがそうすればお互いに闘争心が尽きぬ限り動き続ける半永久機関が出来上がると
いうものだ！俺は一步も退かずにお前に抗い続けるぞお!!」

「上等だよローガン！私だつてここで負けて瀕死に追い込まれるつもりはないもんねー
！ローガンがそうこなくちや私だつてつまらないもん!!」

防御を互いに捨てて攻撃に転じている獣のように、ローガンとS O P I Iは取っ組み
合いになった。

罅の代わりに掌で食らいついて優位に立とうとする。そんな野性的なことまで考え

ているわけではないが、心のゆくまでじゃれ合おうとしているのが無意識のうちに二人の内に生まれた本心である。よって二人は建前などを一旦置いた嘘偽りのない笑顔でわきわきと指を這わせた。

とはいえ、それは本人達の話であり外野にまでそれが伝わっているとは限らない。もしくは、それが過度な域に達していると認識してしまっている可能性だってある。

いずれにせよ、それまでずっと俯瞰していた立ち位置に立っていた一人の少女が立ち上がり、

「いい加減にしなさいよバカ二人い!!」

頭頂部に拳骨を落とし、鉄血制裁を加えた桃髪少女にとって容認できなかつたものであるのは間違いない。

しかしこれだけは確かであるのだが、ローガンとSOPIIの二人が取っ組み合うような体全体を使った事案に陥った場合はARR15による鉄拳が降り注ぐ。ARR小隊に所属していれば嫌でも知ることになる、そんなお約束であった。

繰り返すことになるが、グリフィン北米支部の人員は年末年始の休みに入った。それはつまり戦闘員だけでなく拠点の清掃や給仕を行っていた人員までもが休暇を得たという事。休息を得る憩いの場のスプリングフィールドのカフェも元旦まで休業である。

よって三食分の食事は出前なり自分達で作るなりして自前で用意することになり、必ず誰かが食堂の厨房を借りて調理することになっていた。

この日は夕方からローガンを含めた複数人で夕食の準備をすることになっていた。冷蔵庫の中と変わらない温度に震えながら包丁を握っていた。

「とりま、やっぱりこの時期は温かいのが一番だよなあ……。というわけで汁物系でいこう」

「肉や魚のタンパク質だけでなく野菜もたくさん摂れるたらベストよね……。というわけで単なる汁物でなく東洋の鍋料理というのはどうかしら？」

「あゝいいっすね」

などと本日の夕飯分の給仕を共に担当することになった45と手を打ち合った後、単調な作業なら可能としているロボットたちと連携して具材を刻んだ。今日一日で使うのが許容されている合成肉、野菜類、キノコ類を食べやすいサイズにカットしながら、五人程度でつつける土鍋を出して洗って出汁を敷いていく。

……つもりなのだが、

「出汁つてどれだけ調味料を加えればいいのかしら……?」

「たしか飯を出してくれてる婆さんたちがいくつかのメニューのメモを残してくれてるとか聞いたな。どこかに張り出されてたりしてないか?」

「えくつとちよつと待つて……ああ、冷蔵庫の脇に冊子という形であったのね。でも意外と種類は少ないのね、これだけでいいのかしら……?」

「ちよつと見せなさい……。たしかに本当にこれだけでいいのか心配になるわね。日本の料理つて簡単じゃなかったりそうであつたりとわからないものだけど、これは簡単で美味しいものなの……?」

416に続いてローガンも見てみればたしかに書き漏らしがあるのではないかと疑わしくなるぐらいであつた。昆布や鰹節の合わせ出汁にしようゆにみりんなどと、欧米人であるこちらからしてもあまり馴染みのない物々が片手で数えられる程度しか記されていないのだから不安にもなつてくるというものだ。

「いつそのことカレーにした方がいいんじゃない？あなた達が言ったことに私も頷ける点が大いにあったから異議は唱えなかったけど、今こうしてみると雲行きが心配になって来たわ」

「なんじやあ割烹着姿になつてやる気満々の416せんせえ、あなたはここで妥協という道を選ぶのですかのお？それにカレーという道を選ぶあたり、とても安易ではありませんかあ？」

「果てしなくうざつたらしいわよローガン。私は完璧だけど、完璧なのだからこそ失敗を予測しているのよ。ここで変にチャレンジ精神を働かせれば地雷に足を突っ込んでジ・エンド。地雷探知機ほかのせんたくしを持ち込まなかったことを最大に後悔しながら破綻することになるわ」

「とりあえずその異議は却下。時には冒険しなきゃ何も面白くないじゃない。それに何も白紙の地図を広げているわけじゃないのだから重大故に陥ることはないわ」

「そーだそーだ、作つた料理の美味さに定評のある人達を書いてもらつているのだから間違いはないだろ」

意地悪い笑みを浮かべる45にローガンも悪ノリし、メモに記されている通りに調味料を必要な分だけ彼女が用意している間にローガンは出汁の用意を始めた。沸騰した湯に具材を通すなり落とそうとしていると、言われたことの処理が間に合わずフリーズ

していた416が我に返ってこちらに食らいついて来た。心なしか、ローガンの腕を掴んだ握力が華奢で細いその手にしては強すぎる気がする。

掴まれてから416の表情を見てみれば、その碧眼は涙目になっていて眼前に忌避したいものを突き付けられた少女そのものようである。さらにはガタガタと震えていた。それに改めて見てみれば掴んだというよりは縋り付いている、という表現が正しいのかもしれない。なにせ両腕でローガンの片腕をガツチリとロックし関節をキメずとも動かさないようにしているのだから。

「ローガンお願いよ。お願いだから他人からの意見を聞かずに我が道を突っ走ろうとしないで。この間のようなことになるのは本当に御免なのよ……！」

「……あく、先日あれか」

鬼気迫つていながら切羽詰つてもいて、未来予測に怯えているその様子にローガンもさすがにノリが冷めてしまう。先日の苦難を体験したのはローガンも同じであるからだ。

慣れない者達が当番制にして料理をするということは、どこかで『はずれ』を食すことになるかもしれないという事でもある。ちゃんとレシピ通りに料理をすればいいのだが、中には敷かれたレールから自ら外れていく者がいる。

自分好みの味じゃないということと調味料を足していった人形がいた。火の調節を

せずに一気に加熱していった人形もいた。それでもよっぽどのことをしなければ食事をするのにあたつて飲み込めないことにはならない。

ただ先日、面倒くさがつたとある人形が適当に諸々放り込み煮込んでいったせいで食した人員が全滅に追い込まれた、という事実がある。ローガンが苦々しく覚えている限りでは、たしか416がじゃんけんで負けて404小隊分のメニューを『処理』することになり、顔面蒼白にしながら『処理』していた。

その時の行いをローガンは生ごみへとゴーシュートしなかつたことを評価しており、自分と同じ道を辿らなかつた彼女に敬意を表していた。

しかしこの様子からしてやはりというべきか、416とてあの時には苦痛を感じて二度と体験したくないということだ。ローガンとてここまで懇願されれば良心が大いに働いて気持ちの方にストツプが掛けられるし、彼女が策士であっても本心かどうかをほとんど疑わない。

ただ目の前に提示されているレシピを無下にもできないので、

「……とりあえず45、一つの鍋分だけ敷いてみよう。レシピ通りにやつてダメなようなら別の料理を作るとしようや」

「オーケー。416がこんなになつたのも私達に責任の一端があるというものだもの。ちやんとこまめに味見もしてみるとしましょう」

「416、とりま放してくれ。さすがに骨が軋んできて痛い」

涙目になっている416を剥がしてからは慎重に量などを見て入れていった。目分量などやった暁にはすぐに絞殺されそうであったので、きちんと小さじやら大きじやらの調理器具を使って忠実にレシピに従って、である。すぐ傍に監視の目がありながら調理するというのはここまでやりにくいものなのかと、ローガンは初めて知った。

やがて一通りの手順が終わり具材を投入するだけになったところで、ローガンと45は完成した出汁を口に運んでみた。

「ん〜……まあこんなもんじゃないか?」

「……ちよつと味が薄いのかもしれないけどね。また別で作っておいて適宜つき足すということでもいいんじゃないかしら」

「というわけで416、お前も賞味してみてください」

416が恐る恐るといった様子で出汁を掬ったスプーンを口に運ぶ。大丈夫なはずだがもしかして、という可能性を考えてローガンははらはらとしていたが、味わった後に浮かべていた表情が万が一のと違っていて安心した。

「45の言う通りちよつと薄いかもしれないけど、これだったら抵抗なく食べれそうだわ。ちゃんと下処理をしていれば、の話だけど」

「そこからはもう俺達全員の努力次第だな。とりあえず今夜の飯は『すき焼き』というこ

とでいいか、二人とも」

「異議なし」

「同じく」

理性の番人からの許しが出たということで、そこからは本格的に準備を進めていった。

45と出汁の作り方をずっと見ていた416はローガンと交代し、こちらは作業口ポットによって切り出された具材をまた洗い出したり一つの鍋の分だけ分けたりとする。冷水で両手が悴んで難儀したが、それでも何とか一通りの区分けが終わらせることができた。

温水で手を温めてからローガンは二人の様子を窺ってみると、二人の仕事も終わりを迎えようとしていた。

「その様子からして一先ずそっちも終わりそうか？」

「まあね。時間としてはまた夕飯時よりちよつと前だし、誰かが来たぐらいから具材を入れて茹で始めればいいわ」

「それじゃあちよつと休憩できるかね」

「そんなわけないでしょ。各テーブルにコンロを設置したりとまだやることはあるのだから一服する暇なんてないわよ。ほらローガンは先に終わったのだからやってきて頂

戴

「さつきまであんな小娘みたいに怯えていたのによくもまあ……」

416に聞こえないようにそう呟くと厨房の棚から小型カセットコンロを全て引つ張り出し、食堂の方に出て設置を始めた。取り皿なども置いてから壁の時計を見てみればもう六時。早い者であればもう既に来てもおかしくない時間帯である。

腹の虫の主張を聞き流してふと行き来した食堂を一望した途端、ローガンは自分の視覚を疑った。今の季節は言うまでもなく冬、そして日もすっかり沈んで光源たるものはローガンが立っている食堂の天井に取り付けられている大型の白熱電球しかない。それに清掃員の仕事に関心出来るぐらい、白塗りの床と壁などの光沢に清潔感を感じさせられるものであった。

それが一瞬だけ暗転したかと思いきや自分だけが別の世界線に飛ばされたと錯覚させられた。テラスに面している大きな窓のガラスが全て割れて床に瓦礫などと散らばっているがその床も酷いことになっている。ひび割れて亀裂が入って穴までも開いており、土埃までもが舞っていて生活感を全く感じさせない。ジジジ……と電球が音を立てながら明滅し申し訳程度に働いているがそれでも全体を見まわすには足りない。それでもなぜ暗がりの中でも『食堂だった場所』をはっきりと見ていられるのか、というとサーチライトのような光が外から中へと入ってきているからだ。

あまりにも唐突なことにローガンは愕然としながら周囲を見渡す。誰かいるかと思っていたがそこには自分以外、誰もいなかった。

「一体、こいつは……!?!」

これでは拠点などの安心できる『安全地帯』セーフエリアではない。聴覚を通じて伝わって来た何かしらかの機械の駆動音、硝煙そのものと認識させられる臭いまでもが鼻を突いてようやくローガンは自分が立っている地がここがどのような所か認識を改めた。

嫌でもローガンにも自分の在処としての感覚が根付いてしまった、慣れ親しんでしまった場所。『バトルフィールド戦争地帯』そのものであった。

「なん、で……!?!」

どうしてグリフィン北米支部のここでこのような光景を幻視してしまっている? いや、そもそもこれは幻視しているのか? 自分は今、過去に見た光景を今また映し出しているだけなのではないのか?

靄が晴れるようにして思考がクリアになっていくに比例して、瓦礫に混じって遺体が転がっているのにも目に映ってきた。一人一人に見覚えがある。非戦闘員であるこの基地の給仕係であったり研究員だったり、またはここで武器を取って戦死したであろう整備士。そして誰よりも果敢にも戦ったものの敵わなかった戦術人形の彼女達。皆、そこで壁にもたれかかれて、横たわって血を流して死んでいた。

何故、何故？何故自分はこうしてプレイバックして見ている？得をすることなどなに一つもない筈なのに、自分の精神を自傷するのと変わらないのに何故？

「頭が……痛え……!!」

物理的に脳が左右に分離していくようだった。それは右脳と左脳というように人間の脳は分かれているとかそういうのではなく、解体されていくという表現が当てはまる。身体ではなく精神が悲鳴を上げて血を流し、苦痛を訴えてくる。

次第に頭痛、胸痛、腹痛と全身が悲鳴を上げて吐き気までも催す事態にローガンは耐えきれず両膝を床についた。耳鳴りまでもがロツクミュージックの最大音量のように響いてきて聴覚を潰したくなつたが生憎にも両手とも最初に痛覚を働かせた頭部の方に行つてしまつて張り付いてしまつてゐる。

——動かそうとすれば抑えられなくなつた方に飛び出そうとする軟体動物のように、頭痛という概念そのものがまるで……？——

——一体俺は何を言おうとしている……？——
思考が纏まらず、ローガンは何色かもうわからない視界内で自分が倒れたことだけを知覚した。

『ローガン……？どうしたのローガン……!!』

誰かが、自分にとって大切な誰かが駆け寄つて来る。キーンツという耳鳴りに混じつ

て聞こえてくるその声でうつつすらと浮かんできたのはとある部隊の隊長。左目に古傷が残されている、戦場では合理的な戦術を行使してじわじわと敵を追い詰める、狩りのリーダー。周囲には陽気で人当たりよく付き合ってもそれはあくまで計算しての偽善であつて誰かに自分を許しているわけではない。

だがその内面、自分を本当の意味で理解し物怖じせずに向き合ってくれる、そんな人を密かに渴望している女の子だ。彼女が過去になにを見て経験し苦しんだのか、自分はまだもう知っている。

『どうしたのローガン!? 45、一体なにが……!?』

『私にもわからないわよ! 416、今すぐ彼を——!』

身体を動かせないのは今だけだと、自分は大丈夫だとそう伝えたかった。しかしそう口を動かさないまま、ローガンの意識は闇に沈んだ。

目を開ければそこは見知らぬ天井、と昔の誰かが何かの作品で表現していたらしいがローガンはそれを詳しく知らない。ただ自分の場合は見覚えのない、というわけではなく単に見慣れていないだけだと目を覚ましてからそう思った。

鼻を突く薬品の臭いと身体の背面全体に感じる柔らかさから、自分は医務室に運ばれてそのベットのうえで横になっているのだと認識するのに一分弱の時間を要した。だが、誰かに聞かずにそう気付けたのだから悪いことではないだろう。

「ローガン、起きた……?」

その声の元を頭を動かして追ってみると、そこにはいつもの普段着としての警告色の戦闘服を着用しているUMP45がいた。ローガンが何かを言う前に彼女は目を覚ました自分の額に手を当てると、しばらくそのまま硬直。そしてゆっくりと手をどかすと溜息を吐いた。

「熱はやっぱりないか……ビックリしたわよローガン。呼びかけに応えないから見てみれば倒れていたんだもの」

「……悪い。ちよつとした体調不良からの眩暈がな」

「まったく、自己管理云々とは言わないけど心配させないでよね。この間まで残業してまで書類作業で働き詰めていた影響がここに出てくるものじゃこの先やっていけないわよ？ いっそのこと、あの夜戦女王が以前言ってた通りに基地内の警備に回ってた方がいいんじゃないかなロクガン？」

ピツとローガンの額に指した人差し指の先をグリグリと45が押しつけてくる。少々棘を含めた言葉にローガンはぐうの音も出せずに詰まって言葉を発せなかった。ただその白磁のように白い指先には力が込められておらず当てられているだけであるのだと、ローガンはすぐに気付いた。

指先から伝って45の表情に視点を移してみれば、彼女は笑っていないながらもどこか気持ちの霽が晴れていないように陰を落としている。その黄金色の両目には憂いが浮かんで彼女の想いが映し出されていた。

「本当に悪かったよ。良かれと思つてやつてた結果がこの様だ。情けないと罵倒されても仕方ないし、お前からも甘んじて受けるよ」

「じゃあ言わせてもらおうわよ。バカ、アホ、無鉄砲、命知らずの博打男。あなたと肩を並べて戦うことになった時は一回は肝が冷えるだけの思いをするだけの覚悟をしなければならぬじゃない。いい加減に段階を飛び越さない戦い方を一貫しなさいよ」

「皆にも言われるなそれ。気付けばそうしなければならぬとかを直感で思つてしまつ

て、可能かどうか考える前に身体が動いてしまっているんだよ」

「言い訳するなバカローガン。それでいつも見ていられない思いをするこつちの身にもなりなさいよ、いくつ私達に活動寿命があっても足りなくぐらいになるんだから」

「はっはっは……そんなにひどい男なんだな、俺って奴は」

「ええ、本当に。自省しなさいよ、狼さん？」

頬を膨らませた45にローガンは力なく笑って起こした上体と一緒に両目を動かして状況を確認。損壊していたりする異変などが全く見受けられない、そんな静かな医務室にいるのは自分と45だけ。薄暗い豆電球に照らされて掛け布団などの皺が見えていても、自分や45が着ている暗色の上着にははつきりと見られない、そんな明るさだ。そんな中でローガンは少女の姿をしている45と二人きりでいることに気恥ずかしさを感じ始めたところで、不意に45はこちらに正面からもたれかかって来た。

「……45？」

胸に当てられた彼女の左手は次第にローガンの上着を掴んで自身の引き寄せ、もう一方はローガンの背へと伸びていた。自惚れではなく、まるで掻き抱いたローガンを大切な何かのように、失くしたくないと主張しているようで、そして遠くへと行って欲しくない懇願しているかのようでもあった。ローガンは内に湧いていた羞恥心が鳴りを潜めているのを隅に追いやっていながらどうしたものかと困っていると、胸に顔を埋め

た45がくぐもつた声で言ってきた。

「……ローガン、ハリーと同じくあなただつて代わりは見つからない、『唯一』の存在なんだから無茶はほどほどにして。誰かの為に身体を張ってくれているのだから絶対にするなどは私からは言えない。でもあなたは銃を握つて戦いながら私達を『理解』しようとしてくれている、他には見つけれない人なのよ。そんな人をG11も416に9、私だつてできれば放つたらかしにしたくないの。だからローガン、お願いだから自分を大切にしてよ……」

その言葉による衝撃は初めてではない気がした。しかし、だがらといつてそれによるインパクトが弱まる理由になつていない。

45が本心のまま訴えているのか、と疑問を抱くほどローガンだつて自分が捻くれないと確信している。彼女が今日まで歩んできた道のりを詳しく知らないが、決して楽な道筋ではないことまでは重々承知している。もしかしたら幼少期の自分よりも過酷な経験を、心をすり減らされる思いをしてきたのだろうから。決してローガンは45達に憐れまず同情までしない。それはあくまで客観的に、『他人』という立場に甘えて傍観しているだけのような気がするからだ。結局それらは戦術人形として自分達の為に戦ってきた彼女への冒涇に、侮辱へとなつてしまう。それだけはローガンとて断じて許せなかつた。

何かをするのだとしたらただただ、共に目線を同じ高さに合わせて物を見ること。そして苦々しく思うことがあればそれを共有し肩を組む、それだけだ。

その事象の『当人』という立ち位置にしなければ、『404小隊』というこの世の『必要悪』を良き友人として受け入れられない。

ローガンは密かに行き場の無い、何にも形容できそうにない温かい感情を込めて45の頭をゆつくりと撫でた。

「ごめんな45、俺はまだこの先もお前達に心配をかけることになる。俺はきつと、自分の命をなげうつての姿勢でなければ地団駄踏んでしまつて前進できないんだ」

「それをやめてつて言つてるのに……」

「うん、お前が言いたいことはわかつてる。でもさ、目指しているその先に輝ける未来があるつて、立場を気にせずに笑い合えるんだつて思うんだよ。俺はそれをお前の為にも形にしたい。クソツタレな取捨選択を強いている、そんな世界で在り続けて欲しくない。だつてよ、誰も苦しいままでありたいなんて思うわけないじゃないか」

「でもローガン、それつて——」

45が何かを言い掛けた途端、数メートル目の前の医務室の扉が開かれる。ガチャリツと開かれた先にいたのは小さな土鍋をトレイに載せたAR15であった。

一瞬、ローガンは自分の中の時が止まった気がした。腕の中には顔を埋めている45

がいて、自分は医務室のベッドの上。さらには薄暗い部屋の中で彼女と二人キリで誰も居ない。そんな状況下で事がこれから起こらない、という方向性に考えないのは無茶があるというものだ。

顔を見せた当初はきよんとしていたAR小隊の参謀が徐々に邪気を纏っていくのをローガンは見た。眉間に皺をつくれるだけ両目はつり上がり、わなわたと身体を震わせて手に持っているトレイからは軋ませるだけの力を込めている。それに恐れを抱かない程、ローガンは怖いもの知らずではない。

「……なにをしているのかしら二人とも。『そういったこと』をする為に医務室はあるわけじゃないのだけど？」

「ち、違いますことよ参謀閣下！俺としましては単に心配してくれていた45に謝っていただけの事でありましてですわね!」

「それって抱き合わないといけない事？口頭だけで済むだけなのに、体全体で意思表示をするというのは随分とオーバーじゃないかしら？」

AR15の長い脚が一步を踏み出す度に地響きが鳴っている気がした。ローガンからすれば自身より背丈が低い華奢な少女が歩いて来ているだけだというのに、何故か自然界の絶対的王者が自分の命を狩ろうとしているのだと誤認してしまう。

『抵抗』という二文字すら掻き消えてしまうそれほどまでにST AR—15という

戦術人形の少女が畏怖を抱かせる存在のように思えた。

「どう取り繕ってももう手遅れねローガン。私がこうしてきているというのに45を引き剥がそうとしないのだから」

「キヤーツ！もう言い訳しても本当に耳を貸してくれなさそうで俺のパニックは最高潮！ていうかすごいぞARR15、もう気迫だけで人を殺せる勢い！そんな奴が味方にいてくれるだなんてとても嬉しいぞう!!」

「そうかしら。でもここで潰えようとしているのはあんたよ。ここでどのような手段を取っても私はあんたを逃がすつもりはないから」

「怖い、とてつもなくすつげえ怖い！やめて俺のメンタルゲージはゼロになっていますから!!」

ズモモモモモモモ……と黒い邪気をより濃くする彼女にローガンはガクガク震えて怯えている小動物へと変容させられていた。正直な話、他意そのものが鳴りを潜めていたというのであって行為に及ぼうとする機などローガンには微塵もなかった。弱みを見せてくれた少女につけ込むようなクズにローガンだつてなりたくない。

命に誓ってそう言えるというのに、ARR15は明らかにそういった宣誓すらも受け付けてくれる様子はない。彼女の立場からすれば訝しむのを通り越して怒りを覚えて当然なのだろうが、数段飛ばして私刑という名の説教が執行しようとしているのが目に見

えている。

男とかの性別の問題ではなく、理不尽な境遇にローガンは辛くなった。

しかし思わぬ方向からの助け船が現れることだってある。日本の童話の一つである鶴の恩返しのように、恩を得た動物がその相手の為にできるだけのことを尽くすことのように。

ローガンの腕の中にいた少女がこちらの胸にまた数度額をこすりつけた後に立ち上がる。一瞬だけ見えた彼女の笑顔はこれまで見たことないぐらいに綺麗であった。

「不満とかはごもつともだけどさARR15、今回はそういうのはなしだよ。あなただつてローガンの事が心配だつたんでしょ？ だつたらやることはわかっているよね」

「あんたがそれを言う？ 経緯はどうだつたかは私は知らないけど容認できるほどお人よしではないわよ。第一、体調を崩した人に何をしようとしていたのか聞く権利は私にある筈よね？」

「そうだしあなたの主張の正当性は否定はしないよ。でもARR15、ローガンにそう強気でいられるの？ あなた達がしでかしたことの負債は——」

ノイズが走ってそれ以降の45が言ったことはわからなくなった。ただその最後の言葉を聞いた瞬間、ローガンは自分の中になにかがストンと落ちて来た。パズルのピースが繋がり組み合わされて一つの絵が完成するように、今日一日であった負のイメージ

が連結していった。

夢心地であった意識が現実を引き戻されるのと同一の感覚が生まれたと同時にAR15の顔色が変わる。背を向けている45がどのような表情を浮かべているのかはわからない。ただ、ノイズがローガンの聴覚で働き続けている間にも二人の会話は続いているのはAR15の動きでわかった。ローガンは読唇術を会得しているわけではないが、それでも穏やかな会話をしているのとはかけ離れているのだけは確信できる。

現実であればこんな喧しいノイズなんか耳を遮る筈はないというのに、何故？二人の会話を聞こえないよう妨げてきている、何故？誰がどのような意図をもってこんなことを……？

——ああ、そうか。これは『俺自身』による……——

パズルの絵が完成して全体図がはつきりとして見て取れて来た。MG4との会話における空白の思考、SOPPIIに憚れた違和感、気を失う前に見た光景。その全ては自分の中で巣食っている負の記憶とイメージによるもの。誰かに打ち明けることなどできない、話すにしても全てを曝け出すことなども到底かなわない。それでも誰かに理解して欲しい、そんなローガンの葛藤と渴望であった。

やがて二人の会話が終わったらしく、45が立ち退いて医務室から退室しローガンの耳を覆いつくしていたノイズまでもが消え去る。意気消沈、という四文字が表現が合う

ほどにAR15はそこで俯いて沈黙していた。

ローガンは立ち上がり、AR15の前に立つ。すると彼女からか細い声が聞こえてきた。

「……ねえローガン、教えて。あなたが今も戦っているのは、何故なの？」

「なんで、だろうな。やりたいことが他に見つからないから？ いや、鉄血よりも酷い、虐殺を平然と続ける連中を叩き潰したいからかもしれない」

思えば多くの敵を屠って来たと思う。ナイフや銃弾で敵を殺し、その血肉を糧にして自分は前に進んできた。生きる為、以外にも目的はあったが、結局は自分が生存している道を確認かなものにする為という原点に立ち戻ることになる。それがおかしなことだとは微塵にも思わない。だって人間だけでなく生物そのものが自己の存続を無意識にも望んでいるのだから。

「その中に、あなたにとつて大切だった人はいるのかしら。信じていた者に裏切られて傷心し、憎悪を覚えるだけの枠組みに入れたことはある？」

「……あったかもしれない。もう覚えていたくないことも多すぎるからな」

「じゃあローガン、私達AR小隊は？」

その言葉に我に返って彼女の方を見てみれば、いつの間にか自分の手にはかつて愛用

していた拳銃が握られていて、その銃口をAR15は自ら自分の胸に押し当てていた。いつの間にか周囲は医務室の整った環境ではなくなり、ローガンにとつての始まりの場所に移り変わっている。

脳の処理が間に合わず混乱したが、とにかく今は引き金を引いてはならないと指を懸命にそこから離し銃口も明後日の方向に向けようとした。だがローガンが行っていることを予測していたかのように、AR15は両手で銃身を掴み、もう片手をローガンの右手に添えて妨げている。

理解が追い付かない、力が及ばない、意志を表明できない。出来ないことがあまりにも多すぎた。

拳銃に落としていた視界に上から何かが垂れ落ちて来る。視線を上げてみればそこでは誰でもない、AR15という少女が蒼炎たる両目から涙を流していた。

目が合ったのと同時に、彼女の口はわななきながら再び言の葉を紡いだ。

「……教えてよ、ローガン。私はあなたにとつてのなに？あなたにとつての他人か敵なのか、私にはわからない。あなたの良き隣人としてありたい、それは本当の事だけ事実がそれを許してくれないの……。45が言った通り私達が、私が犯したあなたへの罪は大きくてどう報いればいいのかわからないの。……教えて、ローガン。あなたは私が

—

——憎い……?——

これは夢であつて現実ではない。だけどここの胸を貫く痛みと高鳴る鼓動は間違いない本物で、咄嗟に取ろうとしている行動も嘘偽りなくローガンがそうしたいと思つてゐる事。そうであると自分もそう断言できる。

「答えてよローガン！ あなたは私を殺したいというのならそうしていいわよ！ それだけの資格があなたにはある！ それとも自己破壊を私に命じてみる!? それであなたの気が晴れるなら構わないわ!!」

「違う、俺は……!!」

あんなことがあつて何も思わないことはない。遺恨が残るのは然るべきことで、AR 15 に対し負の感情を抱いてしまつても咎められる覚えはない。

だけどそんなどす黒い渦の中に一つの光だけがあつた。自分の中に臆気ながらに留まっていた亡霊を払ってくれたのは誰だったか、はつきりと覚えてゐる。そもそもその話、過去となつた隣人たちが逝つたことの喪失感を影ながら歯を食いしばつて耐えて来た自分、そんなどうしようもない男を誰よりも先に見つけてくれたのは誰だったか。

全て、全て、全て、覚えてゐる。暗闇を歩いてきた分、抱擁しあつた時の嬉しさを。言葉に乗せての伝え合う高揚を。友愛や親愛を受けた時の温かさを。

それを取り戻したいと、心から思つてゐるいからこそ、ローガン・ブラックという自

分はこんな幻想と願望に満ち溢れた夢を見た。

だから目の前にいるARR15は彼女本人ではない。ローガンが過去に見た記憶が投影されている偶像で、記憶にない言葉や台詞、言い回しなどは全てローガンのこうであつて欲しいという願いという名の当てつけだ。

「……ごめんな、今はお前が満足のいく答えを用意できない。いざごぎがあつた奴にこういうのもなんだが、俺も迷つてるんだと思う。でも確かなのは、お前を殺したいとは微塵も思っていない、それだけだよ」

ゆつくりとローガンは距離を詰めてARR15を抱きしめる。腕に収まつた少女は銃口を未だに自身に当てながら抵抗してきたがなんとか抑え込む。きつと暴れているのはやりどころのない感情に満ち溢れてしまった幼き頃の自分で、ARR15の姿をしているのはきつとそれだ。

「俺もいい加減に大人にならないとなんだ。身体的にじゃなくて、はつきりとした線引きが出来るぐらいの精神的にな。そうならなきや、機械仕掛けの人間であり続けるお前達に申し訳が立たない」

きつとこのまま帰つて彼女本人に言えば何を言つてるのかと罵倒されることだろう。SOP11と一緒にされているように拳骨を落とされた拳句には一蹴されてくどくどと耳に痛いことを言われてしまうことだつて容易に想像できる。

だからそうならないよう、きちんとやるべきことをやって帰らなくてはならない。胸を張って堂々していられる自分になって、自分の足で彼女の元に。

そう認識した途端、なにかが浮上していく気がした。浮力が働かないまま沈んでいた暗闇そのものに光が差し込んでいくように、段々と自己の深層意識から引き戻されていく。

それでもローガンは腕に抱いた少女を抱きしめ続けた。もう二度と、忘れてしまわぬように。

揺れ動かされていた、銃器を抱えた目の前の少女に。いつの間にか予定していた自分

だけの休憩時間がオーバーしていたらしく、マシンガンの少女は眉根を寄せて不満げであった。

「サボっていたのか」と言われかけたがすぐに取り消された。仮眠に入るまでの二十六時間、一睡もせずに戦地に潜伏していたのだし疲れはピークに達していた。それはこの少女も長時間に渡り行動を共にしているので重々承知している。戦術人形という立場になれば人間の疲労の具合が正確に測れないと、彼女は物静かに愚痴った。

そんなことはないさ、と俺は言った。他人が感じている疲労なんて同じ人間でもよくわからなかったりするし、逆に俺だってお前達のこととわからないことだってある。俺達も属しているタスクフォースなんて部隊にいるんじや、そんな命題に真っ向からぶつかるのは避けられない。だけど二人三脚で行ってはならないと言われているわけではないんだし、地道に見極めていけばいいさ。

言いながら俺は身体の節々を鳴らしていると、少女は立ち上がって呆れたようにして言葉を漏らした。その言葉、捉えようによつてはプロポーズになるのではないですか？少女は変化が乏しく無表情のままであったが、少し顔を赤らめていた。そんな気恥ずかしいことを恥ずかしがりながら言えるようになったということとは心の距離が近くなってきたことを証拠だろう。しかし彼女とてむず痒くなっているのも間違いない。

このまま少々雑談で洒落込みたかったが、寝坊してしまったせいで時間も差し迫って

きている。

とりあえず俺は近くの壁に立て掛けていた小銃を手を取ってセーフティを解除、ハンドルを引いて移動準備を整えた。少女の方はもう準備完了とばかりにセーフハウスの出入り口にて待機している。

互いに拳を打ちつけてから外に出ると、硝煙の臭いが鼻を突くのはいつもの事ではあるが空から風物詩そのものが降ってきていた。グローブを填めた掌に載せてみればそれは溶けて水へと変化していく。それが何なのか、俺はわからないほど無知ではない。

雪……、と静かに白い吐息と共に漏らした少女の頭を俺は撫でると戦闘用のマスクを鼻に掛けて顔の下半分をそれで覆う。夢で見た時のようにリラックスして歩けないこと、それによる虚しさを少女が感じているから慰めているのではない。むしろ逆、俺自身へのそれだ。

どうしたのですか、と尋ねて来る少女に俺は悪いな、とだけ返して先を急ぐ。今の俺の情けない姿を少女を始めとして誰にも見せたくなかった。

……もちろん、彼女にも。

ここから先、俺はまた銃弾が飛び交う戦地にまた飛び込むことになる。同じ部隊の誰かがそこで死ぬことになるだろうし、それで心を痛めることになることだって間違いない。だけどそれを避けようとするものなら、俺は俺を許せなくなるし彼女に申し訳立た

なくなる。

それによつては俺自身がここで急に命を落とすことになるかもしれない。そうなら、彼女はどんな顔をするのだろうか。

……嫌な想像を振り払い、俺と少女は部隊の集結地点に急いだ。

——全ては、彼女の為に——

俺はここにいない彼女に思いを馳せながら、もう一度眼前の空を仰いだ。

45. 到達 — We can` t lose you —

銃声をサプレッサーで消音されているといつてもやはり限度がある。そもそも抑えられているのはそれだけであつて、弾丸を発射したと同時に銃口から噴出されるガスの噴出音までもがないものとなるわけではない。

なので先行偵察しているローガンにとつてネックなのはその音で鉄血兵に気付かれて先制攻撃の機会を与えてしまうのではないかという事であつた。第一、光学迷彩でカモフラージュされている跳躍地雷の無力化をするにはまず目視で存在を確認する必要がある。暗がりの中でローガンが所持している『P226』のフラッシュライトで気付かれることだつて十分あり得た。

ローガンの過剰に思えるほどの警戒心で五感の全てが研ぎ澄まされ、思考の全てまでもが現実の事象の全てに向けられる。G11との通信をしてから、二回引き金を引いて処理した地雷の数は一つや二つではない。薬室に装填できる弾薬も含めれば十六発のバラベラム弾を装填できる『P226』のマガジンを一本分交換するだけの数をローガンは破壊している。さらにリロードしてからも四つをスクラップにした。

「さすがにそろそろ勘弁して欲しいんだがな……」

言わずもがなだが、弾薬だつて都合のいいコミックの話のように無限に所持しているわけではない。ローガンはその場で何かから錬成できる錬金術師でなければ、無から作り出す魔法使いでもない。なのでもし使用している『P226』の弾薬である9mmバラベラム弾がなくなればローガンの武器はナイフと体術だけになる。

現代で一兵士が所持する武器で有力な武器というと小銃がまず挙げられる。銃撃という戦闘手段の一つが失われた場合はどこの兵士だつて少々戦いにくくはなる。それはローガンも同じだった。

銃器を失った場合でも戦闘に参加できるように訓練こそすれど、そのようなことになれば真つ向な戦いなどできないに等しい。致し方ないとはいえ、長く続くこの現状がローガンにとって憎々しく思えてくる。

しかしある一点を過ぎたところで、設置されている地雷は突然となくなつた。見落としているからとかではなく、見慣れて来た光に当てられたことで生み出される空間の湾曲部分がないのである。

それでもなければそういう笑い話で済めばいいと思い、集中力を途切れることのないように努めながら前進。

「おつと……」

ふとここまででなかつた音を聴覚で拾い、ローガンは身を屈めると壁の方に寄る。壁

を背を付けるようにして一歩ずつ足音を殺しながら進んでいくと、進行方向上に光が差し込まれているのが見えてくる。光源たる物体による光が余分に照らされていることで、少しながらも足元だけでなく壁や天井まで全域に至って危険物が無いのは見て取れた。ただそれによって警戒態勢になっているヴェスピドが数体が巡回していたので、一旦進行を停止。

敵の陣形と周囲の地形を改めてを確認し、二体以上で存在を認知しあっている六体の制圧が可能かどうかを考察する。銃やナイフ、格闘術などを全て駆使した結果がどうかを判断し、その後起こりうることまで考慮した結果としては、ローガンとしての常套手段^{ステルス}を捨てての攻撃となるだろう、と至った。

だからといってこちらの存在を気付かれずにやり過ぎるのは不可能で、この先の様子を探りたければいずれかの手段を取る必要がある。偵察という以上は敵に気付かれるのだけどうしても避けねばならない。

そもその話、進行するのであればG11達の後続が追い付くまでが現実的ではあるが、ハイエンドモデル二体がここにいる以上は正面からの戦闘は取るべきではない。なによりもローガンが自分を除いて戦力として頼れるのはG11だけであった。

(仕方ない……)

嘆息するとローガンは暗闇に紛れながらも収集できるだけの情報を入手しようと回

り込むようにして移動した。

ここまでは一本道であったもののある地点に直角で分かれ道が出来たような道筋になっていたので、明かりを避けて岩に身を隠しつつづけるように心がければ難しくはなかった。鉄血兵の視線が外れた瞬間に動いて移動、体全体を隠したら立ち止まって敵の様子を窺う。これを繰り返してローガンは分かれ道の先の光源が見えるように移動した。

周囲に完全に身を隠せるだけの遮蔽物が無いので、腹這いの匍匐姿勢となり敵からの視認性を可能な限り避ける。そして端末を操作してHUDの視野と倍率を調整して『地図』の終着点を見た。

HUDの視界に映されたのは数十分前に対面を果たした鉄血のハイエンドモデルのエクスキューショナーとアツシユ。後者はともかく、前者の方は声を荒げて怒鳴っていた。

「うるせえな、いい加減にしがれ！どちらにしても上のフロアはもう制圧されちゃってもう捨てないと駄目だ。だったら第二プランでここを爆破してやればいいだけじゃねえか！」

「エクスキューショナー、私は何度も言ってるでしょう。無理やりこじ開けるような真似をすれば何が起こるのか分かりませんよ。ここに隠した者は恐らく私達の到来も予

想して居た筈、でしたら罫を一つか二つ用意していてもおかしくありません」

「臆病な意見を並べては自分から尻込みしているんじゃないやねえよ。この中の情報なんざ何も入手出来てねえから慎重になるのは良いとしてももうグリフィンの方が来る！
だったらいつそのこと……！」

「足踏みを続ければもちろんではありませんが短慮な行為も自身の死を招きます。第一、私達の元にはワイヤレスで起爆できても地下深くまで信号は届かないでしょう。雑兵をここで使うにしても、まだグリフィンの方たちの全滅が確認できていませんよ」

苛立っているエクスキューショナーに臆せず正面から向き合うアツシユの方は笑顔を崩していない。屈託のない、だが底の知らないそれを浮かべている彼女にローガンはどこか既視感を覚えながらも監視を続行。

二人の間には爆薬パックが積まれており、隅には見覚えがあるケースがどけられている。事前にハルカ達に情報を伝えられた防弾ボックスそのもので、ここから見る限りではもう中身が取り出されている物だと思われた。

エクスキューショナーを視界に収めた時は電動工具が中身だどこかで思っていたが、断定的に見て人一人の力では持ち運べない量の爆薬が運ばれていた物だろう。

「私達二人が次に行動を起こすのは『待機』ですよ。民兵はともかく、ここに現地入りしたグリフィンの兵には気をつけねばなりません。あなたとて、ハンターを討った相手を

放置するつもりはないでしょう」

「それはそうだ。オレの仲間があんな軟弱な男に負ける筈がねえだろうが、万が一というのものもある。それを見定める為にもオレがあいつを叩き潰す。ハンターのやり方を真似てでも、オレの総力をもつて殺すつて決めてんだよ」

「それは結構ですが、私としましてはあの方にまた尋ねておかなければならないことがあるので忘れないでくださいね。個人的にはありますがあの人に興味がありますので」

「興味、ねえ。敵であるアイツにもそんな笑みを浮かべているが本当に興味という二文字に収まるものなのか？何か別の感情が含まれているような気がするぞ」

アッシュが後ろ手に組んだままその場でクルクルと回り近くにある岩の上に飛び乗るとそこで片脚で立ち両手を広げてバランスを取り始めた。そこで立ち続けているついでに彼女はスケート選手のように軽く回転したりと、アクロバティックな動きを披露する。その間にも笑顔を崩さなかつたりと、外見年齢に合わせて無邪気な様子を窺わされた。

対するエクスキューショナーは溜息を吐いたように額に手を当てると、反対側に位置している防弾ボックスに腰掛ける。そして楽しそうにしている人形に言った。

「これは言われるまで気付かなかつたが、エージェントの奴はお前が人間と遜色ない、そ

のものの行動をしている、と言っていた。その時オレはそこまで気にも留めなかったがな」

「私達のAIという物は元々人類が生み出した技術の産物です。精神年齢のままの行動パターンのモデルはその年齢の人間から取りまますからおかしいことはないでしょう？」

「たしかにな。けどどな、てめえと初顔合わせを果たしてから一カ月、会話を何度かしてみて思ったがエージェントの指摘は概ね間違っていないと思ったよ。お前のメンタルモデルは鉄血オレたちよりもI・O・Pっのに近いってな」

「さすが、エルダーブレインの『代理人』と呼ばれているだけの事はありますね。私達を率いるのにふさわしく他人を見る目は確かなようです。まったくもってあつぱれですよ」

くすくすと笑いながらアツシユは今度はバレエの選手でもあるように片脚を頭上にあげて両手でそれを掴む。そしてその姿勢を保ちながらその場に留まり続けて見せた。

人間としては限界まで研ぎ澄ませているであろう聴覚を頼りに、二人の会話にローガンは耳を傾けるが思考する暇が一切ない。どこかで二人が言った事の意味を解釈して噛みしめてしまえばどこか重要なことを聞き逃してしまいそうで一ミリたりとも気が抜けない、それほどまでにローガンは一旦内にて僅かに頭だけを浮かび上がらせた可能性を捨てきれなかった。

「話題をすり替えようとしてるんじゃないねえぞ、その気がなくともな。オレはてめえと顔を合わせた時に言ったよな、言葉にはできないがてめえが気に入らねえってな」

「ええ、たしかに言っていましたね。同じ勢力の人形としてあるのにそんなこと言われて傷ついていたので覚えていきますよ」

「あの時は言葉の通りにいけ好かねえだけだったが今だったらこう言える。てめえが得意分野としていることもあるんだろうが、『人間臭い』んだよ。例えるならグリフィンなんかには肩入れしているI・O・P製の奴らのようにな」

ビキリツと何かが割れかけた気がした。その音が一体なにによるものかは定かではなかったが、場を見ていたローガンが思うに恐らくエクスキューションナーとアツシユの間にあつた空間そのもののような気がした。いや、二人の会話をなしにしてみればそんな音は響いていない。それにローガンの付近でスリーマンセルを組んで陣取っている鉄血兵に何かの異変が起きたわけでもなく、視認した時から変わらずに付近を見て回っている。ローガン自身も装備が何かを破損してしまつたというわけではない。腹這いになつてポケット越しに小道具やらなにやらを圧迫してしまつてはいるが、戦場に出る以上はガラス細工のような壊れやすいのは持ち出してないしなにも問題ない筈だ。

なのに、なぜそう認識してしまつたのか。鉄血が製造する人形の中ではトップランクに位置する二人がこちらに気付いたから？それとも彼女達ももつていた何かを破損さ

せてしまったから？もしくは外敵と接触した時のように戦闘体勢に移行したから？

違う、どれも正しくない。もしこのまま話が進んで沈んでいくのであれば、三つ目であげた通りに二人が取っ組み合うことがあるかもしれない。だがそうなるのには如何せん早く、まだ最初の段に踏み出したに過ぎない。

きつとそうではない、もつと簡単にシンプルな話だ。立場など似通った部分はあつても肩を組んで一緒に歩くぐらいにはならないのが直感でわかる。そんなことなら人生で何度か見てきた、見させられてしまつてきた。口喧嘩した時よりも酷い、『怒り』や『妬み』を通り越した『憎悪』をぶつけ合う直前と同様、エクスキューションとアツシユの關係の間に亀裂が生まれた、とローガンはそう悟つた。

アツシユがバランスを取つていた岩から飛び降りてまた後ろ手に組む。赤目を薄らと覗かせ、無邪気にやや邪悪な要素が表面に混じつた彼女にローガンは少しながら戦慄した。

「……へえ、あなたを見下してはいませんが武器を振る以外にもそうはつきりと言葉にできるのでですね。見た目に沿つて言葉遣いも野暮つたいのは変わりないですが少し意外です」

「んなのはどうでもいい、てめえには自覚はあんのかよ。その内に自分が人形じゃなくて人間そのものだつて思い込むことだつてあるんじゃないかねえのか」

「自己暗示、というのがあります。馴染みのない環境に紛れるには自分もその一部だと言いかせるのです。森にて身を隠すのであれば自分は草木だと、砂漠であれば砂だと言いうように。ですから私は自分が本当に『人間』という存在なのだと言いかせたことはいないわけではありませんよ」

「本当にそれが原因か？通り越して擬態する対象の臭いが染みついている、どころじゃねえ。人間達の生活の中に溶け込んでいる戦う機能を持たない自律人形そのものに近付いてる気がするのはオレだけか？伝手で聞いた話じゃ、余計なことをせず目的達成に集中するように命じられているのにも関わらずな」

「さあ、どうでしょうね？たしかに必要以上に関わることがないようにも言われているので可能な限り面倒事は避けていますよ。ですがどうしても受け流すことが出来なかったことになったりすれば力行使することだってあります。探られてしまえばマズいことだってやはりあるのですね」

「敵情視察とか暗殺でそう危険を冒しているのはオレだって知ってる。だがな、こつちが知らないうちに単独行動で潜りこんでたことだってあったんだろ。もうその民生組織は司令官がクズだったこともあって解体されてしまっただけはいるがそうする必要はなかった筈だ。詳しくは知らないが、PMCの程の規模じゃなく現場に送る兵士の体制もよろしくなかったそうじゃねえか。それだったらためえが出張する必要もねえ、自滅す

る様を眺めてほくそ笑んでいいだろ」

「……そこまで知っているのであれば隠す必要もないですね。単なる話、敵であつてもやつていことが目に余っていたんですよ。難民を保護して十分な貯蓄を与えても従属している部下への配給は本人達の意志など関係なしに最低限。自分は変化させずに私腹を肥やしている、そんな醜い人間の行いが。他を足蹴にして自分だけが手を伸ばして星を掴む。戦争犯罪ではありませんがその行いは決して褒められたものではありません。それに思うことがある以上、私は鉄血の戦術人形という群れの中では十分異端なのでしようけど」

「そう憤慨する時点で十分異端だクソツタレ。オレ達はあくまで人類殲滅という最終目標を掲げて連中の事情に突っ込む必要なんてねえんだよ。人間達の歴史だけじゃなく世間を見てみろよ。国同士の争いに対して関係が薄い第三者の人間は関心を装っているだけだろうが。テロや戦争による犠牲者に気の毒だとか都合のいい言葉を並べて自分達に飛び火しないように安全圏内から眺めているだけ、それが公になっている現状だ。当事者としてオレ達からすれば敵対している連中にそんな配慮をする必要性は皆無だ。簡単な話、人類なんて全員殺すんだからそれが遅かろうと早かろうと関係ないだろ。善悪問わず、同じ種がどうなるうとも本当に胸を痛めるわけでもない。あんながん細胞共に時間的な猶予を与えるだけに留まらず価値を見出すなんてのは無駄だし間

違っているさ」

二人の会話が意識から遠ざかり、背筋に悪寒が走るのと同時に腹の中に嫌なものが腹の内にストーンと落ちてきた気分だった。鉄血工造という組織は本当にローガンを始めとした人類を皆殺しにしているのだということなど既に知っていることだと、わかっていることではあった。だがこうして確実に言葉にされたのはローガンにとつては初めてで、現代において人類に牙を剥く『絶対悪』というのを相手にしているのだと受け止めるを得なかった。

考えなかつたわけではなく、忌避していたわけでもない。ただただ、そう臆気に頭に浮かび上がらせていただけでそう深く潜り込んでいなかっただけ。

何を今更、と言われるのかもしれない。七年以上もそんな連中と戦い続けているのだからわかつていたことであろう、などとそう厳しく言われることは間違いない。

それほどまでにエクスキューショナーが主張した人類の汚点というのは正しかった。ローガンが経験してきた過去にも、どこかの誰が命を落としたという一報があつても大きく気にも留めない、ということなどある。

自分の事で精一杯だったから。そう言つてしまえばお終いではあるが、それは自分だけがそうではないと表明したい逃避ではないのではないか。

一々他人の事で気に留めていられない。それだつて自分には関係ないことだとして

完全に切り離し、自分の身の回りのことに没頭する口上にしかならない。

(だけど……!!)

生きるか死ぬかわからない、明日生き残れるかは今日の自分にかかっている。それだけ己につきつけて銃弾を掻い潜っては放ってきた。安全な場所や物資を手に入れたのだとしても、それだけでこの先も生きていけるわけではない。また新たな居場所を探って戦い続けては、それらを独占しようとする輩を押しつけたことだつてあつた。生まれついた時から生物に備わっている生存本能のままに戦い、帰巢本能が無い野良犬のように彷徨う。他者を殺した時点でローガンが生きてきた道のりなど、褒められたものではない。誰が為、というわけではなくほとんど自分が自分の為であるのだから。

しかし今のローガン・ブラックがどう歩んできたかその過程を抜きにしてもだ。誰かの災難を見て見ぬフリをした、それだけで人類という種の価値を決めて否定するのは間違っている。

胸を痛めてはすぐに現場に駆けつけられるのはヒーローでしかない。自分はそんな超人ではなく、並の強度と力しか持たない一人の人間なのだからそんな偉業など出来る筈もない。

それも逃避、責任逃れ？ 愚かな人間という間で線引きをしたいだけだろうか？

そうではない。自分だつて同じ、自身と親しき者までにしか奔走しない愚かな人間で

ある。だが愚かであることは無価値であるのだと結びつかない。それすなわち、そんなタグ一つですぐに切り捨てられることに直結するわけではない、ということだ。

たしかに人類は過ちを幾度と繰り返し返す、愚蒙で愚昧で愚劣な一面を持った生き物だ。そう受け止め、受け入れた上でローガンは傲岸に言い放つ。『だからどうした』と。

どう理由づけされたのだとしても、大人しく殺される結末を迎える必要性がある、なんてことには決してならない。なるわけがない。食物連鎖を別に置いたとしても、一方的に事情を押しつけて命を奪おうとする行為だって人類が犯してきた罪。それを無自覚であっても犯そうとするエクスキューションナー達、鉄血工造だつてこの世で蔓延るがん細胞だ。

どう言葉で否定されようとも、それだけは絶対に間違つていないと筋を通してぶつけられる。

ローガンは腹の中で蠢こうとしていた黒い現実を燃やし、また新たに戦意が猛る為のガソリンとして注いだ。

冷却され始めていた手足の指先に熱が通つて手元に転がっていた石を握ることもできる気力が漲ってくる。今だったら手の内にある石を砕いて砂に変え、ナイフ一本でこの場を制圧できそうな気分にもなつてもくる。だがそんなけなしに生み出した闘争心だけでは現実を変えれない。精神論で現実を自分の良いように路線変更させられるの

なら誰だつて苦勞しない。

だからこそ、自身の生存をかけた『鬭争』という本能のままにローガンは決断した。「……なるほど、立派な考えをお持ちのようですね。個人的に少々あなたと語りたいた気分にはなりますがエクスキューション、罨にかかった獲物がどうなったかの第二の確認報告が来ていません。遅くとも今には来て居る筈なのに音沙汰ないのが奇妙に思いませんか？」

「二人が死んでいるつづうことで追跡する旨の報告が来たのが十分ぐらい前か。だが通れるだけの撤去も済んだつてなことだし順調に行けばもうそろそろきていいぐらいだろ。単にてめえにとつて話の風向きが悪くなつたということと理由を作るべく言つてねえか？」

「そうではありませんよ。こちらで設置しておいた地雷原の方からも爆発音が一切聞こえてきませんし、少々気がかりになつて来ただけです。気が急いでいるだけだと思ふのかもかもしれませんが、むしろ臆病で慎重になつた方が沼に踏み込まなくて済むなんてことだつてありますよ」

「はあ……まあ仕方ねえか。おいお前ら、全員でもと来た道戻つて状況確認に行つて来い。会敵したなら即座に報告してこつちに情報を回せ。それと、グリフィンの男を捕縛した時は殺さずに連れて来い、わかつたな」

エクスキューションナーは溜息を吐きながらそう言うと、巡回を続けていた鉄血兵を集結させて指示を通達。それを受けたヴェスピド達は陣形を維持したままローガンが通つて来た道の方に足を向けた。

こちらに気付かないまま向かつて行つた敵の背中を見ながら、ローガンは無線機に手を当ててG11達に警告した。

「G11、そつちに鉄血兵が向かつたぞ。数は六体で全員がヴェスピドだ。必要ならばバックアタックもできるような俺も戻るぞ」

『了解だよ。大丈夫、こつちで迎え撃つ。ローガンはそこでできることをやってくれればいいよ』

「本当にいいのか？正直戦える奴をお前が動員したとしても怪しい所があるぞ。お前の実力は知ってはいるが……」

『相手はたった六体のヴェスピドなんですよ？そんなのにあたしが負ける理由はないよ。それにローガンから接近してくる情報をもらえてるわけだし、こつちから待ち伏せだつてできる。慢心なんてなしに取り掛かればあたしは勝てるよ』

「お前の周りにいるのは404小隊の、45や9、416みたいな腕利きのベテランじゃない。それも鹹味してもそう言えるんだな？」

『あたしだつて眠いのを堪えてこつちまでやつてるんだよ？もし早く作戦を終えて心置き

なく寝させてもらえるならあたしだつて全力を出す。それともローガンはあたしに信じさせておいて信じてくれないの?』

「いいや、そうじゃねえよ。単なる最終確認だ」

やれることはやろう、とローガンは静かに横に動いて完全に自分を物陰に隠す。自分一人である二人を倒すことまでは残念ながら叶わない。暗黙の了解としてローガンも鉄血のハイエンドモデルに遭遇した際は基本的に撤退を命じられている。そうなっているほど、エクスキューショナーとアッシュのような上級人形の実力は徘徊している鉄血兵と天地の差がある。

だからできることなどないに等しいが、それでもできることがあるとするならば。

「任せたぞジー。今のところ、お前が一番の頼りだよ」

『こつと言うのは柄じゃないけど、信頼に応えるようにするよ。帰るときは膝枕をよろしくね』

「ちやつかりしやがって。頭も撫で回してやるから覚悟しておけよ」

ゆつくりと体勢を整えてからローガンは通信を終了させると、肺に多くの酸素を静かに取り入れて変換された不要物を吐き出す。それに含まれているのは二酸化炭素などの生物学的な物だけでなく、心のしこりになりかけていた不可視のそれまでもを排出してから気持ち切り替えて為すべきことを整理した。

ゲートの前にいるエクスキューションナーとアツシユを倒すか否かは置いておくとしても、『オアシス』を手に入れて逃げ切りさえすればこの場では勝ちではある。その後G11やハモンド達だけでなく416やバルソクとハルカと合流しなければならぬ。

これから選ぶ道のりは楽でない上に現実的ではない。最も利口な手段であるのなら、どこかで抜け道を発見して後続の416達と合流。再編成してからまたここに来て鉄血のエリート達と交戦する、というところなのだろう。既にG11達の方に鉄血兵が向かっており、知らされた彼女から助太刀は無用とまで言われているので変な我を通すつもりはない。

「ヤッ……」

結果はどう転ぶかはわからないことを理由になにもしないわけにはいかない。ローガンは思いながら『P226』とナイフを握り締めた。

逃げるか戦うか。大きく分けられたその二択のどちらかの選択を強いられるのは今回が初めてではない。生き残る為に最善を尽くす、その強い意志を柱にするのはもはや恒例行事と同様だ。

今回では後者は論外、あまりにも戦力差がありすぎている。体得している体術がある程度通用するのはイントウルダーと一時間前にもなっていないエクスキューションナーとの戦闘で証明されたが、それだけでは不十分。相手の武装も合わせて考えて見ると尚更不利な博打に近いのは言わずもがなだ。対する前者も反射的な生存本能のままに逃げてその場を凌げたとしても必ず五体満足でいる敵の魔の手に絡めとられてしまう。似た状況下でそんな苦い経験は既に行っている。

とはいえ、互いに対極に位置するそれだけが選択肢ではない。例を上げれば、少数による敵地潜入による隠密任務であれば戦力的に不利なのは必然なので、敵を目視で捉えてもすぐに片付けずに『やり過ぎ』やこちらにとつて都合のいい状況になるまで『待つ』というのもある。さらに枝分かれする手段のうち、ローガンが選択したのは戦いだけでなく人生の師でもあった人物が一度だけ取った手段。

「……これはおそらく人類側の銃声ですね。鉄血わたしたちの銃はここまで甲高くはないです。エクスキューションナー、彼らが私達を打破するのだとしたら、彼らにはどのような追い風が働いているのだと思いますか？」

「連中の武装にマグナムとかの大口径の銃があつたりして下手すれば戦局がひっくり返される。一度食らつてしまったことがあるから言えるがああ威力は侮れん。四肢がもがれてもおおかしくない」

「私はそれに類する物を手に取つたことはありませんが発砲までしたことはありません。拳銃などとはそこまでかけ離れているのですか」

G-1達による交戦が開始されたのか戦闘音に合わせて二人の会話も聞こえては来るものの、それでもいつでも戦闘体勢に移行できるようにはなっているだろう。仕掛ける前に下手を打てば心構えまでの全てが水泡と帰す。細心の注意を払いながらローガンは見つからない範囲で距離を詰めると、一旦ナイフの代わりに左手で慣れ親しんでいる投擲物を握り締めた。

ピンの輪に指を掛けた瞬間、ピピピッと電子音がこれから向かう先から聞こえてくる。それで動きをローガンは止めたが、その音が何から発せられたのかは敵方から明かされた。

「……おっと、我々の指揮官からのお呼び出しですよエクスキューションナー」

「かつたるい定時報告の時刻だから向こうからかけてきやがったか。わざわざこんなことをする必要なんかねえだろうに」

「それだけ彼女も今回の事案を重要視しているのでしょう。大々的な目論見が頓挫することがなくとも、そうならざる可能性を秘めたのが『オアシス』ですから」

よくよく噛み砕けば到底聞き流すことが出来ないことを話しているが、逆にエクスキューションナーの注意が別に向けられるというところでローガンはピンを抜くと光源がある方へとすかさず投擲した。カンッ!と煙を吹きだしたそれが地面にて跳ねていくのを視界に捉えながら、『P226』で可能な限りそこで展開されていた照明を破壊。そして粗方の光源を壊すと弾倉を取り換えて標的の方へと一直線に走った。

「このタイミングでかよ……!?!」

そのような呻きを聞きながらもローガンは駆けてスモークで視野を奪われた標的に接近。さすがに戦い慣れているということもあってかハイエンドモデルの一体はただやられるということではなくこちらからの組みつきに対抗してきた。煙越しにようやく気付いた時にはほぼほぼゼロ距離であったので、ローガンが抵抗の手を受け流すのは容易ではあった。が、第二の反撃までのインターバルが短かった。

先に掴みかかって来たこちらに突き出した腕とは逆のそれでフックを仕掛け、こちらの側頭部に命中させようとしてくる。無駄のない動きによる反撃でローガンの肝も一

瞬だけ冷えたが、すかさずナイフを握った腕でブロック。勢いが完全に殺せぬまま敵の細腕が自身の頬を叩いたが衝撃でよろけてしまうほどではない。

「ハ、の野郎……！」

痛みで顔を顰めながらも攻撃に転じ、また一步踏み出して距離を詰めると腹に一発『P226』のグリップで殴りつけた。たまらず身体を折りそうになった鉄血の上級人形だったが、こちらを絡めとる第三の巧手を講じてくる。フックの勢いを抑えたローガンの左手を掴んで関節をキメるように捻り上げりながらも自身は対峙しているこちらの背後に移動してきたのである。

(この動き、対人戦における近接格闘術を!?)

ローガンの経験による話になるが、これまで鉄血兵との接近戦において武器を振るわれることはあっても素手の状態から搦め手による戦闘術を駆使されることはなかった。同じハイエンドモデルのハンターとは接近戦にならずAR小隊による掃射の火力で圧倒したが、イントウルダーでは第三者から見ても近接戦も交えた武器による戦闘であつたに違いない。彼女らも鉄血工造という勢力が所持する戦力の一角であつたのだと言われても特に違和感も何もない、それだけの実力者であつた。

そんな彼女らも殴る蹴るなどの四肢による原始的な攻撃をすることがあつても、人間にとつての可動域外の方へと腕を動かそうとするような一日二日で体得できるもので

はない武道などを駆使することはなかった。人間とはかけ離れた力を発揮できる戦術人形だからそのような戦闘手段を取る必要はない、などと言われればそれまで。

それだからこそ今こうして腕力などに頼り切った単純な攻撃ではないことにローガンは内心驚愕しているのである。同じ立場の難民や人道を外れたロクでなしを殺していた、兵士として戦う前の歳月も含めれば十八年以上。それだけ戦闘経験を積んでいても経験したことがない初めての相手にローガンはさらに警戒心を強めた。

(でもこれならまだ——！)

応じようがあるとして、ローガンは背後に回られるよりも先に自身の左腕の関節部分を右手で無理矢理ロックして外れることがないようにする。左手を掴んでいたハイエンドモデルの人形は途中から腕が回らなくなったことで反射的によるものなのか足を止め、掴んだ手を伝ってこちらに視線を動かそうとしていた。

すかさずローガンは左足で敵の戦術人形を蹴り上げて転倒させ、左腕全体からの痛みやら痺れによる主張を無視しながらその人形をうつ伏せにさせて片腕と一緒にやや体重をかけると、自身に引き寄せてナイフの切っ先を喉元に突き立てる。人質を取ると同様に抵抗させぬように動きを封じ、スモークが晴れたことでやや視認できるようになったもう一人に『P226』の銃口を向けて発砲。

一時ではあるものの無力化された上級人形はこの一連の流れに感嘆に捉えられる言

葉を漏らす。

「奇襲といえど単独でここまでやれるのですね。ですがこんな手段は突拍子過ぎて合理的ではないのですか?」

「黙ってる」

アツシユの言葉を蹴って引き続きエクスキューショナーがいた方へと撃ち続けるが、未だにはつきりと有効打を与えられたようではない。煙が立ち込められている中から敵方から明確な反応が返ってこないこともあって周囲を警戒しているとさらに視界が開けて撃っていた方をはつきりと視認できるようになった。

発砲を止めて銃口を向けている先を見てみると、そこには大型拳銃をもってこちらに向いているエクスキューショナーの姿があった。こちらを視覚で捉えた彼女はすぐさま照準を定めたようではあったものの、アツシユが人質にされているのを理解して舌打ちし言った。

「なに大人しくそいつに抑えられているんだ阿保。腐つてもてめえも戦術人形なんだからホイホイ負けてんじやねえ」

「もちろん私としても負けるつもりは微塵もありませんでしたよ。ですがやはりどうか、技量を最大限に活かして上回ってきているんです。一度あなたも瀬戸際に追い込まれたのですからなんとなくわかるでしょう?」

再度舌打ちしたエクスキューショナーが忌々しそうにこちらを睨んでくるが、下手を打てば痛い目に遭うのは自身の方だということをおぼろげにわかっているらしく手に持っている大型拳銃を撃つて来ない。

ローガンからすればそうならなければ困るのだが、二人の様子からよろしくない雰囲気から『気に入らない奴も始末出来て一石二鳥』とか言うことも考えていたのである。それが杞憂に済んだことに少しながら安堵しながらも対峙しているエクスキューショナーを改めて見てみると、こちらに半身になつてゐる彼女の右腕に弾痕が見え隠れしている。ローガンが放つた銃弾には当たつてゐたようだった。

「てめえらがどう考えているかは知つたことじゃないが、世界規模の大惨事が計画されているんじゃないやてめえら全体で謀つてゐることを知る必要はあるしな。その為にも『オアシス』は俺達ももらう」

「そうだろうなとは思つていたが、イントウルリーダーから奪い返した『鍵』の持ち主はやつぱりてめえかよ」

「俺は俺が信用できる他の奴に持たせた方がいいとは思つていたんだがな。だが結果論で言えば正解ということになるな」

「だがこのままじゃゲートを開けることは出来ねえだろ。オレ達とこうしているだけじゃ膠着状態だ。それでどうやって一人で確保するつもりだつてんだ」

「誰も俺一人でやるとは言ってねえだろ。こうしていけばいずれあいつら^{G11}が来るまで俺は現状維持でこうしていればいいだけだ」

ギリリツとエクスキューションナーが歯ぎしりして悔しがっているような様子を見せる。彼女の赤目からは殺意が明確に顔を覗かせており心情を窺わせていた。

もし彼女に弊害が生まれていなければ容赦なく撃つていたであろう。が、まだ引き金にかかっている彼女が動けばローガンはすぐさま組み伏しているアツシユの首へとナイフを突き立てて『P226』でエクスキューションナーに反撃する。それが誰にでもわかるようにこちらからも圧を意識して発している足元から声が聞こえてきた。

「ですがなぜあなたはまた撃とうとはしないのですか？捕虜にして情報を得るのであれば今からでも足を撃つなりすればいいのに」

「俺からまた追撃使用するものならてめえのお仲間も見逃さないだろ。だからこいつはてめえの仲間と俺の我慢比べでもあり、いずれは俺の勝ちが決まっている持久戦でもあるつつうことだ」

「あなたのお仲間が私達の兵に負けるといふことは考えていないのですか？こちらが得ている情報では分断されて私達と戦うには非常に乏しい状態の筈。不確定要素は少なくとも大きすぎですからあなたも思い至っていないことはないでしょう」

「^{G11}当人から『やれるから信じてくれ』と言われたんだ。だったら多少心配になっても信じ

てやるのが俺の役割で、他にやれることがあるのなら実行しておく。それだけの話だ」
「……危機的状况に陥っているというのにそう言えるとは。それほどまでにその方を信頼しているのですね」

「他に思うことはあるぐらい、三大欲求を一丁前に主張しても実力は本物。それに……」
これまでは見られなかった落ち度があれば一生懸命に取り返そうとする一面もあるしな、と言葉を紡がずに心の中でそう言葉を漏らして口元を僅かに緩ませながらローガンは『P226』の標準をそのままエクスキューショナーの身体の中央に定め続ける。さらにアツシユとは対照的な様子の彼女の挙動の一つ一つに注意を配りながらも、切羽詰まっていけないように見えるハイエンドモデルの背中と右腕に掛けている体重を自身も忘れぬように続けた。

「そういうえば、私から出した命題について考えてくれましたか？できればその回答をもらいたいのですが」

「学び舎で出される宿題でもあるまいし律儀に回答する必要なんでねえだろうが。生き残るのに精一杯だと言うのにそこまで頭を割けねえよ」

『それもそうだよ。仲間と目の前のことで精一杯だという人に急かすのは酷な話じゃないのかな』

その声には聞き覚えがあった。

「ババツ!と今まで沈黙していたゲートに備え付けられていた照明が点って辺りが照らされていく。照明とは別の機械音までもが響き渡っていくことで地面だけでなく空洞までもが揺れてエクスキュージョナー諸共少々体勢を崩しそうになったものの、ローガンはしゃがみの体勢になっていたのでアツシユに隙を見せるほど大きく動くことがなかった。

視線を移さずにローガンは響き渡って来た声に向けて言葉を返す。

「久しぶり、て言えばいいのか?それともこの間助けてくれた礼としてありがとうなんてのが欲しいか?」

『うくん、どうなんだろ。こっちとしてはきちんと約束を果たしに来てくれたことで嬉しいんだけどさ。そんな追い討ちみたいのをしてさらに喜ばせたいの?』

「ありきたりなことをそんな風に捉えられて困惑の真つただ中だが両方くれてやる。

『久しぶりだな、この間のアシストは本当に助かった。サンキューな』

『うわあくつつても棒読みで心が籠ってなきそう!』

「それでも言ってることは本心だよ」

ゲートのスピーカーから何かから発せられている声には喜色が聞いている限りでは窺えて裏が無いように思える。それにその活発な声が間違いない『あの時』に聞いた時のものとして内に生まれていた一つの疑問に決着をつけた。

忌々しそうにしているエクスキューションーではなくその声に、ローガンはさらに心からの感謝を贈った。

「本当に助かったよ。お前が手助けしてくれなかったら、たぶん俺はあそこでクソ共に殺されてた。おかげであの一件を解決まで持つていけたんだし感謝してないわけないだろ」

『それならよかったよ、どういたしまして。それじゃあ改めて自己紹介した方がいいかな?』

「そうしてくれ」

そう返すと咳払いがまず最初に響いてくる。そしてその少女の声が紡いだ言葉ははつきりとしていて、今回の件にて鉄血と争う元であることを明確に示していた。

「あたいは機密情報の探査と伝達を目的に製作された独立型AIの『オアシス』。あなたが来るのを心待ちにしていたよ、ローガン・ブラック」

46. オアシス — Dice was thrown —

その声を前に聞いたのは大欲怨霊事件の最中。孤立してしまいがちながらもグローザ救出の為に敵地と化したダム内に潜入するとして草木生い茂る中を進んでいたあの時だった。『アネクトート』の一人を尋問に掛けていた時に周波数も記載されたショートメッセージをローガンの端末に送って接続し、ロシア絡みの彼らの情報を譲渡と同時にダムへと続く通路の方へとナビしてくれた誰か。

あの時影ながらも助けてくれたのは誰だったのかを一切考えない程、ローガンだって恩知らずではない。大欲怨霊事件の解決後はこちらの救助に来て欲しいとの条件に従って行動しようと思ったが、その前にその者に繋がる情報などは何一つないように思っていた。

だが通信途絶後に最後に残されたメッセージには『座標』と『地図』という単語によるヒントを、後々に行動を共にしたバーンズから『オアシス』に関わる情報を得た。枝分かれしている情報からまた別のそれへと、まるで先の見えない路線図のようで少々頭を悩ませてしまうのも仕方がない。だが『オアシス』に辿り着くのに必要なものとして大々的にあげられている二つの名前は一致している。そして本体からある人形を経由

して接続したのだということを書いてもいたので、そこでイフの仮説をローガンは立てていた。

通信方法などの細かいことは置いといて、もしかしたら『オアシス』が手助けをしてくれたのではないかと。

「なに一つも根拠なんてなかったというのに、まさか本当にそうだったみたいで驚きだ」
『そうだろうね。こつちからは明確にヒントらしいものは寄越していなかったから予測が外れていても仕方ないかなとは思ってたよ』

少々耳を覆いたくなるほどの音響ではあるが、ヘリのローダー音のように連続しているわけではないのでまだ我慢できるくらいである。その前に両手は今敵の動きを封じ込めるのに精一杯で他の事に回せないものの、状況的にはそこまで悪くはない。

地に伏させているアツシユに片腕を負傷し銃をこちらに向けて引き金に指を掛ける、その一歩手前で静止を余儀なくされているエクスキューショナー。こちら側も妙な動きはできないが、次第に鉄血兵と交戦して勝利したG-1と合流するのも時間の問題だろうとローガンは考えていた。他の者がこちらに来て手が増えれば、今こうして会話しているオアシスの確保もできるようになる。そうなるのも時間の問題で鉄血の兵としていた彼女達からすればよろしくないのは明らかだ。

「とりあえずもう少し時間をくれよな。もう少し我慢してくれればお前をここから連れ

出せるだろうから」

『もちろん、約束通りに来てくれたんだから急かしたりも何も口出しはしないよ。この場においての一連の流れは見てて危なっかしいことこの上なかつたけどね』

「ツーマンセルとかを組んでる奴とかからもよくそう言われるよ。でもそれって戦術人形であつた時の経験も踏まえての評価か？」

『ん……まあそうだね。他の選択肢がありながらも危険が高いのを選ぶだなんて、危険予測とか危機管理が出来ていないんじゃないかと思うよ』

「説教は勘弁してくれ。俺にそんなことをする先生はもういるんだからよ」

一人の桃髪少女を思い浮かべながらもそう言葉を漏らし、ローガンは密かに切迫している自身の精神を持たせるようにする。一歩どころか半歩間違えれば転落しかねないこの状況下では、指一つでも動かさばすぐさま相手から反撃を受けるのは言わずもがな。加えて敵の一人は押さえ付けてはいるものの、どこかで力が緩みでもすれば戦線に復帰されて逆に追い詰められてしまうのが目に見えている。それだけでなく対峙しているエクスキューショナーに至っては殺気が溢れていて、新米^{ルーキー}であれば逃げ出してもおかしくないぐらいであつた。

自身の手が空くようになるのはいつになるのかははっきりとはわからない。オアシスと会話できるようになつたのはいいのだが、G11達が差し向けられた鉄血兵の排除

が出来たかどうかの確認の一つとして銃声まで聞こえなくなった。それが意味するのは単に至近の音響によって聞こえなくなっているだけか、有言実行として結果を成したのか、それともその逆かはもうわからない。こちらもこちらで自分の目の届く範囲の事しかもう注意が払えないので、できるだけ早くこちらに駆けつけて欲しいというのがローガンの本音である。

『それにしても、あたいを消す為に鉄血も手を打って来たんだ。やっぱり『代理人』は一番悔れないね』

「てめえの情報を得たのは偶然、それで無視するのは到底出来ないつつうことでオレ達が寄越されたわけだが……まさかこんなにおしやべりな奴だとは思わなかったな」

『その口ぶりからすると、あたいがどのメンタルモデルから構成されたか知らないようだね』

「知ったことかよ。こつちからすれば害悪でしかないてめえが元はどこ誰だったなんてオレ達には知る必要なんてどこにもねえ」

『……まったく、やっぱり鉄血というのはそういう点でもないクソの掃き溜めだね。人類と比較してもトントンかもしれないけど、良心が少なからずもある分人間側に傾くのはもう揺るがなさそう』

呆れたかのようにオアシスがそう言われたことでエクスキューショナーの怒気は増

す。これまでに相対した者の中で一番に恐れを抱いて冷や汗を流すが、ローガンが瞬きをした瞬間には『P226』の照準から消え去り、そこには土煙だけが残されていた。一瞬の事で何が起こったのか分からなかったが、すぐにゲートの方から轟音が響いて来たのでどちらに視線をスライドさせてみる。するとローガンと睨み合いを続けていたハイエンドモデルは太刀を振り抜いて衝撃波をゲートに命中させていた。

ドオンツ!!という轟音と共に衝撃波による疾風がローガンを叩き、すかさず『P226』を持った腕を眼前にかざして様子を見る。闘気と怒りの矛先がこちらでなくなつたもののいつまた戻ってくるのか分からないので警戒していると、大きな傷らしいものが刻まれていないゲートを足蹴にしてエクスキューションナーは吠えた。

「どっちがマシかなんて討論に興じるつもりなんかねえが比較の対象にあんな屑をもつてくるんじゃないか！」

『何がそんなに腹立たしいのさ？それに秀でているかの比較として人間と人形の二つを上げることの何が間違えてるといふの？』

「前提の問題だクソが！人型とかそういう謎かけとかじゃなくあの屑どもとオレ達にはなにも比較の前提となる類似点がねえじゃねえかよ！それに一番腹立たしいのは……！」

『見て見ぬふりをする、同情だけして救いの手を差し伸べないとかの話ならあたいも聞

いてたよ。あんたが一番腹立たしく思っているのはそこで、鉄血工造の戦術人形として当て嵌められた目的以外で人類殲滅に結び付けてる個人的な理由、そうでしょ？そもそもさ、人間とあんたも含めた鉄血の戦術人形に前提条件がないって、あんたも考えているように考えてないよね。あんたら鉄血の人形だつて戦術人形だつてことを忘れていないわよね。元を辿っていけば人間によって結成された会社の商品で人工物であることは揺るがない。彼らにできないことをする、又は手助けをする為に生み出されたのが自律人形で戦術人形というのはそこから枝分かれして生まれた存在でしかない筈。それを明確に示す為に彼らと比較されるのは避けられない事よ』

オアシスが言っている事にローガンも耳を傾けて事の成り行きを静かに見守る。静かでありつつも熱が籠っているオアシスの言葉の一つ一つをそのまま受け止めていると、エクスキューションナーはやや気圧されたかのように見えたがすぐさま反論しようと思わなかった。

「間違つたことを言っていないとして得意満面になつてんじやねえぞ！あんなのを同じ土台に引つ張つてくるだけの筋道があるんだとしても……!!」

『そこで更にゴネてみる？いいよ、言えることがあるなら言つてみなよ。たぶんあんたの場合じゃそこからは私情の話で感覚的な話でしかないだろうからあたいはどうも思わないよ。あんたが人間と比較されたくないから凄んで否定してもそれが知性を持つ

てる全生物に通じるわけではない』

ダメ押しとばかりにエクスキューションナーは今度は大型拳銃でゲートに向かって発砲するが、それでオアシスが破損するわけがない。バアン！と跳弾で付近の壁を抉って石となったその一部が転がっていくのを大体ローガンと同じ位置で見ていたアッシュが言った。

「……実際の所、戦術人形が生み出した戦闘データというのは速度と効率によるスコアとして管理している人間達の方に出回ります。そうでもしなければ、戦術人形という戦うことを主目的に開発されたことを証明する為の材料を得られませんからね。優秀な人形であることを知らしめるにはエースという肩書きを得ている人間の兵士と競い合いになることは必然。単純な戦闘力だけでなくリーダースhipも問われて、思想までもが比べられることだってあり得ないことではありません。その対象は同じく戦術人形の誰かか、それともメンタルモデルとしての基となった人間かのどちらかはわからないけど同程度の知性を持つているとして選択肢にあがってしまいます。開発元がI. O. Pか鉄血であつても、次へと活かす為の貴重なデータとして技術者は見ているでしょうけど、人間そのものを嫌っている彼女からすれば腹立たしいこと以外でしかないでしょうね」

『そういうこと。次へとステップアップする為に何かと比較することなんて日常茶飯

事。だってそうでもしなきゃ一切進歩できないじゃん。過去の自分から前進しているのだということを確認にすることを理由に振り返ってみている間にも、周囲の人からは自分が思ったよりも何倍にも比較されてる。与り知らぬところでそうされていたことに不快に感じるのは仕方ないとしてもそれを拒否しているんじゃないやこの世界を歩いていけない。それを理解しようとしていないのはあんたの落ち度だよ、エクスキューズナ。これだけでもあたいが人間側に就く、十分な理由の一つになり得るよ」

「黙れええええええええええええええ!!オレにオレの仲間を殺した奴を認めさせるんじゃないええええええええええ!!」

激昂しているエクスキューズナがさらに太刀を振りかざして何度もゲートを斬りつけては報われない結果にさらに憤慨する。その様に心が晴れるということにならないまま、怒りの矛先をこちらに映さぬよう時間稼ぎとして静観していた時だった。HUDの方に遠距離通信がオンラインになったことの表示が現れ、沈黙していた無線機から声が聞こえてきたのである。

『こちらグリフィン北米支部指令部のプロフェット!アルファ、応答してくれ!』
「プロフェット、こちらアルファ。感度はイエローだが聞こえてる」

少々端末を操作して調整したかったが、もしもの時もあるとして諦めローガンは応答を返して自身の生存を伝えた。その声を聞いた指揮官は一閃空けた後にむ無線機越し

に安堵の溜息を漏らしたらしいがすぐに立ち直ってみせた。とはいえ、その声は少々力が抜けていてまだ完全に持ち直した訳ではなかったようではあったのだが。

「状況報告、というと色々と言わないとならないんだが……」

『大まかなことなら416から聞いたから大丈夫。瓦礫を切り崩してそつちを追尾していた鉄血の部隊を掃討してG11たちと合流したそうだよ。だけど早期決着を狙っての戦闘で彼らから死傷者は出てしまったけどなんとかなったみたい』

「……そうか、合流できたのはいいが事が済んだらきちんと收拾をつけないとだな」

ローガンは胸を撫で下ろしながら勇敢にも戦って命を散らした兵士たちに黙祷する。響き渡る騒音を意識的にシャットアウトし心の内に訪れた静寂の中で死した民兵達を悼んだ後で、援軍という存在により肩の荷が少し降りた気分になるよう努める。感情の底なし沼にずぶずぶと嵌まらぬことにならないようにし、傷心しているのが悟られることにならないようにもしながらハリーに報告した。

「報告。先行した後に目標地点に到達して連中のボス二人と膠着状態にさせていたんだが、思わぬ方向からの手助けで時間は稼げている。一人は捕縛、もう一人は……回収目標と悶着中」

『ちよつと待った。ツツコミどころが複数あるけど大前提の問題だ。君一人でハイエンドモデルと交戦するようなバカなことをしたのかい?』

「奇襲を仕掛けて一体だけを人質にするべく速攻で……てな感じで。さすがに連中も自軍の優秀な仲間を失うのは手痛い以上の損害を被るだろうから、半分賭けではあったがうまくいったよ」

『……運かいいのか巡り合わせが良かったのかわからないね。それを隠すどころか臆せず言えるあたりから手馴れてる気がするけど褒められたことじゃないよ』

「こんな局面でお前まで説教するのかよハリー。お前の場合だと外堀をじわじわと埋めて落ち度を認めさせようとして来るから俺からすれば一番苦手だぞ」

『それじゃあ今回からその方向性を強めて行こうかな。そうでもしないとローガンは猪突猛進な悪癖を直そうとはしないでしょ』

うげえ、と心からの呻き声を出して忌避したい衝動のままに無線機のイヤホンマイクをそのまま耳から外してしまいたくなくなったが、一時的に耳を塞ぐようなそんな行為では何も意味ないとしてぐつと堪える。

自分以外に銃を持って戦える味方がいない以上はそんなことをして不安にさせるのも悪いし、大きな動きをすればエクスキューショナーに気付かれるかもしれない。アツシユの方に視線を落とせば自身の仲間が八つ当たりをしている子供のようになっている様に苦笑いを浮かべていてこちらの小声による会話に耳を傾けていたかどうか分からない。が、こうしてローガンの手で組み伏せられている以上はよっぽどの力を発揮

しなければ動けないので、このまま援軍の到達まで待ち続けければ一緒にフロリダ州に現地入りした戦術人形三人とハルカ達がエクスキューショナーだけを相手取るだけで済む。勝てるかどうかは別として、ハイエンドモデル二体と同時に戦うよりは大分やりやすくなる筈だ。

「……とにかく、早く来てくれるようだと助かる。プロフェットと繋げられたということとは皆も聞こえているんだろ」

『まあそうだね。僕らの会話が円滑に進むように黙ってくれてはいるけど全員が聞こえているだよ。それでアルファ一、その状況下でエクスキューショナーと交戦するとして君はどうするんだい？どっちみち、戦っているのを暢気に観戦するつもりなんてないんだろ？』

「スポーツ観戦じゃないんだし当たり前だ。つうか銃弾が飛び交って命を掛け合う競技なんてあつてたまるかよ」

『アルファ2と協力者、⁴聞いての通りだ。戦える人員を率いて今すぐアルファリーダー⁶がいる位置に駆けつけてくれ。このままじゃさらに無茶をやらかしてしまいそうで気がしなくなくなる』

『言われなくてもそうするわよ。私自身が散々な扱いをされるのは慣れてしまっているけど、唆されたりしたんじゃないやなく自分から火の中に飛び込むことまで見過ごすことまで

馴染みたくないわ』

『右に同じだ。部下やダチにしても自分から深い縦穴に入ろうとしている奴を止めない理由はない。待つてろ、今すぐ行つてやる』

「首輪を掛けられそうな勢いでガクブルが止まらなくてありがたくなつてくるな……」

416とハルカが残した言葉にローガンはそう独り言で漏らすと、彼女達が来た時に先んじてアツシユを無力化しておこうと、体重をかけたままナイフで関節部分の機構を切ろうと体勢を変えた。エクスキューションナーへの警戒を解かずにアツシユの動きを封じている自身の足の着地点を変える。そして人間であれば骨と筋を繋げている腱がある位置にナイフをかざした時、アツシユから非難がましい声が上がった。

「あなたは動けない敵に対しさらに追い打ちをかけるようなことを平然とする人間なのですか？ そうだとしたら私の中であなたにしていた評価を改めなければならぬのですが」

「てめえの勝手なそれを気にする必要はあるかよ。俺だつて好き好んでやろうとしていゝるわけじゃねえけど俺だけじゃない誰かの命も左右するのであればやるさ」

「趣味嗜好ではないのだと言うのですね。貪欲に自分達が生き残れるよう、最善を尽くしているだけだと証明できますか？」

「誰も俺が歩んだ生きた道のりを知らないしそれを示せる物もない。だから俺から提示

出来る物は何一つもないから証明なんて出来ねえよ。だけど……」

今一度、ゲートのオアシスに問答を繰り返して当たり散らしているエクスキューションーを見る。論じて勝てないから力で押し切ろうとする、そんな子供じみた真似が通用するわけではないのだということ、ローガンはもう知っている。だがこのご時世では逆もまた然りで、力ないまま言葉だけでは窮地を脱することも到底出来やしないのだ。蝶事件が起る前の数十年前より厳しい世界となった今では特に嫌な両立を強要されてもいるのだから生きづらくなっているのだと言つても間違つていると指摘されることはないだろう。

なのでローガンはアツシユに包み隠さずに言った。言葉選びなどせず、ありのまま内に生まれて膨れ上がっている思いをそのままに。

「投げ出したら俺自身を許せないぐらい、もう会えない人達に色々託されてしまっているんだ。一つ一つ見て行けば小さいけど、捨て置いて逃げる真似なんて絶対にできないししたくない。教官あの人に会うまでは自分が生き残るのに『死にたくない』という思いしかなかったけど、今はそれ以外にも理由は出来てしまつてる。加えてバカで相手をするのが面倒だった奴から『誰よりも強く生きてくれ』なんて真面目に言われたんだし振り返ることはあつても立ち止まれねえよ。だから俺は教官やあいつらから受け取つたものをなかつたことにしない為に茨道であつてもやるべきことをやるべくまっすぐ進む、

そんな覚悟があるつてのは胸を張つて言えるさ」

これまで出会つてきた者達の顔を駆け抜けるように思い描きながらも、ローガンは渡されてきた記憶や信条によるバトンの聖火の一部を自身の活動燃料としてくべる。ローガンは自分がどれほど悲しんで落ち込もうと怒り狂おうとも、それを理由に生を放棄し自分で掲げた目的までもを投げ捨てることなんていう選択肢を捨てた。手の内から失われてしまったが、この手は誰かに掴んでもらつてもいるのだから。

託された思いの為に。そして手を取つてくれている当人たちの為にも、逃げずに立ち向かうのだともうローガンは決めた。

それにアツシユからの問いに対しては野球の硬式ボールだけでなく追加で関係のないバスケットボールも投げて渡したようなものだが、十数分前のエクスキューショナーよりも堂々と意思を示しておかなければいけない、そんな気がしていたのである。

ローガンが衝動のままに発した言葉を聞いていたアツシユは対話のない一問を生むほど黙した後と言つた。

「私が求めていた解答とは違つていましたが、そのような信念を抱いているからこそあなたは立ち上がれているのですね。ここまで至るのにどれほどの苦難を経験をしたのかなど私にはわかりませんが、恥ずかしがることなく言えるということはそう思わなくていいだけの過去があるからでしょう。あなたのことですから嘘をつくこともないで

しようね」

「……そいつはどうか。思惑や理由があつてついた嘘だつて俺にもある。今言つた事にそいつが含まれているかもしれないぞ」

「偽りであることを考えさせるようなことまでも言つてるんですからそうは思えませんよ。あなたが発した言葉だけでなく声音も真剣そのものでしたからそう疑うのも杞憂でしょうし、元々からあなたはそう偽るのは得意ではなくできればやりたくない。そうでしょう?」

それに反論できないで口を噤んでしまつた自分に叱咤したくなつたが、アツシユが言つた事は正しい。欺かなければ自分が窮地に立たされることになるのであれば勿論ローガンも出まかせを吐くが、対立することがない親しき者達にはやはり良心が働いて抵抗が生じる。戦地に迷い込んだ難民の子を助ける過程で安心させたりする為に言つてずると引き摺つてしまうことだつてあつたし、彼女が言つた事を認めざるを得なかつた。

手が空いていれば額に手を当てたい気分になつたが、すぐにそれは消え失せた。次にアツシユがポツリと漏らした言葉が確信を得たものになつていたからである。

「もう大丈夫。やっぱり間違つていなかったよ、——」

「お前、今なんて……?」

問い質そうとしたその時、伏しながらも自分に向けられたアツシユの笑顔は違っていた。ファーストコンタクト時から見た『ただただ笑っている』だけのそれではなく、感情が含まれているそれになっていることにローガンは言葉にならずとも直感で気付く。体裁を整える愛想笑いからの変化にローガンが問い質すのよりも先に視界が大きくブレた。

前触れなどない、あまりにも突然のことにローガンも混乱したが、一からすべてを頭で理解する必要がないのだというかのように背から不時着。受け身を取らなかつたことでダイレクトに背骨に響き渡る衝撃と遅れてくる鈍痛で顔を顰めたが、長年の経験で染みついた——もしくは染みついてしまった——反射行動のままに後転し体を起き上がらせると両手には慣れ親しんでいる武器を正面に構えた。

『P226』のアイアンサイトを覗き込んだ先にいたのは体勢を整えて地に足をつけているアツシユ。それですぐにローガンはこの場への奇襲をする前よりも最悪な事態に陥つたと理解しすぐに行動に移した。

「くそ!!」

悪態をついたローガンは『P226』を発砲しながら即時後退。正確に照準を定めるのではなく牽制を第一にした射撃であるので命中精度など皆無に等しい。されど敵がいる方へと撃ち放っている大雑把で闇雲な射撃であつても時と場合によつては一発だ

けでも命中することはある。

期待しているわけではなかった。所詮はまぐれ、当たればラッキーというだけで成功ありきでいるべきことではないからである。

だからといつてもだ、外れるのではなく『外された』というのは誰にも予想できなかっただろう。放ったうちの弾丸数発がローガンの運に運ばれていたのかは定かではないが、結果からして恐らくアツシユへの命中コースに乗っていたのだと考えられる。

さすがに牽制射撃といえないほどの壁と地面で土煙が上がり、後退していたローガンもさすがに驚愕する。

「な、に……!?!」

「理解できないことがあれば驚くのは無理ありませんが、みすみすその隙を見逃すほど私は易しくありませんよ」

声の出先へと視線を動かした時にはローガンの腹へと拳が叩き込まれていた。体内の内臓の活動が一瞬停止し、肺からは酸素もろとも空気が吐き出される。

その威力により身体がくの字に折れ曲がり両の足が地面から浮く。それを認識した途端、今度は背の方に衝撃が加わって地面へ叩きつけられて歪んだ視界一杯に暗く固いそれだけが収まった。

咳き込みながらも立ち上がろうとするが体が思ったように動かず、両腕から力が抜け

てまた頬から砂埃がある地面へと着地。四苦八苦しながらも再度起き上がろうとしても全身が麻痺しているかのようにとたどしい動きしかできない。

「これは危ないのであちらにどかさせてもらいますね」

ガララララツツという金属類の何かがざらざらしている平面を滑っていくような音が聞こえたのでそちらに視線を動かすと、右手から離れた『P226』がアツシユの足に蹴られて数メートル先まで転がっていた。万全の状態であればすぐに取り戻せる距離にあるというわけではない、駆けていくにしても背中を見せることになったりと無防備にならざるをえないほど遠くである。

「ごほつ……ちつくししょう……！」

「ご安心を、ここであなたに止めを刺すつもりはありませんよ。あなたの援軍がこちらに向かってくるのですからここも一旦退かせてもらいます。私も数で物を言われは一たまりもありませんしね」

「わざわざ勝ちを見逃す様な真似をしてんじゃねえよ……！俺を人質にするなりすればてめえらはまだ……!!」

「たしかに、そうすることでまた私達に追い風を吹かせることはできます。ですがそれではダメなんですよ」

うつ伏せになっているローガンのすぐ傍でアツシユが片膝をつくことで声が大きく

聞こえてくる。なんとか頭だけを持ち上げてアツシユを見上げると、彼女はどこか苦しそうでありながらも強がって見せているような笑顔でこちらを見ていた。それは彼女の仮面の一つなのかどうなのかはローガンにはわからない。だが人間でもそう易々とできる感情表現ではないことはたしかであり、とても小さな疑念にローガンは思えた。

「また会いましょう、ローガン。第四次世界大戦勃発の阻止の行く先でもし私を追うのであれば『彼女』が教えてくれるでしょう。いつか、いつの日か……あなたと共に……」

最後はエクスキューショナーの剣戟による音で掻き消されたので、アツシユの色素がやや薄い唇がどのような言葉を紡いでいたのかはわからない。読唇術なども身に着けていないことから様々な推測を立てるが、聞き返すことを忘れてしまっていた。

立ち上がった離れていくアツシユの足を掴むこともできずにローガンの右手は空だけを掴み、彼女は早足でエクスキューショナーのもとへと向かって行く。全身の痺れこそ徐々に緩和してきているが、まだ打撃の命中箇所である腹部と背中への痛みがまだ動けるほどになっていない。久々ともいえる、鉄血の戦術人形からの容赦のない近接攻撃の攻撃力にローガンは行動不能からまだ回復できていなかった。

「ご立腹の所申し訳ありませんがグリフィンの人形達がこちらに来てます。残っている私達の戦力も多くないですし、彼らがオアシスの確保に移っている間に戦略を練り直す

べきではありませんか?」

「クソが、もう奴らが来ているのかよ……! だったらあそこで動けなくなってるクソ野郎を引きずっていつてやるとしようじゃねえか」

「おすすめしませんよ。上のフロアに戻るとなると『崩壊液』コーラップスの被爆者との一度以上の戦闘は必然といえます。そこで常時見張つていなければならぬ人質と連れ行こうものなら確実に私達は彼等の餌食になるでしょう」

「だったらどうグリフィンの犬どもとケリをつけろつつうんだよ。ここでも拾わずに行くんじゃオレらが優位に立てる手段を取ろうとしていない、勝つのを自分やめようとしているのとまったく同じじゃねえか!」

「無理にハンターの戦い方を模倣する必要なんてないんですよエクスキューシヨナー。足らぬ点を補填しあっていた、相棒のようであつた彼女と同じ手段ではなく、あなたが本来の得意としていた戦術を駆使しましょう。世の中、戦い方は一つじゃないのですから」

こちらに背を向けているアッシュがどのような表情かはわからない。思考しているエクスキューシヨナーの顔に複数の負の感情が入り混じっているようなのだけは確認できたが、それが一切確認できない。

やがて言葉を飲み込んだエクスキューシヨナーは舌打ちすると、オアシスのゲート横

の方へと大股で近付いた。そして岩面に偽装させていたらしいパネルを開けてキーボードを露にすると操作。五本の指でキーを押して最後に大きめのキーを叩いた瞬間、バシユツと機械が空気を吐き出したかのような音と共に横の岩が横にスライドして一人が進んでいけるだけの通路が現れた。

そしてエクスキューショナーは眼光を閃かせたその両目でローガンを見て言った。

「オレを追って来い『狼王』。てめえらがどう足掻こうと無駄だつてことをここで証明してやる。この地下内がてめえらの死に場所だ」

そう残すとエクスキューショナーはその暗い通路の方へと進んで消え、アツシユもそれに続こうと歩いていく。

もうその頃には脳からの指令を十分に遂行できるほどに回復していたので、ローガンは『P226』の方に一回だけ大きく前転し拾い上げる。スライドを引いて一発だけ弾丸を排出させると即座に彼女に照準を定めた。

「待て、アツシユ!!」

「残念ですがそうはできません。現時点で言いたいことは言えましたし、私もお暇させて頂きます。ですがローガン、急いだ方がいいですよ。災厄の匣による審判のカウントダウンはもう数年前から始まっているのですから」

「意味わからねえことを言ってるじゃねえよ!」

バスバスタツと二回引き金を引いて発砲したが弾着するよりも先にアツシユの姿は掻き消えた。土煙が舞っている方向からして隠し通路でここから逃げおさせたようで、今すぐ追跡するにはあまりにも不安要素が多い。様々なことがこの場であり過ぎて情報で頭がパンクしそうにもなつて冷静さまでもを欠きそうになつたが寸でのところであつた。通路の方から不意打ちを食らわされないうよう、敵影がないことを見る範囲で確認。そして一切の危険が起こり得ないと判断したところでローガンは深呼吸をその場でした。

——落ち着けよ。奴らへの対応も重要だがその前に今回の任務のことを忘れちゃいけないだろ——

そう言い聞かせたところでローガンも通つてきた方から複数の足音が聞こえてくる。増援の鉄血兵が駆けつけてきたわけではないのだと、足音からしてもすぐにわかつた。行き着いたうちの一人、現状を概ね理解したうえで銀髪の少女がまず最初に口を開いた。

「……状況は？」

「逃げられたよ、俺達が通つて来たのとは別の出口を使われてな。あの見たことのないハイエンドが何かしらかの機能を発揮されて逆転された」

「……その様子からして単なるつまらない言い訳をしているわけではないよね。完璧

な私がおの場にあればこうはならなかっただろうけど、随分とまた無茶をしたのね」
「説教は勘弁してくれ。帰ったら正座させられて精神的に追い詰められるのがもうわかっているんだからここで滅多打ちになりたくない」

ジト目の416が耳が痛くなる台詞を言う前にローガンはこの場でやるべきことをやる為には腰につけているポーチの中でここまで触れていなかったそれを開けた。サイズとしては小物が入る程度ではあるが、様々なアクセシビリティを想定して対策がされた耐久性に優れた入れ物になっているというのには厳しい検査に立ち会ったとされている指揮官の言である。

その中から当たり障りのないデザインUSBメモリを取り出すと自身の端末に接続する。言うまでもなくこれがイントゥルーダーから奪取した『鍵』であり、オアシスを回収するのに必要なものの一つ。……いや、これが真つ先に失われればすべての努力が水の泡になるのだから、他のどれよりも一番嚴重に所持していなければならなかった代物だ。

端末に読み込ませている間にローガンはゲートのコンソールが起動していることを確認し、『鍵』が端末にインプットされたところで無線による外部接続を開始。ゲートを開けるのに必要なプロセスを『鍵』が処理しているのをローガンは画面を見て待つていとスピーカーを介して声を発しているオアシスが声を発した。

『へえ、北米支部の指揮官はここまでの人員を寄越して来たんだ。人数が少ないというので減点だけど事の重要性を理解した上で人選もしているようだし一先ず及第点に達しているね』

「グリフィンの事を知っているような口ぶりだな。私からすればその判定基準がどうあるのかのかわからないがわかるかバルソクとやら？」

「残念だが私もさっぱりだ。実戦経験が皆よりないせいかもしれないが、少なくともこのVIPが頭数だけで見ていないのはたしかだろうさ」

『もちろん、あたかも個人のスキルを見て言ってるのさ。優秀な結果を出して冷静な判断と実行力による自信をもっているHK416。惰眠を時間を無駄にしている日常生活から実戦になれば敵を躊躇なく正確に撃ち抜いて抹殺するGr G11。今はまだ経験浅いけど、マシンガンの戦術人形としてだけでなく新たな道を切り開いてものにしてようとしているAEK999。遠方からの細かい指示が届きにくいここで全員を率いるべく選ばれた、現場指揮官であるローガンの事だっけ知っているよ』

概要のように大雑把に言っただけではあるが間違っておらず全員が目を剥き言葉を失う。オアシスが情報探査・伝達を主軸の目的とされているAIであるのを伝えられたのはローガンだけなので無理はないが、長らく幽閉されていたのとほとんど変らないというのにローガンも驚きだった。

「……随分と物知りのようだな。鉄血の企みを阻止することを目的にグリフィンが動くのは予測していた、なんてのも考えてしまうがな」

『まさか、そんなわけじゃないじゃん。組織そのものを信用しているわけじゃないけど、あの中には言うことに耳を傾けて得た情報を選別・吟味して素直に自分の中に落とし込める人だっている。そんな人は信頼できるからローガンにコンタクトを図ったんだよ』

ハルカとオアシスの会話の中でデータ処理が終わって端末の画面に『認証完了』という文字が表示されたので、ローガンはコンソールのパネルを『閉』から『開』にするべく操作した。赤い表示から緑の色に変わると付近に警告音が鳴り響き、白塗りで重々しいゲートがゆっくりと開かれていくのに反応して各々が身体をビクつかせて距離を取る中でオアシスの声ははつきりと聞こえてくる。

「ビーツ!!」という警告音に掻き消されないのは単にオアシスが発声するのに音のボリュームを上げているからかもしれないが恐らく違う。それはまるで真に迫った予言のようであって、この先起こる災禍というものの備えをするよう呼び掛けの警告でもあったからだ。

『さて、楽しい時間は無しだよ兵士諸君。ここを脱した後には鉄血だけでない、巨悪ともいえる敵を相手にしなければならぬからね。国家や人種などは関係ない全世界における生存戦争を繰り広げられようとしているのをわかっていながら見て見ぬふりをし

ている、そんな奴らと人類そのものを世界規模で根絶やしにする大規模な計画を企てている鉄血工造。その二つの勢力との内なる戦争の渦中にいながらどう活路を切り拓くのか、これから模索しよう。……まあとりあえず無事に帰るまでが任務なんだし、ここからさっさとトンズラしようぜ☆』

……最後の一言が余計ではないかと思ったのはローガンだけだろうか。

47. 折り返し地点 — Secret proposition

t i o n —

現地で行える装備の確認というのはやれることが少ない。自陣からの出撃前に装備する銃の弾倉に弾薬を込めてポーチに収納したりと足りないものがあればその場ですぐに補充できる。今回の任務の前日も物資があればタスクが多い分、すぐに必要な道具を移動の車輛に詰め込めたり不十分な装備を身に着けられるだけで気持ちに余裕が持てた。

ただ目標物の回収が済んで任務の折り返し地点に立った現在になつては弾薬がどれほど残っているか、とか体感とどれほど差が出ているかの確認作業しかできない。

ここまで来るのに多くの弾薬を消費し、人員を犠牲にしてきた。ハルカが選り抜いた民兵の人数も半数以下の十人以下にまで落ち込んで、慣れない場での戦闘の繰り返しで疲労も溜め込んできている。結果としては飛び入り参加で来たハモンドの兵も少なからずも全員が負傷し、戦えるのも彼も含めて三人しかない。

「最初と比べてみても大分減つたな……」

「あんたが気に病む必要はない。生むことはないようには最大限に努力するつもりだ

し、犠牲は最初から覚悟していたさ。それにうちの者がやられてしまったのはあんたがいなかったタイミングだったし、ハモンドの阿保の隊の奴が死んじまったのは自業自得というのもある。この状況下じゃ自分の隊の連中を守ることを優先してしまうのも仕方ないし道理だ。むしろあたしがリーダーとして失格だと罵られるのが普通だよ」

『鉄血だけでなくE. L. I. Dの来襲というのは本当に不幸だったね。でも今は己の力不足を嘆いてここまでの選択を悔いるよりも生還することを考えようよ。エクスキューションナーに隠し通路を通じてこつちよりも前に出られてしまったんだし待ち伏せされているのは間違いない。E. L. I. Dとあいつをどう凌ぐのかを念頭に行動しないと』

耳元のイヤホンを通じてくるオアシスの言葉にローガンとハルカも頷いた。

オアシスの回収にあたっては『それ』がどのような形態をしているかはわからなかったが、ローガンだけでなく416やG11にバルソクもそれぞれ違った『回収容器』を持つていた。独立したコンピューターであれば収納できる大型のカプセルを、紙媒体であれば穴が空くことがないようにする為の合成素材のファイルを。もし情報を内包した爆発する危険性がある物であれば耐衝撃ケースをそれぞれ一つを持ち歩いていたのである。

ローガンが所持していたのは小型の外付けハードディスクで許容できるデータの保

容量を増やした端末であり、もし電子機器から複数の情報を抜き取るのであればすべてを不足なく保存できるようにしていた。ただそれはあくまで建前で、大欲怨霊事件の最中に聞いた言葉の端々からなんとなく自我を持った電子生命体かなにかかと予想していたのが事実である。

「問題なく声が聞こえてくるといふことは居所を移動できたようだな。どんな感じだ、別の乗り物に乗っていないながら前を見ているというのは」

『新車に乗っていないながら中古屋に売った昨日まで自分の車だったそれを見ている気分だよ。でもこの端末内のデータがあまり整理されていないね。ローガンって掃除とかあまりしないタイプ?』

「自室の汚れが目立ってきたら一気に全部片づけはするが、それまではほとんどしないな。ていうか俺の性格をそこでバラすのやめてくれない?」

『じゃあこの先もここに居座らせてもらうつもりなんだし、ある程度はデータを整理させてもらうよ。保存しているものの中身は開かないけど、それぐらいなら許してよね』

「勘弁してくれ……」

色々なニュアンスや意味を含めながらローガンはそう呻いた。端末内に収まったオアシスがこれまでローガンが端末内に収集して保存してきたデータを置き換えていた

りしているのを画面で見てもう既に何の価値もなくなったゲートの内部に視線を移した。

ゲートが開いて中に入ったのはオアシスという自立したAIを保存していた大型の記録媒体装置。グリフィンの北米支部にもあるデータを一括で保管できるだけでなくネットワークを構築するサーバーに近い形状をしていた。それから伸びていたケーブルをローガンの端末に接続してオアシスのアクセスを許可した途端、複数のデータファイルも含めて移動し、各機能を調整し常時会話ができるようにしたということまで今に至っている。

「プロフェット、オアシスの回収を完了。まだ危険要素が出回っているが帰投する方向性で作戦を遂行したいが、セカンドオブジェクトのデータ抜き取りはどうする？」

『あくまであれは現場を知らないお偉方の欲張りによる産物だから気にしなくていいんだけど、可能であれば達成して欲しくはあるね。オアシス、君が収集している鉄血に関する情報はどの程度までならあるのかな？』

『こつちで集められているのは第四次世界大戦を引き起こすまでの大まかな流れの情報と密かに加担している組織の名前。あとは現段階でのロシアの内部状況といったところかな』

「数は少なくとも一つ一つが爆弾みたいに強力だな。私だったら開くのに躊躇どころか

誰かに放り投げたくなってしまおうぞ」

バルソクが言っていることにはローガンもわからなくもないが、横槍のようにオアシス回収以外の目的を課してきたグリフィン上層部からすればそれで及第点を付けることとはないだろう。可能であれば、などと言われたということは達成するのは絶望的、不可能でなければやれということであるのだと、プロフェットことハリー談。

どちらにしてもエクスキューションナーは自分達に、特にローガンに対し復讐の念があることから攻撃を仕掛けてくるのは容易に考えられる。都合よくハイエンドモデルの一体から記録媒体を抜き取ればベストであっても、それを実現できるか否かは別問題だ。今回に至っては場所と人員や弾薬などを鑑みてかつてないほど難しいというのがローガンの見立てである。

『とにかく、オアシスが所持している情報だけでも鉄血の狙いを暴くことはできるだろう。それに『アネクドート』までも送り込んできたロシアの裏情報を知れるというのこちらとしても大きい。これらだけでも十分な収穫だよ。だから君たちが上層部に引っぱり張られて欲を掻く必要もないんだし、全員で生還してくれることだけを考えてくれればいい』

『ここから先はあたいたいも皆のバックアップに入るよ。ローガンの位置を中心に敵が接近してくるようなものならすぐに通達するし起動して入りこめる機器があればハツキ

ングもする。時々ローガンの手を借りることはなるだろうけど、それでも最大限に働かから頼ってね〜!』

「それはありがたいね。ここまで来てあたしもヘトヘトになってきているし、ちよつとは楽できそうだよ……」

『おつとつと、さすがに怠けさせる為にあたいも動くわけじゃないからなく。G11には気を抜かないよう情報支援は控えておくことにしようかな〜へっへっへ☆』

「ふえ〜、そんな〜……」

「当たり前でしょ。今日が初対面で会ったばかりのプログラムに甘えるんじゃないわよオタンコナス」

「痛い痛いイダアイ! この状況下で体罰は駄目だつて〜! 視覚機能が損なわれたらどうするつもりなんだよ〜!」

416に頭をアンアンクローで鷲掴みされて涙目になるG11というその光景にバルソクやハルカ、この場にいる民兵たちも笑った。もちろんローガンも404小隊の二人のこのようなやり取りが見られたことにより少々心が晴れやかになれた。無線機越しであるハリーもどうなっているのか想像できていたようで静かに笑っており、端末で皆の状況が見れているオアシスに至っては盛大に笑っている。

こうして笑っていられているのだから。皆が理不尽に殺されなければならないこと

の道理なんてない。

「さて、と……」

そうローガンは気持ちを入れ替えて進むべき方向を見据えたところで、横からカラシニコフの突撃銃が差し出されてきた。差出人を見てみると意外にも反りが合わないと思っていたハモンドである。

「……どう心変わりして、それを差し出す気になったんだ。俺の事が気に入らないだろうし、その持ち主であるお前のお仲間が悪いだろうから遠慮していたんだが」

「勘違いすんじゃないぞ。てめえのことを認めたくないやねえが、生きて帰るにはてめえの豆粒みてえな力だつて必要なだけだ。だったらもう使えなくなっている奴のを貸してやるぐらい容認してやるさ」

「……そいつはどうも。相変わらずのマウント取りの姿勢で逆に安心した。そのまま鉄血とかE・L・I・Dに相手にも強気で居続けてくれよ」

下手にハモンドの精神を逆撫でするようなことを言えば互いに望まぬ結果になると思い、ローガンは自分の本音を隠して様式的な台詞を言うと差し出された『Ak-74』を受け取る。続けて差し出された予備の二つの弾倉を空になっていくマガジンポーチに押し込むと『Ak-74』のハンドルを引いて薬室に弾薬が装填されているのを確認、上部に取り付けられているダットサイトが機能しているのも覗いて確かめた。ハモン

ドはやることが終わったとばかりに鼻を鳴らすとハルカの方に歩いていく。

そんな彼を見送ってから譲渡された銃の両手で持った時に感じる重量と材質による感触にローガンが首を傾げていると、こちらの様子を見ていたバルソクが寄って来た。

「どうしたんだマスター。なにか武器に不具合があるのか？」

「いや、あるだけいいんだがカラシニコフとかのロシアの銃はなんかなあ……俺の性にはあまり合わないんだよ。アメリカとかドイツのカービンライフルにはない良さがあるといのは理解してはいるんだがな」

「マスターは他所様のスオミようにロシア嫌いじゃないだろ？それかあれか、マガジンを装填する時に前から差し込んだりするのが苦手だったりするのか？そうだったりするとロシア生まれのA E K 9 9 9はちよつと傷つくんだが」

「そんなつまらない理由でじゃねえよ。単なる感性の問題であつて機能とかデザインに文句はない。簡単に言えばイメージの問題だな。昔ヒットしていた映画とかでもそうだったりにように、テロ活動とか民間人に圧制を敷いていた奴らの多くはハンドガードが木塗りのA Kとか持ってただる？ハルカ達は違うが、今でも時折山賊紛いの事をして難民から追剥している連中が持つてるのもそうだ」

「コピー品とかが出回つたことで価値が下落、それで良くないことを考える奴の手にも行き渡りやすくなったことによる影響だな。まあたしかに、悪役だったり敵が持つてい

る銃には良くないイメージができてしまうんだろうな。実際に犯罪とかに使われてしまった時にはその人形に同情もしてしまいそうだし」

悲しきことかな、とバルソクが溜息を吐くのにローガンは苦笑いを浮かべて乾いた笑い声を漏らした。すぐさまこうなったのはあんたのせいだと腕を小突かれたが、彼女も本気でやったわけでもなくローガンと同じく笑っている。それから一しきり笑った後でふとバルソクから提案された。

「だったら私の祖国のに慣れる為に、ハニーバジャールマスターの銃の修理が終わるまでカラシニコフの銃を使ったらどうだよ。ハンドガードが木塗りなのが嫌だったら全部黒く染めてしまえばいいじゃないか」

「それってグリフィンで許されるの？単なる一時的な取り替えなんだし、あまりものの銃を貸し出してもらえればいいんじゃないかと思うんだが」

「じゃあマスターが帰ったら以前に交戦した『アネクトート』のクソ共から鹵獲した『Ass val』を宛がわれたらどうするよ？マスターは経験とかのイメージでそう左右されたりもするのなら、凄惨な現場を生み出したあの変態どもの銃をまたマスターは使えるのか？」

「よゝし帰ったら銃を真っ黒に染めてやるぞー!!……………ていうか『Ass val』の戦術人形っていたよな。なんか喧嘩を売ってしまったてそうで申し訳ない

んだけど」

「あく……まあここだけの話にはしておこう。とにかく、帰ったらマスターにおすすめのロシア製の銃を教えてやるよ」

お手柔らかに、と言いながらヒラヒラと手を振ると出立の準備が済んだ民兵達の先頭にいたハルカの横に立つ。お馴染みとなってきた隊形を同じ組織の者たちと組んでみると、ふとローガンはあることを思い出してそれに関わる物を防弾ベストのポーチから取り出した。シャラシャラと擦れ合つて重力に引かれるチエーンはやや不格好ながら長穴の形状になっている鉄板の穴に通されている。戦場にいる者なら誰もが知つていて戦地における個人証明書である物、ドックタグである。

それを左手に持ったローガンはハルカの方に差し出して言った。

「ある傭兵団に所属していたフロリダ出身の奴だが、こいつの出身地の詳しい場所がわかるか？できれば基地に帰る前にそこにこれだけでも吊つておきたい」

「……わかるが一つ聞かせてくれ。こいつの持ち主はどうしたんだ？」

「死んだよ。爆破した戦車の爆風に巻き込まれて重症になつて、最後には俺に自分を殺すように頼んできた」

「それであんたは引き金を引いたつてことか。あんたのことだ、何の関係もなくその場に居合わせてしまった、なんて奴を撃つたわけじゃないだろ」

ハルカが何を考えているのかが何一つも悟れないが敵対関係にあったことは間違いない。複数の傭兵組織による密かな侵攻を許せばグリフィン北米支部の保護区の住民の生活を支える一つが損なわれる状況になっていたのは想像に難しくない。後に姿を現した『アネクトート』とは別に大量の物資を持ち込んでいたことは現場収拾に参加したスタッフからの報告で、見逃せば完全にローガン達が被害を被ることの裏付けとなっている。

したがってローガンが銃弾で介錯したあの傭兵も敵として対処すべき対象であった、ということになり理的に責められる謂れはない筈だ。

「まあそうだが……知り合いだったのか？」

「知り合い、知り合いか……。まあたしかにそうではあったな……。客人、これの弔いはこつちでやっておくから心配しなくていい。こいつを帰したことに礼を言うよ」

「……おう」

バックパックにドックタグを収納したハルカが先陣を切っていくのを止めず、ローガンは堂々たる彼女の背を見る。フロリダという環境に適応できるよう薄着であることもあって、女性でありながらも筋肉質な体つきであることが窺える。そんなハルカの背には今回の最中に何度か見ていた時と違い言動も相まってどこか哀愁が漂っているように思えた。

「何なの一体。勝手に話をとんとんと隠しながら進めて。まあ帰還する前に寄り道せず
に済んだのはいいことだけど」

「訳ありにしてはなんだか大人しい感じだね。早くベッドで寝れるようならあたしはな
んでもいいよお……」

416とG11が後に続きながらそう言葉を漏らす。ローガンの脳裏には数日前の
事が過って二人の台詞を気にしていられなかった。

〈六日前〉

グリフィンの重鎮を交えての緊急方針会議を終え、手掛かりを得るべく根を詰めて三日経った。これといった成果が出ないことによる精神的な疲労が一気に来たので、少々気分転換をすべくローガンは屋上で風に当たっていた。

秋になれば日も短くなり春や夏であればまだ燦々と照っていたこの時間帯には既に夕暮れになってきている。手に持っていた苦いだけの缶コーヒーを一気に飲み干すと、手摺に肘をつけて沈んでいく太陽にローガンは目を細めた。

「ふ……」

ぐしゃつと黒塗りのアルミ缶を握りつぶしてから癖になっている溜息を一つ零して空を仰いだ。

ローガンにはこうして一人、なにか思うことがあれば己の人生の命題といえるものを考えることがある。この世で生を受けて誰しもが生き続けていれば同じ命題に行き着くかもしれないが、二十年と五年程度生き続けているローガンの場合だと習慣のように頭に思い浮かべてしまう。『一体どこに、答えがあるのか』と。

今日まで鉄血などと戦い続けて勝つて得られたのは次の戦いまでの生の時間。たしかな形や色がないものの、ローガンは人生は積み重ねという言葉になぞらえてそれを積み木のようにだと思っている。勝ちを拾うということはつまり次に積み重ねることができると見つけられたことであり、それを上に重ねたことでまた新たに時を過ごすこ

とが出来るのだとも。

幾度と誰かから奪って自分の生を維持してきたローガンの人生は統一性や親和性などが皆無でとても歪だ。大理石で作られたブロックを重ねてきた上々の人間とは違い、一度崩そうとすれば簡単にバラバラになって吹き飛ばされ、最後には塵となる。そうなるのはもう、誰も『ローガン・ブラック』という人間を記憶に留めることはないだろう。ローガンも自分はそんな強くない、吹けば簡単に飛んでいく存在だということを嫌というほど知っている。

「……………」

ガリガリと頭を搔いて遠くに見える保護区の建物を眺める。僅かに響いてくる車のクラクションやエンジン音を耳にしながら、それらにさらに耳を傾けるようにローガンは目を閉じた。

こうしていると自分が子供の頃思い描いてた理想の自分とは何だったのか、どのような完成形を夢に見ていたのかということが、陽の光を反射して照らし返してくる遠方の建物と空色と橙色による鮮やかなグラデーションの空を見ていると時々わからなくなってくる。現実を突きつけられて諦めざるを得なかった理想と泡沫のように新たに浮かんでくるそれ。そしてまた消えては新たに生み出される。消える度に残されるのは虚しさと喪失感による胸の痛みだけで、今以上に失くしてしまったものよりも大きく

て多い。

ローガンだつてただ闇雲に戦っているわけではなく、様々な疑問を思い浮かべては自分の答えを得てそれを胸にしながら一歩ずつ着実に歩んできた。幾度も繰り返し自問自答の末に肥大化していく解答なき命題、それが『前に進むことで今以上に失つていく。その先には何があるのか』だつた。

こんな矛盾までもが複雑に混ざり合う命題に対する答えを誰が持っている？

ただここで切実に願うことあるとすれば、正しくなくていいから、迷つていてもいいから言つて欲しいということだけ。せめてそうして、誰にも言えずにこうして悶々としてしまつている自分の事を泥沼から引き上げて欲しい。

「バカだな俺も……」

そんな都合よく誰かから助けてもらえるわけがないというのに甘えたことを考えている自分に反吐が出そうになる。ローガンは再度大きく溜息を吐いて首筋を缶を持つていない手で撫でるまで、長い間思考の沼に嵌つていたらしい。背後に近付いてきている者の事に一切ローガンは気付かなかつた。

「まあたしかにローガンは頭はよくないけどよく回るよね。なんでそんなことを考えられるのというぐらいに」

「時々感心してしまいそうになるわ。無茶をするしこつちから制裁を加えられていると

いうのに口が達者に動くから逆に驚きよ」

突然のように近くから聞こえた声にビクリと驚いたローガンが振り返ると、そこには二人の少女がいた。片や一人は前者とは違う別部隊の隊長を支えながら己の力を出し惜しみすることなく振るう、生真面目で口煩いが仲間を想う気持ちは皆より人一倍強い少女。もう一人は素性が知れなかった一つの特殊部隊を率いていることで近寄りがたい雰囲気を出会った当初だけ感じこそすれど、対等な関係を築きさえすればネコ科の動物を連想させる少女である。ローガンにとつての関わりがある戦術人形の中でトップに当たるAR15とUMP45が、やれやれと頭に手を当てながら首を振っていたり肩を竦めていたりとしていた。

危うく手に持っていた空き缶を手摺より外側に落として基地外側の方に落としてしまいそうになったがなんとか堪えてローガンは言い返した。

「心外だな二人とも。単に宥めようとコミカルなことを言っただけだっていうのに頭悪いみたいと言われれば俺も傷つく。まあ本当の事なんだけども」

「じゃあその点においては反論できないわよね事実なんだから。一人格好つけて黄昏でいる人なんて私から言わせてもらえればダサイの一言に尽きるわよ」

「容赦ない物言いをありがとよ45。おかげでこの先もやっていける気がしなくなつて涙がちよちよ切れてくるわチクシヨウめ」

何も言い返せなくなったローガンはくすぐすと楽しそうに笑っている。45に項垂れる。このところ料理の練習もあつてAR小隊と過ごす時間が多いことで404と面々と顔を合わせるのはあまりない。カイルを通してグレイという人物に關した報告を受け取つた日、あれが9も交えた久方ぶりの45との交流でもあつたのかもしれない。

そう思うほどローガンもこのところ働き詰めでありながらAR小隊の手伝いを陰ながらしている。それを45がどう思っているのかはローガンにはわからないが、仲が良き友人としては歯痒く感じるものがあつたのだろうと思ひ内心溜息を吐いた。

「今ローガン、自分が情けないと思つてるような顔してたけどそこまで気に病む必要はないわよ。あくまで45のは我儘に近しいものだから」

「それでも人形も時々わたしたちは我が儘を言いたくはなるわよ。AR15は物事を非情に見ないといけない分の反動を受けたりしないのかしら？」

「私はそうストレートに発散できないわよ。精々トレーニングや訓練で払拭するように努めるだけ。自分の内面を誰かに簡単に曝け出すだなんてみともない真似、私はしないわよ」

「あなたはそういった面でも頑固だね。強く在り続ける為にそう自分に言い聞かせるのは結構だけどそればかりだと疲れるわよ？自分の負の気持ちの捌け口を構築するぐら

いの事をさせてもらった方が、その相手との距離が縮まったりもして一石二鳥よ」

「会話の内容から察するになんか俺が関わる話のようだけど当てつけにされるのは御免だぞ。話を聞くだけならともかく矛先を変えられて痛い目に誰かの代わりに受けるというのは何も得しないし」

二人の会話からしてAR15の鬱憤晴らしのルートを話しているようではあったが、急に八つ当たりの的にならないようにする為に釘を打っておく。すると45は後ろ手に組むと前屈みになってローガンを上目遣いで見上げて来た。

「ローガンもさ、少しだけでも女の子の我が儘を聞いてあげるなりしてあげてよ。感情に流されるのを律するのもいいけど、受け止めてあげてもいいんじゃない？ほら、AR小隊の猛犬とはじゃれ合ってるみたいに」

「SOPRIIの場合は単に子供の相手をしているのと同じような感覚でしかないんだがな。お前の言いたいことはなんとなくわかるが、言ってくれない限りは察するだなんて俺には無理だ」

「だってさ、AR15。ローガンが言ってることは最もだけど」
「なんで私に振るのよ。別にいいと言っているのに……」

そつぽを向くAR15と楽しげな45にローガンは二人が何を考えているのかまったくわからず首を傾げたが、なんとなく気が紛れたので仕事部屋に戻ろうと歩を進め

た。すると二人はローガンを追いかけるように後ろに付いてくる。

「俺について来てもなんも面白いことはないぞ」

「指揮官からの伝言を伝えるべき相手が移動しているのだもの。だったら私達だって当人が行く先に向かわなければならぬじゃない」

「ハリーから？」

屋上から戻ろうとしていた歩をすぐに止め、首だけ振り返るとAR15が鼻を鳴らしながら両腕を組んでいた。ローガンはなにか伝えられるようなことがあったかと考えた。特に思い当たることはない。というところで通信機器を持ち出していなかったことに今更ながら気付いて余計に手間取らせてしまったことに如何せん申し訳なくなつた。

「あく……すまん。なんか面倒なことをさせてしまったみたいで」

「みたいじゃなくて本当にそうなんだけど……まあいいわ。頭がいつばいいいつばいになつていようだし考え事もずつとしていけば仕方ないだろうから」

「それで、あいつからはなんて言われてるんだよ。飯時じゃなければ基本つまらないことを言わない、基地内の奴であればニュートラル男のことだから小言を伝えに来たわけじゃないだろ」

「連絡を受け取ったM16からのメモによるとだけど、『頼まれていた事項についての調

査結果はシロが濃厚。過去を振り返ってみても特にこれといった動きはない」だって「……そうか、アテが外れたってことか」

その伝言を聞いてローガンはガリガリと頭を搔いて推測が外れたことに溜息を吐く。また一から考え直しかと思いやるべき仕事がまた積み重なったことに対してもまた気を重くしていると、AR15に述べられた伝言の意味があまりわからないらしい45が聞いてきた。

「二人で何を調べていたのかはわからないけど、概要としては『オアシス』のことよね?」「まあそうなんだが……そうか、シロだっていうのなら振り出しに戻らないとだな……」「ずつとうんうん唸りながら出てきた推察が外れるというのはやっぱり堪えるものよね。それもどうでもいいような謎かけじゃなくてこれからの行動を左右するものだもの」

「ふくん……ねえローガン、問題なければ私にも教えてくれない? ひよつとしたらなにか見落としがあれば気が付けれるかもしれないから」

少々ハリーと共有している情報について話していいものかと迷ったが、元々機密でも何でもなければ緘口令まで出されているわけでもない。ハリーのみならずグリフィン上層部からも『オアシス』に関する事項を口外しないように言われていない。

暗黙の了解、やら組織内の常識として云々と後から喧しい小言を聞かされるのだとし

ても、45のように電子機器のクラッキングが長けている戦術人形を誤魔化するのはあまり得策ではない。その気になれば交渉材料になり得る情報を抜き取って保有し、時が来ればそれを持ち掛けて最後に切り札として切り出す。そうやりかねない人形であるのがUMP45という戦術人形で、とある界限で恐れられている存在だ。

とはいってもローガンにとつてはARR15と同位と言えるほど信用できている存在であることは間違いない。

なのでローガンは決心し、屋上に設営されている自販機からまた同じ銘柄の缶コーヒーを購入した後に、二つ分の微糖のそれを続けざまに買って二人に放り投げた。

「まあとりあえず長くなるだろうからそれを持って下で話そう。季節の影響もあってそろそろ寒くなってくるからよ、どうせならゆったりと話そうや」

時はもう終業時間に差し迫ってきている。あと三十分程度なのだし、偶にであればこれぐらい許されるだろう。

〈同日〉

「……それで、どういった経緯があつた訳なの？」

機密事項でないにしてもさすがに大つぴらかつ堂々と話せることではないので、ローガンはAR15と45を連れて基地内の休憩室に入っていた。幸い中には誰もおらず周囲にも行き来している人や人形がいなかつたので、聞き耳を立てられることはないだろうと思つて扉を閉めて振り返る。AR15は休憩室内に備え付けられているソファ背もたれに腰掛け、45は真向いのそれに座つて微糖のコーヒーに口をつけている。そんな二人を見ながらローガンは壁に寄りかかつて二人とは違う缶を開けて一口飲んでから言つた。

「まずは整理も含めて説明しようか。俺達が追いかけている『オアシス』というのはグリフィンのデータベースどころか正規軍のものもない、『アッシュ』つう鉄血の奴が追いかけると言つてた代物だ。初めは敵が残したメッセージということで鵜呑みにせずとも

捨て置かない、そんな曖昧な感じで頭の隅に置いていたんだが、この間の『アネクドール』が暴れたあの事件の最中に聞いた話で確保しなければならぬという話が現実味を帯びた。ここまでならお前にも話したよな?」

「ええ、『オアシス』を探しあてて持ち替えるには『座標』に『地図』、それと『鍵』が必要だつてことも聞いたわ。それ聞いた時はデータの整理もあつてこれ以上は話せないとかでは話は終わったんだけど進展はあつたの?」

ローガンの頭の中で蘇ってくるのは相棒であつた友を吊つたその数日前に送信されてきたボイスメッセージ。話している当人の性別を判断させないような、男性と女性の混合した声に乗せられた言の葉を聞いてないことにするなど到底できないあれを、今でも端末内のパスワード必須のフォルダ内にて保存している。

そして時が流れて気付かぬ間に『オアシス』確保に必要らしいピースを集めていた現在。大欲怨霊事件にてバーンズから聞いた話でローガンの中で『オアシス』の存在が情報が詰まった膨大なものとなり、状況証拠ではあるが現実味を帯び始めた。

「AR15も参加した元アメリカ陸軍基地の任務達成と回収したデータが『座標』、それでワシントンD・Cでイントウルダーに殺された元アメリカ政府の職員であつたVIPが所持していたのが『鍵』であることが確定したのが方針会議の五日ぐらい前だ。だがまだ『地図』が見つけれられていないから、最近は思い当たり次第ハリーと連携して

片っ端から調べてたんだよ」

「それでここのところ執務室で根を詰めていたのね。私達が声掛けても生返事だし何か思いつけばPCに飛びついて調べては落胆してて忙しそうだったから何かと思つたわよ」

「おかげでM4やらSOPHIIから頼んでもいないのに栄養ドリンクを置かれたり肩を揉まれたりやらであいつらには特に悪かつたと思う。それにまだ報われないというのは増々くるものがある……」

「反省会はまた今度にしてあなたと考えた推測そのものを聞かせて。あなたのことだから勘に任せた、そう考えた根拠がないことはないだろうしそれも説明して頂戴」

ARR5からの催促されたので、ローガンはどのような順序で話すか思案した後45を見る。彼女も言わずともそうして欲しいというようにこちらをじつと見つめていたので何も隠すことなく話すことにした。

「まず最初に俺はお前達にも以前話したある奴に『地図』と『座標』は既に手の内にある』という残されたメッセージから考えた。その言葉の通りに考えるのであればもう俺達はその二つを手に入れているんだということだつてな。実際の所『座標』はもう確保できていることだし、単に『地図』は俺達が気付かない間に手に入れていると考えるのは筋が通つてる、ここまでは言いたい事があるか？」

口を挟まずに静聴している二人は首を横に振って否の意を示す。

ローガンが話している推測は別の可能性があるかもしれないことで視野を狭めないよう留意しながらのものであり、これが最も正解に近いのではないかと考えている。それを伝え漏れや誤りがないように気を付けながら続けて話した。

「帰還した当初、俺はAR15から言われたようにイントウルダーから取り返したあのUSBメモリが『鍵』じゃなく『地図』なのかもしれないと思っていた。が、実際には違つて該当する機器に接続すれば自動的にセキユリティロックを解除するプログラムまで組みまれていたことから『地図』じゃないことがほぼほぼ確定して困窮したよ」

「でもそこからどう糸口を探したのよ。オアシスなんていうのは砂漠の緑地と言われてたりするだけでそれが私達が追い求めている『オアシス』に繋がるわけでもない。あの男もどれがどこにあるかだつて知らなかったようだったし」

『オアシス』なんて名前にした由来を思い返してみろ。奴は戦争の傷跡がある地を『砂漠』、俺達だけでなく難民や民間人にも襲い掛かる鉄血だとかの連中を『砂漠化』として揶揄していた。そう例えたのはオアシスというのが本来なら乾燥地帯にあるものだからだったのかもしれないが、現実には置き換えてみれば戦いの傷が絶えず人類の居場所が巢食われている場所なんて世界を見渡せば無数にある。だから敢えてシンプルに調べることにした」

「……バーチャルや仮想空間でもなく、私達がこうして生きているこの現実世界の砂漠地帯に目をつけた、ということね？」

「その通り」

45の言葉に肯定してからローガンは缶コーヒード一度喉を湿らせてから壁から背中を離し、向かい側の窓の方へと歩いた。そこからはこの基地の演習場が見えていて、誰がどのような訓練をしているかを見渡せるようになっていて。今ではキルハウスにてバルソクが『P P 19 B A T O N』を手にしながら演習を開始し、ランダムに現れるホログラムターゲットに向かって撃ち始めている。

こちらから教えたことを忠実に守りながらも、銃の撃ち方だけでなくナイフによる自己流の戦い方を模索している彼女に密かにエールを送ったところでまた自分もいる室内の方に意識を戻した。

「だが現代じゃアメリカの半分以上が砂漠になってしまっていて、精度を良くしての情報収集するにはまだ絞り込みが必要だった。当たり前前の話だが、調査するにしても道具だけでなく金も必要だ。ましてや砂漠なんて人がいないのに等しい地帯から情報を探すのだからUAVや衛星を駆使する必要だってある。徒歩で確かめるにはあまりにも危険すぎるし時間も多くない。もし俺が自分で行こうものならお前達が止めてくるんじゃないかと思うぐらいだよ」

「それはそうよローガン。私達よりもローガンの方がヤワなんだし水分だって多く必要とする。私達にはオーバーヒートのリスクが強ク付き纏ってくることにはなるけど脱水症状よりもまだなんとななるものだから、ローガンが行くことになるのなら私が代わりに行くわよ」

「そりやどうも……まあ本筋に戻してだが、それで俺が次に考え着いたのは鉄血やロシアの特殊部隊の動きだ。後手に回ることにはなるが奴らだって根拠もなく調査することはないだろうし、わざわざ危険地帯に人員を派遣することはしたくないだろうからな」

これに関して鉄血はともかくス^ロペツ^シナズには当てはまることだろうと思われる。派閥云々は置いておかなくても鍛え抜かれた精鋭を失うのはロシア政府の人間とて好ましくないだろうし、ロシアのように国の中では地球の最北端に位置する人間からすればおいそれと砂漠なぞ送り込めるような地帯ではない。

いつになく真剣な面持ちの45は顎に手を当てながら言った。

「ダメ押しさせてもらうけど、それだけでも絞り込むには至らないわよ。砂漠で徘徊している鉄血兵の数なんてたかが知れているし奴らだって隠蔽する術を持っていてもおかしくない」

「もちろん俺もそう考えたんだが、結果を急いでいるグリフィン上層部からの圧力がか

かつて探査せざるを得なかったんだ。基地内のドローンオペレーターに探索区域を指定するにしても限定的に一部の州しかできなかつたし、探査の間は俺も立ち会えなかつたりとだな……」

「それは難儀だったわね……一つ提案だけどきローガン、『座標』のデータを見れたりしないのかな？ 今日ではもういいとして明日ぐらいにさ」

「ハリーに申請する必要があるとは思うが事情を話せばまあ大丈夫だろう。一体なにを確かめるつもりだ45」

缶を一気に空にした45は立ち上がり、ストレッチをすると挑戦的な笑顔を浮かべる。そしてローガンに近付くと自分の拳をこちらの胸に正拳突きをするように当てて言った。

「最近はローガンにいいところ見せられていないんだもの。怨霊相手の時だって陰ながら成果を出していたぐらいで肩を並べて戦っていたわけじゃない。だったら今回の情報収集で役立たないと私だって立つ瀬がなくなっちゃうわよ」

百点満点の笑顔を浮かべながら45はご馳走様と言って空き缶を捨てて休憩室から出ていく。助力はありがたいが、屋上の時といい妙に機嫌が良い彼女が何故そう言ったのかわからずローガンは首を傾げる。

その日で印象的だったのは45の笑顔と、それ以降ARR15がいつも以上にムスツと

していたことだろうか。

48. 蜃気楼の先に —Collapse sound

〈五日前〉

一日が始まったばかりということもあつて通路に射してきている日差しがさわやかに感じられている午前中。ローガンは始業になつてからは昨晚にハリーに言われた通りに基地内のラボの方に向かつていた。

45が自ら助力を申し入れてくれたことを断ることなく口頭で申請したのは十二時間以上も前の事。お互いに業務で疲弊してはいたものの、裏世界では名を知れ渡らせている404小隊の隊長が頼まれてもいないのに乗り気になつて首を突っ込んできたインパクトを理解できない程ではなかった。特に幼少期からの知つた仲であるハリーからすれば驚愕に値することは言わずもがなどころかA-Iにバグでも発生したのかと疑つてもいた。

それでも経緯を知つての発言であつたので善意あつてのことだろう、とそうハリーが結論付けてのが昨日。この後は彼も立ち会つての『座標』のデータ確認を行うべく45

を呼び出してからローガンも移動し始めたのは数分前だが……。

「なんでお前まで来てんの？ お前も仕事あるだろうから別に付き合う必要なんてないだろうに」

「後学の為に拝見させてもらうだけよ。特に私からは邪魔しないから居ない者として扱ってくれていいわ」

「はいはい、それじゃあお言葉に甘えてくつて阿保な真似できるか。来るのもいいし止めやしないけど、なんで突然そんなつまらないイジメみたいなことをすることになるんだよ」

「今後の道筋が切り拓ける私は気にしないから良いわよ」

ローガンが歩きながら背後に言葉を投げかけてみれば聴き慣れた声が返って来る。AR小隊とシエアさせてもらっている執務室から出てからずつとついて来ている戦術人形の少女を思い浮かべながら振り返るとそこには思った通りの姿があった。

不満があったり悩んでいることがあれば眉間にやや皺を寄せているのはいつものことだが今朝最初に見かけてからは一層深い。それだけでなくスモッグのようなオーラを幻視する程の雰囲気で、宿舎で寝室などを共にしているM4に原因を聞いても苦笑いだけで明確な回答をもらえなかった。

ローガンがまた歩き出せばAR15も一定の距離を保ったまま歩き出し、止まれば彼

女もほぼ同時にその場で止まる。距離感はともかく足音だけでもそう判別するのは難しいことではない。

すれ違う職員や人形がローガンの後ろを見てはギョツとして足早に立ち去っていった回数桁が二つになりそうところで溜息を吐くと、ローガンはまた振り返って睨んできてもいるような眼光のAR15に言った。

「俺が何か悪いことをしたんなら言ってくれ。多少はサボってたりしても周囲に睨まれるような常識に欠いたことはしていないつもりだ。下手に溜め込んだりなんだつたりして爆発されるのは御免だしそうなくても欲しくない」

「言いたいことがあつたら私は普段から言ってるじゃない。それとも何？単に自分の気が楽になりたいからすぐに溜めているものを言つてるといふの？」

刺々しいその声と台詞にムツとなりかけたがすぐに言葉の端々に乗らないように自制する。嘘偽りなく本当の意味で伝わるにはそう負の感情を込めてはならないことは兵士になる以前に、良好な人間関係を築く知識として戦いだけでなく人生においても師と呼べる男から学ばせてもらった。

なのでローガンは

「そうじゃなくて、お前達との関係を変に拗れてしまいたくないから言ってるだけだ。特にお前は俺にとっての恩人でもあるんだから、つまらないことで振じ切りたくないん

だよ」

「……………」

ローガンの本心に対しARR15は沈黙したようだった。我ながら恥ずかしいこと言ったかなと思いい白髪を掻いてから通路の窓から快晴の空を見上げる。雲一つもない青々としたこの空の下で今も失われている命があるということが頭に掠め、日光と一緒にそれを遮るようにして手を翳した。だがそれはほんの一瞬の誤魔化しでしかなく、息絶えてしまうのは何故なのかがリフレインしてくる。

いつしたかわからない怪我の古傷があると言われている首筋を撫でながらローガンは言った。

「この世で死んでいる人達が……まあそうなってしまった要因はいくつかあるわけだが、タイミングとか巡り合わせだとか以外にもいくつかある。例に挙げやすいものの一つとしては『孤独』だな。全部一人でなんとかなる、片付けれる奴なんて世界中を見渡しても絶対にいない。大抵はなんとかなるぐらいで絶対的な解決を約束できるスーパーヒーローなんておとぎ話や創作物の中でしかいないんだよ。それでも俺達にできることがあるとすれば互いに協力して補い合う事だけ。青臭くてむず痒くなるけど、実のところこの世の心をついてる事実でもあるから俺は『んな阿保な』とか言つて捨て切れないな」

「……誰かと協力して生存の道を模索して突破する。単純なことのように見えて難しいことのそれが重要であることは私にもわかるわ。ワンフォーオール、オールフォーワン、その二つを鼻で笑い飛ばすようならそいつは本当に窮地に陥ったことがないだけ。実際に大群相手に一人で武器を取って戦ってみなきや、骨格どころかメンタルや骨身に沁みて理解できないでしょうね」

「味方といえる存在を失いながらも戦って数年経ったからこそ、俺は戦力としてだけでなく良好な関係を結べているお前と拗れたくないんだよ。人間と人形が友人だなんておかしな話かもしれないが俺は気にしない。でもつまらないことが俺達の間で生まれているのなら話は別、それを取り除くのに力を注ぐさ。もう一度言うけどさ、俺はお前とは特に仲違いをしたくない。お前は俺が立ち直るきっかけを作るのを特に手伝ってくれた恩人なんだからな」

「わかったわよローガン。でもお願いだから繰り返し言わないで。なんだか逆にこっちが恥ずかしくなってきたから」

声の方を見てみれば、真っ赤にしている顔を上着の襟で隠そうとしているARR15の姿があった。顔をこちらから背けてはいるものの眉間の皺はついさつき見た時よりも浅くなっているように思える。

羞恥心でやりづらくなっているのはこちらと同じではあるが、ARR15の爆弾になり

かねなかつた感情を適切に抑制させれたことに胸を撫で下ろす。S O P I I と共に雷を落とされる時のようなことになるのはローガンとて避けたいことの一つであるが、それ以前に自分の口から言つた事に嘘などどこにもない。

誰かと仲違いをして先に逝かれてしまうことなどはローガンにはないが、それだけは絶対にするなど師に念を押されているのを思い返す。そうしてしまつた先にあるのはなにかあるのかまでは詳しく教えてもらえなかつたが、生きている限りは今後ずっと引き摺つていくことになると言われていた。もう故人となつた本人がどのような経験をしたのかはローガンには知る由もないが想像するのはそう難しくない。しこりどころか血栓として体の重要器官のどこかで詰まつて機能不全を起こすような、苦しい思いをするのだろうか。ローガンは思っている。

そこで朝から何を考えているのかと頭を振つたところでA R 15の方に向き直る。まだ何ら違えておらず、互いにこの世界で生きている少女に言った。

「もう行こう。朝つぱらからこんなじめじめとした深い話をするもんじやない。もつと笑つて右往左往と動き回るべきだ」

「……ごめん、私が悪かつたわ。ローガンが本当に悪いわけではないのにネチネチと当たつてしまつた。私はそうじやないというのに」

「おん？そうじやないってなんだよ？」

「別に。ローガンには関係ないわよ」

今度はツーンと顔を逸らすのが頬はまだ赤い。唇を突き出して見た目相応の仕草にローガンはどういったことかと考えてみるが、生憎ながら負の感情を除いた人の情には幾分疎くなってしまっているので悟れない。

当人のARR15がローガンには関係ないとは言ってはいるものの、雰囲気からしてそうではないだろうとは思われるが、下手に詮索すればまだ状況が逆戻りだと思いつ込むのをやめた。

横に並んできたARR15と通路を歩きながらローガンはとりあえず別の話題を振ってみた。

「昨晩は皆の都合が合わないということやらなかったけど、今夜の練習メニューはなんだったか……シエフ？」

「誰がシエフよ。間違っていないければ今夜はハンバーグだったと思うけど、ローガンは嫌いかしら？」

「合成品であったとしても食べる分ノープロブレム。消費期限がとうの昔に過ぎているレーション食わされるよりも天と地の差があるし、そもそも肉類は俺の好物の一つだよ」

「ソースはデミグラスかチーズ、トマト？それとも和風の玉ねぎとか大根おろしとかも

選択肢に上がってたけどどれがいい？」

「もちろん和風の大根おろしで」

「即決ね。わかったわよ、手間はかかるけどソースは私が作る。味見の方は頼んだわよ」
「おうとも」

ローガンは胸を躍らせながらそう言う一方で隣のARR5は呆れたようにしながらも笑みを浮かべている。

言わずもがなではあるが、戦術人形といえど味覚モジュールがあるので食事を取るのであれば美味しいものを食べたいというのは人間と共通している。期限が過ぎた配給食品よりも作り立てで温かいスープの方を選ぶ、それはローガンだって同じだ。基地内に限定した秋の祭りに向けての練習が大本で美味なものをチーム全員で作って食べることも一つの目的となっているのだが、結果としては全員で楽しんで調理できているのだから決して悪いことではない。ARR5自身は素直に認めようとはしないが、彼女もなんだかんだいって皆と共に動き回っているので鼻屑目で見えていなくともやることとの価値を見出しているのは確かだ。

「ハンバーグってああ見えて色々と手間がかかるのって知ってる？美味しさを出す一つとして中にチーズ仕込んだりとダイエット目的で少し豆腐混ぜるにしても、第一に型崩れしないようにキャッチボールするようにして空気抜かないといけないみたいなこと

だとか」

「それぐらいなら聞きかじったことはあるが、今じゃ食用ノリが出回っているぐらいだからしなくてもいいんじゃないかねとか思っちゃまうな。まああれを使わなくてもいいようにする手間ではあるんだろうが」

「逆よローガン。元々ハンバーグは食用ノリを一切使わずに作るものなの。そういった人工物を入れなくなつてあれはちゃんと形になるってことを私はこの間の下調べで知つたわ」

「一昔から現代で仕事で料理している方々、俺が無知でしたすみません。なんか知らないうちに冒瀆していたというか馬鹿にしました」

無知は罪なり、を身をもつて知つたローガンが項垂れたところで目的地が見えてくる。以前このラボを訪れたのはグローザがまだいた時でありまだ一カ月も経っていない。

以前と同様に渡されているIDを壁に埋め込まれている端末にかざす。電子音が鳴つて開かれたことでラボ内のけたたましい機械音に顔を顰めながらローガンは中に入り、前に来た時はこれほどではなかったよなと思ひ返す。一間空けてきたAR15も眉根を寄せているので、耳栓をしなければ聴覚がイカれてしまいそうに感じているのは同じらしい。

一体なぜこんなことになっていのかと、ローガンは戦場でも駆使している観察眼で見渡すまでもなくすぐに原因は突き止められた。

「おおおおおおおおお！やはり私は天才か！見たかアイザック・ニュートン、万有引力などもはや過去のもの！今日よりこの先は特有浮力が唱えられる時が来たのだはっはっは!!」

「色々と突っ込みどころがあるのですがそれ以前に計器の数値がとんでもないことになっていきますよチーフ！騒音も酷いしこのままじゃラボどころか基地諸共吹き飛んでしまいます!!」

「おおっと、それはさすがによろしくないな。ではここをこうやってだな……うむ、出力こそ落ちてはいるが中のリングは浮き続けている！世の中には宇宙空間や水中を再現した無重力装置が存在しているが万有引力のような学説を説いているものはなかった！これこそ新たな発明だああああああああ!!」

……見覚えがある科学者が手作り感満載の装置の前で高笑いしたり歓喜の声を上げている。いや、装置自体には表面に継ぎはぎがあったり雑と思わせるような作りをしていることでそう感じさせているわけではない。むしろ接合部や装置の外面に綻びを思わせるような大きな傷は見受けられず、きちんとした職人による仕事が行われているのが一目でわかるぐらいだ。

ではなぜ、お粗末だと感じさせられてしまうのか。それは単純な話だ。まさに無垢な子供が描くような、質量や物理法則を無視した『ぼんのうのきかい』を表した外観をしているからである。

「何の解決も出来ていませんよ現実を見てください！新たな法則論を唱えるよりも先に辺りを爆発四散させて爆発魔として世に名を残したいのですかあ!!」

「心配するなよく見てみたまえ諸君！計器が指し示している数値はあくまで危険域と注意域の境目を行き来しているだけであつてオーバーロードすることなどない！今後も多少の調整はしなければならぬが……なに、何故警報が鳴りだす!?装置が発している熱なども規定内だ、断熱処理に抜かりなどない筈だぞ!!」

マッド野郎の横で訴えている科学者の言い分はまだローガンにもわかる。自分の定規で物事を測っている様子の男に組みつかん勢いではあるがそんなことをしている場合ではないことを理解しているのだろう。マッド野郎が操作したパネルに食いついて自分も問題解決にあたりながら言った。

「夜通しで排熱ではなく断熱処理をしていたんですか!?それでは逃がすべき熱がループにループを重ねてグルグルしてさらに大きな熱として返ってくるのも必然っているものじゃないですかねえ!!」

「そんなことはない私はなにも間違っていないぞ！安全規定からちよつとはみ出すぐら

いの事だつて私からすればお茶の子さいさい散歩をする気分のできることだ！」

「あなたの軽はずみな衝動で我々全員どころかこの基地の全員の命が左右されているのですか今！なーんで突飛なことをせずにはられないんですかチーフう!!」

「発展というのは綱渡りをする気分でなければ一気に飛躍できない物なのだ！石橋を叩いて一步一步前進することなど私の性には合わん！芸術は爆発という言葉のように常に驀進する面持ちでなければこの世の中は生きてゆけんのだあ!!」

大馬鹿野郎である。演説の如く持論を振りかざしているが、この人間は赤いボタンが目の前にある物なら周囲から制止されても『いいや限界だ！押すね!』と言つて拳で叩くタイプだろう。

装置の内部が見える窓の前で高笑い混じりに叫んでいる狂乱男を他所に複数人の科学者たちが作業に取り掛かるが、問題は解決されるどころか悪くなっているように思える。騒音は大きく、肌で感じる熱量も増えて汗もじつとりとかくぐらいになつてきている。

蚊帳の外であるローガンからしても只事でないのは明らかであつた。本来ならここでこちらも動いて事態の收拾にあたるべきではあるうが……。

「これつて俺達も手伝つた方がいいんだらうけどむしろ足を引つ張るだらうから待機して良いのか……?」

「そんなわけないでしょ！今すぐ私達も止めるのに協力すべきよ！」

遠い目になって現実逃避をしようとしたローガンではあったがAR15の叱責により現実に戻される。ラボ内の主な熱源に走り出す彼女に続いてローガンも向かうと、オミが入浴場で好んでいるサウナを連想させられる熱量を肌で感じた。

二人で近付いている間にもマッド主任を除いた科学者たちが解決にあたっているが芳しい成果を出せていないらしい。右往左往している様子が隠すことなくそれを語っていた。

「ちよつとどいてください！無理矢理ではあるけど私がコントロールド回路に接続してパスをカットアウトさせます！」

「た、たしかに戦術人形のあなたがアクセスすればできるかもしれないませんが……！」

「言っただろう心配するなと！そんなことをせずとも実証が完了すれば自動で機能を停止すべく数値は落ち着き機能は停止する！」

「その前に爆発待ったなしよ！そこを大人しく退いて私にアクセスさせなさい！好き放題に言われるだけで邪魔になって仕方ないんだからしつこくパネル前に張り付かずにさっさと作業場から出ていきなさいよ！」

「人形や人間云々は関係なくそうホイホイといいなりにになると思ったら大間違いだぞうわっはっはあ！私は生まれてこの方、誰かから言われたことを大人しく実行したことも

なにもないわあ!!」

「随分と自信に満ち溢れているけどそれって胸を張って言えることなの？俺も我ながら馬鹿だと思ふことを口走ることにはあるけどそこまで酷くないぞ」

高笑いをするテロリストもどきをA R 15が引き剥がして寄越して来たので、とりあえずローガンは腕の関節をキメて背中に回すとその場でねじ伏せる。耳障りに思うことを発する前にローガンはある程度は加減をして痛みで口を封じさせた。

苦悶の声を足元から聞きながら事態の收拾に加わったA R 15の様子を見守るが悪銭苦闘しているのは明らかであった。一本のケーブルをうなじの付近にある(らしい)差込口に接続しているA R 15が額に汗を浮かべているのが見えるが、元々彼女はそこまでの仕事を想定して作られてはいない。A R 小隊という特殊部隊の一員であることからA R 15も他にはない技能を持つていはするが、電子機器に対しての仕事はM 4やR Oの方が長けている。

戦闘において特筆できるとされている正確な射撃こそ彼女の十八番であるので、本来こうしてなにかしらかの装置のロックダウンを行うのは得意ではない。

「なんなのこれ……回路の構造は滅茶苦茶、良い所だけの継ぎ接ぎばかり。それどころか鉄血のシステムでも見たことない独学も良い所の電子回路じゃない……!」

「だから私は天才なのだ!この装置だけじゃなくラボ内のコンピュータ全てのあだあ

ゴキリッ。

「あぎやああああああああああああああ!!」

……この男が下手に口を滑らせなければなの話だが。すんつと無表情になったローガンは琴線に触れられたことを示すが如く関節を外した。

この一件においての元凶が喚くのを意識の外に追いやって他にやれることがあるかを戦場で発揮している観察眼で周囲を見渡すが、どれも触れたことがない機器ばかりで操作の様子がなかった。一般的な端末やドロウソンの操作で戦術端末ぐらいしかまともには扱えないことに内心で地団駄を踏んでいたがなんとかならしたらしい。

ヒュウウウン……という機械音と共に装置が沈静化していき、発せられてラボ内に満ちていた温度が徐々に下がっていく。装置の方に視線を向ければARR15がぐったりとして近くのコンテナにもたれかかっていた。

「なんとかなつたわ……でもこれの回路の全体に負荷をかけて強引に焼き切ったから、すぐにはまた使えないわよ」

「命が拾えただけ断然いいという話です、すいません手間を取らせてしまつて。今後はこんなことにはならないよう、これよりも一層目を光らせませう」

「もう同じことをするのは御免よ。これだったらいっその事、指揮官に報告して——」

そうARR15が言っている途中で、彼女とローガンも通つたラボの出入口が開かれ

る。話に混ざっていないローガンが反射的に外の光が入ってきているそちらの方を見ていると、自分達と同じく今日この時間帯にここに用がる二人の人物がそこに立っていた。

一人がこちらに気付くと片手をあげて相変わらざるの柔和な笑みを浮かべる。そしてひらひらと振りながらこちらに言った。

「グツモーニン、ローガン♪朝からとても楽しいことになってたみたいだけど私は参加しそびれた？」

「まさしくその通りだがある意味グツトタイミングで来てくれたよ45。この事態を引き起こし言い逃れはできそうにないこいつを直ぐに罰してくれる奴が来てくれたしな」
後ろ手に組む45の後ろ、もう一人の友人の方に焦点を合わせると彼は彼でやはり思うことはローガンの倍以上にあるのだろう。笑顔を浮かべながらも感情が滲み出ているその様相のまま、ローガンが組み伏している男にあくまで『穏便』に聞いた。

「……一体、何をしていたというのかな？ 只事ではなかったことは確かだけど僕には一目ですべてを把握するだけの力はないんだ。だから『正直』で『素直』に話してくれるといいんだけど……ねえ、話してくれるよね？」

……ローガンの足元でうつ伏せになっている男がハリーの笑顔にガタガタと震え出したのは言うまでもない。

〈同日・数十分後〉

バタバタと動き回る技術者たちを他所にローガンとARR15はラボに隣接している分析室の方に通された。ハリーが（こちらも見覚えがある）以前上司に対し精神攻撃を敢行した彼の助手との研究・開発部門の配当金云々の話が終わってから、45は操作する情報分析の端末に無線で接続し用があるデータを引き出す。黒い背景に白い文字で羅列している画面で45が一つ一つを目で追って行くその様子を何も言わずに見守っていたのが数分、彼女はふむ、眩いた後に振り返って言った。

「この『座標』のデータだけど、まだ正確かつ深いところまで分析できてないよね？」
「……残念つ悔しいことですがその通りです。報告はしましたが、暗号を解読して不要と判断した大部分を取り除いてもどうしても解読し言い切れない箇所が一つだけ見つかりました」

「散らかったプラモデルの部品のようになっていてわかりづらいけどね。それに解読されているこの羅列は暗号としては軍事的に扱われているものとしてはあまりにもレベルが低い。人を選んだりはするけど、昔の紙の雑誌にあったクロスワードがいい例ね」
「ただ、既存のものとは違ってヒントとなるものが全くないのが辛いものでしたがね」

どう逆立ちをして画面を見てもローガンには全く理解できないが、45と助手の二人がどのような会話をしているのかはまだわからないわけではない。クロスワードの概要をあーだこーだと思いついて出していると、思案していたハリーが言った。

「その解読している方の暗号で共通しているものはあったかい？例えば食べ物に乗り物、地理や歴史みたいなテーマとか」

「複数で関連したワードはあれど、どれにも一貫したテーマという物は見当たりませんでした。点々と共通項があつて繋がっているワードこそあれど、全てが全てそういうわけでは……」

「最後のワードのヒントはなし。他とは全く独立しているから厄介なことは間違いない

わ。でもこうして見てみるとどれももありふれた単語ばかりよ。ひよつとしたら答えはなんてこのない、普通の言葉の可能性も十分にあるわ」

45が画面を切り替えてやや既視感のあるパズルの画面を表示させる。縦や横に並んでいる数字とアルファベットが順々に変換されていき、ローガンも見慣れている英単語が交差している様を写していった。

ローガンも一通り見てみたが、たしかに45の言う通りでどれもが特定の場面であれば見聞きするようなそれではない。本やテレビなどを見ていれば普通に目にする単語であって、特別な事情がない限りは心がざわついたりはしないだろう。

「数が多いな、ざつと見てみた感じとしては百以上はあるだろこれ。物の名前に地名とかええつと……この『はんにゃ』って何？」

「たしか、日本に伝わる鬼女の顔だったかな。嫉妬や恨みが表面に出た女が鬼のように角まで生やしているその様のことをいうわけだけど、ローガンは日本が好きだから知ってると思ってたよ」

「日本における伝承については俺もあまり知らないんだが、そういったものまでこのパズルに盛り込まれているのかよ。これじゃあ何が正解なのか辿り着けないんじゃないのか」

未だ誰にも解かれていない数学の式を見ているのと同じ気分になってきてローガン

は頭を抱えた。クロスワード自体は知識を問われているだけなのだが今回の暗号に至ってはあまりにも範囲が広すぎる。正解に辿り着かれる選択肢やヒントもないでどうやって解読しろつていうんだ、と頭を掻きむしるローガンを横目にARR15はふと気づいたように言った。

「でもこれ、私達が知識に欠いてるとかじゃなくても最低限で物を知っていればできるものよね。もし思いつかなくても文字数や他の交差している文字で少し調べれば出てくる単語ばかり」

「クロスワードを解くのに定石ではあるけどたしかにそうだね。視野を狭めて限定的にしか見ていない、戦いにだとか血生臭いものにも無縁だし……こうして見てみると文化とかにこそ少々齧った感じはあるけど、専門用語のような単語こそ含まれていない。そうなるのもこれもしかしたら……」

『般若』という単語がその一例かと思つてローガンは今一度顔を上げて画面を見た瞬間、ローガンの中で何かが落とし込まれてきた。単語一つ一つを見るべく拡大されている状態から縮小させ全体図を見てみる。そして今一度閃いたことが近いと思つていることを確認し指をさす。

「なあ凸凹しててちよつとわかりづらいけどこれつてもしかすると世界地図の形になつていないか。単語の配置や文字数による形、それと当て嵌められている言葉自体が

それっぽく見える」

そのローガンの一言で皆が凝視する。解説したらしい助手までもが食い入る中で、ローガンは一步引いた状態から全体を見てみる。

このデータが『座標』と呼ばれている理由としては、いくつかの単語の中の色が違っている文字を十六進数——一般的な物の数え方——で変換したことによる。説明こそされてもローガンにはちんぷんかんぷんだったが、単に指定されているアルファベットを英語の順に数え方に沿って数値に置き換えることだけはわかった。残念ながらそれ以降の説明を聞いてはいたがローガンの頭脳で理解はできず、左耳から聞いたことがすぐに流されていっていたのだが。

「たしかに全体を見渡してみると世界地図に似てますね。そうなると『座標』としての数字の並び順に綻びが生じますね……」

「色が変わっているこの位置が意味するものは……45、たしかこれは十八年前にあった……」

「……『災禍鉄人作戦』ね」

ビクリと一人がローガンの周囲にいる一人が身を震わせたようだが、ローガン自身は北アメリカ大陸を模しているパズルの一カ所に意識を割いていたので気に止められなかった。話を聞き逃すと思いきすぐに記憶の中から復帰すると45は続けざまに話した。

「それがどう結びついていっているのかはまだわからないけど今は置いておきましょう。グリフィンも関係した作戦のことまでもが絡んでいるとするのなら、未解読のこれは何になるのかしら？」

「位置的に見てみても、たぶんそこはなんの島や大陸もないし先の事件にも該当することはない。おそらくグリフィンという一点を除いて何にも関連してないんだらう」

皆に倣ってローガンも考え込むがこれといって先に進める情報が思いつかない。あまりにも導き出した結論を正解と思えるだけの補強材が足りなすぎるよりも皆無に等しいのが大きすぎる。マルチエンディングのテレビゲームであればクリア条件がなにも揃っておらずグッドエンドを見ずに終わる、ベストを尽くしたいプレイヤーからすれば歯痒い状態だ。

このままじゃ進退窮まって何もできずに終わるか、と思いポケットに手を突っ込んだ瞬間に指が何かに触れた。咄嗟に取り出してみると一つのドックタグで、無数の細かい傷が表面についているそれに45がすぐに食いついた。

「なにそのドックタグ。ローガンのじゃないよね？」

「ダムの方に出向いて来た傭兵の一人のだよ。こいつの故郷で埋めてやろうと失くさないようにずっと持っているんだが、我ながらなんであんなことしたんだろうなあ……」

鎖が通されているそのプレートに記されている出自を見たのがはもう何回目なのか

はわからないが、暗記できているし片手で数えられる回数ではないのは確かだ。特にこれといった特徴のないプレートと同様の情報をローガンが眺めていると、身長による目線の高さがあまり変わらないハリリーが言った。

「出身はフロリダ？砂漠にこそなっているけどあそこは鉄血の出入りが少ないから、適応できている人からすれば安全地帯に近いのに出てきたのか」

「経緯はどうあれ、生まれ育った地から出て世を渡り歩くのは珍しい話じゃないだろ。傭兵としての稼ぎが悪いから巣立ったつつうのかもしれないし、そこまで注目するところは……」

「……そういえばローガン、昨日の話で砂漠地帯にUAVを送り出して云々って話が あったけど、あれはどこでやったの？」

「さすがに何もなかっただっ広い場所を調べるのは時間と道具の無駄遣いだなと思って、ネバタ州のゴーストタウンになったラスベガスを中心に調べたが結果は知っての通り。瓦解した建物と瓦礫以外、あとは砂だけだった」

「砂漠地帯になったフロリダだけど、あそこにもかつて観光地としてされていただけのことはある施設が数多くあったわけだから調べるだけの価値はあると思うけど」

ふむ、とAR15の言ったことに考えていると45がその端末でも可能としている ネット検索を使ってフロリダ州の画像を表示させる。そこにはたしかに今のフロリダ

にある町の写真と五十年は昔のそれが並べられており悲しい比較がされていた。

「今のフロリダはどうであれ調べるだけの価値はあるんじゃないかしら。『座標』の中の数値は数学のそれみたいに三種類の軸と数字で表されているわけだけど縦と横以外に地中にまで潜りこむように指定までされているんだし」

「……ハリー、たしか今日の午後にはUAVの調整が終わってまたの探査が可能になるんじゃないかったか？」

「その気になれば午後一にすぐに飛ばせるよ。フロリダだと探査が始まるのは夕方ごろになると思うけど今晚には結果がまとまる筈だ。飛ばすというのなら僕からは許可する」

その言葉にローガンは頷いた後で写真の中のフロリダの街並みを見る。かつてはテーマパークがあったりして栄えていた町が寂れ、砂の中になが残されているのか。自分にとって都合の良い想像ではなく、起り得る事態を想定して思い浮かべているとARI5がローガンの袖を掴んできた。

「どうした？」

「……さつきからローガン、怖い顔してるわよ。険しいなんてものじゃない、それこそ鉄血の奴らと戦っているのと同じぐらいに」

実際に自分がどのような顔になっているのかはわからないが、いつも冷静で何にも動

じないスタンスを取っているAR15が言う事なのだからよほどのことなのだろう。かといってすぐにも通りの感じにしようと思ってもホイホイとできることではないのだが、無意識に眉間に皺が寄っていたようなので揉み解す。それだけで表情が柔らかくなるわけではないだろうが多少はマシになるだろうと継続していると、苦笑いしている45が言った。

「それとさこのまだ未解読のこの暗号だけど、ちよつと一日だけ私に預けてくれない？きつとだけど解読できると思うのだけれど」

「私はかまいませんが……ハリー指揮官は？」

「……貴重な情報だからね。外に漏らしたりは絶対にしないように」

「わかっているわ、そこは心配しないで」

45からの申し出に応じて助手が『座標』のバックアップデータを作成を開始する。その作業を傍で見ながらハリーと何かの話をしている間にもローガンは揉んでいたのだが、やはり普段から触れている部分でもないので短時間でも痛くなってくる。そろそろ我慢もできなくなつたので一度手を離し、ローガンと同じく事の流れを見ていたAR15の方を向いた。

「これでどんな感じ？」

「単に赤くなっただけで何も変わっていないように見えるけど……でもなんだかさつきよ

りはいいわよ」

「なんで肩を僅かに震わせて口の端もわななかせているんだ。それかあれか、目が怖
いっていうなら代わりに口角を上げて笑って見せればいいってことか」

「やめなさい、そうやってもただキモくなるだけで誰も得しないから」

破顔して笑うAR15にそのままローガンは思うがままに顔を変化させていったの
が数分、もうやめると他の者にやめるように促されるまで続けた。

……内で騒めく、正体不明で漆黒の感情を誤魔化す様に。

49. 継戦続行 — W i l l t o s u r v i v e —

静寂だけが満ちる地下通路が続く、ということにはならず、登山を想像させる坂道を十数分間歩いた末にようやく終わりが見えた。先頭をゆくハルカが割れ目のようなそこから顔を覗かせて左右を確認、そしてこちらに対して頷いたのでローガンは彼女と同時に飛び出して一帯に敵対者がいないことを確かにすべく辺りを見る。

どこかのプラットフォームに出たらしいが、自分達以外の誰かがいるわけではないようにホラー映画のように不気味なほど静かだった。

『AK-74』のタクティカルライトで目につく箇所を全て照らし、先行したエクスキューションナーとアッシュュが潜んでいるのを見逃さないよう気を張り続ける。

「クリア、と思いたいが実際はどうなるかわからないな。オアシス、最短で地上に出るルートとしてはどう行けばいい？」

『今の向きのまま見て三時の方向かな。カメラやセンサーが搭載された電子機器が転がっているわけじゃないから敵がいるかどうかまではわからないけど、進んだ先には点検用エレベーターがあるよ』

「今もここに全域に電気が通っているわけじゃないから点検用なんてのがあっても意味が

ないだろ」

『もしかしたらただけどね。今もまだ非常回路が仮死状態であるのならあたいが起動してエレベーターを動かすことが出来るよ。運が良ければそれで地下一階にまで一気に戻れるし、一応確認してみたらどうかね』

都合のいい夢を提案されているようにローガンとしては少々気乗りしないが、ここまでの戦闘による負傷者もいる。最低限で戦える者と帰還する用意に入っていれば偵察として先行していた民兵の遺体を運び出すべく残っていた味方と合流することもできるだろうし、自分達も遠回りせずに地上に出ることが出来る。

任務とはいえないにも馬鹿正直にここでエクスキューションナーを始めとした鉄血兵と戦う必要性もないのだし、長居して無駄に装備を浪費すればこの地下で徘徊しているE・L・I・Dによる脅威が増すことになる。凶らずとも三つ巴の状態になっているのだから、数もなにもかも劣っているこちらは離脱の態勢であるのが吉だろう。

「確認してみるだけいいだろ、ローガン。どっちにしても動かないと始まらないし望みがあるのなら私は賭けてみたい。あんたらも含めた価値ある命を、こんな掃き溜めに埋めさせたくないしな」

「希望的観測、ではあるけどここでは私達の分が悪いのは確かよ。救援はないことを前提にしないとなんだし行きましようよローガン」

「……選択肢はないな、仕方ない。バルソク、俺の左側を頼む」
「任せろマスター」

もう分断して行動するのではなく一纏めでそうすることにした以上、出し惜しみをやめたバルソクが『P P 1 1 9 B A T O N』ではなく自分の分身である『A E K 1 9 9 9』を手に持ちローガンに動きを合わせてくる。

バルソクも分隊行動は戦術人形ということもあつて元々からできていたが、彼女の性格が出て基地での演習では大雑把な面が少々見受けられていた。銃器によるものは仕方ないとしても慢心や決めつけによる見落としを無くするよう、現在も訓練中ではあるが最初に比べれば断然動きが繊細かつぎこちなさもなくなっている。

こちらに歩調なども合わせるように位置関係の確認も忘れていない彼女を内で評価し、ローガンは引き続き右翼側をハルカ達民兵に任せて前進した。

『オアシス、僕達グリフィンのデータベースにはアツシュという名の鉄血兵のデータはない。あれについて知っていることがあれば教えてくれないか』

『残念だけどそれはない袖を降らせているのと同じだよ。あたかも彼女に関しての情報は一握りしかないし、他のハイエンドと同じように彼女そのものを突き詰めるには十分だよ』

『それがかまわないよ。君は交戦した隊員にはわからないことが唯一わかるかもしれない』

い、僕達側にいてくれる存在だ。奴の装備や特殊能力、なんでもいい」

ハリーが無線を通じてアッシュの情報をオアシスから聞こうとしているのにローガンも耳を傾けつつも、進んでいる地下通路の陰に銃口と共にライトを当てる。不意打ちとして急に飛びつかれても対応できるよう、ハンドガードを持つて支えている手の内にあるナイフを握りしめながら注視していたが、杞憂で終わったので再び前方に視線を戻した。

『あのハイエンドの戦闘スタイルは速撃を主としているけど相手の急所を殴る蹴るだけじゃない。手練れの兵士であれば可能としている格闘術で技をかけられる、この一点に關しては他では見られない大きな違いだよ』

「それと、俺が撃った弾丸を見た感じでは何のアクションもなく逸らして見せていたな。いつから鉄血の人形は手品師も戦力に加えるようになったんだよ」

『あれは一時的に体表面に不可視の膜を張って不要物を明後日の方向に逸らす『ディビエイトシールド』。適用できる時間が短い上に再使用にはかなりの時間を要する、彼女だけが持つている能力だね。異なる点はあるけど似ているものがあるとするればI. O. P製のでもいたよね、一時的に損害を無効化して持ち堪えられる人形が』

『……いるにはいるがどうか、『フォースシールド』と似ているという事か』

『そういうこと。アッシュはモジュールによる効果が攻撃面には機能しない反面、防衛

の方に傾倒している。だけどそれを補っているだけの戦闘能力もあるのはたしかだよ。それに関してはローガン、あなたが一番退官した筈』

オアシスが言うことに間違いはない。今しがた説明であった『デイビエイトシールド』による危機回避だけで生き残ってきたわけでないだろうということとは先に交戦したローガンが一番知っている。自身も体得している近接格闘術を駆使して動きを封じにきたこともそうだが、ハモンドに対し目にも止まらない速度で衝撃弾を装填している銃を撃ってきたので、ヴェスピドやリーパーのような鉄血兵とは一線を引いた戦闘力を有しているのは間違いない。

『鉄血内での立ち位置ははっきりと言えないけど、エクスキューショナーとのやり取りからして腫れ物扱いをされているみたい。エージェントに一目は置かれてるぐらい優秀ではあるけど、経緯は複雑で信用はあまりされていらないようだね。あたいが把握できているのはここまでだよ』

『データベースの更新に合わせて、世界中の各所で似た人形の日撃情報があるかこれからは調べないとだな……。とりあえずありがとう、ほんのちっぽけな断片でもなにもないよりはマシだ。今後奴に關係する情報が入ってくればすぐにシェアするようにするよ』

『それはどうも。あなたの情報収集能力はあたかも認めているから、重要であればなお

のこと早期の通達をよろしく』

自分達の足音や息遣い、または装備が揺れたり擦れたりして起こる物音以外が聞こえてこないこの空間のどこかに敵が潜んでいるかもしれない可能性を無意識に考慮するのは当たり前のあるのだろう。ただそう無自覚な心構えができているのだとしても実際に結果を示せずこととは話は違う。一丁前なことを言っておいて実力は大したことなかったので口先だけだった、という人間がいるのはいつの世も同じだ。

そんな人間に自分もなりたくない、というのは少なからずローガンにもある。その延長線で認められたい、と思うのは自然でなにもおかしく思うことはない。そう浮かんできたということは敬意を払えるか張り合える相手がいるからであること以外に他ならない。

そこでなぜ今そんなことを考えているのかと、ローガンははたと気付いてかぶりを振る。生還か死、そのどちらかがこれからの行動で左右されるというのに暢気に人生について考えている暇はないだろう。そう叱咤しながら進んでいったところで非常口を表すマークがある扉に辿り着いた。

「バルソク、416」

無言で二人が扉の左右について領き合う。そしてバルソクのハンドサインによるカウントに合わせて416が扉を開けて突入、ローガンも続いて彼女とは逆側に進入し

た。開けてライトに照らされて視認できたのはこちらに背を向けてしゃがんで何かをしている人影が三つ。鉄血ではないその者達に何者かと尋ねるなど、そんなことは無駄だということをローガンは知っている。

声を掛けることもなく、416と同時にその三人に向けて一掃掃射を開始する。バラバラララララララッ!!とローガンの手にあるカラシニコフがフルオートで火を吹くと同時に銃弾を放ち続け、肉眼では視認できないまま照準に収まっている三人に向かつていった。

敵としている三人は撃たれながらもすぐさま立ち上がってこちらに襲い掛かろうとしていたが、416との同時攻撃による火力に圧倒されて倒れていく。四肢が分断されてもなお這ってこちらに近付いてこようとしているがそれも無意味だ。

そして三人が動かなくなったところで銃撃をやめ、ローガンは『AK-74』の弾倉を取り換える。黒い大型弾倉を差し込んで薬室に弾丸がセットされているのを確認、そして銃口を向けたまま接近した。それぞれを足で蹴っては反応がないことを確かめ、本当の意味で死者になったことに確信が持てたところで後続で待機している皆に向かつて言った。

「クリアー！」

そう言うとは不測の事態に対応できるよう待機していたバルソクを先頭にG11とハ

ルカが、そして負傷者に肩を貸しているハモンド達こと民兵が入って来た。各々がローガンと416が何に対処したのかを見て、ここにも鉄血に並ぶ敵対せざるをえない存在に溜息を吐いた。

「無尽蔵に出てくるだけでなく、こんな所にも居やがったのか……」

「鉄血の人形にまで群がっているのは初見ではないけど、気分がいいものでないのは確かだよ。ここで喰われているのは奴らだったから良いけど、自分の腹に顔を突っ込まれているのを想像するのは本当に嫌だよ」

辺りに部品をばら撒いている鉄血兵と今しがた制圧したE・L・I・Dだった三人を見下ろしながらそう言うG11にローガンも言葉を発することは無くとも同感だ。自身の人生の終わりを告げる事象が銃殺によるものなのか圧死によるもののかはわからないが、生きながらして腸を食い荒らされるのだけはまっぴら御免である。自我があるかどうかさえ定かではない『その後』が怖いからではなく、単純に苦痛に苛まれる時間が他よりも長いだろうからだ。

G11は恐らくそこまで考えているうえで言ったのだろうから、ローガンとしても強く共感を持てる。ローガンも思いつく限り死因を脳内で幾度と比較してみても、その結果に行き着くのは同じだった。

「上の層で出くわした時みたいにならないうえ、今は良しとしましよ。」

ローガン、頼んだわよ」

「ちよつと待てよ……よし、接続完了だ。オアシス、行けるか？」

『ばつちり。最初に回路の生存チェックつと……うん、年季の入った電子回路だから時間を要するけど動かせるよ』

「この手の仕事に関してはこの中でお前しかできない。頼んだぞ」

『任せて。この手の仕事はあたいたつての得意満面で意気揚々に自信もつてできるよ』

ローガンによって無線で接続され、エレベーターの制御パネルから制御回路にアクセスしたオアシスが一つや二つどころではない処理を開始した。初めて声を聞いた時に行ったハッキングと同様にローガンの端末の画面にダイアログボックスが表示され目まぐるしく文字が流れていく。

『……よし、回路の復旧完了。エレベーターを起動するよ！』

処理を開始して三十秒とちよつとしてオアシスの掛け声に共鳴するようにして、低い唸り声をあげるようにしてエレベーターの制御パネルが点灯した。パツと光った橙色の呼び出しボタンの次に頭上にあるフロア表示も生き返って、ゲートの向こうから駆動音が聞こえてくる。それか普段自陣にて耳にしているのに類する物だということを確認できたのと同時に左右に開かれて中が露になった。

開かれる直前には既にE、L、I、Dによるモンスターハウスを想定して、バルソクを主力に戦闘態勢に移行していたが想像していたことにはならず済んだ。電灯に照らされているのは床以外が白塗りになっているエレベーター内部だけで敵が乗り込んでいる、などということにならなかつたことに一息ついたハルカが後方にいる民兵に一声かけた。

「よし、負傷している奴と肩を貸している奴は先に乗り込め。重量過多のブザーがなるまで詰めるよ！あたし達は次に乗り込んで合流する！」

「ほれほれ、さつさと乗った乗った！グリフィンの私達はあんたたちほど派手な怪我だつてないし体力の消耗もしていない。気を使わずに上に行つちやつてくれよな！」

「す、すまん。先に行かせてもらう」

明るい声を発するバルソクに軽く背を押された負傷した民兵がエレベーターに乗り込んで、さらに次の半身血塗れの男がゆつくりと入っていきこうとする。だが途中で立ち止まって振り返ると、身体と同じく半分以上が包帯に覆われているその顔をこちらに向けて言った。

「おいハモンド、お前はどうするんだ」

「どうせ五体満足で十分に動ける一人にカウントされてしまっているさ。ていうかさすがにお前みたいに酷くなっている奴を押し退けようとは思わねえよ」

よくよく見てみるとその負傷兵とハモンドには同隊であることを示すものは一切ない。かといってハルカ直属の部隊であることの証である統一感のある装備を身に着けているわけでもなく、その人物もハモンドに近いのか同じ歳であることを窺わせるぐらいい若々しい。

消去法でハモンドの部隊の一人であるその男は自分達が来た道の方を見張っている隊長に続いて声を掛けた。

「ならオレからは特に言う事はないがお前も早く来いよ。こんなしみつたれた場所なんざしばらくは居たくないしな」

「わかったからもういけ。早く帰りたいのはこっちも同じだ。喋れる元気があるのならここに残ってくれてもいいんだぞ」

そのハモンドの言葉に肩を竦めた負傷兵は足を引きずりながらもエレベーター内部に入っていく。ローガンはここから退く彼から背後にいるハモンドの方に視線を移したが変に絡まれるのを避ける為に一瞥するだけに留めておく。思うことはあるが問いつめるほどの事ではないし面倒ことになるのは目に見えている。第一ローガンはさほど重要でなければそうしつこく人に食いつく性格ではないのだから、そんな気など一切湧きもしなかつた。

先導役に任された万全の民兵も乗ったエレベーターのゲートが閉まって動き出す。

くぐもって聞こえてくる駆動音と共に上昇している度に希望の架け橋が見えてきていくようなあつたが、それが不確実で霧や雲などでしかローガンには感じられない。

「実際にこうして動いているのに不安なのローガン？それともローガンって実は悲観主義な人間だったりする？」

「……持っている目標ゆめを語ったりはしたけどそううまくいくものじゃないつつうことはこれまで何回も痛感してきた。現実主義、と俺は自己分析してたけどある奴には否定されてそう言われたりもしたしひよつとするとそうかもな」

「ローガンは気持ち強く持ちなさいよ。今回の理不尽に押し潰されようとしているのはあなただけじゃない。私達だってプレス機にかけられようとしているんだから、脱する前に勝手に一人で折れてもらわれると困るわ」

G11の横から出てきた416がローガンの鼻先にピツと指を突き立てるとそう言い放つ。力強い言葉に比例した輝きのある彼女の碧眼が映しているのはローガンであるのは視線でわかる。だが自分自身がどんな様相でいるのかまでは悟れない。自分の内面が投影されてしまっているのはもうG11を通じて知っていはするが、歩く死体への恐怖に不甲斐ない自分への怒り、そしてアッシュの言動による苦悩が複雑に混ざってしまったてなにながどうなっているのかが自分の事であるというのに何も自覚できなかった。

「私とG-11はあなたのことを必ず連れて帰るよう、あの45から強く念押しされているわ。あなたを生還させたいと思っっているのはあいつが404の隊長で、そいつからの指示だから、みたいなつまらない理由だけじゃないわよ。私だって友人でありたいと思う人は選ぶわけだし、数少ないそいつを見殺しにするような真似だってできればごめんなの。おわかり？」

「……おわかりだけでも内心恥ずかしがっているのが浮き彫りになっていきますよ。別に行く先を見失ったり戦意喪失したわけじゃないのだからそうガチンコの激励はしなくてもいいのに、そう柄にもないことをするからお鼻があ!？」

「あーあー、今のはマスターが悪いぜ。せっかく思っっていることを包隠さずに曝け出してくれたというのにおちよくられたら手も出て然るべきだ。鼻歌で感謝の意を示してやれば殴られずに済んだらうにおごっふ!？」

「二人揃って馬鹿にしているじゃない、私も『つい』手が出てしまうぐらい楽しくて仕方ないわ。シャドー隊って近辺に手頃な奴がいればちよつかい出しては痛い目に遭うのがお好きな隊なのかしら」

416が額に青筋浮かべながらも鬼も裸足で逃げ出すぐらい百点満点な笑顔を見せているが、ローガンとしては単に自分がそこまでへこたれていないことを示そうとしていただけであった。場所と状況的にはそうふざけていられるわけではないのだから、一

応礼を混ぜながらの意思表示をするつもりであったというのが嘘偽りのない本音である。……ただまあ、少々弄りたいと思ったのも嘘ではないので416が気分を逆撫でされた猫のようになるのは道理であるのだが。

「……あんた達を見ていると、グリフィンの連中は常に戦場でも余裕も持っているものなのかわかるな。それなりの場数は踏んでいるつもりだったんだが、あたし達がまだまだなのを痛感するよ」

『違うからね？単に彼らが特殊であってグリフィンの皆が緊張感皆無なやり取りをするわけじゃないからね？』

『404の二人は戦いの合間に頬を折り合うようなことをしているのはいつもなのか。ローガンとAEK999は示し合わせたようにコントをしているのは……通常運転っぽいね！』

「今考えることを放棄したよなオアシス」

あつはつは、とオアシスが笑ったタイミングでエレベーターが地下一階に到達したらしく『B1』の表示が光る。負傷兵全員が地上に限りなく近づけた、と思った時だった。突如としてエレベーターの制御パネルも動力を失って沈黙し光を失い、駆動音も何も聞こえなくなった。

その異変にハルカと振り返ったハモンドだけでなくこの場に残った数人の民兵が動

揺し始めたが、同じ組織に属していないこともあってすぐに俯瞰的に物事を見れた。ローガンは数度エレベーターのパネルのキーを叩いて反応がないのを確かめると言った。

「オアシス」

『いや、回路自体は死んでない。非常電源がダウンどころかあたい以外の誰かに侵入されてもいないよ。物理的にカットアウトされていないのは言わずもがな、でしょ？』

「ああ、今しがた俺達の誰かが勝手に弄ったわけでもない。一応ちよつと見てみるが……」

ローガンはパネル下部にあるメンテナンス回路の蓋を開けてみて配線に異常がないか見てみたが、どのケーブルも無事で切られている痕跡はない。オアシスがシステムの方に異常がないと言った以上は原因は別にある。考えられるとすれば……。

「地下四階^{地下}ではないところから物理的に介入されている、とかはあり得るか」

『もしそうだったらまだ回路を遠回しに繋げてパスできるよ。寄り道しないのなら始点と終点が無事というだけで動かすことはできる。でも今回のはなにをしてもダメ、できるだけのことを望んだレスポンスは返ってこない』

「……バルソク、ちと危なっかしいがゲートを無理やりこじ開けて異物がないか確認するぞ。416とG11はいざという時の為にスタンバイ」

ローガンは頷いたバルソクと両開きになっているエレベーターゲートの端を隙間から指をかけて掴み、タイミングを合わせて開かせる。両腕の負荷は相当なものではあるが大の男や戦術人形であればまだ対応できる重量である。

グググ……とゲートは軋みながらもゆっくりと開いていき、大きくなっていく隙間から流れてくる空気が別物のように感じているのはきつと気のせいではない。第四層になつてからの重々しい空気が死臭に満ちている、地上における戦場でもここまで異質に感じたことは滅多にない。比較して上の層からののはそれが緊迫している程度という表現しか頭に上らないだけでなくどこか一息つける、戦場であるのにも拘らず気持ちのどこかで安心できそうであつた。

そう過らせながらゲートを完全に開けた瞬間に416とG11はすぐに自分達の分身の銃口を死臭が流れ出る先の方に向ける。ローガンとバルソクもすぐに各々の銃器を手に持ちながら顔を覗かせてみたが、上から下へと伸びるエレベーターのワイヤーがあるぐらいで目につくほどの物は見当たらなかつた。

「見える範囲で異常はなし、ね。これエレベーター本体になにかあつたりしない？」

『モーシヨンログの最後には『指定フロアに到達』とだけあるから、下りれずに宙ぶらりんになっているのが現状だね。無論、向こうも黙って佇んでいるんじゃないやこれやっているのはだろうけど』

「こつちからどうにかできる、というわけじやなさそうだな。ただまあ、今すぐ俺たちが上の方に戻って——」

手助けすればいいだけか、と言葉を続けようとしたが突然横から誰かに飛びつかれたので口に出れなかった。不意打ちに等しいその衝撃に踏ん張ることもできずにローガンは倒れ、軽く地面に頭を打ち付けて視界が衝撃と共にブレる。袖を捲つて露出している腕を擦つてヒリヒリとした火傷に似た痛みも感じることで不快感が増し、文句が頭の中で幾つも出てきた。

「おい、一体何を……?!」

脈絡もない唐突なことにローガンは何も考えることなく原因を見ようと頭を動かしてみると、自分の胸の中には416が飛び込んできていて自分を押し倒したのが彼女であるのを見て明らかであった。

しかし決してエレベーターの異変が起こる前のやり取りによる報復を彼女はしたわけではない。そうローガンがすぐに気付けたのは416の背が横一文字に斬られ、彼女の赤い人工血液で手を濡らしたからであった。

「私もバカね……身を挺して誰かを庇うだなんて……ッ!!」

「416……!!」

視線を上げるとそこには目を血走ったようでありながらも光らせている戦術人形が

いた。黒で統一された装備の中で一番目を引くのは右手にある大剣で、その切っ先は赤く染まっている。

暗闇の中で立っているその姿からローガンは死神を連想し、不吉の象徴にまで見えるその鉄血兵の名を言った。

「……エクスキューションナー！」

「言っただろ、ここがためえらの墓場だつて。遠慮もなければ制約ももうない。ハンターの仇であるためえをここできっちり殺してやる！」

「させるかってんだ！」

ローガンが態勢を立て直す前にエクスキューションナーが追撃を仕掛けようとしたが、すぐさまハルカがタックルを食らわせて転倒させる。その間にローガンは覆い被さっている416を横に転がしてから自分は立ち上がり、416の『HK416』を彼女に持たせてからベストのフックを引っ張った。

「バルソク、援護射撃！G11は撤退する後方の安全確保だ、急げ!!」

「ハモンドは一人と撤退のルートを構築するのを手伝え！お前達二人はあたしとローガンの援護に回れ!!」

『来た道の方から鉄血兵の増援を検知。危険ではあるけど反対側の方に逃げるしかない！G11!!』

「わかった！」

バルソクとハルカに二人の民兵が前に立ってエクスキューションナーに撃ち始めたタイミングでローガンは『AK-74』を下げてから『HK416』のストラップを肩に通す。そして一息で少女の身体を首の後ろに担ぎ上げ両腕で落とさぬように掴むと持てるだけの力でその場から退いた。

振り返る寸前に複数の銃声が鳴る方を見ればエクスキューションナーは大剣を翳して盾にし、じりじりと距離を詰めようとして来ている、わけでもなかった。むしろ自分から後退しエレベーターゲートの方に向かっていているようにも感じるぐらい、一歩一歩着実に足を動かしているようにも見える。

「いいぞマスター、私達も適当に切り上げるからさっさと……！」

「いいのか、このまま退いてしまつて？」

銃声を合間を縫つてエクスキューションナーの声を耳にした瞬間、背筋だけでなく聴覚の神経系を通じて脳にまで悪寒が走った。比喩ではなく言葉の通りに。空っぽになっている胃の奥底に直接氷を落とし込まれた、なんて表現が生易しいぐらいだ。それほどまでにエクスキューションナーが何をしようとしているのか、すぐにわかつてしまったのである。

それはハルカも同じだったようで、すぐに突撃銃のは発砲を続けながらも突貫を開始

した。

「待てやめろお!!」

「遅い」

バツンツ! といとも簡単にエレベーターのワイヤーが切断される。ローガンは近年のエレベーターの機構を理解しているわけではないが、弛むことなく張られたワイヤーが重要な役割を担っているのは直感で理解できる。

大剣でワイヤーを切断したエクスキューショナーは身を翻して接近してきたハルカに勢いを殺すことなく蹴りを繰り出す。鉄血兵のハイエンドモデルの一体、その肩書きに相違ないまでに威力があるのはすぐに見て取れた。

だがハルカはそれを大人しく食らう人間ではない。彼女とて一つの戦闘集団を纏めてあげて先頭に立ち続けている、戦場で腕を叩き上げてきたとされる一人の兵士だ。

無駄のない動きで屈み頭部だけでなく首諸共狩り取る勢いであつた回し蹴りを回避。装填している弾倉が空になったからかアサルトライフルを手放すと拳を打ち出して接近戦に持ち込んだ。エクスキューショナーの得物は言うまでもなく手に握られている黒塗りの大剣でありそれは長物だ。距離を取るのではなく間合いを詰めて振りにくく決定打を与えられないようにする、ローガンから見ても他人の援護を振り切つてという一点を除いていい判断だと思う。顔面に繰り出されたそれは避けられたが、こうな

ることを予測していたかのように両腕で首を抱え込んでエクスキューシヨナーの足を踵で一息に蹴って浮かした。このままいけばすぐに地面に組み伏すことはできる。

しかし忘れてはならない。相手は人間とはかけ離れた身体能力を持つ機械仕掛けの人形、その中でトップクラスの性能を持っていることを。

「舐めるなあ!!」

転倒こそすれどすぐさまハルカを片腕だけで熨せるのは戦術人形であるからだろう。本来人間であればそんなことなどできずに組み伏せられて何もできずにいた筈ではあるが、その道理は戦術人形に必ず通用するわけではない。

エクスキューシヨナーの怪力によつて引き剥がされたハルカは背を地面につけるよりも先に体を回転させて両の足で着地、そしてホルスターから拳銃を引き抜いた。

それと寸分違わず、黒の戦術人形の背後から金切り音が聞こえてきた。ガギャギャギャギャギャギャギャ!!と火花を散らしながら人の丈以上の高さがある金属の何かが下降していったのを認知した途端、ズンツ!!と巨大な何かが落下した音と同時に振動が僅かに足に伝わって来た。

「カゴ一杯の人肉のミンチ、一丁上がりつてな。これでどれだけの死にぞこないどもを引き寄せられるのか、少し試してみたくもなるな」

「ふざ、けてんのかためえ!人の事を実験道具みたいに言つてんじやねえ!!」

「人間だつて自分達が病原体に蝕まれ死なないようマウスのような動物を使ってきただろうが。さも自分達は許されるような口をきいてんじやねえ!!」

今度はエクスキューショナーが接近し、現時点でこの場にて最も相対しているといえるハルカに身の丈の剣を振りかぶる。頭部から股にまでかけて両断するよう、大根切りをするのと同様にエクスキューショナーが自身の頭の上に構えた。

「そんなつまらないリズムを刻ませてたまるかってんだクソが!!」

416を担いでいるローガンに代わつてバルソクが動く。死神の鎌と同一の役割を果たそうとしていた武器の軌道を『AEK-999』の銃床で殴つて逸らし、あと一秒遅ければもう一人の命を散らされていた未来を潰した。

ガアンツ!!と切つ先がアスファルトの地面を切り裂いては砕き、小石サイズになったそれを撒き散らす。それには目をくれずにバルソクは割つて入った状態からすぐに反撃に転じ銃口をエクスキューショナーへと向けるが、敵もすぐに巨大な片手で掴んで自分から逸らしながら引き寄せる。自分の銃が奪われるわけにはいかないのでグリッブを掴んだままになるが、こうなった以上は両手で持っている必要はない。

グリッブを握っていない右手を腰に伸ばせばそこにある物として届くのに『PP-19 B A T O N』があるが、接近戦では銃よりも早い武器があることを体を持って知つた彼女は別のそれに手を伸ばす。ローガンが持っているのとあまりサイズが変わらな

いサバイバルナイフを逆手で引き抜いたバルソクは難ぐようにしてエクスキューシヨナーの首元に目掛けて振った。が、大剣を垂直に突き立てられて防がれる。

必然的に二人は額が触れるほど近くで睨み合う形になる。無論、両者とも膠着しているように見えて力比べをしている状態だ。どちらかが何かのきつかけを持ってばこの均衡が崩れることになるが、ローガンだけでなくハルカと民兵二人のいる位置が悪い。援護するべく回りこむこともできるだろうが、敵増援が迫ってきているのだからここで決着をつけられるだけの時間があるのか怪しい。

「どいてろ時代遅れ！オレ達よりも十歩は離れている玩具で立ちふさがっているんじゃないねえ!!」

「そんなんで立つてはいけないことになるわけねえだろうが！ワタシが戦えばビートを刻む隊の皆やマスターを守る、それだけで十分だ!!」

「借物の理由を堂々と言ってんじやねえ反吐が出る！」

「違うな、これはワタシがここで戦う『存在理由』だっ!!」

一瞬だけ頭を引つ込めたかと思うと、その分を頭突き of 威力の増強に換算させた。ゴツ！と鈍い音を響かせたバルソクはよろめいたエクスキューシヨナーの腹を蹴って距離を置かせてナイフを投擲する。そのナイフは残念ながら急所に命中することなく弾かれたがバルソクにはそれだけでも十分だったのかもしれない。おかげで『AEK—

『999』の代わりに『P P 119 B A T O N』を掴んでの射撃体勢に移行でき、次の攻撃手段を行使する準備に入れた。

フリーになった右手が次にどこに伸びたかを確認し、そしてそこに何かがあるのか思い出したローガンは叫んだ。

「急いで退け！このままじゃ俺達が邪魔になる！バルソク、スリーカウントだ!!」

「オーケーマスター！スリー——！」

右手に握られた『それ』を目にしたハルカや民兵達も察したのか、すぐさま退避を開始する。バルソクもサブマシンガンで発砲しながらゆっくりと後退しているのを見てからローガンもハルカ達が出てから自分も小部屋から退けるようにポジションを得て、右手で握った『P 2 2 6』をエクスキューションナーへと向けた。

「ツ——！」

数度引き金を引いて足止め、並びにバルソクが弾倉のリロードができるだけの時間を稼ぐ。時間としては本当に一秒、それ以内にまた戦闘が継続できるだけの態勢を整えられたバルソクがまた口を開いて銃声に負けないほどの大声を響かせた。

「ワン——！」

セーフティをかけぬまま『P 2 2 6』をホルスターに戻すのと、バルソクが手に持っている物のピンが地面に落ちたのは同時だった。ローガンは出入口に数歩で到達して

から手の届く距離にいるバルソクの肩を掴んで引き寄せる。最後に小部屋の中を見た時には『それ』が投じられ、構えを解いた敵リーダーの目線がそれに奪われていた。

「ゼロ!!」

そう耳にした途端、すぐに爆発が起きて小部屋の中に爆炎が生まれた。ドガアンツ!! と爆音までもが轟いて狭い一つの空間を支配し破壊する。

フラググレネードとは爆弾のように火薬を爆発させるのではなく破片を撒き散らし敵を纏めて片付ける武器の一種だ。地下に進入する前に地上でバルソクがローガンと一緒に鉄血の敵部隊を殲滅するのに使ったのがそうだ。そして今回、バルソクは通常の銃火器だけでは埒が明かないとして使用に踏み切った。本来ならそうすべきではないのだろうが、状況が状況だけに仕方ないとローガンは思う。あのままではいずれはエクスキューショナーの凶刃に全員が倒れることになるのは時間の問題であっただろうから。

「げほっ……バルソク、無事か?」

「ああ、なんとかな。今回ばかりはワタシも勲章ものじゃないか?」

「帰ったら他よりも一杯多く奢ってやる。ていうか俺と動きを合わせているお前を他に寄越すのが惜しくなってきたぞ」

「へへっ、それは今のワタシにとっての最高のメロディだぜマスター!」

にかつと笑うバルソクと拳を打ち合わせると、銃声が鳴りすぐ近くに銃弾が着弾する。バルソクとすかさず身を屈めて鳴った方に視線を動かすと来た道から複数の鉄血兵が進軍してきていた。

ローガンがバルソクの背を叩くと彼女はニヤリと頷いて『AEK—999』を構えて撃ち出す。ローガンは耳元の無線機に手を当てながら言った。

「ガイドを頼むぞオアシス！お前が俺達の道標になつてルートを指示してくれ！」
『了解！』

真つ向から相手に出来るほどこちらには戦力が残されていないとして、ローガンは腰に下げているスモークグレネードを手にとるとピンを抜いて投擲する。一つだけではなく二つ目も投げて敵の視線を主に遮らせた。既に交戦状態にあったG11とハモンドであったが、完全にスモークが満ちたところで撤退すべく行動を開始。民兵全員とハモンドだけでなくハルカも煙の中にフラグを投じてから背を向けて走り出し、進行方向側に先行し始めた。時折後方にいるこちらの方を確認しながらG11は彼らに続き、バルソクはローガンの後ろで殿につく。

意識が朦朧としているらしい416にローガンは言った。

「頑張れよ416。お前がここで戦えない分、俺達が踏ん張るからこんなところで死ぬんじゃないぞ。俺を守ってくれたことの礼だつて言わなきゃならねえんだから……」

！」

失つたものはあつた。だが得られたものも確かにある。

返つてこなくなつたことによる重みこそ尋常ではなく無視することなど到底できない。それでも同じぐらい手の内に収まつてくれたものによる温かさは何物にも代え難く、失くしたくないととても強く思える。

互いの生存と目的達成を賭けた『闘争』はまだ終わったわけではないが、また一歩として前進できたのは間違いないかつた。

「絶対に負けてたまるかよ。煉獄だろうがなんだろうが知つたことじゃねえ、何をしてでも全員で生きて帰つてやるさ」

50. 闘争と隠忍 —To survive, to withstand—

先導しているハルカとハモンドがまた発砲し、何体目かわからないE. L. I. Dを排除する。止まることなく進む彼らに続いてローガンも走り続け、足元に転がっている死体を跨いでさらに奥へと身を投じる民兵達を追った。

G11が負傷した416を担いでいるこちらと後方の警戒に当たっているバルソクの代わりに周囲に目を配っているので任せ、ローガンは負傷者を落とすことがないよう気を付ける。息も上がってきて疲労が蓄積されて足がもつれてしまいそうになるのも一度や二度ではなく、転んでしまうかと思つたのは片手で数えられるのかどうか怪しい。

『その分かれ道を右……ああ駄目だ取り消し！その先に鉄血兵が何かと交戦している、おそらくE. L. I. Dだ!!』

「ハモンド、左手に進め！右の方は連中が潰し合っているからアウトだつてよ！わかつたらさつさとお前の俊足を活かして先行しろ！」

「くそつたれ、遠回りに遠回りを重ねられているみたいで腹が立ってきやがる！どこま

で行けばオレらはここからとんずらできるんだ!!」

『聞こえはしないから言うけどさっさと行けよスカポントン! 文句ばかりを口にすると暇があったら人間性を磨けつてんだよがきんちよ!!』

線路が敷かれているトンネルを進んだ先にあるのはレバーを左右のどちらかに倒すことで地下鉄の進行方向が変更される分かれ道。オアシスの指示に従った二人が進行していく方にローガンも走りながら後ろに付いているバルソクに聞いた。

「バルソク、奴らは来ているか!？」

「ぼっちりとブルートが追いかけて来てる! まだ距離はあるがこのままじゃ時間の問題だぞー!」

その報告にローガンは舌打ちをする。どこかで捲き次第、重傷を負っている416の応急処置に移りたいのだが、後方から鉄血兵の中で動きがハイエンドモデル並みに俊敏であるブルートが追跡してきている以上はできない。敵の頭数もこちらよりも倍であるので、交戦しようにも不利な状況下であることを承知で戦わなければならないのは必然。それだけでなくこの地下空間では神出鬼没である『崩壊液』の被爆者の奇襲を常に警戒しなければならないので得策ではなかった。

「オアシス、このシステムに干渉してシャッターを閉じるなりして振り切るなんてことはできないのか!？」

『通電していれば可能ではあったけど非常電源も繋がっていかないからできないよ！ていうかこの管制システムは独立しているからどうしても遅延^{ラグ}や誤作動も起こりえる！民間のシステムは軍用のと違ってずっとデリケートなんだし急速かつ無理に動かせば悪手になっちゃうよ！』

「ちくしょうめ！バルソクは奴らから目を離すな、G11は継続して俺とバルソクの警戒役を専任していてくれ！」

G11からの返答はなかったが、断末魔に近い叫び声をあげて襲い掛かって来た死者を撃ち抜いて応えてみせた。彼女とていつも416に喧しく小言を言われている立場ではあるが、さすがに同じ部隊の人形を失うのは思うことがあるらしい。ちらちらとローガンから少し外れている方に視線を配らせてはすぐに周囲に意識を戻したりと、せわしないにしてもほどがあるぐらいだった。

416から流れてきている人工血液が彼女の背から服、そしてローガンに伝って赤い斑点を築いていく。戦術人形は人間よりも簡単に死ぬことはないが、416が受けたエクスキューションの凶刃は間違いなく致命傷であることは間違いない。四肢が取れようと部品の幾つかが無くなるうとも生きていきでられる彼女達ではあるが、それでも焦りを覚えずにはいられない。耳に聞こえてくる息遣いも何もかもが苦しそうで、戦術人形などという存在を『物』として見ていないローガンからすれば自分と同じ『人間』

を助けようとしているのと同じであった。

「頑張ってくれよ……!!」

ローガンの呼び掛けに言葉を返すことのないことはわかってはいるが、尊く思える存在の一人が危うい状態になっていることから口にせずにはいられなかった。

心を蝕んでくる焦燥感との格闘が始まってしばらくになるが、そのひとり相撲の終わりはまだ見えてこない。息が上がって苦しくなり喉もカラカラになってくるだけでなく、追撃を仕掛けようとして来る鉄血兵に対し憤りも覚えてきた。

片手に持つ『P226』でハモンドに食らいつこうとしていたE・L・I・Dの頭を八つ当たりの気持ちで混ぜて撃ち抜いて排除。死角に入りこまれていたことに驚く彼に言った。

「礼はいい、急げ！」

今自分達が欲しているのは距離と安全な場所。そして応急処置を施せるだけの時間だ。

そう無意識に認識しているのを己で理解しながら、ローガンはまだ自分達のリーダーに追隨している民兵の一人に接近していた死者の足を撃って転倒、放置し空になった弾倉を捨てて。スライドを啜えてからフリーになった右手で新しいそれをポーチから取り出しグリップの内側に入れる。そしてまた手の内に戻すとロックを解除して次の射

撃を可能としていると、バルソクが『P P—19 B A T O N』を後方に向けて発砲した。

ダラララララララララララッ!!という銃声に振り返れば複数体のブルートがもうすぐそこにまで迫ってきていた。足の速さ云々を置いても当然であるが、道を切り開いているこちらに対し敵方は同じ道を辿っている自分達を追跡すればいいだけ。こうなるのも必然だった。

「ハルカ、手を貸してくれ!!」

「任せろ! ハモンド、お前は前方から来る連中を相手しろ!」

ハモンドと先頭を走っていたハルカがハモンドではない別の部下と後方から迫って来たブルートの迎撃に入る。ローガンはまともに戦闘が出来ない状態であるので手持っている拳銃による援護しかできないので、ブルートの相手は任せるしかない。だがハルカに民兵一人、先制攻撃を仕掛けたバルソクと加勢したG11では捌ききれない頭数を相手にしなければならぬにしても敗北は目に見えている。せいぜい犠牲ありきの時間稼ぎができればいいところだ。

(どうする、このままじゃ全滅は免れねえ。416は投げ出せない、ハルカ達にG11とバルソクは交戦、ハモンドの奴は他の民兵の連中とE・L・I・Dを追い払ってる……駄目だ、このままじゃ全員死ぬ。こつちの人数だけじゃなく戦力も火力も装備も何もか

もが足りなさすぎる！全員がベストを尽くしてはいるがここまでの道のりがあまりにも酷いんだ！どうすれば犠牲なく突破できる!?こんな暗がりであんなに死んだらだれも死なせたくねえ！どうすればいいってんだよ!？」

苦悩したままローガンはバルソクを他と囲い込もうとしていたブルートに『P226』を連射してダウンさせる。続いてハルカにナイフを突き立てようとしていた個体の頭部にも発砲し隙を作ってから、かすり傷を負わされた彼女の部下に止めを刺そうとしていた敵にも銃弾をお見舞いする。そして単独で善戦しているG11に同時攻撃を仕掛けようとしていた二体のうちの片方を仕留めた。ここだけでキル数が三、アシストが一である。

しかしここまでやつてもまだ終わりではない。

次から次へと接近型の鉄血兵は現れては襲い掛かってくる。次第にローガンの方にも直接攻撃をしようとしてくるものもいるぐらいで、それらを牽制するのに精一杯になつても来た。

「害虫が次から次へと湧いてきやがって!」

「ぐっ!?!クソが、調子に乗るんじゃねえぞ!!」

口汚く敵を罵るバルソクとハルカを諫める暇だつてもう皆無だ。戦闘で使えるのは銃を握っている片手に両脚だけで、CQCのような格闘術を満足に使うことなど到底で

きない。それにあまりに動きを大きくして立ち回ってしまうと416を振り落してしまいかねない。

一体の刺突を身を逸らして脇の方に抜けさせ、ナイフを握ったその腕とを絡めるようにして至近距離から発砲する。胸部に致命傷レベルの弾丸を食らったそのブルートの次に襲い掛かる個体と同じ方向から接近してくるのを視認。すかさず仕留めたばかりの鉄血兵を前方に押しやって敵にとつての障害物にすることで接近を遅らせ、怯んだところにもたまた銃弾を叩きこんだ。さらに跳躍することで距離を一気に縮めて強襲してくるのもいる。おおよその落下地点はちょうど今、ローガンが立っている地点だ。

「ちい!!」

回避どころか受け流しも間に合わないと判断し、ローガンは416だけでも攻撃からの危険性から遠ざけようと片脚を後方に退いて半身になる。大体の敵が着地するのに合わせて振るわれる凶器が同じく鈍器と同じく繰り出されたローガンの『P226』とぶつかり合って火花を散らした。ギリリリリリリリリリリリッ!と耳障りな音がブルートの刃と『P226』のスライドが鳴らした瞬間、弾けた。

力比べというわけではないが、単純に重力まで加わった敵の一撃のほうに分があった。ローガンの拳銃は手元を離れて転がっていき、こちらは素手となる。こちらが扱うナイフであれば折れてしまいかねない、少なくとも刃こぼれもしてしまいかねないとい

うのに敵の刃にはそんな様子は全然見られない。

テクノロジーによるレベルの違いがここでも出ていることにローガンは歯噛みしたがそれを悠長にしている時間は与えないとばかりに対峙しているブルートが追撃を仕掛けてきた。

「ローガンッ！」

視界の端でG-11がこちらの状況に気付いて援護をしようとしていたが、今度はE・L・I・Dに襲い掛かれてまた手一杯に陥っている。乱戦状態になってきているのが吉と出るか凶となるかは置いといて、目の前のブルートは他の武器を取り出させまいと連撃を仕掛けてくるので対処に移行した。薙ぎ払いに振り下ろし、それらを全て紙一重でなんとか避けていたつもりだったが、頬に鋭い熱が走ったのでついに掠めたのだと知覚する。さらには腕や野戦服にも亀裂が生じたかのようになったが、十分に敵を引き寄せることが出来た。

再度振りかぶったところで蹴り上げるようにして片脚を突き出すと命中し、敵は僅かながら後退し自分達からすれば貴重な時間が生まれた。

フリーになっていた右手を腰の方に伸ばすことで指先に触れたのはナイフの柄。それを握ってから一気に引き抜くと手の内で回転させて刃の方を指で挟み込み、目の前のブルートに向けて投擲した。視覚ユニットがあるゴーグルに刺さったことで沈黙し

裳ではないだろう。加えて腐肉特有の感触がナイフと共に防御の手段として突き出した足がつかえ棒としての役割を果たしながらその感覚を伝わって来た。

言葉などはない生理的嫌悪が押し寄せてきてたせいでどれだけの時間が流れたのかはわからぬ。生命の危機であったことから必死になっていて時間という概念すら頭から飛んでいたのだし、同じ理由から周囲の状況がどうなっているかなどの把握が全くといって良いほどできていなかった。

ましてや、それが悪しき方向に大きく動いていたことだつてすぐにわからなかった。

そのの始まりがなんだったのかはわからない。ただローガンが気付いた時には地響きが大きくなって地震が起きたのだと錯覚してしまうほどであった。異変に気付いたのとほぼほぼ同時にローガンの眼前にいた E・L・I・D の頭蓋が肉片を撒き散らして吹き飛んで楽になった。

「マスター、急いでくれ早く!!」

バルソクが助けてくれたらしくローガンの『P226』を手渡してくる。銃口から硝煙が立ち上るそれを受け取りながら周囲に目を配らせれば鉄血兵と E・L・I・D の大半が自分達ではない方へと注意が逸れていた。ローガンもその方向へと視線を動かそうとしたが、その前にバルソクが背を押して来たので元凶が何かを知ることが適わなかった。

「なんだ、一体何が起こってる!？」

「簡単に言えばあのデカイ変異体が来てるんだよ!こんなところで戦うことになったらワタシ達の全滅は免れない、そうだろ!？」

「マジかよ……!？」

バルソクはこういった状況で冗談をいう性格ではないので虚実を突きつけられているわけではない。それを証明するように彼女と同じく敵と交戦していたG-11にハルカと彼女の部下が同じく走っているのだから疑う余地などない。

既にスタミナが底をついているようなものであったが、身の毛がよだつ恐怖に背を押されていられるのもあってローガンはまた走り出す。ハモンド達も状況を把握しているようである。ローガン達に倣って来たのとは逆方向に駆け始めた。彼らに追い付いてから一間置き、後方から肉が潰れる音やコンクリートが砕ける音が聞こえてくる。それらをここで立てられる存在などは思いつく限りではバルソクが言うE・L・I・D変異体しかない。エクスキューションナーやアッシュのようなハイエンドモデルよりも厄介な敵に遭遇してしまった、ということだ。

「誰か後ろを振り返って追手の確認ができる奴がいるか!？」

「無茶言うな、必要なことでも勇気がある行動だぞそれ!」

「大丈夫、まだ足元の雑魚共に気を取られてる!今だったらまだ……!」

G11が言い終わるよりも先に後方の戦闘音が止んで変異体のものらしき唸り声が聞こえてくる。嫌な予感がそこで沸き上がったがこれはローガンだけではないだろう。G11が無慈悲な現実を告げるよりも先に咆哮が轟いた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

「気付かれた、来る!!」

「走れ走れえ！死ぬ気で走れえええええええええええええええええええええ!!」

ハルカの号令が発せられる以前からローガンとしては全力疾走に近いのだが、最もな危機的状況が現実となつてしまった以上は文句を言う暇など皆無だ。口を動かすよりも手を、ではなく足を全力の倍だけ働かせて逃げ切るつもりで疾走した。

ダガアンダガアンツ!!と銃声とは違う地響きまでもが追手として迫つて来るのを本能のままに感じながら前を走る者達に追従する。が、やはりというべきか大差ある体躯による歩幅の違いがある時点で分が悪かった。振り返るまでもなく予想していたよりも早く接近してきてるのが体感でわかる。

「どうする、このままじゃ追い付かれるぞ!」

「くそ、敵のライブを中断させる手段としてフラツシュバンでも持つてくればよかつた!」

今更ながら今回の持ち物に閃光手榴弾フラツシュバンを加えなかつたことをローガンも嘆かわしく

思うがないものねだりではない。ローガンが持ち出している投擲物はスモークグレネードだけで今回は他の類似品は持って来ていない。投擲物ではないが、強いというならC4ぐらいしか他に持って来ていない。

昨日の自分を呪っているとハモンドがローガンよりも後方を一瞬見てから叫んだ。

「この暗がりですぐにこっちの居場所が分かるんだ！光源があるからとしても、奴らの視力は『崩壊液』の影響で……！」

『変異体がどの方向性で変異したのかはわからないけど、目を失った人間の聴覚が一段と鋭くなるのと同じで足音を聞きつけてるかもしれない。それが光のない世界で生き続けて独特の進化を遂げた深海魚に似通ってる可能性もある！いずれにしてもこのままじゃマズイ、なにか手を打たないと！奴らは熊なんてものじゃない本当の化け物だよ！！』

オアシスの言う通り、速攻で策を講じなければデッドエンドは間違いない。ここで闇雲に逃げようとしてもいずればこちらの体力が尽きる、それ以前に追い付かれて一掃されてしまいかねないからだ。

「仕方ない、一か八かだ……！」

そうハルカは呟くと何かを懐から取り出した。HUDで明暗調整がされてはいるがこちらに背を向けているので彼女が一体何をしようとしているのかはわからない。

何をどうするのか詳細までを問う事はしないのでこの状況をどうかできるのであればなんでもいい。ローガンは両手を使えないことからここは自分以外の誰かに期待するしかできないので、ハルカが考えていることに望みをかけるしかない。

「早くしてくれハルカ！このままじゃ犠牲が出る!!」

「わかつてる！走りながらなんだし少し時間をくれ!!」

ここで時間稼ぎを頼まないことから彼女も銃弾をただ浴びせることは焼け石に水であることを理解していることでもある。見上げなければ変異体の頭部を見られないぐらい巨体であることから、変異レベルは恐らく正規軍でも相手をするのを手を大いに焼くぐらい。噂で聞く最新式のレールキャノンを主砲として積まれた戦車でも打ち倒せるかどうか怪しく思える。

暫定しただけの根拠も何もない予想だが、そんなE・L・I・D変異体を相手に何をするつもりなのか？

一瞬だけそう思考を過らせた瞬間、並走していたバルソクに突然引つ張られる。そうされた後にG-11にも支えられていたので転びはなんとかしなかったものの、何故唐突にそうしたのか。そんな疑問はすぐに解消された。

ズンツ!!とローガンの走行ルート上に巨大な拳が振り下ろされたからである。土気色のそれが何のものであるかなど言うまでもない。

「速すぎる、もう追いつかれた!」

「バルソク、俺のポーチからスモークを取って使え! やれるだけ手を尽くすしかない!」
「了解だ!」

だがここまで距離を詰められたことは逆手にも取れる。攪乱すべくバルソクに指示したローガンは腰のグレネードポーチから抜き取られながら別のE・L・I・Dが接近してきているのを見た。そしてそれが生存者である自分達ではなく背後にいる変異体の方にまっすぐ向かって行つたことも。

「スモーク行くぞ!」

グシャリツ!! と骨などに肉體構造を司っているなにもかもがミンチになつた音を背中で聴き取つたところで、バルソクが前方にグレネードを投じた。バンツ!! と缶が破裂した音と共に灰色のスモークが展開される。閉鎖空間であるこの空間内であれば煙は広く拡散することがないので背丈があつても意味がない。

煙の中を脱してからローガンはさらにスモークを展開すべく自分も一つ取り出しながらバルソクだけでなくG・I・Iにも言った。

「三人で同時展開だ! もう数的に多くないだろうが出し惜しみするだけ無駄だろうし気負う必要はねえぞ!!」

「まあそうなるよね。一つだけじゃ不安だらけだし!」

「それじゃあ拝借拝借っと！」

ピンの輪に歯を引つ掛けて一息に抜くと足元に転がす。それがまた自分達にとつての隠れ蓑が構築され、さらには一寸先とその先にも同じく束の間のトンネルが出来上がった。

最後の一つを手元に残していながら突き進み、少し咳き込んだりして息苦しくなるのに拍車がかかったがこればかりは仕方ない。

「気持ち距離を稼げたとは思いますがこれも時間の問題だぞー！」

「もう十分だ！ハモンド、あたしが合図を出したらこいつをそっちの壁に設置しろ！できるだけ高く、あたしのと対称の位置にだ、わかったな!?」

「御託を並べてもやらせるだろ!? まあ喜んで手伝わせてもらうがなあ!!」

ハルカと何かを受け取ったハモンドの間に何かが垂れ下がっているのが見えた。その二人が意図的に走行のペースを緩めて後方に、ローガン達と並ぶ。そして民兵のリーダーである彼女はこちら見ながら言った。

「あんた達はそのまま走っていい！ただこの後は爆竹を鳴らすからそのつもりでいてくれよ！」

「爆竹……!?!」

手元を見てみれば鼠色の粘土のようなのに爆薬がつけられており、ハモンドの手にも

ほぼほぼ同じ物がありワイヤーのようなので繋がられている。一体それが何なのか考えているとローガンを起点に近距離スキャンを常に行っているオアシスが少しばかりわかつたらしい。

『爆薬はC4のような起爆の操作を必要とするものでなく、罨として用いる指向性爆薬に近いね……だけど起爆スイッチにしているそれって……?』

「説明は後だ、行け!!」

スモークの効果がなくなつたらしく、再度地震と誤認してしまうだけの震動が響いて来た。その場で地団駄を踏んでリズムが不安定のものではなく、それが大体の一定間隔で刻まれて大きくなっていることからまた死の象徴たる存在がまた近付いているのが見なくてもわかる。ハルカは迫つて来ている変異体を主に見てタイミングを測っている様子である。無論こちらに目をくれないE・L・I・Dが群れを成しながら変異体の方になだれ込んでいる事から別の敵に引つ掛けられてしまわぬように注意せねばなるまい。ハルカの我慢と注意、そして見極めが試されるこの状況。ローガンもほんの一时的に来た道の方を見た。

人混みを掻き分ける、という表現が当てはまるぐらいに両腕で足元の『死者』という枠組みだけで収まっているE・L・I・Dを薙ぎ払ってはいるが、顔がずつとこちらに向けられていることから虚殺のターゲットとしてされている。ファンタジーの創作物

における巨人を彷彿とさせるその巨体が既視感のある体勢になった瞬間、ローガンの背に悪寒が走った。

「ハルカあ!!」

「まだまだ! まだもう少し……!!」

ドガツドガツ!!と最大震動で猛スピードによるタックルが迫ってきたこと、ローガンは反射的に協力者の名を叫んでいた。身を丸めて迫って来る変異体に対しての純粹な恐怖にローガンはさらに加速しようとは思うがすでに限界値に達している。これまで的人生の中でもトツプクラスの生命の危機、それも目に見えているのだから何よりも恐ろしい。

ローガンだけでなくバルソク、G11でさえも各々が不安を口に出している。

「おいおい、このままじゃワタシ達も死にぞこないになっちゃった人達の仲間入りだぞ……!!」

「何をするかは少しわかるけど、こうコアに過負荷をかけてくるのは戴けないんだけど……!」

なにを言おうとしてもハルカは聞く耳を持たない、いや持てないだろう。全神経を最善としてとったカウンターのタイミングに向けているようなので三人して喚き散らかしても無意味だ。

「——ハモンド、今だ！」

「……!!」

そして示し合わされていた合図が発せられ、二人はほぼ同時に左右に分かれて手に持っていた罍を投じた。ローガンがハモンドに投じられた罍を目で追って行くと、それは壁についた途端に吸着しピンツと線を張る。余分だった分が爆薬装置内の機構により自動で巻き取られたらしく、形だけ見れば戦場で見るブービートラップが出来上がった。

「弾けろっ!!」

ハルカがそう言った瞬間、出来上がったばかりの罍に気付かずに突貫してきていた変異体が引っかかって起爆する。その瞬間、ローガンの目にはそのワイヤーが光って爆発したように見えた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

ドドドドドドドドンツ!!と爆発が連鎖し、真紅の炎が変異体そのものの足元から頭部へと爆炎が立ち上って覆いつくした。体感ではあるが、対人で使うどころか戦車を標的にしたRPGと同等と思うぐらいも炸薬量は多い。

それだけの爆薬をここで使用すれば予期せぬ弊害が生じることがある。今回の場合だと、スレッズハンマーか何かで衝撃を与えれば崩れてしまうのではないかと危惧して

いるこの地下空間がそうだ。風化してひび割れているのが目に見えているというのに、爆薬などをなんの考えなしに使えばどうなるかなど想像は難しくない。

変異体が苦痛でもがき苦しむ中ですぐにその予兆は現れた。

「また崩れるぞ!」

「今日で何回目だつてんだこれ! 必死こいて走るのもそろそろ限界だぞ!」

「まだ二回目だ! それぐらいで根を上げてるようじゃ生き残れないぞおい!!」

「そういう意味で言ってるんじゃないやねええええええええええええええええ!!」

鉄血兵の次はE・L・I・D、そして最後は土と瓦礫などによる追跡劇が始まった。ことにローガンは絶叫しながら走る。とうの昔に体中が酸素と水分を欲していて叶う事ならここで立ち止まってしまいたいが、この状況が休憩することを許してくれない。

ガラガラという崩壊音が追ってきているのを感じながら全力疾走を続けていると次のプラットフォームに到達する。敵影はないが終着駅らしく線路は終わっているので行き止まりだった。

「方向はどっちだオアシス!?!」

『プラットフォームのエスカレーター! だから行つてすぐ右だよ!』

「よりにもよつてそっちか! バルソク、G11はアシストを頼むぞ!」

ローガンはそう言いながら担いでいる416をプラットフォームの昇降口にさせる

と、先に上ったバルソクが代わって同じようにして担いだ。G11が貸してくれた手を掴んでローガンもプラットフォームに上がってからハルカ達の方を確認すると彼女達も問題なく上れたらしい。すぐに駆け出したので三人そろって続いた。

『非常電源を起動してパスを繋げ直して、旧式の監視カメラに接続してつと……大丈夫、上のフロアに鉄血もE.L.I.Dもない!』

進行可能ということで全員で稼働していない階段を駆け上がっては念のために敵の有無の確認をする。周囲に敵はいない、尚且つ崩壊の手はここまで伸びてこないことを確かめて一息つく、などせずすぐに次の行動に移した。

「はあ……416を……!」

「ああ……しつかりしろ……!」

息絶え絶えになりながらローガンはバルソクにその場で416を横たえさせると自分には救急キットを彼女の持ち物から取り出す。電源を入れるだけで自動展開したそれは負傷者として認定した416の容態をスキャンし処置レベルを表示。応急処置としての必要なそれが表記されているが最後には『指令部に第三級修復措置を申請・報告せよ』とあった。

「バルソクはG11と416の処置を。俺はハリーに報告する……!」

「わかった、任せろ。G11、裂傷の処置を手伝ってくれ!お前さんから見てキットの指

示以外で必要な措置はありそうか？」

「……うん、傷は深いけどコアとか重要機関が深刻なほど傷ついているわけじゃない。でも機関部の冷却液と人工血液が漏れてしまっているからそこだけは処置しよう」

二人が仕事を開始するのを横目にローガンは壁に背を預けて身体を支える。数日分の活力までも出し切った気分で脱力しそうになったが無線機に手を当てて言った。

「プロフェット、こちらアルファリーダー……アルファ2が負傷し戦闘続行が不可能な容態になっている。今現在は作戦区域からの離脱を行っているので戻り次第、第三級修復措置を行えるよう準備を要請する……」

息を整えながらなんとか言い切ったローガンは腰に下げていた水筒を手にとって中身を煽って咽た。色々と頭の中で情報が錯綜しているが細かいことを考えるのは後として、口の中に溜まっていた痰を誰もいない地面隅に吐き捨てる。警戒態勢をほんの一時だけ解いて一息ついていている民兵の彼らを見たところで返答がないことに疑問に思つて声を掛けた。

「プロフェット？聞こえるか指令部？」

聞こえてくるのはノイズそのもの。中継装置に不具合が起きているのかと思いつつ確認してみると感度が悪くなっているわけじゃないのはすぐにわかった。こちらの無線はイカれていないので向こうにトラブルが発生したのか、と思つたがあのハリーの

事だからそれはないのではないかと考え直す。

内に湧きだした不安を押しえ付けながらローガンは名を呼んだ。

「……ハリー？」

——〈Ash to North Griffin〉——

『……誰だ？』

『はじめまして、グリフィン北米支部指揮官殿。私はアツシユ、鉄血の上級人形の一体です』

『お前がアツシユか……ということとは現地のチームと通信できなくなった原因は』

『言うまでもなく私ですよ。あなた達の回線を探知・傍受した後にカットオフさせても

りました。まあこれは一時的な物ですがね』

『こつちも暇じゃない。単刀直入に聞かせてもらうけどわざわざ僕たちの通信に割り込んでまで、何が目的だ?』

『ご心配なく、私自身が目的としていたことは既に達成されています。今はもう新鮮な空気を吸って綺麗な夕日を眺めているんです。今回はもうあなた方の兵隊に手を出しません』

『もう一体いるだろう、『処刑人』のエクスキューショナーが。お前がどうであつても奴までが動きを合わせるとは到底思えない』

『確かにそうでしょうね。ですが彼らは『処刑人』にうまく応戦し痛手を負わせれたようです。ですが『彼』ではない一人が重体になっているので互いに手を打った感じ、というところでしょうか』

『その言い方からするとお前は『鉄血』という立ち位置から一步引いたところから俯瞰しているような印象を受けるな。言っていることが興味ないような、自分は関係ないから知ったことじゃないみたいなのと同じだ。お前は一体何を考えている?』

『残念ですがあなたはこちら側の『当事者』はなり得ないのでお答えしません。ですが一つだけ警告しておきます。あなたの命を直接狙っている人間がいることを、ね』

『……なぜ鉄血のお前がそんなことを僕に言うんだ。お前達からすれば一応グリフィン

の指揮官である僕だつて優先的に抹消すべき対象じゃないのか』

『ふふつ、そうではあります私からすれば彼が情報を得るための窓口であるあなたがここで退場されてしまうと困るだけです。私があなを見殺しにしないことで得られるメリツトはそれだけです、逆にそれが大きいのですよ』

『……それが嘘じゃないことこのことの証拠はどこにあるんだ？ 本当の事も混ぜての詐欺を働いていない、なんてことを信じているわけじゃないが納得のいくソースが無ければ信用されるわけない、ということぐらいはわかつているだろ』

『ええ、ご心配なく。素直にお教えはしませんが一つヒントを差し上げましょう。あなたは『ヘンゼルとグレーテル』という童話はご存じですか？』

『兄妹が家に帰る為にパン屑を拾って行って魔女に云々、という話だろう。それがなんだ？』

『伝えられている内容に多少の差異はあつたりしますが、道標としていたパン屑を小鳥に食べられたことで帰道がわからなくなつた、という一点はおそらく一致しているでしょう。そのせいで兄妹は森に彷徨うことになるわけですが、物語上の都合とはいえそうそうお菓子でできた家を見つける、なんてことがそうそうあるわけじゃないでしょう』

『帳尻合わせ、だな。物語の進行が滞ることがないように調整して矛盾なく収集をつける。そんなことがあるのかなんて思つたりもするがそれに文句をつけてどうするんだ』

『それをするのには勿論人が関わっています。大体は作者かアドバイザーですが、偶に作者と親しい間柄である物語製作の相談役が絡んでた、なんてことも考えられなくもありません。挿絵の絵師だったり誤字脱字のチェックを行うチェッカーだったりとね。であれば情報を簡単に敵方に正確に知られぬよう、カバーストーリーによる情報戦を仕掛けている人物だっていいでしょう。偵察や強襲を企てているのならその計画を敵に伝わってしまうのはなよりの痛手ですから。ですがそれは決して立案した『物語』の中心人物とは限らない。さて、今回の情報の『帳尻合わせ』を行っているのは誰でしょうか?』

『……お前は一体何なんだ。童話による例えをしてきた鉄血の人形なんてこれまではいなかった』

『そうでしょうね。ですから私がその初めて、ということになるのでしょうか。私の個性や人格を記せるのに必要で、私からすれば『もらえた』大きな要素の一つでしょうね』

『なんだって……?』

『……喋り過ぎました。とにかく、警告だけはさせてもらいましたよ、ロシアにて父親を失った哀れな指揮官殿。あなたがロシア人の父とアメリカ人の母、そのハーフであることだって私は知っています。私はその気になればあなたの個人情報をおールドネット

どころかリニードネットの海に流すことだってできません。もしあなたが『彼』に下手に手を下せば……わかっていますよね?』

—〈A s h〉—

それでは、とアツシユは返答を聞かぬまま小型無線機を外して脇に置く。茜色の夕日
が差し込んできている廃墟のカウンターに腰掛けていた彼女はその白い素足を放り出
していた状態から自身の方に抱き寄せる。人間と同じように膝から曲げて縮こまり、
アツシユは息を長く吐きながら顔を埋めた。

そうすることで感じることもあるとすれば、仮初の体温以外に『本物』であつて欲しいと願つている感情の一つ。

生きている証の一つだと教えられたが決して気持ちのいいものではないそれ。人はそれを『寂しい』という一言で表現し伝えたいと思う相手にそう表しているが、今の自分にはその相手がいない。

頼れる味方などいない。この苦痛を共感できる友だつてそうだ。ここ数十年、どんな時だつて自分は独りで他人から自分を偽つてきた。これからだつてそうする機会はたくさんある筈でここで今更ながらへこたれているようじゃ駄目だということだつてわかつている。

ただ久しぶりに人の温かみを思い出してしまった。物理的にはなく精神的に。渴望していた『協力者』になり得る人物が生まれたことで生じてしまった弊害かんじょうのまま、我儘に手を伸ばしてしまいたかつた。

「……早く来てください、ローガン」

今の自分が路頭に迷つた挙句、路地裏に蹲つた子供のようだということはわかつていゝる。だが押し寄せる寂寥感には抗えず、耐えることしかアッシュにはできなかつた。

51. 予測不可能 —Armored human—

『その先には鉄血兵が集結していて交戦するのは得策じゃない、どうにかやり過ごすしかないよ。それにE・L・I・Dとの交戦に備えて鉄血も地下内にマンティコアを入れ込んで。策がないままいけば負けるのは必至のはかわらないけど分が悪すぎるのも言わずもがなだ。絶対に見つかっちゃダメだよ』

オアシスからの情報を頭に叩き込みながら軋む扉を押して開かせると、ローガンは『AK-74』のサイトを覗きながら行く先を見た。オアシスの言う通りらしく、どこから鉄血製の重装甲歩兵戦車の駆動音が聞こえてくる。だが音の響き具合だけでなく暗視処理をされている視野で得られる視覚情報からすると見える範囲に敵兵はいないようだった。

「……行くぞ」

ローガンは合図を出してから先頭に立ち、G-11がすぐにバックアップの態勢に入らずかさず皆が出るまでの後方警戒に移行する。その次にバルソクが416を担ぎながら出てくると片手に『PP-19 B.A.T.O.N.』を持って隊列の中央に入った。

このフロアもE・L・I・Dとの遭遇は十分にあり得ることであり、オアシスの探知

網には引つかからない。あくまでオアシスが探知できるのは機械兵である鉄血であつて、『崩壊液』で異形の物とかしていても生身の体であるE・L・I・Dは機械探知をするオアシスに気付かれないということだ。

それでも近辺にカメラなどの電子機器があればハッキングしてアクセスして電子伝いに偵察することは可能ではあるが、今回に至ってはかなり制限されている状態だ。ハッキングはともかく、本来なら非常回路が備わっていない旧式の電子機器に非常電源に無理やり繋げるような無茶なことすれば壊れてしまうのだっておかしくない。コップに注がれた水が零れる、だけでなく危うくバランスを保つてそのコップを乗せていたトレイのそれが狂つてしまつて落ちてしまう、というのがわかりやすい例えだろう。だからこそオアシスはエレベーターの稼働は前向きに行い、三要素からの追跡からの振り切るのには回路を弄らなかつた。

とはいえ、陣形や効率で圧してくる鉄血工造と数と稀有な変異体で押し寄せるE・L・I・D、両者のどちらかだけでも一歩前に出れるだけいいだろう。

『行く先約三百メートルにプラットフォーム。そこで鉄血兵は部隊を再編して意識としては戦闘態勢を維持したまま巡回を続けるみたいだね。複数のマンティコアの反応があることからあれを主体にするのかもしれない』

「本当に厄介なことになる前にお暇した方がいいな。皆疲れていて厳しいが仕方ない、

ペースを上げるぞ」

『それとそのまま行くと三体の鉄血兵の反応がある。ずっと動いていないようだから多分、急ごしらえの前線、というところかな』

四層においての連戦、ならびに逃走による行為が立て続けに起こったせいで疲労が積み重なっているのが民兵達から見て取れたが、彼らとて生き残ってきた兵士。多くの仲間を失ったことによるショックは大きい筈ではあるが戦うことで自分の生をもぎ取る気力までは失われていないようではあった。彼らを率いるハルカはもちろんのこと、意外にもハモンドも思うことはあるらしく足を引つ張るようなことを何も言っていない。

ローガンもまだ継戦して任務を続行するだけの体力と意志はあるが、手元に残っている装備は反比例して『ある』とは言えない状況になっている。精々『AK-74』の弾倉と『P226』のそれにスモークグレネードがあるぐらいで芳しくない。C4などの爆薬は数としてはある方だが場所が悪すぎる。使うとすれば最後の手段だ。

そう頭を上らせていたところでローガンは敵影を視認する。工事現場で道路を封鎖している従業員のようはこちらに背を向けており、まだローガン達は気付かれていない。

すぐにローガンは後方にいる仲間たちにハンドサインで制止を合図すると小声で報告した。

「オアシスが言った、鉄血兵のガードを三体視認。こつちには気付いていないから先制のチャンスではあるが、下手に銃をぶつ放せば俺達の存在を知らしめることになるぞ」
「ならやることはシンプルかつ大胆に行くぞ。ローガン、あんたとあたしで近接戦で一気に片を付けよう。一人、陽動を頼んだぞ」

416の暗視ゴーグルを借り受けたハルカが部下の一人にそう言ったところで、ローガンはハルカと左右に分かれて横一列になっている三体の鉄血兵に接近する。『AK-74』を野戦服のフックに吊るしておくことで両手を空いた状態にし、物音どころか自分の呼吸音まで無くす為息を止めた。

細心の注意を払って接近したところで線路を挟んで対岸にいるハルカに合図を送る。彼女も頷いたところでローガンもすかさず一体に組みついた。

膝裏に蹴りを入れて鉄血兵の一体に膝をつかせると片手に握られているサブマシンガンのパレルを掴む。不意を突かれて現状を理解できていないうちに一息に奪うとそれでちょうどいい位置にある鉄血人形の頭部を殴った。まだ仕留めれていない、よろめいているだけなのでこちらに気付いた中央の鉄血兵に押しやる。押しやられた鉄血兵は何もできないでされるがままに覚束ない足取りのままに行き衝突、そして二体とも膠着した状態になった。

いつもなら決定打としてナイフを抜いて止めを刺しに行くが、奪ったガードのサブマ

シガンには銃剣が付いているので自分の武器を使う必要はない。

「ふっ……!!」

銃剣を構えたまま突貫し最初に攻撃した鉄血兵のコアがある位置にそれを突き刺した。一回だけではなく二回、同じ位置を刺してから捻じ込むように銃そのものを回転させて一体目を無力化すると用済みになった銃を手放して二体目の首を正面から片手で掴んだ。そしてローガンは大きく踏み出してからその鉄血兵の足を後ろからかけて一瞬だけ宙に浮かせ、重力だけでなく自分の腕力も加えて地面に叩きつけた。

倒れながらも盾を翳して時間稼ぎをしようとはしているので、最悪やられても銃声を鳴らしてこちらの存在を知らせようとしていることが考えられる。

そうなつてたまるかと、ローガンはすかさずサブマシンガンがあるその手の内側、手首に拳を振り下ろして掌を開かせる。そうなつたのは一瞬、ほんの数秒のことではあるが単に敵の銃を奪うだけであればそれだけで十分。

奪つてから逆手持ちに持ち替えると押さえ付けている鉄血兵の首元に銃剣を刺し込み、今度はそのまま抜くことなく推し進めていった。次第に銃剣の刃が貫通して人工血液が噴き出したが、完全に頭部のユニットとコアを切断して分離していかないのまだ抵抗がある。ダメ押しとばかりに盾の縁でローガンの腕を叩いてくるので少しばかりは我慢する必要があるぐらいだ。

そこでローガンは叩かれていた右腕を引いて首から手を離す代わりに盾諸共ガードを踏みつける。具体的に狙いをつけていたとすれば人間にとつても急所である頭部。全体重をかけていたことで足の裏に物越しに何かが碎けるような感触が伝わって来た。

メキメキリツ！と金属が破断されたような音がしたのは銃剣が刺さっている首元であり、踏みつけている頭部はローガンの体重で回転させられている。完全に動かなくなった時にはもう頭部と身体が別々になったときであった。

ハルカの方を見てみれば彼女は首の骨を折るのと同じように頭部を回転させており、息を吐きながらローガンが片した二体の鉄血兵を見た。

「こつちが一体をやっつけている間によくそんな手段で殺そうと思うな。最初にそうやろうと脳内でリハーサルしてんのか？」

「条件反射に近いもんだろうがどうだろうな。こうした方が効率よく殺せる手段が思い浮かんでそうするだけだが、そんなに引くことなのかよ」

「少なくともあたしはこいつらを仕留めるのにそう複数案を頭内に浮かべることはできないよ。精々事前に体にある程度の戦術を染み込ませるぐらいでそこまではさすがに。まああたしもまだまだだつてことなんだろうさ」

ひらひらと手を振りながら苦笑いを浮かべているハルカは足元に転がっている鉄血兵の身体を蹴った。彼女も彼女で派手な音を立てることなく制圧しているのだからそ

う謙遜することでもないだろ、とローガンは思うが自分もこう振り返ってみれば敵を確殺するのに少しばかり異質なのかもしれないと少しばかり感じた。

「とにかく急ごう。オアシスが探知できていないE・L・I・Dが後方から来ていることだつてあり得ない話じゃない。それにあの変異体がずっと四層にとどまっているとは限らないしな」

「それは考えすぎじゃないのか。あんなデカい図体の奴が登攀してくる、というかよじ登ってくるのは……」

『あり得ない話じゃないよ。奴はE・L・I・Dにしては珍しく知性がある個体であるのはあたいもローガンのHUDで窺えた。だつたら野生動物は縄張りに餌が無ければ遠出する、なんてみたいにあの化け物だつて欲を満たす為にやりかねない。何かを口にしてる様子はなかったから食欲とかじゃなく、単純に他者を殺害したい、それだけで動いて来ても不思議じゃない』

「奴にそこまでの自覚があるかどうかはさておいてもまるで『アネクトート』みたいだな。奴らは奴らで確信犯ではあったが」

『その分凶暴性と脅威としての規模がとんでもないよ。でもなにか大きく動かされることがなければあいつとかち合うことはない。今はとにかくここから脱出しよう』

オアシスの言う通り、ここで考え事をしてるばかりでは何も好転しない。ローガン

は懸念を自分の内側に仕舞いこむと待機しているバルソク達に合図を出して前進を再開した。

それからどれだけの時間が過ぎたのかはわからない。明かりが一切ない空間にハルカと共に先行していつてどれぐらいになったかははっきりしないが、距離としてはかなりの物になったと思われる頃。

鉄血兵が出している足音や駆動音がはつきりと間近に聞こえるようになった時には二層にいける道筋の中では近道である、運送として配置されている貨物用エレベーターが見えていた。

「……なるほどね、どうやってマンティコアが地下に入りこんだのかがわからなかったけどあれだったんだ」

『簡易的にあれのシステムチェックを行ってみたけど電力があそこだけに供給がされる。地上か一層の方にある制御パネルに外付けのバッテリーを接続してシステムを迂回していないんだろうね』

「確実に増援を送り込めるように安全策を取った、ということか。あれにあたし達があやかるのは無理そうだな」

「敵に全く見つからない隠密とか潜入についてはワタシもまだ勉強中だけど、これは不可能と見るべきだろ。エレベーター付近には物陰なんてほとんどないし見張りよろし

く常に一体が動いてない。正面突破で辿り着けたとしても、きつと地上だとわんさか敵さんがいると仮定した方が良さそうだ」

「あれを使うとした時の賭けの要素が多すぎるし、俺も右に同じく、だな。オアシス、次の近道に行くにはどうすればいい？」

『……それよりも皆、まずいことになってきた』

他の誰かに聞かれることはないというのにも拘らず、オアシスは声を潜めて言った。声のトーンはさつきまで聞いてたものとは違って真剣みを帯びているどころではなく、危機的状況に陥った時に聞くようなそれだ。

目線の先のエレベーターが動き始めたことで新たに増援が来たのかと思ひ、ローガンは再度屈んで姿を隠す。そしてこの状況下ではなにもわからないのでそのままオアシスに聞いた。

「どうしたんだよ。今更鉄血兵の方にハイエンドの増援が来たぐらいじゃ俺はもう驚かねえぞ。まあ気持ち的には絶望するが」

『いや、そうじゃないよ。鉄血兵に新たな動きがあるにはあるけどそれはあたい達全員に対してのものじゃない。かといってE、L、I、Dが連携して襲撃してくる、なんてものでもないんだ』

「じゃあ一体何が検知できたのオアシス。そう言い惜しむことじゃなければさつさと

言つてよ、こつちだつて暇じゃないんだから」

G-11がはつきりと言つた事にハルカも同じようで頷く。バルソクがどうかはわからないが、ローガンはオアシスの一字一句を脳内え反芻していくうちに胸騒ぎを覚え始めた。

ウイイイインツ！とわかりやすい駆動音を鳴らしながら稼働しているエレベーターがまるで何かの宣告か、と思ひ浮かべた瞬間には停止しゲートが開き始めた音が聞こえてくる。もう一度だけ顔だけ覗かせて内なる騒めきを沈めようとした瞬間、エレベーターの内側から銃火が迸つた。

ダラララララララララツ!!と長い銃声が鳴り響いて付近にいた鉄血兵を蜂の巣に、コマンド待機状態にあつたマンティコアも反撃しようと交戦し始めたが、為す術もなく装甲に穴を空けて沈黙していった。

「な、なんだ？ 一体何が……!?!」

「静かにしろバルソク！」

驚愕するバルソクを引つ込めさせて引き続き状況を観察していると、エレベーターからマシンガンを携えた何人かが降りてきた。しかしその者達はローガンから見ても異質である。

正規軍が兵器の一つとして運用している心を持たない機械兵とカラーリングは同じ

ではあるものの、機械部が一切露出していないのがまず一つの特徴ではある。が、それだけでなく防弾だけでなく対爆も一つの機能としてあるスーツの一つ、ジャガーノートのように重装備なのが見て取れた。

さらにそれは目に見えての最新型であるのは間違いない。ヘルメットの横に装着されているヘッドライトや腕にある端末、さらには背にタンクのような物を背負っているのが見える。

「オアシス、あれはなんだ……!?!」

『結論だけ言うよ。あたいには彼らがどうしてここにこのタイミングで来たのかはわからない。目的もなにもかも、あたいには何も把握できていないよ。だけど彼らの正体は』
『
隊列を組みながら周囲を確認したので、ローガンはすぐさま顔を引つ込めて息を殺す。とはいってもそれだけでは足りないような気がしたが、幸運なことにこちらの存在を察知された様子はない。』

『彼らはアメリカの組織の中でも暗部に位置しているCIA直轄における闇の部隊だよ。その中でも最悪な部類だ』

世の中には人体による運動をアシストしているアシストスーツというものがある。脚が不自由な人がそれによって歩けたりするほか、貨物の運び出しや人命のレスキューにも使われたりと技術力さまさまな産物だ。技術の進歩によって誕生した宝石の一つがもたらした恩恵は民間にとつてありがたいものであつたに違いない。

しかしその一方で軍用に転用されているという一面がある。スーツがあれば一人では負担が過多であつて不可能である仕事をできるのだから、戦闘面に活かそうと考え付いてもなんらおかしいことではない。着地時においてのアシストは必要になるが、高く跳躍できるようになるだけでもいいだろう。または超人的な筋力を発揮出来たり、ローガンも交戦した『アネクトドート』の兵のように腕からシールドを展開する機能もあれば尚良しだ。

そうしたものを世間では強化服パワードスーツと呼ばれ、正規軍では人数分だけ配備されているという話をローガンは聞いたことがある。

『でもあの部隊が身に着けているのは装甲による防御や人工筋肉によるアシストは既存のものと同等でも、新素材による軽量化を実現し装備している人の感覚器官をブーストする小型システムが導入されている最新型の別系統。あれは純粋に銃撃戦のアシストに特化したモデルなんだよ』

「政府の補助が届きやすい正規軍ならではの装備ってことか。そうなると正面衝突することになればこっちが死ぬのは避けられないどころか逃げられない、か……」

貨物用エレベーターがあるエリアから退避して少し、オアシスのガイドによつて行き着いた災害における避難場所でローガン達は腰を下ろしていた。警戒態勢は解かぬまま、気付かれないように話を最少にしつつグリフィンの無線機を保有していないハルカの部下にも聞こえるように音声出力を端末のスピーカーホーンに切り替え、オアシスの説明に耳を傾ける。

端末の画面に浮かび上がったのは先程見た強化服。所々に機能面における説明があるが膨大で、ローガンからすれば全てが頭に入る気がしない。

『強化服『ヘビータンク』。正式名称は『コンバットモデル バージョン47』。装甲の厚さは三十ミリ、各関節部を中心に衝撃吸収ユニットが搭載されていて本人にはガトリン

グを撃ちながら移動しても負担はほとんどない。システムAⅠが搭載されていて着用している人が考えていることを脳波で読み取って味方の位置や銃器の弾薬数もHUDに表示される。背負っているユニット部の電源を入れればホバーを開始して高所への到達も容易にできる、公開されている情報だけでもはつきりわかるぐらいの優れたものだよ』

「思いつく要素を詰められるだけ詰めて実用化させましたって感じではあるが、自動処理機能が備わった重装甲であるだけじゃないようだな。この画像でもあるように管が口元へと伸びているしガスだとかの対策もされている。防護服そのものの役割もしていて別側面からの攻撃にも対応しているが……これを着ている奴を無力化するには圧死させるか焼夷弾かなにかで焼くぐらいじゃないと駄目か」

『有効手段が極限なまでに限られる、それがこれの最大の特徴だよ。テストモデルが開発されたのは最下層にいた時から知ってたけどこんなにも早く実用化に移っていただなんて……』

こうして見てみれば並の火器では対抗できないのは最早目に見えている。白兵戦に持ち込んで十分な兵器がない以上敗北は必至で、相手が悪ければ死する想像は難しくない。

「CIAがこんなのを持って現地入りねえ。随分とこの地下にご執心のようだけど、た

ぶん目的としているのはワタシ達とそう変わらないだろう」

『油断しちゃダメだよ。連中がここに寄越して来た部隊はCIA内でも秘匿されていて特務を専門としてる。けどなによりも恐れられているのは、目撃者がどのような存在であつても必ず抹消する、ということなんだ。隊員の一人一人が元正規軍の手練れであるからだけじゃなく、彼らが組織でも都市伝説のように語られているのはその特異性を有しているからなんだよ』

だがこれだけではオアシスが言った『まずいこと』というのに理解できない。たしかに最新鋭の装備が正規雇用の人間にあるだけでも厄介だが、相手も人間ならやりようがいくらでもある。オアシスから提示された情報資料を見ている限りでは自身が誰かに視られているのを察知できるわけでもないのです、あくまで着用者がHUD越しに目視による索敵を行うことが大前提となつていられない。であれば、最新の注意を払いつつやり過ごすなり迂回すればかち合うことにはならない。

「連中が俺達の後を嗅ぎまわつてここに来る、なんて予想は416がしていたがまさか本当に来るとは驚きだが……オアシス、お前が懸念しているのは何なんだ」

『皆も知つての通り、CIAはいわゆるアメリカの情報局であり情報と実行力をもつたエージェントで任務を遂行する組織。映画でもあるように人々が謳歌する日常の陰で命のやり取りをしていたりもするそんな彼らが一番の武器は前者だ。それを得る方法

として彼らが用いる手段としては色々あるけど、大雑把にでも敵の位置情報を把握できる、政府に公認されている組織ならではのそれを駆使できる手段。それは何かわかる？」

国に認められている組織が可能とする方法としてはいくつかあるが、オアシスの言う事に該当する方法としてはローガンが思いつく限りでは一つだけある。それをローガンが言う前にギーが黙して閉じていた口を開いて言った。

「人工衛星による観測、だよね。そうなる……ああそっか、たしかにこれはまずいことになった……」

「ちよつと待て、こっちはてんで理解できねえぞ。てめえらだけでわかってねえで教えやがれ」

ハモンドがガリガリと頭を抱えながら偉そうに言ってくるがそれにイラつく以前に事の重大さにローガンも気付いたが眩暈が生じてきた。額に手を当てながらも思い当たった推測が他の皆との認識に相違ないことを確定させるべく、答え合わせも兼ねてハモンドを見た。

「目的ははつきりしていないが、このタイミングで連中がここに来たつてことはCIAが人工衛星で俺達を見てたんだろ。俺達がフロリダに現地入りしてもう六時間以上経過しているし、時間としてもそこまでおかしく思うことはない。それで現在進行形で活

動を開始しているわけだから地上の衛星観測は続いている。そんな現状で地上に俺達が出れば何かしらかの事案に関係している、ということをお白しているようなものだ。あんな見るだけでもヤバイ奴からの『追及』は俺達だけでなく協力関係にあるお前達にも及ぶ。ここから出た直後に捕捉されて追跡される、なんてだけじゃない。俺達はまだ組織としては大きいからまだいいが、お前達の制圧は正規軍の手にかかれば赤子の手を捻るようなものだろうよ」

あの強化服をまとった連中が班としての規模でハルカ達の拠点に攻め入った場合は間違いない彼女達が全滅する。組織の規模が小さいハルカ達が全滅しても世界の誰も気にしない。世の中は鉄血に対抗するだけに限らず、弱い者から搾取して自分は生き残る、弱肉強食の生存競争だ。今更ハルカ達のような民兵の集団が与り知らぬところで死んでいても誰も気にしない。そんな事例などもう溢れ返っているのだから。

「そんな……そんなことに……!!」

「連中が俺達グリフィンのどこまでを把握しているのかはわからないが、動いていることがバレているのはある意味想定内といえる。ハリーも隠しようもないと言ってたぐらいだしな。だがもしこの件にフロリダ内に居を構えているお前達に関係していることまで知られていたら、ということだ。このまま脱出して今はいいだろうが、俺達全員、その後はどうするのかをきちんと考えておかないとならない」

ハモンドが壁に拳を打ち付けてながら打ちひしがれているが、彼だけでなく民兵全員が似た反応を示している。そう壁にぶつかった気分になるのはローガンも同じだが、規模だけでなく属している組織が違う以上は彼らほどじゃない。あくまでこちらは口裏を合わせての言い訳を考えておけばいいだけであり、彼らのように生死の問題に直結するわけではないからだ。その違いによる影響は後々に押し掛かつてくる問題として出てくる。『責任』か『命』、その二つを天秤にかければ重いものとして示されるのは言わずもがな。そのどちらを選び取るのかなど、地に這いつくばって生きている人間であるローガンからすれば躊躇せず後者を掴み取る。それは今も足掻き続けているという点に限つての話で一番近いハルカからすれば同様のことだろう。

「……そうか、とりあえずあたし達が危機的状況に陥つてゐることは了解した。いずれにしてもあそこには長居できなかつたことだし帰還次第、撤収の用意をさせるから心配しなくていい」

「いや……こんな事態になつた責は俺達にもあるし、できるだけだけの支援ができるようこつちの指揮官に掛け合つてみる。俺にはそれぐらいしかできないが……」

「気持ちだけ受け取つておくから気に病むなよ。こんな辺鄙なところにも足運ぶことになつた経緯まで聞いた限りじゃ仕方ないさ」

「怒らないのか？」

「何にだよ。あたし達は元々放浪者^{ノーマッド}で特定の箇所に拠点を築かない人間の集団だった。あそこで屯していたのは戦えない女子供を落ち着いて確実に守れるよう、体勢を整える時間を作ろうとしていただけ。もちろん帰ってから現状と対策を告げても多少の文句は来るだろうが、単にまた旅立つ時間が早まったと割り切るしかないさ。だから気にするなよローガン、確かに形がある『帰る場所』が無くなるのは腹立たしくはあるが決して『居場所』がなくなるわけじゃないんだからな」

ニカリと笑ったハルカはこちらの胸の中央に拳を軽く当ててくる。それだけで自分の内で膨れ上がろうとしていた罪悪感が縮小し、存在が確認できる程度の最少サイズになったのを感じた。

気恥ずかしさを誤魔化す様に頭を掻きながら顔を逸らすと礼を言った。

「まあサンキュー、そう言ってくれたおかげで気が楽になったよ。お前になんで人がついて来ているのかがなんかわかった気がするし、AR15^{あーいっ}に出会う前の俺であつたらたぶん付き従つてかもしれない」

「お、なんだつたら今からでも移籍してくれたって良いぞ？ あんたが来てくれるならあたしからしても大助かりだしハモンドのいい薬にもなる」

肩に手を回されたこと背中を丸めると、続いて帽子を外されて頭を掻きまわされる。言われたことを脳内で反芻する前に身体の半分がハルカの胸に当たって顔が赤くなる

のを感じて言葉が霧散する。はっはっは、と笑う彼女がそれに気付いている様子はないのでわざとやっているのかと思うぐらいだ。

「お、お気づきですかハルカ殿？今ちよつと付き合いが浅い人間、それも男を相手に結構なレベルのスキンシップを為さっていますことよ!？」

「そう遠慮するもんじゃねえぞローガン。ようやくわかったがあたしはあんたが気に入ってきてんだ、それも性別云々の話も含めてな!」

いい!?と話の方向が急激におかしな方に振り切っていることにローガンは変な声を上げる。わっしやわっしやと引き続きこちらの頭を笑いながら掻きまわしているハルカから助けを求めようと見える範囲で周囲を見渡したが、リーダーである彼女に従うという意思に溢れている民兵はもちろん、自身を奮い立たせようと自分だけの世界に入っているハモンドには無理だと感じた。部下である彼らはともかく、ハモンドに至っては今日一日で二度ハルカに打ちのめされているのでアテにできない。

「ていうかお前の髪って本当に白いのな。染めてしまった方がこの先も本当に困ることはないんだしやってしまった方がいいだろ」

「いいんだよ、いつもはなにか暗色系の帽子を被ってるんだし。最近の染料はそうではなという話だけど、そんなのを使って髪抜けやすくなるのが俺は一番嫌なんだよ」

「ふ〜ん……まあそれはいいとして、どうするんだよローガン。あたしはあんたが来る

なら歓迎するつもりだが、グリフィンからこつちに来る気はないのか？」

「……あくまで俺が言ったのはイフの話だよ。今じゃグリフィンの中に俺が居場所とさせてもらっている場所があるのだし恩もある。だから俺はいまいる『ここ』からそつちに行くことはできないし、あいつらをちゃんとした理由もなく蔑ろにしたくない。だから無理だ」

そう言ったローガンの脳裏にチラつくのはこちらに手を振ってくる二小隊の面々。違つた過去や苦難をもっている彼女達は自分とは違う存在ではあるが、同様に『闘争』に強く結びつけられてしまった、そんな宿命を背負わされている。小隊それぞれは表と裏、コインのそのようであるが小隊メンバーの個性を比較してみれば反転しているほどかけ離れたものではない。精々物事における価値観が違うぐらいで、それでもシビアナ見方を必要であるのを理解しているのは一致している。

親しかった友人たちと変わりない彼女らを裏切れることはローガンにはできない。だからここでハルカにどのように条件を揃えられた上で誘われても突つ撥ねるつもりだった。

ハルカによるアームロックから解放されて痛み始めていた腰を摩っていると、彼女垂れ落ちていた帽子を拾い上げた上で言った。

「そつか、ならこれ以上食い下がらないでよくよ。あんたが日系アメリカ人で日本人の

血が入ってるからかもしれないけど言動からして謙虚な面もありそうだ。それでいて不幸なことがあれば尾を引いてしまいそうだし余計なことを言わないようにするよ。後ろのお二方が怖いことだしな」

笑みを浮かべているハルカからそれを受け取ったところで振り返って見てみると、苦笑いをしているバルソクとジト目になっているG-11の二人がいた。負のオーラが立ち上っている二人にローガンがぎよつとしている、普段の七割増しに目つきが悪くなっているG-11がローガンの腹を指でぐりぐりしながら主張を述べた。

「ねえローガン。あたしは別にローガンがどこの誰と親密になっても構わないけど、後々になつて面倒になるのも嫌だし少なくともこのことは45に報告しておくから」

「なんでそこで45が出てくるの？別に疚しいことだつて何も無いというのになんで処刑台に吊るされるようなことになつてるのよ？そこまでの悪いことをしたのかしらん？」

「自覚あるなしに限らず、本人に見られたらとりあえず笑つてない笑顔を向けられていたんじゃない？ローガンのことだから胸倉を掴まれるようなことに発展してるかもしれないし。だつて満更じゃなかったでしょ、顔に胸が押しつけられるのは」

「わお、俺もなんとなく察していたけどあいつそういつたコンプレックスがあつたのね！気のせいかな殴られた鼻がズキズキと痛んできた！」

イフの話をしている最中に45のある一点に視線が止まった、カフェでの一件のノーモーション・ノックアウトパンチを思い出す。一日の事件とその後の現場收拾などによる疲労で痛みを感じつつも即座に眠りにつけたわけだが、ローガンだってさすがにあれを毎日受けていたいと思わない。

黒笑顔を浮かべる45が目には浮かんできて肝がストーンと落とされたような気分になった。

「とりあえずさマスター、AR15にもこのことは言っておくぜ？あの特種部隊の隊長さんだけじゃなく仲間思いの参謀も知つとかないとフェアじゃないしな」

「あれえ、あいつにも絡む話だという要素はどこにあつたのです？もしここにいたとしたら蔑まれるかもしれないけど、出来事の一つとして片付けられることじゃないの？」

「出来事であるのなら話のタネとして言っても構わないよな？あいつだつてマスターの事を気にかけている、その最初の『当事者』なんだし。ていうかさ、AR15がマスターの仕事を手伝っているのは何故だか考えたことはあるか？書類仕事にパトロールとか、仕事だけじゃなく普段のコミュニケーションも全部、マスターがグリフィンに馴染んで欲しいと思っているからなんだぜ？」

「帰ったらそのありがたみに感謝して礼の一つでも返そうと思うよ。てかお前の目も据

わってて怖えよバルソク！」

陰ながらサポートしてくれていたAR15の行いにそうした意味を考えていなかったわけではないのだが、とりあえず有言実行をすることを示しておく。それでも目の前で青筋を浮かべているバルソクの機嫌が良い方に転がってくれることはなく形だけの笑顔による恐怖が増してきた。

見た目だけの話であれば十代半ば、もしくは後半になっている少女に気圧されている大の男という情けない図が出来上がっているが、そんな感想を抱けるのは事情を知らない奴だけだとローガンは思う。

『まあとりあえず今のやり取りは録音しておいたから、その二人に報告するのなら活用するといよいよお二方。映像まではさすがに無理だったけど、二人の証言も合わされば疑われることないと思うしね』

「なんでそんな手際の良いことをしてくれちゃってんのオアシス？お前さんはあれなの、元戦術人形ってことで気持ち分かるあっちの味方なの？」

『うーん、それはどうかなく。叶う事なら以前ののように自分の手足で動いて顔の器官系モジュールを駆使したいとは思いうけど執着はしてないよ。でもあたいはエクスキューションナーが言ったように事実を見て見ぬフリをすることはしたくないんだよ』

「たしかにそれは大切なことではあるけどそれだけじゃお前の本心の一部しか聞けてな

いな。そういった後付けの真面目な面だけじゃなく、実のところはなんでそんなことをしたんだ」

『面白そうだから☆』

「愉快犯かてめえ!!」

オアシスが目に見える相手であればローガンは掴みかかってヘッドロックを仕掛けていたであろうが、相手は長らく付き添った自身の戦術端末に入っている電子生命体である。言葉で意思を伝え合うことはできてもそう物理的に交流を交わすことはできないので歯ぎしりの音でこちらの憤慨を表現するしかない。

『そう怒ることはないじゃんか。こうでもしてあたいがそう物騒なばかりの代物じゃないんだってことを知って欲しいんだからこれぐらいは許してよ☆』

「被害を食らうのは俺じゃねえか! つうかそんなのただの盗聴としてしか処理されねえよ誰も得しねえよ! こうなったら無理やりにもデータを消去して……!」

『へっへーん、そうされてたまるかとプロテクトをかけておいたもんねー! それにも消されてもすぐに複製データができるようにも細工しておいたし諦めて頂戴な!』

「なんも誇らしくねえからなおい! ああもうちつくしよ本当にパスワード入力とか余計なことしてくれやがって! これ絶対に俺が決めているコードじゃなくてお前が決めただ奴だろ!!」

『たつのしいな、たつのしいな♪人をおちよくるのはたつのしいな♪』

電子生命体様はローガンが頭を抱えていることでご機嫌の様子である。悲しきことかな、状況的に四面楚歌に近い状況で誰にも助けを求められない。オアシスはもちろん、それぞれの理由を持ってチクる気満々のバルソクとG-11にトラブルの発端であったハルカはそそくさと部下たちを勇気づけているのでローガンの救済者は誰もいないのは明確だ。

どうにか音声データを消去しようと端末で悪戦苦闘していたが、望んでた結果は得られないとして諦めざるを得なかった。溜息を吐きながら項垂れ、画面を最初の『ヘビータンク』に戻したところでふと気付いた。

「話題は戻るがオアシス。こんな強化服が開発された理由だが、これって単純に鉄血やE・L・I・Dとの戦闘を主目的に置いて開発された、って考えていいのか？」

『……そう思いたいけどどうだろう。正規軍が相手取る敵がこつちと全て同じとは限らない。その二つだけじゃなくテロリストだとかの反政府組織という名の集団はいくつかあるわけだし』

「これは俺の嫌な妄想だが、戦術人形との戦闘を重点にした兵器じゃないか？ 戦闘用強化服で対鉄血兵、そんなテーマはあくまでカモフラージュで、グリフィンが統率しているI・O・P製の人形をターゲットにしている、という可能性は？」

これといった大きな根拠はない。ローガンの推測だつて技術は日々進歩しているのだから、白兵戦による大規模戦闘を有利に働かせるべく開発したと言われてしまえばお終いだ。

だがもしもの話、これの開発目的が自分達が最初に思い浮かべるのとは別のところにあるのだとしたら。

『ない、とは言い切れない。政府側の彼らがグリフィンを対等に見ているのかというとそうとはあまり思えないし。人々の生活の確保だとかの仕事を委譲されているけど、それは依頼人と民間軍事会社としての関係上で受け持たせているようでもある。そんな関係を壊す、それともなかつたことにするとしての陰のテーマをどこかに置いているかもしれない、それは考えすぎとして捨てきれないね』

「……そうか。とりあえず今はそれでいい。CIAの連中に鉄血、それにゾンビ共に見つからずに抜け出すというのは至難だがここから脱出しよう、休憩は終わりだ。お前のデータを元にした先のことの推察とかはまた今度にするしかない」

こんな暗く汚れていて状況的には芳しくない現在ではなく、確たる情報をちやんとした場所で整理できるようになるまではするべきではないとして、立て掛けていた『AK—74』を手に取る。

目的を達するまでの手段、それに必要な思考と意識はクリアで体力と気力も尽きてい

ない。地獄を見させられて、その中を潜らなければならぬ、切り拓かなければならぬ。経験はこれまでも幾らでもあったことでありこれぐらいであればまだ生温いと言える。頼れる武器も道具も何一つなかった時に比べれば、まだ希望はある。

今一度区切られている扉を少しだけ開けて外部を聞き耳を立てながら確認。どこか遠くの方から銃声が聞こえはするが近隣にいない。

そこでローガンは振り返って他の面子の準備が済んだか、視線を外から内へと移すと皆が銃を持つては隊列を組みなおしていた。

「こっちの『燃料』補給も終わった、行けるぞ」

「ワタシたちの方は言わずもがな、だ。まだビキビキ来てはいるんだがな」

「んじゃそれは敵にぶち当たった時に解消してくださいな。俺はサンドバックになるのは御免なんで」

「嫌だよ。帰るときには即座に枕にさせてもらおうから」

G-11にばつさりと切り捨てられたところでローガンは顔を顰めたものの、自分に何ができるのかわかっていないのでどうしようもないとケリをつける。後のことは生き残れたという結果を確定させた後で考えればいい、と未来の自分に放り投げて外に出ようとした。

しかしその瞬間、数十分前まで肌で感じていたどす黒い悪意のある空気が刺さった気

がした。冷たく鋭利な刃物の切っ先が毛穴の一つ一つに入りこんで体の内側から傷つけてくる、そんな比喩が咄嗟に浮かんでくるぐらいなまでの殺意が向けられているように。

咄嗟にローガンはその主を目による索敵で探ったがサングラスのHUDにはそれらしい人影が見当たらない。

「ローガン？」

「ちよつと待つてろ……」

一人でゆっくりと外部に身を晒してみると『負』そのものを全身で感じ身の毛が逆立ち鳥肌になった。ここ地下三層目であればこの下ほどまだ死臭は薄く常時プレス機に負荷を掛けられている気はしなかったはずだ。ここからローガン達の目の前で犠牲が出てきて予断を許さぬ状況になったものの、ここまでこの場に留まるの拒否したくはならなかった。

であればその原因はなにか。違いを生じさせている原因の特定を行うのなら目についたりする物を元に一から辿っていくのではなく、過去と現在で比較をする方が手っ取り早い。環境、位置、そして敵と洗いざらいに全てを比べてみて今回のケースに該当する『違い』を絞り込んだ。

（強化服部隊のCIAが原因、だとしてもこうも明確に殺意が来るわけない。じゃあ別

の何かが……?)

あくまでローガンは兵士であつて超能力者ではない。この嫌な雰囲気というものは自分の思い込みによる影響の可能性が大きい。それでも他人の悪意を歳が十代になる前から日常茶飯事で向けられていたので人一倍に敏感になつてしまつてゐるのだから無視はできない。心臓を鷲掴みにされるような恐怖感、という偶に読んでいる小説にあつた表現はこういうものなのかもしれないが読者である限りは、それが執筆者の実体験であるかどうかなどは知る由もない。

目星を利かせて周囲を見渡した瞬間、異変が起きた。

ボコリツと肉が泡立つような音が聞こえたのでローガンは音の発生源である目の前にフラッシュライトを当てる。全神経を総動員させて目を凝らしてみると、そこにいたのは一体の鉄血兵だった。全身が白と黒の二色で統一されていて近未来的なヘルメツトで頭部のほとんどを覆つてゐる、戦場で見かけるヴェスピドタイプ。だがなにかにもぎ取られたように両腕を始めとして身体の至る所がない。

それが一歩ずつ歩いてくるのでローガンは『AK-74』を構えたが、その鉄血兵は襲い掛かつてくることなくうつ伏せに倒れる。不意打ちで急に動きだすことはないか、恐る恐る近付こうとした時、倒れたヴェスピドが来た方向から足音が響いた。

「……あくあく……まつたくよお……手下の奴のモジュールをもぐことになるとは思わ

なかつたつ。同類を殺して自分の血肉にするつ、こういうのをてめえらはなんて言うんだつたかなあ？」

聞き覚えのある声ではあるがノイズが酷い。まるで十分な修理もせず繋げ、出力させたスピーカーから出た音声のように掠れてブツブツと雑音が混じっている。それでも誰がそこにいるかなど、ライトを照らして確認する前にその者の名がローガンの口から出た。

「……エクスキューションナー」

「ああつともうちつとここを弄れつば……つとこんなもんか」

ガチャリツと何かをはめ込んだ鉄血兵が暗闇から姿を現す。ガチガチとサイズがあつていないように見える腕を鳴らしながら首元を摩った次に、目元と耳に機器を押し込んで調子を確かめてはもう一度外してはまた押し込む。その動作を終わらせた鉄血のハイエンドモデルの一体、エクスキューションナーが内部機関や骨格を体の半分以上も露にしながら言った。

「そんじや第四ラウンドといこうぜ、ローガン・ブラック。『狼王』だかなんだか知らねえが、確実に皆殺しにしてやるよ」

52. 『彼ら』をかけて | We can never

lose |

肉食獣が獲物を追走する時の動きのようだった。地を蹴つたのは恐らく片手で数えられる程度の数度だというのに一気に距離を詰められ、こちらの喉を鷲塚むべく突き出した手が迫つて来る。反射的にローガンはその継ぎ接ぎで敵に繋がられているその手を『AK-74』の銃身で弾きストックを突き出した。が、さすがに並の兵と同じようにされるがままになることはなく突き出したのとは逆の手で防がれる。

「悪いが近接戦闘はこっちの十八番でもある。そうそう簡単にはやられはしねえぞ!!」
今はエクスキューションナーの手元にはないようではあるが、得物として身の丈ほどの大きさの大剣を選んでいるのだからそうなのだろう。初戦においての大剣の扱い方は、良し悪しはローガンにはわからないものの、ナイフと同じように見ればそう悪いものではない。それには大剣に使わされている、というように動きに無駄があつたわけではない。明確な殺意を持ってこちらの命を刈り取るうとしていたのは敵味方とかを抜いても疑う余地も皆無だ。

「そう、かよ……い！」

銃声が背後から轟く。そう認識するよりも先にエクスキューショナーは身を翻して放たれた銃弾の回避を行っていた。右腕がまだ彼女本来の巨大のそれであった時には想像もできなかったほどの身のこなしで右へ左へ、または跳躍や空中で錐揉み回転までもして避ける。そしてその最中、顔半分が人工皮膚が焼けたことで剥き出しになっている球体状のカメラがローガンを捉えた途端、エクスキューショナーは口で三日月に似た弧を描くと自身の腰へと手を伸ばした。

「クソツ!!」

それだけで何をしようとしているのかを察したローガンは横に受け身を取るつもりで跳びながら『AK-74』の射撃モードを切り替え、肩からタイル状になっている地に着きながら横向きに回転。そして案の定、エクスキューショナーの大型拳銃が火を吹いて凶弾が放たれた。

ドンツドンツ!!と腹に響く銃声がバレルから飛び出したと思った途端、左肩に重い衝撃が加えられたのと同時に熱が迸る。撃たれたことでローガンは回避行動が中途半端になって体勢を崩し、その場でうつ伏せになって倒れた。それでもただではやられない。その状態から着地したばかりのエクスキューショナーに射撃を開始。

「撃て！奴をここに叩け!!」

「気持ち悪いことこの上ないよまったく！」

ローガンだけでなく場に展開したバルソクやG11にハルカ、ハモンドまでもが加わってエクスキューションナーのみに向けた掃射した。ダダダダダダダダダダダダダダダダダツ!!と複数の銃声が響き渡ると同時に着弾位置が土煙が舞ってそこにいたエクスキューションナーを覆い隠す。見えなくなっても装填している弾倉の弾が無くなるまで撃ち続け、バルソクの『AEK-999』が射撃をやめると場に訪れたのは静寂だった。敵影がまたはつきりする前に痛む肩口を押さえては傷の具合を見てみればローガン基準でそこまで大したことはない。大口径の銃弾を食らったものの、その軌道上に僅かに出てしまっていただけで大事はないようだ。

「ローガン、傷の具合はっ?」

「心配するな、痛むけど大したことはねえよ」

「血がドバドバ出てるんだから大したことはないわけないよ?これじゃあ掠めたというよりも挟られているようなものじゃん!」

「ああもう、すぐにここから移動しよう。今の銃声でCIAの連中が来てしまいかねない。」

G11の小言を聞くことになるよりも先にバルソクがそう言ってきたので、言いたかったことを胸の内にとまったらしい少女はローガンに片手を貸して来た。彼女の体

軀では逆にこちらに引き倒してしまふと思つて、差し出された手を掴みながらも自分の足に通常の倍に力を入れて立ち上がった。

そうしたことでローガンは肩の痛みを無視しながら装填している空の弾倉を外すと最後のそれを差し込む。渡されている『AK—74』の弾倉はハルカ達と共有しているが、彼女達の方も余裕があるとは言えない状況である。それでも一応余っているかどうかを尋ねようと一齐に移動しようとした瞬間、一つの銃声がまた響いてハモンドの横にいた民兵の一人、彼の首が血肉と共に弾けて頭が転がつていった。

「な………に………!?!」

突然のことに現実の処理が間に合わないハモンドがそう呟いたのが聞こえたがそれに構っていられるほどの余裕はない。

ビシヤリツと飛び散った血液を浴びながらも銃声の方を屈みながら見ると、まだ戦闘可能な様子のエクスキューショナーがにたにたとした笑みを浮かべながらこちらを見ていた。

「こんなつまらない形でオレが死ぬどころかてめえらを逃がすわけねえだろローガン・ブラック? オレが作ってやったこの墓場から飛び出さずにてめえは寝てろつてんだよお!!」

「んなホイホイとE・L・I・Dの仲間入りしてたまるかつてんだ!!」

思うことはあるだろうがハルカはそう言ってアサルトライフルによる射撃を再開する。対するエクスキューショナーは転がっている各部が欠如している鉄血兵のボディを片手で軽々と持ち上げるとそれを盾にして銃弾の霰を防いだ。一度途切れると今度是用済みになったそれをぶん投げて、ついさっきの機動力を足の機関部をフルで働かせて接近し始めてくる。

片手には大型拳銃でもう片方は素手といった状態ではあるが、戦術人形の素手というのは人の喉を潰せるほどの万力がそこにあるのだと言っても過言ではない。三原則による縛りがあるI・O・P製の人形でさえ捕虜を尋問にかける際には殺さない程度に加減こそすれど、その細い手のどこにそんな力があるのかと不思議に思うぐらいだ。

鉄血兵には人間を保護する為のロボット工学三原則が適用されているとは到底言えない。なのでもしエクスキューショナーのようなハイエンドモデルに首根っこを掴まれるようなものなら死の瀬戸際に立っているのと同義だ。

「バルソク!!」

「おうよ!!」

こちらの呼び声に応えたバルソクがジャンクとなった鉄血兵を押し付けられたハルカとエクスキューショナーの間に割って入る。構えられていた拳銃の銃口を『PP—I 9 B A T O N』で逸らすと発射された銃弾がコンクリートの地面を削り砕かれたそれ

が舞った。薙ぐように振るわれたバルソクの銃を躲したエクスキューショナーがバックステップで一度距離を保とうとしているが、G11がすかさず撃って追撃を行う。

ガガガンツ!!と『Gr G11』のバースト射撃で放たれた弾丸が本人の意思に沿ってエクスキューショナーの身体を撃ち抜くのだと、ローガンは思っていた。にたりと笑ったエクスキューショナーが敢えて体勢を崩したようになった時までは。

「く……!?!」

「てめえならそうやってくるだろうと思ってたさ!!」

倒れた状態から反転して即座に立つと今度はG11の方に迫る。カバーする余裕はローガンにもバルソクにもなく、鉄血兵のボディをどけていたハルカと戦いの経験が多くないらしいハモンドも間に合わなかった。回避はできないとしてG11は防御の態勢になって自分の分身を眼前に構えたが、それも見越していたのか勢いを殺していない回し蹴りで彼女の腹部を蹴り上げてそこから吹っ飛ばす。

ガアンツ!!とコミックやアニメーションでもぐらの勢いでG11が壁に叩きつけられるのにローガンは声を上げた。

「G11!!」

「さすがに人形相手じゃ上半身と下半身が別々になつたりはしないか。それでもまあ致命傷だろ」

エクスキューショナーを覗いて皆の中では最短距離にいるローガンから見た限りでも、G-1も重傷を負ったように見えた。腹部の人工皮膚や筋肉、それどころか内部ユニット保護の為の装甲カバーまでもが損壊していて機構が歪んだり壊れていながら露出している。人間であれば助からないとその場で断定してしまう、即死一步手前の状態と同じだ。

「これで二人目、終わりだ!!」

「させるかってんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお!!」

人間と同じように人工血液を吐き出したG-1に止めを刺そうとしたエクスキューショナーにローガンは肩の痛みを忘れて『P226』とナイフを抜くと、先に右手の拳銃を連射しつつ接近する。身を屈めた敵にローガンはがむしやらの膝蹴りを繰り返すと防がれたが関係なしにそのまま押し切る。手の甲を顔面に打ち付けたエクスキューショナーがやや仰け反つたら即座にローガンは相手の片腕を脇で挟むと肩に目掛けてナイフを振り下ろした。

「がああ!! てめえええええええええええええええええ!!」

グシャリツと切つ先が人工皮膚や内部機構を貫通したら刃が向いている方向に腕力を働かせて一気に切り離させる。反撃による拳を首を逸らしてかろうじて躲すとエク

スキューシヨナーのカメラに狙いをつけて下から上へとナイフを振るった。結果としては狙った通りのことにはならなかったが、赤黒く残っていた頬の人工皮膚を切り裂くぐらいのことはできた。

続いで反撃の手を食らわぬようにすべく、『P226』の銃身の先でエクスキューシヨナーの身体を押しつけて距離を取らせる。そうした後は無論、すぐに発砲できるような銃の狙いは敵方につけて、接近戦にもすぐに対応できるよう刃物を片手に握って銃のグリップに携えている。

「ハモンド、あいつ

G I I

を担げ!!お前達はあたしのすぐ後につけよ!!」

「クソツタレが、了解だリーダー!!」

「マスターも急いでくれ!ここに長居するのは得策じゃない!!」

「わかつてる!」

こうなった以上、今は逃げるが勝ちだ。エクスキューシヨナーが何を言おうとも、この人数で犠牲どころか重傷者が出ている以上はまともな継戦は不可能である。

かといってこのまままた背を向けていくようなものならまた誰かの急所が撃たれて命を持って行かれることは考えられなくもない。また戦闘続行の姿勢を見せている敵方

がまた大型拳銃を手に襲い掛かってくることを考えるのは当たり前のようなものだ。

そこでローガンは『P226』で牽制射撃を行いながら残っていたスモークグレネードをポーチから取り出し、歯でピンを挟んで抜くと振り向き際に足元に落とす。

バンツ!!と一閃空けてすぐに展開されたスモークに紛れ込むと撤退の態勢に移行している者達へ叫んだ。

「退けえ!このまま一気に貨物エレベーターで撤退するぞ!」

「異議なしだ!あたしが先行する、続け!」

416とG11をそれぞれ抱えているハモンドと民兵の二人を先に行かせて最後尾に着こうとしたがバルソクが背を押してきた。

一気に

「マスターも怪我人なんだから無理しなくていい!奴からの不意打ち対処はワタシの方が分があるわけだからここは任せてくれよ!」

「……わかった、手を貸してほしかったら言えよ!」

走りながらのサムズアップにこちらが応えようとバルソクはフラググレネードを取り出して後方のスモークへと投擲する。勢いからしておそらく下層の時と同じくエクスキュージョナーに直接当てるように見えるそれがスモークの中に消えた途端、人でも発することがないような咆哮が轟いた。それは決してここまで二度遭遇したE.L.

I. D 変異体のものでなく、聴き取った声質からしてエクスキューショナーのものであるということまではわかったが思わぬ反撃がきた。

バルソクが投げたグレネードが戻ってくることなど、誰が想像できたであろうか。

「くそっ!!」

「バルソク!!」

ドンツ!!と空中でフラググレネードが炸裂する。ピンを抜いてから時間が経っていたので近くに落下する前に爆発したので致命傷にはなり得ないものの、それでも傷を負うのだから負傷という範疇に収まってしまふ。

火傷をした時のようにヒリヒリとした痛みを節々に感じながらもバルソクの方を見ると、彼女も大事には至ってはいないらしい。服の裾が焦げて穴が空くだけに留まらず身体を伝って人工血液が流れ出ているのが見えたが、よろめいてもまだ自分の足で走り続けていられるのだから大丈夫そうだった。

「まだ行けるな!」

「当たり前だ、ワタシは簡単にくたばりはしないさ!!」

ハンターとイントウルダーと交戦した時には存分に発揮されていなかった機動力と戦闘力を目にし、ローガンは本当に鉄血兵の中でも上級人形、ハイエンドモデルと相対しているのだと実感した。いや、過去に戦った二体が弱かったからとかではない。

A R小隊と共に交戦したハンターによる脅威というのはローガンには実感できなかったが、ローガンが到達する前に陰では部隊の中ではトップクラス実力の持つているM16を含め、A R小隊全員を相手取って制圧して見せていた。グリフィンが所有する人形部隊の中では特殊部隊の位置にある彼女らの戦闘技術はローガンも知るところなので、対峙したハンターはやはり鉄血兵の中でも力があつたのだと頷ける。

イントルーダーに関しては画面越しに会話していたことが多いことがあつた。それでも外部の電子機器にアクセスしていたのだからその技術はやはり馬鹿にできない。なによりも直にローガンが交戦してみても、あの人形は電子戦に秀でているというだけでないことを実感した。度重なる負傷で身体が軋んでいたとはいえ、銃撃も交えた近接戦では有利を取られて一対一の対決では負けた、そのことをはつきりと覚えている。そのこともあつてハイエンドモデルという肩書きに恥じないだけの実力を有しているのだと断言できる。

「やっぱりというか、正面から戦つてなんとかなる相手じゃねえな。このまま逃げ切れぬならいいが……!」

『……いや駄目だ。このままじゃエレベーターを落とされた民兵の彼らの二の舞になる。ここで撒けたとしても奴ならすぐに追跡して襲撃してくるし一気に畳みかける方が吉じゃないかな』

「じゃあどうやるってんだよ!? そう理想を語るのはいいが現実は……!」

先頭を走るハルカがそう言葉を叩きつけてはいたが突然として言葉を切った。何事かと思つて背後から正面の方に視線を戻すと、地下に入った時ほど人数が多くなつてきていることで前方がどうなっているかなどすぐに把握できた。ローガンではない誰かがその元凶の名を叫んだ。

「E. L. I. D!!」

その声を皮切りに彷徨っていた死者たちが互いに共鳴しているかのように咆哮を発するとこちらに駆けてくる。即座にハルカや手が空いている民兵の一人が応戦するが数も多く全ての連中を無力化するには手が足りなすぎる。

「バルソク、お前も頼む!……ここは一点突破で道を作りたい!」

「……仕方ねえ、マスター!」

「行け、背後は任せろ!」

バルソクは『AEK—999』のマガジンを取り換えると決死の突破を凶っているハルカ達がいる方へと向かつて行つた。ローガンも『AK—74』を手に持つと左右から迫つて来るE. L. I. Dを走りながら足を撃ち、できるだけ弾丸を早く消費しないように、尚且つ効率的に転ばして追つてこれないようにした。

セミオート射撃で一体につき二、三発を片足に撃ち込んではずぐに最も近距離にいる

個体に照準を合わせ引き金を絞る。反動がストックを当てている右肩から伝播し、悲鳴を上げている左肩が意図的に無視しているローガンの脳に苦痛を訴えてくる。それだけでなく喉はカラカラに乾き、体中の筋肉も疲労が溜まってきていて休息を求めてきてもいる。それらが一つになってローガンをつりじりと精神的に挫こうとしているかのようだった。

もう諦めろ、という死神の囁きを銃声で掻き消し、深淵へと頭の中で誘われたことによる不快感を目の前に迫って来た E・L・I・D の腕を振り払っては顔面を銃身で殴打する。悪夢どころか死そのものへと引きずり込まれてたまるかと、抗う皆と同じくローガンも抵抗し続けた。

「こいつら相手にまともにもやり合う必要はねえ！お前らは突つ走れ!!」

負傷者二名を担いでいる民兵に襲い掛かっていた一体の頭蓋に風穴を空けて援護し、声で彼らの背中を押す。頷く彼らは先頭にいる自分達のリーダーに遅れないよう走り出した。そうした様子を見て一瞬、彼らの方こそ自分よりも死の誘いは強く感じているのかもしれない、という考えが頭に過った。ローガンの限つての話でいえばだが、自分達の手には負えない現実というのが力をつけていくと明確にわかつてきていた。

靄が晴れて視界が良好になっていくことで見えてくるそのラインに対しての恐怖の大小に個人差はあれど、突き詰めてそれを理解できるかどうかはその者の知性と経験に

よって問われてくる。ここまでグリフィンに属する余所者の自分達に異議を申し立てなかった彼らが内面どのように思っていたのだろうか。

しかし盲目的にリーダーであるハルカに従っているわけではないのだということは要所で立ちはだかる脅威に困惑し弱気になっていく様子でわかっている。誰かに判断を全面的に委ねているのであればそうした感情は不要だ。少なくとも、細かいところまで挙げればキリがないほど問題行為を起こしてみせたハモンドがそうだ。

信念を武器に内なる自身の本音とせめぎ合っていたのは416やG11、ローガンとバルソクだけではない。彼らもまた自分の生存を、なけなしの矜持をかけて際限なく湧いてくる恐怖そのものと戦っている。

ここまで辿り着いた以上は『協力者』であるからというだけではなく、肩を並べる者として彼らの生還を目指すべきだろう。

そう心に翳すにしてもはもう犠牲が出ているから手遅れなのだろう。だがそんなのはここで何もしないことの理由にはならない。

「ああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

銃声に紛れて聞こえてくるその声の発生源は進行先の天井だった。転ばしたE、L、I、Dの数がおそらく二桁に達するかというタイミングの時に仰いでみると、血走ったかのように両目を染めてスパークさせているエクスキューショナーが走っていた。物

理法則を無視した冗談に思うその様に思考が停止したのに一問置いて、エクスキューションナーはミサイルのように突貫してくる。目測による着地点は一列に組まれている隊列の中心点。

ドンツ!!とおおよそ予測通りの位置に着地したエクスキューションナーは手刀でよめいていたし死者の腹を突いて貫通、そして軽々とその体をハモンドへと放った。

「ちよ待っだっ!!」

一人を担いでいるのにも拘らずもう一人を押し付けられたのと同義なので、ハモンドはたまらずに足を止めてしまいがそれは仕方ないものだ。そう敵方が受け止めて問題が解決するまで待つてくれるわけではないが。

「逃げる、ハモンドツ!!」

「死ぬ!人間!!」

肉食獣が狩りをする時は群れの中から動きが鈍っている、もしくはそうすることが出来ない個体を見つけ出して標的にするのである。彼らはそれを観察することしかできないが、エクスキューションナーは最初に狩れる的を選んで意図的にさらに容易にさせるようにしてみせた。ハモンドの片手は首の後ろで担いでいるG11を落とさないように彼女の股から腕を通して垂れ下がっている彼女の腕を掴むというローガンと同じ方法で行っていて塞がっている。もう片方には彼の拳銃が握られてはいるのだが、押

しつけられたE・L・I・Dが覆い被さってしまっているのと同じくだ。

結果、ハモンド自身は回避や防御はおろか、反撃と牽制といった行動もなにもできない状況下にあるので彼は襲い掛かるエクスキューショナーを相手に自分で行うことのできない。

ローガンがすかさずカバーとして『AK-74』の照準を定めて引き金を引いたが、タミング悪く弾倉内の弾薬が切れて乾いた金属音がきこえてきただけだった。すぐに『P226』で攻撃をしようにも、その時にはもうハモンドは既に絶命の一手を与えられている。

条件反射に近い感覚でホルスターの『P226』に手を伸ばしながらこちらから助けることはできないなどと諦観を抱き始めていたが、それはローガンだけであつたのだと直後に思い知った。

「あたしの部下に手を出すなあ!!」

「う、があ!？」

エクスキューショナーがハルカの突進からの捨て身タックルで壁に叩きつけられる。見てからに死に物狂いであることがわかるその行動で九死に一生を得る切符を手にしたハモンドに体重を掛けている本当の死体をどかそうとしたところで、ローガンは『P226』で両サイドから攻めて来るE・L・I・Dを先に始末する。数が減って疎らに

なっている隙にローガンはハモンドの方へ駆け寄って死体を脇へ押しやると、転倒していたハルカを助け起こした。

『マスター急いでくれ！誤射しない範囲で掃射しているが長くはもたない！』

前方にいるバルソクが民兵の一人を背にそう無縁越しに言うので、ローガンは二人の背を押して走る。手に届く獲物が一つ増えたことで全体的なE・L・I・Dの動きの流れに変化が生じているのを目にしながら降りかかる火の粉を払い続けた。自分の前を走るハルカもその手に握る銃器の引き金を引いて死者を打倒していく動きがあった。ただその一瞬、動きが止まる。

銃口から噴き出していたマズルフラッシュだけでなくその歩みもなにもかもだ。まるでハルカだけがタイムストップさせられたように硬直した彼女に苛立ちをやや覚えながら肩を掴んだ。

「一体何でこんなところで……!!」

言葉は尻すぼみに消えてしまった。彼女が止まった『原因』、フラッシュライトで照らして見ているものが何かがわかってしまったからだ。

その『原因』が露出している肌そのものはE・L・I・Dにしてはまだ綺麗な方で最近になって仲間入りしたものだということはずぐにわかった。ただ問題なのはまだ残されている顔の造りとそれが着用している衣服に見覚えのあること。特に後者に至っ

ては類似点が多くあるのだから、そのE・L・I・Dが何者であったかなどすぐにはわかってしまった。

運命の神様という存在がいるのであれば、本当に性格の悪い悪戯だと思ってしまう巡り合わせであった。生還を目指して抗いつづけているリーダーと、力及ばず脱落してしまつたその部下たち。生者と死者という関係で再会するなど、ローガンには似た経験がないがこれから先もしたくないそれだ。

間接的な『崩壊液』によつてE・L・I・Dと化した民兵を相手にローガンは舌打ちするとそのE・L・I・Dも含めて数体の頭部を『P226』で撃ち抜いた。

「こんなところで立ち止まつてんじゃねえ！こいつらをこうしてしまつたことの罪悪感とかを感じるのは後にしろ!!」

「っー」

怒声混じりの言葉を叩きつけられたことでハルカは我に返つてまた走り出すものの、内心の動揺がまだ収まつていないせいか動きのキレがまだ戻つてきていない。とはいつてもそこまで気にしていられるほどの余裕はこちらにもないので、ナイフも携えて活路を切り開くべく尽力した。

「バルソク、あとどれぐらいもつ!?!」

『もうワタシの弾薬もなくなる！そうなつたらあとはマスター次第だ!』

よかったことを苦痛で思い知って助けが来ないことに絶望してオレにロクな抵抗もできない無力な自分に落胆して死ね何にも変えることができない誰かを失くした本当の痛みを感じることもないでめえらが偉そうに豪語する資格がねえんだって死に際に知って殺されるおおおおおおおおおお!!」

E. L. I. Dに腕がれたせいも人工皮膚にはもう覆われていない方のアイカメラはなくなっている。そのせいか残されている片目のユニットが黒目や白目もなくただただ血濡れたように真つ赤に染まっているのが薄れゆく意識の中で印象付けられる。

だがエクスキューショナーの言った事にローガンの琴線に大きく触れるものがあった。一気に頭の中の火山が噴火するだけのエネルギーが湧き出たことで、ローガンは肘鉄をエクスキューショナーの顔面にありったけの力で食らわせた次に足で腹を蹴り上げる。怒りで沸点に達しているのはこちらだけでなく相手もそうなので頬への一発では効果が見込めなかったものの、すかさずの第二撃で力が緩んだ。

さらに縮まった互いの顔の距離を利用して頭突きをすると再度足を使って押しやり一気に距離を置かせる。そうしたことでようやく咳き込めるだけの余裕が生まれ、数度酸素を取り入れてから身体を起こしエクスキューショナーを睨んだ。

「……てめえだけが失くした物の痛みに苛まれているわけじゃねえんだ。喪失感に苦しみなながらも歯を食いしばって自分の大切な物の為に守るために戦っている奴はこの世

にはそこらじゅうにいる。そんな奴の覚悟とか意思に大小はねんだよ。それなのになんだ、自分は仲間がやられたもんだから一方的に被害者面してやがって。てめえがハンターつつうお仲間を失くしたのと同じ日に俺だつて相棒を永遠に失つた！てめえだけが耐えがたい苦痛に喘いでいるんじゃないやねえんだよ!!」

残つた片腕で頬を拭うエクスキューションナーが睨み返してくるがその眼光に恐れはまったく抱かない。世間知らずの子供によるせめてものの抵抗のようで痛くも痒くもなく、むしろ長い年月を経て鉄血兵とも戦つてきたことで大きくなつていた憎悪がさらに膨れ上がった。

「……知つた口を利いてんじゃないやねえ。てめえのが一ダース分であろうとなんでであろうとオレの苦痛はオレだけの物で深いもんだ！てめえら虫けらみたく簡単に死ぬわけじゃねえんだし、死ぬ直前までに見聞きした『記憶』をどうやつても『記録』としか見れねえんだよ！その虚しさをてめえは知らねえだろ!!あいつと対等な関係として築いてきたオレの中の『記憶』を一つの『記録』としか見られない、悔しさがわからねえだろうが!!」

「ああそうさ。まだ俺は戦術人形の誰かを死なせてしまったことはねえ。だけどな、死んだ奴に俺がどうやつても言った事に返してくれない、笑つたり悲しんでもくれない、そういつたことの悔しさは知ってるよ！だけどどんなに手を伸ばしても死んだ連中が

生きて帰ってくることはねえんだって受け入れるしかなかった！だから俺はここまで生きて来れたんだ、『生きる』つつうことの意味の一つを教えてくれたあいつらのおかげで！じゃなかったら俺はずっと親を亡くした時の記憶に囚われてたよ！無力感だとか絶望に落胆だって!?! そんなもんとこの昔から味わっているってんだ!!」

エクスキューションナーのその経験がどこまでの悲しみを背負うものであつたかなどはローガンには測れない。他者が経験したことによるはそれがどれほどの物かなどあくまで世間体、一般的な観点でしかその大ききさでしか見れないからだ。さらに踏み込んでいくのであれば個人の価値観、ローガンの物差しでしか測って判断できない。そこそ鉄血兵に対しては本当に全くの無駄というものだ。人類殲滅を目論んでいる、そんな相手にしたところでも意味がない。

「ていうかさ」

故にローガンは切り込む。ここで打倒すべき敵を見据えては両手に握る武器の感触を確かめるように手を開いては閉じては臨戦態勢になる、のではなく構えを解いては呆れたように腰に手を当てては溜息を吐いては自分を落ち着かせ、刃で静かに斬り裂くように言った。

「ハンターを相手にてめえは相棒として誇れていたんだろ。今のそんな足踏みをして駄々を捏ねている様をあいつに見せられるのか」

「……………は？」
バルソク達の怒号と銃声が遠のいて沈黙がローガンとエクスキューショナーの間に生まれた。ローガンが投じる爆弾はこれだけではないし、本当ならもつと言いたいことはある。

俺がハンターを殺したもののあいっだって俺の相棒を殺した、そのどっちにも大した違いはない、とか。てめえだってハルカの仲間を一度に殺しただろうが、とか。世界の悲しみの連鎖が始まる起点の一つとなつたてめえがそう被害者ぶつてるなんて都合がよすぎるだろうが、とか。

だがいざとなつて自分の口をついてみれば出てきたのはそんなことだつた。

沸騰していた感情が徐々に冷却されて落ち着いていく中で、これから言う事を殴りつけるようにしてはならない、そう自分に言い聞かせてエクスキューショナーを見据えた。

「相棒つてことはてめえら二人は一応は対等な関係で手を組んだんだろ。だつたらてめえにも見栄つつかプライドもあつたんだ。だけど自分を見るよ、敵である俺に食らいつくのは結構だが、俺から見ても言つてることの視野が狭い。そんな自分を鑑みて、目の前に奴がいたら胸を張れるのかよ」

何故エクスキューショナーを相手にそんな歩み寄るようなことを自分から言つてる

のだろうか。ローガンも内心不思議に思った。アツシユを相手に問答をしていた様子を見て和解などできることはないのだと自分の中で結論づけていたというのに。論外だ。大人としてそう簡単に意見を変えていいものじゃない。もしそうするならばきちんとした理由があつて然るべきであり他者にもそれを理解してもらふ必要がある。

人間と人形、人類側と鉄血側。それはかわらない。どう逆立ちしてもローガンはエクスキューションとわかりあえない。

だがある一点だけ共通しているのだから理解はできる。

『理解者』の相棒を喪うのは辛い、それは俺にだってわかる。俺はあいつが死んだことで五回目、今まで頭を掻きむしる体験を五回してきた。泣いてしまうほどの喪失感を味わうことになるだけじゃなくて、自分が持つ何かを対価にしても蘇って欲しいとかも願ってしまうよ。だけどそんなじゃ意味はない、単なるエゴでしかねえ。死んだ奴はどうやっても生き返ってこない。喚き散らして何かに当たっても解決することなんてできねえんだよ」

ローガンも当時、つもり積もったその感情でARR15に当たってしまった。耐えていた自分の事を認めて慰めてくれたのは彼女だというのに。

自分から五回分の経験が災いを起こしてしまっただけあつて自己嫌悪もした。まさしく大人の八つ当たりなんてみっともない真似をしてしまつてARR15だけでなく皆

に多大な迷惑をかけてしまったと、今でも自分を殴ってしまいたくなる。

ああもう、本当にクソツタレだ。こんなところで奴と自分を重ねてしまうだなんて、本当に馬鹿で愚かでクソツタレでしかない。

過去の自分を見ている気分であるからではない。むしろエクスキューショナーの方が復讐として真つ向から自分達と戦いに来ているのだから真つ当とも言える。ただただローガンの中にあるのは相棒という『理解者』を得ていて失くした、その共通項による同情と憐憫だった。

「ふざけるな……」

沈黙を破ってエクスキューショナーが声を出す。赤く染まったその瞳が映す感情までは把握出来ないが、残されている人工皮膚が表していた。ローガンの言う事に耳を傾けてわかってしまい、今の自身がハンターと釣りあえる、誇れるのかどうかの結果を出したのかもしれない。

「ふざけてねえよ」

「黙ってるよクソが！んなことたあオレだつて言われなくてもわかってんだよ！オレが慣れないことをしてくれているのはいつもやってくれたのは奴だった！オレがやっていたのは組んだ時の大まかな戦略を立てていただけで奴は俯瞰しては補強してくれていたよ！だけどあいつはオレがいなくても十二分にやれる奴で他者の助けだつてなく

てもいい！オレは追い込み役を担っただけのおまけでしかなかつたんだ！だからオレはあいつの背を追いかけようにして一つ一つ積み重ねてきたんだよ！！だけど全部をやってみて振り返ってみれば真似事だらけで奴から及第点をもらえただけの結果なかだせちやいなかった！！終いには道理も何もかもを無視して阿保な面を曝け出してみつともねえことありやしねえ！！そうだ、今のオレにはなにも誇れることがねえよ！！」

納得できなかったのだろう。自分が正しいのかどうかではなく、それが飲み込めない。そしてそんな風にグダグダ悩んでいる自分に嫌気がさしてきてさらに感情が噴出する。エクスキューショナーの苦悩はエクスキューショナーのものだけであり、表面化したそれにローガンが割り込むことはできない。

ただ、苦悩していたことを吐き出すその様子はまさしく人間らしく、鉄血兵のハイエンドモデルという肩書きによるインパクトはもうローガンには感じられなくなった。

「てめえはこれで満足か！オレがあるだけで特に意味もなかったモジュールや回路で叩き出してたことを全部暴露してご満悦に浸れているだろ！！」

「全然、ではないが共感に近いものは得れているさ。俺にも五人、そういう奴が居たって言っただろ。それぞれ違った長所があつたもんだから、俺だつてあいつらの人数分だけ模倣から始めて努力したさ。それだけでてめえの言葉の重みだつて理解できるさ、一回だけでも相当に苦勞もするからな。俺達二人は決して相容れないが、勝負することがで

きる。万全であれば力量こそてめえの方が強いが今はもうそうでもない。俺とてめえにはもう大差ない」

身体能力こそエクスキューショナーに分があるものの、総体的に見てみればローガンとは大差がないといえる。

今からで対峙するしか選択肢はないが、勝率はどう見ても高いとは言えないのだから後から皆になにを言われるかなどすぐにわかる。だが、ここが正念場だ。ここで勝たなくては自分が託されながら積み重ねてきたものが全てなかったものどころか嘘になる。それはここから生きて帰るのに絶対に必要なことであり、ローガンにとっての闘争本能の根幹として掲げている信念でもある。

ローガンはナイフを手の内で回転させてまた逆手で柄を掴み、『P226』を持つ右手に添えて構えた。

「エクスキューショナー、俺はてめえに勝つよ。俺も耐え忍んできた過去と経験をなかつたことにしない為に、全力でてめえを打ち倒す!!」

そうローガンが吼えたのを皮切りに、二度目の激突が起きた。

53. さらばだ友よ — In the despair world —

現時点でエクスキューショナーが武器としているのはヴェスピドからもぎ取った片腕と両脚を駆使した体術が主である。または大型拳銃も織り交ぜてきており、所々でゼロ距離の至近距離で発砲してくる。まともに受けるだけでそこでノックダウン、戦闘継続は不可能となり敗北は間違いない。民兵一人の首を一発でもって消し飛ばしたことから、銃弾はマグナム弾に近いもので相当な威力を持つている、という推測が根拠だ。

だからこそエクスキューショナーが自分のどこかに照準を合わせようものならローガンはすぐに敵の腕の腕の進行方向に自分のそれをもってインスターセプトし、即座にカウンターとして『P226』を撃つべく持つて行く。だがエクスキューショナーには押しやられて距離を置かれるか、防がれるかして有効打は互いに与えられていない。

そう物理的な堂々巡りが繰り返されて数度になつて変化が起こる。

ドンッ!!と遂に放たれた弾丸が首筋を掠めて壁が抉られたところだったがエクスキューショナーの拳銃の弾が尽きた。スライドが後方に止まったことでこちらにまで弾切れを知らせてくる。

「期待するなよ、予備弾倉を入れるのに口だつてあるんだから片腕でもリロードはできるんだからな!!」

「心配するな元からしてねえ!!」

ガツンツ!!と躲しようがなかったエクスキューシヨナーの頭突きを受けたことで、ローガンは自身の視界が揺れてよろめいてしまう。バックステップで距離を置いたエクスキューシヨナーのリロードが済むよりも先にローガンはダメージから復帰し、『P226』を発砲しながら距離を詰める。

そうしていながらローガンの脳裏に過るのは教官から教わったことの一つの言葉だった。

『ローガン、戦い方というのは一つじゃない。銃にナイフと武器を使うのは結構だが、それだけだと戦い方を自分から制限しているようでもある。見慣れている武器を出しても用途が相手にも知られているのだからうまく使えなければ相手を倒せない、お前もわかるよな。だから敵と戦う時は自分が優位に立てる方法を探って思いついたら実行しろ。方法にもよるがうまくいけばそれだけで勝負が決まることがある』

それ以上は具体的に教えてくれなかったが、今回ばかりはどうすればいいのかわかっている。ここまでは様子見と手段の模索だったが、思いついた戦い方の実行の可能性について感覚的には可能と判断した。

ローガンは接近しながら『P226』だけでなくナイフまでも収納して両手をフリーにしたところで前傾姿勢になる。怪訝な表情すら浮かべなくなつたエクスキューシヨナーが口に咥えた弾倉を拳銃のグリップの先に差し入れようとするが、それよりもローガンの手が届く方が早い。

しかしエクスキューシヨナーもそれがわからないほど戦闘経験が乏しいわけではない。ましてや彼女は近接戦闘に長けたモデルであり、策も無しに正面から戦つては勝機は得られないのは言わずもがなだ。

予測していた通り、エクスキューシヨナーは寄せ付けんばかりに足技を繰り出して来た。単純に片足で蹴り上げたりするのではなく、中国武術の一つであるような華麗なそれでもって迎え撃ってくる。タイミングといい必中距離といえるところで繰り出してきたのだから回避はできない。今のエクスキューシヨナーの攻撃をまともに受ければどうなるかなどG11が証明している。ダメージを最小に抑えるべく受け流そうとするとしても腕一本がしばし痛みでまともに使えなくなることだつて十分にあり得る。

だからこそローガンは瞬時に決断した。

「て、めえ……!!」

「痛つてえが肉を切らせて骨を断つてこういうことだよなあ!!」

バンツ!!と可能な限り首を屈めた後にタイミングを合わせて手を下から突き上げる。

迫っていた刃のないギロチンを逸らされた代わりにビリビリと左手首から腕全体が痺れて肩の傷が悲鳴を上げるが、首を狩られるのに比べれば安い買い物だ。

態勢をやや崩しながらも着地したエクスキューショナーにまだまともに機能する右手を伸ばす。狙いはエクスキューショナー本人ではなくその手に握られている拳銃。当たれば一撃必殺の武器が敵の手にあるのならせめて警戒、可能であれば使えない状態にするのが好ましい。今回だと遮蔽物など皆無、ましてや一對一の正面切つての勝負なのだから後者のようにするのが勝利への一歩だ。

弾倉を入れたばかりの銃を掴むとローガンはエクスキューショナーの足の後ろに自身のそれを配置。そしてスライドを掴んだままエクスキューショナーの首元にラリアットの要領で右腕を命中させた。

「ふっー」

短く息を吐いて持ちうる腕力で前面へとエクスキューショナーを押し出す。そして彼女は倒れまいと足を踏ん張らせるべく片足を後方へと下がらせようとしたが、それを見越していたローガンの右足が許さない。

宙を舞ったエクスキューショナーの手はまだ大型拳銃を離さないが、そうするだけが使用不可に陥らせる方法ではない。

敵が仰向けに倒れたところで体を跨ぎ、まともな感覚がまだ完全に戻ってきていない

左手も動かして込めたばかりの弾倉を排出させるべく動く。対するエクスキューションナーは片腕しか使えないことから銃を持つその腕を地に寝かせようと抗った。それによつてローガンの注意がそちらに逸れてしまうのだが、エクスキューションナーはそうなるのを目論んでいたのだという事を気付かなかつた。

「この野郎があゝ！調子に乗つてんじゃねえぞ!!」

ガチンツ!と何かが外れた音がした途端、ローガンの視界の端から迫つてくるものがあった。その正体が何かであるのはわからなかつたが反射的に自身を狙つたものであることは理解できた。

この状態で回避はできない。両手も塞がっているので何かを使つて防御もできない。できるとすれば身を固めて大型拳銃を握っている両手を離さないようにするだけ。

ガンツ!!と視界がブレて、脳も揺れる。右上半身の骨格全体にヒビが入つたかのような苦痛が伝わってくる。例えではなく本当にそうなっているのではないかと思うぐらゐにローガンの思考が一色に塗りつぶされたが、それでも両手は離さなかつた。

ローガンの執念によるこの結果に驚いたのはエクスキューションナーだけでなく、ローガン自身も内心そうだった。

「一体どこまで……!!」

「自分でもびつくりだよ、まさか本当に耐えられるなんてな!!」

歪む視界に捉えたのはエクスキューショナーの片脚。キックによる力が集中する箇所は足の先の方なので吹っ飛ばされるようなことにならなかつたのだろうが今はどうでもいい。

大型拳銃のスライドが動いて弾丸を装填されたが弾倉を排出させ、さらには無理矢理もぎ取るべく掴みながら前転した。回転してから起き上がるとローガンは奪い取れた拳銃のスライドを外してバラしては投げ捨てる。金属部品が落下してはバラバラに転がっていく中で、エクスキューショナーも復帰しては真紅の両目でこちらを睨みつけてきた。

「何かご不満かっていうか文句を一つは言いたくありませんだろうな」

「……さっきの手放さないって、てめえの痛覚はどうなってるやがる。どんなに訓練していても耐えられないボーダーラインというのは存在しているつづうのに」

「どうだろうな。今のは俺も痛かつたからあるにはあるが、過去に拷問を受けてたわけだから幾分麻痺しているのかもしれない。それが良いことかどうかはわからないがな」
「……なんだよ、てめえもそこそこぶっ壊れてきているんじゃないか。まあオレもコアをオーバーロードさせてるわけだが、どっちにしろまともじゃねえ。なあ!？」

バチバチツとスパークした途端にエクスキューショナーが予備動作なしで接近してくる。明確に目に見える武器などはないが戦術人形としての身体能力を活かした格闘

戦に持ち込まれ、ローガンはエクスキューショナーの近接攻撃を受け流すか躲すなどの応戦に追われた。

正拳突きに回し蹴りと隙がない連撃でなかなか反撃に転じれないが、捌ききれないことはない。片腕がないというハンデを両脚による攻撃でカバーしており、一撃の一つ一つが人間のそれとは違うものだと思えて感じた。

何回目かの回し蹴りを躲した後に迫って来た踵落としを両腕をクロスして受け止める。骨にまで伝わってくる衝撃に歯を食いしばって耐えているとエクスキューショナーが言った。

「どうやら余裕綽々って感じらしいが、これだったらどうだよ！」

ジャキンツと金属の何かが飛び出た音が受け止めているエクスキューショナーの方から聞こえてきた。確かめるよりも先にその足でまた蹴りが迫ってきたので思い切ってバックステップで下がる。そしてエクスキューショナー全体の姿を捉えた途端、先程の金属音が何によるものなのか把握できた。

「仕込み武器、か。まさか鉄血がそういったものにまで手を出しているとは驚きだな」「こういった小細工の武器はオレよりもエージェントの方が詳しいんだが、正直こういうのはオレの性には合わん。だがためえを殺せるならなんでもいい!!」

もう片方のブーツからも刃を出すとエクスキューショナーが再度接近してくる。最

適な間合いに立たされれば負傷、下手すれば継戦不可もしくは勝負を決されてしまうのは明白。鼻先を掠めた鈍色の刃先に肝が冷やしながらかもエクスキューショナーが自分よりも優れている要素を探してみる。

身体状況、武器の数、戦略、運動能力、残されている体力。思いつく限り列挙してみて一考したが総合的に旗色が悪いという結果しか弾き出せない。

『状況的に有利な敵兵と至近距離で会敵し、遮蔽物も何もないのであれば特攻してなんとしても生き延びろ』

そう教わってから反芻したのがこれで何度目か、ローガンにはわからない。だがここで勝機を見出すには距離を取って『P226』で撃つよりも確実にやりようが幾らでもある。こうして単独で交戦しエクスキューショナーの虚をついて活路を開くにはそれが一番なのかもしれない。

またナイフを抜いて迫ってきていた仕込み武器を受け流す。ギャリリリリリッ！と赤い火花を散らして方向が逸れたタイミングでローガンはさらに距離を詰めて大きく踏み出した。

さらに一步、ナイフを振りかざした瞬間、エクスキューショナーは寧猛な笑みを浮かべて腕を伸ばしてくる。大振りのピンタをするように振られたそれにフックを食らわされて攻撃できないかと思われたがそうはならなかった。

開かれた片手の掴む先はローガンではなく手に持つている武器のナイフの刀身。人
工皮膚が裂けて人間と同じ形状の骨格が露出し出すがそれすら構わずに握力が加えら
れていくので、ローガンは握っている柄を引いて切り裂こうとした。

しかし思ったようにならず、むしろ柄を握っているこちらの手が汗で滑って手から抜
けそうになるばかりだった。

「だろうな。こうされている以上、お前の腕力じゃこのままオレの手を斬ることなんて
できやしねえ！役割を果たせないのならこのナイフは壊してしまっっていいよなあ!？」

バキンッ!!と薄い金属板が砕けた音がした。一方向にかけていた力を止めていたス
トッパーが消えたことでローガンのナイフは薙ぎ払われるように振られた。ただ、その
柄の先についていた刀身は折られてしまっって刃物としての用途を果たせない状況
になっってしまったている。

振り抜いてからそう認識したローガンではあるものの、それをゆっくりと待つてくれ
るほど相対しているほどエクスキューションナーは甘くない。ローガンが気付いた時に
は両脚が振り払われて倒され、眼前には破片を握り締めたままの拳が迫っていた。

すかさず両掌をクロスして止めるが、相手の手の指の隙間から出ている金属片が容赦
なく突き刺さる。ザクリッとその金属片が刺さっているのを遅れてから近くした途端、
恐らく自分の血と思われる液体が重力に従って頬に落ちてきた。

「どうした、立場が逆転したぞ？これぐらいの事をひっくり返してもらえなきやオレ達の『敵対者』としての面目が丸つぶれだぞ!!まあオレは殺す気満々だけどなあ!!」

「わけもわからねえことをほざいてんじやねえよツ!!」

拳を引き戻したかと思えば再度突き出される。他の手段がない為、こちらの頭蓋骨を陥没させるであろう一撃を逆の手を上に乗せて防いだ。今度はさらに深く突き刺さっただけでなく骨にまで達したかもしれない。戦闘になつていなければ悶絶してしまうほどの痛覚の訴えにローガンは声を漏らしそうになつたが歯をくいしばって耐えた。

盃から零れたようにローガンの血が垂れ落ちて、無視や誤魔化しなども到底できない怪我を負ったことを知らしめてくる。しかし今の自分には打開策が思いつかない。

マウントを取られ、両手は文字通り身を削つての防御に費やされ、足の方も封じられて反撃できない状況だ。痛みに塗りつぶされていけないなけなしの思考を駆使しようとするが足りない。『力』が、自分の『力』が足りない。

単純に筋力がエクスキューショナーに対抗するのに同等のものになつていないとかではない。これまでも行く先々を阻んできた様々な鉄血の人形と機械兵を打倒してきた。それで培ってきた経験があつても足りないという話なのだ。

だが忘れてはならない。全ての戦いにおいてローガンの独力によつて活路が切り拓かれたわけではない。たしかにローガンが自分一人の頭脳と技術でもって勝利を得て

もいるが、割合で言うのであればそんなのは半分以下でしかないのである。

すなわち、今回のローガンの必死の抵抗も意味を生み出したということだ。

「おおらああああああああああああああああああああああああああああ!!」

何者かが叫んで突貫してエクスキューシヨナーをタツクルで突き飛ばす。王手をかけていたことと、ローガンとの勝負で周囲への警戒が薄まっていたらしいエクスキューシヨナーは対応が遅れて体勢を崩した。

視界から失せたと同時に刺さっていた感覚が消え失せて、血液の流れを薄らと知覚することになった。

そんな自分の生命の鼓動を断ち切ってローガンは身を起こすと、こちらを制するようにして掌が向けられた。その手を辿っていくと自分と色を合わせた黒と紺色のシャツとベストが目に入り、脇に下げているサブマシンガン

SMG

に纏め上げられた長い銀髪の少女がいた。

そしてもう一人、身に着けている装備はちゃんとしたものが揃っておらずともあるものを大事にしていたことが窺える男だった。肩で呼吸しながらも眼前の敵を睨みつけているのが後姿だけでもわかるその者は、初対面から自分に噛みついていてというのに、今はそうするべき相手を正しく見定めている。

「すまないマスター。こつちの処理で色々遅れてしまった」

「いや、気にしなくていい。それ以前にナイスセーブだったしちようどいい救援だ。これだけ人手が増えたらまだ……!」

「マスターはもう下がっていいんだよ。その手じゃもうロクに奴と戦えないだろし、あとはワタシとアイツに任せてくれ」

エクスキューションナーと一触即発といった状況になっている民兵の男、ハモンドを顎でしゃくるが、バルソクと二人だけではまだ旗色が悪すぎる。ハル力達が来ていないことからして、かわりに負傷したG-11の応急処置を行っているのだろう。となると、すぐにまた増援は望めそうにはない。

ローガンはポーチから包帯を取り出して手に巻き、自身もまた飛び込むつもりでまた戦場を見て言った。

「バルソク、お前の事は信じているが、さすがにあの野郎を叩きのめせるだけの實力はお前にもないのはわかってる。だからこそ、俺もやるんだよ」

「だけど、その怪我じゃもう銃だってロクに握れないだろ。マスターの牙

ナイフ

だってもう折られてしまっているというのに、どうやってやるつもりだよ?」

「止めを刺すのは俺である必要はないって話だ。お前でもいいし、俺達に並ぼうとして

いるハモンドのどちらでもいい。とにかくあいつをぶつ倒せればそれでいいんだからな」

雑ではあるが両手に巻き終えたので、ローガンは両の手を動かして状態を確かめる。傷自体は単なる刺し傷として片付けないので、なにか両手でする時に激しく痛むのは必然だ。具体的には、近接戦で投げ飛ばすべく触れたときだったり、銃を握った時だったりするのが例として挙げられる。

だがそれだけだ、戦えないわけではない。手が駄目でもまだ蹴ることができる脚がある。策を考えることができる頭がある。

『なにもしない』という選択肢は、ローガンにはない。

それがわかったのかバルソクは溜息をつくとローガンにかざしていた手をどけて『P P—19 B A T O N』を手を取った。

「……わかった、マスターの言う通りだし従うよ。だけどゲスト

ハモンド

もいる中でどう動くんだよ」

「その前に、だ。オアシス、エクスキューショナーの格闘戦における能力は大体どれほどのものだよ。五体満足だったとすればたぶん百人組手は行けると思うんだが」

『戦術人形だしその倍はいけるだろうね。ガタが来ている今はそれは無理なのは間違い

ないけど、君達三人がかりに対応できないわけではない筈。となれば……」

「確実に勝つには策が必要、つてことだな。ワタシたちの力の不均一なのが激しい短期決戦でいられるのがいい」

「ならバルソク、お前のフラグを一つ貸してくれ。そいつで別物の手投げ弾を作るから時間を稼いでくれ。攻め方は『トロイの木馬』だ、いいな？」

「……オーケーだマスター！任せろ!!」

バルソクからフラググレネードを受け取ったところでローガンは自分のポーチからC4爆弾を取り出す。フラグを脇に置いてからC4をひっくり返し裏につけている接着粘土を剥がした。

球状になっている本体には殺傷力がある程度は軽減されても極端に弱まらないように、そして簡単に剥がれ落ちてしまわないように貼り付ける。そうしてから考えていた即席『セムテックス』に近いものかどうかを確かめて、世に出て回っているのに少しばかり近づけたと感想を抱いてから視線を上げて戦場を俯瞰した。

バルソクとハモンドが各々で、それでも互いに足を引っ張ることにならないように近接戦を仕掛けられているのはきつとバルソクが力をセーブしつつも配慮しているからなのだろう。一步引いた状態でもエクスキューショナーから痛手を受けることなく対応できているのはいいが、それでも時間の問題であった。主な攻め手であるハモンドが人

質にでも取られてしまうだけの隙ができてしまえばその時点でアウト、エクスキューションの勝ちになってしまう。ハモンド自身のスタミナが尽きてしまうのが先か、それともバルソクのアシストの手が回りきらなくなるのか。いずれにしても長時間もつことがないのは明白で手を拱いている余裕はない。

「バルソク!!」

即席セムテックスを手隠して名を呼ぶとこちらを一瞥したバルソクが頷く。ハモンドが次にエクスキューションから反撃を受けて後退した隙を突くべく、彼女は脇に下げていたマシンガンやサブマシンガンを捨てると敵に掴みかかった。警戒したエクスキューションが牽制として足を突き出しての蹴りを放つので回避、そしてその足を脇に挟んでから掴むことで片足を封じた。

「マスター!!」

すかさずローガンは手に持っていた物が狙い通りに行くと思わず走り出した。尻餅をついたハモンドを追い越して前頭姿勢になるとそのままエクスキューションに接近する。そして人工皮膚が焼け爛れているその顔が見えてきたタイミングで『それ』を持つている手を突き出した。

「こんなんでもオレに勝てるわけねえだろ、舐めてんじやねえぞ!!」

「言われなくても承知してらっつてんだ!!」

振るわれてきたエクスキューショナーの片腕をローガンは自分のもう片腕で受けて防衛しさらに踏み込む。狙いをつけているのはエクスキューショナーの背中であり、もし剥がそうともがかれることになっても相当なことをしなければできない位置である。

バルソクによる動きの制限もあるのだから、常人相手であればこれだけでチエックメイトを掛けれていた。が、相手は鉄血兵で戦術人形。ましてや各機能が上級の人形で、小隊一つ組んでいても倒せるかどうかが怪しいレベルの敵だ。

故に、この後の反撃も必然といえる。

「まだまだ甘えんだよおローガン・ブラック!!」

そう言った次の瞬間、再度振るわれた牽制の一撃は自分の腹部に命中していた。鳩尾付近に当たったこともあってローガンが体を折ってノックバックを受けた途端に、エクスキューショナーは地に着いていた方の足でバルソクを蹴っていた。一秒にも満たないその一連の攻撃で呆気にとられた束の間、蹴った勢いを利用して空中でバックスピンをしたエクスキューショナーにローガンは片腕で引き寄せられては半回転させられる。そしてわかりやすい人質の囷の一要素にされては軽く首を絞められた。

「オレが『トロイの木馬』つつうのを知らないとも思ったのか？さすがに最低限の知識としてインストールされているんだしすぐに察せれるぞ。てめえの部下が囷になって引き付けている間にてめえ自身がオレに爆弾を引っ付ける算段だったんだろ。教えて

やるよ、そんなのはただの陽動作戦であって『トロイの木馬』でもなんでもねえ。てめえの勉強不足だ」

ギリギリと首に掛けられている圧力が強まって息苦しくなるが、エクスキューシヨナーが誤解してくれたことにローガンは笑みを浮かべた。そして手の内に握っていた『それ』をローガンは見せつけると、耳元からは困惑の声が聞こえてきた。

「一体こりやあどうなつてやがる……!?!」

「ぐっ……たしかに、てめえの言う通りで『トロイの木馬』つてのには今のところは当てはまらない……だけどそれは俺が『ウイルス』としての役割であった場合の話だ」

『それ』は地べたに転がっていた手のひらサイズのアスファルトの欠片であった。エクスキューシヨナーはそれを引っ手繰るので大人しくそうさせ、眼前にいるバルソクを見てからハモンドに視線を移した。何をしようとしているのかを大まかに察したらしい彼を隠すようにバルソクがその前に立ったが、ローガンを拘束し続けているエクスキューシヨナーに気付いている様子はない。

「それと言っておくとだなエクスキューシヨナー、今の俺とてめえにある決定的な違いがあるとすれば一つだけある。後ろを振り返りすぎて目の前に巡ってきてくれた新しい縁を取るかどうか、だ。てめえはハンターとの縁に拘りを見せたけど、俺からすればてめえにあるのはそれしかないように見えねえんだよ。代わりにはならないけど空い

てしまった穴を埋めてくれる何かを、てめえは探したことあるかよ」

「……だつたらてめえはどうなんだ。そんな都合のいいモンを今でも得られているのかよ」

「いるさ、目の前にだつてな」

首を絞められているので顎でしゃくすることはできないが、自分を信じてくれているバルソクを言葉で示す。

ローガンが得られた新たな縁としては、戦いに身を置いてから初めて出来た師弟関係の存在である彼女だけじゃない。グリフィンの支部で部下を指揮しているハリーに、彼も含めた世界中の指揮官が属している組織を総括しているヘリアン、AR小隊や404小隊を始めとした面々だっている。失ったものはあるが得られたものだってあった。

ハンターへの執着があったのは、ローガンが幾度も繰り返してきたその経験をエクスキューショナーはしていなかったからかもしれない。同等の存在で在ろうとしてもがいていた、そんなストーリーがあったからかもしれない。

運と巡り合わせを除いて蓄積している経験値とセンスが物を言う戦場ではそんなことだつて一つの武器になる。

「無駄なんだろうが、てめえも視野を広く持つて周りを見渡せ。俺からの宿題だツ!!」

一息に肘鉄を背後にいるエクスキューショナーに叩き入れると拘束から抜け出して

反転。そしてホルスターから『P226』を抜くと体勢を崩しているエクスキューシナーに向かつて至近距離で撃った。

装填されている弾倉の弾薬を全て撃ち切るつもりで引き金を引き続ける。それでも相手は戦術人形で頭部や心臓部分以外の人間なら致命傷となる箇所には被弾しても戦闘続行は可能だ。加えてハンドガンで一マガジン分を胴体に撃ち込んでも決め手に欠ける。こういった場合はあくまで牽制として割り切るしかない。

しかしそれで十分だ、とローガンは血が包帯に滲んできているのを感じながら自分に鞭を打った。ジグジグと痛む両手で握っていた『P226』をその場で捨てると、ローガンは倒れそうになったところで踏ん張ったエクスキューシナーへと駆けた。

言葉などないままに死を感じさせる掌がローガンに向かつて迫って来る。まともに掴まれたらさっきのナイフのように碎かれてしまうのはもう言わずもがなだ。

だったら自分はこれを封じて次に繋げればいい。

頭を逸らして紙一重で避けるとその腕を自分のそれと搦め、もう片方の手でエクスキューシナーの脇腹に拳を叩きこむ。一発だけでなく何発も打ち込んだことで生じたノックバックを受けている隙に、今度はバルソクが動いた。両脚に組みついては仕込み武器が飛び出ているブーツを片方だけでも踏みつける。体重の掛け方からしてバルソクの全体重がそこに乗せられたようだった。

「やれハモンドオ!!」

決め手を任せた者の名を叫び、抵抗を続けるエクスキューシヨナーの腕をローガンは押さえ続けた。こちらに走り出したハモンドの手にはローガンが託した即席セムテツクスが握られている。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ハモンドは叫びつつ接近し、接着粘土のある部分をエクスキューシヨナーの胴体の真ん中に押し当てる。そしてグレネードのピンに指を掛けて抜き放つと遠くへと押しやるべく思いっきり蹴ろうとするので、ローガンとバルソクはタイミングを合わせて拘束を解き、同じ方向へと力を入れた。

「てめえらああああああああああああああああああああ!!」

『ぶつとベツ!!』

三人で同じ台詞を言ってからローガン達も距離を可能な限り取るべく後方に跳び退ってはヘッドダイブし頭を庇う。そして体前面で地を感じた途端に背中爆発が起きて轟音が響き渡った。チクチクと針で刺されたような痛みからして、爆発した破片が接着粘土を通り越して距離を取ったローガンの体に少々刺さったようだが、致命傷には程遠い掠り傷を負わされたような痛みであった。

そして一間空けてからローガンは起き上がって自分の体の痛む箇所を見てみる。見

た限りでは本当の軽傷で済んだようなもので大事には至っていない。

ローガンは自分は五体満足で動けるのだということを確認してから手元に転がっていた『P226』を拾い上げて隣にいるバルソクに聞いた。

「行けるか？」

「大丈夫、ワタシはハモンドの奴を……」

「新兵扱いをいつまでもしてらんじゃねえ、オレもまだ動ける」

傍に寄ってきていたハモンドが手を貸してくるので素直に取って立ち上がる。こちらが立ち上がると今度はバルソクにも同じことをしているので、ローガンは下で『AK—74』を受け取った時と同じような衝撃を感じたが今はそこにばかりスポットを当てられない。

『P226』を構えて爆発があつた方に向かって行くと、そこには胴体が吹き飛ばされて全体的に金属骨格が剥き出しになっている頭部だけが転がっていた。半分ぐらいしか残っていないそれがエクスキューショナーのものであることなどは状況的にすぐわかる。グレネードが弾けたことで生じる臭いに混ざっている焦げ臭さに顔を顰めながらもさらに近づいてみるとまだ完全に沈黙していないようにアイカメラの光がまだ残っていた。

ローガンは構えを解いてエクスキューショナーの意思が残っているだろうその近

くに片膝をついてしゃがんで言った。

「わからねえだろ、俺達がなんでこんな土壇場で賭けに出たかなんて。俺とバルソクの二人が囷として出て真打が他にしたかなんてのだって、本当は俺からしても分が悪くて失敗するのだと前提してたさ。だけどてめえがあいつらまでも下に見ているからこそ、俺はそこに活路を見出してたのさ」

ローガンが仕掛ける際に託したそれを手に持っている彼は最初にどう思ったのかは定かではない。ロクな説明だつてなかつたし、そもそも『トロイの木馬』のことを知っていたのか、バルソクと示し合ったことの意味をわかっていたのか。不確定要素がありすぎて『傍観者』の第三者からすればそうごとくがうまく運ぶことがない、と否定的な見方をして仕方ない。

それでもローガンだけでなくバルソクが踏み切れたのは、チェックメイトを決めれる手の内で可能性が一番あつたからかもしれない。

製造元は違うが同じく戦術人形としてのカテゴリーに入っている自分は警戒されてしまつてもそれは然るべきだ。それにローガンも同じくグリフィンに所属し、緊急時の現場指揮官として任されている。それにイントウルダーが言った事から鉄血自体に目をつけられているので要注意していることだつて考えられる。

グリフィンという組織にいるからだけでなく、在り方を見られている自分達では決着

をつけられない。

では『民兵』という枠組みにいてグリフィンとの関係が薄いハモンドならどうか。リーダーであるハルカではなく彼女の部下である彼であれば蚊帳の外とは言わずともその一步手前に近い、そんな存在として見做されて警戒が薄まっている、と考えられるのではないだろうか。アツシユとのやり取りでそれは窺っていたのだし、それをたつた一つの根拠とすることができる。

それに、ある意味の意趣返しとしてでもある。この世における鉄血との戦争はグリフィンに限つての話ではなく、全人類に関わる話だ。

大切なのは闘争の渦にいて力が有る無しという一点ではなく、己が如何様な『存在』で『理由』があるか。夢を実現する為に、生き残る為だつたり愛する誰かを守る為でもなんでもいい。人の身である自分達が武器として振りかざすそれがあるのなら、誰にでも鉄血と相対するのに資格がある。

だからこそ、ローガンはハモンドがエクスキューショナーにチエックメイトの一撃を撃ち出すことには誰にも文句は言わせるつもりはない。身の上における立場は違うが、ハモンドも戦う意思を持った兵士で鉄血兵に立ち向かつてみせた。その時点でもうエクスキューショナーに限らず、全ての鉄血兵と戦うだけの資格は有している。

「ここでの経験を記憶しているためえのメンタルモデルは潰えてしまおうしもう多くは言

うつもりはねえ。だけどこの先、俺達グリフィンだけでなくこういった奴らのことも警戒する勢力として覚えておけ。力が僅かしかない代わりに知恵を絞っててめえらと戦っている奴だつて世界を見渡せばいるにはいるんだ。そういつた奴はしぶとく生き抜いて慢心している隙を突くもんだし、俺達と結集すればこの戦争にだつて終止符を打てる。ここで消滅しても覚えとけよ、エクスキューショナー」

ローガンがそう言うと言き入れたようにしてアイカメラの光が明滅し反応を示す。そして一際強く光つて一間空けると完全に消滅し沈黙した。

この地下空間における鉄血との戦いが決したとして、ローガンは立ち上がって言った。

「鉄血上級人形『エクスキューショナー』、K I A」

エクスキューションナーとの戦いが終わったからといって今回の任務が達成したというわけではない。今後の鉄血の動向を探るべく課せられていた彼女のCPUを抜き出せなかったとはいえず、まだ脱出できていないのだから仕事は終わっていない。

それでもハル力達と肩を叩き合い、心機一転して全員で貨物エレベーターに移動した。CIAの構成員がもういないのを物陰から念入りに確認しこの場の安全を確保すると、エレベーターを起動して乗り込む。

きわめて業務的なボックス内部にあるパネルの地上へのボタンを押すと機械音が鳴り響いて上方へと向かって動き出した。

「ようやく……」

誰かがそう呟いたことで、ローガンも少しばかり脱力して内部に残されていた木製のコンテナに寄りかかる。息を長く吐いてここまでのことを一斉に振り返る前に、一角で横になっている416とG11の元にまで歩いた。

『痛み』による過負荷からメンタルモデルを保護すべく強制スリープ状態に陥っているG11の処置も済んでいるので、今すぐ危険な状態に陥ることはない。416と比べる

までもなく重傷なのだが、割と早く手当てができたので大事に至っても取り返しがつかないことにならなかったのだった。

「……オアシス、通信の復旧はできそうか？」

『ちよつと待つて……うん、こいつでどうだ！』

オアシスの掛け声で無線機の回線にノイズが走り出す。耳障りなそれにローガンは顔を顰めつつも自身も端末で調整を行って出力などを補正する。

その間にもオアシスが時間短縮も図って基地の方からダイレクトに各々に繋がるようになっていた無線の接続状況から、ローガンが装着していて自身が客人

A I

として入り込んでいる戦術端末と無線機を起点に枝分かれの分配接続に切り替えてみせた。

「改めて思うけど、戦術人形の時のお前さんってやっぱり電子戦に特化したモデルだったりしてたのか？ A Iにクラスチェンジしたとはいっても、こうも早く仕事できるとはちよつと不思議なんだけど」

『まあね。銃を使つての戦いよりは情報収集とかハッキング、こういった電子機器の操作の方が得意だったし今もそうだよ』

「お前自身のことは事前に少し話を聞いている。過去にグリフィンからロクでもない仕

打ちを受けたとかなんとか。それは本当なのか？」

ノイズに混ざりながらも喋っていたオアシスが沈黙する。

正直言つて興味半分ではあつたが、バーンズから聞いた情報の正確性を知る為にも必要なことではあつた。ここまで協力してくれたのだからローガンとしてはもうある程度は信頼を置いてはいる。しかし時間だけでは全幅のそれを置くことはできない。場合によつては腹を割つて話して相互理解を深めるのだつて必要になる。

エクスキューションナーに対し言葉で突っぱねて見せたりもしているので、腹の内に他に隠していることがなければ信頼できる。なのでできればローガンとしては隠し事などなしであつて欲しいのだった。

とはいえ踏み込み過ぎたか地雷を踏んだかもしれない、と思つて冷や汗を流したがそれは杞憂で済んだ。

『……ごめん。今は、その事について話したくない。あなた自身にも必要なことであるのはわかるけど、あたい自身もあの時のことは決して堂々と話せることじゃないんだ』
「それは……お前にとつてトラウマに近いものなのか？」

『まんまそうではないけどさ、後から考えてみればある奴にあたいの我儘

ねがい

による呪縛と捉えられる言葉を放つてしまったんだよ。恥を晒すようでもあるわけだ

から、あたいもちよつと話しづらいんだ』

「……気持ちわかる。他人に爪痕を残してしまったのは俺にも経験はあるからな」

人生という自身の在り方を記憶という形で綴っていれば、どこかに羞恥心で目を背けるたくもなる経験が出てくる。他人にはそうでなくとも過去を振り返った自分からすれば過去の自分に悪態をつきたい、ローガンにもそれはある。

だからこそ、ローガンは言った。

「わかった。いつか話したくなったら話してくれよ。その時まで待つてやるよ」

『……うん、ありがと。本当にあなたが来てくれてよかったよ』

ひらひらと見えない相手に手を振るとローガンは立ち上がって最終確認を終えてから接続を承認。ハリー達と決めている無線チャンネルのノイズが取り払われたタイミングで貨物エレベーターが地上階に到達したので、ローガンはバルソク達にクリアリングを任せる。

自分はいつでも彼女達が戻ってこれるようにエレベーターを開かせ続け、無線に声を投げかけた。

「こちらアルファ一。プロフェット、聞こえているなら返事をしてくれ」

『……えている、聞こえているよアルファリーダー！こつちでも色々接続を修復しようとしていたけど、ようやくなんとかなった……！』

「その甲斐もあつた報告をする。任務は概ね完了、オアシスを無事地上にまで持つて来れた。だが地下からの離脱の途中でアルファ2と3が負傷して強制スリープに陥っている状態だ。至急、迎えを寄越して彼女達だけでも回収してくれ。第一級と第二級の修復措置を整えておいて欲しい」

『了解、ただちにそちらに救護ヘリを向かわせる。安全地帯に到達したようであれば合図してくれ、巡回させているヘリが現在地を元にそちらに急行する』

クリア!!とバルソクが叫んだのでローガンはG11を担いでエレベーターから外に出る。肉眼では見えないまでに遙か空に浮かんでいる衛星を睨みつけると、416を運んでいるハモンドと廃病院で手招きをしている民兵のいる方へと向かった。

「それとプロフェット、今回の件にCIA、政府の諜報機関が絡んできた。恐らくだが今後政府からちよつかいがかけられるだろう。帰還したら詳細まで報告するが留意しておいてくれ」

『……そうか、わかった。対策を講じておいた方がいいだろうし、後日はそれを打ち合わせをしよう。とにかく今はお疲れ様、よくやってくれた』

陽の光が当たっていないことで熱が籠っていない地面を見つけては一旦そこに下ろして寝かせると全員が集合した。民兵の一人が拠点からここまで行き来で利用するラ

クダの番をしている仲間と最初に遺体になっていた仲間を運び出しているだろう味方に連絡を取っている中で一息をついていると、ハリーが無線越しにハルカに話しかけた。

『ハルカ、顔を合わせることはなかったけど久しぶりに協力体制を敷けて良かった。近いうちにそつちに礼として食糧を中心に物資を送るよ』

「それはいいとして、こつちからも色々と迷惑をかけてしまつてたし、この間みたく契約で取り決めていた以上に送付しなくていいからな。前回はともかく、今日は立場が逆だったんだし勘定する必要はないぞ。むしろ減らされてしまつても仕方ない……」

『そんなことはしないよ。今回は事前に合意している分だけ送つて次回に借りを作れるように心がけるさ』

旧知の仲である二人の話に耳を傾けてハルカの方に目線を途端、言葉では表現できないような違和感を彼女から感じた。警戒態勢を維持していた時には見られなかったその何かにローガンは訝しんで、所々がE・L・I・Dの返り血にも塗

まみ

れている全身を見て回つた。

その途端、そうする必要はない、と誰かが言ったかのように彼女の無線を押さえていない方の腕がはつきりと目に見える形で跳ねた。ビクビクと痙攣した腕が病気か何か

で異常をきたした震え始めたので、ローガンは驚きながらも駆け寄ってみる。その間にも血管が浮き上がって来たかのようになっていて異常だということが明らかにした。断りをいれることなく無言で腕を掴んで袖を捲つてみると先述の症状以外におかしな点はないが、彼女のことと思われる血が腕を伝つてきた。

「……ハルカ」

ローガンの呼びかけに彼女はこちらを見て脂汗をかきながらも笑みを浮かべると、濡れの肩を露にした。環境に適応すべく薄着であつたので女性ながらも鍛えられているのは、ローガンでも初対面の時からわかつていた。アスリート並に体の筋肉が盛り上がっているというわけではなくとも、一般男性とで腕相撲すれば拮抗しい勝負をするであろう。

ハルカがシャツをずらして肩を見せ、確信めいた嫌な予測とこれほどまでに違つて欲しいと思うことはローガンでもあまりない。

———どうか、どうか思い浮かべているビジョンが現実になりませんように———
 そう強く願いながら現実を見た瞬間、ローガンは大きく息を吐き出した。

「マジかよ……お前……」

「……すまないな。強く鼓舞してもらつたというのに、あたしは部下の姿をしていた奴をすぐには撃てなかつたんだ」

異変に気付いたバルソクとハモンドがハルカの肩を見て、絶句し言葉を紡げなくなるが無理もない。両者とも『これ』に關しては初見で一体どうしてこうなったのかということの理解はできないのだから。彼女達もローガンと同じく群がって襲い掛かって来るE・L・I・Dの対処に追われていたので、仲間の誰かが噛みつかれたことには気付くのは難しいだろう。それも彼女のかE・L・I・Dとも判別しづらいまでに血が付着していれば仕方ない。

「隠すつもりはなかったさ。連中に噛まれてしまったらどうなってしまふかなんて、あたしも知っているしそうなたた奴を見てきたからな」

ゾンビやらヴァンパイアなどの化け物に噛まれるなり血を吸われれば同類になってしまうというのはそういうった系列のフィクション作品ではありがちだ。ウィルスなどによるプロセスで辻褄を合わせては作品の設定の厚みを加えているので面白味も増してくるものではある。

しかし自分達が目にはしているのは紛れもない現実であり、帰還する前に解決すべき問題である。

黙っているところからの状況が音声でしか把握できないハリーの方から聞かれた。

『……なんとなくはわかったけど確認として教えて欲しい。なにがどうなっているんだい?』

『……このままじゃあなただけじゃなくなつたあたいの達の友達が E. L. I. D の仲間入りするつてことよ。これだけでもわかるでしょ』

『つ……そうか……』

オアシスが代わりに答え、ハリーは息を呑んだようだった。憤りも僅かながらも含めたオアシスの言い分を咎めようとも思ったが、そんな気などすぐに霧散した。

この場にいる皆が事態の変化を知つた中で、ハモンドが口を開いた。

「で、でもよ、グリフィンのためえらは『崩壊液』に対しての治療の策は持ち合わせているんだろ？ 政府と関わりがあるわけだからそういう研究とかの結果だつて……！」

内情をある程度までは知つているバルソクまでもが期待が籠つた視線をこちらに向けてくるが、残念ながらそんなものはないのでローガンは首を横に振つた。

『崩壊液』というのはウイルスなどの『病原菌』という分類よりも核爆弾から発せられる『放射能』のような認識に近しいらしい。E. L. I. D になつた存在に対し、『崩壊液』に『感染』した』ではなく、『崩壊液』に『被爆』した』という表現がされているからだ。無論、E. L. I. D に攻撃を加えられたことで『崩壊液』が伝播するのだから『感染』と言うこともできる。

しかし未だに人類は『崩壊液』の解明が進んでいない。液と言われているが原始的に調べてみれば物体が素粒子に似た動きをしているとか、それに『被爆』してからのプロ

セスなどしかわかっていないのだ。

従つてローガンが知る限りでは、ハルカから『崩壊液』を剥離する手段はない。

『残念だけど、彼女の命を救う手段はないよ。このままじゃハルカは『崩壊液』の影響が全身に行き渡つて死ぬ。そしてその後は……』

「コンピューターが御託を並べているんじゃないよ!!暗がりから出てばかりのてめえからオレはそんなことを聞きたいんじゃない!!おい、答えてくれよローガン! 『手段はある』つて言つてくれよ!!」

スピーカーに切り替えて声を出したオアシスに吼えたバルソクはローガンの胸ぐらを両手で掴んでくる。その手は殴り掛かる時のようなものではなく、縋りついているそのものであった。

ハモンドだけでなく民兵の一人までもがローガンに詰め寄つてきては矢継ぎ早に問い質してくる。助けてくれたら見返りは出す、礼はする、だからなんとかしてくれ、と言われたがローガンはハルカの命を救う手段は持ち合わせていない。彼らが納得できる、許容できる方法は、

本当にクソツタレだ。

鉄血、『崩壊液』にE. L. I. D、そしてこんな顛末に直面させたこの世の人智が及ばないシステム。自分達を圧死させるが如く容赦なく押しつけてくる要因全てが本当

に憎々しいと思うのは、これで何度目だ。十数回になったあたりからもう数えていないが、ひよつとするとその数値は三桁になつていないのではないだろうか。燃料などもうない筈の高炉が点火されて黒く轟々と猛るこの感覚。誰にもぶつけることができない、発散させるどころか忘れることだつて絶対にできない憤りを抱え込まなければならぬ虚しさに、いつになつたら決着がつけれるのだろうか。

「……プロフェット、本当にグリフィンは『崩壊液』への対抗策はないんだな。半日ではあるが共に死線を潜り抜けたんだ、ワタシとしても彼女を助けたい」

『ああ……僕もそう上層部と本部の研究部門に問い詰めたよ。友人を助けられるのなら何を投げ打つてもいいぐらいだ。それに、あつたとしてもハルカがE・L・I・Dと化す前に間に合うのかどうかだつてある』

「仮に基地の方で治療薬があつたのだとして、遠く離れたここに届けられるのには時間が足りない、つてことだよな。だけどそんなことを考えるまでもなく、ワタシ達は……」
 『……『人間』としての尊厳とかそういうのじゃない。『死者』とか『怪物』としてではなく、『人間』として終わらせてあげるのが一番の救済だよ』

バルソクとプロフェットの会話はローガンとハルカにしか聞こえていない。言つてすることはごもつともだし、彼女もそうである方がいいだろう。無理に生にしがみつこうとしているのなら、こつも晴々とした笑顔を浮かべていることはない。

そんなハルカを他所に部下である二人が三人になって何度も同じことを聞いてくる。手段はない。辛いのはお前らだけじゃない、俺達だってそうだ。

そう言うのは簡単だ。なにせ自分達はフロリダの外から来た余所者でハルカの部下じゃない。だからリーダーである彼女を喪った時の痛みを痛感するわけじゃないのだ。

ローガンはハルカの事を今日まで知らなかった。容姿も、性格も、地位も全て。協力の存在こそハリーからは教えられはしたが、今日知れたことなどほんの一握り、それどころか指で抓んだ程度しかないぐらいだろう。

あまりにもローガンはハルカの事を知らない。それだからこそ、今こんなところで宥めるような安っぽいことは言えないのである。

従って、ローガンはこう言うことしか出来ない。

「……ない。ハルカを助けられる手段はなにもない」

「ふ……ふざけるなあ!!」

激昂したハモンドが拳を振るって殴り掛かってくる。その拳はローガンから見れば緩やかで躲すことだって受け止めることもできる。ハモンドの拳は本人の性格を投影したかのように赤くなっていて、様々な感情が籠った一撃が放たれようとしている。この男の事だから、きつと悉く躲されては自分が拘束されると無意識に考えているのだろう。

これが達成されても事態が解決されることはないと知りながらもやってしまふ、そんなことすらもわからないのかとローガンは苛立ちを覚えながら身構えて受け止める姿勢になった。

だがそれも束の間、疲労が積み重なった体に鞭を打って腕を上げようとした途端、ハモンドの腕をハルカが止めたのだから何もせず済んだ。

「あたしが死ぬ直前でそんな馬鹿な真似をするなバカタレ……せめて安らかに逝かせてくれよ」

「ハル、カ……」

「すまないなローガン。あなたにも出来ないっていうのに責め立てさせてしまったな。あんたが負い目を感じているのなら、まず最初にそうなっているべきなのはあたしたちの方さ。鉄血と戦えはしても力不足なのは変わりがない、だからこんなことになってしまったんだしな……」

まだ変異が起こつていない腕を伸ばしたハルカが笑いながらそう言ったが、身体だけでなく精神的にも大分無理をしているのが一目でわかった。首筋にまで広がっている異変による苦痛に耐えながらも見栄を張っている様子にローガンは胸に痛みを覚える。

こちらに笑いかけたハルカが今度はハモンドの方を向くと、彼女はハモンドの腕を放してから懐からローガンが地下で渡したドッグタグを取り出した。それをハモンドに

差し出す。

「お前にこれを任せる……今の拠点から西南部、そこにある町跡の外れにある廃墟にこれを返しておいてくれ……」

「……そう言わないで自分で行つてくださいよ……！リーダー、昔馴染みであるのなら自身で行くのが……それにまだオレたちはあんたが必要なんですから……！！」

「そう甘ったれたことを言うな、あたしはお前のお袋じゃねえんだからよ……後のことはジャックに任せる。あいつに従つて、お前らは生きろ……」

立っているだけの力も尽きたようにハルカがその場で崩れ落ちる。『崩壊液』の影響で顔色も悪くなつてきていて、彼女に残されている猶予ももうそこまでない。地下での戦闘からまだ一時間も経っていないが、ハルカはCIAの暗部に追い付かれるのに足を引つ張るわけにはいかなないので地上に出るまでの辛抱だと言いつ聞かせていたのだろう。

ローガンは過去にハルカと同様にE・L・I・Dに噛みつかれた者から、撃たれた時よりも体力の消耗が加速度と同様に激しくなつてきている、と聞いていた。ここまでの脱出の道のりも決して楽なものではなかったのだから、体への負担は尋常じゃないものだろう。ましてや今、『崩壊液』による身体の変異による苦痛だつて

もうそろそろ、楽にしてやるべきだ。

「いい加減にしろよハモンド……これはあたしからの『命令』じゃなくて『頼み』だ。こ

れぐらい、受けてくれたっていいだろ……」

「やめてくれ……！オレはあんたに救われたんだから、あんたの為にこの命を使おうと思つた！オレがやるべきだと思つたことは全部、殴られるだけの空回りになつてもいいからやつてきたんだよ！それなのにあんたが先に逝つちまうなんて認められるわけがねえよ!!」

「リーダー、ハモンドだけじゃなくて俺達も今も拠点を修復している連中だつてそうだ！あんたが助けた人達がいる分、それだけ悲しむ人だけいることがわからないわけないだろ!!」

「どう、だろうな……案外、いなくなつて清々する奴だつているかもしれない……あたしだつて我ながら酷く叱責してしまつたことだつてあるわけだしな……」

皆の視線が自身から逸れたので、ローガンはホルスターから『P226』を抜いてから装填している弾倉を排出する。そこに弾丸は残されていなかったが、露になる薬室に手を当てがつてはそのままスライドを引いた。重力に従つて手の内に落ちてきたものがあつたので見てみれば、それは使用している最後の9mmパララム弾。人の急所に的確に命中させれば一発でも致命傷になる。

相手は動かないでくれるだろうから外すことはない。それだけで十分だ。

『……ローガン』

「心配するな、わかってる」

オアシスの呼びかけに応えては、空の弾倉に弾をセットしては『P226』に装填し直してスライドを戻す。今度は弾が排出されないようにスライドを手前に引いては、次に引き金を絞れば発砲できることを確認する。

ガシヤンツとスライドが戻った音でこちらに気付いたハモンドが、銃を奪おうと飛びつこうとしてきた。

しかしそれよりも先にもう一人の民兵の男が割り込んでハモンドを止めて言った。

「よせ、これ以上は、堂々巡りでしか、ない！」

「うっせえ！そこをどきやがれえ！！リーダーを絶対に殺させは……！！」

「オレだって、死なせてほしくは、ない！だけど、ハルカさんが、生きて欲しいと、望んでいる！！だったらオレは、それに、従う！」

「リーダーの死体を跨ぐのかよてめえも!?随分と恩知らずなやつだったんだなあ!!」

「それでも、オレもお前も、前に進まないと駄目だ！ハルカさんだって、立ち止まって、欲しくないんだよ!!いい加減に、割り切れ！オレ達は、生きなければ、ならない!!」

他人の経験や教訓を活かしては次の者達に継承することも人の世における生の循環で、人類は無意識に行っている。生きるということは、誰かを土台にしては跳び、前進できなくなった者をその場に置いて歩き続けることでもあるのだ。

闘争が世界中で起こっているこんな世の中では、抽象的な例えではなくはつきりとした形で起こっていてそこには必ず誰かが胸を痛めている。

今がその時。グリフィンと民兵という部類の武装グループ、アメリカ人と日本人のよ
うな組織や人種などは関係ない。自分達は目的を達成することを理由に結集して、鉄血
やE・L・I・Dと戦った。

それだけで『友』の死を悼むのに十分な理由だ。

ローガンはついさつきや普段よりも重く感じる銃を持ち上げるよりも先に、ハモンド
を見て言った。

「お前らがどう思っているのは勝手だけどさ、きつと鉄血に本当に勝つには『力』だけ
じゃ駄目なんだろうさ。鉄血だって元は数字の羅列でできていたAIで、それが機械の
体に詰め込まれた存在だ。あいつらが最終的に俺達を滅ぼそうとしているのは明白で
それに対抗しなきゃならない。それには『力』という一要素だけを武器にするんじゃない
く、頭の出来や在り方が俺達人間の方が連中より上等だ、って豪語できるだけの根拠
だっている。鉄血との戦争は単純なものじゃなくて、そうした面もコインみたいにある
んだって思う。だから俺は、少なくともエクスキューションナーみたいに仲間を固執して
いたり、自分だけが被害者面ばかりをするわけにはいかない。今ここで、足踏みを続け
ることだってな」

ローガンが照準を定めたとところでまた二人が動き出そうとしたが、ハモンドに言葉をぶつけた民兵とバルソクまでもが動いて彼らを止めに入った。

ハモンドと一人の民兵、この二人になにを言っても納得して道を開けないということはおもう揺るがない。であればもう、このまま片を付けた方がいい。

「すまないな……あんたにあたしの介錯を任せることになるなんて……」

「……今までもこんなことは何度もあった。今回だって、同じことをするだけだよ」

動かないハルカの額を狙いながら銃を握り締め、指を引き金にかける。それでもういつでも撃てるだけの態勢を整えたのだと知覚した途端、ローガンは自分の手先が震え始めたことに気付いた。

誰もが注視するまでもなくわかるほどに向けている銃口の先がブレて照準も定まらなくなり、銃を両手で持ち直しても望んでたようにならなかつた。むしろ震えが大きくなってしまったて下手をすればハルカの頭部から弾道が逸れてしまいそうであつた。

それでもローガンはこれからやろうとしていることに目を逸らそうとはしなかつた。自分はこれから、仲間を殺す。いかなる理由があつても揺るがない事実を飲み込んで、実行して達成しようとしているのだと。

「最後に、なにか言い残したいことはあるか？」

「……そうだな」

変異は顔にまで浮き上がってきているがまだそうするだけの時間はある。ローガンに言われたことにハルカは目を閉じて数秒黙考し、口を開いては言った。

「……ハリー、お前は仲違いなりしてつまらない形で友人を失くすなよ。どんなことがあっても、取り戻すために出せるもんは全部出し切れ。あたしの前で銃を撃とうして構えている奴はそうするだけの意味はあるからな」

『……わかった、肝に銘じておくよ』

ふつと小さく笑ったハルカは身体をゆっくりと動かしては近付き、ローガンの『P2 26』を掴み自分の額に押し当てた。そして動作不良を起こさない程度にスライドを持ちながらこちらを見てくる。

その顔にはもう、憂いはもうないのだと言っているかのようだった。

「さあ、もうやってくれローガン。あんたももうガタガタで耐えられないだろ。だってら早く終わらせてしまった方がお互いの為だ」

「……ああ」

「そんな辛い顔をするなよ、あたしだって楽じゃない。だけどあんたのに比べればあたしの苦痛なんて一瞬でしかないんだ……もうあたしのは死人同然として見てくれ……」

ハルカの頬に血の混じった涙が伝った。満面の笑みに余計なものが混ざったことに

ローガンも目が熱くなって逸らしてしまいそうになる。

彼女だって本心としてはもつと生きていたいと思っっている筈なのに、人生の幕を誰かに引かれることを願わなくてはならなくなった。こんなことになれば、誰も望んでいることではなかったというのに。

ローガンは歯を食いしばり、眼前で自分を正面から見ているハルカ・タカハシという女性は言った。

「ローガン・ブラック。束の間の共同戦線ではあったけど、肩を並べてあたしはよかった。できればそのまま、誰かの道標で在り続けていてくれ」

「善処するよ……俺もお前と一緒に戦えたことで学べたこともあった。ハルカ、お前を俺は絶対に忘れない」

グツと指に力を掛ける。勇敢な彼女に貰った勇気を物理的な力にして。背中の方から懇願の声が聞こえてくる。

「やめてくれえええええええええええええええええええええええええええええ!!」
ドンツ！と銃声が、響いた。

—〈Ash〉—

善悪を決める正しい基準はなにかと、アツシユは考えたことがある。見聞きしたこと
の事象を引き起こした本人が善か悪、正しいことをしたのか、それともその逆か。それ
を確定できるのは、その場に居合わせた人間ではなく、後々に結果を一望できる第三者
しかない。その人間はそれを『歴史』という形で人物の行いや関わった事件などを記し
て来た。

だがそれはあくまで人による記録であるので、全てが真実であるとは限らない。その
人間の人数、主観や価値観で見方は変わってしまうし、どこかに隠蔽しているか嘘で覆
われた事実だつて有り得る。

例えば、あるアメリカ人の警官が市街地で銃を撃つては三十人の人質に爆弾も仕掛け
て大量殺人を目論んだロシア人を射殺したと、報じられたとしよう。アメリカ側からす
れば、自国の民を救ったヒーローとして語り継がれるかもしれない。そして人質も三十

人全員、救出されているのだから表彰された。そうあらゆるメディアを通じて世界中に知れ渡った。

その後日、事件の当事者であった人質の一人がこう証言した。『自分を含めた人質の数は三十人ではなく三十一人、その内の一人は犯人に撃たれて殺されていた。なので人質全員が助けられたわけではない』と。他にも自分達を『結果的には助けたことになった』警官はトリガーハッピーで酒癖が悪く、市民からの評判は最悪だったという。それでもアメリカ政府は多くの人を助けた警官として扱い、耳を貸そうとはしなかった。

またロシアからはこんなニュースが流れた。『先日の事件の最中で死んだ人質は事件現場周辺を観光していた、我々と同じロシア人であり、射殺された犯人との面識はなかった。銃撃戦になった際にアメリカ人の警官に誤射で撃たれてしまって死亡した。これは我々への冒涇である』。これを皮切りに、両国の溝は深まっていったりとする。とどつて十分に考えられる。下手をすれば延長線上で戦争にもなりかねない。しかしこれはそうなることをロシアが狙っていて偽情報で裏工作をしていた、なんてことだつて考えられる。

このように耳に痛い『事実』に対してを隠蔽しては嘘を流し、都合のいいことだけをそのまま垂れ流す。後に盤をひっくり返すほどではなくとも、その起点にもなるかもしれない『真実』を誰かが語ることになったりすることはあった。小説やドラマ、映画だ

とかでそういった作品もちらほらと散見している。過去を振り返って突き詰めてみれば人類のそんな汚点はもつとありそうだ。

それに例え話の中の世界ではアメリカ政府から見た『事実』と人質の証言とロシアを元にしたそれがあつて、後世の人々はどちらが本当のことかの判別がつかない。

誰が正しくて間違っているのか、善悪に分類するにはどうなのか。そもそも誰もが思惑があつたので『真実』とは違うことを述べていた、という結論を導き出しかねない。

だからアツシユは、この先自分がやろうとしていることがこの先にとつて本当に正しいことかどうかはわからない。嘘塗れの『歴史』に前例がない以上は自分がその例を作らなくてはならないだけでなく、この行いに意味があるのかと考えてしまう。『ある側』からすれば正しいことでも、対極に位置している『こちら側』からすれば間違っていることはわかつている。なにもしなければその逆だ。

しかし動かなければ、かつて自分の手を引つ張つてくれたあの人を裏切つてしまうことになる。ぶつきらばうではあつたものの温かく接してくれて自分を逃がしてくれた、そんな人を蔑ろにしたその時は自分を許せなくなるだろう。

正規の人員から『放浪者

ノーマッド

』になり、中小規模の組織を渡り歩いては誰かと関わつては『生きる』遺志を継いで、

また放浪していたという彼が言ったように。

この道を確認するものとして選ばたきっかけだつて得られた。後は実行に移すだけ。

「……絶対に成し遂げてみせるよ」

亡き『先導者』の想いをなかつたことにしない為に、アツシユはまた動き出した。

動き回っている物音で水面下で漂っていた意識が浮上する。閉じていても瞼を透過して差し込んでくる火の光に眉をしかめながらもローガンは起き上がっては、自分がいるグリフィンの車輻の外を見た。

深夜に差し掛かれれば幾分静まるかと思いきや、交代して作業に取り組み続けているよ

うで動きに淀みがない。ただ、休息を得て眠っている中には子供もいるので、彼らの睡眠に影響がないように可能な限り物音は抑えられているらしい。

多少の足音や物音は動けば発するのだから仕方ないので、ローガンは頭を掻いては水筒を手に車輪から外に出た。扉を閉めようとした際に後部座席で寝ていたバルソクの姿がないのに気付く。

「……まあいつか」

探した方がいいか、と一瞬思ったが、彼女だつてきちんと考えて行動できる少女だと思ひ直しては車輪の扉を閉めては寄りかかる。星空を仰いでは水筒に残されている水を飲んで一息をついた。

要請通りに回収された416とG11の修復作業に取り掛かって大事なことがないこと、連絡が入ったのは、時計を見る限り二時間前。それで気が楽になつて熟睡できる、なんてことには到底ならず、ローガンは仮眠をする三十分ほど前までは悶々としていた。

そうなつていたのは両手にある裂傷や体中の掠り傷、または腹や頬にある痣による物理的な要因ではない。仲間を手にかけてしたことによる事実、それがなによりもその面で図太くないローガンの心に重くのしかかつていた。

「はあ……」

溜息を漏らし、彼らのリーダーが死んだことの事実を突きつけられた者達の顔を思い

出す。やはりほとんどが現実を受け入れるまでの時間を要し、生き残って帰って来た自分達は質問攻めに遭わされた。

当時の状況や死因などの質問を挙げては最終的には、誰がハルカを殺したのか、そう聞かれた。その時のローガンは意を決して自分だと示そうとしたが、それよりも先にハモンドを真つ先に制止した民兵が『彼女はE・L・I・Dに殺された、それだけだ』と答えてそれ以上は口を開かずにいた。

E・L・I・Dのことを詳しく知らない彼らから『言葉攻め』と書いたリンチを受けずに済んだことで安堵しては、ローガンは後でその民兵に一言礼を言ってからハルカの副官と話をした。

ハリーも無線を使つて交えて協議した結果、一週間以内にこちらから所属や素性を隠した支援部隊を寄越して移動することになった。彼らもまだ大規模な移動をしたばかりで、また同じことができるほど落ち着いていないのでそれまではCIAからの追撃には厳重に警戒すると言っていたが、それでは駄目だとハリーは強く言つて様々な案を提示。そして互いに要所を取り上げては擦り合わせて妥協し、今の形に落ち着いたという事になる。

『……ねえ、ローガン。あのサングラスをつけて夜空を見せてよ』

今日一日の出来事に思い巡らせていると、端末のスピーカーからオアシスの声が出た

されて聞こえてきた。遠慮があらながらも楽しみにしていたことに期待に胸を膨らませていたようでもあったので、ローガンは無言で車内にしまっていたHUDのサウンドと周囲に迷惑を掛けないように無線機をつけた。すると自動で二つが端末と接続されて、画面に様々なデータ処理が行われる。

そして視界の明暗調整が終わると、オアシスが感嘆の声を漏らした。

『ほえ、今になつてもこの空は変わらないね。大気中の塵で絶景の星空が台無しになつているのは相変わらずだけど、やっぱり多少は星が見えるね』

「がっかりしたか？人形だった時よりも綺麗になつていなくて」

『ん、むしろなんか安心しちゃった。醜悪な人間の一面は悪い方に向かつていても、これだけは変化していかないでくれているのがさ。こうしてみると変えられないことがあるというのは、良い意味もあるんだなって思えるよ』

良くも悪くも、時間の経過だけでも人は変わる。筋力が衰えに肌の潤いの喪失、髪の色素が抜け落ちたりと肉体の皺が増えたりもする。人生経験を積んだことで達観してしまい、柔軟な思考が難しくなったりもして、後に続いてくる若者たちに大なり小なり疎んじられてしまう。

犬や猫などの動物だって歳を重ねればヨボヨボになり寿命を迎えてしまつて死に至り、その骸は土へと還る。それには人体だって例外ではない。

そんな生物である自分達に比べれば星の変化はあつてないようなものなのかもしれない。見た星の光の色が異なっていたりもするかもだが、天体観測が趣味ではないローガンからすれば些細なことに感じる。

対してオアシスはどうなのかと思ひ、ローガンは聞いてみた。

「お前は以前、どういったことが趣味だったんだ？ そんな性格からすると、その場でじつとしていようなことはあまり好きじゃないだろ」

『どころがどっこい！ あたいはこれでも文芸への深い理解があるんだぞー！ ネットに転がっている世界中の著書を読んで、は広く知識を吸収しているのだあゝ!!』

「……………へえ〜？」

『……………うえ〜、嘘だよー。だからそう弄り甲斐のある面白そうなものを見つけたようにニヤニヤしないでっ〜』

「いやいや、俺にはロクな学がないわけだからその辺を頼れそうだなって思っただけだぞ〜。そういうったことでわからないことがあつたら教えてくれよな、よろしく頼むぞ〜へっへっへ」

『ローガンのいじわるう〜！ 撤回！ 撤回するから勘弁してっばあ〜！』

オアシスがそう縋りついているかのような声でそう言ってることにローガンは愉悅を感じて笑みを浮かべたが、それもすぐに失せた。

未だに押し掛かっている重石による負荷の影響もあるし、面持ちを暗くして目の前を行き交つて夜通しの仕事をしている人々に対して悪く思ったからだ。彼らは今、任されている仕事による忙しきで自分達の『指導者』であつたハルカを喪つた悲しみを忘れようとしている。

あくまでそれは逃避であり、喪失による痛みを先送りしているだけ。いずれは乗り越えなければならぬ課題から目を背けているに過ぎない。

それでも、ローガンは彼らを論すだけでなくここで愉樂に興じる資格は自分にはないと思つた。どのような経緯はあれど、『彼らのリーダーを撃つた』のは自分であるのだから。

『……その急な沈黙だけで考えている事、すぐにわかちやうよローガン。ハリーとかいう指揮官と一緒に一度言つたけど、彼女を殺したのはあなたではなくE・L・I・Dとか『崩壊液』そのものだ。だから、あなたが気に病む必要なんてないよ』

「そう言われてもやつぱりすぐには割り切れないよ。俺でも好感を持てる人間こそこの世には何十人かいるけど、そんな奴の一人を俺自身は撃つたんだ。あいつを追い込んだのはたしかにE・L・I・Dとかかなだろうが、瀕死状態になつたあいつを撃つてとどめを刺したのは俺だよ。これだけは、変えられない事実だ」

『確かにそうではあるけどさ……まあ、少しだけでも性別の関係も含めて好意を伝えて

きた人を撃ってしまったことによる衝撃っていうのは、相当なものなんだろうね。持っている力の大きさはどうであれ、死んだ仲間のことと怒っていながらも冷静に現実を見れるのも部隊長として必要な要素を備えていた。彼女が死んでしまったことによる影響は人類全体で見れば小さく見えても、今みたいにフォーカスしてみれば本当に大きいよ」

「ああ……」

段々といたたまれなくなってきたので、ローガンは車内に戻ってラジオ放送でも聞こうと思い扉を開けるべく手を掛けた。扉を開けたままの状態で座席に腰掛けては片脚を外に放り出し、電源を入れたら最小に音量を近く調節する。

サングラスを外して耳を傾けると流れてくるのはクラシックの曲だった。今の時間帯だとジャズのどちらかが流れてくるが、今日はこっちでよかったとローガンは思った。

もしジャズだったら無性に酒に逃げてしまたくなりそうでしょうもなかっただろうな、と一人ごちていると横からビール缶が差し出されてきた。予兆も何もなかった突然のことに驚いて差出人を見るとバルソクが立っていた。

「顔色が良くないぜマスター。なんか嫌な夢でも見たのか？」

「……まあ、そうだな。ちよつとばかし精神的にくるものは見たよ。それよりもこれは

「一体どこから持ってきたんだ」

「ジャックとかいう副官のあいつが色んな意味を含めての餞別として分けてくれたんだ。もうこんな時間帯に渡しても遅いことに変わりはないが飲んで休んでくれってよ」

「ふーん……そんなじゃ遠慮なくもらうとするかっとその前に」

受け取ってプルタブで開けるよりも先にローガンは自分の耳につけているイヤホンマイクをトントンと示してバルソクにもつけるように促す。それで理解したのか、バルソクも耳に自分のを押し込んで起動。それから後部座席の方に乗り込んだ。

『バルソク、わざわざこれを強請りに行ったわけじゃないんじゃないの？あんたは別に酒好きではないし対価をすぐに要求するほど凶々しいわけでもないらしいし、なんかあつた？』

「ん……マスターみたいにワタシも思うことがあつたから、単に気を紛らわせるべく邪魔にならないようにしながら散策してただけさ。そんであのジャックが手を貸さないと危なっかしい仕事をしていたから手伝った、それだけ」

「その礼がこのビールというわけか。別に不満はないけど、俺達にくれてしまつて大丈夫なのかよ向こうは」

「身内の飲んだくれに渡つてしまうよりは良いってよ。それに期限が近い代物だから片す意味合いもあるんじゃないか」

表面に刻印されている数字を見てみれば、バルソクの言う通りで消費期限が今日からあと一週間後となっている。腹を下したりと体調不良に陥ることはないよな、などと馬鹿なことが頭に浮かんでしまったものの、過去に飲んだ配給ビールよりは上々の麦酒なので一旦頭の片隅に置いておいた。

口に含んでヤバそうだと感じたなら吐き出そうと思ひ直し、缶を開けて乾杯しようとするバルソクの方を見ると彼女は浮かない顔をして手元を見つめていた。彼女が思い詰めている様子を初めて見たローガンは一先ず聞いてみることにした。

「さっき言ってた、お前の『思うこと』は何だ。俺のはお前もわかっているとは思うがお前の方の俺は知らん。乾杯する前に話してみろよ。そんな顔されたままじゃ酒がマズくなる」

「……ははっ、んだよそれ。むしろ話を聞いて欲しいのはマスターの方じゃないのか。エクスキューションナーみたいな奴を相手にしたこともあつて肉体的な疲労まで積み重なつてガタが来ているような気がするぞ」

「人間なめんなこの野郎。演習と称されて敵地に放り込まれたら、お前ら人形に負けないうぐらいのスタミナとかタフネスだつてつくつてんだ。こんなんでも俺は一応お前も所属しているシャドー隊の隊長を任されているんだ。だつたら上司として一回は話を聞くぐらいしてやらないと面子が保てない。ほら、早くしろよ」

バルソクの額に軽くデコピンをかましてそう言い放つと、ローガンは車内のフロント部分にビール缶を置いて前席のシートの向こう側にいる彼女を見る。こう押ししてもバルソクが口を噤つぶんでしまうのならローガンにはもう打つ手はない。これ以上無理矢理吐かせようものならパワハラになってしまうからだし、敵ではない彼女にそこまで強く強制させたくない。

ローガンとバルソクには人間と戦術人形という違いがあり、いざとなれば権利を行使することがこの先あるのかもしれないができればローガンはそんなことになって欲しくない。バルソクに限らず、戦術人形に対してローガンは『戦友』という対等な関係でありたいからだ。

加えてバルソクはシャドー隊に加わったことが確定した少女で、形式としては部下という扱いにはなるがそれだけでは温かみも何もない関係しかできない。

なのでローガンは静かに、バルソクが言葉を紡ぐのを待った。彼女が自身の中による葛藤を取東させようとしてしているようなら、こちらに理解してもらえるように話す順序を考えているようなら、幾らでも時間を使うつもりで。

「……わかつたよ、話す。こっちが折れないと、マスターはずつと嫌な形で覚えていそうだからな」

どれだけの時間が流れたのかはわからないが、やがて降参というように両手を挙げた

バルソクがそう言った。そして数メートル先のドラム缶の中で燃えている焚火を見つめながら話した。

「マスターはこれまでもこんな経験を何度もしてきたのか？ 指揮官からの指示に従って単純に敵を屠るだけじゃない仕事とかを遂行していたら仲間を喪った、こんなのを」

「ん〜……そうだな。グリフィンに移転する前の味方がお前らほど頑丈じゃない人間の奴らばかりだったから。お前から戦術人形はそう簡単には死なない。その分苦痛を長く感じることはなるだろうけど、それだって命があつてのことだ」

「そういう点でもマスターとワタシ達のようにI・O・Pで製造されている人形には違いがあつたんだと気付きました。肩を並べる仲間である以上はどちらにしても悲しいものではある。ハルカの死による重荷がワタシのメンタルにずしりと降りかかつてきた気分だ」

神妙な面持ちのバルソクから発せられる言葉を彼女が今回の任務で感じたこととしてローガンは飲み込む。グリフィンに所属する前まであつた仲間の喪失で目に焼き付けられた光景がフラッシュバックしたものの、すぐに振り払って耳を傾けた。

「ワタシ達人形はメンタルモデルが保存されているから完全に破壊されてしまったとしても、それは完全な『死』じゃない。またボディが製造されてはそこにバックアップのデータが入れられて戦場に赴くことになる。マスターはそれに関してはどう思う？」

「エクスキューションナーが言うように、虚しさだとか諸々は感じはすると思う。現場でしていたやり取りを覚えているのはこっちだけだからな」

「ワタシも過去にそんなことを経験したから言えるけどまさしくそうだよ。本当にぶつけようのないやるせなさが生まれてきて終いには溜息しか出てこなくなる。それがいつの間にか……人間の誰かを喪った時も同じようにしか思わないだろうとか、バカげた考えに変わっていたんだ。もし銃弾が飛び交う戦場で共に戦う味方の誰かが死んでしまっても、新たな経験にはならないなんて感じにさ」

「そんな認識をしたことを今回で自覚してしまったって?」

「うん。あいつが連れてた連中が死んでいった様ももちろん心に来るものはあつたよ。でもハルカのはそれを何倍にも濃縮した感じだった。直接言葉を交わして関わった影響に『崩壊液』による……なんて言うんだろうな、この……」

「無力感?」

「それもあるがメインはそうじゃなくて、どうしようもないことで手の打ちようもないようなことで誰かに失望したほどでなくとも気落ちする事を……」

「……落胆ってことか?」

「それだ。ワタシがもつとちゃんと戦えていれば、ハルカは『崩壊液』の毒牙にかけられることはなかった。それで自分自身がなんか……」

これ以上はマズいな、と感じたローガンは溜息を一つつくとバルソクの脳天に手刀を振り下ろした。掌の怪我を無視しつつもある程度まで力を込めたその一撃は防がれたりもすることなく直撃し、俯いていたバルソクの頭を大きく揺らした。今度はそのまま驚いた様子のバルソクの頭を掴み、わしゃわしゃと銀髪を掻きまわした。

バルソクが非難の声を漏らし始めたところで一旦やめてこちらを見させ、正面から言った。

「もうやめとけ。俺が言うのも何だが、そこまで突き詰めた上で考えてしまうと思考の袋小路に迷い込んでしまうぞ。ハルカが『被爆』してしまったのは、あいつやお前のせいじゃない。今回お前は目的を達しつつも初めてのE・L・I・Dと戦って生還できたわけだから、俺からしてもお前はよく頑張ったよ。つうか、お前がいたからこそエクスキューションナーを倒す活路を開けたわけでもある。諦念とかで差し引くものは微々たるものだ。まずはそれを誇りに思つて怪我を治せ。それで帰ったらハリーへの報告ついでに省みて自分を鍛えろ。その時は俺も付き合つてやる。お前だつて好きにギターを弾く時に失敗してもずぶずぶと沼に嵌らないだろ、それと同じだ。足を止めて振り返ることも必要だが、次の為のステップアップを第一にしろ。そうじゃなきゃやつてらんねえぞ」

ローガンはバルソクの頭を離すと腰掛けていたシートから立ち上がつて外に出る。

その拍子で転がっていた小石を蹴り、その行く先を目で追ってみると形状だけは砂丘になつていた地点で止まつて沈黙した。

その転がっていた小石は世界規模から見た人一人の人生と変わらず、他人からすればこのことを知っても些事として片付けられる。それにはローガンとバルソクも目にしたハルカという一人の人間の在り方も例外ではない。

事实上に齒噛みしながら振り返りバルソクの方を向いた。

「だけどもあ、これだけは話しておくか。バルソク、お前はハルカに渡したあのドックタグがどういった物だったのかは聞いたか？」

「……いや、ワタシは聞いてない」

「そうか。ハモンドから聞いた話だけだな、俺が以前に撃ち殺した奴は数年前にハルカと喧嘩別れした幼馴染だったそうだ。口喧嘩の末に一発もらったそいつは、フロリダを出て生き方を模索していたみたいだな」

ハモンドもハルカから詳しく聞き出すことはできなかつたそうだが概要でいえばそういうことらしい。袂を別つてしまつた経緯と理由はもう当人たちがこの世にいなくなつたことで、彼らを跨いだ自分達には知る由もない。

ローガンは重く息を吐くとバルソクに言った。

「この世界ではさ、なにかあれば全てが崩れてしまつて闇の中に消えてしまう。親しい

奴との仲、生き様という足跡。それを得てきた奴がいたという事実ということできさえ、一発の銃弾で抹消されてしまうんだ。俺達に出来ることは『そういう奴』がいたということを書いて残して、それを抱えたまままた戦いに臨んでは生き残る、それだけなんだろう」

「でもマスター、それはいつ終わらせれるんだよ……ワタシ達だつてずっと戦つていられるわけじゃない。それを続けられたとしてもいつかは寿命を迎えて死んでしまう。あんたとか指揮官に至つては生物としての、ワタシたち人形は摩耗する機械としてよ。ワタシ達に続いてきて戦つてくれる連中がいたとしても、そいつらが鉄血とかのクソツタレを潰せれる確証はどこにもない！だつたらワタシ達はいつまでこうして銃を握つていればいいんだ……!!」

「終わらせられないさ、この先もずっと。俺達がどう足掻いても、こんな負の連鎖に終止符を打たせてもらえない。せめて俺達が有利にいけるように追い風に風向きを変える、そんなことしかできない。それに、鉄血を片付けられたとしても国家の間には不和が残っているのだから、また第三次世界大戦が再開されたりもするかもしれない。鉄血の企みを阻止できたとしても、いずれは別の要因で四回目の世界大戦だつて起こり得る。あくまでこれは時間稼ぎ。意思がある奴らが前線に立つまでの一時凌ぎでしかないんだよ」

車輛から飛び出すようにバルソクが距離を詰めて来てはローガンの胸倉を掴む。その表情は悲観すべきものを、直視すべき現実を叩きつけられたそのもので悲し気に歪んでいる。歯を食いしばらせて両手で掴んでいるこちらを時折揺らし、言葉を紡ごうと口を開くがまた閉じる。

そのうちローガンは殴り掛かってくるのかと思ったが、バルソクは縋るように身を寄せてはこちらの胸に額を当ててきた。

「こんな喪失感を覚えながらも時間を稼ぐために戦い続ける役目を負わされている、それがワタシ達の役目だということなのかよ……教えてくれよマスター。ワタシだつて何かの為に戦う度に自分を磨り減らすことは避けられないのはわかっている。それでも、これまで戦えたのはワタシの音楽を抵抗してくる奴らに刻めたからだ。でもこんなことを知らされて、ワタシはどうすればいい……どうやってロクでもないこんな現実の中で戦う意味を見出せばいいんだよ……」

ああ、お前の言う通り、この世は本当にクソだよ。報われないのがわかっているながらも戦わされるこんな世界など、なくなってしまうばいいのにと思うぐらいに。

「……それは俺にもわからない。何処に命を懸けて戦える価値があるのか、俺も教えて欲しいぐらいだ。でもわかっているのは、俺達が糧にしているのは正義だとか意地とかそういうのじゃない。生きていたいっつう一つの思いからだ。でもその願いは何もし

ないで得られるわけがないんだから、結局は武器を取って戦うしかねえ。それに加えて俺達は戦わねえと自分じゃない誰かが死んでしまうからな」

ローガンはゆっくりとバルソクの手の上に自分のを重ねて正面から見ると。今もグリフィン北米支部にいるARR15や45の戦術人形だけじゃなく彼女らの指揮官であるハリーもはつきりと理解していないのかもしれない。

いや、この先を誰よりも見ているだろう後者に至ってはもしかするとそう言葉にして重く受け止めているかもしれないし、各支部の指揮官や本部で最高責任者の椅子に座っているヘリアンだとそれ以上だって考えられなくもない。この話は争いを続けている人間全員に関係があることだ。本当に和解して手を取り合わない限り、こんな苦しいだけの闘争は終わらない。それだつて今じゃ単なる夢物語で話したところで鼻で笑われるのが目に見えている。

もしかすると、こんなことは知らなくてもよかつたのかもしれない。自分達は兵士であるのだから、指示に従うままに戦って目的を完遂し帰還するだけで評価されるし労ってもらえる。辛いことを何も考えずにいられるのは一種の楽だ。

だがそれでは駄目だ。思考せずに戦い続けるようじゃ操り人形でしかなくなってしまふ。あくまでローガンは人間であり、バルソクだつて性格や嗜好などがプログラムされて自分で考えては動く自律人形であり、知性があるという点であれば大きな差異はな

い。

こんな黒くて暗い未来予測を知ったバルソクが絶望したのだとしてもそれはきつと失敗なんかにはならない。目線を同じ高さに合わせて肩を組んでは腹を割ってこの先の事までも話し合えるようになれるのだから、決して無駄ではない。

「ヒーローなんてこの世にいないもんだから他人頼みなんて一切できないし、放置だつて出来ない。結局は俺達が失つては傷つき、血反吐を吐きながらもやるしかないんだよバルソク。何もしないという選択肢を選ぶのは俺達には許されねえんだ」

「……マスターは、それでいいのか？義務感による戒めでしかなくて自分を自分で縛っているようなものだぞ。マスターは人間でグリフィンにいる限りは前線で戦い続ける必要なんてないんだ。指揮官に申請すれば別の部署に移転できるんだろうから無理しなくて済むだろう？」

「元々、今日まで俺は銃とナイフを手にとつて散々敵を殺して来たんだ。今更デスクにずっと座つて事務仕事に明け暮れるなり、機械のメンテナンスとか開発なんてできない性に合わないさ。この生き方だけは絶対に他の誰かに曲げさせはしない。大義とか使命なんて立派なものはないけど、あいつらとの記憶を無駄にしたくないから譲りたくない。だから俺はこれからも先を見据えては見落とさずもいられるように戦場（ごうば）にいるさ」

バルソクが力を抜いて自分を自由にしてくれたいところで、ローガンは放した片手を自分の前に持って来ては握り拳を作る。自分が出会っては逝ってしまった仲間たちの顔を思い浮かべては、最後に遺された言葉を目に見えない形でまた刻み込む。

「……そっか。ならワタシはマスターについていく。その行く先が人形であるワタシにも踏み込めるのかはわからないけど、足掻き抜いてロツクな価値ある何かを見つけてやるさ」

「おう、その意気で生き残ってくれよな。俺一人でこんな永遠と続く逆境を覆せるわけなんてないんだし、お前の力もアテにさせてもらおうからな」

小さく笑うとローガンは車輻内に置いていた自分のビール缶とバルソクの分も手に取って片方を手渡す。受け取った彼女とほぼ同時のタイミングでプルタブを起こして開けると、聞き慣れた気持ちの良い炭酸が弾ける音が聞こえてきた。

缶から視線をあげてバルソクを見ると、彼女も曇りが少し晴れたような笑顔でこっちを見返して物を持っている片手を掲げる。ローガンも同じようにすると言った。

「そんなじゃ、勇敢なるリーダーだったハルカと彼女の部下達全員に敬意を。それで A E K 9 9 9、バルソクの再出発を祝って」

『乾杯』

カツンツとビール缶をバルソクと打ち付けた後にローガンは一気に呷った。麦酒独

特の苦味が口内から喉へと通ると後に来るのは炭酸による快感。
今日一日の慰みには足りないが、今はそれだけで十分であった。

54. D44N事件・起 — G a i t h e a v y —

『人形諸君。ようこそ、自由の国であつたアメリカへ』

そうへりのローター音混じりに言われた台詞は今でも覚えている。

当時の私達は激戦区であつたロシアの西側、そこで指揮官を喪いながらも本部からの指示による作戦行動を一通り終えていた。機密情報の収集を目的とした任務だけでなく、少人数による敵陣地破壊任務などを学んだばかりの知識を活かして遂行。ギリギリの瀬戸際ではあつたが、それによつて鉄血が企んでいたとされているグリフィンに向けたウィルス計画を頓挫させることができた。

それでも戦局が一向に傾かないままロシアの一部が一旦ある程度まで落ち着いただけ。同等の被害を被つたとされる極東支部は未だに慌ただしく、中央本部の助けを得ながらなんとか拮抗している状態だという話を聞いていた。

そんな中、私達AR小隊の戦地は加勢も含めて西から東へとロシアを横断することになるのかと思われていたが、海と国を越えて北米支部へと移転。そこで新たな指揮官の指示に従つて作戦行動を遂行し、特命あるまで待機せよ。

それが私達AR小隊に下された本部からの指令であり、取り返しのつかない運命を歩まされるチケツトだった。



「ん……」

悲劇が何処で起きようとも変わらない朝日を憎々しく思うようになってから三年余り、海を飛び越えて一年と少し。記憶にある泰西側に残った仲間達の顔は色褪せてきてしまっていて、何にも感じなくなってきた。それが良いことなのか悪いことなのか、はつきりわからないまま私は今日も動く。

簡素なベッドから起き上がってから、自分に宛がわれた個室を改めて見渡す。前にいた支部の基地に置いていた私物などないに等しく、私の装備と着替えなどが収容されているケースや、人が行き交う市街地に潜入で持ち込む大型のガンケースぐらいしかない。

部屋の隅で壁に立て掛けられているそれらを一瞥すると、私は寝間着を脱ぎ捨て部屋に備え付けられた洗面台で顔を洗っては歯を磨き、髪を梳くなどして身形を整える。そしていつもの普段着に着替えたらもう一度だけここまでの身支度に忘れていないかを確認。

「よし……」

そう呟いて私は部屋の外に出ては鍵を閉め、デスクワークをしているいつもの執務室へと向かう。人形用の宿舎を出で中庭を突っ切って反対側の執務棟に入り、お馴染みになった廊下を歩いては階段を登った。そして突き当りを曲がって左手に見えてきた扉をノックをしないまま開ければ、日常の一部が私のアイカメラを介して写り込んできた。

「あつ、おはよーARR15。今日はわたしが一番乗りだったから朝食は用意するね〜」
『今日は』じゃなくて『今日も』じゃない……でもおはよう。なら私は飲み物の方を用意するから頼んだわよ」

「それじゃ、今日はクロワッサンにしよっか。明日になったらようやく食堂の設備が直ることだし、とりあえず今回に至っては最後の自給自足だね」

SOPIIは置いている棚から透明の袋を取り出すと四つの小皿の上に三個ずつパンを乗せた。鼻歌混じりに冷蔵庫からレタスを取り出して洗い、解凍して温めたソーセージまでもを添えて支度を整えているのを横目に、私は湯を沸かしながらインスタントコーヒーの元を取り出して昨夜に洗ったM4や皆のカップにスプーンを使って入れていった。

「もうそろそろ全員が揃う頃だしペルシカももう呼び出しておこうよ。今日のどこかで情報を渡されるんだし」

「今日になっても思うけど、やっぱりアバウトね……でもたしか昨日からずっと認識障害の新規プログラムツールを私達に向けて作っていたようだし、まだいいわ。全員が来てからでもいいし、あの人も叩き起こされるのはそう気が良くないでしょうし」

『ところがどっこい。これがもう準備完了なんだよねー』

ブウンという重い音と共に室内に設置しているホログラムスクリーンが触れてもいないのに起動される。直前に聞こえた声でそれをしたのは誰なのかはすぐにわかったものの、ここの基地にいない人物が遠隔操作で動かしていることについては驚かざるを得ない。

背後にある機器が起動したのでS O P I Iと振り返ると、そこには相変わらずの様相の女性が映っていた。得意げな笑みを浮かべているが両目の下には隈が変わらず出来ていて心なしか以前に増して頬がこけているようにも見える。不健康そうな（実際そうであるらしい）見た目の事もあつて顔色が良くないのはいつものことだが、そのようなよろしくない変化があるのは私としても少しばかり心配にもなってくるものだ。

「グットタイムング……なのかな？でもおはよう、ペルシカ」

『はい、おはよう。一睡もしていないわけだから目がシヨボシヨボするし瞼が重いけど、君達が元気そうで何よりだよ』

「時差でいうと、今ロシアは午後二時ぐらいね。本当に体調とか大丈夫なのですか？」
『やっぱり万全というわけではないけど、こういうことを繰り返せばやっぱり許容できるようになってくるものだよ。とはいっても最近はカフェイン過剰摂取にならないように気をつけてはいるけどね』

そう言いながら彼女は手元に置いていたらしいカップを持って口へと運んで啜った。中身はきつと私とS O P I Iが思っている物が入っているのだろうが、深く突っ込むまいと思ひ私は湧いたお湯を四つのマグカップに注いで準備を進めた。

立ち上る湯気に混じったコーヒの香りを嗅いで一間空けたタイムニングで執務室の扉が開く。その音に私とS O P I Iがそちらの方を見ると、私達A R小隊におけるブレ

インたるM4と、主な電子戦を担当しているRO635が二人で話を入れて来たのだっ
た。

「おはよう二人とも、朝から準備してくれてありがと。でもARR15はともかくSOP
IIが私達よりも最近早起きなのは意外ね」

「最近が目覚めが良くてすぐにベッドから起きれるんだよね。その時はまだROが寝
てるから気を使わないといけないけど、早朝からのランニングが楽しいんだ」

「……あなた、本当にSOP IIよね？ ジャンクを私にもしよっちゅう見せびらかして
くるM4 SOPMOD IIよね？ あなたが早朝から健康的に過ごそうとするイメー
ジが湧いてこないのだけれど」

「残念といって良いのかよくわからないけど本当よARR15。SOP IIは本当に陽が
昇り始める時間帯に起床しては着替えてランニングに行ってるわ」

知らず知らずの内にそんなことをしていたのかと、信じられない物を見るような目に
なっていたようだ。SOP IIは逆に腰に両手を当てたまま胸を張ってみせた。ふん
すーっと鼻息までは吐いて得意げなその態度に少しばかり頭に來るものがあるものの、
彼女なりのメンタルケアとして私は突っかかることはしなかった。むしろ私も射撃と
かレーンを走る訓練だけでなく、そういった戦闘に向けたものじゃない気分転換を主目
的に置いた運動もすべきかもしれない。

そこで、ペルシカがあることに気付いて言った。

『M16は？昨晚に飲んだくれてまだ寝ているのかな？』

「M16姉さんは五日前に指揮官から下された特務で居ません。二日前にも同じこと言いませんでしたっけ？」

『ええつと……ああ、そうだったごめんごめん、すっかり忘れてたよ。たしか予定では今日中に帰還することになってたね。それとおはよう、N4とRO。二人も元気そうでしょうだよ』

「ええ、おはようございますペルシカさん。今日までもなんとかやれています」

ペルシカはM4のその言葉に目を細め、大切な我が子を見る母親のような目になった。AR小隊の中でも一番気にかけている彼女がロシアでの一件で目に見えて気落ちしていたのだから、最近になって持ち直しているのだからほっとしているのかもしれない。

……私からすれば、本当にそうではないのだが。

「こうして朝から通信している、ということは何か緊急の用事が出来たのですか？」

『そうじゃないよ。一仕事終えてものだから一休みしようかと思っただけ、時間的にも大丈夫そうだったからこつちから繋げただけ。まあ、I・O・Pがちよつと気になる『噂』を耳にしたから早めに伝えたくて、というのもあるけど』

「『噂』、ですか?」

各々で皿とカップを手にしては席につき、私とSOPIIが用意した食事を口にしながら耳を傾けた。カタカタとキーボードを叩いた時の軽い音がホログラムで浮かび上がっているペルシカの方からしたと思えば、彼女が消えて一つのダイアログボックスが表示される。

『君たちは最近、ネットワークそのものが変わろうとしているのは知っているよね? 人類がこれまで残した用済みのデータや『負の遺産』を主に旧ネットワークとして隔離する『オールドネット』と、有益な情報とその新規開拓、並びに不要なそれを自動で削除されたりと便利機能が備わった『リニューアルネット』。アクセスできるようになるのは今日から一週間後だっけかな』

ペルシカが言った『負の遺産』というのは、これまでにおいて人類が残してしまった『失敗』を総じたもの。科学的にあり得ないと証明された錯覚や思い込みから生まれたデマに、人質を大量に巻き込んでしまったテロ活動阻止における特殊部隊の記録など、決して耳触りがよろしくない事実がそうだ。

まとめると、第三次世界大戦以降に世界そのものが分断されたことを踏ん切りにネットワークの管理者たちが『過去との決別』と称した分割における不要物ということだ。「存じてあげてます。世界における権力者やメディアがあげている声には賛否両論でど

ちらが多いとも言えない状況であると」

『都合のいいことを言っていたりするけど、実際のところは見たくない代物の『廃棄』に近いわけだからね。一応ネット環境さえ整っていさえいければ誰でもアクセスできるようにはするとかではあっても、それも一つの批判のタネにしかならない』

「失敗から学ぶことがある、というか学ぶ為に失敗するというのに、その結果をわざわざ遠くへと追いやることをしていますから当然と言えます。それでも強行して突き通そうとしている開発者たちの姿勢だって『負の遺産』に含まれそうだというのにそれだって目を背けていたりもしていますし……」

テレビ放送などで宣伝含めて話しているのを私も以前見たが、それまでにはなかった革新的な技術を導入するのは良しとしても否定的な意見には耳を貸していないその態度にはやや腹が立つものだった。私達が今の形に固執しているからとかではなく、傲慢にふんぞり返っているその様が気に入らない。プレゼンの内容自体は理解できても、製作に携わった人間の様を見てると不安だつて残る。そうネット配信のコメント欄におけるリアルな声が多くあつたことから、私と概ね同じ感想を抱いた人たちはそう少なくなかった。

『そのオールドネットにへと投棄しようとしている一般レベルのデータに混ざつて、脈絡も何もなくてちぐはぐ、意味不明なフリーメールの文章があつたりしている。金型に

よる製造業の会社の月間レポートなのかと思いきや、全然関係のない心理学のことが本文になっていたりね。ほら、こんな感じに』

「……これって一般的に公開されている翻訳サイトにて別言語に自動翻訳したからとかではありませんよね？主語と述語だったり、意味の繋がりとかもなにもないですし」

『国家保安局の知り合いの伝手で手に入れたデータだけど、これを寄越してくれた人の性格からしても私に黙って余計なことをするとは思えないよ。ほぼほぼ間違いない、ネットの海に彷徨っていたままの形とみてくれていい』

ペルシカはそう言うものの、見せられている文体は酷く目を通す気力がなくなつてくるものだった。意図してこう書いているのだとしたらともかく、そんな考えがないのであれば嘘言っていないのかの疑念が濃くなるだけだろう。

額に手を当てた私に苦笑したらしいペルシカが表示するデータを切り替えて見苦しいうデータを消してくれた。次に現れるのは同じようなものだと、決めつけに近い勘で忌避したかったが嫌々ながら目を向けてみたが、彼女本人が苦々しげにも笑みを浮かべている姿であった。

『まあこれはあくまでサンプル、一つの例でしかない。中身は異なつていてもイカれている系列としては他にもいくらでもあるんだ。私としてもこんなのを事情も知らない君たちに幾ら見せても無意味だから、悪戯に混乱を招くつもりもないよ』

「それでペルシカさん、『噂』とはなんなのですか？ オールドネットと今のデータを説明したのですから何かしらかの形で関係しているのだと思うのですけれど……」

『ん？ ないよう？』

ROが拳手をしてからそう言ったのに対し、ペルシカはあっけんからんとそう返して来た。その台詞にM4は食べ物で喉を詰まらせたようで咽せ、SOPIIは砂糖やミルクをドバドバ入れたコーヒートを嘔き出し、質問をしたROは口をあんぐりと開けて思考を停止させているかのようだった。私に至っては頭痛がしてきてまた額に手を当てているのだから、きつと顔を顰めているのだろう。

ペルシカは私達の様子に今度は純粹に笑ってみせ、笑い声を部屋に響かせた。

『はあく笑った笑った……でもごめん、少し嘘をついてしまったから訂正するよ。全てがそういうわけじゃなく、オールドネットと『投棄』される『負の遺産』、この二つには問題はない。一個人としては無視できないけど、許容するかどうかは別問題だしね』

「……わかりやすくお願いしていい？ 今の流れでわたしのメンタルの許容量が激減して難しい話が入ってこないだろうかさ」

『はいはい、でも難しく伝えることはないよ。君達も順を追って理解してくればそれでいいから留意しておいてね』

ペルシカはキーボードを叩いて端末を操作、何も書かれていないボックスを表示させ

るところにオールドネットと意味不明な『負の遺産』について書き込んだ。後者については内容とかではなく、『そういうもの』であるということの名だけにしオールドネットと線で結びつけて関連性を示した。

『ここ』まで話した通り、オールドネットとは今日も我々が利用しているネットワークそのものであり、あと一週間もすれば旧世代の遺物となる。で、リニュードネットという新たなネットワークを立ち上げるのにあたって、時代の一つの区切りとして『負の遺産』をオールドネットに『投棄』しようとしている。ここまでは理解できているかな?』

私も含めて各々が頷くので、ペルシカは再度操作して『負の遺産』を増産して密集させる。見苦しくならない程度に増やしては真剣さが増した声で言った。

『ところがこの手のデータはネットが立ち上がった際に出来た数十年、その時間を鹹味して考えてみても少ない。それもそうだ、ここまで件名と本文が違っているどころじゃなくかけ離れているやり取りのデータなんて数多いとは考えにくい。それにそんな少ないデータのやり取りが多いのが一年半以上前から始まって今日まで。動作や操作ミスによつてあつたらしい疎

まば

らであるのに反し、一日に最低で一回、場合によつては片手で数えれないぐらいにメッセージのやり取りを行っている。さすがにそうなれば私どころかデータの管理者

の目にも止まるつてものだよ』

「今更ですけど、システムのバグやデータ抽出で不手際を起こしてしまつたとかはないのですか？それか見つかることを前提にデータの作成者がウィルスを仕込んでこちらを攪乱しようとする論んでいることだつてあり得るのでは？」

『先に話したけど、これは国家保安局に属している私の知り合いから回してもらつたもの。彼女が言うには、こちらのシステムが干渉された形跡も何もないそう。どこまで保安局の機器性能が良いのかわからないけど、今はそれを信じるしかない。』魔術師

ウィザード

『級のハッカーじゃなければ『こちら側』の感知されないコンピュータウイルスを生み出すのは無理だからそれは考えにくいね。でもだから、その可能性はあり得るだけで否定はしないでおこうか。ネットサーフィンをしている優秀な野良のハッカーがいないことはないだろうし』

今では情報戦なども仕掛けるにあたって、各国の首脳は特殊部隊の補助の役目を担わせる力が有るハッカーを民間からも取り入れたようだった。アメリカ政府はどこまでそうしたのかはわからないが、ロシア政府は手当たり次第に報酬をちらつかせて引きずり込んだ。他には第三次世界大戦で遺物となつたEU加盟国のイギリスやフランス、アジアでは中国なども規模は違えども行つたことは確認されており、それぞれが睨み合

いを続けている状況である。

ロシアが先駆けたその行動を真似て早数年、スカウトされなかったハッカーが技能を成長させて最高位の『魔術師』級になっていたり、また新たな人間が他人の端末に侵入しては情報を盗み見ることに楽しさを見出してしまった、なんてことだつて容易に考えられる。あくまで根絶したわけじゃなく取り入れただけなのだから。

とりあえず私はこの話の本題を聞くべくペルシカに言った。

「可能性云々は置いておいて、現在のところ明らかになっていることを教えてもらえますか？このままじゃ話が進みませんから考察などは後回しにすべきです」

『うん、むしろそうしてくれた方が今の私としてはありがたいから現時点でわかっていることを説明させてもらおうよ。それでえーと……さつき君達に見てもらった文がその『負の遺産』のうちの『この先には必要ない』一部として片付けられるわけだ。んで、私に興味本位でプログラムの作成をやっている片手間でちよつと解読を他のデータと照らし合わせながらやってみたら、ある規則性がわかったんだ。それで読み進めて言った結果、あることが今君達がいる国のアメリカで行われようとしていることがわかったんだ』

表示されたテキストファイルの文面がごちゃごちゃして意味の分からない状態から、ペルシカが不要と判別されたワードが消されていってそれぞれが間隔が空いているだ

けの読みやすい状態になった。それに目を通した私達のうち、M4が最初に声を出した。

「この『作戦』が開始されるのって……二日後の夜じゃありませんか？」

『その通り。これはペルシカに渡してグリフィンに動いてもらいたいつもりではある。実体はまだわかっていないけど、金銭が集う銀行がターゲットとされているのなら大体の目的は絞れる。……さてようやく、君達に本題の『噂』を話せる。今回私達で取り掛かることになりそうな仕事の根幹であるそれについてね』

グリフィンの保護区の一画にある銀行が狙い目だ、と記されているテキストファイルの陰からペルシカが顔を覗かせて来てそう言った。彼女は笑顔を浮かべながらも挑戦的に口角を上げ、その『作戦』が二日後に行われる銀行襲撃の説明書きを加えると新たに別のウィンドウで一人の男性の顔写真を表示させた。

私が茶髪の頭にカーキ色の帽子を被ってギョロついた目でこちらを見返してくるその男の人相を頭に叩き込んでいると、ROはペルシカに聞いた。

「この男は？」

『今回の銀行襲撃を目論んでいるのは君達も度々目に行っているだろうロボット人権保護団体の一団、その中の一派なんだろう。その男は地元警察で指名手配されている過激派の中心人物なんだよ。見たことない？』

「……いえ、私達戦術人形はデマの制止に赴くことは許されていませんから見たことありませんでした。それでこの男がどうしたのです?」

『声を上げて訴えるだけならともかく、過激なデマを起こすのならそれだけじゃ足りない。自分達の声が通らないことを理解していく度に、モラルによるリミッターが緩んでいつてしまう。そんな人間が取る手段としては気に入らない者に暴力を振るつての行進だ。そうなる と 無論、形態を問わずとも武器が必要になつてくる』

生きていくのには何にしても金が絡んでくるものの、自衛とかではなくそんなつまらないことの為に使われることに溜息をつきたくなつてくる。

過激派の彼らがとつている手段は褒められたものでは到底ならない。元々ロボット人権保護団体は保護区の街中を私達が歩くものなら、行く手を遮つて話術なりでグリフィンから引き剥がそうとしてきて厄介にはならずとも鬱陶しく感じてしまう。そんな連中なので元から良いイメージなどはないし、プラカードだけでなくバットや鉄パイプを持つている姿がライブ中継のテレビで見た時にはふつふつと煮えてくる黒い感情がある。

それもあつて、ペルシカが次に言う事の察しがついてしまった。

「つまり、この男は『資金調達』と称して保護区の銀行を襲撃しようと画策している、と言いたいことですね?」

『そう、AR15の言う通り』

「そうする動機はすぐに思い当りましたが……指名手配されている保護団体の過激派の一人だから、って理由だけでこいつに絞り込めたわけじゃありませんよね。あなたのことでしょうか他に情報源

ソース

はある筈」

そう私が言ったらペルシカは困った顔をしながら頬を掻いた。

『うーん、そう言われるとちよつと困るな……さっきのメッセージが頻繁にやり取りがされ始めた時期になって、こいつが君達のいる保護区で姿が確認されるようになって、で納得してもらえるかな？ 目撃情報はネットに転がっていた情報からによるものだけ』

「……あまりらしくないですね。こういつたことでもあなたは一番考えられる、確率が高いとして言い淀んだりはしないというのに」

『知つての通り、私はあくまで研究員であつて対人を専門とした情報分析官じゃない。だからシステムハックする鉄血の拠点の位置を割り出してはそこへのガイドとかはできて、機械じゃない相手を追い詰める仕事は専門外だよ』

「でしたらどうやってあの訳のわからないメールのメッセージを解読できたのですか。

「ああ見えて赤ちゃんでもわかる幼稚な暗号が使われていたと言いませんよね？」

「ちよつとARR15……!」

横にいるM4がやめるように呼び掛けてくるがここで追及の手を緩めるつもりはない。通信相手を青白く浮かび上がらせるホログラムであるせいかペルシカの顔色は普段の五割増しぐらいに悪く見えるし、徹夜どころか朝になっても休まずに作業していたらしいので疲労も溜まっているだろう。

そんな相手に気遣いが出来ない程、私だつて鬼じゃない。が、この時は何故だか自分が納得するまで問い詰めるつもりになっていた。

『君達を泥沼に突き落とすようなことは言っていないのだけれど、私が信用できないのかなARR15』

「勘違いしないでください。私はただ出所がはつきりしない情報で踊らされたくないだけです」

『デカいことをしでかすのに足る動機が推測できる国指定の指名手配犯がうろついている、これだけでも一応捕縛する理由になるとは思うよ。そもそも地元警察から暴徒そのものである過激派の鎮圧としてグリフィン北米支部に協力要請だつて出しているのだから、正当なこととして見做してもらえから大丈夫。そうだよね?』

たしかに一種の社会問題としてメディアに取り上げられているので組織だけでなく

世間に咎められることはない。過激派の攻撃に巻き込まれてその場に居合わせてしまった一般人が怪我を負うことだって少なくない。それでも何食わぬ顔で続けている相手に対しての治安活動として処理され、私が求めている榮譽だって得られる。

よく考えなくてもわかることだということなのに。ペルシカの言ってることが腑に落ちなかった。

「そうですけど、私は……！」

「……そこまでにしようよA R 15。放っておくことはできない危険な奴を縛ればいい、今はそれだけでいいじゃん。難しいことはわたしにはわからないけど、後から口を割らせば何を企んでいたのかわかることなんだし」

「情報が何も無い状況でなければ確実性が極端に低いわけでもない。不安であれば私達が開き込んで調査すればいいのだから、そこまで突つかからなくてもいいわよ」

S O P I I が言った事にR O が同調してそう言うってくる。わからないことがあれば調べるなりして自分の足で追いかけることも大切だと、いう言い分は最もで言い返す余地はない。ペルシカがわからないことがあれば私達が調べるなりして報告、情報を共有して解決に望むなど初めてではないのだし今回もそうすればいいだけだ。

「……そうですね。裏付けるに足る情報が今ないのなら探せばいいだけよね……失礼しました」

『そう気を悪くしてないからいいよ。むしろ一人の人間みたいに疑問を浮かび上げさせては投げかけてくれるのが相変わらずで安心できたからさ』

ひらひらと手を振ったペルシカは椅子の背もたれに体重を預けて長く息を吐いた。整理の為に表示していたダイアログボックスを閉じさせると、欠伸をして肩の骨を鳴らし、見せた。

「概ねの事情は把握できたのですし、もうお休みなつたらどうですか？得られたものがあつてそちらがよろしければ回線を繋いで報告しますので」

『そうさせてもらうよ……カフェインの効果が切れて眠くなってきたし暫しお別れだ。それじゃ……火傷をしないように気を付けてね』

そう言ったペルシカとの接続が断たれて彼女は消えた。束の間の静寂が部屋を満たし、誰一人として大きな物音を立てることないまま朝食を摂った。

思えば、こういう時こそM16という人形が培った特性を活かして欲しいタイミングだったのだが、まだ長期の任務から帰ってきていない。誰も悪くないし彼女にも非があるわけでもないというのに、無性に誰かに当たりたくなるぐらいに自身への不満が生まれ出てきていた。

やや乱暴ながらも宥めてくれるM16が帰って来るのを心待ちにするなど、初めての事だった。

55. D44N事件・承 | What is right

t —

私達が居住地としている北米支部を中心に広がっている保護区は他と比較してみると本部の次に広いらしい。ロシアの中央に位置する向こうを知らないので私とすれば如何せんわからないが、度々訪れる何人かの客人がそう言っているのでそうなのかもしれない。

ペルシカから得た情報を持って指揮官に進言したところ、こちらに回せる人員はいないので現時点では私達だけで情報収集に当たることになった。

それについての文句は（全くといわけではないが）ない。あと数日で起ころうとしている世界の大きな変化に絡められた確証のない穏やかではない話。逆の立場になってみれば私だつて訝しんで疑うし、情報提供者から直接聞いても疑念が浮かんだのだから無理もない。

そして現在、私達はM16が帰還するよりも先に行動を開始し、ターゲットとされる銀行周辺に私も散らばつて状況を窺いながら一人一人の人相を確認していた。

『定時報告。AR小隊の各員は報告を』

「こちらA R I 5、今のところ銀行近辺で特筆すべきことはなし」

『こつちも特にこれといつてないよ。あるとすれば……おいしそーでジャンキーな売店が並び始める……あとは季節柄で余計にじめじめしてるぐらい……』

『そんなことに気を取られないでよ……警察から得た写真を元に監視カメラで片っ端からスキャンしているけど引つかからないわ』

とはいえ、聞き込みなどは私達がすべきではない。警察紛いのそのようなことを人形として容姿が良いようにされてしまっている私達がすれば目立ってしまい、面倒な連中に絡まれることだってあり得る。目標を追いかけての戦闘はこちらの本分なのでいいが、それまでのプロセスにおいて考えも無しにそうしてしまふと悪目立ちしてしまつてよろしくない。

ただし、私達は戦闘に特化した自律人形であり、自分達の足で歩くだけでなく街の至る所に設置されている監視カメラにもアクセスできる。要は目立たずに情報を得る方法は幾らでもあるのだ。

従つて、私とS O P I Iは普段と違った私服を着た状態で人混みに紛れての役割を担い、R OはカメラへのハッキングでM 4もそちらに加わりつつも全体の指揮を執っている。その態勢になつて昼頃から始めて五時間ほど。陽が半分以上沈んで消える時間帯になつていた。

『終業時間になったから職員が出てきたわ……AR15、そっちから見てもその中にターゲットと思わしき人はいる?』

「ネガティブ。見えている限りでは、だけど」

『身なりに違いはあつても全員が顔を隠していないし……駄目ね。M4、こっちの網にはヒットなし。そっちは?』

『似たようなものね。帰宅ラッシュが始まったせいで人通りが増えて全員の顔をスキヤンしきれない』

『デモを起こした時を除いて目撃情報が多いここから始めたけど、今日は外れだったかな』

念入りに計画しているのであればその犯行現場を視察するだろうと思い、銀行を中心とした半径二百メートルを用途に私とSOP11は巡回していた。M4とROのカメラによる監視は表道を見れても裏の方までは見渡せない。そんな狭い小道や環境による事情で設置できない箇所を巡回の際に必ず確認し不審者がいないか見る。それも私とSOP11に与えられた役目だ。

『仕方ない。AR15とSOP11は巡回範囲を広げてみて。そろそろ警察官の巡回も本格化してひよつとすると彼らが見つけるかもしれない。協力体制を敷いている以上はこちらにも通達が来るけど、目標が武装していることだって十分に考えられる。民間

人から負傷者が出ないようにするためにお願い」

「でもここ周辺を手薄にするわけにもいかないわよ。交代する形で順番に四百メートル範囲外を巡回した方がいいんじゃないかしら」

『そうね……わかった。異常があればすぐに連絡を。すぐに駆けつけるわ』

「了解。SOPII、まずは先に私から行くわ。あんたは引き続き同じルートを回って頂戴」

『はいはい……それにしてもお腹減ったあ……露店で何かを買って食べながら続けてい……い……?』

『気持ちにはわかるけど我慢してSOPII。私とM4は身体を動かすわけじゃないけどお腹だって空くわけだし、バッテリーとは別のエネルギーを消耗しているのは皆も同じなんだから』

『ふえ……』

私はそんな会話を耳にしながらルートを変更、表通りから外れて脇道へと歩を進めた。背負っているギターケースに見せかけているガンケースの肩紐がズレて行きそうだったのを抑えて直し、外灯がなく薄暗い道を通っていき逆側に出た。

頭に叩き込んでいる地図を呼び起こして自分が何処にいるのかを推定し、銀行からどれほどの距離があるかをざっくりと計算する。

無理のない程度に見回る範囲を広げるとしたらどれぐらいがいいのかを考えて、すれ違う人々の視線を無視する。時折見ずともわかるほどにこちらに向けた声もあり、何時から生まれ出た一部の人間に対する不快感を募らせながら早歩きを続け、肩に置かれた手さえも無理矢理払い除けた。

「しっ、はっ……」

人目が無ければ急所突きをしてその場で悶絶させられるものだが、衝動のままにそうしてしまえば注目を集めてしまつてよろしくない。気持ちを落ち着けて周囲を注意深く見ていかなければならないというのに、思考のノイズを一点集中しながらに投じてくる顔もわからない背後の男が鬱陶しくて仕方なかった。

理性と衝動の間でギリギリの均衡を保ちながら表通りで人混みを掻き分けて何度目かわからない十字路に行き着くと、ここを限界点として向かう方向を変えた。

(それにしても……)

保護区の間がこんなにもいたんだな、と私は改めて周囲を見回した。

やはり不自由なことはあつてもこうして最低限の衣食住と職を確保できているだけいい。そんな声を聞いたのはいつだったのかは覚えていない。その反対で欲深くあれこれと上から目線で要求してくる輩もいるわけではあるのだが。

人々の言う事に耳を傾けて彼らの営みを目を向ける、なんて政治家みたいな仕事は本

来なら民間軍事会社^Pがやることではなかった筈なのに。食糧の供給からの真似事までやつての手探りで救われている人がいるということは、昼間の通りを元氣よく駆けていた子供たちがいたのだから間違いないのだろうと思う。

それに、後先考えないでの贅沢さえしなればグリフィンの管理下で命を繋いでられる、そんな未来と外の世界で彷徨つて瘦せ細つた野良犬と同様に生き残る道を模索するその二つが選択肢に上がればどちらを選ぶかなど明らかだ。

しかし外を知らないままに辛い目に遭わず、此処に行き着いた人はどれだけいるのだろうか。

(やめよう……こんなことを考えるのは……)

別に私個人としては誰かの感謝を求めて戦っているわけではない。ここまで必死に足掻いてきたのは仲間と自身の榮譽の為であつて彼らからの温かい声を目的にしているのではないのだから無駄でしかない。

私はST AR15という名の戦術人形で戦うことを使命としている存在。求めているのは犠牲がない結果と名誉や栄光だけであり、それ以上の見返りを求めるというのは欲張りが過ぎるというものじゃないだろうか。

それにきつと、戦術人形の自分には不要なのだろうか。

(あれ……?)

沼から足を引き抜いた今になって気付いた時には、いつの間にか私にとつてのストレスの源となつていた男を引き剥がしていたらしい。任されていた仕事と並行していた思考で意識外に飛ばしていたことで気にしなくなり、ナンパ野郎も次第に諦めたのかもしれない。

しかし私にとつてはそんなのはもうどうでもよく、本当に気に留めるべきことが目に入ったのであるべく自然な形で近くの建物に背を預ける。そして手元にタッチパネル式の通信端末を持つて周囲から浮かないようにして様子を窺った。

一見すると単なる往來の場における制服を着た警官二人が深く帽子を被った一人の男性への職務質問のようではあるが穏やかではない。

私は静観しながら報告した。

「M4、N11—2で職務質問がされている。今のところ様子を見ているけどなんか危なさそう」

『顔は見える？それとその人はどんな感じ？』

「見えない。でもなんか焦っているようで警官二人を押し退けてまでこの場を去ろうとしている」

『なら気付かれないように注意しながら引き続き監視して。緊急事態になれば報告、先行して対応するように』

「了解」

私かもう一度視線だけで彼らを見てみれば、苛立つて怒鳴っている帽子の男を相手に警官二人は宥めながら一つ一つの挙動を観察していた。

遠巻きに見ている私からしても暴言も混じっている台詞は彼らでも聞き慣れてはいらるだろうが、周囲の人々に取ってからすればその汚い言葉は聞き流すのに無理がある。男一人は勝手にエスカレーターすれば手を出しそうで、公務執行妨害として連行されるのはそう遠い話ではない。

「ん……？」

これといったはつきりとした理由はないが、私の視界に目についた人がいた。数は三人で、私の前を通ると横断歩道を経由して向い側へと歩いていった。

(なに、あの人たち?)

思わず注視してしまっているのも、もし私が考えている危険分子が彼らではなく私自身を狙っての事だったら失敗以外の何物でもない。

後々振り返ってみればあの時の行為も反省点の一つとして片付けられるものの場合によつては致命的な失敗になり得た、と私は思う。ただそれは事が済んでから言えたことであり、現在の出来事でなく過去のものとなったから冷静に立ち戻れるというだけだ。

私は人ばかりで三人の手荷物がはつきりと確認できないことに苛立って移動しそうになるのを堪えては観察を続ける。胸騒ぎを明確に覚えた時には問答を繰り返している警官たちの背後に近づいたと思つた瞬間、銃声が響いた。

一瞬だけ視認できたビジネスバックから取り出した拳銃で警官二人に向かって三人の男達は発砲。その音で人の波はどよめき、悲鳴が上がった。

「っ!!」

私はその場に屈んで人混みに隠れると、背負っていたバッグから分身を取り出してはストックを伸ばしてはチャンバーを引いてから弾倉を装填し戦闘体勢を整える。そして立ち上がって状況を見てみれば、倒れた警官に止めと言わんばかりにまた数発をお見舞いした三人はその場から離れ始めた。

「報告よM4!三人の通行人が警察官二人を射殺して逃亡したわ!」

『銃声がこつちまで聞こえてきたけどそういうことね!職務質問にあつていた人はどうしてる?!』

「わからない!だけどなんか状況が変よ!私は銃所持者を無力化のに先行する!」

『了解。私はS O P I Iと合流して今すぐA R I 5の方へと向かう!R Oは街中のカメラにアクセスして足取りを追つて!』

M4からの指示の後に聞こえてくる二人の応答を聞き流しながら私は押し寄せてく

る人だかりを掻き分けながら追跡を行った。市民が歩道や車道も関係なく走るので車の流れも滞り、クラクションも混じって響き渡っている。私からでははつきりと見えな
いものの、また銃声だつて聞こえてきた。

『AR15、銃を持った連中が帽子の男を追いかけてその先の裏路地に入ったわ!』
『心得てはいるだろうけど生け捕りが前提で殺しては駄目だよ!』

「わかつてる!」

ROの言う裏路地に私も入つて標的を追つた。表通りほど人が多くいるわけではないのだし、私の前を行つている先客のおかげか壁に背をつけて腰を抜かしているので私が行くべき道は形成されていた。

同じく銃を、それも拳銃のような小型ではなくライフルを持っている私に市民がギョツと目を剥いている。私にはそんな彼らに声の一つかけるだけの余裕はないのだから一瞥だけくれてやつて先を急いだ。

両脚に搭載されている機器の出力を最大に引き出して前進し、戦術人形としてのポテンシャルを最大限に活かせば追い付くのはそう時間がかからない。何度か進行方向に無関係だと一目でわかる人が入ってきてしまったが、跳躍してしまえばタイムロスはないし、環境的に難しそうであれば単純に迂回した。

そして見つけた。見覚えのある背格好の三人がそれぞれ片手に銃を持って走つてい

る、その様子を視覚で捉えた。

射線はギリギリ確保できるとして、私はその場で片膝をついて照準を一人の片脚に定める。呼吸を止めてブレが収まったタイミングで引き金を引いた。

「ダンッ！」と私が放った弾丸は概ね狙い通りに一人の片脚を抉って進行を阻止。銃声と共に傷ついた仲間が出たことで他二人がその場に止まった。

「！！」

一人が倒れた者の傍に残り、もう一人がこちらに背を向けて先へと走っていく。その者の妨害をしようとして第二射に移ろうとする前に眼前から銃声が響き、地面が銃弾によって爆ぜた。

私は頭でそれを理解するよりも先にすかさず反撃をまともに受けぬように、横へと転がって周囲の立地条件から生じている相手方の死角へと潜りこんで銃撃をやり過ぐす。そして前屈みになったまま踏み出して物陰へと滑り込ませて状況を窺うべく顔を覗かせる。相手は弾倉を取り換えるのにもたついていた。銃を護身用として所持しているにしても、弾倉を排出しては替えのそれを入れてまた射撃体勢に移行するまでのことぐらひは知っていて当然といえる。

そうでなければ諸刃の剣どころの話じゃない。使い方どころか用途も何も知らない

で凶器を振り回す子供と五十歩百歩でしかなく、その手のベテランからすれば赤子の手をひねるようなものだ。

銃を使つての戦いに慣れていない——!!

私はすぐにそこから飛び出して駆けて一気に距離を詰め、スライドが固定されているその拳銃を持つている手ごと蹴り上げた。

「操り人形が邪魔するなあ!!」

「不要な混乱を生み出しているあんたみたいな奴に言われたくないわよ!!」

単純に飛びかかって組みついて来るのかと直感で思えばポケットナイフを抜いて突き出してきた。だが私からすれば遅い。一般人でも生命本能で避けきれずとも致命傷は回避できる程度でしかないのだから、戦うことを主目的に置いている人形ならば対処は容易い。

柄を握っているその手を私は分身を使つて弾くことで迫つて来ていた銀色の切っ先を逸らす。そうすれば目の前には刺突を繰り出した勢いのままこちらと距離が縮まるのは男の体躯で、相手はこうなることを考えていなかったのは浮かべている驚愕の表情でわかった。情報を吐かせるべく生け捕りにする、なんて理由はあつてもそうするまで命を奪う以外にやっつてはいけなことを隊長^{M4}から言われていない。銃撃で以て脚を撃つて転倒させることだつてそうだし、私がこれからしようとしていることだつてそう

だ。

「ふっ!!」

ストックを男の首筋に当てると一息で地面へと押し倒して馬乗りになると、その顔面に何発か拳を打ち込んだ。三発ほどで歯が何本か折れて宙を舞うものの未だに意識を刈り取るまでに至っていないので、合間に何かを言われようととも耳を貸さずに続ける。今は死なせなければいいだけなのだから。

そして右手が血だらけになりながらも殴った回数が二桁になったぐらいでようやく沈ませることができて男は細く小さく呼吸をするのみとなって沈黙した。

「……なにやってるのよ私は」

所要時間を考えればこうせずに後ろ手で縛ればいいだけ。意識はあっても自由を封じれば時間短縮ですぐにここから逃げた男と容疑者だつて追えるというのに。

ただ内に湧き出てきたどす黒い感情に従うがままに、これからの行いを正当化するだけの屁理屈をこねて自分を誤魔化した。終わった後に後悔したんじやもう遅いということだつて、S O P I I に小言を言えるぐらいわかつているのに。これでは彼女に大きく言えたものではない。それに、この自己嫌悪は私がする中で最悪に次と言つていいぐらいのやつだ。

人に説教するぐらいの大口を叩くのであれば反抗されることのないように自分には

そういった経験がないことだって大事じゃないだろうかと、そう思って何度も自問自答してきた。だということに、わざわざ自分から火に油を注ぐ様なことをしてしようもないことをした。自分のことがまた嫌いになるのには十分すぎる。

『二人とも、その位置からならあと五で目標を目視で確認できる。……今!』

『……見えた!今なら脚を撃てるよ!!』

『ダメよ!射線の延長線上に無関係の人が数人いて貫通して誤射するわ!』

『くっそお!!』

その声からS O P I Iが歯噛みしているのが容易に想像できる。M4と彼女の詳しい位置情報を得る前に、私は動けなくなった二人に電磁式の手枷を手足につけて警察に通報する。

まだ何も終わっていない。始まったばかりだ。



結果だけ言ってしまうえば逃亡していた男諸共、銃を持って追跡していた残り一人も捕えてお縄に出来た。ROからの情報を頼りに私も改めて追って近辺に辿り着いたら、散開して一ブロック内に閉じ込めるように包囲して追いつめるようにした。住民に危害が及ばぬように発砲は極力控える、という指示があったのでやり辛かったが、先にSOPIIが逃げていた方を捕まえたので後は楽になった。M4と協力して一本道で挟み撃ちにし、その場で投降させた、という結果でだ。

ただそこまで相手方が撃つたことによる流れ弾を受けた、という住民が出てしまった。収拾の代行として傷の具合を診た警官の話では掠り傷だという話だが、本人は大事にしたのか喚いているとかなんとか。いずれにしても私達が直に相手をせずに済むことではある。

「それで、収獲はあったのか」

「有益な情報が幾つか。SOPIIが解体コレクションを見せながら尋問をしたこともあって、そこまで手間はかかりませんでした」

「あいつら、爪を剥がすよりも前に音を上げてしまったからつまらなかつたよ……」

「……合理的な経緯はあるけど、お前にも一応ロボット三原則って組み込まれているんだよな？」

私達とは別件で基地から離れていたM16が帰還したので、情報共有としての昔に定時が過ぎた、というよりも日付が変わる数分前の執務室に集まっていた。私は視線を陽が完全に沈んで基地内の明かりが映えている風景から戻し、腕を組みながら顎に手をのけているAR小隊の姉貴分を見る。

彼女は部屋中央のホログラムデバイスに送り込んで表示されている情報に一通り目を通したらしく、入力済ませたM4を見た。

「逃げてた連中は全員は同じグループに属していたのか？」

「私も最初はそう思ったのですが少々違うようです。AR15、説明して」

M4が振り返って私に振ったので、促されたままに言った。

「奴らはたしかにロボット人権保護団体で過激派という立ち位置の人たちだった。けど過激派の中で色々な思惑が入り乱れていて複雑な状況になっているというのが所見だよ」

「……どういうことだ？」

私はホログラムから職務質問されていた男——ペルシカから情報であった指名手配犯だった——の顔写真を引っ張ってM16の正面に持つてくる。そして警察の

データベースの方でも記録として保存されていて保護区の街角などで貼りだされているそれも出して同じようにした。

「この男は過激派の一員としてマークしている奴ではあるんだけど、あくまでこいつは^{デブ}困でしかなかった。悪事を働く時の表舞台に主役として立たせて、裏方でこいつがやったように見せかける為に」

「じゃあなんだ、こいつは自分の肩に他人によつて背負わされているものの重さに耐えきれなくなっていた、なんて言えはしないのか」

「警察の取り調べが終わっていないし全体像がはつきりしていないからそう断言はできないけど、私達はそう見てる。そして今はまだ奴らの皮を一枚剥がしただけで銀行襲撃を阻止できた、なんて言えはしない。そうよね、M4」

「ええ。まだ彼を盾にして悪事を働いている奴を引きずり出せていないから、結局はやるべきことは変わらない。作戦決行は明後日。とにかく皆も急ぎで得られた情報を目に通して」

M4がそう言いながら端末を操作してホログラムという形のダイアログボックスを映し出した。青白く浮かび上がっているそれが拡大されて中にある文字が見るのに億劫にならないギリギリならぬぐらいのサイズになって内容を記している。

私も端から黙読していくと、先に終えたらしいROが言った。

「指揮官への報告は？」

「送信するよりも先に『この件はA R小隊に一任する』とだけ言われて受け取らなかつた。この任務の事に顔を突っ込まないみたい」

「おいおい、そいつはあまりどころか断然よろしくないんじゃないのか。緊急事態にならない限りは私達の指揮権はあの指揮官にあるんだろ」

M16の言う通り、A R小隊の直接指揮はこの北米支部の指揮官に委任されている。緊急事態、つまり作戦中に連絡ができなくなった状況下に置かれた場合やペルシカを通じて本部からの特務が下されない限りは隊長であるM4に指揮権は戻ってこないことになっていた。M4の指揮システムを始めとしたモジュールによる負荷を可能な限り緩和するのが建前ではあるが、きつと本音としては手綱を握っておいて妙な動きをされたくない、そんなところだろう。

そのような意識を持っているのが垣間見えている所為で私達とここの指揮官の仲は極めて事務的なやりとりしかしておらず、仕事を除いた意志疎通も最低限しかしていない。

責任、という二文字が直接私達に降りかかることになるのなら、と思った私は言った。「指揮官全員が、私達の危機的状況を救ってくれたあの人みたいがいい奴とは限らない。むしろ思考するのに余計なものが混ざらなくて済むって考えた方がいいんじゃないか

しら。あの男の指揮能力は大したことないんだからあんたの方がマシよM4」

「お〜わ〜……みんなが心の中で思っているようなことをズバリと言ったねAR15。わたしも頭にくることをチクチク言われるようなら関わらないで、とか言つてしまいうになるけどAR15のはもう心をめつた刺しにできそうだよ」

「……でもまあ彼の指揮能力とか文句云々は置いとくとして。要は独立部隊であつた頃に戻つたようなものなのよね。じゃあ特務の時のように行動すればいい、ということよね」

ROが言つた事にM4は頷いて目を閉じ、AR小隊で共有されているマップも含めた戦術ネットワークを起動・展開した。私達の意識間で成り立つているこの仮想空間での会話などは現実の方では聞こえず、余程のクラッカーでなければ盗聴することもできない。

状況整理だけならM4に特に負担のかかるこの方法をとる必要はないのだが、今はもう夜中で就寝している人間の職員やスリープに移行している人形だつている。私達にも少なからず疲労はあつて明日の事も考えればできるだけ早く休んでおくべきだから、短時間で済ませる為のこの手段は悪手ではないだろう。

『証言によれば、保護区の北側に過激派の人間が潜伏しているという話だつた。銀行襲撃という内部情報を得た彼は先の計画を知つて恐ろしくなりそこから逃げ出した、とい

うのがとりあえずの見解だけど相違ある?』

保護区の北側に赤い光点が生まれ、そこから同色の光線が私達が捕縛した概ねの位置にまで伸びた。そこからさらに枝分かれするように新たなそれが出てきてその場全体を巡るようにしてさらに数多く生まれ出て他と繋がるが、街の至る所で浮かび上がったバツ印で黒く変色し消え失せる。ほとんどがそうなつて片手で数えられる程度でしかなかったマツプを見渡してS O P I Iは言った。

『このバツは何?』

『保護団体の過激派の人間が検問紛いな拠点を密かに置いているという証言から知れた場所よ。一人に集中して罪を着せている連中もこうなることを前もって予測して各所に配置していたらしいわ』

『随分とこうなることを危惧していたようだな。やたら滅多につつうか闇雲に置いているんでなく標的を発見しやすいようにしている。頭を使っているようだが……』

M16の言う通りで人混みが自然と形成される交差点や裏道の中では比較的人が通るところなど、一区に偏っているのではなく北側全域に満遍なく『網』が敷かれている。『情報源』として扱うことになっている彼が逃げられないように巡らされている『網』を見ながら思うことがあるとするなら、やはりそれは『一人に対しての対応としては大仰しい』ということに尽きる。

そうなる、やはりM16が言ったようにこの先の計画の表側の要として見なされているからか……或はリークされるとマズイ情報があるからなのか。

『警察が尋問を引き継いだけど、明日中に重要情報が手に入ると期待はしない方がいいよ……あいつらはわたしたちと違って銀行襲撃の事まで知っているわけじゃないから急いでくれないだろうし……ふわあ……』

『指名手配犯として持ち上げられた経緯がどうであつても過激派の人間としての思想まで捨てたわけじゃないから、完全に口を割らせるには時間が必要よ。でもその肝心の時間が十分にあるわけじゃない以上は柔軟かつ大胆に、尚且つ慎重さを忘れずに行動しなければならぬわ』

『だけどどうするのよ。さつき見せられた情報だけじゃ次に出るべき行動指針はわからないわ』

『そんなことはないぞRO、『情報源』が逃げてきたルートを見てみる』

椅子に腰かけていたM16は立ち上がって光る赤線のもとに向かうと、それが最初に点として生まれ出た地点を指差す。そして私達を見渡しながら言った。

『奴らの拠点がわかつているのだから、これから先の動きを見据えるかつて感じに様子見をしたりするんじゃないやなくてそこを叩いてしまった方が手取り早い。奴らは公務員とか司法に直接関わっているお偉いさんじゃなくて、あくまで有志団体のうちの連中の

一握りでしかない。事前に下調べこそしても抵抗を受けるだろうがそれは仕方ない』
 『あちこちが損傷して噴き出しているガスのパイプを修理するんじゃないやなくてその元栓を閉めるという事ね。多少のリスクと手間はかかるけど、とりあえずの応急処置のような行動としては悪くはないんじゃないかしら』

『ただ、ここはあくまでロボット人権保護団体としての場所であつて全員が過激な思想を持つているわけじゃないことを前提にすべきでしょう。証言通りにそこに保護団体の人がいるのなら捜査して有益な何かがあれば捕縛する、という手順ですべきではないでしょうか姉さん』

『ああ、大体はそれでいいと思うんだが……一つだけ引つ掛かることがある』
 M16はM4の傍から北区側のマップ全域に浮かんでいるバツ印をもう一度見渡し
 ては、やはりというように頷く。

そんな様子にM4はジッと静観しては姉の言葉を待つていて、SOP11は隊の中で早起きしては一日中勤務したことで眠そうに瞼を擦り、ROは答えが喉元まで出かかっているようでありながらもわからず首を傾げている。私はM16の言いたいことについては大体の察しが出来ているので、隊長と同じく答え合わせを待つている状態だった。

自律人形が世に出ると弊害のように現れた団体。彼等はあくまで言葉を武器にして

いるのであって直接暴力に訴えてくることはない。もしやるのだとすればそれこそ過激派の間であり、今回私達が止めねばならない標的だ。そんな彼らに対してM16が無視できないことがあるとするならば。

『ここまで広く人員を展開しては行動し、束縛するような真似はこれまでになかった筈だ。連中は主張を通そうと連携しては暴動を起こしてはいるが、所詮はまともな訓練も受けずにエネルギーを余らせているグループでしかない。つか只の暴徒だよ。そんな奴らがどうしてこうも予期していたように見張り役を配置できているんだ』

暗号化したメールのやり取りに組織的に動いて一人を指名手配犯という看板をぶら下げた役者を立てるなど、これまでの連中には前例のないことをしているわけだが、急にこれらを一度にできるようになったとは考えにくい。前々から綿密に計画していたにしても、やることの全てを頭に叩き込むのは容易じゃない。私が街中で発見して最初に追跡した三人組は銃の扱いは置いといても動きそのものは悪くはなかったし、何度かの本番を経ていると感じた。

では、なぜ統率が幾分とれて行動できるようになっているのだろうか。

『M16姉さんは、それに関してどう考えていますか。私は今のところその手に関して秀でている新たなリーダーが現れたかと思うのですが』

『どうだろうな……AR15、お前が発見した奴らは銃に関しては何れの素人だったら

しいな』

『ええ、そうよ』

『使っていた拳銃はなんだった？』

私は自身のデータドライブにアクセスして事前に調べていた拳銃のデータと一緒に画像を引っ張り出す。それを皆に見えるように展開してから言った。

『二世代前までアメリカ軍に採用されていた『P320』ね。製造番号は当然と言ったように消されていたけど、見様見真似で作られたコピー品とかじゃなくて精度もそこそこ高いらしいわ』

『精度が良くてアメリカ軍、正規軍で使われてたってことはだ、私の説の方が有力だな……』

私が映し出した画像と詳細説明のダイアログボックスを一瞥して、M16は確信めいたものを得たような真剣な表情で私達を見る。滅多に見ないその顔に私も背筋がさらに正されたように感じたが、気のせいではなかったようで寝ぼけ眼だったSOPIIに至っては眠気が吹き飛んだように目をパチクリさせていた。

こうも彼女から余裕が見られないということは、洒落にならないどころか無視することも到底できない、大事の事案に直面した場合に限る。経験者は語る、というようにAR小隊どころか戦術人形としても最古参と言っても差支えない彼女がこういう時に

言うことには重みがある。

『これは私の推測だが、おそらく過激派にとつての『協力者』がいる。それも武器を供給できるだけのパイプを持ち、戦略を教授できるだけのな』

『協力者』つて……でもなんでそう思ったの。普通に考えればM4が言ったように頭がキレる奴が出てきたと思うんじゃないの』

『戦略を練れていても道具の扱いがわかっていない』ということ、それが根拠だ。普通新しい頭がグループを纏めあげるようになったんなら、武器の扱いが分かるようになっていないと話にならないだろ。恐らくだが、『協力者』は過激派を行動の実行に移させて自身は後方支援を主にしている。銃とプランを渡すだけして事の成り行きを見てるのかもしれないな』

言葉にならないまま私の中で浮遊していた違和感が明確な形で組み上がっていく。たしかにM16の言う通りで、一つの計画で良い結果を得る為には実行員の隅々にまで手筈が行き届いていなければならぬ。直接グループの面倒を見るのであれば戦略だけでなく道具の使い方まで伝達・指導していなければ筋が通らないというものだ。

それに今になってM16が銃の種類を私に聞いて来た意味が分かった。M4の考えが現実だということで『扱い切れていない武器』と『彼らには前例のない連携』を否定しようとしてもその『協力者』が邪魔してくる。

『外』を知らない連中がクオリティが高い銃を保護区の中でたまたま手に入れたとは考えにくいわね。M16、『協力者』はきつと単なる武器商人とか戦略家じゃないわよね。きつともつと位の高い……』

『ああ、戦地を歩いては落ちてる物を拾って保管している回収業者、スカベンジャーとも違う。こればかりは外れて欲しいと思うばかりなんだが……』

私から視線を外したM16はため息混じりに椅子に戻って腰を下ろす。そして顔だけ持ち上げては視線は手元を見つめながらはつきりと言った。

『協力者』は正規軍所属の軍人か政府関係者、そんな奴かそいつとパイプがあるクソ野郎と見るべきだ。ひよつとすると協力という二文字だけぶら下げては高みの見物を決め込んでいることも考えられるが……どちらにしても厄介な相手だということには間違いない』

私達の運命を示す羅針盤が、大きく動いた。

56. D44N事件・転「前」 — Things, we don't understand —

曇り空を横切るようにして一機のドローンが飛んでいく。ただそれは鳥のように羽ばたくことは適わず、機械的に上昇することしかできない。何時か自分が生まれ変わったのだとしても意志を持った鳥になれずにプログラムで動くドローンにしかなれないのだろうかと考えたことがある。

生きた鳥と機械のそれ、飛翔し広い空を飛ぶのであればどちらが良いのかと問われれば、私は断然前者を選ぶ。ただその答えは両者を比較したからではなく、単に生き物という存在に憧れがあるからだ。私も自律人形として一見すれば人間と大差のない『人』ではあるけれど、機械的でも擬似的でもなく、食べ物から栄養を得て、怪我をすれば血が流れ、酸素を取り入れる為の呼吸をする、そんな生命活動をしている存在が羨ましいと思うことがある。

だがそれはエゴであって叶わない願いだ。創作物であるように私という人格がそのまま転生なりして別の生命体に転移するという事なんて、都合のいいことなどこの世にはない。

そんな諦観を抱えながらも私は戦術人形として与えられた役目を果たさなければならぬ。

私とは違った価値観と諦念も抱いているであろう仲間、友人たちの足を引っ張るのは御免だ。



「ドローンの起動・展開が終了。設定した巡回ルートを自動操縦で飛行しているよ」

『カメラの無線接続も完了したわ、感度良好』

「ペルシカさん、こちらの準備は整いました。そちらの画像解析の準備は大丈夫ですか

「？」

『ちようどこつちも終わった、システムオールグリーン。何時でも行けるよ』

グリフィン北米支部の保護区はぎっくりとした円状になっており、方角を示す四つのアルファベットの次につく数字が大きいほど管理区画とされていない危険地帯である『外』に近づく。当たり前の話ではあるが、中央に位置する基地から離れれば離れるほど『外』から真つ先に鉄血兵やテロリストに襲撃されるだろうからピリピリしているのが目に見える。土を掘つての塹壕やコンクリートで固めたことで形成される防壁にトーチカ、そして設置されている重火器の近くで銃を腰に下げて警戒態勢に当たっている戦術人形がいる。斥候と思わしき敵部隊が挑発するようにして辺りをうろついたり発砲もするのだから、彼女らも常に気を張っていなければならなかった。

物騒な代物を下げている存在が近くに居て『外』から銃声が聞こえてくるのだから、自然と内側で住んでいる人々にも緊張は伝播してしまう。落ち着かない状況が続けばストレスが溜まり気が萎えて疲れてしまうのは、その周辺で住居を構えていたり商いをしてい一般市民や巡回している警察官だ。そうして生まれる隙について盗みを働く輩や鬱憤晴らしに暴力に走る人間が出てくる。

他の区域でも全く出ないという訳でなく多少はそういった事案はあるものの、『15』区画ほどではない。良くない事で騒ぎが起こることは毎日ある。要するに、治安が悪い

ということだ。

「複数を上空に飛ばしていますけど、ペルシカさんが手動で解析をしているのですか？」
『そんな効率の悪いことはしないよ。画像データの読み込みによるオートサーチで保護団体の上着だとか銃火器を指定して、それを解析するといった手順を自動でやってもらうだけだよ。でもまあ、なにか目に止まるものがあつたら今度は私自らが手を動かすよ』

「……それって仕事をしていると言えるのですか？ そのシステムを作るのにはちゃんとやることはやっているとはいえますけども」

「そう言うなAR15。ペルシカさんだって天才の肩書はあっても体のつくりは人間そのものだ。現場から回される情報を一人かつリアルタイムで処理し続けるには無理があるというものだけぞ」

『とはいってもそれまでコーヒーを啜っているんじゃないかって複数のモニターに目を通しておかないとだから楽じゃないよ。プログラムには引つかからないきな臭いものはあるかもしれないだしね』

そして私達AR小隊が今いるのは件の『15』の北側であるN15-2にある建物の屋上で、現時点では最新式の偵察ドローン一式を展開していた。リアルタイムで送信するカメラを取り付けているを始め、地上に設置されたビーコンに従って指定したポイン

トへの飛行はもちろん、想定外の事があれば手動操作に切り替えて対応出来たりもする。今は電脳世界における仕事に移っているので、現実のRO本体は近くで動かない状態だ。

そんな絵に描いたような機能を持ち合わせて現実になった代物がもうアイカメラの等倍では見えなくなつたところで、私はドローン制御装置の画面に映っている景色に視線を移す。

まばらにあつて目につく壁や天井に穴が空いている廃墟、交通整備こそ最低限はされているがアスファルトのようにしつかりと舗装された道ではない道路、そして車やバイクのような乗り物ではなく徒歩で行き交う人々。似ている映像が四つのパネルに表示されていて画面端に文字列が上から下へと流れては、解析結果らしきデータが近くの端末に送られてくる。

目を見張るものが表示されるまでは待機するとして、私は近くに立て掛けていた分身のライフルを手にとってスコープサイトの調整を始めた。

「複数個のカメラを一齐に操作するのつてどんな気分なのRO。想像だけでいってしまう自分の顔以外の部分にも目玉があるんじゃないかなって思うんだけど」

『集中してるから話し掛けなくてよもう……ざっくりといえれば私という存在が分裂したようなイメージ、つていえばいいかしら。それとも意識だけで同じような作業を並行し

て進めているなんてでもわかる?」

「私達みたいな通常の人形じゃ抱えきれなくなつてエラーを吐き出すというのに、よく悠長にそんな感想を言えるもんだよな」

同時並行で電子機器の操作というのは容易いことのように見えるが、あくまで二つ以上のそれを動かすだけならまだ誰にでもできる。ただ、それらの作業数にその内容と、時と場合によれば変化することがあるのだから必ずしもそうとは言えない。カメラを動かして撮影する簡単な一連の動きでも同時にやるのでは何もかも足りなすぎる。人間体で四つの機械を操作するのは無理というものだ。

だからこそAR小隊において電子戦における情報処理が一番長けているROが適任であり、彼女がペルシカと連携することで現状としてはベストな空からの探査が可能になった。

「それにしても、『15』地区というのは本当に陰気なところだね……ここに来るまででわたしたちを見た人達、顔は怒っているようでも目は怯えていたよ」

「仕方ないわよ、ここも警戒地域として指定されているのは周知されているんだから。『外』からの危機に恐怖しているとかだけじゃなくて人間社会にうまく馴染めずに民度が低い連中が多く集まっている、そうなつてしまっている場所なのよ」

「トラブルが絶えない、というか一日に五回はこちらから止めに入らないと收拾がつか

ない案件があったりするらしいね。なんでそんなことをするのかしら」

「性格とか色々あるとは思いますが、そういうのを起こしては騒いでいる大概が鬱憤晴らしたとかストレスを抱えきれなくなった連中だ。承認欲求が満たされずに誰にも必要とされなくなつて居ても居ないのと変わらない存在になつてしまうんだよ。そんな風になれば『自分を見て欲しい』として、誰かを傷つける行為に走つちまう。残念だけどこのことに関しては銃をぶつ放しているのが仕事である私達には根本的な解決はできない。精々ひどくならないことを願うことしかやれることはないよ」

M16が近くのドラム缶に向かって飲料水が入っていた容器を投げ捨てる。ごみの分別も何もされていないそれに入った容器から目を逸らし、彼女はいつものような余裕のある笑みを浮かべることなく端末の画面を見ているM4の近くで同じようにして覗き込んだ。

このことに関わっている者の中で一番事態を冷静に重く受け止めているのはきつとM16という古株だろう。

ロボット人権保護団体の過激派にとつての『協力者』が政府や正規軍などグリフィンのようなPMCとは違った立ち位置にいて過激派に計画を伝授しているようなら、きつと私達が踏み入ることを予測していても何も不思議じゃない。一度目標を見つけさえすれば困つて確実に確保できるとされる布陣を保護区の中で展開できるということとは、

地理を把握しているだけの実行グループだけではここまでできないだろう。

M16は『協力者』が助力している目的を確証がなにもない憶測として語ろうとしなかったが、私が考えうる、というよりもまず真つ先に思い浮かぶとするならばグリフィンへの間接的な攻撃だ。

こうして世の中が荒れている状態だと名声なんてものは関係ない、疎遠に思うのかもしれない。しかし現実という蓋を開けてみれば良し悪し問わず関わっており、プライドが高かったり自身より上に立つ人がいるのが許し難い人間には特にそうだ。存在価値を証明するか、あるいは自己満足するが為に地位を高める過程においてはどうしても自分以外の輝く星が邪魔に思えてくる想像なんて難しくない。私にも少なからずもそういった思いを抱いているからだ。

もしM16の推測通りに『協力者』が政府関係で国民的地位が高い人物あればの話ではあるのだが、おそらく動機はそこにある。

国民を守る役目を担っているグリフィンが目障りに感じたのだから、『協力者』はロボット人権保護団体という第三者を使ってどうにか貶めようとしてきている。これが私の見解だ。

「そっういえば……皆は知ってる？ 今日から保護区外のある一角が危険指定区域とされるのを」

「ええくと、なんだったっけ……」

「たしか特殊危険指定項目に抵触しているとかで要注意だなんとか言つてたな、今朝のニュースで」

「第四十四項の『思想又は宗教における過激な運動』。『外』のある一角では人権保護団体が住み着いているというのは聞いたことありますけど……」

特殊危険指定項目。略称として特危と知られているそれは、私達が渡米して数カ月後にアメリカ政府が要因や経緯など関係なく対象を要注意として指定する為に定められた項目だ。過去の自然災害として現代も残されている放射能や『崩壊液』による汚染区域など、十分な注意があつたのだとしても人が踏み入るべき場所ではないとして国から直々に注意が下されるという理解で間違つていない。

ただM4が言つたのはそうした時の流れでどうにかなるものではなく、凝り固まつた思想に執着してしまつた人が集団として成り立つてしまつたあまりに危険視されることになつたことで正式に危険指定されたということだ。第四十四項とは主に人形を信仰の対象として掲げて殺人を繰り返すカルト集団を指定するものとして作られた項目であり、よっぽど危険視されるようなことを口走つて行動していなければ目をつけられない。

「グリフィンに頼らずに自力で生きていこうとしている連中なんてこの世にいくらでも

いる。意地や信条に信頼、そういったことで反りが合わない奴らは自衛の手段を身に付けてな。だがそれにばかりに囚われて厄介者になるのでは意味がないつつうのに……」
「今じゃ常識そのものの根底が揺らいで瓦解している世の中なのだから歪んだ認識しか持っていないわ。詳しく聞いてみれば殺人を犯した後に免罪符を得ようと工作したものの発覚して、なんて話をごまんとあるもの。過ちを認められずに自己正当しようとしている様はもう狂気じみているわ」

「加えて、頭がいいというのに狂人になった奴ほど質が悪い。内の狂気を抑制する為の枷が外れてしまっているせいで他者の意見に耳を傾けようとしな、と思いがちではあるけど、そんな奴ほど事の真理を的確についてくるものだ。多少は個人の価値観が混じってはいるものの否定できない事実もぶつけられるし厄介以外の何物でもないんだよな……」

私が言った事に続いてM16は経験談を述べた後に溜息を漏らす。概要だけなら私も聞いたことがあるその話が脳裏に過ろうとしたが、今はそつちに脱線してはならないと切り替えた。弾倉を叩きこんで安全装置を改めてかけたところで街中に設置したビーコンが今も問題ないことを別の端末で確認して状況を俯瞰する。

ペルシカはM16が言った仮説を鵜呑みにはしないよう心掛けながら広い視野を保ったまま確かめようということと今回のドローンを紹介した映像解析を担った。現状

からやることは間違っていない。が、言い知れない違和感を感じていた。

A R小隊が結成された時から協力してくれている彼女には感謝しているし、メンバー同様に家族愛のような感情を寄せてもいる。何時だって陰から支えては作戦の良き情報支援をしてくれていたのはペルシカで、指令部からの誤情報だと知らせて正しいそれを教えてくれて危機一髪、部隊への大きな痛手か、下手すれば壊滅になっていたかもしれない顛末を避けることが出来た。

何度もそうして助けてくれたれば信頼に足るものだし、普段だって静かに愚痴などを聞いてくれるはアドバイスをくれたりもしてくれて日常でも色々世話になった。彼女は家族としてなくてはならない存在だと断言できる。……恥ずかしくて絶対に口にはできないが。

そう、付き合いが長いからこそわかる違和感。今も昨日の朝に銀行襲撃のことを話してもらった時から根付いたそれを取り除けずにいる。

いつも仕事の話なら私達に隠し事せずに、わからないことがあればすぐにそうだと明かしてくれるというのに。せめてそうしなければならぬかの理由だけでも教えてくれればいいだろうに、何故そうして煙に巻くようなことをするのかがわからないしおかしいことのように思う。

『……む、ペルシカさん。三番ドローンで撮影された映像を解析していただけますか』

『どれどれ……ああクリーンヒットだ。連中のロゴが入った上着を着ている男が北上している』

その一言で待機状態にあった私達の空気が変わって該当するドローンの画面に視線が集中して釘付けになった。私も例外じゃなく二人が視認したとされる男の人相を見て、ドローンの現在地から大雑把に位置を割り出す。そしてそちらの方を直に自分で見てみればあまりよろしくない場所にいることが分かった。

「外周防壁からそう離れてない場所にいるようね。」

『精密スキャンしたけど九割九分そうだね。それと数名だけの過激派リストにヒット、そいつはしばしばあの『囿』の傍で暴動に加担していた奴の一人だ』

「移動して北上している……どこに行く気なんだろう」

「……どつちみちこのまま逃がすという選択肢はない。追うぞー！」

「ROとペルシカさんはドローンを動員してそのまま監視を！私達四人は地上から追跡しますー！」

『了解！』

M4に続いて三階建ての屋上から飛び降り、建物の屋根伝いで高空で飛んでいる三番ドローンの元へと向かう。脚部のユニットが持つ動力を最大限に引き出してはパルクルールのように跳んでは着地、または受身をとって勢いを殺さぬようにして前進し続け

る。

偶に後ろからS O P I Iが落ちたりはせずとも転んだりして『ふぎやつ』と声を漏らしているが、私が遅れてないか振り返っても取り返してついて来ている。M 16は相変わらずの体捌きで速度を落とすところか段々と上げて隊長に追い付いてなにかあればすぐにアシストできる位置についた。そしてM 4は眼前にある目標にひた走っては冷静に状況の分析をするとしてR Oとペルシカと密に連携を取り、考えられるだけの可能性を忘れないことを念頭に置きながら具体的な確保を私達全員で考案している。一
個隊の隊長として他には劣らない、遜色ないまでに成長したと思える。

……絶対に言わないが。

「……よし、それじゃあ——！」

「作戦開始!!」



地上に着地したM4とSOPIIの二人が件の男の行く道を阻んで挟み撃ちにして迫っているのを見ながら、私は付近からアクシデントが生じて影響が及ばないように警戒している。そうしていながらもどうしても気になることがあったので近くに居るM16に聞いた。

「ねえ、『協力者』が私達がこのように行動する可能性をどれだけ予測しているのかしら？」

「あるべきものとして間違いなくしているだろう。包囲網の配置からして『協力者』は確実に成功を収めるようにするだけの兆候があることから几帳面な性格のようだ。万が一の失敗を考慮しておくのが計画を立てることの基本であるように追われることだつて考えるのが自然といえる」

「即興のプロファイルとしてはそんなところだけど、でもどうして直接的な行動を起こさうとしないの。悪人として日向に出るとマズイから、といつても規模は三流でチンピラ同然でしかない人間を使うのは非効率じゃない。もしもの場合を警戒するのだとしても計画を実行できるだけ力量をもったグループを立てるのが定石でしょ」

「……わからん。だが間違いなく『協力者』は頭がキレル奴だ。裏をかくような、前提なんてものを崩してくるような見方をしてくるのかもしれない」

たしかにM16の言う通りなのかもしれない。誰も考えもしなかったことで驚かされる時というのは『そんなことなどあり得ない』という決めつけや固定概念によるというのが多い。生活にしても戦闘にしても、経験を積んだことで自然と寄生するそれらは例外なく誰にでも単食つて予測を覆してくるものだ。

『協力者』が歴史に名を残す武将のように確信に近い予想で王手をかけるのではなく、裏の裏をかいたどころではなく虚を突くようなことを得意としているとすると厄介だ。なにせ何が疑がわずに済むことなのかという認識そのものがなくなっているのだから、川に掛かっている橋を慎重に渡りたいのに安全確認で叩くことすらできないのと同じ。危なっかしくて足を踏み出す勇氣も湧いてこないのも仕方がないだろう。

「トカゲの尻尾であるどころか畏へと誘う為の生餌なのかもしれないが、ここでもしないようじゃ核心に絶対辿り着けない。今日一日は普段の任務より気が休まることはないだろうけどお前の冷静な情報分析能力も頼りにするからな」

「今朝起きた時からそんなことは覚悟してたんだからそんな言葉なんて無用よ。あんたもそこら辺の見極めはアテにさせてもらおうよ、我が隊の姉貴分」

「おお、それは責任重大だな」

互いに手の甲をぶつけ合つて笑みを向けたところで、地上組の方に動きがあった。行く手に先回りしていたM4と男が接触して問答が開始され、SOPIIは得物を脇に下げて路地裏の方から様子を窺つてはこちらに目配せして位置関係を確認している。彼女とM16が互いに見失つていないことをサムズアップで確かめ合つては平然とした様子であることを努めている隊長を見守つた。

M4が無線越しに男に対しなんてことのない事件の聴取をしているのを耳にしながら、私は比較的見晴らしの良い此処から付近に目を配らせていると、既視感のある違和感を見つけた。

「いた、M4から見て右手のおおよそ三十メートル先の路地。屯している男四人組がそうよ」

「見つけた、アロハシャツだとかスーツだとかで奇天烈な組み合わせの連中のことね。特に目立ったことはしていないのに目線が釘付けになつてるといふぐらいに固定されているわ」

『こつちも映像を受け取つた。ARRIS、君の感覚としてはそいつらはクロ率何パーセント?』

「胸を張つてクロだと断言できません。この地区には似つかわしくないビジネスバッグを持つていますけど汚れが酷いですし、アロハシャツの奴は服装を揃えなさすぎ、それも

小奇麗と来ていますしああいっただジーンズであれば拳銃一丁ぐらい挟んで隠せますよ」「なら手筈通り私が即座に動ける位置につくぞ。RO、こつちにドローンを一機まわしてくれ。陽動に使いたい」

M16はそう言うともた走っては跳躍し、私が見つけたグループの死角に回り込んでいった。ドローンもあるとはいえ四人の制圧を一人でやれると言えるのはさすがではあるものの、治安悪くてもここも保護区であつて一般人の往来がある。自分達や過激派の連中からにしても、撃つて下手すれば流れ弾で彼らを怪我させてしまいかねないので細心の注意が必要だ。なので発砲はしないことを前提で、するのだとしても最小限にするのがこの状況における最善の手段と心構えだろう。

『配置についての。ARR15、他に連中のお仲間がいないのならM4に合図を』
「了解。SOP11、M4のバックアップは任せたわよ」

私はそう言うってからサブレッサーを外した状態の分身の銃口を上に向けて数度引き金を引いた。馴染みの衝撃が肩を叩くのと同時に発せられる銃声が空へと溶けていく。眼前の状況を見てみればM4は視線がこちらに動いた男を後ろに回すことで関節をキメて地面に組み伏せ、SOP11は彼女を援護すべく駆け寄っていった。

『奴らが動いた、こつちは私が片付ける』

ドローンが低空で横切つたのを皮切りに、M16も銃を取り出した四人に上から奇襲

を仕掛けてまず二人を気絶させた。彼女に気付いた三人目は近接格闘で数発の拳を打ち込んでよろけさせ、最後の一人は三人目をそちらに押しやって自身の姿を見失わせると逆手で首根っこを掴んでから足を蹴飛ばして払い、うつ伏せの態勢のまま地面に引き倒してその上に乗って拘束した。

『AR小隊、付近の他のドローンが人権保護団体の数人を検知。ただ、全員がそちらに向かっているのではなく北上している。最初に見つけた奴とい動きが妙だ』

『どうする隊長。ここで一気に追い打ちをかけて全員をひっ捕らえるのに私は一票だ
が』

『……この五人を捉えることはできませんでしたけどまだ銀行襲撃の計画を潰した訳ではありません。このまま追撃して可能な限り、願わくは過激派の中心人物を捕縛するのを目標としましょう。ROは先行偵察でドローンを操作、私達は向かいながら再終結!』

『了解だ。私はこいつらを縛った後で行く、先に行け!』

SOPIIと走り出したM4を私は追いかけて走った。私が轟かせた銃声を聞いた人たちが足を止めて聞こえてきた先にいた私を見ているが、彼らにはこちらの事情を知る由もないのだからスタントマンがパフォーマンスをしているようにしか見えないうろ。別にそれは構わないが、地上を走るしかないM4とSOPIIには障害物でしかなく決して乱暴にはならないそれであって邪魔でしかない。そうなればどうして

も建物伝いに跳んでいる私とは差が出来始めてしまつて足並みが揃わないことになるのは必然と言える。

『連中はまだ北上中……待つて、このまま彼らは一体どこに行くつもりなの……?』

『ペルシカさん、彼らは一体なにをしようとしているのか推測できますか?』

『この状況じゃなにを言つても憶測にしかならないし……いや待つた、奴らが一つの建物に集結してる。古いけど大型のガレージがある、なんだあそこ……』

何処かで聞いた話ではたしか保護区の最北には撤退した警察特殊部隊の特別基地があつたという。そこで働いていた人達は勢力として膨大になつた民度が低いとか何とかの人達に耐えきれずそこから撤退した、なんてことを耳にしたことがある。車好きでなければないガレージを、それも何台も入れられる大型ガレージなんて民間で持てる個人なんてとてつもなく限られている。

となれば大方、そこは噂通りの場所なのかそれに類するものなのだろう。

『RO、私達の現在地からするとどれぐらい距離があるつ?』

『おおよそ四百メートルだけど、たぶんあなた達が到達するよりも先に彼らが全員集まるわ。何故だかわからないけど彼らは駆け足で向かつてるし置かれてる状況を知つてそうよ!』

『やっぱり『協力者』の奴が何枚か噛んでやがるな。こうなることを想定済みだつてか』

『ですがやることは変わりません。命令を変更、AR15はROと連携して動いて！場合によっては抵抗を受けることにはなるけどその時はあなたの判断に任せるわよ！』

「わかった！」

その一言で私は速度を上げてM4達を追い抜いてROが操作している最北のドロインの所まで目指した。

同じく脚で向かう者がいない状態での単独で現場に向かうのであれば気を遣う必要はない。ショートカットとして通りを一息に飛び越えることだって今ならできる——

!!

「っ!!」

気持ちがいいとは到底言えない嫌な浮遊感を全身で感じたのはほんの数秒だけ。ただ、その瞬間に妄想であつて欲しいと願う荒唐無稽な考えが何故だか増幅した気がして、着地したらそれによる悪寒が全身に行き渡った。無視して進むにも足取りが重くなつたようであつた。

外側に向かうにつれてトタンなどの作りが甘い建物を足場にするこゝになつて危うくなるのが何度かあつたが、そういう物理的な要因よりも数列ではじき出された思考による影響が大きい。振り切ろうにも際限なくうかんでくる嫌な未来予測と格闘する経験としては何度かあるのだから、今回だつて無理矢理蓋を閉めてしまえばいい。だと

いうのに、何故？

逡巡して考えられるのはただ一つ。

直面している現状において、私が一番恐れている事態だからだ。

『AR15、また状況が変わった！奴らがガレージから出てきたと思ったら何台かの車に乗ってる！』

そうして独り相撲をしていた私の思考を遮ってくれたのはROの報告だった。人間というならば心ここにあらずという状態になっていた私の意識が引き戻されて視覚や聴覚など現実の情報が一気に流れ込んでくる。

はっとなつてわかる範囲で俯瞰してみればたしかにこの場では珍しい四駆のエンジン音が鳴っており、それがここから離れようとしているようだった。

『淀みないわけではないけど動きがスムーズすぎる……AR15もつと急いで！このままじゃ容疑者をみすみす逃がすことになる！』

「わかつてるわよ！でもさすがにこれじゃあ……!!」

ドローンが飛行していた地点によりやく到達したものの、ガレージから最後の一台が飛び出していた。一見して整備が行き届いているとは思えない複数の車体がカーブを描いたりしながら道へと走り、さらに北へと向かつて行くのを目にした。

『下手に発砲でもすれば通行人に被害が及んでしまうし狙撃は駄目ね……！AR15、

あなたのスペックならその車両にまで飛び移れない!?」

「この距離で動いている対象に着地するのは至難の業というか不可能ですよ!」

元が民政に向けられた人形の私には軍事的な部品は使われていないので、戦術人形としての改造を施されていても身体機能は通常の自律人形と大して変わらない。なので肉眼レベルで視認できる距離に到達できたとしても走り幅跳びの要領で、なんて芸当はできない。ましてや距離的にも軍事目的で開発された一級品の人形にできるとは限らないのだが。

一か八かとして車の進行ルートをと見渡して使えるものを、されど通行人へのリスクをできるだけ低く済ませれる何かがないかと探す。道行を妨害できさえすれば時間稼ぎになって距離を詰めれる、そう思つてのことだったが、あるもののどれもこれもがガラクタばかりで射的的の的にしかならない。

できることがあるとするならば、建物伝いで走つて直線で距離を離されてはカーブで詰めての繰り返しで見失わないようにすることだけ。

『このままじゃどうにもならないわ! ジリ貧でAR15の方が先にバテてしまうわよ!』

『そうはさせないさ!』

M16の声が聞こえてきたかと思うと、私の視線の先で保護団体の車の横っ面に何か

がぶつかってきて横転させた。ガンツ!!と鉄がひしゃげる音がして、すぎましい勢いで死角から飛び出した何かの正体を理解した途端、私の口から出てきたのは彼女への悪態だった。

「危ないじゃない!民間人に被害が出たらどうするつもりだったのよ!」

『ROのドローンの映像をリアルタイムで見せてもらってたからちゃんと考慮しての行動だよ。戦術ネットワーク経由だから幾分動きが鈍るがこれも一つの手だ』

そう言いながら盾を収納して走行不能となっている車の運転席と助手赤に乗っていた二人を引きずり出す。意識が朦朧となつているその二人が保護団体の迷彩柄が入った白い上着を着ていることを確認したのかとおもいきや、いきなり各々の服を破き始めた。

突然のことに私は少し驚き、飛び降りてM16の方に近付いた。

「何をしているのよ?そんなところに武器とかを隠している事なんてよつぼどの奴じゃないと……」

「いや、さつき捕えた奴らの首にもこんなのがあつてだな」

M16に促されるままに見てみると、二人の首の前には正円の上から縁取りされた鳥が大きく彫られていた。その鳥の嘴が足元にいる雛に向けられているのを見ながら私は言った。

「これってタトウーよね？見栄を張る為になら腕とかにするけど、なんでわざわざ首にしているのよ」

『さてな……ペルシカさん、早速だがこいつに関するデータが欲しい。ROの映像でタトウーの凶柄から意味を教えてください』

りよーかい、と言つて無線の向こうにいるペルシカの方から端末を操作する軽快な音が聞こえてくる。近くに寄つて来たドローンから送られてきたであろう映像データの解析結果を待つ、なんてことは本来なら現状において正解ではないだろうが、向こうは車で遠くまで走つて行つてしまつている。エンジン音が遠くから響いて来る別のそれと判別できないぐらいに混じつてしまつているのでこのまま自分達の足で探すのは非効率だ。

今はここで捕えた連中から情報を引き出して次の行動に移す方がいいだろう。

『その凶柄からネット検索にヒットだ。間違いがなければ描かれているのはペリカンみたいだよ』

「ペリカン？タトウーにペリカンってなんなのよ。そこらじゅうにいるゴロツキなら自分をもつと強く見せる為に別の良いのを彫るでしょ」

『いや、タトウーというのはそもそもファッションとかそういうのじゃなくて自身が体験した苦痛を示すものなんだよ。時の流れでそういつた意味が薄れてしまつてほとん

ど知られていないけど、人間の兵士が信念や誓いを表すのにも使われている。これはそれらに類するものだ』

身の周りにいるのが人形ばかりで人間の相手をするものの比率がどうしても下がってしまふ。そうなることやはり関連した知識を取り入れる機会も減るのでそういった事に疎くなってしまうのが道理だ。

無知な自分に少々苛立っているとM16は見えてきたM4とSOPRIIに手を振りながら言った。

「ロシアの国家保安局にいた頃に教えてもらったことがある。当人達にはタトゥーの図柄も重要ではあるが彫る位置もそうだつてな。首に彫られているのは社会に認められていなくともそのことに屈さない意味があつて……たしかペリカンはキリスト教で自己犠牲の象徴だったか」

『正解だ、さすがだねM16。キリストが教徒にパンや葡萄酒を分けたように、餌を子供に与えれなかつた時に自分の血をあげる習性から今は亡きアイルランドの輸血機関のシンボルとしても使われていたようだ』

「人権保護団体が首に自己犠牲のタトゥーとは……なんだか嫌な予感がするな」

M4達がこちらに到着して捕縛した保護団体の連中を後送する手筈を警察に連絡して整えている間に、私とSOPRIIはM16が半スクラップにした車の態勢を元に戻し

て車内に何かないか調べた。ズタズタになつてゐる革のシートから発せられる刺激臭にS O P I Iが顔を歪めては鼻を押さえて苦悶の声を上げる。私自身も同じように嗅覚モジュールを働かせたくないと思つて片手を使ったのだから気持ちにはよくわかる。本来の用途をこなせるからと急ごしらえでとりつけられているこのシートはカビが生えているだけでなく虫の死骸など見えて気分がいいではないものが張り付いていて衛生的によろしくないのは一目瞭然。これに嫌悪感を抱かないとすれば一般的な観念がとてつもなく薄れている者ぐらいだ。もつとも、『一般的』というラインがどこにどう引かれるべきなのか、共有されるべき基準というものが遺物になつてゐるこんな世の中ではそんなことを論じても無駄だろう。

「んえ〜も〜やだ〜この中〜!!」

「私も頑張つて早く終わらせるようにするから手伝つて。我慢するのはあんただけじゃないんだから……じゃあほら、あんたはこのバッグの中を調べてよ」

「ううわあ〜、よくこんな穴だらけの代物を使つてれたねこいつら。愛着でもあるのかな……」

背中ではそんな声を聞きながらさらに漁り続けてみると、ダツシユボードの中に折りたたまれた写真とそれに挟められていたメモがあった。突つ込んでいた上半身を戻してそれを開いてみようとした瞬間、そう遠くない位置から爆音が轟いて来た。

遅れてくる爆風に顔を叩かれてそれがきた方を見ると赤い爆炎が高く立ち上っていた。遠くから聞こえる悲鳴や怒声が木霊してくるのに合わせて足元に何かが落ちてきた。

私達が飛ばしたドローン☒☒だった、金属片だった。

「RO、ペルシカさん、状況は!？」

『ごめん、爆破が起きたのは一瞬で私にはわからない!だけど……!』

『ああ、こつちで解析できた!だけど連中、こんなことをするなんて正気じゃない!』

「驚いているのはわかりましたから早く教えてください!」

怒鳴りつけるように無線に言葉を叩きつけ、私は一旦手にしていた写真とメモをバツクパツクにしまって眼前の状況を睥んだ。損害の規模がどの程度なのかは今のところわからないが、野次馬が見ている方から走って来る人達の様子からして火柱が上がっただけの些事ではないのは間違いない。先程の爆風だってこれまで戦場で身体で覚えている経験からしてそうであると、私の警鐘が鳴らされているのだから捨て置けない事態だ。

ペルシカからの応答が来たのは私に急かされてからおそらく五秒程度。ただ、戦術ネットワークを経由して視界の隅に表示された映像からわかる通り、驚愕するのに値する事実であった。

『映像の通り、複数台が自己を顧みないかのように北側のゲートに突っ込んで爆発した……さすがにこれは……!』

「……障害物を避けて的確に壊してる……ぐにやぐにやと運転してるから運転席には誰かがいたんだよねこれって……」

ようやく奴らがペリカンのタトウを体に刻んだ意味の合点が行った。自己犠牲を正気とは思えない解釈をしていて、彼らは自身で掲げている目的を達成しようとする命を投げ出している。そこに内包されている黒い狂気に怖気が走って私の身体は震えた。

あまりのことに皆が言葉を失っていると、ペルシカも繋がっているAR小隊の無線回線とは別のそれが開かれた。AR小隊と生みの親である彼女のみで構築されていて他は割り込むことが出来ないのとは別の回線、つまるところグリフィン北米支部で使われているものだった。突然のことに訝しんでいると指揮官の声が主に隊長のM4に向けて聞こえて来た。

そして送られた指示に、私達は従う以外に他に手段はなかった。

57. D44N事件・転「後」 — Failure, un
stoppable —

ドローンに投下された物資に言われた通りの物資が必要な分だけあるかどうかを確かめてみると、動作不良など万が一の予備の分を除いてきちんと用意されていた。ただ、人数分用意する必要がないとしてデリバリーされたものが一種ある。

偵察に重宝される双眼鏡であればいいと思う機能として、光源がない地における暗視や熱源を視覚的に認知できるサーマルビジョンなどいくつか挙げられる。いわずもがなだが、夜戦などを想定した作戦もあるのだから敵の頭数を誤ることなくカウントできる方がいい。であればそれらの機能を取り入れるのはわりと定石だ。

ではさらにそこからミスを減らすのに使用者が努力する以外の方法としてはなにがあるだろうか。

決まっている、さらに便利な機能の追加だ。そして物資の中にあるその偵察キットに含まれる双眼鏡は別の不安を感じさせるほどの高機能を引つ提げて投下されてきたのである。

「まさか双眼鏡に電子システム搭載とはな……これからの偵察任務はこいつを手放せな

いぞ」

『どうかな。またすぐに最新式のそういうのが開発されてお役御免になるか、欠陥が見つかって作り直しになることにだってあり得るよ。技術が進歩するのはいいことだけど、レベルを上げるのに段階を着実に踏まないようじゃすぐに崩れ去ってしようもないことになる。過去に作るものの出来が良いようでよろしくなかつた国というのはあつたのだからそれがいい例だよ』

声の調子からしてペルシカはやれやれと言わんばかりなので私達が手に取っている電子機器が気に食わないのだろう。

彼女が実際に戦場を目にすることは限りなく少ないが、私達がそこで必要としているニーズを理解してくれているのだから『不必要』と言ってバツサリと切り捨てはしないでくれる。心得に似た注意点などを助言してくれているし、互いの気心や人柄への理解度でいうならば上から目線で物事を語って来る連中と比較するまでもない。

ただまあ、今回のペルシカの言い分は頷ける。作りが甘いせいで序盤は良くても後々のここぞというタイミングでロクに使えなくなるのは一番よろしくない。そうなれば肩透かしも良い所だ。

「テストを数度経てからの投入ですから信頼性は極端に損なわれていないでしょう。下手に扱えばさすがに故障するでしょうけど、そんな乱暴にしなければいいだけです。私

達からの実地試験、ということにしてROは万が一の補助をドローンの管制を継続してください」

『それはいいけど建物内に入られたら私の方からは探査できないわよ。もしも立て籠もられたらどうするつもり?』

「そこのところは心配しなくていいよ。わたし達だつてご丁寧に正面玄関からノックして入るわけじゃないんだし、M16が言う陰に隠れている奴の事もあるんだから慎重に動くよ。それに新しい玩具だつてあるんだしね〜」

S O P I I は手に持っている手榴弾サイズの筒をペン回しのようにして手の内で弄んだ。グリフィンのデータベースに記録されていない範囲内の対象に光を掃射してマーキングする、警察からの要請で強襲作戦を実行する部隊からすればお馴染みのアイテムだ。

偵察のみならず標的の制圧も考えて私達への装備。気に食わないが指揮官の椅子に座れるだけあつて、目的達成の過程で立ち足る不測の事態を失くす手段を心得ている。汎用性に富んだ必要な物を必要なだけ、それでも適正が高いかつ適度な分だけ。明確に敵方のことがわかっていない以上はどこかの性能に特化したものを使わない、と彼は言うがその判断も一理あるものだ。

だがそれ以外に私の精神を逆撫でする事実が一つある。

「それにしても、今になって事態の解決に乗り込んでくるだなんて気に入らないわ。AR小隊に一任するとか言つてたくせに……」

『気持ちにはわかるよ。直接言われていないけど私にも腹に据えかねているものがあるのは否定しない。ただこの支援が無ければ実行可能な打開案の幅が依然として狭かった。少々腹立つけど助けられたと認めるしかないよ』

保護区の北区からさらに北上、破壊されたゲートから『外』に飛び出した保護団体を追つて行き着いたのは数時間の位置にある集落のような場所、その一端に私達はいる。偶然か、それとも誰かによる策略なのか。昼間に話していた『特殊危険指定項目』に抵触した危険指定区域として指定が入つて名が改まった『D44N』である。

世間では危険視され始めたというのに、夕陽どころかそれそのものすら完全に沈んで黄昏の刻になったことを知らせている今では灯りで光点を作り出し、それを結んで線にして一つの拠点を築いていた。『外』ということもあつて気持ちばかりの防衛線が張られているそこでも人の営みが垣間見れるのだから不思議なものだ。

ただ、私自身は支援助資こそ送つても援軍はなし、結果さえ出せれば過程は問わない。そんな指示と前言撤回で頭に来ていた。

『彼がしているのは『指揮』ではなくて『指令』を与えているだけ。だけどそれは特殊部隊に寄せている信用によるものじゃないだろうね。どちらかという腫れ物同士でこ

すり合わせさせて血が出ても構わずに摩擦で消そうとしているみたいだ』

「……嫌な例えだがやろうとしているのは結局それに近いんだろうな。あいつならそう腹黒く渦巻かせていてもなんらおかしくない」

「それはそれとして、もう行動に移しましょう。RO、ドローンで観測できる限りでは内側はどのようになっていますか」

M4が新型双眼鏡を覗きながらそう言うと、ROから送られてきた観測データが戦術ネットワークを介して表示された。画像だけでなく現在進行形で解析されているデータが羅列になっているのを今は目を背けて画の方を見てみると、それには様々な鈍器を持つて臨戦態勢といわんばかりの様相になっている人々がいた。

『見ての通り、この拠点にいるすべての人が敵と思うべきよ。武器を持つている全員が私達を快く思っていないのはこんな辺鄙なところにいることから明らか。正面で顔を合わせれば言葉少なく襲い掛かるって考えた方がいいんじゃないかしら』

「でもそこまで悩むことなの？こいつらへの発砲は最低限にするのだとしても近接戦に關しては私達の方に分があるじゃん。数こそ向こうが上だからちよつと工夫しないとだけだよ」

『そう簡単に片付けれることじゃないし気に留めておくべきことはそこじゃないんだよ S O P I I。こいつもこちらが来るのに備えているということは単純に逃れた連中が知

らせただけでなく『協力者』に予期されていたということもあるだろう。それにM16が言ったように他人に武器を供給できるような奴となるとそれなりの準備をしていると見るべきだ。事前情報がない状態である上にこちらが少数精鋭という布陣で挑まなくてはならないのだから警戒をする必要がある。そうなると、言わんとしていることはわかるね』

私達の目標は『銀行への襲撃計画の阻止』ではあるものの、達成するのに『それを計画している者達への制裁』という過程を経なければならぬ。当然、話し合いで解決できるような連中ではないのだから『無力化』することが必須だ。ではその『無力化』するのに連中を私達が持っている銃やナイフなどの武装や体術で殺傷するのかと問われれば、もちろんそれは『ノー』。権限や責任、ロボット工学三原則云々とかではなく思想などが危うく感じられても、相手は鉄血兵と相対すればまともに戦うことが出来ない集団でしかない。正当防衛、もしくは最悪の事態を阻止するのに必要だったのなら許されるのかもしれないが、そんな理由もなく撃つものなら奴らと同類としてそう変わりが無いことになってしまう。

日々綱渡りをしているような気分になりながら戦っているこちらがそう認識される、そんなのは御免こうむるという話だ。

『今回の私達はあくまで行き過ぎた思想を持ってしまっている人を本当の悪事というも

のから守るべき役目にある。相手がトリガーハッピーのテロリスト紛いに殺人を負い目もなくしてくるならともかく、話し合いの余地があるのであれば極力そうしななければならない。古くからある交戦規定なんてものじゃないけど、世界の至る所で大量の血が流されているのだから無意味に散らさない為にも命を尊重しての人道なんてものに則つておくべきだろうさ』

「……言っていることは理解できますけど実践するとなると面倒ですね。血気盛んな相手にも歩み寄ろうとしたら痛い目に遭うのはお互いそうだけど、それだけですまないことになったりすることもあり得ない話じゃないですし。それ以外で手っ取り早く済ませれる手段があるのならそちらに逃げてしまいたいです」

『気持ちにはわかるよ。私は兵隊として戦つてくれている君達とは違つてそんな現場に居合わせる事が絶対に出来ないからその綱渡りの苦勞を本当の意味で『共有』できない。ただ私の場合、ラボや廊下で理屈や正論を並べても拒否して話し合いにならない、そんな上から目線のマウント取り野郎に向かい合わせなければならないことがあるから『理解』こそできる。そういう間接的な意味で君達とは以心伝心というわけだ』

「励ましてくれてありがとうございます、と言いたいところですけど言葉遣いが汚くありませんかペルシカさん。というか自分でも意識してわざとそんな言葉を使ったなんてわけじゃありませんよね？」

『さくどうだろうね〜カフェインの定期摂取を怠ったつもりはないけど脳の回転が落ちて浮かんできたワードをそのまま言っちゃっているんじゃないかなって思うよ〜』

声音が明るいものになって雑談などをする時のようにおちやらけているのがわかるようになった。それに釣られたように私だけでなく他の皆も笑みを浮かべて声を漏らし、東の間の一時を享受できた。

が、その後に聞こえてきた声に込められた感情の差があった。

『だから聞かせてもらおうよ。このまま敵の本拠地を叩くべく、行くんだね?』

そこにどのような意味合いがあったのか、今になってみてもはつきりとはわからない。ただ、あの人はきつと私達が歩まされて直面することになる未来を知っていてそうなることがわかっていたのだろうと思う。どのような過程があったのだとしても根底には私達への温情があったのだから、きつとなにか事情があったのかもしれない。そうM4は言っていた。

だが私の場合、昨日にあったやり取りから不信感が芽吹き始めていたのだから彼女とは違った主張である。

ペルシ力はきつと、私達には話していない、今回の事件の『裏』を知っていたのだろうから。

「……今夜の月は赤いわね」

これといった確かな理由はないというのに、そんな月を見るだけで不安になってきていた。



ザリザリザリツ!!と瓦解している住居という壁の向こう側から高速で引き摺られて
いる何かの音が聞こえてくる。話し声に混じっている音の主が何なのかは探らないま
ま、私達は姿勢を低く保って陰から飛び出しては別のそれに一人ずつ移動し、突くこと
のできる警備の穴の方へと進んでいった。

私達が発砲などして応戦し、血生臭い結果となることを避けるには戦意を削ぐしか
ない。そうする方法としては警告や交渉など、言葉を交わすことで相手と意志疎通し互い

に同意を得たうえで穩便に済ませるのが理想だ。人質が取られた上での発砲事件などが起こった際は人命救助を最優先として、犯人の神経を逆撫でしないように細心の注意を払ってそれを実行する。話し合いの余地があるのであればという条件が満たされているのならの常套手段として昔から知られている方法である。

ただそれを可能とする状況というのは相手が包囲されて逃げることができないうか、自分が置かれている状態を俯瞰できていればに限る。当たり前だが、筋の通った言い分が無ければ話し合いなどできるわけがない。加えて圧倒的不利な状況に立たされているのはこちらなのだから言葉のない圧力をかけとることはできない。

では、如何様にして相手方の戦意を崩して立場を逆転させるか。

『今のところ目立った動きはないけど強気になってるんじゃないや何をするかわからない。あの頃のようにスピード勝負として、慎重でも迅速に彼らの精神的な柱を叩き折り返しましよ』

そうM4に言われて思い返されたのは数年前の事。まだ私達が戦術人形としてだけでなく一部隊としてもルーキーでロシアの地における今は亡き指揮官の元で戦っていた頃、新兵器を運び込んだとされる鉄血の前線基地を破壊する任務があった。それも鉄血の方も最重要防衛地点として定めているほどに、警備だけでなく鉄血兵の装備も万全以上の基地を破壊しなければならなかった。

当時の私達の指揮官がまだ上級代行官であつたヘリアンや親交のある各支部の仲間と協議を重ねた結果、上から下された指令を大事になる前に完遂するには、不意打ちのように虚を突いて痛手を与えてから反撃の機会を与えぬままに畳みかけるしかない、にいうことになつた。

言葉にするだけであれば多少容易に感じるものの、實際に行動に移すと難しい。敵と動員できる自分達の戦力差は大きいものだから隠密で動いて攻撃するのだとしても、全てが理想通りにいくことは決してない。あまりにも分が悪すぎる博打というものだ。

それにいくつかの手段こそ思いつきこそすれど、そのどれが最適解として扱つていものなのかがわからないこともある。

現場に立つ私達人形だとか後方で指揮する指揮官という立場など関係なく、遠からずも命がかつた大博打。高く聳え立った壁のようであつた。人形を道具として切り捨てる指揮官なら間違いなく考えなしに投入して損害を、必要な犠牲として私達を捨てていた。

しかしそれを重々承知していたことなのか、あの指揮官は事前の準備としては十分に手間をかけてリスクを減らすように心がけてくれた。

月間での交代制の副官であつたトンプソンによれば、無人機を使った拠点の偵察に鉄

血の配置や巡回ルート、配備されている固定砲台。それらを始めとして周囲の環境や地形までもを必要ないのではと思うほど調べつくし、協議結果から外れず目的達成に有効、そして犠牲がないことを第一に幾つか考案していたらしい。彼は合間に仮眠を挟むようにはしてこそいたが、短期決戦として遂行すべく二時間程度しか休んでいなかったという副官の証言だ。

そして指令が下つてからの三日目で作戦を立案、それに準じた能力を持つていて適した人形による部隊を編成した。ブリーフィング中の作戦の説明も考えもつかない、酷く言えば荒唐無稽に思えるプランのように思えるそれだったが、成功に至れる現実的な手順や根拠があつた。細心の注意を払うことはあつても、第一ステップである隠密任務としてはそれは当然。無駄のないラッシュで速攻で畳みかける必要があるのは強襲任務としてもそうだ。指揮官はそれらの手段を提示し、最後に言った。

『自分は、この場にいる誰もを死なせるつもりはない。この先で戦つてくれる他の仲間達だつてそうだ。だから私にできることがあるのなら実践するし、多少の無茶ができるのならする。だから君達の力を貸してくれ。バッドどころかノーマルでもない、グッドのさつきにあるハッピーエンドを飾る為に』

夢物語を語る夢想家、それまで思つてしまつていた。ただその言葉に彼が『指揮官』という重荷を背負いながら何を見据えていて走っているのか、それがそのときになつてわ

かってしまったのである。

理想と現実、責任による重圧なんてもものじゃない。彼もまた戦場ではない何処か、私達には立つことが出来ない場所で戦っていた。この世でも見据えている者はそうそういない、別のステージを踏破することを目指していたのだろうと。

『数秒後にそちらに見回りの二人が接近するわ。どうやっても避けられない、制圧するしかないぐらいよろしくないわよ』

『ならこちらでよろしくするさ。AR15、一人任つてたぞ』

M16の声で現実を引き戻される私の視線の先には真新しいカービン銃を引つ提げてこちらに歩いてくる二人の男。奮い立っている他の目がないことで気が緩んでいるのか、談笑しながら暢気にしている。

油断している彼らが接近してきたら締め落とすべく、私はM16と同様にストラップに繋がっている分身を脇に下げ、両手をフリーにした状態で何時でも飛び出せる体勢になった。

『同時にやるぞ、私のカウントに合わせてろよ』

彼女のスリーカウントに合わせて陰から跳んで距離を詰め、一人の顔を掴みながら正面から足を掛けて体勢を崩させる。技に掛けたらあとは力任せで、相手の後頭部から体全体を地面に叩きつけるよう、大の男を倒せるほどの腕力を生み出すべく出力を上げ

た。

ドグシャツ！と男が声を上げる前に地面に倒し、混乱している間に完全に気絶させるべく相手の首に二の腕を引っ掛けて物陰へと引っ張り込む。素早く隠れるべく傍で待機していたSOP IIに胴体を掴んで手伝ってもらって暗がりに戻ると、私は首を両腕でガツチリとロックした。

虫が鳴くような声を最後に白目を剥いて気絶したので私とSOP IIは身体を丸めさせて隠す。

『こつちで二人片付けた。他の状況は？』

『今のところは物音で不審がられたりバレたりした様子はないわ。第一制圧ポイントへの道はもう問題なく行けそうよ』

『ならば打ち合わせ通りに。私と姉さんは敵拠点の中央部に侵入、ARI5とSOP IIは発電機を押さえてから陽動を仕掛けてから合流する。異議は？』

この場にいる誰もが首を横に振り、無線機の向こう側にいるROとヘリアンからも特に何も言われることがなかったので私はSOP IIと事前に偵察して見つけていた発電機の方へと移動した。

道中に『協力者』からの入れ知恵が彼ら自身によるものかは定かではない、足元に何かしらかのトラップがあつて油断が一切できない道中だった。ただその仕掛け方が素

人そのもので目を凝らしてさえいれば見つけれられる状態ではあったので、鉄血や訓練されて人間としては十分に戦えるテロリストの手口よりは容易いものではあった。

「先導はあんたに任せるわよ S O P I I。M4、これから電源を落とすわよ」
『了解』

拠点の隅にあつて一番高い、見張り台のようなものが屋上についている建物についていたので私は裏手にある発電機から伸びているコードを傍で立て掛けられていた斧で断ち切った。途端に周囲の光源が消えて暗闇が訪れて、それが月明りのみによる世界が生まれる。

人形であるこちらに対し、人間の目は咄嗟に視界の明暗の調節ができるわけではない。これから侵入する建物の方からやれ電源がどうしただとか代わりの物を持ってこいだとか言っている。

奇襲をかけるなら今だ。

「ゴー」

支援物資にあつたサプレッサーとフラッシュライトが取り付けられた上にスタンゴム弾が装填されている拳銃を持った S O P I I が裏口から入つたのに続く。正面で狼狽している男をバディに任せ、ゴム弾の特殊効果で痺れて動けなくなつて転がっている一人の両手を縛つて後を追う。S O P I I が奇襲のつもりで襲い掛かつて来た一人の

攻撃を受け流すとその顎に肘鉄を食らわせてよろめかせ、至近距離からスタンゴム弾を叩きこむ。その横に出てきた包丁を持った新手を私は撃つて無力化、階段下の小さな物置から出てきたバッドを持った男にも同様に対処した。

踏み入ったワンフロアは一部屋間取りが簡素かつ単純なつくりになっていた。それによつて隠れていると思わしき箇所を見て回つてのクリアリングに時間をかけることなく済んだと言える。

『一階クリア。AR15、二階へ上がるよ』

「引き続き後ろに付くわ。あんたも承知しているとは思うけど不意打ちには十分に気を付けなさいよ。鉄血と戦っている時は派手に暴れてくれてこつちの仕事を減らしてくれるのは良いけど、今回ののはそうもいかないのだから」

『そこまで言われなくてもわかつてるよ。もしわたしがやられそうになつてもAR15が助けてくれるでしょ?』

「それはそうだけど……一々私の手を借りなくてもいいようにしなさいよ。あんただつて他に迷惑をかけ続けるのはいい気はしないでしょ」

『でも見捨てないでくれるよね、AR15のことだから。だから信じてるよ』

無邪気な笑みをこちらに向けた際の口元を綻ばせたまま二階へと階段を使って登つていくので、内に湧いた照れを抑え込んでやや遅れながらも私も向かった。

こちらが上がりきる前に S O P P I I は高笑いしながら接近してきたらしい男一人を撃つて無力化していた。懐中電灯を持っているのか、もう一人がこちらを照らしては仲間を呼びつつ光源とは別の手に持っている何かを向けてきている。

はつきりと見えたわけじゃない。けど一瞬見えたシルエツトでそれが何なのかはすぐにはわかつた。

(起爆装置!?)

レバーを握ることで起爆させる簡易式のそれに私の頭は一時真っ白になったが、彼の注意が向いているのは今のところ S O P P I I だけでこちらにはまだだ。

私は S O P P I I が暴れたことで足元に転がっている物のうち、最適の位置にあったアルミ製のカップを彼の方に蹴り上げた。狙いとしては相手の上半身のどこかだが、当たってもインパクトが少ない体のどこかだったとしても別にいい。

狙い通りというべきか、カップは男の顔面へと飛んでいき注意を逸らすことに成功した。顔の右半分命中したことで相手はよろめき視線は S O P P I I から外れ、痛みで顔を押し立てては苦悶の声を上げた。

「S O P P I I !!」

「わかつてるよー!」

すぐに相方が撃つては駆け寄って落とした起爆装置を蹴ってこちらに転がす。S O

PIIが拘束している間にそれを手に取ってロックを掛けていると、男が呼び声に応えた仲間が三階の方から下りてきた。フラッシュライトを点灯させているこちらは隠れようがない場所に立っていて、互いに視認し合つての戦闘になることは必至。ここから敵拠点全体に伝播した騒ぎになることは避けられないことになる。

とはいえ、それがM4からの指示であり狙いではある。

「もういいわ、派手にやるわよSOPPII！ できるだけ離脱の時間を作る為にステルスで行きたかったけど仕方ないわ！ 銃声も何もかも鳴らして奴らを一人でも多く引き付けるのよ！」

「よし、効率と楽しさを重視して暴れちゃうぞお〜！」

銃口についていたサブレッツサーを高速で回して取り外すと、SOPPIIはいつもの高笑いしてはスタンナイフを抜いては敵増援に飛びかかった。連携を重視しない肉食獣同然の動きに目の前の敵たちは驚きの声を上げては手に持っている武器で応戦しようとしているものの、兵士でも何でもない人間ではSOPPIIの動きは止められない。獲物同然に狩られることしかできないし、隙を突こうとしても私がさせない。

伊達に戦術人形として数年戦い続けていないわけではないのだし、同じ部隊のメンバーの動きの癖だって把握できている。陣形を組んでいる時は勿論連携するとして指示を守っている彼女は散開しての自由戦闘になれば、アサルトライフルの人形でありな

がらサブマシンガンのそのように攻撃するトリックスターとなる。それが私達AR小隊における火力担当であるM4SOPMODIIだ。

日常や仕事だけではなく訓練だつて共にしてきた、その時間は決して短くない。だから、今こうして背中から角材で殴打しようとしている一人を撃つべきだということだつてすぐにわかる。

「そのまま行つて！残りの敵はこつちで片付けるから！」

「わかつた！」

『いいぞ二人とも。そつちの騒ぎがこつちにまで聞こえて来て連中がそつちに寄つていつてる。陽動として申し分ない働きだぞ』

「了解。そつちもできるだけ早く『中枢部』の制圧をお願いするわ。ある程度まで片付けてくれてないと私達も合流できないから！」

「心配するな、こつちも今から襲撃する。合流の予定時刻はあと四分だ、そつちも急げよ」

了承の意を最後に言つてM16との通信を終了し、同時並行で遂行していた敵方との戦闘に全意識を戻す。残り四分、それ以内に見張り台としてのこの建物の制圧は難しくないが連中の注意が多くこちらに向いてくれなければ作戦の意味がない。奴らにとつての大騒動として知らしめるのに、ここにいる連中を倒すだけではインパクトが弱い

し、そいつらを全員に見せつけにするのだとしても時間がかかる上に不十分だ。

何か、大きな花火をあげるようなことがなければ『陽動』になつているとはあまり言えないのではないだろう。

然れば……。

「RO、ペルシカさん。私達がいる建物内で一纏めで無線接続されている爆弾の位置を割り出すことはできますか？」

『残念だけど建物外部から爆発物の検出をするにはそれ専用の機器がないとできないわ。私は複数のドローンを操作しているし……』

『送られてきた映像から解析するにしても、直接内部を見れているわけじゃないからこっちからもわからないね。きっとそうするにしても時間がかかりすぎてアウト、君達二人は包囲されてそこからの移動がし辛くなつて作戦は混迷を極めることになるだろうね』

その通り。過去の経験を活かしての今回の作戦は隠密をしての陽動と襲撃に部隊ごと別れてのもので、退路を常に確保しつつ、生還することを第一とした二段階の作戦だ。

前とは違って今の敵は人間なので幾らでもやりようはあるが、それでも油断禁物。加えて裏で糸を引いている存在に関しては鉄血よりも明確な意図が見えず不明瞭だ。決して見くびることなどできない。

『たけどそこに設置されているのが有線の簡易型の物でなければ、その繋げられているパスをその全てから切断して接続し直すことはできる。多少手間はかかるけど、ROに見せてくれれば後はこつちでやるよ』

『ではお願いします。無線式であることが起爆装置からわかりますので何処かに仕掛けられている筈です。屋上付近でドローンを待機させておいてください、こちらで持つて行きます』

『りよーかい』

SOPHIEが最後の一人を倒したところで三階にまで行つてみると、二人で手分けをするまでもなく目につく部屋の隅にあるテーブルの上に二、三個の爆薬があつた。手に取つて見てみれば無線接続されている装置は起爆信号で爆発するタイプのもので、型式としては決して旧くはない。正規軍で使われている最新式の二世代分ぐらい以前のものでもきつちりと本来の用途通りに使えるのなら問題ない。

SOPHIEと目配せし合つて一つだけ持ち、風が吹き込んでくる梯子を上つてさらに上へと、この建物に目をつけた理由の一つの屋上に向かつた。先に外に出た相手の手を借りて乗り出すと何十人かがこちらに來ているのが見えた。

「ペルシカさんこれです、お願いしますー!」

『よしRO、そこでドローンを滞空させてくれ……ファイアーウォールが張られていな

い電子装置のプログラムを変えるなんて朝飯前だよ……よし、これでオーケーだ！」

信号を受信するアンテナの先の色が変わったことからペルシカの言うように他とは独立して爆破できるようになったのだろう。明確な変化があったとはいっても手に持っているのは危険物で人形の私達でも近距離で爆風を受ければただではすまない。ペルシカがミスした、ということの心配がないと言えば嘘になるがもう時間はない。

私は持っていた爆弾をSOPHIEの前に持ってきて言った。

「投げる？」

「えっいいの!?!最近みんながわたしに遠投をさせてくれないから今回も駄目だと思っただよ!!」

「あんたが前の投擲訓練でふざけてベースボール選手よろしくのフォームで投げたからでしょ。あんな真似をされたら説教してもしばらくはやらせたくないと思うわよ」

SOPHIEの短所の一つとしては他のメンバーと比較してみても無邪気な、幼い印象を与えてくるメンタルモデル所以の注意力散漫であること。先日の爆発物を使った訓練にて、実戦ではないことに甘んじて児童のように遊びを入れてしまったことで彼女本人だけでなく、訓練に参加していた皆に危うく大怪我を負わせるところだった。かろうじてそれは免れたものの、よっぽどの迫いつめられた状況下ではない限りは手榴弾などを

S O P I I に持たせるのは駄目だということになったのである。

ただ彼女は多数の敵を殲滅するべく装備の一つとして『M203グレネードランチャー』を所持しているので爆発物の心得がないわけではない。彼女も誤った使い方をすれば怪我どころじゃ済まないことを知っているし、単に型に縛られない投擲方法を模索している道にいた所でおふざけが過ぎていただけだ。

S O P I I とてあの時のことは反省しているし、こちらからはもう責めることはない。

「できるだけ高く、広範囲にわたって人の目につくように投げて。そしたらこっちで起爆するから」

「オツケー！合図したら投げるよ！」

ぶんぶんと腕をまわしてからS O P I I は爆薬を手にとって空を仰ぐ。私がさきほど回収した起爆装置の電源を起動してセーフティに手を掛け、頷くと気合の一声を発しながら空へと放った。ブオンツ！と棍棒を振ったような音と共に球技選手の如く高速で爆薬は頭上へと飛んでいく。私は新型双眼鏡を通してのアイカメラで追ってるそれがボールよろしく高く、放物線を描こうとしているうちの頂点に達そうとしているところを見極めなければならぬ。そうしての死人を出さない為の配慮だからこそ、S O P I I にこの役目を任せるのは投擲よりも難しい話だ。

ただでさえ光源が月明りしかなく物の視認がしにくい状況なのだから、これこそ注意力などを切らさずにいなければならない仕事。暗視モードが搭載されている双眼鏡があつても使い方を誤れば見失ってしまうか、タイミングを逃すなどして失敗となつてしまいかねない。

私がやつても絶対成功するとは言い切れないが、人数少ない上での適所に割り当てるなら今のがベストだろう。

(そろそろ……今！)

描かれている放物線が頂点に達したと思つたタイミングで私は手に握っている起爆装置のレバーを押し込んで起動させ、夜空に綺麗とは決して言えない花火を咲かせた。わずかに遅れて聞こえてきた爆音が一帯に響き、爆炎による光が辺りを照らし出す。注意が一気にこちらに向いてくれることを願いながら、私は背負っていたキット一式のパーツをその場に下ろしては展開、SOPIIに手伝ってもらいながらそれらを組み上げる。

『AR15にSOPII、あなた達の方に血気盛んそうな大群が向かおうとしているわ。武器は大したことないけど、あなた達本来の銃を撃てないんじゃないや戦うのはかなりキツイことは間違いないわ』

「ええ、今こつちでも目視で確認できた。まともに相手をするつもりはないけど、もう少し

しここで粘っていないと陽動にはならないしちよつと耐えてみるわ。M4にM16、そつちの状況はどう？」

『警備員みたいな人がいる程度で今のところ楽よ。そつちの騒ぎでちよつとざわついてるし、悪い想像を勝手にして浮足立ってる。いつでも合流していいわ』

『それと、だ。こつちの方で『協力者』でなくともこつちら一帯の中心人物、まあリーダーのようなもんだろうが目星も点けることが出来た。制圧するのに私達二人だけでも遅れを取りはしないが、パフォーマンスをかけてまとめて無力化するには不十分だ』

「わかった、タイミングを見計らって合流する。ちなみにそつちって何処の——」

M4と位置関係の確認を済ませてから改めて連中の様子を見てみれば、屋上にいるこちらに罵声を浴びせては建物内部に突入しようとしているのが見えた。目の前に来ればすぐに殴り掛かるなりして力で押しえ付けようとする勢いだ。

『あいつらが言ってたグリフィンの操り人形だ！』

『オレ達の邪魔をしやがって！ただじゃおかねえ!!』

『殺せ！殺せ!!殺せ!!!』

そう声を揃えて馬鹿でもわかるぐらいの殺気をこちらにわかるように言葉に乗せての罵詈雑言を吐いている。ロボット、人形にも人間同等の扱いを、などと宣っている人権保護団体には到底思えない様相にS O P I Iも『うわあ……』とドン引きしているが

無理もない。化けの皮を剥がされた悪人とは大体こういうものであり、見るのも聞くのも嫌いうことで忌避したいと思うのも当然だ。

（単に私達グリフィンに守られたくない、ならまだわかるわよ。だけど庇護下に置かれることを拒んでるだけじゃなく、自分達に害を与えない人形だけを保護してそうじゃないのは排除する、なんてロボット人権保護団体として矛盾してるじゃない）

わかつている過激派の考えの核心部というのは、『保護』という名の自分達の支配が及ぶか否か、その一点に尽きる。外見だけでなく人間同様に反応を示すことを始めとして人権保護団体の連中は人権というものが自律人形にもあると主張している集団だ。まだ穏健派にいる人達はそう声を上げるか、直に人形達にそう思わないかなどと聞いては訴えたりするだけで、迷惑ではあるがまだ許容できる範囲である。

私達が相手取っている人達は自分達がマウントを取り続けたいが為に、考えにそぐわない人間や巡回している人形を攫っては痛めつける、または殺害・破壊するなどして些事などと片付けることが決して出来ないことを繰り返してきた。暴動を起こしてまで騒ぎ立て、陰では正当性などなく人を殺すほどに暴力を振るっているのは犯罪でしかない。

（もしかして『協力者』が元軍人とかの戦闘のエキスパートじゃなくてこんな民間人の枠にいる人達を『使って』いるのは、勘ぐられないようにするだけじゃなく凶暴性を知ら

しめる為?)

いや、それをほとんどの誰も持っている裏の顔を教えるようなものであり、秘めているそれを世間にさらして何になるのだろうか。グリフィンの目を掻い潜って銀行を襲撃した、という敵対関係にはある彼らからすれば実績ともとれる事実を残せはする。私達に一泡吹かせた荒くれ団体のエリート、なんて肩書きを得れはするが、軍か政治の世界に身を置いていたと思われる『協力者』が旨味をあまり感じはしないだろう。だが……。

(……駄目ね、私だけが考えても答えに行き着きそうにない。こいつらを捕えた後で皆で考察しつつも追うしかないわ)

とにかく、だ。眼下ではそろそろいいだろうと思うぐらいに過激派の連中が集まってきたている。S O P I I が封じた梯子の扉の方からも怒声が聞こえて来ては叩いている音も聞こえてくる。

もう頃合いだ、と私は先程組み上げて設置していた装置、ジップラインランチャーを起動し、M4とM16がいる建物の屋上へと砲口を向けて取り付けられているパネルの方を見る。計測されて表示されている距離が装置の射程内に収まっていることを確認し、側面についているトリガーを引いて射出した。

ドルルルルルッ!と発射されたジップラインが伸びていく音の後にグラツプルの

アンカーが狙った箇所に食いついて固定されたことが、パネルが『SUCCESS』と成功の文字を表示したのでわかった。

既に用意されている二人分のフックの内の一つをラインにかけると、前に立ったSOPPIIも同様にベルトに留め具をつけるまでの準備を終える。そしてちようど力任せに開こうと顔を少し覗かせてきた人に手を振りながら言った。

「バイバイ」

満面の笑顔と残すと前へと踏み出して地上の連中から見れば滑空していると思うだろう速度で合流地点へとSOPPIIは移動していく。私もすぐに後に続いて宙へと足を運び、フックのベルトを握り締めながら舞った。ジップラインを滑る音を耳にしながら見下ろせば呆気にとられたようにこちらを見上げてくる人間達の姿がある。向こうからすればラインが闇夜に溶けて見えていないだろうので、突然何の理屈もなく移動しているように見えているのかもしれない。

少しばかり悦に浸っているとあつという間にジップラインのゴール地点に近付いて来たので、フックの金具でブレーキをかけて勢いを弱まらせる。先に到着したSOPPIIが端でM4から聞かされた方角や位置などを確認しては立っているその場を軽く叩いて頂き、バックバックに手を突っ込む。

私はその一連の動きを見て問題ないと思ったのでSOPPIIにこれからの下準備を

任せ、無線機に手を当てながら言った。

「M4、十秒後にこっちは突入する。そっちもタイミングを合わせて」

了解、という隊長からの返答がくるのとSOPPIIがそこに二つのラペリングアンカーを打ち込むのはほぼ同時だった。安全確認として先にフックを掛けてワイヤーを引つ張るなりして安全確認をする。

私もラペリングする前の最終確認としてそうしてからSOPPIIと建物の外壁に両脚で張り付く。スタンゴム弾のマガジンを新しいのに入れ替えたタイミングで、室内の方から乱暴に金属扉が乱暴に開かれたような音の後にフラッシュバンが炸裂、聞き慣れた声が投降を呼びかけている。

その時には私とSOPPIIも窓ガラスを慣性と共に蹴破つては窓際にいた一人を地面に倒し、銃を構えて眼前を見据える。薄手のツナギの上から保護団体の上着に袖を通している男が数人どころかすぐには数えきれないぐらいの大人数、その全員が拳銃やらライフルを持って室内に入っているM4とM16に向けて撃っていた。

私はスタンゴム弾を最も近距離にいた者に撃ち込んで無力化し、フラッシュバンの影響を受けていない連中の対処を優先するべく動いた。

「相手が素人だからと無理して踏み込むなよ！戦闘の腕はともかくとして武器だけは侮れないんだからな！」

「言われなくてもわかっているわよー」

こちらに気付いた数人が銃口をこちらに向けてくる。先手を取って倒すことはできても、数は相手に分があるので反撃がくることにはなる。近くには遮蔽物はなく、隠れる場所はM4とM16がいる場所ぐらいだ。

できることがあるとするならば、と私はふらついている一人を目の前に引つ張って射線を遮り、泡を食ったような顔をして硬直した者の首筋に一発撃ち込んだ。その場に崩れ落ちるのを最後まで見ずにさらにもう一人、と順々に視界に映る最優先ターゲットを見ては対処した。

S O P I I と分散して眼前の敵を倒していると、弾幕が薄まったことでM4とM16も立て直して一人ずつ確実に無力化していく。フラッシュバンの影響がなくなる頃には、もうたった一人をこの場にいる小隊全員で追いつめたような状況だった。

「ここにいる奴が最後?」

「ええ、目標にはもう爆薬を仕掛けていつでも起爆できるわ。その周囲も制圧して誰も居ないから大丈夫よ」

「双眼鏡ではわからなかったが重火器も腐るぐらいたくさんあつたぞ。マシンガンにグレネードランチャー、さらにはRPGまであつて宝物を見つけたようなもんだった」

この拠点にいたロボット人権団体、その過激派が強気でいられたのは扱い方を間違え

なければ戦術人形にも通用するSUVに取り付けられたガトリング砲が見受けられたことからそうだと考えていた。まさかそこまでの物資を隠し持っていたとは思わなかった。

しかし……。

「ロケットランチャーとか撃てば派手に爆発する物じゃなくても、銃弾を撃つだけのマシンガンを表に持ち出していかなかったのは何故なの？」

「考えてみればいい。私達が今居るのは危険指定区域になりたての場所だ。そうなる政府でも鉄血だけでなく民間事業の大部分をグリフィンに任せているとはいえ、何も知らないで放っておく、なんてことはし難い。世論はともかく、余計なことに食いつきやすいマスコミなんてのは黙っていないだろうさ。だから一応の機械による監視はつけて体裁は整える。藪を突かない様子にながら様子見をするとしては、一番考えやすいのは何だろうな？」

「……そうか、サテライトスキャンね」

世間に注目されるようになったことで、仕事はしていないわけではない、という言い訳を嘘もなく成立させる為にも最低限はそうすることはありえる。本当に目の上のコブとして邪魔になるのであればグリフィンが手を下すだろうから、安全圏から様子見をして矛先が自分達に向くかどうかだけを衛星で確認し続ける、なんてことは想像に難し

くない。

そうなる、大々的にライフルやマシンガン、銃器としては重くて大きいRPGを出していないのも納得できる。もし全員がそう武装していれば自分達の手の内を晒すようなもので、組織の規模を知られてしまうのと同じだからだ。

そう私の中で纏めていると、戦意を喪失しているのが目に見えて分かる一人にM4が歩み寄って言った。

「そこまで時間がないけどこれだけは今すぐ聞かせてもらいましょうか。あなた達に色々とアドバイスをして物資を提供した人がいると思うのですが、一体どこにいますか?」

「し、知らねえよ……!」

男がそう震えながら答えると、近くに來ていたM16が無言で拳を突き出して壁に穴を空けた。バンツ!と壁紙やそこに立っていた鉄材がひしゃげているのを見た男は情けない声を口にしては尻餅をつきガクガクと震え始める。

「言えよ」

「知らねえんだってえ!オレは下っ端であんたらにとつての肝心なことは何も知らされていねえんだよお!」

「あんたもいい歳してんだ、何も疑問に思わなかったわけじゃないだろ!妄信的に上か

ら言われる事に従う馬鹿なのかお前は！」

おつかないねえ、とS O P I Iは何処か楽しそうにしながら尋問を眺めておりウキウキしている状態だが、生憎ながら私はそんな気分じゃない。

「なんなんだよ、結局はあの一家が言った通りになっちまったじゃねえかよ……！」

そう失禁しながら泣き崩れるその中年の男への苛立ちが高まってきた時だった。外の方から聴覚には不快でしかない最大音量のハウリングが聞こえて来て咄嗟に耳を押さえる。反射的に窓の外を見て音の元を探してみると、拠点の各所に点在していたスピーカーが私達が居る建物の数メートル横にあった。

『あく、テストス。聞こえるかな、人権保護団体の諸君。それとその場に潜りこんでいるグリフィンの人形の君達も』

状況を把握している、と演算で即座に叩き出して部屋を見渡せば天井の隅の方に監視カメラが一台取り付けられており、機能していることが示されているようにフロント部分のランプが灯されていた。それを撃つて壊してやりたい衝動に駆られて私の名の元となった分身の照準に定めたが、その前にM16がハンドガードを掴んで下げてきた。言葉のない目配せで脇に下げると、M4がカメラに向かって言った。

「あなたがこの人達には協力的な立場にいた方ですか？」

『そうさ。軍の余りものの武器や策を用意しては提供していたのは僕だよ。とはいって

も、やっぱりというべきかなんというか、考えられるうちに可能性が一番高い結末になったか』

私は優男のような声による言動に訝しんだ。M16のプロファイリングによれば『協力者』は成功を収めようとする、確実性を求めた性格であるらしい。もしその通りであるならば、結果に執着しているような様子が無ければ納得できない。

彼女の推測が外れたのか、と横目に見ると彼女は彼女で表情を変えることなくカメラの方に視線を固定させていながら口元に手を置いていた。このような仕事かつ真顔でいるということは長年の付き合いから察するに何かを考察している時であるのだから何も言えない。精々今出来ることがあるとするならば、SOPIIが余計な口出しをしない様に見張っていることと、私なりの情報分析をすることぐらいだ。ROとペルシカには周囲の状況を報告、そして助言をもらうぐらいしか期待できない。

となると、現時点ではM4しかこの『協力者』だと思われる人物としか言葉を交わせないだろう。

「様子からすると、あなたはここの何処にもいないようですね。私達が来るのがわかっていたのであれば、もっと強力なものを用意しておくべきではなかったのですか？」

『宝の持ち腐れってやつさ。強い兵器を与えたとしても扱えなければ意味ないだろう？』

彼らに扱えるギリギリの範囲といずれくる君達という戦力そのものを鹹味していたんだけど……そもそもそれを使わせない戦法を取って来たか。民生用に出回っているのとは違う、I. O. P 自慢の戦術人形による特殊部隊は伊達じゃない、ということだね』
「……どうやら私達の事を知っているようですね。一体何者なのですか？」

この者が所有している情報網はある程度までの機密情報まで知れるらしい。

グリフィンという組織の下で構成されている人形部隊というのはい多いが、大部分は指揮官という地位を得ている人間の指揮を得て活動している。私達 A R 小隊のように指揮を受けなくても作戦の遂行が可能な部隊というのは公式で知っているのは、組織内でも受け持つことになる指揮官やヘリアンのような代行官、または亡き社長のクルーガーぐらいなものだ。

この男が何処まで知っているのかまでは測れない。ただ、私達が特殊部隊による人形であることまでは把握していることは確かだろう。

『残念ですがあなた達とはお喋りするつもりはないよ。こちらも遠からずも命を懸けている身なんだから、引き際ぐらいは心得ておかないとだし情報もくれてやるつもりもない。でもさ、僕と話している君はなんでそこにいないと思うんだい？』

「それは……」

『まあ大方、高みの見物を決め込んで自分は手を下そうとしてない、なんて感じていたの

かもしれないけどね。根拠だとかお決まりみたいなのがあつてそう思っていたのなら、まあわからないでもないよ』

その瞬間、弾かれたように顔を上げたM16がSOPPIIを押し退けて窓際へと駆け寄っていく。何かが閃いたことで外を見ているのだが、様子からして過激派の連中がこちらに戻ってくることを警戒しているわけではないようだった。

訳も分からないSOPPIIが彼女に文句を言っているが、私は口を塞いで遮断して黙らせて状況を静観しようとしたことで気付いた。何時からかはわからないが、ROとペルシカの声が全く聞こえていない。

無線の制御端末の画面を見ると、ジャミングされて不調を来していることを示していた。

『僕の狙いはね、AR小隊。君達がここに来て過ちを犯した、ということを世間に認知してもらおうなんだ。ピンク髪の子は気付いたようだけど、今さっきここ一帯に外部からの無線通信を妨害し始めたんだよ』

何か、嫌な予感がした。ドス黒くて形のないイメージの何かが私のコアを握っているどころか、それを隙間なく包み込まれてしまっているような悪寒が背筋を走って震えた。

まさか、暇を持て余した正規の兵士、高額な報酬を第一とする傭兵でもなく、保護団

体のペリカンのタトゥーを入れた過激派の人達を利用したのは――。

――私達を、A R 小隊のみを容易におびき出す為――

『外部からすれば突然の通信途絶となれば、君達が独自に行動していたとしか思えないだろうね。目的こそ君達の上司こそわかっているも腹の奥では何を考えているかなんて誰にも理解できるはずもない。だからこそ、今がその時だ』

「よせ、やめろ!!」

M 16 が振り返ってカメラに向かって叫ぶ。が、制止させられるはずもなく。

『ドカーン』

私達がいる建物の周りで、爆破が起こった。

58. D44N事件・結 —Which is easier—

唐突なことに惑いながらも敵対関係にあったロボット人権保護団体における過激派の連中を拘束した後、外に出てみれば地獄が広がっていた。アイカメラを通じて電脳に伝わってくる景色がこれほどまでに何かの間違いであつて欲しいと思つたことはない。そして凄惨たるものは何たるか、それをまさに見せつけられているような状況だつた。

「一体、どうしてこんなことを……!?!」

そう声を漏らすM4に言葉が出せないのは私だけじゃないと思いたい。戦場に口ドアウトされてからのこれまでは戦力差に気圧されてしまったことはあつても皆を奮い立たせる為に失つたことはなかった。

しかしそんな過去の事を思い返すことを自分から禁じているかのように、凄然たる現実から目を逸らすことはできなかつた。ついさっきの爆破で全ての建物が崩落し、爆炎によつてそこにある物全てが燃えている。もちろんそれは、『協力者』と思わしき人物が仕掛けた爆薬から運よく生きていた人達でさえも飲み込んでいた。

「特危に抵触するぐらいの奴らと組むことによるメリットと奴の最終目的が何なのかを
ずつと考えていたが……最悪な所業をマジでやりやがった……!」

「わたしにはわからないよM16! あいつは結局は何をどういうことをしたくてわたし
たちをここにおびき出したの!?!」

「あんたも混乱するのはわかるけど落ち着きなさいよ! 騒ぎ立ててもなんの解決になら
ないのはわかっているでしょ!!」

そんなことを言ってる私の方は視覚と聴覚を機能させているモジュールだけでなく、
思考を司る電脳を物理的に、コアも自己破壊で機能不全にさせたくなる衝動が湧いてき
ていた。時間を巻き戻せるなら、とかそんな非現実的なことばかりが頭に浮かんで即
座に自分の中で叱咤しては否定して。そんなループを繰り返しては自分一人だけの暗
色のみの思考の渦に沈んでいる。

「え、M4、一体なにを……!?!」

「まだ……まだ助けられる人がいる筈……!?!」

M4はその場で立ち尽くしては愕然としていたり、仲間に掴みかかっていたり、まし
てや負のスパイラルの中には留まらずに、まだ助けられる者を探そうと歩き始めた。彼
女もまだ現実への理解が終わっておらず、明確になにをすべきかというのはわかってい
ない。それでも、何かをしないとイケないということで行動に移したのだろう。

だがそんなことをしても無駄だ。バラバラになった死体に瓦礫をどかしては現れる人体の一部を見つけてはそこに放るしかない。私達の隊長であるM4はあくまで戦術人形。『指揮官』という人間の代わりとしての現場指揮官であつても災害救助隊に属しているわけじゃない。

この場にいる私達全員は救命措置の心得はあつても致命傷を負つたことで命を落とした、死者を蘇生できない。魔法は使うことのできるファンタジーワールドの住人じゃないのだから、死人を助けたいと思つてもエゴでしかない。

彼女も演算による思考でどこかでわかっている筈だが、昔から抱えている強い責任感故に行動せずにはいられないのだろう。それも、私達が意図したことではなかったとはいえ、こうも犠牲者を生み出してしまった身として居ても立つても居られないのも無理もない。

『協力者』であつただろう男の策にまんまと乗せられ、こんな事態を招いてしまった。

その事実だけはもう、どう足掻いても変えられない。

『……ちら、北……部所……AR……』

ノイズが混じりながらも聞こえてくる声にM4を除いた私も含めた全員が反応してはROが操作しているドローンを空を仰いで探す。夜空と同色のそれを視界を補正する機器なしのアイカメラで探すのは難儀ではあるが文句を言つても仕方ない。

私もR Oからの呼び掛けに応えては探そうとは思ったが、隊長の後姿を見てその選択肢が電脳から消え去った。家屋から出ては火にくるまれて叫んでのたうち回っていた一人が、M 4による消火しての介抱も虚しく息絶えてしまったらしい。黒焦げになったその者の胸に手を置いては項垂れた友達は、こちらに顔を見せずに立ち上がって次の生存者を探し始めた。

とても見ていられなかった。責任問題で明日には解体されるかもしれない、明日が我が身だというのに。責任感が強い彼女の事だから、内の方では不甲斐ないとして自分を責め立てていたりして色々と逡巡することがあつて頭を抱え込むほど苦悩している筈だ。

それでも搜索に当たっているのは、苦痛からの逃避によるものか、それとも単なる責任感か。そのどちらなのだとしても、判断に迷つて地団駄を踏んでいた頃とは違つているのは確か。ただそれを成長と言つていいのかどうかはわからない。

だが一つだけ確かなこととして言えるのは、思考に逃げているばかりじゃ隊長とは対等な仲間として隣に立てなくなるといふことだけ。R Oを通じてペルシカや指揮官と連絡をとる役目をS O P I IとM I 6に任せるとして、私が今ここでA R小隊の隊員として、M 4にとつての最初の友としてやることはただ一つ。

意を決した私は二枚の壁が寄りかかり合つてかろうじて崩壊にまで至つていない箇

所の前で試行錯誤している彼女に近付いて言った。

「……一人じゃできないこともあるでしょ。あんたは隊長なんだから私達にも命じなさいよ」

「でも……AR15はこういうことはいつも……」

「勘違いしないで、結果を残せないことがわかつているのなら私は動かないわよ。でもそれを人命救助にまで持ち込むほど馬鹿じゃないわ。それに万が一にでも可能性があるのなら幾らでも手を貸すから」

これまでの行動とは矛盾しない言い訳を思いついたままに言ったが、違う。理屈こそ色々と自分の中で捏ねてはいたが、単純に今の友達が見ていられなかったただけだ。

「ごめん……それから、ありがとう……」

「……礼はいいわよ。さっさと一人でも見つけて助けて、後で情報をもらいましょ。私達がもしミスしていたのだとしても、潔白ではあることを証明する第一歩としての布石なのだから」

うつすらと涙を浮かべるM4にはそう返したが、胸中で生まれた自身への負の感情を抑え込んでいる状態で、少しばかり気持ちが悪くなっただけだ。この救助活動は成功するという保証はなく、私達にとって利の有る結果を得られるとは限らない。

それに、これは一種の現実逃避だ。目の前のことで必死になれて一時的に苦悩から逃

げれることでしかない。

「だというのに、それらをすべて無視して友情を優先するとは、と我ながら何してんだと思う。もつと別にやる必要があるだろうに。」

「ほら、そっちの方にまだ手遅れじゃない人がいないのならこの壁を倒れないように補強してから内側を探るわよ。なんかその辺で使えるのはない？」

「周囲が火の海になってきているから何も……」

それはそうだ。周囲にあるのは瓦礫とかいった用途などないものしかなく、使えそうなものがあつたのだとしても大方が火炎に飲まれて使えない状態になっているだろう。

早急に見渡しても役に立つものが無いと判断した私は最終手段としてバックパックに入っていた予備のラペリングロープを手にとってM4に投げ渡した。

「これで壁が倒れないように補強して踏ん張っていて。敵との銃撃によるリスクよりも高い役目をあなたにやらせるわけにはいかないわ」

「……わかった。でも私の方から見ても危なくなったりしたらすぐに声を掛けるからその時はすぐに退いて。そうでもしてくれなかつたら無理やりにもあなたのAIにアクセスして呼び戻すから」

「心配しなくても自暴自棄になつたりして身を投げ出すようなことはしないわよ」

本心からの言葉を言ってからM4の補強が済むまでに様子を窺おうと中を覗き込もうとした途端、こちらが触れるよりも先に何かの拍子でバランスが崩れて二枚の壁が内側に倒れた。ガララララツという崩れる音の後に地響きが足から伝わり、土埃が私達に舞ってくる。

内に誰かいたかどうかはわからない。が、まだ助けられた命があつたのだとしたらもう手遅れだ。

遂に我慢できなくなったのか、M4は悲痛な声を漏らしてM4が倒れた壁に駆け寄ろうとした。彼女が感情のままに行動しようとするのを制するべく、己も律することを兼ねて片腕を掴んだ。

「離してARR5、きつと中に誰かいるんだから！」

「もうダメ、諦めて！いたんだとしてももう手遅れ！次の要救助者を探す方が……！！」
効率的、という言葉が発する前になんとか飲み込んだ。人の命を無視した無情であるそんなことを言えばM4の精神を逆撫でしてさらに追いつめることになってしまう。

加えて私が手を貸して横倒しになった壁を起こしたとしたら、見た目が最悪であるサンドイッチの具を見ることになってしまいかねない。下手すればM4のメンタルモデルが崩壊し、精神構造を司る機能不全を起こすことだって十分あり得る。ただでさえ脆くなっている今では目の毒だ。

「気持ちわかるけど冷静になってM4！今回ばかりは私が……あんたには非がなかった、どうしようもなかったことは知ってる！こんなことをするだなんて事前に気付くことなんてできるはずないんだから!!」

今まで抑え込んでいた感情が爆発したのか、私の呼びかけには耳を貸していないかのように辿り着こうと藻掻く。欲しいものに手を伸ばす駄々っ子のように、両手を伸ばして求めている物を手にしようとしている。ただ私が制そうとしているのはそのかわいらしいような、微笑ましく思うような状況によるものではない。

加えて戦術人形同士とはいっても出力に多少は差異はある。それもI・O・Pの中でも特別製であるM4の力は私よりも強い。したがって、私一人が力づくで止めようとしても結局は無駄であり時間稼ぎにしかならない。それにメンタルモデルによる影響による力が加わっているからか、体術の訓練で感じるそれよりも強く感じる。

あともう少しすれば振りほどかれる未来が目に見えたその時にM4の肩に別の誰かの手が置かれた。

「指揮官からの指令だM4。『ただちにそこから撤収して帰還。別名あるまで待機』だそうだ」

「なん、で……なんでですか?!」

やりきれない表情のM16にM4が掴みかかるが、シャツの襟を掴まれても引き剥が

そうしない。ライフルを持っていない片手を力んで震えている相手のそれに置いて、抑揚のない声で言った。

「曰く、自分達グリフィンが被ることになる被害がどれほどになるのかが分からない以上、下手に現場に触れて証拠を残すことがないようにしろってよ」

「まだどこかに私達が助けられる人がいる筈です！生存者の有無を確認せずに退却しろだなんて納得できるわけじゃないですか!!」

一般人からすれば戦術人形とは自分達の代わりに戦う道具という認識を持っているのは普通だ。銃とナイフを持って白兵戦に望ませ、自分達に敵対する存在を殲滅させる。戦争においての兵士の役目を任せられた操り人形、それが私達だ。

だがそんな道具の元を辿っていけば自律人形という起源に立ち上っていくわけであり、私達は形はどうあれど『人助け』の主目的から生まれたという事実が浮かび上がる。接客や介護といったような生活を支えるのがわかりやすいもので、看護師だとか消防士みたいに直接的に救命に当たることも例になっている。

だからM4が言いたいことは理解できて、私としても解せない。グリフィンが関与していることはもう曲げられない事実なのだから、ここに残ろうともそう変わりはない。もう既に政府に衛星によって監視されているのだとしても、人命を助けるなり弔うことは決して悪いことにはならない筈だ。

「……そんな顔をされなくても言いたいことはわかるよ二人とも。だが最後に奴が言い残した言葉の通りなら、もう既に私達が関わったという事実を嘘に織り交ぜた詐欺の情報が出回っているのだから。非難されるのは私やお前達だけじゃない。グリフィンそのものが誇りを受けることになり、事実確認としてお偉い方に踏み込まれることになる。指揮官はこれを好機としてこき下ろそうとする連中から組織を守る為に退け、つて言ってるんだよ」

「そこにいるかもしれない人一人を救うのではなく組織を優先するという事なのですか!? それでは何の為にグリフィンという組織があつて鉄血と戦っているのですか!! 彼らを助けて守る為にやっているというのに、それでは自分で否定しているようなものですよ!!」

「上層部からすれば私達の事なんて知ったことじゃないだろうさ。あくまでグリフィンは傭兵の集まりのPMC、本来なら民間軍事として戦闘員を派遣するのが本分だ。政府から委託されたその役割を全うしようとしているのは北米支部とは別の指揮官やその人形達、それとここにいる全員さ。活動する足掛かりとか建前とでしか捉えていないだろうよ」

戦争難民を本当に助けるのだとしたら本当にそういつた民間企業に任せるのが筋ではあるが、生憎ながらそういつたことをやってのけれるのは他に見つかっていない。結

果を出せていなければ、出し続けていなければ意味がないのだ。ロクに戦うことが出来ない自転車操業のようになって組織には任せられないとするのは自然だし正しい。火の車どころか自転車操業になっている他所のPMCにもだってそうだ。

だからこそ尚更腹が立つというものだ。他では得られていないそうした役目を足蹴にしているというものは。ここで何もせずに離れるという事こそ、軽んじているとして付け入られる隙を与えるという事だろうに。

食い下がろうとするM4とは別に私は指揮官に直接抗議しようとしたが、その前に別の声が耳に届いた。

「やめようよ二人とも……まんまとやられてM16だって悔しいんだからさ。わたしも本当ならこんなことをした奴にマガジン全部の銃弾を撃ち込むとかしてやりたいよ……」

SOPIIが俯きながら消え入りそうな声でそう言った。普段から常に無邪気でポジティブである彼女にしてはあまり見られない様子なので眉を顰めていると、ROの声が無線を通じて聞こえてきた。

『今回の事件の責任をどう取るのかという話になる前に、ペルシカさんから直接申告があったそうよ。信じたくはないんだけど、本人の端末から電子メールで送信されたって……』

それを聞いた瞬間、S O P I I の様子も相まつての確証も何もない想像にとてつもなく嫌な予感がした。人で言うならば血の気が失せる、という体験ならこれまでにも何度か経験したが、思考が完全にそのことだけに持つて行かれる程のことはなかった。

「まさか……!」

『そのまさかよ。経緯はどうあれ、当初はペルシカさんが今回の事案を持ち込んで指令を下したことはもう変えようのない事実。だから彼女は責任をもつてグリフィンとの正式な情報連絡員としての役目だけじゃなく、16 Lab そのものの研究員をやめるぞうよ』

私が抱いていた世界の色彩が暗く反転したというのに、夜空に浮く月は変わらずにただ紅いままだった。

それが、今から約十八年前の出来事だ。アツシユからだと彼女らが詳細に何を感じて思ったのかまでは正確に測れはしない。同じ戦術人形という立場による感性で思うことはあれど、結局のところ自分はそのことを断片的に知っただけの他人であつて『当事者』ではない。何もせずに見届けて干渉しないのであれば、ただ見るだけの『傍観者』とそう変わりがない。

ただし、アツシユはこの先に見据えているのでこれも知っておくことに越したことはない。

手元の端末に映し出されているこれはグリフィンのデータベースにていくつものプロテクトを掛けられて保存されていたデータによる報告書だ。ハツキングして手に入れば、解析した後に暗記するぐらいに何度も読み込んだがやはり気持ちのいいものではない。出来事を正確に報告することは常に求められていることではあるが、そこに筆者個人の考えなどを織り交ぜられてはもうそれは報告書ではない。ただの論文、大学生が教授に提出するレポートと相違ない。上司に見せるのならつつらとそんなことを織り交ぜるべきではない筈だ。

しかし、事実を追うのであればこれを捨て置くことができるものではない。現実逃避と捉われてしまわない様にまた目を通すこととしよう。

文字数としても相当であるこの報告書を簡潔に纏めれば、表向きとしてはグリフィンによる工作として破壊されたということになっている。それに伴ってこの事件、『D 4 4 N事件』によってグリフィンに対しての責任追及は一応あったものの結局は時の流れもあつて一応鎮静化されたらしい。当時はグリフィンによる正式発表でワイドショーが取り上げ、事件に関係のある情報などが挙げられては周知されたようである。目立った交戦による跡が見つからないことから、危険指定された者達が事故を起こしたものの、鉄血による破壊工作を受けたのだの、グリフィンによる排除がされたとか、身勝手なコメントーターたちによる考察があつたみたいだ。

その延長線上で衛星による監視データはなかったの云々など、アメリカ政府そのものにも疑惑の目が向けられたのだが無理はない。特別危険指定に記録されたのは土地ではなく、そこで根を張っていた人間達だ。過激派集団による暴走行為でいつ自分達に飛び火しそうになるのか、と考えて緊張していた市民たちが政府も疑うのは自然な流れだ。なにせ特危に指定してそのあまり問もないタイミングでこんなことがあつた、それも衛星によるデータがないのでは、一般人からだと言論を多少なりとも抱かざるを得ない。しかし世論なんてのはそんなものだ。何事もなければ杞憂として心配の色が薄

れていつしか忘れてしまう。現に過去を他の媒体で遡ってみてもロボット人権保護団体の過激派によって表沙汰になる事件はなかったらしく、その関連の事で世間が騒がしくなったことはないようだった。

一方で、A R小隊の彼女達だ。自決した犯人による偽情報の流布もあつてしばらくは一般市民や政府における一部の官僚からの追及があり、耳どころか心が幻肢痛を覚えるぐらいの思いを彼女達はしたことだろう。ただ、これまでにおけるA R小隊による活躍で保護区などにおける事件解決などの功績や鉄血兵から救われた人たちによる市民の声もあつて、全員が『A R小隊の暴走』ということには疑問を持たなかったわけではない。

筆者によればA R小隊を解体、という意見も出たとのことだが、各人形にはメンタルモデルにおける傷心レベルを除いては異常が全く見られなかったことと、部隊の成り立ちによる特異性や重要性からグリフィン上層部の総意によつて却下された。表向きとしては不祥事を起こしたのはグリフィンの方なのでそんなことをできるとは考えにくいものの、巨大にも膨れ上がった組織には公開できないような裏のパイプが存在するというものだ。そうした繋がりのある人物による口利きか工作によつて誰にも異を唱えても無効にしたのかも知れないが、それも憶測でしかない。グリフィンが裏取引をしたという証拠も何もない以上はそのようなことをしていても無駄の一言に尽きる。

腰掛けてある椅子の背もたれに体重を預けては溜息を吐き、液晶画面から視線を持ち上げる。目線の先には一丁の銃が机の上で明かりを反射し金属特有の輝きを放っている。片手で持ち上げられるそのグリップを持ってもう片手で銃身を撫でれば冷感を伴つての硬質な感覚が伝わって来た。

「……あなたたちも何かの為に生まれた存在なのに、どうしてこんなにも違うのだろう」
その独り言に含まれている意味はアツシユにしかわからないものがあつた。きつと彼女らもそういった渦中から助け出されるべき存在なのだろうが、今の自分ではあそこから一人しか助け出せない。

特殊能力でも機密情報を持つているでもない、経験に基づいた力量を除けば一兵士とそう変わりのない彼だけが信頼できる唯一の人間である。その彼の境遇とその因果を知っているから、というのもあるが、抱いている意思を嘘偽りのなく直に聞くことが出来たのも大きい。富や地位の為でもない、自分をここまで生き永らえさせてくれた人達の行いをなかつたことにしないようにすることは自分にも通じるものがあつたのだから。

共通項が多いからといって彼を理解していると驕るつもりはないがこうは思う。真実を知つて再起できない程の心の傷を負つて欲しくはない、と。

「さて……どうなるかな」

アツシユが以前入手した情報によれば、『暗殺者』が今日ぐらいに現地入りすることになっていゝる。その者をどうするかは彼ら次第だがどう転んでも自分にとつてはそう不都合があることはない。

遅かれ早かれ、彼もいずれは知ることになるのだから。



聞かされた予定時刻に近付いてはいるものの、さつきから内に沸き上がる気持ちが先行してモヤモヤした気持ち膨れ上がるばかりだ。コンテナに寄りかかつては手に持つてゐる通信端末の時刻を確認してみると前回から一分も経過してゐない。

どれだけ心待ちにしているのかと自分に呆れていると、冷たい風が吹いてきて私の髪が靡いた。反射的に閉じていた目を開くと前を横切った鮮やかな色合いの紅葉が地を滑っていたので、何の気もなしにそれを目で追う。風に乗せられているとはいえず手に取ろうと思えばすぐに追いつけるそれだったが、次第に勢いを増して地から空へと飛んでいった。風や水があれば別の場所へと運ばれる紅葉が見えなくなるまで見送っていた私はあいつの髪の色は本来ならどのような色だったのだろうかと思う。

姿を見かける時はいつも目になっている白髪を間近で見ればわかるのだが、彼の髪は昔の色を窺わせるように赤みが残っている。人間の頭髪は老人になるほどに歳を重ねるよりも先にほんの少しばかり変色するという。だがあれほどはつきりと見えるようになるのはアルビノぐらいなものだ。遺伝等による個人差があるとはいってもそれでもあそこまで顕著に変わっているのはそうそうないだろうし、生まれた時からあのようにであったという風に思ってしまうのだが本当にそうなのだろうか。

と、そこで私はあいつのことを考えてしまっていることに気付き、その思考を左右に振り払った。あいつ自身は頭髪のことに対しては抜け毛を気にしているぐらいで色についてはそこまで気に留めているようには見えない。もう既にそういうものとして奴自身もう受け止めているのだから自分がそこまで考える必要性はないだろう。メデイカルチェックによる健康状況が悪いという風にも聞かないし、自分の方からとやか

く言う事はない。

空を見上げると頭に過るのはあの紅い月の夜の事だ。今は昼間なので月の代わりに太陽が輝いて

これまでではないほどの悲しみのどん底に墮とされたあれから十八年の事件をロシアで初めて得た指揮官を喪ったあのことと一緒に忘れたことは一度もない。今日までずっと一日に一度は思い返しては胸の痛みを記憶に埋もれさせないようにして来た。そうする時は作戦の合間であつたり、基地内での事務作業の休憩時間だつたりして、他に支障が来さないようにしているしこれからもそうするつもりだ。ただ最近、それが徐々に緩和されてきているように思える。時の流れもあるが、普段の生活が良い意味で忙しくなっていて充実した毎日を送っているのが大きい。

忘れるにしてもいいことと悪いことがあるとはいうが、D44N事件に関してはどうか。私からだとは後者としか言いようがなく、AR小隊全員もきつと同意見であるだろう。痛ましい記憶を抱えたまま生きていくことになるのは私達人形だけではなく、あいつやハリ―指揮官のような善人の人間もなのだから。むしろ意図的に記憶を消すことのできない彼らの方こそ苦痛に喘ぎ続ける立場にあり続ける。憐れまれるのは私達ではない、まだ戦術人形の方がマシであり、この先私達がやるべきことは明確だ。

「あ……」

ゲートの向こうから遠くから聞き慣れたエンジン音が聞こえてきたので空中に彷徨わせていた視線を音源の方へと移し、通信端末をしまつて背を離して自分の足でそこに立つ。グリフィンの紋が描かれているカーキ色の車体が見えてくるまでの時間はそこまでかかつていないように感じるのは気のせいか、それとも現実のことか。もしかしたらあちらも気が急いでいたのであれば、と考えると喜びに胸の内が跳ねそうになったが、顔に出すまいと私は表情を緩ませまいと強張らせた。

やや砂が被っているその車両が車庫の近くに居る私の前に横向きで停まる。それで駐車したわけではないことを示したようにエンジンをかけたままの状態で運転席から一人の男が降りてきた。身を乗り出した助手席にいる相方に一言を残して降り、扉を閉めると私の方を見る。数日前にここから出発した時には巻いていなかった袖から覗く包帯や頬に張られているガーゼからして楽な任務でないことは見てすぐに分かった。

ただ、今はそんなことはどうでもいい。この場で私から言うべきことはたった一言だけ。

「おかえり」

それを聞いた男——ローガン——は笑みを浮かべながら見合つた言葉を返してくれた。

「ただいま」

似合っていないサングラスを外した彼に、私も微笑んだ。

59. 重要記憶 — Confidential mat

t e r s —

終業時間を迎えたことで職員がぞろぞろと仕事部屋であるラボから出ては通路を進んでいく。何も喋りたくないとはかりの疲れた顔の男性がいれば横に並ぶ者と談笑する女性もいて、それぞれが仕事終わりで脱力しては歩いていった。朝方から労働に就いていたのであれば自分もその中に混じって目にするのはそう難しいことではない、そんな風景だ。職種を問わない企業の共通点としては当たり障りのない、それどころか無難どころか下らないの一言で片付けられてしまうことではあるのだろうが、ローガンからすればそれすらも新鮮に感じる。なにせオペレーター兼緊急時の現場指揮官という役目を得るまでのこれまでは、ライフを放浪するか、秩序という文字などはないも当然の組織にいるばかりだったのだから。

とはいっても。

「こんな時間に今更呼び出すって……」

ハリーが北米支部の指揮官であると同時に上司でもあるとはいえ、やはり疲れた身の状態で呼び出しを受けるといっはそう気持ちがいいものではない。小言を受けるに

しても何にしても、精神的にも疲労が蓄積している以上は溜息も出したくもなる。

「…………たく」

すれ違う人達には保護区外で身を削って戦ってきた人間、という認識でそれ以上は自身の事をあまり知られていない。付き合いがあるのはハリーや回収班のパイロットであるブラックバードとその知り合いの者達ぐらいである。そういつた銃弾が飛び交う現場を知っている人達曰く、溜息を吐く癖があるのだから云々。無意識における癖に關しての指摘を貰った。

眩きのような声量で悪態をつくのもその一つだが、こういつたのはすぐに直すことができるわけもなく。

やれやれ、と一人ごちた。

(それにしても…………)

何時もなら執務室を同じにしているA R小隊の少女達と雑談しながら食堂だったり、最近では後日の基地内の食の祭典に向けた準備としてちよつとした手伝いをしている頃ではあるが、ここでの日常に大きな変化はない。多少動きがあったのだとしても些事であつたりして大事になつたことはなくある程度は安定した日常を送れている。これが本来の人間という種が謳歌すべき毎日なのか、あるいは過去のように生き残るべく駆けずり回るべきなのか。どちらがそうであるのか、そうではないのかという意見はあつ

ても誰にもそれが絶対的に正しいといえるものはない。

ローガンも問われれば困る質問でもある。

「ヤッ……」

詩人みたいなことなんてずっと考えるのは性に合わない、と頭を左右に振って懐からIDカードを取り出す。目的地の端末に通すとランプが赤から緑へと変わり、自動式の扉が開いて入室が許可された。

そこに足を踏み入れる前に視界に入った一人がこちらに気付いたので片手をあげて近くに寄って言った。

「今日はしばらくぶりに基地内でゆっくりと飲みたい気分だったんだけどな」

「これが終わったらくぶりとそうすればいいよ。そこまで手間と時間を取らせるつもりはないし、僕も今晚は味が濃い料理をつまみにするつもりだったしね」

「お前の場合、酒はあまり飲まずに談笑しているだけだろ。雰囲気で酔っているように見せかけて部下のコンディションを見ているのは知っているからな」

「バレてたか」

ハリーとの会話で砕けた口調で話すことにもう何の抵抗も感じないことに内心で苦笑しては互いに軽く掌を打ち付け合う。仕事上は指揮官とオペレーター、組織における一グループのリーダーとその構成員である立場ではあるが目上の者からの頼みでそう

いったのは建前のような物になっている。

望まれたこととはいえ、おかしなことになったなとローガンは本当に思う。

「スプリングフィールドは人間観察までできることに俺はちよつと驚いたよ。飯食う時に見かけた様子とか書類の提出とかで体調管理ができていいのか、みたいなことを注意深く見てたようだし。お前、あまり飯をロクに食っていないようだから心配されてたぞ」

「栄養面としては問題ない筈なんだけどね……。そんなに今の僕ってそこまで見た感じ危なっかしく感じる状態なの？」

「目の下の隈は薄らながらもあるし顔色も良いとは言えない。それに笑ってはいるけど覇気が感じられん、空元気で無理をしているのが丸わかりだ。俺が言うのも何だが、朝の身だしなみとかで鏡を見ろよ」

指揮官という立場であるからには責任が付いて回る仕事をしながら、回されてきた報告書などにも目を通したりと多忙であることは想像に難しいことではない。北米支部が管理している保護区における日々の様子から何まで頭に入れておかなければならぬのだから。

スオミから頼まれていることだしな、とローガンは声無く呟くと早めに用件を済ませる為に言った。

「とりあえずさっさと済ませて飯を食いに行こうや。不足していたカロリーをバンバン取らせて胃袋をパンパンにやるから覚悟しておけよ」

「なにそれ、なんか変な物を食べさせられるわけじゃないよね？ ビジュアルとかなにそれおいしいの？ とか言つて見た目をドブにフライアウェイさせたような料理を出されるわけじゃないよね？」

「安心しろ、死にはしない」

「どういう事!？」

初回に作られたA R小隊特製の何故か激苦い創作料理とかをスプリングフィールドが作るわけがないだろ、とローガンは声なく言いながら味と同じく苦い記憶に蓋をする。

「それじゃさっさと用件を済ませてしまおうか。こんなところで、それで俺とお前の二人にした理由は何なんだよハリー」

「ああ……でも残念だったね。ここに居るのは君と僕だけじゃないんだよ」

『そうそう、二人だけじゃないんだよねー☆』

ハリーのとは違った音声がかえってきたかと思うと、室内にあるホログラム端末が起動される。青白い光が浮かび上がる前に突然の声にローガンは少し驚きながらも言った。

「オアシス、お前もいたのかよ……つーことは今までの会話とかも黙って聞きたい口か」

『指揮官と元放浪者の兵士の仲ってどういうものかなうつていう興味からちよつと見させてもらつていたよ。傍目から見ても冗談も言えるぐらいだから仲は良いことは十分わかるぐらいにね』

「ううわ……なんかむず痒いけど覗き見されたみたいでちよつと腹立たしい」

「ローガン、みたいじゃなくてまさにそのものをされたんだよ。この時まで基地内の重要機器を除いた機械のシステムを経由して見て回つていいとは言つたけど……でもまあタイミングが結構悪かつただけじゃないかな」

『あたいが悪くないように言つてくれてフォローしてくれてるのは嬉しいけど、そのまさかだつたらどうする？情報提供こそするとはいつても信頼関係が築けているかどうかは別問題なんだよ？』

「僕は指揮官としての経験はまだ浅いけど、その前に色々な人や人形と出会つて来たよ。『表』の世界とか『裏』だつたり関係なくね。他人に明かせない情報網を構築するのに顔合わせての対面なんてのは欠かせないのだから、自然とそういう勘が身についてくるものなんだ。それが信用できる、て言つてるのだから僕は信じるよ」

ローガンはハリーが言ったことを理解できても、その核心までの深みまでは計り知れ

ないと思った。

単純に話している相手が目を泳がせていたり、発せられる口調などから感情を直感的に感じ取ることなんてことは誰にでもできる。命のやり取りをする場であれば敵意から生まれた殺意を感じ、自然と身に着けている武器を取ることが自然と頭に浮かび上がってくるものだ。

相手が懐や腰に手を伸ばしたら反射的にホルスターの拳銃に手が伸ばして構える、なんてことはローガンにも何度かあった。

ただし、ハリーの言ったことはローガンが身に着けたそれとは違う。一言で言ってしまうえば観察眼による勘、ということになるのだろう。それも鋭い、初対面で大体のところまでは測れる程のだ。

『昔は人形だったけど、今のあたいはAIという人工知能でデータの集合体だよ。グリフィンに害を脅かす爆弾を抱え込んでいるのかもしれないというのに、易々と信用しているようでなんだか不安になるよ』

「たしかに。事前情報を得ていたとはいえ、その全てが確実性があるというわけじゃない。君は鉄血の手が加えられた存在だ。本来はこんな機密サーバーのところには居させたりして自由自在に基地内の機器にアクセスできるようにすべきじゃないよ。でも報告によれば、君はエクスキューショナーに対して言葉による応酬をしたりして鉄血と

は対立している様子を見せたらしいじゃないか」

先日ローガンが提出した、フロリダ州での任務の報告書を手元のタブレットに表示させてはハリーは言う。その表情は真顔だったり必死な様子を窺わせるようなものではなく、単に語り掛けているだけの余裕の印象を感じさせる微笑だった。

『それだけじゃあなた達に味方するという根拠にはならないよ。どちらにも味方しないで利害の一致ということで利用しただけの第三勢力、という可能性は考えられるでしょ？』

「なるほど、第三勢力であることを否定するのは難しいね。ただ、『利用』し合って互いに助け合うのが『協力』という風に解釈は出来ないかな？ 現地の電子機器にハックして敵情報やルートを通達、動かされるのなら電源を接続までしたのだから、これは立派な『協力』と言える」

「つまらないことを言うことになるのかもかもしれないけど、ちよつと待てよハリー。それだとフロリダ州を脱するまでの、という期限付きでの話になってしまう。この基地に来てから何もしない、なんてことは言つてなくても言質は取れていないし、オアシス自身がそれをしない保証はどこにもないんだ」

シンプルに言えば、ローガン自身もオアシスの事を訝しんでいる、ということでもある。彼女を信用できるか否か、なんてことはハリーだけの話ではない。いうなれば、北

米支部どころか密に共同戦線を敷いて協力することになる同僚たちにも関わってくる
ことでもあるからだ。

それが解消できない限りは心にしこりを作る障害、敵からの工作があればパラノイア
を起こしかねない爆弾でしかない。

「ローガンは気付いてないかもしれないけど、君自身への入れ込み具合から見れば
ほぼないと言っている。わざわざ遠方から中継地点を介して通信しては機器にハック
したぐらいいんだから。なによりもしばしば聞かせてもらっているコミユニケーション
が好意的だ。グリフィン上層部へはともかく、ここにいる僕たちに不利益を生み出す
ことは限りなく低いよ」

『あちやく……あんたって可能性があれば一つずつ前向きに考慮しては外堀を埋めてい
くタイプ？人によりけりだけど、その性格を利用して疑いの目を遠ざけるような頭が
回る奴にうまいように使われちゃうよ』

「何も根拠がないままに言っているよりもいいでしょ？他人の長所と短所における最初
の着目点に個人差があるように、人の思考は基本ポジティブかネガティブの二パター
ンだ。警戒して疑うことはあっても陽気に考えることだって困難に立ち向かうのに大切
だよ」

それにさ、とハリリーが言葉を切ってこちらを見る。疲労が溜まっていることがありあ

りとわかるその顔ではあるが、本人はずっと作り笑いでも何でもなく自然と笑みを浮かべていた。

何を想っているのかわからないままローガンはきよんとするしかなかったが、彼はオアシスがいる端末の方に向き直って言った。

「下手すれば死に急ぎかねない危なっかしい友達を助けてくれたんだ。そんな君が悪人のメンタルモデルによるAIじゃないと、信じないわけがないよ」

ハリリーが言った事にオアシスからは反応がすぐに返って来ることはなかったので一瞬の間があった。

ただ、ローガンとしては自分を指している形容詞に少しムツとしていたのではある。故人となった人々が云々というのもあるが、当時は北米支部にいたARR15からは釘を刺されたり、部隊を組んでいた404小隊の二人からも同じような目を向けられていたりもしている。

簡単に死ぬつもりは毛頭ないというのに、戦術人形の彼女たちだけでなく指揮官であるハリリーからも同じようなことを言われることが腹立たしかった。

しかし彼であればこちらにも反撃の手立てはある。

「へ〜いへ〜い〜ハリリーさんよ。身を削って仕事をするのはまだ領けるけど、やりすぎてフラフラの不健康になっているお前にだけは言われたくねえぞ〜。人の事を危なっ

かしいとかほざきいといて自分の事を棚に上げるなよこのもやし野郎」

「あれ、もしかして導火線に火を点けちゃった？でもそれって多少なりとも自覚があるからじゃないのかい。手立てが他になかったとは言っても捨て身による手段というのは褒められたものじゃないことは君も重々承知しているでしょ脳筋男」

「あくあくこれだから現場にいなかった奴つてのは困るもんなんだよ。結果論を唱えてさももつとやりようがあったらうみたいなことを言つて厚顔無恥つてのを晒すような真似をするんだから。お前だつて部下を纏める立場にはいるんだからよ、そういうのをもつと気を付けろよ鈍感」

「こういう態度でいれるのはジョークもわかってくれる君ぐらいだから他にはしていないから心配しないでいいよ。だけど鈍感なんて言葉はローガンには言われたくないね」

この野郎……、とローガンが半眼で睨んでいるとハリーは部屋の隅に設置されている机から紙の資料を持って渡して来た。無言によるそれを受け取つて視線を落とすとまづ目に映つたのはロシア語から英語に訳された単語の羅列、そして題目として一番上にある「極秘：第四次世界大戦の未来プロセス」という文だった。

ハリーの副官であるスオミどころか他の誰も居ない、オアシスも含めたたつた三人だけで招集された意味が分かった途端、ローガンは反射的に顔を持ち上げた。

「オアシス、君に対しての信頼性における根拠はつけてみたけど今回ばかりは君頼りだ。はつきり言つて状況は悪すぎる。正直のところ、グリフィンが総力を挙げてでも鉄血の企みを完全にシャットダウンさせることは難しいだろう。できるだけ後に引かないようにベストを尽くすしかないんだ、わかってくれるかい？」

『あんたたちがいうベストというのはどの程度？ ローガンが言つてたけど、今回における鉄血の計画を阻止できたとしても世界の戦いはなくならない。あくまで次の危機的状況までの時間稼ぎにしかならないんだ。一体どこまでがあんたたちにとつてのゴールなの？』

一瞬言葉が詰まったものの、あくまでそれはローガン個人の考えだ。バルソクには一種の事実のように言つてしまつたが、ローガンとしては絶望感に打ちひしがれて何もしていないでいるよりもまだマシだ。

そう言おうとしたが傍にいる男から言葉が発せられた。

「僕達が立っているのはすごろくとかみたいにも明確なゴールが見える盤上じゃない。そういう風には守らなくてはならないルールや設定があるわけでもない世界で手探りでやつていくしかないんだ。だから『鉄血による第四次世界大戦の阻止』は絶対にする、してみせる。でももし、その道すがらにやらなければならない事案があれば取り組むし、僕達に助けを求めている人がいるのなら手は伸ばすよ。回答に逃げているように聞こ

えているならそれでもいい。僕の言うベストというのは、何があっても放置も逃避だつてせずに僕なりの戦い方でやり抜くことなんだから」

ローガンだけではなく、オアシスもその意思の表明を黙って聞いていた。指揮官としてのハリリーのポリシーはローガンも聞かされたことはなかったから、というのもある。ただその節々に感じ取れる言葉の重みというのが感じ取れて茶々を入れることが無粋であることが直感でわかったのである。

人それぞれに違った人生の歩みがあることによる重み。淀みやつつかえることすらないままに発せられたそれに対し、ローガンはすぐには言葉を紡ぐことが出来なかった。

『……わかった。愚直だけど確固たる信念をもって事態の解決に向かっているとして、あたいはあんたとも手を取ることにするよ』

「よろしく頼むよ。それで早速だけど、ローガンが来たことだし教えてくれないかな。君がくれた情報について」

『話す前にさ、長くなるだろうから録音とかの用意をしてくれる？二度も同じようなことを話すの疲れるし気が進まないから』

「心配しないでいいよ。もうとつくの昔にしているからさ」

ふとハリリーの方を見てみると、彼は今では古風ともいえる様式のカセットテープとそ

れを回す為のウォークマンを懐から取り出してセットしていた。

「今の時代でそんなのを使うのかよ。簡単にデジタル機器を使えば保管とかの手間を掛けずに済むだろ」

「骨董品に近いこんなのを使うのは今回の事が重要だからさ。それにデータ化してサーバーに保存したら、クラッカーのような悪意を持つてハッキングするような連中に消されてしまいかねない。今でもセキュリティには十分な対策こそしているけども、万が一のことも考えたら……てね」

懐かしむような目になりながらハリーはカチャカチャとテープを入れて蓋を閉じる。電源が入っていることも確認した後、スイッチを押して安定した部屋の端末上に置くと、待つていたかのように中のテープが回り出して録音を開始したことを告げた。

—へグリフィン北米支部の機密テープ###より—

『それじゃあ始めよう。まずオアシス、君は現ロシアにおける情報を集めているという風に事前に話を聞いた。一つずつ話してくれ』

『じゃあ最初に第四次世界大戦、なんてのは誰しもが望んでいるわけではない、なんていう前提についてから話すことにしようか。先の大戦で各国は疲弊して自国内における統治にかかりつきりになっているけど、逆にそれをチャンスとして捉えている連中もいるんだ』

『……初っ端から嫌な話だな。派手にドンパチすることを自分たちからやろうとするなんて、ただの戦争屋じゃねえか』

『だけどそんなことをあからさまにしようものなら目をつけられて抑えられるのが目に見えてしまう。保身に徹しているからこそ他者の挙動に過敏になる、なんてのは人間にはあることなんだからさ』

『仮に僕が政府における一員でそんなことを考えているとしよう。オアシスが言ったように戦争を意図的に画策し始めようとしているのだとしても、もし自国が負けた時のことも考慮する筈だ。だってもしそうなったら戦犯、調査されてしまえば罪人として良くて投獄、最悪は処刑されてしまうだろうから』

『逆にそんなことなんてない、て高を括れるだけの何かがあるのなら話は別だろうが……待てよ？たしか今のロシア政府では大まかに保守派と急進派に別れている、つつう話があったよな。あれは鉄血に対してによるものだったが……あれに関連が？』

『あわよくば、だね。戦術人形から人へと転用した新型A S S Tは政府内の秘密計画によるものだったけど、死亡に至るまでのリスクがある以上は人道的にアウトだとして関係者内で却下された。ただ、諦めきれない一部の人間がその詳細を持ち出して同じ思想を持つ仲間たちに見せた、というのが保安局のエージェントによる見解だよ』

『急進派による行動理念は鉄血排除の他に世界における覇権といったその辺だったのか。『アネクトドート』と繋がりを持った理由はダムにおける一件で知れはしたけど裏ではそんなことがあった、てことか』

『重要なのはここからだよ。彼らだけでは決して大戦を引き起こす要因を作ることはできないんだから。世界的に鎖国しているような状況下なのだから、ちよつとやそつとのことじゃ火の種は広がらない。下手をすれば自分達が痛い目を見ることになるしね』

『たしかに』

『そこで一つ目の情報。急進派は鉄血の企みを『はつきりと』わかっついて黙認しているんだよ』

『……は？何を言ってるやがる』

『……彼らは彼ら自身だけでは戦火を広げることではできないことを自覚しているんだ。だから自分たちにはできないことをしようとしている鉄血の計画に乗ることを選んだ、ということだね』

『そういうこと。第四次世界大戦を繰り広げさせる、という企みを急進派が知る経緯についてはあたいも調べてもわからなかつたけどね。でも去年、世界的に有名な『AK—47』とかのロシア製のライフルが何者かに国の外に運び出されようとしている情報を得ていたんだよ。それが鉄血兵による仕業だということもわかつていた。古びた漁港から大規模に持ち出されようとしているそのことを、自国製の衛星も打ち上げているのだから見逃すはずもない』

『さすがに鉄血の行動となれば誰もが見ぬフリをしている筈はないだろう。急進派はその情報を握りつぶすと同時にばからしい博打に出たんだ、綱渡りどころかその綱すら細い糸みたいな所に足を踏み出すようにね』

『……ようやく話が見えてきたけどクソ野郎どもによる仕業じゃねえか。まとめてしまえば国単位でマウントを取りたいが為に自国民どころか世界まで巻き込んでテロを起こしているようなもんってことだろ。もうそんなことをやっているんじゃ清廉潔白の政府関係者でも何でもない。身勝手にもほどがありすぎるテログループの一員みたいなもんじゃねえかよ』

『そう、ローガンの言う通りで彼らが今やっていることはまさにテロと同じだ。それどころか、身分が高いもんだから証拠の抹消もそれなりに容易なものだから余計に質が悪い。これも一種のクーデターだよ。だけど彼等には思想によつて悪事をやっていることと自覚はないし、もうテロリストと遜色ないことは確か』

『ただ一つだけ疑問がある。いくら政府内部にいるとはいつても目を全てに配らせているのは難しい。他国に比べてロシアは広大であるのに加えてグリフィンの本部だつてあるのだから、下手を打てば僕達にバレてしまつて抑えられてしまうことだつて彼らにもわかつてはいただろう』

『下々のことは下々の者どもに、それが急進派の言だよ。自分達には行き届かないことがあつても、その道に詳しい連中に多額の金を握らせるなりして黙らせては仕事をさせた方がより確実に成果を得られる。ただ、技術はあつても雇用主ということで自分達の方が上だということを主張してはいる』

『てことは、ここにゐるリストは……』

『そういうこと。地を這いつくばりながら自転車操業で活動しているグループから事業関係で一端では良くも悪くも名を知られている企業規模まで色々だよ』

『名前からざつと調べた限りでは軍事とはほぼ関係ないようだけど、全体に目を通してみれば見たことのある同業者の名もあつたから軍事とは無関係ではないだろう』

『これのうまいところは戦地を歩くのに慣れている回収業者みたいのを中心にするんじゃないくて、思惑があるようにはあまり見えないところに少数のベテランを混ぜているところだな。全員が裏があると思われているのは仕方ないこととしても、重要課題を抱え込ませた奴を他の連中で隠れ蓑の中に居させてやがる。詐欺の口口と一緒だな』

『オアシス、一つ質問させて欲しい。急進派が保守派よりも一枚どころか何枚も上手だったとしてもチラついている尻尾をまったく目撃されなかったわけじゃないんじゃないのかい？彼らだって仮にも政府関係者であつて決して馬鹿じゃない。なによりも人体を対象にした新型ASSTなんて異様な案が挙げれば目をつけるのは当然だろう』

『残念だけど、保守派の目と鼻の良い人たちは全員暗殺されてしまった。残ったのは比較的若手で状況をうまく読むことが難しい人たちだけで、いつでも抱き込めるようにキープされている状況だよ』

『なんで殺さないで生かしているんだ？いつそのこと全員を消してしまった方が……いやまでよ……ああ、そういうことかよ……！』

『そう、ちよつと考えれば簡単な話だよ。人は変化に敏感なのだから、そうした良くないと思う事にはマイナスの反応をされてしまう。ただそれは政府関係者じゃなくてマスコミに、てことだよ』

『暗殺なんてのは社会主義国家における主権者によつて何回も世間に公にされないまま

に行われてきた。せめて立つとすれば噂ぐらい。でも彼らはあやふやなそれすらも揉み消した。不都合なことを起こらせないようなほどの金を握らせてね』

『日本のことわざで火のない所には煙は立たない、ていうのがあるけどそれに信憑性があるかどうかは別の話だな……話を戻そう。とにかく、急進派が持てる財力とか情報を元に鉄血の行動に対して干渉しないままに利用しようとしているってことか』

『ここまでの話でロシア内も水面下では緊張状態でピリピリしているのも想像に難しくない、てのはわかるよね。モスクワを中心とした街の至る所では銃を持った兵士がツーマンセルを組んでは巡回していたりもして市民もわけがわからないままに戦々恐々としているよ』

『グリフィン本部はこのことを認識していないのかハリー。証拠がないにしても、ペルシカさんだったら気付いているんじゃないのかよ』

『僕達は民間軍事会社であって政治には触れないよ。内政とか新規プロジェクトに関わることを知る権限を与えられていないし、もしその情報を手に入れたとしても煙に巻かれてしまうのが関の山だ。だからきつとペルシカさんは異変に気付けたとしても動けない……のかもかもしれない』

『クソツタレ……』

『ここまではあたいたちにとつて最悪な印象を持たせる話だった。でも一つだけ、良い

情報があるよ』

『どんなだよ？まさか『アネクドート』の奴らが逆立ちしてロシア政府に対してクーデターを企てようとしている、なんてじゃないだろうな？』

『あんな狂犬には連中も手を焼かされているから全くあり得ないとは言わないけどしばらくは起こり得ないよ。でもレジスタンスとして活動しようとしているグループがいる、というのは本当だよ』

『ロシア政府に対してか？』

『そう、時系列としては国全体に異変が起き始めたのは昨年の今ぐらい。特定できるほどの情報を入力できなかったけどいち早く察知して準備していた個人がいたようだね。急進派に詳しい足取りを掴まれないようにハックする度にプロフィールが変わっているのだからコンピュータに強い人であるのは間違いないけど』

『なんともまあ……今も生きているのか？』

『恐らくは。あたいが追えたのは今年の夏ぐらいまで。秘匿回線によるネットを通じて知らせる同志を連れてはロシアを脱出。その後は浮浪者に紛れては西へ西へと流れて国から別へと渡つていった。彼等は道すがらに人助けをしては規模を拡大して、最後に観測できた時には五百人ぐらいにはなったそうだね』

『困難を越えてアメリカに來た、なんてところまで追えたら最高なんだけど、さすがにそ

「ここまで都合がいいことにはなってます？」

『ないね、残念ながら』

まあそうだよ、とハリーは小さく呟いて肩を竦めた。ローガンもそうであるのは直感的に察しがついていたので期待はしていない。

時計をみれば陽が完全に沈んでいる時間になっているので、もう一時間ぐらい話し込んでいる。疲れてきた脳内活動をちよつとだけシフトすると浮かんでくるのはA R 小隊の彼女らだ。

今頃明日からのことについて打ち合わせていて、真面目なM 4が隊長として取りまと

めようとしているのに対し、S O P I I が大声を発しつつ元氣よく挙手しては案を出すものの、A R I 5 にクールな毒舌な一言と一緒にツッコまれているだろう。その様子を M I 6 がニマニマと笑みを浮かべながら酒を煽っていると、R O が横からジャックダニエルの酒瓶を持っていて彼女に小言を少しばかり言っているかもしれない。

早くあちらに戻りたくもあるが、この場でトンスラすることはできない。録音もされている以上は尚更だ。

『ただ一時期を皮切りに、ある一国を拠点にしたみたい。監視カメラにその人物の仲間が街に繰り出しては買い出しに行っているのが映っていたんだけど、それが繰り返し同じ街で記録された』

「何処で？」

この時点でのローガンの予想としては、一昔前までなら発展途上国とまで言われた辺りに逃げていくかもしれないと考えていた。

堅苦しい言い方をすれば、その人物がロシアから脱出したのは過度な圧力が直に降りかかる社会に対して嫌悪感を抱いたから、ということだ。となれば現代においてまだ自由な主張がしやすく動きやすい国に逃げていくのが考え付く。ただし、今となつては鉄血が辺りにいることは当たり前といえるだけではなく、地球環境も劣悪になつていて土地勘やサバイバルの知識などがあつても生きて行けるかどうか怪しくなっている。

オアシスが言っている人物が綱渡りに綱渡りを重ねるようなそんな真似をできないとはいわれないが、ロシア内の街で生活していたのではそうした技術を頭だけではなく体で覚えているイメージが湧きづらい。

なので結局はローガンとしては確認めいた予感はないが、有力だと思つたのはユーラシア大陸における発展途上の何処かということである。

しかし、その予想はホログラムで表示された地図の赤点によつて大きく外れたことを知らされ、ローガンは度肝を抜かれて掠れた声しか出せなかつた。

「ここは欧州……ヨーロッパか……!?!」

『あたかも振り返つてみて驚いたもんなんだけど、人間つて本気になればここまでのことまでもできるもんなだね。さらにカメラの映像も合わせて詳しく絞り込んでみれば……』

全体的に青い世界地図がぼやけたかと思うと、赤点を中心にした拡大された地図になつていた。次に国境だけでなく汚染地域などを表記した詳しいそれになつていき、ローガンとハリーが知りたい名前までもが浮かび上がった。

その名を言う前にオアシスの淡々とした声が聞こえてきた。

『場所はかつてグレートブリテンともアイルランド連合王国とか言われていたけど世界秩序の崩壊と共に瓦解した国である立憲君主制国家。その最大都市はロンドン、つま

り……』

「イギリス、か……」

きつと今の姿は他の人達に見せられないようなものなのだろうが、経緯さえ知つても
らえれば馬鹿にされることはないだろう。

60. 足取りは軽やかに —What a mess!

今日になつて何度目かわからないブザーの音をヘッドホン越しに聞くと、肺に溜めていた息を吐いて構えていたライフルを下ろす。装填していた弾倉を外しては本体の薬室に入つていた最後の一発を排出し、安全装置を掛けてから離れのカウンターの上に置いた。その横では何丁もの同サイズの銃器が証明に照らされて黒光りしており、それぞれが存在感を主張しているかのようなようであつた。

ローガンが改めて無言で一丁ずつ見ていると、ここに来てから風船ガムを膨らませては破裂させていたバルソクが言つた。

「どうだいマスター、ロシア製のアサルトライフルとかサブマシンガンを一通り試してみても、この基地が置いているのだけではあるがそれなりに数はあつただろ」

「どれも悪くないつつうか、良いものばかりであつたのは素直な感想だな。手入れがまあまあ行き届いているつてもあるが、銃そのものの性能による総合的な評価もアメリカのと遜色ない。下手するところの方が良いかもしれない」

「用途に合っているのは当然だが、ロシア産の銃が生み出された過程にはアメリカと張

り合う意味合いもあるんだ。他国の銃よりも優れている、なんてことを堂々とと言えるぐらいの設計者たちの意思がそれぞれにあるんだろうさ」

「まあそうなんだろうな。見かけだけのハリボテみたいなのを下手に作ってしまおうようじゃ、ライバルに一気に差をつけられてちまう。これはこういったものづくりとかだけの話じゃないけど、そうした競争は何処にでもあるつてもんだよな」

シヤカシヤカと音楽が聞こえてくるヘッドホンに繋がっている音楽プレイヤーの電源を切ったバルソクに近くの自販機で買ったコーラを放って寄越す。受け取った彼女はガムをちり紙に包んでからプルタブを起こして開けて一気に呷った。人間よろしく、喉元を鼓動させて数秒間に渡って炭酸飲料を口にして離れたかと思うと一息、そしてお約束と言えるゲツプを口を閉じたまま静かにした。

ローガンは缶コーヒーを手にテーブルを挟んだ向かい側に座ってからその一連の動きを見てから言った。

「一応確認させてもらうけどバルソク、お前は女子というカテゴリーに入るメンタルの持ち主の人形だよな。俺が言うのも何だが、諸々はしたなくねえか？」

「ワタシは確かに気品とは無縁さ。でも一応ギターを弾いている時とかは別人みたいだとか言われるぐらいなんだぞ。マスターだつてその時のワタシを見て意外と言つてただろう」

「そうだけども、訓練とか任務中を除いてお前が女子らしくしている様子を見た覚えが俺はねえよ。結局はどうでもいい話として片付けられはできても、やっぱり時折考えちゃう」

「それでワタシとマスターの仲が悪くなることはないだろ。さすがに見えちやいけないような所が晒されているようなら隠すなり治すようにはするが……」

「なら今の自分の姿を見てどう思う?」

バルソクは姿勢を固定しながら自分を写しているカウンター横の鏡を見た。要略すれば以下の通り。

1. 片腕を背もたれの上に置きながら体重と一緒に椅子の背もたれに寄りかかっている（しかもやや斜めに傾いている）。
 2. タイツを履いてはいるのだが、スカート姿で足を組んでいる。
 3. 今日の待ち合わせに遅刻寸前だった為、髪の手入れが粗雑であることが窺えるぐらいボサボサになっている。
 4. 上半身が部屋着のシャツであるせいか、襟元がヨレヨレなのが目につく。
- 結果、今の姿に品位があるとは言えない。

「なるほど」

「お前、スオミとかみたいない可愛い部類じゃなくてカツコイイ方にルックスが振られているからいいけど、そうじゃなかったら割と致命的じゃねえか。今日含めて数日間がオフなのはお互い様だけど、その辺はやっぱり他の目もあるんだしキツチリした方が良くね？」

「んだよー。そう言っているマスターはいつものような仕事着じゃんか。せつかくの休暇なのにちよつとは違う服を着て来いよ、弄り甲斐がないだろ」

「銃をぶつ放すつづうのに別のを着てこないと駄目だったんか俺。というか基地内でそこまで気合の入った服装でいるのは違うだろ」

「そうじゃないんだよマスター。いつものベストを外しただけの戦闘服の上に季節に合わせてミリタリージャケットを着ているのは悪くないけど、あくまでマスターは実用的な面でしか見ていないだろ。もっと美観的に自分を見ろよ」

ふむ、とローガンは先程のバルソクのように鏡に自分を写してみても自身を俯瞰してみる。上下一体で紺色の戦闘服で黒のブーツという自分の立ち姿、そして遠くでハンガーに掛けている暗色がメインの薄手のジャケットを見やった。

美観と実用という、使う物には付き物でありながら相反している二つの要素について数舜思考。そして、

「わからん」

その一言でニマニマしていたバルソクが椅子からコケて椅子までもが横倒しになった。コントであるように派手に地面に転がった彼女は『そっかー、わからないかー……』とぶつぶつと言い出すので、とりあえずローガンは放置。

そして先程まで自分が触れていた銃の方に視線を移した。

(にしてもどうしたものかな。どれも良い代物だというのはわかるんだけど、俺的にはどうも型に当てはまるようなものが無いな)

事の始まりについては、先のフロリダの地下における作戦の最中のことから振り返らなければならぬ。

会敵したエクスキューショナーとアッシュの追跡したが鉄血の爆破による罠に誘い込まれた。それによる落石から生き残ったものの、ローガンが装備していた『ハニーバジャー』のストックがガタつくどころか、銃内で不具合を窺わせるような音が起きたりしてそのままの使用が躊躇われるようなことになり、その場では再度使うことなく持ち帰ることになった。

手入れを怠ったことで銃が発砲できなくなるのはまだ良いが、最悪は内側から爆発するなりして至近距離から破片を浴びるなりして怪我することになってなりかねない。その事を考えればあの時の判断は正しかったとローガンは思う。あの銃が悪化するなりして修理しても使い物にならなくなるのはローガンからだとい番避けたいことであ

るのだから。

それ以降は貸し出された『AK-74M』を使用することで生き残ることができたのだが、帰還して落ち着いてから銃をバラしてみると内部のパーツが幾つか衝撃で折れたり歪んだりもして破損してしまっていた。幸いというか、グリフィンには各々の戦術人形が保有している銃のメンテナンスや修理ができるよう、オイルだけでなく各部における部品などがある程度まで出揃っているのではあるのだが、北米支部には『ハニーバジャー』のそれは置かれていなかった。この基地にその銃を持つ人形がないことが起因しているのではある。

となれば時間を問わなければ外部へ必要な物を発注、もしくは早期にまた使えるようにしたいのであれば銃そのものを丸々出すしかない。

ローガンも手入れの為に『ハニーバジャー』を分解していたので多少なりとも内部はわかるが、損傷具合からして自分が手を付けるにはリスクが大きすぎた。なのでそこまで悩むことはなく、グリフィン北米支部が認めている中で一番信頼できるミリタリーショップに預けることとなった。

そして手続きや前報酬などを送り、返って来るまでの代わりを探すことになって今に至る、というわけだ。

「うむむむ……もう少し話したいけどこの話題はここまでにしておくか。冗談は抜きに

してさ、マスターって組み込まれる部隊内だとバンバン前に出るし、基本サブマシンガンのようにコンパクトめをやつとかがいいのかもかもしれないな。『ハニーバジャー』だってストックを伸ばしても基本的にアサルトライフルよりも短いんだし」

「だけどそつちだと射程が心許ないだろ？ 近接戦^Cとかで屋内に突入するならともかく、野戦とかじゃ威力が落ちてやりにくくなる。バレルを切り詰めてショートバレルにするという手もあると言つちやあるが、今回はそこまでする必要はないんだしなあ……」

アサルトライフルとサブマシンガンの大きな違いの一つ。銃身の大きさという外観的な違いに目が行きがちで忘れてしまいうなるのは、それぞれで使用する弾薬の口径とそれと銃による射程距離の長さだ。

我儘で実用的に考えてみれば、やはり重量は軽くて射程距離は長距離に対応でき、そしてコンパクトで取り回しが良い、というものになる。

しかしそんな全ての意見に応えた銃はここにはない。あくまで、ロシア製の小銃、という点に限つてのはあるが。

ローガンが頭をガシガシと描いていると、脇に来たバルソクが言った。

「銃器保管所を覗いてみればマスターが気に入りそうなものはいくらでもあるんだしさ、ワタシの国で生まれたということに縛られなくていいよ。言い出しつぺはこつちだ

けど、これ以上悩ませてしまったんじや時間の浪費でもつたいないしさ」

バツが悪そうにしているバルソクの言った事にローガンは顎に手を当てて逡巡する。そして首を左右に振った。

「せっかくの進言だけど、お前が色々と手伝ってくれたんだしもう少し考えてみるよ。他の銃に触れるのにいい機会だと思えばそう悪いことじゃない」

「いやでも、こういうのは本人が自由に選ぶことだろ。外野から変な条件を付けて視野を狭めさせられるようなもんじゃないか」

傍から見ればそう見えてしまっても仕方がないと言える。ただ実情を見れば、単に悪者銃というローガン個人としてのイメージがあるロシア製の小銃から代用品を選ぶ、なんてただだ。生まれの地に対して負の感情を抱かれるのは決して気持ちのいい話ではない。

だからバルソクはいくらか払拭できるように、こうして自分の手伝いをしてきているのだとローガンは思っていた。

「そういうお前は、架空の話による俺の勝手な偏見に付き合ってくれているだろ。俺からすれば、フリーであるお前を我儘に巻き込んでしまっているこっちの方に負い目があるってものだよ」

「そんなことは……」

ない、と言ひ掛けたところで何かに気付いたように口を開けたまま静止する。そんな彼女にローガンは苦笑しながら言った。

「お前のと同じ話だよ。俺達がしているのは、あつちが『悪いことしたな』なんて考えている事でも、もう一方が良しとしているつつう話だ。俺はロシア産のから悩みながらも銃を選ぶのを良しとしているし、お前は俺に付き添つていいと考えてくれている。本音を持つて接しているこそすれど全てをぶつけているわけじゃないから誤解が生じてしまう。人間社会における仲違いの一例だ」

「あゝ……つまりはお互いさまつてことか？ いい意味で」

「ちよつと違うけど、まあそういうことでもいい」

バルソクのような人形にはわかりづらいことなのかもしれない。しかし人間関係の構築というのはローガンを始めとした人類からして避けられない課題だ。一歩間違えれば信頼関係にヒビを入れて亀裂を生み、それがさらに大きくなつて谷のような深い溝となる。人は誰にでも好かれることはできないといつても、そのようなことは少ない方がいい。

ローガンの脳裏にチラつく経験談を振り返つてみれば、どれもが苦々しい記憶でしかなかった。

「だから気にするな。俺も俺で別に気に病む必要はなかつたつてことで受け取るから

よ

甦る記憶を振り払うようにそう言うと、バルソクは少しばかり逡巡した後にはぎこちなく笑みを作つて頷く。

仲違い、というワードには最近の任務に関連しての覚えがある為か、彼女もそこから茶々を入れることなく並べられている銃器に視線を落とし悩み始めた。

砂漠で耐え忍ぶ者達を守るべく戦つた女リーダーに思いを馳せて感傷に浸つてしまふのはもう済んだこと。忘れはしないが心を痛めるのは一先ずこれつきりにしておこう、とあの場でローガンは踏ん切りをつけて眼前の問題に向き直つた。

「それでどうするんだ。マスターの銃に対する要望つて近接戦を想定して取り回しが良いことと威力もそこそこある奴が良いってことだろ。アサルトライフルで取り回しの良い形状つて……」

『ブルパップ方式』か」

引き金も含めたグリップと弾倉の前後の位置関係が反転した銃の形状を指しているのが『ブルパップ方式』というものである。『M4A1』や『AK-47』などの小銃の通常形状と比較すると、弾倉の交換がしにくい、格闘戦に置いてリーチが短くなつたりするというデメリットがあるがローガンにとつての希望を全て満たす銃の方式である。

第二次世界大戦から提案されたその方式は通常のと比較すると少数派の方に入つて

しまうが、その形状を好んでいたり屋内戦を主軸としている人からすれば信頼を置くことが出来る。

「ロシアにもブルパップのアサルトライフルがあったんだっけか」

「ああ、何丁かあった筈だ。『A—91』とか『ADS』に……あとは……」

『OTS—14』

その銃の名を口に出したのはローガンでもバルソクでもなかった。一瞬二人で顔を見合わせてからその声の発信源へと顔を向けてみると、そこには腕を組んで微笑んでいる美女がいた。特徴なのはその端正な顔だけではなく、金糸のような長い髪にすらりとした体躯だつてそうだ。その凛とした風貌から自分では手を出せない高嶺の花、貴族のようなイメージを持たされてしまうだろう。

その美女はこちらに歩み寄りながら言った。

「まさか、ちよつと会つてない間に私の顔を忘れたなんてことはないわよね。あんなにもドロドロした戦いを一緒に潜り抜けたというのに」

「……んなわけねえだろ」

ハリリーの奴、サプライズのもりだったのかとローガンはぼやく。報連相を俺なんかから叩き込まれるようなことをされるのは腹立たしいだろうに。

「何時、こつちに来たんだ。事前に言ってくれば歓迎パーティでも企画してたぞ」

「ついさつきよ。それと予定では一週間後ぐらいにここに来ることになってたんだけど、あなたたちがしばらくオフだって聞いたから早めに来たの。ローガン、あなただけで遅いよりも早い方が良いでしょう?」

「多めに自由時間を取れるというのなら、たしかにそうだな。後手後手に面倒事に手を付けることになるよりは早めには早めに片付けた方が気が楽だ」

「私を迎えるのが面倒だっていうことじゃないわよね?」

「ちげえよ」

初対面とは違って柔和な雰囲気を感じるようになったのは、あの場で心の内と彼女の過去を知った上で激励したからかもしれない。平行線であった仲がそれで何処かで交わるようになり、それがこうした再会を生み出したのか。

いや、そんなのは一旦横に置いておこう。

「久しぶりだな、グローザ」

グリフィン北米支部特有なのかどうかはローガンには知る由もなかったのだが、この支部の食堂は機能性を重視した美観性を脇に置いた造りにはなっていないらしい。白塗りでシンプルなテーブルとイスのワンセットだけでなく、飲食店にあるような家族で卓を囲うようなボックス席まで用意されているのはここだけ、というのがグローザの談。しかもその一つ一つが趣の違う、木目と重厚感のあるシックなものから和風のようなアジアンなどのデザインがあつたりして、そういったインテリアを好む人には好評である。

スプリングフィールド自身が外部との連絡任務に動員されているので、彼女がマスターとなつているカフェは閉まつていた。なので硝煙の臭いが充満している屋内射撃場から場所を移し、落ち着いて話ができる場所を流れでここに行き着いたというのが大筋である。

「この指揮官つて福利厚生にどれだけの資金をつぎ込んでいるのかしら……」

「さあなあ」

知らないことには答えられないので、ローガンはテーブルに頬杖をつきながら適当にそう流した。

「今明かされる、衝撃の真実う！……とはいかずとも、そういった意味で北米支部は人形の頭数だけでなく異質じみていることを知らされた。ローガンとしては、はぁん……、というところだが。」

「ほーい、頼まれていたブラックコーヒーと紅茶。相反する二つの飲み物を同時に持つてきましたよーっと」

「突然だけどき、イギリス紳士がコーヒーを泥水って呼ぶのは単なる見た目だけの偏見じゃね？」

「あそこの国では味の評価としてそう言うだけであって、口にせずにもそう言うてしまうことはなかなかないわ。一応イギリス式の淹れ方というのがあから、人々には親しまれてはいる筈よ」

「これを毛嫌いしている紅茶派の人しか知人にいかなかったから知らなかったな……」

「あのさ、その話題とコーラにしたことでアウエーになりそうなワタシの身になつてくれない？炭酸ブクブクで甘味料たっぷりのこれで太ったりしないの、とか聞いてもいいからさ」

「飲談などをするにはせめて飲み物があつた方が良くしてお使いをバルソクに頼ん

でいた。その彼女の方に円形のテーブルを挟んで正面を座るグローザから視線をスライドすると、射撃場で奢ったのと同じメーカーで中身も同一の飲料が置かれていた。

内心で頭を捻って一言。

「うん、偶には甘い炭酸飲料もいいよな」

「真顔で当たり障りのなくて面白みのないことを言われたよちくしょう。いやそりゃあ、こんなかまってちゃんみたいなことを言われたらそんな反応になつてしまうのわかる気がするけども！」

「仮にも俺だつてここ来てからずっとお前たち人形と卓囲つて飯食つてるんだぞ。辛いものとかで身体とかメンタルで反応が出るというのは知ってるんだし、今更そんな体型の事を言われてもよ」

「知らず知らずの内に女性にとつてのタブーという地雷原に足を向けているんじゃないかしらあなたたち。それともわかつてやってやっているの？確信犯？」

「いやいやそんなことは……つてこれじゃマスターが言つたように品位が損なわれたりする？」

ローガンは咳払いをしてコーヒーを一口。グローザからの非難がましい視線がちよつと痛いので口笛を吹きながら明後日の方へと顔を向けて一息つく。

あれこれ考えているイヤホンマシンガンが首を捻っている間にはと思ひ、話題の転換も

謀つて突然の来訪者に聞いた。

「ハリーとは顔を合わせたか？」

「ええ。予定とは大きく違うという事で慌ててはいたけど、スオミが粗方の受け入れの準備をもう進めていたみたい。書面上の手続きはもう終えたわ」

「お互いに苦勞なことで……つうか、本部はよくオーケーしたな。お前つてほら、内部の機密情報を保持しているのだから、お偉いさんは首輪をつけて目の届くところに繋げておきたいんじゃないのか？」

ローガンの記憶では、グローザは自身のメンタルモデルに保存された長年の記憶を保護すべく、グリフィンという組織の内部情報を保持している。もし自身を故意による破壊などを目論んだ場合にはそれをネット上に拡散する、なんて脅しまで上層部にしていて、現在進行形でそれが有効であることも教えてもらった。

自分達にとっての爆弾のスイッチが手元にない以上は、その持ち主を目の届く監視下に置いておきたいのというのが自然ともいえる。条件は明確であつてもそれが必ず守られるという保証はどこにもないのだから。

だからグリフィン上層部の幹部たちはグローザを本部に拘置しているつもりだろう、とローガンは考えていた。

「本来なら、ね。あなたがチームの中核となつている『シャドー隊』の入隊に待ったをか

ける幹部は、たしかに過半数どころか四分の三を超えていた。そういった結果が出た以上は、私が北米支部に来れることはない筈だったわ」

「じゃあなんで？」

グローザは目を閉じて紅茶を口元に運び、そのカップとセットになっているソーサーへと戻す。小さく一息をつき、バルソクの次にこちらを真っ直ぐ見て言った。

「私の編入に賛成派である幹部の一人が言ったの。『グリフィンへの圧力を打開するには、今蓄えている戦力を開放するしかない。このまま秘めたままでは具体的な打開策が浮かんでくるどころか、事態の混迷化が進んで取り返しをつかないことに成り得る』と」

「圧力？ 誰からのだ」

「そこまでは私にはわからない。でもグリフィンにそうプレッシャーを掛けることのできる対象は限られているわ。大規模なテロリスト、鉄血のエリート、それから」

「……ロシア政府」

先日オアシスから聞いた情報の話が脳にフラッシュユバックする。頭に詰め込んだ細かいことまでが文字や絵となって目に浮かんできたそれにローガンは頭を左右に振るって今は払い落とした。

「その一言で場の流れが好転したということなのか？ まだ色々とごたごたしていたみたいには考え付くが」

「頭がお堅い、または日和っている人はまだいたようだけど、数日間にわたる会議で賛成派が過半数を上回ったわ。そこからはもうとんとん拍子。ヘリアンさんとは以前から示し合わせていたから、変に妨害される前に出立したの。ハリー指揮官に話を通す前に予定を早めてしまったのはたしかに私の落ち度だったけど、このことを説明したら納得してくれたわ」

「ちよつと待った。たしかに今言ったことでここに来るまでの経緯はわかったけどさ、グリフィンという組織内でも世界に分散する基地から別のところに移動するわけだから I・O・P にも申請しないとじゃないといけないんじゃない？」

バルソクの質問にローガンが首を傾げていると、こちらの様子に気付いたグローザが説明してくれた。

「知つての通り、私達はグリフィンと提携している I・O・P 社の戦術人形よ。民間軍事会社^Mとくわい兵たちが企業という形を為して、依頼があれば現場に戦闘員として人そのものが送り込まれる。でもグリフィンは人間ではなく戦術人形を投入するという形態を取っている。それはわかつていいるわよね？」

「ああ。戦闘効率とか諸々を見ても、どちらの方が全体的に良い結果を出せているかというのにはもう既に公開情報としてあるからな。俺達人間は急所に怪我を負わされれば致命傷となつてすぐに戦闘不能になるが、お前たちは幾分頑丈なこともあつてまだ戦う

ことが出来る。備えられた継戦能力にプラスして人間と同様に経験さえ培えれば、人類側の犠牲が減つてもう万々歳だ」

ローガンが言つた事にグローザは頷いてバルソクに目配せし、自分は再び紅茶を口にした。バトンタッチされたことに気付いたイヤホン少女は硬直して少し赤面。あゝ……うゝ……、と呟いてはローガンの方をチラチラ見てはもにもよによし始めた。

そして何かを決心したかと思うと、アクションを起こす。イヤホンを外し、上着を脱ぎ、シャツのボタンを外し始め……。

「えっはっ？ お前何してん？ お前いきなり何してんの!？」

「うるさい！ マスターはそこで騒がずに待つてろ！」

「馬鹿だろお前！ 白昼堂々服を脱ごうとする奴がいるかさっさともつかい着ろつてんだ!!」

どったんばったん!!とローガンは上司としてだけでなく男としての体裁を保つ為にも勢いよく立ち上がり、抵抗を試みようとするバルソクの上半身に椅子に掛けられたばかりの上着を被せようとする。が、彼女とて戦術人形で、身体能力は人間であるローガンよりも上だ。

少し意外なことに、器用にもバルソクはシャツの裾を掴みながら片方の肘と足で一定以上の距離を保つてみせ、スピードがやや落ちはしても脱ぎ脱ぎ続行。

と同時に両の腕を以て腰から拘束する。力任せに脇に抱えるように力むと体感的にバルソクの脚が離れたかのように思えたので、床にねじ伏せるべく重力に引かれるがままに力を加えた。

だがしかし、相手は曲がりになりにも戦闘用の人形。人間では対処できない敵にも応戦できるように設計された存在であり、搦め手を用いない真つ向勝負では分が悪いというものだ。

バルソクの両手は自身が着ているシャツを掴んでいたのでローガンは咄嗟に封じられていた状態として認識してしまった。彼女がすべきことの優先順位を逆転してしまえばフリーになり、一気に状況が変わるといふのに。

「ワタシでも脈絡も理由もなしに服を脱ぐわけないってんだ察しろよバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

心からの叫びを耳にした時には、ローガンは縦方向に回転しながら宙を舞っていた。気持ちの悪い浮遊感を体全体で感じ取るよりも先に背中から床に落下し、洒落にはならない衝撃と鈍痛にその場で丸まって悶絶する。

「おぐう……お前なあ……!」

「私のパスが悪かったとしても、彼女が一体どのようなにして説明しようとしたのはわかかったわ……突飛な行動ではあつたけど」

ローガンが半眼でグローザの方を睨むが、彼女は肩で息をしているバルソクを見ながら特等席を得た野次馬のように見物を決め込んでいた。さつきまで三人で囲っていたテーブル上についての間にかケーキまで置かれている。

紅茶とスイーツ、そして美女。同じ空間に存在しているというのにも関わらず、別時空且つ別域にいる何者かを垣間見ているような気分になる。

なんでだよ。なんで火種を投下した本人が貴族よろしくテイータイムを決め込んでるんだよ。脚を組んではふわっふわな生クリームを口に運んでは、「ワタシハカンケイアリマセーン」ってな感じに主張してんじやねえ。あなたはセレブですか？俺みたいに阿保な真似をしなくてはいいけど、収集をつけるぐらいの気概は見せろよ。ふざけるな、ふあつきんふあつきん。

「……で、バルソクは何を見せようとしていたんだ。できるだけ肌を露出させない方向性で頼む」

なんかもう、色々と傷ついたらしいバルソクがその場でしゃがみ込んで即時の再起不能に陥っている隙にグローザに尋ねる。痛む腰を摩りながらよろよろと体を起こすと、彼女は仕方なしとばかりに溜息を吐き出した。

「AR小隊のような特殊任務を命じられる人形は除いて、通常の人形である私たちは唯一無二のものではない。製造工場から出荷されてからの経験で性格とかに多少差異は

あつてもね。だからI・O・Pは何処にどの個体の人形がいるのか、ということ进行管理する為にコードを記しているのよ。私たちの身体にね」

そう言うのとグローザは自分の身体の、人間であればお尻のちよつと上の位置、尾骶骨があるぐらいいのところにトントンと軽く叩く。

ローガンはその言葉を自分なりに落とし込んででは噛み砕いては言った。

「銃の製造コードみたいなものか？」

「わかりやすく言えばそういうこと。あれも犯罪とかに使われた場合に所有者を特定したりするのに使われているのはあなたも知っているわよね？ 私たちに刻まれている数字とバーコードは、グリフィンを通じて所属している基地などを記録する為に使われているの」

「ということとは……戦地で修復不可能となった時にも活用されたりもするのか？ メンタルモデルを他の間違えたりしないようにする為に」

「そうね。だからこのコードは色々重要な役割を持っているのよ。それこそ、私に首輪をつけ続けている、ということにもね」

これはローガンが後々調べてわかったことではあるのだが、生活補助としての役割をもつ民生用の人形にも備わっているものらしい。小銃ほど簡単に闇市などの裏世界に出回ることはないようにする他、I・O・Pの承認なしに違法改造もされることも防ぐ

のがこの仕組みだ。そもそも、商品の一つ一つにそれ一つだけの商品コードをつけているというのは流通情報システムが生み出された時から存在しているものなのだから、何の不思議ではない。

しかし、このような管理システムを組んだとしても、悪い意味で狡猾な商売人には完全に効果が及ぶわけではないというのが残念なところだ。

それでもこの仕組みが必要か否か、と問われればローガンは前者だと答える。なにせ、システムに不具合等が起きれば保有している側に危害が及ぶわけでもあり、下手すれば治療しても元通りとはいかない怪我だって負いかねない。まさしく小銃の暴発と一緒にだ。

そんなことになれば、製造側の方に落ち度はなかったのか、などとクオリティコントロールも問われることだってあり得る。だから、ローガンが思い浮かべているようなバーコードや数字の羅列はあって当然のものであり、それらを見る度に一々気に留めることはなくても知識として覚えておくべきことだと考えている。

「まあ、I. O. Pも戦闘データと引き換えという取引をしたうえで戦術人形を貸し出しているわけでもないからそれなりに複雑な事情が絡み合っている、てところまで覚えておくといいわ。実際、あなたが介入できるところなんてないでしょ？」

「たしかにそうだが……せめてさ、その重要情報の源をもうちよつと見やすいところに

移すぐらいのことはできるんじゃないのか。トラブルがあつた際に毎回服を脱がすつてのはよ、なあ?」

バルソクを流し目で見ると、彼女は茹蛸のように赤い顔になりながらも半眼でこちらを睨んでくる。その非難がましい視線には色々と賛否が溢れるものがあるように感じ、細かく応対するのが面倒に思えた。

「心配しなくても、これをスキキャンして照合するのは大体はシステムをシャットダウンしてメンテナンスをする時ぐらいなんだし、メンテナンス要員以外に損することはないわよ。……多少はちよつとむず痒いような思いはするけど」

「ということだがバルソク、お前から言いたいことは?」

「……しばらくマスターとは口を利きたくない」

つーん、と顔を横に向けて会話を拒否する姿勢を見せられてローガンは溜息をついた。せめて謝罪の意を示しておこうと思つて起き上がると、吹抜け構造となつていゝ食堂の二階から電子音が聞こえてきた。

普段なら気にせず聞き流す、毎日のように耳にしているその音であつて感じる事などない筈。だというのに、言い知れぬ嫌な予感がしたので音源の方に顔を向ける。

「……………45、何してんのお前?」

「ん〜?何してると思う〜?」

手摺に両脇を引つ掛けては手元のビデオカメラを弄っている戦術人形の少女、UMP 45がそこにいた。何時も身に着けている彩度の高い黄色と明度などない黒による組み合わせの警告色の上着を袖に通しては、同色のスカートに学生服のような白いシャツといういつもの服装。それらの色彩配色が本来の意味を為しているのが直感でわかる。

加えて、さつきあのようなことがあったこの場で、出来事を映像という媒体で記録できるそのようなものを手にしているのでローガンは全身から冷や汗が噴き出すのを感じた。

「お約束でもなんとなくで聞かせてもらうけどよ、何時からいたんだ」

「そのロックンロールが三種類の飲み物をトレイに乗せて来てから」

「つまり最初からじゃねえか盗聴かよおい」

「盗聴じゃないよ盗撮だよ」

「もつと悪いだろうが!!」

ガーツ!!と彼女に吼えると、45はケラケラと笑いながらひらりと手摺を飛び越えて空中に身を投げ出した。その瞬間には怒りも失せてローガンは咄嗟に受け止めようと動き出し、真下に辿り着いてキャッチする体勢になる。すると両腕に重力という運動エネルギーも加わった重みがどつとかかった。

無事に成功させることが出来たことに胸を撫で下ろしていると、お姫様抱つこの状態

になつてゐる45の笑顔が目に入った。

「わお、ちよつと期待していただけど本当にしてくれるなんて思わなかつたわ。意外とそこだけは紳士なのねローガンって」

「んなことを言つてるうちにさつさと降ろすぞ。つうか何の予告もなしに飛び降りるなよ、心臓に悪い」

「いーじゃん。これぐらいの我儘、聞いてよね」

丁寧は45を足元から降ろすと、彼女はにんまりと笑みを浮かべながら身を翻してクルクルと回つた。ご機嫌に見えるその様子にローガンは溜息をつくと、彼女の視線がある一点で止まったことに気付いた。追つて見てみると、お茶会に洒落込んでいるセレブ讓に行き着いてゐる。

「あなたが『OTs—14』ことグローザ、その中でも『特異体』と言われている個体ね」
 「そうよ、はじめまして。丁寧に挨拶をする必要はあるかしら、404小隊のUMP45？」

「しなくていいわよ。何時かあなた自身の視覚による記録メモリから削除するかもしれないし」

「あらそう」

ん〜?とローガンは首を傾げる。何故だかわからないが、じりじりとしたような、距

離を測っているような心配がお互いからしたような気がしたからだ。

……いや、訂正しよう。グローザは自然体で接しており、45の方が一方的に警戒態勢になっているだけだ。猫のように毛を逆立たせている、というわけではないが、前傾姿勢になって何時でも攻撃なり回避なりと行動できる態勢になっている風な雰囲気を感じる。物理的ではなく、精神的にだ。

何がどうなっているのかわからず流れに任せて場を見守っていると、グローザは柔らかい笑みを浮かべながら言った。

「安心して。彼の事は『そういう風』には見ていない。私が所属する部隊の隊長だということだけで、信頼関係を築く以上のことはしないから」

「口だけだったらどうでも言えるよ。その保証はどこにあるの?」

「知つての通り、私は十数年前に指揮官を亡くした人形よ。あの基地内で誓約した唯一の、ね」

そう言いながらグローザは自分の左手を見せると、そこには光を反射して鈍く輝く銀の指輪があつた。薬指に嵌められているそれがどういった意味を持つのかなど、ローガンでもすぐにわかる。

それで?と45が続きを促すので、グローザは自分の左手に視線を落として語つた。

「形式としては一般的な人間と人形にある『誓約』だったけど、あの人はこれを私に人間

同士による『結婚』として贈るつて言つてくれた。それも真つ白で綺麗なウェディングドレスまで用意して、式まで挙げてくれた。だから、私のこの想いは他の誰にも向けないわ」

「固執している、というわけじゃないようだけど……なんだかあれね。その思いに縛りついているようにも見えるわよあなた」

「そう見えるならそれでもいいわ。でも今言つた事は紛れもない事実。もうあの人は歸つてこない。だとしても誰かと友達になることだつたら、別に咎められることはないわ。それはUMP45、あなたにも当てはまることよ」

説教でも叱責でもない。ただただ、それは正しいことなんだと言ひ聞かせるだけの言葉だつた。

感情で一人歩きした45の敗北、というのはもう他の誰が見ても明らか。何故なら、彼女も以前にハリーの父親でグローザの想い人と同じ会社で役職であつた、敬愛していと指揮官を喪つたのだから。45とグローザ。彼女らを感じているのは一人に対する友愛と親愛。抱いている愛はそう二つに分類されてしまうが、親しみという意味合いでの強い気持ちには変わりはない。

過去に囚われていずとも、懸念していたことはなかつたようで45は両手を上げて降参の意を示した。

「はいはい、私の負け。ただの確認だったんだけど、真正面からそんな悪意がない言葉を言われたらもうどうしようもないわ」

「ふふ。でもあなたとAR15による取り合いは見物させてもらおうわよ。恋愛模様って見てる分には面白いのだから」

「別にいいわよ。この戦争だけは、私自身の力で勝たないとなんだから」

不敵に笑う45にグローザはフォークでケーキを切り分けては口へと運んで味を楽しみます。長く綺麗な足を組んでは優雅に一人だけの茶会を始めたことに、ローガンとしてはもう何も言い出せなくなりました。

そんな自分に、話は終わったとばかりに45が百点満点の笑顔をこちらに向けてきた。

「さーてローガン？私、今日はもうフリーなんだ。あなたは今日からしばらく休暇なのはもう知っているんだから、これから保護区の方でのお出かけに付き合ってくださいよ」

「ツツコミどころがあるが……ええ？休暇だからこそ、俺は個人的にこれからやりたいことやるつもりなんだけど」

「やりたいことといっても単に銃の試し撃ちとかフィジカルトレーニングとかそんなじゃない。継続は力なり、というので続けるのは良いことだけだし、偶には私のプライベートに付き合ってくれてもいいでしょ？」

たしかに、45とは最近ご無沙汰だ。フロリダでの任務の後も簡単な挨拶を交わしたぐらいでまともな話などしていないぐらいに。

それでも、ローガンとしてもやりたいこととしていくつかをリストアップしている。代替えの銃の選別は勿論、興味深い題材として仕舞っていた本、それかブラックバードなどの輸送チームの面々と雑談するのもいいと思っていたぐらいだ。特に最後においては、役職など関係なく男同士で気兼ねなく喋れるのだから気が楽というものである。

……野郎同士で何やってんだ、と遠くから眺めるようなことはあるが。

「ローガン？なんか遠い目になってない？」

「いや〜？年上への配慮って大変だよなって改めて感じていただけ〜」

ともかく、戦場に赴いての激務から解放されたのだから今日一日だけでも自分の為に時間を使いたいというのがローガンの本音だ。休暇は数日、基地内の食の祭典がある日まで続いている。多少は誰かに時間をあげることがあるだろうが、せめて明日まで待つて欲しい。でなければ割とゲンナリする。いやマジで。

「ロ〜ガ〜ン、今のあなたに選択権ってあるって思うの？一撃必殺の交渉のカードは私の手の中にあるというのに」

45はそう言いながら片手に持っているビデオカメラをひらひらと振って見せびらかしてくる。それ一つだけで、ローガンは既に首輪を掛けられてリードを握られてし

まっているのだと知った。

不名誉な様を他人に見せられるのは誰にとつても気持ちの良いものではない。これがばら撒かれればバルソクの釈明があるまで居心地の悪い思いをするのは間違いないだろう。

そもそも、経緯などいくらでも編集して誤魔化せれる、メディアを通じて記録媒体に保存されてしまった時点で察するべきだった。

「何か言いたいことはある？」

「……もう仕方ないから付き合つてやるとしてだな。とりあえずそのカメラをぶつ壊していいか？」

「ダクメク♪」

その台詞にローガンが降参とばかりに肩を竦めると、ベーツと舌を出した45は屈託なく笑った。